



Cisco Secure Firewall Device Manager バージョン 7.7 コンフィギュレーション ガイド

最終更新：2025 年 8 月 13 日

シスコシステムズ合同会社

〒107-6227 東京都港区赤坂9-7-1 ミッドタウン・タワー

<http://www.cisco.com/jp>

お問い合わせ先：シスコ コンタクトセンター

0120-092-255（フリーコール、携帯・PHS含む）

電話受付時間：平日 10:00～12:00、13:00～17:00

<http://www.cisco.com/jp/go/contactcenter/>

【注意】シスコ製品をご使用になる前に、安全上の注意（www.cisco.com/jp/go/safety_warning/）をご確認ください。本書は、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。また、契約等の記述については、弊社販売パートナー、または、弊社担当者にご確認ください。

THE SPECIFICATIONS AND INFORMATION REGARDING THE PRODUCTS IN THIS MANUAL ARE SUBJECT TO CHANGE WITHOUT NOTICE. ALL STATEMENTS, INFORMATION, AND RECOMMENDATIONS IN THIS MANUAL ARE BELIEVED TO BE ACCURATE BUT ARE PRESENTED WITHOUT WARRANTY OF ANY KIND, EXPRESS OR IMPLIED. USERS MUST TAKE FULL RESPONSIBILITY FOR THEIR APPLICATION OF ANY PRODUCTS.

THE SOFTWARE LICENSE AND LIMITED WARRANTY FOR THE ACCOMPANYING PRODUCT ARE SET FORTH IN THE INFORMATION PACKET THAT SHIPPED WITH THE PRODUCT AND ARE INCORPORATED HEREIN BY THIS REFERENCE. IF YOU ARE UNABLE TO LOCATE THE SOFTWARE LICENSE OR LIMITED WARRANTY, CONTACT YOUR CISCO REPRESENTATIVE FOR A COPY.

The Cisco implementation of TCP header compression is an adaptation of a program developed by the University of California, Berkeley (UCB) as part of UCB's public domain version of the UNIX operating system. All rights reserved. Copyright © 1981, Regents of the University of California.

NOTWITHSTANDING ANY OTHER WARRANTY HEREIN, ALL DOCUMENT FILES AND SOFTWARE OF THESE SUPPLIERS ARE PROVIDED “AS IS” WITH ALL FAULTS. CISCO AND THE ABOVE-NAMED SUPPLIERS DISCLAIM ALL WARRANTIES, EXPRESSED OR IMPLIED, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, THOSE OF MERCHANTABILITY, FITNESS FOR A PARTICULAR PURPOSE AND NON-INFRINGEMENT OR ARISING FROM A COURSE OF DEALING, USAGE, OR TRADE PRACTICE.

IN NO EVENT SHALL CISCO OR ITS SUPPLIERS BE LIABLE FOR ANY INDIRECT, SPECIAL, CONSEQUENTIAL, OR INCIDENTAL DAMAGES, INCLUDING, WITHOUT LIMITATION, LOST PROFITS OR LOSS OR DAMAGE TO DATA ARISING OUT OF THE USE OR INABILITY TO USE THIS MANUAL, EVEN IF CISCO OR ITS SUPPLIERS HAVE BEEN ADVISED OF THE POSSIBILITY OF SUCH DAMAGES.

Any Internet Protocol (IP) addresses and phone numbers used in this document are not intended to be actual addresses and phone numbers. Any examples, command display output, network topology diagrams, and other figures included in the document are shown for illustrative purposes only. Any use of actual IP addresses or phone numbers in illustrative content is unintentional and coincidental.

All printed copies and duplicate soft copies of this document are considered uncontrolled. See the current online version for the latest version.

Cisco has more than 200 offices worldwide. Addresses and phone numbers are listed on the Cisco website at www.cisco.com/go/offices.

Cisco and the Cisco logo are trademarks or registered trademarks of Cisco and/or its affiliates in the U.S. and other countries. To view a list of Cisco trademarks, go to this URL: <https://www.cisco.com/c/en/us/about/legal/trademarks.html>. Third-party trademarks mentioned are the property of their respective owners. The use of the word partner does not imply a partnership relationship between Cisco and any other company. (1721R)

© 2015–2025 Cisco Systems, Inc. All rights reserved.



目次

第 1 章

はじめに 1

本書の対象読者 1

Device Manager /Threat Defense のバージョン 7.7.0 における新機能 1

システムへのログイン 6

ユーザ ロールで表示および実行可能な対象の制御 7

Device Manager へのログイン 7

コマンドライン インターフェイス (CLI) へのログイン 9

パスワードの変更 10

ユーザ プロファイルの設定 11

英語以外の言語でページを表示する 12

システムの設定 12

インターフェイスの接続 13

Firepower 1010 のケーブル配線 14

Firepower 1100 のケーブル配線 15

Secure Firewall 1210/1220 のケーブル配線 16

Secure Firewall 1230/1240/1250 のケーブル配線 17

Cisco Secure Firewall 3100 のケーブル配線 18

Firepower 4100 のケーブル配線 19

Firepower 9300 のケーブル配線 20

Threat Defense Virtual の仮想ケーブル接続 21

ISA 3000 のケーブル配線 23

(任意) CLI での管理ネットワーク設定の変更 24

セットアップウィザードを使用した初期設定の完了 25

外部インターフェイスの IP アドレスを取得できない場合の対処方法 29

初期セットアップ前のデフォルト設定	30
初期セットアップ後の設定	33
設定の基本	38
デバイスの設定	38
セキュリティ ポリシーの設定	40
ルールまたはオブジェクトを検索	41
変更の展開	42
インスペクション エンジンを再起動する設定変更	44
完全な展開を強制するいくつかの変更の設定	45
インターフェイスおよび管理ステータスの表示	45
システムのタスク ステータスの表示	47
CLI コンソールを使用した設定の監視およびテスト	48
Device Manager と REST API の併用	49

第 2 章

ベストプラクティス : Threat Defense の使用例	51
Device Manager でデバイスを設定する方法	51
ネットワーク トラフィックを調べる方法	57
脅威のブロック方法	65
マルウェアのブロック方法	71
アクセプタブル ユース ポリシー (URL フィルタリング) の実装方法	75
アプリケーションの使用を制御する方法	81
サブネットの追加方法	85
ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法	92
その他の例	98

第 3 章

システムのライセンス	101
ファイアウォールシステムのスマートライセンス	101
Cisco Smart Software Manager	101
ライセンス認証局との定期通信	102
スマート ライセンスのタイプ	102
Threat Defense Virtual のライセンス	104

Threat Defense Virtual パフォーマンス階層ライセンスのガイドラインと制限事項	105
暗号化機能に対するエクスポート制御設定の影響	106
期限切れまたは無効になっているオプション ライセンスの影響	107
スマート ライセンスの管理	107
デバイスの登録	109
Threat Defense Virtual パフォーマンス階層の変更	110
オプション ライセンスのイネーブル化とディセーブル化	111
Cisco Smart Software Manager との同期	112
デバイスの登録解除	113
エアギャップネットワークでの永久ライセンスの適用	114
ユニバーサル永久ライセンスと特定ライセンス予約	114
スマートアカウントがユニバーサルライセンスを提供できることの確認	115
PLR モードへの切り替えおよびユニバーサルライセンスの適用	115
PLR 登録のキャンセル	117
PLR モードでのデバイスの登録解除	118

 第 I 部 :

システム モニタリング 121

 第 4 章

デバイスのモニタリング 123

トラフィック統計を取得するためのロギングの有効化	123
イベント タイプ	123
設定可能な接続ロギング	125
自動接続ロギング	125
接続ロギングのためのヒント	125
外部の Syslog サーバへのイベントの送信	126
Cisco Cloud ベースのサービスを使用したイベントの評価	127
トラフィックおよびシステム ダッシュボードのモニタリング	127
コマンドラインを使用した追加統計情報のモニタリング	130
イベントの表示	131
カスタム ビューの設定	133
イベントのフィルタリング	134

イベント フィールドの説明 135

第 5 章

ストリーミングテレメトリ 149

- ストリーミング テレメトリについて 149
- ストリーミング テレメトリに関するガイドライン 149
- ストリーミング テレメトリを有効にする 150
- テレメトリ コレクタのセットアップ 155
 - テレメトリ コレクタに関するガイドライン 155
 - テレメトリ コレクタでのプロトコル定義 156
- Threat Defense デバイスとテレメトリ コレクタ間の通信 157
 - テレグラフ制御メッセージ (制御チャネル) 157
 - コレクタ制御メッセージ (制御チャネル) 158
 - ストリーム キャンセル メッセージ (制御チャネル) 158
 - Telegraf データ メッセージ (データ チャネル) 158
 - メトリック メッセージ (データ チャネル) 159
 - Telegraf データ メッセージ (データ チャネル) 159
- テレメトリ ストリーミングのトラブルシューティング 160
 - テレメトリ ストリーミング サービスのステータスの確認 160
 - ステータス エラーのカテゴリ 161
 - テレメトリ コレクタがデータを受信することを確認する 162

第 6 章

Cisco ISA 3000 のアラーム 163

- アラームについて 163
 - アラーム入力インターフェイス 164
 - アラーム出力インターフェイス 164
- Syslog アラーム 165
- SNMPトラップ アラーム 165
- アラームのデフォルト設定 166
- ISA 3000 のアラームの設定 166
 - アラーム入力コンタクトの設定 166
 - 電源装置アラームの設定 169

温度アラームの設定	171
アラームのモニタリング	173
アラーム ステータスのモニタリング	173
アラームに関する Syslog メッセージのモニタリング	173
外部アラームをオフにする	174

第 II 部 :

再利用可能なオブジェクト 175

第 7 章

オブジェクト 177

オブジェクト タイプ	177
オブジェクトの管理	181
ネットワーク オブジェクトとグループの設定	182
ポート オブジェクトとグループの設定	184
セキュリティ ゾーンの設定	185
アプリケーションフィルタ オブジェクトの設定	187
URL オブジェクトとグループの設定	189
位置情報オブジェクトの設定	192
syslog サーバの設定	193
セキュリティグループタグ (SGT) グループの設定	194

第 8 章

証明書 197

証明書について	197
公開キー暗号化	198
機能別の証明書タイプ	198
例 : OpenSSL を使用した内部証明書の生成	200
証明書の設定	201
内部および内部 CA 証明書のアップロード	202
自己署名内部および内部 CA 証明書の生成	204
信頼できる CA 証明書のアップロード	206
信頼できる CA 証明書グループの設定	208

第 9 章

アイデンティティ ソース 209

アイデンティティ ソースについて 209

Active Directory (AD) アイデンティティ レalm 211

サポートされるディレクトリ サーバ 211

ユーザ数の制限 212

ディレクトリ ベース DN の決定 212

AD アイデンティティ レalmの設定 213

AD レalmシーケンスの設定 216

ディレクトリ サーバ接続のトラブルシューティング 217

RADIUS サーバおよびグループ 218

RADIUS サーバの設定 219

RADIUS サーバ グループの設定 221

RADIUS サーバおよびグループのトラブルシューティング 223

Identity Services Engine (ISE) 224

ISE に関する注意事項と制限事項 224

Identity Services Engine の設定 225

ISE/ISE-PIC アイデンティティ ソースのトラブルシューティング 227

SAMLサーバ 228

SAML サーバの設定 228

ローカル ユーザ 232

ローカル ユーザの設定 232

第 III 部 :

基本 235

第 10 章

Firepower 4100/9300 上の論理デバイス 237

インターフェイスについて 237

シャーシ管理インターフェイス 237

インターフェイス タイプ 238

FXOS インターフェイスとアプリケーション インターフェイス 239

Firepower 9300 のハードウェアとソフトウェアの要件と前提条件 239

論理デバイスに関する注意事項と制約事項	240
インターフェイスに関する注意事項と制限事項	240
一般的なガイドラインと制限事項	241
インターフェイスの設定	241
インターフェイスの有効化または無効化	241
物理インターフェイスの設定	242
EtherChannel（ポート チャンネル）の追加	242
論理デバイスの設定	244
Device Manager のスタンドアロン Threat Defense を追加します。	244
ハイ アベイラビリティ ペアの追加	244
Threat Defense 論理デバイスのインターフェイスの変更	245
アプリケーションのコンソールへの接続	249
Firepower 4100/9300 論理デバイスの履歴	250

第 11 章

高可用性（フェールオーバー）	251
高可用性（フェールオーバー）について	251
アクティブ/スタンバイ フェールオーバーについて	252
プライマリ/セカンダリ ロールとアクティブ/スタンバイ ステータス	252
起動時のアクティブ装置の判別	252
フェールオーバー イベント	252
フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンク	254
フェールオーバー リンク	254
ステートフル フェールオーバー リンク	254
フェールオーバー リンクとステート リンクのインターフェイス	255
フェールオーバーおよびステートフル フェールオーバー インターフェイスの接続	255
フェールオーバーの中断の回避とデータ リンク	256
ステートフル フェールオーバーがユーザ接続に与える影響	258
サポートされる機能	258
サポートされない機能	259
スタンバイ装置で許可される設定の変更とアクション	260
ハイ アベイラビリティのシステム要件	261

HA のハードウェア要件	261
HA のソフトウェア要件	261
HA のライセンス要件	262
高可用性のガイドライン	263
高可用性の構成	265
2 台の装置でのハイ アベイラビリティの準備	266
ハイ アベイラビリティ用のプライマリ装置の設定	268
ハイ アベイラビリティ用のセカンダリ装置の設定	271
ヘルス モニタリングのフェールオーバー基準の設定	273
ピア装置のヘルス モニタリング フェールオーバー基準の設定	273
インターフェイスのヘルス モニタリング フェールオーバー基準の設定	275
システムがインターフェイス ヘルス进行测试する方法	277
スタンバイ IP および MAC アドレスの設定	278
ハイ アベイラビリティ設定の確認	280
高可用性の管理	281
ハイ アベイラビリティの中断または再開	282
ハイ アベイラビリティの破棄	284
アクティブ ピアとスタンバイ ピアの切り替え（強制フェールオーバー）	285
フェールオーバー後の未展開の設定変更の保持	286
高可用性モードでのライセンスと登録の変更	287
HA IPsec 暗号キーまたは HA 設定の編集	287
障害のある装置の正常な装置としてのマーキング	287
ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレード	288
ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング	290
ハイ アベイラビリティ ペアでの装置交換	293
高可用性のモニタリング	294
フェールオーバーの全般的なステータスと履歴のモニタリング	294
HA モニター対象インターフェイスのステータスのモニタリング	296
HA 関連の Syslog メッセージのモニタリング	296
ピア装置での CLI コマンドのリモート実行	297
ハイ アベイラビリティ（フェールオーバー）のトラブルシューティング	297

装置の障害状態のトラブルシューティング	300
HA アプリケーション同期障害のトラブルシューティング	301

第 12 章

インターフェイス 305

Threat Defense インターフェイスについて	305
インターフェイス モード	306
管理/診断インターフェイス	307
分離した管理ネットワークを設定する際の推奨事項	308
セキュリティ ゾーン	309
IPv6 アドレッシング	309
Auto-MDI/MDIX 機能	310
インターフェイスに関する注意事項と制限事項	310
インターフェイスの設定に関する制限	310
デバイス モデルによる VLAN サブインターフェイスの最大数	311
物理インターフェイスの設定	311
管理インターフェイスの設定	318
ブリッジ グループの設定	320
EtherChannel の設定	325
EtherChannel について	326
チャネル グループのインターフェイス	326
別のデバイスの EtherChannel への接続	326
Link Aggregation Control Protocol	328
ロード バランシング	328
EtherChannel MAC アドレス	329
EtherChannel インターフェイスのガイドライン	329
EtherChannel の追加	331
VLAN インターフェイスとスイッチ ポートの構成 (1010/1210/1220)	338
スイッチポートおよびインターフェイスについて	338
スイッチポートの注意事項および制約事項	340
VLAN インターフェイスの設定	341
スイッチ ポートのアクセス ポートとしての設定	346

スイッチ ポートのトランク ポートとしての設定	348
Power over Ethernet の設定	350
VLAN サブインターフェイスと 802.1Q トランキングの設定	352
パッシブ インターフェイスの設定	358
パッシブ インターフェイスを使用する理由	359
パッシブ インターフェイスに関する制限事項	359
ハードウェア Threat Defense パッシブインターフェイスのスイッチの設定	360
Threat Defense Virtual パッシブインターフェイスの VLAN の設定	361
パッシブ モードでの物理インターフェイスの設定	361
インラインセットの設定	363
インターフェイスの詳細オプションの設定	366
MAC アドレスについて	367
MTU について	367
パス MTU ディスカバリ	368
MTU とフラグメンテーション	368
MTU とジャンボ フレーム	368
詳細オプションの設定	369
インターフェイスの変更のスキャンとインターフェイスの移行	372
インターフェイスのスキャンと移行について	372
インターフェイスのスキャンと移行に関する注意事項と制限事項	373
インターフェイスのスキャンと移行	374
Secure Firewall 3100 のネットワークモジュールの管理	378
ブレイクアウトポートの設定	378
ネットワークモジュールの追加	379
ネットワークモジュールの交換方法	381
ネットワークモジュールを別のタイプに交換する	383
ネットワーク モジュールの取り外し	386
管理インターフェイスと診断インターフェイスのマージ	388
管理インターフェイスのマージ解除	395
停電時のハードウェアバイパスの設定 (ISA 3000)	397
インターフェイスのモニタリング	399

インターフェイスの例 401

第 IV 部 :

ルーティング 403

第 13 章

ルーティングの基本ルートと静的ルート 405

ルーティングのベストプラクティス 405

ルーティングの概要 406

サポートされるルーティング プロトコル 406

ルート タイプ 407

ルーティング テーブルとルート選択 408

ルーティング テーブルへの入力方法 408

転送の決定方法 411

管理トラフィック用ルーティングテーブル 412

Equal-Cost Multipath (ECMP) ルーティング 412

スタティック ルート 413

スタティック ルートとデフォルト ルートについて 413

デフォルトルート 413

スタティック ルート 414

スタティック ルートのバックアップとスタティック ルートのトラッキング 414

スタティック ルーティングのガイドライン 415

スタティック ルートの設定 416

SLA モニタ オブジェクトの設定 418

ECMP トラフィックゾーンの設定 420

ルーティングのモニタリング 422

第 14 章

仮想ルータ 425

仮想ルータと Virtual Route Forwarding (VRF) について 425

仮想ルーター対応ポリシーの設定 426

仮想ルータ間のルーティング 427

デバイス モデルごとの仮想ルータの最大数 427

仮想ルータのガイドライン 429

仮想ルータの管理	431
仮想ルータの作成またはインターフェイス割り当ての編集	433
仮想ルータのスタティック ルートとルーティング プロセスの設定	434
仮想ルータの削除	435
仮想ルータの例	435
複数の仮想ルータを介して遠隔サーバにルーティングする方法	436
重複するアドレス空間を持つ複数の仮想ルータへのインターネットアクセスを提供する方 法	441
仮想ルータのモニタリング	453

第 15 章

ルートチューニングのためのルートマップおよびその他のオブジェクト 455

ルートマップの設定	455
ルートマップの <code>permit</code> 句と <code>deny</code> 句	455
ルートマップの <code>match</code> ステートメントと <code>set</code> ステートメント	456
ルートマップの設定	457
アクセス リストの設定	462
拡張アクセスリストの設定	463
標準アクセスリストの設定	465
AS パスアクセスリストの設定	466
コミュニティリストの設定	468
ポリシー リストの設定	470
プレフィックス リストの設定	472

第 16 章

Open Shortest Path First (OSPF) 477

OSPFv2 のプロセスとエリアを設定する	477
OSPF プロセスとエリア特性のカスタマイズ	480
OSPF プロセスの詳細設定の構成	480
OSPF エリアプロパティの設定	485
スタティック OSPF ネイバーの設定	489
OSPF サマリーアドレスの設定	490
OSPF フィルタルールの設定	492

OSPF 再配布の設定	493
OSPFv2 インターフェイスの設定と OSPF 認証	495
OSPFv2 の失われたネイバー検出と Fast Hello パケットの設定 (OSPF インターフェイス設定)	499
OSPF のモニタリング	500

第 17 章

Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP)	503
EIGRP のベストプラクティス	503
EIGRP について	504
DUAL 有限状態マシン (FSM)	504
EIGRP のメトリック重み	505
EIGRP コストメトリック	505
EIGRP のガイドライン	506
コア EIGRP プロセスの設定	506
完全なルーティングのための EIGRP プロセスの設定	506
スタブルルーティングのための EIGRP プロセスの設定	508
EIGRP プロセスのカスタマイズ	511
EIGRP の高度な設定の指定	511
EIGRP がアダプタイズするネットワークの設定	513
EIGRP パッシブ ルーティング インターフェイスの設定	514
静的 EIGRP ネイバーの設定	516
EIGRP のデフォルトルート候補配信の制御	517
EIGRP のフィルタルールの設定	518
EIGRP のルート再配布の設定	520
EIGRP のモニタリング	522

第 18 章

Border Gateway Protocol (BGP)	525
BGPについて	525
ルーティング テーブルの変更	525
BGP を使用する状況	527
BGP パスの選択	527

BGP マルチパス	528
BGP の設定	529
BGP のグローバル設定	529
BGP プロセスの設定	533
BGP 一般設定	535
BGP 詳細設定の指定	536
BGP でアドバタイズする ネットワークの設定	538
BGP ルートの挿入の設定	540
BGP 集約アドレス設定の設定	541
IPv4 用の BGP フィルタ設定の指定	543
BGP ネイバーの設定	544
他のルーティングプロトコルからの BGP ルート再配布の設定	553
BGP のモニタリング	555

第 V 部 :**セキュリティ ポリシー 557**

第 19 章**SSL 復号 559**

SSL 復号について	559
なぜ SSL 復号を実装するか	560
暗号化されたトラフィックに適用できるアクション	560
再署名の復号	560
既知キーの復号	561
復号禁止	562
ブロック	562
自動的に生成された SSL 復号ルール	562
復号できないトラフィックの処理	562
SSL 復号のためのライセンス要件	563
SSL 復号のガイドライン	563
SSL 復号ポリシーの実装および管理方法	564
SSL 復号ポリシーの設定	566
SSL 復号ポリシーの有効化	568

SSL 復号のデフォルト アクションの設定	569
SSL 復号ルールの設定	570
SSL 復号ルールの送信元/送信先基準	573
SSL 復号ルールのアプリケーション基準	574
SSL 復号ルールの URL 基準	576
SSL 復号ルールのユーザ基準	577
SSL 復号ルールの詳細条件	578
SSL 復号設定の指定	579
既知のキーと復号の再署名の証明書の設定	579
高度なトラフィックおよび復号できないトラフィックの設定の指定	580
再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード	581
例：ネットワークからの古い SSL/TLS バージョンのブロック	583
SSL 復号のモニタリングおよびトラブルシューティング	584
SSL 復号のモニタリング	585
復号再署名がブラウザに関して動作する（ただしアプリケーションに関しては機能しない） Web サイトの処理（SSL または認証局ピンニング）	585

第 20 章

アイデンティティ ポリシー	587
アイデンティティ ポリシーの概要	587
パッシブ認証経由のユーザ アイデンティティの確立	588
アクティブ認証経由のユーザ アイデンティティの確立	588
不明なユーザの処理	588
アイデンティティ ポリシーを実装する方法	589
アクティブ認証のベストプラクティス	590
アイデンティティ ポリシーの設定	592
アイデンティティ ポリシーの設定	593
アイデンティティ ポリシーのデフォルト アクションの設定	595
アイデンティティ ルールの設定	595
透過的なユーザ認証のイネーブル化	600
トランスペアレント認証の要件	601
トランスペアレント認証用の Internet Explorer の設定	602

トランスペアレント認証用の Firefox の設定 603

アイデンティティ ポリシーのモニタリング 604

アイデンティティ ポリシーの例 604

第 21 章

セキュリティ インテリジェンス 605

セキュリティ インテリジェンスについて 605

ブロックリストの例外の作成 606

セキュリティ インテリジェンス フィード カテゴリ 606

セキュリティ インテリジェンスのためのライセンス要件 608

セキュリティ インテリジェンスの設定 608

セキュリティ インテリジェンスのモニタリング 609

セキュリティ インテリジェンスの例 610

第 22 章

アクセス制御 611

アクセス制御のベストプラクティス 611

アクセス制御の概要 615

アクセス制御ルールおよびデフォルト アクション 615

アプリケーションのフィルタリング 616

暗号化トラフィックおよび復号トラフィックのアプリケーション制御 616

Common Industrial Protocol (CIP) および Modbus アプリケーション (ISA 3000) でのフィ
ルタリング 616

アプリケーション フィルタリングのベストプラクティス 617

URL フィルタリング 618

カテゴリ別とレピュテーション別の URL のフィルタリング 618

URL のカテゴリとレピュテーションのルックアップ 619

手動 URL フィルタリング 619

HTTPS トラフィックのフィルタリング 620

URL フィルタリングとアプリケーション フィルタリングの比較 622

効果的な URL フィルタリングのベストプラクティス 622

Web サイトがブロックされた際、ユーザに対して表示される内容 623

DNS要求のフィルタリング 624

DNS要求のフィルタリングのガイドライン	625
URLカテゴリとレピュテーションに基づいたDNS要求のフィルタリング	625
侵入、ファイル、およびマルウェア検査	626
アクセス コントロール ルールの順序のベスト プラクティス	627
NAT とアクセス ルール	628
その他のセキュリティ ポリシーがアクセス制御に影響する仕組み	628
アクセス制御のためのライセンス要件	628
アクセス コントロール ポリシーに関する注意事項と制限事項	629
アクセス コントロール ポリシーの設定	632
デフォルト アクションの設定	633
アクセス コントロール ポリシーの設定	633
アクセス制御ルールの設定	634
送信元/送信先条件	637
アプリケーション基準	639
URL の基準	641
ユーザ基準	643
侵入ポリシーの設定	644
ファイル ポリシー設定	644
ロギングの設定	645
アクセス制御ポリシーのモニタリング	647
ダッシュボードでのアクセス制御統計情報のモニタリング	647
ルール ヒット カウントの調査	648
アクセス制御に関する Syslog メッセージのモニタリング	649
CLI でのアクセス制御ポリシーのモニタリング	649
アクセス制御の例	650
TrustSec セキュリティ グループ タグを使用したネットワーク アクセスの制御方法	650
セキュリティ グループ タグ (SGT) について	651
セキュリティ グループ タグ (SGT) に基づくアクセス制御の設定	652
第 23 章	侵入ポリシー 659
	侵入ポリシーとネットワーク分析ポリシーについて 659

システム定義のネットワーク分析および侵入ポリシー	660
検査モード：防御と検出	661
侵入とプリプロセッサのルール	661
侵入ルールの属性	662
デフォルトの侵入変数セット	663
ジェネレータ識別子	664
ネットワーク分析ポリシー	665
侵入ポリシーのためのライセンス要件	666
アクセス制御ルールでの侵入ポリシーの適用	666
侵入イベントの Syslog の設定	667
ネットワーク分析ポリシーの設定 (Snort 3)	667
インスペクタおよびバインダオーバーライドの設定	669
オーバーライドとスキーマのダウンロード	672
オーバーライドのアップロード	673
侵入ポリシーの管理 (Snort 3)	673
カスタム侵入ポリシーの設定 (Snort 3)	675
侵入ポリシーのプロパティの表示または編集 (Snort 3)	676
侵入ポリシーのルールグループの追加または削除 (Snort 3)	679
侵入ルールのアクションの変更 (Snort 3)	681
カスタム侵入ルールとルールグループの管理	683
カスタム侵入ルールのアップロード	684
個人のカスタム侵入ルールの設定	687
侵入ポリシーのモニタリング	688
侵入ポリシーの例	689

第 24 章

ネットワーク アドレス変換 (NAT)	691
NAT を使用する理由	691
NAT の基礎	692
NAT の用語	692
NAT タイプ	693
ルーテッドモードの NAT	693

自動 NAT および 手動 NAT	694
自動 NAT	694
手動 NAT	695
自動 NAT と 手動 NAT の比較	695
NAT ルールの順序	696
NAT インターフェイス	698
NAT 用のルーティングの設定	699
マッピング インターフェイスと同じネットワーク上のアドレス	699
固有のネットワーク上のアドレス	700
実際のアドレスと同じアドレス (アイデンティティ NAT)	700
NAT のガイドライン	700
インターフェイス ガイドライン	700
IPv6 NAT ガイドライン	701
IPv6 NAT のベストプラクティス	701
検査対象プロトコルの NAT サポート	702
FQDN 宛先のガイドライン	704
NAT のガイドラインの補足	705
NAT の設定	707
ダイナミック NAT	708
ダイナミック NAT について	708
ダイナミック NAT の欠点と利点	709
ダイナミック自動 NAT の設定	710
ダイナミック手動 NAT の設定	711
ダイナミック PAT	714
ダイナミック PAT について	714
ダイナミック PAT の欠点と利点	715
ダイナミック自動 PAT の設定	715
ダイナミック手動 PAT の設定	717
スタティック NAT	720
スタティック NAT について	720
スタティック自動 NAT の設定	725

スタティック手動 NAT の設定	727
アイデンティティ NAT	730
アイデンティティ自動 NAT の設定	731
アイデンティティ手動 NAT の設定	732
Threat Defense の NAT ルールのプロパティ	736
自動 NAT のパケット変換プロパティ	736
手動 NAT のパケット変換プロパティ	738
詳細 NAT プロパティ	740
IPv6 ネットワークの変換	741
NAT64/46 : IPv6 から IPv4 へのアドレス変換	741
NAT64/46 の例 : 内部 IPv6 ネットワークと外部 IPv4 インターネット	742
NAT64/46 の例 : 外部 IPv4 インターネットと DNS 変換を使用した内部 IPv6 ネットワーク	744
NAT66 : IPv6 アドレスから別の IPv6 アドレスへの変換	749
NAT66 の例 : ネットワーク間のスタティック変換	750
NAT66 の例 : シンプル IPv6 インターフェイス PAT	752
NAT のモニタリング	755
NAT の例	756
内部 Web サーバへのアクセスの提供 (スタティック自動 NAT)	756
FTP、HTTP、および SMTP のための単一アドレス (ポート変換を設定したスタティック自動 NAT)	759
宛先に応じて異なる変換 (ダイナミック手動 PAT)	765
宛先アドレスおよびポートに応じて異なる変換 (ダイナミック手動 PAT)	771
NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え	777
DNS 64 応答修正	778
DNS 応答修正、外部の DNS サーバ	784
DNS 応答修正、ホスト ネットワーク上の DNS サーバ	787
第 VI 部 :	仮想プライベート ネットワーク (VPN) 791
第 25 章	サイト間 VPN 793
	VPN の基本 793

Internet Key Exchange (IKE)	794
VPN 接続をセキュアにする方法	795
使用する暗号化アルゴリズムの決定	795
使用するハッシュ アルゴリズムの決定	796
使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定	797
使用する認証方式の決定	798
VPN トポロジ	799
動的にアドレス指定されたピアによるサイト間 VPN 接続の確立	799
仮想トンネルインターフェイスとルートベースの VPN	800
ルートベースの VPN を設定するためのプロセスの概要	800
仮想トンネルインターフェイスとルートベースの VPN に関するガイドライン	801
IPsec フローのオフロード	802
サイト間 VPN の管理	803
サイト間 VPN 接続の設定	804
仮想トンネルインターフェイスの設定	809
サイト間 VPN 経由のトラフィックの許可	810
グローバル IKE ポリシーの設定	811
IKEv1 ポリシーの設定	813
IKEv2 ポリシーの設定	814
IPsec プロポーザルの設定	817
IKEv1 用 IPsec プロポーザルの設定	817
IKEv2 用 IPsec プロポーザルの設定	819
サイト間 VPN 接続の確認	820
サイト間 VPN のモニタリング	823
サイト間 VPN の例	823
NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除	823
外部サイト間 VPN ユーザの外部インターフェイスでインターネット アクセスを実現する 方法（ヘアピニング）	830
サイト間 VPN における複数の仮想ルータのネットワークからのトラフィックを保護する 方法	838

第 26 章

リモート アクセス VPN 843

リモート アクセス VPN の概要 843

デバイス モデル別の同時 VPN セッションの最大数 844

セキュアクライアント ソフトウェアのダウンロード 845

セキュアクライアント ソフトウェアのインストール方法 845

RADIUS およびグループ ポリシーを使用したユーザの権限および属性の制御 846

RADIUS サーバに送信された属性 847

RADIUS サーバから受信した属性 847

二要素認証 849

RSA 二要素認証 849

RADIUS を使用した Duo 二要素認証 849

LDAP を使用した Duo 二要素認証 850

リモート アクセス VPN のライセンス要件 851

リモート アクセス VPN に関する注意事項と制限事項 851

リモート アクセス VPN の設定 852

クライアント プロファイルの設定およびアップロード 854

リモート アクセス VPN 経由のトラフィックの許可 858

リモート アクセス VPN 設定の確認 858

リモート アクセス VPN 設定の管理 860

RA VPN 接続プロファイルの設定 861

接続プロファイルのための AAA の設定 865

接続プロファイルのための証明書認証の設定 869

RA VPN のクライアント アドレス指定の設定 870

RA VPN のグループ ポリシーの設定 871

一般属性 872

セッション設定属性 873

アドレス割り当て属性 873

スプリット トンネリング属性 874

セキュアクライアント 属性 875

トラフィック フィルタ属性 877

Windows ブラウザ プロキシ属性	878
リモート アクセス VPN のモニタリング	878
リモート アクセス VPN のトラブルシューティング	879
SSL 接続問題のトラブルシューティング	879
セキュアクライアント のダウンロードおよびインストールの問題のトラブルシューティング	880
セキュアクライアント 接続問題のトラブルシューティング	880
RA VPN トラフィック フローの問題のトラブルシューティング	881
リモート アクセス VPN の例	882
RADIUS 認可変更の実装方法	882
認可変更へのシステム フロー	883
Threat Defense デバイスでの認可変更の設定	884
ISE での認可変更の設定	888
Duo LDAP を使用した二要素認証の設定方法	892
Duo LDAP セカンダリ認証のシステム フロー	892
Duo LDAP セカンダリ認証の設定	893
リモート アクセス VPN ユーザの外部インターフェイスでインターネットアクセスを実現する方法 (ヘアピンング)	900
リモート アクセス VPN を使用した外部ネットワークでのディレクトリ サーバの使用法	905
グループによって RA VPN アクセスを制御する方法	921
異なる仮想ルータの内部ネットワークへの RA VPN アクセスを可能にする方法	926
セキュアクライアント のアイコンとロゴをカスタマイズする方法	930

 第 VII 部 :

システム管理 933

 第 27 章

システム設定 935

管理アクセスの設定	935
管理アクセス リストの設定	936
データインターフェイスでの管理アクセス用の HTTPS ポートの設定	938
Threat Defense Web サーバー証明書の設定	939
ログイン画面のカスタマイズ	940

システム ログिंगの設定	941
重要度レベル	942
リモート syslog サーバのログिंगの設定	942
内部バッファへのログिंगの設定	944
コンソールへのログिंगの設定	945
イベント リスト フィルタの設定	946
DHCP の設定	947
DHCP サーバの設定	947
DHCP リレーの設定	950
ダイナミック DNS (DDNS) の設定	952
DNS の設定	955
DNS グループの設定	955
データおよび管理トラフィック用のDNSの設定	957
DNS の一般的な問題のトラブルシューティング	959
デバイスのホスト名の設定	961
Network Time Protocol (NTP) の設定	961
Precision Time Protocol の設定 (ISA 3000)	962
管理接続用 HTTP プロキシの設定	966
クラウド サービスの設定	966
Security Cloud Control の有効化または無効化 (レガシー デバイス マネージャ モード)	968
Cisco Success Network への接続	969
Cisco Cloud へのイベントの送信	970
クラウド サービスの登録解除	971
Web 分析の有効化または無効化	972
URL フィルタリングの設定	972
Device Manager から Management Center または Security Cloud Control に切り替えます。	974
Management Center または Security Cloud Control を Device Manager に切り替えます。	980
TLS/SSL暗号設定の設定	981
TLS/SSL暗号オブジェクトの設定	982

ソフトウェア アップデートのインストール	985
システム データベースおよびフィードの更新	985
システム データベースおよびフィードの更新の概要	985
システム データベースの更新	987
Cisco Security Intelligence フィードの更新	989
のアップグレードThreat Defense	990
アップグレード準備状況チェックの実行	992
アップグレードのモニタリング Threat Defense	993
Threat Defense のアップグレードのキャンセルまたは再試行	994
Threat Defense の復元	994
Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング	995
デバイスのイメージ再作成	997
システムのバックアップと復元	997
システムの即時バックアップ	998
システムのスケジュール バックアップ	999
反復バックアップ スケジュールの設定	1000
バックアップの復元	1001
バックアップ ファイルの管理	1003
監査と変更管理	1004
監査イベント	1004
監査ログの表示および分析	1006
監査ログのフィルタリング	1007
展開およびエンティティ変更履歴の確認	1009
保留中の全変更の廃棄	1010
デバイス設定のエクスポート	1011
Device Manager および Threat Defense ユーザーアクセスの管理	1012
Device Manager (HTTPS) ユーザー用の外部認証 (AAA) 設定	1012
Threat Defense CLI (SSH) ユーザー用の外部認証 (AAA) 設定	1014
Device Manager ユーザーセッションの管理	1016
外部ユーザー用のスタンバイ HA ユニットでの Device Manager アクセスの有効化	1017
Threat Defense CLI のローカル ユーザ アカウントの作成	1017

システムの再起動またはシャットダウン	1020
システムのトラブルシューティング	1021
接続テストのためのアドレスへの ping	1021
ホストへのルートのトレース	1023
デバイスのトレースルートへの表示	1025
NTP のトラブルシューティング	1026
管理インターフェイスの DNS のトラブルシューティング	1028
CPU およびメモリ使用量の分析	1031
ログの表示	1032
トラブルシューティング ファイルの作成	1034
ハードウェア管理のタスク	1034
ISA 3000 デバイスの交換	1035
Cisco Secure Firewall 3100 での SSD のホットスワップ	1035
USB ポートの無効化	1037

付録 A :

詳細設定	1039
Smart CLI と FlexConfig について	1039
Smart CLI と FlexConfig の推奨される使用法	1040
Smart CLI および FlexConfig オブジェクトの CLI コマンド	1041
ソフトウェアのアップグレードが FlexConfig ポリシーに与える影響	1041
ASA ソフトウェア バージョンと現在の CLI 設定の決定	1042
禁止された CLI コマンド	1042
Smart CLI テンプレート	1049
Smart CLI および FlexConfig に関する注意事項と制限事項	1050
Smart CLI オブジェクトの設定	1050
FlexConfig ポリシーの設定	1052
FlexConfig オブジェクトの設定	1054
FlexConfig オブジェクトの変数の作成	1056
FlexConfig 変数の参照と値の取得	1058
変数参照: {{変数}} または {{{変数}}}	1058
セクション {{#key}} {{/key}} と逆セクション {{^key}} {{/key}}	1062

FlexConfig オブジェクト内の Smart CLI オブジェクトの参照	1064
秘密キー オブジェクトの設定	1066
FlexConfig ポリシーのトラブルシューティング	1067
FlexConfig の例	1068
グローバル デフォルト インспекションを有効/無効にする方法	1068
FlexConfig の変更を元に戻す方法	1074
一意のトラフィック クラスのインспекションを有効にする方法	1076



第 1 章

はじめに

次のトピックでは、Secure Firewall Threat Defense（旧称 Firepower Threat Defense）の設定を開始する方法について説明します。

- [本書の対象読者](#)（1 ページ）
- [Device Manager /Threat Defense のバージョン 7.7.0 における新機能](#)（1 ページ）
- [システムへのログイン](#)（6 ページ）
- [システムの設定](#)（12 ページ）
- [設定の基本](#)（38 ページ）

本書の対象読者

このマニュアルでは、脅威に対する防御 デバイスに組み込まれた Secure Firewall Device Manager（旧称 Firepower Device Manager）の Web ベース設定インターフェイスを使用して 脅威に対する防御 を設定する方法について説明します。

Device Manager では、小規模または中規模ネットワークで最も一般的に使用されるソフトウェアの基本機能を設定できます。また、これは多くの 脅威に対する防御 デバイスを含む大規模なネットワークを制御するために強力な複数デバイスのマネージャを使用することがない、単一のデバイスまたは限られた数のデバイスを含むネットワークのために特に設計されています。

多数のデバイスを管理している場合、または 脅威に対する防御 で許可される、より複雑な機能や設定を使用したい場合は、組み込みの Device Manager の代わりに Secure Firewall Management Center（旧称 Firepower Management Center）を使用してデバイスを設定します。

Device Manager /Threat Defense のバージョン 7.7.0 における新機能

リリース：2025 年 3 月 5 日

次の表に、Device Manager を使用して構成した場合に 脅威に対する防御 7.7.0 で使用可能な新規機能を示します。

機能	説明
プラットフォーム機能	
Cisco Secure Firewall 1230、1240、および 1250（ラックマウント）。	Secure Firewall CSF-1230 および CSF-1240 が導入されました。 • 8x1Gbps RJ-45 1000BASE-T/2.5BBASE-T 銅線 • 4x1Gbps SFP+ 光 Secure Firewall CSF-1250 : • 8x2.5Gbps 1000BASE-T/2.5BBASE-T 銅線 • 4x2.5Gbps SFP28 光 Cisco Secure Firewall CSF-1230, CSF-1240, and CSF-1250 Hardware Installation Guide を参照してください。
Cisco Secure Firewall 1210CP IEEE 802.3bt のサポート (PoE++ および Hi-PoE)。	IEEE 802.3bt のサポートに関連する次の改善が行われました。 • PoE++ と Hi-PoE : ポートあたり最大 90 W。 • シングルシグネチャおよびデュアルシグネチャの受電デバイス (PD) 。 • パワーバジェットが先着順で行われます。 • show power inline にパワーバジェットフィールドが追加されました。 新しい/変更された画面 : [デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] > [PoE] 新規/変更されたコマンド : show power inline
AWS、Azure、GCP のインスタンス。	次のファミリーから Threat Defense Virtual のインスタンスを追加しました。 • AWS (Amazon Web Services) : C6i、C6a • Azure (Microsoft Azure) : Dv4、Dv5 • GCP (Google Cloud Platform) : E2、N1、N2D、C2D 参照 : Cisco Secure Firewall Threat Defense Virtual スタートアップガイド

機能	説明
ISO ベースの cloud-init シーディングを使用した VMware 向け Threat Defense Virtual の自動プロビジョニング。	ホスト名、パスワード、管理モード、ファイアウォール モード、ネットワーク設定、展開タイプなどの初期設定の詳細が含まれているテキスト ファイル (day0.iso) を使用して、VMware 向けの脅威防御仮想機能をすばやく展開できるようになりました。 Cisco Secure Firewall Threat Defense Virtual スタートアップガイドを参照してください。
ファイアウォールと IPS の機能	
インラインセットのハードウェアバイパスのサポート。	デバイスモデルがハードウェアバイパスをサポートしている場合、サポートされているインターフェイスを含むインラインセットに設定できるようになりました。 インラインセット設定に [バイパス (Bypass)] オプションが追加されました。
廃止 : Snort 2	アップグレードの影響。Snort 2 デバイスはアップグレードできません。 Snort 2 は廃止されました。Snort 2 デバイスをバージョン 7.7.0 以降にアップグレードすることはできません。 show snort counters および show snort preprocessor-memory-usage コマンドと同様、Snort 2 に切り替える機能は削除されました。 アップグレードする前に、Snort 3 に切り替えてください。現在のバージョンに対応するガイドの「侵入ポリシー」の章を参照してください： Cisco Secure Firewall Device Manager 設定ガイド。
管理機能	
カスタムログインページ。	デバイスマネージャのログインページはカスタマイズできます。これには、ログインページに画像やテキストを追加することが含まれます。たとえば、免責事項と警告を含めて、ユーザーにログイン前の同意を求めることができます。このテキストは、SSH セッションでも表示されます。 [システム設定 (System Settings)] > [ログイン ページ (Login Page)] ページが追加されました。

機能	説明
Google リモートプロシージャコール (gRPC) を使用したカスタムストリーミングテレメトリ。	Google リモートプロシージャコール (gRPC) を使用してデータを収集する外部テレメトリコレクタに、システムの正常性とテレメトリデータを送信するようにデバイスを設定できます。その後、テレメトリコレクタを使用してデバイスをモニターし、カスタム テレメトリ ソリューションと統合できます。 この機能を設定するには、API を使用します (/devicesettings/default/telemetrystreamingconfig)。
Performance	
高可用性 Threat Defense の迅速なフェールオーバー。	Threat Defense の高可用性フェールオーバーにより、新しいアクティブデバイスがMACアドレスエントリごとにマルチキャストパケットを生成して、すべてのブリッジグループインターフェイスに送信し、アップストリームスイッチにルーティングテーブルを更新させます。このタスクは、データプレーンで非同期的に実行され、コントロールプレーンでの重要なフェールオーバータスクに特権が与えられるようになりました。これにより、フェールオーバーが迅速になり、ダウンタイムが減少します。
広帯域幅で暗号化されたアプリケーション トラフィックは、侵入インスペクションを不要なものとしてバイパスします。	特定の広帯域幅の暗号化されたアプリケーション トラフィックは、接続が許可ルールに一致する場合でも、侵入インスペクションを不要なものとしてバイパスするようになりました。侵入ルール (LSP) と脆弱性データベース (VDB) の更新により、バイパスされるアプリケーションが変更される可能性があります。現時点では、AnyConnect、IPsec、iCloud プライベート リレー、QUIC (HTTP/3 を含む)、Secure RTCP になっています。

機能	説明
FlexConfig を使用した、ブロックの枯渇からの Threat Defense の自動回復の設定。	サービスの中断によるダウンタイムを減らすために、新しい障害マネージャによりブロックの枯渇がモニターされて、必要に応じてデバイスが自動的にリロードされます。高可用性展開では、これによりフェールオーバーがトリガーされます。障害モニタリングは、新しいデバイスとアップグレードされたデバイスで自動的に有効になります。無効にするには、FlexConfig を使用します。 新規/変更された FlexConfig コマンド： • fault-monitor block-depletion recovery-action {none reload} none を指定すると、自動リロードはオフになりますが、障害モニタリングはオフになりません。これを行うには、no fault-monitoring を使用します。 • fault-monitor block-depletion monitor-interval seconds 新規/変更された Threat Defense CLI コマンド：show fault-monitor block-depletion {status statistics}
トラブルシューティング	
CPU プロファイラにアプリケーション識別の統計が含まれる。	CPU プロファイラに、アプリケーション識別の統計が含まれるようになりました。CPU プロファイリング (cpu profile activate) を有効にすると、特定のアプリケーショントラフィックの処理で使用するリソースを確認できるようになりました。 新規/変更された CLI コマンド：system support appid-cpu-profiling status、system support appid-cpu-profiling dump 参照：Cisco Secure Firewall Threat Defense コマンドリファレンス
新しい IP フロー統計。	Cisco TAC の指示で脅威防御デバイスから IP フロー統計を収集する際に、新しい all パラメータは追加の統計（ポート、プロトコル、アプリケーション、累積遅延、および検査時間）を、指定されたファイルにログ記録します。 新規/変更されたコマンド：system support flow-ip-profiling start flow-ip-file filename all {enable disable} Cisco Secure Firewall Threat Defense コマンドリファレンスを参照してください。
セキュリティと強化	

機能	説明
Threat Defense CLI の Basic ユーザーのユーザー権限の制限。	Threat Defense CLI の Basic ユーザー権限の範囲が <code>dig</code>、<code>ping</code>、<code>traceroute</code> の各コマンドに制限されるようになりました。Basic 権限を持つユーザーを作成した場合は、そのユーザーを Config 権限に変更する必要があるかどうかを判断してください。ユーザーの権限レベルを変更するには、<code>configure user access</code> コマンドを使用します。 参照：Cisco Secure Firewall Threat Defense コマンドリファレンス
すべての RADIUS 応答に Message-Authenticator 属性が必要です。	アップグレードの影響。アップグレード後、既存のサーバーに対して有効にします。 すべての RADIUS 応答で Message-Authenticator 属性を要求できるようになりました。これにより、Threat Defense VPN ゲートウェイで、RA VPN 用でもデバイス自体へのアクセス用でも、RADIUS サーバーからのすべての応答を安全に検証できるようになります。 新しい RADIUS サーバーでは、[すべての RADIUS 応答にメッセージオーセンティケータを要求 (Require Message-Authenticator for all RADIUS Responses)] オプションがデフォルトで有効になっています。既存のサーバーでも有効にすることを推奨します。無効にすると、ファイアウォールが攻撃にさらされる可能性があります。 新しい CLI コマンド：<code>message-authenticator-required</code> バージョンの制限：バージョン 7.0.7 以降/7.7.0 以降が必要です。

システムへのログイン

脅威に対する防御 デバイスには、次の 2 つのインターフェイスがあります。

Device Manager Web インターフェイス

Device Manager は Web ブラウザで実行されます。このインターフェイスを使用して、システムの設定、管理、およびモニタが行えます。

コマンドライン インターフェイス (CLI、コンソール)

CLI はトラブルシューティングに使用します。Device Manager の代わりに初期設定に使用することもできます。

以下のトピックで、これらのインターフェイスへのログインやユーザアカウントを管理する方法について説明します。

ユーザ ロールで表示および実行可能な対象の制御

ユーザー名はロールに割り当てられ、Device Manager で何を実行できるか、また何を表示できるかがユーザーロールによって決まります。ローカルに定義される [管理者 (admin)] ユーザーにはすべての権限がありますが、別のアカウントを使用してログインすると権限が少なくなります。

Device Manager ウィンドウの右上隅にユーザー名と権限レベルが表示されます。

admin
Administrator 

権限は次のとおりです。

- [管理者 (Administrator)] : すべての機能を表示および使用できます。
- [読み取り/書き込みユーザー (Read-Write User)] : 読み取り専用ユーザーが実行できることをすべて実行できます。また、設定を編集および展開することもできます。アップグレードのインストール、バックアップの作成と復元、監査ログの表示、他の Device Manager ユーザーセッションの終了など、システムクリティカルなアクションに対してのみ制限があります。
- [読み取り専用ユーザ (Read-Only User)] : ダッシュボードおよび設定を表示できますが、変更することはできません。変更しようとする、権限がないことを示すエラーメッセージが表示されます。
- [暗号管理者 (Cryptographic Admin)] : 証明書、復号ポリシー、秘密キーなどの暗号化関連機能を設定できます。他の機能への読み取り専用アクセス。
- [監査管理者 (Audit Admin)] : ユーザーのログイン履歴と監査ログを表示し、監査関連のアクションを実行できます。設定機能への読み取り専用アクセス。

これらの権限は、CLI ユーザが利用できる権限とは関連していません。

Device Manager へのログイン

Device Manager を使用して、システムの設定、管理、モニターを行います。ブラウザで設定可能な機能を、コマンドラインインターフェイス (CLI) で設定することはできません。セキュリティ ポリシーを実装するには、Web インターフェイスを使用する必要があります。

Firefox、Chrome、Safari、Edge ブラウザの最新バージョンを使用します。



(注) 誤ったパスワードを入力し、3 回連続してログインに失敗した場合、アカウントは 5 分間ロックされます。再度ログインを試みる前に待機する必要があります。

始める前に

最初は、**admin** ユーザー名を使用してのみ Device Manager にログインできます。ただし、[Device Manager および Threat Defense ユーザーアクセスの管理（1012 ページ）](#) に説明されているように、外部 AAA サーバに定義されている追加ユーザの認証は設定できます。

アクティブなログインは一度に5つまで可能です。これには、デバイスマネージャにログインしているユーザーと、有効期限の切れていないAPI トークンなどのアクティブなAPI セッションが含まれます。この制限を超えると、最も古いセッション（デバイスマネージャログインまたはAPI トークン）が期限切れになり、新しいセッションが許可されます。これらの制限は、SSH セッションには適用されません。

手順

ステップ 1 ブラウザを使用して、システムのホームページ（例：<https://ftd.example.com>）を開きます。

次のいずれかのアドレスを使用できます。設定済みであれば、IPv4 アドレス、IPv6 アドレス、または DNS 名を使用できます。

- 管理アドレス。（ほとんどのプラットフォームの）デフォルトでは、管理インターフェイスは DHCP クライアントであるため、IP アドレスは DHCP サーバによって異なります。
- HTTPS アクセス用に開いたデータ インターフェイスのアドレス。（ほとんどのプラットフォームの）デフォルトでは、“内部” インターフェイスでHTTPSアクセスが許可されているため、デフォルトの内部アドレス192.168.1.1に接続できます。95.1.使用モデルの内部IPアドレスの詳細については、[初期セットアップ前のデフォルト設定（30 ページ）](#) を参照してください。

HTTPS データポートを変更した場合は、URL にカスタムポートを含める必要があります。たとえば、ポートを 4443 に変更した場合は、<https://ftd.example.com:4443> のような URL にします。

ヒント

ブラウザがサーバ証明書を認識するように設定されていない場合、信頼されていない証明書に関する警告が表示されます。証明書を例外として受け入れるか、または信頼できるルート証明書ストアの証明書を受け入れます。

ステップ 2 ログイン画面に警告や免責事項などのテキストが含まれている場合は、その情報を読み、チェックボックスをオンにして契約に同意します。

ステップ 3 （ローカルユーザーおよびRADIUSのみ）デバイスに定義されているユーザー名とパスワードを入力し、[ログイン (Login)] をクリックします。

事前定義されたユーザであるユーザ名 **admin** を使用できます。デフォルトの **admin** パスワードは Admin123 です。AWS では、初期展開時にユーザーデータを使用してデフォルトのパスワードを定義（[\[高度な詳細 \(Advanced Details\)\] > \[ユーザーデータ \(User Data\)\]](#)）していなければ、デフォルトの管理者パスワードは AWS のインスタンス ID です。

アクティビティが 30 分間ないと、セッションは期限切れになり、再度ログインするよう要求されます。ログアウトするには、ページの右上にあるユーザアイコンドロップダウンメニューから [ログアウト (Log Out)] を選択します。



ステップ 4 (SAML サーバーのみ) [ログイン (Login)] ボタンの横にある [シングルサインオン (SSO) (Single-Sign On (SSO))] リンクをクリックします。

これにより、ログイン用の SAML サーバーに移動します。ログイン情報を入力しないでください。リンクをクリックするだけです。ローカルのログイン情報を入力して [ログイン (Login)] をクリックすると、ローカルデータベースを使用してログインします。

SAML サーバーのログインページで、通常どおりにログインします。ログインに共通アクセスカード (CAC) を使用する場合は、リンクをクリックして証明書を使用してサインインします。デバイスマネージャは、CAC 認証を直接処理しません。

コマンドラインインターフェイス (CLI) へのログイン

コマンドラインインターフェイス (CLI) を使用してシステムのセットアップを行い、基本的なシステムのトラブルシューティングを行います。CLI でポリシーを設定することはできません。

CLI にログインするには、次のいずれかを実行します。

- デバイスに付属のコンソール ケーブルを使用し、9600 ボー、8 データ ビット、パリティなし、1 ストップビット、フロー制御なしに設定されたターミナルエミュレータを用いて PC をコンソールに接続します。コンソール ケーブルの詳細については、デバイスのハードウェア ガイドを参照してください。



(注) Firepower および Secure Firewall デバイスモデルでは、コンソールポートの CLI は Secure Firewall eXtensible オペレーティングシステム (FXOS) です。一部のデバイスモデルでは、**connect ftd** コマンドを使用して 脅威に対する防御 CLI にアクセスできます。Firepower 4100/9300 の場合は、[アプリケーションのコンソールへの接続 \(249 ページ\)](#) を参照してください。FXOS CLI は、シャールレベルのトラブルシューティングにのみ使用します。基本設定、モニタリング、および通常のシステムのトラブルシューティングには 脅威に対する防御 CLI を使用します。FXOS コマンドの詳細については、FXOS のマニュアルを参照してください。

- Threat Defense Virtual の場合は、仮想コンソールを開きます。

- SSH クライアントを使用して、管理 IP アドレスに接続します。SSH 接続のインターフェイスを開く場合は、データインターフェイスのアドレスにも接続できます（[管理アクセスリストの設定（936 ページ）](#) を参照）。データ インターフェイスへの SSH アクセスはデフォルトで無効になっています。**admin** ユーザ名または別の CLI ユーザアカウントを使用してログインします。デフォルトの **admin** パスワードは **Admin123** です。AWS では、初期展開時にユーザーデータを使用してデフォルトのパスワードを定義（[\[高度な詳細（Advanced Details）\]>\[ユーザーデータ（User Data）\]](#)）していなければ、Threat Defense Virtual のデフォルトの管理者パスワードは AWS のインスタンス ID です。

ヒント

- 管理者がログインプロセスに警告や免責事項などのテキストを追加した場合は、ステートメントを読んで同意したことを確認する必要があります。
- ログイン後に、CLI で使用可能なコマンドの情報を確認するには、**help** または **?** を入力します。使用方法の情報については、『[Cisco Firepower Threat Defense コマンド リファレンス](http://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html)』（http://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html）を参照してください。
- **configure user add** コマンドを使用して、CLI にログインできるローカルユーザアカウントを作成できます。ただし、これらのユーザは CLI のみにログインできます。Device Manager Web インターフェイスにはログインできません。
- 外部サーバで SSH アクセス用のユーザアカウントを作成できます。SSH アクセス用の外部認証の設定については、[Threat Defense CLI（SSH）ユーザー用の外部認証（AAA）設定（1014 ページ）](#) を参照してください。

パスワードの変更

パスワードは定期的に変更する必要があります。次の手順では、Device Manager にログインしているときにパスワードを変更する方法について説明します。



- (注) CLI にログインしている場合は、**configure password** コマンドを使用してパスワードを変更できます。別の CLI ユーザのパスワードを変更するには、**configure user password username** コマンドを使用します。

始める前に

この手順は、ローカルユーザにのみ適用されます。ユーザアカウントが外部 AAA サーバで定義されている場合、そのサーバでパスワードを変更する必要があります。

手順

ステップ 1 メニューの右上にあるユーザアイコンのドロップダウンリストから、[プロファイル (Profile)] を選択します。



ステップ 2 [パスワード] タブをクリックします。

ステップ 3 現在のパスワードを入力します。

ステップ 4 新規のパスワードを入力し、確認用にも入力します。

[生成 (Generate)] をクリックすると、ランダムな 16 文字のパスワードが生成されます。[パスワードの表示 (Show Password)] () ボタンをクリックして、マスクされていないパスワードを表示します。次に、[クリップボードにコピー (Copy To Clipboard)] リンクをクリックして、[確認 (Confirm)] フィールドにパスワードを貼り付けます。

このページには、パスワードの最小要件が含まれています。これらの最小要件は変更できません。パスワードは次のとおりです。

- 8 ～ 128 文字である
- 小文字と大文字がそれぞれ1文字以上含まれていること
- 数字が1桁以上含まれていること
- 特殊文字が1文字以上含まれていること
- 同じ文字の繰り返しが含まれていない

ステップ 5 [変更 (Change)] をクリックします。

ユーザ プロファイルの設定

ユーザ インターフェイスを設定したり、パスワードを変更することができます。

手順

ステップ 1 メニューの右上にあるユーザアイコンのドロップダウンリストから、[プロファイル (Profile)] を選択します。



ステップ 2 [プロファイル (Profile)] タブで次の設定を行い、[保存 (Save)] をクリックします。

- [タスクのスケジューリングに使用するタイムゾーン (Time Zone for Scheduling Tasks)] : バックアップや更新などのタスクをスケジュールする際に使用するタイムゾーンを選択します。別のゾーンを設定しても、ダッシュボードとイベントではブラウザのタイムゾーンが使用されます。
- [カラー テーマ (Color Theme)] : ユーザ インターフェイスで使用するカラー テーマを選択します。

ステップ 3 [パスワード (Password)] タブで、新しいパスワードを入力し、[変更 (Change)] をクリックします。

英語以外の言語でページを表示する

次の言語で GUI およびオンライン ヘルプを表示できます。

- フランス語 (カナダ)
- 中国語
- 英語 (デフォルト)
- 日本語
- 韓国語

これらの言語を使用するには、ブラウザの設定でその言語を選択する必要があります。製品自体には言語設定がありません。

お使いのブラウザで特定の言語がサポートされていない場合、製品はその言語で表示されません。たとえば、フランス語バージョンは、カナダのフランス語を使用するようにブラウザを設定した場合にのみ表示されます。別のタイプのフランス語を選択すると、製品は英語になります。

システムの設定

システム機能をネットワークで正しく動作させるには、初期設定を完了する必要があります。適切な導入には、ケーブルを正しく接続することや、デバイスをネットワークに挿入してインターネットや他の上流に位置するルータに接続するために必要なアドレスを設定することが含まれます。次の手順で、このプロセスについて説明します。

始める前に

初期設定を開始する前から、デバイスにはいくつかのデフォルト設定が組み込まれています。詳細については、[初期セットアップ前のデフォルト設定 \(30 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [インターフェイスの接続 \(13 ページ\)](#)

ステップ 2 [セットアップウィザードを使用した初期設定の完了 \(25 ページ\)](#)

設定の詳細については、[初期セットアップ後の設定 \(33 ページ\)](#) を参照してください。

インターフェイスの接続

デフォルト設定では、特定のインターフェイスが内部ネットワークと外部ネットワークに使用されることを前提としています。これらの前提に基づいてネットワーク ケーブルをインターフェイスに接続する場合、初期設定は簡単です。

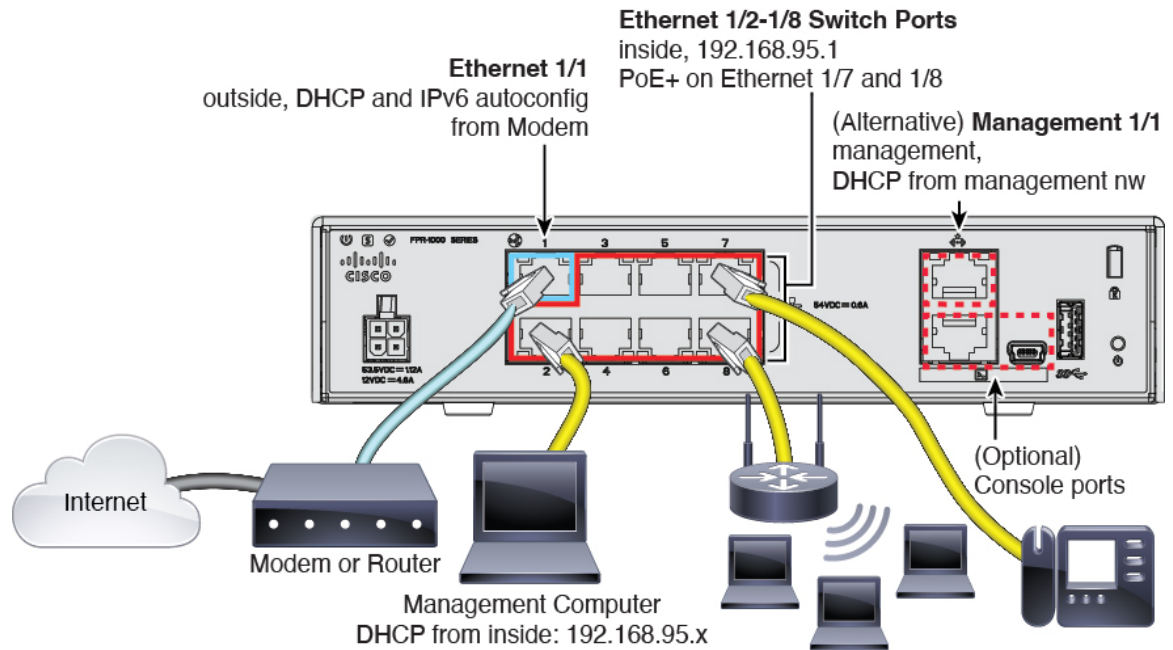
大半のモデルのデフォルト設定は、管理コンピュータを内部インターフェイスに接続するように設計されています。また、ワークステーションを管理ポートに直接接続することもできます。インターフェイスは別のネットワーク上にあるので、内部インターフェイスと管理ポートを同じネットワークに接続しないでください。

内部インターフェイスを、アクティブな DHCP サーバを持つネットワークに接続しないでください。内部インターフェイスで稼働中の DHCP サーバと競合してしまいます。ネットワークに別の DHCP サーバを使用する必要がある場合は、初期設定の後に不要な DHCP サーバを無効にします。

ここでは、デバイスの設定に内部インターフェイスを使用する際、このトポロジでシステムをケーブル接続する方法を説明します。

Firepower 1010 のケーブル配線

図 1: Firepower 1010 のケーブル配線



- 管理コンピュータを次のいずれかのインターフェイスに接続します。
 - イーサネット 1/2 ～ 1/8：管理コンピュータを内部スイッチポートのいずれかに直接接続します（イーサネット 1/2 ～ 1/8）。内部にはデフォルトの IP アドレス（192.168.951.1）があり、クライアント(管理コンピュータを含む)に IP アドレスを提供するために DHCP サーバも実行されるため、これらの設定が既存の内部ネットワーク設定と競合しないようにしてください。
 - Management 1/1：管理コンピュータを管理ネットワークに接続します。Management 1/1 インターフェイスは、DHCP から IP アドレスを取得するため、ネットワークに DHCP サーバが含まれていることを確認してください。

管理 1/1 IP アドレスをデフォルトから変更し、静的 IP アドレスを設定する必要がある場合は、管理コンピュータをコンソールポートにケーブル接続する必要もあります。[（任意）CLI での管理ネットワーク設定の変更（24 ページ）](#)を参照してください。

後で、他のインターフェイスから管理アクセスを設定できます。

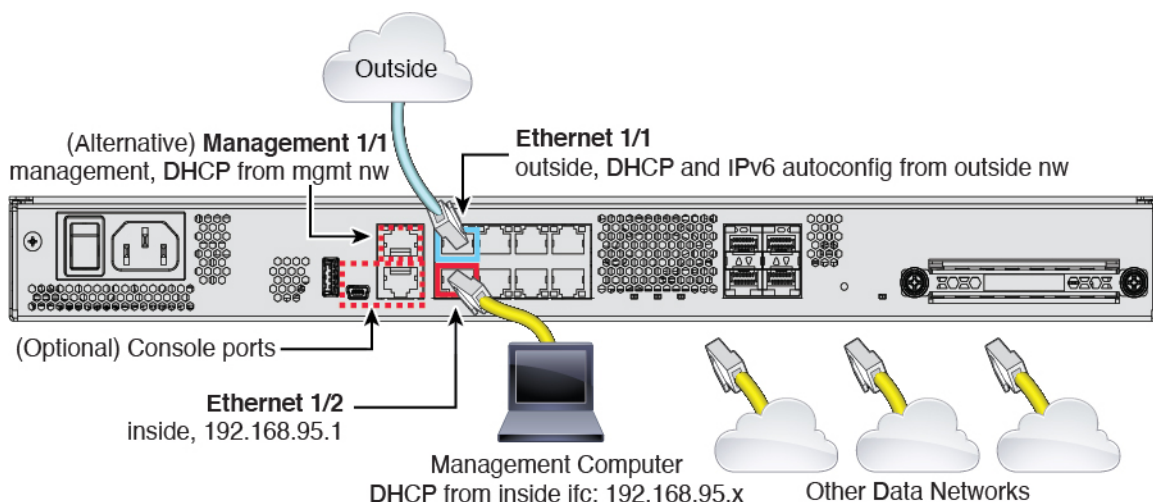
- 外部ネットワークをイーサネット 1/1 インターフェイスに接続します。
デフォルトでは、IP アドレスは IPv4 DHCP および IPv6 自動設定を使用して取得しますが、初期設定時に静的アドレスを設定できます。
- 内部デバイスを残りのスイッチポート（Ethernet 1/2 ～ 1/8）に接続します。
イーサネット 1/7 および 1/8 は Power over Ethernet+（PoE+）ポートです。



(注) PoE は Firepower 1010E ではサポートされていません。

Firepower 1100 のケーブル配線

図 2: Firepower 1100 のケーブル配線



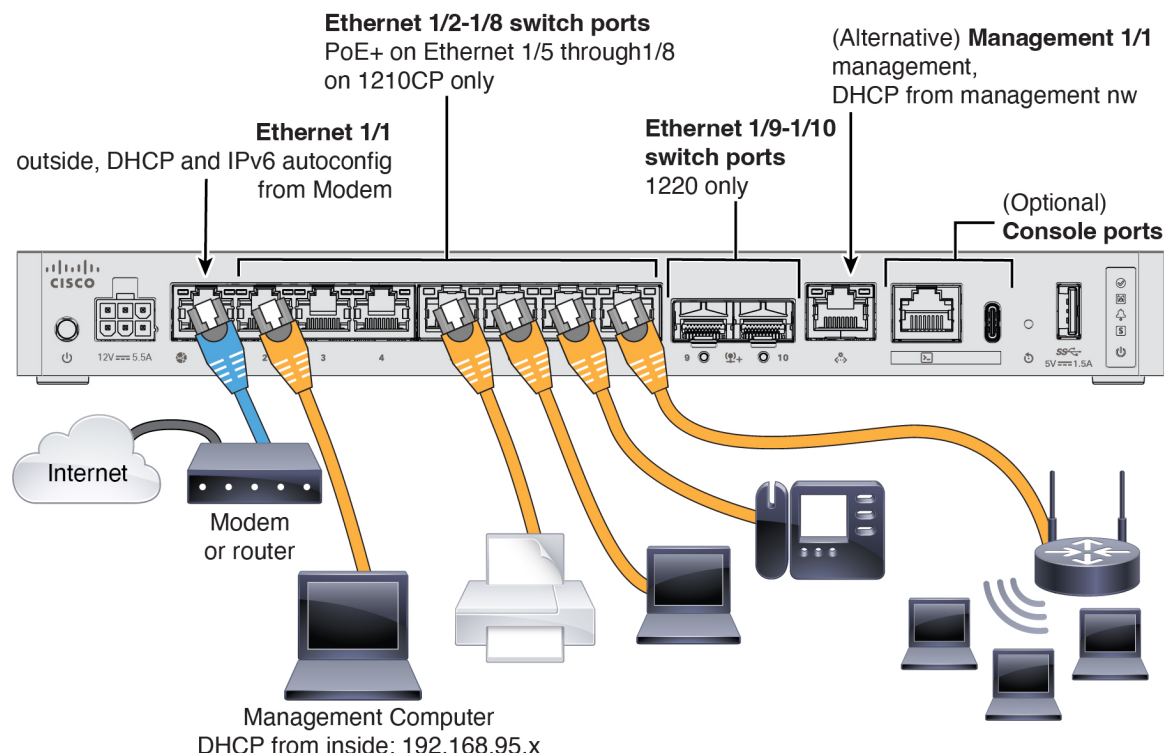
- 管理コンピュータを次のいずれかのインターフェイスに接続します。
 - Ethernet 1/2：初期設定のために管理コンピュータを Ethernet 1/2 に直接接続するか、Ethernet 1/2 を内部ネットワークに接続します。イーサネット 1/2 にはデフォルトの IP アドレス（192.168.95.1）があり、クライアント(管理コンピュータを含む)に IP アドレスを提供するために DHCP サーバも実行されるため、これらの設定が既存の内部ネットワーク設定と競合しないようにしてください。
 - Management 1/1（ラベル「MGMT」）：管理コンピュータを管理ネットワークに接続します。Management 1/1 インターフェイスは、DHCP から IP アドレスを取得するため、ネットワークに DHCP サーバが含まれていることを確認してください。

管理 1/1 IP アドレスをデフォルトから変更し、静的 IP アドレスを設定する必要がある場合は、管理コンピュータをコンソールポートにケーブル接続する必要もあります。[（任意）CLI での管理ネットワーク設定の変更（24 ページ）](#)を参照してください。

後で、他のインターフェイスから管理アクセスを設定できます。

- 外部ネットワークを Ethernet 1/1 インターフェイス（ラベル「WAN」）に接続します。
デフォルトでは、IP アドレスは IPv4 DHCP および IPv6 自動設定を使用して取得しますが、初期設定時に静的アドレスを設定できます。
- 残りのインターフェイスに他のネットワークを接続します。

Secure Firewall 1210/1220 のケーブル配線



- 管理コンピュータを次のいずれかのインターフェイスに接続します。
 - イーサネット 1/2 ～ 1/8 (1210) または 1/10 (1220) : 管理コンピュータをいずれかの内部スイッチポート (イーサネット 1/2 ～ 1/8 (1210) または 1/10 (1220)) に直接接続します。内部にはデフォルトの IP アドレス (192.168.95.1) があり、クライアントに IP アドレスを提供するために DHCP サーバも実行されます (管理コンピュータを含む)。したがって、これらの設定が既存の内部ネットワーク設定と競合しないようにしてください。
 - Management 1/1 : 管理コンピュータを管理ネットワークに接続します。Management 1/1 インターフェイスは、DHCP から IP アドレスを取得するため、ネットワークに DHCP サーバが含まれていることを確認してください。

管理 1/1 IP アドレスをデフォルトから変更し、静的 IP アドレスを設定する必要がある場合は、管理コンピュータをコンソールポートにケーブル接続する必要もあります。[\(任意\) CLI での管理ネットワーク設定の変更 \(24 ページ\)](#) を参照してください。

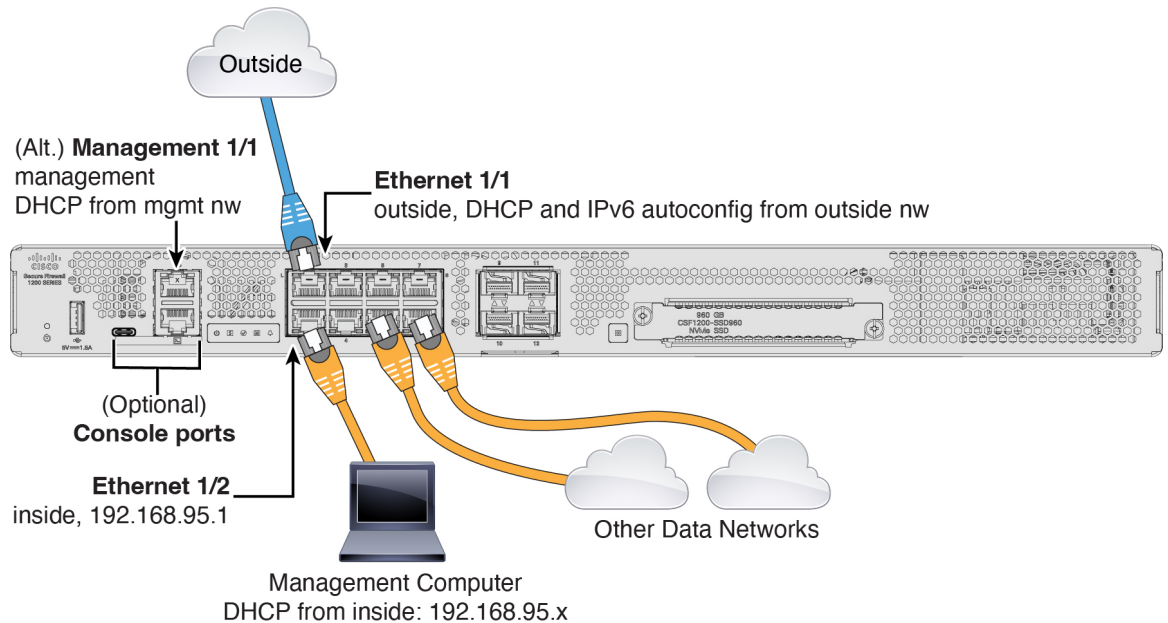
後で、他のインターフェイスから管理アクセスを設定できます。

- 外部ネットワークをイーサネット 1/1 インターフェイスに接続します。

デフォルトでは、IP アドレスは IPv4 DHCP および IPv6 自動設定を使用して取得しますが、初期設定時に静的アドレスを設定できます。

- 内部デバイスを残りのスイッチポート（イーサネット 1/2 ～ 1/8（1210）または 1/10（1220））に接続します。
- Secure Firewall 1220 のイーサネットポート 1/9 および 1/10 は SFP+ ポートです。
- Secure Firewall 1210CP のイーサネットポート 1/5 ～ 1/8 は Power over Ethernet+（PoE+）です。

Secure Firewall 1230/1240/1250 のケーブル配線



- 管理コンピュータを次のいずれかのインターフェイスに接続します。
 - Ethernet 1/2：初期設定のために管理コンピュータを Ethernet 1/2 に直接接続するか、Ethernet 1/2 を内部ネットワークに接続します。Ethernet 1/2 にはデフォルトの IP アドレス（192.168.95.1）があり、（管理コンピュータを含む）クライアントに IP アドレスを提供するために DHCP サーバーも実行されるため、これらの設定が既存の内部ネットワークの設定と競合しないようにしてください。
 - Management 1/1：管理コンピュータを管理ネットワークに接続します。Management 1/1 インターフェイスは、DHCP から IP アドレスを取得するため、ネットワークに DHCP サーバが含まれていることを確認してください。

管理 1/1 IP アドレスをデフォルトから変更し、静的 IP アドレスを設定する必要がある場合は、管理コンピュータをコンソールポートにケーブル接続する必要もあります。[（任意）CLI での管理ネットワーク設定の変更（24 ページ）](#)を参照してください。

後で、他のインターフェイスから管理アクセスを設定できます。

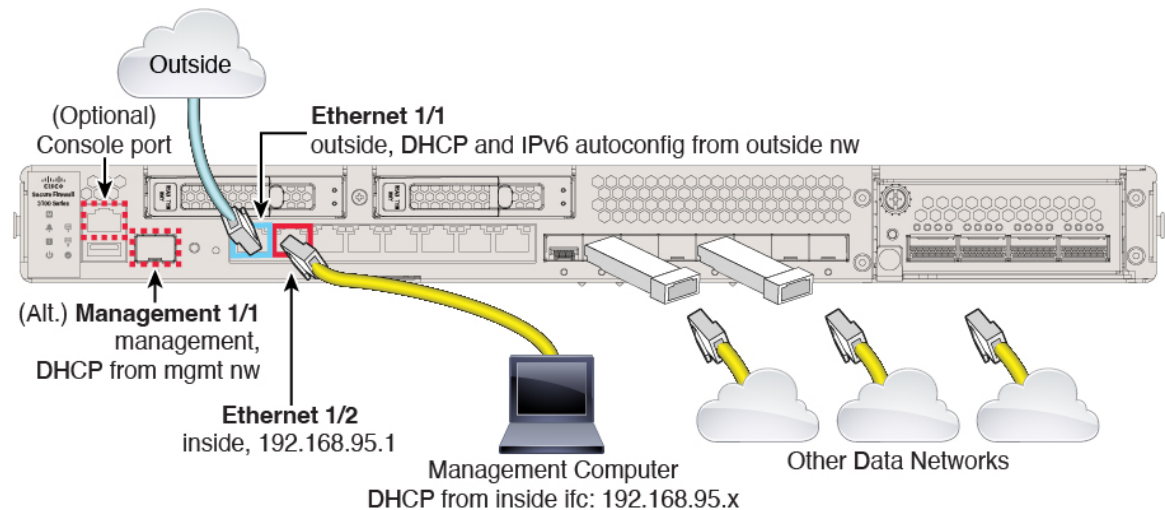
- 外部ネットワークを Ethernet1/1 インターフェイスに接続します。

デフォルトでは、IP アドレスは IPv4 DHCP および IPv6 自動設定を使用して取得しますが、初期設定時に静的アドレスを設定できます。

- 残りのインターフェイスに他のネットワークを接続します。イーサネット 1/9 ～ 1/12 は、SFP/SFP+ インターフェイスです。

Cisco Secure Firewall 3100 のケーブル配線

図 3: Cisco Secure Firewall 3100 のケーブル配線



Management 1/1 または Ethernet 1/2 のいずれかで Threat Defense デバイスを管理します。デフォルト設定でも、Ethernet1/1 を外部として設定します。

- 管理コンピュータを次のいずれかのインターフェイスに接続します。
 - Ethernet 1/2 : 初期設定のために管理コンピュータを Ethernet 1/2 に直接接続するか、Ethernet 1/2 を内部ネットワークに接続します。Ethernet 1/2 にはデフォルトの IP アドレス (192.168.95.1) があり、(管理コンピュータを含む) クライアントに IP アドレスを提供するために DHCP サーバーも実行されるため、これらの設定が既存の内部ネットワークの設定と競合しないようにしてください。
 - Management 1/1 : Management 1/1 を管理ネットワークに接続し、管理コンピュータが管理ネットワーク上にあるか、またはアクセスできることを確認します。Management 1/1 は、管理ネットワーク上の DHCP サーバから IP アドレスを取得します。このインターフェイスを使用する場合は、管理コンピュータから IP アドレスに接続できるように、ファイアウォールに割り当てられている IP アドレスを決定する必要があります。

管理 1/1 IP アドレスをデフォルトから変更し、静的 IP アドレスを設定する必要がある場合は、管理コンピュータをコンソールポートにケーブル接続する必要もあります。[\(任意\) CLI での管理ネットワーク設定の変更 \(24 ページ\)](#) を参照してください。



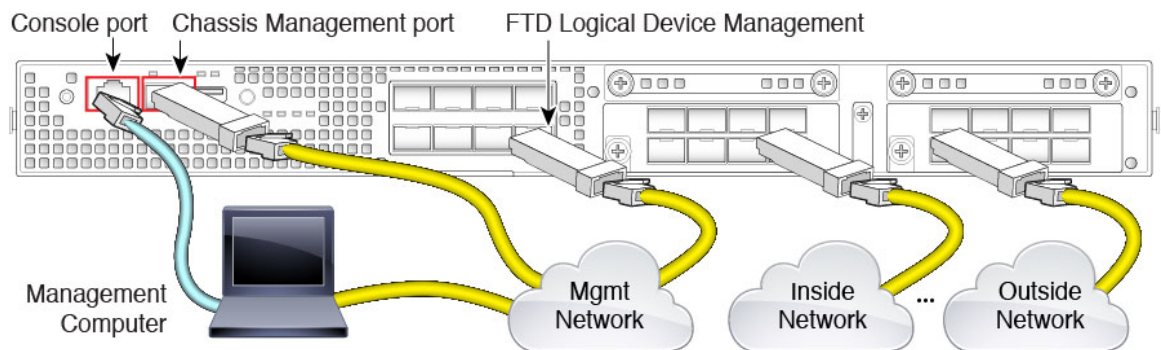
(注) Management 1/1 は、SFP モジュールを必要とする 10 Gb 光ファイバインターフェイスです。

- 外部ネットワークを Ethernet1/1 インターフェイスに接続します。

デフォルトでは、IP アドレスは IPv4 DHCP および IPv6 自動設定を使用して取得しますが、初期設定時に静的アドレスを設定できます。

- 残りのインターフェイスに他のネットワークを接続します。

Firepower 4100 のケーブル配線



論理デバイスの管理インターフェイスで脅威に対する防御の初期設定を実行します。後で、任意のデータ インターフェイスから管理を有効にすることができます。脅威に対する防御 デバイスでは、ライセンスと更新にインターネットアクセスが必要です。デフォルトの動作では、デバイスの展開時に指定したゲートウェイ IP アドレスに管理トラフィックをルーティングします。そうではなく、バックプレーンを介してデータインターフェイスに管理トラフィックをルーティングする必要がある場合は、後で Device Manager でその設定が行えます。

シャーシの初期設定、継続的なモニタリング、および論理デバイスの使用のために、次のインターフェイスを配線します。

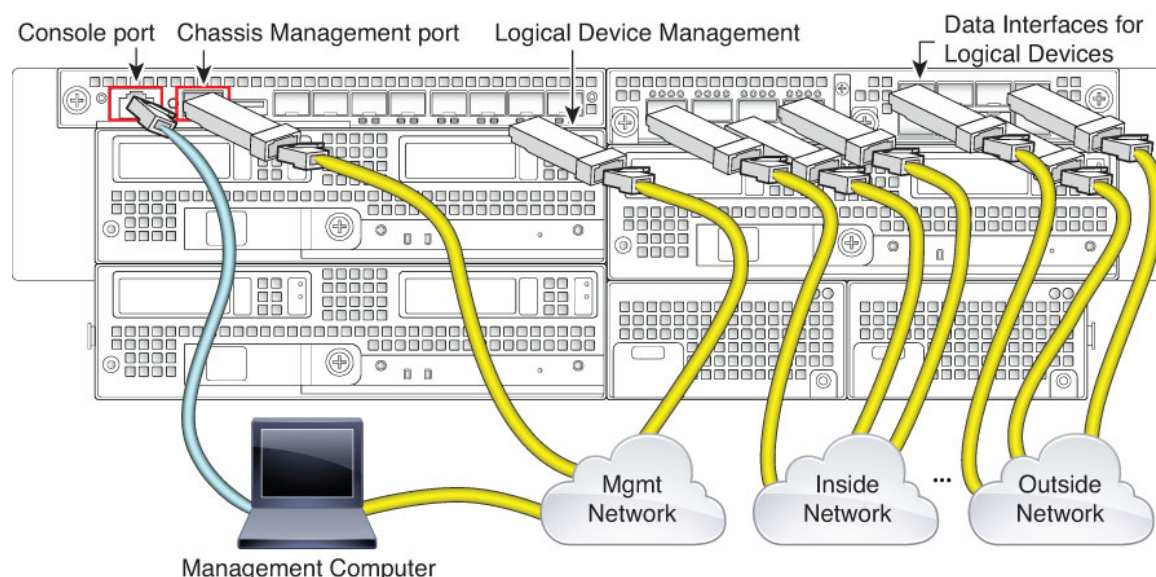
- コンソールポート：管理コンピュータをコンソールポートに接続して、シャーシの初期設定を実行します。Firepower 4100 には RS-232-to-RJ-45 シリアルコンソールケーブルが含まれています。接続には、サードパーティ製のシリアル USB ケーブルが必要になる場合があります。
- シャーシ管理ポート：設定および継続的なシャーシ管理のために、シャーシ管理ポートを管理ネットワークに接続します。
- ThreatDefense 論理デバイス管理インターフェイス：FXOS 管理用に予約されているシャーシ管理ポートを除き、シャーシ上の任意のインターフェイスを選択できます。
- データインターフェイス：データインターフェイスを論理デバイスデータネットワークに接続します。物理インターフェイス、EtherChannel、およびブレイクアウトポートを設定して、大容量のインターフェイスを分割できます。

高可用性の場合は、フェールオーバー/ステートリンクにデータインターフェイスを使用します。



(注) コンソールポート以外のすべてのインターフェイスには、SFP/SFP+/QSFP のトランシーバーが必要です。サポートされているトランシーバーについては、『[Hardware Installation Guide](#)』を参照してください。

Firepower 9300 のケーブル配線



論理デバイスの管理インターフェイスで脅威に対する防御の初期設定を実行します。後で、任意のデータインターフェイスから管理を有効にすることができます。脅威に対する防御デバイスでは、ライセンスと更新にインターネットアクセスが必要です。デフォルトの動作では、デバイスの展開時に指定したゲートウェイ IP アドレスに管理トラフィックをルーティングします。そうではなく、バックプレーンを介してデータインターフェイスに管理トラフィックをルーティングする必要がある場合は、後で **Device Manager** でその設定が行えます。

シャーシの初期設定、継続的なモニタリング、および論理デバイスの使用のために、次のインターフェイスを配線します。

- **コンソールポート**：管理コンピュータをコンソールポートに接続して、シャーシの初期設定を実行します。Firepower 9300 には RS-232-to-RJ-45 シリアルコンソールケーブルが含まれています。接続には、サードパーティ製のシリアル USB ケーブルが必要になる場合があります。
- **シャーシ管理ポート**：設定および継続的なシャーシ管理のために、シャーシ管理ポートを管理ネットワークに接続します。

- 論理デバイス管理インターフェイス:1つ以上のインターフェイスを使用して論理デバイスを管理します。FXOS 管理用に予約されているシャーシ管理ポートを除く、シャーシ上の任意のインターフェイスを選択できます。管理インターフェイスは論理デバイス間で共有することも、論理デバイスごとに個別のインターフェイスを使用することもできます。通常、管理インターフェイスはすべての論理デバイスで共有します。個別のインターフェイスを使用する場合は、インターフェイスを単一の管理ネットワークに配置します。ただし、実際のネットワーク要件は異なる場合があります。
- データインターフェイス: データインターフェイスを論理デバイスデータネットワークに接続します。物理インターフェイス、EtherChannel、およびブレイクアウトポートを設定して、大容量のインターフェイスを分割できます。ネットワークのニーズに応じて、複数の論理デバイスを同じネットワークまたは異なるネットワークに配線できます。トラフィックはすべて、1つのインターフェイス上のシャーシを終端とし、別の論理デバイスに到達するには別のインターフェイスに戻る必要があります。

高可用性の場合は、フェールオーバー/ステートリンクにデータインターフェイスを使用します。



(注) コンソールポート以外のすべてのインターフェイスには、SFP/SFP+/QSFP のトランシーバーが必要です。サポートされているトランシーバーについては、『[Hardware Installation Guide](#)』を参照してください。

Threat Defense Virtual の仮想ケーブル接続

Threat Defense Virtual をインストールするには、<http://www.cisco.com/c/en/us/support/security/firepower-ngfw-virtual/products-installation-guides-list.html> で、ご使用の仮想プラットフォームに対応したクイックスタートガイドを参照してください。Device Manager は、次の仮想プラットフォーム（VMware、KVM、Microsoft Azure、Amazon Web Services（AWS））でサポートされています。

Threat Defense Virtual のデフォルト設定では、管理インターフェイスと内部インターフェイスは同じサブネットに配置されます。スマート ライセンスを使用し、システム データベースの更新を入手するには、管理インターフェイスでインターネット接続が必要です。

したがって、Management0/0 と GigabitEthernet0/1（内部）の両方を仮想スイッチで同じネットワークに接続できるように、デフォルト設定が設計されています。デフォルト管理アドレスはゲートウェイとして内部 IP アドレスを使用します。したがって管理インターフェイスは内部インターフェイス、外部インターフェイスの順に経由し、インターネットに到達します。

また、インターネットにアクセスできるネットワークである限り、内部インターフェイスに使用しているサブネットとは異なるサブネットに Management0/0 を接続することもできます。管理インターフェイスの IP アドレスとゲートウェイをネットワークに対して適切に設定してください。

Threat Defense の物理インターフェイスへの VMware ネットワークアダプタとインターフェイスのマッピング方法

VMware Threat Defense Virtual デバイス用に最大 10 のインターフェイスを設定できます。少なくとも 4 つのインターフェイスを設定する必要があります。

Management0-0 送信元ネットワークが、インターネットにアクセスできる VM ネットワークに関連付けられていることを確認します。これは、システムが Cisco Smart Software Manager にアクセスするとシステムデータベース更新をダウンロードすることを可能にするために必要です。

OVFをインストールするときにネットワークを割り当てます。インターフェイスを設定しておけば、後でVMwareクライアントを介して仮想ネットワークを変更できます。ただし、新しいインターフェイスを追加する必要がある場合は、必ずリストの最後にインターフェイスを追加してください。他の場所でインターフェイスを追加または削除した場合、ハイパーバイザによってインターフェイスの番号が再設定され、その結果、設定内のインターフェイスIDが誤った順番になります。

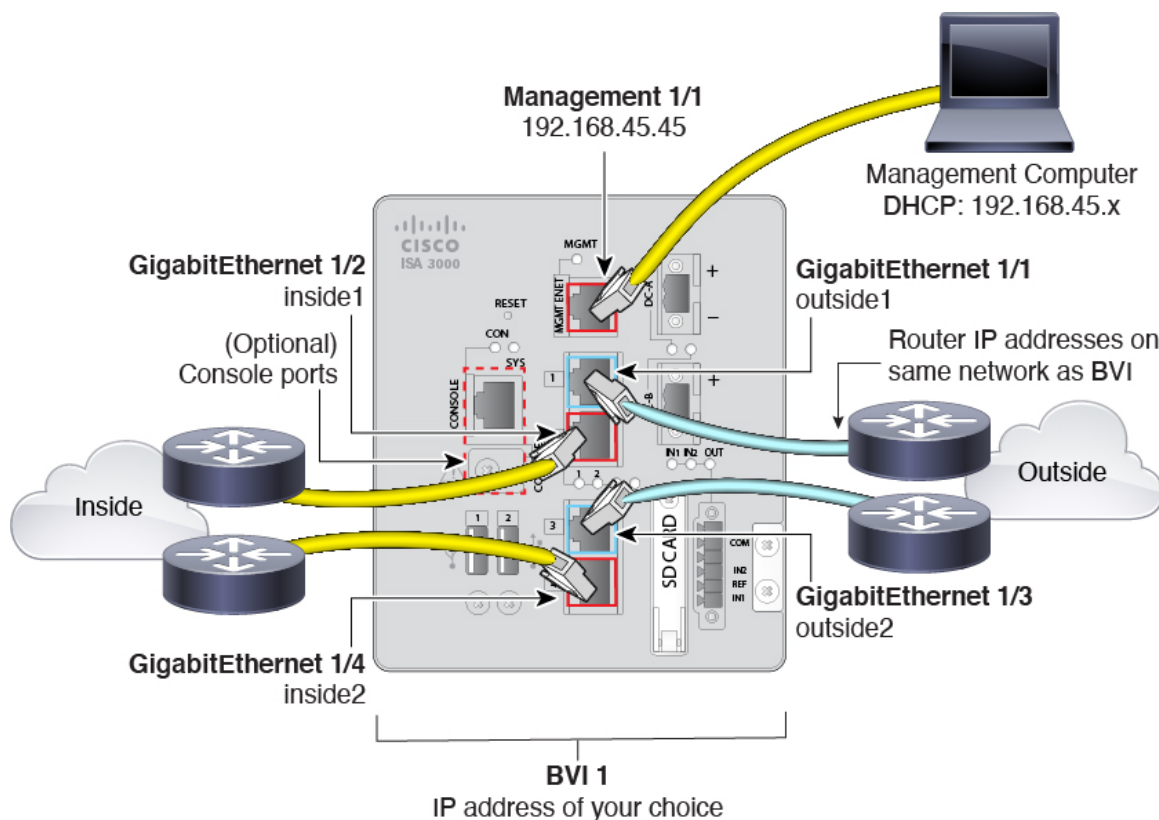
次の表は、VMware ネットワーク アダプタおよび送信元インターフェイスの、Threat Defense Virtual の物理インターフェイス名へのマッピングを示しています。追加のインターフェイスについては、命名は同じパターンに従い、関連する数字を1つずつ増やします。すべての追加インターフェイスはデータインターフェイスです。仮想ネットワークの仮想マシンへの割り当ての詳細については、VMware のオンラインヘルプを参照してください。

表 1: 送信元ネットワークから宛先ネットワークへのマッピング

ネットワークアダプタ	送信元ネットワーク	宛先ネットワーク（物理インターフェイス名）	機能
Network adapter 1	Management0-0	Management0/0	管理
ネットワークアダプタ 2	内部使用のため予約済み。	内部使用のため予約済み。	内部使用のため予約済み。
ネットワークアダプタ 3	GigabitEthernet0-0	GigabitEthernet 0/0	外部データ
Network adapter 4	GigabitEthernet0-1	GigabitEthernet 0/1	内部データ
ネットワークアダプタ 5	GigabitEthernet0-2	GigabitEthernet0/2	データ トラフィック
Network adapter 6	GigabitEthernet 0-3	GigabitEthernet0/3	データ トラフィック
Network adapter 7	GigabitEthernet 0-4	GigabitEthernet0/4	データ トラフィック
Network adapter 8	GigabitEthernet 0-5	GigabitEthernet0/5	データ トラフィック
Network adapter 9	GigabitEthernet 0-6	GigabitEthernet0/6	データ トラフィック
Network adapter 10	GigabitEthernet 0-7	GigabitEthernet0/7	データ トラフィック

ISA 3000 のケーブル配線

図 4: ISA 3000



- GigabitEthernet 1/1を外部ルータに接続し、GigabitEthernet 1/2を内部ルータに接続します。
これらのインターフェイスによってハードウェアバイパスペアが形成されます。
- GigabitEthernet 1/3を冗長外部ルータに接続し、GigabitEthernet 1/4を冗長内部ルータに接続します。

銅線ポートを備えたモデルの場合は、これらのインターフェイスによってハードウェアバイパスペアが形成されます。ファイバはハードウェアバイパスをサポートしていません。これらのインターフェイスは、他方のペアで障害が発生した場合に冗長ネットワークパスを提供します。これら4つのデータインターフェイスはすべて、選択した同じネットワーク上に存在します。BVI 1のIPアドレスを、内部ルータおよび外部ルータと同じネットワーク上に配置するように設定する必要があります。

- Management 1/1 を管理コンピュータ（またはネットワーク）に接続します。

Management 1/1 の IP アドレスをデフォルトから変更する必要がある場合は、管理コンピュータをコンソールポートにケーブル接続する必要もあります。[（任意）CLIでの管理ネットワーク設定の変更（24 ページ）](#)を参照してください。

(任意) CLI での管理ネットワーク設定の変更

デフォルトの管理 IP アドレスを使用できない場合、コンソールポートに接続して、CLI で初期セットアップ（管理 IP アドレス、ゲートウェイ、およびその他の基本ネットワーク設定の指定など）を実行できます。管理インターフェイスのみを設定できます。内部インターフェイスや外部インターフェイスは設定できません。これらは後で GUI を使用して設定できます。



(注) 展開時に IP アドレスを手動で設定するため、Firepower 4100/9300 にこの手順を使用する必要はありません。



(注) 設定をクリア（たとえば、イメージを再作成することにより）しないかぎり、CLI セットアップスクリプトを繰り返すことはできません。とはいえ、これらの設定すべては、後から CLI で **configure network** コマンドを使用して変更できます。[Cisco Secure Firewall Threat Defense コマンドリファレンス](#)を参照してください。

手順

ステップ 1 Threat Defense コンソールポートに接続します。詳細については、「[コマンドラインインターフェイス \(CLI\) へのログイン \(9 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 2 ユーザ名 **admin** を使用してログインします。

デフォルトの admin パスワードは Admin123 です。AWS では、初期展開時にユーザーデータを使用してデフォルトのパスワードを定義（**[高度な詳細 (Advanced Details)] > [ユーザーデータ (User Data)]**）していなければ、Threat Defense Virtual のデフォルトの管理者パスワードは AWS のインスタンス ID です。

ステップ 3 Threat Defense に初めてログインすると、エンドユーザーライセンス契約（EULA）に同意するように求められます。その後、CLI セットアップスクリプトが表示されます。

デフォルト値または以前に入力した値がカッコ内に表示されます。以前に入力した値をそのまま使用する場合は、Enter を押します。

次のガイドラインを参照してください。

- [管理インターフェイスの IPv4 デフォルトゲートウェイを入力します (Enter the IPv4 default gateway for the management interface)] : 手動 IP アドレスを設定した場合は、「**data-interfaces**」またはゲートウェイルータの IP アドレスのいずれかを入力します。**data-interfaces** を設定すると、アウトバウンド管理トラフィックがバックプレーン経由で送信され、データインターフェイスが終了します。この設定は、インターネットにアクセスできる個別の管理ネットワークがない場合に役立ちます。管理インターフェイスから発信されるトラフィックには、インターネットアクセスを必要とするライセンス登録とデータベースの更新が含まれます。**data-interfaces** を使用する場合、管理ネットワークに直接

接続していれば管理インターフェイスで **Device Manager**（または SSH）を引き続き使用できますが、特定のネットワークまたはホストのリモート管理の場合は、**configure network static-routes** コマンドを使用して静的ルートを追加する必要があります。データインターフェイスでの **Device Manager** の管理は、この設定の影響を受けないことに注意してください。DHCPを使用する場合、システムはDHCPによって提供されるゲートウェイを使用します。DHCP がゲートウェイを提供しない場合は、フォールバックメソッドとして **data-interfaces** を使用します。

- [ネットワーク情報が変更された場合は再接続が必要になります (If your networking information has changed, you will need to reconnect)] : SSH でデフォルトの IP アドレスに接続しているのに、初期セットアップでその IP アドレスを変更すると、接続が切断されます。新しい IP アドレスとパスワードで再接続してください。コンソール接続は影響を受けません。
- [デバイスをローカルで管理しますか (Manage the device locally?)] : または **Device Manager** を使用するには [はい (yes)] を入力します。[いいえ (no)] と応えると、**Management Center** デバイスの管理にはオンプレミスまたはクラウド配信を使用することになります。

例 :

```
You must accept the EULA to continue.
Press <ENTER> to display the EULA:
End User License Agreement
[...]

Please enter 'YES' or press <ENTER> to AGREE to the EULA:

System initialization in progress. Please stand by.
You must configure the network to continue.
You must configure at least one of IPv4 or IPv6.
Do you want to configure IPv4? (y/n) [y]:
Do you want to configure IPv6? (y/n) [n]:
Configure IPv4 via DHCP or manually? (dhcp/manual) [manual]:
Enter an IPv4 address for the management interface [192.168.45.45]: 10.10.10.15
Enter an IPv4 netmask for the management interface [255.255.255.0]: 255.255.255.192
Enter the IPv4 default gateway for the management interface [data-interfaces]: 10.10.10.1
Enter a fully qualified hostname for this system [firepower]: ftd-1.cisco.com
Enter a comma-separated list of DNS servers or 'none' [208.67.222.222,208.67.220.220]:
Enter a comma-separated list of search domains or 'none' []:
If your networking information has changed, you will need to reconnect.
For HTTP Proxy configuration, run 'configure network http-proxy'

Manage the device locally? (yes/no) [yes]: yes

>
```

ステップ 4 新しい管理 IP アドレスで **Device Manager** にログインしてください。

セットアップウィザードを使用した初期設定の完了

Device Manager に初めてログインする際に、デバイスセットアップウィザードを使用してシステムの初期設定を完了します。

ハイアベイラビリティ設定でデバイスを使用する予定の場合は、[2台の装置でのハイアベイラビリティの準備（266 ページ）](#)を参照してください。



- (注) Firepower 4100/9300 と ISA 3000 は、セットアップウィザードをサポートしていないため、この手順はこれらのモデルには適用されません。Firepower 4100/9300 の場合、シャーシから論理デバイスを展開するときにすべての初期設定が行われます。ISA 3000 の場合、出荷前に特殊なデフォルト設定が適用されます。

始める前に

データ インターフェイスがゲートウェイ デバイス（ケーブルモデム、ルータなど）に接続されていることを確認します。エッジ導入の場合、インターネット対応ゲートウェイに接続されていなければなりません。データ センター導入の場合、バックボーン ルータに接続されている必要があります。使用しているモデルのデフォルトの「外部」インターフェイスを使用してください（[インターフェイスの接続（13 ページ）](#) および [初期セットアップ前のデフォルト設定（30 ページ）](#) を参照）。

以上の確認が済んだら、管理コンピュータをハードウェアモデルの「inside」インターフェイスに接続します。または、管理インターフェイスに接続することもできます。Threat Defense Virtual については、管理 IP アドレスに接続できることを確認するだけで十分です

（管理 IP アドレスからインターネットへの接続が必要な Threat Defense Virtual を除く）。管理インターフェイスをネットワークに接続する必要はありません。デフォルトでは、システムはインターネットに接続されたデータインターフェイス（通常は外部インターフェイス）からシステムライセンスおよびデータベースやその他の更新を取得します。別個の管理ネットワークを使用する必要がある場合は、初期設定が完了した後に、管理インターフェイスをネットワークに接続し、別個の管理ゲートウェイを設定できます。

デフォルトの IP アドレスにアクセスできない場合に管理インターフェイスのネットワーク設定を変更するには、[（任意）CLI での管理ネットワーク設定の変更（24 ページ）](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 Device Manager にログインします。

- a) CLI での初期設定を完了していない場合は、<https://ip-address> で Device Manager を開きます。このアドレスは次のいずれかになります。
 - 内部インターフェイスに接続されている場合：<https://192.168.95.1>
 - （Threat Defense Virtual の場合は必須）管理インターフェイスに接続している場合：<https://192.168.45.45>。
 - （他のすべてのモデル）管理インターフェイスに接続している場合：https://dhcp_client_ip

- b) ユーザ名 **admin** を使用してログインします。デフォルトの **admin** パスワードは **Admin123** です。AWS では、初期展開時にユーザーデータを使用してデフォルトのパスワードを定義（**[高度な詳細（Advanced Details）]** > **[ユーザーデータ（User Data）]**）していなければ、Threat Defense Virtual のデフォルトの管理者パスワードは AWS のインスタンス ID です。。

ステップ 2 これがシステムへの初めてのログインであり、CLI セットアップウィザードを使用していない場合、エンドユーザライセンス契約を読んで承認し、管理パスワードを変更するように求められます。

これらのステップを完了しなければ、次のステップに進めません。

ステップ 3 外部インターフェイスと管理インターフェイスについて以下のオプションを設定し、**[次へ（Next）]** をクリックします。

注意

[次へ（Next）] をクリックすると、インターフェイスの設定がデバイスに導入されます。インターフェイスは「outside」という名前で「outside_zone」セキュリティゾーンに追加されます。設定値が正しいことを確認します。

外部インターフェイス

- **[IPv4 の設定（Configure IPv4）]**：外部インターフェイスの IPv4 アドレス。DHCP を使用するか、手動で静的 IP アドレス、サブネットマスク、およびゲートウェイを入力できます。**[オフ（Off）]** を選択して、IPv4 アドレスを設定しないという選択肢もあります。デフォルトの内部アドレスと同じサブネットに（静的に、または DHCP を介して）IP アドレスを設定しないでください（[初期セットアップ前のデフォルト設定（30 ページ）](#)）を参照）。セットアップウィザードを使用して PPPoE を設定することはできません。インターフェイスが DSL モデム、ケーブルモデム、または ISP への他の接続に接続されており、ISP が PPPoE を使用して IP アドレスを提供している場合は、PPPoE が必要になる場合があります。ウィザードの完了後に PPPoE を設定できます。[物理インターフェイスの設定（311 ページ）](#) を参照してください。
- **[IPv6 の設定（Configure IPv6）]**：外部インターフェイス用の IPv6 アドレスです。DHCP を使用するか、手動で静的 IP アドレス、プレフィックスマスク、およびゲートウェイを入力できます。**[オフ（Off）]** を選択して、IPv6 アドレスを設定しないという選択肢もあります。

[管理インターフェイス（Management Interface）]

- **[DNS サーバ（DNS Servers）]**：システムの管理アドレスの DNS サーバ。名前解決に使用する DNS サーバのアドレスを 1 つ以上入力します。デフォルトは、OpenDNS パブリック DNS サーバ、または DHCP サーバから取得した DNS サーバです。フィールドを編集した後、デフォルトに戻す場合は、**[OpenDNS を使用（Use OpenDNS）]** をクリックすると該当する IP アドレスがフィールドにリロードされます。ISP は、特定の DNS サーバを使用するよう要求する場合があります。ウィザードを完了した後に DNS 解決が機能しない場合は、[管理インターフェイスの DNS のトラブルシューティング（1028 ページ）](#) を参照してください。
- **[ファイアウォールホスト名（Firewall Hostname）]**：システムの管理アドレスのホスト名。

ステップ 4 システム時刻を設定し、[次へ (Next)] をクリックします。

- [タイムゾーン (Time Zone)] : システムのタイムゾーンを選択します。
- [NTP タイムサーバ (NTP Time Server)] : デフォルトの NTP サーバを使用するか、手動で NTP サーバのアドレスを入力するかを選択します。バックアップ用に複数のサーバを追加できます。

ステップ 5 システムのスマート ライセンスを設定します。

システムに必要なライセンスを取得して適用するには、スマート ライセンス アカウントが必要です。最初は 90 日間の評価ライセンスを使用して、後でスマート ライセンスを設定するので構いません。

デバイスを今すぐ登録するには、デバイスを登録するオプションを選択し、リンクをクリックして **Smart Software Manager** アカウントにログインしてから、新しいトークンを生成して、そのトークンを編集ボックスにコピーします。また、サービスリージョンを選択し、**Cisco Success Network** に使用状況データを送信するかどうかを決定する必要があります。前述の設定については、画面上のテキストで詳しく説明されています。

デバイスをまだ登録しない場合は、評価モードオプションを選択します。評価期間は最大 90 日です。後でデバイスを登録してスマート ライセンスを取得する場合は、[デバイス (Device)] をクリックしてから、[スマートライセンス (Smart Licenses)] グループでリンクをクリックします。

ステップ 6 [終了 (Finish)] をクリックします。

次のタスク

- オプション ライセンスの範囲の機能（カテゴリ ベースの URL フィルタリング、侵入検査、マルウェア対策など）を使用する場合は、それぞれの機能に必要なライセンスを有効にします。[オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化（111 ページ）](#) を参照してください。
- 他のデータインターフェイスを個々のネットワークに接続して、それらのインターフェイスを設定します。インターフェイスの設定については、[サブネットの追加方法（85 ページ）](#) および [インターフェイス（305 ページ）](#) を参照してください。
- 内部インターフェイスを使用してデバイスを管理する場合、内部インターフェイスで CLI セッションを開くには、内部インターフェイスで SSH 接続を開始します。[管理アクセスリストの設定（936 ページ）](#) を参照してください。
- 使用例を調べて、製品の使用方法を学んでください。「[ベストプラクティス：Threat Defense の使用例（51 ページ）](#)」を参照してください。

外部インターフェイスの IP アドレスを取得できない場合の対処方法

デフォルトのデバイス設定には内部インターフェイスのスタティック IPv4 アドレスが含まれています。初期デバイス セットアップ ウィザードを使用してこのアドレスを変更することはできません。ただし、後で変更することはできます。

デフォルトの内部 IP アドレスが、デバイスに接続されている他のネットワークと競合する可能性があります。これは特に、外部インターフェイスで DHCP を使用してインターネット サービスプロバイダー (ISP) からアドレスを取得する場合に該当します。一部の ISP は、内部ネットワークと同じサブネットをアドレスプールとして使用しています。同じサブネットのアドレスを持つ 2 つのデータ インターフェイスを持つことはできないため、ISP からの競合するアドレスを外部インターフェイスに設定することはできません。

内部スタティック IP アドレスと外部インターフェイスの DHCP が提供するアドレスの間に競合がある場合は、接続図には、外部インターフェイスは管理上動作しているが IPv4 アドレスが割り当てられていないことが示されます。

この場合セットアップ ウィザードは正常に完了し、デフォルト NAT、アクセス、およびその他のポリシーや設定がすべて設定されます。競合を解消するには、次の手順に従います。

始める前に

ISP に正常に接続できることを確認します。サブネット競合がある場合外部インターフェイスのアドレスを取得できませんが、単に ISP への接続がない場合にも外部インターフェイスのアドレスを取得できません。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。
- ステップ 2** 内部インターフェイスの [アクション (Actions)] 列にマウスを合わせ、編集アイコン (🔧) をクリックします。
- ステップ 3** [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブで、192.168.2.1/24 や 192.168.46.1/24 など、一意のサブネット上のスタティックアドレスを入力します。デフォルトの管理アドレスは 192.168.45.45/24 であるため、そのサブネットは使用しないでください。

内部ネットワークで DHCP サーバがすでに実行されている場合、DHCP を使用してアドレスを取得することもできます。ただし最初に、[このインターフェイスに DHCP サーバを定義済み (DHCP SERVER IS DEFINED FOR THIS INTERFACE)] グループで [削除 (Delete)] をクリックして、インターフェイスから DHCP サーバを削除する必要があります。
- ステップ 4** [このインターフェイスに DHCP サーバを定義済み (DHCP SERVER IS DEFINED FOR THIS INTERFACE)] 領域で [編集 (Edit)] をクリックして、DHCP プールを新しいサブネットの範囲に変更します (たとえば、192.168.2.5-192.168.2.254)。
- ステップ 5** [OK] をクリックしてインターフェイスの変更を保存します。
- ステップ 6** メニューの [展開 (Deploy)] ボタンをクリックして、変更を展開します。



ステップ 7 [今すぐ展開 (Deploy Now)] をクリックします。

展開が完了すると、外部インターフェイスに IP アドレスが割り当てられていることが接続グラフィックで示されるはずです。内部ネットワークのクライアントを使用して、インターネットまたはその他のアップストリーム ネットワークに接続できることを確認します。

初期セットアップ前のデフォルト設定

ローカルマネージャ (Device Manager) を使用して 脅威に対する防御 デバイスの初期設定を行う前、デバイスには次のデフォルト設定が含まれています。

多数のモデルにおいて、この設定では、デバイスマネージャを内部インターフェイス経由で開き (通常、コンピュータをインターフェイスに直接接続する)、内部インターフェイス上に定義された DHCP サーバを使用してコンピュータに IP アドレスを提供することを前提としています。または、コンピュータを管理インターフェイスに接続し、DHCP を使用してアドレスを取得できます。ただし、一部のモデルではデフォルト設定や管理要件が異なります。詳細は以下の表を参照してください。



(注) ウィザードを使用してセットアップを実行する前に、CLI セットアップ ([\(任意\) CLI での管理ネットワーク設定の変更 \(24 ページ\)](#)) を使用してこれらの設定の多くを事前に設定できます。

デフォルト設定

設定	デフォルト	初期設定中に変更できるか
管理者ユーザ用のパスワード	Admin123 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスを展開するときのパスワードを設定します。 AWS : 初期展開時にユーザデータを使用してデフォルトのパスワードを定義 ([高度な詳細 (Advanced Details)] > [ユーザデータ (User Data)]) していなければ、デフォルトは AWS のインスタンス ID です。	はいデフォルトパスワードを変更する必要があります。

設定	デフォルト	初期設定中に変更できるか
管理 IP アドレス	DHCP 経由で取得。 Threat Defense Virtual192.168.45.45 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスの展開時に管理 IP アドレスを設定します。	番号 Firepower 4100/9300の場合 : 可。
管理ゲートウェイ	デバイス上のデータ インターフェイス。通常は、外部インターフェイスがインターネットへのルートになります。このゲートウェイは、 from-the-device (デバイスからの出力) トラフィックのみで機能します。デバイスが DHCP サーバからデフォルトゲートウェイを受信した場合は、そのゲートウェイが使用されます。 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスの展開時に、ゲートウェイ IP アドレスを設定します。 ISA 3000 : 192.168.45.1。 Threat Defense Virtual192.168.45.1	番号 Firepower 4100/9300の場合 : 可。
管理インターフェイスの DNS サーバ	OpenDNS パブリック DNS サーバ、IPv4 : 208.67.220.220 と 208.67.222.222、IPv6 : 2620:119:35::35。DHCP から取得した DNS サーバは使用されません。 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスの展開時に DNS サーバを設定します。	はい
内部インターフェイスの IP アドレス	192.168.95.1/24 Firepower 4100/9300 : データインターフェイスが事前設定されていません。 ISA 3000 : BV11 IP アドレスは事前に設定されていません。BV11 にはすべての内部インターフェイスと外部インターフェイスが含まれます。 Threat Defense Virtual192.168.45.1/24	いいえ

設定	デフォルト	初期設定中に変更できるか
内部クライアント用の DHCP サーバ。	内部インターフェイス上で実行されており、アドレスプールは 192.168.95.5 ～ 192.168.95.254 です。 Firepower 4100/9300 : DHCP サーバが有効になっていません。 ISA 3000 : DHCP サーバが有効になっていません。 Threat Defense Virtual : 内部インターフェイスのアドレスプールは 192.168.45.46 ～ 192.168.45.254 です。	いいえ
内部クライアント用の DHCP 自動設定。（自動設定により、クライアントに WINS および DNS サーバのアドレスが提供されます。）	外部インターフェイス上で有効になります。	はい（ただし、間接的）。外部インターフェイスに静的 IPv4 アドレスを設定した場合は、DHCP サーバの自動設定が無効になります。
外部インターフェイスの IP アドレス	IPv4 : インターネットサービスプロバイダー（ISP）またはアップストリームルータから DHCP を通して取得されます。 IPv6 : 自動設定。 Firepower 4100/9300 : データインターフェイスが事前設定されていません。 ISA 3000 : BV11 IP アドレスは事前に設定されていません。BV11 にはすべての内部インターフェイスと外部インターフェイスが含まれます。	はい

デバイス モデル別のデフォルト インターフェイス

初期設定中に、別の内部インターフェイスと別の外部インターフェイスを選択することはできません。設定後にインターフェイス割り当てを変更するには、インターフェイスと DHCP の設定を編集します。インターフェイスを非スイッチドインターフェイスとして設定するには、そのインターフェイスをブリッジ グループから削除する必要があります。

Threat Defense デバイス	外部インタフェース	内部インターフェイス
Firepower 1010	Ethernet1/1	VLAN1 には、物理ファイアウォールインターフェイスである外部インターフェイスを除く他のすべてのスイッチポートが含まれます。

Threat Defense デバイス	外部インターフェース	内部インターフェイス
Firepower 1120、1140、1150	Ethernet1/1	Ethernet1/2
Cisco Secure Firewall 1210/1220	Ethernet1/1	VLAN1 には、物理ファイアウォールインターフェイスである外部インターフェイスを除く他のすべてのスイッチポートが含まれます。
Cisco Secure Firewall 1230/1240/1250	Ethernet1/1	Ethernet1/2
Cisco Secure Firewall 3100 シリーズ	Ethernet1/1	Ethernet1/2
Firepower 4100 シリーズ	データインターフェイスが事前設定されていません。	データインターフェイスが事前設定されていません。
Firepower 9300 appliance	データインターフェイスが事前設定されていません。	データインターフェイスが事前設定されていません。
Threat Defense Virtual	GigabitEthernet0/0	GigabitEthernet0/1
ISA 3000	GigabitEthernet1/1 および GigabitEthernet1/3 GigabitEthernet1/1 (outside1) と 1/2 (inside1) 、および GigabitEthernet1/3 (outside2) と 1/4 (inside2) (非光ファイバモデルのみ) は、ハードウェアバイパスペアとして設定されます。 すべての内部および外部インターフェイスは、BVI1 の一部です。	GigabitEthernet1/2 および GigabitEthernet1/4

初期セットアップ後の設定

セットアップウィザードを完了すると、デバイス設定には以下の設定が含まれます。次の表は、特定の設定が明示的に選択したものか、他の選択に基づいて自動的に定義されたものかを示しています。すべての「暗黙的」の設定を確認し、必要であれば編集します。



- (注) Firepower 4100/9300 と ISA 3000 は、セットアップウィザードをサポートしていません。Firepower 4100/9300 の場合、シャーシから論理デバイスを展開するときにすべての初期設定が行われます。ISA 3000 の場合、出荷前に特殊なデフォルト設定が適用されます。

設定	構成	明示的、暗黙的またはデフォルト設定
管理者ユーザ用のパスワード。	入力したもの	明示的
管理 IP アドレス	DHCP 経由で取得。 Threat Defense Virtual : 192.168.45.45 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスの展開時に設定した管理 IP アドレス。	これがデフォルトです。
管理ゲートウェイ	デバイス上のデータ インターフェイス。通常は、外部インターフェイスがインターネットへのルートになります。管理ゲートウェイは、 from-the-device (デバイスからの出力) トラフィックのみで機能します。デバイスが DHCP サーバからデフォルトゲートウェイを受信した場合は、そのゲートウェイが使用されます。 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスの展開時に設定したゲートウェイ IP アドレス。 ISA 3000 : 192.168.45.1 Threat Defense Virtual : 192.168.45.1	これがデフォルトです。
管理インターフェイスの DNS サーバ	OpenDNSパブリックDNSサーバ、IPv4: 208.67.220.220, 208.67.222.222、IPv6: 2620:119:35::35、またはユーザの入力値。DHCP から取得した DNS サーバは使用されません。 Firepower 4100/9300 : 論理デバイスの展開時に設定した DNS サーバ。	明示的
管理ホスト名。	firepower か、入力したもの。 Firepower 4100/9300: 論理デバイスの展開時に設定したホスト名。	明示的
データ インターフェイスを介した管理アクセス。	データ インターフェイスの管理アクセス リスト ルールは、内部インターフェイス経由の HTTPS アクセスを許可します。SSH 接続は許可されません。IPv4 と IPv6 接続の両方が許可されます。 Firepower 4100/9300: デフォルトの管理アクセス ルールを持つデータ インターフェイスはありません。 ISA 3000 : デフォルトの管理アクセスルールを持つデータ インターフェイスはありません。 Threat Defense Virtual: デフォルトの管理アクセスルールを持つデータ インターフェイスはありません。	暗黙的

設定	構成	明示的、暗黙的またはデフォルト設定
システム時刻	選択したタイムゾーンと NTP サーバです。 Firepower 4100/9300 : システム時刻はシャーシから継承されます。 ISA 3000 : Cisco NTP サーバ : 0.sourcefire.pool.ntp.org、1.sourcefire.pool.ntp.org、2.sourcefire.pool.ntp.org。	明示的
スマート ライセンス	ベース ライセンスで登録したもの、または有効化した評価期間のうち、いずれか選択したものです。 サブスクリプションライセンスは有効化されていません。有効化するにはスマート ライセンス ページに移動します。	明示的
内部インターフェイスの IP アドレス	192.168.95.1/24 Firepower 4100/9300: データインターフェイスは事前設定されていません。 ISA 3000 : なし。BVI1 の IP アドレスは手動で設定する必要があります。 Threat Defense Virtual 192.168.45.1/24	これがデフォルトです。
内部クライアント用の DHCP サーバ。	内部インターフェイス上で実行されており、アドレスプールは 192.168.95.5 ~ 192.168.95.254 です。 Firepower 4100/9300 : DHCP サーバが有効になっていません。 ISA 3000 : DHCP サーバが有効になっていません。 Threat Defense Virtual : 内部インターフェイスのアドレスプールは 192.168.45.46 ~ 192.168.45.254 です。	これがデフォルトです。
内部クライアント用の DHCP 自動設定。(自動設定により、クライアントに WINS および DNS サーバのアドレスが提供されます。)	DHCP を使用して外部インターフェイスの IPv4 アドレスを取得する場合、外部インターフェイス上で有効化されず。 スタティック アドレッシングを使用する場合、DHCP 自動構成は無効化されます。	明示的、ただし間接的

設定	構成	明示的、暗黙的またはデフォルト設定
データ インターフェイス構成	• Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220: 外部インターフェイス Ethernet1/1 は、物理ファイアウォールインターフェイスです。その他すべてのインターフェイスは、有効になっている VLAN1（内部インターフェイス）の一部であるスイッチポートです。エンドポイントまたはスイッチをこれらのポートに接続し、DHCP サーバから内部インターフェイスのためにアドレスを取得できます。 • Firepower 4100/9300 : データ インターフェイスはすべて無効になります。 • ISA 3000 : データ インターフェイスはすべて有効になり、同じブリッジグループ（BV11）の一部になります。GigabitEthernet1/1 および 1/3 は外部インターフェイスで、GigabitEthernet1/2 および 1/4 は内部インターフェイスです。GigabitEthernet1/1（外部 1）と 1/2（内部 1）、および GigabitEthernet1/3（外部 2）と 1/4（内部 2）（非光ファイバモデルのみ）は、ハードウェアバイパスペアとして設定されます。 • その他すべてのモデル : 外部および内部インターフェイスのみが設定され、有効化されます。他のすべてのデータ インターフェイスは無効になります。	これがデフォルトです。
外部の物理インターフェイスと IP アドレス	デバイス モデルに基づくデフォルトの外部ポートです。初期セットアップ前のデフォルト設定（30 ページ）を参照してください。 IP アドレスは DHCP および IPv6 自動設定により取得されるか、入力したスタティックアドレスです (IPv4、IPv6 または両方)。 Firepower 4100/9300: データ インターフェイスは事前設定されていません。 ISA 3000 : なし。BV11 の IP アドレスは手動で設定する必要があります。	インターフェイスはデフォルト。 アドレッシングは明示的。

設定	構成	明示的、暗黙的またはデフォルト設定
スタティック ルート。	外部インターフェイスにスタティック IPv4 または IPv6 アドレスを設定する場合、必要に応じてスタティックデフォルトルートが IPv4/IPv6 に設定され、そのアドレスタイプに対して定義したゲートウェイを指し示します。DHCP を選択すると、デフォルト ルートは DHCP サーバから取得されます。 ネットワーク オブジェクトも、ゲートウェイと「すべての」アドレス、つまり IPv4 の場合は 0.0.0.0/0、IPv6 の場合は ::/0 に対して作成されます。	暗黙的
セキュリティゾーン。	内部インターフェイスを含む inside_zone。Firepower 4100/9300 では、このセキュリティゾーンにインターフェイスを手動で追加する必要があります。 外部インターフェイスを含む outside_zone。Firepower 4100/9300 では、このゾーンにインターフェイスを手動で追加する必要があります。 (これらのゾーンを編集して他のインターフェイスを追加するか、独自のゾーンを作成することができます)	暗黙的
アクセス コントロール ポリシー	inside_zone から outside_zone へのすべてのトラフィックを信頼するルールです。これは、ネットワーク内のユーザから外部に出るすべてのトラフィックと、それらの接続に対するリターン トラフィックを検証せずに許可します。 他のすべてのトラフィックに適用されるデフォルトのアクションは、ブロックです。これにより、外部からのトラフィックはすべてネットワークに入ることができなくなります。 Firepower 4100/9300 : 事前設定されたアクセスルールはありません。 ISA 3000 : inside_zone から outside_zone へのすべてのトラフィックを信頼するルール、および outside_zone から inside_zone へのすべてのトラフィックを信頼するルール。トラフィックがブロックされます。デバイスには、inside_zone 内のインターフェイスと outside_zone 内のインターフェイス間のすべてのトラフィックを信頼するルールもあります。これにより、内部にいるユーザ間、および外部にいるユーザ間のすべてのトラフィックが検査なしで許可されます。	暗黙的

設定	構成	明示的、暗黙的またはデフォルト設定
NAT	インターフェイスの動的PATルールは、外部インターフェイスへの任意の IPv4 トラフィックの発信元アドレスを、外部インターフェイスの IP アドレス上の一意のポートに変換します。 補足的な非表示の PAT ルールにより、内部インターフェイスを通過する HTTPS アクセス、およびデータ インターフェイスを経由する管理アドレスのルーティングが有効化されます。これらは NAT テーブルには含まれませんが、CLI で show nat コマンドを使用すれば確認できます。 Firepower 4100/9300 : NAT は事前に設定されていません。 ISA 3000 : NAT は事前設定されていません。	暗黙的

設定の基本

ここでは、デバイスの設定に関する基本的な方法について説明します。

デバイスの設定

Device Manager に最初にログインするとき、基本設定の構成のセットアップウィザードを利用できます。ウィザードを完了したら、次の方法を使用してその他の機能を設定し、デバイス設定を管理します。

項目が見にくい場合は、ユーザプロファイルで別の配色を選択してください。ページの右上のユーザアイコン ドロップダウン メニューから [プロファイル (Profile)] を選択します。



手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックして [デバイス概要 (Device Summary)] に移動します。

ダッシュボードには、有効なインターフェイスやキー設定が設定されているか（緑色）またはまだ設定が必要であるかなど、デバイスの視覚的なステータスが表示されます。詳細については、[インターフェイスおよび管理ステータスの表示（45 ページ）](#)を参照してください。

ステータス イメージの上にはデバイス モデルの概要、ソフトウェア バージョン、VDB（システムと脆弱性のデータベース）バージョンがあり、前回の侵入ルールは更新されています。この領域には、機能を設定するためのリンクを含め、ハイ アベイラビリティ ステータスも表示されます。[高可用性（フェールオーバー）（251 ページ）](#)を参照してください。また、クラウド

ド登録ステータスも表示されます。ここには、クラウド管理を使用している場合、デバイスが登録されているアカウントが表示されます。[クラウドサービスの設定 \(966 ページ\)](#) を参照してください。

画像の下には、設定可能なさまざまな機能のグループが表示され、各グループの設定の概要や、システム設定の管理に使用できるアクションも一緒に表示されます。

ステップ 2 各グループのリンクをクリックすると、設定を行ったりアクションを実行したりできます。

次に、グループの概要を示します。

- [インターフェイス (Interface)] : 管理インターフェイスの他に、少なくとも2つのデータインターフェイスを設定する必要があります。[インターフェイス \(305 ページ\)](#) を参照してください。
- [ルーティング (Routing)] : ルーティング設定。デフォルトルートを定義する必要があります。設定によっては、他のルートが必要になる場合があります。[ルーティング \(403 ページ\)](#) を参照してください。
- [更新 (Updates)] : 位置情報、侵入ルール、脆弱性データベースの更新、およびシステムソフトウェアアップグレード。これらの機能を使用する場合は、データベース更新を最新の状態に保つために定期的な更新スケジュールを設定してください。また、定期的な更新スケジュールが実行される前に更新をダウンロードする必要がある場合にも、このページにアクセスします。[システムデータベースおよびフィードの更新 \(985 ページ\)](#) を参照してください。
- [システム設定 (System Settings)] : このグループにはさまざまな設定が含まれます。の中には、デバイスの初期セットアップ時に設定され、その後はほとんど変更されることがない基本設定も含まれます。[システム設定 \(935 ページ\)](#) を参照してください。
- [スマート ライセンス (Smart License)] : システム ライセンスの現在の状態を表示します。システムを使用するには、適切なライセンスをインストールする必要があります。機能によっては追加のライセンスが必要です。[システムのライセンス \(101 ページ\)](#) を参照してください。
- [バックアップと復元 (Backup and Restore)] : システム設定のバックアップ、または以前のバックアップの復元を実行します。[システムのバックアップと復元 \(997 ページ\)](#) を参照してください。
- [トラブルシューティング (Troubleshoot)] : Cisco Technical Assistance Center の要請を受けたときにトラブルシューティング ファイルを生成します。[トラブルシューティング ファイルの作成 \(1034 ページ\)](#) を参照してください。
- [サイト間 VPN (Site-to-Site VPN)] : このデバイスとリモート デバイスの間のサイト間バーチャルプライベートネットワーク (VPN) 接続。[サイト間VPNの管理 \(803 ページ\)](#) を参照してください。
- [リモート アクセス VPN (Remote Access VPN)] : 内部ネットワークへの外部クライアントの接続を可能にするリモート アクセス仮想プライベート ネットワーク (VPN) 構成です。[リモート アクセス VPN の設定 \(852 ページ\)](#) を参照してください。

- [詳細設定 (Advanced Configuration)] : FlexConfig および Smart CLI を使用して、Device Manager を使用して設定できない機能を設定します。 [詳細設定 \(1039 ページ\)](#) を参照してください。
- [デバイス管理 (Device Administration)] : 監査ログを表示するか、設定のコピーをエクスポートします。 [監査と変更管理 \(1004 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 変更を展開するには、メニューの [展開 (Deploy)] ボタンをクリックします。



変更は、それらを展開するまでデバイスで有効になりません。「[変更の展開 \(42 ページ\)](#)」を参照してください。

次のタスク

メインメニューにある [ポリシー (Policies)] をクリックし、システムのセキュリティ ポリシーを設定します。また、[オブジェクト (Objects)] をクリックして、これらのポリシーに必要なオブジェクトを設定することもできます。

セキュリティ ポリシーの設定

組織のアクセプタブルユース ポリシーを実装して不正侵入やその他の脅威からネットワークを保護するにはセキュリティ ポリシーを使用します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] をクリックします。

[セキュリティポリシー (Security Policies)] ページには、システムを経由する接続の一般的な流れ、およびセキュリティ ポリシーが適用される順序が表示されます。

ステップ 2 ポリシーの名前をクリックして構成します。

アクセス制御ポリシーは常に必要ですが、各ポリシータイプを構成する必要はない場合があります。次に、ポリシーの概要を示します。

- [SSL 復号 (SSL Decryption)] : 侵入、マルウェアなどについて暗号化された接続 (HTTPS など) を検査する場合は、接続を復号する必要があります。SSL 復号ポリシーを使用して、どの接続を復号する必要があるか判断します。検査後にシステムが接続を再暗号化します。 [SSL 復号ポリシーの設定 \(566 ページ\)](#) を参照してください。
- [アイデンティティ (Identity)] : 個々のユーザにネットワークアクティビティを関連付ける場合、またはユーザやユーザ グループのメンバーシップに基づいてネットワークアクセスを制御する場合は、特定のソース IP アドレスに関連付けられているユーザを判断す

るためにアイデンティティ ポリシーを使用します。[アイデンティティ ポリシーの設定 \(592 ページ\)](#) を参照してください。

- [セキュリティ インテリジェンス (Security Intelligence)] : セキュリティ インテリジェンス ポリシーを使用して、選択されている IP アドレスまたは URL との接続をすぐにドロップします。既知の不正なサイトをブロックすれば、アクセス制御ポリシーでそれらを考慮する必要がなくなります。シスコでは、セキュリティインテリジェンスのブラックリストが動的に更新されるように、既知の不正なアドレスや URL の定期更新フィードを提供しています。フィードを使用すると、ブラックリストの項目を追加または削除するためにポリシーを編集する必要がありません。[セキュリティ インテリジェンスの設定 \(608 ページ\)](#) を参照してください。
- [NAT] (ネットワーク アドレス変換) : NAT ポリシーを使用して内部 IP アドレスを外部のルーティング可能なアドレスに変換します。[NATの設定 \(707 ページ\)](#) を参照してください。
- [アクセス制御 (Access Control)] : アクセス制御ポリシーを使用してネットワーク上で許可する接続を決定します。セキュリティ ゾーン、IP アドレス、プロトコル、ポート、アプリケーション、URL、ユーザまたはユーザグループでフィルター処理できます。また、アクセス制御ルールを使用して侵入およびファイル (マルウェア) ポリシーを適用します。このポリシーを使用して URL フィルタリングを実装します。[アクセスコントロールポリシーの設定 \(632 ページ\)](#) を参照してください。
- [侵入 (Intrusion)] : 侵入ポリシーを使用して、既知の脅威を検査します。アクセス制御ルールを使用して侵入ポリシーを適用しても、侵入ポリシーを編集して特定の侵入ルールを有効または無効にすることができます。[侵入ポリシー \(659 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 変更を展開するには、メニューの [展開 (Deploy)] ボタンをクリックします。



変更は、それらを展開するまでデバイスで有効になりません。「[変更の展開 \(42 ページ\)](#)」を参照してください。

ルールまたはオブジェクトを検索

ポリシールールまたはオブジェクトのリストで全文検索を使用すると、編集する項目を探すことができます。これは、数百のルールのあるポリシーや長いオブジェクトリストを処理するとき特に便利です。

ルールとオブジェクトで検索を使用する方法は、任意のタイプのポリシー（侵入ポリシーを除く）またはオブジェクトの場合と同様です。[検索 (Search)] フィールドに検索する文字列を入力し、Enter を押します。

この文字列は、ルールまたはオブジェクトの任意の部分に存在でき、部分文字列にすることができます。アスタリスク*は、0個以上の文字に一致するワイルドカードとして使用できます。次の文字を含めないでください。検索文字列の一部としてサポートされていません。?!{}<>:%。次の文字は無視されます。;#&。

文字列は、グループのオブジェクト内に出現することがあります。たとえば、IPアドレスを入力し、そのアドレスを指定するネットワークオブジェクトまたはグループを検索することができます。

完了したら、検索ボックスの右側にある [x] をクリックしてフィルタをクリアします。

変更の展開

ポリシーや設定を更新した場合、その変更内容はすぐにはデバイスに適用されません。設定を変更するには、次の2つの手順を実行します。

1. 設定情報を修正します。
2. 変更を展開します。

この手順により、デバイスを「部分的に設定された」状態で実行することなく、関連する変更のグループ化を行えるようになります。ほとんどの場合、展開には変更だけが含まれます。ただし、必要に応じてシステムは設定全体を再適用し、それがネットワークを中断させる場合があります。さらに、いくつかの変更ではインスペクションエンジンの再起動が必要であり、この再起動中にトラフィックがドロップされます。したがって、潜在的な混乱の影響が最小限になるタイミングで変更を展開するように検討してください。



(注) 展開ジョブが失敗した場合、システムは、一部の変更を以前の設定にロールバックする必要があります。ロールバックには、データプレーン設定のクリアと以前のバージョンの再展開が含まれます。これにより、ロールバックが完了するまでトラフィックが中断されます。

必要な変更をすべて完了した後、次の手順に従って変更をデバイスに展開します。



注意 Threat Defense デバイスは、インスペクションエンジンがソフトウェアのリソースの問題が原因でビジー状態である、または設定の展開中にエンジンの再起動が必要なためダウンしているときに、トラフィックをドロップします。再起動が必要な変更の詳細については、[インスペクションエンジンを再起動する設定変更](#) (44 ページ) を参照してください。

手順

ステップ 1 Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。

このアイコンは、展開されていない変更がある場合にドットマークで強調表示されます。



[保留中の変更 (Pending Changes)] ウィンドウには、設定の展開バージョンと保留中の変更との比較が表示されます。それらの変更は、削除された要素、追加された要素、または編集された要素を示すために色分けされています。色の説明については、ウィンドウの凡例を参照してください。

展開でインスペクションエンジンの再起動が必要な場合は、再起動を必要とする変更の詳細を示すメッセージがページに表示されます。この時点で一時的なトラフィック損失を許容できない場合は、ダイアログを閉じ、変更を展開する良いタイミングを待ちます。

アイコンが強調表示されていない場合でも、アイコンをクリックすると最後に成功した展開ジョブの日時を確認できます。展開履歴を表示するリンクもあり、クリックすると展開ジョブだけを表示するようにフィルタ処理された監査ページに移動します。



ステップ 2 変更内容に問題がない場合は、[今すぐ展開 (Deploy Now)] をクリックして、ジョブをすぐに開始できます。

ウィンドウに展開が進行中であることが示されます。ウィンドウを閉じるか、または展開が完了するまで待つことができます。展開が進行中の間にウィンドウを閉じても、ジョブは停止しません。結果は、タスクリストや監査ログで確認できます。ウィンドウを開いたままにした場合、[展開履歴 (Deployment History)] リンクをクリックすると結果が表示されます。

状況に応じて、次の手順を実行できます。

- [ジョブの命名 (Name the Job)] : 展開ジョブに名前を付けるには、[今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンのドロップダウン矢印をクリックして、[展開ジョブの命名 (Name the Deployment Job)] を選択します。名前を入力して [展開 (Deploy)] をクリックします。名前は、ジョブの一部として監査および展開履歴に表示されるため、ジョブの検索が容易になります。

たとえば、ジョブの名前を「DMZ Interface Configuration」にした場合、成功した展開の名前は「Deployment Completed: DMZ Interface Configuration」になります。さらに、その名前は、展開ジョブに関連する [タスク開始 (Task Started)] イベントと [タスク完了 (Task Completed)] イベントの [イベント名 (Event Name)] として使用されます。

- [完全な展開を強制 (Force a full deployment)] : 問題があり、システムに変更だけではなく完全な設定を展開するように強制する場合は、[今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンのドロップダウン矢印をクリックして [完全な展開を適用 (Apply Full Deployment)] を選択することができます。完全な展開の場合はトラフィックが中断されるため、[展開 (Deploy)] をクリックする前に、このアクションを実行することを確認する必要があります。
- [変更の破棄 (Discard Changes)] : 保留中の変更をすべて破棄するには、[詳細オプション (More Options)] > [すべて破棄 (Discard All)] をクリックします。確認を求められます。

- [変更のコピー (Copy Changes)] : 変更の一覧をクリップボードにコピーするには、[詳細オプション (More Options)] > [クリップボードにコピー (Copy to Clipboard)] をクリックします。このオプションは、変更の数が 500 未満の場合にのみ機能します。
- [変更のダウンロード (Download Changes)] : 変更の一覧をファイルとしてダウンロードするには、[詳細オプション (More Options)] > [テキストとしてダウンロード (Download as Text)] をクリックします。自分のワークステーションにファイルを保存するように求められます。このファイルは YAML 形式です。YAML 形式に対応しているエディタがない場合は、テキストエディタで表示できます。

インスペクション エンジン を再起動する設定変更

設定変更の展開時に、次の設定またはアクションによりインスペクションエンジンが再起動されます。



注意 展開時には、リソースに対する需要に伴い、少数のパケットが検査なしでドロップされることがあります。また、一部の設定の展開時にはインスペクションエンジンを再起動する必要がありますが、これによりトラフィック検査が中断され、トラフィックがドロップされます。

導入

一部の変更ではインスペクションエンジンの再起動が必要で、これにより一時的なトラフィック損失が発生します。インスペクションエンジンの再起動が必要な変更は、次のとおりです。

- SSL 復号ポリシーが有効化または無効化された。
- 1 つまたは複数の物理インターフェイス上（サブインターフェイスではありません）で MTU が変更された。
- アクセス制御ルールのファイル ポリシーを追加または削除します。
- VDB が更新されました。
- ハイ アベイラビリティ設定が作成または破棄された。

さらに、Snort プロセスがビジー状態で CPU の合計使用率が 60% を超えている場合、展開中に一部のパケットがドロップされることがあります。show asp inspect-dp snort コマンドを使用して、Snort の現在の CPU 使用率を確認できます。

システム データベースの更新

ルール データベースまたは VDB に更新プログラムをダウンロードした場合は、それらをアクティブにするために更新プログラムを展開する必要があります。この展開により、検査エンジンが再起動される場合があります。手動で更新プログラムをダウンロードする、または更新プログラムのスケジュールを設定する場合は、ダウンロードが完了した後に、システムが変更を

自動で展開する必要があるかどうかを指定できます。更新プログラムを自動的に展開するシステムがない場合は、次に変更を展開したときに更新プログラムが適用され、その際に検査エンジンが再起動される場合があります。

システム アップデート

バイナリ変更が含まれており、システムの再起動を必要としないシステム更新またはパッチをインストールする際には、インスペクションエンジンを再起動する必要があります。バイナリ変更には、インスペクションエンジン、プリプロセッサ、脆弱性データベース（VDB）、または共有オブジェクトルールの変更が含まれていることがあります。バイナリ変更が含まれていないパッチでは、Snort の再起動が必要となることがある点に注意してください。

完全な展開を強制するいくつかの変更の設定

ほとんどの場合、展開には変更だけが含まれます。ただし、必要に応じてシステムは設定全体を再適用し、それがネットワークを中断させる場合があります。次に、完全な展開を強制するいくつかの変更を示します。

- セキュリティ インテリジェンス ポリシーまたはアイデンティティポリシーは、最初は有効になっています。
- セキュリティ インテリジェンス ポリシーとアイデンティティポリシーの両方が無効になっています。
- データを再利用する場合の EtherChannel の作成。
- EtherChannel の削除。
- EtherChannel のメンバー インターフェイス アソシエーションの変更。
- 設定で使用されているインターフェイスの削除。たとえば、アクセスコントロールルールで使用されるセキュリティゾーンの一部であるサブインターフェイスを削除します。
- FlexConfig ポリシーの一部である FlexConfig オブジェクトの変更、またはオブジェクトに `negate` 行が含まれていない場合のポリシーからのオブジェクトの削除。 `negate` 行を省略すると、FlexConfig オブジェクトによって生成された設定を削除する特定の 방법이 ないため、システムは強制的に完全に展開されます。各 FlexConfig オブジェクトに適切な `negate` 行を常に含めることで、この問題を回避できます。

インターフェイスおよび管理ステータスの表示

[デバイス概要 (Device Summary)] には、デバイスのグラフィカルビューと管理アドレスの選択設定が表示されます。[デバイス概要 (Device Summary)] を開くには [デバイス (Device)] をクリックします。

このグラフィックの要素は、各要素のステータスに基づいて色が変わります。要素にマウスポインタを合わせると、追加情報が表示されるものがあります。このグラフィックを使用して、次の項目をモニターできます。



- (注) グラフィックのインターフェイス部分（インターフェイス ステータス情報を含む）は、[インターフェイス（Interfaces）] ページと [監視（Monitoring）] > [システム（System）] ダッシュボードにも表示されます。

インターフェイス ステータス

ポートにマウス ポインタを合わせると、その IP アドレス、有効ステータス、リンク ステータスが表示されます。IP アドレスはスタティックに割り当てるか、または DHCP を使用して取得することができます。ブリッジ仮想インターフェイス（BVI）をマウスオーバーすると、メンバー インターフェイスのリストが表示されます。

インターフェイス ポートでは次のカラー コーディングが使用されます。

- 緑色：インターフェイスが設定され、有効であり、リンクが稼動しています。
- 灰色：インターフェイスは無効です。
- オレンジ色/赤色：インターフェイスが設定され、有効ですが、リンクは停止しています。インターフェイスが有線接続している場合、これは修正する必要があるエラー状況です。インターフェイスが有線接続していない場合、これは想定されるステータスです。

内部/外部ネットワーク接続

グラフィックでは、次の条件で、外部（またはアップストリーム）ネットワークまたは内部ネットワークに接続するポートが示されています。

- 内部ネットワーク：内部ネットワークのポートは、「inside」という名前のインターフェイスについてのみ表示されます。その他の内部ネットワークがある場合、これらは表示されません。インターフェイスに1つも「inside」という名前が指定されていない場合、内部ポートとしてマークされるポートはありません。
- 外部ネットワーク：外部ネットワークのポートは、「outside」という名前のインターフェイスについてのみ表示されます。内部ネットワークと同様に、この名前は必須です。この名前が指定されていない場合、外部ポートとしてマークされるポートはありません。

管理設定ステータス

このグラフィックには、ゲートウェイ、DNS サーバ、NTP サーバ、スマート ライセンスが設定されているかどうかと、それらの設定が正しく機能しているかどうかが表示されています。

緑色は機能が設定されており正しく機能していることを示し、灰色は機能が設定されていないか正しく機能していないことを示します。たとえば、サーバに到達できない場合、DNS ボックスは灰色です。詳細情報を表示するには、アイコンにマウス ポインタを合わせます。

問題が見つかった場合は、次のように修正します。

- 管理ポートおよびゲートウェイ：[システム設定（System Settings）] > [管理インターフェイス（Management Interface）] を選択します。

- DNS サーバ : [システム設定 (System Settings)] > [DNS サーバ (DNS Server)] の順に選択します。
- NTP サーバ : [システム設定 (System Settings)] > [NTP (NTP)] の順に選択します。 [NTP のトラブルシューティング \(1026 ページ\)](#) も参照してください。
- スマート ライセンス : [スマート ライセンス (Smart License)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] リンクをクリックします。

システムのタスク ステータスの表示

システムのタスクには、データベース更新の取得および適用など、直接の介入なしに実行されるアクションが含まれます。これらのタスクのリストとそのステータスを表示し、これらのシステム タスクが正常に完了したことを確認できます。

タスク リストには、システム タスクと展開ジョブの統合ステータスが表示されます。監査ログにはより詳細な情報が含まれており、[\[デバイス\]>\[デバイス管理\]>\[監査ログ\]](#)の下にあります。たとえば、監査ログにはタスクの開始とタスクの終了ごとに個別のイベントが表示されます。一方、タスクリストではそれらのイベントが単一のエントリにマージされます。さらに、展開の監査ログ エントリには、展開された変更に関する詳細情報が含まれています。

手順

-
- ステップ 1** メイン メニューの [タスク リスト (Task List)] ボタンをクリックします。



タスク リストが開き、システム タスクのステータスと詳細が表示されます。

- ステップ 2** タスク ステータスを評価します。

解決しない問題が見つかった場合、デバイス設定を修正しなければならないことがあります。たとえば、データベース更新を入手できない問題が続く場合、デバイスの管理 IP アドレスでインターネットへのパスが存在しないことを示しています。タスクに示される問題の中には、Cisco Technical Assistance Center (TAC) に問い合わせる必要があるものもあります。

タスク リストでは次の操作を行えます。

- [成功 (Success)] または [障害 (Failures)] ボタンをクリックして、ステータスに基づいたリストのみを表示する。
 - タスクをリストから削除するには、[削除 (delete)] アイコン () をクリックします。
 - [完了したすべてのタスクを削除 (Remove All Completed Tasks)] をクリックして、実行していないタスクをリストから削除する。
-

CLI コンソールを使用した設定の監視およびテスト

Threat Defense デバイスには、監視およびトラブルシューティングに使用できる CLI（コマンドラインインターフェイス）が組み込まれています。SSH セッションを開いてすべてのシステムコマンドにアクセスすることはできますが、Device Manager で CLI コンソールを開いて、さまざまな **show** コマンド、**ping**、**traceroute**、および **packet-tracer** などの読み取り専用コマンドを使用することもできます。管理者権限を持っている場合は、**failover**、**reboot**、および **shutdown** コマンドを入力することもできます。

ページ間の移動、設定、および機能の展開を行っている間、CLI コンソールを開いたままにしておくことができます。たとえば、新しいスタティックルートを展開した後で、CLI コンソールで **ping** を使用して、ターゲットネットワークに到達できることを確認できます。

CLI コンソールでは基本脅威に対する防御 CLI を使用します。CLI コンソールを使用して、診断 CLI、エキスパート モード、および FXOS CLI（FXOS を使用するモデル）に入ることはできません。このような他の CLI モードに入る必要がある場合は、SSH を使用します。

コマンドの詳細については、[Cisco Firepower Threat Defense コマンド リファレンス](https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html)、https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html を参照してください。

注：

- **ping** は CLI コンソールでサポートされていますが、**ping system** コマンドはサポートされていません。
- システムは最大で2つのコマンドを同時に処理できます。そのため、別のユーザが（たとえば、REST API を使用して）コマンドを発行している場合は、その他のコマンドの完了を待ってからコマンドを入力する必要があります。問題が解決しない場合は、CLI コンソールの代わりに SSH セッションを使用します。
- コマンドは、展開された設定に基づいて情報を返します。Device Manager で設定を変更しても、展開していない場合は、コマンド出力に変更の結果が表示されません。たとえば、新しいスタティックルートを作成しても展開していない場合、そのルートは **show route** 出力に表示されません。

手順

ステップ 1 Web ページの右上にある [CLI コンソール (CLI Console)] ボタンをクリックします。



ステップ 2 プロンプトにコマンドを入力し、Enter を押します。

コマンドの中には他より出力まで時間がかかるものもありますが、しばらくお待ちください。コマンドの実行がタイムアウトになったというメッセージが表示されたら、もう一度試してください。 **show perfstats** など、対話型の応答が必要なコマンドを入力した場合にも、タイムア

ウトエラーが発生します。問題が解決しない場合は、CLI コンソールの代わりに SSH クライアントを使用する必要があります。

このウィンドウを使用する方法について、いくつかのヒントを次に示します。

- コマンドの一部を入力した後で **Tab** キーを押すと、オート コンプリートが作動します。また、**Tab** はコマンド内のその位置で使用可能なパラメータをリストします。また、**Tab** は3つのレベルまでキーワードを示します。3つのレベルを過ぎると、コマンドリファレンスを使用して詳細を確認する必要があります。
- コマンドの実行を停止するには、**Ctrl+C** を押します。
- ウィンドウを移動するには、ヘッダー内の任意の箇所をクリックしたままウィンドウを目的の位置にドラッグします。
- ウィンドウサイズを変更するには、[展開 (Expand)]  または [折りたたみ (Collapse)]  ボタンをクリックします。
- [別のウィンドウに切り離す (Undock Into Separate Window)]  ボタンをクリックすると、ウィンドウが Web ページから独自のブラウザウィンドウに切り離されます。再度ドッキングするには、[メインウィンドウにドッキング (Dock to Main Window)]  ボタンをクリックします。
- クリックしてドラッグすると、テキストが強調表示されます。次に **Ctrl+C** を押すと、出力がクリップボードにコピーされます。
- すべての出力を消去するには、[CLI のクリア (Clear CLI)]  ボタンをクリックします。
- [最後の出力のコピー (Copy Last Output)]  ボタンをクリックすると、最後に入力したコマンドからの出力がクリップボードにコピーされます。

ステップ 3 完了したら、コンソール ウィンドウを閉じます。**exit** コマンドは使用しないでください。

Device Manager へのログインに使用するクレデンシャルにより CLI へのアクセスが検証されますが、コンソール使用時は実際には CLI にログインしていません。

Device Manager と REST API の併用

ローカル管理モードでデバイスをセットアップする場合、Device Manager と 脅威に対する防御 REST API を使用してデバイスを設定できます。実際には、Device Manager は REST API を使用してデバイスを設定します。

ただし、REST API は Device Manager で利用できる機能に加えて、その他の機能を提供できることを理解してください。したがって、所定の機能について、Device Manager で設定を確認するときには表示できない、REST API を使用した設定を行うことができます。

REST API で利用できて Device Manager で利用できない機能を設定する場合は、設定が完了していない可能性がある、Device Manager を使用したすべての機能（リモートアクセス VPN など）に変更を加えます。API のみの設定が維持されるかどうかは場合によって異なります。多くの場合、Device Manager で使用できない設定への API の変更は Device Manager の編集により維持されます。所定の機能については、変更が維持されているかどうかを確認する必要があります。

一般的には、所定の機能について Device Manager と REST API の両方を同時に使用しないようにする必要があります。代わりに、デバイスを設定するために、機能ごとにいずれかの方法を選択します。

API エクスプローラを使用して API メソッドを表示および試すことができます。[詳細オプション (More options)] ボタン (⋮) をクリックし、[API エクスプローラ (API Explorer)] を選択します。



第 2 章

ベストプラクティス：Threat Defense の使用例

ここでは、Device Manager を使用して 脅威に対する防御 で実行する共通のタスクについていくつか説明します。これらの使用例は、デバイス設定ウィザードが完了しており、この初期設定が保持されていることを前提としています。初期設定を変更した場合でも、これらの例から製品の使用法は理解できるはずです。

- [Device Manager でデバイスを設定する方法](#) (51 ページ)
- [ネットワーク トラフィックを調べる方法](#) (57 ページ)
- [脅威のブロック方法](#) (65 ページ)
- [マルウェアのブロック方法](#) (71 ページ)
- [アクセプタブルユース ポリシー \(URL フィルタリング\) の実装方法](#) (75 ページ)
- [アプリケーションの使用を制御する方法](#) (81 ページ)
- [サブネットの追加方法](#) (85 ページ)
- [ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法](#) (92 ページ)
- [その他の例](#) (98 ページ)

Device Manager でデバイスを設定する方法

セットアップウィザードの完了後、いくつかの基本ポリシーが適切に設定された機能しているデバイスが必要です。

- 外部インターフェイスと内部インターフェイス。その他のデータインターフェイスは設定されません。
- (Firepower 4100/9300) 事前に設定されたデータインターフェイスはありません。
- (ISA 3000) ブリッジグループには 2 つの内部インターフェイスと 2 つの外部インターフェイスが含まれています。セットアップを完了するには、BVII の IP アドレスを手動で設定する必要があります。
- (Firepower 4100/9300 を除く) 内部インターフェイスおよび外部インターフェイスのセキュリティゾーン。

- (Firepower 4100/9300 を除く) 内部から外部へのトラフィックをすべて信頼するアクセスルール。
- (Firepower 4100/9300を除く) 内部から外部へのすべてのトラフィックを外部インターフェイスの IP アドレスの固有ポートに変換するインターフェイス NAT ルール。
- (Firepower 4100/9300 および ISA 3000 を除く) 内部インターフェイスで実行されている DHCP サーバー。

次の手順では、設定可能なその他の機能の概要を示します。各手順について詳細な情報を表示するには、ページのヘルプ ボタン (?) をクリックしてください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] を選択し、[スマートライセンス (Smart License)] グループで[設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

使用するオプションライセンス (IPS、マルウェア防御、URL) ごとに [有効化 (Enable)] をクリックします。セットアップ中にデバイスを登録した場合は、必要な RA VPN ライセンスも有効にできます。必要かどうかわからない場合は、各ライセンスの説明をお読みください。

登録していない場合は、このページから登録できます。[Register Device] をクリックして、説明に従います。評価ライセンスの有効期限が切れる前に登録してください。

ステップ 2 他のインターフェイスに接続している場合は、[デバイス (Device)] を選択し、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックしてから、インターフェイスのタイプをクリックして、インターフェイスのリストを表示します。

- Firepower 4100/9300 では、名前、IP アドレス、またはセキュリティゾーンを使用して事前に設定されているデータインターフェイスがないため、使用するインターフェイスを有効にして設定する必要があります。

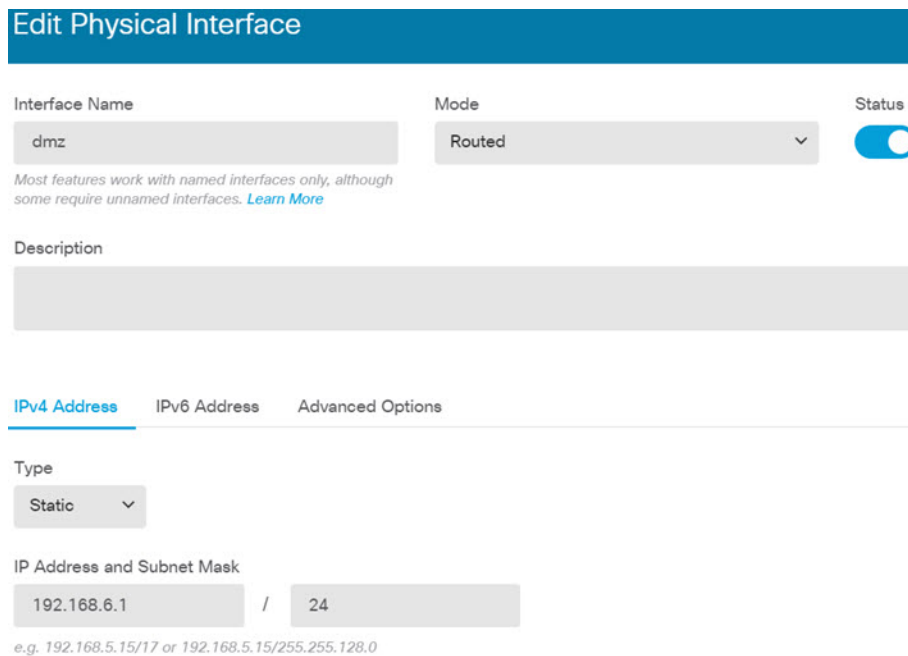
- ISA 3000 はのすべてのデータインターフェイスが含まれるブリッジグループが事前に設定された状態で出荷されるため、これらのインターフェイスを設定する必要はありません。ただし、BVIのIPアドレスを手動で設定する必要があります。ブリッジグループを分割する場合は、ブリッジグループを編集して個別に扱うインターフェイスを除去できます。その後、別のネットワークをホストするようにこれらのインターフェイスを設定できます。

その他のモデルの場合は、他のインターフェイス用のブリッジグループを作成するか、個別ネットワークを設定するか、またはそれらを組み合わせることができます。

- Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220 の場合、Ethernet1/1 (外部) 以外のインターフェイスはすべて、VLAN1 (内部) に割り当てられたアクセス モードのスイッチ ポートです。スイッチポートをファイアウォールポートに変更することができます。それには、新しい VLAN インターフェイスを追加してスイッチポートを割り当てます。または、トランクモードのスイッチポートを設定します。

各インターフェイスの編集アイコン（）をクリックして、IP アドレスなどの設定を定義します。

次の例では、Web サーバなどのパブリックアクセスが可能なアセットを配置する「緩衝地帯」（DMZ）として使用されるインターフェイスを設定します。完了したら [保存（Save）] をクリックします。



Interface Name: dmz

Mode: Routed

Status: ☒

Description:

IPv4 Address | IPv6 Address | Advanced Options

Type: Static

IP Address and Subnet Mask: 192.168.6.1 / 24

e.g. 192.168.5.15/17 or 192.168.5.15/255.255.128.0

ステップ 3 新しいインターフェイスを設定した場合は、[オブジェクト（Objects）] を選択してから、目次から [セキュリティゾーン（Security Zones）] を選択します。

必要に応じて新しいゾーンを編集または作成します。インターフェイスではなくセキュリティゾーンに基づいてポリシーを設定するため、各インターフェイスはゾーンに属している必要があります。インターフェイスの設定中はインターフェイスをゾーンに配置できないため、常に、新しいインターフェイスの作成後または既存のインターフェイスの目的の変更後にゾーンオブジェクトを編集する必要があります。

次の例は、DMZ インターフェイス用の新しい DMZ ゾーンを作成する方法を示しています。

Add Security Zone

Name

dmz-zone

Description

Mode



Routed



Passive

Interfaces



dmz

ステップ 4 内部クライアントがDHCPを使用してデバイスからIPアドレスを取得するようにする場合は、[デバイス (Device)] を選択し、次に[システム設定] > [DHCPサーバ]を選択します。[DHCPサーバ (DHCP Servers)] タブを選択します。

すでに内部インターフェイス用に構成されている DHCP サーバがありますが、アドレス プールを編集したり、それを削除したりすることができます。他の内部インターフェイスを設定する場合、それらのインターフェイスにDHCPサーバを設定するのが非常に一般的です。各内部インターフェイスのサーバおよびアドレス プールを設定するには、+をクリックします。

クライアントに対して提供される WINS および DNS リストを [設定 (Configuration)] タブで調整することもできます。

次の例は、inside2 インターフェイス上の DHCP サーバをアドレス プール 192.168.4.50-192.168.4.240 を使用して設定する方法を示しています。

Add Server

Enabled DHCP Server ☒

Interface

inside2

Address Pool

192.168.4.50-192.168.4.240

e.g. 192.168.45.46-192.168.45.254

ステップ 5 [デバイス (Device)] を選択し、次に [設定の表示 (View Configuration)] を [ルーティング (Routing)] グループでクリックし、デフォルトルートを設定します。

デフォルトルートは通常、外部インターフェイス以外に存在するアップストリームまたはISP ルータを指しています。デフォルトの IPv4 ルートは any-ipv4 (0.0.0.0/0) 用で、デフォルトの

IPv6 ルートは any-ipv6 (::0/0) 用です。使用する IP バージョンごとにルートを作成します。DHCPを使用して外部インターフェイスのアドレスを取得している場合は、必要なデフォルトルートがすでに存在している可能性があります。

このページで定義するルートはデータインターフェイス専用です。管理インターフェイスには影響しません。管理ゲートウェイは **[システム設定 (System Settings)] > [管理インターフェイス (Management Interface)]** で設定します。

次の例に、IPv4 のデフォルト ルートを示します。この例では、isp-gateway は ISP ゲートウェイの IP アドレスを識別するネットワーク オブジェクトです (ISP からアドレスを取得する必要があります)。このオブジェクトは、**[ゲートウェイ (Gateway)]** ドロップダウンリストの下部で **[新しいネットワークの作成 (Create New Network)]** をクリックして作成します。

The screenshot shows the 'Add Static Route' configuration page. It has the following fields and values:

- Protocol:** IPv4 (selected), IPv6
- Gateway:** isp-gateway
- Interface:** outside
- Metric:** 1
- Networks:** any-ipv4

ステップ 6 **[ポリシー (Policies)]** を選択し、ネットワークのセキュリティ ポリシーを設定します。

デバイスセットアップウィザードにより、内部ゾーンと外部ゾーン間のトラフィックフロー、および外部インターフェイスに向かうすべてのインターフェイスのインターフェイス NAT が有効になります。新しいインターフェイスを設定する場合でも、そのインターフェイスを内部ゾーン オブジェクトに追加するとアクセス制御ルールが自動的に適用されます。

ただし、複数の内部インターフェイスがある場合は、内部ゾーンから内部ゾーンへのトラフィックフローを許可するアクセス制御ルールが必要です。他のセキュリティゾーンを追加する場合は、それらのゾーンとの双方向トラフィックを許可するルールが必要です。これらは最小限の変更です。

さらに、追加のサービスを提供するために他のポリシーを設定し、組織が必要とする結果を取得するために NAT およびアクセスルールを調整することができます。以下のポリシーを設定できます。

- **[SSL 復号 (SSL Decryption)]** : 侵入、マルウェアなどについて暗号化された接続 (HTTPS など) を検査する場合は、接続を復号する必要があります。SSL 復号ポリシーを使用して、どの接続を復号する必要があるか判断します。検査後にシステムが接続を再暗号化します。

- [アイデンティティ (Identity)] : 個々のユーザにネットワークアクティビティを関連付ける、またはユーザまたはユーザグループのメンバーシップに基づいてネットワークアクセスを制御する場合は、特定のソース IP アドレスに関連付けられているユーザを判定するためにアイデンティティポリシーを使用します。
- [セキュリティインテリジェンス (Security Intelligence)] : セキュリティインテリジェンスポリシーを使用して、選択されている IP アドレスまたは URL との接続をすぐにドロップします。既知の不正なサイトをブロックすれば、アクセス制御ポリシーでそれらを考慮する必要がなくなります。シスコでは、セキュリティインテリジェンスのブラックリストが動的に更新されるように、既知の不正なアドレスや URL の定期更新フィードを提供しています。フィードを使用すると、ブラックリストの項目を追加または削除するためにポリシーを編集する必要がありません。
- [NAT] (ネットワークアドレス変換) : NAT ポリシーを使用して内部 IP アドレスを外部のルーティング可能なアドレスに変換します。
- [アクセス制御 (Access Control)] : アクセス制御ポリシーを使用してネットワーク上で許可する接続を決定します。セキュリティゾーン、IP アドレス、プロトコル、ポート、アプリケーション、URL、ユーザまたはユーザグループでフィルター処理できます。また、アクセス制御ルールを使用して侵入およびファイル (マルウェア) ポリシーを適用します。このポリシーを使用して URL フィルタリングを実装します。
- [侵入 (Intrusion)] : 侵入ポリシーを使用して、既知の脅威を検査します。アクセス制御ルールを使用して侵入ポリシーを適用しても、侵入ポリシーを編集して特定の侵入ルールを有効または無効にすることができます。

次の例は、アクセス制御ポリシーで内部ゾーンと DMZ ゾーンの間のトラフィックを許可する方法を示しています。この例では、[接続終了時 (At End of Connection)] が選択されている [ロギング (Logging)] 以外のタブではオプションは設定されていません。

Order	Title	Action
2	Inside_DMZ	Allow

Source/Destination Applications URLs Users Intrusion Policy File policy Logging

SOURCE			DESTINATION		
Zones	Networks	Ports	Zones	Networks	Ports/Protocols
inside_zone	ANY	ANY	dmz-zone	ANY	ANY

ステップ7 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ネットワーク トラフィックを調べる方法

デバイスの初期セットアップが完了すると、すべての内部トラフィックに対してインターネットまたはその他のアップストリーム ネットワークへのアクセスを許可するアクセス制御ポリシーと、その他のすべてのトラフィックをブロックするデフォルトアクションが設定されています。追加のアクセス コントロール ルールを作成する前に、ネットワークで実際に発生しているトラフィックを調べると役立ちます。

Device Manager のモニタリング機能を使用してネットワークトラフィックを分析できます。以下の質問の回答には Device Manager のレポートが役立ちます。

- ネットワークの用途
- 最も多くネットワークを使用しているユーザ
- ユーザの接続先
- ユーザが使用しているデバイス
- 最もヒットしているアクセス制御ルール（ポリシー）

初期アクセスルールから、トラフィックに関する情報（ポリシー、宛先、セキュリティゾーンなど）を取得できます。ただし、ユーザ情報を確認するには、ユーザがユーザ自身を認証（識別）することを要件としたアイデンティティポリシーを設定する必要があります。ネットワークで使用されているアプリケーションに関する情報を取得するには、追加の調整が必要です。

次の手順で、トラフィックをモニタするように 脅威に対する防御 デバイスを設定する方法を説明し、設定ポリシーおよびモニタリング ポリシーのエンドツーエンドプロセスの概要を示します。



- (注) この手順では、ユーザがアクセスしたサイトの Web サイト カテゴリとレピュテーションの情報は取得されないため、URL カテゴリ ダッシュボードに有用な情報は表示されません。カテゴリとレピュテーションに関するデータを取得するには、カテゴリ ベースの URL フィルタリングを実装し、URL ライセンスを有効にする必要があります。この情報のみ取得する場合は、許可するカテゴリ（金融など）へのアクセスを許可する新規のアクセスコントロールルールを追加して、アクセス コントロール ポリシーで最初のルールに設定できます。URL フィルタリングの実装の詳細については、[アクセプタブルユース ポリシー（URL フィルタリング）の実装方法（75 ページ）](#)を参照してください。

手順

ステップ 1 ユーザの動作を調べるには、接続に関連付けられているユーザを識別するアイデンティティポリシーを設定する必要があります。

アイデンティティポリシーを有効にすると、ネットワークを使用しているユーザや、ユーザが使用しているリソースに関する情報を収集できます。この情報は [ユーザ (User)] 監視ダッシュボードで確認できます。ユーザ情報は、イベントビューアに表示される接続イベントにも表示されます。

この例では、ユーザ アイデンティティを取得するためにアクティブ認証を実装します。アクティブ認証を使用すると、デバイスからユーザ名とパスワードを求められます。ユーザは、HTTP 接続に Web ブラウザを使用する場合にのみ認証されます。

認証に失敗したユーザは、Web 接続を確立できません。これは、接続のためのユーザ アイデンティティ情報がないことを意味します。必要に応じて、認証失敗ユーザのトラフィックをドロップするアクセス制御ルールを作成できます。

- a) メインメニューで [ポリシー (Policies)] をクリックし、次に [アイデンティティ (Identity)] をクリックします。

アイデンティティポリシーは、最初は無効化されています。アクティブ認証を使用している場合、アイデンティティポリシーは Active Directory サーバを使用してユーザを認証し、ユーザが使用しているワークステーションの IP アドレスをユーザに関連付けます。その後システムはその IP アドレスのトラフィックをユーザのトラフィックとして識別します。

- b) [アイデンティティポリシーの有効化 (Enable Identity Policy)] をクリックします。
- c) [アイデンティティルールの作成 (Create Identity Rule)] ボタンまたは [+] ボタンをクリックして、アクティブ認証を義務付けるルールを作成します。

この例では、すべての人に認証を義務付けていると仮定しています。

- d) ルールの [名前 (Name)] を入力します。Require_Authentication など、任意の名前を選択できます。
- e) [送信元または宛先 (Source/Destination)] タブをデフォルトのままにします。これは、[任意 (Any)] 基準に適用されます。

より制限されているトラフィックに合わせて、ポリシーに制約を加えることができます。ただし、アクティブ認証は HTTP トラフィックに対してのみ試行されるため、非 HTTP トラフィックが送信元/宛先条件に一致していることは重要ではありません。アイデンティティポリシーのプロパティの詳細については、[アイデンティティルールの設定 \(595 ページ\)](#) を参照してください。

- f) [アクション (Action)] で [アクティブ認証 (Active Auth)] を選択します。

いくつか未定義の設定があるため、アイデンティティポリシーの設定が行われていないと仮定して、[アイデンティティポリシー設定 (Identity Policy Configuration)] ダイアログボックスが開きます。

- g) アクティブ認証に必要な [キャプティブ ポータル (Captive Portal)] の設定と [SSL 復号 (SSL Decryption)] の設定を行います。

アイデンティティルールによりユーザのアクティブ認証が要求されると、そのユーザはキャプティブポータルポートにリダイレクトされ、認証を求められます。キャプティブポータルには SSL 復号ルールが必要です。このルールは、システムによって自動的に生成されますが、SSL 復号ルールに使用する証明書は選択する必要があります。

- [サーバ証明書 (Server Certificate)] : アクティブ認証時にユーザに提示する内部証明書を選択します。事前定義された自己署名の DefaultInternalCertificate を選択するか、[新規内部証明書の作成 (Create New Internal Certificate)] をクリックして、ブラウザが信頼している証明書をアップロードできます。

ブラウザが信頼している証明書をアップロードしない場合、ユーザは証明書を許可する必要があります。

- [ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] : アクティブな認証要求のキャプティブポータルとして使用するインターフェイスの完全修飾ホスト名を定義するネットワークオブジェクトを選択します。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックします。

FQDN は、デバイス上のいずれかのインターフェイスの IP アドレスに解決される必要があります。FQDN を使用すると、クライアントが認識するアクティブ認証用の証明書を割り当てることができます。これにより、IP アドレスにリダイレクトされたときにユーザに表示される信頼できない証明書の警告を回避できます。証明書では、FQDN、ワイルドカード FQDN、または複数の FQDN をサブジェクト代替名 (SAN) に指定できます。

アイデンティティルールによりユーザのアクティブ認証が要求されているが、リダイレクト FQDN を指定していない場合、ユーザは、接続されているインターフェイス上のキャプティブポータルポートにリダイレクトされます。

- [ポート (Port)] : キャプティブポータルポート。デフォルトは 885 (TCP) です。別のポートを設定する場合は、1025 ~ 65535 の範囲にする必要があります。
- [再署名証明書の復号 (Decrypt Re-Sign Certificate)] : 再署名証明書での復号を実装するルールに使用する内部 CA 証明書を選択します。事前定義済みの NGFW-Default-InternalCA 証明書 (デフォルト) か、作成またはアップロードした証明書を使用できます。証明書がまだ存在しない場合は、[Create Internal CA] をクリックして作成します。(SSL 復号ポリシーをまだ有効にしていない場合にのみ、復号再署名証明書の入力が必要になります)。

クライアントのブラウザに証明書をまだインストールしていない場合は、ダウンロードボタン (📥) をクリックしてコピーを入手します。証明書をインストールする方法については、各ブラウザのマニュアルを参照してください。再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード (581 ページ) も参照してください。

例 :

[アイデンティティポリシーの設定 (Identity Policy Configuration)] ダイアログは、次のようになります。

Identity Policy Configuration

Identity Policy

ACTIVE AUTHENTICATION

Server Certificate

DefaultInternalCertificate

Redirect to Host Name

CaptivePortal

Port

885

e.g. 885 or 1025-65535

SSL Decryption ⓘ

Decrypt Re-Sign Certificate

NGFW-Default-InternalCA

⚠️ ① Download the selected certificate. ② Install it on all client machines for all browsers. [Read detailed instructions](#)

If you do not install the certificate, users will see warnings for untrusted HTTPS connections.

CANCEL SAVE

- h) [保存 (Save)] をクリックしてアクティブ認証の設定を保存します。
[アクティブ認証 (Active Authentication)] タブが [アクション (Action)] 設定の下に表示されます。
- i) [アクティブ認証 (Active Authentication)] タブで、[HTTP ネゴシエート (HTTP Negotiate)] を選択します。

これにより、ブラウザおよびディレクトリ サーバは最も強力な認証プロトコルを、NTLM、HTTP ベーシックの順にネゴシエートできます。

(注)

[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を指定しない場合、HTTP 基本、HTTP 応答ページ、および NTLM 認証方式では、インターフェイスの IP アドレスを使用してユーザがキャプティブポータルにリダイレクトされます。ただし、HTTP ネゴシエートでは、完全修飾 DNS 名 *firewall-hostname.AD-domain-name* を使用してユーザがリダイレクトされます。[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を指定せずに HTTP ネゴシエートを使用する場合は、アクティブ認証が必要なすべての内部

インターフェイスの IP アドレスにこの名前をマッピングするように DNS サーバを更新する必要もあります。そうでない場合は、リダイレクションが完了せず、ユーザは認証できません。認証方式に関係なく一貫した動作を確保するために、[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を常に指定することを推奨します。DNS サーバを更新できない、または更新を望まない場合は、その他の認証方式のいずれかを選択します。

- j) [ADアイデンティティソース (AD Identity Source)] で [新しいアイデンティティレルムの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックします。

レルム サーバ オブジェクトをすでに作成している場合は、そのオブジェクトを選択して、サーバ設定手順を省略します。

次のフィールドを入力し、[OK] をクリックします。

- [名前 (Name)] : ディレクトリ レルムの名前。
- [タイプ (Type)] : ディレクトリ サーバのタイプ。サポートされているタイプは Active Directory のみのため、このフィールドは変更できません。
- [ディレクトリユーザ名 (Directory Username)]、[ディレクトリパスワード (Directory Password)] : 取得するユーザ情報に対して適切な権限を持つユーザの識別用ユーザ名とパスワード。Active Directory では、昇格されたユーザ特権は必要ありません。ドメイン内の任意のユーザを指定できます。ユーザ名は Administrator@example.com などの完全修飾名である必要があります (Administrator だけでなく) 。

(注)

この情報から ldap-login-dn と ldap-login-password が生成されます。たとえば、Administrator@example.com は cn=adminisntrator,cn=users,dc=example,dc=com と変換されます。cn=users は常にこの変換の一部であるため、ここで指定するユーザは、共通名の「users」フォルダの下で設定する必要があります。

- [ベースDN (Base DN)] : ユーザおよびグループ情報、つまり、ユーザとグループの共通の親を検索またはクエリするためのディレクトリ ツリー。たとえば、dc=example,dc=com となります。ベース DN の検索方法については、[ディレクトリベース DN の決定 \(212 ページ\)](#) を参照してください。
- [ADプライマリ ドメイン (AD Primary Domain)] : デバイスが参加する必要がある、完全修飾 Active Directory ドメイン名。たとえば、example.com のように指定します。
- [ホスト名/IP アドレス (Hostname/IP Address)] : ディレクトリ サーバのホスト名または IP アドレス。サーバに対して暗号化された接続を使用する場合、IP アドレスではなく、完全修飾ドメイン名を入力する必要があります。
- [ポート (Port)] : サーバとの通信に使用するポート番号。デフォルトは389です。LDAPS を暗号化方式に選択している場合は、ポート 636 を使用します。
- [暗号化 (Encryption)] : ユーザとグループの情報をダウンロードするのに暗号化接続を使用する場合は、適切な方式を [STARTTLS] または [LDAPS] から選択します。

デフォルトは[なし (None)]です。したがって、ユーザとグループ情報はクリアテキストでダウンロードされます。

- [STARTTLS] は暗号化方式をネゴシエートし、ディレクトリ サーバでサポートされている最も強力な方式を使用します。ポート 389 を使用します。リモートアクセス VPN 用にレムを使用する場合は、このオプションがサポートされません。
- [LDAPS] では LDAP over SSL が必要です。ポート 636 を使用します。
- [信頼できる CA 証明書 (Trusted CA Certificate)] : 暗号化方式を選択した場合は、認証局 (CA) 証明書をアップロードして、システムとディレクトリ サーバの間で信頼できる接続を有効化します。認証に証明書を使用している場合、証明書のサーバ名とサーバのホスト名/IP アドレスが一致する必要があります。たとえば、IP アドレスとして 10.10.10.250 を使用するが、証明書では ad.example.com が指定されている場合、接続が失敗します。

例：

次の図に、ad.example.com サーバの非暗号化接続を作成する例を示します。プライマリドメインはexample.com、ディレクトリ ユーザ名はAdministrator@ad.example.comです。すべてのユーザとグループの情報は識別名 (DN) ou=user,dc=example,dc=comの下にあります。

Name	Type
AD	Active Directory (AD)
Directory Username	Directory Password
Administrator@ad.example.com e.g. user@example.com	*****
Base DN	AD Primary Domain
ou=user,dc=example,dc=com e.g. ou=user, dc=example, dc=com	example.com e.g. example.com

DIRECTORY SERVER CONFIGURATION

ad.example.com:389	
Hostname / IP Address	Port
ad.example.com e.g. ad.example.com	389
Encryption	Trusted CA certificate
NONE	Please select a certificate

- k) [AD アイデンティティ ソース (AD Identity Source)] で、作成したオブジェクトを選択します。

ルールは次のようになります。

Order	Title	AD Identity Source	Action
1	Require_Authentication	AD	Active Auth

Source / Destination [Active authentication](#)

Type
HTTP Negotiate

Fall Back as Guest ☐

ACTIVE AUTHENTICATION
For HTTP connections only, pro-
specified identity source to obt-
connections, even non-HTTP, f-
prompted to authenticate again-
access. You must configure the
Tune - Select the authenticati-

- l) [OK] をクリックしてルールを追加します。

ウィンドウの右上にある [展開 (Deploy)] アイコン ボタンに 1 つのドットが表示されています。これは、まだ展開されていない変更があることを示します。ユーザ インターフェイスで変更を行っても、デバイスで変更を設定するには十分ではありません。変更を展開する必要があります。したがって、一連の関連する変更を行ってからそれらの変更を展開します。このように展開することで、部分的に設定された変更がデバイスに反映されるという問題が発生しません。この手順の後半で変更を展開します。



ステップ 2 Inside_Outside_Rule アクセス制御ルールのアクションを [許可 (Allow)] に変更します。

Inside_Outside_Rule アクセスルールが信頼ルールとして作成されます。ただし信頼されているトラフィックは検査されないため、トラフィック一致基準に、ゾーン、IP アドレス、およびポート以外の条件やアプリケーションが含まれていない場合、システムは信頼されているトラフィックの特性の一部（アプリケーションなど）を学習できません。トラフィックを信頼する代わりにトラフィックを許可するようにこのルールを変更すると、システムはトラフィックを完全に検査します。

(注)

(ISA 3000)。また、Outside_Inside_Rule、Inside_Inside_Rule および Outside_Outside_Rule を [Trust] から [Allow] に変更することも検討してください。

- [ポリシー (Policies)] ページの [アクセス制御 (Access Control)] をクリックします。
- Inside_Outside_Rule 行の右側にある [アクション (Actions)] セルにマウス ポインタを合わせて編集アイコンと削除アイコンを表示させ、編集アイコン (🔧) をクリックしてルールを開きます。
- [アクション (Action)] で [許可 (Allow)] を選択します。

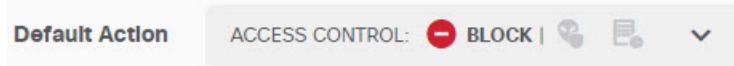
Order	Title	Action
1	Inside_Outside_Rule	Allow

- d) [OK] をクリックして変更を保存します。

ステップ 3 アクセス制御ポリシーのデフォルト アクションでロギングを有効にします。

接続ロギングを有効にするアクセス制御ルールに一致する接続の場合にのみ、接続に関する情報がダッシュボードに表示されます。Inside_Outside_Ruleによりロギングが有効になりますが、デフォルト アクションではロギングが無効です。したがってダッシュボードには Inside_Outside_Rule の情報だけが表示されており、どのルールにも一致しない接続は反映されません。

- a) アクセス制御ポリシーページの下部にあるデフォルトアクション内の任意の位置をクリックします。



- b) [ログ アクションの選択 (Select Log Action)] > [接続の開始時と終了時 (At Beginning and End of Connection)] の順に選択します。
- c) [OK] をクリックします。

ステップ 4 脆弱性データベース (VDB) の更新スケジュールを設定します。

シスコはVDBの更新を定期的にリリースしています。VDBには、接続で使用されているアプリケーションを特定できるアプリケーション検出プログラムが含まれます。VDBは定期的な更新する必要があります。更新を手動でダウンロードするか、定期的なスケジュールを設定できます。次の手順では、スケジュールの設定方法を説明します。デフォルトでは、VDBの更新は無効化されているため、VDBの更新を取得するには操作を実行する必要があります。

- a) [the name of the device in the menu] をクリックします。[デバイス (Device)]
- b) [更新 (Updates)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

Updates

[View Configuration](#) >

- c) [VDB] グループで [設定 (Configure)] をクリックします。

VDB 265.0

Configure
Set recurring VDB updates

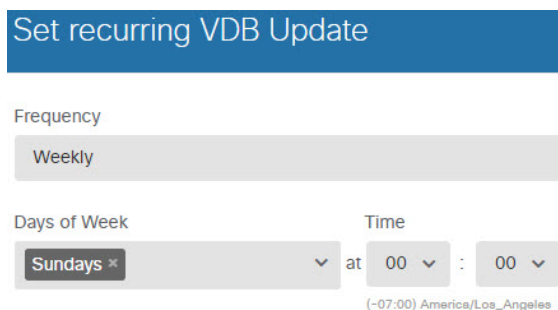
UPDATE NOW

- d) 更新スケジュールを定義します。

ネットワークに支障のない時間と頻度を選択します。また、更新をダウンロードした後、システムが自動展開を実行する点にも注意してください。これは、新しい検出プログラム

を有効化するのに必要です。このため、何らかの形で設定をすでに変更して保存した後、まだ展開していない場合は、それも展開する必要があります。

たとえば、次のスケジュールは VDB を 1 週間に 1 回、日曜日の午前 12:00（24 時間表記を使用）に更新します。



Set recurring VDB Update

Frequency

Weekly

Days of Week

Sundays

Time

at 00 : 00

(-07:00) America/Los_Angeles

e) [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 5 変更を保存します。

a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

次のタスク

この時点で、監視ダッシュボードとイベントによりユーザとアプリケーションの情報が表示され始めます。この情報を評価して不適切なパターンを特定し、許容できない使用を制限するための新しいアクセスルールを作成できます。

侵入とマルウェアに関する情報の収集を開始するには、1 つ以上のアクセスルールで侵入ポリシーとファイルポリシーを有効にする必要があります。また、これらの機能のライセンスも有効化する必要があります。

URL カテゴリに関する情報の収集を開始するには、URL フィルタリングを実装する必要があります。

脅威のブロック方法

侵入ポリシーをアクセス制御ルールに追加することにより、次世代の侵入防御システム (IPS) フィルタリングを実装できます。侵入ポリシーはネットワークトラフィックを分析し、トラ

フィックコンテンツを既知の脅威と比較します。いずれかの接続が監視対象の脅威と一致する場合、システムはその接続をドロップし、こうして攻撃を防止できます。

ネットワークトラフィックに対して侵入検査を行う前に、他のすべてのトラフィック処理が行われます。侵入ポリシーをアクセス制御ルールに関連付けると、アクセス制御ルールの条件に一致するトラフィックをシステムが通過させる前に、侵入ポリシーを使ってまずトラフィックを検査するようシステムに指示できます。

単にトラフィックを許可するルール上で侵入ポリシーを設定できます。トラフィックを信頼またはブロックするように設定したルールにインスペクションは実行されません。また、デフォルトアクションが [許可 (allow)] の場合、デフォルトアクションの一部として侵入ポリシーを設定できます。

侵入ポリシーは Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によって設計されており、侵入ルール、プリプロセッサルール状態、詳細設定が設定されています。Snort 3 をインスペクションエンジンとして使用している場合は、Talos ポリシーに基づき、独自のカスタムポリシーを作成できます。

潜在的な侵入を許可するトラフィックの検査に加え、セキュリティインテリジェンスポリシーを使用して、既知の不正 IP アドレスとのすべてのトラフィック、または既知の不正 URL へのすべてのトラフィックを先制的にブロックできます。

手順

ステップ 1 まだ有効化していない場合は、IPS ライセンスを有効化します。

侵入ポリシーとセキュリティインテリジェンスを使用するには、IPS を有効にする必要があります。現在、評価ライセンスを使用している場合は、ライセンスの評価版が有効化されています。デバイスを登録している場合、必要なライセンスを購入して、Cisco.com の Smart Software Manager アカウントに追加する必要があります。

- a) [デバイス (Device)] をクリックします。
- b) [スマートライセンス (Smart License)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

Smart License

Registered

View Configuration



- c) IPS グループで [有効化 (Enable)] をクリックします。

必要に応じて、システムはライセンスをアカウントに登録したり、評価ライセンスを有効化したりします。ライセンスが有効になっていることがグループに表示され、ボタンが [無効化 (Disable)] ボタンに変わります。

ステップ 2 1 つ以上のアクセス ルール用の侵入ポリシーを選択します。

脅威のスキャン対象となるトラフィックをどのルールで扱うかを決定します。この例では、`Inside_Outside_Rule` に侵入検査を追加します。

- a) メインメニューで [ポリシー (Policies)] をクリックします。

[アクセスコントロール (Access Control)] ポリシーが表示されていることを確認します。

- b) `Inside_Outside_Rule` 行の右側にある [アクション (Actions)] セルにマウス ポインタを合わせて編集アイコンと削除アイコンを表示させ、編集アイコン (🔧) をクリックしてルールを開きます。
- c) [アクション (Action)] に [許可 (Allow)] をまだ選択していない場合は、これを選択します。

Order	Title	Action
1 ▼	Inside_Outside_Rule	🔧 Allow ▼

- d) [侵入ポリシー (Intrusion Policy)] タブをクリックします。
- e) [侵入ポリシー (Intrusion Policy)] トグルをクリックしてから、侵入ポリシーを選択します。

ほとんどのネットワークでは、[バランスのとれたセキュリティと接続 (Balanced Security and Connectivity)] ポリシーが適しています。このポリシーは適度な侵入保護を提供し、過剰にアグレッシブ (ドロップすべきでないトラフィックがドロップされる可能性がある) でもありません。ドロップされるトラフィックが多すぎる場合は、[セキュリティを上回る接続性 (Connectivity over Security)] ポリシーを選択することにより、侵入検査を緩和できます。

アグレッシブなセキュリティが必要な場合は、[接続性を上回るセキュリティ (Security over Connectivity)] ポリシーを試してください。[最大検出 (Maximum Detection)] ポリシーは、ネットワーク インフラストラクチャ セキュリティをさらに重視したポリシーであり、運用上より大きな影響を及ぼす可能性があります。

Edit Access Rule

Order	Title	Action
1	Inside_Outside_Rule	Allow

Source/Destination Applications URLs Users **Intrusion Policy** File

INTRUSION POLICY

☒

LEVEL OF INTRUSION POLICY

Balanced Security and Connectivity

BALANCED SECURITY AND CONNECTIVITY

This policy is designed to balance overall network performance with network infrastructure security. This policy is appropriate for most networks. Select this policy for most situations where you want to apply intrusion prevention.

f) [OK]をクリックして変更を保存します。

ステップ3 (オプション)。**[ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)]**に移動し、歯車アイコンをクリックして、侵入ポリシーの syslog サーバを設定します。

侵入イベントは、アクセスコントロールルール用に設定された syslog サーバを使用しません。

ステップ4 侵入ルールデータベースの更新スケジュールを設定します。

シスコは侵入ルールデータベースの更新を定期的にリリースしています。接続をドロップすべきかどうかを判断するために、侵入ポリシーでこれが使用されます。ルールデータベースを定期的に更新してください。更新を手動でダウンロードするか、定期的なスケジュールを設定できます。次の手順では、スケジュールの設定方法を説明します。デフォルトでは、データベースの更新は無効化されているため、更新されたルールを取得するには操作が必要です。

- [the name of the device in the menu] をクリックします。[デバイス (Device)]
- [更新 (Updates)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

Updates

[View Configuration](#)



- [ルール (Rule)] グループで [設定 (Configure)] をクリックします。

Rule

2016-03-28-001-vrt

Configure

Set recurring Rule updates

UPDATE NOW



d) 更新スケジュールを定義します。

ネットワークに支障のない時間と頻度を選択します。また、更新をダウンロードした後、システムが自動展開を実行する点にも注意してください。新しいルールを有効化するには、この操作が必要です。このため、何らかの形で設定をすでに変更して保存した後、まだ展開していない場合は、それも展開する必要があります。

たとえば、次のスケジュールはルール データベースを 1 週間に 1 回、月曜日の午前 12:00 (24 時間表記を使用) に更新します。

Set recurring Rule Update

Frequency

Weekly

Days of Week

Mondays ×

Time

at 00

: 00

(-07:00) America/Los_Angeles

e) [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 5 既知の不正ホストやサイトとの接続を先制的にドロップするためのセキュリティインテリジェンス ポリシーを設定します。

セキュリティインテリジェンスを使用して、脅威だとわかっているホストやサイトとの接続をブロックすることで、接続ごとに脅威を特定するためのディープ パケット インスペクションに必要な時間を節約できます。セキュリティインテリジェンスにより、不要なトラフィックを早期にブロックして、実際に関心があるトラフィックの処理により多くのシステム時間を残すことができます。

- [デバイス (Device)] をクリックし、[更新 (Updates)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- [セキュリティ インテリジェンス フィード (Security Intelligence Feeds)] グループで [今すぐ更新 (Update Now)] をクリックします。
- または、[設定 (Configure)] をクリックして、フィードの定期更新を設定します。デフォルトの [毎時 (Hourly)] はほとんどのネットワークに適していますが、必要に応じて頻度を減らすことができます。

- d) [ポリシー (Policies)] をクリックして、[セキュリティ インテリジェンス (Security Intelligence)] ポリシーをクリックします。
- e) ポリシーをまだ有効化していない場合は、[セキュリティ インテリジェンスの有効化 (Enable Security Intelligence)] をクリックします。
- f) [ネットワーク (Network)] タブで、ブラック/ドロップリストの [+] をクリックして、[ネットワークフィード (Network Feeds)] タブにあるすべてのフィードを選択します。フィードの横にある [i] ボタンをクリックして、各フィードの説明を確認できます。

フィードが存在しないというメッセージが表示される場合は、後でもう一度試してください。フィードのダウンロードはまだ完了していません。この問題が解決しない場合は、管理 IP アドレスとインターネット間にパスがあることを確認してください。

- g) [OK] をクリックして、選択したフィードを追加します。

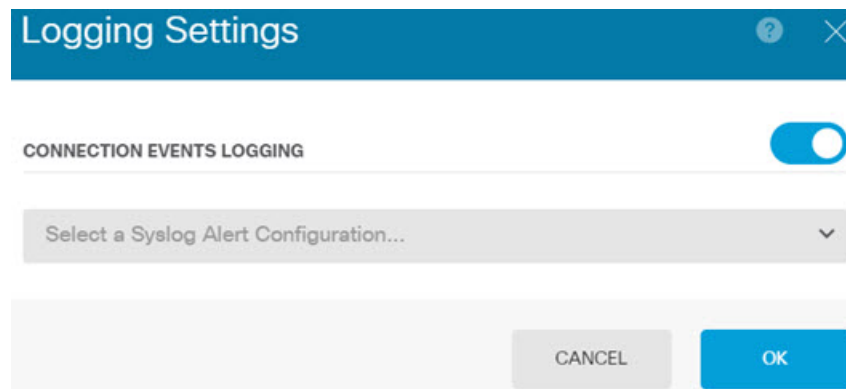
他にも不正 IP アドレスがある場合は、[+] > [ネットワーク オブジェクト (Network Objects)] をクリックして、それらのアドレスを含むオブジェクトを追加できます。リストの下部にある [新規ネットワーク オブジェクトの作成 (Create New Network Object)] をクリックして、今すぐ追加することもできます。

- h) [URL] タブをクリックし、ブラック/ドロップリストの [+] > [URL フィード (URL Feeds)] をクリックして、すべての URL フィードを選択します。[OK] をクリックして、リストに追加します。

ネットワークリストと同様に、独自の URL オブジェクトをリストに追加して、フィードに含まれていないその他のサイトをブロックできます。[+] > [URL オブジェクト (URL Objects)] をクリックします。リストの最後にある [新規 URL オブジェクトの作成 (Create New URL Object)] をクリックして、新しいオブジェクトを追加できます。

- i) ギア アイコンをクリックし、[接続イベント ログギング (Connection Events Logging)] を有効にして、一致した接続のセキュリティ インテリジェンス イベントをポリシーが生成できるようにします。[OK] をクリックして変更を保存します。

接続ログギングを有効にしない場合、ポリシーが予想どおりに機能しているかどうかを評価するために使用するためのデータを得られません。外部 syslog サーバを定義している場合はここで選択することで、そのサーバにもイベントを送信できます。



- j) 必要に応じて、各タブの [ブロックしない (Do Not Block)] リストにネットワークオブジェクトまたは URL オブジェクトを追加して、ブロックリストに対する例外を作成できます。

[ブロックしない (Do Not Block)] リストは、ホワイトリストではなく、例外リストです。例外リストにあるアドレスや URL がブロックリストにも表示されている場合、そのアドレスや URL の接続はアクセス制御ポリシーの通過を許可されます。フィードはこのようなしてブロックできますが、後で必要なアドレスやサイトがブロックされていることに気付いた場合は、例外リストを使用して、フィードを完全に削除することなく、そのブロックをオーバーライドできます。その後、それらの接続はアクセス制御、および侵入ポリシー（設定されている場合）によって評価される点に注意してください。したがって、接続に脅威が含まれている場合は、侵入検査中に特定されてブロックされます。

[アクセスおよび SI ルール (Access and SI Rules)] ダッシュボード、およびイベントビューアのセキュリティインテリジェンスビューを使用して、ポリシーによって実際にドロップされているトラフィックを特定し、[ブロックしない (Do Not Block)] リストにアドレスや URL を追加する必要があるかどうかを決めます。

ステップ 6 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

次のタスク

この時点から、侵入が特定された場合は、監視ダッシュボードおよびイベントに攻撃者、ターゲット、および脅威に関する情報が表示されます。この情報を評価して、ネットワークにさらにセキュリティ対策が必要かどうか、または使用中の侵入ポリシーのレベルを下げる必要があるかどうかを決定できます。

セキュリティインテリジェンスの場合、[アクセスおよび SI ルール (Access and SI Rules)] ダッシュボードでポリシーのヒット数を確認できます。セキュリティインテリジェンスイベントはイベントビューアでも確認できます。セキュリティインテリジェンスのブロック数は侵入の脅威情報には反映されません。これは、検査する前に、トラフィックがブロックされるためです。

マルウェアのブロック方法

ユーザは、悪意のあるソフトウェア（つまりマルウェア）をインターネットサイトや電子メールなどの通信手段から取り込んでしまうリスクに絶えずさらされています。信頼される Web

サイトでさえ、ハイジャックされて、無警戒なユーザにマルウェアを配布することがあります。Web ページには、別のソースからのオブジェクトが含まれることがあります。このオブジェクトには、イメージ、実行可能ファイル、Javascript、広告などがあります。改ざんされた Web サイトには、しばしば、外部の送信元でホストされているオブジェクトが組み込まれます。真のセキュリティとは、最初の要求だけではなく、各オブジェクトを個別に調べることです。

マルウェア防御を使用してマルウェアを検出するためにファイルポリシーを使用します。ファイル制御を実行するファイルポリシーを使用して、ファイルにマルウェアが含まれているかどうかに関係なく、特定のタイプのすべてのファイルを制御することもできます。

マルウェア防御は Secure Malware Analytics Cloud を使用して、ネットワークトラフィックで検出された潜在的なマルウェアの性質を取得します。Secure Malware Analytics Cloud にアクセスし、マルウェアルックアップを実行するため、管理インターフェイスにはインターネットへのパスが必要です。デバイスが対象ファイルを検出すると、ファイルの SHA-256 ハッシュ値を使用してファイルの性質について Secure Malware Analytics Cloud に問い合わせます。可能性のある性質は、[クリーン (clean)]、[マルウェア (malware)]、または[不明 (unknown)] (明確な判定を下せない) になります。Secure Malware Analytics Cloud に到達できない場合、性質は[不明 (unknown)] になります。

ファイルポリシーをアクセス コントロール ルールに関連付けることで、アクセス コントロール ルールの条件に一致するトラフィックを通過させる前に、接続時にファイルのインスペクションを実行するよう、システムに指示できます。

単にトラフィックを許可するルール上で侵入ポリシーを設定できます。インスペクションは、トラフィックを[信頼 (trust)] または[ブロック (block)] するよう設定されたルールでは実行されません。

手順

ステップ 1 まだ有効化していない場合は、マルウェア防御 および IPS ライセンスを有効化します。

ファイルポリシーを使用するには、侵入ポリシーに必要な IPS ライセンスに加えて、マルウェア防御を有効化する必要があります。現在、評価ライセンスを使用している場合は、それらの評価ライセンスを有効にします。デバイスを登録している場合は、必要なライセンスを購入して、それらを Cisco.com の Smart Software Manager アカウントに追加する必要があります。

- a) [デバイス (Device)] をクリックします。
- b) [スマートライセンス (Smart License)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

Smart License

Registered

View Configuration



- c) **マルウェア防御** グループで [有効化 (Enable)] をクリックし、**IPS** グループでも [有効化 (Enable)] をクリックします (まだ有効化されていない場合)。

必要に応じて、システムはライセンスをアカウントに登録したり、評価ライセンスを有効化したりします。ライセンスが有効になっていることがグループに表示され、ボタンが [無効化 (Disable)] ボタンに変わります。

ステップ 2 1つ以上のアクセス ルール用のファイル ポリシーを選択します。

マルウェア スキャンの対象となるトラフィックをどのルールで扱うかを決定します。この例では、**Inside_Outside_Rule** にファイル検査を追加します。

- a) メイン メニューで [ポリシー (Policies)] をクリックします。
[アクセスコントロール (Access Control)] ポリシーが表示されていることを確認します。
- b) **Inside_Outside_Rule** 行の右側にある [アクション (Actions)] セルにマウス ポインタを合わせて編集アイコンと削除アイコンを表示させ、編集アイコン (🔧) をクリックしてルールを開きます。
- c) [アクション (Action)] に [許可 (Allow)] をまだ選択していない場合は、これを選択します。

Order	Title	Action
1 ▼	Inside_Outside_Rule	 Allow ▼

- d) [ファイル ポリシー (File Policy)] タブをクリックします。
- e) 使用するファイル ポリシーをクリックします。

主な選択は、マルウェアと見なされるすべてのファイルをドロップする [マルウェアをすべてブロック (Block Malware All)]、または Secure Malware Analytics Cloud にクエリしてファイルの性質を判断するがブロックはしない [クラウドをすべてルックアップ (Cloud Lookup All)] です。ファイルがどのように評価されるかを確認する場合は、クラウドルックアップを使用します。ファイルの評価を適切に確認できた後で、ブロックポリシーに変更できます。

マルウェアをブロックする他のポリシーを使用することもできます。これらのポリシーをファイル制御と組み合わせて、Microsoft Office、Office、PDF ドキュメントのアップロードをブロックできます。つまり、これらのポリシーを使用すると、マルウェアをブロックするだけでなく、これらのファイルタイプがユーザから他のネットワークに送信されるのを防止できます。実際の要件に合う場合は、これらのポリシーを選択できます。

この例では、[マルウェアをすべてブロック（Block Malware All）]を選択します。

The screenshot shows the 'Edit Access Rule' configuration page for 'Inside_Outside_Rule'. The 'File Policy' tab is active, displaying a list of policies with 'Block Malware All' selected. Below this, the 'FILE EVENTS' section shows the 'Log Files' checkbox checked. The right sidebar contains a 'CONTROLS' section with a note about file policies.

- f) [ロギング（Logging）] タブをクリックし、[ファイル イベント（File Events）] の下で [ログ ファイル（Log Files）] が選択されていることを確認します。

デフォルトでは、ファイル ポリシーを選択すると常にファイル ロギングが有効になります。イベントやダッシュボードにファイルとマルウェアの情報を表示させるには、ファイル ロギングを有効にする必要があります。

FILE EVENTS

☒ Log Files

- g) [OK] をクリックして変更を保存します。

ステップ 3 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開（Deploy Changes）] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開（Deploy Now）] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

次のタスク

この時点から、ファイルまたはマルウェアが送信される場合に、監視ダッシュボードおよびイベントにファイル タイプやファイルおよびマルウェアのイベントに関する情報が表示されます。この情報を評価して、ファイル伝送に関するセキュリティ上の予防策をネットワークにさらに追加すべきかどうか判断できます。

アクセプタブルユース ポリシー (URL フィルタリング) の実装方法

ネットワークのアクセプタブルユース ポリシーを設定できます。アクセプタブルユース ポリシーは、組織で適切とされるネットワーク アクティビティと、不適切とされるアクティビティを区別します。通常、これらのポリシーはインターネットの使用に注目し、生産性の維持、法的責任の回避（敵対的でない作業場所の維持など）、Web トラフィックの制御を目的としています。

URL フィルタリングを使用して、アクセス ポリシーと共にアクセプタブルユース ポリシーを定義できます。広範なカテゴリ（ギャンブルなど）でフィルタリングできるため、ブロックする Web サイトを個別に識別する必要はありません。カテゴリ照合の場合は、許可またはブロックするサイトの関連レピュテーションも指定できます。該当するカテゴリとレピュテーションの URL をユーザが参照しようとする、セッションがブロックされます。

カテゴリおよびレピュテーションデータを使用することで、ポリシーの作成と管理も簡素化されます。この方法では、システムが Web トラフィックを予期されるとおりに制御することが保証されます。さらに、シスコの脅威インテリジェンスは常に更新されて新しい URL が追加され、既存の URL も新しいカテゴリとリスクに更新されるため、システムでは常に最新情報を使用して要求対象の URL がフィルタ処理されます。ただし、セキュリティに対する脅威（マルウェア、スパム、ボットネット、スパム、フィッシングなど）を表す悪意のあるサイトが現れては消えるペースが早すぎて、新しいポリシーを更新して導入するのが間に合わないこともあります。

次の手順で、URL フィルタリングを使用してアクセプタブルユース ポリシーを実装する方法について説明します。この例では、複数のカテゴリのあらゆるレピュテーションのサイト、高リスクのソーシャルネットワーキング サイト、および未分類サイトである `badsite.example.com` をブロックします。

手順

ステップ 1 [URL] ライセンスを有効にしていない場合は、有効にします。

URL カテゴリとレピュテーションの情報を使用する場合、またはこれらの情報をダッシュボードとイベントに表示する場合には、URL ライセンスを有効にする必要があります。現在、評価ライセンスを使用している場合は、ライセンスの評価版が有効化されています。デバイスを登録している場合、必要なライセンスを購入して、Cisco.com の Smart Software Manager アカウントに追加する必要があります。

- a) [デバイス (Device)] をクリックします。
- b) [スマートライセンス (Smart License)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。



- c) [URL] グループの [有効化 (Enable)] をクリックします。

必要に応じて、システムはライセンスをアカウントに登録したり、評価ライセンスを有効化したりします。ライセンスが有効になっていることがグループに表示され、ボタンが[無効化 (Disable)] ボタンに変わります。

ステップ2 URL フィルタリング アクセス制御ルールを作成します。

ブロックルールを作成する前に、まずユーザが表示しているサイトのカテゴリを確認します。その場合、許可するカテゴリ（金融など）に [Allow] アクションを設定したルールを作成できます。すべての Web 接続のインスペクションを実行して、URL がこのカテゴリに属しているかどうかを判断する必要があるため、金融以外のサイトのカテゴリ情報も取得します。

ただし、ブロック対象とすることがすでに判明している URL カテゴリが存在する場合があります。ブロッキングポリシーでもインスペクションが強制されるため、ブロックされるカテゴリだけでなく、ブロックされないカテゴリへの接続に関するカテゴリ情報も取得します。

- a) メインメニューで [ポリシー (Policies)] をクリックします。
[アクセス コントロール (Access Control)] ポリシーが表示されていることを確認します。
- b) [+] をクリックして新しいルールを追加します。
- c) 順序、タイトル、アクションを設定します。
 - [順序 (Order)] : デフォルトで、新しいルールはアクセスコントロールポリシーの最後に追加されます。ただし、同じ送信元/宛先その他の基準に一致するルールよりも前（上）にこのルールを配置する必要があります。こうしないと、このルールは決して一致しません（各接続はテーブル内で最初に一致する 1 つのルールにのみ一致します）。このルールの場合、同じ [送信元/宛先 (Source/Destination)] を、デバイスの初期設定時に作成された `Inside_Outside_Rule` として使用します。他のルールをすでに作成している場合もあります。アクセス制御の効率を最大にするには、接

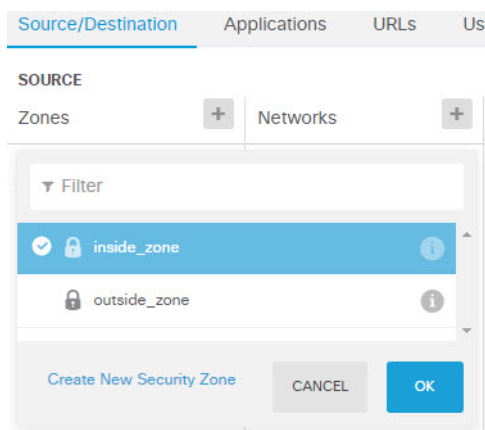
続の許可/ドロップを迅速に決定できるように特定のルールを早く適用するのが最善です。この例では、この目的でルールの順序として [1] を選択します。

- [タイトル (Title)] : ルールに Block_Web_Sites などのわかりやすい名前を付けます。
- [アクション (Action)] : [ブロック (Block)] を選択します。

Order	Title	Action
1	Block_Web_Sites	 Block

- d) [送信元または送信先 (Source/Destination)] タブで、[送信元 (Source)] > [ゾーン (Zones)] の順に [+] をクリックし、inside_zone を選択して、[ゾーン (zones)] ダイアログボックスで [OK] をクリックします。

条件の追加も同じ方法です。[+] をクリックすると表示される小さいダイアログボックスで、追加する項目をクリックします。複数の項目をクリックしたり、選択されている項目をクリックして選択解除したりすることができます。チェックマークは選択されている項目を示します。ただし [OK] ボタンをクリックするまではポリシーには何も追加されません。単純に項目を選択するだけでは十分ではありません。



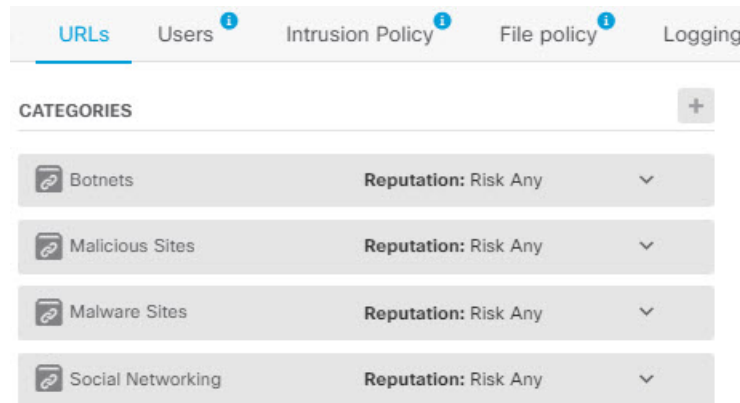
- e) 同じ手法で、[宛先 (Destination)] > [ゾーン (Zones)] に outside_zone を選択します。

Source/Destination	Applications	URLs	Users	Intrusion Policy	File policy	Logging
SOURCE Zones  Networks  ☒ inside_zone ☐ outside_zone Create New Security Zone CANCEL OK						
					DESTINATION Zones  ☐ inside_zone ☒ outside_zone	

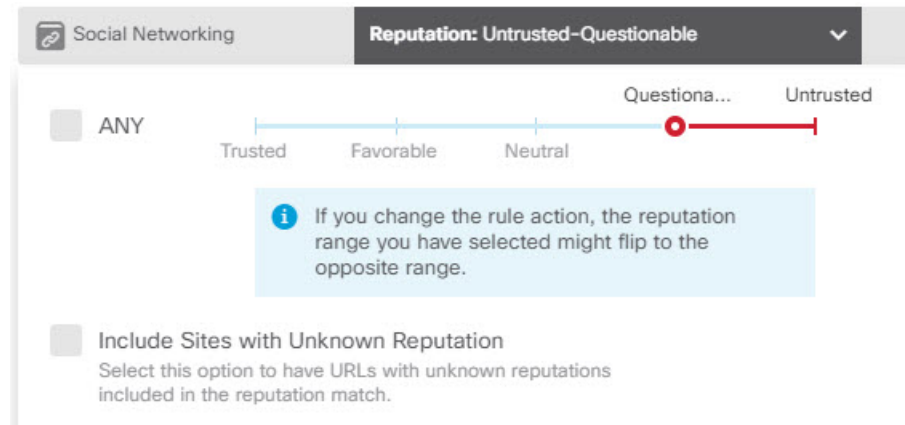
- f) [URL] タブをクリックします。
- g) [カテゴリ (Categories)] の [+] をクリックし、完全にブロックするカテゴリまたは部分的にブロックするカテゴリを選択します。

この例では、ボットネット、悪意のあるサイト、マルウェアサイト、およびソーシャルネットワークキングを選択します。他にもブロックできるカテゴリがあります。ブロック

したいサイトがわかっている場合、そのカテゴリがわからない場合は、[URL to Check] フィールドに URL を入力し、[Go] をクリックします。ルックアップ結果を示す Web サイトが表示されます。



- h) レピュテーションに影響されるブロックを [Social Networking] カテゴリに実装するには、そのカテゴリの [Reputation: Risk Any] をクリックして、[Any] の選択を解除してからスライダを [Questionable] に移動します。閉じるには、スライダをクリックします。



レピュテーションスライダの左側に許可されるサイトが示され、右側にブロックされるサイトが示されます。この場合、レピュテーションが [Questionable] と [Untrusted] の範囲内にあるソーシャル ネットワーキング サイトのみがブロックされます。したがって、ユーザは一般に利用されるソーシャル ネットワーキング サイト（リスクが少ないサイト）にはアクセスできます。

レピュテーションが不明な URL をレピュテーション一致に含めるには、[レピュテーションが不明なサイトを含める（Include Sites with Unknown Reputation）] オプションを選択します。通常、新しいサイトは評価されていません。また、その他の理由でサイトのレピュテーションが不明である（または判断できない）場合もあります。

レピュテーションを使用して、許可するカテゴリ内のサイトを選択してブロックできます。

- i) カテゴリ リストの左側にある [URL (URLS)] リストの横の [+] をクリックします。

- j) ポップアップダイアログボックスの下部で、[新規URLの作成 (Create New URL)] リンクをクリックします。
- k) 名前と URL の両方に **badsite.example.com** を入力し、[追加 (Add)]、[OK] の順にクリックしてオブジェクトを作成します。

オブジェクトに URL と同じ名前を付けるか、またはオブジェクトに別の名前を付けることができます。URL では、URL のプロトコル部分を含めず、サーバ名だけを追加します。

New URL Object

Name

badsite.example.com

Description

URL

badsite.example.com

- l) 新しいオブジェクトを選択して [OK] をクリックします。

ポリシーの編集集中に新しいオブジェクトを追加すると、リストにオブジェクトが追加されます。新しいオブジェクトは自動的に選択されません。

Order	Title	Action
1	Block_Web_Sites	Block

Source/Destination
Applications
URLs
Users
Intrusion Policy
File policy
Logging

URLS

badsite.example.com

CATEGORIES

Botnets	Reputation: Risk Any
Malicious Sites	Reputation: Risk Any
Malware Sites	Reputation: Risk Any
Social Networking	Reputation: Questionable

- m) [ロギング (Logging)] タブをクリックし、[ログアクションの選択 (Select Log Action)] > [接続の開始時と終了時 (At Beginning and End of Connection)] の順に選択します。

Web カテゴリ ダッシュボードおよび接続イベントにカテゴリおよびレピュテーションの情報を表示するには、ロギングを有効化する必要があります。

- n) [OK] をクリックしてルールを保存します。

ステップ3 （オプション）。URL フィルタリングの設定を指定します。

[URL] ライセンスを有効にすると、Web カテゴリ データベースの更新が自動的に有効になります。通常、データが更新されるのは 1 日に 1 度ですが、システムは 30 分間隔で更新を確認します。何らかの理由でこれらの更新を実行しない場合には、オフにできます。

- [the name of the device in the menu] をクリックします。[デバイス（Device）]
- [システム設定（System Settings）]>[トラフィック設定（Traffic Settings）]>[URL フィルタリングの設定（URL Filtering Preferences）] をクリックします。
- [URL クエリソース（URL Query Source）] で、推奨オプションの [ローカルデータベースと Cisco Cloud（Local Database and Cisco Cloud）] を選択します。

インストールされている URL データベースにサイトのカテゴリがない場合、Cisco Cloud にカテゴリが含まれている可能性があります。クラウドからカテゴリとレピュテーションが返されると、カテゴリベースのルールを URL 要求に正しく適用できます。メモリ制限によりインストールされる URL データベースが小さいローエンドのシステムでは、このオプションを選択することが重要です。

あるいは、ルックアップをローカルデータベースまたは Cisco Cloud に制限できます。

- 妥当な [URL 存続可能時間（URL Time to Live）]（24 時間など）を選択します。
- [Save] をクリックします。

ステップ4 変更を保存します。

- Web ページの右上にある [変更の展開（Deploy Changes）] アイコンをクリックします。



- [今すぐ展開（Deploy Now）] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

次のタスク

この時点で、URL カテゴリとレピュテーション、およびドロップされた接続に関する情報が監視ダッシュボードとイベントに表示され始めます。この情報を評価して、URL フィルタリングによって好ましくないサイトのみがドロップされているかどうか、または特定カテゴリのレピュテーション設定を緩和する必要があるかどうかを判断できます。

Web サイトのカテゴリとレピュテーションに基づいて Web サイトへのアクセスをブロックすることを、ユーザに対して事前に通知することを検討してください。

アプリケーションの使用を制御する方法

ブラウザ ベースのアプリケーション プラットフォームの場合も、あるいは企業ネットワーク内外の伝送として Web プロトコルを使用するリッチ メディア アプリケーションの場合も、Web は企業内でアプリケーションを配信するユビキタス プラットフォームとなりました。

Threat Defense は接続を検査し、使用されているアプリケーションを判別します。これにより、特定の TCP/UDP ポートを対象とするだけでなく、アプリケーションを対象としたアクセス制御ルールを記述することが可能になります。したがって、複数の Web ベースアプリケーションが同じポートを使用する場合でも、それらを選択的にブロックまたは許可できます。

特定のアプリケーションを選択して許可またはブロックできることに加えて、種類、カテゴリ、タグ、リスク、ビジネスとの関連性などに基づきルールを記述することもできます。たとえば、リスクが高くビジネス関連性が低いすべてのアプリケーションを識別してブロックするアクセス制御ルールを作成できます。ユーザがこのようなアプリケーションのいずれかを使用しようとする、セッションがブロックされます。

シスコは、システムや脆弱性データベース (VDB) の更新プログラムにより、追加のアプリケーション検出機能を頻繁に更新および追加しています。これにより、リスクの高いアプリケーションをブロックするルールが新しいアプリケーションに自動的に適用され、手動でルールを更新する必要がなくなります。

この事例では、[アノニマイザー/プロキシ (anonymizer/proxy)] カテゴリに属するすべてのアプリケーションをブロックします。

始める前に

この事例では、[ネットワーク トラフィックを調べる方法 \(57 ページ\)](#)にある事例をすでに完了したことを想定しています。前提となる事例では、アプリケーションダッシュボードで分析可能なアプリケーション使用状況に関する情報を収集する方法について説明しました。実際にどんなアプリケーションが使用されているか理解することにより、アプリケーションベースのルールを効率的に設計できます。その事例では、VDB 更新をスケジュールする方法についても説明しました（したがってここでは繰り返し説明しません）。アプリケーションが正しく識別されるように、VDB を定期的に更新してください。

手順

ステップ 1 アプリケーションベースのアクセス制御ルールを作成します。

- a) メイン メニューで [ポリシー (Policies)] をクリックします。

[アクセス コントロール (Access Control)] ポリシーが表示されていることを確認します。

- b) [+] をクリックして新しいルールを追加します。
- c) 順序、タイトル、アクションを設定します。

- [順序 (Order)] : デフォルトで、新しいルールはアクセス コントロールポリシーの最後に追加されます。ただし、同じ送信元/宛先その他の基準に一致するルールよりも前 (上) にこのルールを配置する必要があります。こうしないと、このルールは決して一致しません (各接続はテーブル内で最初に一致する 1 つのルールにのみ一致します)。このルールの場合、同じ [送信元/宛先 (Source/Destination)] を、デバイスの初期設定時に作成された **Inside_Outside_Rule** として使用します。他のルールをすでに作成している場合もあります。アクセス制御の効率を最大にするには、接続の許可/ドロップを迅速に決定できるように特定のルールを早く適用するのが最善です。この例では、この目的でルールの順序として [1] を選択します。
- [タイトル (Title)] : ルールに **Block_Anonymizers** などの意味のある名前を付けます。
- [アクション (Action)] : [ブロック (Block)] を選択します。

Order	Title	Action
1	Block_Anonymizers	Block

- d) [送信元または送信先 (Source/Destination)] タブで、[送信元 (Source)] > [ゾーン (Zones)] の順に [+] をクリックし、**inside_zone** を選択して、[ゾーン (zones)] ダイアログボックスで [OK] をクリックします。

- e) 同じ手法で、[宛先 (Destination)] > [ゾーン (Zones)] に **outside_zone** を選択します。

Source/Destination	Applications	URLs	Users	Intrusion Policy	File policy	Logging
SOURCE						
Zones	+	Networks	+	Ports	+	DESTINATION
inside_zone		ANY		ANY		outside_zone

- f) [アプリケーション (Applications)] タブをクリックします。
- g) [アプリケーション (Applications)] で [+] をクリックしてから、ポップアップ ダイアログボックスの下部にある [高度なフィルタ (Advanced Filter)] リンクをクリックします。

アプリケーションフィルタ オブジェクトを事前に作成してこの [アプリケーションフィルタ (Application Filters)] リストでそれらを選択することもできますが、別の方法として、アクセス制御ルールで基準を直接指定し、オプションでその基準をフィルタ オブジェクトとして保存することもできます。単一のアプリケーションに関するルールを記述している場合を除き、[高度なフィルタ (Advanced Filter)] ダイアログボックスでアプリケーションを見つけて適切な基準を作成する方が簡単です。

基準を選択すると、ダイアログボックスの下部にある [アプリケーション (Applications)] リストが更新され、その基準に一致するアプリケーションが正確に表示されます。作成しようとしているルールは、これらのアプリケーションに適用されます。

このリストをよく見てください。たとえば、リスクが非常に高いすべてのアプリケーションをブロックしようとする場合があります。ただし、本書を作成している時点で、TFPT は非常に高リスクに分類されています。ほとんどの組織は、このアプリケーションをブロックすることを希望しません。さまざまなフィルタ条件を試して、選択に一致するアプリケーションを確認するには時間がかかります。これらのリストは VDB 更新のたびに変更される可能性があることに注意してください。

この例では、[カテゴリ (Categories)] リストから [アノマイザー/プロキシ (anonymizers/proxies)] を選択します。

Filter Applications ? RESET FILTER

Risks

Any

Business Relevance

Any

Types

Any

Categories

1 selected x

Search Categories

anonymizer/proxy

mobile application

VoIP

web services provider

e-commerce

Tags

Any selected

Search Tags

displays ads

not work related

high bandwidth

file sharing/transfer

share media

Filter the list of applications 33 Applications

Application	Description
All applications that match the filters (33)	
ASProxy	ASProxy open-source web proxy
After School	Anonymous messaging app.
Avocent	Registered with IANA on port 1078 tcp/udp.
Avoidr	Web based proxy compatible with many popular social networking sites.

- h) [高度なフィルタ (Advanced Filter)] ダイアログボックスで [Add (追加)] をクリックします。

フィルタが追加され、[アプリケーション (Applications)] タブに表示されます。

Source/Destination Applications URLs Users Intrusion Policy

APPLICATIONS SAVE AS FILTER +

Categories: anonymizer/proxy

- i) [ロギング (Logging)] タブをクリックし、[ログアクションの選択 (Select Log Action)] > [接続の開始時と終了時 (At Beginning and End of Connection)] の順に選択します。

このルールによってブロックされる接続の情報を取得するには、ロギングを有効化する必要があります。

- j) [OK] をクリックしてルールを保存します。

ステップ 2 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ステップ 3 [モニタリング (Monitoring)] をクリックして、結果を評価します。

ドロップされた接続があれば、[ネットワークの概要 (Network Overview)] ダッシュボードの [アプリケーション (Applications)] ウィジェットにそれが表示されるようになります。ドロップされたアプリケーションだけに注目するには [すべて/拒否/許可 (All/Denied/Allowed)] ドロップダウン オプションを使用します。

アプリケーションに関する情報は、[Webアプリケーション (Web Applications)] ダッシュボードで検索することもできます。[アプリケーション (Applications)] ダッシュボードにプロトコル関連の結果が表示されます。いずれかのユーザがこれらのアプリケーションの使用を試みた場合、アイデンティティ ポリシーが有効で認証が必要になっていれば、接続を試みたユーザとアプリケーションを関連させることができます。

サブネットの追加方法

デバイス上に利用可能なインターフェイスが存在する場合は、それをスイッチ（または別のルータ）に有線接続して別のサブネットにサービスを提供することができます。

さまざまな理由で、サブネットを追加する必要があることがあります。この事例では、次の典型的なシナリオを扱います。

- サブネットは、プライベート ネットワーク 192.168.2.0/24 を使用する内部ネットワークです。
- ネットワークのインターフェイスにはスタティック アドレス 192.168.2.1 が指定されています。この例では、この物理インターフェイスはネットワーク専用です。別のオプションとして、すでに有線接続されたインターフェイスを使用し、新しいネットワーク用のサブインターフェイスを作成する方法もあります。
- デバイスは DHCP を使用し、アドレス プール 192.168.2.2 ~ 192.168.2.254 を使用して、ネットワーク上のワークステーションにアドレスを提供します。
- 他の内部ネットワーク、および外部ネットワークに対するネットワークアクセスは許可されます。外部ネットワークに向かうトラフィックは NAT を使用してパブリック アドレスを取得します。



- (注) この例では、未使用のインターフェイスがブリッジグループに含まれていないことを想定しています。現在、これがブリッジグループのメンバーとなっている場合は、ブリッジグループから削除した後で、この手順を進める必要があります。

始める前に

新しいサブネット用に、ネットワーク ケーブルをインターフェイスおよびスイッチに物理的に接続します。

手順

ステップ 1 インターフェイスを設定します。

- a) [デバイス (Device)] をクリックし、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックし、次にインターフェイスタイプをクリックして、インターフェイスのリストを表示します。
- b) 有線接続したインターフェイスの行の右側にある [アクション (Actions)] セルにマウスポインタを合わせ、編集アイコン (🔧) をクリックします。
- c) 基本的なインターフェイス プロパティを設定します。
 - [名前 (Name)] : インターフェイスの一意の名前。 ([Inside_2] など)。
 - [モード (Mode)] : [ルーテッド (Routed)] を選択します。
 - [ステータス (Status)] : ステータストグルをクリックして、インターフェイスを有効化します。
 - [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブ : [種類 (Type)] に [静的 (Static)] を選択して、「192.168.2.1/24」と入力します。

Edit Physical Interface

Interface Name: Mode: Status: ☒

Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces. [Learn More](#)

Description:

IPv4 Address | IPv6 Address | Advanced Options

Type:

IP Address and Subnet Mask: /

e.g. 192.168.5.15/17 or 192.168.5.15/255.255.128.0

- d) [保存 (Save)] をクリックします。

インターフェイスの一覧に、更新されたインターフェイスの状態と設定された IP アドレスが表示されます。

GigabitEthernet1/5	inside_2	☒	Routed	192.168.2.1	STATIC

ステップ 2 インターフェイスの DHCP サーバを設定します。

- [the name of the device in the menu] をクリックします。[デバイス (Device)]
- [システム設定 (System Settings)] > [DHCPサーバ (DHCP Server)] をクリックします。
- [DHCP サーバ (DHCP Server)] タブをクリックします。

このテーブルには、既存のすべての DHCP サーバが一覧表示されます。デフォルト設定を使用している場合は、この一覧に内部インターフェイス用のものが 1 つ含まれます。

- テーブルの上の [+] をクリックします。
- サーバのプロパティを設定します。
 - [DHCP サーバを有効にする] : サーバを有効にするにはこのトグルをクリックします。
 - [インターフェイス (Interface)] : DHCP サービスを提供するインターフェイスを選択します。この例では inside_2 を選択します。
 - [アドレスプール (Address Pool)] : サーバがネットワーク上のデバイスに提供できるアドレス。「192.168.2.2-192.168.2.254」を入力します。ネットワークアドレス (.0)、インターフェイスアドレス (.1)、およびブロードキャストアドレス (.255) は含めないでください。また、ネットワーク上のデバイスにスタティックアドレスが必要な場合は、プールからそれらのアドレスを除外します。プールは連続するアドレスから

なる単一の範囲である必要があるため、スタティックアドレスを選択する際にはこの範囲の先頭または末尾から選択します。

- f) [追加 (Add)] をクリックします。

#	INTERFACE	ENABLED DHCP SERVER	ADDRESS POOL
1	inside	Enabled	192.168.1.5-192.168.1.254
2	inside_2	Enabled	192.168.2.2-192.168.2.254

ステップ3 インターフェイスを内部セキュリティゾーンに追加します。

インターフェイスのポリシーを作成するには、インターフェイスがセキュリティゾーンに属している必要があります。セキュリティゾーン用のポリシーを作成します。このようにすると、ゾーン内でインターフェイスを追加または削除したときに、インターフェイスに適用されるポリシーが自動的に変更されます。

- メインメニューで [オブジェクト (Objects)] をクリックします。
- コンテンツテーブルから [セキュリティゾーン (Security Zones)] を選択します。
- [inside_zone (inside_zone)] オブジェクトの行の右側にある [アクション (Actions)] セルにマウスポインタを合わせ、編集アイコン (🔧) をクリックします。
- [インターフェイス (Interfaces)] の下で [+] をクリックし、inside_2 インターフェイスを選択して、インターフェイスの一覧で [OK] をクリックします。

- e) [保存 (Save)] をクリックします。

Security Zones			
3 objects			
#	NAME	MODE	INTERFACES
1	inside_zone	Routed	inside, inside_2
2	outside_zone	Routed	outside

ステップ 4 内部ネットワーク間のトラフィックを許可するアクセス制御ルールを作成します。

どのインターフェイス間でも、トラフィックは自動的に許可されません。必要なトラフィックを許可するためのアクセス制御（コントロール）ルールを作成する必要があります。唯一の例外は、アクセス制御ルールのデフォルトアクションでトラフィックを許可した場合です。この例では、デバイスセットアップウィザードで設定されるブロック デフォルトアクションを保持しているものと想定します。したがって、内部インターフェイス間のトラフィックを許可するルールを作成する必要があります。このようなルールをすでに作成済みの場合は、この手順をスキップしてください。

- a) メインメニューで [ポリシー（Policies）] をクリックします。

[アクセスコントロール（Access Control）] ポリシーが表示されていることを確認します。

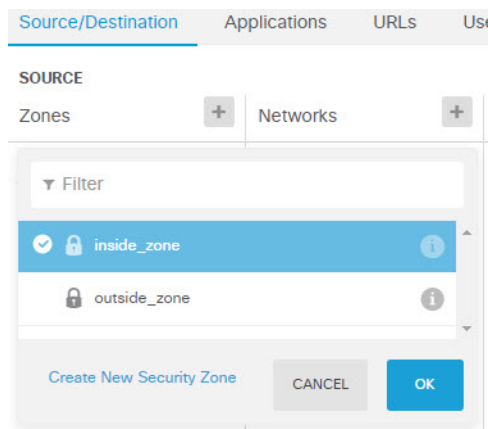
- b) [+] をクリックして新しいルールを追加します。

- c) 順序、タイトル、アクションを設定します。

- [順序（Order）]：デフォルトで、新しいルールはアクセス コントロール ポリシーの最後に追加されます。ただし、同じ送信元/宛先その他の基準に一致するルールよりも前（上）にこのルールを配置する必要があります。こうしないと、このルールは決して一致しません（各接続はテーブル内で最初に一致する 1 つのルールにのみ一致します）。このルールの場合、一意の送信元/宛先基準を使用しているため、ルールを一覧の最後に追加しても構いません。
- [タイトル（Title）]：ルールに Allow_Inside_Inside などの意味のある名前を付けます。
- [アクション（Action）]：[許可（Allow）] を選択します。

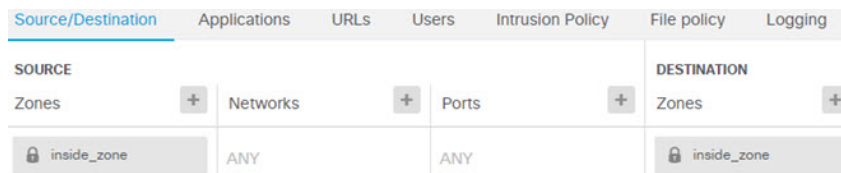
Order	Title	Action
4 ▼	Allow_Inside_Inside	 Allow ▼

- d) [送信元または送信先（Source/Destination）] タブで、[送信元（Source）]>[ゾーン（Zones）] の順に [+] をクリックし、inside_zone を選択して、[ゾーン（zones）] ダイアログボックスで [OK] をクリックします。



- e) 同じ手法で、**[宛先 (Destination)]** > **[ゾーン (Zones)]** に `inside_zone` を選択します。

送信元および宛先に同じゾーンを選択するには、セキュリティ ゾーンに 2 つ以上のインターフェイスが含まれている必要があります。



- f) (オプション) 侵入およびマルウェアの検査を設定します。

内部インターフェイスは信頼済みゾーンにありますが、ユーザがラップトップをネットワークに接続することがよくあります。したがって、ユーザはそれと知らずに、外部ネットワークや Wi-Fi ホットスポットからネットワーク内部に脅威を持ち込む可能性があります。このため、内部ネットワーク間でやり取りされるトラフィックに対して侵入やマルウェアのスキャンを実行するのが適切でしょう。

次を行うことを検討します。

- **[侵入ポリシー (Intrusion Policy)]** タブをクリックし、侵入ポリシーを有効化します。スライダを使用して、**[バランスのとれたセキュリティと接続 (Balanced Security and Connectivity)]** ポリシーを選択します。
 - **[ファイルポリシー (File Policy)]** タブをクリックして、**[すべてのマルウェアをブロックする (Block Malware All)]** ポリシーを選択します。
- g) **[ロギング (Logging)]** タブをクリックし、**[ログアクションの選択 (Select Log Action)]** > **[接続の開始時と終了時 (At Beginning and End of Connection)]** の順に選択します。
- このルールに一致する接続に関する情報を取得するには、ロギングを有効化する必要があります。ロギングにより、ダッシュボードに統計が追加され、イベントビューアにイベントが表示されます。
- h) **[OK]** をクリックしてルールを保存します。

ステップ 5 必要なポリシーが新しいサブネット用に定義されていることを確認します。

インターフェイスを `inside_zone` セキュリティゾーンに追加すると、`inside_zone` の既存のすべてのポリシーが新しいサブネットに自動的に適用されます。ただし、時間をかけてポリシーを検査し、ポリシーをさらに追加する必要がないことを確認してください。

デバイスの初期設定を完了すると、次のポリシーがすでに適用されているはずです。

- [アクセス制御 (Access Control)] : `Inside_Outside_Rule` は新しいサブネットと外部ネットワークの間のすべてのトラフィックを許可します。前述の事例に従って設定した場合は、ポリシーにより侵入/マルウェア検査も提供されます。新しいネットワークと外部ネットワークの間の一部のトラフィックを許可するルールを設定する必要があります。そうしないと、ユーザはインターネットその他の外部ネットワークにアクセスできません。
- [NAT] : `InsideOutsideNATrule` は外部インターフェイスに向かうインターフェイスに適用され、インターフェイス PAT を適用します。このルールを保持した場合、新しいネットワークから外部に向かうトラフィックには、外部インターフェイスの IP アドレスで一意的なポートに変換された IP アドレスが指定されます。外部インターフェイスに向かうすべてのインターフェイス (または `inside_zone` インターフェイス) に適用されるルールがない場合は、この時点でルールを作成する必要があるかもしれません。
- [アイデンティティ (Identity)] : デフォルトのアイデンティティ ポリシーは存在しません。ただし、前述の事例に従って設定した場合は、新しいネットワークの認証を要求するアイデンティティ ポリシーがすでに設定されているはずです。適用されるアイデンティティポリシーがなく、新規ネットワークのユーザベース情報が必要な場合は、新しいポリシーを作成します。

ステップ 6 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

次のタスク

新規サブネットのワークステーションが DHCP を使用して IP アドレスを取得していることと、そのワークステーションが他の内部ネットワークおよび外部ネットワークに到達できることを確認します。監視ダッシュボードとイベントビューアを使用して、ネットワーク使用状況进行评估します。

ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法

脅威に対する防御 デバイスは通常、アクティブなファイアウォールおよびIPS（侵入防御システム）セキュリティデバイスとして展開されます。デバイスの中核的機能は、ネットワークに対するアクティブな保護を提供し、不必要な接続や脅威を排除することにあります。

ただし、システムはパッシブモードで展開することもでき、その場合、デバイスは監視対象のスイッチポート上のトラフィックだけを分析します。このモードは、主にデモやテスト目的で使用されます。そうすることで、デバイスをアクティブなファイアウォールとして展開する前にそのデバイスに慣れることができます。パッシブ展開を使用すると、ネットワーク上に現れる脅威の種類（ユーザが参照している URL カテゴリなど）をモニタできます。

パッシブモードは、通常はデモやテスト目的で使用しますが、防御のないIDS（侵入検知システム）など、必要なサービスが提供される場合は、実稼働環境でパッシブモードを使用することもできます。パッシブ インターフェイスをアクティブなファイアウォールのルーテッド インターフェイスと混在させることで、組織が必要とする的確なサービスの組み合わせを提供できます。

次の手順では、限られた数のスイッチポートからのトラフィックを分析するために、システムをパッシブに展開する方法を説明します。



(注) この例は、ハードウェア 脅威に対する防御 デバイス向けです。Threat Defense Virtual にパッシブモードを使用することもできますが、ネットワークの設定は異なります。詳細は、[Threat Defense Virtual パッシブインターフェイスのVLANの設定（361 ページ）](#)を参照してください。それ以外の場合、Threat Defense Virtual にはこの手順が適用されます。

始める前に

次の手順は、内部インターフェイスと外部インターフェイスに接続し、デバイスの初期セットアップウィザードが完了していることを前提としています。パッシブ展開の場合でも、システムデータベースの更新をダウンロードするためにインターネットに接続する必要があります。また、Device Manager を開くために管理インターフェイスにも接続できる必要があります。これは、内部ポートまたは管理ポートへの直接接続を介して可能です。

この例では、**[ポリシー（Policies）] > [侵入（Intrusion）]** ページで、侵入ポリシーの syslog を有効にしていることも前提としています。

手順

ステップ 1 スイッチ ポートを SPAN（スイッチド ポート アナライザ）ポートとして設定し、送信元インターフェイスのモニタリング セッションを設定します。

次の例では、Cisco Nexus 5000 シリーズ スイッチの 2 つの送信元インターフェイスに SPAN ポートとモニタリングセッションを設定します。異なる種類のスイッチを使用している場合は、必要なコマンドが異なることがあります。

```
switch(config)# interface Ethernet1/48
switch(config-if)# switchport monitor
switch(config-if)# exit
switch(config)# monitor session 1
switch(config-monitor)# source interface ethernet 1/7
switch(config-monitor)# source interface ethernet 1/8
switch(config-monitor)# destination interface ethernet 1/48
switch(config-monitor)# no shut
```

確認するには、次の手順に従います。

```
switch# show monitor session 1 brief
      session 1
-----
type           : local
state          : up
source intf    :
    rx         : Eth1/7          Eth1/8
    tx         : Eth1/7          Eth1/8
    both       : Eth1/7          Eth1/8
source VSANs   :
destination ports : Eth1/48

Legend: f = forwarding enabled, l = learning enabled
```

ステップ 2 脅威に対する防御 インターフェイスをスイッチの SPAN ポートに接続します。

脅威に対する防御 デバイス上の現在未使用のポートを選択することをお勧めします。スイッチの設定例に基づいて、スイッチのイーサネット 1/48 にケーブルを接続します。これはモニタリングセッションの宛先インターフェイスです。

ステップ 3 脅威に対する防御 インターフェイスをパッシブモードで設定します。

a) [デバイス (Device)] をクリックし、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックし、[インターフェイス (Interfaces)] または [EtherChannels] をクリックします。

b) 編集する物理インターフェイスまたは EtherChannel の編集アイコン (🔧) をクリックします。

現在使用されていないインターフェイスを選択します。使用中のインターフェイスをパッシブインターフェイスに変換する場合は、最初にセキュリティゾーンからインターフェイスを削除し、そのインターフェイスを使用する他のすべての設定を削除する必要があります。

c) [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 (🔴) に設定します。

d) 以下を設定します。

- [インターフェイス名 (Interface Name)] : インターフェイスの名前 (最大 48 文字)。英字は小文字でなければなりません。たとえば、**monitor** などです。

- [モード (Mode)] : [パッシブ (Passive)] を選択します。

Interface Name	Mode	Status
monitor	Passive	☒

- e) [OK] をクリックします。

ステップ 4 インターフェイスのパッシブ セキュリティ ゾーンを作成します。

- a) [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [セキュリティ ゾーン (Security Zones)] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) オブジェクトの名前を入力し、任意で説明を入力します。例、**passive_zone**。
- d) [モード (Mode)] で [パッシブ (Passive)] を選択します。
- e) [+] をクリックして、パッシブ インターフェイスを選択します。

Name
passive_zone

Description

Mode
☐ Routed ☒ Passive

Interfaces
+
monitor

- f) [OK] をクリックします。

ステップ 5 パッシブ セキュリティ ゾーン用の 1 つ以上のアクセス制御ルールを設定します。

作成するルールの数と種類は、収集する情報によって異なります。たとえば、IDS（侵入検知システム）としてシステムを設定する場合は、割り当てられた侵入ポリシーを設定した [許可 (Allow)] ルールが少なくとも 1 つは必要です。URL カテゴリ データを収集する場合は、URL カテゴリの仕様を含むルールが少なくとも 1 つは必要です。

[ブロック (Block)] ルールを作成して、ルーテッド インターフェイスでアクティブにブロックされる接続を確認できます。インターフェイスがパッシブなので、それらの接続は実際にはブロックされませんが、システムによるネットワーク上のトラフィックの調整方法は明確に確認できます。

次の使用例では、アクセス制御ルールを主な使用方法について説明します。それらの使用例は、パッシブ インターフェイスにも当てはまります。作成するルールの送信元ゾーンとしてパッシブ セキュリティ ゾーンを選択します。

- 脅威のブロック方法 (65 ページ)
- マルウェアのブロック方法 (71 ページ)
- アクセプタブルユース ポリシー (URL フィルタリング) の実装方法 (75 ページ)
- アプリケーションの使用を制御する方法 (81 ページ)

次の手順では、侵入ポリシーを適用して、URL カテゴリ データを収集する 2 つの [許可 (Allow)] ルールを作成します。

- [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] の順に選択します。
- [+] をクリックして、すべてのトラフィックを許可するが、侵入ポリシーを適用するルールを追加します。
- ルールの順序として [1] を選択します。このルールはデフォルトのルールよりも具体的ですが、デフォルトのルールとはオーバーラップしません。カスタムルールがすでにある場合は適切な位置を選択し、パッシブインターフェイス向けのトラフィックが代わりになるようにそれらのルールと一致しないようにします。
- ルールの名前、**Passive_IDS** などを入力します。
- [アクション (Action)] として [許可 (Allow)] を選択します。
- [送信元または宛先 (Source/Destination)] タブで、[送信元 (Source)] > [ゾーン (Zones)] の下でパッシブ ゾーンを選択します。このタブの他の設定は変更しないでください。

この時点で、評価モードで実行中のルールは次のようになります。

Order	Title	Action
1	Passive_IDS	Allow

Source/Destination	Applications	URLs	Users	Intrusion Policy						
SOURCE <table border="1"> <thead> <tr> <th>Zones</th> <th>Networks</th> <th>Ports</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>passive_zone</td> <td>ANY</td> <td>ANY</td> </tr> </tbody> </table>	Zones	Networks	Ports	passive_zone	ANY	ANY				
Zones	Networks	Ports								
passive_zone	ANY	ANY								

- [侵入ポリシー (Intrusion Policy)] タブをクリックし、スライダをクリックして [オン (On)] にして、ほとんどのネットワークに推奨される [バランスのとれたセキュリティと接続 (Balanced Security and Connectivity)] ポリシーなどの侵入ポリシーを選択します。



- h) [ロギング (Logging)] タブをクリックして、ロギング オプションで [接続終了時 (At End of Connection)] を選択します。

SELECT LOG ACTION

- ☐ At Beginning and End of Connection
- ☒ At End of Connection
- ☐ No Connection Logging

- i) [OK] をクリックします。
- j) [+] をクリックして、URL およびすべての HTTP 要求のカテゴリを判断するためにシステムがディープ インスペクションを実行する必要があるルールを追加します。
- このルールにより、ダッシュボードで URL カテゴリ情報を確認できるようになります。処理時間を短縮し、パフォーマンスを向上させるために、URL カテゴリ条件を指定する少なくとも 1 つのアクセス制御ルールが存在する場合にのみシステムは URL カテゴリを判断します。
- k) ルールの順序として [1] を選択します。これは、前のルール (Passive_IDS) の上に配置されます。(すべてのトラフィックに適用される) ルールの後に配置すると、今作成しているルールは決して一致しません。
- l) ルールの名前、**Determine_URL_Category** などを入力します。
- m) [アクション (Action)] として [許可 (Allow)] を選択します。
- または、[ブロック (Block)] を選択できます。いずれのアクションでも、このルールの目的が達成されます。
- n) [送信元または宛先 (Source/Destination)] タブで、[送信元 (Source)] > [ゾーン (Zones)] の下でパッシブ ゾーンを選択します。このタブの他の設定は変更しないでください。

Order	Title	Action
1	Determine_URL_Category	Allow

Source/Destination	Applications	URLs	Users	Intrusion Policy
SOURCE				
Zones	Networks	Ports		
passive_zone	ANY	ANY		

- o) [URL (URLs)] タブをクリックし、[カテゴリ (Categories)] 見出しの横にある [+] をクリックして、いずれかのカテゴリを選択します。たとえば、**[Search Engines and Portals]** を選択します。必要に応じて、レピュテーション レベルを選択するか、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。

CATEGORIES
Search Engines and Portals Reputation: Risk Any

- p) [侵入ポリシー (Intrusion Policy)] タブをクリックし、スライダをクリックして [オン (On)] にして、最初のルールに選択したのと同じ侵入ポリシーを選択します。
- q) [ログギング (Logging)] タブをクリックして、ログギング オプションで [接続終了時 (At End of Connection)] を選択します。

ただし、アクションとして [ブロック (Block)] を選択した場合は、[接続の開始時と終了時 (At Beginning and End of Connection)] を選択します。ブロックされた接続自体は終了しないため、接続の開始時にのみログ情報を取得できます。

- r) [OK] をクリックします。

ステップ 6 (オプション)。その他のセキュリティ ポリシーを設定します。

次のセキュリティ ポリシーも設定して、トラフィックにどのような影響を与えるかを確認できます。

- [アイデンティティ (Identity)] : ユーザ情報を収集します。アイデンティティ ポリシーにルールを設定して、送信元 IP アドレスに関連付けられているユーザが確実に特定されるようにできます。パッシブ インターフェイスのアイデンティティ ポリシーの実装プロセスは、ルーテッド インターフェイスのプロセスと同じです。[ネットワーク トラフィックを調べる方法 \(57 ページ\)](#) で説明されている使用例を参照してください。
- [セキュリティ インテリジェンス (Security Intelligence)] : 既知の不正な IP アドレスと URL をブロックします。詳細については、[脅威のブロック方法 \(65 ページ\)](#) を参照してください。

(注)

パッシブインターフェイス上のすべての暗号化されたトラフィックは復号不可として分類されるため、SSL 復号ルールは無効になり、パッシブ インターフェイスには適用されません。

ステップ 7 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ステップ 8 監視ダッシュボードを使用して、ネットワーク経由で到達するトラフィックや脅威の種類を分析します。脅威に対する防御 デバイスに不要な接続をアクティブにドロップさせる場合は、デバイスを再展開して、監視対象ネットワークに対するファイアウォール保護を提供するアクティブなルーテッド インターフェイスを設定できます。

その他の例

使用例の章の例に加えて、特定のサービスについて説明している一部の章で設定例が示されています。場合によっては次の例が役立つ可能性があります。

アクセス制御

- [TrustSec セキュリティ グループ タグを使用したネットワーク アクセスの制御方法 \(650 ページ\)](#)

ネットワーク アドレス変換 (NAT)

IPv4 アドレスの NAT

- [内部 Web サーバへのアクセスの提供 \(スタティック自動 NAT\) \(756 ページ\)](#)
- [FTP、HTTP、およびSMTPのための単一アドレス \(ポート変換を設定したスタティック自動 NAT\) \(759 ページ\)](#)
- [宛先に応じて異なる変換 \(ダイナミック手動 PAT\) \(765 ページ\)](#)
- [宛先アドレスおよびポートに応じて異なる変換 \(ダイナミック手動 PAT\) \(771 ページ\)](#)
- [DNS 応答修正、外部の DNS サーバ \(784 ページ\)](#)
- [DNS 応答修正、ホスト ネットワーク上の DNS サーバ \(787 ページ\)](#)
- [NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除 \(823 ページ\)](#)

IPv6 アドレスの NAT

- NAT64/46 の例：内部 IPv6 ネットワークと外部 IPv4 インターネット (742 ページ)
- NAT64/46 の例：外部 IPv4 インターネットと DNS 変換を使用した内部 IPv6 ネットワーク (744 ページ)
- NAT66 の例：ネットワーク間のスタティック変換 (750 ページ)
- NAT66 の例：シンプル IPv6 インターフェイス PAT (752 ページ)
- DNS 64 応答修正 (778 ページ)

リモート アクセス仮想プライベート ネットワーク (RA VPN)

- RADIUS 認可変更の実装方法 (882 ページ)
- Duo LDAP を使用した二要素認証の設定方法 (892 ページ)
- リモート アクセス VPN ユーザの外部インターフェイスでインターネットアクセスを実現する方法 (ヘアピニング) (900 ページ)
- リモート アクセス VPN を使用した外部ネットワークでのディレクトリ サーバの使用法 (905 ページ)
- グループによって RA VPN アクセスを制御する方法 (921 ページ)
- 異なる仮想ルータの内部ネットワークへの RA VPN アクセスを可能にする方法 (926 ページ)
- セキュアクライアントのアイコンとロゴをカスタマイズする方法 (930 ページ)

サイト間仮想プライベート ネットワーク (VPN)

- NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除 (823 ページ)
- 外部サイト間 VPN ユーザの外部インターフェイスでインターネットアクセスを実現する方法 (ヘアピニング) (830 ページ)
- サイト間 VPN における複数の仮想ルータのネットワークからのトラフィックを保護する方法 (838 ページ)

SSL/TLS の復号

- 例：ネットワークからの古い SSL/TLS バージョンのブロック (583 ページ)

FlexConfig ポリシー

- グローバル デフォルト インスペクションを有効/無効にする方法 (1068 ページ)
- FlexConfig の変更を元に戻す方法 (1074 ページ)
- 一意のトラフィック クラスのインスペクションを有効にする方法 (1076 ページ)

仮想ルーティング

- [重複するアドレス空間を持つ複数の仮想ルータへのインターネットアクセスを提供する方法 \(441 ページ\)](#)
- [複数の仮想ルータを介して遠隔サーバにルーティングする方法 \(436 ページ\)](#)
- [異なる仮想ルータの内部ネットワークへの RA VPN アクセスを可能にする方法 \(926 ページ\)](#)
- [サイト間 VPN における複数の仮想ルータのネットワークからのトラフィックを保護する方法 \(838 ページ\)](#)



第 3 章

システムのライセンス

ここでは、Threat Defense デバイスをライセンスする方法について説明します。

- [ファイアウォールシステムのスマートライセンス \(101 ページ\)](#)
- [スマート ライセンスの管理 \(107 ページ\)](#)
- [エアギャップネットワークでの永久ライセンスの適用 \(114 ページ\)](#)

ファイアウォールシステムのスマートライセンス

シスコ スマート ライセンシングは、シスコ ポートフォリオ全体および組織全体でソフトウェアをより簡単かつ迅速に一貫して購入および管理できる柔軟なライセンスモデルです。また、これは安全です。ユーザーがアクセスできるものを制御できます。スマートライセンスを使用すると、次のことが可能になります。

- **簡単なアクティベーション**：スマートライセンスは、組織全体で使用できるソフトウェアライセンスのプールを確立します。PAK（製品アクティベーションキー）は不要です。
- **管理の統合**：My Cisco Entitlements（MCE）は、使いやすいポータルですべてのシスコ製品とサービスの完全なビューを提供するので、取得したもの、使用しているものを常に把握できます。
- **ライセンスの柔軟性**：ソフトウェアはハードウェアにノードロックされていないため、必要に応じてライセンスを簡単に使用および転送できます。

スマートライセンスを使用するには、まず Cisco Software Central でスマートアカウントを設定する必要があります（software.cisco.com）。

シスコライセンスの概要については詳しくは、cisco.com/go/licensingguide [英語] を参照してください。

Cisco Smart Software Manager

Threat Defense デバイ스에 1 つ以上のライセンスを購入する場合は、Cisco Smart Software Manager（<https://software.cisco.com/#SmartLicensing-Inventory>）でそれらのライセンスを管理します。Cisco Smart Software Manager を使用すると、組織のプライマリアカウントを作成できます。

デフォルトでは、ライセンスはプライマリアカウントの下でのデフォルト仮想アカウントに割り当てられます。アカウント管理者は、仮想アカウント（例：地域、部門、支社）を追加できます。複数の仮想アカウントは、大量のライセンスやアプライアンスを管理するのに役立ちます。

ライセンスとアプライアンスは仮想アカウントごとに管理されます。つまり、その仮想アカウントのアプライアンスのみが、そのアカウントに割り当てられたライセンスを使用できます。新たにライセンスを追加する必要がある場合は、別の仮想アカウントから未使用のライセンスを譲渡できます。また、仮想アカウント間でのアプライアンスの譲渡も可能です。

Cisco Smart Software Manager にデバイスを登録する際は、製品インスタンスの登録トークンを Cisco Smart Software Manager で作成し、そのトークンを Device Manager に入力します。登録済みデバイスが、使用されているトークンに基づいて仮想アカウントに関連付けられます。

Cisco Smart Software Manager の詳細については、そのマネージャのオンラインヘルプを参照してください。

ライセンス認証局との定期通信

Threat Defense デバイスの登録に製品インスタンス登録トークンを使用すると、デバイスはシスコのライセンス認証局に登録されます。ライセンス認証局は、デバイスとライセンス認証局の間の通信に ID 証明書を発行します。この証明書は 1 年間有効ですが、6 か月ごとに更新されます。ID 証明書の期限が切れた場合（通常、9 か月後または通信のない状態が 1 年続いた後）、デバイスは未登録状態に戻り、ライセンスされた機能は停止されます。

デバイスはライセンス認証局と定期的に通信します。Cisco Smart Software Manager に変更を加えた場合は、デバイス上で許可を更新し、変更をすぐに有効化することができます。また、スケジュールどおりにデバイスが通信するのを待つこともできます。通常のライセンスに関する通信は 12 時間ごとに行われますが、これには猶予期間があり、デバイスはホームをコールすることなく最大で 90 日間は動作します。90 日が経過する前にライセンス認証局に連絡する必要があります。

スマート ライセンスのタイプ

次の表に、Threat Defense デバイスで使用可能なライセンスを示します。

Threat Defense デバイスを購入すると、自動的に Essentials ライセンスが含まれます。すべての追加ライセンスはオプションです。

表 2:スマートライセンスのタイプ

ライセンス	期間	付与される機能
Essentials	永久	オプションのターム ライセンスでカバーされないすべての機能。 Essentials ライセンスは登録時にアカウントに自動的に追加されます。ただし、Secure Firewall 3100 の場合は例外です。ファイアウォールを購入すると、基本ライセンスが取得され、そのライセンスはアカウントに含まれる他のライセンスと同様に管理されます。たとえば、登録時にライセンスが正しいバーチャルアカウントに含まれていることを確認する必要があります。 このトークンに登録された製品の輸出規制された機能を許可するかどうかも指定する必要があります。このオプションは、自国が輸出管理の標準規格に適合している場合のみ選択できます。このオプションは、高度な暗号化（および高度な暗号化を必要とする機能）の使用を制御します。
IPS	期間ベース	次のポリシーを使用するために必要です。 • Intrusion • ファイル (File) （マルウェア防御 も必要） • セキュリティインテリジェンス (Security Intelligence)
マルウェア防御	ターム ベース	ファイルポリシー (IPS も必要)
URL	期間ベース	URL ポリシー：カテゴリおよびレピュテーションベースの URL フィルタリングまたは DNS ルックアップ要求フィルタリング。 このライセンスがなくても、個別の URL で URL フィルタリングを実行できます。

ライセンス	期間	付与される機能
RA VPN : • Secure Client Advantage • Secure Client Premier • Secure Client VPN のみ	ライセンスタイプに基づきタームベースまたは永久	リモートアクセス VPN の設定。RA VPN を設定できるように、基本ライセンスで輸出規制機能を許可する必要があります。デバイスを登録するときに、エクスポート要件を満たすかどうかを選択します。 Device Manager は、任意の有効な セキュアクライアント ライセンスを使用できます。使用できる機能はライセンス タイプによって異なります。まだ購入していない場合は、 リモートアクセス VPN のライセンス要件（851 ページ） を参照してください。 『Cisco AnyConnect Ordering Guide』（ http://www.cisco.com/c/dam/en/us/products/collateral/security/anyconnect-og.pdf ）も参照してください。
通信事業者	ターム ベース	モバイルネットワークプロトコルのインスペクション。GTP/GPRS、Diameter、SCTP、および M3UA インスペクションを設定するには、このライセンスが必要です。これらのインスペクションを設定するには、FlexConfig を使用します。

Threat Defense Virtual のライセンス

このセクションでは、Threat Defense Virtual で使用可能なパフォーマンス階層ライセンスの権限について説明します。

すべての Threat Defense Virtual ライセンスを、サポートされているすべての Threat Defense Virtual vCPU/メモリ構成で使用できます。これにより、Threat Defense Virtual を使用しているお客様は、さまざまな VM リソースフットプリントで実行できるようになります。また、サポート対象の AWS および Azure インスタンスタイプの数も増えます。Threat Defense Virtual VM を設定する場合、サポートされる最大コア（vCPU）数は 16 個です。また、サポートされる最大メモリ容量は 32 GB RAM です。

Threat Defense Virtual スマートライセンスのパフォーマンス階層

RA VPN に対するセッション制限は、インストールされている Threat Defense Virtual プラットフォームの権限付与階層によって決定され、レートリミッタによって適用されます。次の表は、権限付与層とレート制限に基づくセッション制限をまとめたものです。

表 3: Threat Defense Virtual 権限付与に基づくライセンス機能の制限

パフォーマンス階層	デバイス仕様（コア/RAM）	レート制限	RA VPN セッション制限
FTDv5、100Mbps	4 コア/8 GB	100Mbps	50
FTDv10、1Gbps	4 コア/8 GB	1Gbps	250
FTDv20、3Gbps	4 コア/8 GB	3 Gbps	250
FTDv30、5Gbps	8 コア/16 GB	5 Gbps	250
FTDv50、10Gbps	12 コア/24 GB	10 Gbps	750
FTDv100、16 Gbps	16 コア/32 GB	16 Gbps	10,000

Threat Defense Virtual パフォーマンス階層ライセンスのガイドラインと制限事項

Threat Defense Virtual デバイスのライセンスを取得する際は、次の注意事項と制限事項に注意してください。

- Threat Defense Virtual は、導入要件に基づいて異なるスループットレベルと VPN 接続制限を提供するパフォーマンス階層型ライセンスをサポートしています。
- すべての Threat Defense Virtual ライセンスを、サポートされているすべての Threat Defense Virtual コア/メモリ構成で使用できます。これにより、Threat Defense Virtual を使用しているお客様は、さまざまな VM リソースフットプリントで実行できるようになります。
- Threat Defense Virtual を展開する際、デバイスが評価モードであるか、すでに Cisco Smart Software Manager に登録されているかに関係なく、パフォーマンス階層を選択できます。



(注) お使いのスマート ライセンシング アカウントに、必要なライセンスが含まれていることを確認してください。使用アカウントにあるライセンスと一致する階層を選択することが重要です。Threat Defense Virtual をバージョン 7.0 にアップグレードする場合は、[FTDv - Variable] を選択して現在のライセンスコンプライアンスを維持できます。Threat Defense Virtual は、ご使用のデバイスの機能（コア/RAM の数）に基づいてセッション制限を引き続き実行します。

- REST API を使用して、新しい Threat Defense Virtual デバイスを展開する場合や Threat Defense Virtual をプロビジョニングする場合、デフォルトのパフォーマンス階層は FTDv50 です。

- Essentials ライセンスはサブスクリプションベースで、パフォーマンス階層にマッピングされます。バーチャルアカウントには、Threat Defense Virtual デバイスの Essentials ライセンス権限と、IPS、マルウェア防御、および URL フィルタリングのライセンスが必要です。
- 各 HA ピアは 1 つの権限を消費します。各 HA ピアの権限は Essentials ライセンスを含めて一致している必要があります。
- HA ペアのパフォーマンス階層の変更は、プライマリピアに適用される必要があります。
- ユニバーサル PLR ライセンスは、HA ペアの各デバイスに個別に適用されます。セカンダリデバイスが、プライマリデバイスのパフォーマンス階層を自動的にミラーリングすることはありません。手動で更新する必要があります。

暗号化機能に対するエクスポート制御設定の影響

デバイスを登録する場合、このトークンに登録された製品の輸出規制された機能を許可するかどうか指定する必要があります。このオプションは、自国が輸出管理の標準規格に適合している場合のみ選択できます。このオプションは、高度な暗号化（および高度な暗号化を必要とする機能）の使用を制御します。

評価モードは、非輸出準拠アカウントを使用して登録する場合と同じように扱われます。つまり、評価モードで実行している場合、リモートアクセス VPN を設定したり、高度な暗号化アルゴリズムを使用したりはできません。

特に、DES 標準は評価モードまたは非輸出準拠モードでのみ使用できます。

したがって、サイト間 VPN などの暗号化機能を設定したり、高可用性グループのフェールオーバー接続を暗号化したりすると、輸出準拠アカウントに登録した後に接続の問題が発生する可能性があります。機能が評価モードで DES を使用していた場合、アカウントの登録後にその機能の設定が破損します。

暗号化関連の問題を回避するには、次の推奨事項を考慮してください。

- サイト間 VPN や暗号化されたフェールオーバー接続などの暗号化機能は、デバイスを登録するまで設定しないでください。
- 輸出準拠アカウントを使用してデバイスを登録した後、評価モードで設定したすべての暗号化機能を編集し、より安全な暗号化アルゴリズムを選択します。各暗号化機能をテストおよび検証して、正しく機能していることを確認します。



(注) 評価モードで HA フェールオーバー暗号化を設定した場合は、HA グループ内の両方のデバイスをリブートして、より強力な暗号化の使用を開始する必要があります。両方のデバイスが自身をアクティブユニットと見なすスプリットブレイン状態を回避するために、最初に暗号化を削除することを推奨します。

期限切れまたは無効になっているオプション ライセンスの影響

次のいずれかのオプションライセンスが期限切れになっても、そのライセンスを必要とする機能は引き続き使用できます。ライセンスはコンプライアンス違反とマークされます。そのため、ライセンスを購入してアカウントに追加し、ライセンスをコンプライアンス状態に戻す必要があります。

オプションのライセンスを無効にすると、システムは次のように反応します。

- **マルウェア防御**：システムは **Secure Malware Analytics Cloud** への問い合わせを停止し、**Secure Malware Analytics Cloud** から送信される週次のイベントの確認応答も停止します。ファイルポリシーが含まれている既存のアクセス コントロール ポリシーは再展開できません。マルウェア防御ライセンスが無効にされた後、システムが既存のキャッシュファイルの性質を使用できるのは極めて短時間のみであることに注意してください。この時間枠の経過後、システムは **Unavailable** という性質をこれらのファイルに割り当てます。
- **IPS**：システムは、侵入ポリシーまたはファイルポリシーを適用しなくなります。セキュリティインテリジェンスポリシーの場合、システムはこのポリシーの適用を中止し、フィード更新のダウンロードを停止します。ライセンスを必要とする既存のポリシーを再展開することはできません。
- **[URL]**：URLカテゴリ条件を使用したアクセス制御ルールはURLまたはDNSルックアップ要求のフィルタリングを直ちに停止し、システムはURLデータに対する更新をダウンロードしなくなります。既存のアクセス制御ポリシーにカテゴリおよびレピュテーションベースのURL条件を使用したルールが含まれている場合は、それらのポリシーを再導入することができません。
- **[RA VPN]**：リモートアクセスVPN設定は編集できませんが、削除は可能です。ユーザは、引き続き、RAVPN設定を使用して接続できます。ただし、システムがエクスポート準拠でなくなるようにデバイス登録を変更した場合は、リモートアクセスVPN設定が直ちに停止し、どのリモートユーザもVPN経由で接続できなくなります。

スマート ライセンスの管理

システムの現在のライセンスステータスを表示するには[スマートライセンス (Smart License)] ページを使用します。システムにライセンスが付与されている必要があります。

90 日間の評価ライセンスを使用しているか、Cisco Smart Software Manager に登録されているかがページに表示されます。登録が完了すると、Cisco Smart Software Manager への接続のステータスと、ライセンスのタイプごとのステータスを確認できます。

使用認証により、スマート ライセンス エージェントのステータスが特定されます。

- **[承認済み (「接続中」、「十分なライセンス」) (Authorized ("Connected", "Sufficient Licenses"))]**：デバイスがライセンス認証局に接続し、登録しました。これにより、アプリケーションのライセンス権限付与が承認されました。これでデバイスはコンプライアンスに遵守しています。

- [コンプライアンス違反 (Out-of-Compliance)] : デバイスに使用可能なライセンス権限付与がありません。ライセンスされた機能は動作を継続します。ただし、遵守するためには、追加の権限付与を購入するか、他を解放して権限付与を確保する必要があります。
- [承認期限切れ (Authorization Expired)] : デバイスはライセンス認証局と 90 日以上通信していません。ライセンスされた機能は動作を継続します。スマートライセンス エージェントが認証要求を再試行します。再試行に成功すると、エージェントは [コンプライアンス違反 (Out-of-Compliance)] または [承認済み (Authorized)] 状態になり、新しい認証期間が始まります。デバイスを手動で同期してみてください。



(注) スマートライセンス ステータスの横にある [i] ボタンをクリックすると、仮想アカウント、輸出規制機能を表示できます。また、Cisco Smart Software Manager へのリンクも表示されます。輸出規制機能は、国家の安全、外交政策、およびテロ対策関連の法規制の対象となるソフトウェアを制御します。

次の手順では、システム ライセンスの管理方法の概要について説明します。

始める前に

システムのインターネットへのパスがない場合は、スマートライセンスを使用できません。代わりに、パーマネントライセンス予約 (PLR) モードに切り替えます。詳細については、[エアギャップネットワークでの永久ライセンスの適用 \(114 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスを登録します。

オプションのライセンスを割り当てる前に、Cisco Smart Software Manager に登録する必要があります。評価期間が終了するまでに登録してください。

[デバイスの登録 \(109 ページ\)](#) を参照してください。

(注)

登録する際に、使用状況データをシスコに送信するかどうかを選択します。選択内容は、歯車アイコンの横にある [Cisco Success Networkにアクセス (Go To Cisco Success Network)] リンクをクリックすると変更できます。

ステップ 3 オプション機能のライセンスをリクエストして管理します。

ライセンスによって制御される機能を使用するには、オプションのライセンスを登録する必要があります。[オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化 \(111 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 システム ライセンスを維持します。

次のタスクを実行できます。

- [Cisco Smart Software Manager との同期](#) (112 ページ)
- [デバイスの登録解除](#) (113 ページ)

デバイスの登録

Threat Defense デバイスを購入すると、自動的に Essentials ライセンスが含まれます。Essentials ライセンスは、オプションライセンスではカバーされないすべての機能をカバーしています。これは永久ライセンスです。

システムの初期セットアップ時に、Cisco Smart Software Manager にデバイスを登録するように求められます。90 日間の評価ライセンスを選択した場合、評価期間が終了する前にデバイスを登録する必要があります。

デバイスを登録すると、仮想アカウントによってライセンスがデバイスに割り当てられます。デバイスを登録すると、有効にしているすべてのオプション ライセンスも登録されます。

始める前に

デバイスの登録時には、そのデバイスだけが登録されます。高可用性のために設定されているデバイスの場合は、その装置を登録するために、高可用性ペアにあるその他の装置にログインする必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 [Register Device] をクリックして、説明に従います。

- a) リンクをクリックして [Cisco Smart Software Manager](#) を開いて自分のアカウントにログインするか、必要に応じて新しいアカウントを作成します。
- b) 新しいトークンを生成します。

トークンを作成するとき、トークンの使用に有効な期間を指定します。推奨される有効期間は 30 日間です。この期間は、トークン自体の有効期限を定義するものであり、トークンを使用して登録するデバイスには影響しません。有効期限が切れた後にトークンを使用するには、新しいトークンを生成します。

このトークンに登録された製品の輸出規制された機能を許可するかどうかも指定する必要があります。このオプションは、自国が輸出管理の標準規格に適合している場合のみ選択できます。このオプションは、高度な暗号化（および高度な暗号化を必要とする機能）の使用を制御します。

- c) トークンをコピーして[スマートライセンス登録 (Smart License Registration)] ボックスに貼り付けます。
- d) Threat Defense Virtual デバイスのパフォーマンス階層 (**Threat Defense Virtual のみ**) を選択するか、デフォルトの選択のままにします。

パフォーマンス階層が選択されていない場合、Threat Defense Virtual デバイスはレガシーモードで動作します。デフォルト設定は4 コア/8 GB です。詳細については、[Threat Defense Virtual パフォーマンス階層の変更 \(110 ページ\)](#) を参照してください。

- e) シスコ クラウドサービスの登録リージョンを選択します。
登録後、このリージョンを変更する必要がある場合は、デバイスの登録を解除してから再度登録し、新しいリージョンを選択する必要があります。
- f) 使用状況データをシスコに送信するかどうかを決定します。
Cisco Success Network ステップの情報を読み、[サンプル データ (Sample Data)] をクリックして収集された実際のデータへのリンクを表示して、[Cisco Success Network を有効にする (Enable Cisco Success Network)] オプションを選択したままにするかどうかを決定します。
- g) [デバイスの登録 (Register Device)] をクリックします。

Threat Defense Virtual パフォーマンス階層の変更

Threat Defense Virtual は、導入要件に基づいて異なるスループットレベルと VPN 接続制限を提供するパフォーマンス階層型ライセンスをサポートしています。すべての Threat Defense Virtual ライセンスを、サポートされているすべての Threat Defense Virtual コア/メモリ構成で使用できます。これにより、Threat Defense Virtual を使用しているお客様は、さまざまな VM リソースフットプリントで実行できるようになります。[Threat Defense Virtual スマートライセンスのパフォーマンス階層 \(104 ページ\)](#) を参照してください。

Threat Defense Virtual をバージョン 7.0+ にアップグレードすると、デバイスは自動的に「FTDv 変数」階層状態に移行し、権限付与レベルを選択するまで非階層化権限を使用し続けます。

次の点を考慮してください。

- スループットまたはRA VPNの要件に基づいて、導入ニーズに合わせてパフォーマンス階層を変更できます。Threat Defense Virtual は、調整可能なコアおよびメモリリソースを使用して展開することに注意してください。選択したパフォーマンス階層は、デバイスの仕様を超えることはできません。
- AWS では、パフォーマンス階層の変更はサポートされていません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス概要 (Smart License summary)] の [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 [パフォーマンス階層 (Performance Tier)] ドロップダウンリストから目的のオプションを選択します。

- FTDv5 (4 コア/8 GB)
- FTDv10 (8 コア/8 GB)
- FTDv20 (8 コア/8 GB)
- FTDv30 (8 コア/16 GB)
- FTDv50 (12 コア/24 GB)
- FTDv100 (16 コア/24 GB)

(注)

現在のデバイス仕様に基づいて最適な階層が強調表示されます。

ステップ 3 選択内容とデバイスの仕様を確認します。

(注)

Threat Defense Virtual VM を設定する場合、サポートされる最大コア (vCPU) 数は 12 個です (VMware および KVM での FTDv100 の場合は 16 個)。また、サポートされる最大メモリ容量は 24 GB RAM です。選択したパフォーマンス階層は、デバイスの仕様を超えることはできません。

ステップ 4 [はい (Yes)] をクリックして、パフォーマンス階層を変更します。

オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化

オプションのライセンスを有効化 (登録) または無効化 (リリース) できます。ライセンスによって制御される機能を使用するには、そのライセンスをイネーブルにする必要があります。

オプションのターム ライセンスの対象となる機能が不要になった場合は、そのライセンスをディセーブルにできます。ライセンスをディセーブルにすると、Cisco Smart Software Manager アカウントでライセンスが解放され、それを他のデバイスに適用できます。

また、評価モードで実行中の場合は、これらのライセンスの評価版をイネーブルにすることもできます。評価モードでは、デバイスを登録するまでライセンスは Cisco Smart Software Manager に登録されません。ただし、評価モードでは RA VPN ライセンスまたはキャリアライセンスを有効化できません。

始める前に

ライセンスをディセーブルにする前に、そのライセンスを使用していないことを確認してください。ライセンスを必要とするポリシーは書き換えるか削除します。

高可用性の設定で動作する装置の場合は、アクティブな装置でのみライセンスを有効化または無効化します。スタンバイ装置が必要なライセンスを要求（または解放）すると、次の設定の展開時にスタンバイ装置に変更内容が反映されます。ライセンスを有効にする際は、Cisco Smart Software Manager アカウントで十分な数のライセンスが使用可能であることを確認する必要があります。これを確認しないと、一方の装置が準拠、もう一方の装置が非準拠になる可能性があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 必要に応じて、それぞれのオプション ライセンスの [有効化/無効化 (Enable/Disable)] コントロールをクリックします。

- [イネーブル (Enable)] : ライセンスを Cisco Smart Software Manager アカウントに登録し、制御される機能をイネーブルにします。これで、そのライセンスによって制御されるポリシーを設定し展開できます。
- [ディセーブル (Disable)] : ライセンスを Cisco Smart Software Manager アカウントから登録解除し、制御される機能をディセーブルにします。新しいポリシーでこの機能を設定することも、この機能を使用するポリシーを展開することもできません。

ステップ 3 RAVPN ライセンスを有効にしている場合、アカウントで使用可能なライセンスタイプを選択します。

Cisco Smart Software Manager との同期

システムは定期的にライセンス情報を Cisco Smart Software Manager と同期します。通常のライセンスに関する通信は30日ごとに行われます。猶予期間においてアプライアンスは、Call Home を行うことなく最大で 90 日間動作します。

ただし、Cisco Smart Software Manager に変更を加えた場合は、デバイス上で許可を更新し、すぐに変更が適用されるようにすることができます。

同期により、ライセンスの現在のステータスが取得され、認証と ID 証明書が更新されます。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス概要 (Smart License summary)] の [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** ドロップダウン リストから [接続の再同期 (Resync Connection)] を選択します。
-

デバイスの登録解除

デバイスを使用しなくなった場合は、Cisco Smart Software Manager からデバイスの登録を解除できます。登録を解除すると、仮想アカウントでデバイスに関連付けられている Essentials ライセンスとすべてのオプションライセンスが解放されます。オプションライセンスは他のデバイスに割り当てることができます。また、デバイスはクラウドおよびクラウドサービスから登録解除されます。

デバイスの登録を解除すると、デバイスの現在の設定とポリシーはそのまま機能しますが、変更を加えたり展開したりすることはできません。



注意 デバイスの登録を解除するには、次の手順を使用する必要があります。代わりに Cisco Smart Software Manager アカウントから登録を解除すると、デバイスでのライセンス状態と Cisco Smart Software Manager でのライセンス状態の間に不一致が生じます。これにより、HA ペアを形成する場合など、デバイスのライセンス登録を再度試行したときにエラーが発生します。この失敗の症状を示すメッセージは、「Failed to generate token to enroll with Cisco Cloud using Smart License」と「Could not return the certificate for the given sn (serial_number) since it is REVOKED.」です。この場合は、この手順を使用してユニットの登録を解除し、再試行してください。

始める前に

デバイスの登録解除時には、そのデバイスだけが登録解除されます。高可用性のために設定されているデバイスの場合は、その装置を登録解除するために、高可用性ペアにあるその他の装置にログインする必要があります。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** 歯車ドロップダウンリストから [デバイスの登録解除 (Unregister Device)] を選択します。
- ステップ 3** 警告を読み、デバイスを登録解除する場合は [登録解除 (Unregister)] をクリックします。
-

エアギャップネットワークでの永久ライセンスの適用

エアギャップネットワークは、インターネットへのパスがないネットワークです。これらは、外部からの侵入や攻撃の可能性を完全に防ぐことを目指した高セキュリティネットワークです。インターネットへのパスがないため、Cisco Smart Software Manager にデバイスを直接登録することはできません。代わりに、永久ライセンス予約（PLR）モードを使用して、デバイスに適用可能なライセンスを取得できます。

PLR モードを使用する必要がある場合は、次のことに注意してください。

- ファイルポリシー、URL ルックアップ、パブリック Web サイトへの状況に応じた相互起動といった、インターネットへのアクセスを必要とする機能は使用できません。
- Web 分析と Cisco Success Network を有効にしても、インターネットへのアクセスがないため、シスコは関連データを収集しません。
- 地理位置情報データベース、侵入ルール、および脆弱性データベース（VDB）に更新を手動でアップロードする必要があります。たとえば、更新をフラッシュドライブにダウンロードし、そのドライブをセキュリティ保護された建物に持ち込んで、セキュリティ保護されたワークステーションからアップロードすることができます。



(注) Cisco Smart Software Manager は、デバイスのシリアル番号を使用して永久ライセンスを割り当てます。デバイスの登録を解除する必要があるものの、通常の登録解除プロセスまたはキャンセルプロセスでライセンス割り当ての削除に失敗した場合、シスコテクニカルサポートに連絡して、Cisco Smart Software Manager から登録を削除する必要があります。デバイスを再イメージ化しても、ライセンス登録は削除されません。

次のトピックでは、各タイプの永久ライセンス、それらを適用する方法、およびデバイスの登録をキャンセルまたは解除する方法について詳しく説明します。

ユニバーサル永久ライセンスと特定ライセンス予約

ライセンス予約には、次の 2 つの異なるタイプがあります。

- ユニバーサル永久ライセンス予約（ユニバーサル PLR または UPLR）：ユニバーサル永久ライセンスでは、サポートされているファイアウォール製品（すべてのオプションライセンスを含む）を無期限かつ無制限で使用できます。ユニバーサル永久ライセンスを購入して適用すると、適用される機能ライセンスが、無期限に適用されます（通常は時間ベース）。ただし、スマート ライセンス アカウントで有効期限が切れた場合は、交換用ライセンスを購入する必要があります。
- 特定ライセンス予約：特定ライセンス予約には、標準スマートライセンスと同じ数およびタイプのライセンスが必要です。このライセンスを取得する場合は、基本ライセンスに追

加するオプションの機能ライセンスを選択します。このライセンスは有効期限があるため、定期的に更新する必要があります。

Device Manager ではユニバーサル PLR だけがサポートされています。

Cisco Smart Software Manager (CSSM) アカウントでユニバーサル永久ライセンス予約 (PLR) モードを有効にする場合は、シスコの担当者と協同で作業する必要があります。

スマートアカウントがユニバーサルライセンスを提供できることの確認

永久ライセンスを取得して適用できることを確認するには、CSSMアカウントにログインし、**[スマートソフトウェアライセンシング (Smart Software Licensing)] > [インベントリ (Inventory)]** ページに移動して、**[ライセンス (Licenses)]** タブをクリックします。**[ライセンスの予約 (License Reservation)]** ボタンが表示された場合は、永久ライセンス予約を取得する権限があります。

ただし、このボタンを使用すると、ユニバーサルライセンスと特定の永久ライセンスの両方に対して機能するウィザードが開始します。

また、デバイスのユニバーサルライセンスがあることを確認するには、使用可能なライセンスのリストを参照する必要があります。このライセンスは、**[ライセンスの予約 (License Reservation)]** ボタンで起動するウィザードのステップ 2 で選択可能な項目として表示されます。

[ライセンスの予約 (License Reservation)] ボタンが表示され、ユニバーサルライセンスを取得できる場合は、永久ライセンスを使用するためのシステムの変換に進めます。ボタンが表示されない場合、または特定のライセンスのみを予約できる場合は、シスコの担当者に連絡し、お客様のアカウントに対してユニバーサル PLR モードを有効にするように依頼してください。

PLR モードへの切り替えおよびユニバーサルライセンスの適用

[スマートアカウントがユニバーサルライセンスを提供できることの確認 \(115 ページ\)](#) の説明に従い、永久ライセンスを取得できることを確認し、必要なユニバーサルライセンスを購入したら、永久ライセンス予約 (PLR) モードに切り替えてライセンスを適用できます。



注意 現在評価モードになっている場合、PLR モードに切り替えた後で評価モードに戻ることはできません。

始める前に

デバイスが高可用性用に設定されている場合は、HA グループ内の両方のデバイスに対して、このタスクを個別に実行する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 スマートライセンスを使用してすでにデバイスを登録している場合は、歯車  ドロップダウンリストから [デバイスの登録解除 (Unregister Device)] を選択し、登録解除を確認します。登録解除タスクが完了するのを待ってから、次に進みます。

ステップ 3 歯車  ドロップダウンリストから [ユニバーサルPLRに切り替え (Switch to Universal PLR)] を選択して、ユニバーサル永久ライセンス予約 (PLR) モードに切り替えます。

警告を読み、[はい (Yes)] をクリックしてスイッチを確認します。

システムが PLR モードに切り替わり、PLR 登録プロセスが開始されます。

ステップ 4 PLR 登録を完了します。

- a) [ユニバーサル永久ライセンス予約 (Universal Permanent License Reservation)] ダイアログボックスが開いたら、最初のステップで必要な要求コードを含めます。テキストファイルに保存する場合は [テキストで保存 (Save AS TXT)] をクリックし、印刷する場合は [印刷 (Print)] をクリックします。文字列を強調表示し、Ctrl+C を押してクリップボードにコピーすることもできます。

モードの切り替え後にプロセスをキャンセルした場合は、[ライセンス (Licensing)] ページの [予約の続行 (Continue Reservation)] ボタンをクリックして、この時点から再開できます。

- b) CSSM アカウントにログインし、[スマートソフトウェアライセンシング (Smart Software Licensing)] > [インベントリ (Inventory)] ページに移動して、[ライセンス (Licenses)] タブをクリックします。
- c) [ライセンス予約 (License Reservation)] ボタンをクリックし、ウィザードの指示に従います。生成した要求コードの入力を求められ、入力すると、承認コードを入手できます。

ウィザードには、次のステップが含まれています。

1. ライセンス要求コードを入力するか、コードを含むテキストファイルをアップロードして、[次へ (Next)] をクリックします。
2. ステップ 2 では、ライセンスを取得しているシステムの製品の詳細と、使用可能なライセンスの箇条書きリストが表示されます。ローカルで管理されている Threat Defense デバイスのユニバーサルライセンスを選択し、[次へ (Next)] をクリックします。
3. ステップ 3 では、適切なライセンスが選択されていることを確認し、[承認コードの生成 (Generate Authorization Code)] をクリックします。
4. ステップ 4 では、承認コードが表示されます。必要に応じて、[ファイルとしてダウンロード (Download As File)] または [クリップボードにコピー (Copy to Clipboard)] をクリックして、コードを保存します。

5. [閉じる (Close)] をクリックして、ウィザードを終了します。
- d) Device Manager に戻り、承認コードを適切なフィールドに貼り付けます。
- ユニバーサルライセンスの有効な承認コードの形式は次のとおりです。
XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXXXXX-XXXXX。ここで X は英数字です。承認コードが XML ファイルである場合、特定のライセンスを保有していますが、このシステムでは使用できません。PLR 登録のキャンセル (117 ページ) の説明に従って登録をキャンセルし、CSSM で予約済みライセンスをリリースしてください。次に、シスコの担当者と協力して、スマートアカウントをユニバーサル PLR に変換します。
- e) [Register] をクリックします。
- 登録プロセスが開始されます。[ライセンス (Licensing)] ページを更新して、登録ステータスを確認します。

ステップ 5 必要に応じて、オプションの機能ライセンスを有効にします。

ユニバーサルライセンスでは、Essentialsライセンスに対してのみデバイスが登録されます。必要な機能ライセンスごとに、[有効化 (Enable)] をクリックできます。

PLR 登録のキャンセル

ユニバーサル永久ライセンス予約 (PLR) 要求は、完了する前にキャンセルできます。たとえば、PLR 登録プロセスを開始したが、Smart Software Manager アカウントが PLR に対して設定されていない場合は、PLR モードの承認を取得している間にプロセスをキャンセルし、スマートライセンス アカウントを適切に設定できます。

PLR 登録プロセスが完了している場合は、キャンセルできません。代わりに、「[PLR モードでのデバイスの登録解除 \(118 ページ\)](#)」を参照してください。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** 歯車  ドロップダウンリストから [PLR のキャンセル (Cancel PLR)] を選択して、キャンセルプロセスを開始します。
- ステップ 3** 状況に適したオプションを選択します。
- [CSSM にライセンスがあります (I have a license in CSSM)] : Cisco Smart Software Manager (CSSM) でライセンス登録ウィザードを実行し、承認コードを取得している場合は、このオプションを使用します。この時点で、CSSM に予約されているライセンスがあるため、それらのライセンスをリリースする必要があります。

- [CSSMにライセンスがありません (I do not have a license in CSSM)] : 承認コードを取得した時点でCSSM ウィザードを完了していない場合は、このオプションを使用します。たとえば、Device Manager で PLR 登録を開始したが、自分のスマートアカウントに[ライセンス予約 (License Reservation)] ボタンがないことに気付いた場合に使用します。

ステップ 4 ([CSSMにライセンスがあります (I have a license in CSSM)] を選択した場合)。ライセンスが使用中としてマークされていないことを確認するには、CSSMからリリースコードを取得する必要があります。取得しないと、それらのライセンスは他のデバイスで使用可能な状態になりません。

- (登録時に) CSSM から取得した承認コードを [キャンセル (Cancellation)] ダイアログボックスに貼り付け、[リリースコードの生成 (Generate Release Code)] をクリックします。
- [ライセンスコードのリリース (Release License Code)] フィールドにコードがある場合は、[テキストで保存 (Save As TXT)] をクリックしてテキストファイルに保存するか、[印刷 (Print)] をクリックして印刷します。コードを選択し、Ctrl+C を押してクリップボードにコピーすることもできます。
- CSSM の [スマートソフトウェアライセンシング (Smart Software Licensing)] > [インベントリ (Inventory)] ページでデバイスを見つけ ([名前 (Name)] はデバイスのシリアル番号)、[アクション (Action)] > [削除 (Remove)] をクリックして、リリースコードを入力します。

CSSM に製品が正常に削除されたことが表示されるまで待ちます。

ステップ 5 [OK] をクリックしてキャンセルプロセスを完了します。

システムがスマートライセンスモードに戻ります。ただし、デバイスは登録解除されるため、評価モードは再開できません。この時点で、スマートライセンスを使用してデバイスを登録するか、PLR モードに切り替えて、使用するデバイスを再度登録する必要があります。

PLR モードでのデバイスの登録解除

デバイスの使用を停止する、別のファシリティに移動するなどによりデバイスのライセンスを必要としなくなった場合、デバイスの登録を解除できます。

デバイスの登録を解除すると、ライセンスが未使用の状態に戻ります。デバイスの登録を解除しない場合、ライセンスは使用中としてマークされたままになり、他の目的で使用することはできません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[スマートライセンス (Smart License)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

- ステップ 2** 歯車  ドロップダウンリストから [ユニバーサルPLRの登録解除 (Unregister Universal PLR)] を選択し、警告を読み、[はい (Yes)] をクリックしてプロセスを開始します。
- ステップ 3** [ユニバーサル永久ライセンス予約の登録解除 (Unregister Universal Permanent License Reservation)] ダイアログボックスが開くと、[リリースライセンスコード (Release License Code)] フィールドには、CSSM アカウントに現在割り当てられているライセンスを解放するために必要なコードが入力されます。このコードのコピーを保持するには、[テキストで保存 (Save as TXT)] または [印刷 (Print)] をクリックします。コードを選択し、Ctrl+C を押してクリップボードにコピーすることもできます。
- ステップ 4** CSSM アカウントに移動し、[スマートソフトウェアライセンシング (Smart Software Licensing)] > [インベントリ (Inventory)] ページでデバイスを見つけ ([名前 (Name)] はデバイスのシリアル番号)、[アクション (Action)] > [削除 (Remove)] をクリックして、リリースコードを入力します。
- CSSM に製品が正常に削除されたことが表示されるまで待ちます。
- ステップ 5** Device Manager に戻り、[デバイスの登録解除 (Unregister Device)] ダイアログボックスで [登録解除 (Unregister)] をクリックします。
- これでプロセスは完了です。この時点で、CSSM のライセンスは他のデバイスに自由に割り当てることができ、Threat Defense デバイスのライセンスは解除されます。
-



第 Ⅰ 部

システム モニタリング

- [デバイスのモニタリング](#) (123 ページ)
- [ストリーミングテレメトリ](#) (149 ページ)
- [Cisco ISA 3000 のアラーム](#) (163 ページ)



第 4 章

デバイスのモニタリング

システムには、デバイスと、デバイスを通過するトラフィックを監視するために使用できるイベント ビューアとダッシュボードがあります。

- [トラフィック統計を取得するためのロギングの有効化 \(123 ページ\)](#)
- [トラフィックおよびシステム ダッシュボードのモニタリング \(127 ページ\)](#)
- [コマンドラインを使用した追加統計情報のモニタリング \(130 ページ\)](#)
- [イベントの表示 \(131 ページ\)](#)

トラフィック統計を取得するためのロギングの有効化

監視ダッシュボードとイベント ビューアを使用して、広範囲に及ぶトラフィック統計をモニタリングすることができます。ただし、どの統計情報を収集すべきかシステムに知らせるためにロギングを有効にする必要があります。ロギングでは、システムを通過する接続に対して有用な情報を提供するさまざまな種類のイベントを生成します。

ここでは、イベントと提供される情報について、特に接続ロギングに重点を置いて詳しく説明します。

イベント タイプ

システムでは、以下のタイプのイベントが生成されます。監視ダッシュボードで関連する統計を表示するには、これらのイベントを生成する必要があります。

接続イベント

ユーザがシステムを通過するトラフィックを生成すると、その接続に関するイベントが生成されます。これらのイベントを生成するには、アクセスルールで接続ロギングを有効にします。また、セキュリティ インテリジェンス ポリシーおよび SSL 復号ルールでロギングを有効にすると、接続イベントを生成できます。

接続イベントには接続に関する幅広い種類の情報が含まれ、これには送信元と宛先の IP アドレスおよびポート、使用された URL およびアプリケーション、送信されたバイト数またはパケット数などがあります。情報には、実行されたアクション（接続の許可やブロックなど）や接続に適用されたポリシーも含まれます。

侵入イベント

システムは、ホストとそのデータの可用性、整合性、機密性に影響する可能性のある悪意のあるアクティビティについて、ネットワークを通過するパケットを検査します。システムは潜在的な侵入を識別すると、侵入イベントを生成します。これには、エクスプロイトの日時とタイプ、攻撃とそのターゲットについての状況説明が記録されます。侵入イベントは、アクセス制御ルールのログギング設定に関係なく、ブロックまたはアラートするように設定された侵入ルールに対して生成されます。

ファイル イベント

ファイル イベントは、ファイル ポリシーに基づいてシステムがネットワーク トラフィック内でファイルを検出して、必要に応じてブロックしたことを表します。これらのイベントを生成するには、ファイル ポリシーを適用するアクセス ルールでファイル ログギングを有効にする必要があります。

システムはファイル イベントの生成時に、アクセス制御ルールのログギング設定に関係なく、接続終了時の情報もログギングします。

マルウェア イベント

システムは、全体的なアクセスコントロール設定の一環として、ネットワーク トラフィックのマルウェアを検出できます。**malware defense** は、結果として生じたイベントの性質や、いつどこでどのようにしてマルウェアが検出されたかに関するコンテキストデータを含むマルウェアイベントを生成できます。これらのイベントを生成するには、ファイル ポリシーを適用するアクセス ルールに対してファイル ログギングを有効にする必要があります。

ファイルの判定結果は、正常からマルウェア、マルウェアから正常などに変更できます。**malware defense** が **Secure Malware Analytics Cloud** にファイルについて照会し、クエリから 1 週間以内に判定結果が変更されたことがクラウドに特定されると、システムはレトロスペクティブ マルウェア イベントを生成します。

セキュリティ インテリジェンス イベント

セキュリティ インテリジェンス イベントは、ポリシーによってブロックまたはモニタされた各接続の、セキュリティ インテリジェンス ポリシーによって生成された接続イベントの一種です。すべてのセキュリティ インテリジェンス イベントには、自動入力された [セキュリティ インテリジェンス カテゴリ (Security Intelligence Category)] フィールドがあります。

これらのイベントのそれぞれについて、対応する「通常」の接続イベントがあります。セキュリティ インテリジェンス ポリシーはアクセスコントロールなどのその他多数のセキュリティ ポリシーより前に評価されるため、セキュリティ インテリジェンスによって接続がブロックされると、その結果のイベントには、以降の評価から収集される情報（ユーザ アイデンティティなど）は含まれません。

設定可能な接続ロギング

組織のセキュリティとコンプライアンスのニーズに応じて、接続をログに記録する必要があります。生成されるイベントの数を抑えてパフォーマンスを向上させることを目標にする場合は、分析のために重要な意味を持つ接続のロギングだけを有効化してください。ただし、プロファイリングのためにネットワークトラフィックを広範囲に把握したい場合は、他の接続のロギングを追加で有効にできます。

システムは複数の理由で接続をログできるため、1つの場所でログを無効にしても、一致する接続がログされないとは限りません。

接続ロギングは次の場所で設定できます。

- **アクセス制御ルールおよびデフォルトアクション**：接続終了時点のロギングは、接続に関するほとんどの情報を提供します。接続の開始も記録できますが、これらのイベントの情報は不完全です。接続ロギングはデフォルトで無効になっているため、追跡するトラフィックを対象としたルール（およびデフォルトアクション）ごとにこのロギングを有効にする必要があります。
- **セキュリティ インテリジェンス ポリシー**：ブロックされた接続ごとにセキュリティ インテリジェンス接続イベントを生成するようにロギングを有効にすることができます。セキュリティ インテリジェンス フィルタリングの結果として接続イベントがロギングされる場合、一致するセキュリティ インテリジェンス イベントもロギングされます。これは、別々に表示および分析できる特殊な接続イベントです。
- **SSL 復号ルールとデフォルトのアクション**：接続の最後にロギングを設定できます。ブロックされた接続では、システムはすぐにセッションを終了し、イベントを生成します。モニタ対象の接続とアクセス制御ルールに渡す接続では、セッションが終了する際にイベントが生成されます。

自動接続ロギング

他のロギング設定に関係なく、次の接続終了イベントは自動的に保存されます。

- システムは、接続がアクセス コントロール ポリシーのデフォルトのアクションで処理される限り、侵入イベントに関連付けられている接続を自動的に記録します。一致するトラフィックの侵入イベントを取得するには、デフォルトアクションでロギングを有効にする必要があります。
- ファイルおよびマルウェア イベントに関連付けられている接続は自動的に記録されます。（接続イベントのみ）：必要に応じてファイルおよびマルウェア イベントの生成を無効にできます。

接続ロギングのためのヒント

ロギング設定および関連する統計情報の評価を検討する際は、次のヒントに注目してください。

- アクセス制御ルールを使ってトラフィックを許可する場合、侵入ポリシーまたはファイルポリシー（またはその両方）を使用して、さらにトラフィックを検査し、最終目的地に到達する前に、侵入や禁止ファイル、およびマルウェアをブロックすることができます。ただし、暗号化されたペイロードに対するファイルインスペクションと侵入インスペクションはデフォルトで無効になっていることに注意してください。侵入ポリシーまたはファイルポリシーで接続をブロックする理由が特定された場合は、接続ログ設定に関係なく、システムが速やかに接続終了イベントを記録します。許可された接続のロギングは、ネットワーク内のトラフィックに関するほとんどの統計情報を提供します。
- 信頼された接続とは、信頼アクセス制御ルールまたはアクセス制御ポリシー内のデフォルトアクションによって処理された接続です。ただし、信頼された接続では、ディスカバリデータ、侵入、禁止ファイルとマルウェアの検査は行われません。したがって、信頼された接続の接続イベントに含まれている情報には限りがあります。
- トラフィックをブロックするアクセス制御ルールとアクセス制御ポリシーのデフォルトアクションにおいては、システムが接続開始イベントをロギングします。一致するトラフィックは、さらに検査されることなく拒否されます。
- サービス妨害（DoS）攻撃中にブロックされた TCP 接続のロギングは、複数の同様のイベントでシステムのパフォーマンスに影響を与え、データベースのパフォーマンス低下させる可能性があります。ブロックルールのロギングを有効にする際は、そのルールでモニタするトラフィックが、インターネット側のインターフェイス上なのか、DoS 攻撃に脆弱なその他のインターフェイス上なのかを確認してください。
- リモートアクセス VPN 接続プロファイルの設定時に、[復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn))] オプションを選択した場合、または **sysopt connection permit-vpn** コマンドをイネーブルにした場合は、すべてのサイト間またはリモートアクセス VPN トラフィックがインスペクションとアクセス コントロールポリシーをバイパスします。したがって、このトラフィックに対する接続イベントは発生せず、トラフィックは統計ダッシュボードには反映されません。

外部の Syslog サーバへのイベントの送信

イベントを格納する容量が限られている、Device Manager を通してイベントを表示する以外に、外部の Syslog サーバにイベントを送信するルールとポリシーを設定することもできます。この機能と、選択した syslog サーバプラットフォームの追加のストレージを使用して、イベント データを表示および分析できます。

外部の syslog サーバにイベントを送信するには、各ルール、デフォルトのアクション、または接続のログ記録を有効にするポリシーを編集し、ログ設定の syslog サーバオブジェクトを選択します。侵入イベントを syslog サーバに送信するには、侵入ポリシーの設定でサーバを設定します。Syslog サーバにファイル/マルウェア イベントを送信するには、[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [ロギング設定 (Logging Settings)] でサーバを設定します。

詳細については、各ルールとポリシーの種類に応じたヘルプおよび[syslog サーバの設定](#)（193 ページ）を参照してください。

Cisco Cloud ベースのサービスを使用したイベントの評価

イベント ビューアと独自の syslog サーバーを使用することに加えて、接続イベントおよび高プライオリティの侵入/ファイル/マルウェア関連イベントをシスコのクラウドベース サーバーに送信できます。Threat Response など、シスコのクラウドベースのサービスでは、クラウド サーバーからイベントをプルし、各サービスを使用してそれぞれのイベントを評価できます。

これらのクラウドベースのサービスは、脅威に対する防御 デバイスと Device Manager で分離されています。イベントを Cisco Cloud に送信する必要があるサービスを使用することを選択する場合は、[デバイス（Device）]>[システム設定（System Settings）]>[クラウドサービス（Cloud Services）] ページで接続を有効にする必要があります。「[Cisco Cloud へのイベントの送信](#)（970 ページ）」を参照してください。

トラフィックおよびシステム ダッシュボードのモニタリング

システムにはいくつかのダッシュボードが含まれており、デバイスを通過するトラフィックやセキュリティポリシーの結果の分析に使用できます。ダッシュボード情報は、構成全体の有効性を評価し、ネットワークの問題を特定して解決するために使用します。

高可用性グループ内の装置のダッシュボードには、そのデバイスの統計情報のみ表示されません。統計情報は装置間で同期されません。



- (注) トラフィック関連のダッシュボードで使用されるデータは、接続またはファイルロギングを有効にするアクセス制御ルール、およびロギングを許可するその他のセキュリティポリシーから収集されます。ダッシュボードには、ロギングが有効になっていないルールと一致するトラフィックは反映されません。問題に関連する重要な情報を記録するルールが設定されていることを確認します。ユーザ情報は、ユーザ アイデンティティを収集するアイデンティティルールが設定されている場合にのみ使用できます。最後に、侵入、ファイル、マルウェア、および URL カテゴリの情報を使用できます。ただし、これを使用できるのは、これらの機能に関するライセンスを所有しており、機能を使用するルールを設定している場合のみです。

手順

- ステップ 1** メイン メニューの [モニタリング（Monitoring）] をクリックして、[ダッシュボード（Dashboards）] ページを開きます。

ダッシュボードのグラフおよびテーブルに表示されているデータを制御するには、事前定義された時間範囲（過去 1 時間、過去 1 週間など）を選択するか、特定の開始時間と終了時間を指定してカスタムの時間範囲を定義することができます。

トラフィック関連のダッシュボードには、次のタイプのディスプレイがあります。

- [上位 5 つの棒グラフ (Top 5 bar graphs)] : これらは、[ネットワークの概要 (Network Overview)] ダッシュボードに表示され、項目ごとのサマリー ダッシュボードには、ダッシュボード テーブルで特定のアイテムをクリックしたかどうかが表示されます。[トランザクション (Transactions)] または [データ使用 (Data Usage)] (送受信バイト数の合計) のカウント間で情報を切り替えることができます。さらに、すべてのトランザクション、許可トランザクション、拒否トランザクションの表示を切り替えることもできます。グラフと関連付けられている表を確認する場合は、[追加表示 (View More)] をクリックします。
- [テーブル (Tables)] : テーブルには、特定のタイプの項目（アプリケーションまたは URL カテゴリなど）およびその項目の合計トランザクション数、許可トランザクション数、ブロックトランザクション数、データ使用量、および送受信バイト数が表示されます。未加工の [値 (Values)] と [パーセンテージ (Percentages)] 間の数字は切り替えることができ、上位 10、100、または 1000 エントリが表示されます。項目がリンクの場合は、そのリンクをクリックしてサマリー ダッシュボードとその詳細情報を表示できます。

ステップ 2 目次にある [ダッシュボード (Dashboard)] リンクをクリックして、次のデータのダッシュボードを表示します。

- [ネットワークの概要 (Network Overview)] : ネットワークのトラフィックに関するサマリー情報を表示します。これには、一致したアクセスルール（ポリシー）、トラフィックを開始したユーザ、接続で使用されたアプリケーション、一致した侵入シグネチャ、アクセスされた URL の URL カテゴリ、および最も頻繁に接続される宛先が含まれます。
- [ユーザ (Users)] : ネットワークの上位ユーザを示します。ユーザ情報を表示するには、ID ポリシーを設定する必要があります。ユーザアイデンティティがない場合は、送信元 IP アドレスが含まれます。以下の特殊なエンティティが表示される場合があります。
 - [認証失敗 (Failed Authentication)] : ユーザが認証を求められ、有効なユーザ名/パスワードを入力できずに最大試行回数に達しました。認証の失敗により、ユーザがネットワークにアクセスできなくなることはありませんが、このようなユーザに対してネットワーク アクセスを制限するアクセスルールを作成できます。
 - [ゲスト (Guest)] : ゲストユーザは [認証失敗 (Failed Authentication)] ユーザと似ていますが、アイデンティティルールでこのようなユーザがゲストと呼ばれるように設定されている点で異なります。ゲストユーザが認証を求められましたが、認証できずに最大試行回数に達しました。
 - [認証不要 (No Authentication Required)] : ユーザの接続が、認証不要と指定されているアイデンティティルールに一致したため、ユーザは認証を求められませんでした。

- [不明 (Unknown)] : IP アドレスのユーザマッピングがないため、認証失敗の記録がありません。通常、これは、HTTP トラフィックがそのアドレスからまだ見られてないことを意味します。
- [アプリケーション (Applications)] : ネットワークで使用されている上位アプリケーション (HTTP など) を示します。この情報は、インスペクションを実行済みの接続にのみ提供されます。接続にインスペクションが行われるのは、「許可」ルールと一致した場合、および、ゾーン、アドレス、およびポート以外の条件を使用するブロックルールと一致した場合です。そのため、インスペクションが必要なルールにヒットする前に接続が信頼またはブロックされている場合、アプリケーション情報は使用できません。
- [Web アプリケーション (Web Applications)] : ネットワークで使用されている上位 Web アプリケーション (Google など) を示します。Web アプリケーション情報を収集するための条件は、アプリケーション ダッシュボードの場合と同じです。
- [URL カテゴリ (URL Categories)] : 参照する Web サイトのカテゴリに基づいて、ネットワークで使用されている Web サイトのカテゴリ (ギャンブルや教育機関など) を示します。この情報を入手するには、トラフィック一致基準として URL カテゴリを使用する少なくとも1つのアクセス制御ルールが存在する必要があります。情報は、ルールに一致するトラフィック、またはルールに一致するかどうかを判断するためにインスペクションを実行する必要があるトラフィックに関してのみ提供されます。最初の Web カテゴリのアクセス コントロールルールよりも前にあるルールと一致する接続に関するカテゴリ (またはレピュテーション) 情報は表示されません。
- [アクセスおよび SI ルール (Access And SI Rules)] : ネットワーク トラフィックで一致した上位アクセスルールおよびセキュリティ インテリジェンス ルールに相当するものを示します。
- [ゾーン (Zones)] : デバイスに入ってから出ていくトラフィックの上位セキュリティゾーンのペアを示します。
- [宛先 (Destinations)] : ネットワーク トラフィックの宛先を示します。
- [攻撃者 (Attackers)] : 侵入イベントをトリガーする接続の送信元である、上位の攻撃者を示します。この情報を表示するには、アクセスルールで侵入ポリシーを設定する必要があります。
- [ターゲット (Targets)] : 攻撃の犠牲者である、侵入イベントの上位ターゲットを示します。この情報を表示するには、アクセスルールで侵入ポリシーを設定する必要があります。
- [脅威 (Threats)] : トリガーされた上位の侵入ルールを示します。この情報を表示するには、アクセスルールで侵入ポリシーを設定する必要があります。
- [ファイルログ (File Logs)] : ネットワーク トラフィックに表示される上位のファイルタイプを示します。この情報を表示するには、アクセスルールにファイルポリシーを設定する必要があります。
- [マルウェア (Malware)] : 上位マルウェアのアクションとディスポジションの組み合わせを示します。ドリルダウンして関連付けられているファイルタイプの情報を参照できま

す。この情報を表示するには、アクセスルールにファイル ポリシーを設定する必要があります。

- 可能なアクション：マルウェアクラウドルックアップ、ブロック、アーカイブブロック（暗号化）、検出、カスタム検出、クラウドルックアップのタイムアウト、マルウェアブロック、アーカイブブロック（深さ超過）、カスタム検出ブロック、TIDブロック、アーカイブブロック（検査失敗）。
- 可能なディスポジション：マルウェア、不明、クリーン、カスタム検出、使用不可。
- [SSL復号（SSL Decryption）]：デバイスを経由した暗号化トラフィックとプレーンテキストトラフィックの内訳、および SSL 復号ルールに従った暗号化トラフィックの復号方法の内訳を示します。
- [システム（System）]：インターフェイスとそのステータス（マウスをインターフェイスに合わせると IP アドレスが表示される）、全体的なシステムの平均スループット（最大 1 時間で 5 分間のバケット、より長い期間で 1 時間のバケット）、およびシステム イベント、CPU 使用率、メモリ使用率、ディスク使用率に関する概要情報の表示を含む、システムの全体図を示します。また、スループット グラフは、すべてのインターフェイスではなく、特定のインターフェイスに限定して表示できます。

（注）

[システム（System）] ダッシュボードに表示される情報は、全体的なシステムレベルの情報です。デバイスの CLI にログインすると、さまざまなコマンドを使用して詳細情報を確認できます。たとえば、**show cpu** および **show memory** コマンドには、他の詳細を示すパラメータが含まれますが、これらのダッシュボードには **show cpu system** および **show memory system** コマンドからのデータが表示されます。

ステップ 3 目次でこれらのリンクをクリックすることもできます。

- [イベント（Events）]：発生したイベントを表示します。個々のアクセスルールに関連する接続イベントを表示するには、それぞれのアクセスルールで接続のログギングを有効にする必要があります。また、セキュリティ インテリジェンス ポリシーおよび SSL 復号ルールでログギングを有効にして、セキュリティ インテリジェンス イベントおよびその他の接続イベントデータを参照します。これらのイベントは、ユーザの接続の問題の解決に有効です。
- [セッション（Sessions）]：Device Manager ユーザーセッションを表示および管理します。詳細については、「[Device Manager ユーザーセッションの管理（1016 ページ）](#)」を参照してください。

コマンドラインを使用した追加統計情報のモニタリング

Device Manager ダッシュボードには、デバイスを介して移動するトラフィックや一般的なシステム使用状況に関連するさまざまな統計情報が表示されます。ダッシュボードが対応していな

い領域に関する追加情報は、CLI コンソールを使用するか、またはデバイス CLI にログインすることで得られます（[コマンドライン インターフェイス \(CLI\) へのログイン \(9 ページ\)](#)を参照）。

CLI にはこうした統計情報を提供するためのさまざまな **show** コマンドが含まれます。CLI は一般的なトラブルシューティングにも使用することが可能で、**ping** および **traceroute** といったコマンドが含まれます。ほとんどの **show** コマンドには、統計情報を 0 にリセットする **clear** コマンドがあります（CLI コンソールから統計情報をクリアすることはできません）。

コマンドのドキュメントは、[Cisco Firepower Threat Defense コマンド リファレンス](http://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html)、http://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html にあります。

たとえば、次のコマンドが役に立ちます。

- **show nat** は NAT ルールのヒット数を表示します。
- **show xlate** はアクティブな実際の NAT 変換を表示します。
- **show conn** はデバイスを経由する現在の接続に関する情報を提供します。
- **show dhcpd** はインターフェイスで設定した DHCP サーバに関する情報を提供します。
- **show interface** は各インターフェイスの使用状況の統計情報を提供します。

イベントの表示

ロギングを有効にしたセキュリティ ポリシーによって生成されるイベントを表示できます。また、イベントは、トリガーされた侵入ポリシーとファイル ポリシーから生成されます。

イベントビューアのテーブルには、生成されるイベントがリアルタイムで表示されます。新しいイベントが生成されるごとに、古いイベントが徐々にテーブルから削除されます。

始める前に

特定のタイプのイベントが生成されるかどうかは、関連するポリシーと一致する条件に加えて、次の内容によって決まります。

- 接続イベント：アクセスルールは、接続ロギングを有効化する必要があります。また、セキュリティ インテリジェンス ポリシーおよび SSL 復号ルールで接続ロギングを有効にすることもできます。
- 侵入イベント：アクセスルールで侵入ポリシーを適用する必要があります。
- ファイルおよびマルウェア イベント：アクセスルールでファイルポリシーを適用し、ファイルロギングを有効にする必要があります。
- セキュリティ インテリジェンス イベント：セキュリティ インテリジェンス ポリシーを有効にして設定し、ロギングを有効にする必要があります。

手順

ステップ 1 メイン メニューで [監視 (Monitoring)] をクリックします。

ステップ 2 目次から [イベント (Events)] を選択します。

イベントビューアでは、イベントがタイプごとにタブで表示されます。詳細については、[イベント タイプ \(123 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 表示するイベント タイプのタブをクリックします。

イベント リストでは次の操作を行えます。

- [一時停止 (Pause)] をクリックして、新しいイベントが追加されるのを停止し、イベントを注意深く分析する。[復帰 (Resume)] をクリックして、新しいイベントの表示を再開する。
- 新しいイベントが表示される頻度を更新率 (5、10、20、または 60 秒) で選択する。
- 目的の列が含まれるカスタム ビューを作成する。カスタム ビューを作成するには、タブバーにある [+] ボタンをクリックするか、[列の追加/削除 (Add/Remove Columns)] をクリックします。事前定義されたタブは変更できないため、列を追加または削除すると、新しいビューが作成されます。詳細については、[カスタム ビューの設定 \(133 ページ\)](#) を参照してください。
- カラム幅を変更する。カラムヘッダーの境界をクリックして、目的の幅までドラッグします。
- イベントの上にマウスを置いて [詳細を表示 (View Details)] ボタンをクリックし、イベントの完全な情報を表示する。イベント内のさまざまなフィールドの説明については、[イベント フィールドの説明 \(135 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 必要に応じて、さまざまなイベント属性に基づいたフィルタをテーブルに適用することで、イベントを検索することができます。

新規フィルタを作成するには、ドロップダウンリストからアトミック要素を選択してからその値を入力するか、フィルタリングの基準となる値を含むイベントテーブルのセルをクリックしてフィルタを作成します。同じカラムにある複数のセルをクリックして、それらの値に OR 条件を作成するか、異なるカラムにあるセルをクリックしてカラムの間に AND 条件を作成することができます。セルをクリックしてフィルタを作成した場合は、得られたフィルタを編集して、さらに調整することもできます。フィルタの作成ルールの詳細については、[イベントのフィルタリング \(134 ページ\)](#) を参照してください。

フィルタを作成したら、次のいずれかを実行します。

- フィルタを適用してテーブルを更新し、フィルタと一致するイベントのみが表示されるようにするには、[フィルタ (Filter)] ボタンをクリックします。

- 適用したフィルタをすべてクリアして、フィルタなしの状態にテーブルを戻すには、[フィルタ (Filter)] ボックスにある [フィルタのリセット (Reset Filters)] ボタンをクリックします。
- フィルタのいずれかのアトミック要素をクリアするには、クリアする要素の上にカーソルを置き、[X] をクリックします。[フィルタ (Filter)] ボタンをクリックします。

カスタム ビューの設定

独自のカスタムビューを作成して、イベントを表示する際、目的のカラムが簡単に表示されるようにできます。また、事前定義ビューは編集または削除できませんが、カスタムビューは編集または削除できます。

手順

ステップ 1 [モニタリング (Monitoring)] > [イベント (Events)] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 既存のカスタム（または事前定義された）ビューに基づいて新規ビューを作成するには、そのビューのタブをクリックしてから、タブの左側にある + ボタンをクリックします。
- 既存のカスタム ビューを編集するには、そのビューのタブをクリックします。

(注)

カスタムビューを削除するには、ビューのタブにある [X] ボタンをクリックします。削除すると、元に戻すことはできません。

ステップ 3 右側のイベントテーブルの上にある [カラムの追加/削除 (Add/Remove Columns)] リンクをクリックし、カラムを選択または選択解除して、ビューに含めるカラムのみが選択リストに含まれるようにします。

使用可能な（使用されていない）リストと選択されているリストの間で、カラムをクリックしてドラッグします。選択されているリスト内でカラムをクリックしてドラッグし、テーブル内でのカラムの順番（左から右に向かう）を変更することもできます。カラムについては、[イベント フィールドの説明 \(135 ページ\)](#) を参照してください。

完了したら [OK] をクリックして、カラムの変更を保存します。

(注)

事前定義されたビューを表示しながらカラムの選択を変更すると、新規ビューが作成されます。

ステップ 4 必要に応じてカラムのセパレータをクリックしてドラッグし、カラムの幅を変更します。

イベントのフィルタリング

複雑なフィルタを作成してイベントテーブルを制限し、現在関心のあるイベントのみが表示されるようにできます。次の手法を単独または組み合わせて使用して、フィルタを作成できます。

カラムをクリック

フィルタを作成する最も簡単な方法は、フィルタリングの基準となる値を含むイベントテーブルのセルをクリックすることです。セルをクリックすると、その値とフィールドの組み合わせに正しく定式化されているルールを使用して、[フィルタ (Filter)] フィールドが更新されます。ただし、この手法を使用するには、イベントの既存のリストに目的の値が含まれている必要があります。

すべてのカラムをフィルタリングすることはできません。セルのコンテンツをフィルタリングできる場合は、そのセルの上にカーソルを合わせたときに下線が表示されます。

アトミック要素の選択

[フィルタ (Filter)] フィールドをクリックして、ドロップダウン リストから必要なアトミック要素を選択した後、照合値を入力することでフィルタを作成することもできます。これらの要素には、イベントテーブル内のカラムとして表示されないイベント フィールドが含まれます。また、表示するイベントと入力された値との関係を定義する演算子が含まれます。カラムをクリックすると必ず、「equals(=)」フィルタが表示されますが、要素を選択すると、数値フィールドに「greater than(>)」または「less than(<)」も選択できるようになります。

[フィルタ (Filter)] フィールドに要素を追加する方法に関係なく、フィールドに演算子または値を入力して調整できます。[フィルタ (Filter)] をクリックしてフィルタをテーブルに適用します。

イベント フィルタの演算子

イベント フィルタには、次の演算子を使用できます。

=	等しい。イベントは指定した値と一致します。ワイルドカードを使用することはできません。
!=	等しくない。イベントは指定した値と一致しません。「等しくない」の式を作成するには、感嘆符 (!) を入力する必要があります。
>	大なり。イベントに、指定された値よりも大きい値が含まれています。この演算子はポートや IP アドレスなど、数値のみに使用できます。
<	小なり。イベントに、指定した値よりも小さい値が含まれます。この演算子は、数値のみに使用できます。

複雑なイベント フィルタのルール

複数のアトミック要素を含む複雑なフィルタを作成する場合、次のルールに注意してください。

- 同じタイプの要素には、そのタイプのすべての値の間に OR 関係があります。たとえば、Initiator IP=10.100.10.10 と Initiator IP=10.100.10.11 を含めると、トラフィックの送信元としてこれらのアドレスのいずれかを含むイベントが一致します。
- 異なるタイプの要素には、AND 関係があります。たとえば、Initiator IP=10.100.10.10 と Destination Port/ICMP Type=80 を含めると、この送信元アドレスと宛先ポートのみを含むイベントが一致します。10.100.10.10 から異なる宛先ポートへのイベントは表示されません。
- IPv4 アドレスや IPv6 アドレスなどの数値要素は範囲を指定できます。たとえば、Destination Port=50-80 を指定して、この範囲内のポートのすべてのトラフィックを対象とします。ハイフンを使用して、開始と終了の数字を区切ります。すべての数値フィールドに対して、範囲を使用できるわけではありません。たとえば、[Source] 要素に IP アドレスを範囲で指定することはできません。
- ワイルドカードまたは正規表現は使用できません。

イベント フィールドの説明

イベントには次の情報を含めることができます。イベントの詳細を表示したときに、この情報を確認できます。最も興味のある情報を表示するためにイベント ビューア テーブルに列を追加することもできます。

使用可能なフィールドの完全なリストを以下に示します。すべてのフィールドがすべてのイベントタイプに適用されるわけではありません。個別のイベントで入手可能な情報は、システムで接続が記録された方法、理由、時期によって異なる可能性があることに注意してください。

アクション (Action)

接続イベントまたはセキュリティ インテリジェンス イベントの場合、接続をロギングしたアクセス制御ルールまたはデフォルト アクションに関連付けられたアクション。

許可

明示的に許可された接続。

信頼

信頼された接続。信頼ルールによって検出された TCP 接続の最初のパケットだけが接続終了イベントを生成します。システムは、最後のセッションパケットの1時間後にイベントを生成します。

[ブロック (Block)]

ブロックされた接続。[ブロック (Block)]動作は、次の条件下で、アクセス許可ルールに関連付けることができます。

- 侵入ポリシーによってエクスプロイトがブロックされた接続。
- ファイル ポリシーによってファイルがブロックされた接続。
- セキュリティ インテリジェンスによってブロックされた接続。
- SSL ポリシーによってブロックされた接続。

デフォルトアクション

接続がデフォルト アクションによって処理されました。

ファイルイベントまたはマルウェアイベントの場合は、ファイルが一致したルールのルールアクションに関連付けられたファイル ルールアクションと、すべての関連するファイル ルールアクションのオプション。

許可された接続 (Allowed Connection)

システムがイベントのトラフィック フローを許可したかどうか。

アプリケーション (Application)

接続で検出されたアプリケーション。

アプリケーションのビジネスとの関連性 (Application Business Relevance)

接続で検出されたアプリケーショントラフィックに関連するビジネス関連性：Very High、High、Medium、Low、または Very Low。接続で検出されたアプリケーションのタイプごとに、関連するビジネスとの関連性があります。このフィールドでは、それらのうち最も低いもの（関連が最も低い）が表示されます。

アプリケーション カテゴリ、アプリケーション タグ (Application Categories、Application Tag)

アプリケーションの機能を理解するのに役立つ、アプリケーションの特性を示す基準。

アプリケーションのリスク (Application Risk)

接続中で検出されたアプリケーショントラフィックに関連付けられたリスク：Very High、High、Medium、Low、Very Low。接続で検出されたアプリケーションのタイプごとに、関連するリスクがあります。このフィールドでは、それらのうち最も高いものが表示されます。

ブロック タイプ (Block Type)

イベントでトラフィックフローが一致したアクセス制御ルールで指定されたブロックのタイプ：block または interactive block。

クライアントアプリケーション、クライアントバージョン (Client Application、Client Version)

接続で検出されたクライアントのクライアント アプリケーションとバージョン。

クライアントのビジネスとの関連性 (Client Business Relevance)

接続で検出されたクライアントトラフィックに関連付けられたビジネスとの関連性：Very High、High、Medium、Low、Very Low。接続で検出されたクライアントのタイプごとに、

ビジネスとの関連性が関連付けられます。このフィールドには、それらのうちの最も低いもの（関連性が最も薄いもの）が表示されます。

クライアント カテゴリ、クライアント タグ (Client Category、Client Tag)

アプリケーションの機能を理解するのに役立つ、アプリケーションの特性を示す基準。

クライアント リスク (Client Risk)

接続で検出されたクライアントトラフィックに関連付けられたリスク：Very High、High、Medium、Low、Very Low。接続で検出されたクライアントのタイプごとに、リスクが関連付けられます。このフィールドには、それらのうちの最も高いものが表示されます。

接続 (Connection)

内部的に生成された、トラフィック フローの一意の ID。

接続ブロックタイプ インジケータ (Connection Blocktype Indicator)

イベントでトラフィックフローが一致したアクセス制御ルールで指定されたブロックのタイプ：block または interactive block。

接続のバイト数 (Connection Bytes)

接続の合計バイト数。

接続時間 (Connection Time)

接続の開始時刻。

接続タイムスタンプ (Connection Timestamp)

接続が検出された時刻。

拒否された接続 (Denied Connection)

システムがイベントのトラフィック フローを拒否したかどうか。

宛先国または大陸 (Destination Country and Continent)

受信ホストの国と大陸。

宛先 IP

侵入、ファイル、またはマルウェア イベントで受信側ホストによって使用された IP アドレス。

宛先ポート/ICMP コード、宛先ポート、宛先 Icode (Destination Port/ICMP Code; Destination Port; Destination Icode)

セッション レスポンドによって使用されたポートまたは ICMP コード。

宛先セキュリティグループタグ、宛先セキュリティグループタグ名

宛先に関連付けられている TrustSec セキュリティグループタグの番号と名前（存在する場合）。

方向 (Direction)

ファイルの伝送方向。

判定結果 (Disposition)

ファイルの評価 :

[マルウェア (Malware)]

Secure Malware Analytics Cloudでそのファイルがマルウェアとして分類されていること、またはファイルの脅威スコアが、ファイルポリシーで定義されたマルウェアしきい値を超えていることを示します。ローカルマルウェア分析では、ファイルをマルウェアとしてマークすることもできます。

[クリーン (Clean)]

Secure Malware Analytics Cloudでそのファイルがクリーンとして分類されているか、ユーザーがファイルをクリーンリストに追加したことを示します。

不明

システムが Secure Malware Analytics Cloudに問い合わせましたが、ファイルの性質が割り当てられていませんでした。言い換えると、Secure Malware Analytics Cloudがファイルを正しく分類していませんでした。

カスタム検出

ユーザがカスタム検出リストにファイルを追加したことを示します。

対応不可

システムが Secure Malware Analytics Cloudに問い合わせることができなかったことを示します。この評価を持つイベントのパーセンテージが低く表示される場合があります。これは、想定された動作です。

[該当なし (N/A)]

ファイル検出ルールまたはファイルブロックルールでファイルが処理され、システムが Secure Malware Analytics Cloudに問い合わせなかったことを示します。

[出力インターフェイス、出力セキュリティ ゾーン (egress Interface, Egress Security Zone)]

接続がデバイスから出たインターフェイスとゾーン。

[出力仮想ルータ (Egress Virtual Router)]

宛先インターフェイスが属する仮想ルータ(存在する場合)の名前。

イベント、イベント タイプ (Event、Event Type)

イベントのタイプ。

イベント秒、イベント マイクロ秒 (Event Seconds、Event Microseconds)

イベントが検出された、秒単位およびミリ秒単位の時間。

ファイル カテゴリ (File Category)

ファイルタイプの一般的なカテゴリ : Office Documents、Archive、Multimedia、Executables、PDF files、Encoded、Graphics、System Files など。

ファイル イベント タイムスタンプ (File Event Timestamp)

ファイルまたはマルウェア ファイルが作成された日時。

ファイル名 (File Name)

ファイルの名前です。

ファイル ルール アクション (File Rule Action)

ファイルを検出したファイル ポリシー ルールに関連付けられたアクション、すべての関連するファイルルール アクションのオプション。

[ファイルSHA-256 (File SHA-256)]

ファイルの SHA-256 ハッシュ値。

ファイル サイズ (KB) (File Size (KB))

キロバイト単位のファイルのサイズ。ファイルサイズは、システムが受信を完了する前にファイルをブロックした場合に空白になる可能性があります。

ファイル タイプ (File Type)

ファイルのタイプ (HTML や MSEXE など) 。

ファイル/マルウェア ポリシー (File/Malware Policy)

イベントの生成に関連付けられたファイル ポリシー。

ファイルログ ブロックタイプ インジケータ (Filelog Blocktype Indicator)

イベントでトラフィック フローが一致したファイル ルールで指定されたブロックのタイプ: block または interactive block。

ファイアウォール ポリシー ルール。ファイアウォール ルール (Firewall Policy Rule、Firewall Rule)

接続を処理したアクセス制御ルールまたはデフォルト アクション。

最初のパケット (First Packet)

セッションの最初のパケットが検出された日時。

HTTP Referrer

接続で検出された HTTP トラフィックの要求された URL の参照元を表す HTTP 参照元 (別の URL へのリンクを提供した Web サイトや別の URL からのリンクをインポートした Web サイトなど) 。

HTTP レスポンス (HTTP Response)

接続で、クライアントの HTTP 要求に応答して送信された HTTP ステータス コード。

IDS 分類 (IDS Classification)

イベントを生成したルールが属している分類。

入力インターフェイス、入力セキュリティ ゾーン (Ingress Interface、Ingress Security Zone)

接続がデバイスに入ったインターフェイスとゾーン。

[入力仮想ルータ (Ingress Virtual Router)]

送信元インターフェイスが属する仮想ルータ(存在する場合)の名前。

イニシエータ バイト、イニシエータ パケット (Initiator Bytes、Initiator Packets)

セッション イニシエータから送信されたバイトまたはパケットの総数。

イニシエータの国と大陸 (Initiator Country and Continent)

セッションを開始したホストの国と大陸。イニシエータ IP アドレスがルーティング可能な場合にのみ使用できます。

イニシエータ IP (Initiator IP)

接続またはセキュリティ インテリジェンス イベントでセッションを開始したホスト IP アドレス (および DNS 解決が有効になっている場合のホスト名)。

インライン結果 (Inline Result)

システムがインラインモードで動作している場合に、侵入イベントをトリガーしたパケットをドロップしたまたはドロップするはずだったかどうか。空白は、トリガーされたルールが Drop and Generate Events に設定されていなかったことを示します。

侵入ポリシー (Intrusion Policy)

イベントを生成したルールが有効になっていた侵入ポリシー。

IPS ブロックタイプ インジケータ (IPS Blocktype Indicator)

イベントでトラフィック フローが一致した侵入ルールのアクション。

最後のパケット (Last Packet)

セッションの最後のパケットが検出された日時。

MPLS ラベル (MPLS Label)

この侵入イベントをトリガーしたパケットに関連付けられたマルチプロトコル ラベル スイッチング ラベル。

マルウェア ブロックタイプ インジケータ (Malware Blocktype Indicator)

イベントでトラフィック フローが一致したファイル ルールで指定されたブロックのタイプ: block または interactive block。

メッセージ (Message)

侵入イベントの場合は、イベントの説明テキスト。マルウェアまたはファイルイベントの場合は、マルウェア イベントに関連付けられた追加情報。

NAT宛先IP

ネットワークアドレス変換 (NAT) の対象となるパケットの場合は、変換後の宛先 IP アドレス。

NAT宛先ポート

ネットワークアドレス変換（NAT）の対象となるパケットの場合は、変換後の宛先ポート。

NAT送信元IP

ネットワークアドレス変換（NAT）の対象となるパケットの場合は、変換後の送信元 IP アドレス。

NAT送信元ポート

ネットワークアドレス変換（NAT）の対象となるパケットの場合は、変換後の送信元ポート。

NetBIOS ドメイン（NetBIOS Domain）

セッションで使用された NetBIOS ドメイン。

元のクライアントの国と大陸（Original Client Country and Continent）

セッションを開始した元のクライアント ホストの国と大陸。元の IP アドレスがルーティング可能な場合にのみ使用できます。

元のクライアント IP（Original Client IP）

HTTP 接続を開始したクライアントの元の IP アドレス。このアドレスは、X-Forwarded-For（XFF）ヘッダー フィールド、True-Client-IP HTTP ヘッダー フィールド、またはそれらの等価物から抽出されます。

ポリシー、ポリシー リビジョン（Policy、Policy Revision）

イベントに関連付けられたアクセス（ファイアウォール）ルールを含む、アクセスコントロール ポリシーとそのリビジョン。

優先度（Priority）

Cisco Talos Intelligence Group（Talos）：[高（high）]、[中（medium）]、または[低（low）]によって決まるイベントの優先度。

プロトコル（Protocol）

接続に使用されたトランスポート プロトコル。

理由（Reason）

次の表に説明する状況で、接続がロギングされた理由。これ以外の場合、このフィールドは空です。

理由	説明
[DNS ブロック（DNS Block）]	システムは検査を行わず、ドメイン名とセキュリティ インテリジェンス データに基づいて接続を拒否しました。DNS ブロックの理由は、DNS ルール アクションに応じて、Block、Domain not found、または Sinkhole のアクションとペア化されます。

理由	説明
DNS モニタ	システムが、ドメイン名とセキュリティ インテリジェンス データに基づいて接続を拒否するはずが、接続を拒否するのではなくモニタするように設定されていました。
エレファントフロー	接続は、エレファントフローと見なすのに十分な大きさです。このフローは、システム全体のパフォーマンスに影響を与えるのに十分な大きさです。デフォルトでは、エレファントフローとは 1GB/10 秒を超えるフローです。 system support elephant-flow-detection コマンドを使用して、デバイス CLI でエレファントフローを識別するためのバイトしきい値と時間しきい値を調整できます。
ファイル ブロック	接続に、システムが送信を阻止するファイルまたはマルウェア ファイルが含まれていました。ファイル ブロックの理由は、必ず、Block のアクションとペア化されます。
ファイル カスタム 検出	接続に、システムが送信を阻止するカスタム検出リストにあるファイルが含まれていました。
ファイル モニタ	システムが、接続に特定のタイプのファイルを検出しました。
ファイル再開許可	ファイル伝送が、元はファイルブロックルールまたはマルウェア ファイルブロックルールによってブロックされました。ファイルを許可する新しいアクセス コントロール ポリシーが展開された後、HTTP セッションが自動的に再開しました。
[ファイル復帰ブロック (File Resume Block)]	ファイル伝送が、元はファイル検出ルールまたはマルウェア クラウドルックアップファイルルールによって許可されました。ファイルをブロックする新しいアクセスコントロールポリシーが展開された後、HTTP セッションが自動的に停止しました。
[侵入ブロック (Intrusion Block)]	システムが、接続で検出しエクスプロイト (侵入ポリシー違反) をブロックしたまたはブロックするはずでした。侵入ブロックの理由は、ブロックされたエクスプロイトの場合はBlock のアクションと、ブロックされるはずだったエクスプロイトの場合は Allow のアクションとペア化されます。
侵入モニタ	システムが、接続でエクスプロイト (侵入ポリシー違反) を検出しましたがブロックしませんでした。これは、トリガーされた侵入ルールの状態が Generate Events に設定されている場合に発生します。
IP ブロック	システムが検査する前に、IP アドレスとセキュリティ インテリジェンス データに基づいて接続を拒否しました。IP ブロックの理由は、必ず、Block のアクションとペア化されます。

理由	説明
保留中のルールの場合 (Pending Rule Match)	これは、どのルールがマッチしているかをシステムが判断できるようになる前に接続が終了した場合に発生します。これらの短期間の接続 (DNS ルックアップなど) は、通常、ファイアウォールを介して許可されます。特に、アクセス制御ポリシーの初めの部分にアプリケーションベースのルールがある場合、システムは少数の packets を検査して、ルールがマッチしているか判断します。
SSL ブロック (SSL Block)	システムが、暗号化された接続を SSL インспекション設定に基づいてブロックしました。[SSL ブロック (SSL Block)] の理由は必ず [ブロック (Block)] のアクションと対として組み合わせられます。
[URL ブロック (URL Block)]	システムが検査する前に、URL とセキュリティインテリジェンスデータに基づいて接続を拒否しました。URL ブロックの理由は、必ず、Block のアクションとペア化されます。

受信時間 (Receive Times)

イベントが生成された日時。

参照ホスト (Referenced Host)

接続のプロトコルが HTTP または HTTPS の場合は、このフィールドにそれぞれのプロトコルで使用されていたホスト名が表示されます。

レスポнда バイト、レスポнда パケット (Responder Bytes, Responder Packets)

セッション レスポндаから送信されたバイトまたはパケットの総数。

レスポндаの国と大陸 (Responder Country and Continent)

セッションに応答したホストの国と大陸。レスポнда IP アドレスがルーティング可能な場合にのみ使用できます。

レスポнда IP (Responder IP)

接続またはセキュリティ インテリジェンス イベントのセッションレスポндаのホスト IP アドレス (および DNS 解決が有効になっている場合のホスト名)。

SI カテゴリ ID (セキュリティ インテリジェンス カテゴリ)

ネットワーク名や URL オブジェクト名、フィードカテゴリの名前など、ブロック項目が含まれるオブジェクトの名前。

署名 (Signature)

ファイル/マルウェア イベントの署名 ID。

[ソースの国または大陸 (Source Country and Continent)]

送信ホストの国と大陸。送信元 IP アドレスがルーティング可能な場合にのみ使用できます。

送信元 IP (Source IP)

侵入、ファイル、マルウェア イベントで送信側ホストによって使用された IP アドレス。

送信元ポート/ICMP タイプ、送信元ポート、送信元ポート Itype (Source Port/ICMP Type, Source Port, Source Port Itype)

セッション イニシエータによって使用されたポートまたは ICMP タイプ。

送信元セキュリティグループタグ、送信元セキュリティグループタグの名前

送信元に関連付けられている TrustSec セキュリティグループタグの番号と名前（存在する場合）。

実際の SSL アクション (SSL Actual Action)

システムによって接続に適用される実際のアクション。これは期待される動作とは異なることがあります。たとえば、接続が復号化を適用するルールと一致しても、いくつかの理由で復号化できないことがあります。

アクション	説明
ブロック/リセット付きブロック (Block/Block with reset)	ブロックされた暗号化接続を表します。
復号（再署名）	再署名サーバ証明書を使用して復号された発信接続を表します。
復号（キーの交換）	置換された公開キーによる自己署名サーバ証明書を使用して復号された発信接続を表します。
復号（既知のキー）	既知の秘密キーを使用して復号された着信接続を表します。
デフォルトアクション	接続がデフォルト アクションによって処理されたことを示します。
復号しない	システムが復号化しなかった接続を表します。

SSL 証明書のフィンガープリント (SSL Certificate Fingerprint)

証明書の認証に使用する SHA ハッシュ値。

SSL 証明書ステータス (SSL Certificate Status)

これは、証明書ステータス SSL ルールの条件を設定した場合にのみ適用されます。暗号化されたトラフィックが SSL ルールと一致する場合、次のサーバ証明書のステータス値の 1 つ以上がこのフィールドに表示されます。

- 自己署名
- 有効

- 署名が無効です
- 発行者が無効です
- 期限切れ
- 不明
- まだ有効ではありません
- 破棄

復号できないトラフィックが SSL ルールと一致する場合、[チェックしていない (Not Checked)] がこのフィールドに表示されます。

SSL サイファスイート (SSL Cipher Suite)

接続に使用された暗号スイート。

予期された SSL アクション (SSL Expected Action)

接続が一致した SSL ルールで指定されたアクション。

[SSL フローフラグ (SSL Flow Flags)]

暗号化された接続の最初の 10 デバッグ レベル フラグ。

SSL フローメッセージ (SSL Flow Messages)

HELLO_REQUEST や CLIENT_HELLO など、SSL ハンドシェイク中にクライアントとサーバ間で交換された SSL/TLS メッセージ。TLS 接続で交換されたメッセージの詳細については、<http://tools.ietf.org/html/rfc5246> を参照してください。

SSL ポリシー (SSL Policy)

接続に適用された SSL 復号ポリシーの名前。

SSL ルール (SSL Rule)

接続に適用された SSL 復号ルールの名前。

SSL セッション ID (SSL Session ID)

SSL ハンドシェイク中にクライアントとサーバ間でネゴシエートされた 16 進数のセッション ID。

SSL チケット ID (SSL Ticket ID)

SSL ハンドシェイク中に送信されたセッション チケット情報の 16 進数のハッシュ値。

SSL URL カテゴリ (SSL URL Category)

SSL 復号処理中に決定された宛先 Web サーバの URL カテゴリ。

SSL バージョン (SSL Version)

接続に使用された SSL/TLS バージョン。

TCP フラグ (TCP Flags)

接続で検出された TCP フラグ。

合計パケット数 (Total Packets)

接続で送信されたパケットの総数：イニシエータ パケット + レスポンダ パケット。

URL、URL カテゴリ、URL レピュテーション、URL レピュテーション スコア (URL、URL Category、URL Reputation、URL Reputation Score)

セッション中にモニタ対象ホストによって要求された URL と、それに関連付けられたカテゴリ、レピュテーション、レピュテーション スコア（使用可能な場合）。

DNSルックアップ要求フィルタリングの場合、カテゴリとレピュテーションは[DNSクエリ]フィールドに表示されるFQDN用です。Web要求ではなくDNS要求に対してカテゴリ/レピュテーションルックアップが実行されるため、URLフィールドは空白になります。

システムが SSL アプリケーションを識別またはブロックした場合は、要求された URL が暗号化トラフィック内に存在するため、システムはSSL証明書に基づいてトラフィックを識別します。したがって、SSL アプリケーションの場合は、URL が証明書に含まれている共通名を示します。

ユーザ (user)

イニシエータ IP アドレスに関連付けられたユーザ。

VLAN

イベントをトリガーしたパケットに関連付けられた一番内側の VLAN ID。

Web アプリケーションのビジネスとの関連性 (Web App Business Relevance)

接続で検出された Web アプリケーション トラフィックに関連付けられたビジネスとの関連性：Very High、High、Medium、Low、Very Low。接続で検出された Web アプリケーションのタイプごとに、ビジネスとの関連性が関連付けられます。このフィールドには、それらのうちの最も低いもの（関連性が最も薄いもの）が表示されます。

Web アプリケーション カテゴリ、Web アプリケーション タグ (Web App Categories、Web App Tag)

Web アプリケーションの機能を理解するのに役立つ、Web アプリケーションの特性を示す基準。

Web アプリケーション リスク (Web App Risk)

接続で検出された Web アプリケーション トラフィックに関連付けられたリスク：Very High、High、Medium、Low、Very Low。接続で検出された Web アプリケーションのタイプごとに、リスクが関連付けられます。このフィールドには、それらのうちの最も高いものが表示されます。

Web アプリケーション (Web Application)

接続で検出された HTTP トラフィックの内容または要求された URL を表す Web アプリケーション。

Web アプリケーションがイベントの URL と一致しなかった場合は、そのトラフィックがアドバタイズメントトラフィックなどの参照先のトラフィックの可能性があります。システムが参照先のトラフィックを検出すると、参照元のアプリケーション（使用可能な場合）を保存し、そのアプリケーションを Web アプリケーションとしてリストします。



第 5 章

ストリーミングテレメトリ

統合ダッシュボードと CLI を使用したデバイスのモニタリングに加えて、テレメトリ コレクタにデータを送信するようにデバイスを構成できます。コレクタを使用して、ネットワーク内の複数のデバイスをモニターできます。

次のトピックでは、ストリーミングテレメトリを使用するための要件と、テレメトリ コレクタのセットアップと Threat Defense デバイスへの接続方法について説明します。

- [ストリーミングテレメトリについて \(149 ページ\)](#)
- [ストリーミングテレメトリに関するガイドライン \(149 ページ\)](#)
- [ストリーミングテレメトリを有効にする \(150 ページ\)](#)
- [テレメトリ コレクタのセットアップ \(155 ページ\)](#)
- [テレメトリ ストリーミングのトラブルシューティング \(160 ページ\)](#)

ストリーミング テレメトリについて

Google リモートプロシージャコール (gRPC) を使用してデータを収集する外部テレメトリコレクタに、システムの正常性とテレメトリデータを送信するようにデバイスを設定できます。その後、テレメトリコレクタを使用してデバイスをモニターし、カスタムテレメトリソリューションと統合できます。

デバイスとテレメトリコレクタの間の接続では、相互トランスポート層セキュリティ (mTLS) 認証を使用してセキュリティを確保します。デバイスとテレメトリコレクタは、クライアントとサーバーのアイデンティティを確認するために証明書を交換し、データ転送を暗号化します。デバイスは、テレメトリサーバーへの接続を開始します (ダイヤルアウトモデル)。

ストリーミング テレメトリに関するガイドライン

ストリーミングテレメトリを構成するときは、次のガイドラインに留意してください。

- IPv4 アドレスのみを使用できます。
- Threat Defense デバイスとテレメトリコレクタに使用される証明書は、通信を確保するために同じ認証局 (CA) によって署名されている必要があります。Threat Defense デバイス

に必要な証明書を作成し（または Threat Defense Web サーバー用に設定された証明書を再利用することにし）、テレメトリ コレクタで使用する証明書をダウンロードしてください。

- 各 Threat Defense デバイスは、単一のテレメトリ コレクタにのみ接続できます。ただし、単一のコレクタを複数の Threat Defense デバイスで使用することはできません。
- 高可用性で構成されているデバイスの場合、各デバイスでストリーミングテレメトリを個別に構成する必要があります。テレメトリ構成が、アクティブ ユニットからスタンバイ ユニットに複製されることはありません。必要であれば、プライマリユニットとセカンダリ ユニットの構成して、異なるテレメトリコレクタを使用することができます。
- Threat Defense デバイスは、ストリーミング テレメトリに次のポートを使用します。
 - 制御チャンネル：9276 over HTTP
 - データ チャンネル：8087 over HTTP
 - ポート 9273 および 9276 は診断に使用されます。
- 次の Threat Defense API を使用してリモートのプロシージャを記述し、テレメトリ コレクタから Threat Defense デバイスを構成することができます。
 - /object/internalcertificates
 - /object/externalcacertificates
 - /object/networks
 - /devicesettings/default/telemetrystreamingconfig

ストリーミング テレメトリを有効にする

テレメトリ コレクタをセットアップしたら、Threat Defense デバイスとテレメトリ サーバー間の接続を構成できます。接続が構成されると、Threat Defense デバイスは自動的に接続のセットアップを試み、成功すると、コレクタが要求するのと同じ頻度でデータをストリーミングします。

始める前に

テレメトリ コレクタが [テレメトリ コレクタのセットアップ \(155 ページ\)](#) に記載されている要件を満たしていることを確認します。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] を選択し、[+] > [内部証明書の追加 (Add Internal Certificate)] を選択し、Threat Defense デバイスでセキュアな通信のために使用され

るクライアント証明書をアップロードします。詳細については、[内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 2 [オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] を選択し、[+] > [信頼される CA 証明書の追加 (Add Trusted CA Certificate)] を選択し、Threat Defense デバイスでコレクタのアイデンティティを確認するために使用される CA 証明書をアップロードします。詳細については、[信頼できる CA 証明書のアップロード \(206 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 [オブジェクト (Objects)] > [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] を選択して、テレメトリ コレクタを識別するネットワーク オブジェクトを作成します。詳細については、[ネットワーク オブジェクトとグループの設定 \(182 ページ\)](#) を参照してください。

コレクタの IPv4 アドレスを使用してホスト オブジェクトを作成するか、telemetry.domain.com などのコレクタの完全修飾名を含む FQDN オブジェクトを作成します。FQDN は IPv4 アドレスに解決する必要があり、名前が正しく変換されるように DNS も構成する必要があります。

ステップ 4 ネットワーク オブジェクトの ID を取得します。

- a) 詳細オプション ボタン  から [API エクスプローラ (API Explorer)] を選択して、API ページにアクセスします。
- b) [NetworkObject] で、[GET /object/networks] を選択します。
- c) [パラメータ (Parameters)] セクションの [フィルタ (Filter)] フィールドで、オブジェクト名と等しくなるように出力のフィルタを設定します。たとえば、作成したネットワーク オブジェクトが TelemetryCollector の場合、フィルタは次のようになります。

名前: TelemetryCollector

- d) [GET /object/networks] セクションの下部までスクロールし、[試行する (Try It Out)] をクリックします。
- e) 呼び出しが正しい場合は、次のような 200 応答コードと意味のあるオブジェクト本体を取得できるはずです。id エントリを探し、値をメモします。この例では、id の値は **79ee2ea9-76b7-11ef-9515-f5b34b7d9531** です。

```
{
  "items": [
    {
      "version": "p4qjmqtn5c5e",
      "name": "TelemetryCollector",
      "description": null,
      "subType": "HOST",
      "value": "10.1.1.1",
      "isSystemDefined": false,
      "dnsResolution": "IPV4_AND_IPV6",
      "id": "79ee2ea9-76b7-11ef-9515-f5b34b7d9531",
      "type": "networkobject",
      "links": {
        "self":
          "https://ftdl.domain.com/api/fdm/v6/object/networks/79ee2ea9-76b7-11ef-9515-f5b34b7d9531"
      }
    }
  ]
}
```

ステップ 5 内部証明書オブジェクトの ID を取得します。

- a) API エクスプローラの [証明書 (Certificate)] で、[GET /object/internalcertificates] を選択します。
- b) [フィルタ (Filter)] フィールドで、証明書名でフィルタ処理します。たとえば、Threat Defense デバイスの内部証明書が FTD1Cert の場合、フィルタは次のようになります。

名前 : FTD1Cert

- c) [GET /object/internalcertificates] セクションの下部までスクロールし、[試行する (Try It Out)] をクリックします。
- d) 呼び出しが正しい場合は、次のような 200 応答コードと意味のあるオブジェクト本体を取得できるはずです。id エントリを探し、値をメモします。この例では、id の値は **d874dfa3-7423-11ef-b3a0-09429aedc3d3** です。

```
{
  "items": [
    {
      "version": "gr573izgdsj2o",
      "name": "FTD1Cert",
      ...
      ATTRIBUTES REMOVED
      ...
      "id": "d874dfa3-7423-11ef-b3a0-09429aedc3d3",
      "type": "internalcertificate",
      "links": {
        "self":
      "https://ftdl.domain.com/api/fdm/v6/object/internalcertificates/d874dfa3-7423-11ef-b3a0-09429aedc3d3"
      }
    }
  ]
}
```

ステップ 6 信頼できる CA 証明書オブジェクトの ID を取得します。

- a) API エクスプローラの [証明書 (Certificate)] で、[GET /object/externalcacertificates] を選択します。
- b) [フィルタ (Filter)] フィールドで、証明書名でフィルタ処理します。たとえば、テレメトリ コレクタの信頼できる CA 証明書が TelemetryCollectorCert である場合、フィルタは次のようになります。

名前 : TelemetryCollectorCert

- c) [GET /object/externalcacertificates] セクションの下部までスクロールし、[試行する (Try It Out)] をクリックします。
- d) 呼び出しが正しい場合は、次のような 200 応答コードと意味のあるオブジェクト本体を取得できるはずです。id エントリを探し、値をメモします。この例では、id の値は **c3d925b4-7423-11ef-b3a0-bf815c0136ac** です。

```
{
  "items": [
    {
      "version": "fkry47nobvcnu",
      "name": "TelemetryCollectorCert",
      ...
      ATTRIBUTES REMOVED
      ...
      "id": "c3d925b4-7423-11ef-b3a0-bf815c0136ac",
    }
  ]
}
```

```

        "type": "externalcacertificate",
        "links": {
            "self":
"https://ftdl.domain.com/api/fdm/v6/object/externalcacertificates/c3d925b4-7423-11ef-b3a0-bf815c0136ac"
        }
    }
}

```

ステップ 7 Threat Defense デバイスとテレメトリ コレクタ間の接続を構成します。

- a) API エクスプローラの [TelemetryStreamingConfig] で、[POST /devicesettings/default/telemetrystreamingconfig] を選択します。
- b) [パラメータ (Parameters)] > [本文 (Body)] で、[値 (Value)] 編集ボックスに次のテンプレートを入力します（非表示の無効な文字がコピーされないようにしてください）。各フィールドの意味は、このテンプレートで説明されています。<> 文字内の説明は、置換が必要な変数です。他の値は、表示されているとおりにする必要があります。カンマ、カッコ、コロン、および {} の配置は重要です。

```

{
  "name": "<a unique name for the gRPC streaming config API>",
  "connectionMode": "DIAL_OUT",
  "port": "<port on which the collector is waiting for connections from the
        Threat Defense device, 1-65535. Check the collector configuration
        for the right value.>",
  "targetHost": {
    "name": "<name of the network object that identifies the telemetry collector
host>",
    "id": "<ID of the network object>",
    "type": "networkobject"
  },
  "clientCertificate": {
    "name": "<The name of the internal certificate that identifies the Threat
Defense device>",
    "id": "<ID of the internal certificate object.>",
    "type": "internalcertificate"
  },
  "caCertificate": {
    "name": "<The name of the trusted CA certificate for the telemetry collector>",

    "id": "<ID of the trusted CA certificate>",
    "type": "externalcacertificate"
  },
  "type": "telemetrystreamingconfig"
}

```

例：

この手順に示されている例の値を指定すると、以下が正しいペイロードとなります。名前とポートの値は前の手順で決定されたものではないことに注意してください。必要に応じて変更できます。

```

{
  "name": "YourCompanyTelemetry",
  "connectionMode": "DIAL_OUT",
  "port": 50051,
  "targetHost": {
    "name": "TelemetryCollector",
    "id": "79ee2ea9-76b7-11ef-9515-f5b34b7d9531",
    "type": "networkobject"
  }
}

```

```

    },
    "clientCertificate": {
      "name": "FTDlCert",
      "id": "d874dfa3-7423-11ef-b3a0-09429aedc3d3",
      "type": "internalcertificate"
    },
    "caCertificate": {
      "name": "TelemetryCollectorCert",
      "id": "c3d925b4-7423-11ef-b3a0-bf815c0136ac",
      "type": "externalcacertificate"
    },
    "type": "telemetrystreamingconfig"
  }
}

```

- c) セクションの下部までスクロールし、**【試行する (Try It Out)】** をクリックします。
- d) 200 の応答コードを探します。他にコードが表示された場合は、エラーを修正して再試行してください。成功すると、応答の本体は次のようなものになります。

```

{
  "version": "jfwu476cue32n",
  "name": "YourCompanyTelemetry",
  "connectionMode": "DIAL_OUT",
  "port": 50051,
  "targetHost": {
    "version": "p4qjmqtn5c5e",
    "name": "TelemetryCollector",
    "id": "79ee2ea9-76b7-11ef-9515-f5b34b7d9531",
    "type": "networkobject"
  },
  "clientCertificate": {
    "version": "gr573izgdsj2o",
    "name": "FTDlCert",
    "id": "d874dfa3-7423-11ef-b3a0-09429aedc3d3",
    "type": "internalcertificate"
  },
  "caCertificate": {
    "version": "fkry47nobvcnu",
    "name": "TelemetryCollectorCert",
    "id": "c3d925b4-7423-11ef-b3a0-bf815c0136ac",
    "type": "externalcacertificate"
  },
  "id": "b6dc6f28-76c1-11ef-9515-8ff976794f92",
  "type": "telemetrystreamingconfig",
  "links": {
    "self":
      "https://ftdl.domain.com/api/ftm/v6/devicesettings/default/telemetrystreamingconfig/b6dc6f28-76c1-11ef-9515-8ff976794f92"
  }
}

```

次のタスク

テレメトリ ストリーミングが正しく機能していることを確認する方法については、次のトピックを参照してください。

- [テレメトリ ストリーミング サービスのステータスの確認 \(160 ページ\)](#)
- [テレメトリ コレクタがデータを受信することを確認する \(162 ページ\)](#)

テレメトリ コレクタのセットアップ

Threat Defense デバイスからテレメトリ データを受信し、情報を集約して、組織の運用要件を満たせるようわかりやすい方法で表示するには、独自のテレメトリ コレクタを用意する必要があります（市販またはカスタムのいずれか）。次に、gRPC コールを使用して Threat Defense デバイスで実行されている Telegraf コンポーネントからデータを収集するようにテレメトリ コレクタをセットアップする方法についての一般的な情報を示します。

手順

-
- ステップ 1 テレメトリ コレクタが[テレメトリ コレクタに関するガイドライン（155 ページ）](#)に記載された要件を満たしていることを確認してください。
 - ステップ 2 [テレメトリ コレクタでのプロトコル定義（156 ページ）](#)の説明に従って、proto 定義を構成します。
 - ステップ 3 [Threat Defense デバイスとテレメトリ コレクタ間の通信（157 ページ）](#)で説明されているように、テレメトリ コレクタが Threat Defense デバイスで実行されている Telegraf クライアントを受信して応答できることを確認します。
-

テレメトリ コレクタに関するガイドライン

- Windows、Mac、Linux、または UNIX サーバーでクライアントを実行できます。
- テレメトリ コレクタには Go をインストールする必要があります。Go の最小バージョンは 1.20 です。
- テレメトリ コレクタには IPv4 アドレスが必要であり、それを使用する Threat Defense デバイスとの直接またはプロキシ経由の適切なルーティングが必要です。接続が失われた場合、Threat Defense デバイスは 5 分ごとに接続を再試行します。
- テレメトリ コレクタのリスニング ポートは、他の目的に予約されていない有効な TCP ポート（1 ～ 65535）である必要があります。
- テレメトリ コレクタのサーバー証明書、サーバー キー、および CA 証明書は、次のパスにある必要があります。
 - サーバー キー：/root/grpc-certs/keys/server.key
 - サーバー証明書：/root/grpc-certs/keys/server.crt
 - CA 証明書：/root/grpc-certs/keys/ca.crt

- 証明書が期限切れになると、テレメトリ クライアントに認証エラーが表示され、ストリーミングが停止します。認証の問題を修正して送信を再開するには、証明書を置き換える必要があります。
- メッセージは、**Prometheus** 時系列フォーマットを使用します。クライアントはこのフォーマットを処理する必要があります。
- 次のテレメトリ コレクタはサポートされていません：
https://github.com/CiscoSE/grpc_collector。

テレメトリ コレクタでのプロトコル定義

Threat Defense デバイスは、データの構造化にプロトコル バッファを使用します。テレメトリ コレクタの `proto` 定義には、次のものが含まれている必要があります。

```
syntax = "proto3";
// Update the go_package option to a local package path
option go_package = "grpcstreaming/grpc_streaming_proto";
package proto;
service GrpcStreamingService {
    rpc DataStream (stream DataResponse) returns (stream DataRequest);
    rpc ControlStream (stream ControlResponse) returns (stream ControlRequest);
}
message ControlResponse {
    string version = 1;
    string ftd_uuid = 2;
    string hostname = 3;
    bool init_streaming = 4;
    repeated string capabilities = 5; // ['metric_streaming']
    // cancel stream acknowledgement
    bool ack = 6;
}
message ControlRequest {
    string version = 1;
    int64 interval = 2;
    repeated string metric_subscriptions = 3;
    // cancel stream
    StreamCancellationMessage cancellation_message = 4;
}
message DataResponse {
    string ftd_uuid = 1;
    repeated Metric metrics = 2;
}
message DataRequest {
    bool ack = 1;
}
message StreamCancellationMessage {
    string collector_uuid = 1;
    bool cancel_stream = 2;
}
message Tag {
    string key = 1;
    string value = 2;
}
message Metric {
    int64 timestamp = 1;
    string metricFamily = 2;
    double value = 3;
```

```
    repeated Tag tags = 4;  
    string metricType = 5; //Counter | Gauge  
}
```

Threat Defense デバイスとテレメトリ コレクタ間の通信

最初に接続を確立するために、Threat Defense デバイスは、`initial_request=True` を示すペイロードを含む gRPC 要求を、テレメトリ コレクタに送信します。要求は、その機能（「`metric_streaming`」）もアドバタイズします。

テレメトリ コレクタは、接続を確認し、コレクタがストリーミング データを受信できる時間間隔を含むメッセージで応答する必要があります。この間隔は、Threat Defense デバイスがテレメトリをコレクタにストリーミングすることになる、予想される頻度を示します。範囲は 1 分（60 秒）から 24 時間です。有効な頻度が取得されると、システムはメトリックの初期セットを送信し、要求されたレートで追加情報を提供します。

通信に使用される RPC メソッドは次のとおりです。

- ストリーミングを設定するために Threat Defense デバイスの Telegraf コンポーネントから送信される単項 RPC（制御メッセージ）。

`rpc ConfigureMetricStreaming (TelegrafControlMessage)` は `(CollectorControlMessage)` を返します。

- ストリーミング RPC（データ メッセージ）。Threat Defense デバイスの Telegraf とテレメトリ コレクタ間のメトリック データの双方向ストリーミングを促進にします。

`rpc BiDirectionalMetricStreaming (stream TelegrafDataMessage)` は `(stream CollectorDataMessage)` を返します。

次のトピックでは、テレメトリ コレクタがデバイスから受信するメッセージと、コレクタがデバイスに送信する必要があるメッセージについて詳しく説明します。

テレグラフ制御メッセージ（制御チャンネル）

テレグラフ制御メッセージは、メトリックストリーミングを開始するため、Threat Defense デバイス上の Telegraf コンポーネントからコレクタに送信されます。その中では、`init_request` フラグが `true` に設定されています。

```
message TelegrafControlMessage {  
    // Indicates the proto version used by the FTD device. First version will be 1.0  
    string version;  
  
    // Indicates the device id of the sender  
    string device_uuid;  
  
    // Indicates the device hostname of the sender  
    string hostname;  
  
    //list of strings indicating the capabilities of FTD. This will be "metric_streaming"  
    repeated string capabilities;  
  
    // Flag to initiate a collector response for configuring telemetry streaming
```



```
bool init_streaming = 1;
}
```

コレクタ制御メッセージ（制御チャネル）

コレクタ制御メッセージは、Telegraf制御メッセージへの応答としてコレクタから Threat Defense デバイスに送信されます。これには、メトリックバッチの望ましい頻度としての間隔が含まれています。範囲は1分（60秒）から24時間です。メトリックサブスクリプションコンポーネントはオプションです。

```
message CollectorControlMessage {
  // Indicates the proto version used by the target. Current version supported is 1.0
  string version;
  // Time interval at which the FTD device should send metric batches
  int64 interval = 1;
  // Set of metric families to subscribe to, the default value is the only supported value.
  // Default: "all"
  repeated string metricSubscriptions = 2;
}
```

ストリーム キャンセル メッセージ（制御チャネル）

ストリーム キャンセル メッセージは、Threat Defense デバイスとテレメトリ コレクタ間の既存のテレメトリ ストリームをキャンセルするために使用されます。Threat Defense デバイスまたはコレクタのいずれかが、制御チャネルでこのメッセージを発行できます。キャンセル要求の受信者は、ACK メッセージで応答する必要があります。キャンセルが完了すると、Threat Defense デバイスは、コレクタが新しいストリーミング要求を受け入れるまで、5分ごとにコレクタを再試行します。ストリーミングを完全に停止するには、Threat Defense デバイスのストリーミング構成を削除するだけです。

```
message StreamCancellationMessage {
  // Indicates the proto version used by the FTD device. First version will be 1.0
  string version;

  // Indicates the device id of the sender
  string device_uuid;
  // This flag indicates that the cancel request is true
  bool cancel_request;
}
```

Telegraf データ メッセージ（データ チャネル）

Telegraf データメッセージには、Threat Defense デバイスからコレクタに送信されるメトリックのバッチが含まれています。これには、個々のメトリックメッセージを含む、メトリックと呼ばれる繰り返しフィールドが含まれています。

```
message TelegrafDataMessage {
  // Batch of metrics sent by Telegraf
  repeated Metric metrics = 1;
}
```

メトリック メッセージ（データ チャネル）

テレメトリ データは、インターフェイス、CPU、メモリ、ディスク使用率など、システムのさまざまなコンポーネントから収集されたメトリックであり、モニタリングと分析のために Threat Defense デバイスからテレメトリ コレクタに送信されます。このデータのフォーマットは、プロトコル定義のメトリック メッセージによって定義されます。

次に、テレメトリ データを含むメトリック メッセージの例を示します。

```
METRIC=timestamp:1718257445000
metricFamily:"cpu" value:0.7 tags:{key:"cpu" value:"CPU")} tags:{key:"description"
value:"cpu_utilisation"} tags:{key:"process" value:"lina"} tags:{key:"rcpu"
value:"x86_cpu0"} tags:{key:"uuid" value:"7eb19498-2519-11ef-a8dd-b74b4d43a7e7"}
metricType:"Gauge"
```

メトリック メッセージには、次のフィールドが含まれます。

- タイムスタンプ（int64 型のタイムスタンプ）：メトリックが記録された正確な時刻。エポック時間で表されます。
- メトリック ファミリ（文字列 metricFamily）：「cpu」、「メモリ」、「ディスク」、「インターフェイス」など、測定対象のシステム コンポーネントまたはリソース。
- 値（double 型の値）：メトリックの数値。この値の解釈方法は、メトリックのタイプによって異なります。たとえば、CPU の使用率の場合には、パーセント値として解釈されます。
- タグ（繰り返しタグのタグ）：メトリックに関する追加のコンテキスト。各タグはキーと値のペアであり、キーは説明のためのラベル（「cpu」、「プロセス」、「インターフェイス」など）で、値は特定の詳細（「CPU0」、「lina」、「GigabitEthernet0/0」など）です）。
- メトリック タイプ（文字列 metricType）：メトリックの特性。時間の経過とともに累積される「カウンタ」（送信された合計パケット数など）や、特定の時点の値を表す「ゲージ」（CPU 使用率など）を指定できます。

Telegraf データ メッセージ（データ チャネル）

Telegraf データメッセージには、Threat Defense デバイスからコレクタに送信されるメトリックのバッチが含まれています。これには、個々のメトリック メッセージを含む、メトリックと呼ばれる繰り返しフィールドが含まれています。

```
message TelegrafDataMessage {
  // Batch of metrics sent by Telegraf
  repeated Metric metrics = 1;
}
```

テレメトリ ストリーミングのトラブルシューティング

次のトピックでは、テレメトリ ストリーミングのトラブルシューティング方法について説明します。

テレメトリ ストリーミング サービスのステータスの確認

テレメトリ ストリーミングを有効にすると、構成は直ちにデバイスにプッシュされます。すべての値が正しく、コレクタへのパスがある場合、サービスが再起動し、テレメトリサーバーに接続します。

手順

ステップ 1 API エクスプローラの **[TelemetryStreamingConfig]**で、**[GET /operational/telemetrystreamingstatuses]**を選択します。

ステップ 2 **[試してみる (Try It Out)]**をクリックします。

ステップ 3 応答コードが 200 の場合は、応答本文の **state** 値を確認します。

理想的な応答は、エラーメッセージが出ずに **CONNECTED** 状態になることです。

状態が **DISCONNECTED** である場合は、エラーメッセージを調べて、考えられる問題を特定します。

たとえば、次のエラーは接続を確立できなかったことを示しています。このエラー例は、テレメトリ コネクタ用ではない IP アドレスを指定することによって生成されたものであるため、i/o タイムアウトが発生しています。これは、指定したポート値が正しくないことを示している可能性もあります。エラーはタイプに分類され、サービスの開始後にエラーが発生した回数のカウントが含まれていることに注意してください。

```
"items": [
  {
    "state": "DISCONNECTED",
    "errors": [
      {
        "errorType": "StreamingErrors",
        "errorMessage": "2024-09-30 19:20:33.575156378 +0000 UTC m=+308552.647839001
: rpc error: code = Unavailable desc = connection error: desc = \"transport: Error while
dialing: dial tcp 10.1.1.1:50051: i/o timeout\"",
        "errorCount": 3857,
        "type": "telemetryerror"
      }
    ]
  }
]
```

i/o タイムアウト以外のもう1つの一般的なエラーは、「ホストへのルートがない」ことです。この場合、ネットワークまたは Threat Defense デバイス構成にルーティングの問題があります。

エラー タイプの詳細については、[ステータス エラーのカテゴリ \(161 ページ\)](#) を参照してください。

ステータス エラーのカテゴリ

テレメトリ ストリーミング サービスでエラーが発生した場合、サービス ステータスが [接続済み (Connected)] か [切断済み (Disconnected)] かには関係なく、テレメトリ ストリーミング ステータス情報に、発生した問題に関連するエラー メッセージが含まれています。エラー メッセージには、エラーが発生した時刻、エラーコード、および説明が含まれます。

メッセージは次のカテゴリに分類されます。

中止エラー (コード 0)

テレメトリ サービスの中止につながるエラー。このエラーが続く場合には、シスコのテクニカル サポートに問い合わせてください。

システム エラー (コード 1 ~ 10)

これらのエラーは、通常、ホスト名またはUUIDが構成されていなかったことを意味します。これは、テレメトリ ストリーミングが正しく構成されていないことを意味します。構成をやり直してください。

バッファ エラー (コード 11 ~ 20)

これらのエラーは、メトリック変換の問題など、メトリックバッファに関連しています。このエラーが続く場合には、シスコのテクニカル サポートに問い合わせてください。

認証エラー (コード 21 ~ 30)

これらのエラーは、証明書に問題があることを示しています。メッセージを評価し、証明書の問題を解決してください。

たとえば、証明書の有効期限が切れている場合は、新しい有効な証明書をアップロードして、サービスを再度有効にする必要があります。すべての証明書が同じ認証局によって署名されていることを確認します。

ストリーミング エラー (コード 31 ~ 40)

これらのエラーは、Threat Defense デバイスとテレメトリ コレクタとの接続に関連しています。問題には、IP アドレスとポート番号の間違い、または DNS 解決の問題が含まれる場合があります。また、ルーティングの問題と関連している場合もあります。

修正には、テレメトリ ストリーミング構成のやり直し、ネットワークのルーティング問題の解決が必要となる場合があります。ルーティング/DNS の問題は、アップストリームリンクやDNSサーバーのダウンなど、一時的な問題による場合もあります。

引数無効のエラー (コード 41 ~ 50)

これらのエラーは、メッセージで返された誤ったデータに関連しています。たとえば、プロトコルのバージョンが間違っているか、間隔頻度が範囲外である、などです。これらの

テレメトリ コレクタがデータを受信することを確認する

エラーでは、Threat Defense デバイスではなくテレメトリ コレクタを修正する必要があります。これらのエラーが表示された場合でも、サービス ステータスが [接続済み (Connected)] のままになる場合があることに注意してください。たとえば、許容される最小値が 1 分であるのに、間隔が 30 秒になっている場合、値が範囲外であるため、次のエラーが発生します。

```
"state": "CONNECTED",
  "errors": [
    {
      "errorType": "InvalidArgumentErrors",
      "errorMessage": "2024-09-30 19:20:33.575156378 +0000 UTC m=+308552.647839001
: Possible proto version mismatch or invalid streaming interval -
client=192.168.97.90, proto version=0.0.1, streaming interval=30s",
      "type": "telemetryerror"
    }
  ],
```

テレメトリ コレクタがデータを受信することを確認する

テレメトリ コレクタが Threat Defense デバイスから情報を受信していることを確認します。テレメトリ コレクタ コンソールに関連するメッセージとデータが表示されます。例：

```
2024/08/19 11:08:58 D! [grpc_client] Streaming interval set to=1m0s
2024/08/19 11:08:58 D! [grpc_client] Starting listener, attempting to listen at
address=:50051 over tcp
2024/08/19 11:08:58 D! [grpc_client] CERT_PATH: /root/grpc-certs/keys
2024/08/19 11:08:58 D! FTD signalling listener running on port=8087
2024/08/19 11:08:58 D! [grpc_client] Collector server started at port=50051
2024/08/19 11:09:24 D! [grpc_client] DataStream RPC invoked
2024/08/19 11:09:24 D! [grpc_client] ControlStream RPC invoked
2024/08/19 11:09:24 D! [grpc_client] Receiving metrics from
device=firepower-7eb19498-2519-11ef-a8dd-b74b4d43a7e7
2024/08/19 11:09:24 D! [grpc_client] ControlStream - received done signal
2024/08/19 11:09:24 D! [grpc_client] RPC
context=&{device:firepower-7eb19498-2519-11ef-a8dd-b74b4d43a7e7 controlStream:0xc000024120
dataStream:0xc000096020}
2024/08/19 11:14:24 D! [grpc_client] info - received metric batch of count=479 from
device=firepower-7eb19498-2519-11ef-a8dd-b74b4d43a7e7
2024/08/19 11:14:24 D! [grpc_client] METRIC=timestamp:1718257445000
metricFamily:"interface" value:35386 tags:{key:"duplex_mode" value:"FULL"}
tags:{key:"interface" value:"GigabitEthernet0/0"} tags:{key:"interface_description"}
tags:{key:"interface_name" value:"inside_interface"} tags:{key:"interface_type"
value:"GigabitEthernet"} tags:{key:"mac_address" value:"0050.5683.0a21"}
tags:{key:"uuid" value:"7eb19498-2519-11ef-a8dd-b74b4d43a7e7"} tags:{key:"description"
value:"input_packets"} metricType:"Counter"
```



第 6 章

Cisco ISA 3000 のアラーム

Cisco ISA 3000 デバイスのアラーム システムを設定して、望ましくない状況になったときに警告することができます。

- [アラームについて \(163 ページ\)](#)
- [アラームのデフォルト設定 \(166 ページ\)](#)
- [ISA 3000 のアラームの設定 \(166 ページ\)](#)
- [アラームのモニタリング \(173 ページ\)](#)

アラームについて

さまざまな条件でアラームを発行するように ISA 3000 を設定できます。いずれかの条件が設定と一致しない場合、アラームがトリガーされます。これにより、LED、Syslog メッセージ、SNMP トラップによって、またアラーム出力インターフェイスに接続された外部デバイスを通じて、アラートがレポートされます。デフォルトでは、トリガーされたアラームにより Syslog メッセージだけが発行されます。

次のものをモニタするようにアラーム システムを設定できます。

- 電源装置
- プライマリおよびセカンダリ温度センサー
- アラーム入力インターフェイス

ISA 3000 には内部センサーに加えて 2 つのアラーム入力インターフェイスと 1 つのアラーム出力インターフェイスがあります。アラーム入力インターフェイスにはドアセンサーなどの外部センサーを接続できます。アラーム出力インターフェイスにはブザーやライトなどの外部アラーム デバイスを接続できます。

アラーム出力インターフェイスはリレー メカニズムです。アラーム状態に応じて、リレーは通電または非通電のいずれかの状態になります。リレーが通電状態になると、インターフェイスに接続されているデバイスがアクティブになります。リレーが非通電状態になると、接続されているデバイスが非アクティブ状態になります。アラームがトリガーされるかぎり、リレーは通電状態のままになります。

外部センサーとアラームリレーの接続については、『[Cisco ISA 3000 Industrial Security Appliance Hardware Installation Guide](#)』を参照してください。

アラーム入力インターフェイス

アラーム入力インターフェイス（または接点）は外部センサー（ドアが開いているかどうかを検出するセンサーなど）に接続できます。

各アラーム入力インターフェイスには対応する LED があります。これらの LED は各アラーム入力のアラームステータスを示します。アラーム入力ごとにトリガーとシビラティ（重大度）を設定できます。LEDに加えて、出力リレーのトリガー（外部アラームをアクティブにするため）、Syslog メッセージの送信、および SNMP トラップの送信を行うように接点を設定できます。

次の表に、アラーム入力のアラーム状態に応じた LED のステータスを示します。また、アラーム入力に対する出力リレー、Syslog メッセージ、および SNMP トラップの応答を有効にしている場合のそれらの動作も示します。

アラーム ステータス	LED	出力リレー	Syslog	SNMP トラップ
アラームが設定されていない	オフ	—	—	—
アラームがトリガーされていない	緑色で点灯	—	—	—
アラームがアクティブになっている	マイナー アラーム：赤色で点灯 メジャー アラーム：赤色で点滅	リレーが通電状態になる	Syslog が生成される	SNMP トラップが送信される
アラームが終了した	緑色で点灯	リレーが非通電状態になる	Syslog が生成される	—

アラーム出力インターフェイス

アラーム出力インターフェイスにはブザーやライトなどの外部アラームを接続できます。

アラーム出力インターフェイスはリレーとして機能します。また、このインターフェイスには、入力インターフェイスに接続された外部センサーや、デュアル電源センサー、温度センサーなどの内部センサーのアラームステータスを示す、対応する LED があります。出力リレーをアクティブにする必要があるアラームがある場合は、それを設定します。

次の表に、アラーム状態に応じた LED と出力リレーのステータスを示します。また、アラームに対する Syslog メッセージおよび SNMP トラップの応答を有効にしている場合のそれらの動作も示します。

アラーム ステータス	LED	出力リレー	Syslog	SNMP トラップ
アラームが設定されていない	オフ	—	—	—
アラームがトリガーされていない	緑色で点灯	—	—	—
アラームがアクティブになっている	赤色で点灯	リレーが通電状態になる	Syslog が生成される	SNMP トラップが送信される
アラームが終了した	緑色で点灯	リレーが非通電状態になる	Syslog が生成される	—

Syslog アラーム

デフォルトでは、アラームがトリガーされるとシステムは syslog メッセージを送信します。メッセージを送信しない場合は、syslog メッセージングを無効にすることができます。

syslog アラームを機能させるには、**[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [ロギング設定 (Logging Settings)]** で診断ロギングも有効にする必要があります。syslog サーバ、コンソールロギング、または内部バッファロギングを設定します。

診断ロギングの宛先を有効にしなければ、アラームシステムはどこにも syslog メッセージを送信しません。

SNMP トラップ アラーム

必要に応じて、SNMP トラップを SNMP サーバに送信するようにアラームを設定できます。SNMP トラップ アラームが機能するには、SNMP を設定する必要があります。

SNMP を設定するには、Threat Defense API を使用します。[詳細オプション (More options)] ボタン (⋮) をクリックし、[API エクスプローラ (API Explorer)] を選択します。次に、SNMP リソースを探し、そのモデルのマニュアルを調べて、機能の設定方法を確認します。SNMP バージョン 2c または 3 を使用できます。バージョン 1 はサポートされていません。SNMP の設定の詳細については、最新バージョンの ASA ソフトウェア用の『*CLI Book 1: Cisco ASA Series General Operations CLI Configuration Guide*』にある SNMP に関する章を参照してください。このガイドは、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/asa-5500-series-next-generation-firewalls/products-installation-and-configuration-guides-list.html> から入手できます。

アラームのデフォルト設定

次の表に、アラーム入力インターフェイス（コンタクト）、冗長電源、および温度のデフォルト設定を示します。

	アラーム	トリガー	シビラティ（重大度）	SNMP トラップ	出力リレー	Syslog メッセージ
アラーム コンタクト 1	[有効 (Enabled)]	クローズ状態	マイナー	無効	無効	有効
アラーム コンタクト 2	[有効 (Enabled)]	クローズ状態	マイナー	無効	無効	有効
冗長電源（有効な場合）	[有効 (Enabled)]	—	—	無効	無効	有効
温度	プライマリ温度アラームで有効（高温/低温のデフォルトしきい値はそれぞれ 92°C および -40°C）。セカンダリアラームでは無効。	—	—	プライマリ温度アラームで有効	プライマリ温度アラームで有効	プライマリ温度アラームで有効

ISA 3000 のアラームの設定

ISA 3000 のアラームを設定するには FlexConfig を使用します。ここでは、さまざまなタイプのアラームの設定方法について説明します。

アラーム入力コンタクトの設定

アラーム入力コンタクト（インターフェイス）を外部センサーに接続する場合、センサーからの入力に基づいてアラームを発行するようコンタクトを設定できます。実際には、デフォルトで、コンタクトはクローズ状態つまりコンタクトを流れる電流が停止すると syslog メッセージを送信するようになっています。デフォルトでは要件が満たされない場合にのみ、コンタクトを設定する必要があります。

アラーム コンタクトには1および2の番号が付いているため、正しく設定するためにどのように物理ピンを接続するのかを理解する必要があります。コンタクトを個別に設定します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfigオブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。

ステップ 3 [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。

ステップ 4 オブジェクトの名前を入力します。たとえば、**Enable_Alarm_Contact** などです。

ステップ 5 [テンプレート (Template)] エディタで、コンタクトの設定に必要なコマンドを入力します。

a) アラームコンタクトの説明を設定します。

alarm contact {1 | 2} description string

たとえば、コンタクト1の説明を「Door Open」に設定するには、次のように入力します。

```
alarm contact 1 description Door Open
```

b) アラームコンタクトの重大度を設定します。

alarm contact {1 | 2 | any} severity {major | minor | none}

1つのコンタクトを設定する代わりに、**any** を指定してすべてのコンタクトの重大度を変更できます。重大度によって、コンタクトに関連付けられているLEDの動作が制御されます。

- **major** : LED が赤色で点滅します。
- **minor** : LED が赤色で点灯します。これがデフォルトです。
- **none** : LED が消灯します。

たとえば、コンタクト1のシビラティ（重大度）をメジャーに設定するには、次のように入力します。

```
alarm contact 1 severity major
```

c) アラームコンタクトのトリガーを設定します。

alarm contact {1 | 2 | any} trigger {open | closed}

1つのコンタクトを設定する代わりに、**any** を指定してすべてのコンタクトのトリガーを変更できます。トリガーは、アラート信号を発する電気条件を決定します。

- **open** : コンタクトの通常状態はクローズです。つまり、コンタクトに電流が流れています。コンタクトがオープンになる、つまり電流が停止するとアラートがトリガーされます。

- **closed** : コンタクトの通常状態はオープンです。つまり、コンタクトに電流は流れていません。コンタクトがクローズになる、つまり電流がコンタクトを流れ始めるとアラートがトリガーされます。これはデフォルトです。

たとえば、ドアセンサーをアラーム入力コンタクト 1 に接続して、通常状態ではアラームコンタクトに電流は流れていない（オープン）とします。ドアが開くとコンタクトはクローズになり、アラーム コンタクトに電流が流れます。アラーム トリガーをクローズに設定しているため、電流が流れ始めたらアラームはオフになります。

```
alarm contact 1 trigger closed
```

- d) アラームコンタクトがトリガーされるときに実行するアクションを設定します。

alarm facility input-alarm {1 | 2} {relay | syslog | notifies}

複数のアクションを設定できます。たとえば、デバイスを設定して、外部アラームをアクティブ化したり、syslog メッセージを送信したり、SNMP トラップを送信することもできます。

- [リレー (relay)] : アラーム出力リレーに通電します。これにより、ブザーやフラッシュ ライトなどに接続した外部アラームがアクティブ化されます。出力 LED も赤色になります。
- [syslog] : syslog メッセージを送信します。このオプションは、デフォルトで有効です。
- [通知 (notifies)] : SNMP トラップを送信します。

たとえば、アラーム入力コンタクト 1 のすべてのアクションを有効にするには、次のように入力します。

```
alarm facility input-alarm 1 relay
alarm facility input-alarm 1 syslog
alarm facility input-alarm 1 notifies
```

ステップ 6 [ネゲートテンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

これらすべてのコマンドでは、**no** 形式を使用して設定を無効化し、デフォルト設定に戻します。たとえば、テンプレートにこの手順で示したすべてのコマンド例が含まれている場合、ネゲートテンプレートは次のようになります。

```
no alarm contact 1 description Door Open
no alarm contact 1 severity major
no alarm contact 1 trigger closed
no alarm facility input-alarm 1 relay
no alarm facility input-alarm 1 syslog
no alarm facility input-alarm 1 notifies
```

ステップ 7 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ステップ 8 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

- a) 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。

- b) [グループ リスト (Group List)] で [+] をクリックします。
- c) `Enable_Alarm_Contact` オブジェクトを選択して、[OK] をクリックします。
プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。予想していたコマンドが表示されていることを確認します。
- d) [保存 (Save)] をクリックします。
これで、ポリシーを展開できます。

ステップ 9 展開が完了したら、CLI コンソールまたは SSH セッションで、**show running-config** コマンドを使用し、実行中の設定が正しく変更されていることを確認します。外部センサーをテストして、アラームがトリガーされていることを確認します。

電源装置アラームの設定

ISA 3000 には、電源装置が 2 台搭載されています。デフォルトでは、システムはシングル電源モードで稼働しています。ただし、デュアルモードでシステムを稼働するよう設定できます。その場合、プライマリ電源が故障すると 2 つ目の電源が自動的に電力を供給します。デュアルモードを有効にすると、電源アラームが自動的に有効になって `syslog` アラートが送信されますが、アラートを無効にしたり、SNMP トラップまたはアラーム ハードウェア リレーを有効にすることもできます。

次の手順では、デュアルモードを有効にする方法と電源アラームを設定する方法について説明します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig オブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。
- ステップ 3** [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。
- ステップ 4** オブジェクトの名前を入力します。たとえば、`Enable_Power_Supply_Alarm` などです。
- ステップ 5** [テンプレート (Template)] エディタで、電源アラームの設定に必要なコマンドを入力します。
 - a) デュアル電源モードを有効にします。
power-supply dual
次に例を示します。

`power-supply dual`
 - b) 電源アラームがトリガーされたときに実行するアクションを設定します。
alarm facility power-supply rps {relay | syslog | notifies | disable}

複数のアクションを設定できます。たとえば、デバイスを設定して、外部アラームをアクティブ化したり、syslog メッセージを送信したり、SNMP トラップを送信することもできます。

- [リレー (relay)] : アラーム出力リレーに通電します。これにより、ブザーやフラッシュライトなどに接続した外部アラームがアクティブ化されます。出力 LED も赤色になります。
- [syslog] : syslog メッセージを送信します。このオプションは、デフォルトで有効です。
- [通知 (notifies)] : SNMP トラップを送信します。
- [無効 (disable)] : 電源アラームを無効にします。電源アラームに設定されたその他のアクションは動作しなくなります。

たとえば、電源アラームのすべてのアクションを有効にするには、次のように入力します。

```
alarm facility power-supply rps relay
alarm facility power-supply rps syslog
alarm facility power-supply rps notifies
```

ステップ 6 [ネゲートテンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

これらすべてのコマンドでは、**no** 形式を使用して設定を無効化し、デフォルト設定に戻します。たとえば、テンプレートにこの手順で示したすべてのコマンド例が含まれている場合、ネゲートテンプレートは次のようになります。

```
no power-supply dual
no alarm facility power-supply rps relay
no alarm facility power-supply rps syslog
no alarm facility power-supply rps notifies
```

ステップ 7 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ステップ 8 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

- a) 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。
- b) [グループリスト (Group List)] で [+] をクリックします。
- c) Enable_Power_Supply_Alarm オブジェクトを選択して、[OK] をクリックします。

プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。予想していたコマンドが表示されていることを確認します。

- d) [保存 (Save)] をクリックします。

これで、ポリシーを展開できます。

ステップ 9 展開が完了したら、CLI コンソールまたは SSH セッションで、**show running-config** コマンドを使用し、実行中の設定が正しく変更されていることを確認します。

温度アラームの設定

デバイスの CPU カードの温度に基づいてアラームを設定できます。

プライマリ温度範囲とセカンダリ温度範囲を設定できます。温度が下限しきい値以下になるか上限しきい値以上になると、アラームがトリガーされます。

プライマリ温度アラームは、すべてのアラーム アクション（出力リレー、syslog、および SNMP）についてデフォルトで有効になっています。プライマリ温度範囲のデフォルト設定値は -40°C ～ 92°C です。

セカンダリ温度アラームはデフォルトでディセーブルになっています。セカンダリ温度は、-35°C ～ 85°C の範囲で設定できます。

セカンダリ温度範囲はプライマリ範囲よりも制限されているため、セカンダリの低温または高温のいずれかを設定すると、プライマリ設定にデフォルト以外の値を設定していたとしても、対応するプライマリ設定はこの設定によって無効になります。2 つの異なる高温アラームと 2 つの異なる低温アラームを有効にすることはできません。

したがって、実際には、プライマリのみまたはセカンダリのみ的高温値および低温値を設定する必要があります。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig オブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。
- ステップ 3 [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。
- ステップ 4 オブジェクトの名前を入力します。たとえば、**Enable_Temperature_Alarm** などです。
- ステップ 5 [テンプレート (Template)] エディタで、温度アラームの設定に必要なコマンドを入力します。
 - a) 許容温度範囲を設定します。

```
alarm facility temperature {primary | secondary} {low | high} temperature
```

温度は摂氏で示されます。プライマリ アラームの許容範囲は -40 ～ 92 で、これがデフォルト範囲でもあります。セカンダリ アラームの許容範囲は、-35 ～ 85 です。低い値は、高い値より小さくする必要があります。

たとえば、セカンダリ アラームの許容範囲内で、より制限された温度範囲の -20 ～ 80 を設定するには、次のようにセカンダリ アラームを設定します。

```
alarm facility temperature secondary low -20
alarm facility temperature secondary high 80
```

- b) 温度アラームがトリガーされたときに実行するアクションを設定します。

```
alarm facility temperature {primary | secondary} {relay | syslog | notifies}
```

複数のアクションを設定できます。たとえば、デバイスを設定して、外部アラームをアクティブ化したり、syslog メッセージを送信したり、SNMP トラップを送信することもできます。

- [リレー (relay)] : アラーム出力リレーに通電します。これにより、ブザーやフラッシュライトなどに接続した外部アラームがアクティブ化されます。出力 LED も赤色になります。
- [syslog] : syslog メッセージを送信します。
- [通知 (notifies)] : SNMP トラップを送信します。

たとえば、セカンダリ温度アラームのすべてのアクションを有効にするには、次のように入力します。

```
alarm facility temperature secondary relay
alarm facility temperature secondary syslog
alarm facility temperature secondary notifies
```

ステップ 6 [ネゲートテンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

次のすべてのコマンドでは、**no**形式を使用してデフォルト設定に戻したり（プライマリアラームの場合）、設定を無効にします（セカンダリアラームの場合）。たとえば、テンプレートにこの手順で示したすべてのコマンド例が含まれている場合、ネゲートテンプレートは次のようになります。

```
no alarm facility temperature secondary low -20
no alarm facility temperature secondary high 80
no alarm facility temperature secondary relay
no alarm facility temperature secondary syslog
no alarm facility temperature secondary notifies
```

ステップ 7 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ステップ 8 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

- a) 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。
- b) [グループ リスト (Group List)] で [+] をクリックします。
- c) Enable_Temperature_Alarm オブジェクトを選択して、[OK] をクリックします。

プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。予想していたコマンドが表示されていることを確認します。

- d) [保存 (Save)] をクリックします。

これで、ポリシーを展開できます。

ステップ 9 展開が完了したら、CLI コンソールまたは SSH セッションで、**show running-config** コマンドを使用し、実行中の設定が正しく変更されていることを確認します。

アラームのモニタリング

ここでは、アラームのモニタおよび管理方法について説明します。

アラーム ステータスのモニタリング

CLI で次のコマンドを使用してアラームをモニタすることができます。

- **show alarm settings**

使用可能な各アラームの現在の設定が表示されます。

- **show environment alarm-contact**

入力アラーム コンタクトの物理ステータスに関する情報が表示されます。

- **show facility-alarm relay**

出力リレーをトリガーしたアラームに関する情報が表示されます。

- **show facility-alarm status[info |major |minor]**

トリガーされたすべてのアラームに関する情報が表示されます。**major** ステータスまたは **minor** ステータスでフィルタリングすることで表示の絞り込みができます。**info** キーワードを使用すると、キーワードを使用しない場合と同じ出力になります。

アラームに関する Syslog メッセージのモニタリング

設定するアラームのタイプに応じて、次の Syslog メッセージが表示される場合があります。

デュアル電源アラーム

- %FTD-1-735005 : Power Supply Unit Redundancy OK
- %FTD-1-735006 : Power Supply Unit Redundancy Lost

温度アラーム

これらのアラームでは、*Celsius* は、デバイス上で検出された温度（摂氏単位）に置き換えられます。

- %FTD-6-806001 : Primary alarm CPU temperature is High *Celsius*
- %FTD-6-806002 : Primary alarm for CPU high temperature is cleared
- %FTD-6-806003 : Primary alarm CPU temperature is Low *Celsius*
- %FTD-6-806004 : Primary alarm for CPU Low temperature is cleared
- %FTD-6-806005 : Secondary alarm CPU temperature is High *Celsius*
- %FTD-6-806006 : Secondary alarm for CPU high temperature is cleared

- %FTD-6-806007 : Secondary alarm CPU temperature is Low *Celsius*
- %FTD-6-806008 : Secondary alarm for CPU Low temperature is cleared

アラーム入力コンタクトアラーム

これらのアラームでは、「*description*」は、設定したコンタクトの説明です。

- %FTD-6-806009 : Alarm asserted for ALARM_IN_1 *alarm_1_description*
- %FTD-6-806010 : Alarm cleared for ALARM_IN_1 *alarm_1_description*
- %FTD-6-806011 : Alarm asserted for ALARM_IN_2 *alarm_2_description*
- %FTD-6-806012: Alarm cleared for ALARM_IN_2 *alarm_2_description*

外部アラームをオフにする

アラーム出力にアタッチされる外部アラームを使用していて、アラームがトリガーされる場合、**clear facility-alarm output** コマンドを使用してデバイス CLI から外部アラームをオフにできます。このコマンドは、出力ピンの電源を切り、出力 LED もオフにします。



第 II 部

再利用可能なオブジェクト

- [オブジェクト \(177 ページ\)](#)
- [証明書 \(197 ページ\)](#)
- [アイデンティティ ソース \(209 ページ\)](#)



第 7 章

オブジェクト

オブジェクトは、ポリシーまたはその他の設定で使用する基準を定義した再利用可能なコンテナです。たとえば、ネットワーク オブジェクトはホストとサブネットのアドレスを定義します。

オブジェクトを使用して基準を定義し、複数のポリシーでこの基準を簡単に再利用できます。オブジェクトを更新すると、そのオブジェクトを使用するすべてのポリシーが自動的に更新されます。

- [オブジェクト タイプ \(177 ページ\)](#)
- [オブジェクトの管理 \(181 ページ\)](#)

オブジェクト タイプ

次のタイプのオブジェクトを作成できます。ほとんどの場合、ポリシーまたは設定がオブジェクトを許可する場合、オブジェクトを使用する必要があります。

オブジェクトタイプ	主な用途	説明
セキュアクライアント プロファイル	リモート アクセス VPN	セキュアクライアント プロファイルは、セキュアクライアントソフトウェアとともにクライアントにダウンロードされます。これらのプロファイルでは、多くのクライアント関連オプション（スタートアップ時の自動接続、自動再接続など）や、エンドユーザーがセキュアクライアントの設定および詳細設定からオプションを変更することを許可するかどうかを定義します。 クライアント プロファイルの設定およびアップロード (854 ページ) を参照してください。

オブジェクトタイプ	主な用途	説明
Application Filter	アクセス制御ルール	アプリケーションフィルタ オブジェクトは、IP 接続で使用されるアプリケーション、あるいは、タイプ、カテゴリ、タグ、リスク、またはビジネス関連性によってアプリケーションを定義するフィルタを定義します。ポート指定を使用する代わりに、ポリシーでこれらのオブジェクトを使用してトラフィックを制御できます。 アプリケーション フィルタ オブジェクトの設定 (187 ページ) を参照してください。
証明書	アイデンティティ ポリシー リモート アクセス VPN SSL 復号ルール。 管理 Web サーバ。	デジタル証明書は、認証に使用されるデジタル ID を保持しています。証明書は、HTTPS および LDAPS などの、SSL(Secure Socket Layer)、TLS (Transport Layer Security)、および DTLS (Datagram TLS) 接続に使用されます。 「証明書の設定 (201 ページ)」を参照してください。
DNS グループ	管理インターフェイスとデータ インターフェイスの DNS 設定	DNS グループは、DNS サーバと一部の関連属性のリストを定義します。www.example.com などの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を IP アドレスに解決するには、DNS サーバが必要です。 DNS グループの設定 (955 ページ) を参照してください。
イベントリスト フィルタ	選択したログの宛先のシステムログ設定。	イベントリストフィルタは、syslog メッセージ用のカスタムフィルタリストを作成します。syslog サーバまたは内部ログ バッファなど、特定のログの場所に送信されるメッセージを制限するには、これらを使用できます。 イベント リスト フィルタの設定 (946 ページ) を参照してください。
位置情報	セキュリティ ポリシー	位置情報オブジェクトは、トラフィックの送信元または宛先となるデバイスをホストする国および大陸を定義します。IP アドレスを使用する代わりに、ポリシーでこれらのオブジェクトを使用してトラフィックを制御できます。 位置情報オブジェクトの設定 (192 ページ) を参照してください。

オブジェクトタイプ	主な用途	説明
アイデンティティソース	アイデンティティポリシー リモートアクセスVPN Device Managerアクセス	アイデンティティソースは、ユーザーアカウントを定義するサーバーとデータベースです。この情報は、IPアドレスに関連付けられているユーザーIDの提供や、Device Manager へのリモートアクセスVPN接続またはアクセスを認証するなど、さまざまな方法で利用できます。 アイデンティティソース（209ページ） を参照してください。
IKE ポリシー	VPN	インターネットキーエクスチェンジ（IKE）ポリシーオブジェクトは、IPsec ピアの認証、IPsec 暗号キーのネゴシエーションと配布、およびIPsecセキュリティアソシエーション（SA）の自動的な確立に使用されるIKEプロポーザルを定義します。IKEv1 と IKEv2 には別個のオブジェクトがあります。 グローバルIKEポリシーの設定（811ページ） を参照してください。
Ipsec プロポーザル	VPN	IPsec プロポーザルオブジェクトはIKEフェーズ2ネゴシエーション時に使用されるIPsecプロポーザルを設定します。IPsecプロポーザルは、IPsecトンネル内のトラフィックを保護するためのセキュリティプロトコルとアルゴリズムの組み合わせを定義します。IKEv1 と IKEv2 には別個のオブジェクトがあります。 IPsec プロポーザルの設定（817ページ） を参照してください。
ネットワーク	セキュリティポリシーと多様なデバイス設定。	ネットワークグループおよびネットワークオブジェクト（まとめてネットワークオブジェクトと呼ばれる）は、ホストまたはネットワークのアドレスを定義します。 ネットワークオブジェクトとグループの設定（182ページ） を参照してください。
ポート	セキュリティポリシー	ポートグループおよびポートオブジェクト（まとめてポートオブジェクトと呼ばれる）は、トラフィックのプロトコル、ポート、またはICMPサービスを定義します。 ポートオブジェクトとグループの設定（184ページ） を参照してください。

オブジェクトタイプ	主な用途	説明
秘密鍵	Smart CLI および FlexConfig ポリシー。	秘密鍵オブジェクトは、パスワードや、暗号化および非表示にするその他の認証文字列を定義します。 秘密キーオブジェクトの設定（1066ページ） を参照してください。
セキュリティゾーン	セキュリティポリシー	セキュリティゾーンは、複数のインターフェイスからなるグループです。ゾーンを使用するとネットワークがセグメントに分けられ、トラフィックの管理や分類に役立ちます。 セキュリティゾーンの設定（185ページ） を参照してください。
SGT グループ	アクセス制御ポリシー。	TrustSec セキュリティグループタグ（SGT）は、Cisco Identity Services Engine（ISE）で定義されたトラフィックのタグを定義します。これらのオブジェクトを作成するには ISE を設定する必要があります。その後、そのオブジェクトを、アクセス制御ルール内の送信元/宛先一致基準として使用できます。 セキュリティグループタグ（SGT）グループの設定（194ページ） を参照してください。
SLA モニタ	スタティックルート	SLA モニタは、スタティックルートのモニタリングに使用するターゲット IP アドレスを定義します。ターゲット IP アドレスに到達できなくなったことをモニタが判断した場合、システムはバックアップスタティックルートをインストールできます。 SLA モニタ オブジェクトの設定（418ページ） を参照してください。
SSL 暗号	SSL設定。	SSL 暗号オブジェクトでは、Threat Defense への SSL 接続を確立するときを使用できるセキュリティレベル、TLS/DTLS プロトコルバージョン、および暗号化アルゴリズムの組み合わせを定義します。システム設定でこれらのオブジェクトを使用して、ボックスへの TLS/SSL 接続を行うユーザのセキュリティ要件を定義します。 TLS/SSL暗号設定の設定（981ページ） を参照してください。

オブジェクトタイプ	主な用途	説明
Syslogサーバ	アクセス制御ルール 診断ロギング。 セキュリティインテリジェンスポリシー。 SSL復号ルール。 侵入ポリシー ファイル/マルウェアポリシー	Syslog サーバ オブジェクトは、コネクション型または診断システム ログ (syslog) メッセージを受信できるサーバを識別します。 syslog サーバの設定 (193 ページ) を参照してください。
URL	アクセス コントロール ルール セキュリティインテリジェンスポリシー。	Web リクエストの URL または IP アドレスを定義する URL オブジェクトおよびグループ（総称して URL オブジェクトと呼ばれます）。 URL オブジェクトとグループの設定 (189 ページ) を参照してください。
ユーザ	リモート アクセス VPN	リモートアクセス VPN とともに使用するために、デバイスでユーザ アカウントを直接作成できます。外部認証ソースの代わりに（または外部認証ソースに加えて）ローカル ユーザ アカウントを使用できます。 「 ローカルユーザの設定 (232 ページ) 」を参照してください。

オブジェクトの管理

オブジェクトは、[オブジェクト (Objects)] ページから直接設定することも、ポリシーを編集するときに設定することもできます。どちらの方式でも同じ結果となり、新規または更新されたオブジェクトが作成されるので、その時点で適した方法を使用します。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページから直接オブジェクトを作成して管理する方法について説明します。



- (注) ポリシーまたは設定を編集する際にプロパティにオブジェクトが必要な場合、すでに定義されたすべてのオブジェクトのリストが表示されるので、そこから適切なオブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、リスト内に表示される [新しいオブジェクトの作成 (Create New Object)] リンクをクリックします。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択します。

[オブジェクト (Objects)] ページには目次があり、使用可能なタイプのオブジェクトがリストされます。オブジェクトタイプを選択すると、既存のオブジェクトのリストが表示され、そこから新しいオブジェクトを作成することができます。オブジェクトの内容とタイプも確認できます。

ステップ 2 目次からオブジェクト タイプを選択し、次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。オブジェクトのコンテンツはタイプによって異なります。具体的な情報については、各オブジェクトタイプの設定トピックを参照してください。
- グループ オブジェクトを作成するには、[グループの追加 (Add Group)] () ボタンをクリックします。グループ オブジェクトには複数の項目があります。
- オブジェクトを編集するには、そのオブジェクトの[編集 (edit)] () アイコンをクリックします。事前定義オブジェクトのコンテンツは編集できません。
- オブジェクトを削除するには、そのオブジェクトの[削除 (delete)] () アイコンをクリックします。ポリシーまたは別のオブジェクトで現在使用中のオブジェクトを削除することはできません。また、事前定義オブジェクトも削除できません。

ネットワーク オブジェクトとグループの設定

ネットワーク グループおよびネットワーク オブジェクト（まとめてネットワーク オブジェクトと呼ばれる）を使用して、ホストまたはネットワークのアドレスを定義します。その後、トラフィック一致基準を定義するためにセキュリティ ポリシーでオブジェクトを使用したり、サーバやその他のリソースのアドレスを定義する際に使用することができます。

ネットワーク オブジェクトは単一のホストまたはネットワークアドレスを定義しますが、ネットワーク グループ オブジェクトは複数のアドレスを定義できます。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] リンクをクリックすることにより、アドレスプロパティの編集集中にネットワーク オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [ネットワーク (Network)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- グループを作成するには、[グループの追加 (Add Group)] ボタン  をクリックします。
- オブジェクトまたはグループを編集するには、オブジェクトの編集アイコン  をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトのごみ箱アイコン  をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前を入力し、オプションでオブジェクトの説明を入力してオブジェクトの内容を定義します。

オブジェクトの内容またはスタンドアロンIPアドレスからオブジェクト名を簡単に識別できるように、名前にIPアドレスだけを使用しないことを推奨します。名前にIPアドレスを使用する場合は、host-192.168.1.2やnetwork-192.168.1.0など、わかりやすいプレフィックスを付けてください。IP アドレスを名前として使用する場合は、縦線がプレフィックスとして追加されます（例：|192.168.1.2）。Device Manager ではオブジェクトセクタに縦棒が表示されませんが、CLIで **show running-config** コマンドを使用して実行中の設定を調べると、この命名規則を確認できます。

ステップ 4 オブジェクトの内容を設定します。

ネットワークオブジェクト

オブジェクト [タイプ (Type)] を選択して、コンテンツを設定します。

- [ネットワーク (Network)] : 次のいずれかの形式を使用してネットワーク アドレスを入力します。
 - サブネット マスクを含む IPv4 ネットワーク（例：10.100.10.0/24、10.100.10.0/255.255.255.0）。
 - プレフィックスを含む IPv6 ネットワーク（例：2001:DB8:0:CD30::/60）。
- [ホスト (Host)] : 次のいずれかの形式を使用してホスト IP を入力します。
 - IPv4 ホスト アドレス（例：10.100.10.10）。
 - IPv6 ホスト アドレス（2001:DB8::0DB8:800:200C:417A または 2001:DB8:0:0:0DB8:800:200C:417A など）。
- [範囲] : 開始アドレスと終了アドレスをハイフンで区切ったアドレスの範囲。IPv4 または IPv6 の範囲を指定できます。マスクまたはプレフィックスを含めないでください。たとえば、192.168.1.10-192.168.1.250 または 2001:DB8:0:CD30::10-2001:DB8:0:CD30::100 とします。
- [FQDN] : www.example.com などの単一の完全修飾ドメイン名を入力します。ワイルドカードを使用することはできません。また、[DNS解決 (DNS Resolution)] を選択して、IPv4 アドレス、IPv6 アドレス、または Ipv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を FQDN と関連付けるかどうかも決定します。デフォルトは、IPv4 と IPv6 の両方です。これらのオブジェ

クトは、アクセス制御ルールでのみ使用できます。ルールでは、DNS ルックアップによって FQDN 用に取得された IP アドレスを照合します。

ネットワークグループ(Network Groups)

グループに追加するネットワークオブジェクトまたはグループを選択するには、[+] ボタンをクリックします。新しいオブジェクトを作成することもできます。

ステップ 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

ポート オブジェクトとグループの設定

ポート グループおよびポート オブジェクト（まとめてポート オブジェクトと呼ばれる）を使用して、トラフィックのプロトコル、ポート、ICMP サービスを定義します。その後、トラフィック一致基準を定義するためにセキュリティ ポリシーでオブジェクトを使用できます（たとえばアクセス ルールを使用して特定の TCP ポートへのトラフィックを許可する）。

ポート オブジェクトは単一のプロトコル、TCP/UDP ポートまたはポート範囲、ICMP サービスを定義しますが、ポート グループ オブジェクトは複数のサービスを定義できます。

システムには、一般的なサービス用の事前定義されたオブジェクトがいくつか用意されています。これらのオブジェクトをポリシーで使用できます。ただし、システム定義されたオブジェクトを編集/削除することはできません。



(注) ポート グループ オブジェクトを作成するときには、オブジェクトの組み合わせが適切であることを確認してください。たとえば、アクセスルールで送信元ポートと宛先ポートの両方を指定するために使用する目的で、1つのオブジェクトにプロトコルを混在させることはできません。すでに使用されているオブジェクトを編集する場合は、そのオブジェクトを使用するポリシーを無効（使用不可）にしないよう、注意が必要です。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される[新しいポートの作成 (Create New Port)] リンクをクリックすることにより、サービス プロパティの編集集中にポート オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、次に目次から [ポート (Ports)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- グループを作成するには、[グループの追加 (Add Group)] ボタン (🔍) をクリックします。

- オブジェクトまたはグループを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトのごみ箱アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力し、オブジェクトの内容を定義します。

ポート オブジェクト

[プロトコル (Protocol)] を選択し、そのプロトコルを次のように設定します。

- [TCP (TCP)]、[UDP (UDP)] : 単一のポートまたはポート範囲を入力します。たとえば「80」 (HTTP の場合) や「1 ~ 65535」 (すべてのポートが対象) のように入力します。
- [ICMP]、[IPv6-ICMP] : [種類 (Type)] で ICMP、任意で [コード (Code)] を選択します。タイプをすべての ICMP メッセージに適用するには、[任意 (Any)] を選択します。タイプとコードについての詳細は、次のページを参照してください。
 - ICMP—<http://www.iana.org/assignments/icmp-parameters/icmp-parameters.xml>
 - ICMPv6—<http://www.iana.org/assignments/icmpv6-parameters/icmpv6-parameters.xml>
- [その他 (Other)] : 適切なプロトコルを選択します。

Port Groups

グループに追加するポートオブジェクトを選択するには、[+] ボタンをクリックします。また、新しいオブジェクトを作成することもできます。

ステップ 4 [OK] をクリックして変更を保存します。

セキュリティ ゾーンの設定

セキュリティゾーンは、複数のインターフェイスからなるグループです。ゾーンを使用するとネットワークがセグメントに分けられ、トラフィックの管理や分類に役立ちます。複数のゾーンを定義できますが、1つのインターフェイスは1つのゾーンにしか含めることができません。

システムは、初期設定時に次のゾーンを作成します。これらのゾーンを編集してインターフェイスを追加/削除できます。また、不要になったゾーンを削除することもできます。

- **inside_zone** : 内部インターフェイスが含まれます。内部インターフェイスがブリッジグループである場合、このゾーンには内部ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) ではなく、すべてのブリッジグループメンバーインターフェイスが含まれます。このゾーンは、内部ネットワークを表します。
- **outside_zone** : 外部インターフェイスが含まれます。このゾーンは、インターネットなど、制御範囲の外にあるネットワークを表します。

通常は、ネットワーク内での役割に従ってインターフェイスをグループ化します。たとえば、インターネットに接続するインターフェイスを [outside_zone] セキュリティ ゾーンに配置し、内部ネットワーク用のすべてのインターフェイスを [inside_zone] セキュリティ ゾーンに配置します。その後、外部ゾーンから着信して内部ゾーンに向かうトラフィックにアクセス制御ルールを適用できます。

ゾーンを作成する前に、ネットワークに適用するアクセスルールやその他のポリシーを検討してください。たとえば、すべての内部インターフェイスを同じゾーンに配置する必要はありません。内部ネットワークが4つ存在していて、その1つを他の3つとは別に扱う必要がある場合は、ゾーンを1つではなく2つ作成できます。パブリック Web サーバへの外部アクセスを許可すべきインターフェイスがある場合、そのインターフェイス用に別個のゾーンを使用できます。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [新しいセキュリティ ゾーン の作成 (Create New Security Zone)] リンクをクリックすることにより、セキュリティ ゾーン プロパティの編集にセキュリティ ゾーンを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、次に目次から [セキュリティゾーン (Security Zones)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 ゾーンの [モード (Mode)] を選択します。

このモードはインターフェイスのモードに直接関係します。ゾーンには、1つのタイプのインターフェイスを含めることができます。

- [ルーテッド (Routed)] : ルーテッドインターフェイスは、セキュリティポリシーを適用できる通過トラフィック用の通常のインターフェイスです。
- [パッシブ (Passive)] : パッシブインターフェイスは、デバイスを通るトラフィックに影響を与えません。
- [インライン (Inline)] : インラインインターフェイスは、IPS 処理に使用されるインラインセットのメンバーです。

ステップ 5 [インターフェイス (Interfaces)] リストで、[+]をクリックし、ゾーンに追加するインターフェイスを選択します。

一覧には、その時点でゾーンに含まれていないすべての名前付きインターフェイスが表示されます。インターフェイスをゾーンに追加するには、その前にインターフェイスを設定して名前を付ける必要があります。

すべての名前付きインターフェイスがすでにゾーンに含まれている場合、この一覧には何も表示されません。あるインターフェイスを別のゾーンに移動するには、まず現在のゾーンから削除する必要があります。

(注)

□ブリッジグループインターフェイス (BVI) をゾーンに追加することはできません。代わりに、メンバーインターフェイスを追加してください。異なるゾーンにメンバーを配置することができます。

ステップ 6 [OK] をクリックして変更を保存します。

アプリケーション フィルタ オブジェクトの設定

アプリケーション フィルタ オブジェクトは、IP 接続で使用するアプリケーション、あるいは、タイプ、カテゴリ、タグ、リスク、またはビジネス関連性によってアプリケーションを定義するフィルタを定義します。ポート指定を使用する代わりに、ポリシーでこれらのオブジェクトを使用してトラフィックを制御できます。

個別のアプリケーションを指定することもできますが、アプリケーションフィルタを使用すれば、ポリシーの作成と管理が簡単になります。たとえば、リスクが高くビジネス関連性が低いすべてのアプリケーションを識別してブロックするアクセス制御ルールを作成できます。ユーザがこのようなアプリケーションのいずれかを使用しようとする、セッションがブロックされます。

アプリケーション フィルタ オブジェクトを使用せずに、アプリケーションやアプリケーションフィルタをポリシーで直接選択することもできます。しかし、同じグループに属するアプリケーションやフィルタに関して複数のポリシーを作成する必要がある場合は、オブジェクトが便利です。システムには事前定義されたアプリケーションフィルタが複数用意されています。これらを編集/削除することはできません。



(注) シスコは、システムや脆弱性データベース (VDB) の更新プログラムにより、追加のアプリケーション検出機能を頻繁に更新および追加しています。これにより、リスクの高いアプリケーションをブロックするルールが新しいアプリケーションに自動的に適用され、手動でルールを更新する必要がなくなります。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、アプリケーション基準を [アプリケーション (Applications)] タブに追加してから [フィルタとして保存 (Save As Filter)] リンクをクリックすることにより、ア

アクセス制御ルール編集時にアプリケーション フィルタ オブジェクトを作成することもできます。

始める前に

フィルタを編集するときに、選択したアプリケーションが VDB の更新によって削除された場合は、アプリケーション名の後に「Deprecated (廃止)」が表示されます。これらのアプリケーションはフィルタから削除する必要があります。それ以降の展開では、システムソフトウェアのアップグレードがブロックされます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アプリケーション フィルタ (Application Filters)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。

ステップ 4 [アプリケーション (Applications)] リストで [追加 + (Add +)] をクリックし、オブジェクトに追加するアプリケーションやフィルタを選択します。

最初のリストには、継続的にスクロールされる一覧形式でアプリケーションが表示されます。[高度なフィルタ (Advanced Filter)] をクリックすると、フィルタ オプションが表示され、アプリケーションを選択しやすくなります。選択が完了したら [追加 (Add)] をクリックします。このプロセスを繰り返して、アプリケーションやフィルタを追加できます。

(注)

1つのフィルタ条件内での複数の選択はOR関係にあります。「リスクが高いOR非常に高い」という具合です。フィルタ間の関係はANDであり、「リスクが高いOR非常に高いANDビジネスとの関連性は低いOR非常に低い」となります。フィルタを選択するごとに、アプリケーションの一覧が更新され、条件に一致するものだけが表示されます。これらのフィルタを使用して、個別に追加するアプリケーションの検索や、フィルタ基準をルールに追加する際に目的のアプリケーションが対象となっているかを確認できます。

リスク

アプリケーションが、組織のセキュリティポリシーに違反して使用される可能性：非常に低い～非常に高い。

ビジネスとの関連性

アプリケーションが、娯楽としてではなく、組織のビジネス活動の範囲内で使用される可能性：非常に低い～非常に高い。

種類

アプリケーションのタイプ：

- **アプリケーションプロトコル**：HTTPやSSHなどのホスト間の通信を表すアプリケーションプロトコル。
- **クライアントプロトコル**：Web ブラウザや電子メール クライアントなどのホスト上で動作しているソフトウェアを表すクライアント。
- **Web アプリケーション**：HTTP トラフィックの内容または要求された URL を表す MPEG ビデオや Facebook などの Web アプリケーション。

カテゴリ

アプリケーションの最も基本的な機能を表す一般的な分類。

タグ

アプリケーションに関する追加の情報。カテゴリに類似。

暗号化されたトラフィックの場合、システムがトラフィックを識別してフィルタ処理できるのは **SSL プロトコル** のタグが付けられたアプリケーションのみです。このタグが付いていないアプリケーションは、暗号化されていない、または復号されたトラフィックでのみ検出可能です。また、システムは **復号トラフィック** タグを、復号されたトラフィックでのみ検出できるアプリケーションに割り当てます。（暗号化されたトラフィックや暗号化されていないトラフィックで検出されるアプリケーションには割り当てない）

アプリケーション一覧（画面下部）

この一覧は、上部のフィルタ オプションを選択するごとに更新されるため、現在のフィルタに一致するアプリケーションのみを確認できます。この一覧を使用することで、フィルタ基準をルールに追加する際に目的のアプリケーションが対象となっているかを確認できます。特定のアプリケーションを追加しようとしている場合、このリストからそのアプリケーションを選択します。

ステップ 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

URL オブジェクトとグループの設定

URL オブジェクトとグループ（URL オブジェクトと総称する）を使用して、Web リクエストの URL または IP アドレスを定義します。これらのオブジェクトを使用して、アクセス制御ポリシーに手動の URL フィルタリング、またはセキュリティ インテリジェンス ポリシーにブロッッキングを実装できます。

URL オブジェクトは単一の URL または IP アドレスを定義するのに対して、URL グループ オブジェクトは複数の URL またはアドレスを定義できます。

URL オブジェクトを作成するときには、次の点に注意してください。

- パスを含めない（つまり、URL に / の文字がない）場合、一致はサーバーのホスト名のみに基づきます。1 つ以上の / を含める場合、文字列の部分一致には URL 文字列全体が使用されます。次に、次のいずれかに該当する場合、URL は一致と見なされます。
 - 文字列が URL の先頭にある。
 - 文字列がドットの後に続く。
 - 文字列の先頭にドットが含まれている。
 - 文字列が `://` 文字の後に続く。

たとえば、`ign.com` は `ign.com` および `www.ign.com` と一致するが、`verisign.com` とは一致しません。



(注) サーバーは再構成でき、ページは新しいパスに移動できるため、個々の Web ページまたはサイトの一部（つまり / 文字を含む URL 文字列）をブロックまたは許可するために手動の URL フィルタリングは使用しないことをお勧めします。

- システムは、暗号化プロトコル（HTTP と HTTPS）を無視します。つまり、ある Web サイトをブロックした場合、アプリケーション条件で特定のプロトコルを対象にしない限り、その Web サイトに向かう HTTP トラフィックと HTTPS トラフィックの両方がブロックされます。URL オブジェクトを作成するときに、プロトコルを指定する必要はありません。たとえば、`http://example.com` ではなく `example.com` を使用します。
- アクセス コントロール ルールで URL オブジェクトを使用して HTTPS トラフィックを照合することを計画している場合は、トラフィックの暗号化に使用される公開キー証明書内でサブジェクトの共通名を使用するオブジェクトを作成します。また、システムはサブジェクト共通名に含まれるサブドメインを無視するので、サブドメイン情報を含めないでください。たとえば、`www.example.com` ではなく、`example.com` を使用します。

ただし、証明書のサブジェクト共通名が Web サイトのドメイン名とはまったく関係ない場合があることをご了承ください。たとえば、`youtube.com` の証明書のサブジェクト共通名は `*.google.com` です（当然、これは随時変更される可能性があります）。SSL 復号ポリシーを使用して HTTPS トラフィックを復号し、URL フィルタリングルールが復号されたトラフィックで動作するようにすると、より一貫性のある結果が得られるようになります。



- (注) 証明書情報を利用できないためにブラウザがTLSセッションを再開した場合、URL オブジェクトは HTTPS トラフィックと一致しません。このため、慎重に URL オブジェクトを設定した場合でも、HTTPS 接続では一貫性のない結果が得られることがあります。

次に、[オブジェクト (Objects)] ページで直接オブジェクトを作成および編集する方法について説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される[新しいURL作成 (Create New URL)] リンクをクリックすることにより、URL プロパティの編集に URL オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、次に目次から [URL] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- グループを作成するには、[グループの追加 (Add Group)] ボタン  をクリックします。
- オブジェクトまたはグループを編集するには、オブジェクトの編集アイコン  をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトのごみ箱アイコン  をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。

ステップ 4 オブジェクトのコンテンツを定義します。

URL オブジェクト

[URL] ボックスに URL または IP アドレスを入力します。[URL] ではワイルドカードを使用できません。

URL グループ

グループに追加する URL オブジェクトを選択するには、[+] ボタンをクリックします。また、新しいオブジェクトを作成することもできます。

ステップ 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

位置情報オブジェクトの設定

位置情報オブジェクトは、トラフィックの送信元または宛先となるデバイスをホストする国および大陸を定義します。IPアドレスを使用する代わりに、ポリシーでこれらのオブジェクトを使用してトラフィックを制御できます。たとえば、地理的な場所を使用すると特定の国へのアクセスを簡単に制限できます。その際、その地域で使用される可能性のある IP アドレスをすべて把握する必要はありません。

通常は、位置情報オブジェクトを使用しなくても、地理的な場所をポリシーで直接選択することもできます。しかし、同じグループの国や大陸に対して複数のポリシーを作成する必要がある場合、オブジェクトは便利です。



(注) 地理的な場所の最新データをトラフィックフィルタリングに確実に使用するために、位置情報データベース (GeoDB) を定期的に更新することを強く推奨します。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [新しい位置情報の作成 (Create New Geolocation)] リンクをクリックすることにより、ネットワーク プロパティの編集集中に位置情報オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [地理位置情報 (Geolocation)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。

ステップ 4 [大陸/国 (Continents/Countries)] リストで、[追加+ (Add+)] をクリックし、オブジェクトに追加する大陸や国を選択します。

大陸を選択すると、その大陸内のすべての国が選択されます。

ステップ 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

syslog サーバの設定

Syslog サーバオブジェクトはコネクション型または診断システム ログ (syslog) メッセージを受信可能なサーバを識別します。Syslog サーバにログ収集と分析のための設定がある場合は、オブジェクトを作成してそれらを定義し、関連ポリシーでこのオブジェクトを使用します。

以下のイベントタイプをsyslogサーバに送信できます。

- 接続イベント。次のポリシーのタイプで syslog サーバ オブジェクトを構成します：アクセス制御ルールとデフォルトアクション、SSL 復号ルールとデフォルトアクション、セキュリティ インテリジェンス ポリシー。
- 侵入イベント。侵入ポリシーで syslog サーバ オブジェクトを構成します。
- 診断イベント。 [リモート syslog サーバのログGINGの設定 \(942 ページ\)](#) を参照してください。
- ファイル/マルウェアイベント。[デバイス]>[システム設定]>[ログGING設定]でsyslogサーバを設定します。

次に、[オブジェクト (Objects)] ページで直接オブジェクトを作成および編集する方法について説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [syslog サーバの追加 (Add Syslog Server)] リンクをクリックすることにより、syslog サーバ プロパティの編集に syslog サーバオブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [Syslog サーバ (Syslog Servers)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 syslog サーバのプロパティを次のように設定します。

- [IP アドレス (IP Address)] : syslog サーバの IP アドレスを入力します。
- [プロトコルタイプ (Protocol Type)]、[ポート番号 (Port Number)] : プロトコルを選択して、syslog に使用するポート番号を入力します。デフォルトは UDP/514 です。[TCP] を選択すると、システムはsyslogサーバが利用できない場合を認識して、サーバが再度利用可能になるまでイベントの送信を停止することができます。デフォルト UDP ポートは 514、デフォルト TCP ポートは 1470 です。デフォルトを変更する場合、ポートは 1025 ~ 65535 の範囲にする必要があります。

(注)

トランスポートプロトコルとして TCP を使用する場合、メッセージが失われないように syslog サーバーへの接続が 4 つ開きます。syslog サーバーを使用して非常に多数のデバイスからメッセージを収集する場合、接続オーバーヘッドの合計がサーバーに対して大きすぎる場合は、代わりに UDP を使用します。

- [デバイスログのインターフェイス (Interface for Device Logs)] : 診断 syslog メッセージの送信に使用するインターフェイスを選択します。接続、侵入、ファイル、マルウェアの各イベントタイプでは、常に管理インターフェイスが使用されます。インターフェイスの選択によって、syslog メッセージに関連付けられる IP アドレスが決まります。次のオプションのいずれかを選択します。

- [データインターフェイス (Data Interface)] : 選択したデータ インターフェイスを診断 syslog メッセージに使用します。ブリッジグループメンバー インターフェイス経由でサーバにアクセス可能な場合は、代わりに ☐ブリッジグループインターフェイス (BVI) を選択してください。診断インターフェイス(物理的な管理インターフェイス) 経由でアクセスできる場合は、このオプションではなく[管理インターフェイス]を選択することを推奨します。パッシブインターフェイスを選択することはできません。

データインターフェイスで通信する場合、接続、侵入、ファイル、およびマルウェアの syslog メッセージでは、送信元 IP アドレスが管理インターフェイスかゲートウェイ インターフェイスで使用されます。前述のイベントタイプ用に選択したインターフェイスから syslog サーバにトラフィックを転送するための適切なルートが、ルーティングテーブルに存在する必要があることに注意してください。

- [管理インターフェイス]: すべてのタイプの syslog メッセージに仮想的な管理インターフェイスを使用します。データインターフェイス経由でルーティングする場合、送信元 IP アドレスが管理インターフェイスまたはゲートウェイ インターフェイスで使用されます。

ステップ 4 [OK] をクリックして変更を保存します。

セキュリティグループタグ (SGT) グループの設定

セキュリティグループタグ (SGT) グループオブジェクトを使用して、Identity Services Engine (ISE) によって割り当てられた SGT に基づいて送信元アドレスまたは宛先アドレスを識別します。その後、トラフィックの一致基準を定義するためにアクセス制御ルールでオブジェクトを使用できます。

ISE から取得した情報をアクセス制御ルールで直接使用することはできません。代わりに、ダウンロードした SGT 情報を参照する SGT グループを作成する必要があります。SGT グループは複数の SGT を参照できます。そのため、必要に応じて、関連するタグのコレクションに基づいてポリシーを適用できます。

アクセス制御のために SGT を使用方法の詳細については、[TrustSec セキュリティ グループタグを使用したネットワーク アクセスの制御方法 \(650 ページ\)](#) を参照してください。

始める前に

SGT グループを作成する前に、SXP マッピングをサブスクライブして変更を展開するように ISE アイデンティティソースを設定する必要があります。その後、システムは ISE サーバから SGT 情報を取得します。SGT をダウンロードした後にのみ、SGT グループを作成できます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [SGT グループ (SGT Groups)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 [タグ (Tags)] で、[+] をクリックし、ダウンロードした SGT を選択してオブジェクトに含めます。

SGT を削除するには、タグ名の右横にある [x] をクリックします。

リストが空の場合、システムは SGT マッピングをダウンロードできませんでした。この場合、次のようになります。

- ISE アイデンティティ オブジェクトが SXP トピックをサブスクライブしていることを確認します。マッピングを取得するには、SXP をサブスクライブする必要があります。
- ISE で静的マッピングが定義されていることと、これらのマッピングをパブリッシュするように ISE が設定されていることを確認します。マッピングが存在しない場合は、単にダウンロードされるものではありません。[ISE でのセキュリティグループと SXP パブリッシングの設定 \(654 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 5 [OK] をクリックします。



第 8 章

証明書

デジタル証明書は、認証に使用されるデジタルIDを保持しています。証明書は、SSL（セキュアソケットレイヤ）、TLS（Transport Layer Security）、およびDTLS（データグラムTLS）接続（HTTPSやLDAPSなど）に使用されます。次のトピックでは、証明書の作成と管理の方法について説明します。

- [証明書について（197 ページ）](#)
- [証明書の設定（201 ページ）](#)

証明書について

デジタル証明書は、認証に使用されるデジタルIDを提供します。デジタル証明書には、名前、シリアル番号、会社、部門、またはIPアドレスなど、ユーザまたはデバイスを識別する情報が含まれます。デジタル証明書には、ユーザまたはデバイスの公開キーのコピーも含まれています。証明書は、SSL（セキュアソケットレイヤ）、TLS（Transport Layer Security）、およびDTLS（データグラムTLS）接続（HTTPSやLDAPSなど）に使用されます。

次のタイプの証明書を作成できます。

- **内部証明書：**内部アイデンティティ証明書は、特定のシステムまたはホストの証明書です。この証明書は、OpenSSL ツールキットを使用して自分で生成するか、証明機関から取得できます。自己署名証明書を生成することもできます。何らかの理由で内部証明書が期限切れになるか無効になった場合は、次の CLISH CLI コマンドを使用して再生成できます。

```
> system support regenerate-security-keyring
String Certificate to be regenerated, default or fdm
```

- **内部証明書認証局（CA）証明書：**内部 CA 証明書は、他の証明書の署名にシステムが使用できる証明書です。これらの証明書は、基本制約拡張と CA フラグに関して内部アイデンティティ証明書と異なります。これらは CA 証明書では有効ですが、アイデンティティ証明書では無効です。この証明書は、OpenSSL ツールキットを使用して自分で生成するか、証明機関から取得できます。自己署名内部 CA 証明書を生成することもできます。自己署名内部 CA 証明書を設定する場合は、CA はデバイス自体で稼働します。

- 信頼できる認証局（CA）証明書：信頼できる CA 証明書は、他の証明書に署名するために使用されます。これは自己署名され、ルート証明書と呼ばれます。別の CA 証明書により発行される証明書は、下位証明書と呼ばれます。

証明機関（CA）とは、証明書に「署名」してその認証を確認することで、デバイスまたはユーザのアイデンティティを保証する、信頼できる機関です。CA は、公開キーまたは秘密キーの暗号化を使用してセキュリティを確保する PKI コンテキストでデジタル証明書を発行します。CA は、信頼できるサードパーティ（VeriSign など）の場合もあれば、組織内に設置したプライベート CA（インハウス CA）の場合もあります。CA は、証明書要求の管理とデジタル証明書の発行を行います。詳細については、「[公開キー暗号化（198 ページ）](#)」を参照してください。

公開キー暗号化

RSA 暗号化システムなどの公開キー暗号化では、各ユーザは、公開キーと秘密キーの両方を含むキーペアを使用します。これらのキーはお互い補足しあい、一方のキーで暗号化されたものは、もう一方のキーで復号できます。

簡単に言えば、データが秘密キーで暗号化されると、署名が形成されます。署名はデータに付加されて受信者に送信されます。受信者は送信者の公開キーをデータに適用します。データとともに送信された署名が、公開キーをデータに適用した結果と一致した場合、メッセージの有効性が確立されます。

このプロセスは、受信者が送信者の公開キーのコピーを持っていること、およびその公開キーが送信者になりすました別人のものではなく、送信者本人のものであることを受信者が強く確信していることに依存しています。

通常、送信者の公開キーは外部で取得するか、インストール時の操作によって取得します。たとえば、ほとんどの Web ブラウザでは、いくつかの CA のルート証明書がデフォルトで設定されています。

デジタル証明書および公開キー暗号化の詳細については、[openssl.org](#)、[Wikipedia](#)、またはその他の情報源を参照してください。SSL/TLS 暗号方式について十分に理解していると、デバイスに対してセキュアな接続を確立するのに役立ちます。

機能別の証明書タイプ

各機能に対して正しい種類の証明書を作成する必要があります。次の機能には証明書が必要です。

アイデンティティ ポリシー（キャプティブ ポータル）：内部証明書

（オプション）キャプティブポータルはアイデンティティポリシーで使用されます。ユーザは、識別情報を示してユーザ名に関連付けられた IP アドレスを取得するために、デバイスへの認証時に、この証明書を承認する必要があります。証明書を提供しない場合、デバイスは自動で作成された証明書を使用します。

アイデンティティ レalm（アイデンティティ ポリシーおよびリモート アクセス VPN）：信頼された CA 証明書

（オプション）ディレクトリ サーバに暗号化接続を使用する場合、ディレクトリ サーバで認証を実行するために、証明書を承認する必要があります。ユーザは、アイデンティティおよびリモート アクセス VPN ポリシーによるプロンプトが表示されたら認証する必要があります。ディレクトリ サーバに暗号化を使用しない場合、証明書は必要ありません。

管理 Web サーバ（管理アクセス システム設定）：内部証明書

（オプション）Device Manager は Web ベースのアプリケーションであり、Web サーバで動作します。お使いのブラウザで有効として受け入れられる証明書をアップロードすると、Untrusted Authority の警告を受けるのを回避できます。

リモート アクセス VPN：内部証明書

（必須）内部証明書は、セキュアクライアントがデバイスへの接続を行うときにデバイス ID を確立する外部インターフェイスに使用します。クライアントはこの証明書を承認する必要があります。

サイト間 VPN：内部および信頼できる CA 証明書

サイト間 VPN 接続に証明書認証を使用する場合は、接続内のローカルピアの認証に使用される内部アイデンティティ証明書を選択する必要があります。これは VPN 接続の定義の一部ではありませんが、システムがピアを認証できるように、ローカルおよびリモートピアのアイデンティティ証明書に署名するために使用した信頼できる CA 証明書をアップロードする必要があります。

SSL 復号ポリシー：内部、内部証明書、および信頼できる CA 証明書および証明書グループ

（必須）SSL 復号ポリシーは、以下の目的のため証明書を使用します。

- 内部証明書は既知のキー復号ルールに使用されます。
- 内部 CA 証明書は、クライアントと 脅威に対する防御 デバイス間にセッションを作成するときに、再署名の復号ルールに使用されます。
- 信頼できる CA 証明書は、脅威に対する防御 デバイスとサーバ間にセッションを作成するときに、再署名の復号ルールに間接的に使用されます。信頼できる CA 証明書は、サーバの証明書の署名機関を検証するために使用されます。これらの証明書は、直接設定するか、ポリシー設定において証明書グループで設定できます。システムには、Cisco-Trusted-Authorities グループで収集された多数の信頼できる CA 証明書が含まれるため、追加の証明書をアップロードする必要はないことがあります。

ストリーミング テレメトリ：内部証明書と信頼できる CA 証明書。

これらの証明書は、通信を確立するために同じ CA によって署名されている必要があります。内部証明書は 脅威に対する防御 デバイスを表します。信頼できる CA 証明書は外部テレメトリ コレクタを表します。

例：OpenSSL を使用した内部証明書の生成

次の例では、OpenSSL コマンドを使用して内部サーバ証明書を生成します。OpenSSL は [openssl.org](https://www.openssl.org) から取得できます。具体的な情報については OpenSSL ドキュメンテーションをご確認ください。この例で使用したコマンドは変更される可能性があります。また、便利な別のオプションを使用できる可能性もあります。

この手順は、脅威に対する防御 にアップロードする証明書の取得方法について、1つの考え方を示すものです。



(注) ここに示す OpenSSL コマンドは、単なる例です。実際のセキュリティ要件に合わせてパラメータを調整してください。

手順

ステップ 1 キーを生成します。

```
openssl genrsa -out server.key 4096
```

ステップ 2 証明書署名要求 (CSR) を生成します。

```
openssl req -new -key server.key -out server.csr
```

ステップ 3 キーと CSR を持つ自己署名証明書を生成します。

```
openssl x509 -req -days 365 -in server.csr -signkey server.key -out server.crt
```

Device Manager は暗号化キーをサポートしないため、自己署名証明書を生成するときはリターンキーを押してチャレンジパスワードをスキップしてください。

ステップ 4 内部証明書のオブジェクトを Device Manager で作成するときは、正しいフィールドにファイルをアップロードします。

ファイルの内容をコピーして貼り付けることもできます。サンプルのコマンドによって、次のファイルが作成されます。

- **server.crt** : [サーバ認証 (Server Certificate)] フィールドにコンテンツをアップロードまたはペーストします。
- **server.key** : [証明書キー (Certificate Key)] フィールドにコンテンツをアップロードまたはペーストします。キーの生成時にパスワードを指定した場合は、次のコマンドを使用してそれを復号できます。出力が **stdout** に送信され、ここで出力をコピーできます。

```
openssl rsa -in server.key -check
```

証明書の設定

Threat Defense は、PEM または DER 形式の X.509 証明書をサポートします。OpenSSL を使用して必要に応じて証明書を生成、信頼できる認証局から取得、または自己署名証明書を作成します。

証明書の詳細については、[証明書について（197 ページ）](#) を参照してください。

各機能で使用するタイプについては、「[機能別の証明書タイプ（198 ページ）](#)」を参照してください。

次に、[オブジェクト（Objects）] ページで直接オブジェクトを作成および編集する方法について説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [証明書の新規作成（Create New Certificate）] リンクをクリックすることにより、証明書プロパティの編集中に証明書オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト（Objects）] を選択し、目次から [証明書（Certificates）] を選択します。

システムには、そのまま、または置き換えて使用できる次の事前定義された証明書が付属します。

- DefaultInternalCertificate
- DefaultWebserverCertificate
- NGFW-Default-InternalCA

システムには、サードパーティ証明機関からの多数の信頼された CA の証明書も含まれています。これらは再署名の復号アクションのために SSL 復号ポリシーが使用します。

Cisco-Trusted-Authorities グループにはこれらの証明書がすべて含まれており、このグループが SSL 復号ポリシーで使用するデフォルトグループです。

定義済みの検索フィルタをクリックすると、リストを [システム定義（System-defined）] の証明書または [ユーザ定義（User-defined）] の証明書だけに制限できます。また、[脆弱キー（Weak Key）] フィルタを使用して、推奨される最小長よりも短いキーを持つ証明書を検索できます。それらの証明書を、より長いキーを持つ証明書に置き換えることをお勧めします。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しい証明書オブジェクトを作成するには、[+] メニューから証明書のタイプに適したコマンドを使用します。

- 新しい証明書グループを作成するには、 をクリックし、[証明書グループの追加 (Add Certificate Group)] を選択します。
- 証明書やグループを表示または編集するには、証明書の編集アイコン () または表示アイコン () をクリックします。
- 参照されていない証明書やグループを削除するには、証明書のごみ箱アイコン () をクリックします。

証明書の作成と編集の詳細については、次のトピックを参照してください。

- [内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#)
- [自己署名内部および内部 CA 証明書の生成 \(204 ページ\)](#)
- [信頼できる CA 証明書のアップロード \(206 ページ\)](#)
- [信頼できる CA 証明書グループの設定 \(208 ページ\)](#)

内部および内部 CA 証明書のアップロード

内部アイデンティティ証明書は、特定のシステムまたはホストの証明書です。

内部 CA 証明書は、他の証明書の署名に使用できる証明書です。これらの証明書は、基本制約拡張と CA フラグに関して内部アイデンティティ証明書と異なります。これらは CA 証明書では有効ですが、アイデンティティ証明書では無効です。

この証明書は、OpenSSL ツールキットを使用して自分で生成するか、認証局から取得できます。その後、次の手順を使用してアップロードします。キー生成の例については、[例 : OpenSSL を使用した内部証明書の生成 \(200 ページ\)](#) を参照してください。

自己署名内部アイデンティティ証明書および内部 CA 証明書を生成することもできます。自己署名内部 CA 証明書を設定する場合は、CA はデバイス自体で稼働します。自己署名証明書の作成の詳細については、[自己署名内部および内部 CA 証明書の生成 \(204 ページ\)](#) を参照してください。

これらの証明書を使用する機能の詳細については、[機能別の証明書タイプ \(198 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [証明書 (Certificates)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- **[+] > [内部証明書の追加 (Add Internal Certificate)]** をクリックし、次に **[証明書とキーのアップロード (Upload Certificate and Key)]** をクリックします。

- **[+] > [内部CA証明書の追加 (Add Internal CA Certificate)]** をクリックし、次に **[証明書とキーのアップロード (Upload Certificate and Key)]** をクリックします。
- 証明書を編集または表示するには、情報アイコン (i) をクリックします。ダイアログボックスには、証明書の件名、発行者、および有効な時間範囲が表示されます。[証明書の置換 (Replace Certificate)] をクリックして、新しい証明書とキーをアップロードします。ダイアログボックスで証明書とキーを貼り付けることもできます。

ステップ 3 証明書の名前を入力します。

名前は設定でオブジェクト名としてのみ使用され、証明書自体の一部にはなりません。

ステップ 4 [証明書のアップロード (Upload Certificate)] (編集する場合は、[証明書の置換 (Replace Certificate)]) をクリックし、証明書ファイル (例: *.crt) を選択します。許可されるファイル拡張子は、.pem、.cert、.cer、.crt、および .der です。または、証明書に貼り付けます。

証明書は PEM または DER 形式の X509 証明書である必要があります。

貼り付ける証明書には、必ず BEGIN CERTIFICATE ラインと END CERTIFICATE ラインを含めてください。例：

```
-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIICMTCCAZoCCQDdUV3NGK/cUjANBgkqhkiG9w0BAQsFADBDMSwCQYDVQQGEwJV
UzETMBEGA1UECAwKU29tZS1TdGF0ZTEhMB8GA1UECgwYSW50ZXJuZXQgV2lkZ2l0
(...5 lines removed...)
shGJDReRYJQqilHHzrYTWZAYTrD7NQPhtK+ZiJng67cPgnNDuXEn55UwMOQoHBp
HMUwmhiGZlZJM8BpX2Js2yQ3ms30pr8rO+gPCPMCAwEAATANBgkqhkiG9w0BAQsF
AAOBgQCB02CebA6YjJCGr2CJZrQSeUwSveRBpmOuoqm98o2Z+5gJM5CkqgfwxwCUn
RV7LRfQGFYd76V/5uor4Wx2ZCjy6+zuQEm4ZxWNSZpA9UBixFXJCs9MBO4qkG5D
v1k3WYJfcgyJ10h4E4b0W2xiixBU+xoOTLRATnbKY36EWAG5cw==
-----END CERTIFICATE-----
```

ステップ 5 [キーのアップロード (Upload Key)] (または編集時に、[キーの交換 (Replace Key)]) をクリックし、証明書ファイル (例: *.key) を選択します。ファイル拡張子は .key である必要があります。または、証明書のキーに貼り付けます。

キーは暗号化できず、RSA キーである必要があります。

次に例を示します。

```
-----BEGIN RSA PRIVATE KEY-----
MIICXQIBAAKBgQC1SulBknrmJzw/5FZ9YgdMLDUGJlbYgkN7mVrkjyLQx2TYsem
r8iTiKB6iyTKbuS4iPeyEYkNF5FglCqKWEdmthNZkBhOsPslA8e60r5mImeDrtw+
Cc0O5cSfnlTAw5CgcGkcXTCaGIZmXmkzwGlfYmzbJDeazfSmvys76A8I8wIDAQAB
AoGAUVDgEX8vXE0m9cOubPZ54pZo64KW/OJzUKP0TwxdLqGw/h39XFpkEXiIgmDL
(...5 lines removed...)
DSWvzekRDH83dmP66+MIbWePhbhty+D1OxbiuVuHV0/ZhxOhCG8tig3R8QJBAJmj
fId05+1dNI4tGbWv6hHh/H/dTP2STlZ3jERMZd29fjIRuJ9jpFC2lIDjvs8YGeAe
0YHkfSOULJn8/jOCf6kCQQDIJiHfGF/31Dk/8/5MGrG+3zau6oKXiu6db8Rh+7l
MU0x09tvtbBUy9REJq1YJWTKpeKD+E0QL+FX0bqvz4tHA
-----END RSA PRIVATE KEY-----
```

ステップ 6 [OK] をクリックします。

キーサイズが、生成された自己署名証明書で許可されている最小サイズよりも小さい場合、証明書が推奨の最小要件を満たしていないことを示す警告が表示されます。いずれにしても [続行 (Proceed)] をクリックして証明書をアップロードしますが、新しい強力な証明書を作成することをお勧めします。

自己署名内部および内部 CA 証明書の生成

内部アイデンティティ証明書は、特定のシステムまたはホストの証明書です。

内部 CA 証明書は、他の証明書の署名に使用できる証明書です。これらの証明書は、基本制約拡張と CA フラグに関して内部アイデンティティ証明書と異なります。これらは CA 証明書では有効ですが、アイデンティティ証明書では無効です。

ユーザは、自己署名内部アイデンティティと内部 CA 証明書を生成できます。つまり、証明書はデバイス自体によって署名されます。自己署名内部 CA 証明書を設定すると、CA がデバイス上で有効になります。システムは、証明書とキーの両方を生成します。

また、これらの証明書は、OpenSSL を使用して作成することも、信頼できる CA から取得してアップロードすることもできます。詳細については、[内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#) を参照してください。

これらの証明書を使用する機能の詳細については、[機能別の証明書タイプ \(198 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [証明書 (Certificates)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- **[+] > [内部証明書の追加 (Add Internal Certificate)]** をクリックし、次に **[自己署名証明書 (Self-Signed Certificate)]** をクリックする。
- **[+] > [内部CA証明書の追加 (Add Internal CA Certificate)]** をクリックし、次に **[自己署名証明書 (Self-Signed Certificate)]** をクリックする。

(注)

証明書を編集または表示するには、情報アイコン (i) をクリックします。ダイアログボックスには、証明書の件名、発行者、および有効な時間範囲が表示されます。[証明書の置換 (Replace Certificate)] をクリックして、新しい証明書とキーをアップロードします。証明書を交換する際は、次の手順で説明されている自己署名の特性を設定し直すことはできません。代わりに、[内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#) の説明に従って、新しい証明書を貼り付けるかアップロードする必要があります。残りの手順は、新しい自己署名証明書のみに適用されます。

ステップ 3 証明書の名前を入力します。

名前は設定でオブジェクト名としてのみ使用され、証明書自体の一部にはなりません。

ステップ 4 証明書の件名および発行者の情報については、次の少なくとも 1 つを設定します。

- **Country (C)** : 証明書に含める 2 文字の ISO 3166 国コード。たとえば、米国の国コードは US です。ドロップダウン リストから国コードを選択します。
- **State or Province (ST)** : 証明書に含める都道府県または州。
- **Locality or City (L)** : 都市の名前など、証明書に含める地域。
- **Organization (O)** : 証明書に含める組織または会社の名前。
- **Organizational Unit (Department) (OU)** : 証明書に含める組織単位の名前 (部門名など)。
- **Common Name (CN)** : 証明書に含める X.500 共通名。これは、デバイスの名前、Web サイト、または他の文字列にすることができます。この要素は、通常は正常な接続のために必要です。たとえば、リモートアクセス VPN で使用する内部証明書には CN を含める必要があります。
- **[キータイプ (Key Type)]** : この証明書用に生成するキーのタイプ : RSA、ECDSA (楕円曲線デジタル署名アルゴリズム (楕円曲線 DSA))、または EdDSA (エドワード曲線デジタル署名アルゴリズム)。
 - RSA キーは 2048、3072、または 4096 ビットです。
 - ECDSA キーは 256、384、または 521 ビットです。
 - EdDSA キーは 256 ビットです。
- **[有効期間]**: 証明書が有効と見なされる期間。有効期限の設定に関係なく、デフォルトは本日から 825 日です。デフォルトに戻すには、[デフォルトの設定] をクリックします。次のいずれかの方法を使用して、期間を設定できます。期限が切れる前に必ず証明書を交換してください。
 - **[日付別]**: [期限日] をクリックして、証明書が有効と見なされる最終日を選択します。
 - **[日数別]**: 証明書が有効と見なされる本日からの日数を入力します。数字を入力したら、[日付別] をクリックして、計算された期限日を確認できます。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

信頼できる CA 証明書のアップロード

信頼できる認証局（CA）の証明書は、他の証明書に署名するために使用されます。これは自己署名され、ルート証明書と呼ばれます。別の CA 証明書により発行される証明書は、下位証明書と呼ばれます。

これらの証明書を使用する機能の詳細については、[機能別の証明書タイプ（198ページ）](#)を参照してください。

外部認証局から信頼できる CA 証明書を入手するか、OpenSSL ツールなど、内部の CA を使用して CA 証明書を作成します。その後、次の手順を使用して証明書をアップロードします。

始める前に

システムは 1 日に 1 回シスコに連絡して、新しいまたは更新された信頼できる CA 証明書があるかどうかを判断し、更新された証明書があればダウンロードします。毎日このジョブを実行することで、プレインストールされた証明書が最新の状態に保たれます。**show cert-update** コマンドを使用して、CLI でこの自動チェックを監視できます。**configure cert-update auto-update disable** コマンドを使用して毎日のジョブを無効にし、**configure cert-update run-now** コマンドを使用して更新を手動でダウンロードできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [証明書 (Certificates)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- **[+] > [信頼できる CA 証明書の追加 (Add Trusted CA Certificate)]** の順にクリックします。
- 証明書を編集するには、その証明書の編集アイコン (🔗) をクリックします。

ステップ 3 証明書の名前を入力します。

名前は設定でオブジェクト名としてのみ使用され、証明書自体の一部にはなりません。

ステップ 4 [証明書のアップロード (Upload Certificate)] (編集する場合は、[証明書の置換 (Replace Certificate)]) をクリックし、信頼できる CA 証明書ファイル (例: *.pem) を選択します。許可されるファイル拡張子は、.pem、.cert、.cer、.crt、および .der です。または、信頼できる CA 証明書に貼り付けます。

証明書のサーバの名前は、サーバのホスト名/IP アドレスと一致する必要があります。たとえば、IP アドレスとして 10.10.10.250 を使用しているのに、証明書で ad.example.com を使用すると接続が失敗します。

証明書は PEM または DER 形式の X509 証明書である必要があります。

貼り付ける証明書には、必ず BEGIN CERTIFICATE ラインと END CERTIFICATE ラインを含めてください。例：

```

-----BEGIN CERTIFICATE-----
MIIFgTCCA2mgAwIBAgIJANvdcLnabFGYMA0GCSqGSIb3DQEBCwUAMFcxMjEzNDE3
BAYTA1VTMQswCQYDVQIDAJUWDEPMA0GA1UEBwwGYXVzdGluMRQwEgYDVQKDasx
OTIuMTY4LjEuMTEUMBIGA1UEAwwLMTkyLjE2OC4xLjEwHhcNMjE3MDI3MjEzNDE3
WhcNMjE3MDI3MjEzNDE3WjBXMQswCQYDVQGEwJVUzELMAkGA1UECAwCVFgxDzAN
BgNVBACMBmF1c3RpbjEUMBIGA1UECgwLMTkyLjE2OC4xLjEwFDASBgNVBAMMCzE5
Mi4xNjguMS4xMIIICiJANBgkqhkiG9w0BAQEFAAOCAg8AMIICGKCAgEA5NceYwtP
ES6Ve+S9z7WLKGX5JlF58AvH82GPKQdrixn3FZeWLQapTpJZt/vgtAI2FZIK3lh
(...20 lines removed...)
hbr6H0gKlOwXbRvOdkstzTEzVUqbgxt5Lwupg3b2ebQhWJz4BZvMsZX9etveEXDh
PY184V3yeSeYjbSCF5rP71fObG9Iu6+u4EfHp/NQv9s9dN5PMffXKieqpuN20Ojv
2b1sfOydf4GMUKLBUMkhQnip6+3W
-----END CERTIFICATE-----

```

ステップ 5 この証明書が認証局によって発行されていない場合は、[CA証明書のチェックをスキップする (Skip CA Certificate Check)] を選択します。

信頼できる CA 証明書としてローカル CA 証明書をインストールする必要がある場合は、チェックをスキップしてください。

ステップ 6 [検証の使用 (Validation Usage)] を設定して、証明書の使用を制限します。

一部の機能では、特定の証明書に対して接続を検証できるかどうかを選択できます。それらの機能が証明書を有効に使用できることを証明書で示す必要があります。そうしないと、接続が拒否されます。

これらのオプションに含まれていない機能は、明示的な使用許可なしでこの証明書に対して検証できます。たとえば、SSL 復号ポリシー、および **Device Manager** をホストする Web サーバーは、[検証の使用 (Validation Usage)] オプションを無視します。このフィールドでオプションを選択すると、**show running-config** コマンドを使用して表示される実行コンフィギュレーションに証明書がダウンロードされます。

これらのオプションの主な目的は、特定の証明書に対して検証できるため、VPN 接続が確立されないようにすることです。

- [SSL サーバ (SSL Server)] : リモート SSL サーバで証明書を検証します。ダイナミック DNS に使用されます。
- [SSL クライアント (SSL Client)] : 着信リモートアクセス VPN 接続の証明書を検証します。
- [IPsec クライアント (IPsec Client)] : 着信 IPsec サイト間 VPN 接続の証明書を検証します。
- [その他 (Other)] : Snort 検査エンジンで管理されない機能 (LDAPs など) を検証します。このオプションは、特定の機能に問題がある場合にのみ選択します。このオプションは他のすべてのオプションと相互に排他的です：他のオプションを選択する前にそれを選択解除してからこのオプションを選択することができます。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

信頼できる CA 証明書グループの設定

SSL 復号ポリシー設定で外部の信頼できる CA 証明書グループを使用して、SSL 復号ポリシーが信頼する必要がある証明書を指定します。エンドユーザが、証明書の発行者の証明書が信頼できる証明書に含まれていないサイトに接続しようとする、証明書を信頼することを求めるメッセージが表示されます。そのため、信頼できるリストに証明書がないと、エンドユーザの利便性は低下しますが、それ自体が接続を妨げることはありません（アクセス制御ルールを使用して実現することは可能）。

デフォルトグループは Cisco-Trusted-Authorities です。次の場合にのみ、独自のグループを作成する必要があります。

- デフォルトグループにない証明書を信頼する必要がある場合。作成後、SSL 復号ポリシー設定でデフォルトグループと新しいグループの両方を選択します。
- デフォルトグループよりも限定された証明書リストを信頼する必要がある場合。作成後、信頼できる証明書の完全なリスト（差分だけでなく）を持つグループを作成し、SSL 復号ポリシー設定で唯一のグループとして選択します。

始める前に

グループに追加するすべての信頼できる CA 証明書をアップロードします（システムにまだない場合）。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [証明書 (Certificates)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しい証明書グループを作成するには、 をクリックし、[証明書グループの追加 (Add Certificate Group)] を選択します。
- 証明書グループを編集するには、そのグループの編集アイコン () をクリックします。

ステップ 3 証明書グループの [名前 (Name)] を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 [+] をクリックし、証明書をグループに追加します。

グループに必要なすべての証明書を追加します。グループの作成時に [新規信頼 CA 証明書の作成 (Create New Trusted CA Certificate)] をクリックして新しい証明書をアップロードできます。

グループ内の証明書が不要になった場合は、証明書の [X] アイコン (右横) をクリックします。

ステップ 5 [OK] をクリックします。



第 9 章

アイデンティティ ソース

アイデンティティ ソースは、ユーザ アカウントを定義するサーバおよびデータベースです。この情報は、IP アドレスに関連付けられているユーザー ID の提供や、Device Manager へのリモートアクセス VPN 接続またはアクセスを認証するなど、さまざまな方法で利用できます。

ここでは、アイデンティティ ソースの定義方法について説明します。アイデンティティ ソースを必要とするサービスを設定するときに、次のオブジェクトを使用します。

- [アイデンティティ ソースについて \(209 ページ\)](#)
- [Active Directory \(AD\) アイデンティティ レルム \(211 ページ\)](#)
- [RADIUS サーバおよびグループ \(218 ページ\)](#)
- [Identity Services Engine \(ISE\) \(224 ページ\)](#)
- [SAMLサーバ \(228 ページ\)](#)
- [ローカル ユーザ \(232 ページ\)](#)

アイデンティティ ソースについて

アイデンティティ ソースは、組織内のユーザのユーザアカウントを定義する AAA サーバおよびデータベースです。この情報は、IP アドレスに関連付けられているユーザー ID の提供や、Device Manager へのリモートアクセス VPN 接続またはアクセスを認証するなど、さまざまな方法で利用できます。

[オブジェクト (Objects)] > [アイデンティティソース (Identity Sources)] ページを使用して、ソースを作成および管理します。アイデンティティ ソースを必要とするサービスを設定するときに、次のオブジェクトを使用します。

サポートされているアイデンティティ ソースとその使用方法是次のとおりです。

Active Directory (AD) アイデンティティ レルム

Active Directory は、ユーザアカウントおよび認証情報を提供します。[Active Directory \(AD\) アイデンティティ レルム \(211 ページ\)](#) を参照してください。

このソースは、次の目的で使用できます。

- リモートアクセス VPN (プライマリアイデンティティ ソースとして)。ADはRADIUS サーバと組み合わせて使用できます。

- アイデンティティ ポリシー（アクティブ認証用、およびパッシブ認証で使用されるユーザ アイデンティティ ソースとして）。

AD（Active Directory）レルムシーケンス

AD レルムシーケンスは、AD レルムオブジェクトの番号付きリストです。レルムシーケンスは、ネットワーク内で複数の AD ドメインを管理する場合に役立ちます。[AD レルムシーケンスの設定（216 ページ）](#) を参照してください。

このソースは、次の目的で使用できます。

- パッシブ認証で使用されるユーザ ID ソースとしての ID ポリシー。シーケンス内のレルムの順序によって、競合が発生しているまれな状況で、システムがユーザ ID を決定する方法が決まります。

Cisco Identity Services Engine（ISE）または Cisco Identity Services Engine Passive Identity Connector（ISE PIC）

ISE を使用している場合は、脅威に対する防御 デバイスと ISE 展開を統合できます。[Identity Services Engine（ISE）（224 ページ）](#) を参照してください。

このソースは、次の目的で使用できます。

- アイデンティティ ポリシー（ISE からユーザ アイデンティティを収集するためのパッシブ アイデンティティ ソースとして）。

RADIUS サーバ、RADIUS サーバグループ

RADIUS サーバを使用している場合は、それらを Device Manager で使用することもできます。それぞれのサーバを個別のオブジェクトとして定義し、それらをサーバグループ（特定グループ内のサーバは互いのコピー）に入れる必要があります。サーバグループを機能に割り当て、個々のサーバは割り当てないでください。[RADIUS サーバおよびグループ（218 ページ）](#) を参照してください。

このソースは、次の目的で使用できます。

- 認証、および許可、アカウンティングのアイデンティティソースとしてのリモートアクセス VPN。ADはRADIUSサーバと組み合わせて使用できます。
- アイデンティティ ポリシー（リモートアクセス VPN ログインからユーザ アイデンティティを収集するためのパッシブ アイデンティティ ソースとして）。
- Device Manager または 脅威に対する防御 CLI 管理ユーザーの外部認証。許可レベルが異なる複数の管理ユーザをサポートできます。これらのユーザは、デバイスの設定とモニタリングのためにシステムにログインできます。

SAML サーバ

セキュリティアサーションマークアップ言語 2.0（SAML 2.0）は、当事者間、特に ID プロバイダー（IdP）とサービスプロバイダー（SP）の間で認証および許可データを交換するためのオープン標準です。

このソースは、次の目的で使用できます。

- シングルサインオン (SSO) 認証ソースとしてのリモートアクセス VPN。
- Device Manager ユーザーの外部認証。許可レベルが異なる複数の管理ユーザをサポートできます。これらのユーザは、デバイスの設定とモニタリングのためにシステムにログインできます。

LocalIdentitySource

これはローカル ユーザー データベースです。これには Device Manager で定義したユーザーが含まれます。このデータベースのユーザーアカウントを管理するには、**[オブジェクト (Objects)] > [ユーザー (Users)]** を選択します。ローカル ユーザ (232 ページ) を参照してください。



(注) ローカル アイデンティティ ソース データベースには、CLIアクセス用にCLIで設定するユーザは含まれません(**configure user add** コマンドを使用)。CLI ユーザーは、Device Manager で作成するユーザーとは完全に別のユーザーです。

このソースは、以下の目的で使用できます。

- リモート アクセス VPN (プライマリまたはフォールバック アイデンティティ ソースとして)。
- アイデンティティ ポリシー (リモート アクセス VPN ログインからユーザ アイデンティティを収集するためのパッシブ アイデンティティ ソースとして)。

Active Directory (AD) アイデンティティ レルム

Microsoft Active Directory (AD) はユーザ アカウントを定義します。Active Directory ドメイン用に AD アイデンティティ レルムを作成できます。ここでは、AD アイデンティティ レルムの定義方法について説明します。

サポートされるディレクトリ サーバ

Windows Server 2012、2016、2019 で Microsoft Active Directory (AD) を使用できます。

サーバの構成については、次の点に注意してください。

- ユーザグループまたはグループ内のユーザにユーザ制御を実施したい場合は、ディレクトリ サーバにおいてユーザ グループを設定する必要があります。サーバがオブジェクト階層でユーザを管理している場合、システムでユーザ グループ制御を実行できません。
- システムがサーバからユーザのメタデータを取得するには、ディレクトリサーバで、次の表に示すフィールド名を使用する必要があります。

メタデータ	Active Directory フィールド
LDAP ユーザ名	samaccountname
名	givenname
姓	sn
電子メール アドレス	mail userprincipalname (mail に値が設定されていない場合)
department	department distinguishedname (department に値が設定されていない場合)
電話番号	telephonenumber

ユーザ数の制限

Device Manager はディレクトリサーバーから最大 50,000 人のユーザーに関する情報をダウンロードできます。

ディレクトリ サーバに 50,000 以上のユーザ アカウントが含まれる場合、アクセス ルールでユーザを選択するとき、またはユーザベースのダッシュボード情報を閲覧するときに、すべての可能な名前を確認することができません。ルールは、ダウンロードしたこれらの名前だけに書き込むことができます。

この制限は、グループに関連付けられた名前にも適用されます。グループに 50,000 を超えるメンバーが含まれている場合は、ダウンロードした 50,000 個の名前だけをグループメンバーシップと照合できます。

ディレクトリ ベース DN の決定

ディレクトリのプロパティを設定するときに、ユーザとグループに共通のベース識別名 (DN) を指定する必要があります。ベースはディレクトリ サーバで定義され、ネットワークごとに異なります。アイデンティティ ポリシーが動作するためには、正しいベースを入力する必要があります。ベースが間違っている場合は、システムがユーザ名やグループ名を判別できないため、アイデンティティベースのポリシーが機能しません。



ヒント 正しいベースを取得するには、ディレクトリ サーバを担当する管理者に確認してください。

Active Directory の場合は、ドメイン管理者として Active Directory サーバにログインし、コマンドプロンプトで **dsquery** コマンドを次のように使用することで、正しいベースを判別できます。

ユーザ検索ベース

dsquery user コマンドを入力し、ベース識別名を調べる既知のユーザ名（一部または全部）を指定します。たとえば次のコマンドでは、部分名「John*」を使用して、「John」で始まるすべてのユーザに対する情報を返します。

```
C:\Users\Administrator>dsquery user -name "John*"
"CN=John Doe,CN=Users,DC=csc-lab,DC=example,DC=com"
```

ベース DN は「DC=csc-lab,DC=example,DC=com」となります。

グループ検索ベース

dsquery group コマンドを入力し、ベース識別名を調べたい既知のグループ名を指定します。たとえば次のコマンドでは、グループ名「Employees」を使用して識別名を返します。

```
C:\>dsquery group -name "Employees"
"CN=Eemployees,CN=Users,DC=csc-lab,DC=example,DC=com"
```

グループのベース DN は「DC=csc-lab,DC=example,DC=com」となります。

また、ADSI Edit プログラムを使用して、Active Directory 構造を参照することもできます（**Start > Run > adsiedit.msc**）。ADSI Edit で、組織単位（OU）、グループ、ユーザなど任意のオブジェクトを右クリックし、[プロパティ（Properties）] を選択すると、識別名が表示されます。DC 値の文字列をベースとしてコピーできます。

ベースが正しいことを確認するには、次のように操作します。

1. ディレクトリ プロパティの [Test Connection] ボタンをクリックして、接続を確認します。問題を解決し、ディレクトリ プロパティを保存します。
2. デバイスに対する変更をコミットします。
3. アクセスルールを作成して、[ユーザ（Users）] タブを選択し、ディレクトリから既知のユーザ名とグループ名の追加を試みます。ディレクトリが含まれるレルム内のユーザおよびグループに入力が一致すると、自動コンプリートによる候補が表示されます。これらの候補がドロップダウン リストに表示された場合、システムがディレクトリを正常にクエリーできたことが分かります。候補が表示されない場合は、該当する検索ベースを修正する必要があります。

AD アイデンティティ レルムの設定

アイデンティティ レルムとは、認証サービスを提供するのに必要なディレクトリ サーバおよび他の属性のことです。ディレクトリ サーバには、ネットワークへのアクセスが許可されているユーザおよびユーザ グループに関する情報が格納されます。

Active Directory の場合、レalmはActive Directory ドメインに相当します。サポートする必要があるADドメインごとに個別のレalmを作成します。

レalmは次のポリシーで使用されます。

- [アイデンティティ (Identity)] : レalmはユーザ アイデンティティおよびグループ メンバーシップ情報を提供します。この情報をアクセス制御ルールで使用することができます。システムはすべてのユーザおよびグループに関する更新された情報を、毎日最後の 1 時間 (UTC) にダウンロードします。ディレクトリサーバに管理インターフェイスから到達できる必要があります。
- [リモート アクセス VPN (Remote access VPN)] : レalmは認証サービスを提供します。これにより、接続を許可するかどうかが決まります。ディレクトリサーバにRA VPN外部インターフェイスから到達できる必要があります。
- アクセス制御、SSL 復号 : レalm内のすべてのユーザにルールを適用するため、ユーザの基準でレalmを選択することができます。

ディレクトリ管理者と協力して、ディレクトリサーバのプロパティを設定するために必要な値を取得してください。



(注) 接続されたネットワーク上にディレクトリサーバが存在しない場合やデフォルトルート経由で使用可能でない場合は、そのサーバのスタティックルートを作成します。[デバイス]>[ルーティング]>[設定の表示]の順に選択して、スタティックルートを作成します。または、サーバを定義するときに適切なインターフェイスを選択します。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。レalmプロパティの編集時に、オブジェクトリストに表示される [新しいアイデンティティレalmの作成 (Create New Identity Realm)] リンクをクリックして、アイデンティティレalmを作成することもできます。

始める前に

ディレクトリサーバ、Threat Defense デバイス、およびクライアント間で、時刻設定が一致していることを確認します。これらのデバイス間で時刻にずれがあると、ユーザ認証が成功しない場合があります。「一致」とは、別のタイムゾーンを使用できますが、たとえば、10 AM PST=1 PMEST など、それらのゾーンに対して相対的に同じになっている必要があることを意味しています。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アイデンティティレalm (Identity Realm)] [アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- AD レルムを作成するには、**[+] > [AD]** をクリックします。
- レルムを編集するには、そのレルムの編集アイコン (🔗) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ3 基本レルムのプロパティを設定します。

- [名前 (Name)] : ディレクトリ レルムの名前。
- [タイプ (Type)] : ディレクトリ サーバのタイプ。サポートされているタイプは **Active Directory** のみのため、このフィールドは変更できません。
- [ディレクトリユーザ名 (Directory Username)]、[ディレクトリパスワード (Directory Password)] : 取得するユーザ情報に対して適切な権限を持つユーザの識別用ユーザ名とパスワード。Active Directory では、昇格されたユーザ特権は必要ありません。ドメイン内の任意のユーザを指定できます。ユーザ名は **Administrator@example.com** などの完全修飾名である必要があります (Administrator だけでなく)。

(注)

この情報から **ldap-login-dn** と **ldap-login-password** が生成されます。たとえば、**Administrator@example.com** は **cn=admin, cn=users, dc=example, dc=com** と変換されます。cn=users は常にこの変換の一部であるため、ここで指定するユーザは、共通名の「users」フォルダの下で設定する必要があります。

- [ベースDN (Base DN)] : ユーザおよびグループ情報、つまり、ユーザとグループの共通の親を検索またはクエリするためのディレクトリ ツリー。たとえば、**cn=users, dc=example, dc=com** となります。ベース DN の検索方法については、[ディレクトリ ベース DN の決定 \(212 ページ\)](#) を参照してください。
- [AD プライマリ ドメイン (AD Primary Domain)] : デバイスが参加する必要のある、完全修飾 Active Directory ドメイン名。たとえば、**example.com** のように指定します。

ステップ4 ディレクトリ サーバのプロパティを設定します。

- [ホスト名/IPアドレス (Hostname/IP Address)] : ディレクトリ サーバのホスト名またはIPアドレス。サーバに対して暗号化された接続を使用する場合、IPアドレスではなく、完全修飾ドメイン名を入力する必要があります。
- [インターフェイス]: ADサーバに到達するためのインターフェイス。インターフェイスを選択しない場合、データルーティングテーブルを使用して適切なインターフェイスが検索されます。管理専用インターフェイスを使用する場合は、そのインターフェイスを具体的に選択する必要があります。管理専用ルーティングテーブルからルートルックアップを使用することはできません。
- [ポート (Port)] : サーバとの通信に使用するポート番号。デフォルトは389です。LDAPSを暗号化方式に選択している場合は、ポート 636 を使用します。

- [暗号化 (Encryption)] : ユーザとグループの情報をダウンロードするのに暗号化接続を使用する場合は、適切な方式を [STARTTLS] または [LDAPS] から選択します。デフォルトは [なし (None)] です。したがって、ユーザとグループ情報はクリア テキストでダウンロードされます。
- [STARTTLS] は暗号化方式をネゴシエートし、ディレクトリ サーバでサポートされている最も強力な方式を使用します。ポート 389 を使用します。リモートアクセス VPN 用にレルムを使用する場合は、このオプションがサポートされません。
- [LDAPS] では LDAP over SSL が必要です。ポート 636 を使用します。
- [信頼できる CA 証明書 (Trusted CA Certificate)] : 暗号化方式を選択した場合は、認証局 (CA) 証明書をアップロードして、システムとディレクトリ サーバの間で信頼できる接続を有効化します。認証に証明書を使用している場合、証明書のサーバ名とサーバのホスト名/IP アドレスが一致する必要があります。たとえば、IP アドレスとして 10.10.10.250 を使用するが、証明書では ad.example.com が指定されている場合、接続が失敗します。

ステップ 5 レルムの複数のサーバがある場合は、[別の設定の追加 (Add Another Configuration)] をクリックし、追加サーバごとのプロパティを入力します。

最大 10 の AD サーバをレルムに追加できます。これらのサーバは互いの重複である必要があり、同じ AD ドメインをサポートする必要があります。

各サーバエントリは適宜折りたたんだり展開することができます。セクションには、ホスト名または IP アドレスとポートラベルが付けられます。

ステップ 6 システムがサーバと通信できるか確認するには、[テスト (Test)] ボタンをクリックします。

システムは別個のプロセスおよびインターフェイスを使用してサーバにアクセスします。このため、アイデンティティ ポリシーでは接続に成功してリモートアクセス VPN では失敗するなど、ある使用方法では接続が成功しても、別の方法では失敗したことを示すエラーが表示される場合があります。サーバにアクセスできない場合は、指定した IP アドレスとホスト名が正しく、DNSサーバにそのホスト名が入力されているかなどを確認します。サーバのステイック ルートを設定する必要が生じることもあります。詳細については、[ディレクトリ サーバ接続のトラブルシューティング \(217 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

AD レルムシーケンスの設定

パッシブ ID ルールで AD レルムシーケンスを使用すると、システムが複数の AD サーバでユーザの照合を試みることができるようになります。レルムシーケンスで、各 AD サーバが別個のレルムまたはドメイン (engineering.example.com や marketing.example.com など) を管理する AD レルムの番号付きリストを設定します。

レルムシーケンスは、複数の AD ドメインをサポートしていて、異なるドメインのユーザーが Threat Defense デバイスを介してトラフィックを送信する可能性がある場合にのみ役立ちます。

レルムは、受動的に認証されるユーザセッションの ID を検索するために使用されます。レルムの順序は、まれに競合が発生した場合に、ID の競合を解決するために使用されます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- AD レルムシーケンスを作成するには、[+] > [AD レルムシーケンス (AD Realm Sequence)] をクリックします。
- AD レルムシーケンスを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

オブジェクトを削除するには、そのオブジェクトのごみ箱アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 レルムシーケンスのプロパティを設定します。

- [Name] : オブジェクトの名前。
- [説明 (Description)] : (任意) オブジェクトの説明。
- [ADレルム (AD Realms)] : [+] をクリックして、AD レルムオブジェクトをシーケンスに追加します。レルムを追加したら、目的の順序になるように、レルムをクリックしてドラッグアンドドロップします。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

パッシブ ID ルールで AD レルムシーケンスを選択できるようになりました。

ディレクトリ サーバ接続のトラブルシューティング

システムは、機能に応じてディレクトリサーバとの通信に異なるプロセスを使用します。そのため、アイデンティティ ポリシー用の接続は機能しますが、リモートアクセス VPN 用の接続は失敗します。

これらのプロセスでは、さまざまなインターフェイスを使用してディレクトリサーバと通信します。次のインターフェイスからの接続を確認する必要があります。

- 管理インターフェイス (アイデンティティ ポリシーの場合)
- データ インターフェイス (リモート アクセス VPN (外部インターフェイス) の場合)

アイデンティティ レルムを設定する場合、[テスト (Test)] ボタンを使用して接続が機能することを確認します。エラー メッセージは、接続に問題のある機能を示す必要があります。次

に、認証属性およびルーティング/インターフェイス設定に基づいて、発生する可能性がある一般的な問題を示します。

ディレクトリユーザの認証の問題。

問題が、ユーザ名またはパスワードのため、ディレクトリサーバにログインできなかったということである場合、名前とパスワードが正しく、ディレクトリサーバで有効なことを確認します。Active Directory では、昇格されたユーザ特権は必要ありません。ドメイン内の任意のユーザを指定できます。ユーザ名は Administrator@example.com などの完全修飾名である必要があります (Administrator だけでなく)。

また、システムは、ユーザ名とパスワードの情報から ldap-login-dn と ldap-login-password を生成します。たとえば、Administrator@example.com は cn=admin, cn=users, dc=example, dc=com と変換されます。cn=users は常にこの変換の一部であるため、ここで指定するユーザは、共通名の「users」フォルダの下で設定する必要があります。

ディレクトリサーバは、データインターフェイスを介してアクセス可能です。

ディレクトリサーバが、データインターフェイスに直接接続されているネットワーク上にある (ギガビットイーサネットインターフェイスなど) か、直接接続されているネットワークからルーティング可能であるネットワーク上にある場合は、仮想管理インターフェイスとディレクトリサーバ間のルートがあることを確認する必要があります。

- **data-interfaces** を管理ゲートウェイとして使用するには、ルーティングを成功させる必要があります。
- 管理インターフェイスに明示的なゲートウェイがある場合は、そのゲートウェイルータはディレクトリサーバへのルートを持つ必要があります。
- 直接接続されているネットワークとディレクトリサーバをホストするネットワーク間にルータがある場合は、ディレクトリサーバのスタティックルートを設定します ([**デバイス (Device)**] > [**ルーティング (Routing)**]) 。
- データインターフェイスの IP アドレスとサブネットマスクが正しいことを確認します。

ディレクトリサーバは、外部ネットワーク上です。

ディレクトリサーバが外部 (アップリンク) インターフェイスの反対側のネットワーク上にある場合は、サイト間 VPN 接続を設定する必要があります。手順については、[リモートアクセス VPN を使用した外部ネットワークでのディレクトリサーバの使用法 \(905 ページ\)](#) を参照してください。

RADIUS サーバおよびグループ

RADIUS サーバを使用して、リモートアクセス VPN 接続、および Device Manager と脅威に対する防御 CLI 管理ユーザの認証および認可を行うことができます。たとえば、Cisco Identity

Services Engine (ISE) とその RADIUS サーバーも使用する場合は、Device Manager でそのサーバーを使用できます。

RADIUS サーバを使用するように機能を設定する場合は、個別のサーバではなく RADIUS グループを選択します。RADIUS グループは、相互にコピーである RADIUS サーバの集合です。グループに複数のサーバがある場合は、それらは、1 つのサーバが使用できなくなった場合に冗長性を提供する一連のバックアップサーバを形成します。ただし、サーバが 1 つしかない場合でも、機能の RADIUS サポートを設定するには、メンバーが 1 つのグループを作成する必要があります。

ここでは、サポートされている機能でできるように RADIUS サーバおよびグループを設定する方法について説明します。

RADIUS サーバの設定

RADIUS サーバは、AAA(認証、認可、アカウントिंग)サービスを提供します。RADIUS サーバを使用してユーザーを認証および認可すると、これらのサーバーを Device Manager と一緒に使用できます。

RADIUS サーバごとにオブジェクトを作成した後、重複サーバの各グループを含む RADIUS サーバ グループを作成します。

始める前に

RA VPN のリダイレクト ACL を設定する場合は、スマート CLI を使用して、サーバオブジェクトを作成または編集する前に拡張 ACL を作成する必要があります。オブジェクトの編集中に ACL を作成することはできません。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] > [RADIUSサーバ (RADIUS Server)] をクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 次のプロパティを設定します。

- [Name]: オブジェクトの名前。サーバで設定されているものと一致している必要はありません。

- [サーバ名またはIPアドレス (Server Name or IP Address)] : サーバの完全修飾ホスト名 (FQDN) または IP アドレス。たとえば、radius.example.com または 10.100.10.10 などです。
- [認証ポート (Authentication Port)] : RADIUS 認証および認可が実行されるポート。デフォルトは 1812 です。
- [タイムアウト (Timeout)] : 次のサーバに要求を送信する前にサーバからの応答を待機する時間の長さ (1~300秒)。デフォルトは 10 秒です。認証トークンの入力を求めるなどのために、このサーバをリモート アクセス VPN のセカンダリ認証ソースとして使用している場合は、このタイムアウトを少なくとも 60 秒に増やします。この間に、ユーザはトークンを取得して入力できます。
- [サーバ秘密キー (Server Secret Key)] : (任意) 脅威に対する防御 デバイスと RADIUS サーバ間でデータを暗号化するために使用される共有秘密キー。キーは、大文字と小文字が区別される最大 64 文字の英数字文字列です。スペースは使用できません。キーは、英数字またはアンダースコアで開始する必要があります。次の特殊文字を含めることができます : \$ & - _ . + @。+@ を使用できます。文字列は、RADIUS サーバで設定された文字列と一致している必要があります。秘密キーを設定していない場合、接続は暗号化されません。
- **RADIUS 応答にはメッセージオーセンティケータが必要です** : Message-Authenticator 属性は、Blast- RADIUS 攻撃を防ぐために使用されます。メッセージオーセンティケータをサポートするように RADIUS サーバをアップグレードした場合は、このオプションを有効にして、Blast- RADIUS 攻撃を防御できます。有効にする場合は、すべての要求と応答にメッセージオーセンティケータが含まれている必要があります。含まれていなければ認証に失敗します。

ステップ 4 (オプション) リモートアクセス VPN の認可変更設定のためにサーバを使用している場合は、[RA VPNのみ (RA VPN Only)] リンクをクリックし、次のオプションを設定できます。

- [ACLのリダイレクト (Redirect ACL)] : RA VPN リダイレクト ACL を使用する拡張 ACL を選択します。[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] ページのスマート CLI 拡張アクセスリストオブジェクトを使用して、拡張 ACL を作成します。

リダイレクト ACL の目的は、Cisco Identity Services Engine (ISE) がクライアントポスチャを評価できるように、初期トラフィックを ISE に送信することです。ACL は ISE に HTTPS トラフィックを送信しますが、ISE 宛てのトラフィックや、名前解決のために DNS サーバに送信されるトラフィックは送信しません。例については、[Threat Defense デバイスでの認可変更の設定 \(884 ページ\)](#) を参照してください。

- [RADIUSサーバに接続するために使用されるインターフェイス (Interface Used to Connect to RADIUS Server)] : サーバと通信するときに使用するインターフェイス。[ルートルックアップ経由で解決する]を選択した場合、システムは常にデータルーティングテーブルを使用して、使用するインターフェイスを決定します。[インターフェイスの手動選択]を選択した場合、システムは常に選択したインターフェイスを使用します。管理専用インター

フェイスを使用する場合は、具体的に選択する必要があります。管理専用ルーティングテーブルにルートルックアップを使用することはできません。

認可変更を設定している場合、システムがインターフェイスでCoAリスナーを適切に有効化できるように、特定のインターフェイスを選択する必要があります。

Device Manager 管理アクセスにもこのサーバーを使用する場合、このインターフェイスは無視されます。管理アクセスの試行は、常に管理 IP アドレスを介して認証されます。

ステップ 5 (任意。オブジェクトを編集する場合のみ) [テスト (Test)] をクリックして、システムがサーバに接続できるかどうか確認します。

ユーザ名とパスワードの入力を求められます。テストでは、サーバに接続できるかどうか、接続できる場合はユーザ名が認証されるかどうかを確認します。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

RADIUS サーバグループの設定

RADIUS サーバグループには、1 つまたは複数の RADIUS サーバオブジェクトが含まれています。グループ内のサーバは、相互にコピーされる必要があります。これらのサーバはバックアップサーバのチェーンを形成します。そのため、最初のサーバが利用できなくなると、システムはリスト上の次のサーバを試すことができます。

機能に RADIUS サポートを設定する場合、サーバグループを選択する必要があります。したがって、RADIUS サーバが 1 台しかなくても、それを含むサーバグループを作成する必要があります。

始める前に

グループに追加するすべてのサーバには、**[すべての RADIUS 応答にメッセージ認証を要求 (Require Message-Authenticator for all RADIUS Responses)]** の設定が同じである必要があります (有効か無効かのいずれか)。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、**[+] > [RADIUSサーバグループ (RADIUS Server Group)]** をクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 次のプロパティを設定します。

- **[Name]** : オブジェクトの名前。サーバで設定されているものと一致している必要はありません。
- **[デッドタイム (Dead Time)]** : 失敗したサーバは、すべてのサーバが失敗した後にのみ再アクティブ化されます。デッドタイムは、最後のサーバが失敗した後にすべてのサーバを再アクティブ化するまで待機する時間の長さ(0~1440分)です。デッドタイムは、ローカルデータベースへのフォールバックを設定した場合にのみ適用されます。認証は、デッドタイムが経過するまでローカルで試行されます。デフォルトは 10 分です。
- **[最大失敗試行回数]**: 次のサーバを試行する前に、グループ内のRADIUSサーバに送信されたAAAトランザクションの失敗数(応答がなかった要求の数)。1 ~ 5 を指定できます。デフォルトは 3 です。最大失敗試行数を超えると、システムはサーバを故障としてマークします。

特定の機能について、ローカルデータベースを使用するフォールバック方式を設定していて、グループ内のすべてのサーバが応答に失敗した場合、グループは非応答と見なされ、フォールバック方式が試行されます。サーバグループはデッドタイムの間非応答とマークされたままになるため、その期間内に追加の AAA 要求でサーバグループへの接続は試行されず、フォールバック方式がすぐに使用されます。

- **ダイナミック認証 (RA VPNの場合のみ) 、ポート : RADIUS サーバグループ向けの RADIUS ダイナミック認証または認可変更 (CoA) サービスを有効にすると、グループは CoA 通知用に登録され、Cisco Identity Services Engine (ISE) からの指定した CoA ポリシー更新用ポートをリスンします。デフォルトのリスニングポートは 1700 ですが、1024 ~ 65535 の範囲で別のポートを指定することができます。このサーバグループを ISE と併せてリモート アクセス VPN で使用する場合にのみ、ダイナミック認証をイネーブルにします。**
- **[RADIUSサーバをサポートするレルム (Realm that Supports the RADIUS Server)]** : AD サーバを使用してユーザを認証するように RADIUS サーバが設定されている場合は、この RADIUS サーバと組み合わせて使用される AD サーバを指定する AD レルムを選択します。レルムが存在していない場合は、リストの下部にある [新しいアイデンティティレルムの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックして作成します。
- **[RADIUSサーバリスト (RADIUS Server list)]** : グループのサーバを定義する RADIUS サーバオブジェクトを最大 16 個選択します。優先順にこれらのオブジェクトを追加します。リストの最初のサーバが、非応答になるまで使用されます。オブジェクトを追加した後に、ドラッグアンドドロップで並び替えることができます。必要なオブジェクトがまだない場合は、[新規RADIUSサーバの作成 (Create New RADIUS Server)] をクリックしてすぐに追加します。

[テスト (Test)] リンクをクリックして、システムがサーバに接続できることを確認することもできます。ユーザ名とパスワードの入力を求められます。テストでは、サーバを接続できるかどうか、接続できる場合はユーザ名が認証されるかどうかを確認します。

ステップ 4 (オプション) [すべてのサーバをテスト (Test All Servers)] ボタンをクリックして、グループ内の各サーバへの接続を確認します。

ユーザ名とパスワードの入力を求められます。システムは、各サーバを接続できるかどうか、各サーバでユーザ名が認証されるかどうかを確認します。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

RADIUS サーバおよびグループのトラブルシューティング

次に、外部認証が機能しない場合に確認する項目を示します。

- RADIUS サーバの [テスト (Test)] ボタンとサーバ グループ オブジェクトを使用して、デバイスからサーバに通信できることを確認します。テストする前に、必ずオブジェクトを保存してください。テストが失敗した場合：
 - テストは、サーバに設定されたインターフェイスを無視し、常に管理インターフェイスを使用することを理解しておいてください。RADIUS 認証プロキシが管理 IP アドレスからの要求に応答するように設定されていない場合、テストは失敗することが予想されます。
 - テスト中に正しいユーザ名/パスワードの組み合わせを入力していることを確認します。正しくない場合は、クレデンシャルが不正であるというメッセージが表示されます。
 - 秘密キー、ポート、およびサーバの IP アドレスを確認します。ホスト名を使用している場合は、DNS が管理インターフェイス用に設定されていることを確認します。秘密キーがデバイス設定ではなく RADIUS サーバで変更された可能性を考えます。
 - テストが引き続き失敗する場合は、RADIUS サーバへのスタティックルートを設定する必要があります。CLI コンソールまたは SSH セッションからサーバに ping を試行して、到達できるかどうか確認します。
- 外部認証が機能していたのに機能しなくなった場合は、すべてのサーバがデッドタイムになっている可能性を考えます。ローカル認証へのフォールバックを設定する場合、グループ内のすべての RADIUS サーバが失敗したときに、システムが最初のサーバを再試行する前に待機する時間 (分単位) がデッドタイムです。デッドタイム中は、ローカル認証が使用されるため、指定したユーザーのユーザー名とパスワードがローカルのユーザー名/パスワードになります。デフォルトは 10 分ですが、1440 分までの範囲で設定できます。
- HTTPS 外部認証が一部のユーザでしか機能しない場合は、各ユーザアカウントの RADIUS サーバで定義されている `cisco-av-pair` 属性を評価します。この属性の設定が正しくない可能性があります。属性が欠落しているか不正であると、そのユーザアカウントのすべての HTTPS アクセスがブロックされます。
- SSH 外部認証が一部のユーザでしか機能しない場合は、各ユーザアカウントの RADIUS サーバで定義されている `Service-Type` 属性を評価します。この属性の設定が正しくない可

能性があります。属性が欠落しているか不正であると、そのユーザアカウントのすべての SSH アクセスがブロックされます。

Identity Services Engine (ISE)

パッシブ認証に ISE/ISE-PIC を使用するために、Cisco Identity Services Engine (ISE) または ISE Passive Identity Connector (ISE-PIC) 展開を 脅威に対する防御 デバイスと統合することができます。

ISE/ISE-PIC は権限を持つアイデンティティ ソースであり、Active Directory (AD)、LDAP、RADIUS、または RSA を使用して認証するユーザのユーザ認識データを提供します。ただし、脅威に対する防御 では、AD との組み合わせでのみユーザ アイデンティティ認識に ISE を使用できます。さまざまな監視ダッシュボードおよびイベントでユーザ情報を表示できるだけでなく、アクセス制御および SSL 復号ポリシーでユーザ アイデンティティを一致基準として使用できます。

Cisco ISE/ISE-PIC の詳細については、Cisco Identity Services Engine の管理者ガイド [英語] (<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/identity-services-engine/tsd-products-support-series-home.html>) と Identity Services Engine Passive Identity Connector (ISE-PIC) のインストールおよび管理者ガイド [英語] (<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/ise-passive-identity-connector/tsd-products-support-series-home.html>) を参照してください。

ISE に関する注意事項と制限事項

- ファイアウォールシステムでは、システムがデバイス認証をユーザーと関連付けないため、Active Directory 認証とともに 802.1x デバイス認証を使用することはできません。802.1x アクティブログインを使用する場合は、802.1x アクティブログインのみをレポートするように ISE を設定します (デバイスとユーザの両方)。この設定により、デバイスログインは一度だけシステムにレポートされます。
- ISE/ISE-PIC は、ISE ゲスト サービス ユーザのアクティビティをレポートしません。
- ISE/ISE-PIC サーバとデバイスの時刻を同期させます。同期していない場合、予想しない間隔でユーザ タイムアウトが実行される可能性があります。
- 多数のユーザ グループをモニタするように ISE/ISE-PIC を設定する場合、メモリ制限のためにシステムがグループに基づいてユーザマッピングをドロップする可能性があります。その結果、レムムまたはユーザ条件を持つルールが予期どおりに実行されない場合があります。
- システムのこのバージョンと互換性がある特定のバージョンの ISE/ISE-PIC については、『Cisco Secure Firewall Compatibility Guide』 (<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/firepower-ngfw/products-device-support-tables-list.html>) を参照してください。
- ご使用のバージョンの ISE が IPv6 をサポートしていることを確認できないかぎり、ISE サーバの IPv4 アドレスを使用してください。

Identity Services Engine の設定

Cisco Identity Services Engine (ISE) または Cisco Identity Services Engine Passive Identity Connector (ISE PIC) をパッシブ アイデンティティ ソースとして使用するには、ISE Platform Exchange Grid (pxGrid) サーバへの接続を設定する必要があります。

始める前に

- ISEからpxGridサーバおよびMNTサーバの証明書をエクスポートします。たとえば、ISE PIC 2.2 では、**[証明書 (Certificates)] > [証明書の管理 (Certificate Management)] > [システム証明書 (System Certificates)]** ページにあります。MNT (モニタリングおよびトラブルシューティング ノード) は、証明書リストの [使用者] 列に [管理者] として表示されます。これらは、**[オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)]** ページで信頼できる CA 証明書としてアップロードするか、次の手順でアップロードすることができます。これらのノードは、同じ証明書を使用することがあります。
- AD アイデンティティ レalmを設定する必要もあります。システムは、AD からユーザのリストを取得し、ISE から user-to-IP アドレス マッピングに関する情報を取得します。
- 静的セキュリティ グループ タグ マッピングの有無にかかわらず、アクセス制御にセキュリティグループタグ (SGT) を使用し、SXP トピックをリッスンする場合は、ISE で SXP とこれらのマッピングも設定する必要があります。[ISE でのセキュリティグループと SXP パブリッシングの設定 \(654 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 **[オブジェクト (Objects)]** を選択し、目次から **[アイデンティティソース (Identity Sources)]** を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、**[+] > [Identity Services Engine]** をクリックします。最大で 1 つの ISE オブジェクトを作成できます。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの **[ごみ箱 (trash can)]** アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 次のプロパティを設定します。

- **[Name]** : オブジェクトの名前。
- **[ステータス (Status)]** : クリックしてオブジェクトを有効または無効にします。無効にすると、アイデンティティルールで ISE をアイデンティティ ソースとして使用できません。
- **[説明 (Description)]** : (任意) オブジェクトの説明。

- [プライマリノードホスト名/IPアドレス (Primary Node Hostname/IP Address)] : プライマリ pxGrid ISE サーバのホスト名または IP アドレス。ISE バージョンが IPv6 をサポートしていることを確認しない限り、IPv6 アドレスを指定しないでください。
- [セカンダリノードのホスト名/IPアドレス (Secondary Node Hostname/IP Address)] : ハイアベイラビリティ向けにセカンダリ ISE サーバを設定している場合、[セカンダリノードのホスト名/IPアドレスの追加 (Add Secondary Node Hostname/IP Address)] をクリックし、セカンダリ pxGrid ISE サーバのホスト名または IP アドレスを入力します。
- [pxGridサーバCA証明書]: pxGridフレームワークの信頼された証明機関の証明書。展開にプライマリとセカンダリの pxGrid ノードがある場合、両方のノードの証明書が同じ認証局によって署名されている必要があります。
- [MNTサーバCA証明書]: 一括ダウンロードを実行する場合に使用するISE証明書用の信頼された証明機関の証明書。これは、MNT (モニタリングおよびトラブルシューティング) サーバが分かれていない場合、pxGridサーバ証明書と同じにすることができます。展開にプライマリとセカンダリの MNT ノードがある場合、両方のノードの証明書が同じ認証局によって署名されている必要があります。
- [サーバ証明書 (Server Certificate)] : ISE への接続時または一括ダウンロードの実行時に脅威に対する防御 デバイスが ISE に提供する必要がある内部アイデンティティ証明書。
- [登録 (Subscribe To)] : 登録する必要がある ISE pxGrid トピックを選択します。トピックを登録すると、そのトピックに関連するデータがダウンロードされます。
 - [セッションディレクトリ トピック (Session Directory Topic)] : ユーザセッションの SGT マッピングを含む、ユーザセッションに関する情報を取得するかどうか。このオプションは、デフォルトで有効です。セキュリティポリシーで使用するためや、監視ダッシュボードで表示するためにパッシブユーザIDを取得する場合は、このオプションを選択する必要があります。
 - [SXPトピック (SXP Topic)] : SGT から IP アドレスへの静的マッピングを取得するかどうか。セキュリティグループタグ (SGT) に基づくアクセス制御ルールを作成する場合は、このトピックを選択します。
- [ISEネットワークフィルタ (ISE Network Filters)] : ISE がシステムに報告するデータを制限するように設定できる任意のフィルタ。ネットワーク フィルタを指定すると、ISE はフィルタ内のネットワークからのみデータを報告します。[+]をクリックして、ネットワークを識別するネットワーク オブジェクトを選択し、[OK] をクリックします。オブジェクトを作成する必要がある場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックします。IPv4 ネットワーク オブジェクトのみを設定します。

ステップ 4 [テスト (Test)] ボタンをクリックして、システムが ISE サーバに接続できることを確認します。

テストが失敗した場合は、[ログの表示 (See Logs)] リンクをクリックして、詳細なエラーメッセージを確認します。たとえば、次のメッセージはシステムが必要なポートでサーバに接続できなかったことを示しています。問題はホストへのルートが存在しないことである可能性

があります。つまり、ISE サーバが予期されたポートを使用していないか、接続を妨げるアクセス制御ルールが存在します。

```
Captured Jabberwerx log:2018-05-11T16:10:30 [ ERROR]: connection timed out while  
trying to test connection to host=10.88.127.142:ip=10.88.127.142:port=5222
```

ステップ 5 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

次のタスク

ISEを設定したら、アイデンティティ ポリシーを有効にして、パッシブ認証ルールを設定し、その設定を展開します。その後、ISE/ISE PIC に移動して、デバイスをサブスクライバとして許可する必要があります。サブスクライバを自動的に許可するよう ISE/ISE PIC を設定している場合、サブスクリプションを手動で許可する必要はありません。

ISE/ISE-PIC アイデンティティ ソースのトラブルシューティング

ISE/ISE-PIC 接続

ISE 接続または ISE-PIC 接続で問題が発生している場合、次の項目を確認します。

- ISE 脅威に対する防御 デバイスを正常に統合するには、ISE の pxGrid アイデンティティ マッピング機能を有効にする必要があります。
- ISE サーバと脅威に対する防御 デバイスの間の接続を成功させるには、ISE のクライアントを手動で承認する必要があります。

または、『*Cisco Identity Services Engine* 管理者ガイド』の「ユーザおよび外部 ID ソースの管理」の章にある説明に従って、ISE で [新しいアカウントの自動承認 (Automatically approve new accounts)] を有効にできます。

- 脅威に対する防御 デバイス (サーバ) 証明書には、**clientAuth** 拡張キー使用値が含まれている必要があります。そうでない場合、他の拡張キー使用値を含むことはできません。**clientAuth** 拡張キーの使用が設定されている場合は、キーの使用も設定されていないか、デジタル署名キー使用値が設定されている必要があります。**Device Manager** を使用して作成できる自己署名アイデンティティ証明書は、これらの要件を満たしています。
- ISE サーバの時間は、脅威に対する防御 デバイスの時間と同期する必要があります。アプライアンスが同期していないと、システムは予期しない間隔でユーザタイムアウトを実行することがあります。

ISE/ISE-PIC ユーザ データ

ISE または ISE-PIC によって報告されたユーザ データに問題がある場合は、次の項目に注意します。

- システムは、データベース にデータがない ISE ユーザのアクティビティを検出すると、サーバからそのユーザに関する情報を取得します。ISE ユーザによるアクティビティは、アクセス制御ルールで処理されず、システムがユーザダウンロードでそのユーザに関する情報を正常に取得するまでダッシュボードに表示されません。
- LDAP、RADIUS、または RSA ドメイン コントローラによって認証された ISE ユーザについてユーザ制御を実行することはできません。
- システムは、ISE ゲスト サービス ユーザのユーザ データを受信しません。

SAMLサーバ

セキュリティ アサーション マークアップ言語 2.0 (SAML 2.0) サーバーを設定して、リモートアクセス VPN 接続およびデバイスマネージャユーザーのシングルサインオン (SSO) 認証ソースとして使用することができます。SAML は、当事者間、特に ID プロバイダー (IdP) とサービスプロバイダー (SP) の間で認証および許可データを交換するためのオープン標準です。

SAML サーバの設定

セキュリティ アサーション マークアップ言語 2.0 (SAML 2.0) サーバーを設定して、リモートアクセス VPN 接続およびデバイスマネージャユーザーのシングルサインオン (SSO) 認証ソースとして使用することができます。たとえば、Duo Access Gateway (DAG) は SAML サーバーです。

SAML サーバーを認証方法として使用する場合、SAML サーバーはアイデンティティ プロバイダー (IdP) として機能し、Threat Defense デバイスはサービスプロバイダー (SP) として機能します。

RA VPN の場合、SAML サーバーをプライマリ認証ソースとして使用できますが、セカンダリ認証ソースを設定したり、フォールバックソースを設定したりすることはできません。

デバイスマネージャのログインでは、SAML サーバーをサポートするように設定している場合、SAML サーバーを使用するときに Common Access Card (CAC) をログインに使用できます。

始める前に

SAML サーバー アイデンティティ プロバイダーから次の情報を取得します。可能であれば、簡単にアップロードできるように XML ファイルでユーザーから情報をダウンロードします。

- エンティティ ID URL (SAML サーバメタデータを提供)
- サインイン URL
- サインアウト URL
- アイデンティティ プロバイダー証明書

SAML 属性に対して複数の値が返された場合、システムは最初に見つかった有効な値を使用します。たとえば、RA VPN で SAML を使用し、Cisco のグループポリシー属性に複数の値を指定した場合、最初の有効なグループポリシーが使用されます。どの値が使用されるかを制御しなければならない場合は、返される各属性に対して1つの値を提供するように SAML サーバーが構成されていることを確認してください。

手順

ステップ 1 [SAMLサーバ (SAML Servers)] ページに移動するには、次のいずれかを実行します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。
- [デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] > [SAMLサーバ (SAML Servers)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] > [SAMLサーバ (SAML Server)] をクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 次のプロパティを設定します。

- [Name] : オブジェクトの名前。
- [説明 (Description)] : (任意) オブジェクトの説明。
- [アイデンティティプロバイダー (IDP) エンティティ ID URL (Identity Provider (IDP) Entity ID URL)] : SAML 発行元が要求に応答する方法を記述したメタデータ XML を提供するページの URL。これは、一部の SAML サーバ製品ではエンティティ ID と呼ばれ、他の製品ではメタデータ URL と呼ばれます。この URL は、プロトコル (https://) を含めて 4 ～ 256 文字である必要があります。たとえば、https://191.168.2.21/dag/saml2/idp/metadata.php のようになります。

(注)

SAML サーバーから XML ファイルで情報をダウンロードした場合は、[XMLファイルから読み込む (Populate from XML file)] をクリックし、ファイルを選択します。このフィールドと [サインインURL (Sign-In URL)] と [アイデンティティプロバイダー証明書 (Identity Provider Certificate)] は、XML ファイルから読み込むことができます。

- [サインインURL (Sign-In URL)] : アイデンティティ プロバイダー SAML サーバにサインインするための URL。この URL は、プロトコルを含めて 4 ～ 500 文字である必要があります。http:// と https:// の両方を使用できます。たとえば、https://191.168.2.21/dag/saml2/idp/SSOService.php のようになります。

- [サインアウトURL (Sign-Out URL)] : アイデンティティプロバイダー SAML サーバからサインアウトするための URL。この URL は、プロトコルを含めて 4 ～ 500 文字である必要があります。http:// と https:// の両方を使用できます。たとえば、<https://191.168.2.21/dag/saml2/idp/SingleLogoutService.php> のようになります。
- [サービスプロバイダー証明書 (Service Provider Certificate)] : Threat Defense デバイスに使用する内部証明書。認定済みのサードパーティによって署名された証明書がすでにアップロードされていると理想的であり、ここでそれを選択できます。組み込みの DefaultInternalCertificate を使用することや、ここで [新しい内部証明書の作成 (Create New Internal Certificate)] をクリックして署名済みの証明書をアップロードすることもできます。SAML サーバアイデンティティプロバイダーはこの証明書を信頼する必要があるため、証明書を SAML サーバにアップロードする必要がある場合があります。証明書をアップロードする方法や、その他の方法でサービスプロバイダーとの信頼関係を有効にする方法については、SAML サーバのマニュアルを参照してください。
- [アイデンティティプロバイダー証明書 (Identity Provider Certificate)] : SAML サーバアイデンティティプロバイダーの信頼できる CA 証明書。この証明書は SAML サーバからダウンロードします。まだアップロードしていない場合は、ここで [新しい信頼できる CA 証明書の作成 (Create New Trusted CA Certificate)] をクリックしてアップロードしてください。
- [要求の署名 (Request Signature)] : ログイン要求の署名時に使用する暗号化アルゴリズム。暗号化を無効にする場合は、[なし (None)] を選択します。それ以外の場合は、[SHA1]、[SHA256]、[SHA384]、または [SHA512] のいずれか (後のものほど強力) を選択してください。
- [要求タイムアウト (Request Timeout)] : SAML アサーションには有効な期間があります。ユーザは、有効な期間内にシングルサインオン要求を完了する必要があります。この期間を変更するために、秒単位でタイムアウトを設定できます。アサーションの NotOnOrAfter 条件よりも長いタイムアウトを設定すると、タイムアウトは無視され、NotOnOrAfter が使用されます。指定できる範囲は 1 ～ 7200 秒です。デフォルトは 300 秒です。
- [この SAML アイデンティティプロバイダー (IDP) は内部ネットワーク上にある (This SAML identity provider (IDP) is on an internal network)] : SAML サーバが、保護されたネットワークへの内部ネットワーク (外部ネットワークではなく) 上で動作しているかどうか。
- [ログイン時の IDP 再認証の要求 (Request IDP re-authentication at login)] : SAML サーバに以前の認証セッションを再利用させるのではなく、ログインごとにユーザが再認証されるようにするには、このオプションを選択します。このオプションは、デフォルトで有効です。

ステップ 4 [ユーザーロール (User Roles)] をクリックし、外部ユーザーの RBAC 許可ロールを設定します。

- [デフォルトユーザーロール (Default User Role)] : このページの設定で決定できない場合にユーザーに割り当てる許可ロール。

- [グループメンバー属性 (Group Member Attribute)] : ユーザーの RBAC 許可ロールを定義する SAML サーバーのユーザー属性。
- [ロールマッピング (Role Mapping)] : ロールごとに、ロールに対応する SAML ユーザーレコードのグループメンバー属性に表示される文字列を入力します。
 - [管理者 (Administrator)] : アプリケーションのすべての側面に対する完全な読み取り/書き込みアクセス権を持つユーザー。
 - [暗号管理者 (Cryptographic Admin)] : 証明書、復号ポリシー、秘密キーなどの暗号化関連機能を設定できるユーザー。他の機能への読み取り専用アクセス。
 - [監査管理者 (Audit Admin)] : ユーザーのログイン履歴と監査ログを表示し、監査関連のアクションを実行できるユーザー。設定機能への読み取り専用アクセス。
 - [読み取り/書き込み (Read-Write)] : 読み取り専用ユーザーが実行できることをすべて実行でき、設定を編集および展開することもできるユーザー。アップグレードのインストール、バックアップの作成と復元、監査ログの表示、他の **Device Manager** ユーザーセッションの終了など、システムクリティカルなアクションに対してのみ制限があります。
 - [読み取り専用 (Read-Only)] : ダッシュボードおよび設定を表示できますが、変更することはできないユーザー。変更しようとする、権限がないことを示すエラーメッセージが表示されます。

ステップ 5 [OK] をクリック

次のタスク

通信を暗号化するために [署名の要求 (Request Signature)] を有効にした場合は、デバイスマネージャ情報を SAML サーバーにアップロードする必要があります。ID ソースのリストから、サーバーの [ダウンロード (Download)] (📄) ボタンをクリックし、XML ファイルを保存します。次に、SAML サーバーにログインし、情報をアップロードします。詳細については、SAML プロバイダーのマニュアルを参照してください。

デバイスマネージャのログインにサーバーを使用しているのに機能しない場合は、SAML サーバーの設定を確認します。

- SAML IdP にログインし、デバイスマネージャの SAML 応答コンシューマが正しく設定されていることを確認します。次の値である必要があります：
`https://<FDM_URL>/api/fdm/latest/fdm/token`
- SAML サーバーオブジェクトで署名が有効になっている場合は、デバイスマネージャのパブリック証明書が SAML アプリケーションにアップロードされ、暗号化が有効になっていることを確認します。デバイスマネージャの XML ファイルをアップロードすると、証明書が SAML サーバーに追加されます。FDM API を使用してデバイスマネージャ証明書を取得することもできます：`https://<FDM_URL>/saml/metadata`

ローカル ユーザ

ローカル ユーザー データベース (LocalIdentitySource) には Device Manager で定義したユーザが含まれます。

ローカル定義ユーザは、次の目的で使用できます。

- リモートアクセス VPN (プライマリまたはフォールバック アイデンティティ ソースとして)。
- 管理アクセス (Device Manager ユーザーのプライマリまたはセカンダリソースとして)。

管理者ユーザはシステム定義のローカル ユーザです。ただし、管理者ユーザはリモートアクセス VPN にログインできません。追加のローカル管理者ユーザは作成できません。

管理アクセスの外部認証を定義すると、デバイスにログインしている外部ユーザがローカル ユーザのリストに表示されます。

- アイデンティティ ポリシー (indirectly) (リモートアクセス VPN ログインからユーザ アイデンティティを収集するためのパッシブ アイデンティティ ソースとして)。

ここでは、ローカル ユーザの設定方法について説明します。

ローカル ユーザの設定

リモートアクセス VPN とともに使用するために、デバイスでユーザ アカウントを直接作成できます。外部認証ソースの代わりに (または外部認証ソースに加えて) ローカル ユーザ アカウントを使用できます。

リモートアクセス VPN のフォールバック認証方式としてローカルユーザデータベースを使用する場合、必ず外部データベースの名前と同じユーザ名/パスワードをローカル データベースで設定します。そうしなければ、フォールバック メカニズムは効果を発揮しません。

ここで定義されたユーザは、デバイスCLIにはログインできません。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] > [ユーザ (Users)] を選択します。

リストに、次のようなユーザ名とサービスタイプが表示されます。

- **MGMT** : Device Manager にログインできる管理ユーザー向け。管理者ユーザが常に定義されており、削除することはできません。また、追加の **MGMT** ユーザを設定することもできません。ただし、管理アクセス用の外部認証を定義すると、デバイスにログインする外部ユーザが **MGMT** ユーザとしてローカル ユーザ リストに表示されます。

- **RA VPN** : デバイスに設定されたリモートアクセス VPN にログインできるユーザ向け。プライマリ ソースまたはセカンダリ（フォールバック）ソースのローカル データベースも選択する必要があります。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- ユーザを追加するには、**[+]** をクリックします。
- ユーザを編集するには、そのユーザの編集アイコン () をクリックします。

特定のユーザ アカウントが必要なくなったら、そのユーザの削除アイコン () をクリックします。

ステップ 3 ユーザ プロパティを設定します。

名前とパスワードには、印刷可能 ASCII 英数字または特殊文字（スペースと疑問符を除く）を使用できます。印刷可能文字は ASCII コード 33 ～ 126 です。

- **[名前 (Name)]** : リモート アクセス VPN にログインするためのユーザ名。名前には 4 ～ 64 文字を使用できますが、スペースは使用できません（例：johndoe）。
- **[パスワード (Password)]**、**[パスワードの確認 (Confirm Password)]** : アカウントのパスワードを入力します。パスワードの長さは、8 ～ 16 文字にする必要があります。同じ文字を連続して使用することはできません。数字、大文字、小文字、および特殊文字をそれぞれ 1 文字以上使用する必要もあります。

(注)

ユーザは、自分のパスワードを変更できません。ユーザにパスワードを通知します。パスワードを変更する必要がある場合は、ユーザ アカウントを編集する必要があります。また、外部 MGMT ユーザのパスワードは更新しないでください。パスワードは外部 AAA サーバによって制御されています。

ステップ 4 **[OK]** をクリックします。



第 III 部

基本

- [Firepower 4100/9300 上の論理デバイス \(237 ページ\)](#)
- [高可用性 \(フェールオーバー\) \(251 ページ\)](#)
- [インターフェイス \(305 ページ\)](#)



第 10 章

Firepower 4100/9300 上の論理デバイス

Firepower 4100/9300 は柔軟なセキュリティ プラットフォームが 1 つまたは複数の論理デバイスをインストールすることができます。

シャーシインターフェイスを設定し、論理デバイスを追加し、Secure Firewall シャーシマネージャまたは FXOS の CLI を使用して Firepower 4100/9300 シャーシ上のデバイスにインターフェイスを割り当てる必要があります。これらのタスクは、Device Manager では実行できません。

この章では、基本的なインターフェイスの設定、および Chassis Manager を使用したスタンドアロンまたはハイ アベイラビリティ論理デバイスの追加方法について説明します。FXOS CLI を使用するには、FXOS CLI コンフィギュレーションガイドを参照してください。高度な FXOS の手順とトラブルシューティングについては、FXOS コンフィギュレーションガイドを参照してください。

- [インターフェイスについて \(237 ページ\)](#)
- [Firepower 9300 のハードウェアとソフトウェアの要件と前提条件 \(239 ページ\)](#)
- [論理デバイスに関する注意事項と制約事項 \(240 ページ\)](#)
- [インターフェイスの設定 \(241 ページ\)](#)
- [論理デバイスの設定 \(244 ページ\)](#)
- [Firepower 4100/9300 論理デバイスの履歴 \(250 ページ\)](#)

インターフェイスについて

Firepower 4100/9300 シャーシ は、物理インターフェイスおよび EtherChannel (ポートチャネル) インターフェイスをサポートします。EtherChannel のインターフェイスには、同じタイプのメンバインターフェイスを最大で 16 個含めることができます。

シャーシ管理インターフェイス

シャーシ管理インターフェイスは、SSH または シャーシマネージャ によって、FXOS シャーシの管理に使用されます。このインターフェイスは、アプリケーション管理の論理デバイスに割り当てる管理タイプのインターフェイスから分離されています。

このインターフェイスのパラメータを設定するには、CLIから設定にする必要があります。このインターフェイスについての情報をFXOS CLIで表示するには、ローカル管理に接続し、管理ポートを表示します。

FirePOWER **connect local-mgmt**

firepower(local-mgmt) # **show mgmt-port**

物理ケーブルまたはSFPモジュールが取り外されている場合や、**mgmt-port shut** コマンドが実行されている場合や、論理デバイスがオフラインになっている場合でも、シャーシ管理インターフェイスは稼働状態のままである点に注意してください。



(注) シャーシ管理インターフェイスはジャンボフレームをサポートしていません。

インターフェイス タイプ

物理インターフェイスおよび EtherChannel（ポートチャネル）インターフェイスは、次のいずれかのタイプになります。

- **Data** : 通常のデータに使用します。データインターフェイスを論理デバイス間で共有することはできません。また、論理デバイスからバックプレーンを介して他の論理デバイスに通信することはできません。データインターフェイスのトラフィックの場合、すべてのトラフィックは別の論理デバイスに到達するために、あるインターフェイスでシャーシを抜け出し、別のインターフェイスで戻る必要があります。
- **Data-sharing** : 通常のデータに使用します。コンテナインスタンスでのみサポートされ、これらのデータインターフェイスは1つまたは複数の論理デバイス/コンテナインスタンス（脅威に対する防御 Management Center 専用）で共有できます。
- **Mgmt** : アプリケーション インスタンスの管理に使用します。これらのインターフェイスは、外部ホストにアクセスするために1つまたは複数の論理デバイスで共有できます。論理デバイスが、このインターフェイスを介して、インターフェイスを共有する他の論理デバイスと通信することはできません。各論理デバイスには、管理インターフェイスを1つだけ割り当てることができます。アプリケーションと管理によっては、後でデータインターフェイスから管理を有効にできます。ただし、データ管理を有効にした後で使用する予定がない場合でも、管理インターフェイスを論理デバイスに割り当てする必要があります。個別のシャーシ管理インターフェイスについては、[シャーシ管理インターフェイス \(237 ページ\)](#) を参照してください。



(注) 管理インターフェイスを変更すると、論理デバイスが再起動します。たとえば、e1/1 から e1/2 に1回変更すると、論理デバイスが再起動して新しい管理が適用されます。

- **Eventing** : Management Center デバイスを使用した 脅威に対する防御 のセカンダリ管理インターフェイスとして使用します。



- (注) 各アプリケーションインスタンスのインストール時に、仮想イーサネットインターフェイスが割り当てられます。アプリケーションがイベントインターフェイスを使用しない場合、仮想インターフェイスは管理上ダウンの状態になります。

```
Firepower # show interface Vethernet775
Firepower # Vethernet775 is down (Administratively down)
Bound Interface is Ethernet1/10
Port description is server 1/1, VNIC ext-mgmt-nic5
```

- **Cluster** : クラスタ化された論理デバイスのクラスタ制御リンクとして使用します。デフォルトでは、クラスタ制御リンクは 48 番のポートチャネル上に自動的に作成されます。クラスタタイプは、EtherChannel インターフェイスのみでサポートされます。Device Manager および Security Cloud Control はクラスタリングをサポートしていません。

FXOS インターフェイスとアプリケーションインターフェイス

Firepower 4100/9300 は、物理インターフェイスおよび EtherChannel（ポートチャネル）インターフェイスの基本的なイーサネット設定を管理します。アプリケーション内で、より高いレベルの設定を行います。たとえば、FXOS では Etherchannel のみを作成できます。ただし、アプリケーション内の EtherChannel に IP アドレスを割り当てることができます。

続くセクションでは、インターフェイスの FXOS とアプリケーションの連携について説明します。

VLAN サブインターフェイス

すべての論理デバイスで、アプリケーション内に VLAN サブインターフェイスを作成できます。

シャーシとアプリケーションの独立したインターフェイスの状態

管理上、シャーシとアプリケーションの両方で、インターフェイスを有効および無効にできます。インターフェイスを動作させるには、両方のオペレーティングシステムで、インターフェイスを有効にする必要があります。インターフェイスの状態は個別に制御されるため、シャーシとアプリケーションの間で不一致が発生することがあります。

Firepower 9300 のハードウェアとソフトウェアの要件と前提条件

Firepower 9300 には、3 つのセキュリティモジュール スロットと複数タイプのセキュリティモジュールが実装されています。次の要件を確認します。

- セキュリティモジュールタイプ：Firepower 9300 には、さまざまなタイプのモジュールをインストールできます。たとえば、SM-48 をモジュール 1、SM-40 をモジュール 2、SM-56 をモジュール 3 としてインストールできます。
- ネイティブインスタンスとコンテナインスタンス：セキュリティモジュールにコンテナインスタンスをインストールする場合、そのモジュールは他のコンテナインスタンスのみをサポートできます。ネイティブインスタンスはモジュールのすべてのリソースを使用するため、モジュールにはネイティブインスタンスを 1 つのみインストールできます。一部のモジュールでネイティブインスタンスを使用し、その他のモジュールでコンテナインスタンスを使用することができます。たとえば、モジュール 1 とモジュール 2 にネイティブインスタンスをインストールできますが、モジュール 3 にはコンテナインスタンスをインストールできます。
- 高可用性：高可用性は Firepower 9300 の同じタイプのモジュール間でのみサポートされています。ただし、2 つのシャーシに混在モジュールを含めることができます。たとえば、各シャーシには SM-40、SM-48、および SM-56 があります。SM-40 モジュール間、SM-48 モジュール間、および SM-56 モジュール間にハイアベイラビリティペアを作成できます。
- ASA および Threat Defense のアプリケーションタイプ：異なるアプリケーションタイプをシャーシ内の別個のモジュールにインストールすることができます。たとえば、モジュール 1 とモジュール 2 に ASA をインストールし、モジュール 3 に Threat Defense をインストールすることができます。
- ASA または Threat Defense のバージョン：個別のモジュールで異なるバージョンのアプリケーションインスタンスタイプを実行することも、同じモジュール上の個別のコンテナインスタンスとして実行することもできます。たとえば、モジュール 1 に Threat Defense 6.3 を、モジュール 2 に Threat Defense 6.4 を、モジュール 3 に Threat Defense 6.5 をインストールできます。

論理デバイスに関する注意事項と制約事項

ガイドラインと制限事項については、以下のセクションを参照してください。

インターフェイスに関する注意事項と制限事項

デフォルトの MAC アドレス

デフォルトの MAC アドレスの割り当ては、インターフェイスのタイプによって異なります。

- 物理インターフェイス：物理インターフェイスでは、Burned-In MAC Address を使用します。
- EtherChannel: EtherChannel の場合は、そのチャネルグループに含まれるすべてのインターフェイスが同じ MAC アドレスを共有します。この機能によって、EtherChannel はネットワーク アプリケーションとユーザに対して透過的になります。ネットワーク アプリケーションやユーザから見えるのは 1 つの論理接続のみであり、個々のリンクのことは認識し

ないからです。ポートチャネルインターフェイスは、プールにある一意の MAC アドレスを使用します。インターフェイス メンバーシップは MAC アドレスに影響しません。

一般的なガイドラインと制限事項

ハイ アベイラビリティ

- アプリケーション設定内で高可用性を設定します。
- 任意のデータ インターフェイスをフェールオーバー リンクおよびステート リンクとして使用できます。
- ハイ アベイラビリティ フェールオーバーを設定される 2 つのユニットは、次の条件を満たしている必要があります。
 - 同じモデルであること。
 - 高可用性論理デバイスに同じインターフェイスを割り当てること。
 - インターフェイスの数とタイプが同じであること。ハイアベイラビリティを有効にする前に、すべてのインターフェイスを FXOS で事前に同じ設定にすること。
- 詳細については、「[ハイアベイラビリティのシステム要件（261 ページ）](#)」を参照してください。

インターフェイスの設定

デフォルトでは、物理インターフェイスは無効になっています。インターフェイスの有効化、Etherchannel の追加、VLAN サブインターフェイスの、インターフェイスプロパティの編集、を実行できます。

インターフェイスの有効化または無効化

各インターフェイスの[管理状態 (Admin State)] を有効または無効に切り替えることができます。デフォルトでは、物理インターフェイスは無効になっています。

手順

ステップ 1 [インターフェイス (Interfaces)] を選択して、[インターフェイス (Interfaces)] ページを開きます。

[インターフェイス] ページには、現在インストールされているインターフェイスの視覚的表現がページの上部に表示され、下の表にはインストールされているインターフェイスのリストが示されます。

ステップ2 インターフェイスを有効にするには、[disabled 無効なスライダ ()] をクリックして、[enabled 有効なスライダ ()] に変更します。

[はい] をクリックして、変更を確認します。視覚的表現の対応するインターフェイスがグレイから緑に変化します。

ステップ3 インターフェイスを無効にするには、[有効なスライダ (enabled 有効なスライダ ())] をクリックして、[無効なスライダ (disabled 無効なスライダ ())] に変更します。

[はい] をクリックして、変更を確認します。視覚的に表示された対応するインターフェイスがグリーンからグレーに変わります。

物理インターフェイスの設定

インターフェイスを物理的に有効および無効にすること、およびインターフェイスの速度とデュプレックスを設定することができます。インターフェイスを使用するには、インターフェイスをFXOSで物理的に有効にし、アプリケーションで論理的に有効にする必要があります。



- (注)
- QSFPH40G-CUxM の場合、自動ネゴシエーションはデフォルトで常に有効になっており、無効にすることはできません。
 - ポートの SFP を別の SFP モジュールに交換しても、インターフェイスの速度、デュプレックス、および自動ネゴシエーションは自動的に更新されません。インターフェイスを再構成する必要があります。

始める前に

- すでに EtherChannel のメンバーであるインターフェイスは個別に変更できません。EtherChannel に追加する前に、設定を行ってください。

EtherChannel (ポート チャネル) の追加

EtherChannel (ポートチャネルとも呼ばれる) は、同じメディアタイプと容量の最大16個のメンバーインターフェイスを含むことができ、同じ速度とデュプレックスに設定する必要があります。メディアタイプはRJ-45またはSFPのいずれかです。異なるタイプ (銅と光ファイバ) のSFPを混在させることができます。容量の大きいインターフェイスで速度を低く設定することによってインターフェイスの容量 (1GBインターフェイスと10GBインターフェイスなど) を混在させることはできません。リンク集約制御プロトコル (LACP) では、2つのネットワー

ク デバイス間でリンク集約制御プロトコルデータユニット（LACPDU）を交換することによって、インターフェイスが集約されます。

EtherChannel 内の各物理データインターフェイスを次のように設定できます。

- アクティブ：LACP アップデートを送信および受信します。アクティブ EtherChannel は、アクティブまたはパッシブ EtherChannel と接続を確立できます。LACP トラフィックを最小にする必要がある場合以外は、アクティブ モードを使用する必要があります。
- オン：EtherChannel は常にオンであり、LACP は使用されません。「オン」の EtherChannel は、別の「オン」の EtherChannel のみと接続を確立できます。



(注) モードを [On] から [Active] に変更するか、[Active] から [On] に変更すると、EtherChannel が動作状態になるまで最大 3 分かかることがあります。

各メンバーインターフェイスが LACP 更新を送受信するように、Firepower 4100/9300 シャーシは Etherchannel をアクティブ LACP モードでしかサポートしません。アクティブ EtherChannel は、アクティブまたはパッシブ EtherChannel と接続を確立できます。LACP トラフィックを最小にする必要がある場合以外は、アクティブ モードを使用する必要があります。

LACP では、ユーザが介入しなくても、EtherChannel へのリンクの自動追加および削除が調整されます。また、コンフィギュレーションの誤りが処理され、メンバインターフェイスの両端が正しいチャンネル グループに接続されていることがチェックされます。「オン」モードではインターフェイスがダウンしたときにチャンネル グループ内のスタンバイ インターフェイスを使用できず、接続とコンフィギュレーションはチェックされません。

Firepower 4100/9300 シャーシが EtherChannel を作成すると、EtherChannel は [一時停止 (Suspended)] 状態 (Active LACP モードの場合) または [ダウン (Down)] 状態 (On LACP モードの場合) になり、物理リンクがアップしても論理デバイスに割り当てられるまでそのままになります。EtherChannel は次のような状況でこの [一時停止 (Suspended)] 状態になります。

- EtherChannel がスタンドアロン論理デバイスのデータまたは管理インターフェイスとして追加された
- EtherChannel がクラスタの一部である論理デバイスの管理インターフェイスまたは Cluster Control Link として追加された
- EtherChannel がクラスタの一部である論理デバイスのデータインターフェイスとして追加され、少なくとも 1 つのユニットがクラスタに参加している

EtherChannel は論理デバイスに割り当てられるまで動作しないことに注意してください。EtherChannel が論理デバイスから削除された場合や論理デバイスが削除された場合は、EtherChannel が [一時停止 (Suspended)] または [ダウン (Down)] 状態に戻ります。

論理デバイスの設定

スタンドアロン論理デバイスまたはハイアベイラビリティのペアを Firepower 4100/9300 シャーシに追加します。

Device Manager のスタンドアロン Threat Defense を追加します。

Device Manager はネイティブインスタンスで使用できます。コンテナインスタンスはサポートされていません。スタンドアロン論理デバイスは、単独で、または高可用性ペアで動作します。

始める前に

- 論理デバイスに使用するアプリケーションイメージを Cisco.com からダウンロードし、そのイメージを Firepower 4100/9300 シャーシ。
- 論理デバイスで使用する管理インターフェイスを設定します。管理インターフェイスが必要です。この管理インターフェイスは、シャーシの管理のみに使用されるシャーシ管理ポートと同じではありません。
- また、少なくとも 1 つのデータ タイプのインターフェイスを設定する必要があります。
- 次の情報を用意します。
 - このデバイスのインターフェイス Id
 - 管理インターフェイス IP アドレスとネットワークマスク
 - ゲートウェイ IP アドレス
 - DNS サーバの IP アドレス
 - Threat Defense ホスト名とドメイン名

手順

セキュリティポリシーの設定を始めるには、Device Manager のコンフィギュレーションガイドを参照してください。

ハイアベイラビリティペアの追加

Threat Defense ハイアベイラビリティ（フェールオーバーとも呼ばれます）は、FXOS ではなくアプリケーション内で設定されます。ただし、ハイアベイラビリティのシャーシを準備するには、次の手順を参照してください。

始める前に

[ハイ アベイラビリティのシステム要件 \(261 ページ\)](#) を参照してください。

手順

-
- ステップ 1** 各論理デバイスに同一のインターフェイスを割り当てます。
- ステップ 2** フェールオーバーリンクとステートリンクに1つまたは2つのデータインターフェイスを割り当てます。
- これらのインターフェイスは、2つのシャーン間で高可用性トラフィックを交換します。フェールオーバーリンクとステートリンクの組み合わせには、10 GB のデータインターフェイスを使用することを推奨します。使用可能なインターフェイスがある場合は、別のフェールオーバーリンクとステートリンクを使用できます。ステートリンクには、最も多くの帯域幅が必要です。フェールオーバーリンクまたはステートリンクに管理タイプのインターフェイスを使用することはできません。シャーン間でスイッチを使用することをお勧めします。この場合、フェールオーバーインターフェイスと同じネットワークセグメント上に他のデバイスを配置できません。
- ステップ 3** 論理デバイスで高可用性を有効にします。 [高可用性 \(フェールオーバー\) \(251 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 4** 高可用性を有効にした後にインターフェイスを変更する必要がある場合は、最初にスタンバイユニットで変更を実行してから、アクティブユニットで変更を実行します。
-

Threat Defense 論理デバイスのインターフェイスの変更

脅威に対する防御 論理デバイスでは、インターフェイスの割り当てや割り当て解除を行うことができます。その後、Device Manager でインターフェイス設定を同期できます。

新しいインターフェイスの追加や未使用のインターフェイスの削除が、脅威に対する防御の設定に与える影響は最小限です。ただし、セキュリティポリシーで使用されているインターフェイスを削除すると、設定に影響を与えます。インターフェイスは、アクセスルール、NAT、SSL、アイデンティティルール、VPN、DHCPサーバなど、脅威に対する防御の設定における多くの場所で直接参照されている可能性があります。セキュリティゾーンを参照するポリシーは影響を受けません。また、論理デバイスに影響を与えず、かつ Device Manager での同期を必要とせずに、割り当てられた EtherChannel のメンバーシップを編集できます。

古いインターフェイスを削除する前に、あるインターフェイスから別のインターフェイスに設定を移行できます。

始める前に

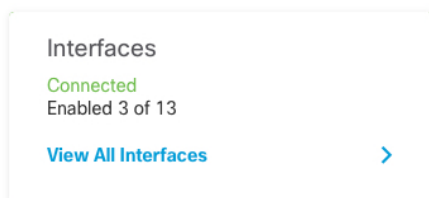
- [物理インターフェイスの設定 \(242 ページ\)](#) および [EtherChannel \(ポートチャネル\) の追加 \(242 ページ\)](#) に従って、インターフェイスを設定し、EtherChannel を追加します。

- すでに割り当てられているインターフェイスをEtherChannelに追加する場合(たとえば、すべてのインターフェイスがデフォルトでクラスタに割り当てられる場合)、最初にそのインターフェイスを論理デバイスから割り当て解除してから、EtherChannelに追加する必要があります。新しいEtherChannelの場合、EtherChannelをデバイスに割り当てることができません。
- ハイアベイラビリティのため、Device Manager で設定を同期する前に、すべてのユニットでインターフェイスを追加または削除していることを確認してください。最初にスタンバイユニットでインターフェイスを変更してから、アクティブユニットで変更することをお勧めします。新しいインターフェイスは管理上ダウンした状態で追加されるため、インターフェイス モニタリングに影響を及ぼさないことに注意してください。
- マルチインスタンスモードでは、サブインターフェイスを同じ VLAN タグを持つ別のサブインターフェイスと変更するには、最初にインターフェイスのすべての設定 (nameif configを含む) を削除してから、シャーシマネージャからインターフェイスの割り当てを解除する必要があります。割り当てが解除されたら、新しいインターフェイスを追加し、Management Center からインターフェイスの同期を使用します。

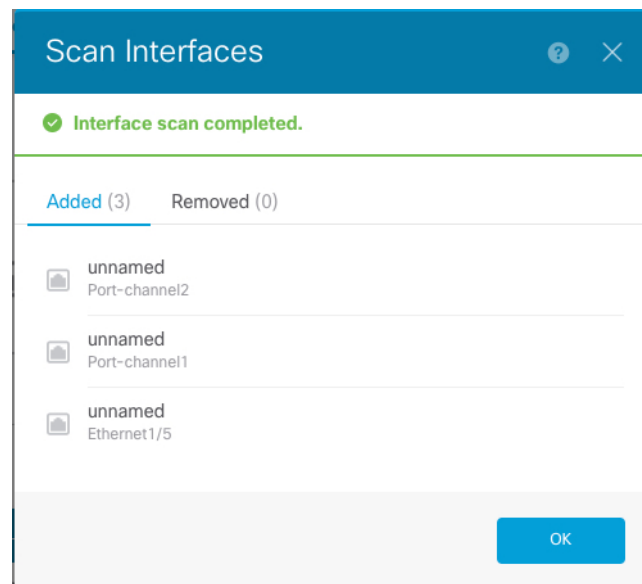
手順

ステップ 1 Device Manager でインターフェイスを同期して移行します。

- a) Device Manager にログインします。
- b) [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)] リンクをクリックします。



- c) [インターフェイス (Interfaces)] アイコンをクリックします。
- d) インターフェイスがスキャンされるのを待ってから、[OK] をクリックします。



- e) 新しいインターフェイスに名前、IPアドレスなどを設定します。

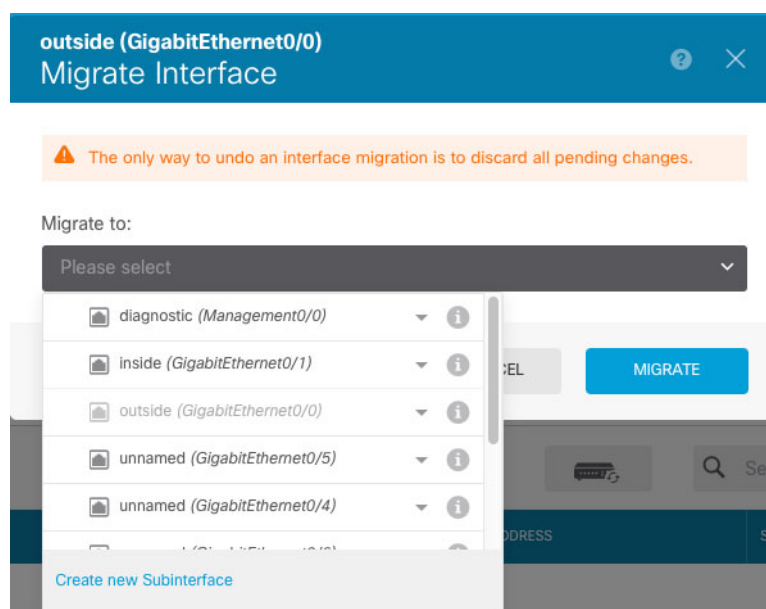
削除するインターフェイスの既存のIPアドレスと名前を使用する場合は、新しいインターフェイスでこれらの設定を使用できるように、古いインターフェイスをダミーの名前とIPアドレスで再設定する必要があります。

- f) 古いインターフェイスを新しいインターフェイスに置き換えるには、古いインターフェイスの [置換 (Replace)] アイコンをクリックします。

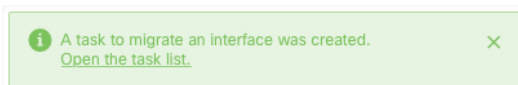
[置換 (Replace)] アイコン

このプロセスによって、インターフェイスを参照しているすべての設定で、古いインターフェイスが新しいインターフェイスに置き換えられます。

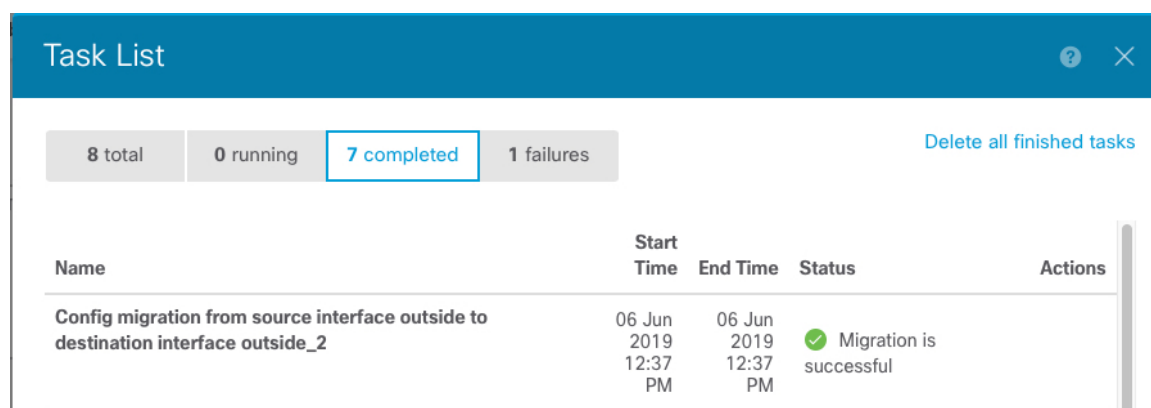
- g) [交換用インターフェイス (Replacement Interface)] : ドロップダウン リストから新しいインターフェイスを選択します。



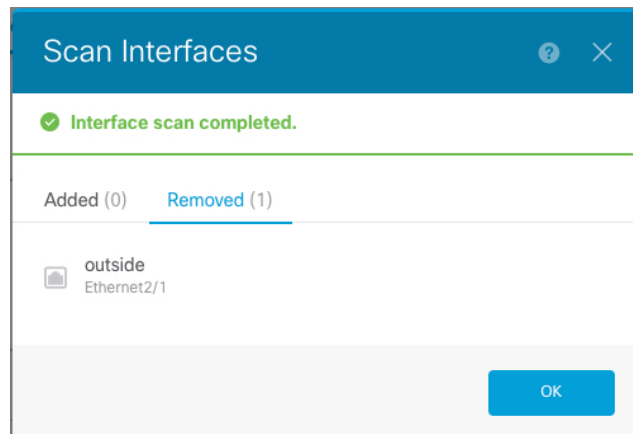
- h) [インターフェイス (Interfaces)] ページにメッセージが表示されます。メッセージ内のリンクをクリックします。



- i) [タスクリスト (Task List)] を調べて、移行が成功したことを確認します。



ステップ 2 Device Manager でインターフェイスを再度同期します。

図 5: *Device Manager* によるインターフェイスのスキャン

アプリケーションのコンソールへの接続

アプリケーションのコンソールに接続するには、次の手順を使用します。

手順

ステップ 1 コンソール接続または Telnet 接続を使用して、モジュール CLI に接続します。

connect module slot_number {console | telnet}

複数のセキュリティ モジュールをサポートしないデバイスのセキュリティ エンジンに接続するには、*slot_number* として **1** を使用します。

Telnet 接続を使用する利点は、モジュールに同時に複数のセッションを設定でき、接続速度が速くなることです。

例：

```
Firepower# connect module 1 console
Telnet escape character is '~'.
Trying 127.5.1.1...
Connected to 127.5.1.1.
Escape character is '~'.

CISCO Serial Over LAN:
Close Network Connection to Exit

Firepower-module1>
```

ステップ 2 アプリケーションのコンソールに接続します。

connect ftd name

インスタンス名を表示するには、名前を付けずにコマンドを入力します。

例：

```
Firepower-module1> connect ftd ftd1
Connecting to ftd(ftd-native) console... enter exit to return to bootCLI
[...]
>
```

ステップ 3 アプリケーション コンソールを終了して FXOS モジュール CLI に移動します。

- Threat Defense：「**exit**」と入力します。

ステップ 4 FXOS CLI のスーパーバイザ レベルに戻ります。

コンソールを終了します。

- a) ~ と入力

Telnet アプリケーションに切り替わります。

- b) Telnet アプリケーションを終了するには、次を入力します。

```
telnet>quit
```

Telnet セッションを終了します。

- a) **Ctrl-],.** と入力

Firepower 4100/9300 論理デバイスの履歴

機能	バージョン	詳細
Firepower 4100/9300 での Device Manager のサポート	6.5.0	Firepower 4100/9300 の脅威に対する防御 論理デバイスで Device Manager を使用できるようになりました。Device Manager はマルチインスタンス機能をサポートしていません。ネイティブインスタンスのみがサポートされています。 (注) FXOS 2.7.1 が必要です。



第 11 章

高可用性（フェールオーバー）

ここでは、アクティブ/スタンバイ フェールオーバーを設定および管理して、Threat Defense システムのハイ アベイラビリティを実現する方法について説明します。

- [高可用性（フェールオーバー）について（251 ページ）](#)
- [ハイ アベイラビリティのシステム要件（261 ページ）](#)
- [高可用性のガイドライン（263 ページ）](#)
- [高可用性の構成（265 ページ）](#)
- [高可用性の管理（281 ページ）](#)
- [高可用性のモニタリング（294 ページ）](#)
- [ハイ アベイラビリティ（フェールオーバー）のトラブルシューティング（297 ページ）](#)

高可用性（フェールオーバー）について

高可用性またはフェールオーバー セットアップは、プライマリ デバイスの障害時にセカンダリ デバイスで引き継ぐことができるように、2つのデバイスを結合します。これにより、デバイスの障害時にネットワーク運用を維持できます。

ハイアベイラビリティを設定するには、同じ脅威に対する防御 デバイスが2台、専用のフェールオーバーリンク（オプションで、ステートリンク）で相互に接続されている必要があります。2台の装置はフェールオーバーリンクを介して常に通信し、各装置の動作状態を判断して、展開された設定の変更を同期します。システムでは、フェールオーバーが発生したときにユーザ接続が維持されるように、ステートリンクを使用して接続状態の情報をスタンバイ デバイスに渡します。

この装置はアクティブ/スタンバイ ペアを形成します。1台の装置がアクティブ装置となり、トラフィックを渡します。スタンバイ装置はアクティブにトラフィックを渡しません、アクティブ装置の設定やその他のステータス情報を同期します。

アクティブ装置の健全性（ハードウェア、インターフェイス、ソフトウェア、および環境のステータス）がモニタされ、特定のフェールオーバー条件が満たされているかどうか判断されます。これらの条件が満たされると、アクティブ装置がスタンバイ装置にフェールオーバーし、スタンバイ装置がアクティブになります。

アクティブ/スタンバイ フェールオーバーについて

アクティブ/スタンバイ フェールオーバーでは、障害が発生した装置の機能を、スタンバイ Threat Defense デバイスに引き継ぐことができます。アクティブ装置に障害が発生した場合、スタンバイ装置がアクティブ装置になります。

プライマリ/セカンダリ ロールとアクティブ/スタンバイ ステータス

フェールオーバー ペアの2つの装置の主な相違点は、どちらの装置がアクティブでどちらの装置がスタンバイであるか、つまりどちらの IP アドレスを使用し、どちらの装置でアクティブにトラフィックを渡すかということに関連します。

しかし、プライマリである装置（コンフィギュレーションで指定）とセカンダリである装置との間で、いくつかの相違点があります。

- 両方の装置が同時にスタートアップした場合（さらに動作ヘルスが等しい場合）、プライマリ装置が常にアクティブ装置になります。
- プライマリ装置の MAC アドレスは常にアクティブ IP アドレスと組み合わせられます。このルールの例外は、セカンダリ装置がアクティブになり、フェールオーバーリンク経由でプライマリ装置の MAC アドレスを取得できない場合に発生します。この場合、セカンダリ装置の MAC アドレスが使用されます。

起動時のアクティブ装置の判別

アクティブ装置は、次の条件で判別されます。

- 装置がブートされ、ピアがすでにアクティブとして動作中であることを検出すると、その装置はスタンバイ装置になります。
- 装置がブートされてピアを検出できないと、その装置はアクティブ装置になります。
- 両方の装置が同時にブートされた場合は、プライマリ装置がアクティブ装置になり、セカンダリ装置がスタンバイ装置になります。

フェールオーバー イベント

アクティブ/スタンバイフェールオーバーでは、フェールオーバーは装置ごとに行われます。

次の表に、各障害イベントに対するフェールオーバーアクションを示します。この表には、各フェールオーバー イベントに対して、フェールオーバー ポリシー（フェールオーバーまたはフェールオーバーなし）、アクティブ装置が行うアクション、スタンバイ装置が行うアクション、およびフェールオーバー条件とアクションに関する特別な注意事項を示します。

表 4: フェールオーバー イベント

障害イベント	ポリシー	アクティブユニットのアクション	スタンバイユニットのアクション	注記
アクティブユニットが故障 (電源またはハードウェア)	フェールオーバー	該当なし	アクティブになる アクティブを障害としてマークする	モニタ対象インターフェイスまたはフェールオーバーリンクでhelloメッセージが受信されることはありません。
以前にアクティブだったユニットが復旧	フェールオーバーなし	スタンバイになる	なし	なし。
スタンバイユニットが故障 (電源またはハードウェア)	フェールオーバーなし	スタンバイに故障とマークする	該当なし	スタンバイ装置が故障とマークされている場合、インターフェイス障害しきい値を超えても、アクティブ装置はフェールオーバーを行いません。
動作中にフェールオーバーリンクに障害が発生した	フェールオーバーなし	フェールオーバーリンクに故障とマークする	フェールオーバーリンクに故障とマークする	フェールオーバーリンクがダウンしている間、装置はスタンバイ装置にフェールオーバーできないため、できるだけ早くフェールオーバーリンクを復元する必要があります。
スタートアップ時にフェールオーバーリンクに障害が発生した	フェールオーバーなし	アクティブになる フェールオーバーリンクに故障とマークする	アクティブになる フェールオーバーリンクに故障とマークする	スタートアップ時にフェールオーバーリンクがダウンしていると、両方の装置がアクティブになります。
ステートリンクの障害	フェールオーバーなし	なし	なし	ステート情報が古くなり、フェールオーバーが発生するとセッションが終了します。
しきい値を超えたアクティブユニットでインターフェイスに障害が発生	フェールオーバー	アクティブを障害としてマークする	アクティブになる	なし。
しきい値を超えたスタンバイユニットでインターフェイスに障害が発生	フェールオーバーなし	なし	スタンバイに故障とマークする	スタンバイ装置が故障とマークされている場合、インターフェイス障害しきい値を超えても、アクティブ装置はフェールオーバーを行いません。

フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンク

フェールオーバー リンクは2つの装置の間の専用接続です。ステートフル フェールオーバー リンクも専用接続ですが、1つのフェールオーバー リンクをフェールオーバー リンクとステート リンクが組み合わされたものとして使用することも、個別の専用ステート リンクを作成することもできます。フェールオーバー リンクだけを使用する場合は、ステートフルな情報もそのリンクを経由し、ステートフル フェールオーバー機能は失われません。

デフォルトでは、フェールオーバー リンクおよびステートフル フェールオーバー リンク上の通信はプレーン テキスト（暗号化されない）です。IPsec 暗号キーを設定することにより、通信を暗号化してセキュリティを強化することができます。

ここでは、これらのインターフェイスについて詳しく説明するとともに、最良の結果を得るためのデバイスの配線方法に関する推奨事項を示します。

フェールオーバー リンク

フェールオーバー ペアの2台の装置は、フェールオーバー リンク経由で常に通信して、各装置の動作ステータスを確認し、設定の変更を同期します。

次の情報がフェールオーバー リンク経由で伝達されています。

- 装置の状態（アクティブまたはスタンバイ）
- Hello メッセージ（キープアライブ）
- ネットワーク リンク ステータス
- MAC アドレス交換
- 設定の複製と同期化
- システム データベースの更新。これには、VDB やルールは含まれますが、地理位置情報データベースやセキュリティ インテリジェンス データベースは含まれません。各システムは、地理位置情報の更新やセキュリティ インテリジェンスの更新を個別にダウンロードします。更新スケジュールを作成する場合は、これらの同期が維持されます。ただし、アクティブ デバイスで地理位置情報やセキュリティ インテリジェンスを手動更新する場合は、スタンバイ デバイスでも更新する必要があります。



(注) イベント、レポート、および監査ログデータは同期されません。イベントビューアとダッシュボードには、特定の装置に関連するデータのみが表示されます。また、展開履歴、タスク履歴、およびその他の監査ログ イベントも同期されません。

ステートフル フェールオーバー リンク

システムは、ステート リンクを使用して接続状態の情報をスタンバイ デバイスに渡します。この情報は、フェールオーバーが発生したときにスタンバイ装置が既存の接続を維持するために役立ちます。

フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンクの両方に単一のリンクを使用することは、インターフェイスを節約する最善の方法です。ただし、大規模な構成とトラフィックの多いネットワークを使用する場合は、ステート リンクとフェールオーバー リンクに専用のインターフェイスを使用することを検討する必要があります。

フェールオーバー リンクとステート リンクのインターフェイス

使用されていないものの有効になっているデータインターフェイス（物理またはEtherChannel）をフェールオーバーリンクとして使用できます。ただし、現在名前が設定されているインターフェイスは指定できません。フェールオーバー リンク インターフェイスは、通常のネットワーク インターフェイスとしては設定されません。フェールオーバー通信のためにだけ存在します。このインターフェイスは、フェールオーバー リンク用にのみ使用できます（ステート リンク用としても使用できます）。フェールオーバーに管理インターフェイス、サブインターフェイス、VLAN インターフェイス、あるいはスイッチポートを使用することはできません。

脅威に対する防御 デバイスは、ユーザーデータとフェールオーバーリンク間でのインターフェイスの共有をサポートしていません。

フェールオーバーリンクとステートリンクのサイジングについては、次のガイドラインを参照してください。

- **Firepower 4100/9300:** フェールオーバーリンクとステートリンクの組み合わせには、10 GB のデータインターフェイスを使用することを推奨します。
- **他のすべてのモデル:** 1 GB インターフェイスは、フェールオーバーリンクとステートリンクの組み合わせに十分な容量です。

フェールオーバーまたはステートリンクとしてEtherChannel インターフェイスを使用している場合、ハイ アベイラビリティを確立する前に、両方のデバイスで同じ ID とメンバーインターフェイスを備えた同じEtherChannelが存在していることを確認する必要があります。EtherChannelの不一致がある場合は、HA を無効にして、セカンダリユニットの設定を修正する必要があります。順序が不正なパケットを防止するために、EtherChannel 内の 1 つのインターフェイスのみが使用されます。そのインターフェイスで障害が発生した場合は、EtherChannel 内の次のリンクが使用されます。フェールオーバー リンクとして使用中のEtherChannelの設定は変更できません。

フェールオーバーおよびステートフル フェールオーバー インターフェイスの接続

未使用のデータ物理インターフェイスは、フェールオーバー リンクやオプションの専用ステートリンクとして使用できます。ただし、現在名前が設定されているインターフェイスやサブインターフェイスを持つインターフェイスは選択できません。フェールオーバーおよびステートフルフェールオーバー リンク インターフェイスは、通常のネットワーキングインターフェイスとして設定されません。フェールオーバー通信用にのみ存在し、通過トラフィックや管理アクセスに使用することはできません。

設定がデバイス間で同期されるため、リンクの両端に同じポート番号を選択する必要があります。たとえば、両方のデバイスで `GigabitEthernet1/3` をフェールオーバー リンク用に選択します。

次のいずれかの方法で、フェールオーバーリンクおよび専用ステートリンク（使用する場合）を接続します。

- 脅威に対する防御 デバイスのフェールオーバー インターフェイスと同じネットワークセグメント（ブロードキャストドメインまたはVLAN）に他の装置のないスイッチを使用する。専用ステートリンクの要件は同じですが、フェールオーバーリンクとは異なるネットワークセグメントに存在する必要があります。



(注) スwitchを使用する利点は、装置のいずれかのインターフェイスがダウンした場合、障害が発生したインターフェイスのトラブルシューティングが容易であることです。直接ケーブル接続を使用する場合、1つのインターフェイスに障害が発生すると、リンクが両方のピアでダウンし、どのデバイスで障害が発生しているのかを判別することが困難になります。

- イーサネットケーブルを使用してユニットを直接接続する。外部スイッチは必要ありません。脅威に対する防御は銅線イーサネットポートでAuto-MDI/MDIXをサポートしているので、クロス ケーブルまたはストレート ケーブルのどちらでも使用できます。ストレート ケーブルを使用した場合は、インターフェイスが自動的にケーブルを検出して、送信/受信ペアの1つをMDIXにスワップします。

長距離のフェールオーバーを使用する場合のステートリンクの遅延は、パフォーマンスを最善にするには10ミリ秒未満でなければならず、250ミリ秒を超えないようにする必要があります。遅延が10ミリ秒を上回る場合、フェールオーバーメッセージの再送信によって、パフォーマンスが低下する可能性があります。

フェールオーバーの中断の回避とデータ リンク

すべてのインターフェイスで同時に障害が発生する可能性を減らすために、フェールオーバーリンクとデータ インターフェイスは異なるパスを通すことを推奨します。フェールオーバーリンクがダウンした場合、フェールオーバーが必要かどうかの決定に、脅威に対する防御 デバイスはデータ インターフェイスを使用できます。その後、フェールオーバー動作は、フェールオーバー リンクのヘルスが復元されるまで停止されます。

耐障害性のあるフェールオーバー ネットワークの設計については、次の接続シナリオを参照してください。

シナリオ1：非推奨

単一のスイッチまたはスイッチセットが2つの 脅威に対する防御 デバイス間のフェールオーバー インターフェイスとデータ インターフェイスの両方の接続に使用される場合、スイッチまたはInter-Switch Link (ISL) がダウンすると、両方の 脅威に対する防御 デバイスがアクティブになります。そのため、次の図に示す2つの接続方法は推奨されません。

図 6: 単一のスイッチを使用した接続：非推奨

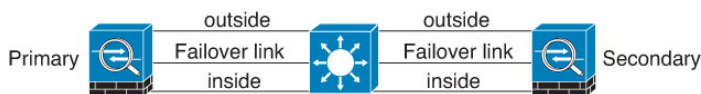


図 7: 2つのスイッチを使用した接続：非推奨



シナリオ 2：推奨

フェールオーバー リンクには、データ インターフェイスと同じスイッチを使用しないことを推奨します。代わりに、次の図に示すように、異なるスイッチを使用するか直接ケーブルを使用して、フェールオーバー リンクを接続します。

図 8: 異なるスイッチを使用した接続

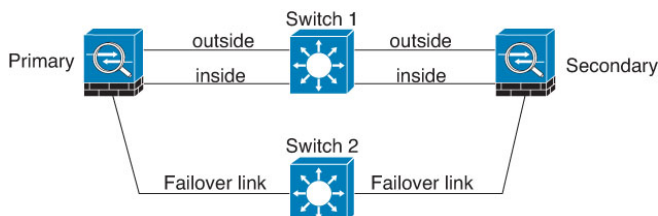
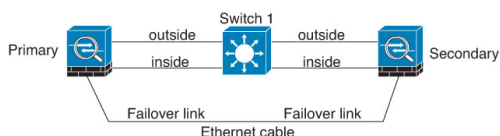


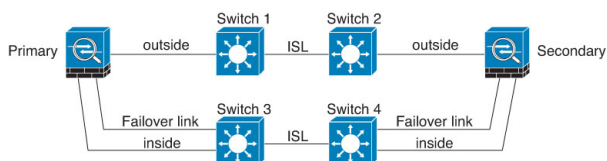
図 9: ケーブルを使用した接続



シナリオ 3：推奨

脅威に対する防御 データ インターフェイスが複数セットのスイッチに接続されている場合、フェールオーバー リンクはいずれかのスイッチに接続できます。できれば、次の図に示すように、ネットワークのセキュアな側（内側）のスイッチに接続します。

図 10: セキュアなスイッチを使用した接続



ステートフル フェールオーバーがユーザ接続に与える影響

アクティブ装置は、接続状態情報をスタンバイ装置と共有します。これは、スタンバイ装置がユーザに影響を与えずに特定のタイプの接続を維持できることを意味します。

ただし、ステートフルフェールオーバーをサポートしないタイプの接続もあります。これらの接続については、フェールオーバーが発生した場合、ユーザが接続を再確立する必要があります。多くの場合、これは、接続で使用されているプロトコルの動作に基づいて自動的に実行されます。

ここでは、ステートフルフェールオーバーに関してサポートされる機能またはサポートされない機能について説明します。

サポートされる機能

ステートフル フェールオーバーでは、次のステート情報がスタンバイ Threat Defense デバイスに渡されます。

- NAT 変換テーブル
- TCP 接続状態と UDP 接続状態（HTTP 接続状態を含む）。その他の IP プロトコル タイプと ICMP は、新しいパケットが到着すると新しいアクティブデバイスで確立されるため、アクティブ装置によって解析されません。
- Snort 接続状態、インスペクションの結果、およびピン ホールに関する情報（TCP の厳密な適用を含む）。
- ARP テーブル
- レイヤ 2 ブリッジ テーブル（ブリッジ グループ用）
- ISAKMP および IPSec SA テーブル
- GTP PDP 接続データベース
- SIP シグナリング セッションおよびピン ホール。
- スタティック/ダイナミック ルーティング テーブル：ステートフル フェールオーバーは OSPF や EIGRP などのダイナミック ルーティング プロトコルに参加します。そのため、アクティブ装置上のダイナミック ルーティング プロトコルを介して学習されたルートは、スタンバイ装置のルーティング情報ベース（RIB）テーブルに保持されます。フェールオーバーイベントが発生した場合、最初はアクティブなセカンダリ装置にプライマリ装置をミラーリングするルールがあるため、パケットは通常は最小限の切断でトラフィックに移動します。フェールオーバーの直後に、新しくアクティブになった装置で再コンバージェンス タイマーが開始されます。次に、RIB テーブルのエポック番号が増加します。再コンバージェンス中に、OSPF および EIGRP ルートは新しいエポック番号で更新されます。タイマーが期限切れになると、失効したルート エントリ（エポック番号によって決定される）はテーブルから削除されます。これで、RIB には新しくアクティブになった装置での最新のルーティング プロトコル転送情報が含まれます。



(注) ルートは、アクティブ装置上のリンクアップまたはリンクダウンイベントの場合のみ同期されます。スタンバイ装置上でリンクがアップまたはダウンすると、アクティブ装置から送信されたダイナミックルートが失われることがあります。これは正常な予期された動作です。

- **DHCP サーバ** : DHCP アドレス リースは複製されません。ただし、インターフェイス上に構成された DHCP サーバは DHCP クライアントにアドレスを付与する前に ping を送信してアドレスが使用されていないことを確認するため、サービスに影響はありません。ステート情報は、DHCP リレーまたは DDNS には関係ありません。
- **アクセス コントロール ポリシーの決定** : トラフィックの一致 (URL、URL カテゴリ、地理位置情報などを含む)、侵入検知、マルウェア、およびファイル タイプに関する決定は、フェールオーバー時に維持されます。ただし、フェールオーバー時に評価される接続には、次の注意事項があります。
 - **AVC** : App-ID 判定は複製されますが、検出状態は複製されません。フェールオーバーが発生する前に App-ID 判定が完了および同期していれば、同期は正常に行われます。
 - **侵入検知状態** : フェールオーバーの途中でピックアップが発生すると、新しいインスペクションは完了しますが古い状態は失われます。
 - **ファイル マルウェア ブロッキング** : フェールオーバーの前にファイルの判定結果を利用できるようにする必要があります。
 - **ファイル タイプの検出およびブロッキング** : フェールオーバーの前にファイル タイプを特定する必要があります。元のアクティブデバイスでファイルを特定しているときにフェールオーバーが発生すると、ファイル タイプは同期されません。ファイル ポリシーでそのファイル タイプがブロックされていても、新しいアクティブ デバイスはファイルをダウンロードします。
- **アイデンティティ ポリシーによる受動的なユーザアイデンティティの決定**。ただし、キャプティブ ポータル経由のアクティブ認証によって収集されたものではありません。
- **セキュリティ インテリジェンスの決定**。
- **RA VPN** : リモート アクセス VPN のエンドユーザは、フェールオーバー後に VPN セッションを再認証または再接続する必要はありません。ただし、VPN 接続上で動作するアプリケーションは、フェールオーバープロセス中にパケットを失って、パケット損失から回復できない可能性があります。
- すべての接続から、確立された接続だけがスタンバイ ASA に複製されます。

サポートされない機能

ステートフル フェールオーバーでは、次のステート情報はスタンバイ Threat Defense デバイスに渡されません。

- GRE や IP-in-IP などのプレーンテキストトンネル内のセッション。トンネル内のセッションは複製されません。新しいアクティブ ノードでは、正しいポリシー ルールを照合するために既存のインスペクション判定を再利用することはできません。
- 復号された TLS/SSL 接続：復号状態は同期されず、アクティブユニットに障害が発生すると、復号された接続がリセットされます。新しいアクティブユニットへの新しい接続を確立する必要があります。復号されていない接続（つまり、TLS/SSL[復号しない（Do Not Decrypt）]ルールアクションに一致する）は影響を受けず、正しく複製されます。
- マルチキャスト ルーティング。

スタンバイ装置で許可される設定の変更とアクション

高可用性モードで運用している場合は、アクティブ装置にのみ設定の変更を加えます。設定を展開すると、新しい変更はスタンバイ装置にも送信されます。

ただし、一部のプロパティはスタンバイ装置固有です。スタンバイ装置では次の設定を変更できます。

- 管理 IP アドレスとゲートウェイ。
- カスタマイズされたログイン ページ。
- CLI のみです。管理者ユーザアカウントや他のローカルユーザアカウントのパスワード。この変更を行うことができるのは CLI のみで、**Device Manager** で行うことはできません。すべてのローカルユーザは、両方のユニットで個別にパスワードを変更する必要があります。

さらに、スタンバイ デバイスでは次のアクションを実行できます。

- HA の一時停止、再開、リセット、解除などの高可用性アクションと、アクティブモードとスタンバイ モードの切り替え。
- ダッシュボードとイベントデータはデバイスごとに一意であり、同期されません。これには、イベント ビューアのカスタム ビューが含まれます。
- 監査ログ情報はデバイスごとに一意です。
- スマートライセンスの登録。ただし、アクティブ装置でオプションのライセンスを有効または無効にする必要があります。このアクションはスタンバイ装置と同期され、適切なライセンスが要求または解放されます。
- バックアップ（ただし復元ではない）。バックアップを復元するには装置で HA を解除する必要があります。バックアップに HA 設定が含まれている場合、装置は HA グループに再び参加します。
- ソフトウェア アップグレードのインストール。
- トラブルシューティング ログの生成。

- 地理位置情報データベースまたはセキュリティ インテリジェンス データベースの手動更新。これらのデータベースは、装置間で同期されません。更新スケジュールを作成する場合、装置は独立して一貫性を維持できます。
- **[モニタリング (Monitoring)] > [セッション (Sessions)]** ページからアクティブな Device Manager のユーザーセッションを表示したり、セッションを削除できます。

ハイ アベイラビリティのシステム要件

ここでは、ハイ アベイラビリティ設定に2台のデバイスを実装する前に満たさなくてはならない要件について説明します。

HA のハードウェア要件

高可用性設定で2つのデバイスを結び付けるには、次のハードウェア要件を満たす必要があります。

- デバイスはまったく同じハードウェア モデルである必要があります。

Firepower 9300 の場合、ハイ アベイラビリティは同じタイプのモジュール間でのみサポートされていますが、2台のシャーシにモジュールを混在させることができます。たとえば、各シャーシに SM-36 および SM-44 がある場合、SM-36 モジュール間と SM-44 モジュール間に高可用性ペアを作成できます。
- デバイスは同じ数の同じタイプのインターフェイスを備えている必要があります。

Firepower 4100/9300 シャーシの場合、HA を有効にする前に、すべてのインターフェイスを FXOS で同様に事前設定する必要があります。HA を有効にした後にインターフェイスを変更する場合は、スタンバイユニットの FXOS でそのインターフェイスを変更してから、アクティブユニットで同じ変更を行います。
- デバイスには同じモジュールが取り付けられている必要があります。たとえば、一方にオプションのネットワーク インターフェイス モジュールがある場合は、もう一方のデバイスに同じモジュールを取り付ける必要があります。
- Firepower 9300 のシャーシ内ハイアベイラビリティはサポートされません。同じ Firepower 9300 シャーシで別の論理デバイス間の HA を設定することはできません。

HA のソフトウェア要件

高可用性設定で2つのデバイスを結び付けるには、次のソフトウェア要件を満たす必要があります。

- デバイスは、まったく同じバージョンのソフトウェア（つまり、1 番目のメジャー番号、2 番目のマイナー番号、および 3 番目のメンテナンス番号が同じ）を実行する必要があります。バージョンは、Device Manager の [デバイス (Devices)] ページで確認できます。

また、CLI で **show version** コマンドを使用して確認することもできます。異なるバージョンを実行するデバイスでも参加できますが、設定がスタンバイ装置にインポートされず、装置を同じソフトウェアバージョンにアップグレードしないとフェールオーバーは機能しません。

- 両方のデバイスがローカルマネージャモードになっている必要があります。つまり、**Device Manager** を使用して設定されている必要があります。両方のシステムで **Device Manager** にログインできる場合は、それらがローカルマネージャモードになっています。CLI で **show managers** コマンドを使用して確認することもできます。
- 各デバイスの初期セットアップ ウィザードを完了する必要があります。
- 各デバイスに固有の管理 IP アドレスが必要です。管理インターフェイスの設定は、デバイス間で同期されません。
- デバイスの NTP 設定が同じである必要があります。
- DHCP を使用してアドレスを取得するようにインターフェイスを設定することはできません。つまり、すべてのインターフェイスに静的 IP アドレスが必要です。
- クラウドサービスの場合は、両方のデバイスを同じリージョンに登録する必要があります。そうしないと、どちらのデバイスも登録できなくなります。複数のクラウドサービスの登録を組み合わせることはできません。
- ハイ アベイラビリティを設定する前に、保留中の変更を展開する必要があります。

HA のライセンス要件

高可用性を設定する前に、装置が同じ状態（両方とも **Essentials** ライセンスに登録されているか両方とも評価モードになっている）である必要があります。デバイスが登録されている場合は、それらを異なる **Cisco Smart Software Manager** アカウントに登録できますが、それらのアカウントは、エクスポート制御機能設定が同じ状態（両方有効または両方無効）である必要があります。ただし、装置ごとに異なるオプションライセンスを有効にすることは可能です。両方のユニットに登録する場合は、デバイスに対して同じシスコ クラウドサービスのリージョンを選択する必要があります。

デバイスが登録されている場合は、スマートライセンスまたはパーマネントライセンス予約（PLR）のいずれかと同じモードを使用する必要があります。

運用時には、高可用性ペアの装置に同じライセンスが必要です。アクティブ装置で行ったライセンスの変更は、展開時にスタンバイ装置で繰り返されます。

高可用性設定には2つのスマートライセンス権限付与（ペアの各デバイスに1つずつ）が必要です。各デバイスに適用するためにアカウントに十分なライセンスがあることを確認する必要があります。ライセンスが不足している場合は、一方のデバイスが準拠状態でも、もう一方のデバイスが非準拠になる可能性があります。

たとえば、アクティブデバイスに **Essentials** ライセンスと **IPS** が割り当てられており、スタンバイデバイスに **Essentials** ライセンスのみが割り当てられている場合、スタンバイ装置は **Cisco Smart Software Manager** と通信してアカウントから利用可能な **IPS** を取得します。スマートラ

イセンスアカウントに購入済みの十分な権限付与が含まれていない場合は、正しい数のライセンスが購入されるまで、アカウントがコンプライアンス適用外（そのため、アクティブデバイスにコンプライアンスが適用されていてもスタンバイデバイスはコンプライアンス適用外）になります。



- (注) 輸出規制対象の機能の設定が異なるアカウントにデバイスを登録した場合、または1つの装置が登録済みで、もう1つが評価モードにある HA ペアを作成しようとした場合、HA の参加が失敗する可能性があります。輸出規制機能に関する設定が不整合な状態で IPsec 暗号化鍵を設定すると、HA を有効化した後に両方のデバイスがアクティブになります。これはサポートされているネットワークセグメント上のルーティングに影響を与え、回復させるにはセカンダリユニットで HA を手動で中断する必要があります。

高可用性のガイドライン

モデルのサポート

- Firepower 9300 : Firepower 9300 で HA を設定することができます。ただし、同じ Firepower 9300 シャーシで別の論理デバイス間の HA を設定することはできません。
- Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220 :
 - 高可用性を使用する場合は、スイッチポート機能を使用しないでください。スイッチポートはハードウェアで動作するため、アクティブユニットとスタンバイユニットの両方でトラフィックを通過させ続けます。高可用性は、トラフィックがスタンバイユニットを通過するのを防ぐように設計されていますが、この機能はスイッチポートには拡張されていません。通常の 高可用性 のネットワーク設定では、両方のユニットのアクティブなスイッチポートがネットワークループにつながります。スイッチング機能には外部スイッチを使用することをお勧めします。VLAN インターフェイスはフェールオーバーによってモニタできますが、スイッチポートはモニタできません。理論的には、1つのスイッチポートを VLAN に配置して、高可用性を正常に使用することができますが、代わりに物理ファイアウォールインターフェイスを使用する設定の方が簡単です。
 - ファイアウォール インターフェイスはフェールオーバー リンクとしてのみ使用できます。
 - 高可用性ペアのシャーシの場合、スタンバイユニットの「アクティブ」LEDはオレンジ色です。
- (Firepower 1000 シリーズ) : デバイスが HA で展開されており、それらのデバイスで何百ものインターフェイスが設定されている場合、フェールオーバー時間の遅延（秒単位）が増加する可能性があります。

- Threat Defense Virtual : HA 設定は、Microsoft Azure クラウドまたは Amazon Web Services (AWS) クラウドの Threat Defense Virtual ではサポートされていません。

その他のガイドライン

- 169.254.0.0/16 と fd00:0:0:::/64 は内部的に使用されるサブネットであり、フェールオーバーリンクやステートリンクに使用することはできません。
- アクティブ装置で展開ジョブを実行すると、アクティブ装置の設定がスタンバイ装置に同期されます。ただし、一部の変更は、変更を展開するまでスタンバイ装置で同期されなくても、保留中の変更に表示されません。次のいずれかを変更すると、変更は非表示になり、スタンバイ装置で設定する前に展開ジョブを実行する必要があります。変更をすぐに適用する必要がある場合は、保留中の変更に表示されている他の変更を行う必要があります。非表示となる変更には、ルール、ジオデータベース、セキュリティインテリジェンスまたは VDB 更新のスケジュール、バックアップのスケジュール、NTP、管理接続用 HTTP プロキシ、ライセンス権限付与、クラウドサービスオプション、URL フィルタリングオプションの編集が含まれます。
- プライマリ装置とセカンダリ装置の両方でバックアップを実行する必要があります。バックアップを復元するには、まず HA を解除する必要があります。両方のユニットで同じバックアップを復元しないでください（両方のユニットがアクティブになってしまうため）。代わりに、まず、アクティブする装置でバックアップを復元し、その後、別のユニットで同等のバックアップを復元してください。
- さまざまなアイデンティティソースの[テスト (Test)] ボタンは、アクティブ装置でのみ機能します。スタンバイ デバイスのアイデンティティ ソース接続をテストする必要がある場合は、まず、モードを切り替えてスタンバイ ピアをアクティブ ピアにする必要があります。
- 高可用性設定を作成または解除すると、設定の変更が展開されたときに両方のデバイスで Snort 検査プロセスが再開されます。これにより、プロセスが完全に再開されるまでに通過トラフィックの中断が発生する可能性があります。
- 高可用性の初期設定時に、セカンダリ上のセキュリティインテリジェンスおよび地理位置情報データベースのバージョンがプライマリ上のバージョンと異なる場合、データベースを更新するジョブはセカンダリ装置でスケジュールされます。これらのジョブは、次の展開時にアクティブ装置から実行されます。HA 結合に失敗した場合でも、これらのジョブはそのまま残り、次の展開時に実行されます。
- アクティブ装置がスタンバイ装置にフェールオーバーするときに、スパニングツリープロトコル (STP) を実行している接続済みスイッチポートは、トポロジ変更を検出すると 30 ～ 50 秒間ブロッキングステートに移行できます。ポートがブロッキングステートである間のトラフィックの損失を回避するために、スイッチで STP PortFast 機能を有効にすることができます。

interface interface_id spanning-tree portfast

この回避策は、ルーテッドモードインターフェイスとブリッジグループインターフェイスの両方に接続されたスイッチに適用されます。PortFast 機能を設定すると、リンクアッ

ブと同時にポートが STP フォワーディング モードに遷移します。ポートは STP に参加し続けます。したがって、ポートがループの一部になる場合、最終的には STP ブロッキング モードに遷移します。

- 高可用性ペアに接続されているスイッチでポート セキュリティを設定すると、フェールオーバー イベントが発生したときに通信上の問題が発生する可能性があります。この問題は、あるセキュア ポートで設定または学習されたセキュア MAC アドレスが別のセキュア ポートに移動するときに、スイッチのポートセキュリティ機能によって違反フラグが付けられるために発生します。
- アクティブ/スタンバイ 高可用性と VPN IPsec トンネルの場合、VPN トンネル経由で SNMP を使用してアクティブ装置とスタンバイ装置の両方をモニタすることはできません。スタンバイ装置にはアクティブ VPN トンネルがなく、ネットワーク管理システム (NMS) 宛てのトラフィックはドロップされます。代わりに、SNMPv3 を暗号化とともに使用して IPsec トンネルを不要にすることができます。

高可用性の構成

ハイ アベイラビリティのセットアップを使用して、デバイスで障害が発生している場合でもネットワーク接続を確保します。アクティブ/スタンバイ ハイ アベイラビリティを使用して、2 台のデバイスがリンクされます。そのため、アクティブ デバイスが故障した場合、スタンバイ デバイスが引き継ぎ、ユーザは接続の問題をほとんど感じません。

次の手順で、アクティブ/スタンバイ ハイ アベイラビリティ (HA) ペアをセットアップするエンドツーエンドプロセスについて説明します。

手順

-
- ステップ 1 [2 台の装置でのハイ アベイラビリティの準備 \(266 ページ\)](#)。
 - ステップ 2 [ハイ アベイラビリティ用のプライマリ装置の設定 \(268 ページ\)](#)。
 - ステップ 3 [ハイ アベイラビリティ用のセカンダリ装置の設定 \(271 ページ\)](#)。
 - ステップ 4 [ヘルス モニタリングのフェールオーバー基準の設定 \(273 ページ\)](#)。

基準には、ピアモニタリングとインターフェイスモニタリングが含まれます。すべてのフェールオーバー基準にはデフォルト設定がありますが、デフォルト設定を調べて、それらがネットワークで機能していることを確認する必要があります。

- [ピア装置のヘルス モニタリング フェールオーバー基準の設定 \(273 ページ\)](#)。
- [インターフェイスのヘルス モニタリング フェールオーバー基準の設定 \(275 ページ\)](#)。

インターフェイス テストの詳細については、[システムがインターフェイス ヘルス をテストする方法 \(277 ページ\)](#) を参照してください。

- ステップ 5 (任意。ただし推奨) [スタンバイ IP および MAC アドレスの設定 \(278 ページ\)](#)。

ステップ 6 (オプション) [ハイ アベイラビリティ設定の確認 \(280 ページ\)](#)。

2 台の装置でのハイ アベイラビリティの準備

高可用性を正常に設定するには、多くのことを事前に正しく準備する必要があります。

手順

ステップ 1 デバイスが [HA のハードウェア要件 \(261 ページ\)](#) に説明されている要件を満たしていることを確認します。

ステップ 2 単一のフェールオーバー リンクを使用するのか、別のフェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンクを使用するのかを決め、使用するポートを特定します。

各リンクのそれぞれのデバイスで同じポート番号を使用する必要があります。たとえば、フェールオーバー リンクの場合は両方のデバイスで GigabitEthernet 1/3 を使用します。使用する内容を把握しておくことで、誤ってその他の目的で使うことがなくなります。詳細については、[フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンク \(254 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 デバイスをインストールしてネットワークに接続し、各デバイスで初期セットアップウィザードを完了します。

- a) [フェールオーバーの中断の回避とデータ リンク \(256 ページ\)](#) で推奨のネットワーク設計を確認します。
- b) [インターフェイスの接続 \(13 ページ\)](#) の説明に従い、少なくとも外部インターフェイスだけは接続します。

その他のインターフェイスも接続できますが、特定のサブネットへの接続には各デバイスで同じポートを使用する必要があります。各デバイスでは同じ設定が共有されるため、デバイスは同じ方法でネットワークに接続する必要があります。

(注)

セットアップ ウィザードでは、管理インターフェイスと内部インターフェイスの IP アドレスを変更できません。そのため、プライマリ デバイス上のそれらのインターフェイスのいずれかをネットワークに接続する場合、セカンダリ デバイスのインターフェイスは接続しないでください。接続すると IP アドレスの競合が発生します。ワークステーションをそれらのインターフェイスのいずれかに直接接続し、DHCP を介してアドレスを取得できるため、Device Manager に接続して、デバイスを設定できます。

- c) 各デバイスで初期セットアップウィザードを完了します。外部インターフェイスの静的 IP アドレスを指定していることを確認します。さらに、同じ NTP サーバを設定します。詳細については、[セットアップウィザードを使用した初期設定の完了 \(25 ページ\)](#) を参照してください。

各装置で同じライセンスと Cisco Success Network オプションを選択します。たとえば、それぞれに評価モードを選択したり、デバイスを登録したりします。

- d) セカンダリ デバイスで、**[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [管理インターフェイス (Management Interface)]** を選択して一意の IP アドレスを設定し、必要に応じてゲートウェイを変更します。また、ニーズに合わせて DHCP サーバの設定を無効化または変更します。
- e) セカンダリ デバイスで、**[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interface)]** を選択し、内部インターフェイスを編集します。IP アドレスを削除するか、または変更します。また、同じネットワーク上に 2 つの DHCP サーバは定義できないため、インターフェイスに定義されている DHCP サーバを削除します。
- f) 設定をセカンダリ デバイスに展開します。
- g) ネットワーク トポロジに基づいて必要な場合は、プライマリ デバイスにログインして、管理アドレス、ゲートウェイ、DHCP サーバの設定、および内部インターフェイスの IP アドレスを変更します。変更を加えた場合は、設定を展開します。
- h) 内部インターフェイス、または管理インターフェイス（別の管理ネットワークを使用する場合）を接続していない場合は、ここでそれらのインターフェイスをスイッチに接続できます。

ステップ 4 デバイスのソフトウェアバージョンが完全に同じである（つまり、同じメジャー（1 番）、マイナー（2 番）、メンテナンス（3 番）の番号が付いている）ことを確認します。バージョンは、Device Manager の **[デバイス (Devices)]** ページで確認できます。また、CLI で **show version** コマンドを使用して確認することもできます。

同じソフトウェア バージョンが実行されていない場合は、Cisco.com から推奨のソフトウェア バージョンを取得して、各デバイスにインストールします。詳細については、[のアップグレードThreat Defense](#)（990 ページ）を参照してください。

- ステップ 5** 接続して、フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンクを設定します。
- a) [（フェールオーバーの中断の回避とデータリンク](#)（256 ページ）で選択した）推奨のネットワーク設計に従い、適切に各デバイスのフェールオーバー インターフェイスをスイッチに接続するか、デバイス間で直接接続します。
 - b) 別のステートリンクを使用している場合は、各デバイスのステートフルフェールオーバー インターフェイスも適切に接続します。
 - c) 次に各デバイスにログインして、**[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interface)]** にアクセスします。各インターフェイスを編集し、インターフェイス名や IP アドレスが設定されていないことを確認します。

名前付きのインターフェイスが設定されている場合、その名前を削除する前に、セキュリティゾーンからそれらのインターフェイスを削除して、その他の設定を削除する必要があります。名前の削除に失敗した場合は、エラーメッセージを調べて、加える必要があるその他の変更を確認します。

- ステップ 6** プライマリ デバイスで、残りのデータ インターフェイスを接続してデバイスを設定します。
- a) **[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interface)]** を選択し、トラフィックの通過に使用される各インターフェイスを編集し、プライマリ静的 IP アドレスを設定します。

- b) セキュリティゾーンにインターフェイスを追加し、接続されたネットワーク上のトラフィックの処理に必要な基本的なポリシーを設定します。設定例については、[ベストプラクティス：Threat Defense の使用例（51 ページ）](#) にリストされているトピックを参照してください。
- c) 設定を展開します。

ステップ 7 [HA のソフトウェア要件（261 ページ）](#) で説明されているすべての要件を満たしていることを確認します。

ステップ 8 一貫性のあるライセンス（登録済みまたは評価モード）を保有していることを確認します。詳細については、[HA のライセンス要件（262 ページ）](#) を参照してください。

ステップ 9 セカンダリ デバイスで、残りのデータ インターフェイスをプライマリ デバイスの同等のインターフェイスと同じネットワークに接続します。インターフェイスは設定しないでください。

ステップ 10 各デバイスで **[デバイス（Device）]>[システム設定（System Settings）]>[クラウドサービス（Cloud Services）]** を選択し、設定が同じであることを確認します。

これで、プライマリ デバイスで高可用性を設定する準備が整いました。

ハイ アベイラビリティ用のプライマリ装置の設定

アクティブ/スタンバイ ハイ アベイラビリティペアをセットアップするには、まず、プライマリ デバイスを設定する必要があります。プライマリ デバイスは、通常の状況下でアクティブにする予定の装置です。セカンダリ デバイスは、プライマリ ユニットが使用できなくなるまでスタンバイモードのままです。

プライマリにするデバイスを選択し、そのデバイス上の **Device Manager** にログインして次の手順に従います。



(注) いったんハイアベイラビリティペアを確立すると、この手順で説明する設定を編集するにはペアを破棄する必要があります。

始める前に

フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンク用に設定するインターフェイスに名前が付いていないことを確認します。名前が付いている場合は、セキュリティゾーンオブジェクトを含め、それらを使用するポリシーからインターフェイスを削除してインターフェイスを編集し、名前を削除する必要があります。また、インターフェイスはパッシブモードではなくルーテッドモードにする必要もあります。これらのインターフェイスは、HA 設定での使用専用にする必要があります。他のプロセスに使用することはできません。

保留中の変更がある場合は、それらを展開してから HA を設定する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側で、[ハイアベイラビリティ (High Availability)] グループの横にある [設定 (Configure)] をクリックします。

デバイスで初めて HA を設定する場合、グループは次のように表示されます。



ステップ 3 [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページで、[プライマリデバイス (Primary Device)] ボックスをクリックします。

セカンダリ デバイスが既に設定されていて、その設定をクリップボードにコピーする場合は、[クリップボードから貼り付け (Paste from Clipboard)] ボタンをクリックすると設定を貼り付けることができます。これにより、適切な値でフィールドが更新され、後で確認できます。

ステップ 4 [フェールオーバーリンク (Failover Link)] プロパティを設定します。

フェールオーバー ペアの 2 台の装置は、フェールオーバー リンク経由で常に通信して、各装置の動作ステータスを確認し、設定の変更を同期します。詳細については、[フェールオーバーリンク \(254 ページ\)](#) を参照してください。

- [物理インターフェイス (Physical Interface)] フェールオーバー リンクとして使用するセカンダリ デバイスに接続するインターフェイスを選択します。名前が付いていないインターフェイスにする必要があります。

フェールオーバーまたはステートリンクとして EtherChannel インターフェイスを使用している場合、ハイ アベイラビリティを確立する前に、両方のデバイスで同じ ID とメンバーインターフェイスを備えた同じ EtherChannel が存在していることを確認する必要があります。EtherChannel の不一致がある場合は、HA を無効にして、セカンダリユニットの設定を修正する必要があります。順序が不正なパケットを防止するために、EtherChannel 内の 1 つのインターフェイスのみが使用されます。そのインターフェイスで障害が発生した場合は、EtherChannel 内の次のリンクが使用されます。フェールオーバーリンクとして使用中の EtherChannel の設定は変更できません。

- [タイプ (Type)] : インターフェイスに IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを使用するかどうか選択します。設定できるアドレスタイプは 1 つのみです。
- [プライマリ IP (Primary IP)] : このデバイス上のインターフェイスの IP アドレスを入力します。(192.168.10.1 など)。IPv6 アドレスの場合、標準表記にプレフィックス長を含める必要があります (2001:a0a:b00::a0a:b70/64 など)。
- [セカンダリ IP (Secondary IP)] : セカンダリ デバイス上のインターフェイスについて、リンクのもう一方の端に設定する必要がある IP アドレスを入力します。このアドレスはプライマリ アドレスと同じサブネット上に存在し、プライマリ アドレスとは異なるアドレスである必要があります (192.168.10.2 または 2001:a0a:b00::a0a:b71/64 など)。

- [ネットマスク (Netmask)] (IPv4 のみ) : プライマリ/セカンダリ IP アドレスのサブネット マスクを入力します。

ステップ 5 [ステートフルフェールオーバーリンク (Stateful Failover Link)] プロパティを設定します。

システムは、ステート リンクを使用して接続状態の情報をスタンバイ デバイスに渡します。この情報は、フェールオーバーが発生したときにスタンバイ装置が既存の接続を維持するために役立ちます。フェールオーバー リンクと同じリンクを使用するか、別のリンクを設定することができます。

- [フェールオーバーリンクと同じインターフェイスを使用する (Use the Same Interface as the Failover Link)] : フェールオーバー通信およびステートフルフェールオーバー通信に単一のリンクを使用する場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択する場合は、次の手順に進みます。
- [物理インターフェイス (Physical Interface)] : 別のステートフル フェールオーバー リンクを使用する場合は、ステートフル フェールオーバー リンクとして使用するセカンダリ デバイスに接続したインターフェイスを選択します。名前が付いていないインターフェイスにする必要があります。次のプロパティを設定します。
 - [タイプ (Type)] : インターフェイスに IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを使用するかどうか選択します。設定できるアドレス タイプは 1 つのみです。
 - [プライマリ IP (Primary IP)] : このデバイス上のインターフェイスの IP アドレスを入力します。アドレスは、フェールオーバー リンクに使用されるものとは別のサブ ネット上にある必要があります (192.168.11.1 など)。IPv6 アドレスの場合、標準表記にプレフィックス長を含める必要があります (2001:a0a:b00:a::a0a:b70/64 など)。
 - [セカンダリ IP (Secondary IP)] : セカンダリ デバイス上のインターフェイスについて、リンクのもう一方の端に設定する必要がある IP アドレスを入力します。このアドレスはプライマリ アドレスと同じサブネット上に存在し、プライマリ アドレスとは異なるアドレスである必要があります (192.168.11.2 または 2001:a0a:b00:a::a0a:b71/64 など)。
 - [ネットマスク (Netmask)] (IPv4 のみ) : プライマリ/セカンダリ IP アドレスのサブ ネット マスクを入力します。

ステップ 6 (オプション) ペアの 2 台の装置間での通信を暗号化する場合は、[IPsec暗号キー (IPsec Encryption Key)] 文字列を入力します。

セカンダリ ノードでまったく同じキーを設定する必要があるため、入力した文字列をメモしてください。

キーを入力しなければ、フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンクでのすべての通信はプレーンテキストで実行されます。インターフェイス間をケーブルで直接接続していない場合、これによってセキュリティの問題が発生することがあります。

(注)

評価モードで HA フェールオーバー暗号化を設定すると、システムは暗号化に DES を使用します。エクスポート 準拠アカウントを使用してデバイスを登録すると、デバイスはリブート後

に AES を使用します。したがって、アップグレードのインストール後など、何らかの理由でシステムがリブートすると、ピアは通信できなくなり、両方のユニットがアクティブユニットになります。デバイスを登録するまで、暗号化を設定しないことを推奨します。評価モードで暗号化を設定する場合は、デバイスを登録する前に暗号化を削除することを推奨します。

ステップ 7 [HAの有効化 (Activate HA)] をクリックします。

システムは、すぐにデバイスに設定を展開します。展開ジョブを開始する必要はありません。設定が保存され、展開が進行中であるというメッセージが表示されない場合は、ページ上部にスクロールして、エラー メッセージを確認します。

設定はクリップボードにもコピーされます。コピーを使用すると、簡単にセカンダリ装置を設定できます。セキュリティを強化するため、暗号キーはクリップボードのコピーには含まれません。

設定が完了すると、実行する必要がある次の手順を説明するメッセージが表示されます。情報を確認したら、[了解 (Got It)] をクリックします。

この時点で、[ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページが表示され、デバイスステータスが [ネゴシエーション中 (Negotiating)] になっている必要があります。ステータスはピアの設定前でも [アクティブ (Active)] に変わります。設定するまで [故障 (Failed)] と表示されます。

PRIMARY DEVICE

Current Device Mode: **Active**  Peer: **Failed** 

これで、セカンダリ装置を設定できるようになりました。[ハイアベイラビリティ用のセカンダリ装置の設定 \(271 ページ\)](#) を参照してください。

(注)

選択したインターフェイスは直接設定されません。ただし、CLI に **show interface** と入力すると、インターフェイスが特定の IP アドレスを使用していることが表示されます。インターフェイスには「failover-link」という名前が付いています。別のステート リンクを設定する場合は「stateful-failover-link」になります。

ハイ アベイラビリティ用のセカンダリ装置の設定

プライマリデバイスをアクティブ/スタンバイ ハイアベイラビリティ向けに設定した後、セカンダリデバイスを設定する必要があります。そのデバイス上の Device Manager にログインして、次の手順に従います。



- (注) まだそのように設定していない場合は、プライマリデバイスからクリップボードにハイアベイラビリティ設定をコピーします。手動でデータを入力するより、コピーと貼り付けを使用してセカンダリ デバイスを設定するほうがはるかに簡単です。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側で、[ハイアベイラビリティ (High Availability)] グループの横にある [設定 (Configure)] をクリックします。

デバイスで初めて HA を設定する場合、グループは次のように表示されます。



ステップ 3 [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページで、[セカンダリデバイス (Secondary Device)] ボックスをクリックします。

ステップ 4 次のいずれかを実行します。

- [簡単な方法 (Easy method)] : [クリップボードから貼り付け (Paste from Clipboard)] ボタンをクリックして設定に貼り付け、[OK] をクリックします。これにより、適切な値でフィールドが更新され、後で確認できます。
- [手動の方法 (Manual method)] : フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンクを直接設定します。プライマリ デバイスに入力したのと同じ設定をセカンダリ デバイスに入力します。

ステップ 5 プライマリ デバイスで [IPSec暗号キー (IPSec Encryption Key)] を設定した場合、まったく同じキーをセカンダリ デバイスに入力します。

ステップ 6 [HAの有効化 (Activate HA)] をクリックします。

システムは、すぐにデバイスに設定を展開します。展開ジョブを開始する必要はありません。設定が保存され、展開が進行中であるというメッセージが表示されない場合は、ページ上部にスクロールして、エラー メッセージを確認します。

設定が完了すると、HA が設定されたことを示すメッセージが表示されます。[了解 (Got It)] をクリックして、メッセージを閉じます。

この時点で、[ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページが表示され、デバイスステータスにこれがセカンダリ デバイスであることが示されている必要があります。プライマリ デバイスとの結合が成功した場合、デバイスはプライマリと同期して、最終的にはスタンバイモードになります。ピアがアクティブになります。

SECONDARY DEVICE
Current Device Mode: **Standby**  Peer Device: **Active**

(注)

選択したインターフェイスは直接設定されません。ただし、CLI に **show interface** と入力すると、インターフェイスが特定の IP アドレスを使用していることが表示されます。インターフェ

イスには「failover-link」という名前が付いています。別のステート リンクを設定する場合は「stateful-failover-link」になります。

ヘルス モニタリングのフェールオーバー基準の設定

高可用性設定の装置は、全体的な健全性とインターフェイスの健全性をモニタします。

フェールオーバー基準により、ピアに障害が発生したかどうかを判断するヘルス モニタリング メトリックが定義されます。アクティブピアが基準に違反した装置である場合、スタンバイ装置へのフェールオーバーがトリガーされます。スタンバイピアが基準に違反した装置である場合、スタンバイピアは障害が発生した装置としてマークされ、フェールオーバーに使用できなくなります。

アクティブ デバイスでのみフェールオーバー基準を設定できます。

次の表に、フェールオーバー トリガー イベントと、関連する障害検出のタイミングを示します。

表 5: フェールオーバー基準に基づくフェールオーバー時間

フェールオーバー トリガー イベント	最小	デフォルト	最大
アクティブ装置で電源断が生じる、または通常の動作が停止する。	800 ミリ秒	15 秒	45 秒
アクティブ装置のインターフェイスの物理リンクがダウンする。	500 ミリ秒	5 秒	15 秒
アクティブ装置のインターフェイスは実行されているが、接続の問題によりインターフェイス テストを行っている。	5 秒	25 秒	75 秒

ここでは、フェールオーバー ヘルス モニタリング基準をカスタマイズする方法と、システムがインターフェイスをテストする方法について説明します。

ピア装置のヘルス モニタリング フェールオーバー基準の設定

ハイ アベイラビリティ設定の各ピアは、hello メッセージを使用してフェールオーバー リンクをモニタすることによって相手装置の状態を判断します。装置がフェールオーバーリンクで3回連続して hello メッセージを受信しない場合、装置はフェールオーバー リンクを含む各データインターフェイスにLANTESTメッセージを送信し、ピアが応答するかどうか検証します。デバイスが行うアクションは、相手装置からの応答によって異なります。

- デバイスがフェールオーバー リンクで応答を受信した場合は、フェールオーバーを行いません。

- デバイスがフェールオーバー リンクで応答を受信せず、データ インターフェイスで応答を受信した場合、装置のフェールオーバーは行われません。フェールオーバー リンクが故障とマークされます。フェールオーバー リンクがダウンしている間、装置はスタンバイ装置にフェールオーバーできないため、できるだけ早くフェールオーバー リンクを復元する必要があります。
- デバイスがどのインターフェイスでも応答を受信しなかった場合、スタンバイ装置がアクティブ モードに切り替わり、相手装置を故障に分類します。

hello メッセージのポーリング時間および保留時間を設定できます。

手順

ステップ 1 アクティブ デバイスで、[デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側に表示される [ハイアベイラビリティ (High Availability)] リンクをクリックします。

フェールオーバー条件は、[ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページの右側の列に表示されます。

ステップ 3 [ピアのタイミング設定 (Peer Timing Configuration)] を定義します。

これらの設定では、アクティブ デバイスがスタンバイ デバイスにフェールオーバーできる早さを決定します。ポーリング時間が短いほど、デバイスは短時間で障害を検出し、フェールオーバーをトリガーできます。ただし短時間での検出は、ネットワークが一時的に輻輳した場合に不要な切り替えが行われる原因となります。ほとんどの場合、デフォルト設定が適切です。

1 回のポーリング期間中に装置がフェールオーバー インターフェイスで hello パケットを検出できなかった場合、残りのインターフェイスで追加テストが実行されます。それでも保持時間内にピア装置から応答がない場合、その装置は故障していると考えられ、故障した装置がアクティブ装置の場合は、スタンバイ装置がアクティブ装置を引き継ぎます。

- [ポーリング時間 (Poll Time)] : hello メッセージ間の間隔。1 ～ 15 秒または 200 ～ 999 ミリ秒を入力します。デフォルト値は 1 秒です。
- [保留時間 (Hold Time)] : 装置が、フェールオーバー リンクで hello メッセージを受信する間隔。この時間を経過すると、ピア装置で障害が発生したと考えられます。保留時間は、ポーリング時間の 3 倍以上にする必要があります。1 ～ 45 秒または 800 ～ 999 ミリ秒を入力します。デフォルトは 15 秒です。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

インターフェイスのヘルス モニタリング フェールオーバー基準の設定

デバイス モデルに応じて、最大 211 のインターフェイスをモニタできます。重要なインターフェイスをモニタする必要があります。たとえば、重要なネットワーク間のスループットを保証するインターフェイスなどです。スタンバイ IP アドレスを設定する場合、さらにインターフェイスを常にアップ状態にする必要がある場合にのみインターフェイスをモニタします。

2回のポーリング期間中に装置がモニタ対象のインターフェイス上でhelloメッセージを受信しない場合は、インターフェイス テストを実行します。1つのインターフェイスに対するインターフェイステストがすべて失敗したが、相手装置のこのインターフェイスが正常にトラフィックを渡し続けている場合、そのインターフェイスは故障していると思われ、故障したインターフェイスがしきい値を超えている場合は、フェールオーバーが行われます。相手装置のインターフェイスもすべてのネットワークテストに失敗した場合、両方のインターフェイスが「Unknown」状態になり、フェールオーバー制限に向けてのカウントは行いません。

インターフェイスは、何らかのトラフィックを受信すると、再度動作状態になります。故障したデバイスは、インターフェイス障害しきい値が満たされなくなった場合、スタンバイモードに戻ります。

show monitor-interface コマンドを使用して、CLI または CLI コンソールからインターフェイスの HA ステータスをモニタできます。詳細については、[HA モニター対象インターフェイスのステータスのモニタリング](#) (296 ページ) を参照してください。



- (注) インターフェイスの1つがダウンした場合、フェールオーバーの観点からは、これも装置の問題と見なされます。インターフェイスがダウンしていることを装置が検出すると、インターフェイスの保留時間を待たずにすぐにフェールオーバーが発生します (1 インターフェイスのデフォルトしきい値を維持している場合)。インターフェイスの保留時間が有効であるのは、装置が自身のステータスを OK と見なしているときだけです (ピアから hello パケットを受信していなくても)。

始める前に

デフォルトでは、すべての名前付き物理インターフェイスが HA モニタリングに選択されています。したがって、重要ではない物理インターフェイスのモニタリングを無効にする必要があります。サブインターフェイスまたはブリッジグループでは、手動でモニタリングを有効にする必要があります。

インターフェイス モニタリングを完全に無効にしてインターフェイスの故障によるフェールオーバーを防止するには、単純に、HA モニタリングが有効になっているインターフェイスがないことを確認します。

手順

- ステップ 1** アクティブ デバイスで、[デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側に表示される [ハイアベイラビリティ (High Availability)] リンクをクリックします。

フェールオーバー条件は、[ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページの右側の列に表示されます。

ステップ 3 [インターフェイス障害しきい値 (Interface Failure Threshold)] を定義します。

故障したインターフェイスの数がしきい値を満たすと、装置は自身を故障としてマークします。装置がアクティブ装置の場合、スタンバイ装置にフェールオーバーします。装置がスタンバイ装置の場合、自身を故障としてマークすることによって、アクティブ装置はその装置をフェールオーバーに利用できると見なさなくなります。

この条件を設定する場合、モニタするインターフェイスの数を考慮します。たとえば、2 つのインターフェイスでのみモニタリングを有効にすると、10 個のインターフェイスのしきい値に到達することはありません。インターフェイスのプロパティを編集するときに [詳細オプション (Advanced Options)] タブの [HA モニタリングの有効化 (Enable for HA Monitoring)] オプションを選択することで、インターフェイスのモニタリングを設定します。

デフォルトでは、1 つのモニタ対象インターフェイスが故障すると、装置は自身を故障としてマークします。

次の [フェールオーバー条件 (Failover Criteria)] オプションのいずれかを選択して、インターフェイス障害のしきい値を設定できます。

- [故障したインターフェイスの数を超える (Number of failed interfaces exceeds)] : インターフェイスの生の数字を入力します。デフォルトは 1 です。実際には、最大値はデバイスモデルに依存して変わりますが、211 以上を入力することはできません。この条件を使用すると、デバイスサポートよりも大きい数を入力すると展開エラーが発生します。より小さい数を試すか、代わりにパーセンテージを使用します。
- [故障インターフェイスのパーセンテージを超える (Percentage of failed interfaces exceeds)] : 1 ~ 100 の数値を入力します。たとえば、50% と入力して 10 個のインターフェイスをモニタする場合、5 個のインターフェイスが故障するとデバイスは自身を故障としてマークします。

ステップ 4 [インターフェイスタイミंग設定 (Interface Timing Configuration)] を定義します。

これらの設定では、インターフェイスで障害が発生したかどうかをアクティブデバイスが判断できる早さを決定します。ポーリング時間が短いほど、デバイスは短時間でインターフェイスの障害を検出できます。ただし、検出が早いほど、実際には健全な状態でもビジー状態のインターフェイスが障害発生とマークされ、必要以上に頻繁にフェールオーバーが生じる可能性があります。ほとんどの場合、デフォルト設定が適切です。

インターフェイスリンクがダウンしていると、インターフェイスのテストは実行されません。また、故障したインターフェイスの数が設定されたインターフェイスフェールオーバーしきい値に合致するかまたはそれを超過すると、スタンバイ装置は 1 回のインターフェイスポーリング期間でアクティブになります。

- [ポーリング時間 (Poll Time)] : hello パケットがデータインターフェイスで送信される頻度。1 ~ 15 秒または 500 ~ 999 ミリ秒を入力します。デフォルトは 5 秒です。

- [保留時間 (Hold Time)] : 保留時間によって、hello パケットを受信できなかったときからインターフェイスが故障とマークされるまでの時間が決まります。5 ～ 75 秒を入力します。ポーリング時間の 5 倍に満たない保持時間は入力できません。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 6 モニタする各インターフェイスの HA モニタリングを有効にします。

- a) [デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] を選択します。

インターフェイスをモニタしている場合、[HA のモニタ] 列は [有効] になります。

- b) モニタリングステータスを変更するインターフェイスの編集アイコン (🔧) をクリックします。

フェールオーバー インターフェイスまたはステートフル フェールオーバー インターフェイスは編集できません。インターフェイス モニタリングはそれらに適用されません。

- c) [詳細オプション (Advanced Options)] タブをクリックします。

- d) 必要に応じて、[HA モニタリングの有効化 (Enable for HA Monitoring)] チェックボックスを選択または選択解除します。

- e) [OK] をクリックします。

ステップ 7 (任意。ただし推奨) モニタ対象インターフェイスのスタンバイ IP アドレスおよび MAC アドレスを設定します。「[スタンバイ IP および MAC アドレスの設定 \(278 ページ\)](#)」を参照してください。

システムがインターフェイスヘルスをテストする方法

システムは、ユーザが高可用性ヘルスをモニタしているインターフェイスを継続的にテストします。インターフェイスのテストに使用されるアドレスは、ユーザが設定するアドレスタイプに基づきます。

- インターフェイスに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方が設定されている場合、デバイスは IPv4 アドレスを使用してヘルス モニタリングを実行します。
- インターフェイスに IPv6 アドレスだけが設定されている場合、デバイスは ARP ではなく IPv6 ネイバー探索を使用してヘルス モニタリングテストを実行します。ブロードキャスト ping テストの場合、デバイスは IPv6 全ノードアドレス (FE02::1) を使用します。

システムは、各装置で次のテストを実行します。

1. リンクアップ/ダウンテスト：インターフェイスステータスのテストです。リンクアップ/ダウンテストでインターフェイスがダウンしていることが示された場合、装置はそれに障害が発生していると見なします。ステータスが Up (稼働中) の場合、装置はネットワーク動作のテストを実行します。
2. ネットワーク動作のテスト：ネットワークの受信動作のテストです。このテストでは、LANTEST メッセージを使用して、障害が発生している装置を判別するためのネットワークトラフィックが生成されます。テストの開始時に、各装置はインターフェイスの受信パ

ケットカウントをリセットします。テスト中（最大5秒間）に装置がパケットを受信するとすぐに、インターフェイスは正常に動作していると見なされます。いずれか一方の装置だけがトラフィックを受信している場合は、トラフィックを受信しなかった装置が故障していると見なされます。いずれの装置もトラフィックを受信しなかった場合、装置はARPテストを開始します。

3. ARPテスト：取得したエントリの最後の2つの装置ARPキャッシュの読み取り。装置は、ネットワークトラフィックを発生させるために、1回に1つずつ、これらのデバイスにARP要求を送信します。各要求後、装置は最大5秒間受信したトラフィックをすべてカウントします。トラフィックが受信されれば、インターフェイスは正常に動作していると見なされます。トラフィックが受信されなければ、ARP要求が次のデバイスに送信されます。リストの最後まで来てもトラフィックが受信されない場合は、pingテストが実行されます。
4. ブロードキャスト ping テスト：このテストでは、ブロードキャスト ping 要求が送信されます。装置は、最大5秒間、すべての受信パケット数をカウントします。この時間間隔の間にパケットが受信されると、インターフェイスが正常に動作しているものと見なされ、テストは停止します。トラフィックがまったく受信されない場合は、もう一度ARPテストが実行されます。

スタンバイ IP および MAC アドレスの設定

インターフェイスを設定する場合、同じネットワーク上にアクティブ IP アドレスとスタンバイ IP アドレスを指定できます。推奨されてはいますが、スタンバイアドレスは必須ではありません。スタンバイ IP アドレスがなければ、アクティブ装置はネットワークテストを実行してスタンバイ インターフェイスの状態を確認することはできません。できることはリンクステータスの追跡のみです。また、管理目的でそのインターフェイス上のスタンバイ装置に接続することもできません。

1. プライマリ装置がフェールオーバーすると、セカンダリ装置はプライマリ装置のIPアドレスとMACアドレスを引き継ぎ、トラフィックを通過させます。
2. 現在スタンバイになっている装置が、スタンバイのIPアドレスとMACアドレスを引き継ぎます。

ネットワークデバイスは、MACとIPアドレスの組み合わせについて変更を認識しないため、ネットワーク上のどのような場所でもARPエントリが変更されたり、タイムアウトが生じたりすることはありません。

セカンダリ装置がプライマリ装置を検出せずにブートした場合、プライマリ装置のMACアドレスを認識していないため、セカンダリ装置がアクティブ装置になり、自分のMACアドレスを使用します。しかし、プライマリ装置が使用可能になると、セカンダリ装置（アクティブ）はMACアドレスをプライマリ装置のMACアドレスに変更します。これによって、ネットワークトラフィックが中断されることがあります。同様に、新しいハードウェアでプライマリ装置をスワップアウトすると新しいMACアドレスが使用されます。

仮想 MAC アドレスがこの中断を防ぎます。なぜなら、アクティブ MAC アドレスは起動時にセカンダリ装置によって認識され、プライマリ装置のハードウェアが新しくなっても変わらないからです。仮想 MAC アドレスを手動で設定できます。

仮想 MAC アドレスを設定しなかった場合、トラフィック フローを復元するために、接続されたルータの ARP テーブルのクリアが必要になる場合があります。MAC アドレスが変わった場合、Threat Defense デバイスはスタティック NAT アドレスに対して Gratuitous ARP を送信しません。そのため、接続されたルータはこれらのアドレスの MAC アドレス変更を認識できません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] を選択します。

少なくとも、HA をモニタしているインターフェイスのスタンバイ IP アドレスと MAC アドレスを設定する必要があります。インターフェイスをモニタしている場合、[HA のモニタ (Monitor for HA)] 列は [有効 (Enabled)] になります。

ステップ 2 スタンバイ アドレスを設定するインターフェイスの編集アイコン () をクリックします。

フェールオーバー インターフェイスまたはステートフル フェールオーバー インターフェイスは編集できません。ハイ アベイラビリティを設定する場合、これらのインターフェイスの IP アドレスを設定します。

ステップ 3 [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブおよび [IPv6 アドレス (IPv6 Address)] タブでスタンバイ IP アドレスを設定します。

スタンバイ アドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。使用している IP バージョンごとにスタンバイ アドレスを設定します。

ステップ 4 [詳細オプション (Advance Options)] タブをクリックして、MAC アドレスを設定します。

デフォルトでは、システムはインターフェイスのネットワーク インターフェイス カード (NIC) に焼き込まれた MAC アドレスを使用します。したがって、インターフェイスのすべてのサブ インターフェイスは同じ MAC アドレスを使用するため、サブ インターフェイスごとに一意のアドレスを作成する必要がある場合があります。手動設定されたアクティブ/スタンバイ MAC アドレスも、ハイ アベイラビリティを設定する場合に推奨されます。MAC アドレスを定義すると、フェールオーバー時にネットワークの一貫性を維持することができます。

- [MAC アドレス (MAC Address)] : H.H.H 形式の Media Access Control アドレス。H は 16 ビットの 16 進数です。たとえば、MAC アドレス 00-0C-F1-42-4C-DE は 000C.F142.4CDE と入力します。MAC アドレスはマルチキャスト ビットセットを持つことはできません。つまり、左から 2 番目の 16 進数字を奇数にすることはできません。
- [スタンバイ MAC アドレス (Standby MAC Address)] : ハイ アベイラビリティで使用します。アクティブ装置がフェールオーバーし、スタンバイ装置がアクティブになると、新し

いアクティブ装置はアクティブな MAC アドレスの使用を開始して、ネットワークの切断を最小限に抑えます。一方、古いアクティブ装置はスタンバイ アドレスを使用します。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

ハイ アベイラビリティ 設定の確認

高可用性の設定が完了したら、両方のデバイスが「動作中」でアクティブ/スタンバイ モードであることが、デバイスのステータスに示されていることを確認します。

PRIMARY DEVICE
Current Device Mode: **Active**  Peer Device: **Standby**

次の手順を使用して、高可用性の設定が機能していることを確認できます。

手順

ステップ 1 FTP などを使用して、異なるインターフェイス上のホスト間でファイルを送信し、アクティブな装置が予期したとおりにトラフィックを渡しているかどうかをテストします。

設定済みの各インターフェイスに接続されている、少なくとも 1 つのワークステーションからシステムへの接続をテストします。

ステップ 2 次のいずれかを実行して、モードを切り替え、アクティブ装置をスタンバイ装置にします。

- Device Manager で、[デバイス (Device)] > [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページの歯車メニューから [モードの切り替え (Switch Mode)] を選択します。
- アクティブ装置の CLI で、**no failover active** を入力します。

ステップ 3 接続テストを繰り返して、ハイ アベイラビリティ ペア内のその他の装置からも同じ接続を確立できることを確認します。

テストが失敗する場合は、他の装置の同等インターフェイスと同じネットワークにその装置のインターフェイスを接続していることを確認します。

HA ステータスは [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページから確認できます。CLI または装置の CLI コンソールを使用し、**show failover** コマンドを入力して、フェールオーバーステータスを確認することもできます。また、**show interface** コマンドを使用して、失敗した接続テストで使用されたインターフェイスのインターフェイス設定を確認できます。

これらの操作で問題を特定できない場合は、他の手順を実行することができます。[ハイアベイラビリティ \(フェールオーバー\) のトラブルシューティング \(297 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 完了したら、モードを切り替えて、元々アクティブだった装置をアクティブステータスに戻します。

高可用性の管理

高可用性ペアを管理するには、[デバイス概要 (Device Summary)] ページの [高可用性 (High Availability)] リンクをクリックします。



[高可用性 (High Availability)] ページには次のものがあります。

- [ロールおよびモード ステータス (Role and Mode Status)] : 左側のステータス エリアには、デバイスがグループ内のプライマリ デバイスかセカンダリ デバイスかが示されます。モードは、このデバイスがアクティブかスタンバイかや、HA が一時停止されているかデバイスがピアデバイスの参加を待っているかが示されます。また、ピアデバイスのステータス (アクティブ、スタンバイ、一時停止、または障害) も示されます。たとえば、現在ログインしているデバイスがプライマリ デバイスであり、アクティブ デバイスでもある場合、セカンダリ デバイスが正常で、必要に応じてフェールオーバーできる状態であれば、ステータスは次のように表示されます。ピアの間のアイコンをクリックすると、デバイス間の設定同期ステータスに関する情報を取得できます。



- [直近の失敗理由 (Last Failure Reason)] : 高可用性 (HA) の設定が何らかの理由で失敗した場合 (アクティブデバイスが使用不可になり、スタンバイデバイスにフェールオーバーするなど)、直近の失敗の理由がロールとモードのステータスの下に表示されます。このメッセージは、フェールオーバー履歴から取得されます。
- [フェールオーバー履歴 (Failover History)] リンク : このリンクをクリックすると、ペアに含まれるデバイスのステータスの詳細な履歴を確認できます。CLI コンソールが開き、**show failover history details** コマンドが実行されます。
- [展開履歴 (Deployment History)] リンク : このリンクをクリックすると、イベントがフィルタリングされて展開ジョブだけが表示された監査ログに移動します。
- 歯車ボタン  : このボタンをクリックすると、デバイス上でアクションが実行されます。
 - [HA の一時停止 (Suspend HA)]/[HA の再開 (Resume HA)] : HA を一時停止すると、HA 設定を削除しなくても、デバイスが高可用性ペアとして機能しなくなります。その後、デバイスで HA を再開 (つまり再有効化) することができます。詳細については、[ハイ アベイラビリティの中断または再開 \(282 ページ\)](#) を参照してください。

- [HA の解除 (Break HA)] : HA を解除すると、両方のデバイスから高可用性設定が削除され、それらがスタンバイデバイスに戻ります。詳細については、[ハイ アベイラビリティの破棄 \(284 ページ\)](#) を参照してください。
- [モードの切り替え (Switch Mode)] : モードを切り替えることにより、アクションを実行するデバイスに応じて、強制的にアクティブデバイスをスタンバイにしたりスタンバイ デバイスをアクティブにすることができます。詳細については、[アクティブ ピアとスタンバイ ピアの切り替え \(強制フェールオーバー\) \(285 ページ\)](#) を参照してください。
- [高可用性設定 (High Availability Configuration)] : このパネルには、フェールオーバー ペアの設定が表示されます。[クリップボードにコピー (Copy to Clipboard)] ボタンをクリックすると情報をクリップボードにロードできます。そこから、セカンダリ デバイスの設定に貼り付けることができます。情報を記録するために別のファイルにコピーすることもできます。この情報には、IPsec 暗号キーを定義したかどうかは示されません。



(注) HA のインターフェイス設定は、インターフェイスのページ ([デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)]) に反映されません。HA 設定で使用しているインターフェイスは編集できません。

- [フェールオーバー基準 (Failover Criteria)] : このパネルには、「アクティブ装置に障害が発生したためにスタンバイ装置がアクティブ装置になる必要がある」かどうかを評価する際に使用される健全性の基準を決定する設定が含まれます。これらの基準を調整して、ネットワークで必要なフェールオーバーパフォーマンスを実現してください。詳細については、[ヘルスモニタリングのフェールオーバー基準の設定 \(273 ページ\)](#) を参照してください。

ここでは、高可用性設定に関連するさまざまな管理タスクについて説明します。

ハイ アベイラビリティの中断または再開

高可用性ペアの装置を中断することができます。これは、次の場合に役立ちます。

- 両方の装置がアクティブ-アクティブ状態になっていて、フェールオーバー リンクの通信を修正しても問題が解決しない場合。
- アクティブまたはスタンバイ装置のトラブルシューティングを行い、その間に装置をフェールオーバーしたくない場合。
- スタンバイデバイスのソフトウェアアップグレードをインストール中のフェールオーバーを防ぎたい場合。

高可用性を中断する場合は、デバイスのペアがフェールオーバー装置として動作するのを停止します。現在アクティブなデバイスはアクティブなまま、すべてのユーザ接続を処理します。

ただし、フェールオーバーの基準の監視が不要になった場合、システムが擬似スタンバイ デバイスにフェールオーバーすることはありません。スタンバイ デバイスの設定は維持されますが、非アクティブのままです。

HA の中断と HA の無効化の主な違いは、中断状態の HA デバイスで高可用性の設定が維持される点にあります。HA を無効化すると、設定は消去されます。そのため、中断システムで HA を再開するオプションがあり、既存の設定を有効にし、2 台のデバイスを再びフェールオーバーペアとして機能させることができます。

アクティブな装置から高可用性を中断する場合は、アクティブスタンバイの両方の装置で設定が中断されます。スタンバイ装置から高可用性を中断する場合は、スタンバイ装置でのみ中断され、アクティブな装置は中断装置へのフェールオーバーを試みません。

再開できるのは中断状態の装置だけです。ユニットは、ピア ユニットとアクティブ/スタンバイ ステータスをネゴシエートします。



- (注) 必要に応じて、CLI から **configure high-availability suspend** コマンドを入力して HA を中断できます。HA を再開するには、**configure high-availability resume** を入力します。

始める前に

Device Manager を使用してハイアベイラビリティを中断した場合、装置をリロードした場合でも、再開するまで中断のままになります。ただし、CLI を使用して中断した場合は一時的な状態なので、リロード時に装置のハイアベイラビリティの設定が自動的に再開され、ピアとアクティブ/スタンバイ状態がネゴシエートされます。

スタンバイ装置の高可用性を中断する場合は、展開ジョブがアクティブな装置で実行中かどうかを確認してください。展開ジョブの進行中にモードを切り替えると、ジョブが失敗し、設定の変更は失われます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側に表示される [ハイアベイラビリティ (High Availability)] リンクをクリックします。

ステップ 3 ギア アイコン (⚙️) から適切なコマンドを選択します。

- [HA の中断 (Suspend HA)] : アクションの確認を求められます。メッセージを読んで、[OK] をクリックします。HA ステータスにデバイスが中断モードであることが表示されます。

- [HA の再開 (Resume HA)] : アクションの確認を求められます。メッセージを読んで、[OK] をクリックします。HA ステータスは、装置がピアとネゴシエートした後に正常 (アクティブまたはスタンバイ) に戻ります。

ハイ アベイラビリティの破棄

2 台のデバイスをハイ アベイラビリティ ペアとして稼働しない場合は、HA 設定を破棄できます。HA を破棄すると、各デバイスはスタンドアロンデバイスになります。これらの設定は、次のように変更されます。

- アクティブ デバイスは破棄される前と変わらずすべての設定を維持し、HA 設定が削除されます。
- スタンバイ デバイスでは HA 設定だけでなくすべてのインターフェイス設定が削除されます。すべての物理インターフェイスは無効になりますが、サブインターフェイスは無効になりません。管理インターフェイスはアクティブなままであるため、デバイスにログインして再設定することができます。



- (注) または、(API エクスプローラから) `BreakHASStatus` API リソースを使用し、`interfaceOption` 属性を使用して、スタンバイ IP アドレスを使用してスタンバイデバイスのインターフェイスを再設定するようシステムに指示することもできます。この結果が必要な場合は、API を使用する必要があります。Device Manager は常にインターフェイスを無効にします。システムは IP アドレスを再設定しますが、そうでない場合にはすべてのインターフェイスオプションが再設定されないため、中断後に変更が展開されるまでトラフィックが期待どおりに動作しない可能性があることに注意してください。

破棄が装置にどのように影響するのかは、破棄を実行するときの各装置の状態によって変わります。

- 装置が健全なアクティブ/スタンバイ状態である場合、アクティブ装置から HA を破棄します。これにより、HA ペアの両方のデバイスから HA 設定が削除されます。スタンバイ装置でのみ HA を破棄する場合は、スタンバイ装置にログインして HA を中断した後に HA を破棄できます。
- スタンバイ装置が中断状態または障害状態になっている場合、アクティブ装置から HA を破棄するとアクティブ装置からのみ HA 設定が削除されます。スタンバイ装置にログインして、スタンバイ装置の HA も破棄する必要があります。
- ピアが HA をネゴシエーションしていたり設定を同期している場合、HA を破棄することはできません。ネゴシエーションまたは同期が完了するか、タイムアウトになるまで待ち

ます。システムがこの状態でスタックしていると思われる場合は、HA を中断してから HA を破棄することができます。



(注) Device Manager を使用する場合は、**configure high-availability disable** コマンドを使用して CLI から HA を破棄することはできません。

始める前に

理想的な結果を得るために、デバイスを健全なアクティブ/スタンバイ状態にして、アクティブ デバイスからこの操作を実行します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側に表示される [ハイアベイラビリティ (High Availability)] リンクをクリックします。

ステップ 3 歯車アイコン (⚙️) から、[HA の破棄 (Break HA)] を選択します。

ステップ 4 確認メッセージを読み、オプションを選択してインターフェイスを無効にするかどうかを決定し、[OK] をクリックします。

スタンバイ装置から HA を破棄する場合は、インターフェイスを無効にするオプションを選択する必要があります。

システムはすぐに、このデバイスとピアデバイスの両方で変更を展開します（可能な場合）。各デバイスで展開が完了して、各デバイスが依存しなくなるまで数分かかることがあります。

アクティブ ピアとスタンバイ ピアの切り替え（強制フェールオーバー）

機能している高可用性ペア（つまり、1 つのピアがアクティブで、もう 1 つがスタンバイ）のアクティブ/スタンバイ モードを切り替えることができます。たとえば、ソフトウェア アップグレードをインストールしている場合は、アクティブな装置をスタンバイに切り替えて、アップグレードがユーザ トラフィックに影響を及ぼさないようにできます。

モードはアクティブまたはスタンバイ装置から切り替えることができますが、ピア装置はその他の装置の観点から機能している必要があります。中断中の装置がある場合、モードを切り替えることはできません（最初に HA を再開する必要があります）。そうしないと、失敗します。



- (注) 必要に応じて、CLIからアクティブモードとスタンバイモードを切り替えることができます。スタンバイ装置から、**failover active** コマンドを入力します。アクティブ装置から、**no failover active** コマンドを入力します。

始める前に

モードを切り替える前に、アクティブな装置で展開ジョブが進行中でないことを確認します。展開ジョブの完了を待ってから、モードを切り替えます。

アクティブな装置に保留中の展開していない変更がある場合は、モードを切り替える前に展開します。そうしないと、新しいアクティブな装置から展開ジョブを実行した場合に変更内容が失われます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックします。

ステップ 2 デバイスの概要の右側に表示される [ハイアベイラビリティ (High Availability)] リンクをクリックします。

ステップ 3 ギアアイコンから (⚙️) から、[モードの切り替え (Switch Mode)] を選択します。

ステップ 4 確認メッセージを読んで、[OK] をクリックします。

強制的にフェールオーバーが行われ、アクティブな装置がスタンバイになり、スタンバイ装置が新しいアクティブな装置になります。

フェールオーバー後の未展開の設定変更の保持

高可用性ペアの装置の設定を変更する場合は、アクティブ装置で設定を編集します。その後、変更を展開すると、アクティブ装置とスタンバイ装置の両方が新しい設定で更新されます。アクティブ装置がプライマリ デバイスであるかセカンダリ デバイスであるかは関係ありません。

ただし、未展開の変更は装置間で同期されません。未展開の変更は、変更を行った装置でのみ利用できます。

そのため、未展開の変更があるときにフェールオーバーが発生すると、その変更は新しいアクティブ装置で利用できません。ただし、現在のスタンバイになっている装置では、変更が保持されています。

未展開の変更を取得するには、モードを切り替えてフェールオーバーを強制的に実行し、そのもう一方の装置をアクティブステータスに戻す必要があります。新しくアクティブになった装置にログインすると、未展開の変更が利用可能になり、それらを展開できます。[高可用性

(High Availability)] 設定の歯車メニュー (⚙️) から [モードの切り替え (Switch Modes)] コマンドを使用します。

次の点に注意してください。

- スタンバイ装置上に未展開の変更があるときにアクティブ装置から変更を展開すると、スタンバイ装置上の未展開の変更が削除されます。そのため、それらを取得できなくなります。
- スタンバイ装置が高可用性ペアに参加すると、そのスタンバイ装置上の未展開の変更が削除されます。装置がペアに参加または再参加するたびに、設定が同期されます。
- 未展開の変更を持つ装置に致命的な障害が発生し、その装置を置き換えたり再イメージ化する必要があった場合は、未展開の変更が完全に失われます。

高可用性モードでのライセンスと登録の変更

高可用性ペアの装置は、ライセンスと登録ステータスが同じである必要があります。変更するには、次の手順に従います。

- アクティブ装置でオプションのライセンスを有効または無効にします。その後、設定を展開すると、スタンバイ装置が必要なライセンスを要求（または解放）します。ライセンスを有効にする際は、Cisco Smart Software Manager アカウントで十分な数のライセンスが使用可能であることを確認する必要があります。これを確認しないと、一方の装置が準拠、もう一方の装置が非準拠になる可能性があります。
- 装置を個別に登録または登録解除します。正しく機能させるには、両方の装置を評価モードにするか、両方の装置に登録する必要があります。装置を異なる Cisco Smart Software Manager アカウントに登録できますが、それらのアカウントは、エクスポート制御機能設定が同じ状態（両方有効または両方無効）である必要があります。装置の登録ステータスに一貫性がない場合は、設定の変更を展開できません。

HA IPsec 暗号キーまたは HA 設定の編集

フェールオーバー基準を変更するには、アクティブ装置にログインし、変更を加えて、それらを展開します。

ただし、フェールオーバー リンクで使用される IPsec 暗号キーを変更したり、フェールオーバーまたはステートフル フェールオーバー リンクのインターフェイスや IP アドレスを変更する必要がある場合は、まず HA 設定を解除する必要があります。その後、新しい暗号キーまたはフェールオーバー/ステートフル フェールオーバー リンク設定を使用してプライマリおよびセカンダリ装置を再設定できます。

障害のある装置の正常な装置としてのマーキング

高可用性設定の装置は、定期的なヘルス モニタリングによって、障害が発生した装置としてマーキングされる場合があります。この装置が正常である場合は、ヘルス モニタリング要件を

再度満たすと正常なステータスに戻ります。正常なデバイスが、頻繁に、障害が発生したデバイスとしてマーキングされる場合は、ピアタイムアウトの値を増やしたり、重要性の低い特定のインターフェイスのモニタリングを停止したり、インターフェイスのモニタリングタイムアウトを変更することができます。

CLI から **failover reset** コマンドを入力することにより、障害が発生した装置を強制的に正常な装置として表示させることができます。このコマンドは、アクティブ装置から入力することをお勧めします。それにより、スタンバイ装置のステータスがリセットされます。**show failover** コマンドまたは **show failover state** コマンドを使用することにより、装置のフェールオーバーステータスを表示できます。

障害が発生した装置を障害のない状態に復元しても、その装置は自動的にアクティブになりません。復元された装置は、（強制または通常の）フェールオーバーによってアクティブになるまではスタンバイ状態のままです。

デバイスステータスをリセットしても、障害が発生したデバイスとしてマーキングされる原因となった問題は解決されません。問題に対処しなかったり、モニタリングタイムアウトを緩和したりすると、そのデバイスは、障害が発生したデバイスとして再びマーキングされます。

ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレード

ハイアベイラビリティ デバイスをアップグレードするには、この手順を使用します。一度に1つつアップグレードしてください。中断を最小限に抑えるため、スタンバイは常にアップグレードします。つまり、現在のスタンバイをアップグレードし、ロールを切り替えてから、新しいスタンバイをアップグレードします。FXOS を更新する必要がある場合は、どちらかのシャーシで Threat Defense をアップグレードする前に、両方のシャーシで更新してください。その場合も、常にスタンバイをアップグレードします。



注意

一方のユニットのアップグレード中にもう一方のユニットで設定変更を行ったり展開したりしないでください。また、異なるバージョンのペアに設定変更を展開しないでください。システムが非アクティブに見えても、アップグレード中は手動で再起動またはシャットダウンしないでください。システムが使用できない状態になり、再イメージ化が必要になる場合があります。失敗した（または進行中）のアップグレードを手動でキャンセルし、失敗したアップグレードを再試行できます。問題が解消されない場合は、Cisco TAC にお問い合わせください。

アップグレード中に発生する可能性のあるこれらの問題およびその他の問題の詳細については、[ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング](#)（290 ページ）を参照してください。

始める前に

アップグレードの計画を完了します。正常に展開され、通信が確立されていることを確認します。



ヒント アップグレードの計画は、『[Cisco Secure Firewall Threat Defense リリースノート](#)』を読むことから始まります。次に、バックアップの作成、アップグレードパッケージの取得、および関連するアップグレード（Firepower 4100/9300 の FXOS など）の実行が含まれます。また、必要な構成変更のチェック、準備状況のチェック、ディスク容量のチェック、実行中のタスクとスケジュールされたタスクの両方のチェックも含まれます。詳細については、お使いのバージョンの『[Device Manager 用 Cisco Secure Firewall Threat Defense アップグレードガイド](#)』を参照してください。

手順

- ステップ 1** スタンバイユニットにログインします。
- ステップ 2** [デバイス (Device)] を選択し、[更新 (Updates)] パネルの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
[システムアップグレード (System Upgrade)] パネルには、現在実行中のソフトウェアバージョン、およびすでにアップロードされたアップグレードパッケージが表示されます。
- ステップ 3** アップグレードパッケージをアップロードします。
- アップロードできるパッケージは1つだけです。新しいパッケージをアップロードすると、古いパッケージが置き換えられます。ターゲットバージョンとデバイスモデルに適したパッケージがあることを確認してください。[参照 (Browse)] または [別のファイルをアップロード (Upload Another File)] [ファイルの置き換え (Replace File)] をクリックしてアップロードを開始します。
- アップロードが完了すると、確認ダイアログボックスが表示されます。[OK] をクリックする前に、必要に応じて [すぐにアップグレードを実行 (Run Upgrade Immediately)] を選択して、ロールバックオプションを選択し、今すぐアップグレードします。今すぐアップグレードする場合は、アップグレード前のチェックリストをできるだけ多く完了することが特に重要です（次のステップを参照）。
- ステップ 4** 準備状況チェックを含む、アップグレード前の最終チェックを実行します。
- アップグレード前のチェックリストを再確認します。関連するすべてのタスク、特に最終チェックを完了していることを確認してください。準備状況チェックを手動で実行しない場合、アップグレードの開始時に実行されます。準備状況チェックに失敗すると、アップグレードはキャンセルされます。詳細については、[アップグレード準備状況チェックの実行 \(992 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 5** [インストール (Install)] [今すぐアップグレード (Upgrade Now)] をクリックしてアップグレードを開始します。
- a) ロールバックオプションを選択します。
- [アップグレードに失敗すると自動的にキャンセルされ、前のバージョンにロールバックする (Automatically cancel on upgrade failure and roll back to the previous version)] を選択できます。オプションを有効にすると、アップグレードが失敗した場合、デバイスは自動的に

アップグレード前の状態に戻ります。失敗したアップグレードを手動でキャンセルまたは再試行できるようにする場合は、このオプションを無効にします。

- b) [続行 (Continue)] をクリックして、アップグレードしてデバイスを再起動します。

自動的にログオフされ、デバイスが再起動するまでアップグレードを監視できるステータスページに移動します。また、このページには、進行中のインストールをキャンセルするオプションが含まれています。自動ロールバックを無効にしてアップグレードが失敗した場合は、アップグレードを手動でキャンセルするか、再試行できます。

アップグレード中にトラフィックがドロップされます。

ステップ 6 可能なときに再度ログインし、アップグレードが成功したことを確認します。

[デバイスの概要 (Device Summary)] ページには、現在実行中のソフトウェアバージョンとハイアベイラビリティのステータスが表示されます。成功を確認する「とともに」ハイアベイラビリティが再開されるまで、続行しないでください。アップグレードが成功した後もハイアベイラビリティが一時停止されたままになる場合は、[ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング \(290 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 7 2 目のユニットをアップグレードします。

- a) ロールを切り替えてこのデバイスをアクティブにします。[デバイス (Device)] > [ハイアベイラビリティ (High Availability)] を選択し、歯車メニュー (⚙️) から [モードの切り替え (Switch Mode)] を選択してください。ユニットのステータスがアクティブになるのを待ち、トラフィックが正常に送信されていることを確認します。ログアウトします。
- b) アップグレードします。前の手順を繰り返して新しいスタンバイにログインして、パッケージをアップロードし、デバイスをアップグレードして、進行状況をモニターし、成功を確認してください。

ステップ 8 デバイスのロールを調べます。

特定のデバイスに優先するロールがある場合は、それらの変更を今すぐ行ってください。

ステップ 9 アクティブユニットにログインします。

ステップ 10 アップグレード後のタスクを完了します。

- a) システムデータベースを更新します。侵入ルール、VDB、GeoDB の自動更新が設定されていない場合は、ここで更新します。
- b) アップグレード後に必要な構成変更が他にもあれば、実行します。
- c) 展開します。

ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング

一般的なアップグレードのトラブルシューティング

以下の問題は、スタンドアロンまたはハイアベイラビリティペアのデバイスをアップグレードするときに発生する可能性があります。

アップグレードパッケージのエラー。

適切なアップグレードパッケージを見つけるには、使用しているモデルを シスコ サポートおよびダウンロード サイト で選択または検索し、適切なバージョンのソフトウェアのダウンロードページを参照します。使用可能なアップグレードパッケージは、インストールパッケージ、ホットフィックス、およびその他の該当するダウンロードとともに表示されます。アップグレードパッケージのファイル名には、プラットフォーム、パッケージタイプ（アップグレード、パッチ、ホットフィックス）、ソフトウェアバージョン、およびビルドが反映されています。

バージョン 6.2.1 以降のアップグレードパッケージは署名されており、ファイル名の最後は .sh.REL.tar です。署名付きのアップグレードパッケージは解凍しないでください。アップグレードパッケージの名前を変更したり、電子メールで転送したりしないでください。

アップグレード中にデバイスにまったく到達できない。

デバイスは、アップグレード中、またはアップグレードが失敗した場合に、トラフィックを渡すことを停止します。アップグレードする前に、ユーザーの位置からのトラフィックがデバイスの管理インターフェイスにアクセスするためにデバイス自体を通過する必要があることを確認してください。

アップグレード中にデバイスが非アクティブまたは無反応に見える。

進行中のメジャーおよびメンテナンスアップグレードは手動でキャンセルできます。[Threat Defense のアップグレードのキャンセルまたは再試行 \(994 ページ\)](#) を参照してください。デバイスが応答しない場合、またはアップグレードをキャンセルできない場合は、Cisco TAC にお問い合わせください。



注意

システムが非アクティブに見えても、アップグレード中は手動で再起動またはシャットダウン「しない」でください。システムが使用できない状態になり、再イメージ化が必要になる場合があります。

アップグレードは成功したが、システムが予想どおりに機能しない。

まず、キャッシュされた情報が更新されていることを確認します。単にブラウザウィンドウを更新して再度ログインするのではなく、URL から「余分な」パスを削除し、ホームページに再接続します（たとえば、<http://threat-defense.example.com/>）。

引き続き問題が発生し、以前のメジャーリリースまたはメンテナンスリリースに戻す必要がある場合は、復元できる場合があります。[Threat Defense の復元 \(994 ページ\)](#) を参照してください。復元できない場合は、イメージを再作成する必要があります。

アップグレードが失敗する。

メジャーアップグレードまたはメンテナンスアップグレードを開始する場合は、[アップグレードに失敗すると自動的にキャンセルされる... (Automatically cancel on upgrade failure...)] (自動キャンセル) オプションを使用して、次のように、アップグレードが失敗した場合の動作を選択します。

- [自動キャンセルが有効 (Auto-cancel enabled)] (デフォルト) : アップグレードが失敗すると、アップグレードがキャンセルされ、デバイスは自動的にアップグレード前の状態に復元されます。問題を修正し、後で再試行してください。
- [自動キャンセルが無効 (Auto-cancel disabled)] : アップグレードが失敗した場合、デバイスはそのままになります。問題を修正してすぐに再試行するか、手動でアップグレードをキャンセルして後で再試行してください。

詳細については、[Threat Defense のアップグレードのキャンセルまたは再試行 \(994 ページ\)](#) を参照してください。再試行またはキャンセルできない場合、または問題が解消されない場合は、Cisco TAC にお問い合わせください。

ハイアベイラビリティのアップグレードのトラブルシューティング

以下の問題は、ハイアベイラビリティのアップグレードに固有です。

未確定の変更を展開しないと、アップグレードは開始されません。

未確定の変更がないにもかかわらず、すべての未確定の変更を展開する必要があることを示すエラーメッセージが表示される場合は、アクティブユニットにログインして（スタンバイユニットをアップグレードする必要があることに注意してください）、マイナーな変更を作成し、展開してください。その後、変更を元に戻し、再展開してから、スタンバイでアップグレードを再試行します。

この方法では解決せず、ユニットが推奨されるものとは異なるソフトウェアバージョンを実行している場合は、ロールを切り替えてスタンバイユニットをアクティブにしてから、高可用性を一時停止します。一時停止したアクティブユニットから展開して高可用性を再開し、ロールを切り替えてアクティブユニットを再びスタンバイにします。これでアップグレードが動作するはずです。

スタンバイのアップグレード中にアクティブユニットからの展開が失敗するか、アプリケーション同期エラーが発生する。

これは、スタンバイのアップグレード中にアクティブユニットから展開した場合に発生する可能性があります。この操作は、サポートされていません。エラーが発生してもアップグレードを続行してください。両方のユニットをアップグレードした後に、必要な設定変更を行い、アクティブユニットから展開します。エラーは解決するはずです。

これらの問題を回避するために、一方のユニットのアップグレード中にもう一方のユニットで設定変更を行ったり展開したりしないでください。また、異なるバージョンのペアに設定変更を展開しないでください。

アップグレード中に行われた設定変更が失われる。

何らかの理由で、設定変更を行い、異なるバージョンのペアに展開する必要がある場合は、両方のユニットに変更を加える必要があります。そうしないと、下位バージョンのアクティブユニットをアップグレードした後にそれらの設定変更が失われます。

アップグレード後に高可用性が一時停止される。

アップグレード後の再起動の後に、システムがライブラリの更新や Snort の再起動といった最終的な自動タスクを実行している間は、高可用性が一時的に停止されます。アップグ

レードの「直後」にCLIにログインすると、多くの場合、この状態が見られます。アップグレードが完全に完了して **Device Manager** が使用可能になっても高可用性が自動的に再開されない場合は、手動で実行してください。

1. アクティブデバイスとスタンバイデバイスの両方にログインし、タスクリストを確認します。両方のデバイスで、実行されているすべてのタスクが完了するまで待ちます。高可用性を再開するのが早すぎると、その後に、フェールオーバーが原因で停止するという問題が発生する可能性があります。
2. **[デバイス (Device)] > [高可用性 (High Availability)]** を選択し、歯車メニュー (⚙️) から **[HAの再開 (Resume HA)]** を選択します。

異なるバージョンのペアでフェールオーバーが発生しない。

高可用性の利点は、トラフィックや検査を中断することなく展開をアップグレードできることです。アップグレードプロセスの実行中は、その全体でフェールオーバーが無効になります。つまり、一方のデバイスがオフラインの場合には、当然、フェールオーバーは無効になりますが（フェールオーバーするものがない、つまり、本質的にすでにフェールオーバーされているため）、それだけではなく、異なるバージョンのペアでもフェールオーバーは無効になります。異なるバージョンのペアが許可される（一時的に）のは、アップグレード中のみです。何らかの問題が発生しても影響が最小限になるメンテナンスウィンドウ中に実行するようにアップグレードをスケジュールし、そのウィンドウ内で両方のデバイスをアップグレードするための十分な時間を確保してください。

アップグレードが一方のデバイスでのみ失敗したか、一方のデバイスが復元され、現在は、異なるバージョンのペアが動作している。

異なるバージョンのペアは、一般的な動作ではサポートされていません。下位バージョンのデバイスをアップグレードするか、上位バージョンのデバイスを復元してください。パッチの場合は復元がサポートされていないため、下位バージョンのデバイスを正常にアップグレードできないときは、高可用性を解除し、一方または両方のデバイスのイメージを再作成してから、高可用性を再確立する必要があります。

ハイ アベイラビリティ ペアでの装置交換

必要に応じて、ネットワーク トラフィックを中断することなくハイ アベイラビリティ グループ内の装置を交換できます。

手順

- ステップ 1** 交換する装置が機能している場合は、ピア装置にフェールオーバーするようにし、デバイス CLI の **shutdown** コマンドを使用して、デバイスをグレースフルシャットダウンします。装置が機能していない場合は、ピアがアクティブ モードで動作していることを確認します。

管理者権限がある場合は、**Device Manager** CLI コンソールから **shutdown** コマンドを入力することもできます。

ステップ2 装置をネットワークから取り除きます。

ステップ3 交換装置を設置して、インターフェイスを再接続します。

ステップ4 交換装置でデバイス セットアップ ウィザードを完了します。

ステップ5 ピア装置で [高可用性 (High Availability)] ページにアクセスし、設定をクリップボードにコピーします。装置がプライマリ装置か、セカンダリ装置かに注意してください。

保留中の変更がある場合は、それらの変更を展開し、展開が完了するまで待ってから続行します。

ステップ6 交換装置で [高可用性 (High Availability)] グループで [設定 (Configure)] をクリックして、ピアから反対側の装置タイプを選択します。つまり、ピアがプライマリの場合は [セカンダリ (Secondary)] を選択し、ピアがセカンダリの場合は [プライマリ (Primary)] を選択します。

ステップ7 ピアから HA の設定を貼り付け、IPsec キーを入力します (使用する場合)。**[HAの有効化 (Activate HA)]** をクリックします。

展開が完了すると、装置はピアに連絡して HA グループに参加します。アクティブなピアの設定がインポートされ、選択内容に基づいて、交換装置がグループ内のプライマリ装置またはセカンダリ装置になります。これで、HA が正常に動作していることを確認し、必要に応じてモードを切り替えて、新しい装置をアクティブな装置にできます。

高可用性のモニタリング

ここでは、高可用性をモニタする方法について説明します。

イベントビューアとダッシュボードには、ログインしているデバイスに関するデータだけが表示されることに注意してください。両方のデバイスの統合された情報は表示されません。

フェールオーバーの全般的なステータスと履歴のモニタリング

次の方法で、高可用性の全般的なステータスと履歴をモニタできます。

- [デバイス概要 (Device Summary)] ([デバイス (Device)] クリック) の [高可用性 (High Availability)] グループに装置のステータスが表示されます。

 **High Availability**
Primary Device: **Active**  Peer Device: **Standby**

- [高可用性 (High Availability)] ページ ([デバイス (Device)] > [高可用性 (High Availability)] をクリック) に両方の装置のステータスが表示されます。失敗した場合は、直近の失敗理由 (フェールオーバー履歴から) が表示されます。それらの間にある同期のアイコンをクリックすると、追加のステータスが表示されます。

PRIMARY DEVICE
Current Device Mode: **Active**  Peer Device: **Standby**

- [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページで、ステータスの横にある [フェールオーバー履歴 (Failover History)] リンクをクリックします。CLI コンソールが開き、**show failover history details** コマンドが実行されます。このコマンドを CLI または CLI コンソールに直接入力することもできます。

CLI コマンド

CLI または CLI コンソールで次のコマンドを使用できます。

- **show failover**

装置のフェールオーバー状態に関する情報が表示されます。

- **show failover history [details]**

過去のフェールオーバーでの状態変更や、状態変更の理由が表示されます。**details** キーワードを追加すると、ピアユニットのフェールオーバー履歴が表示されます。この情報は、トラブルシューティングに役立ちます。

- **show failover state**

両方の装置のフェールオーバー状態が表示されます。この情報には、装置のプライマリまたはセカンダリ ステータス、装置のアクティブ/スタンバイ ステータス、最後にレポートされたフェールオーバーの理由などが含まれます。

- **show failover statistics**

フェールオーバー インターフェイスの送信 (tx) パケット数と受信 (rx) パケット数が表示されます。たとえば、装置がパケットを送信しているのに受信パケットがないことが出力に示されている場合は、リンクに問題があります。ケーブルに問題がある、ピアで正しくない IP アドレスが設定されている、装置によってフェールオーバー インターフェイスが異なるサブネットに接続されているといった可能性があります。

```
> show failover statistics
tx:320875
rx:0
```

- **show failover interface**

フェールオーバーおよびステートフル フェールオーバー リンクの設定が表示されます。次に例を示します。

```
> show failover interface
interface failover-link GigabitEthernet1/3
  System IP Address: 192.168.10.1 255.255.255.0
  My IP Address      : 192.168.10.1
  Other IP Address   : 192.168.10.2
interface stateful-failover-link GigabitEthernet1/4
  System IP Address: 192.168.11.1 255.255.255.0
  My IP Address      : 192.168.11.1
  Other IP Address   : 192.168.11.2
```

- **show monitor-interface**

高可用性に関してモニタされているインターフェイスに関する情報が表示されます。詳細については、[HA モニター対象インターフェイスのステータスのモニタリング（296 ページ）](#)を参照してください。

• **show running-config failover**

実行コンフィギュレーション内のフェールオーバー コマンドが表示されます。これらは、高可用性を設定するコマンドです。

HA モニター対象インターフェイスのステータスのモニタリング

いずれかのインターフェイスのHAモニタリングを有効にしている場合は、CLIまたはCLIコンソールで**show monitor-interface**コマンドを使用して、モニタ対象インターフェイスのステータスを確認できます。

```
> show monitor-interface
This host: Primary - Active
  Interface inside (192.168.1.13): Normal (Monitored)
  Interface outside (192.168.2.13): Normal (Monitored)
Other host: Secondary - Standby Ready
  Interface inside (192.168.1.14): Normal (Monitored)
  Interface outside (192.168.2.14): Normal (Monitored)
```

モニタ対象インターフェイスが持つステータスは次のとおりです。

- (Waiting) (Unknown (Waiting) などのように他のステータスと結合) : インターフェイスはピア装置上の対応するインターフェイスから hello パケットをまだ受信していません。
- Unknown : 初期ステータスです。このステータスは、ステータスを特定できないことを意味する場合があります。
- Normal : インターフェイスはトラフィックを受信しています。
- Testing : ポーリング 5 回の間、インターフェイスで hello メッセージが検出されていません。
- Link Down : インターフェイスまたは VLAN は管理のためにダウンしています。
- No Link : インターフェイスの物理リンクがダウンしています。
- Failed : インターフェイスではトラフィックを受信していませんが、ピア インターフェイスではトラフィックを検出しています。

HA 関連の Syslog メッセージのモニタリング

システムは、深刻な状況を表すプライオリティ レベル 2 のフェールオーバーについて、複数の Syslog メッセージを発行します。フェールオーバー関連のメッセージ ID の範囲は 101xxx、102xxx、103xxx、104xxx、105xxx、210xxx、311xxx、709xxx、727xxx です。たとえば、105032 および 105043 はフェールオーバー リンクとの問題を示しています。Syslog メッセージの説明

については、https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/Syslogs/b_fptd_syslog_guide.htmlにある『Cisco Threat Defense Syslog Messages』を参照してください。



- (注) フェールオーバー時には、システムが論理的にシャットダウンされた後にインターフェイスが起動し、Syslog メッセージ 411001 および 411002 が生成されます。これは通常のアクティビティです。

Syslog メッセージを表示するには、[デバイス (Device)] > [ロギング設定 (Logging Settings)] で診断ロギングを設定する必要があります。メッセージを確実にモニタできるように、外部 Syslog サーバを設定してください。

ピア装置での CLI コマンドのリモート実行

CLI から failover exec コマンドを使用することにより、ピアにログインすることなく、ピア デバイスに show コマンドを入力できます。

failover exec {active | standby | mate} コマンド

コマンドを実行する装置（アクティブまたはスタンバイ）を指定するか、ログインしている装置ではない方の装置が応答するようにする場合は **mate** を入力します。

たとえば、ピアのインターフェイス設定と統計情報を表示するには、次のように入力します。

```
> failover exec mate show interface
```

configure コマンドは入力できません。この機能は、**show** コマンドで使用します。



- (注) アクティブ装置にログインしている場合は、**failover reload-standby** コマンドを使用してスタンバイ装置をリロードできます。

これらのコマンドは、Device Manager CLI コンソールからは入力できません。

ハイアベイラビリティ（フェールオーバー）のトラブルシューティング

高可用性グループ内の装置が期待どおりに機能していない場合は、次の手順による設定のトラブルシューティングを検討します。

アクティブな装置にピア装置が「障害 (Failed)」と表示されている場合は、[装置の障害状態のトラブルシューティング \(300 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 各デバイス（プライマリとセカンダリ）から次の手順を実行します。

- フェールオーバー リンクのその他のデバイスの IP アドレスに ping を実行します。
- 別のリンクを使用する場合は、ステートフル フェールオーバー リンクのその他のデバイスの IP アドレスに ping を実行します。

ping が失敗する場合は、各デバイス上のインターフェイスが同じネットワーク セグメントに接続されていることを確認します。直接ケーブル接続を使用している場合は、ケーブルを確認します。

ステップ 2 次の一般的なチェックを行います。

- プライマリとセカンダリで重複している管理 IP アドレスを確認します。
- 装置の重複しているフェールオーバー IP アドレスとステートフル フェールオーバー IP アドレスを確認します。
- 各デバイスの同等のインターフェイス ポートが同じネットワーク セグメントに接続されていることを確認します。

ステップ 3 スタンバイデバイスのタスクリストまたは監査ログを確認します。アクティブなデバイスで展開が成功するごとに、「アクティブ ノードからの設定のインポート（Configuration import from Active node）」タスクの成功を確認する必要があります。タスクが失敗する場合は、フェールオーバー リンクを確認して、展開を再度実行してください。

（注）

失敗した展開タスクがタスクリストに示されている場合は、展開ジョブ中にフェールオーバーが発生している可能性があります。展開タスクを開始したときにスタンバイデバイスがアクティブ装置であったが、タスク中にフェールオーバーが発生した場合、展開は失敗します。この問題を解決するには、モードを切り替えてスタンバイ装置を再びアクティブ装置にしてから、設定変更を再展開します。

ステップ 4 **show failover history** コマンドを使用して、デバイスの状態変更に関する詳細情報を取得します。

以下の点を確認します。

- アプリケーションの同期エラー。

```
12:41:24 UTC Dec 6 2017
```

```
App Sync      Disabled      HA state progression failed due to APP SYNC timeout
```

アプリケーションの同期フェーズは、アクティブ デバイスの設定がスタンバイ デバイスに転送されるフェーズです。アプリケーションの同期エラーが発生するとデバイスは無効状態になり、そのデバイスをアクティブにすることはできなくなります。

アプリケーションの同期の問題により、デバイスが無効状態になっている場合は、フェールオーバー リンクとステートフル フェールオーバー リンクのエンドポイント用に、デバイスの別のインターフェイスを使用することができます。リンクの各端には同じポート番号を使用する必要があります。

`show failover` コマンドの結果、セカンダリ デバイスが疑似スタンバイ状態にあると表示される場合は、セカンダリ デバイスのフェールオーバー リンクに、プライマリ デバイスに設定したアドレスとは異なる IP アドレスを設定している可能性があります。フェールオーバー リンクの両方のデバイスで同じプライマリ/セカンダリ IP アドレスを使用していることを確認します。

疑似スタンバイ状態は、プライマリとセカンダリで異なる IPsec キーが設定されている可能性も示しています。

その他のアプリケーションの同期の問題については、[HA アプリケーション同期障害のトラブルシューティング \(301 ページ\)](#) 参照してください。

- (アクティブからスタンバイに移行して戻る) フェールオーバーの頻度が異常に高い場合、フェールオーバーリンクに問題がある可能性があります。最悪のシナリオでは、両方の装置がアクティブになり、トラフィックの通過が中断されます。リンクの各端に `ping` を実行して接続を確認します。`show arp` を使用して、フェールオーバー IP アドレスと ARP マッピングが適切であるか確認することもできます。

フェールオーバーリンクが正常で正しく設定されている場合は、ピアのポーリング時間とホールド時間、インターフェイスのポーリング時間とホールド時間を増やすか、HA の監視対象インターフェイスの数を減らすか、インターフェイスのしきい値を増やすことを検討してください。

- インターフェイスチェックが原因のエラー。[インターフェイスチェック (Interface Check)] 理由には、障害が発生したと見なされるインターフェイスの一覧が含まれています。それらのインターフェイスをチェックして、正しく設定されていること、ハードウェアの問題がないことを確認します。リンクの反対側のスイッチの設定に問題がないことを確認します。問題がない場合は、それらのインターフェイスに対する HA モニタリングの無効化を検討します。または、インターフェイス障害のしきい値やタイミングを増やすこともできます。

06:17:51 UTC Jan 15 2017

```
Active      Failed      Interface check

This Host:3

admin: inside

ctx-1: ctx1-1

ctx-2: ctx2-1
```

Other Host:0

ステップ 5 スタンバイ装置を検出できず、フェールオーバーリンクの LAN またはケーブル接続の不良など、具体的な理由を見つけれない場合は、次の手順を実行します。

- a) スタンバイ装置で CLI にログインし、**failover reset** コマンドを入力します。このコマンドにより、装置の状態が「障害」から「非障害」に変わります。次に、アクティブデバイスの HA ステータスを確認します。スタンバイピアが検出される場合は、これで終了です。
- b) アクティブな装置で CLI にログインし、**failover reset** コマンドを入力します。アクティブとスタンバイの両方の装置で HA ステータスがリセットされます。デバイス間のリンクが再確立されるのが理想的です。HA のステータスを確認します。正しくない場合は手順を続行します。
- c) アクティブデバイスの CLI から、または Device Manager から、まず HA を中断してから HA を再開します。CLI コマンドは **configure high-availability suspend** および **configure high-availability resume** です。
- d) これらの手順が失敗する場合は、スタンバイ デバイスを **reboot** します。

装置の障害状態のトラブルシューティング

ピア装置のハイ アベイラビリティ ステータス ([デバイス (Device)] または [デバイス (Device)] > [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページ) で装置が故障としてマークされている場合、アクティブ装置である装置 A と故障したピアである装置 B に基づいて、考えられる一般的な原因は次のとおりです

- 装置 B がハイアベイラビリティ向けに設定されていない場合（スタンドアロンモードのままになっている場合）、装置 A は装置 B を故障として表示します。
- 装置 B で HA を一時停止すると、装置 A は装置 B を故障として表示します。
- 装置 B をリブートすると、装置 B がリブートを完了してフェールオーバー リンク経由で通信を再開するまで装置 A は装置 B を故障として表示します。
- 装置 B でアプリケーションの同期 (App Sync) が失敗すると、装置 A は装置 B を故障として表示します。[HA アプリケーション同期障害のトラブルシューティング \(301 ページ\)](#) を参照してください。
- 装置 B で装置またはインターフェイスのヘルス モニタリングが失敗すると、装置 A は装置 B を故障として表示します。システム上の問題がないか装置 B を確認します。デバイスをリブートしてみます。装置がおおむね正常な場合は、装置またはインターフェイスのヘルス モニタリング設定を緩和することを検討します。**show failover history** の出力にインターフェイス正常性チェックのエラーに関する情報が示されます。
- 両方の装置がアクティブな場合、各装置はピアを故障として表示します。通常、これはフェールオーバー リンクに問題があることを示しています。

ライセンスの問題を示している可能性もあります。デバイスは一貫したライセンス（両方とも評価モードであるか、両方が登録されている）を保持する必要があります。登録されている場合、使用するスマート ライセンス アカウントは別々であっても構いませんが、どちらのアカウントも輸出制限対象の機能で有効または無効のいずれか同じものを選択している必要があります。輸出規制機能に関する設定が不整合な状態で IPsec 暗号化鍵を設定すると、HA を有効化した後に両方のデバイスがアクティブになります。これはサポートされているネットワークセグメント上のルーティングに影響を与え、回復させるにはセカンダリ ユニットで HA を手動で中断する必要があります。

HA アプリケーション同期障害のトラブルシューティング

ピア装置が HA グループへの参加に失敗する場合、またはアクティブ装置からの変更を展開しているときにピア装置で障害が発生する場合は、障害が発生した装置にログインして [ハイアベイラビリティ (High Availability)] ページに移動し、[フェールオーバー履歴 (Failover History)] リンクをクリックします。show failover history 出力にアプリケーション同期の障害が示されている場合、装置がハイアベイラビリティグループとして正しく機能できることをシステムが確認する、HA の検証段階に問題があります。

このタイプの障害は、次のように表示されます。

```
=====
From State          To State          Reason
=====
16:19:34 UTC May 9 2018
Not Detected        Disabled          No Error

17:08:25 UTC May 9 2018
Disabled            Negotiation       Set by the config command

17:09:10 UTC May 9 2018
Negotiation         Cold Standby      Detected an Active mate

17:09:11 UTC May 9 2018
Cold Standby        App Sync          Detected an Active mate

17:13:07 UTC May 9 2018
App Sync            Disabled          CD App Sync error is
High Availability State Link Interface Mismatch between Primary and Secondary Node
```

理想としては、From State が App Sync のときに「All validation passed」というメッセージが表示され、ノードが Standby Ready 状態になります。任意の検証で障害が発生すると、ピアは Disabled (Failed) 状態になります。問題を解決して、ピアがハイアベイラビリティグループとして再度機能するようにする必要があります。アクティブ装置に変更を加えてアプリケーションの同期エラーを修正した場合は、ピアノードを結合するために、それらを展開して HA を再開する必要があります。

次のメッセージは障害の発生を示し、問題の解決方法について説明しています。これらのエラーは、ノードの結合時および後続の各展開時に発生する可能性があります。ノードの結合中は、システムにより、アクティブ装置で最後に展開された設定に対してチェックが実行されず。

- ライセンス登録モードがプライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。

ライセンスエラーは、1つのピアが評価モードになっているときにもう一方のピアが登録されたことを示します。ピアをHA グループに参加させるには、ピアを両方とも登録するか、両方とも評価モードにする必要があります。登録したデバイスを評価モードに戻すことはできないため、**[デバイス (Device)] > [スマートライセンス (Smart License)]** ページからもう一方のピアを登録する必要があります。

登録するデバイスがアクティブ装置の場合、デバイスの登録後に展開を実行します。展開することで装置は強制的に更新され、設定が同期されます。これにより、セカンダリ装置はハイ アベイラビリティ グループに正しく参加できます。

- ライセンス エクスポート コンプライアンスがプライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。

ライセンス コンプライアンス エラーは、デバイスが異なる Cisco Smart Software Manager アカウントに登録されており、1つのアカウントでは輸出規制された機能が有効で、もう一方のアカウントでは無効になっていることを示します。デバイスは、輸出規制された機能の設定（有効または無効）が同じアカウントに登録される必要があります。**[デバイス (Device)] > [スマートライセンス (Smart License)]** ページでデバイス登録を変更します。

- 「ソフトウェアバージョンがプライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。
(Software version mismatch between Primary and Secondary Node.)」

ソフトウェア不一致エラーは、ピアが異なるバージョンの Threat Defense ソフトウェアを実行していることを示します。一度に1台のデバイスにソフトウェアアップグレードをインストールしている場合、システムは一時的にのみ不一致を許容します。ただし、ピアのアップグレードの間に設定変更を展開することはできません。この問題を解決するには、ピアをアップグレードしてから展開をやり直します。

- 「物理インターフェイスがプライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。
(Physical interfaces mismatch between Primary and Secondary Node.)」

HA グループのスタンバイ装置には、アクティブ装置に存在するすべての物理インターフェイスを持たせる必要があります、それらのインターフェイスには同じハードウェア名とタイプ (GigabitEthernet1/1 など) を持たせる必要があります。このエラーは、アクティブ装置に存在する一部のインターフェイスがスタンバイ装置に存在しないことを示しています。スタンバイ装置にはアクティブ装置よりも多くのインターフェイスを含めることができます。そのため、アクティブにする装置を切り替えるか、または別のピア装置を選択してください。ただし、インターフェイスの不一致状態は一時的にする必要があります。たとえば、ある装置でインターフェイスモジュールを交換していて、そのモジュールを使用せずに短時間装置を実行する必要がある場合などです。通常の動作では、両方の装置についてインターフェイスの数とタイプが同じである必要があります。

- フェールオーバー リンク インターフェイスがプライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。

各装置でフェールオーバー物理インターフェイスをネットワークにリンクする場合、同じ物理インターフェイスを選択する必要があります。たとえば、各装置でGigabitEthernet1/8

にします。このエラーは、異なるインターフェイスを使用したことを示しています。エラーを解決するには、ピア装置のケーブル配線を修正します。

- ステートフル フェールオーバー リンク インターフェイスが、プライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。

別々のステートフル フェールオーバー リンクを使用する場合、各装置でステートフル フェールオーバー インターフェイスをネットワークにリンクするときに、同じ物理インターフェイスを選択する必要があります。たとえば、各装置で GigabitEthernet1/7 にします。このエラーは、異なるインターフェイスを使用したことを示しています。エラーを解決するには、ピア装置のケーブル配線を修正します。

- 「フェールオーバー/ステートフル フェールオーバー リンク EtherChannel のメンバー インターフェイスが、プライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません
(Failover/Stateful failover link EtherChannel's member interfaces mismatch between Primary and Secondary Node)」

フェールオーバー インターフェイスまたはステートフル フェールオーバー インターフェイスのいずれかに EtherChannel インターフェイスを選択する場合、EtherChannel は各デバイスで同じ ID とメンバーインターフェイスを持つ必要があります。このエラーメッセージは、不一致があるのがフェールオーバーリンクかステートフル フェールオーバー リンクかを示します。エラーを解決するには、EtherChannel インターフェイスの設定を修正し、各デバイスで同じ ID を使用し、同じインターフェイスを含めるようにします。

- デバイスのモデル番号がプライマリ ノードとセカンダリ ノードで一致していません。

HA グループに参加するピアは、まったく同じモデルのデバイスである必要があります。このエラーは、ピアが同じデバイスモデルではないことを示しています。異なるピアを選択して HA を設定する必要があります。

- アクティブノードとスタンバイノードを同じシャーシに配置することはできません。

同じハードウェアシャーシでホストされているデバイスを使用してハイアベイラビリティを設定することはできません。同じシャーシで複数のデバイスをサポートするモデルでハイアベイラビリティを設定する場合は、別のハードウェアに存在するデバイスを選択する必要があります。

- 不明なエラーが発生しました。もう一度お試しください。

アプリケーションの同期中に問題が発生しましたが、システムが問題を特定できませんでした。もう一度設定を展開してみてください。

- ルール パッケージが破損しています。ルール パッケージを更新して、もう一度試してください。(Rule package is corrupted. Please update the rule package and try again.)」

侵入ルールデータベースに問題があります。障害が発生したピアで、**[デバイス (Device)] > [更新 (Updates)]** に移動して、**[ルール (Rule)]** グループの **[今すぐ更新 (Update Now)]** をクリックします。更新が完了するのを待って、変更を展開します。アクティブ装置から展開を再試行できます。

- プライマリノードとセカンダリノードのクラウドサービスの登録ステータスが一致しません。

一方のノードはシスコクラウドに登録されていますが、もう一方のノードは登録されていません。高可用性グループを形成するには、両方のノードが登録されているか、どちらも登録されていないが必要です。各デバイスで**[デバイス]>[システム設定]>[クラウドサービス]**に移動し、両方のデバイスが同じクラウドサービスリージョンに登録されていることを確認します。

- アクティブ ノードとスタンバイ ノードとで異なるクラウドリージョンを設定することはできません。

デバイスが異なるシスコクラウドサービスリージョンに登録されています。どのリージョンが正しいかを確認し、スマートライセンスから他のデバイスの登録を解除し、再登録時に正しいリージョンを選択してください。両方のデバイスのリージョンが間違っている場合は、両方のデバイスの登録を解除し、正しいリージョンに再登録します。

- 展開パッケージが破損しています。再度実行してください。

これはシステム エラーです。展開をもう一度試して、この問題を解決する必要があります。



第 12 章

インターフェイス

ここでは、脅威に対する防御 デバイスでインターフェイスを設定する方法について説明します。

- [Threat Defense インターフェイスについて \(305 ページ\)](#)
- [インターフェイスに関する注意事項と制限事項 \(310 ページ\)](#)
- [物理インターフェイスの設定 \(311 ページ\)](#)
- [管理インターフェイスの設定 \(318 ページ\)](#)
- [ブリッジ グループの設定 \(320 ページ\)](#)
- [EtherChannel の設定 \(325 ページ\)](#)
- [VLAN インターフェイスとスイッチ ポートの構成 \(1010/1210/1220\) \(338 ページ\)](#)
- [VLAN サブインターフェイスと 802.1Q トランキングの設定 \(352 ページ\)](#)
- [パッシブ インターフェイスの設定 \(358 ページ\)](#)
- [インラインセットの設定 \(363 ページ\)](#)
- [インターフェイスの詳細オプションの設定 \(366 ページ\)](#)
- [インターフェイスの変更のスキャンとインターフェイスの移行 \(372 ページ\)](#)
- [Secure Firewall 3100 のネットワークモジュールの管理 \(378 ページ\)](#)
- [管理インターフェイスと診断インターフェイスのマージ \(388 ページ\)](#)
- [停電時のハードウェアバイパスの設定 \(ISA 3000\) \(397 ページ\)](#)
- [インターフェイスのモニタリング \(399 ページ\)](#)
- [インターフェイスの例 \(401 ページ\)](#)

Threat Defense インターフェイスについて

Threat Defense には、データインターフェイスや管理インターフェイスが組み込まれています。

インターフェイス接続にケーブルを（物理的または仮想的に）取り付ける場合、インターフェイスを設定する必要があります。少なくとも、インターフェイスに名前を付け、トラフィックを通過させるために有効化する必要があります。インターフェイスがブリッジグループのメンバーである場合、これで十分です。ブリッジグループのメンバーではない場合、インターフェイスに IP アドレスを付与する必要があります。単一の物理インターフェイスではなく、VLAN サブインターフェイスを特定のポートで作成する場合、通常、物理インターフェイスではなく

サブインターフェイス上で IP アドレスを設定します。VLAN サブインターフェイスを使用すると、物理インターフェイスを異なる VLAN ID でタグ付けされた複数の論理インターフェイスに分割できます。これは、スイッチのトランクポートに接続する場合に役立ちます。パッシブインターフェイスでは IP アドレスを設定しません。

[**インターフェイス (Interfaces)**] ページには、インターフェイス タイプのサブページが含まれます。これらは、[**インターフェイス (Interfaces)**] (物理インターフェイスの場合)、[**ブリッジグループ (Bridge Groups)**]、[**仮想トンネル インターフェイス (Virtual Tunnel Interfaces)**]、[**EtherChannel**]、および [VLAN] (Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220 の場合) です。Firepower 4100/9300 EtherChannel は [インターフェイス (Interfaces)] ページには表示されますが、[EtherChannel] ページには表示されないことに注意してください。これは、Device Manager ではなく FXOS の EtherChannel パラメータのみを変更できるためです。各ページに、利用可能なインターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、モード、状態が示されます。インターフェイスのステータスは、インターフェイスのリストで直接オン/オフを変更できます。このリストは、設定に基づいたインターフェイス特性を示します。メンバーインターフェイスを参照するには、ブリッジグループインターフェイス上で [開く/閉じる (open/close)] 矢印を使用します。メンバーインターフェイスはリストにも表示されます。サポートされている親インターフェイスのサブインターフェイスを表示することもできます。これらのインターフェイスが仮想インターフェイスおよびネットワークアダプタにどのようにマッピングされるかについては、[Threat Defense の物理インターフェイスへの VMware ネットワークアダプタとインターフェイスのマッピング方法 \(22 ページ\)](#) を参照してください。

以下の各トピックでは、Device Manager を使用してインターフェイスを設定する場合の制限事項、およびインターフェイス管理に関するその他の概念について説明します。

インターフェイス モード

インターフェイスごとに次のモードのいずれかを設定できます。

ルーテッド

レイヤ 3 ルーテッドインターフェイスはそれぞれ、一意のサブネットの IP アドレスが必要です。通常、これらのインターフェイスをスイッチ、別のルータ上のポート、または ISP/WAN ゲートウェイに接続します。

インライン

インターフェイスをインラインセットに追加すると、モードがインラインに変更されます。インラインをモードとして直接選択することはできません。

パッシブ

パッシブ インターフェイスは、スイッチ SPAN (スイッチド ポート アナライザ) またはミラーポートを使用してネットワークを流れるトラフィックをモニタします。SPAN またはミラーポートでは、スイッチ上の他のポートからトラフィックをコピーできます。この機能により、ネットワークトラフィックのフローに含まれなくても、ネットワークでのシステムの可視性が備わります。パッシブ展開で設定されたシステムでは、特定のアクション (トラフィックのブロッキングやシェーピングなど) を実行することができません。

パッシブインターフェイスはすべてのトラフィックを無条件で受信します。このインターフェイスで受信されたトラフィックは再送されません。

スイッチ ポート (Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220)

スイッチポートは、ハードウェアのスイッチ機能を使用して、レイヤ2でトラフィックを転送します。同じ VLAN 上のスイッチポートは、ハードウェアスイッチングを使用して相互に通信できます。トラフィックには、脅威に対する防御 セキュリティポリシーは適用されません。アクセスポートはタグなしトラフィックのみを受け入れ、それらを単一の VLAN に割り当てることができます。トランクポートはタグなしおよびタグ付きトラフィックを受け入れ、複数の VLAN に属することができます。管理インターフェイスをスイッチポートとして設定することはできません。

BridgeGroupMember

ブリッジグループは、脅威に対する防御 デバイスがルーティングではなくブリッジするインターフェイスのグループです。すべてのインターフェイスは同じネットワーク上にあります。ブリッジグループは、ブリッジネットワーク上の IP アドレスを持つブリッジ仮想インターフェイス (BVI) によって表わされます。

BVI に名前を付けた場合、ルーテッドインターフェイスと BVI の間をルーティングできます。この場合、BVI はメンバーインターフェイスとルーテッドインターフェイスとの間のゲートウェイとして機能します。BVI に名前を付けない場合、ブリッジグループのメンバーインターフェイス上のトラフィックはブリッジグループから出ることはできません。通常、インターネットにメンバーインターフェイスをルーティングするため、インターフェイスに名前を付けます。

ルーテッドモードでブリッジグループを使用する方法として、外部スイッチの代わりに脅威に対する防御 デバイスの予備インターフェイスを使用する方法があります。ブリッジグループのメンバーインターフェイスにエンドポイントを直接接続できます。スイッチを接続して、さらに多くのエンドポイントを BVI として同じネットワークに追加することもできます。

管理/診断インターフェイス

管理インターフェイス

管理インターフェイスは、デバイスの他のインターフェイスとは分離されています。Device Manager 管理、スマートライセンス、およびデータベースの更新に使用されます。または、管理インターフェイスの代わりにデータインターフェイスを使用して Threat Defense デバイスを管理できます。管理インターフェイスでは、独自のLinux IPアドレスとスタティックルーティングが使用されます。管理インターフェイスは、**[デバイス]>[インターフェイス]**ページで、または**configure network**コマンドを使用してCLIで設定できます。

ハードウェアデバイスの場合、管理インターフェイスを設定する一つの方法は、ポートをネットワークに接続しないことです。代わりに、管理 IP アドレスのみを設定し、インターネットからの更新を取得するゲートウェイとしてのデータインターフェイスを使用するように設定します。次に、HTTPS/SSH トラフィック (デフォルトで HTTPS は有効) への内部インターフェイスを開き、内部 IP アドレスを使用して Device Manager を開きます ([管理アクセス リストの設定 \(936 ページ\)](#) を参照)。

Threat Defense Virtual の推奨設定は、Management0/0 を内部インターフェイスと同じネットワークに接続し、内部インターフェイスをゲートウェイとして使用することです。

診断インターフェイス（レガシー）

7.3 以降を使用している新しいデバイスの場合、レガシー診断インターフェイスは使用できません。マージされた管理インターフェイスのみを使用できます。

7.4 以降にアップグレードし、診断インターフェイスの設定がない場合は、インターフェイスが自動的にマージされます。

7.4 以降にアップグレードし、診断インターフェイスの設定がある場合は、インターフェイスを手動でマージするか、別の診断インターフェイスを引き続き使用できます。診断インターフェイスのサポートは今後のリリースで削除されるため、できるだけ早くインターフェイスをマージする必要があります。管理インターフェイスと診断インターフェイスを手動でマージするには、[管理インターフェイスと診断インターフェイスのマージ（388 ページ）](#) を参照してください。自動マージを防止する設定には、次のものが含まれます。

- 「管理」という名前のデータインターフェイス。この名前は、マージされた管理インターフェイスで使用するために予約されています。
- 診断の IP アドレス
- 診断で有効な DNS
- Syslog、または RADIUS (リモートアクセス VPN 用) 送信元インターフェイスが診断
- 送信元インターフェイスが指定されておらず、管理専用(診断を含む)として設定されているインターフェイスが少なくとも1つある AD または RADIUS (リモートアクセス VPN 用)。これらのサービスのデフォルト ルート ルックアップは、管理専用ルーティングテーブルからデータルーティングテーブルに変更されていて、管理にフォールバックされません。したがって、管理専用インターフェイスを使用するには、ルートルックアップに依存する代わりに、その特定のインターフェイスを選択する必要があります。
- スタティックルートまたは診断の SLA モニタ
- 診断を使用した FlexConfig
- 診断用の DDNS

レガシー診断インターフェイスの動作の詳細については、このガイドの 7.3 バージョンを参照してください。

分離した管理ネットワークを設定する際の推奨事項

(ハードウェアデバイス) 分離した管理ネットワークを使用する場合は、物理的管理インターフェイスをスイッチまたはルータに有線で接続します。

Threat Defense Virtual の場合、Management0/0 をデータ インターフェイスから分離したネットワークに接続します。管理 IP アドレスおよび内部インターフェイス IP アドレスは同じサブ

ネットに存在するため、デフォルトの IP アドレスを引き続き使用している場合は、そのいずれかを変更する必要があります。

次に、[デバイス]>[インターフェイス]を選択し、管理インターフェイスを編集して、接続されたネットワークでIPv4アドレスまたはIPv6アドレス(あるいはその両方)を設定します。必要に応じて、IPv4 アドレスをネットワーク上の他のエンドポイントに指定するよう DHCP サーバを設定することもできます。管理ネットワーク上でインターネットまでのルートを持つルータが存在する場合は、それをゲートウェイとして使用します。それ以外の場合は、データインターフェイスをゲートウェイとして使用します。

セキュリティ ゾーン

各インターフェイスは、1つのセキュリティゾーンに割り当てることができます。ゾーンに基づいてセキュリティポリシーを適用されます。たとえば、内部インターフェイスを内部ゾーンに割り当て、外部インターフェイスを外部ゾーンに割り当てることができます。また、たとえば、トラフィックが内部から外部に移動できるようにアクセス コントロール ポリシーを設定することはできますが、外部から内部に向けては設定できません。

各ゾーンにはインターフェイスのモードに直接関係するモードがあります。インターフェイスは、同じモードのセキュリティゾーンにのみ追加できます。

ブリッジグループの場合、メンバーインターフェイスをゾーンに追加することはできますが、ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) を追加することはできません。

ゾーンに管理インターフェイスは含めないでください。ゾーンはデータインターフェイスにのみ適用できます。

セキュリティ ゾーンは[オブジェクト (Objects)] ページで作成できます。

IPv6 アドレッシング

IPv6 に対して次の 2 種類のユニキャスト アドレスを設定できます。

- グローバル : グローバル アドレスは、パブリック ネットワークで使用可能なパブリック アドレスです。ブリッジグループの場合、各メンバーインターフェイスではなくブリッジ仮想インターフェイス (BVI) 上でグローバル アドレスを設定します。次のいずれもグローバル アドレスとしては指定できません。
 - 内部で予約済みの IPv6 アドレス : fd00::/56 (from=fd00:: to=fd00:0000:0000:00ff:ffff:ffff:ffff:ffff)
 - 未指定アドレス (::/128 など)
 - ループバック アドレス、::1/128
 - マルチキャスト アドレス、ff00::/8
 - リンクローカル アドレス、fe80::/10

- リンクローカル：リンクローカルアドレスは、直接接続されたネットワークだけで使用できるプライベート アドレスです。ルータは、リンクローカル アドレスを使用してパケットを転送するのではなく、特定の物理ネットワークセグメント上で通信だけを行います。ルータは、アドレス設定またはアドレス解決およびネイバー探索などのネットワーク検出機能に使用できます。ブリッジグループでは、BVI で IPv6 を有効化すると、各ブリッジグループメンバーインターフェイスのリンクローカルアドレスが自動的に設定されます。リンクローカルアドレスがセグメントでのみ使用可能であり、インターフェイス MAC アドレスに接続されているため、各インターフェイスは独自のアドレスを持つ必要があります。

最低限、IPv6 が動作するようにリンクローカルアドレスを設定する必要があります。グローバルアドレスを設定すると、リンクローカルアドレスがインターフェイスに自動的に設定されるため、リンクローカルアドレスを個別に設定する必要はありません。グローバルアドレスを設定しない場合は、リンクローカルアドレスを自動または手動で設定する必要があります。

Auto-MDI/MDIX 機能

RJ-45 インターフェイスでは、デフォルトの自動ネゴシエーション設定に Auto-MDI/MDIX 機能も含まれています。Auto-MDI/MDIX は、オートネゴシエーション フェーズでストレート ケーブルを検出すると、内部クロスオーバーを実行することでクロスケーブルによる接続を不要にします。インターフェイスの Auto-MDI/MDIX をイネーブルにするには、速度とデュプレックスのいずれかをオートネゴシエーションに設定する必要があります。速度とデュプレックスの両方に明示的に固定値を指定すると、両方の設定でオートネゴシエーションがディセーブルにされ、Auto-MDI/MDIX もディセーブルになります。ギガビット イーサネットの速度と二重通信をそれぞれ 1000 と全二重に設定すると、インターフェイスでは常にオートネゴシエーションが実行されるため、Auto-MDI/MDIX は常にイネーブルになり、ディセーブルにできません。

インターフェイスに関する注意事項と制限事項

ここでは、インターフェイスに関する制限事項について説明します。

インターフェイスの設定に関する制限

Device Manager を使用してデバイスを設定する場合、インターフェイス設定に関するいくつかの制限があります。次の機能のいずれかが必要である場合、デバイスを設定するために Management Center を使用する必要があります。

- ルーテッド ファイアウォール モードのみがサポートされます。トランスペアレント ファイアウォール モードのインターフェイスは設定できません。
- パッシブ インターフェイスの設定は可能ですが、ERSPAN インターフェイスの設定はできません。
- 冗長インターフェイスは設定できません。

- Device Manager で EtherChannel を設定できるモデルは、Firepower 1000、Cisco Secure Firewall 3100、ISA 3000 です。Firepower 4100/9300 は EtherChannel をサポートしていますが、シャーシの FXOS で EtherChannel のすべてのハードウェア設定を実行する必要があります。Firepower 4100/9300 の Etherchannel は、単一の物理インターフェイスとともに Device Manager の [Interfaces] ページに表示されます。
- 追加できるブリッジ グループは 1 つだけです。
- Threat Defense は、ルーテッドインターフェイスでのみ IPv4 PPPoE をサポートします。PPPoE は、ハイアベイラビリティ ユニットではサポートされません。

デバイス モデルによる VLAN サブインターフェイスの最大数

デバイス モデルにより、設定できる VLAN サブインターフェイスの最大数が制限されます。データ インターフェイスでのみサブインターフェイスを設定することができ、管理インターフェイスでは設定できないことに注意してください。

次の表で、各デバイス モデルの制限について説明します。

モデル	VLAN サブインターフェイスの最大数
Firepower 1010	60
Firepower 1120	512
Firepower 1140、1150	1024
Cisco Secure Firewall 1200	1024
Cisco Secure Firewall 3100	1024
Firepower 4100	1024
Firepower 9300	1024
Threat Defense Virtual	50
ISA 3000	100

物理インターフェイスの設定

少なくとも 1 つの物理インターフェイスを有効にして使用できるようにする必要があります。通常は名前も付けて、IP アドレッシングを設定します。VLAN サブインターフェイスを設定する予定の場合、パッシブ モード インターフェイスを設定している場合、またはインターフェイスをブリッジ グループに追加する予定の場合は、IP アドレスを設定しません。Firepower 4100/9300 EtherChannel は、単一の物理インターフェイスとともに Device Manager の [インターフェイス (Interfaces)] ページに表示され、この手順はそれらの EtherChannel にも適用されま

す。シャーシ上の FXOS で、Firepower 4100/9300 Etherchannel のすべてのハードウェア設定を実行する必要があります。



(注) 物理インターフェイスを Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220 スイッチポートとして設定するには、[VLAN インターフェイスとスイッチ ポートの構成 \(1010/1210/1220\) \(338 ページ\)](#) を参照してください。

物理インターフェイスをパッシブインターフェイスとして設定するには、[パッシブモードでの物理インターフェイスの設定 \(361 ページ\)](#) を参照してください。

接続されたネットワークでの送信を一時的に防ぐために、インターフェイスを無効にできません。インターフェイスの設定を削除する必要はありません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。インターフェイスリストに、物理インターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、状態が表示されます。

ステップ 2 編集する物理インターフェイスの [編集 (edit)] アイコン (🔧) をクリックします。

ハイ アベイラビリティ設定でフェールオーバー リンクまたはステートフル フェールオーバーリンクとして使用しているインターフェイスを編集することはできません。

ステップ 3 次の設定を行います。

Ethernet1/2
Edit Physical Interface

Interface Name: inside Mode: Routed Status: ☒

Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces.

Description:

IPv4 Address IPv6 Address Advanced

Type: Static

IP Address and Subnet Mask: 10.99.10.1 / 24
e.g. 192.168.5.15/17 or 192.168.5.15/255.255.128.0

Standby IP Address and Subnet Mask: 10.99.10.2 / 24
e.g. 192.168.5.16

CANCEL OK

- a) [インターフェイス名 (Interface Name)] を設定します。

インターフェイスの名前（最大 48 文字）を設定します。英字は小文字でなければなりません。例、[inside] または [outside]。名前を設定しないと、インターフェイスの残りの設定が無視されます。サブインターフェイスを設定するのではない限り、インターフェイスには名前が必要です。注：EtherChannel に追加するインターフェイスの名前は設定しないでください。

（注）

名前を変更すると、以前の名前が使用されていたすべての箇所（セキュリティゾーン、syslog サーバオブジェクト、DHCP サーバ定義など）で変更が自動的に反映されます。ただし、通常、ポリシーや設定に名前のないインターフェイスは使用できないため、最初に古い名前を使用しているすべての設定を削除しないと、その名前は削除できません。

- b) [モード (Mode)] を選択します。

- [ルーテッド (Routed)]：ルーテッドモードインターフェイスでは、トラフィックはフローの維持、IP 層と TCP 層の両方でのフロー状態のトラッキング、IP の最適化、TCP の正規化、ファイアウォールポリシーなど、すべてのファイアウォール機能の管理下に置かれます。これが通常のインターフェイス モードです。

- [インライン (Inline)] : インターフェイスをインラインセットに追加すると、モードがインラインに変更されます。インラインをモードとして直接選択することはできません。インラインセットで使用するインターフェイスを編集する場合は、初期モードとしてルーテッドモードを選択し、どのタイプのIPアドレッシングも設定しないでください。
- [パッシブ (Passive)] : パッシブ インターフェイスは、スイッチ SPAN またはミラーポートを使用してネットワーク中のトラフィック フローをモニタします。SPAN またはミラーポートでは、スイッチ上の他のポートからトラフィックをコピーできます。この機能により、ネットワークトラフィックのフローに含まれなくても、ネットワークでのシステムの可視性が備わります。パッシブ展開で設定されたシステムでは、特定のアクション（トラフィックのブロッキングやシェーピングなど）を実行することができません。パッシブインターフェイスはすべてのトラフィックを無条件で受信します。このインターフェイスで受信されたトラフィックは再送されません。このモードを選択する場合、残りの手順は実行しないでください。代わりに、「[パッシブモードでの物理インターフェイスの設定 \(361 ページ\)](#)」を参照してください。パッシブインターフェイスには IP アドレスを設定できません。
- [スイッチポート (Switch Port)] : (Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220) スwitchポートは、同じ VLAN 上のポート間でのハードウェアスイッチングを可能にします。スイッチングされたトラフィックはセキュリティポリシーの対象にはなりません。このモードを選択する場合、残りの手順は実行しないでください。代わりに、次を参照してください。[VLAN インターフェイスとスイッチポートの構成 \(1010/1210/1220\) \(338 ページ\)](#)

後でこのインターフェイスをブリッジグループに追加すると、モードは自動的に「BridgeGroupMember」に変更されます。ブリッジグループのメンバーインターフェイスには IP アドレスを設定できません。

- c) [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 () に設定します。

Firepower 4100/9300 デバイス上のインターフェイスの場合は、FXOS でもインターフェイスを有効にする必要があります。

この物理インターフェイスのサブインターフェイスを設定する場合は、これで完了です。[保存 (Save)] をクリックして、[VLAN サブインターフェイスと 802.1Q トランッキングの設定 \(352 ページ\)](#) を続けます。それ以外の場合は、次のステップを続けます。

(注)

サブインターフェイスを設定するとしても、インターフェイスに名前を付けて IP アドレスを指定することはできません。これは通常のセットアップではありませんが、このようにセットアップすることが必要であると分かっている場合は、そのように設定できます。

- d) (任意) [説明 (Description)] を設定します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

ステップ 4 [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブをクリックし、IPv4 アドレスを設定します。

[タイプ (Type)] フィールドで以下のいずれかのオプションを選択します。

- [DHCP] : ネットワーク上の DHCP サーバからアドレスを取得する場合は、このオプションを選択します。高可用性を設定する場合、このオプションは使用できません。必要に応じて、次のオプションを変更します。
 - [ルート メトリック (Route Metric)] : DHCP サーバからデフォルトルートを取得する場合の、学習されるルートまでのアドミニストレーティブ ディスタンス (1 から 255)。デフォルトは 1 です。
 - [デフォルトルートを取得 (Obtain Default Route)] : DHCP サーバからデフォルトルートを取得するかどうかを指定します。通常は、デフォルトとなっているこのオプションを選択します。
- [静的 (Static)] : 固定アドレスを割り当てる場合は、このオプションを選択します。インターフェイスの IP アドレスとインターフェイスに接続されたネットワークのサブネット マスクを入力します。たとえば、10.100.10.0/24 ネットワークを接続した場合、10.100.10.1/24 と入力できます。このアドレスがネットワーク上ですでに使用されていないことを確認します。

ハイ アベイラビリティを設定し、HA についてこのインターフェイスをモニタしている場合は、スタンバイ IP アドレスも同じサブネットに設定します。スタンバイ アドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。

(注)

インターフェイスに対して設定されている DHCP サーバがある場合は、その設定が表示されます。DHCP アドレス プールを編集または削除できます。インターフェイスの IP アドレスを別のサブネットに変更する場合は、インターフェイスの変更を保存する前に、DHCP サーバを削除するか、新しいサブネット上にアドレスプールを構成する必要があります。[DHCP サーバの設定 \(947 ページ\)](#) を参照してください。

- [PPPoE] : ポイントツーポイント プロトコル (PPPoE) を使用してアドレスを取得する必要がある場合は、このオプションを選択します。インターフェイスが DSL モデム、ケーブルモデム、または ISP への他の接続に接続されており、ISP が PPPoE を使用して IP アドレスを提供している場合は、PPPoE が必要になる場合があります。ハイアベイラビリティを設定する場合、このオプションは使用できません。次の値を設定します。
 - [グループ名 (Group Name)] : この接続を表すために選択したグループ名を指定します。
 - [PPPoE ユーザ名 (PPPoE Username)] : ISP によって提供されたユーザ名を指定します。
 - [PPPoE パスワード (PPPoE Password)] : ISP によって提供されたパスワードを指定します。
 - [PPP 認証 (PPP Authentication)] : [PAP]、[CHAP]、または [MSCHAP] を選択します。

PAPは認証時にクリアテキストのユーザ名とパスワードを渡すため、セキュアではありません。CHAPでは、サーバのチャレンジに対して、クライアントは暗号化された「チャレンジとパスワード」およびクリアテキストのユーザ名を返します。CHAPはPAPよりセキュアですが、データを暗号化しません。MSCHAPはCHAPに似ていますが、サーバがCHAPのようにクリアテキストパスワードを扱わず、暗号化されたパスワードだけを保存、比較するため、CHAPよりセキュアです。また、MSCHAPではMPPEによるデータの暗号化のためのキーを生成します。

- [PPPoEの学習済みルートメトリック (PPPoE Learned Route Metric)] : アドミニストレーティブディスタンスを既知のルートに割り当てます。有効な値は1～255です。デフォルトでは、学習したルートのアドミニストレーティブディスタンスは1です。
- [PPPoEからデフォルトルートを取得 (Obtain Default Route from PPPoE)] : PPPoEサーバからのデフォルトルートの取得を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
- [IPアドレスタイプ (Ip Address Type)] : PPPoEサーバからIPアドレスを取得するには、[動的 (Dynamic)] を選択します。ISPから静的IPアドレスが割り当てられている場合は、[静的 (Static)] を選択することもできます。

ステップ5 (オプション)。[IPv6 アドレス (IPv6 Address)] タブをクリックし、IPv6 アドレスを設定します。

- [状態 (State)] : IPv6プロセスを有効にし、グローバルアドレスを設定しない場合にリンクローカルアドレスを自動的に設定するには、[有効化 (Enabled)] を選択します。リンクローカルアドレスは、インターフェイスのMACアドレスに基づいて生成されます (Modified EUI-64 形式)。

(注)

IPv6 を無効にしても、明示的な IPv6 アドレスで設定されているインターフェイスまたは自動設定が有効になっているインターフェイスでの IPv6 処理は無効になりません。

- [アドレスの自動設定 (Address Auto Configuration)] : このオプションは、アドレスを自動的に設定する場合に選択します。IPv6 ステートレス自動設定は、デバイスが存在するリンクで使用するグローバルな IPv6 プレフィックスのアドバタイズメントなどの、IPv6 サービスを提供するようにルータが設定されている場合に限り、グローバルな IPv6 アドレスを生成します。IPv6 ルーティング サービスがリンクで使用できない場合、リンクローカルな IPv6 アドレスのみが取得され、そのデバイスが属するネットワークリンクの外部にアクセスできません。リンクローカルアドレスは Modified EUI-64 インターフェイス ID に基づいています。

RFC 4862 では、ステートレス自動設定用に設定されたホストはルータ アドバタイズメントメッセージを送信しないと規定されていますが、この場合は、Threat Defense デバイスがルータ アドバタイズメントメッセージを送信します。メッセージを抑制して、RFC に準拠するためには、[RA を抑制 (Suppress RA)] を選択します。

- [スタティック アドレス/プレフィックス (Static Address/Prefix)] : ステートレス自動設定を使用しない場合、完全に静的なグローバル IPv6 アドレスおよびネットワークプレフィックス

クスを入力します。たとえば、「2001:0DB8::BA98:0:3210/48」のように入力します。IPv6 アドレッシングの詳細については、[IPv6 アドレッシング \(309 ページ\)](#) を参照してください。

アドレスをリンクローカルとしてのみ使用する場合は、[リンクローカル (Link-Local)] オプションを選択します。リンクローカルアドレスは、ローカル ネットワークの外部ではアクセスできません。ブリッジ グループ インターフェイスにリンクローカルアドレスを設定することはできません。

(注)

リンクローカルアドレスは、FE8、FE9、FEA、または FEB で始まっている必要があります。たとえば fe80::20d:88ff:feec:6a82 のようになります。Modified EUI-64 形式に基づくリンクローカルアドレスを自動的に割り当てることを推奨します。たとえば、その他のデバイスで Modified EUI-64 形式の使用が強制される場合、手動で割り当てたリンクローカルアドレスによりパケットがドロップされることがあります。

- [スタンバイ IP アドレス (Standby IP Address)] : 高可用性を設定し、HA に関してこのインターフェイスをモニタリングしている場合は、同じサブネットにスタンバイ IPv6 アドレスも設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。
- [RAを抑制 (Suppress RA)] : ルータ アドバタイズメントを抑制するかどうかを指定します。ネイバー デバイスがデフォルトのルータ アドレスをダイナミックに把握できるように、Threat Defenseはルータ アドバタイズメントに参加できます。デフォルトでは、ルータ アドバタイズメント メッセージ (ICMPv6 Type 134) は、設定済みの各 IPv6 インターフェイスに定期的送信されます。

ルータ アドバタイズメントもルータ送信要求メッセージに応答して送信されます (ICMPv6 Type 133)。ルータ要請メッセージは、システムの起動時にホストから送信されるため、ホストは、次にスケジュールされているルータ アドバタイズメント メッセージを待つことなくただちに自動設定できます。

Threat Defense デバイスで IPv6 プレフィックスを提供する必要があるインターフェイス (外部インターフェイスなど) では、これらのメッセージを抑制できます。

ステップ 6 (オプション) [詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) .

詳細設定には、ほとんどのネットワークに適したデフォルト値が入力されています。ネットワークの問題を解決するためでない限り、詳細設定を編集しないでください。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

次のタスク

- インターフェイスを適切なセキュリティゾーンに追加します。[セキュリティゾーンの設定 \(185 ページ\)](#) を参照してください。

- ダイナミック DNS サービスプロバイダーに完全修飾ドメイン名 (FQDN) を登録し、DNS サーバの IPv4 と IPv6 の両方のインターフェイスアドレスが更新されるように DDNS を設定します。「[ダイナミック DNS \(DDNS\) の設定 \(952 ページ\)](#)」を参照してください。

管理インターフェイスの設定

管理インターフェイスは、[インターフェイス]ページのデータインターフェイスとともに表示される特別なインターフェイスですが、データインターフェイスとしては動作しません。管理インターフェイスには次の使用方法があります。

- IP アドレスへの Web 接続と SSH 接続を開いて、インターフェイスからデバイスを設定できます。
- システムは、この IP アドレス経由でスマート ライセンスとデータベース更新を取得します。
- このインターフェイスはsyslogにも使用できます。

CLI セットアップウィザードを使用すると、システムの初期設定時にデバイスの管理アドレスとゲートウェイを設定します。Device Manager のセットアップウィザードを使用すると、管理アドレスとゲートウェイはデフォルトのまま変更されません。

必要に応じて、Device Manager でこれらのアドレスを変更できます。**configure network ipv4 manual** および **configure network ipv6 manual** コマンドを使用して、CLI で管理アドレスおよびゲートウェイを変更することもできます。デフォルトの管理インターフェイス設定に戻すには、**configure network {ipv4 | ipv6} dhcp-dp-route** コマンドを使用します。

スタティック アドレスを定義できます。あるいは、管理ネットワーク上の別のデバイスが DHCP サーバとして機能している場合は、DHCP を介してアドレスを取得することもできます。ほとんどのプラットフォームでは、管理インターフェイスはデフォルトで DHCP から IP アドレスを取得します。



注意 現在接続されているアドレスを変更した場合は、その変更がすぐに適用されるため、変更の保存と同時に Device Manager（または CLI）にアクセスできなくなります。デバイスに接続し直す必要があります。新しいアドレスが有効であること、管理ネットワーク上で使用可能であることを確認します。

始める前に

7.4以降にアップグレードしていて、管理インターフェイスと診断インターフェイスをまだマージしていない場合は、[管理インターフェイスと診断インターフェイスのマージ \(388 ページ\)](#)を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス]をクリックしてから、[デバイス]>[インターフェイス]リンクをクリックします。

ステップ 2 管理インターフェイスを編集します。

ステップ 3 管理ゲートウェイの定義方法を選択します。

ゲートウェイは、システムがインターネット経由でスマートライセンスとデータベース更新（VDB、ルール、位置情報、URLなど）を取得し、管理 DNS サーバと NTP サーバに到達する方法を決定します。次のオプションから選択します。

静的 IP オプション：

- [データインターフェイスをゲートウェイとして使用（Use the Data Interfaces as the Gateway）]：管理インターフェイスに別の管理ネットワークが接続されていない場合、このオプションを選択します。トラフィックは、ルーティングテーブルに基づいてインターネットにルーティングされ、通常は、外部インターフェイスを通過します。このオプションは Threat Defense Virtual デバイスではサポートされません。
- [一意のゲートウェイを管理インターフェイス用に使用（Use Unique Gateways for the Management Interface）]：管理インターフェイスに別の管理ネットワークが接続されている場合は、IPv4 および IPv6 用の一意のゲートウェイ（下記）を指定します。

DHCP IP オプション：

- [データインターフェイスへのフォールバックが可能な管理インターフェイス用に一意のゲートウェイを使用（Use Unique Gateways for the Management Interface with Fallback to Data Interfaces）]：DHCP サーバがゲートウェイを提供する場合、システムは管理インターフェイスを介してゲートウェイに管理トラフィックをルーティングします。DHCP サーバがゲートウェイを提供しない場合、システムはデータ インターフェイス ルーティングテーブルに基づいて管理トラフィックをルーティングし、通常は外部インターフェイスを介してトラフィックを送信します。このオプションは Threat Defense Virtual デバイスではサポートされません。
- [管理インターフェイス用に一意のゲートウェイを使用（フォールバックなし）（Use Unique Gateways for the Management Interface (no Fallback)）]：システムは、DHCP サーバの提供するゲートウェイに管理インターフェイスを介して管理トラフィックをルーティングします。DHCP サーバがゲートウェイを提供しない場合、システムが到達できるのは管理インターフェイスのローカルホストのみになります。データインターフェイスを介してルーティングするには、[フォールバック（Fallback）] オプションを選択します。

ステップ 4 IPv4 または IPv6 管理アドレス、サブネットマスクか IPv6 プレフィックス、および必要に応じてゲートウェイを設定します。

プロパティを少なくとも 1 セット設定する必要があります。1 つのセットを空白のままにすると、そのアドレッシング方式が無効になります。

- スタティック IP アドレスを設定するには、[タイプ]>[スタティック]を選択します。

- DHCP または IPv6 自動設定を介してアドレスとゲートウェイを取得するには、**[種類 (Type)]** > **[DHCP]** を選択します。

ステップ 5 (任意) スタティック **IPv4** アドレスを設定する場合は、インターフェイスで DHCP サーバを設定します。

管理インターフェイスで DHCP サーバを設定すると、管理ネットワークのクライアントは DHCP プールからアドレスを取得できます。このオプションは Threat Defense Virtual デバイスではサポートされません。

- a) **[DHCPサーバを有効にする]** > **[On]** をクリックします。
- b) サーバの **[アドレス プール (Address Pool)]** を入力します。

アドレス プールは、アドレスを要求するクライアントに対してサーバが提供できる IP アドレスの下限から上限までの範囲です。IP アドレスの範囲は、管理アドレスと同じサブネット上に存在する必要があり、インターフェイス自身の IP アドレス、ブロードキャストアドレス、サブネット ネットワーク アドレスをこれに含めることはできません。アドレスの開始値と終了値をハイフンで区切って指定します。たとえば、「192.168.45.46-192.168.45.254」と入力します。

ステップ 6 **[詳細設定]** ページで、IPv4 の場合は 8～1500、IPv6 を有効にした場合は 1280～1500 の管理インターフェイスの MTU を設定します。

デフォルト値は 1500 バイトです。

ステップ 7 **[保存 (Save)]** をクリックし、警告を確認して **[OK]** をクリックします。

ブリッジグループの設定

ブリッジグループは、1 つ以上のインターフェイスをグループ化した仮想インターフェイスです。インターフェイスをグループ化する主な理由は、スイッチドインターフェイスのグループを作成することです。このようにして、ワークステーションやその他のエンドポイントデバイスをブリッジグループに含まれるインターフェイスに直接接続できます。これらのデバイスを別個の物理スイッチを介して接続しなくても、スイッチをブリッジグループメンバーに接続できます。

グループメンバーには IP アドレスがありません。代わりに、すべてのメンバーインターフェイスがブリッジ仮想インターフェイス (BVI) の IP アドレスを共有します。BVI で IPv6 を有効にすると、メンバーインターフェイスに固有のリンク ローカルアドレスが割り当てられます。

メンバーインターフェイスは個別に有効または無効にします。このようにして、使用しないインターフェイスは、ブリッジグループから削除しなくても無効にできます。ブリッジグループ自体は常に有効にされます。

一般に、ブリッジグループインターフェイス (BVI) には DHCP サーバを設定します。このようにして、メンバーインターフェイスで接続されるすべてのエンドポイントに IP アドレス

を提供します。ただし、必要に応じて、メンバーインターフェイスで接続するすべてのエンドポイントにスタティック アドレスを設定することもできます。ブリッジグループに含まれるすべてのエンドポイントには、ブリッジグループ IP アドレスと同じサブネット上の IP アドレスが割り当てられていなければなりません。

ガイドラインと制約事項

- ブリッジグループを 1 つ追加できます。
- Device Manager 定義の EtherChannel はブリッジグループメンバーとしてサポートされません。Firepower 4100/9300 の EtherChannel はブリッジグループメンバーとなることができます。
- Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220 では、同じブリッジグループ内に論理 VLAN インターフェイスと物理ファイアウォール インターフェイスを混在させることはできません。
- ISA 3000 は、ブリッジグループ BVII を使用して事前に設定されています（名前は付けられていません。これは、ルーティングに参加しないことを意味します）。BVII にはすべてのデータインターフェイス（GigabitEthernet1/1（outside1）、GigabitEthernet1/2（inside1）、GigabitEthernet1/3（outside2）、および GigabitEthernet1/4（inside2））が含まれます。ネットワークに合わせて BVII IP アドレスを設定する必要があります。

始める前に

ブリッジグループのメンバーにするインターフェイスを設定します。具体的には、各メンバーインターフェイスが以下の要件を満たしている必要があります。

- インターフェイスには名前が付けられている必要があります。
- 静的に定義されているか DHCP から取得するかに関わらず、インターフェイスに IPv4 または IPv6 アドレスを定義することはできません。現在使用中のインターフェイスからアドレスを削除する必要がある場合、アドレスを持つインターフェイスに依存する他の設定（スタティック ルート、DHCP サーバ、NAT ルールなど）も、インターフェイスから削除する必要があります。
- インターフェイスをセキュリティ ゾーンから削除し（ゾーン内にある場合）、インターフェイスの NAT ルールをすべて削除してからでないと、インターフェイスをブリッジグループに追加することはできません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックし、[ブリッジグループ (Bridge Groups)] をクリックします。

ブリッジグループのリストに、既存のブリッジグループが表示されます。各ブリッジグループのメンバーインターフェイスを表示するには、開/閉矢印をクリックします。また、メンバー

インターフェイスは[インターフェイス (Interfaces)] または[VLAN (VLANs)] ページでも個別に表示されます。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- BV11 ブリッジグループの編集アイコン (🔍) をクリックします。
- [ブリッジグループの作成 (Create Bridge Group)] をクリックするか、プラスアイコン (+) をクリックして、新しいグループを作成します。

(注)

定義できるブリッジグループは1つだけです。ブリッジグループがすでに定義されている場合、新しいグループを作成するのではなく定義済みのグループを編集します。新しいブリッジグループを作成しなければならない場合は、まず既存のブリッジグループを削除する必要があります。

- 不要になったブリッジグループの削除アイコン (🗑️) をクリックします。ブリッジグループを削除すると、そのグループのメンバーは標準のルーテッドインターフェイスになります。NAT ルールやセキュリティゾーンメンバーシップはすべてそのまま保持されます。これらのインターフェイスを編集して、インターフェイスにIPアドレスを指定できます。新しいブリッジグループに追加する場合は、まず NAT ルールを削除して、インターフェイスをセキュリティゾーンから削除する必要があります。

ステップ 3 以下を設定します。

- a) (任意) [インターフェイス名 (Interface Name)] を設定します。

ブリッジグループの名前（最大 48 文字）を設定します。英字は小文字でなければなりません。例、[inside]または[outside]。このBVIを他の名前付きインターフェイス間のルーティングに参加させる場合は、名前を設定します。

（注）

名前を変更すると、以前の名前が使用されていたすべての箇所（セキュリティゾーン、syslog サーバオブジェクト、DHCP サーバ定義など）で変更が自動的に反映されます。ただし、通常、ポリシーや設定に名前のないインターフェイスは使用できないため、最初に古い名前を使用しているすべての設定を削除しないと、その名前は削除できません。

- b) （任意）[説明（Description）]を設定します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

- c) [ブリッジグループメンバー（Bridge Group Members）]のリストを編集します。

単一のブリッジグループに追加できるインターフェイスまたはサブインターフェイスの数は、最大 64 個です。

- インターフェイスの追加：プラスアイコン（+）をクリックし、1 つ以上のインターフェイスをクリックし、[OK]をクリックします。
- インターフェイスの削除：対象にカーソルを合わせ、右側に表示される [x] をクリックします。

ステップ 4 [IPv4 アドレス（IPv4 Address）] タブをクリックし、IPv4 アドレスを設定します。

[タイプ（Type）] フィールドで以下のいずれかのオプションを選択します。

- [静的（Static）]：固定アドレスを割り当てる場合は、このオプションを選択します。ブリッジグループの IP アドレスとサブネットマスクを入力します。接続されているエンドポイントはすべて、このネットワーク上に存在することになります。このアドレスがネットワーク上ですでに使用されていないことを確認します。

ハイアベイラビリティを設定し、HA についてこのインターフェイスをモニタしている場合は、スタンバイ IP アドレスも同じサブネットに設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイデバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワークテストを使用してスタンバイインターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンクステートだけです。

（注）

インターフェイスに対して設定されている DHCP サーバがある場合は、その設定が表示されます。DHCP アドレスプールを編集または削除できます。インターフェイスの IP アドレスを別のサブネットに変更する場合は、インターフェイスの変更を保存する前に、DHCP サーバを削除するか、新しいサブネット上にアドレスプールを構成する必要があります。[DHCP サーバの設定（947 ページ）](#)を参照してください。

- [ダイナミック（Dynamic）]（DHCP）：ネットワーク上の DHCP サーバからアドレスを取得する場合は、このオプションを選択します。これはブリッジグループの一般的なオプ

ションではありませんが、必要に応じて設定できます。高可用性を設定する場合、このオプションは使用できません。必要に応じて、次のオプションを変更します。

- [ルート メトリック (Route Metric)] : DHCP サーバからデフォルト ルートを取得する場合の、学習されるルートまでのアドミニストレーティブ ディスタンス (1 から 255)。デフォルトは 1 です。
- [デフォルトルートを取得 (Obtain Default Route)] : DHCP サーバからデフォルト ルートを取得するかどうかを指定します。通常は、デフォルトとなっているこのオプションを選択します。

ステップ 5 (オプション) 。[IPv6 アドレス (IPv6 Address)] タブをクリックし、IPv6 アドレスを設定します。

- [状態 (State)] : IPv6 プロセスを有効にし、グローバルアドレスを設定しない場合にリンクローカルアドレスを自動的に設定するには、[有効化 (Enabled)] を選択します。リンクローカルアドレスは、インターフェイスの MAC アドレスに基づいて生成されます (Modified EUI-64 形式)。

(注)

IPv6 を無効にしても、明示的な IPv6 アドレスで設定されているインターフェイスまたは自動設定が有効になっているインターフェイスでの IPv6 処理は無効になりません。

- [スタティック アドレス/プレフィックス (Static Address/Prefix)] : ステートレス自動設定を使用しない場合、完全に静的なグローバル IPv6 アドレスおよびネットワークプレフィックスを入力します。たとえば、「2001:0DB8::BA98:0:3210/48」のように入力します。IPv6 アドレッシングの詳細については、[IPv6 アドレッシング \(309ページ\)](#) を参照してください。

アドレスをリンクローカルとしてのみ使用する場合は、[リンクローカル (Link-Local)] オプションを選択します。リンクローカルアドレスは、ローカル ネットワークの外部ではアクセスできません。ブリッジグループ インターフェイスにリンクローカルアドレスを設定することはできません。

(注)

リンクローカルアドレスは、FE8、FE9、FEA、または FEB で始まっている必要があります。たとえば fe80::20d:88ff:feec:6a82 のようになります。Modified EUI-64 形式に基づくリンクローカルアドレスを自動的に割り当てることを推奨します。たとえば、その他のデバイスで Modified EUI-64 形式の使用が強制される場合、手動で割り当てたリンクローカルアドレスによりパケットがドロップされることがあります。

- [スタンバイ IP アドレス (Standby IP Address)] : 高可用性を設定し、HA に関してこのインターフェイスをモニタリングしている場合は、同じサブネットにスタンバイ IPv6 アドレスも設定します。スタンバイ アドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。

- [RAを抑制 (Suppress RA)] : ルータ アドバタイズメントを抑制するかどうかを指定します。ネイバー デバイスがデフォルトのルータ アドレスをダイナミックに把握できるように、Threat Defense デバイスはルータ アドバタイズメントに参加できます。デフォルトでは、ルータ アドバタイズメント メッセージ (ICMPv6 Type 134) は、設定済みの各 IPv6 インターフェイスに定期的に送信されます。

ルータアドバタイズメントもルータ送信要求メッセージに応答して送信されます (ICMPv6 Type 133)。ルータ要請メッセージは、システムの起動時にホストから送信されるため、ホストは、次にスケジュールされているルータ アドバタイズメント メッセージを待つことなくただちに自動設定できます。

Threat Defense デバイスで IPv6 プレフィックスを提供する必要があるインターフェイス (外部インターフェイスなど) では、これらのメッセージを抑制できます。

ステップ 6 (オプション) [詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) .

ブリッジグループメンバーインターフェイスに対して最も詳細なオプションを設定しますが、一部はブリッジグループ インターフェイスでも使用できます。

詳細設定には、ほとんどのネットワークに適したデフォルト値が入力されています。ネットワークの問題を解決するためでない限り、詳細設定を編集しないでください。

ステップ 7 [OK]をクリックします。

次のタスク

- 使用する予定のすべてのメンバー インターフェイスが有効にされていることを確認します。
- ブリッジグループの DHCP サーバを設定します。 [DHCP サーバの設定 \(947 ページ\)](#) を参照してください。
- メンバーインターフェイスを適切なセキュリティゾーンに追加します。 [セキュリティゾーンの設定 \(185 ページ\)](#) を参照してください。
- アイデンティティ、NAT、アクセスなどのポリシーを確認し、ブリッジグループとメンバー インターフェイスに必要なサービスを指定します。

EtherChannel の設定

この項では、EtherChannel およびその設定方法について説明します。



(注) 次のモデルでは、Device Manager で EtherChannel を追加できます。

- Firepower 1000
- Cisco Secure Firewall 1200
- Cisco Secure Firewall 3100
- ISA 3000

EtherChannel で Firepower 1010 または Cisco Secure Firewall 1210/1220 のスイッチポートまたは VLAN インターフェイスを使用することはできません。

Firepower 4100/9300 は EtherChannel をサポートしていますが、シャーシの FXOS で EtherChannel のすべてのハードウェア設定を実行する必要があります。Firepower 4100/9300 の Etherchannel は、単一の物理インターフェイスとともに Device Manager の [Interfaces] ページに表示されます。また、Threat Defense Virtual などの他のモデルでは、Device Manager で EtherChannel を設定できません。

EtherChannel について

802.3ad EtherChannel は、単一のネットワークの帯域幅を増やすことができるように、個別のイーサネット リンク（チャンネル グループ）のバンドルで構成される論理インターフェイスです（ポートチャンネル インターフェイスと呼びます）。ポートチャンネル インターフェイスは、インターフェイス関連の機能を設定するときに、物理インターフェイスと同じように使用します。

モデルでサポートされているインターフェイスの数に応じて、最大 48 個の Etherchannel を設定できます。

チャンネル グループのインターフェイス

各チャンネル グループには、最大 8 個のアクティブ インターフェイスを持たせることができます。

チャンネルグループのすべてのインターフェイスは、同じタイプと速度である必要があります。チャンネルグループに追加された最初のインターフェイスによって、正しいタイプと速度が決まります。

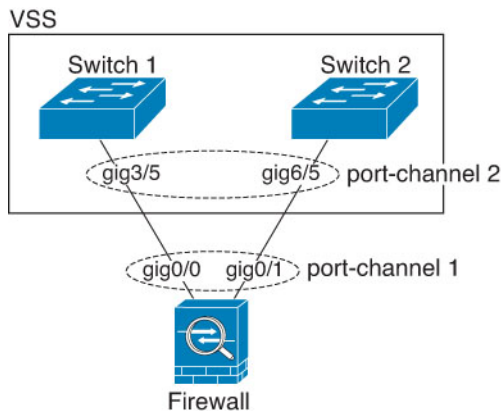
EtherChannel によって、チャンネル内の使用可能なすべてのアクティブインターフェイスのトラフィックが集約されます。インターフェイスは、送信元または宛先 MAC アドレス、IP アドレス、TCP および UDP ポート番号、および VLAN 番号に基づいて、独自のハッシュ アルゴリズムを使用して選択されます。

別のデバイスの EtherChannel への接続

Threat Defense EtherChannel の接続先のデバイスも 802.3ad EtherChannel をサポートしている必要があります。たとえば、Catalyst 6500 スイッチまたは Cisco Nexus 7000 に接続できます。

スイッチが仮想スイッチングシステム (VSS) または仮想ポートチャネル (vPC) の一部である場合、同じ EtherChannel 内の Threat Defense インターフェイスを VSS/vPC 内の個別のスイッチに接続できます。個別のスイッチは単一のスイッチのように動作するため、スイッチインターフェイスは同じ EtherChannel ポートチャネルインターフェイスのメンバです。

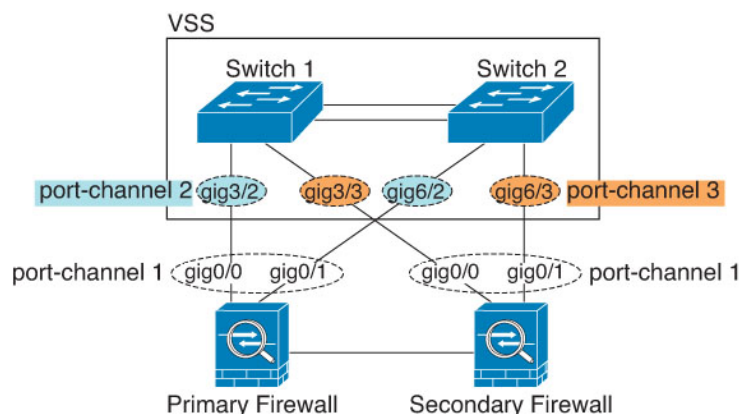
図 11: VSS/vPC への接続



- (注) Threat Defense デバイスがトランスペアレント ファイアウォール モードになっており、2 組の VSS/vPC スイッチ間に Threat Defense デバイスを配置する場合は、EtherChannel 内で Threat Defense デバイスに接続されたすべてのスイッチポートで単方向リンク検出 (UDLD) を無効にしてください。UDLD を有効にすると、スイッチポートは他の VSS/vPC ペアの両方のスイッチから送信された UDLD パケットを受信する場合があります。受信側スイッチは、"UDLD ネイバーの不一致" という理由で受信側インターフェイスをダウン状態にします。

Threat Defense デバイスをアクティブ/スタンバイフェールオーバー展開で使用する場合、Threat Defense デバイスごとに 1 つ、VSS/vPC 内のスイッチで個別の EtherChannel を作成する必要があります。各 Threat Defense デバイスで、1 つの EtherChannel が両方のスイッチに接続します。すべてのスイッチインターフェイスを両方の Threat Defense デバイスに接続する単一の EtherChannel にグループ化できる場合でも（この場合、個別の Threat Defense システム ID のため、EtherChannel は確立されません）、単一の EtherChannel は望ましくありません。これは、トラフィックをスタンバイ Threat Defense デバイスに送信しないようにするためです。

図 12: アクティブ/スタンバイ フェールオーバーと VSS/vPC



Link Aggregation Control Protocol

リンク集約制御プロトコル（LACP）では、2つのネットワーク デバイス間でリンク集約制御プロトコル データ ユニット（LACPDU）を交換することによって、インターフェイスが集約されます。

EtherChannel 内の各物理インターフェイスを次のように設定できます。

- アクティブ：LACP アップデートを送信および受信します。アクティブ EtherChannel は、アクティブまたはパッシブ EtherChannel と接続を確立できます。LACP トラフィックを最小にする必要がある場合以外は、アクティブ モードを使用する必要があります。
- オン：EtherChannel は常にオンであり、LACP は使用されません。「オン」の EtherChannel は、別の「オン」の EtherChannel のみと接続を確立できます。

LACP では、ユーザが介入しなくても、EtherChannel へのリンクの自動追加および削除が調整されます。また、コンフィギュレーションの誤りが処理され、メンバ インターフェイスの両端が正しいチャンネルグループに接続されていることがチェックされます。「オン」モードではインターフェイスがダウンしたときにチャンネル グループ内のスタンバイ インターフェイスを使用できず、接続とコンフィギュレーションはチェックされません。

ロード バランシング

Threat Defense デバイスは、パケットの送信元および宛先 IP アドレスをハッシュすることによって、パケットを EtherChannel 内のインターフェイスに分散します（この基準は設定可能です）。生成されたハッシュ値をアクティブなリンクの数で割り、そのモジュロ演算で求められた余りの値によってフローの割り当て先のインターフェイスが決まります。**hash_value mod active_links**の結果が0となるすべてのパケットは、EtherChannel内の最初のインターフェイスへ送信され、以降は結果が1となるものは2番目のインターフェイスへ、結果が2となるものは3番目のインターフェイスへ、というように送信されます。たとえば、15 個のアクティブ リンクがある場合、モジュロ演算では 0 ～ 14 の値が得られます。6 個のアクティブ リンクの場合、値は 0 ～ 5 となり、以降も同様になります。

アクティブ インターフェイスがダウンし、スタンバイ インターフェイスに置き換えられない場合、トラフィックは残りのリンク間で再バランスされます。失敗はレイヤ2のスパニングツリーとレイヤ3のルーティング テーブルの両方からマスクされるため、他のネットワーク デバイスへのスイッチオーバーはトランスペアレントです。

EtherChannel MAC アドレス

1つのチャンネル グループに含まれるすべてのインターフェイスは、同じ MAC アドレスを共有します。この機能によって、EtherChannelはネットワーク アプリケーションとユーザに対して透過的になります。ネットワーク アプリケーションやユーザから見えるのは1つの論理接続のみであり、個々のリンクのことは認識しないからです。

Firepower および Secure Firewall ハードウェア

ポートチャンネル インターフェイスは、内部インターフェイスの内部データ 0/1 の MAC アドレスを使用します。または、ポート チャンネル インターフェイスの MAC アドレスを手動で設定することもできます。シャーシ上のすべての EtherChannel インターフェイスは同じ MAC アドレスを使用するため、たとえば、SNMP ポーリングを使用する場合、複数のインターフェイスが同じ MAC アドレスを持つことに注意してください。



- (注) メンバーインターフェイスは、再起動後に内部データ 0/1 MAC アドレスのみを使用します。再起動する前に、メンバーインターフェイスは独自の MAC アドレスを使用するが再起動後に新しいメンバーインターフェイスを追加する場合、MAC アドレスを更新するためにもう一度再起動する必要があります。

EtherChannel インターフェイスのガイドライン

ブリッジグループ

Device Manager 定義の EtherChannel はブリッジグループメンバーとしてサポートされません。Firepower 4100/9300 上の Etherchannel は、ブリッジグループメンバーにすることができます。

高可用性

- EtherChannel インターフェイスを高可用性 リンクとして使用する場合、高可用性 ペアの両方のユニットでその事前設定を行う必要があります。プライマリユニットで設定し、セカンダリユニットに複製されることは想定できません。これは、複製には高可用性 リンク自体が必要であるためです。
- EtherChannel インターフェイスをステートリンクに対して使用する場合、特別なコンフィギュレーションは必要ありません。コンフィギュレーションは通常どおりプライマリユニットから複製されます。Firepower 4100/9300 シャーシでは、EtherChannel を含むすべてのインターフェイスを、両方のユニットで事前に設定する必要があります。

- 高可用性の EtherChannel インターフェイスをモニターできます。アクティブなメンバーインターフェイスがスタンバイインターフェイスにフェールオーバーした場合、デバイスレベルの高可用性をモニタしているときには、EtherChannel インターフェイスで障害が発生しているようには見えません。すべての物理インターフェイスで障害が発生した場合にのみ、EtherChannel インターフェイスで障害が発生しているように見えます。
- EtherChannel インターフェイスを高可用性リンクまたはステートリンクに対して使用する場合、異常なパケットを防止するために、EtherChannel 内の 1 つのインターフェイスのみが使用されます。そのインターフェイスで障害が発生した場合は、EtherChannel 内の次のリンクが使用されます。高可用性リンクとして使用中の EtherChannel の設定は変更できません。設定を変更するには、高可用性を一時的に無効にする必要があります。これにより、その期間中は高可用性が発生することはありません。

サポート モデル

- 次のモデルでは、Device Manager で EtherChannel を追加できます。
 - Firepower 1000
 - Cisco Secure Firewall 1200
 - Cisco Secure Firewall 3100
 - ISA 3000

Firepower 4100/9300 は EtherChannel をサポートしていますが、シャーシの FXOS で EtherChannel のすべてのハードウェア設定を実行する必要があります。Firepower 4100/9300 の Etherchannel は、単一の物理インターフェイスとともに Device Manager の [Interfaces] ページに表示されます。また、ASA 5500-X シリーズなどの他のモデルでは、Device Manager で EtherChannel を設定できません。

- EtherChannel で Firepower 1010 または Cisco Secure Firewall 1210/1220 のスイッチポートまたは VLAN インターフェイスを使用することはできません。

EtherChannelの一般的なガイドライン

- モデルで利用可能なインターフェイスの数に応じて、最大 48 個の Etherchannel を設定できます。
- 各チャネル グループは、最大 8 個のアクティブ インターフェイスを設定できます。
- チャネルグループ内のすべてのインターフェイスは、メディアタイプと速度が同じでなければなりません。メディアタイプは RJ-45 または SFP のいずれかです。異なるタイプ（銅と光ファイバ）の SFP を混在させることができます。大容量のインターフェイスで速度を低く設定することでインターフェイス容量（1GB と 10GB のインターフェイスなど）を混在させることはできません。ただし、Cisco Secure Firewall 1200/3100 の場合は、速度が [SFPを検出 (Detect SFP)] に設定されている限り、異なるインターフェイス容量をサポートします。この場合、最も低い共通速度が使用されます。

- Threat Defense の EtherChannel の接続先デバイスも 802.3ad EtherChannel をサポートしている必要があります。
- Threat Defense デバイスは、VLAN タグ付きの LACPDU をサポートしていません。Cisco IOS `vlan dot1Q tag native` コマンドを使用して隣接スイッチのネイティブ VLAN タギングを有効にすると、Threat Defense デバイスはタグ付きの LACPDU をドロップします。隣接スイッチのネイティブ VLAN タギングは、必ず無効にしてください。
- LACP レートはモデルによって異なります。レート（通常または高速）を設定すると、デバイスは接続中のスイッチにそのレートを要求します。デバイスの方も接続中のスイッチによって要求されたレートで送信します。両側で同じレートを設定することを推奨します。
 - Firepower 4100/9300 : LACP レートは、FXOS ではデフォルトで高速に設定されていますが、通常（低速とも呼ばれる）に設定することもできます。
 - Cisco Secure Firewall 3100 LACP レートは、デフォルトで通常（低速）に設定されていますが、デバイスで高速に設定することもできます。
 - 他のすべてのモデル : LACP レートが通常（低速とも呼ばれる）に設定されており、変更できません。つまり、デバイスは接続中のスイッチに常に低速レートを要求します。スイッチのレートを低速に設定して、両側が同じレートで LACP メッセージを送信するように設定することを推奨します。
- 15.1(1)S2 以前の Cisco IOS ソフトウェアバージョンを実行する Threat Defense では、スイッチスタックへの EtherChannel の接続がサポートされていませんでした。デフォルトのスイッチ設定では、Threat Defense EtherChannel がクロススタックに接続されている場合、プライマリスイッチの電源がオフになると、残りのスイッチに接続されている EtherChannel は起動しません。互換性を高めるため、`stack-mac persistent timer` コマンドを設定して、十分なリロード時間を確保できる大きな値、たとえば 8 分、0（無制限）などを設定します。または、15.1(1)S2 など、より安定したスイッチ ソフトウェア バージョンにアップグレードできます。
- すべての Threat Defense コンフィギュレーションは、メンバー物理インターフェイスではなく論理 EtherChannel インターフェイスを参照します。

EtherChannel の追加

EtherChannel を追加して、メンバーインターフェイスを割り当てます。



(注) 次のモデルでは、Device Manager で EtherChannel を追加できます。

- Firepower 1000
- Cisco Secure Firewall 1200
- Cisco Secure Firewall 3100
- ISA 3000

EtherChannel で Firepower 1010 または Cisco Secure Firewall 1210/1220 のスイッチポートまたは VLAN インターフェイスを使用することはできません。

Firepower 4100/9300 は EtherChannel をサポートしていますが、シャーシの FXOS で EtherChannel のすべてのハードウェア設定を実行する必要があります。Firepower 4100/9300 の Etherchannel は、単一の物理インターフェイスとともに Device Manager の [Interfaces] ページに表示されます。また、ASA 5500-X シリーズなどの他のモデルでは、Device Manager で EtherChannel を設定できません。

始める前に

- チャンネルグループ内のすべてのインターフェイスは、メディアタイプと速度が同じでなければなりません。メディアタイプは RJ-45 または SFP のいずれかです。異なるタイプ（銅と光ファイバ）の SFP を混在させることができます。大容量のインターフェイスで速度を低く設定することでインターフェイス容量（1GB と 10GB のインターフェイスなど）を混在させることはできません。ただし、Cisco Secure Firewall 1200/3100 の場合は、速度が [SFP を検出 (Detect SFP)] に設定されている限り、異なるインターフェイス容量をサポートします。この場合、最も低い共通速度が使用されます。
- メンバーインターフェイスに名前を付けることはできません。



注意 コンフィギュレーション内でインターフェイスをすでに使用している場合、名前を削除すると、このインターフェイスを参照しているすべてのコンフィギュレーションが消去されます。

手順

ステップ 1 [デバイス] をクリックし、[インターフェイス] サマリーにあるリンクをクリックし、[EtherChannels] をクリックします。

[Etherchannel] リストには、既存の Etherchannel、それらの名前、アドレス、および状態が表示されます。各 EtherChannel のメンバーインターフェイスを表示するには、開/閉矢印をクリックします。メンバーインターフェイスは [インターフェイス (Interfaces)] ページにも個別に表示されます。

ステップ 2 [EtherChannelの作成 (Create EtherChannel)] をクリックするか（現在の EtherChannel がない場合）、またはプラスアイコン（+）をクリックして [EtherChannel] をクリックし、新しい EtherChannel を作成します。

ステップ 3 次を設定します。

a) [インターフェイス名 (Interface Name)] を設定します。

EtherChannel の名前を 48 文字以内で設定します。英字は小文字でなければなりません。例、[inside] または [outside]。

(注)

名前を変更すると、以前の名前が使用されていたすべての箇所（セキュリティゾーン、syslog サーバオブジェクト、DHCP サーバ定義など）で変更が自動的に反映されます。ただし、通常、ポリシーや設定に名前のないインターフェイスは使用できないため、最初に古い名前を使用しているすべての設定を削除しないと、その名前は削除できません。

b) [モード (Mode)] を設定します。

- [ルーテッド (Routed)] : ルーテッドモードインターフェイスでは、トラフィックはフローの維持、IP 層と TCP 層の両方でのフロー状態のトラッキング、IP の最適化、TCP の正規化、ファイアウォールポリシーなど、すべてのファイアウォール機能の管理下に置かれます。トラフィックがインターフェイスを経由するようにする場合は、このモードを使用します。これが通常のインターフェイス モードです。
 - [インライン (Inline)] : インターフェイスをインラインセットに追加すると、モードがインラインに変更されます。インラインをモードとして直接選択することはできません。インラインセットで使用するインターフェイスを編集する場合は、初期モードとして **ルーテッドモード** を選択し、どのタイプの IP アドレッシングも設定しないでください。
 - [パッシブ (Passive)] : パッシブ インターフェイスは、スイッチ SPAN またはミラーポートを使用してネットワーク中のトラフィック フローをモニタします。SPAN またはミラーポートでは、スイッチ上の他のポートからトラフィックをコピーできます。この機能により、ネットワークトラフィックのフローに含まれなくても、ネットワークでのシステムの可視性が備わります。パッシブ展開で設定されたシステムでは、特定のアクション（トラフィックのブロッキングやシェーピングなど）を実行することができません。パッシブインターフェイスはすべてのトラフィックを無条件で受信します。このインターフェイスで受信されたトラフィックは再送されません。このモードを選択する場合、残りの手順は実行しないでください。代わりに、「[パッシブモードでの物理インターフェイスの設定 \(361 ページ\)](#)」を参照してください。
- c) **EtherChannel ID** を 1 ～ 48 の範囲で設定します (Firepower 1010 および Secure Firewall 1210 の場合は 1 ～ 8、1220 の場合は 1 ～ 10)。
- d) [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 () に設定します。
- e) (任意) [説明 (Description)] を設定します。
- 説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。
- f) [EtherChannelモード (EtherChannel Mode)] を指定します。
- [アクティブ (Active)] : LACP アップデートを送信および受信します。アクティブ EtherChannel は、アクティブまたはパッシブ EtherChannel と接続を確立できます。LACP トラフィックを最小にする必要がある場合以外は、アクティブ モードを使用する必要があります。
 - [オン (On)] : EtherChannel は常にオンであり、LACP は使用されません。「オン」の EtherChannel は、別の「オン」の EtherChannel のみと接続を確立できます。
- g) (Secure Firewall 3100 のみ) **[EtherChannelレート (EtherChannel Rate)]** を選択します。接続されているスイッチの設定と一致させる必要があります。
- [デフォルト (Default)] : デフォルトは **[通常 (Normal)]** (低速、30 秒ごと) です。
 - [通常 (Normal)] : 30 秒ごとに LACP データ ユニットを受信します。
 - [高速 (Fast)] : 1 秒ごとに LACP データ ユニットを受信します。

- h) [EtherChannelメンバー (EtherChannel Members)] を追加します。

EtherChannel には、最大 8 つの（無名）インターフェイスを追加できます。

- インターフェイスの追加：プラスアイコン（）をクリックし、1 つ以上のインターフェイスをクリックし、[OK] をクリックします。
- インターフェイスの削除：対象にカーソルを合わせ、右側に表示される [x] をクリックします。

ステップ 4 [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブをクリックし、IPv4 アドレスを設定します。

[タイプ (Type)] フィールドで以下のいずれかのオプションを選択します。

- [DHCP]：ネットワーク上の DHCP サーバからアドレスを取得する場合は、このオプションを選択します。高可用性を設定する場合、このオプションは使用できません。必要に応じて、次のオプションを変更します。
 - [ルート メトリック (Route Metric)]：DHCP サーバからデフォルトルートを取得する場合の、学習されるルートまでのアドミニストレーティブ ディスタンス（1 から 255）。デフォルトは 1 です。
 - [デフォルトルートを取得 (Obtain Default Route)]：DHCP サーバからデフォルトルートを取得するかどうかを指定します。通常は、デフォルトとなっているこのオプションを選択します。
- [静的 (Static)]：固定アドレスを割り当てる場合は、このオプションを選択します。インターフェイスの IP アドレスとインターフェイスに接続されたネットワークのサブネットマスクを入力します。たとえば、10.100.10.0/24 ネットワークを接続した場合、10.100.10.1/24 と入力できます。このアドレスがネットワーク上ですでに使用されていないことを確認します。

ハイ アベイラビリティを設定し、HA についてこのインターフェイスをモニタしている場合は、スタンバイ IP アドレスも同じサブネットに設定します。スタンバイ アドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。

（注）

インターフェイスに対して設定されている DHCP サーバがある場合は、その設定が表示されます。DHCP アドレス プールを編集または削除できます。インターフェイスの IP アドレスを別のサブネットに変更する場合は、インターフェイスの変更を保存する前に、DHCP サーバを削除するか、新しいサブネット上にアドレスプールを構成する必要があります。[DHCP サーバの設定 \(947 ページ\)](#) を参照してください。

- [PPPoE]：ポイントツーポイント プロトコル (PPPoE) を使用してアドレスを取得する必要がある場合は、このオプションを選択します。インターフェイスが DSL モデム、ケーブルモデム、または ISP への他の接続に接続されており、ISP が PPPoE を使用して IP ア

ドレスを提供している場合は、PPPoE が必要になる場合があります。ハイアベイラビリティを設定する場合、このオプションは使用できません。次の値を設定します。

- [グループ名 (Group Name)] : この接続を表すために選択したグループ名を指定します。
- [PPPoEユーザ名 (PPPoE Username)] : ISP によって提供されたユーザ名を指定します。
- [PPPoEパスワード (PPPoE Password)] : ISP によって提供されたパスワードを指定します。
- [PPP 認証 (PPP Authentication)] : [PAP]、[CHAP]、または[MSCHAP]を選択します。

PAP は認証時にクリアテキストのユーザ名とパスワードを渡すため、セキュアではありません。CHAP では、サーバのチャレンジに対して、クライアントは暗号化された「チャレンジとパスワード」およびクリアテキストのユーザ名を返します。CHAP は PAP よりセキュアですが、データを暗号化しません。MSCHAP は CHAP に似ていますが、サーバが CHAP のようにクリアテキストパスワードを扱わず、暗号化されたパスワードだけを保存、比較するため、CHAP よりセキュアです。また、MSCHAP では MPPE によるデータの暗号化のためのキーを生成します。

- [PPPoEの学習済みルートメトリック (PPPoE Learned Route Metric)] : アドミニストレーティブディスタンスを既知のルートに割り当てます。有効な値は1～255です。デフォルトでは、学習したルートのアドミニストレーティブディスタンスは1です。
- [PPPoEからデフォルトルートを取得 (Obtain Default Route from PPPoE)] : PPPoE サーバからのデフォルトルートの取得を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
- [IPアドレスタイプ (Ip Address Type)] : PPPoE サーバから IP アドレスを取得するには、[動的 (Dynamic)] を選択します。ISP から静的 IP アドレスが割り当てられている場合は、[静的 (Static)] を選択することもできます。

ステップ 5 (オプション)。[IPv6 アドレス (IPv6 Address)] タブをクリックし、IPv6 アドレスを設定します。

- [状態 (State)] : IPv6 プロセスを有効にし、グローバルアドレスを設定しない場合にリンクローカルアドレスを自動的に設定するには、[有効化 (Enabled)] を選択します。リンクローカルアドレスは、インターフェイスの MAC アドレスに基づいて生成されます (Modified EUI-64 形式)。

(注)

IPv6 を無効にしても、明示的な IPv6 アドレスで設定されているインターフェイスまたは自動設定が有効になっているインターフェイスでの IPv6 処理は無効になりません。

- [アドレスの自動設定 (Address Auto Configuration)] : このオプションは、アドレスを自動的に設定する場合に選択します。IPv6 ステートレス自動設定は、デバイスが存在するリンクで使用するグローバルな IPv6 プレフィックスのアドバタイズメントなどの、IPv6 サービスを提供するようにルータが設定されている場合に限り、グローバルな IPv6 アドレス

を生成します。IPv6 ルーティング サービスがリンクで使用できない場合、リンクローカルな IPv6 アドレスのみが取得され、そのデバイスが属するネットワーク リンクの外部にアクセスできません。リンクローカルアドレスは Modified EUI-64 インターフェイス ID に基づいています。

RFC 4862 では、ステートレス自動設定用に設定されたホストはルータ アドバタイズメント メッセージを送信しないと規定されていますが、この場合は、Threat Defense デバイスがルータ アドバタイズメント メッセージを送信します。メッセージを抑制して、RFC に準拠するためには、[RA を抑制 (Suppress RA)] を選択します。

- [スタティック アドレス/プレフィックス (Static Address/Prefix)] : ステートレス自動設定を使用しない場合、完全に静的なグローバル IPv6 アドレスおよびネットワーク プレフィックスを入力します。たとえば、「2001:0DB8::BA98:0:3210/48」のように入力します。IPv6 アドレッシングの詳細については、[IPv6 アドレッシング \(309 ページ\)](#) を参照してください。

アドレスをリンクローカルとしてのみ使用する場合は、[リンクローカル (Link-Local)] オプションを選択します。リンクローカルアドレスは、ローカル ネットワークの外部ではアクセスできません。ブリッジ グループ インターフェイスにリンクローカルアドレスを設定することはできません。

(注)

リンクローカルアドレスは、FE8、FE9、FEA、または FEB で始まっている必要があります。たとえば fe80::20d:88ff:feee:6a82 のようになります。Modified EUI-64 形式に基づくリンクローカルアドレスを自動的に割り当てることを推奨します。たとえば、その他のデバイスで Modified EUI-64 形式の使用が強制される場合、手動で割り当てたリンクローカルアドレスによりパケットがドロップされることがあります。

- [スタンバイ IP アドレス (Standby IP Address)] : 高可用性を設定し、HA に関してこのインターフェイスをモニタリングしている場合は、同じサブネットにスタンバイ IPv6 アドレスも設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。
- [RA を抑制 (Suppress RA)] : ルータ アドバタイズメントを抑制するかどうかを指定します。ネイバー デバイスがデフォルトのルータ アドレスをダイナミックに把握できるように、Threat Defense はルータ アドバタイズメントに参加できます。デフォルトでは、ルータ アドバタイズメント メッセージ (ICMPv6 Type 134) は、設定済みの各 IPv6 インターフェイスに定期的に送信されます。

ルータ アドバタイズメントもルータ送信要求メッセージに応答して送信されます (ICMPv6 Type 133)。ルータ要請メッセージは、システムの起動時にホストから送信されるため、ホストは、次にスケジュールされているルータ アドバタイズメント メッセージを待つことなくただちに自動設定できます。

Threat Defense デバイスで IPv6 プレフィックスを提供する必要があるインターフェイス (外部インターフェイスなど) では、これらのメッセージを抑制できます。

ステップ 6 [詳細 (Advanced)] をクリックし、速度を設定して、メンバーインターフェイスの速度を設定します。

その他の高度なオプションを設定することもできます。[詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

次のタスク

- EtherChannel を適切なセキュリティゾーンに追加します。「[セキュリティ ゾーンの設定 \(185 ページ\)](#)」を参照してください。

VLAN インターフェイスとスイッチ ポートの構成 (1010/1210/1220)

各 1010/1210/1220 インターフェイスは、通常のファイアウォール インターフェイスとしてまたはレイヤ 2 ハードウェア スイッチ ポートとして実行するように設定できます。ここでは、スイッチモードの有効化と無効化、VLAN インターフェイスの作成、VLAN へのスイッチ ポートの割り当てなど、スイッチポート設定を開始するためのタスクについて説明します。また、サポートされているインターフェイスで Power on Ethernet (PoE) をカスタマイズする方法についても説明します。

スイッチポートおよびインターフェイスについて

ポートとインターフェイス

1010/1210/1220 の物理インターフェイスごとに、その動作をファイアウォール インターフェイスまたはスイッチポートとして設定できます。物理インターフェイスとポートタイプ、およびスイッチポートを割り当てる論理 VLAN インターフェイスについては、次の情報を参照してください。

- 物理ファイアウォール インターフェイス：ルーテッドモードでは、これらのインターフェイスは、設定済みのセキュリティポリシーを使用してファイアウォールと VPN サービスを適用することによって、レイヤ 3 のネットワーク間でトラフィックを転送します。ルーテッドモードでは、一部のインターフェイスでブリッジグループメンバーとして、その他のインターフェイスでレイヤ 3 インターフェイスとして、統合ルーティングおよびブリッジングを使用することもできます。デフォルトでは、イーサネット 1/1 インターフェイスはファイアウォール インターフェイスとして設定されます。また、これらのインターフェイスを IPS 専用（パッシブインターフェイス）に設定することもできます。
- 物理スイッチポート：スイッチポートは、ハードウェアのスイッチ機能を使用して、レイヤ 2 でトラフィックを転送します。同じ VLAN 上のスイッチポートは、ハードウェアス

イッチングを使用して相互に通信できます。トラフィックには、Threat Defense セキュリティポリシーは適用されません。アクセスポートはタグなしトラフィックのみを受け入れ、それらを単一のVLANに割り当てることができます。トランクポートはタグなしおよびタグ付きトラフィックを受け入れ、複数のVLANに属することができます。デフォルトでは、イーサネット 1/2 ～ 1/8 (1010 および 1210) または 1/2 ～ 1/10 (1220) は VLAN 1 のアクセススイッチポートとして設定されています。Management インターフェイスをスイッチポートとして設定することはできません。

- **論理 VLAN インターフェイス**：これらのインターフェイスは物理ファイアウォール インターフェイスと同じように動作しますが、サブインターフェイス、IPS 専用インターフェイス（インラインセットおよびパッシブインターフェイス）、または EtherChannel インターフェイスを作成できないという例外があります。スイッチポートが別のネットワークと通信する必要がある場合、Threat Defense デバイスは VLAN インターフェイスにセキュリティポリシーを適用し、別の論理 VLAN インターフェイスまたはファイアウォール インターフェイスにルーティングします。ブリッジグループメンバーとして VLAN インターフェイスで統合ルーティングおよびブリッジングを使用することもできます。同じ VLAN 上のスイッチポート間のトラフィックに Threat Defense セキュリティポリシーは適用されませんが、ブリッジグループ内の VLAN 間のトラフィックにはセキュリティポリシーが適用されるため、ブリッジグループとスイッチポートを階層化して特定のセグメント間にセキュリティポリシーを適用できます。

Power Over Ethernet

PoE は次のように使用できます：

- **Firepower 1010**：イーサネット 1/7 および 1/8 で、IEEE 802.3af (PoE) および 802.3at (PoE+) を使用して、ポートあたり最大 30 ワット、合計で最大 60 ワット供給。
- **Cisco Secure Firewall 1210CP**：イーサネット 1/5、1/6、1/7、および 1/8 で、IEEE 802.3af (PoE)、802.3at (PoE+)、および 802.3bt (PoE++ および Hi-PoE) を使用して、ポートあたり最大 90 ワット、合計で最大 120 W 供給。



(注) PoE は、1010E、1210CE、および 1220CX ではサポートされていません。

PoE+ およびそれ以降の規格では、リンク層検出プロトコル (Link Layer Discovery Protocol、LLDP) を使用して、電力レベルをネゴシエートします。電力は必要な場合にのみ提供されます。

インターフェイスをシャットダウンすると、デバイスへの電源がディセーブルになります。

スイッチポートの注意事項および制約事項

高可用性

- 高可用性を使用する場合は、スイッチポート機能を使用しないでください。スイッチポートはハードウェアで動作するため、アクティブユニットとスタンバイユニットの両方でトラフィックを通過させ続けます。高可用性は、トラフィックがスタンバイユニットを通過するのを防ぐように設計されていますが、この機能はスイッチポートには拡張されていません。通常の 高可用性 のネットワーク設定では、両方のユニットのアクティブなスイッチポートがネットワーク ループにつながります。スイッチング機能には外部スイッチを使用することをお勧めします。VLAN インターフェイスはフェールオーバーによってモニタできますが、スイッチポートはモニタできません。理論的には、1つのスイッチポートを VLAN に配置して、高可用性 を正常に使用することができますが、代わりに物理ファイアウォール インターフェイスを使用する設定の方が簡単です。
- ファイアウォール インターフェイスはフェールオーバー リンクとしてのみ使用できます。

論理 VLAN インターフェイス (SVI)

- 最大 60 個の VLAN インターフェイスを作成できます。
- また、ファイアウォール インターフェイスで VLAN サブインターフェイスを使用する場合、論理 VLAN インターフェイスと同じ VLAN ID は使用できません。
- MAC アドレス :
 - すべての VLAN インターフェイスが 1 つの MAC アドレスを共有します。接続スイッチがどれもこのシナリオをサポートできるようにします。接続スイッチに固有の MAC アドレスが必要な場合、手動で MAC アドレスを割り当てることができます。 [詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) を参照してください。

ブリッジ グループ

同じブリッジ グループ内に論理 VLAN インターフェイスと物理ファイアウォール インターフェイスを混在させることはできません。

VLAN インターフェイスおよびスイッチ ポートでサポートされていない機能

VLAN インターフェイスおよびスイッチポートは、次の機能をサポートしていません。

- ダイナミック ルーティング
- マルチキャスト ルーティング
- 等コストマルチパス (ECMP) ルーティング
- パッシブ インターフェイス

- EtherChannel：スイッチのポートを EtherChannel の一部にはできません。PoE も、EtherChannel のポートではサポートされません。
- フェールオーバーおよびステートリンク

その他の注意事項と制約事項

- Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220 には、最大 60 個の名前付きインターフェイスを設定できます。
- Management インターフェイスをスイッチポートとして設定することはできません。

デフォルト設定

- イーサネット 1/1 はファイアウォール インターフェイスです。
- 1010/1210 では、イーサネット 1/2 ～ 1/8 が、VLAN 1 に割り当てられたスイッチ ポートです。
- 1220 では、イーサネット 1/2 ～ 1/10 が、VLAN 1 に割り当てられたスイッチ ポートです。
- デフォルトの速度とデュプレックス：デフォルトでは、速度とデュプレックスは自動ネゴシエーションに設定されます。

VLAN インターフェイスの設定

ここでは、関連付けられたスイッチポートで使用するための VLAN インターフェイスの設定方法について説明します。最初に、スイッチポートに割り当てる VLAN ごとに VLAN インターフェイスを設定する必要があります。



- (注) 特定の VLAN 上でのスイッチポート間のスイッチングのみを有効にし、VLAN と他の VLAN またはファイアウォール インターフェイス間のルーティングを望まない場合は、VLAN インターフェイス名を空のままにします。この場合、IP アドレスを設定する必要もありません。IP 設定は無視されます。

手順

- ステップ 1** [デバイス]をクリックしてから、[インターフェイス]サマリーにあるリンクをクリックし、[VLANs]をクリックします。

VLAN リストには、既存の VLAN インターフェイスが表示されます。各 VLAN に関連付けられているスイッチポートを表示するには、開/閉矢印をクリックします。また、スイッチポートは [インターフェイス (Interfaces)] ページでも個別に表示されます。

ステップ 2 [VLANインターフェイスの作成 (Create VLAN Interface)] (現在の VLAN がない場合) または プラス アイコン (+) をクリックして、新しい VLAN インターフェイスを作成します。

ステップ 3 次を設定します。

a) [インターフェイス名 (Interface Name)] を設定します。

VLANの名前を48文字以内で設定します。英字は小文字でなければなりません。例、[inside] または [outside]。

VLANと他のVLANまたはファイアウォールインターフェイス間のルーティングを望まない場合は、VLANインターフェイス名を空のままにします。

(注)

名前を変更すると、以前の名前が使用されていたすべての箇所（セキュリティゾーン、syslog サーバオブジェクト、DHCP サーバ定義など）で変更が自動的に反映されます。ただし、通常、ポリシーや設定に名前のないインターフェイスは使用できないため、最初に古い名前を使用しているすべての設定を削除しないと、その名前は削除できません。

- b) [モード (Mode)] は [ルーテッド (Routed)] のままにします。

後でこの VLAN インターフェイスをブリッジグループに追加すると、モードは自動的に **BridgeGroupMember** に変更されます。ブリッジグループのメンバーインターフェイスには、IP アドレスを設定できません。

- c) [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 () に設定します。
d) [VLAN ID] を 1 ～ 4070 の間で設定します。

インターフェイスを保存した後は、VLAN IDを変更できません。VLAN IDは、使用する VLAN タグと設定内のインターフェイス ID の両方です。

- e) (任意) [この VLAN に転送しない (Do not forward to this VLAN)] フィールドに、この VLAN インターフェイスがトラフィックを開始できない VLAN ID を入力します。

たとえば、1 つの VLAN をインターネットアクセスの外部に、もう 1 つを内部ビジネスネットワーク内に、そして 3 つ目をホームネットワークにそれぞれ割り当てます。自宅のネットワークはビジネスネットワークにアクセスする必要がないので、自宅の VLAN で [このインターフェイスから次へのトラフィックをブロックする (Block Traffic From this Interface to)] オプションを使用できます。ビジネスネットワークは自宅のネットワークにアクセスできますが、その反対はできません。

- f) (任意) [説明 (Description)] を設定します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

ステップ 4 [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブをクリックし、IPv4 アドレスを設定します。

[タイプ (Type)] フィールドで以下のいずれかのオプションを選択します。

- [DHCP] : ネットワーク上の DHCP サーバからアドレスを取得する場合は、このオプションを選択します。高可用性を設定する場合、このオプションは使用できません。必要に応じて、次のオプションを変更します。
 - [ルート メトリック (Route Metric)] : DHCP サーバからデフォルトルートを取得する場合の、学習されるルートまでのアドミニストレーティブ ディスタンス (1 から 255)。デフォルトは 1 です。
 - [デフォルトルートを取得 (Obtain Default Route)] : DHCP サーバからデフォルトルートを取得するかどうかを指定します。通常は、デフォルトとなっているこのオプションを選択します。
- [静的 (Static)] : 固定アドレスを割り当てる場合は、このオプションを選択します。インターフェイスの IP アドレスとインターフェイスに接続されたネットワークのサブネットマスクを入力します。たとえば、10.100.10.0/24 ネットワークを接続した場合、10.100.10.1/24 と入力できます。このアドレスがネットワーク上ですでに使用されていないことを確認します。

ハイアベイラビリティを設定し、HA についてこのインターフェイスをモニタしている場合は、スタンバイ IP アドレスも同じサブネットに設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アド

レスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。

(注)

インターフェイスに対して設定されている DHCP サーバがある場合は、その設定が表示されます。DHCP アドレス プールを編集または削除できます。インターフェイスの IP アドレスを別のサブネットに変更する場合は、インターフェイスの変更を保存する前に、DHCP サーバを削除するか、新しいサブネット上にアドレスプールを構成する必要があります。[DHCP サーバの設定 \(947 ページ\)](#) を参照してください。

- [PPPoE] : ポイントツーポイント プロトコル (PPPoE) を使用してアドレスを取得する必要がある場合は、このオプションを選択します。インターフェイスが DSL モデム、ケーブルモデム、または ISP への他の接続に接続されており、ISP が PPPoE を使用して IP アドレスを提供している場合は、PPPoE が必要になる場合があります。ハイアベイラビリティを設定する場合、このオプションは使用できません。次の値を設定します。

- [グループ名 (Group Name)] : この接続を表すために選択したグループ名を指定します。
- [PPPoEユーザ名 (PPPoE Username)] : ISP によって提供されたユーザ名を指定します。
- [PPPoEパスワード (PPPoE Password)] : ISP によって提供されたパスワードを指定します。
- [PPP 認証 (PPP Authentication)] : [PAP]、[CHAP]、または [MSCHAP] を選択します。

PAP は認証時にクリアテキストのユーザ名とパスワードを渡すため、セキュアではありません。CHAP では、サーバのチャレンジに対して、クライアントは暗号化された「チャレンジとパスワード」およびクリアテキストのユーザ名を返します。CHAP は PAP よりセキュアですが、データを暗号化しません。MSCHAP は CHAP に似ていますが、サーバが CHAP のようにクリア テキスト パスワードを扱わず、暗号化されたパスワードだけを保存、比較するため、CHAP よりセキュアです。また、MSCHAP では MPPE によるデータの暗号化のためのキーを生成します。

- [PPPoEの学習済みルートメトリック (PPPoE Learned Route Metric)] : アドミニストレーティブディスタンスを既知のルートに割り当てます。有効な値は 1 ~ 255 です。デフォルトでは、学習したルートのアドミニストレーティブディスタンスは 1 です。
- [PPPoEからデフォルトルートを取得 (Obtain Default Route from PPPoE)] : PPPoE サーバからのデフォルトルートの取得を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
- [IP アドレスタイプ (Ip Address Type)] : PPPoE サーバから IP アドレスを取得するには、[動的 (Dynamic)] を選択します。ISP から静的 IP アドレスが割り当てられている場合は、[静的 (Static)] を選択することもできます。

ステップ 5 (オプション) 。[IPv6 アドレス (IPv6 Address)] タブをクリックし、IPv6 アドレスを設定します。

- [状態 (State)] : IPv6 プロセスを有効にし、グローバルアドレスを設定しない場合にリンクローカルアドレスを自動的に設定するには、[有効化 (Enabled)] を選択します。リンクローカルアドレスは、インターフェイスの MAC アドレスに基づいて生成されます (Modified EUI-64 形式)。

(注)

IPv6 を無効にしても、明示的な IPv6 アドレスで設定されているインターフェイスまたは自動設定が有効になっているインターフェイスでの IPv6 処理は無効になりません。

- [アドレスの自動設定 (Address Auto Configuration)] : このオプションは、アドレスを自動的に設定する場合に選択します。IPv6 ステートレス自動設定は、デバイスが存在するリンクで使用するグローバルな IPv6 プレフィックスのアドバタイズメントなどの、IPv6 サービスを提供するようにルータが設定されている場合に限り、グローバルな IPv6 アドレスを生成します。IPv6 ルーティング サービスがリンクで使用できない場合、リンクローカルな IPv6 アドレスのみが取得され、そのデバイスが属するネットワーク リンクの外部にアクセスできません。リンクローカルアドレスは Modified EUI-64 インターフェイス ID に基づいています。

RFC 4862 では、ステートレス自動設定用に設定されたホストはルータ アドバタイズメント メッセージを送信しないと規定されていますが、この場合は、Threat Defense デバイスがルータ アドバタイズメント メッセージを送信します。メッセージを抑制して、RFC に準拠するためには、[RA を抑制 (Suppress RA)] を選択します。

- [スタティック アドレス/プレフィックス (Static Address/Prefix)] : ステートレス自動設定を使用しない場合、完全に静的なグローバル IPv6 アドレスおよびネットワークプレフィックスを入力します。たとえば、「2001:0DB8::BA98:0:3210/48」のように入力します。IPv6 アドレッシングの詳細については、[IPv6 アドレッシング \(309 ページ\)](#) を参照してください。

アドレスをリンクローカルとしてのみ使用する場合は、[リンクローカル (Link-Local)] オプションを選択します。リンクローカルアドレスは、ローカル ネットワークの外部ではアクセスできません。ブリッジ グループ インターフェイスにリンクローカルアドレスを設定することはできません。

(注)

リンクローカルアドレスは、FE8、FE9、FEA、または FEB で始まっている必要があります。たとえば fe80::20d:88ff:feec:6a82 のようになります。Modified EUI-64 形式に基づくリンクローカルアドレスを自動的に割り当てることを推奨します。たとえば、その他のデバイスで Modified EUI-64 形式の使用が強制される場合、手動で割り当てたリンクローカルアドレスによりパケットがドロップされることがあります。

- [スタンバイ IP アドレス (Standby IP Address)] : 高可用性を設定し、HA に関してこのインターフェイスをモニタリングしている場合は、同じサブネットにスタンバイ IPv6 アドレスも設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。

- **[RAを抑制 (Suppress RA)]** : ルータ アドバタイズメントを抑制するかどうかを指定します。ネイバー デバイスがデフォルトのルータ アドレスをダイナミックに把握できるように、Threat Defenseはルータ アドバタイズメントに参加できます。デフォルトでは、ルータ アドバタイズメント メッセージ (ICMPv6 Type 134) は、設定済みの各 IPv6 インターフェイスに定期的に送信されます。

ルータ アドバタイズメントもルータ送信要求メッセージに応答して送信されます (ICMPv6 Type 133)。ルータ要請メッセージは、システムの起動時にホストから送信されるため、ホストは、次にスケジュールされているルータ アドバタイズメント メッセージを待つことなくただちに自動設定できます。

Threat Defense デバイスで IPv6 プレフィックスを提供する必要があるインターフェイス (外部インターフェイスなど) では、これらのメッセージを抑制できます。

ステップ 6 (オプション) [詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) .

詳細設定には、ほとんどのネットワークに適したデフォルト値が入力されています。ネットワークの問題を解決するためでない限り、詳細設定を編集しないでください。

ステップ 7 [OK]をクリックします。

次のタスク

- VLAN を適切なセキュリティゾーンに追加します。「[セキュリティ ゾーンの設定 \(185 ページ\)](#)」を参照してください。

スイッチポートのアクセスポートとしての設定

1つのVLANにスイッチポートを割り当てるには、アクセスポートとして設定します。Firepower 1010およびCisco Secure Firewall 1210では、イーサネット 1/2 ~ 1/8 スイッチポートが、デフォルトでVLAN 1に割り当てられています。Cisco Secure Firewall 1220では、イーサネット 1/2 ~ 1/10 スイッチポートが、デフォルトでVLAN 1に割り当てられています。



- (注) Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220 では、ネットワーク内のループ検出のためのスパニングツリー プロトコルはサポートされません。したがって、Threat Defense デバイスとのすべての接続は、ネットワークループ内で終わらないようにする必要があります。

始める前に

アクセスポートを割り当てる VLAN ID に VLAN インターフェイスを追加します。アクセスポートは、タグなしトラフィックのみを受け入れます。「[VLAN インターフェイスの設定 \(341 ページ\)](#)」を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。インターフェイスリストに、物理インターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、状態が表示されます。

ステップ 2 編集する物理インターフェイスの [編集 (edit)] アイコン (🔗) をクリックします。

ステップ 3 次の設定を行います。

Ethernet1/7
Edit Physical Interface

Interface Name:
Mode: Switch Port
Status: ☒
Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces.

Description:

IPv4 Address | IPv6 Address | **VLAN** | PoE

☐ Protected Port ⓘ

Usage Type
Access | Trunk

Access VLAN
Filter:
👍 inside (Vlan1) ⓘ
[Create new VLAN](#)

CANCEL OK

- スイッチポートの [インターフェイス名 (InterfaceName)] は設定しないでください。関連付けられている VLAN インターフェイスのみが名前付きインターフェイスです。
- [モード (Mode)] を [スイッチポート (Switch Port)] に設定します。
- [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 (🔗) に設定します。
- (任意) [説明 (Description)] を設定します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

ステップ4 [VLAN] をクリックして、次のように設定します。

- a) (任意) このスイッチポートを保護対象として設定するには、[保護ポート (Protected Port)] チェックボックスをオンにします。これにより、スイッチポートが同じ VLAN 上の他の保護されたスイッチポートと通信するのを防ぐことができます。

スイッチポート間の相互通信を防ぐのは、スイッチポート上のデバイスが主に他の VLAN からアクセスされ、VLAN 内のアクセスを許可する必要がなく、感染や他のセキュリティ侵害が発生した際に、個々のデバイスを相互に孤立させる場合です。たとえば、3つの Web サーバをホストする DMZ がある場合、各スイッチポートにこのオプションを適用すると、3つの Web サーバを相互に分離できます。内部ネットワークと外部ネットワークはいずれも 3つの Web サーバすべてと通信でき、その逆も可能ですが、Web サーバは相互に通信できません。

- b) [使用タイプ (Usage Type)] で、[アクセス (Access)] をクリックします。
- c) [アクセス VLAN (Access VLAN)] の場合は、下矢印をクリックして既存の VLAN インターフェイスのいずれかを選択します。

新しい VLAN インターフェイスを追加するには、[新しい VLAN の作成 (Create new VLAN)] をクリックします。[VLAN インターフェイスの設定 \(341 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ5 [OK] をクリックします。

スイッチポートのトランクポートとしての設定

この手順では、802.1Q タグ付けを使用して複数の VLAN を伝送するトランクポートの作成方法について説明します。トランクポートは、タグなしトラフィックとタグ付きトラフィックを受け入れます。許可された VLAN のトラフィックは、トランクポートを変更せずに通過します。

トランクは、タグなしトラフィックを受信すると、そのトラフィックをネイティブ VLAN ID にタグ付けして、デバイスが正しいスイッチポートにトラフィックを転送したり、別のファイアウォールインターフェイスにルーティングしたりできるようにします。デバイスは、トランクポートからネイティブ VLAN ID トラフィックを送信する際に VLAN タグを削除します。タグなしトラフィックが同じ VLAN にタグ付けされるように、他のスイッチのトランクポートに同じネイティブ VLAN を設定してください。

始める前に

トランクポートを割り当てる VLAN ID ごとに VLAN インターフェイスを追加します。「[VLAN インターフェイスの設定 \(341 ページ\)](#)」を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。インターフェイスリストに、物理インターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、状態が表示されます。

ステップ 2 編集する物理インターフェイスの [編集 (edit)] アイコン (🔗) をクリックします。

ステップ 3 次の設定を行います。

Ethernet1/8
Edit Physical Interface

Interface Name:
Mode: Switch Port
Status: ☒

Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces.

Description:

IPv4 Address | IPv6 Address | **VLAN** | PoE

☐ Protected Port ⓘ

Usage Type
Access | **Trunk**

Native Trunk VLAN
Please select a VLAN

Associated VLANs
+
dmz (Vlan100) ⓘ
inside (Vlan1) ⓘ
Create new VLAN | CANCEL | OK

CANCEL | OK

- スイッチポートの [インターフェイス名 (InterfaceName)] は設定しないでください。関連付けられている VLAN インターフェイスのみが名前付きインターフェイスです。
- [モード (Mode)] を [スイッチポート (Switch Port)] に設定します。

- c) [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 () に設定します。
- d) (任意) [説明 (Description)] を設定します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

ステップ 4 [VLAN] をクリックして、次のように設定します。

- a) (任意) このスイッチポートを保護対象として設定するには、[保護ポート (Protected Port)] チェックボックスをオンにします。これにより、スイッチポートが同じ VLAN 上の他の保護されたスイッチポートと通信するのを防ぐことができます。

スイッチポート間の相互通信を防ぐのは、スイッチポート上のデバイスが主に他の VLAN からアクセスされ、VLAN 内のアクセスを許可する必要がなく、感染や他のセキュリティ侵害が発生した際に、個々のデバイスを相互に孤立させる場合です。たとえば、3つの Web サーバをホストする DMZ がある場合、各スイッチポートにこのオプションを適用すると、3つの Web サーバを相互に分離できます。内部ネットワークと外部ネットワークはいずれも 3つの Web サーバすべてと通信でき、その逆も可能ですが、Web サーバは相互に通信できません。

- b) [使用タイプ (Usage Type)] で、[トランク (Trunk)] をクリックします。
- c) (任意) [ネイティブトランク VLAN (Native Trunk VLAN)] の場合は、下矢印をクリックしてネイティブ VLAN の既存の VLAN インターフェイスのいずれかを選択します。

デフォルトのネイティブ VLAN は 1 です。

各ポートのネイティブ VLAN は 1 つのみですが、すべてのポートに同じネイティブ VLAN または異なるネイティブ VLAN を使用できます。

新しい VLAN インターフェイスを追加するには、[新しい VLAN の作成 (Create new VLAN)] をクリックします。 [VLAN インターフェイスの設定 \(341 ページ\)](#) を参照してください。

- d) [関連付けられている VLAN (Associated VLANs)] で、プラス アイコン (+) をクリックして、1 つまたは複数の既存の VLAN インターフェイスを選択します。

このフィールドにネイティブ VLAN を含めると、無視されます。トランクポートは、ネイティブ VLAN トラフィックをポートから送信するときに、常に VLAN タグを削除します。さらに、ネイティブ VLAN タグ付きのトラフィックは受信されません。

新しい VLAN インターフェイスを追加するには、[新しい VLAN の作成 (Create new VLAN)] をクリックします。 [VLAN インターフェイスの設定 \(341 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

Power over Ethernet の設定

Power over Ethernet (PoE) ポートは、IP 電話や無線アクセスポイントなどのデバイスに電力を供給します。PoE はデフォルトでイネーブルです。この手順では、PoE を無効および有効にする方法と、オプションパラメータを設定する方法について説明します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。インターフェイスリストに、物理インターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、状態が表示されます。

ステップ 2 Firepower 1010 の Ethernet 1/7 または 1/8、または Secure Firewall 1210CP の Ethernet 1/5 ～ 1/8 の任意のインターフェイスの編集アイコン (🔗) をクリックします。

ステップ 3 [PoE] をクリックして、次のように設定します。

Ethernet1/8
Edit Physical Interface

Interface Name:

Mode: Switch Port

Status: ☒

Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces.

Description:

IPv4 Address IPv6 Address VLAN **PoE**

POWER OVER ETHERNET ☒

Consumption Wattage:

4000 - 30000mW

CANCEL OK

a) [Power Over Ethernet] を有効にするには、スライダ (🔗) をクリックして有効にします。
PoE はデフォルトでイネーブルです。

b) (任意) 必要なワット数を正確に把握している場合は、[消費ワット数 (Consumption Wattage)] を入力します。

消費量を手動で設定するには、ワット数をミリワット単位で指定します。範囲は 4000 から 30000 (1010 の場合) または 90000 (1210CP の場合) です。ワット数を手動で設定し、LLDP ネゴシエーションを無効にする場合は、このコマンドを使用します。手動割り当ての場合、**show power inline** 出力にクラスが **n/a** と表示されます。これは、クラスが消費電力の決定に使用されないためです。

デフォルトでは、PoE は受電デバイスのクラスに適したワット数を使用して、受電デバイスに自動的に電力を供給します。ファイアウォールは LLDP を使用して、さらに適切なワット数をネゴシエートします。特定クラスのデバイスを接続すると、より多くの電力を使用する必要がある場合に備えて、そのクラスの最大値までプロビジョニングが行われます。たとえば、12.95W を要求するクラス 4 デバイスを追加した場合、そのデバイスが現在その電力すべてを使用していなくても、30W が割り当てられます。一部のデバイスは、電力要件を再ネゴシエートできます。デバイスに必要な電力が割り当てられている電力よりも少ないことがわかっている場合は、代わりに **[消費ワット数 (Consumption Wattage)]** を手動で設定して、他のデバイス用に電力を解放できます。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

VLAN サブインターフェイスと 802.1Q トランキングの設定

VLAN サブインターフェイスを使用すると、物理インターフェイスを異なる VLAN ID がタグ付けされた複数の論理インターフェイスに分割できます。VLAN サブインターフェイスが 1 つ以上あるインターフェイスは、自動的に 802.1Q トランクとして設定されます。VLAN では、所定の物理インターフェイス上でトラフィックを分離しておくことができるため、物理インターフェイスまたはデバイスを追加しなくても、ネットワーク上で使用できるインターフェイスの数を増やすことができます。

物理インターフェイスをスイッチのトランク ポートに接続する場合は、サブインターフェイスを作成します。スイッチ トランク ポートで表示できる各 VLAN のサブインターフェイスを作成します。物理インターフェイスをスイッチのアクセス ポートに接続する場合は、サブインターフェイスを作成しても意味がありません。

ガイドラインと制約事項

- 物理インターフェイス上のタグなしパケットの禁止：サブインターフェイスを使用する場合、物理インターフェイスでトラフィックを通過させないようにすることもよくあります。物理インターフェイスはタグのないパケットを通過させることができるためです。サブインターフェイスでトラフィックを通過させるには、物理インターフェイスを有効にする必要があるため、物理インターフェイスでトラフィックを通過させないためにインターフェイスに名前を付けなくする必要があります。物理インターフェイスにタグのないパケットを通過させる場合には、通常のようにインターフェイスに名前を付けることができます。
- Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220：サブインターフェイスは、スイッチ ポートおよび VLAN インターフェイスではサポートされていません。
- 必要に応じて詳細設定を変更することはできますが、ブリッジグループメンバーインターフェイスの IP アドレスを設定することはできません。

- 同じ親インターフェイスのすべてのサブインターフェイスは、ブリッジグループメンバーかルーテッドインターフェイスのいずれかである必要があります。混在および一致はできません。
- Threat Defense はダイナミック トランキング プロトコル (DTP) をサポートしないため、接続されているスイッチポートを無条件にトランキングするように設定する必要があります。
- 親インターフェイスと同じ組み込みの MAC アドレスを使用するので、脅威に対する防御デバイスで定義されたサブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てできません。たとえば、サービス プロバイダーによっては、MAC アドレスに基づいてアクセス制御を行う場合があります。また、IPv6 リンクローカルアドレスは MAC アドレスに基づいて生成されるため、サブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てることで、一意の IPv6 リンクローカルアドレスが可能になり、脅威に対する防御 デバイスで特定のインスタンスでのトラフィックの中断を回避できます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。EtherChannel にサブインターフェイスを追加するには、[EtherChannel] をクリックします。インターフェイスリストに、物理インターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、状態が表示されます。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- [Interfaces] ページで、プラスアイコン (+) をクリックして、新しいサブインターフェイスを作成します。
- [EtherChannel] ページで、プラスと下矢印のアイコン (+v) をクリックし、[Subinterface] を選択します。
- 編集するサブインターフェイスの編集アイコン (🔧) をクリックします。

不要になったサブインターフェイスを削除する場合は、対象のサブインターフェイスの削除アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 (🔵) に設定します。

ステップ 4 親インターフェイス、名前、および説明を設定します。

Add Subinterface

Parent Interface

Subinterface Name

Mode

Status

Ethernet1/1

engineering

Routed

☒

Most features work with named interfaces only,
although some require unnamed interfaces.

Description

VLAN ID

Subinterface ID

200

200

1 - 4094

IPv4 Address

IPv6 Address

Advanced

Type

Static

IP Address and Subnet Mask

10.10.10.1

/

24

e.g. 192.168.5.15/17 or 192.168.5.15/255.255.128.0

Standby IP Address and Subnet Mask

10.10.10.2

/

24

e.g. 192.168.5.16

CANCEL

OK

- a) [Parent Interface] を選択します。

親インターフェイスは、サブインターフェイスの追加先となる物理インターフェイスです。いったん作成したサブインターフェイスの親インターフェイスは変更できません。

- b) [Subinterface Name] (最大 48 文字) を設定します。

英字は小文字でなければなりません。例、[inside] または [outside]。名前を設定しないと、インターフェイスの残りの設定が無視されます。

(注)

名前を変更すると、以前の名前が使用されていたすべての箇所（セキュリティゾーン、syslog サーバオブジェクト、DHCP サーバ定義など）で変更が自動的に反映されます。ただし、通常、ポリシーや設定に名前のないインターフェイスは使用できないため、最初に古い名前を使用しているすべての設定を削除しないと、その名前は削除できません。

- c) [モード (Mode)] を [ルーテッド (Routed)] に設定します。

後でこのインターフェイスをブリッジグループに追加すると、モードは自動的に「BridgeGroupMember」に変更されます。ブリッジグループのメンバーインターフェイスには IP アドレスを設定できません。

- d) (任意) [Description] を設定します。

説明は 200 文字以内で、改行を入れずに 1 行で入力します。

- e) [VLAN ID] を設定します。

このサブインターフェイス上のパケットにタグを付けるために使用する VLAN ID を 1 ～ 4094 の範囲で入力します。

- f) [サブインターフェイス ID (Subinterface ID)] を設定します。

サブインターフェイス ID を 1 ～ 4294967295 の範囲の整数で入力します。この ID は、インターフェイス ID に追加されます。たとえば、Ethernet1/1.100 のようになります。便宜上 VLAN ID を一致させることもできますが、必須ではありません。サブインターフェイスを作成した後は、ID を変更できません。

ステップ 5 [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブをクリックし、IPv4 アドレスを設定します。

[タイプ (Type)] フィールドで以下のいずれかのオプションを選択します。

- [DHCP] : ネットワーク上の DHCP サーバからアドレスを取得する場合は、このオプションを選択します。高可用性を設定する場合、このオプションは使用できません。必要に応じて、次のオプションを変更します。
 - [ルート メトリック (Route Metric)] : DHCP サーバからデフォルトルートを取得する場合の、学習されるルートまでのアドミニストレーティブ ディスタンス (1 から 255)。デフォルトは 1 です。
 - [デフォルトルートを取得 (Obtain Default Route)] : DHCP サーバからデフォルトルートを取得するかどうかを指定します。通常は、デフォルトとなっているこのオプションを選択します。
- [静的 (Static)] : 固定アドレスを割り当てる場合は、このオプションを選択します。インターフェイスの IP アドレスとインターフェイスに接続されたネットワークのサブネットマスクを入力します。たとえば、10.100.10.0/24 ネットワークを接続した場合、10.100.10.1/24 と入力できます。このアドレスがネットワーク上ですでに使用されていないことを確認します。

ハイ アベイラビリティを設定し、HA についてこのインターフェイスをモニタしている場合は、スタンバイ IP アドレスも同じサブネットに設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。

(注)

インターフェイスに対して設定されている DHCP サーバがある場合は、その設定が表示されます。DHCP アドレス プールを編集または削除できます。インターフェイスの IP アドレスを別のサブネットに変更する場合は、インターフェイスの変更を保存する前に、DHCP

サーバを削除するか、新しいサブネット上にアドレスプールを構成する必要があります。
[DHCP サーバの設定 \(947 ページ\)](#) を参照してください。

- [PPPoE] : ポイントツーポイント プロトコル (PPPoE) を使用してアドレスを取得する必要がある場合は、このオプションを選択します。インターフェイスが DSL モデム、ケーブルモデム、または ISP への他の接続に接続されており、ISP が PPPoE を使用して IP アドレスを提供している場合は、PPPoE が必要になる場合があります。ハイアベイラビリティを設定する場合、このオプションは使用できません。次の値を設定します。
 - [グループ名 (Group Name)] : この接続を表すために選択したグループ名を指定します。
 - [PPPoEユーザ名 (PPPoE Username)] : ISP によって提供されたユーザ名を指定します。
 - [PPPoEパスワード (PPPoE Password)] : ISP によって提供されたパスワードを指定します。
 - [PPP 認証 (PPP Authentication)] : [PAP]、[CHAP]、または [MSCHAP] を選択します。
 PAPは認証時にクリアテキストのユーザ名とパスワードを渡すため、セキュアではありません。CHAPでは、サーバのチャレンジに対して、クライアントは暗号化された「チャレンジとパスワード」およびクリアテキストのユーザ名を返します。CHAPはPAPよりセキュアですが、データを暗号化しません。MSCHAPはCHAPに似ていますが、サーバがCHAPのようにクリアテキストパスワードを扱わず、暗号化されたパスワードだけを保存、比較するため、CHAPよりセキュアです。また、MSCHAPではMPPEによるデータの暗号化のためのキーを生成します。
 - [PPPoEの学習済みルートメトリック (PPPoE Learned Route Metric)] : アドミニストレーティブディスタンスを既知のルートに割り当てます。有効な値は1～255です。デフォルトでは、学習したルートのアドミニストレーティブディスタンスは1です。
 - [PPPoEからデフォルトルートを取得 (Obtain Default Route from PPPoE)] : PPPoEサーバからのデフォルトルートの取得を有効にするには、このチェックボックスをオンにします。
 - [IPアドレスタイプ (Ip Address Type)] : PPPoEサーバからIPアドレスを取得するには、[動的 (Dynamic)] を選択します。ISPから静的IPアドレスが割り当てられている場合は、[静的 (Static)] を選択することもできます。

ステップ 6 (オプション) 。[IPv6 アドレス (IPv6 Address)] タブをクリックし、IPv6 アドレスを設定します。

- [状態 (State)] : IPv6プロセスを有効にし、グローバルアドレスを設定しない場合にリンクローカルアドレスを自動的に設定するには、[有効化 (Enabled)] を選択します。リンクローカルアドレスは、インターフェイスのMACアドレスに基づいて生成されます (Modified EUI-64 形式) 。

(注)

IPv6 を無効にしても、明示的な IPv6 アドレスで設定されているインターフェイスまたは自動設定が有効になっているインターフェイスでの IPv6 処理は無効になりません。

- [アドレスの自動設定 (Address Auto Configuration)] : このオプションは、アドレスを自動的に設定する場合に選択します。IPv6 ステートレス自動設定は、デバイスが存在するリンクで使用するグローバルな IPv6 プレフィックスのアドバタイズメントなどの、IPv6 サービスを提供するようにルータが設定されている場合に限り、グローバルな IPv6 アドレスを生成します。IPv6 ルーティング サービスがリンクで使用できない場合、リンクローカルな IPv6 アドレスのみが取得され、そのデバイスが属するネットワーク リンクの外部にアクセスできません。リンクローカルアドレスは Modified EUI-64 インターフェイス ID に基づいています。

RFC 4862 では、ステートレス自動設定用に設定されたホストはルータ アドバタイズメント メッセージを送信しないと規定されていますが、この場合は、Threat Defense デバイスがルータ アドバタイズメント メッセージを送信します。メッセージを抑制して、RFC に準拠するためには、[RA を抑制 (Suppress RA)] を選択します。

- [スタティック アドレス/プレフィックス (Static Address/Prefix)] : ステートレス自動設定を使用しない場合、完全に静的なグローバル IPv6 アドレスおよびネットワーク プレフィックスを入力します。たとえば、「2001:0DB8::BA98:0:3210/48」のように入力します。IPv6 アドレッシングの詳細については、[IPv6 アドレッシング \(309 ページ\)](#) を参照してください。

アドレスをリンクローカルとしてのみ使用する場合は、[リンクローカル (Link-Local)] オプションを選択します。リンクローカルアドレスは、ローカル ネットワークの外部ではアクセスできません。ブリッジ グループ インターフェイスにリンクローカルアドレスを設定することはできません。

(注)

リンクローカルアドレスは、FE8、FE9、FEA、または FEB で始まっている必要があります。たとえば fe80::20d:88ff:feec:6a82 のようになります。Modified EUI-64 形式に基づくリンクローカルアドレスを自動的に割り当てることを推奨します。たとえば、その他のデバイスで Modified EUI-64 形式の使用が強制される場合、手動で割り当てたリンクローカルアドレスによりパケットがドロップされることがあります。

- [スタンバイ IP アドレス (Standby IP Address)] : 高可用性を設定し、HA に関してこのインターフェイスをモニタリングしている場合は、同じサブネットにスタンバイ IPv6 アドレスも設定します。スタンバイアドレスは、スタンバイ デバイスでこのインターフェイスによって使用されます。スタンバイ IP アドレスを設定しない場合、アクティブ装置はネットワーク テストを使用してスタンバイ インターフェイスをモニタできません。追跡できるのはリンク ステートだけです。
- [RA を抑制 (Suppress RA)] : ルータ アドバタイズメントを抑制するかどうかを指定します。ネイバー デバイスがデフォルトのルータ アドレスをダイナミックに把握できるように、Threat Defense はルータ アドバタイズメントに参加できます。デフォルトでは、ルータ アドバタイズメント メッセージ (ICMPv6 Type 134) は、設定済みの各 IPv6 インターフェイスに定期的送信されます。

ルータアドバタイズメントもルータ送信要求メッセージに応答して送信されます（ICMPv6 Type 133）。ルータ要請メッセージは、システムの起動時にホストから送信されるため、ホストは、次にスケジュールされているルータ アドバタイズメント メッセージを待つことなくただちに自動設定できます。

Threat Defense デバイスで IPv6 プレフィックスを提供する必要がないインターフェイス（外部インターフェイスなど）では、これらのメッセージを抑制できます。

ステップ 7 （オプション） [詳細オプションの設定](#)（369 ページ）。

詳細設定には、ほとんどのネットワークに適したデフォルト値が入力されています。ネットワークの問題を解決するためでない限り、詳細設定を編集しないでください。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

次のタスク

- サブインターフェイスを適切なセキュリティゾーンに追加します。[セキュリティゾーンの設定](#)（185 ページ）を参照してください。
- ダイナミック DNS サービスプロバイダーに完全修飾ドメイン名（FQDN）を登録し、DNS サーバの IPv4 と IPv6 の両方のインターフェイスアドレスが更新されるように DDNS を設定します。「[ダイナミック DNS（DDNS）の設定](#)（952 ページ）」を参照してください。

パッシブインターフェイスの設定

パッシブインターフェイスは、スイッチ SPAN（スイッチドポートアナライザ）またはミラーポートを使用してネットワークを流れるトラフィックをモニタします。SPAN またはミラーポートでは、スイッチ上の他のポートからトラフィックをコピーできます。この機能により、ネットワークトラフィックのフローに含まなくても、ネットワークでのシステムの可視性が備わります。

パッシブ展開で設定されたシステムでは、特定のアクション（トラフィックのブロッキングなど）を実行できません。パッシブインターフェイスはすべてのトラフィックを無条件で受信します。このインターフェイスで受信されたトラフィックは再送されません。

パッシブインターフェイスを使用して、ネットワーク上のトラフィックをモニタし、トラフィックに関する情報を収集します。たとえば、侵入ポリシーを適用して、ネットワークを攻撃する脅威のタイプを特定したり、ユーザが作成している Web 要求の URL カテゴリを確認することができます。さまざまなセキュリティポリシーおよびルールを実装して、アクティブに展開されたシステムの動作を確認し、アクセス制御やその他のルールに基づいてトラフィックをドロップすることができます。

ただし、パッシブインターフェイスはトラフィックに影響を与えることができないため、多数の設定上の制限が存在します。これらのインターフェイスは、システムがトラフィックをピー

くすることを可能にするだけです。パッシブ インターフェイスに入るパケットがデバイスを出ることはありません。

ここでは、パッシブ インターフェイスとそれらの設定方法について説明します。

パッシブ インターフェイスを使用する理由

パッシブ インターフェイスの主な目的は、単純なデモンストレーション モードを提供することです。単一の送信元ポートをモニタするようにスイッチをセットアップし、ワークステーションを使用して、パッシブ インターフェイスでモニタしたテスト トラフィックを送信することができます。これにより、脅威に対する防御 システムが接続を評価したり脅威を特定したりする方法を確認できます。システムの実行方法に問題がなければ、その方法をネットワーク内にアクティブに展開して、パッシブ インターフェイスの設定を削除できます。

ただし、次のサービスを提供するために実稼働環境でパッシブ インターフェイスを使用することもできます。

- 純粋な IDS 展開：システムをファイアウォールまたは IPS（侵入防御システム）として使用しない場合、IDS（侵入検知システム）としてパッシブに展開できます。この展開方法では、アクセス制御ルールを使用してすべてのトラフィックに侵入ポリシーを適用します。また、システムでスイッチ上の複数の送信元ポートもモニタします。さらに、ダッシュボードを使用してネットワークで見られる脅威をモニタすることができます。ただし、このモードでは、この脅威を防ぐためにできることはありません。
- 混合展開：アクティブ ルーテッド インターフェイスとパッシブ インターフェイスを同じシステム上に混在させることができます。これにより、脅威に対する防御 デバイスをいくつかのネットワークでファイアウォールとして展開すると同時に、複数のパッシブ インターフェイスを他のネットワーク内のトラフィックをモニターするように設定することができます。

パッシブ インターフェイスに関する制限事項

パッシブ モード インターフェイスとして定義する物理インターフェイスには次の制限があります。

- パッシブ インターフェイスのサブインターフェイスは設定できません。
- パッシブ インターフェイスをブリッジ グループに含めることはできません。
- パッシブ インターフェイスで IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを設定することはできません。
- パッシブ インターフェイスに [管理のみ (Management Only)] オプションを選択することはできません。
- このインターフェイスはパッシブ モード セキュリティ ゾーンにのみ含めることができます。ルーテッド セキュリティ ゾーンに含めることはできません。

- パッシブ セキュリティ ゾーンをアクセス制御またはアイデンティティ ルールの送信元基準に含めることは可能です。パッシブ ゾーンを宛先基準で使用することはできません。パッシブ ゾーンとルーテッド ゾーンを同じルールに混在させることもできません。
- パッシブ インターフェイスの管理アクセス ルール (HTTPS または SSH) を設定することはできません。
- パッシブ インターフェイスを NAT ルールで使用することはできません。
- パッシブ インターフェイスのスタティック ルートを設定することはできません。パッシブ インターフェイスをルーティング プロトコルの設定で使用することもできません。
- パッシブ インターフェイスで DHCP サーバを設定することはできません。パッシブ インターフェイスを使用して自動設定で DHCP 設定を取得することもできません。
- パッシブ インターフェイスを syslog サーバ設定で使用することはできません。
- パッシブ インターフェイスではどのタイプの VPN も設定することはできません。

ハードウェア Threat Defense パッシブインターフェイスのスイッチの設定

ハードウェア 脅威に対する防御 デバイス上のパッシブインターフェイスは、ネットワーク スイッチを正しく設定している場合にのみ機能します。次の手順は、Cisco Nexus 5000 シリーズ スイッチに基づいています。別のタイプのスイッチでは、コマンドが異なる可能性があります。

基本的な考え方としては、SPAN (スイッチド ポート アナライザ) またはミラー ポートを設定し、そのポートにパッシブ インターフェイスを接続し、スイッチでモニタリング セッションを設定して、1つまたは複数の送信元ポートから SPAN またはミラー ポートにトラフィックのコピーを送信します。

手順

ステップ 1 スイッチ上のポートをモニタ (SPAN またはミラー) ポートとして設定します。

```
switch(config)# interface Ethernet1/48
switch(config-if)# switchport monitor
switch(config-if)#
```

ステップ 2 モニタへのポートを特定するモニタリング セッションを定義します。

SPAN またはミラー ポートを宛先ポートとして定義していることを確認します。次の例では、2つの送信元ポートがモニタされています。

```
switch(config)# monitor session 1
switch(config-monitor)# source interface ethernet 1/7
```

```
switch(config-monitor)# source interface ethernet 1/8
switch(config-monitor)# destination interface ethernet 1/48
switch(config-monitor)# no shut
```

ステップ3 (任意) **show monitor session** コマンドを使用して、設定を確認します。

次の例に、セッション 1 の概要出力を示します。

```
switch# show monitor session 1 brief
  session 1
  -----
type           : local
state          : up
source intf    :
    rx         : Eth1/7          Eth1/8
    tx         : Eth1/7          Eth1/8
    both       : Eth1/7          Eth1/8
source VSANs   :
destination ports : Eth1/48

Legend: f = forwarding enabled, l = learning enabled
```

ステップ4 脅威に対する防御 パッシブインターフェイスからスイッチ上の宛先ポートにケーブルを物理的に接続します。

物理接続を行う前後に、パッシブモードでインターフェイスを設定できます。「[パッシブモードでの物理インターフェイスの設定 \(361 ページ\)](#)」を参照してください。

Threat Defense Virtual パッシブインターフェイスの VLAN の設定

Threat Defense Virtual デバイスのパッシブインターフェイスは、仮想ネットワーク上で VLAN を正しく設定した場合にのみ機能します。次の手順を実行してください。

- Threat Defense Virtual インターフェイスを、無差別モードで設定した VLAN に接続します。その後、[パッシブモードでの物理インターフェイスの設定 \(361 ページ\)](#) の説明に従ってインターフェイスを設定します。パッシブ インターフェイスでは、プロミスキャス VLAN 上のすべてのトラフィックのコピーが認識されます。
- 同じ VLAN に、1 つ以上のエンドポイント デバイス（仮想 Windows システムなど）を接続します。VLAN からインターネットへの接続がある場合は、単一のデバイスを使用できます。それ以外の場合は、2 つ以上のデバイスが必要です。URL カテゴリのデータを取得するには、インターネット接続が必要です。

パッシブ モードでの物理インターフェイスの設定

インターフェイスはパッシブモードで設定できます。パッシブモードで動作するインターフェイスは、単に、スイッチ自体（ハードウェア デバイスの場合）またはプロミスキャス VLAN（Threat Defense Virtual の場合）で設定されたモニタリング セッションの送信元ポートからの

トラフィックをモニタします。スイッチまたは仮想ネットワークで設定する必要がある内容の詳細については、次のトピックを参照してください。

- [ハードウェア Threat Defense パッシブインターフェイスのスイッチの設定 \(360 ページ\)](#)
- [Threat Defense Virtual パッシブインターフェイスの VLAN の設定 \(361 ページ\)](#)

トラフィックに影響を及ぼすことなくモニタ対象スイッチポートからのトラフィックを分析するには、パッシブモードを使用します。パッシブモードを使用するエンドツーエンドの例については、[ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法 \(92 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [Device] をクリックし、[Interfaces] サマリーにあるリンクをクリックし、[Interfaces] または [EtherChannel] をクリックします。

ステップ 2 編集する物理インターフェイスまたは EtherChannel の編集アイコン (🔧) をクリックします。
現在使用されていないインターフェイスを選択します。使用中のインターフェイスをパッシブインターフェイスに変換する場合は、最初にセキュリティゾーンからインターフェイスを削除し、そのインターフェイスを使用する他のすべての設定を削除する必要があります。

ステップ 3 [ステータス (Status)] スライダを [有効 (enabled)] 設定 (🔘) に設定します。

ステップ 4 以下を設定します。

- [インターフェイス名 (Interface Name)] : インターフェイスの名前 (最大 48 文字)。英字は小文字でなければなりません。たとえば、monitor などです。
- [モード (Mode)] : [パッシブ (Passive)] を選択します。
- (オプション) [説明 (Description)] : 説明は 200 文字以内で入力できます。改行を入れずに 1 行で入力します。

(注)

IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを設定することはできません。[詳細 (Advanced)] タブで変更できるのは、MTU、デュプレックス、速度設定のみです。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

次のタスク

パッシブインターフェイスを作成するだけでは、インターフェイスで確認されるトラフィックの情報を十分にダッシュボードに示すことはできません、次の手順も実行する必要があります。使用例で次の手順について説明します。[ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法 \(92 ページ\)](#) を参照してください。

- パッシブセキュリティゾーンを作成し、それにインターフェイスを追加します。[セキュリティゾーンの設定（185 ページ）](#)を参照してください。
- パッシブセキュリティゾーンを送信元ゾーンとして使用するアクセス制御ルールを作成します。通常は、これらのルールに侵入ポリシーを適用して、IDS（侵入検知システム）モニタリングを実装します。[アクセスコントロールポリシーの設定（632 ページ）](#)を参照してください。
- 必要に応じて、パッシブセキュリティゾーン向けに SSL 復号およびアイデンティティルールを作成し、セキュリティインテリジェンスポリシーを有効にします。

インラインセットの設定

インラインセットは、IPS 専用インターフェイスを提供します。別のファイアウォールがこれらのインターフェイスを保護していて、ファイアウォール機能のオーバーヘッドを避けたい場合、IPS 専用のインターフェイスを実装することがあります。

インラインセットはワイヤ上のバンプのように動作し、2 つのインターフェイスを一緒にバインドし、既存のネットワークに組み込みます。この機能によって、隣接するネットワークデバイスの設定がなくても、任意のネットワーク環境にデバイスをインストールすることができます。インラインインターフェイスはすべてのトラフィックを無条件に受信しますが、これらのインターフェイスで受信されたすべてのトラフィックは、明示的にドロップされない限り、インラインセットの外部に再送信されます。

ガイドラインと制約事項

- インラインセットは Firepower 1000 シリーズ、ISA 3000、Cisco Secure Firewall 3100 のデバイスモデルでのみ構成できます。
- ISA 3000 は、インラインセットでのハードウェアバイパスをサポートしていません。代わりに、[停電時のハードウェアバイパスの設定（ISA 3000）（397 ページ）](#)の説明に従ってハードウェアバイパスを構成してください。
- インラインセットで許可されるインターフェイスタイプ：物理、EtherChannel。
- インラインセットに管理インターフェイスを含めることはできません。
- インラインセットで使用するインターフェイスの属性（名前、モード、インターフェイス ID、MTU、IP アドレス）は変更できません。
- タップモードを有効にすると、Snort フェールオーバーは無効になります。
- Bidirectional Forwarding Detection (BFD) エコーパケットは、インラインセットを使用するときに、デバイスを介して許可されません。BFD を実行しているデバイスの両側に 2 つのネイバーがある場合、デバイスは BFD エコーパケットをドロップします。両方が同じ送信元および宛先 IP アドレスを持ち、LAND 攻撃の一部であるように見えるからです。
- インラインセットとパッシブインターフェイスについては、デバイスではパケットで 802.1Q ヘッダーが 2 つまでサポートされます（Q-in-Q サポートとも呼ばれます）。ファイアウォー

ルタイプのインターフェイスでは Q-in-Q はサポートされず、802.1Q ヘッダーは 1 つだけサポートされることに注意してください。

- インラインセット内のインターフェイスは、ルーティング、NAT、DHCP（サーバー、クライアント、またはリレー）、VPN、TCP インターセプト、アプリケーション インспекション、または NetFlow をサポートしません。

始める前に

- 脅威防御インライン ペア インターフェイスに接続する STP 対応スイッチに対して STP PortFast を設定することを推奨します。
- インラインセットのメンバーとなる物理インターフェイスまたは EtherChannel インターフェイスを設定します。名前、デュプレックス、速度、ルーテッドモード（パッシブを選択しないでください）の値のみを設定します。手動 IP アドレス、DHCP、または PPoE などのアドレッシングタイプは設定しないでください。



- (注) インターフェイスをインラインセットに追加すると、モードがインラインに変更されます。インラインをモードとして直接選択することはできません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックして、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーのリンクをクリックしてから、[インラインセット (Inline Sets)] をクリックします。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- [+] をクリックして、新しいインラインセットを作成します。
- 既存のインラインセットを変更するには、そのインラインセットの編集アイコン (🔍) をクリックします。
- インラインセットが不要になった場合は、そのインラインセットの削除アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 次のオプションを構成します

- インラインセットの [名前 (Name)] を設定します。
- (オプション) [MTU] を変更します。

デフォルトの MTU は 1500 です。より大きなパッケージを処理するには、より高い値に設定できます。

ステップ 4 [一般 (General)] タブで、インターフェイスペアを追加します。ペアごとに 2 つのインターフェイスを選択する必要があります。不要なペアは削除できます。

インラインセットにインターフェイスを追加すると、そのモードは[ルーテッド (Routed)] から[インライン (Inline)]に変更されます。インターフェイスの属性は、インラインセットから削除するまで編集できません。

ハードウェア モデルでサポートされている場合は、[バイパス (Bypass)] モードも選択します。ハードウェア バイパスは、停電時にトラフィックがインライン インターフェイス ペア間で流れ続けることを確認します。この機能は、ソフトウェアまたはハードウェア障害の発生時にネットワーク接続を維持するために使用できます。この機能は、高可用性モードまたは EtherChannel では使用できません。同じインラインセットに対して [バイパス (Bypass)] および [リンクステートの伝達 (Propagate Link State)] を有効にしないでください。

- **[無効 (Disabled)]** : ハードウェア バイパスがサポートされているインターフェイスに対してハードウェア バイパスを無効に設定するか、ハードウェア バイパスがサポートされていないインターフェイスを使用します。
- **[スタンバイ (Standby)]** : サポート対象のインターフェイスでハードウェア バイパスをスタンバイ状態に設定します。スタンバイ状態の場合、トリガーイベントが発生するまで、インターフェイスは通常動作を保ちます。
- **[Bypass-Force]** : インターフェイスペアを手動で強制的にバイパス状態にします。

ステップ 5 [詳細 (Advanced)] タブで、次のオプションパラメータを設定します。

- **[モード (Mode)]** : [インライン (Inline)] モードは標準モードであり、デバイスを通過するトラフィックに影響を与えます。

[タップ (Tap)] モードでは、デバイスはインラインで展開されますが、ネットワークトラフィックフローは妨げられません。代わりに、デバイスは各パケットのコピーを作成して、パケットを分析できるようにします。それらのタイプのルールでは、ルールがトリガーされると侵入イベントが生成され、侵入イベントのテーブルビューにはトリガーの原因となったパケットがインライン展開でドロップされたことが示されることに注意してください。インライン展開されたデバイスでタップモードを使用することには、利点があります。たとえば、デバイスがインラインであるかのようにデバイスとネットワーク間の配線をセットアップし、デバイスで生成される侵入イベントのタイプを分析することができます。その結果に基づいて、効率性に影響を与えることなく最適なネットワーク保護を提供するように、侵入ポリシーを変更してドロップルールを追加できます。デバイスをインラインで展開する準備ができたなら、タップモードを無効にして、デバイスとネットワーク間の配線を再びセットアップせずに、不審なトラフィックのドロップを開始することができます。[タップ (Tap)] モードは、トラフィックによってはデバイスのパフォーマンスに大きく影響することに注意してください。

- **[Snortフェールオープン (Snort Fail Open)]** : Snort プロセスがビジーであるか、ダウンしている場合に、インスペクション (有効) またはドロップ (無効) されることなく、新規および既存のトラフィックを通過させる場合は、[ビジー (Busy)] オプションおよび [ダウン (Down)] オプションのいずれかまたは両方を有効または無効にします。

デフォルトでは、Snort プロセスがダウンしている場合はトラフィックをインスペクションなしで通過させ、ビジーの場合はトラフィックをドロップします。

Snort プロセスの状態には以下の意味があります。

- [ビジー (Busy)] : トラフィックバッファが満杯なため、トラフィックを高速処理できません。デバイスの処理量を超えるトラフィックが存在していること、またはその他のソフトウェアリソースの問題があることを示しています。
- [ダウン (Down)] : プロセスの再起動を必要とする設定を展開したため、プロセスが再起動中です。

ダウン状態になった Snort プロセスは、再び稼働中になった時点で新しい接続を検査します。誤検知と検出漏れを防ぐために、Snort プロセスはインラインインターフェイス、ルーテッドインターフェイス、またはトランスペアレントインターフェイス上の既存の接続を検査しません。これは、プロセスのダウン中に初期セッション情報が失われている可能性があるためです。

(注)

Snort プロセスが開始できない場合、Snort プロセスに依存する機能は動作しません。該当する機能には、アプリケーション制御とディープインスペクションが含まれます。システムでは、シンプルかつ容易に判断できるトランスポート層とネットワークの特性を使用して、基本的なアクセスコントロールのみ実行されます。

- [Propagate Link State] : リンクステートの伝達を設定します。

インラインセットのインターフェイスの1つが停止した場合、リンクステート伝播によってインラインインターフェイスペアのもう一方のインターフェイスも自動的に停止します。停止したインターフェイスが再び起動すると、もう一方のインターフェイスも自動的に起動します。つまり、いずれかのインターフェイスのリンクステートが変更されると、デバイスがその変更を検知し、もう一方のインターフェイスのリンクステートを更新して両方のインターフェイスのリンクステートを一致させるということです。リンクステートの変更が伝播されるまでに最大4秒かかることに注意してください。障害状態のネットワークデバイスを避けてトラフィックを自動的に再ルーティングするようルータが設定された復元力の高いネットワーク環境では、リンクステート伝播が特に有効です。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

インターフェイスの詳細オプションの設定

[詳細 (Advanced)] オプションには、MTU、ハードウェア設定、管理専用、MAC アドレス、およびその他の設定が含まれています。

MAC アドレスについて

Media Access Control (MAC) アドレスを手動で設定してデフォルトをオーバーライドできます。

高可用性設定の場合は、インターフェイスのアクティブ MAC アドレスとスタンバイ MAC アドレスの両方を設定できます。アクティブユニットがフェールオーバーしてスタンバイユニットがアクティブになると、その新規アクティブユニットがアクティブな MAC アドレスの使用を開始して、ネットワークの切断を最小限に抑えます。

デフォルトの MAC アドレス

デフォルトの MAC アドレスの割り当ては、インターフェイスのタイプによって異なります。

- 物理インターフェイス：物理インターフェイスでは、Burned-In MAC Address を使用します。
- VLAN インターフェイス (Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220)：すべての VLAN インターフェイスが MAC アドレスを共有します。接続スイッチがどれもこのシナリオをサポートできるようにします。接続スイッチに固有の MAC アドレスが必要な場合、手動で MAC アドレスを割り当てることができます。[詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) を参照してください。
- EtherChannel：EtherChannel の場合、そのチャネルグループに含まれるすべてのインターフェイスが同じ MAC アドレスを共有します。この機能によって、EtherChannel はネットワーク アプリケーションとユーザに対して透過的になります。ネットワーク アプリケーションやユーザから見えるのは1つの論理接続のみであり、個々のリンクのことは認識しないからです。ポートチャネルインターフェイスは、プールにある一意の MAC アドレスを使用します。インターフェイス メンバーシップは MAC アドレスに影響しません。
- サブインターフェイス：物理インターフェイスのすべてのサブインターフェイスは同じ Burned-In MAC Address を使用します。サブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てることが必要になる場合があります。たとえば、サービス プロバイダーによっては、MAC アドレスに基づいてアクセス制御を行う場合があります。また、IPv6 リンクローカルアドレスは MAC アドレスに基づいて生成されるため、サブインターフェイスに一意の MAC アドレスを割り当てて、一意の IPv6 リンクローカル アドレスが可能になり、Threat Defense で特定のインスタンスでのトラフィックの中断を避けることができます。

MTU について

MTU は、Threat Defense デバイスが特定のイーサネット インターフェイスで送信可能な最大フレームペイロードサイズを指定します。MTU の値は、イーサネット ヘッダー、VLAN タギング、またはその他のオーバーヘッドを含まないフレーム サイズです。たとえば、MTU を 1500 に設定すると、予想されるフレーム サイズはヘッダーを含めて 1518 バイトで、VLAN を使用する場合は 1522 です。これらのヘッダーに対応するために MTU 値を高く設定しないでください。

パス MTU ディスカバリ

Threat Defense デバイスは、Path MTU Discovery (RFC 1191 の定義に従う) をサポートします。つまり、2 台のホスト間のネットワーク パス内のすべてのデバイスで MTU を調整できます。したがってパスの最小 MTU の標準化が可能です。

MTU とフラグメンテーション

IPv4 の場合、出力 IP パケットが、指定された MTU より大きい場合、2 つ以上のフレームにフラグメント化されます。フラグメントは送信先（場合によっては中継先）で組立て直されます。フラグメント化はパフォーマンス低下の原因となります。IPv6 の場合、通常、パケットのフラグメント化は許可されません。したがってフラグメント化を避けるために、IP パケットを MTU サイズ以内におさめる必要があります。

UDP または ICMP の場合、アプリケーションは、フラグメンテーションを避けるために、MTU を考慮する必要があります。



(注) Threat Defense デバイスはメモリに空きがある限り、設定された MTU よりも大きいフレームを受信します。

MTU とジャンボ フレーム

MTU が大きくなると、より大きなパケットを送信できます。大きなパケットはネットワークにとってより効率的です。次のガイドラインを参照してください。

- トラフィックパスの MTU の一致：すべての Threat Defense インターフェイスの MTU と、トラフィックパス上のその他のデバイスインターフェイスの MTU を同じ値に設定することを推奨します。MTU の一致により、中間デバイスでのパケットのフラグメント化が回避できます。
- ジャンボフレームへの対応：ジャンボフレームとは、標準的な最大値 1522 バイト（レイヤ 2 ヘッダーおよび VLAN ヘッダーを含む）より大きく、9216 バイトまでのイーサネットパケットのことです。ジャンボフレームに対応するために、MTU を 9,000 バイト以上に設定できます。最大値はモデルによって異なります。



(注) MTU を増やすとジャンボフレームに割り当てるメモリが増え、他の機能（アクセスルールなど）の最大使用量が制限される場合があります。Threat Defense Virtual のデフォルト値の 1,500 よりも MTU のサイズを大きくする場合は、システムを再起動する必要があります。高可用性にデバイスが設定されている場合、スタンバイデバイスも再起動する必要があります。ジャンボフレームのサポートが常に有効な場合、その他のモデルを再起動する必要はありません。

詳細オプションの設定

インターフェイスの詳細オプションには、ほとんどのネットワークに適したデフォルト設定値が入力されています。ネットワーキングの問題を解決している場合、またはハイアベイラビリティを設定する場合にのみ、これを設定します。

次の手順では、インターフェイスが定義済みであることを前提としています。インターフェイスを最初に編集または作成するときに、これらの設定を編集することもできます。

制限事項

- ブリッジグループの場合、これらのオプションのほとんどはメンバーインターフェイスで設定します。DAD 試行回数と HA モニタリングの有効化を除き、これらのオプションはブリッジ仮想インターフェイス（BVI）では使用できません。
- 管理インターフェイスに MTU、デュプレックス、速度を設定することはできません。
- 拡張オプションは、Firepower 1010 および Cisco Secure Firewall 1210/1220 スイッチポートでは使用できません。
- Firepower 4100/9300 のインターフェイスにデュプレックスおよび速度を設定することはできません。インターフェイスのこれらの機能を設定するには、FXOS を使用します。
- パッシブインターフェイスでは、MTU、デュプレックス、速度のみ設定できます。インターフェイスの管理のみを行うことはできません。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックし、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックし、次にインターフェイスタイプをクリックして、インターフェイスのリストを表示します。
- ステップ 2** 編集するインターフェイスの編集アイコン (🔧) をクリックします。
- ステップ 3** [詳細オプション (Advanced Options)] をクリックします。
- ステップ 4** インターフェイスの状態をハイアベイラビリティ設定でピア装置にフェールオーバーするかどうかが判断する際の要素にする場合は、[HA モニタリングの有効化 (Enable for HA Monitoring)] を選択します。
- このオプションは、ハイアベイラビリティを設定しない場合は無視されます。インターフェイスの名前を設定しない場合も、無視されます。
- ステップ 5** データ インターフェイスを管理専用に指定する場合は、[管理専用 (Management Only)] を選択します。
- 管理専用インターフェイスはトラフィックを通過させないため、データインターフェイスを管理専用として設定してもほとんど価値はありません。管理/診断インターフェイスは、常に管理専用であるため、この設定を変更することはできません。

ステップ 6 Cisco Trustsec を有効にするには、[セキュリティグループタグの伝達 (Propagate Security Group Tag)] を選択します。

名前付きか名前なしにかかわらず、物理、サブインターフェイス、EtherChannel、VLAN、管理、または BVI インターフェイスで Cisco TrustSec を有効または無効にできます。デフォルトでは、インターフェイスに名前を付けると、Cisco TrustSec が自動的に有効になります。

ステップ 7 [MTU] (最大伝送ユニット) を任意の値に設定します。

デフォルトの MTU は 1500 バイトです。最小値と最大値は、プラットフォームによって異なります。ジャンボフレームが頻繁にやり取りされるネットワークでは、大きな値に設定します。

(注)

ISA 3000 シリーズデバイス、Threat Defense Virtual で MTU を 1500 より大きい値に設定する場合は、デバイスを再起動する必要があります。高可用性にデバイスが設定されている場合、スタンバイデバイスも再起動する必要があります。ジャンボフレームのサポートが常に有効な場合、その他のモデルを再起動する必要はありません。

ステップ 8 (物理インターフェイスのみ) 速度およびデュプレックスの設定を変更します。

デフォルトでは、インターフェイスは接続相手のインターフェイスに対し、互いに最適なデュプレックスおよび速度をネゴシエートしますが、必要に応じて、特定のデュプレックスおよび速度を強制的に適用することもできます。記載されているオプションは、インターフェイスでサポートされるもののみです。ネットワーク モジュールのインターフェイスにこれらのオプションを設定する前に、[インターフェイスの設定に関する制限 \(310 ページ\)](#) をお読みください。

- [二重 (Duplex)] : [ハーフ (Half)]、または [フル (Full)] を選択します。SFP インターフェイスは [全二重 (Full)] のみをサポートします。
- [速度 (Speed)] : 実際のオプションは、モデルとインターフェイスタイプによって異なります。速度、[自動 (Auto)]、[ネゴシエーションなし (No Negotiate)]、または [SFP を検出 (Detect SFP)] を選択してください。Firepower 1100 ファイバポートの場合、[ネゴシエーションなし (No Negotiate)] を指定すると速度が 1,000 Mbps に設定され、フロー制御パラメータとリモート障害情報のリンクネゴシエーションが無効になります。(Cisco Secure Firewall 3100 のみ) [SFP を検出 (Detect SFP)] を選択してインストールされている SFP モジュールの速度を検出し、適切な速度を使用します。デュプレックスは常に全二重で、自動ネゴシエーションは常に有効です。このオプションは、後でネットワークモジュールを別のモデルに変更し、速度を自動的に更新する場合に便利です。Cisco Secure Firewall 1250 では、2.5Gbps のインターフェイス速度を構成できます。
- (Cisco Secure Firewall 3100 のみ) [自動ネゴシエーション (Auto Negotiation)] : インターフェイスのタイプに応じて、フロー制御パラメータとリモート障害情報のリンクステータスをネゴシエートするようにインターフェイスを設定します。
- [前方誤り訂正モード (Forward Error Correction Mode)] : (Cisco Secure Firewall 3100 のみ) 25 Gbps 以上のインターフェイスの場合は、前方誤り訂正 (FEC) を有効にします。EtherChannel メンバーインターフェイスの場合は、EtherChannel に追加する前に前方誤り訂正を設定する必要があります。自動を使用する場合に選択する設定は、トランシーバの

タイプと、インターフェイスが固定（内蔵）かネットワークモジュールかによって異なります。

表 6: 自動設定のデフォルト FEC

トランシーバタイプ	固定ポートのデフォルト FEC (イーサネット 1/9 ~ 1/16)	ネットワークモジュールのデフォルト FEC
25G-SR	第 108 条 RS-FEC	第 108 条 RS-FEC
25G-LR	第 108 条 RS-FEC	第 108 条 RS-FEC
10/25G-CSR	第 108 条 RS-FEC	第 74 条 FC-FEC
25G-AOCxM	第 74 条 FC-FEC	第 74 条 FC-FEC
25G-CU2.5/3M	自動ネゴシエーション	自動ネゴシエーション
25G-CU4/5M	自動ネゴシエーション	自動ネゴシエーション

ステップ 9 [IPv6設定 (IPv6 Configuration)] を変更します。

- [DHCPクライアントの有効化 (Enable DHCP Client)] : DHCPv6 を使用してアドレスを取得します。

ルータアダプタイズメントからデフォルトルートを取得するには、[DHCPを使用してデフォルトルートを取得 (Obtain default route using DHCP)] をオンにします。

- [Enable DHCP for IPv6 address configuration] : IPv6 ルータのアダプタイズメント パケットに、管理アクセス設定フラグを設定するかどうか。このフラグは、取得されるステートレス自動設定のアドレス以外のアドレスの取得に DHCPv6 を使用する必要があることを IPv6 自動設定クライアントに通知します。
- [Enable DHCP for IPv6 non-address configuration] : IPv6 ルータのアダプタイズメント パケットに、その他のアクセス設定フラグを設定するかどうか。このフラグは、DHCPv6 から DNS サーバアドレスなどの追加情報の取得に DHCPv6 を使用する必要があることを、IPv6 自動設定クライアントに通知します。
- [DAD 試行回数 (DAD Attempts)] : インターフェイスで重複アドレス検出 (DAD) を実行する回数を 0 ~ 600 の範囲で指定します。デフォルトは 1 です。ステートレス自動設定プロセスでは、アドレスがインターフェイスに割り当てられる前に、DAD によって新しいユニキャスト IPv6 アドレスの一意性が確認されます。重複アドレスがインターフェイスのリンクローカルアドレスであれば、インターフェイスで IPv6 パケットの処理はディセーブルになります。重複アドレスがグローバルアドレスであれば、そのアドレスは使用されません。インターフェイスは、ネイバー送信要求メッセージを使用して、重複アドレス検出を実行します。重複アドレス検出 (DAD) プロセスを無効にするには、この値を 0 に設定します。

ステップ 10 (必要に応じて、サブインターフェイスおよびハイ アベイラビリティ装置に推奨されます) MAC アドレスを設定します。

デフォルトでは、システムはインターフェイスのネットワークインターフェイスカード (NIC) に焼き込まれた MAC アドレスを使用します。したがって、インターフェイスのすべてのサブインターフェイスは同じ MAC アドレスを使用するため、サブインターフェイスごとに一意のアドレスを作成する必要がある場合があります。手動設定されたアクティブ/スタンバイ MAC アドレスも、ハイ アベイラビリティを設定する場合に推奨されます。MAC アドレスを定義すると、フェールオーバー時にネットワークの一貫性を維持することができます。

- [MACアドレス (MAC Address)] : H.H.H 形式の Media Access Control。H は 16 ビットの 16 進数です。たとえば、MAC アドレス 00-0C-F1-42-4C-DE は 000C.F142.4CDE と入力します。MAC アドレスはマルチキャストビットセットを持つことはできません。つまり、左から 2 番目の 16 進数字を奇数にすることはできません。
- [スタンバイ MAC アドレス (Standby MAC Address)] : ハイ アベイラビリティで使います。アクティブ装置がフェールオーバーし、スタンバイ装置がアクティブになると、新しいアクティブ装置はアクティブな MAC アドレスの使用を開始して、ネットワークの切断を最小限に抑えます。一方、古いアクティブ装置はスタンバイ アドレスを使用します。

ステップ 11 [OK] をクリックします。

インターフェイスの変更のスキャンとインターフェイスの移行

デバイスのインターフェイスを変更すると、デバイスは変更が発生したことを Device Manager に通知します。インターフェイスのスキャンを実行するまで、設定を展開することはできません。Device Manager では、セキュリティポリシー内のインターフェイスを別のインターフェイスに移行することができるため、インターフェイスの削除はほぼシームレスに実行できます。

インターフェイスのスキャンと移行について

Scanning

デバイスのインターフェイスを変更すると、デバイスは変更が発生したことを Device Manager に通知します。インターフェイスのスキャンを実行するまで、設定は展開できません。インターフェイスの追加、削除、または復元を検出するスキャンの後に設定を展開できますが、削除されたインターフェイスを参照している設定の部分は展開されません。

スキャンを必要とするインターフェイスの変更には、インターフェイスの追加や削除が含まれます。たとえば、ネットワークモジュールの変更、Firepower 4100/9300 シャーシ上に割り当てられたインターフェイスの変更、Threat Defense Virtual でのインターフェイスの変更などです。

次の変更は、スキャン後の展開をブロックしません。

- セキュリティゾーンのメンバーシップ

- EtherChannel インターフェイス メンバーシップ
- Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220 VLAN インターフェイス スイッチポートのメンバーシップ
- BVI を参照するポリシーのブリッジ グループ インターフェイスのメンバーシップ



- (注) syslog サーバの出力インターフェイスの変更によって展開がブロックされることはありませんが、syslog サーバの設定は、手動で、またはインターフェイス交換機能を使用して修正する必要があります。

Migrating

新しいインターフェイスの追加や未使用のインターフェイスの削除が、脅威に対する防御 の設定に与える影響は最小限です。ただし、セキュリティポリシーで使用されているインターフェイスを削除すると、設定に影響を及ぼします。インターフェイスは、セキュリティゾーン、NAT、VPN、ルーティング、DHCP サーバなど、脅威に対する防御 設定内の多くの場所で直接参照できます。

Device Manager では、セキュリティ ポリシー内のインターフェイスを別のインターフェイスに移行することができるため、インターフェイスの削除はほぼシームレスに実行できます。



- (注) 移行機能は、名前、IPアドレス、およびその他の設定をインターフェイス間でコピーしません。この機能は、古いインターフェイスではなく新しいインターフェイスを参照するようにセキュリティポリシーを変更します。移行する前に、新しいインターフェイスの設定を手動で設定する必要があります。

インターフェイスを削除する必要がある場合は、古いインターフェイスを削除する「前に」、新しいインターフェイスを追加し、古いインターフェイスを移行することをお勧めします。インターフェイスの追加と削除を同時に行っても移行プロセスは機能します。ただし、削除されたインターフェイスやそれらを参照するポリシーを「手動で」編集することはできません。そのため、移行を段階的に実行する方が簡単になる場合があります。

同じタイプのインターフェイスを交換する場合（たとえば、ネットワークモジュールを RMA する必要がある場合）は、次のことができます。1. シャーシからモジュールを取り外す。2. スキャンを実行する。3. 削除されたインターフェイスとは関係のない変更を展開する。4. モジュールを交換する。5. 新しいスキャンを実行する。6. インターフェイス関連の変更を含め、設定を展開します。新しいインターフェイスのインターフェイス ID と特性が古いインターフェイスと同じである場合は、移行を実行する必要はありません。

インターフェイスのスキャンと移行に関する注意事項と制限事項

サポートされていないインターフェイスの移行

- BVI への物理インターフェイス
- ファイアウォール インターフェイスへのパッシブインターフェイス
- ブリッジグループメンバー
- EtherChannel インターフェイスメンバー
- ISA 3000 ハードウェア バイパス メンバー
- Firepower 1010 および Secure Firewall 1210/1220 VLAN インターフェイスまたはスイッチポート
- 診断インターフェイス
- HAフェールオーバーおよびステートリンク
- さまざまなタイプのインターフェイスの移行（たとえば、物理インターフェイスを必要とする機能へのブリッジ グループ インターフェイスの移行）

その他のガイドライン

- インターフェイスを削除する必要がある場合は、古いインターフェイスを削除する「前に」、新しいインターフェイスを追加し、古いインターフェイスを移行することをお勧めします。
- Threat Defense Virtual では、インターフェイスリストの末尾でインターフェイスの追加や削除が行われるだけです。他の場所でインターフェイスを追加または削除した場合、ハイパーバイザによってインターフェイスの番号が再設定され、その結果、設定内のインターフェイス ID が誤ったインターフェイスと一致します。
- スキャン/移行が失敗した場合は、シャーシの元のインターフェイスを復元し、元の状態に戻すために再スキャンします。
- バックアップの場合は、新しいインターフェイスを使用して新しいバックアップを作成してください。古い設定で復元すると、古いインターフェイス情報が復元され、スキャン/置換を再度実行する必要が生じます。
- HA の場合は、アクティブユニットでインターフェイススキャンを実行する前に、両方の装置で同じインターフェイスの変更を行います。アクティブユニットでスキャン/移行を実行する必要があるだけです。設定の変更はスタンバイ ユニットに複製されます。

インターフェイスのスキャンと移行

Device Manager でインターフェイスの変更をスキャンし、削除されたインターフェイスからインターフェイス設定を移行します。インターフェイス設定の移行のみを必要とする場合は（スキャンは不要）、次の手順のうちスキャンに関連するステップを無視してください。



- (注) 移行機能は、名前、IPアドレス、およびその他の設定をインターフェイス間でコピーしません。この機能は、古いインターフェイスではなく新しいインターフェイスを参照するようにセキュリティポリシーを変更します。移行する前に、新しいインターフェイスの設定を手動で設定する必要があります。

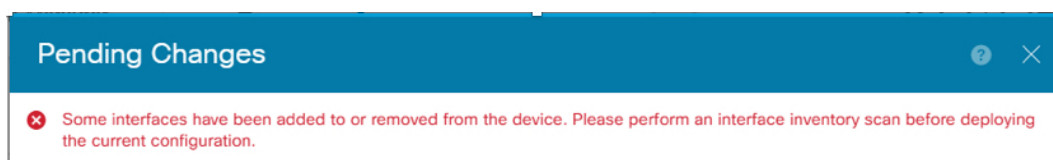
手順

ステップ 1 シャーシでインターフェイスを追加または削除します。

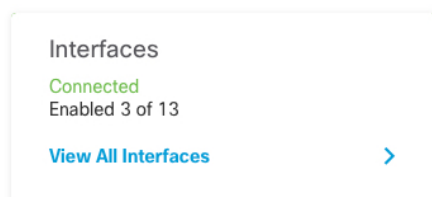
インターフェイスを削除する必要がある場合は、古いインターフェイスを削除する「前に」、新しいインターフェイスを追加し、古いインターフェイスの置き換えを実行することをお勧めします。

ステップ 2 インターフェイスの変更をスキャンします。

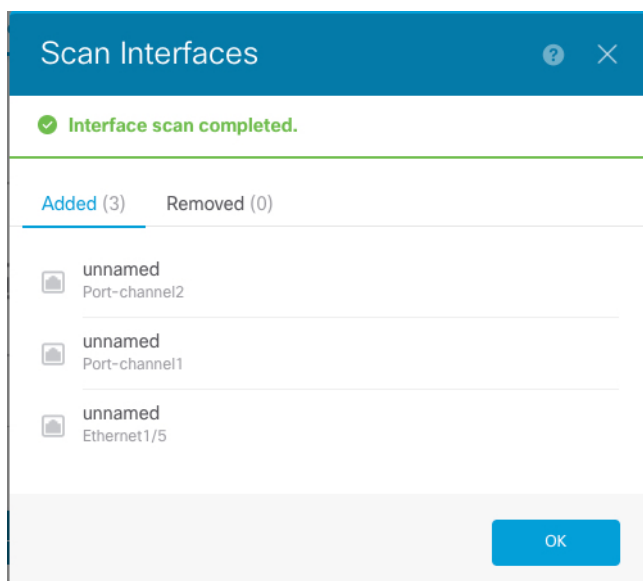
インターフェイスのスキャンを実行するまで、設定は展開できません。スキャンの前に展開しようとする、次のエラーが表示されます。



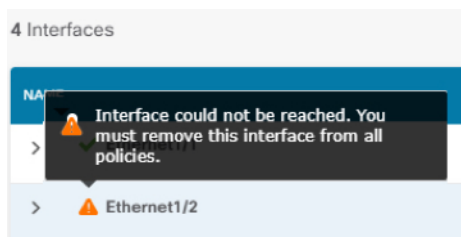
- a) [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)] リンクをクリックします。



- b) [インターフェイス (Interfaces)] アイコン () をクリックします。
c) インターフェイスがスキャンされるのを待ってから、[OK] をクリックします。



スキャン後、削除されたインターフェイスは、[インターフェイス]ページに注意記号とともに表示されます。



ステップ 3 既存のインターフェイスを新しいインターフェイスに移行するには、次の手順を実行します。

- a) 新しいインターフェイスに名前、IPアドレスなどを設定します。

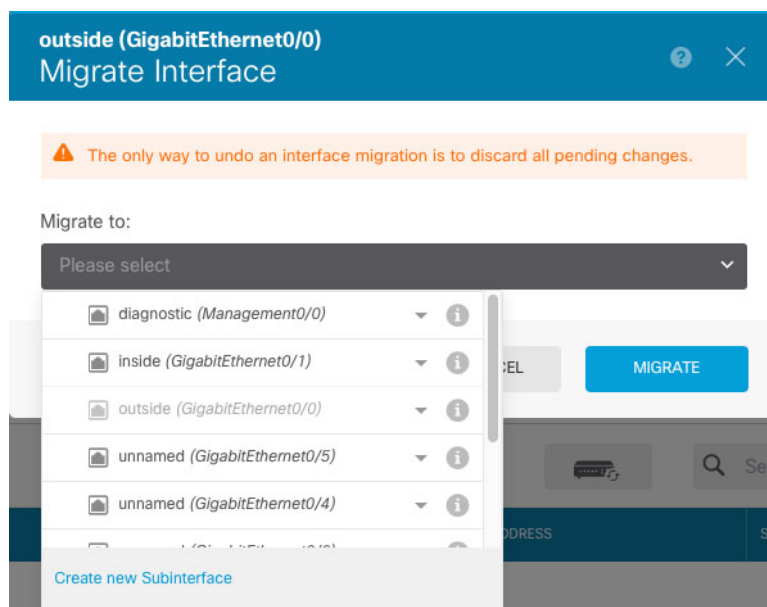
削除するインターフェイスの既存のIPアドレスと名前を使用する場合は、新しいインターフェイスでこれらの設定を使用できるように、まず古いインターフェイスをダミーの名前とIPアドレスで再設定する必要があります。

- b) 古いインターフェイスの[移行]アイコンをクリックします。

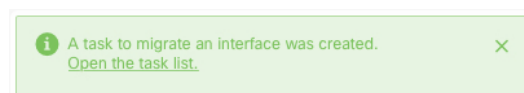


このプロセスによって、インターフェイスを参照しているすべての設定で、古いインターフェイスが新しいインターフェイスに移行されます。

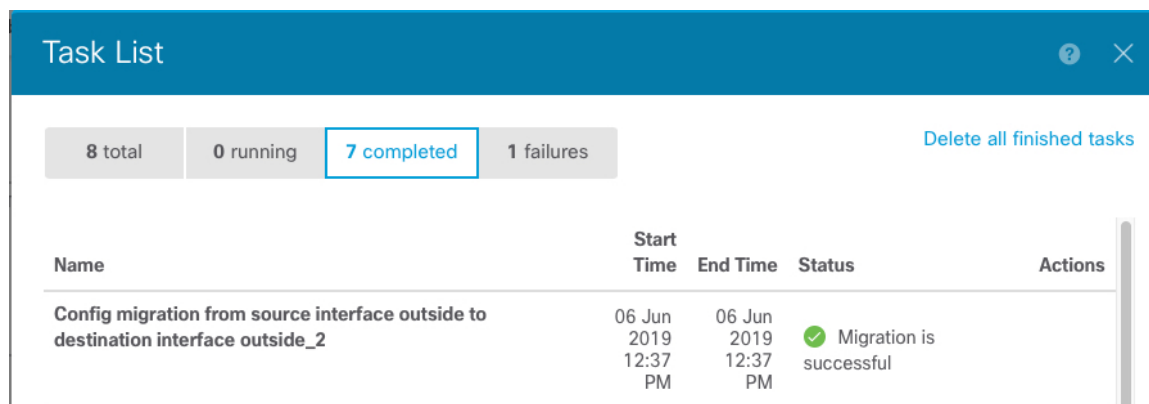
- c) [移行先: (Migrate to:)] ドロップダウンリストから新しいインターフェイスを選択します。



- d) [インターフェイス (Interfaces)] ページにメッセージが表示されます。メッセージ内のリンクをクリックします。



- e) [タスクリスト (Task List)] を調べて、移行が成功したことを確認します。

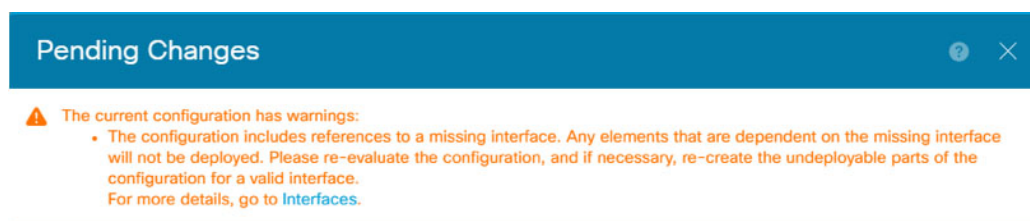


- f) 移行が失敗した場合は、APIエクスプローラで理由を確認できます。

APIエクスプローラを開くには、[詳細オプション (More options)] ボタン (⋮) をクリックし、[APIエクスプローラ (API Explorer)] を選択します。[インターフェイス (Interface)] > [GET/jobs/interfacemigrations] を選択し、[試してみる (Try it Out!)] をクリックします。

ステップ 4 設定を展開します。

削除されたインターフェイスを参照する設定の部分は展開されません。その場合、次のメッセージが表示されます。



ステップ 5 シャーシの古いインターフェイスを取り外し、別のスキャンを実行します。

削除されたインターフェイスのうちポリシーで使用されなくなったものは、[インターフェイス (Interfaces)] ページから削除されます。

ステップ 6 設定を再度展開し、使用していないインターフェイスを設定から削除します。

Secure Firewall 3100 のネットワークモジュールの管理

最初にファイアウォールの電源をオンにする前にネットワークモジュールをインストールした場合、アクションは不要です。ネットワークモジュールは有効になり、使用できる状態になっています。

初回ブートアップ後にネットワークモジュールのインストールを変更する必要がある場合は、次の手順を参照してください。

ブレイクアウトポートの設定

40GB 以上のインターフェイスごとに 10GB のブレイクアウトポートを設定できます。この手順では、ポートの分割と再参加の方法について説明します。ブレイクアウトポートは、EtherChannel への追加を含め、他の物理イーサネットポートと同じように使用できます。

ハイアベイラビリティの場合は、アクティブユニットでこの手順を実行します。インターフェイスの変更は他のユニットに複製されます。

始める前に

- サポートされているブレイクアウトケーブルを使用する必要があります。詳細については、ハードウェア設置ガイドを参照してください。
- このインターフェイスは、ご使用の構成では使用できませんサブインターフェイスを持つことも、EtherChannel の一部にすることもできません。
- ハイアベイラビリティの場合、ハイアベイラビリティ用のインターフェイスの命名、有効化、またはモニタリングもできません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

[インターフェイス (Interfaces)] タブがデフォルトで選択されます。インターフェイスリストに、物理インターフェイスとそれぞれの名前、アドレス、状態が表示されます。

ステップ 2 40GB 以上のインターフェイスから 10GB ポートを分割するために、インターフェイスの右側にある [ブレイクアウト (Breakout)] アイコン () をクリックします。

確認ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。インターフェイスが使用中の場合は、エラーメッセージが表示されます。分割を再試行する前に、ユースケースを解決する必要があります。たとえば、別のインターフェイスを使用するように設定を変更することができます。

たとえば、Ethernet2/1 40GB インターフェイスを分割する場合、分割後の子インターフェイスは、Ethernet2/1/1、Ethernet2/1/2、Ethernet2/1/3、および Ethernet2/1/4 として識別されます。

インターフェイスのグラフィックでは、分割されたポートは  によって示されます。ブレイクアウトポートのステータスの詳細を示すページは、左右の矢印をクリックしてスクロールすることができます。

ステップ 3 ブレイクアウトポートを再参加させるには、インターフェイスの右側にある [参加 (Join)] アイコン () をクリックします。

確認ダイアログボックスで、[OK] をクリックします。子ポートが使用中の場合は、エラーメッセージが表示されます。再参加を再試行する前に、ユースケースを解決する必要があります。たとえば、別のインターフェイスを使用するように設定を変更することができます。

インターフェイスのすべての子ポートを再参加させる必要があります。

ステップ 4 設定を展開します。

ネットワークモジュールの追加

初回起動後にファイアウォールにネットワークモジュールを追加するには、次の手順を実行します。新しいモジュールを追加するには、再起動が必要です。

手順

ステップ 1 ハードウェア設置ガイドに従ってネットワークモジュールをインストールします。

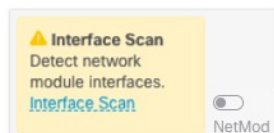
ハイアベイラビリティの場合は、両方のユニットにネットワークモジュールをインストールします。

ステップ2 ファイアウォールを再起動します。[システムの再起動またはシャットダウン（1020ページ）](#)を参照してください。ハイアベイラビリティの場合は、スタンバイユニットを再起動してから、スタンバイユニットでこの手順の残りを実行します。

ステップ3 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)] リンクをクリックします。

次のグラフィックは、インターフェイススキャンが必要であることを示しています。

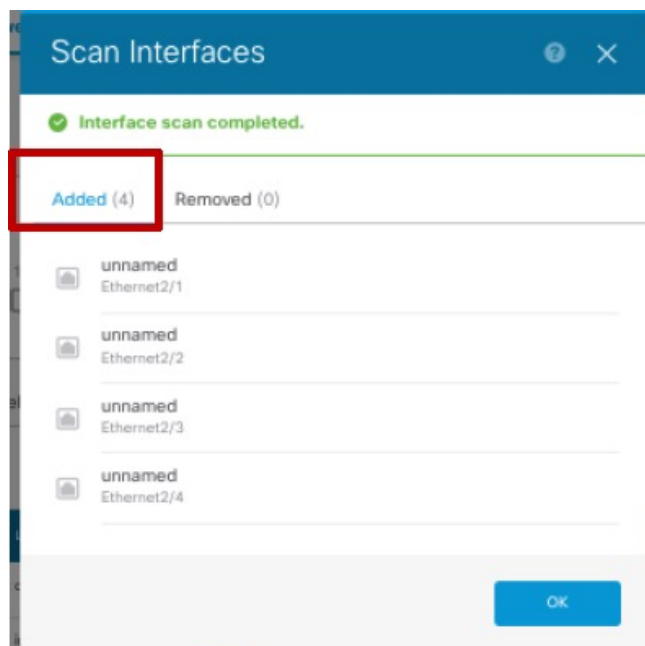
図 13: インターフェイススキャンが必要



ステップ4 [インターフェイススキャン (Interface Scan)] をクリックして、ネットワークモジュールの新しい詳細情報でページを更新します。

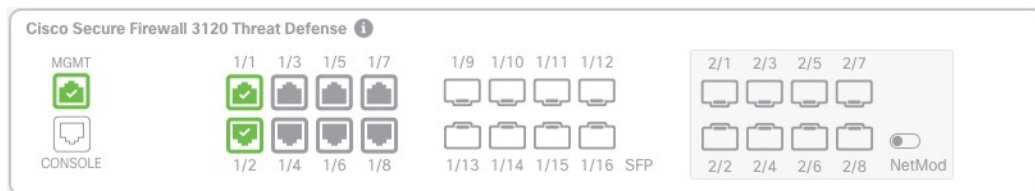
インターフェイスがスキャンされるのを待ってから、[OK] をクリックします。

図 14: インターフェイスのスキャン



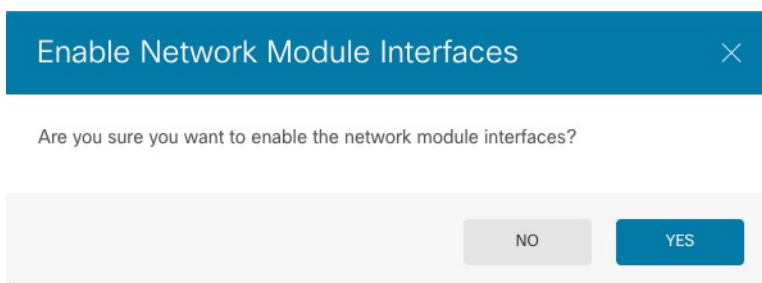
ステップ5 インターフェイスのグラフィックで、スライダー (●) をクリックしてネットワークモジュールを有効にします。

図 15: ネットワークモジュールの有効化



ステップ 6 ネットワークモジュールを有効にするかどうかを確認するメッセージが表示されます。[Yes] をクリックします。

図 16: 有効化の確認



ステップ 7 ハイアベイラビリティの場合は、アクティブユニットを変更し（[アクティブピアとスタンバイピアの切り替え（強制フェールオーバー）](#)（285 ページ）を参照）、新しいスタンバイユニットに対して上記の手順を実行します。

ネットワークモジュールの交換方法

再起動することなく、同じタイプの新しいモジュールのネットワークモジュールをホットスワップできます。ただし、現在のモジュールを安全に取り外すには、シャットダウンする必要があります。この手順では、古いモジュールをシャットダウンし、新しいモジュールをインストールして有効にする方法について説明します。

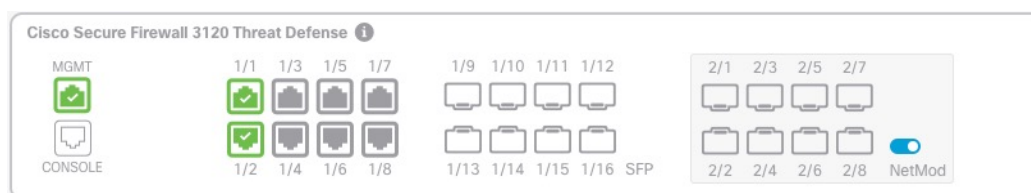
始める前に

ハイアベイラビリティの場合、フェールオーバーリンクがモジュール上にあると、ネットワークモジュールを無効化できません。ハイアベイラビリティを解除する必要があります（[ハイアベイラビリティの破棄](#)（284 ページ）を参照）。モジュールをホットスワップした後、ハイアベイラビリティを再編成できます。

手順

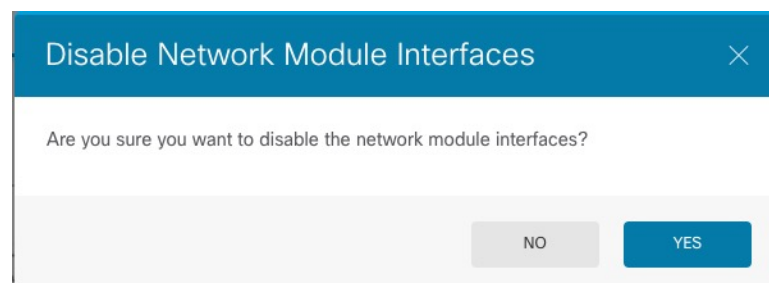
- ステップ 1** ハイアベイラビリティの場合、ホットスワップを実行するユニットがスタンバイノードであることを確認します。[アクティブ ピアとスタンバイ ピアの切り替え（強制フェールオーバー）（285 ページ）](#)を参照してください。
- ステップ 2** [デバイス（Device）] をクリックしてから、[インターフェイス（Interfaces）] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示（View All Interfaces）] リンクをクリックします。
- ステップ 3** インターフェイスのグラフィックで、スライダー（) をクリックしてネットワークモジュールを無効にします。

図 17: ネットワークモジュールの無効化



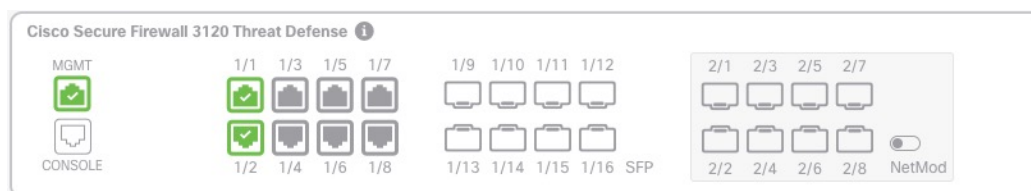
- ステップ 4** ネットワークモジュールを無効にするかどうかを確認するメッセージが表示されます。[Yes] をクリックします。

図 18: 無効化の確認



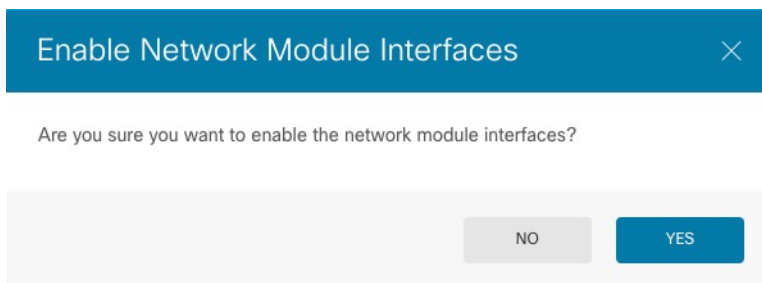
- ステップ 5** ハードウェア設置ガイドに従ってネットワークモジュールをインストールします。
- ステップ 6** インターフェイスのグラフィックで、スライダー（) をクリックしてネットワークモジュールを有効にします。

図 19: ネットワークモジュールの有効化



ステップ 7 ネットワークモジュールを有効にするかどうかを確認するメッセージが表示されます。[Yes] をクリックします。

図 20: 有効化の確認



ネットワークモジュールを別のタイプに交換する

ネットワークモジュールを別のタイプに交換する場合は、再起動が必要です。新しいモジュールのインターフェイス数が古いモジュールよりも少ない場合は、存在しなくなるインターフェイスに関連する構成を手動で削除する必要があります。

始める前に

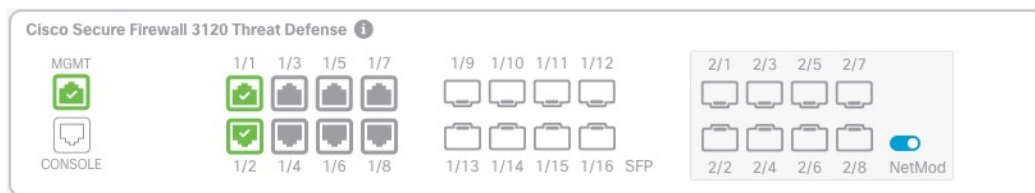
ハイアベイラビリティの場合、フェールオーバーリンクがモジュール上にあると、ネットワークモジュールを無効化できません。ハイアベイラビリティを解除する必要があります（[ハイアベイラビリティの破棄（284ページ）](#)を参照）。これにより、アクティブユニットの再起動時にダウンタイムが発生するようになります。ユニットの再起動が完了したら、ハイアベイラビリティを再編成できます。

手順

ステップ 1 [デバイス（Device）] をクリックしてから、[インターフェイス（Interfaces）] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示（View All Interfaces）] リンクをクリックします。ハイアベイラビリティの場合は、最初にスタンバイユニットでこの手順を実行します。

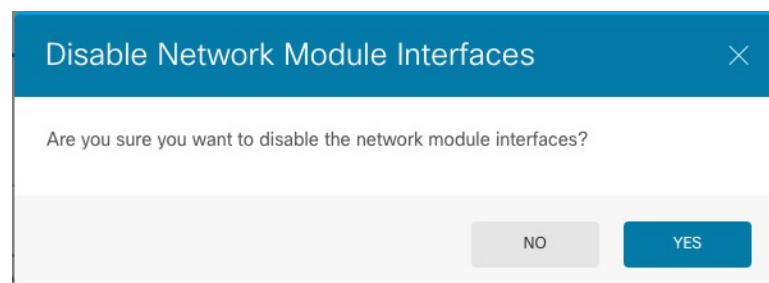
ステップ 2 インターフェイスのグラフィックで、スライダー（) をクリックしてネットワークモジュールを無効にします。

図 21: ネットワークモジュールの無効化



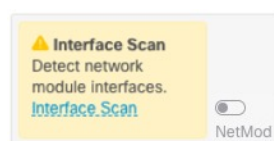
- ステップ3** ネットワークモジュールを無効にするかどうかを確認するメッセージが表示されます。[Yes] をクリックします。

図 22: 無効化の確認



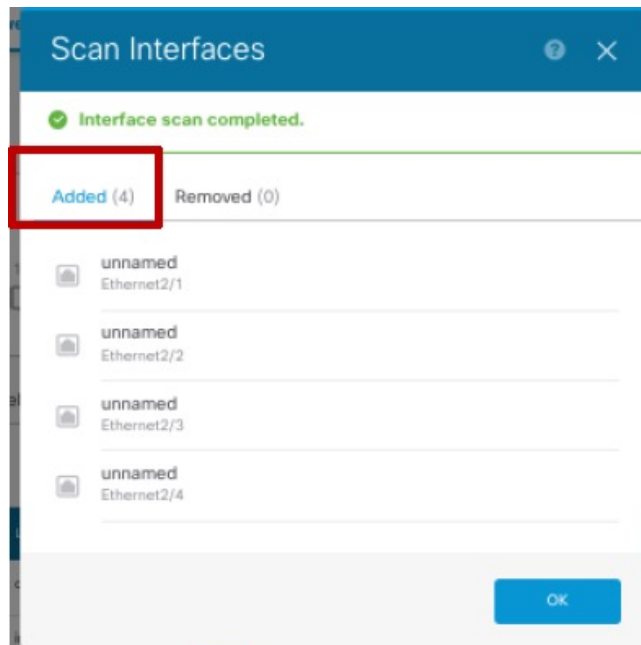
- ステップ4** ハードウェア設置ガイドに従って、デバイスの古いネットワークモジュールを取り外し、新しいネットワークモジュールと交換します。
- ステップ5** ファイアウォールを再起動します。 [システムの再起動またはシャットダウン \(1020 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ6** [インターフェイス (Interfaces)] ページの次のグラフィックは、インターフェイススキャンが必要であることを示しています。[インターフェイススキャン (Interface Scan)] をクリックして、ネットワークモジュールの新しい詳細情報でページを更新します。

図 23: インターフェイススキャンが必要



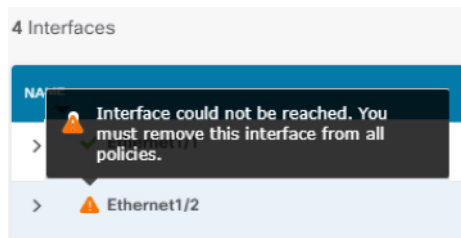
- ステップ7** インターフェイスがスキャンされるのを待ってから、[OK] をクリックします。

図 24: インターフェイスのスキャン



スキャン後、削除されたインターフェイスは、[インターフェイス (Interfaces)] ページに注意記号とともに表示されます。

図 25: 削除されたインターフェイス



ステップ 8 ネットワークモジュールのインターフェイスの数が減少した場合は、削除されたインターフェイスを直接参照する設定を削除する必要があります。

セキュリティゾーンを参照するポリシーは影響を受けません。必要に応じて、設定を別のインターフェイスに移行させることができます。 [インターフェイスのスキャンと移行 \(374 ページ\)](#) を参照してください。

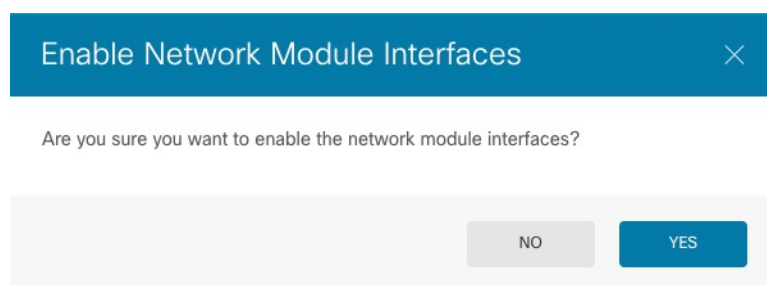
ステップ 9 インターフェイスのグラフィックで、スライダー (🔌) をクリックしてネットワークモジュールを有効にします。

図 26: ネットワークモジュールの有効化



- ステップ 10** ネットワークモジュールを有効にするかどうかを確認するメッセージが表示されます。[Yes] をクリックします。

図 27: 有効化の確認



- ステップ 11** インターフェイス速度を変更するには、[詳細オプションの設定 \(369 ページ\)](#) を参照してください。
- デフォルトの速度は、[SFPを検出 (Detect SFP)] に設定されています。これにより、取り付けられている SFP から適切な速度が検出されます。速度を手動で特定の値に設定しており、その速度の変更が必要になった場合にのみ、速度を修正する必要があります。
- ステップ 12** 設定を変更する必要がある場合は、[展開 (Deployment)] アイコンをクリックします。
- ネットワークモジュールの変更を保存するためだけに展開する必要はありません。
- ステップ 13** ハイアベイラビリティの場合は、アクティブユニットを変更し ([アクティブピアとスタンバイピアの切り替え \(強制フェールオーバー\) \(285 ページ\)](#) を参照)、新しいスタンバイユニットに対して上記の手順を実行します。

ネットワーク モジュールの取り外し

ネットワークモジュールを完全に削除する場合は、次の手順に従います。ネットワークモジュールを削除するには、再起動が必要です。

始める前に

ハイアベイラビリティの場合は、フェールオーバーリンクがネットワークモジュール上にないことを確認してください。

手順

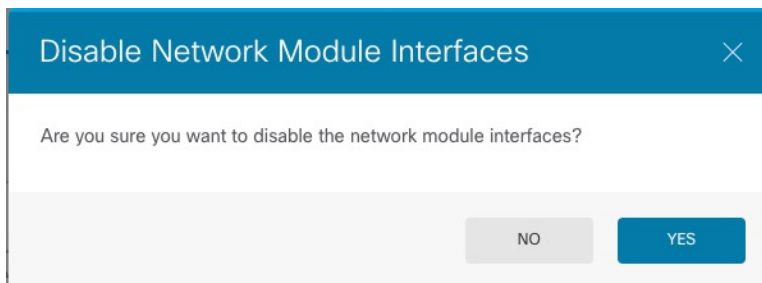
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)] リンクをクリックします。ハイアベイラビリティの場合は、最初にスタンバイユニットでこの手順を実行します。
- ステップ 2** インターフェイスのグラフィックで、スライダー () をクリックしてネットワークモジュールを無効にします。

図 28: ネットワークモジュールの無効化



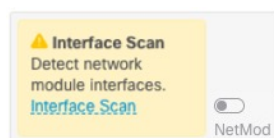
- ステップ 3** ネットワークモジュールを無効にするかどうかを確認するメッセージが表示されます。[Yes] をクリックします。

図 29: 無効化の確認



- ステップ 4** ファイアウォールで、ネットワークモジュールを削除します。
- ステップ 5** ファイアウォールを再起動します。 [システムの再起動またはシャットダウン \(1020 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 6** [インターフェイス (Interfaces)] ページの次のグラフィックは、インターフェイススキャンが必要であることを示しています。[インターフェイススキャン (Interface Scan)] をクリックして、ネットワークモジュールの適切な詳細情報でページを更新します。

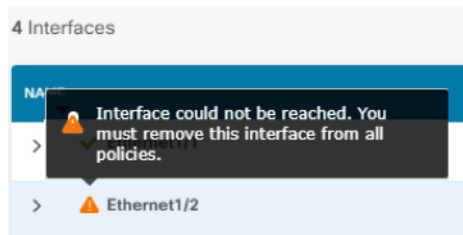
図 30: インターフェイススキャンが必要



- ステップ 7** インターフェイスがスキャンされるのを待ってから、[OK] をクリックします。

スキャン後、削除されたインターフェイスは、[インターフェイス (Interfaces)] ページに注意記号とともに表示されます。

図 31: 削除されたインターフェイス



- ステップ 8** 削除されたインターフェイスを直接参照するすべての設定を削除する必要があります。
- セキュリティゾーンを参照するポリシーは影響を受けません。必要に応じて、設定を別のインターフェイスに移行させることができます。[インターフェイスのスキャンと移行 \(374 ページ\)](#) を参照してください。
- ステップ 9** 設定を変更する必要がある場合は、[展開 (Deployment)] アイコンをクリックします。
- ネットワークモジュールの変更を保存するためだけに展開する必要はありません。
- ステップ 10** ハイアベイラビリティの場合は、アクティブユニットを変更し ([アクティブピアとスタンバイピアの切り替え \(強制フェールオーバー\) \(285 ページ\)](#)) を参照)、新しいスタンバイユニットに対して上記の手順を実行します。

管理インターフェイスと診断インターフェイスのマージ

Threat Defense 7.4 以降では、マージされた管理インターフェイスと診断インターフェイスがサポートされます。診断インターフェイスを使用する設定がある場合、インターフェイスは自動的にマージされないため、次の手順を実行する必要があります。この手順では、設定の変更を確認し、場合によっては手動で設定を修正する必要があります。

バックアップ/復元機能は、マージの状態（マージされていないかマージされている）を保存および復元します。たとえば、インターフェイスをマージしてから、古いマージされていない設定を復元すると、復元された設定はマージされていない状態になります。

次の表に、レガシー診断インターフェイスで使用可能な設定と、マージの完了方法を示します。

表 7: *Device Manager* 統合管理インターフェイスのサポート

レガシー診断インターフェイスの設定	マージ動作	管理でサポートされるかどうか
インターフェイス		「管理」インターフェイスが [Interfaces] ページに表示され、設定できるようになりました。以前は、[System Settings] > [Management Interface] ページで設定が可能でした。
• IP アドレス	手動で削除する必要があります。	代わりに現在の管理 IP アドレスが使用されます。 高可用性の場合、管理インターフェイスはスタンバイ IP アドレスをサポートしません。各ユニットには、フェールオーバー後も維持される独自の IP アドレスがあります。そのため、現在のアクティブユニットとの通信に単一の管理 IP アドレスを使用することはできません。 [Interfaces] ペインで設定するか、 configure network ipv4 または configure network ipv6 コマンドを使用して CLI で設定します。
• 「診断」名	自動的に「管理」に変更されます。 (注) 他のインターフェイスに「管理」という名前を付けることはできません。マージを続行するには、名前を変更する必要があります。	「管理」に変更されます。

レガシー診断インターフェイスの設定	マージ動作	管理でサポートされるかどうか
スタティック ルート	手動で削除する必要があります。	サポートしない 管理インターフェイスには、データインターフェイスに基づく個別の Linux ルーティングテーブルがあります。脅威に対する防御 には、実際のところ、データインターフェイス用と管理専用インターフェイス用の 2 つの「データ」ルーティングテーブルがあります（以前は診断インターフェイスが含まれていましたが、管理専用に変更されたすべてのインターフェイスも含まれています）。トラフィックタイプに応じて、脅威に対する防御 は 1 つのルーティングテーブルをチェックし、次に他のルーティングテーブルにフォールバックします。このルートルックアップには、診断インターフェイスは含まれておらず、管理用の Linux ルーティングテーブルも含まれていません。詳細については、「管理トラフィック用ルーティングテーブル (412 ページ)」を参照してください。 configure network static-routes コマンドを使用して、CLI で Linux ルーティングテーブルのスタティックルートを追加できます。 (注) デフォルトルートは、configure network ipv4 または configure network ipv6 コマンドで設定します。
Syslog サーバ (Syslog Server)	自動的に管理インターフェイスに移動されました。	はい。 syslog サーバの設定で、管理インターフェイスから syslog を送信するオプションを使用できるようになりました (6.3 以降)。syslog に関して診断インターフェイスを明確に選択していた場合は、管理インターフェイスを使用するように変更されます。
RADIUS サーバ	自動的に管理インターフェイスに移動されました。	はい。 診断インターフェイスを明確に選択していた場合は、管理インターフェイスを使用するように変更されます。 (注) ルートルックアップを指定した場合、脅威に対する防御 は管理専用インターフェイスからトラフィックを送信できなくなります。この場合、送信元インターフェイスとして管理専用インターフェイスを明示的に選択する必要があります。

レガシー診断インターフェイスの設定	マージ動作	管理でサポートされるかどうか
AD サーバ	必要に応じて、管理インターフェイスを手動で指定します。	はい。 デフォルトでは、ADサーバ通信のルートルックアップが実行され、7.4 より前のインターフェイスは指定できませんでした。7.4 以降、脅威に対する防御は、ルートルックアップを使用して管理専用インターフェイスからトラフィックを送信できなくなります。この場合、送信元インターフェイスとして管理専用インターフェイスを明示的に選択できるようになりました。
DDNS	手動で削除する必要があります。	サポートしない
DHCP サーバー	手動で削除する必要があります。	サポートしない
DNS サーバ	自動的に管理インターフェイスに移動されました。	はい。 診断インターフェイスを明確に選択していた場合は、管理インターフェイスを使用するように変更されます。インターフェイス ([ANY]) を選択しなかった場合は、ルーティングルックアップも変更されません。ルーティングルックアップはデータルーティングテーブルを使用しますが、ルートが見つからない場合、管理専用ルーティングテーブルにフォールバックしません。 (注) 管理インターフェイスには、管理トラフィック専用の個別のDNSルックアップ設定もあります。
SLA モニタ	手動で削除する必要があります。	サポートしない
FlexConfig	手動で削除する必要があります。	サポートしない

始める前に

- デバイスの現在のモードを表示するには、脅威に対する防御 CLI で **show management-interface convergence** コマンドを入力します。次の出力は、管理インターフェイスがマージされていることを示しています。

```
> show management-interface convergence
management-interface convergence
>
```

次の出力は、管理インターフェイスがマージされていないことを示しています。

```
> show management-interface convergence
no management-interface convergence
>
```

- 高可用性ペアの場合は、アクティブユニットでこのタスクを実行します。マージされた設定は、自動的にスタンバイユニットに複製されます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

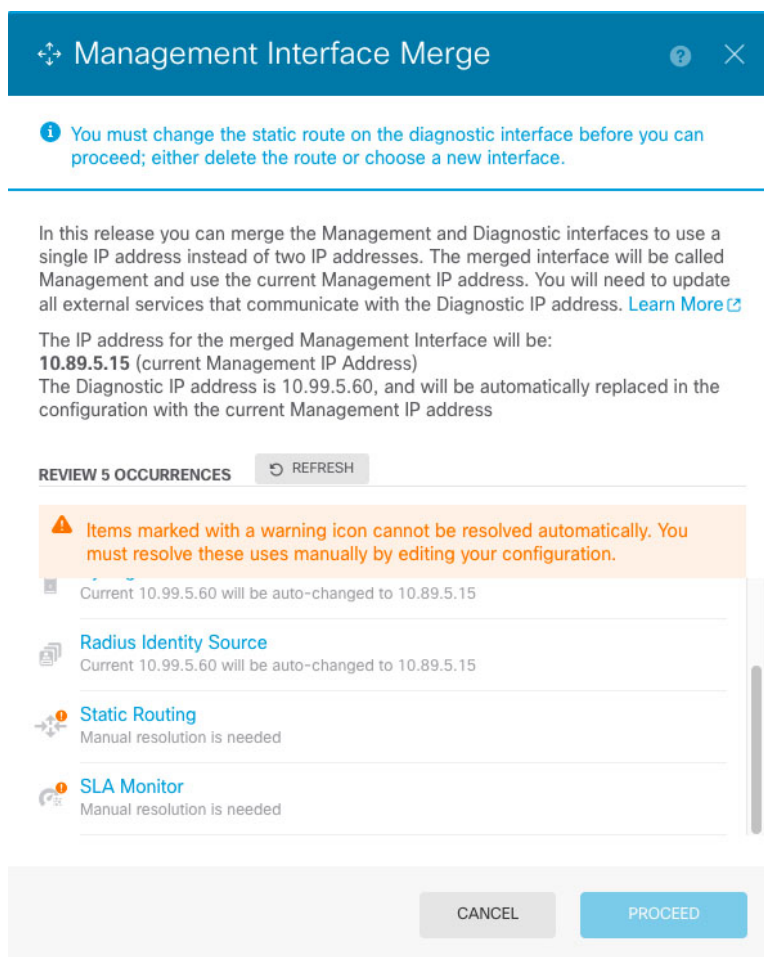
[Interfaces] テーブルの上部に、[Management Interface action needed] のメッセージとリンクが表示されます。

ステップ 2 診断インターフェイスを編集し、IP アドレスを削除します。

診断 IP アドレスを削除するまで、マージを完了できません。

ステップ 3 [Management Interface action needed] エリアの [Merge Management Interface] をクリックします。

[Management Interface Merge] ダイアログボックスに、設定内の診断インターフェイスのオカレンスがすべて表示されます。手動で設定を削除または変更する必要があるオカレンスは、警告アイコン付きで表示されます。自動移行も表示されます。



ステップ 4 リストされている設定を手動で削除または変更する必要がある場合は、次の手順を実行します。

設定を変更している間、参考のために [Management Interface Merge] ダイアログボックスは開いたままにできます。

- 項目をクリックして設定ページを開きます。その後、項目を削除したり、データインターフェイスを選択したりできます。
- [Management Interface Merge] ダイアログボックスの内容を更新するには、[Refresh] をクリックします。

これで、警告は表示されなくなります。

Management Interface Merge

In this release you can merge the Management and Diagnostic interfaces to use a single IP address instead of two IP addresses. The merged interface will be called Management and use the current Management IP address. You will need to update all external services that communicate with the Diagnostic IP address. [Learn More](#)

The IP address for the merged Management Interface will be:
10.89.5.15 (current Management IP Address)
 The Diagnostic IP address is 10.99.5.60, and will be automatically replaced in the configuration with the current Management IP address

REVIEW 3 OCCURRENCES REFRESH

DNS server

Current 10.99.5.60 will be auto-changed to 10.89.5.15

Syslog server

Current 10.99.5.60 will be auto-changed to 10.89.5.15

Radius Identity Source

Current 10.99.5.60 will be auto-changed to 10.89.5.15

⚠ To proceed with the merge, you must acknowledge the configuration changes. You can only revert the merge by using the FTD REST API.

☒ Acknowledge Changes

CANCEL PROCEED

ステップ 5 [Acknowledge Changes] をクリックしてから、[Proceed] をクリックします。
 診断 IP アドレスをまだ削除していない場合、次のエラーが表示されます。

Management Interface Merge

× Diagnostic interface has IPv4 address configured. Please remove configuration and try again.

この場合、診断 IP アドレスを削除してから、[Proceed] をもう一度クリックします。
 設定がマージされると、成功バナーが表示されます。

i The Management interface merge has been successfully done. To apply merge changes please do a [regular deploy](#)

ステップ 6 マージされた新しい設定を展開します。

注意

マージを続行しない場合は、展開する前に [Discard All] を使用して変更を破棄し、マージを元に戻すことができます。マージされた設定を展開すると、Device Manager からインターフェイ

スのマー ジを解除できます。ただし、診断インターフェイスは手動で再設定する必要があります。「[管理インターフェイスのマー ジ解除 \(395 ページ\)](#)」を参照してください。また、マー ジされていない設定を復元すると、デバイスはマー ジされていない設定に戻ります。

マー ジ後、[Interfaces] ページに管理インターフェイスが表示され、設定可能になります。以前は、[System Settings] > [Management Interface] ページで設定が可能でした。

ステップ 7 マー ジ後は、診断インターフェイスと通信する外部サービスがある場合、管理インターフェイスの IP アドレスを使用するように設定を変更する必要があります。

次に例を示します。

- SNMP クライアント
- RADIUS サーバー : RADIUS サーバーでは多くの場合、着信トラフィックの IP アドレスが確認されるため、その IP アドレスを管理アドレスに変更する必要があります。さらに、高可用性ペアの場合、プライマリとセカンダリの両方の管理 IP アドレスを許可する必要があります。診断インターフェイスは、アクティブユニットに存在する単一の「フローティング」IP アドレスをサポートしていましたが、管理インターフェイスはサポートしていません。

管理インターフェイスのマー ジ解除

Threat Defense 7.4 以降では、マー ジされた管理インターフェイスと診断インターフェイスがサポートされます。インターフェイスのマー ジを解除する必要がある場合は、次の手順を実行します。ネットワークをマー ジモード展開に移行する際は、一時的にマー ジ解除モードを使用することを推奨します。個別の管理インターフェイスと診断インターフェイスは、将来のすべてのリリースでサポートされなくなる可能性があります。

インターフェイスのマー ジを解除しても、元の診断設定は復元されません（アップグレードしてからインターフェイスをマー ジした場合）。診断インターフェイスを手動で再設定する必要があります。また、管理インターフェイスは「管理」という名前になり、名前を「診断」に変更することはできません。

または、バックアップ機能を使用して古いマー ジされていない設定を保存した場合は、その設定を復元できます。その場合、診断設定は変わらず、デバイスがマー ジされていない状態になります。

始める前に

- デバイスの現在のモードを表示するには、脅威に対する防御 CLI で **show management-interface convergence** コマンドを入力します。次の出力は、管理インターフェイスがマー ジされていることを示しています。

```
> show management-interface convergence
management-interface convergence
>
```

次の出力は、管理インターフェイスがマージされていないことを示しています。

```
> show management-interface convergence
no management-interface convergence
>
```

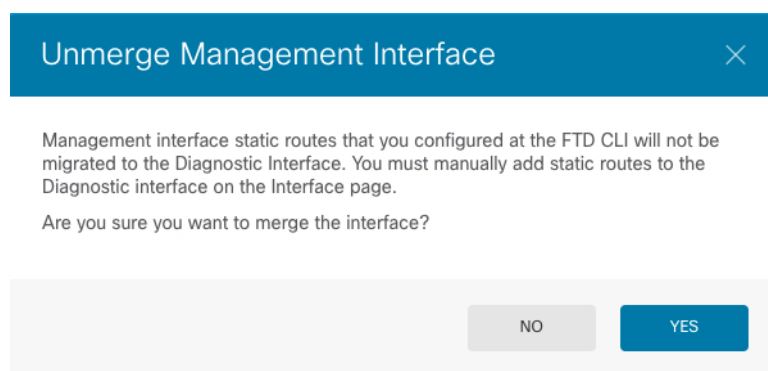
- 高可用性ペアの場合は、アクティブユニットでこのタスクを実行します。マージされていない設定は、自動的にスタンバイユニットに複製されます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

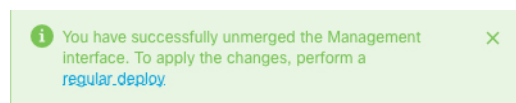
ステップ 2 [Management 1/1] インターフェイス行の右側にある [Unmerge] ([Unmerge]) をクリックし、[Unmerge Management Interface] ダイアログボックスで [Yes] をクリックします。 

図 32: 管理インターフェイスのマージ解除



[Interfaces] ページの上部に成功メッセージが表示されます。

図 33: マージ解除成功



ステップ 3 新しいマージされていない設定を展開します。

マージの解除を続行しない場合は、展開する前に [Discard All] を使用して変更を破棄し、マージされたインターフェイスを保持できます。また、マージされた設定を復元すると、デバイスはマージされた設定に戻ります。

マージ解除後、[System Settings] > [Management Interface] ページに管理インターフェイスが表示され、設定可能になります。

停電時のハードウェアバイパスの設定 (ISA 3000)

ハードウェアバイパスを有効にして、停電時でもトラフィックがインターフェイスペア間を通過できるようにできます。サポートされているインターフェイスペアは銅線インターフェイスの GigabitEthernet 1/1 と 1/2、および GigabitEthernet 1/3 と 1/4 です。光ファイバーサネットモデルを保有している場合は、銅線イーサネットペア (GigabitEthernet 1/1 と 1/2) でのみハードウェアバイパスがサポートされます。デフォルトでは、両方のインターフェイスペアに対してハードウェアバイパスが有効になります (サポートされている場合)。

ハードウェアバイパスがアクティブの場合、トラフィックはレイヤ1でそれらのインターフェイスペア間を通過します。Device Manager と Threat Defense CLI の両方に、インターフェイスがダウンしていることが表示されます。ファイアウォール機能はないため、トラフィックのデバイス通過を許可することのリスクを理解している必要があります。

(この手順で説明されている) TCP シーケンス番号のランダム化は無効にすることをお勧めします。ISA 3000 のデフォルトでは、通過する TCP 接続の初期シーケンス番号 (ISN) はランダムな番号に書き換えられます。ハードウェアバイパスがアクティブになると、ISA 3000 はデータパスには入らず、シーケンス番号は変換されません。受信側のクライアントが予想しないシーケンス番号を受信すると接続がドロップされるため、TCP セッションを再確立する必要があります。TCP シーケンス番号のランダム化が無効になっている場合でも、スイッチオーバー中に一時的にダウンするリンクがあるため、一部の TCP 接続は再確立する必要があります。

CLI コンソールまたは SSH セッションで、**show hardware-bypass** コマンドを使用して動作ステータスをモニタします。

始める前に

ハードウェアバイパスを機能させるための前提条件：

- インターフェイスペアは同じブリッジグループに配置する必要があります。
- インターフェイスはスイッチのアクセスポートに接続する必要があります。トランクポートには接続しないでください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにあるリンクをクリックします。

ページの上にある [ハードウェアバイパス (Hardware Bypass)] セクションは、このデバイスに使用できるインターフェイスペアの現在の設定を示します。

ただし、ハードウェアバイパスを有効にする前に、ペアが同じブリッジグループで設定されていることを確認する必要があります。

ステップ 2 [編集 (Edit)] をクリックしてハードウェアバイパスを設定します。

[ハードウェアバイパスの設定 (Hardware Bypass Configuration)] ダイアログボックスが表示されます。

ステップ 3 自動ハードウェアバイパス動作を設定するには、インターフェイスペアごとに、[停電時のハードウェアバイパス (Hardware Bypass during Power Down)] エリアで次のいずれかのオプションを選択します。

- [無効化 (Disable)] : ハードウェアバイパスを無効にします。トラフィックは、停電時にデバイスを通過しません。
- [有効化 (Enable)] : 停電時にハードウェアバイパスをアクティブにします。ハードウェアバイパスが、停電時にトラフィックが中断されないように確保します。バイパスされたトラフィックは検査されず、セキュリティポリシーは適用されないことに注意してください。電源が復旧したら、ハードウェアバイパスは自動的に無効になるため、トラフィックフローの通常の状態を維持することができ、検査も行われます。ハードウェアバイパスを無効にすると、トラフィックが一時的に中断する可能性があることに注意してください。
- [永続的に有効化 (Enable with Persistence)] : 停電時にハードウェアバイパスをアクティブにし、電源の復元後も有効な状態を維持します。電源が復旧したら、[手動ハードウェアバイパス (Manual Hardware Bypass)] スライドを使用してハードウェアバイパスを無効にする必要があります。このオプションでは、トラフィックに一時的な中断が発生したときに制御することができます。

ステップ 4 (任意) ハードウェアバイパスを手動で有効または無効にするには、[手動ハードウェアバイパス (Manual Hardware Bypass)] スライドをクリックします。

たとえば、システムをテストしたり、何らかの理由で、デバイスを一時的にバイパスしようとする場合があります。ハードウェアバイパスの状態を変更するには、設定を展開する必要がありますことに注意してください。設定を変更するだけでは不十分です。

ハードウェアバイパスを手動で有効化または無効化すると、次の Syslog メッセージが表示されます。メッセージ内の *pair* は 1/1-1/2 または 1/3-1/4 です。

- %FTD-6-803002 : no protection will be provided by the system for traffic over GigabitEthernet *pair*
- %FTD-6-803003: User disabled bypass manually on GigabitEthernet *pair*

ステップ 5 [OK] をクリックします。

変更はすぐには適用されません。設定を展開する必要があります。

ステップ 6 (オプション) TCP シーケンス番号のランダム化を無効にするために必要な FlexConfig オブジェクトとポリシーを作成します。

- a) [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- b) 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig オブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。
- c) [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。

- d) オブジェクトの名前を入力します。たとえば、**Disable_TCP_Randomization** と入力します。
- e) [テンプレート (Template)] エディタに、TCP シーケンス番号のランダム化を無効にするコマンドを入力します。

コマンドは **set connection random-sequence-number disable** ですが、ポリシーマップ内の特定のクラスに対して設定する必要があります。最も簡単なアプローチは、ランダムなシーケンス番号をグローバルに無効にする方法です。この場合、次のコマンドを入力する必要があります。

```
policy-map global_policy
  class default_class
    set connection random-sequence-number disable
```

- f) [ネゲートテンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

たとえば、TCP シーケンス番号のランダム化をグローバルに無効にしている場合、ネゲートテンプレートは次のようになります。

```
policy-map global_policy
  class default_class
    set connection random-sequence-number enable
```

- g) [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。
オブジェクトをFlexConfigポリシーに追加する必要があります。オブジェクトを作成するだけでは十分ではありません。
- h) 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。
- i) [グループ リスト (Group List)] で [+] をクリックします。
- j) [Disable_TCP_Randomization] オブジェクトを選択し、[OK] をクリックします。
プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。予想していたコマンドが表示されていることを確認します。
- k) [保存 (Save)] をクリックします。
これで、ポリシーを展開できます。

インターフェイスのモニタリング

次の領域のインターフェイスに関するいくつかの基本情報を表示できます。

- [デバイス (Device)]。インターフェイスの現在の状態をモニターするには、ポート グラフィックを使用します。ポートにマウスポインタを合わせると、そのポートの IP アドレス、EtherChannel メンバーシップ、有効ステータス、リンクステータスが表示されます。

IP アドレスはスタティックに割り当てるか、または DHCP を使用して取得することができます。

インターフェイス ポートでは次のカラー コーディングが使用されます。

- 緑色：インターフェイスが設定され、有効であり、リンクが稼動しています。
 - 灰色：インターフェイスは無効です。
 - オレンジ色/赤色：インターフェイスが設定され、有効ですが、リンクは停止しています。インターフェイスが有線接続している場合、これは修正する必要があるエラー状況です。インターフェイスが有線接続していない場合、これは想定されるステータスです。
- **[モニタリング (Monitoring)] > [システム (System)]**。[スループット (Throughput)]
ダッシュボードには、システムを介して移動するトラフィックに関する情報が表示されます。すべてのインターフェイスに関する情報を表示できます。または、調査する特定のインターフェイスを選択できます。
- **[モニタリング (Monitoring)] > [ゾーン (Zones)]**。これらのダッシュボードにはインターフェイスを設定するセキュリティゾーンに基づく統計情報が表示されます。詳細について、この情報を掘り下げることができます。

CLI でのインターフェイスのモニタリング

CLI コンソールを開くか、またはデバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用し、インターフェイス関連の動作と統計情報に関する詳細情報を取得することもできます。

- **show interface** はインターフェイスの統計情報と設定情報を表示します。このコマンドには多数のキーワードがあり、必要な情報を取得するために使用できます。使用可能なオプションを表示するには、「?」をキーワードとして使用します。
- **show ipv6 interface** はインターフェイスに関するIPv6設定情報を表示します。
- **show bridge-group** は、メンバー情報や IP アドレスを含む、ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) に関する情報を表示します。
- **show conn** は現在インターフェイスを通じて確立されている接続に関する情報を表示します。
- **show traffic** は各インターフェイスを介したトラフィックフローに関する統計情報を表示します。
- **show ipv6 traffic** はデバイスを介した IPv6 トラフィックフローに関する統計情報を表示します。
- **show dhcpd** はインターフェイスの DHCP 使用状況に関する統計とその他の情報を表示し、特にインターフェイスで設定されている DHCP サーバに関する情報が含まれます。
- **show switch vlan** は VLAN とスイッチポートの関連付けを表示します。

- **show switch mac-address-table** はスタティックおよびダイナミック MAC アドレスエントリを表示します。
- **show arp** はダイナミック、スタティック、およびプロキシ ARP エントリを表示します。
- **show power inline** PoE ステータスを表示します。
- **show vpdn group** は PPPoE グループと、設定されているユーザ名と認証を表示します。
- **show vpdn username** は PPPoE のユーザ名とパスワードを表示します。
- **show vpdn session pppoe state** は PPPoE セッションのステータスを表示します。

インターフェイスの例

使用例の章には、次のインターフェイス関連の例が含まれています。

- [Device Manager でデバイスを設定する方法 \(51 ページ\)](#)
- [サブネットの追加方法 \(85 ページ\)](#)
- [ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法 \(92 ページ\)](#)



第 **IV** 部

ルーティング

- [ルーティングの基本ルートと静的ルート](#) (405 ページ)
- [仮想ルータ](#) (425 ページ)
- [ルートチューニングのためのルートマップおよびその他のオブジェクト](#) (455 ページ)
- [Open Shortest Path First \(OSPF\)](#) (477 ページ)
- [Enhanced Interior Gateway Routing Protocol \(EIGRP\)](#) (503 ページ)
- [Border Gateway Protocol \(BGP\)](#) (525 ページ)



第 13 章

ルーティングの基本ルートと静的ルート

システムでは、ルーティング テーブルを使用して、システムに入るパケットの出力インターフェイスを決定します。ここでは、ルーティングの基本とデバイスで静的ルーティングを設定する方法について説明します。

- [ルーティングのベストプラクティス \(405 ページ\)](#)
- [ルーティングの概要 \(406 ページ\)](#)
- [スタティック ルート \(413 ページ\)](#)
- [ルーティングのモニタリング \(422 ページ\)](#)

ルーティングのベストプラクティス

ネットワーク内のルーティングプロセスの設計は、複雑なプロセスになる可能性があります。この章では、脅威に対する防御 デバイスを、既存のネットワーク内で機能するように、およびネットワークですでに確立されているルーティングプロセスに参加するように設定していることを前提にしています。

そうではなく、新しいネットワークを作成している場合は、ルーティングプロトコルについて説明している箇所、およびネットワークに適した効果的なルーティング計画を設計する方法について説明している箇所を参照してください。この章では、プロトコルを選択するための推奨事項については説明しません。また、プロトコルの動作についても詳しく説明しません。

ネットワークが非常に小規模で、単に ISP にリンクするだけの場合は、少数のスタティックルートで十分であり、ルーティングプロトコルを実装する必要はまったくありません。

一方、多数のルータを含む大規模なネットワークを設定する場合は、内部ルーティング用に OSPF などのルーティングプロトコルを少なくとも 1 つ実装する必要があることが多く、場合によっては外部ルーティング用に BGP などのルーティングプロトコルを 1 つ実装する必要があります。サービスプロバイダーは、どのような外部ルーティングが必要になるかを理解する場合の助けになります。この状況に該当する場合は、まず 脅威に対する防御 を使用して設定可能なルーティングプロトコルを理解し、ネットワークを計画し、最後に計画に従って脅威に対する防御 デバイスを設定します。

ルーティングの概要

ここでは、脅威に対する防御 デバイス内でルーティングがどのように動作するのかを説明します。ルーティングは、発信元から宛先にネットワーク経由で情報を移動する動作のことです。その間に、通常は少なくとも 1 つの中間ノードがあります。ルーティングには、最適なルーティングパスの決定と、ネットワーク経由でのパケットの転送という 2 つの基本的なアクティビティが含まれます。

サポートされるルーティング プロトコル

次の表では、Device Manager を使用して Threat Defense デバイスで設定できるルーティング プロトコルとテクノロジー、および設定を完了するために使用する必要があるメソッドについて説明します。

表 8: サポートされるルーティング プロトコル

ルーティング機能	設定方法	注記
BGP	スマート CLI	[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] ページから BGP スマート CLI オブジェクトを設定します。 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、スマート CLI オブジェクトを使用してルートマップなどの BGP で使用されるオブジェクトを設定します。
Bidirectional Forwarding Detection (BFD)	FlexConfig	[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、FlexConfig オブジェクトを使用して BFD を設定します。BFD は BGP でのみサポートされています。
EIGRP	スマート CLI	[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] ページで、EIGRP スマート CLI オブジェクトを設定します。 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、スマート CLI オブジェクトを使用してルートマップなどの EIGRP で使用されるオブジェクトを設定します。
IS-IS	FlexConfig	[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、FlexConfig オブジェクトを使用して IS-IS を設定します。
マルチキャストルーティング	FlexConfig	[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、FlexConfig オブジェクトを使用してマルチキャストルーティングを設定します。

ルーティング機能	設定方法	注記
OSPFv2	スマートCLI	[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] ページから OSPFv2 スマート CLI オブジェクトを設定します。 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、スマート CLI オブジェクトを使用してルートマップなどの OSPFv2 で使用されるオブジェクトを設定します。
OSPFv3	—	OSPFv3設定はサポートされていません。
ポリシーベースルーティング (PBR)	FlexConfig	[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、FlexConfig オブジェクトを使用してポリシーベースルーティング (PBR) を設定します。
RIP	FlexConfig	[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、FlexConfig オブジェクトを使用して RIP を設定します。
スタティックルート	Device Manager	[デバイス (Device)] > [ルーティング (Device Routing)] ページからスタティックルートをグローバルに、または仮想ルータごとに設定します。
仮想ルータ、VRF	Device Manager	[デバイス (Device)] > [ルーティング (Device Routing)] ページから仮想ルータを設定します。

ルートタイプ

ルートには、スタティックとダイナミックという2つのタイプがあります。

スタティックルートは、明示的に定義するものです。これらは安定した、通常は優先順位の高いルートであり、ルートの宛先へのトラフィックが常に正しいインターフェイスから送信されるようにするために使用します。たとえば、その他のルートでカバーされていないすべてのトラフィックをカバーする、デフォルトのスタティックルート（つまり IPv4 では 0.0.0.0/0、IPv6 では ::/0）を作成する場合などです。別の例では、常に使用する内部 syslog サーバへのスタティックルートがあります。

ダイナミックルートは、OSPF、BGP、EIGRP、IS-IS、または RIP などのルーティングプロトコルの動作を通じて学習されるものです。ルートは直接定義しません。その代わりにルーティングプロトコルを設定すると、システムはネイバルルータと通信してルーティングアップデートを送信し、ルーティングアップデートを順番に受信します。

ダイナミックルーティングプロトコルはルーティングテーブルを調整し、着信ルーティングアップデートメッセージを分析することで、ネットワーク状況の変化に対応します。ネットワークが変化したことをメッセージが示している場合は、システムはルートを再計算し、新し

ルーティング アップデート メッセージを送信します。これらのメッセージはネットワーク全体に送信されるため、ルータはそのアルゴリズムを再度実行し、それに従ってルーティング テーブルを変更します。

スタティックルーティングは単純であり、基本的なルーティングの目的を果たします。ネットワークトラフィックが比較的予想しやすい環境や、ネットワーク設計が比較的単純な環境での使用に適しています。ただし、編集しない限りスタティックルートは変更できないため、ネットワークの変化に対応することはできません。

小規模ネットワークがある場合を除き、通常はスタティックルートを1つまたは複数のダイナミック ルーティング プロトコルと組み合わせます。明示ルートに一致しないトラフィックのデフォルトルートとして、少なくとも1つのスタティック ルートを定義します。



(注) スマート CLI を使用して次のルーティング プロトコルを設定することができます：OSPF、BGP。FlexConfig を使用して、ASA ソフトウェアでサポートされるその他のルーティング プロトコルを設定します。

ルーティング テーブルとルート選択

NAT 変換 (xlates) およびルールで出力インターフェイスを決定しない場合、システムはルーティングテーブルを使用してパケットのパスを決定します。

ルーティングテーブルのルートには、指定ルートに相対的な優先順位を定める「アドミニストレーティブ ディスタンス」というメトリックが含まれています。パケットに一致するルート エントリが複数ある場合、最も短い距離のルート エントリが使用されます。直接接続ネットワーク (インターフェイスで定義される) の距離は0のため、常に優先されます。スタティック ルートのデフォルトの距離は1ですが、1 ~ 254 の距離で作成できます。

特定の宛先が指定されたルートは、デフォルトルート (宛先が0.0.0.0/0または::/0のルート) よりも優先されます。

ルーティング テーブルへの入力方法

Threat Defense ルーティングテーブルには、静的に定義されたルート、直接接続されているルート、およびダイナミック ルーティング プロトコルで検出されたルートを入力できます。Threat Defense デバイスは、ルーティングテーブルに含まれるスタティックルートと接続されているルートに加えて、複数のルーティングプロトコルを実行できるため、同じルートが複数の方法で検出または入力される可能性があります。同じ宛先への2つのルートがルーティングテーブルに追加されると、ルーティング テーブルに残るルートは次のように決定されます。

- 2つのルートのネットワークプレフィックス長 (ネットワークマスク) が異なる場合は、どちらのルートも固有と見なされ、ルーティングテーブルに入力されます。入力された後は、パケット転送ロジックが2つのうちどちらを使用するかを決定します。

たとえば、RIP プロセスと OSPF プロセスが次のルートを検出したとします。

- RIP : 192.168.32.0/24

- OSPF : 192.168.32.0/19

OSPF ルートのアドミニストレーティブ ディスタンスの方が適切であるにもかかわらず、これらのルートのプレフィックス長（サブネットマスク）はそれぞれ異なるため、両方のルートがルーティング テーブルにインストールされます。これらは異なる宛先と見なされ、パケット転送ロジックが使用するルートを決定します。

- **Threat Defense** デバイスが、（RIP などの）1つのルーティングプロトコルから同じ宛先に複数のパスがあることを検知すると、（ルーティングプロトコルが判定した）メトリックがよい方のルートがルーティングテーブルに入力されます。

メトリックは特定のルートに関連付けられた値で、ルートを最も優先されるものから順にランク付けします。メトリックスの判定に使用されるパラメータは、ルーティングプロトコルによって異なります。メトリックが最も小さいパスは最適パスとして選択され、ルーティングテーブルにインストールされます。同じ宛先への複数のパスのメトリックが等しい場合は、これらの等コストパスに対してロード バランシングが行われます。

- **Threat Defense** デバイスが、ある宛先へのルーティングプロトコルが複数あることを検知すると、ルートのアドミニストレーティブ ディスタンスが比較され、アドミニストレーティブ ディスタンスが最も小さいルートがルーティングテーブルに入力されます。

ルートのアドミニストレーティブ ディスタンス

ルーティング プロトコルによって検出されるルート、またはルーティング プロトコルに再配布されるルートのアドミニストレーティブ ディスタンスは変更できます。2つの異なるルーティングプロトコルからの2つのルートのアドミニストレーティブ ディスタンスが同じ場合、デフォルトのアドミニストレーティブ ディスタンスが小さい方のルートがルーティングテーブルに入力されます。EIGRP ルートと OSPF ルートの場合、EIGRP ルートと OSPF ルートのアドミニストレーティブ ディスタンスが同じであれば、デフォルトで EIGRP ルートが選択されます。

アドミニストレーティブ ディスタンスは、2つの異なるルーティングプロトコルから同じ宛先に複数の異なるルートがある場合に、**Threat Defense** デバイスが最適なパスの選択に使用するルートパラメータです。ルーティングプロトコルには、他のプロトコルと異なるアルゴリズムに基づいたメトリックがあるため、異なるルーティングプロトコルによって生成された同じ宛先への2つのルートのいずれが最適パスであるかは、必ずしも判別できません。

各ルーティング プロトコルには、アドミニストレーティブ ディスタンス値を使用して優先順位が付けられています。次の表に、**Threat Defense** デバイスでサポートされているルーティングプロトコルのデフォルトのアドミニストレーティブ ディスタンス値を示します。

表 9: サポートされるルーティングプロトコルのデフォルトのアドミニストレーティブ ディスタンス

ルートの送信元	デフォルトのアドミニストレーティブ ディスタンス
接続されているインターフェイス	0
VPN ルート	1

ルートの送信元	デフォルトのアドミニストレーティブディスタンス
スタティック ルート	1
EIGRP集約ルート	5
外部 BGP	20
内部 EIGRP	90
OSPF	110
IS-IS	115
RIP	120
EIGRP 外部ルート	170
内部およびローカルBGP	200
不明	255

アドミニストレーティブディスタンス値が小さいほど、プロトコルの優先順位が高くなります。たとえば、Threat Defense デバイスが OSPF ルーティング プロセス（デフォルトのアドミニストレーティブディスタンスが 110）と RIP ルーティング プロセス（デフォルトのアドミニストレーティブディスタンスが 120）の両方から特定のネットワークへのルートを受信すると、OSPF ルーティング プロセスの方が優先度が高いため、Threat Defense デバイスは OSPF ルートを選択します。この場合、ルータは OSPF バージョンのルートをルーティングテーブルに追加します。

VPN アドバタイズされたルート（V-Route/RR1）は、デフォルトのアドミニストレーティブディスタンス 1 のスタティックルートと同等です。ただし、ネットワークマスク 255.255.255.255 の場合と同じように優先度が高くなります。

この例では、OSPF 導出ルートの送信元が（電源遮断などで）失われると、Threat Defense デバイスは、OSPF 導出ルートが再度現れるまで、RIP 導出ルートを使用します。

アドミニストレーティブディスタンスはローカルの設定値です。たとえば、OSPF を通じて取得したルートのアドミニストレーティブディスタンスを変更する場合、その変更は、コマンドが入力された Threat Defense デバイスのルーティングテーブルにだけ影響します。アドミニストレーティブディスタンスがルーティングアップデートでアドバタイズされることはありません。

アドミニストレーティブディスタンスは、ルーティングプロセスに影響を与えません。ルーティング プロセスは、ルーティング プロセスで検出されたか、またはルーティング プロセスに再配布されたルートだけをアドバタイズします。たとえば、RIP ルーティング プロセスは、のルーティング テーブルで OSPF ルーティング プロセスによって検出されたルートが使用されていても、RIP ルートをアドバタイズします。

ダイナミック ルーロとフローティングスタティック ルートのバックアップ

ルートを最初にルーティングテーブルにインストールしようとしたとき、他のルートがインストールされてしまい、インストールできなかった場合に、そのルートはバックアップルートとして登録されます。ルーティングテーブルにインストールされたルートに障害が発生すると、ルーティング テーブル メンテナンス プロセスが、登録されたバックアップ ルートを持つ各ルーティングプロトコルプロセスを呼び出し、ルーティングテーブルにルートを再インストールするように要求します。障害が発生したルートに対して登録されたバックアップルートを持つプロトコルが複数ある場合、アドミニストレーティブディスタンスに基づいて優先順位の高いルートが選択されます。

このプロセスのため、ダイナミック ルーティング プロトコルによって検出されたルートに障害が発生したときにルーティング テーブルにインストールされるフローティング スタティック ルートを作成できます。フローティングスタティックルートとは、単に、Threat Defense デバイスで動作しているダイナミックルーティングプロトコルよりも大きなアドミニストレーティブディスタンスが設定されているスタティックルートです。ダイナミック ルーティング プロセスで検出された対応するルートに障害が発生すると、このスタティック ルートがルーティング テーブルにインストールされます。

転送の決定方法

転送は次のように決定されます。

- 宛先が、ルーティング テーブル内のエントリと一致しない場合、パケットはデフォルトルートに指定されているインターフェイスを通して転送されます。デフォルトルートが設定されていない場合、パケットは破棄されます。
- 宛先が、ルーティングテーブル内の1つのエントリと一致した場合、パケットはそのルートに関連付けられているインターフェイスを通して転送されます。
- 宛先がルーティングテーブル内の複数のエントリと一致した場合は、パケットが、ネットワークプレフィックス長がより長いルートに関連付けられたインターフェイスから転送されます。

たとえば、192.168.32.1宛てのパケットが、ルーティング テーブルの次のルートでインターフェイスに到着するとします。

- 192.168.32.0/24 ゲートウェイ 10.1.1.2
- 192.168.32.0/19 ゲートウェイ 10.1.1.3

この場合、192.168.32.1 は 192.168.32.0/24 ネットワーク内にあるため、192.168.32.1 宛てのパケットは 10.1.1.2 宛てに送信されます。もうひとつのルートにもあてはまりますが、192.168.32.0/24 の方が長いプレフィックスを持つためです（24 ビットと 19 ビット）。パケットを転送する場合、プレフィックスが長い方が常に短いものより優先される。



- (注) 既存の接続は、新しい同様の接続がルートの変更により異なる動作になる場合でも、引き続き確立されたインターフェイスを使用します。

管理トラフィック用ルーティングテーブル

Threat Defense デバイスには、デバイス発信管理トラフィック用の次のルーティングテーブルが含まれています。

- **Linux 管理ルーティングテーブル**：Device Manager 管理セッション、ライセンス通信、データベース更新などの管理インターフェイスから送信される特別な管理トラフィックは、常に Linux 管理ルーティングテーブルを使用します。
- **データルーティングテーブル**：すべてのデバイス発信トラフィック（およびすべての通過トラフィック）は、デフォルトでデータルーティングテーブルを使用します。通常のデータインターフェイスはすべて、このルーティングテーブルに含まれます。ほとんどのサービスでは、特定のインターフェイスを選択できるため、そのインターフェイスに関連付けられているルートのみが使用されます。
- **管理専用ルーティングテーブル**：管理専用インターフェイスに設定した管理インターフェイスとすべてのデータインターフェイスは、このルーティングテーブルに含まれます。これらのインターフェイスのいずれかからデバイス発信トラフィックを送信するには、サービスの設定時に特定の管理専用インターフェイスを選択する必要があります。DNS ルックアップと ICMP（ping およびトレースルート）の場合は例外です。ルートが見つからない場合、Threat Defense はデータを使用して自動的に管理にフォールバックします。管理専用インターフェイスにはスタティックルートを追加できますが、特殊な管理インターフェイスには追加できません。Threat Defense デバイスは、Linux にトラフィックを転送する管理用のデフォルトルートを自動的に追加します。この場合、Linux ルーティングテーブルで別のルートルックアップが行われます。Threat Defense CLI **configure network static-routes** コマンドを使用して、管理インターフェイスで使用可能な Linux ルーティングテーブルにスタティックルートを追加できます。



(注) デフォルトの Linux ルートは、**configure network ipv4** または **configure network ipv6** コマンドで設定します。



(注) 管理インターフェイスとレガシー診断インターフェイスをまだマージしていないデバイスについては、このガイドの 7.3 より前のバージョンを参照してください。

Equal-Cost Multipath (ECMP) ルーティング

Threat Defense デバイスは、等コスト マルチパス (ECMP) ルーティングをサポートしています。

インターフェイスごとに最大8つの等コストのスタティックルートまたはダイナミックルートを設定できます。たとえば、次のように異なるゲートウェイを指定する外部インターフェイスで複数のデフォルトルートを設定できます。

```
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside to 10.1.1.2
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside to 10.1.1.3
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside to 10.1.1.4
```

この場合、トラフィックは10.1.1.2、10.1.1.3、および10.1.1.4間の外部インターフェイスでロードバランシングされます。トラフィックは、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレス、着信インターフェイス、プロトコル、送信元ポートと宛先ポートをハッシュするアルゴリズムに基づいて、指定したゲートウェイ間に分配されます。

トラフィックゾーンを使用した複数のインターフェイス間の ECMP

インターフェイスのグループを含むようにトラフィックゾーンを設定する場合、各ゾーン内の最大 8 つのインターフェイス間に最大 8 つの等コストの静的または動的ルートを設定できます。たとえば、次のようにゾーン内の 3 つのインターフェイス間に複数のデフォルトルートを設定できます。

```
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside1 to 10.1.1.2
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside2 to 10.2.1.2
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside3 to 10.3.1.2
```

同様に、ダイナミックルーティングプロトコルは、等コストルートを自動的に設定できます。Threat Defense デバイスは、より堅牢なロードバランシングメカニズムを使用して、インターフェイス間のトラフィックのロードバランシングを行います。

ルートが紛失した場合、デバイスはフローをシームレスに別のルートに移動させます。

スタティック ルート

スタティックルートを作成して、ネットワークの基本的なルーティングを提供することができます。

スタティック ルートとデフォルト ルートについて

接続されていないホストやネットワークにトラフィックをルーティングするには、スタティックルーティングまたはダイナミックルーティングを使用して、ホストまたはネットワークへのルートを定義する必要があります。通常は、少なくとも 1 つのスタティックルート、つまり、他の方法でデフォルトのネットワークゲートウェイにルーティングされていない、すべてのトラフィック用のデフォルトルート（通常、ネクストホップルータ）を設定する必要があります。

デフォルトルート

最も単純なオプションは、すべてのトラフィックをアップストリームルータに送信するようにデフォルトスタティックルートを設定して、トラフィックのルーティングをルータに任せることです。デフォルトルートは、既知のルートもスタティックルートも指定されていない IP パケットすべてを、Threat Defense デバイスが送信するゲートウェイの IP アドレスを特定する

ルートです。デフォルト スタティック ルートとは、つまり宛先の IP アドレスとして 0.0.0.0/0 (IPv4) または ::/0 (IPv6) が指定されたスタティック ルートのことです。

デフォルト ルートを常に定義する必要があります。

脅威に対する防御 には、データインターフェイスと管理専用インターフェイス（特別な Linux 管理インターフェイスを含む）用の個別のルーティングテーブルがあります。データルーティングテーブルのデフォルトルートのみ追加できます。脅威に対する防御 は、Linux 管理インターフェイスにトラフィックを送信する管理専用ルーティングテーブルにデフォルトルートを自動的に追加します。このルートでは、Linux ルーティングテーブルで個別のルートルックアップが行われます。脅威に対する防御 CLI **configure network static-routes** コマンドを使用して、管理インターフェイスで使用可能な Linux ルーティングテーブルにスタティックルートを追加できます。



(注) デフォルトの Linux ルートは、**configure network ipv4** または **configure network ipv6** コマンドで設定します。

スタティック ルート

次の場合は、スタティックルートを 사용합니다。

- ネットワークでサポートされていないルータ検出プロトコルが使用されている。
- ネットワークが小規模でスタティック ルートを容易に管理できる。
- ルーティング プロトコルが関係するトラフィックまたは CPU のオーバーヘッドをなくす必要がある。
- デフォルトルートでは十分でない場合がある。デフォルトのゲートウェイでは宛先ネットワークに到達できない場合があるため、スタティックルートをさらに詳しく設定する必要があります。たとえば、デフォルトのゲートウェイが外部の場合、デフォルトルートは、Threat Defense デバイスに直接接続されていない内部ネットワークにはまったくトラフィックを転送できません。
- ダイナミック ルーティング プロトコルをサポートしていない機能を使用している。

スタティック ルートのバックアップとスタティック ルートのトラッキング

スタティック ルートの問題の1つは、ルートがアップ状態なのかダウン状態なのかを判定する固有のメカニズムがないことです。スタティックルートは、ネクストホップゲートウェイが使用できなくなった場合でも、ルーティングテーブルに保持されています。スタティックルートは、関連付けられたインターフェイスがダウンした場合にのみルーティングテーブルから削除されます。

トラッキングルートを実装すると、サービスレベル契約 (SLA) モニタを使用してスタティック ルートの可用性を追跡し、プライマリ ルートが失敗したら自動的にバックアップ ルートをインストールすることができます。たとえば、ISP ゲートウェイへのデフォルトルートを定義

し、かつ、プライマリ ISP が使用できなくなった場合に備えて、セカンダリ ISP へのバックアップデフォルト ルートを定義できます。

ルートトラッキングを使用する場合、トラッキング対象のルートに宛先ネットワークのターゲット IP アドレスを関連付けます。その後、システムは ICMP エコー要求を使用して、アドレスにアクセスできることを定期的に確認します。指定された時間内にエコー応答がない場合は、そのホストはダウンしていると見なされ、関連付けられたルートはルーティングテーブルから削除されます。削除されたルートに代わって、メトリックが高い追跡対象外のバックアップルートが使用されます。

したがって、デフォルトルートなどの特定の宛先にバックアップ スタティック ルートを使用するには、次を実行する必要があります。

1. ゲートウェイや always-up サーバ (Web サーバや syslog サーバなど) のような、宛先ネットワーク上の信頼できる IP アドレスをモニタする SLA モニタを作成します。宛先ネットワークが正常で使用可能な間は、オフラインになる可能性があるシステムの IP アドレスをモニタしないでください。「[SLA モニタ オブジェクトの設定 \(418 ページ\)](#)」を参照してください。
2. 宛先へのプライマリ ルートを作成し、ルートの SLA モニタを選択します。このルートのメトリックは通常 1 です。「[スタティック ルートの設定 \(416 ページ\)](#)」を参照してください。
3. プライマリルートが失敗した場合に使用されるバックアップ スタティック ルートを作成します。このルートには、プライマリルートより大きいメトリックが必要です。たとえば、プライマリルートが 1 の場合、バックアップルートは 10 にできます。また、通常はバックアップルートとは異なるインターフェイスを選択します。

スタティック ルーティングのガイドライン

ブリッジグループ

- ルーテッドモードでは、BVI をゲートウェイとして指定する必要があります。メンバーインターフェイスは指定できません。
- ブリッジグループ メンバー インターフェイスを通じて直接には接続されていないネットワークに向かう Threat Defense デバイス で発信されるトラフィックの場合 (syslog または SNMP など)、Threat Defense デバイス がどのブリッジグループ メンバー インターフェイスからトラフィックを送信するかを認識するように、デフォルトルートまたはスタティックルートを設定する必要があります。1 つのデフォルトルートで到達できないサーバがある場合、スタティックルートを設定する必要があります。
- スタティック ルートトラッキングは、ブリッジグループ メンバー インターフェイスまたは BVI ではサポートされません。

IPv6

- スタティックルートトラッキング (SLA モニタ) は、IPv6 ではサポートされていません。

等コストマルチパス（ECMP）トラフィックゾーン

- ECMP トラフィックゾーンのメンバーインターフェイスを同じセキュリティゾーンに保持して、これらのインターフェイスに異なるアクセスルール、SSL ルール、または ID ルールが適用されないようにします。
- 特定の ECMP トラフィックゾーンのネットワークには最大 8 つの等コストルートを設定できます。
- 最大 256 の ECMP トラフィックゾーンを作成でき、ゾーンごとに最大 8 つのインターフェイスを使用できます。
- ECMP ゾーンには、物理インターフェイス、サブインターフェイス、および EtherChannel を含めることができます。次のものを含めることはできません。
 - ブリッジグループ（BVI）またはそのメンバー
 - EtherChannel メンバーインターフェイス
 - HA インターフェイス（フェールオーバーまたはステートリンク）
 - 管理専用インターフェイス
 - サイト間 VPN 接続またはリモートアクセス VPN 接続に使用されるインターフェイス。
 - 仮想トンネルインターフェイス（VTI）またはその送信元インターフェイス。
 - VPN 管理アクセス用に設定されたインターフェイス。
- ゾーン内のインターフェイスで DHCP リレー を有効にできません。

スタティック ルートの設定

システム上のインターフェイスに直接接続されたネットワークに向かわないパケットをどこに送信すべきかをシステムに指示するには、スタティック ルートを定義します。

ネットワーク 0.0.0.0/0 用の少なくとも 1 つのスタティック ルート（デフォルト ルート）が必要です。このルートは、既存の NAT xlates（変換）、スタティック NAT ルール、その他のスタティック ルートによって出力インターフェイスを判定できないパケットをどこに送信するかを定義します。

すべてのネットワークに到達するためにデフォルトゲートウェイを使用できない場合は、他のスタティック ルートが必要になることがあります。たとえば、デフォルト ルートは通常、外部インターフェイスのアップストリーム（上流）ルータです。デバイスに直接接続されない内部ネットワークが別に存在し、デフォルト ゲートウェイ経由でそれらにアクセスできない場合、このような内部ネットワークそれぞれにスタティック ルートが必要になります。

システム インターフェイスに直接接続されるネットワークにスタティック ルートを定義することはできません。これらのルートは、システムによって自動的に作成されます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーにあるリンクをクリックします。

ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、スタティック ルートを設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。

ステップ 3 [ルーティングの選択 (Select Routing)] ページで、次のいずれかを実行します。

- 新しいルートを追加するには、[+] をクリックします。
- 編集するルートの編集 () アイコンをクリックします。

ルートが不要になった場合は、ルートのごみ箱アイコンをクリックして削除します。

ステップ 4 ルート プロパティの設定

- [名前]: ルートの表示名。
- [説明]: ルートの目的の任意の説明。
- [インターフェイス]: トラフィックの送信経路となるインターフェイスを選択します。このインターフェイス経由でゲートウェイ アドレスにアクセスできる必要があります。

ブリッジグループの場合は、メンバー インターフェイスではなく、ブリッジ グループ インターフェイス (BVI) のルートを設定します。

仮想ルーティングとフォワーディングを有効にしている場合は、別の仮想ルータに属するインターフェイスを選択できます。別の仮想ルータ内のインターフェイスの仮想ルータでスタティックルートを作成すると、そのルートは仮想ルータの境界を越え、この仮想ルータからのトラフィックが別の仮想ルータにリークするリスクがあります。望ましい結果である可能性もありますが、このルートリークが必要かどうかを慎重に判断してください。インターフェイスを選択すると、インターフェイスが属する仮想ルータの名前がインターフェイスの右側に表示されます。

- [プロトコル]: ルートがIPv4アドレス用かIPv6アドレス用かを選択します。
- [ネットワーク]: このルートでゲートウェイを使用する必要のある宛先ネットワークまたは宛先ホストを識別するネットワークオブジェクトを選択します。

デフォルト ルートを定義するには、事前定義された any-ipv4 または any-ipv6 ネットワークオブジェクトを使用するか、0.0.0.0/0 (IPv4) または ::/0 (IPv6) ネットワーク用のオブジェクトを作成します。

- [ゲートウェイ]: ゲートウェイのIPアドレスを識別するホストネットワークオブジェクトを選択します。トラフィックはこのアドレスに送信されます。複数のインターフェイス上のルートには同じゲートウェイを使用できません。

仮想ルータでルートを定義し、そのインターフェイスが別の仮想ルータに属している場合は、ゲートウェイを空のままにしておく必要があります。これらのネットワークへのトラ

フィックは他の仮想ルータにルーティングされ、ターゲット仮想ルータのルーティングテーブルを使用してゲートウェイが決定されます。

- [メトリック]: ルートのアドミニストレーティブディスタンス。1～254の範囲で指定します。スタティックルートのデフォルト値は1です。インターフェイスとゲートウェイの間に追加のルータが存在する場合は、ホップの数をアドミニストレーティブディスタンスとして入力します。

アドミニストレーティブディスタンスは、ルートを比較するのに使用されるパラメータです。値が小さいほど、そのルートの優先順位は高くなります。接続済みのルート（デバイスのインターフェイスに直接接続されているネットワーク）は、必ずスタティックルートより優先順位が高くなります。

ステップ 5 （任意、IPv4 ルートのみ）このルートの有効性を追跡する [SLA モニタ（SLA Monitor）] を選択します。

SLA モニタでは、ターゲットネットワーク上の常時利用可能なホストが到達可能であることを確認できます。到達不能になった場合、システムはバックアップルートをインストールできません。したがって、SLA モニタを設定する場合は、このネットワークに対してより大きなメトリックを持つ別のスタティックルートも設定する必要があります。たとえば、このルートのメトリックが1である場合は、メトリック 10 のバックアップルートを作成します。詳細については、「[スタティックルートのバックアップとスタティックルートのトラッキング（414ページ）](#)」を参照してください。

SLA モニタ オブジェクトがまだ存在しない場合は、リストの下部にある [SLA モニタの作成（Create SLA Monitor）] リンクをクリックしてここで作成します。

（注）

モニタ対象のアドレスが ping できないことが原因でモニタ対象のルートが削除された場合、このルートは、ルートが到達不能であることを示す警告とともにスタティックルートテーブルに示されます。問題が一時的なものであるか、またはルートを再設定する必要があるかどうかを確認します。ルートが有効でも、監視対象のアドレスが十分に信頼できない可能性もあります。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

SLA モニタ オブジェクトの設定

スタティックルートとともに使用するためのサービスレベル契約（SLA）モニタオブジェクトを設定します。SLA モニタを使用すると、スタティックルートの状態を追跡し、失敗したルートを自動的に新しいものに交換できます。ルートトラッキングの詳細については、[スタティックルートのバックアップとスタティックルートのトラッキング（414ページ）](#)を参照してください。

モニタリング対象の選択時には、その対象がICMPエコー要求に応答できることを確認してください。ターゲットには、ホストネットワークオブジェクトで定義された任意のIPアドレスを指定できますが、次の使用を検討する必要があります。

- ISP ゲートウェイアドレス（デュアル ISP サポート用）。
- ネクストホップゲートウェイアドレス(ゲートウェイの可用性に懸念がある場合)。
- システムが通信する必要があるターゲットネットワーク上のサーバ(syslogサーバなど)。
- 宛先ネットワーク上の永続的なIPアドレス。夜間にシャットダウンされる可能性のあるワークステーションは、適切な選択肢ではありません。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [SLA モニタ (SLA Monitors)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。

ステップ 4 SLA モニタの必須オプションを定義します。

- [モニタアドレス (Monitor Address)] : 宛先ネットワークでモニタするアドレスを定義するホスト ネットワーク オブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックします。

このアドレスは、SLA モニタをスタティックルートに接続している場合にのみモニタされます。

- [ターゲットインターフェイス (Target Interface)] : エコー要求パケットを送信する際に通過するインターフェイスを選択します。これは通常、スタティックルートを定義するインターフェイスになります。インターフェイス送信元アドレスが、エコー要求パケットの送信元アドレスとして使用されます。

ステップ 5 (オプション) 。 [IP ICMP エコーオプション (IP ICMP Echo Options)] を調整します。

すべてのICMPオプションには、ほとんどの場合に適合するデフォルトがありますが、要件に合わせて調整できます。

- [しきい値 (Threshold)] : 宣言する上昇しきい値 (ミリ秒) (0 ~ 2147483647 の間)。デフォルト値は5,000 (5秒) です。この値は、タイムアウトに設定された値以下にする必要があります。しきい値は、しきい値超過イベントを示すためにだけ使用されます。到達可能性には影響しません。しきい値イベントの頻度を使用すると、タイムアウトの設定を評価できます。

- [タイムアウト (Timeout)] : ルート監視操作が要求パケットからの応答を待つ時間 (ミリ秒) (0 ~ 604800000 ミリ秒 (7 日間) の間)。デフォルト値は5000ミリ秒(5秒)です。モニタがこの期間中に少なくとも1つのエコー要求への応答を受信しなかった場合、プロセスはバックアップ ルートをインストールします。
- [頻度]: SLAプローブ間のミリ秒数(1000~604800000、1000の倍数単位)。タイムアウト値未満の頻度は設定できません。デフォルトは60000ミリ秒(60秒)です。
- [サービスタイプ (Service Type)] : ICMP エコー要求パケットの IP ヘッダーの Type of Service (ToS) タイプを定義する整数 (0 ~ 255 の間)。デフォルトは 0 です。
- [パケットの数 (Number of Packets)] : 各ポーリングを送信するパケットの数 (1 ~ 100 の間)。デフォルトは 1 パケットです。
- [データサイズ (Data Size)] : エコー要求パケットで使用するデータ ペイロードのサイズ (0 ~ 16384 バイトの間)。デフォルト値は 28 です。この設定では、ペイロードのサイズだけが指定されます。パケット全体のサイズは指定されません。

ステップ 6 [OK]をクリックします。

これで、スタティック ルートで SLA モニタ オブジェクトを使用することができます。

ECMP トラフィックゾーンの設定

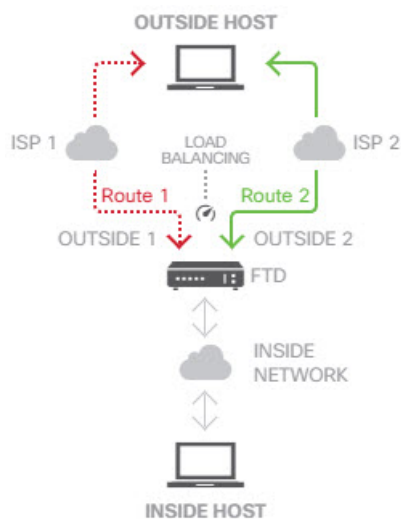
通常、同じルートメトリックを使用して特定のネットワークプレフィックスに複数のルートを設定するには、同じインターフェイスでルートを設定する必要があります。そのため、システムは、等コストマルチパス (ECMP) ルーティング計算を使用して、インターフェイス経由でゲートウェイに送信されるトラフィックのロードバランシングを実現します。

たとえば、次のように、異なるゲートウェイを指定する複数のデフォルトルートを外部インターフェイスに設定でき、この設定は追加の変更なしで許可されます。

```
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside to 10.1.1.2
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside to 10.1.1.3
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside to 10.1.1.4
```

また、ECMPを使用して、同じネットワークプレフィックスおよびルートメトリックの複数のインターフェイス (仮想ルータ内) 間でトラフィックのバランシングを実現することもできます。この設定は、複数の個別インターフェイスを介してゲートウェイにアクセスできる場合に必要です。たとえば、ISP が 2 つあり、ISP 間でロードバランシングを行いたいものの、ISP ゲートウェイ間で内部アドレス空間を分割したくないとします。一方の ISP には **outside1** インターフェイスを介してアクセスでき、もう一方の ISP には **outside2** インターフェイスを介してアクセスできます。これを実現するには、**outside1** インターフェイスと **outside2** インターフェイスを含むルーティング トラフィック ゾーンを作成する必要があります。

```
isp-zone containing outside1 and outside2
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside1 to 10.1.1.2
route for 0.0.0.0 0.0.0.0 through outside2 to 10.1.1.3
```



(注) ECMP ルーティング トラフィック ゾーンはセキュリティゾーンに関連していません。outside1 インターフェイスと outside2 インターフェイスを含むセキュリティゾーンを作成しても、ECMP ルーティング用のトラフィックゾーンは実装されません。

次の手順で、インターフェイス間で ECMP 処理を利用するように ECMP ゾーンを設定する方法について説明します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーにあるリンクをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータを有効にした場合は、スタティック ルートを設定しているルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。
- ステップ 3** [ECMP トラフィックゾーン (ECMP Traffic Zones)] タブをクリックします。
- ステップ 4** [ECMP トラフィックゾーン (ECMP Traffic Zones)] ページで、次のいずれかを実行します。
 - 新しいゾーンを追加するには、[+] または [ECMP トラフィックゾーンの追加 (Add ECMP Traffic Zone)] をクリックします。
 - 編集するゾーンの編集アイコン (✎) をクリックします。

ゾーンが不要になった場合は、ゾーンのごみ箱アイコンをクリックして削除します。ゾーンを削除する前に、そのゾーンに依存するすべての静的ルートを削除する必要があります。
- ステップ 5** ゾーンの [名前 (Name)] を入力し、必要に応じて説明を入力します。
- ステップ 6** [インターフェイス (Interfaces)] で、ゾーンに含める最大 8 つのインターフェイス選択します。

- インターフェイスを追加する場合は、[+] をクリックします。
- 削除するには、インターフェイスの右横にある [x] をクリックします。

インターフェイスを選択する際は、次の制限事項に注意してください。

- 物理インターフェイス、サブインターフェイス、および EtherChannel を選択できます。
- ECMP トラフィックゾーンに含めることのできないインターフェイスのタイプは、ブリッジグループ (BVI) やそのメンバー、Etherchannel メンバー インターフェイス、HA インターフェイス (フェールオーバーリンクまたはステートリンク)、管理専用インターフェイス、またはVPN 管理アクセス用に設定されたインターフェイスです。
- リモートアクセスまたはサイト間 VPN 接続で使用するインターフェイスを含めることはできません。
- DHCP リレーが有効になっているインターフェイスは、サーバまたはエージェントとして選択できません。
- インターフェイスは同じ仮想ルータに割り当てる必要があります。
- 1 つのインターフェイスは 1 つのトラフィックゾーンにのみ含まれます。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

次のタスク

これで、[静的ルート (Static Routes)] タブに移動し、これらのインターフェイスを介した同じ宛先への等コストルートを作成できます。または、動的ルーティングプロトコルがシステムを通じて配布される場合、等コストルートを自動的に設定できます。

ルーティングのモニタリング

ルーティングをモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLI コンソールを開くか、デバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用します。また、[ルーティング (Routing)] ページの [コマンド (Commands)] メニューから、これらのコマンドの一部を選択することもできます。

- **show route** はデータインターフェイスのルーティングテーブルを表示します。直接接続されたネットワークのルートが含まれます。
- **show ipv6 route** はデータインターフェイスのIPv6ルーティングテーブルを表示します。直接接続されたネットワークのルートが含まれます。
- **show network** は管理インターフェイスの設定を表示します。管理ゲートウェイが含まれます。管理インターフェイスを介したルーティングは、データインターフェイスを管理ゲートウェイとして指定しない限り、データインターフェイスルーティングテーブルによって処理されません。

- **show network-static-routes**は、**configure network static-routes**コマンドを使用して、管理インターフェイスに対して設定されたスタティックルートを表示します。通常、管理ルーティングでは、管理ゲートウェイで十分であるため、スタティックルートはありません。これらのルートは、データインターフェイス上のトラフィックには使用できません。このコマンドは、CLI コンソールでは使用できません。
- **show ospf** は OSPF プロセスと学習ルートに関する情報を表示します。OSPF に関する特定の情報を表示するために含めることができるオプションのリストを取得するには、**show ospf ?** を使用します。
- **show bgp** は BGP プロセスと学習ルートに関する情報を表示します。BGP に関する特定の情報を表示するために含めることができるオプションのリストを取得するには、**show bgp ?** を使用します。
- **show eigrp option** は EIGRP プロセスと学習ルートに関する情報を表示します。含めることができるオプションのリストを取得するには、**show eigrp ?** を使用します。オプションを指定する必要があります。
- **show isis option** は IS-IS プロセスと学習ルートに関する情報を表示します。含めることができるオプションのリストを取得するには、**show isis ?** を使用します。オプションを指定する必要があります。
- **show rip database** は RIP プロセスと学習ルートに関する情報を表示します。
- **show vrf** システムで定義されている仮想ルータの情報を表示します。
- **show zone** は ECMP トラフィックゾーンに関する情報（各ゾーンに含まれるインターフェイスなど）を表示します。



第 14 章

仮想ルータ

仮想ルータを作成して、インターフェイスのサブセットのトラフィックを相互に分離することができます。

- [仮想ルータと Virtual Route Forwarding \(VRF\) について \(425 ページ\)](#)
- [仮想ルータのガイドライン \(429 ページ\)](#)
- [仮想ルータの管理 \(431 ページ\)](#)
- [仮想ルータの例 \(435 ページ\)](#)
- [仮想ルータのモニタリング \(453 ページ\)](#)

仮想ルータと Virtual Route Forwarding (VRF) について

複数の仮想ルータを作成して、インターフェイスグループの個別のルーティングテーブルを管理できます。各仮想ルータには独自のルーティングテーブルがあるため、デバイスを流れるトラフィックを明確に分離できます。

これにより、共通のネットワーク機器のセットを使用して、2 件以上のお客様にサポートを提供できます。また、たとえば開発ネットワークを汎用企業ネットワークから分離することによって、仮想ルータを使用して、独自のネットワーク要素をより明確に分離することもできます。

仮想ルータは、Virtual Routing and Forwarding の「軽量」バージョンである VRF-Lite を実装しますが、この VRF-Lite は Multiprotocol Extensions for BGP (MBGP) をサポートしていません。

仮想ルータを作成するときに、インターフェイスをルータに割り当てます。特定のインターフェイスを1つのみの仮想ルータに割り当てることができます。次に、スタティックルートを定義し、各仮想ルータに OSPF や BGP などのルーティングプロトコルを設定します。また、ネットワーク全体で個別のルーティングプロセスを設定し、すべての参加デバイス上のルーティングテーブルが、仮想ルータごとの同じルーティングプロセスとテーブルを使用するようにします。仮想ルータを使用して、同じ物理ネットワーク上に論理的に分離されたネットワークを作成し、各仮想ルータを通過するトラフィックのプライバシーを確保します。

ルーティングテーブルは個別にあるため、仮想ルータ全体で同じ、または重複するアドレス空間を使用できます。たとえば、2 つの別個の物理インターフェイスでサポートされている 2 つの別個の仮想ルータ用に、192.168.1.0/24 アドレス空間を使用できます。

仮想ルータごとに個別の管理およびデータのルーティングテーブルがあることに注意してください。たとえば、管理専用インターフェイスを仮想ルータに割り当てると、そのインターフェイスのルーティング テーブルは、仮想ルータに割り当てられたデータ インターフェイスとは別のものになります。

仮想ルーター対応ポリシーの設定

仮想ルータを作成する場合、その仮想ルータのルーティングテーブルは、グローバル仮想ルータまたは他の仮想ルータから自動的に分離されます。ただし、セキュリティポリシーは自動的に仮想ルータ対応にはなりません。

たとえば、「任意の」送信元または宛先のセキュリティゾーンに適用されるアクセス制御ルールを作成する場合、ルールはすべての仮想ルータのすべてのインターフェイスに適用されます。実はこれがまさに必要な機能かもしれません。たとえば、すべてのお客様が、同じリストの好ましくない URL カテゴリへのアクセスをブロックしたい場合があります。

ただし、いずれかの仮想ルータにのみポリシーを適用する必要がある場合は、その1つの仮想ルータからのインターフェイスのみを含むセキュリティゾーンを作成する必要があります。その後、セキュリティポリシーの送信元と宛先の条件に、仮想ルータが制約されたセキュリティゾーンを使用します。

メンバーシップが1つの仮想ルータに割り当てられたインターフェイスに制限されたセキュリティゾーンを使用することにより、次のポリシーで仮想ルータ対応ルールを作成できます。

- アクセス コントロール ポリシー
- 侵入およびファイルポリシー。
- SSL 復号ポリシー。
- アイデンティティ ポリシーと、ユーザから IP アドレスへのマッピング。仮想ルータで重複するアドレス空間を使用する場合は、仮想ルータごとに個別のレلمを作成し、アイデンティティ ポリシー ルールでそれらを正しく適用してください。

仮想ルータで重複するアドレス空間を使用する場合は、適切なポリシーが適用されるようにセキュリティゾーンを使用する必要があります。たとえば、2つの個別の仮想ルータで 192.168.1.0/24 アドレス空間を使用する場合、192.168.1.0/24 ネットワークを指定するだけのアクセスコントロールルールは、両方の仮想ルータのトラフィックに適用されます。これが求める結果ではない場合は、1つの仮想ルータのみに対して送信元/宛先セキュリティゾーンも指定することで、ルールの適用を制限できます。

NATなどのセキュリティゾーンを使用しないポリシーでは、1つの仮想ルータに割り当てられたインターフェイスを送信元インターフェイスと宛先インターフェイスとして選択することによって、仮想ルータ固有のルールを作成できます。2つの個別の仮想ルータから送信元インターフェイスと宛先インターフェイスを選択する場合は、ルールが機能するよう、仮想ルータ間に適切なルートがあることを確認する必要があります。

仮想ルータ間のルーティング

仮想ルータ間でトラフィックをルーティングするようにスタティックルートを設定できます。

たとえば、グローバル仮想ルータに外部インターフェイスがある場合、外部インターフェイスにトラフィックを送信するために、他の各仮想ルータでスタティック デフォルト ルートを設定できます。その後、特定の仮想ルータ内でルーティングできないトラフィックは、その後のルーティングのためにグローバルルータに送信されます。

仮想ルータ間のスタティックルートは、別の仮想ルータにトラフィックをリークしているため、ルートリークと呼ばれます。ルートをリークしている場合（VR2へのVR1ルートなど）、VR2 から VR1 のみへの接続を開始できます。トラフィックが VR1 から VR2 に流れるようにするには、逆ルートを設定する必要があります。別の仮想ルータのインターフェイスへのスタティックルートを作成する場合は、ゲートウェイアドレスを指定する必要はありません。単純に宛先インターフェイスを選択します。

仮想ルータ間ルートの場合、システムは送信元の仮想ルータ内で宛先インターフェイスルックアップを行います。次に、宛先の仮想ルータでネクストホップの MAC アドレスを検索します。したがって、宛先の仮想ルータには、宛先アドレスに対して選択されたインターフェイスのダイナミック（学習済み）ルートまたはスタティックルートのいずれかが設定されている必要があります。

異なる仮想ルータで送信元インターフェイスと宛先インターフェイスを使用する NAT ルールを設定すると、仮想ルータ間でトラフィックをルーティングすることもできます。ルートルックアップを実行するために NAT のオプションを選択しない場合、宛先の変換が発生するたびに、NAT 変換アドレスを使用して宛先インターフェイスからトラフィックが送信されます。ただし、宛先の仮想ルータには、ネクストホップルックアップが成功するように、変換後の宛先 IP アドレスのルートが設定されている必要があります。

デバイス モデルごとの仮想ルータの最大数

作成できる仮想ルータの最大数は、デバイスモデルによって異なります。次の表に、上限を示します。**show vrf counters** コマンドを入力して、システムでダブルチェックできます。これにより、グローバル仮想ルータを含まない、そのプラットフォームにユーザが定義した仮想ルータの最大数が表示されます。次の表の数字には、ユーザ ルータとグローバル ルータが含まれています。Firepower 4100/9300 の場合、これらの数字はネイティブモードに適用されます。

Firepower 4100/9300 などのマルチインスタンス機能をサポートするプラットフォームでは、仮想ルータの最大数をデバイス上のコア数で割ってから、インスタンスに割り当てられたコア数を乗じて最も近い整数に丸めることにより、コンテナインスタンスごとの仮想ルータの最大数を決定します。たとえば、プラットフォームが最大 100 の仮想ルータをサポートする環境で、70 のコアが存在する場合、各コアは最大 1.43（切り上げた数）の仮想ルータをサポートします。したがって、6 つのコアが割り当てられたインスタンスは、8.58 の仮想ルータをサポートします（この数は 8 に切り下げる）。10 のコアが割り当てられたインスタンスは、14.3 の仮想ルータをサポートします（この数は 14 に切り下げる）。

デバイス モデル	最大仮想ルータ数
Firepower 1010	このモデルでは仮想ルータはサポートされていません。
Firepower 1120	5
Firepower 1140	10
Firepower 1150	10
Cisco Secure Firewall 1210CE	5
Cisco Secure Firewall 1210CP	5
Cisco Secure Firewall 1220CX	10
Cisco Secure Firewall 1230	10
Cisco Secure Firewall 1240	10
Cisco Secure Firewall 1250	15
Cisco Secure Firewall 3105	10
Secure Firewall 3110	15
Secure Firewall 3120	25
Secure Firewall 3130	50
Secure Firewall 3140	100
Firepower 4112	60
Firepower 4115	80
Firepower 4125	100
Firepower 4145	100
Firepower 9300 appliance、すべてのモデル	100
Threat Defense Virtual、すべてのプラットフォーム	30
ISA 3000	10

仮想ルータのガイドライン

デバイスモデルのガイドライン

次を除くすべての対応デバイスモデルで、仮想ルータを設定できます。

- Firepower 1010

その他のガイドライン

- 次の機能は、グローバル仮想ルータでのみ設定できます。

- OSPFv3
- RIP
- EIGRP
- IS-IS
- BGPv6
- マルチキャストルーティング
- ポリシーベースのルーティング
- [VPN]

- 次の機能は、仮想ルータごとに個別に設定できます。

- スタティック ルートとその SLA モニタ。
- OSPFv2
- BGPv4

- 次の機能は、リモートシステムとクエリまたは通信するときに（ボックスからのトラフィック）、システムによって使用されます。これらの機能は、グローバル仮想ルータのインターフェイスのみを使用します。この機能のインターフェイスを設定する場合、そのインターフェイスはグローバル仮想ルータに属している必要があります。一般的なルールとして、システムが外部サーバに到達するためにルートを検索する必要がある場合は、グローバル仮想ルータでルートルックアップが行われます。

- アクセス コントロール ルールで使用する完全修飾名を解決する場合、またはping コマンドの名前を解決する場合に使用されるDNSサーバ。DNSサーバのインターフェイスとしてanyを指定すると、システムはグローバル仮想ルータのインターフェイスだけを考慮します。
- AAA サーバまたはアイデンティティ レalm（VPN で使用する場合）。VPNはグローバル仮想ルータのインターフェイスでのみ設定できるため、VPNに使用される外部

AAAサーバ(Active Directoryなど)が、グローバル仮想ルータのインターフェイスを介して到達可能である必要があります。

- SYSLOGサーバ。
- SNMP。
- NAT では、異なる仮想ルータに割り当てられた送信元インターフェイスと宛先インターフェイスを指定すると、NAT ルールにより、ある仮想ルータから別の仮想ルータにトラフィックが転送されます。NAT ルール内のインターフェイスが意図せず混在していないことを確認します。通常は送信元と宛先のインターフェイスが使用され、ルーティングテーブルは無視され、手動 NAT での宛先変換も無視されます。ただし、NAT ルールでルートルックアップを実行する必要がある場合、インバウンドインターフェイスの VRF テーブルでのみルックアップが実行されます。必要に応じて、宛先インターフェイスの送信元仮想ルータでスタティック ルートを定義します。インターフェイスを [任意 (any)] のままにした場合は、仮想ルータのメンバーシップに関係なく、すべてのインターフェイスにルールが適用されることに注意してください。仮想ルータを使用する場合は、NAT ルールを慎重にテストして、想定どおりに動作することを確認します。必要なルートリクを定義しておかないと、場合によっては、ルールが適合すると予想されるすべてのトラフィックにルールが適合せず、変換が適用されません。
- 仮想ルータ間のルートを設定する場合（ある仮想ルータから2番目の仮想ルータへのルートをリークする場合など）、システムは送信元の仮想ルータで宛先インターフェイスルックアップを実行します。次に、宛先の仮想ルータでネクストホップの MAC アドレスを検索します。したがって、宛先の仮想ルータには、宛先アドレスに対して選択されたインターフェイスのダイナミック（学習済み）ルートまたはスタティックルートのいずれかが設定されている必要があります。
- たとえば、仮想ルータ1から仮想ルータ2への仮想ルータ間ルート(リークルート)を使用する場合は、リターントラフィックを許可するために仮想ルータ2にミラー(リバース)ルートを設定する必要はありません。ただし、どちらの方向でも接続を開始できるようにする場合は、仮想ルータ1から2、および仮想ルータ2から1の両方の方向にルートがリークしていることを確認します。
- ある仮想ルータから別の仮想ルータにインターフェイスを移動すると、そのインターフェイスに設定されているすべての機能が保持されます。設定を調べて、スタティックルート、IPアドレス、およびその他のポリシーが新しい仮想ルータのコンテキスト内で有効なことを確認します。
- 複数の仮想ルータで重複するアドレス空間を使用する場合は、Cisco Identity Services Engine (ISE) からダウンロードした IP アドレスマッピングへのスタティック セキュリティ グループタグ (SGT) は仮想ルータに対応していないことに注意してください。仮想ルータごとに異なる SGT マッピングを作成する必要がある場合は、仮想ルータごとに個別のアイデンティティレルムを設定します。これは、各仮想ルータで同じ IP アドレスを同じ SGT 番号にマッピングする場合には必要ありません。
- 複数の仮想ルータで重複するアドレス空間を使用すると、ダッシュボードデータが紛らわしくなる可能性があります。同じ IP アドレスの接続は集約されます。そのため、同じ IP

アドレスが2つ以上のエンドポイントで共有されている場合は、そのアドレスで送受信されるトラフィックが増加したように見えます。個別のアイデンティティレムを使用してアイデンティティポリシーを慎重に作成する場合は、ユーザベースの統計情報の方が正確です。

- オーバーラップしている DHCP アドレスプールは、別の仮想ルータでは使用できません。
- DHCP サーバの自動設定は、グローバル仮想ルータのインターフェイスでのみ使用できません。自動設定は、ユーザ定義の仮想ルータに割り当てられているインターフェイスではサポートされていません。
- グローバル仮想ルータから新しいルータへの移動を含め、仮想ルータ間でインターフェイスを移動すると、そのインターフェイスを介した既存の接続はすべて切断されます。
- セキュリティ インテリジェンス ポリシーは、仮想ルータに対応していません。IP アドレス、URL、または DNS 名をブロック リストに追加すると、すべての仮想ルータに対してブロックされます。

仮想ルータの管理

仮想ルータと呼ばれる複数の Virtual Routing and Forwarding (VRF) インスタンスを作成して、インターフェイスのグループに対して個別のルーティングテーブルを維持できます。各仮想ルータには独自のルーティングテーブルがあるため、デバイスを流れるトラフィックを明確に分離できます。

これにより、共通のネットワーク機器のセットを使用して、2 件以上のお客様にサポートを提供できます。また、仮想ルータを使用して、独自のネットワーク要素をより明確に分離することもできます。たとえば、開発ネットワークを汎用企業ネットワークから分離することができます。

デフォルトでは、仮想ルーティングは無効になっています。すべてのデバイスで、データ（通過）および管理（ボックス間）トラフィック用に、1つのグローバルルーティングテーブルのセットが使用されます。

仮想ルーティングを有効にすると、最初のルーティングページは、システムで定義されている仮想ルータの一覧になります。仮想ルータを有効にしない場合、最初のルーティングページは、システムで定義されているスタティックルートの一覧になります。

グローバル仮想ルータは、常に存在します。グローバルルータは、個別の仮想ルータに割り当てられていないすべてのインターフェイスを保持します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーにあるリンクをクリックします。

ステップ 2 まだ仮想ルータを有効にしていない場合は、[複数の仮想ルータの追加（Add Multiple Virtual Routers）] リンクをクリックし、次に [最初のカスタム仮想ルータの作成（Create First Custom Virtual Router）] をクリックします。

最初の仮想ルータの作成は、基本的に、追加の仮想ルータの作成と同じです。詳細については、[仮想ルータの作成またはインターフェイス割り当ての編集（433 ページ）](#) を参照してください。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- すべての仮想ルータに適用されるグローバル BGP を設定するには、[BGP グローバル設定（BGP Global Settings）] ボタンをクリックします。これらの設定は、スマート CLI を使用して行います。これについては、[Smart CLI オブジェクトの設定（1050 ページ）](#) で説明しています。1 つ以上の仮想ルータで BGP を設定する場合にのみ、グローバル BGP 設定を設定します。
 - 新しいルータを作成するには、仮想ルータのリストの上にある [+] ボタンをクリックします。
 - たとえば、スタティックルートを作成したり、ルーティングプロセスを定義したりするために、仮想ルータのルーティングプロパティを編集するには、仮想ルータの [アクション（Action）] セルの表示アイコン（) をクリックします。
 - 仮想ルータの名前、説明、またはインターフェイスの割り当てを編集するには、仮想ルータの [アクション（Action）] セルの表示アイコン（) をクリックし、[仮想ルータのプロパティ（Virtual Router Properties）] タブを選択します。
 - 仮想ルータの表示を切り替えるには、仮想ルータ名の横（ルーティングテーブルの上）にある下向き矢印をクリックし、目的の仮想ルータを選択します。[仮想ルータに戻る（Go Back To Virtual router）] 矢印（) をクリックすると、リストページに戻ることができます。
 - 仮想ルータを削除するには、仮想ルータの [アクション（Action）] セルの削除アイコン（) をクリックするか、仮想ルータの内容を表示するときに仮想ルータ名の横に表示される削除アイコンをクリックします。最後の仮想ルータ（削除できないグローバルルータ以外）を削除すると、VRF は無効になります。
 - 仮想ルータのルーティングをモニタするには、その仮想ルータのテーブル内のいずれかの **show** コマンドのリンクをクリックします。コマンドをクリックすると CLI コンソールが開き、CLI コマンドの出力を調べることができます。ルート、OSPF、および OSPF ネイバーに関する情報を表示できます。コマンド出力は展開された設定に基づいていることに注意してください。展開されていない編集内容は表示されません。
- これらのコマンドは、仮想ルータを表示するときに [コマンド（Commands）] ドロップダウン リストから選択して実行することもできます。

仮想ルータの作成またはインターフェイス割り当ての編集

仮想ルータでスタティックルートまたはルーティングプロセスを設定するには、その前にルータを作成し、インターフェイスを割り当てる必要があります。

始める前に

[インターフェイス (Interface)] ページに移動し、仮想ルータに追加する各インターフェイスに名前が付いていることを確認します。仮想ルータに名前を付けるまでは、仮想ルータにインターフェイスを追加できません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] をクリックします。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- まだ仮想ルータを作成していない場合は、[複数の仮想ルータの追加 (Add Multiple Virtual Routers)] リンクをクリックし、次に[最初のカスタム仮想ルータの作成 (Create First Custom Virtual Router)] をクリックします。
- 仮想ルータのリストの上にある [+] ボタンをクリックして、新しいルータを作成します。
- 仮想ルータの編集アイコン (🔧) をクリックして、そのプロパティとインターフェイスリストを編集します。
- 仮想ルータを表示している場合は、[仮想ルータのプロパティ (Virtual Router Properties)] タブをクリックして、表示している仮想ルータのプロパティを編集します。
- 仮想ルータを表示している場合は、仮想ルータ名の横にある下矢印をクリックし、[仮想ルータの新規作成 (Create New Virtual Router)] をクリックします。

ステップ 3 仮想ルータのプロパティを設定します。

- [名前 (Name)] : 仮想ルータの名前。
- [説明 (Description)] : 仮想ルータの説明 (任意)。
- [インターフェイス (Interfaces)] : [+] をクリックして、仮想ルータの一部となる各インターフェイスを選択します。インターフェイスを削除するには、インターフェイス上にカーソルを合わせ、インターフェイス カードの右側にある [X] をクリックします。仮想ルータには物理インターフェイス、サブインターフェイス、ブリッジグループ、および EtherChannel を割り当てられますが、VLAN は割り当てられません。

他のインターフェイスへのルートを意図的に仮想ルーティングテーブルにリークしない限り、ルーティング テーブルはこれらのインターフェイスに制限されます。

ステップ 4 [OK] または [保存 (Save)] をクリックします。

この仮想ルータのビューが表示されます。ここでスタティック ルートまたはルーティング プロセスを設定できます。

仮想ルータのスタティック ルートとルーティング プロセスの設定

各仮想ルータには、個別のスタティックルートとルーティングプロセスがあります。これは、他の仮想ルータに定義されているルートおよびルーティングプロセスとは別に動作します。

スタティック ルートを設定する場合は、仮想ルータの外部にある宛先インターフェイスを選択できます。これにより、宛先インターフェイスを含むルートが仮想ルータにリークされます。他の仮想ルータに必要な以上のトラフィックを送信しないように、リークが必要なルートだけをリークするようにします。たとえば、インターネットへのパスが1つの場合、インターネット宛てのトラフィックについて、各仮想ルータからインターネットに接する仮想ルータへのルートをリークすることが理にかなっています。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] を選択します。

ステップ 2 仮想ルータを開くには、[アクション (Action)] セルの [表示 (view)] アイコン (🔍) をクリックします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- スタティックルートを設定するには、[スタティックルーティング (Static Routing)] タブをクリックしてから、ルートを作成または編集します。詳細については、[スタティック ルートの設定 \(416 ページ\)](#) を参照してください。
- 等コストマルチパス (ECMP) トラフィックゾーンを設定するには、[ECMPトラフィックゾーン (ECMP Traffic Zones)] タブをクリックし、ゾーンを作成します。詳細については、[ECMP トラフィックゾーンの設定 \(420 ページ\)](#) を参照してください。
- BGP ルーティングプロセスを設定するには、[BGP] タブをクリックし、プロセスを定義するために必要なスマート CLI オブジェクトを作成します。詳細については、[Border Gateway Protocol \(BGP\) \(525 ページ\)](#) を参照してください。

すべての仮想ルータに適用される BGP のグローバル設定もあります。これらのプロパティを設定するには、仮想ルータのリストページに戻り、[BGP グローバル設定 (BGP Global Settings)] ボタンをクリックします。

- OSPF ルーティングプロセスを設定するには、[OSPF] タブをクリックしてから、最大 2 つのプロセスを定義するために必要なスマート CLI オブジェクトを作成し、それらに関連付けられたインターフェイス設定を作成します。詳細については、[Open Shortest Path First \(OSPF\) \(477 ページ\)](#) を参照してください。

- (グローバル仮想ルータのみ) EIGRP ルーティングプロセスを設定するには、[EIGRP] タブをクリックし、単一プロセスを定義するために必要な Smart CLI オブジェクトを作成します。詳細については、[Enhanced Interior Gateway Routing Protocol \(EIGRP\)](#) (503 ページ) を参照してください。

仮想ルータの削除

仮想ルータが不要になった場合は、削除できます。グローバル仮想ルータを削除することはできません。

仮想ルータを削除すると、その仮想ルータ内で設定されているすべてのスタティックルートとルーティングプロセスも削除されます。

仮想ルータに割り当てられたすべてのインターフェイスは、グローバルルータに再割り当てされます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 仮想ルータのリストで、仮想ルータの[アクション (Action)] 列にある削除アイコン (🗑️) をクリックします。
- 削除する仮想ルータを表示している場合、ルータ名の横にある削除アイコン (🗑️) をクリックします。

仮想ルータを削除することの確認を求められます。

ステップ 3 [OK] をクリックして、削除を実行します。

仮想ルータの例

次のトピックでは、仮想ルータの実装例を示します。

関連トピック

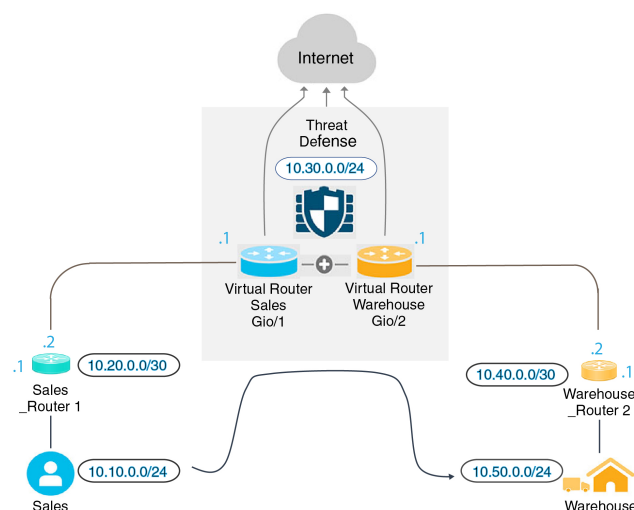
[サイト間 VPN における複数の仮想ルータのネットワークからのトラフィックを保護する方法](#) (838 ページ)

[異なる仮想ルータの内部ネットワークへの RA VPN アクセスを可能にする方法](#) (926 ページ)

複数の仮想ルータを介して遠隔サーバにルーティングする方法

仮想ルータを使用する場合、1つの仮想ルータのユーザが、別の仮想ルータを介してのみ到達可能なサーバにアクセスする必要がある場合があります。

次の図を考えてみましょう。セールスチームのワークステーションは、Sales 仮想ルータに接続されています。ウェアハウスサーバは、Warehouse 仮想ルータを介して接続されます。販売チームが、IP アドレスが 10.50.0.5/24 であるウェアハウスサーバの情報を検索する必要がある場合は、Sales 仮想ルータからのルートを Warehouse 仮想ルータにリークする必要があります。また、Warehouse 仮想ルータは、Warehouse Router 2 から数ホップ離れたウェアハウスサーバへのルートも持っている必要があります。



始める前に

この例では、すでに以下の設定が実施されていることを前提としています。

- Threat Defense デバイスの Sales と Warehouse の両方の仮想ルータで、GigabitEthernet 0/1 が Sales に割り当てられ、GigabitEthernet 0/2 が Warehouse に割り当てられています。
- Sales Router 1 には、10.20.0.1/30 インターフェイスから 10.50.0.5/24 にトラフィックを送信するスタティックルートまたはダイナミックルートのいずれかが含まれています。

手順

ステップ 1 10.50.0.5/24 または 10.50.0.0/24 のネットワークオブジェクトを作成します。また、ゲートウェイ（10.40.0.2/30）のオブジェクトを作成します。

ルートをウェアハウスサーバの単一の IP アドレスに制限する場合は、ホストオブジェクトを使用して 10.50.0.5 を定義します。または、販売チームが倉庫内の他のシステムにアクセスできるようにするには、10.50.0.0/24 ネットワークのネットワークオブジェクトを作成します。この例では、ホスト IP アドレスのルートを作成します。

- a) [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [ネットワーク (Networks)] を選択します。
- b) [+] をクリックし、次にウェアハウスサーバのオブジェクトプロパティを入力します。

Name
Warehouse-Server

Description

Type
☐ Network ☒ Host ☐ FQDN ☐ Range

Host
10.50.0.5

e.g. 192.168.2.1 or 2001:DB8::0DB8:800:200C:417A

- c) [OK] をクリックします。
- d) [+] をクリックし、次にウェアハウスネットワークへのルータゲートウェイのオブジェクトプロパティを入力します。

Name
Warehouse-gateway

Description

Type
☐ Network ☒ Host ☐ FQDN ☐ Range

Host
10.40.0.4

e.g. 192.168.2.1 or 2001:DB8::0DB8:800:200C:417A

- e) [OK] をクリックします。

ステップ 2 Warehouse 仮想ルータの Gi0/2 インターフェイスをポイントする、Sales でのルートリンクを定義します。

この例では、Gi0/1 に inside という名前が付けられており、Gi0/2 には inside-2 という名前が付けられています。

- a) [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルータリング (Routing)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- b) 仮想ルータのリストで、Sales 仮想ルータの [アクション (Action)] 列にある [表示 (view)] アイコン (🔍) をクリックします。

- c) [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。

- [名前 (Name)] : Warehouse-server-route など、任意の名前が付けられます。
- [インターフェイス (Interface)] : **inside-2** を選択します。インターフェイスが別のルータにあり、ルートリークを作成しているという警告が表示されます。これを今から実行します。
- [プロトコル (Protocol)] : この例では、**IPv4** を使用します。または、IPv6 アドレスを使用してこの例を実装することもできます。
- [ネットワーク (Networks)] : Warehouse-Server オブジェクトを選択します。
- [ゲートウェイ (Gateway)] : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name

Warehouse-server-route

Description

 The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface

inside-2 (GigabitEthernet0/2)

Belongs to different Router

 Warehouse

Protocol

☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

 Warehouse-Server

Gateway

Please select a gateway

Metric

1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type

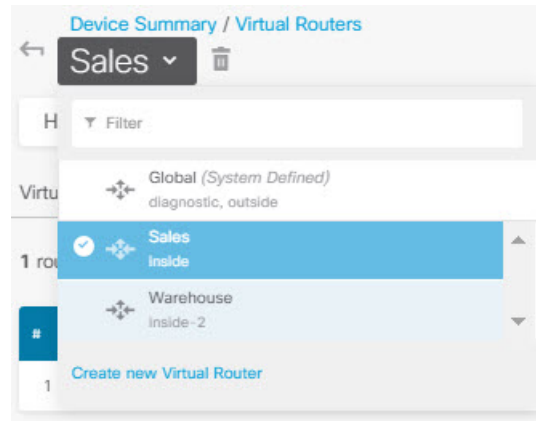
Please select an SLA Monitor

- d) [OK] をクリックします。

ステップ 3 Warehouse 仮想ルータで、Warehouse Router 2 のゲートウェイを指すルートを定義します。

または、Warehouse Router 2 からルートを動的に検出するルーティングプロトコルを設定することで、これを行うことができます。この例では、スタティックルートを定義します。

- a) 現在 Sales と示されている仮想ルータのドロップダウンから、Warehouse 仮想ルータを選択してルータを切り替えます。



- b) [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。
- [名前 (Name)] : Warehouse-route など、任意の名前が付けられます。
 - [インターフェイス (Interface)] : **inside-2** を選択します。
 - [プロトコル (Protocol)] : **IPv4** を選択します。
 - [ネットワーク (Networks)] : Warehouse-Server オブジェクトを選択します。
 - [ゲートウェイ (Gateway)] : Warehouse-gateway オブジェクトを選択します。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name
Warehouse-route

Description

Interface
inside-2 (GigabitEthernet0/2) Belongs to current Router
Warehouse

Protocol
☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks
+
Warehouse-Server

Gateway
Warehouse-gateway

Metric
1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type
Please select an SLA Monitor

c) [OK] をクリックします。

ステップ 4 ウェアハウスサーバへのアクセスを許可するアクセス制御ルールがあることを確認します。

最も単純なルールは、Sales 仮想ルータの送信元インターフェイスから、宛先 Warehouse-Server ネットワークオブジェクトの Warehouse 仮想ルータ内の宛先インターフェイスへのトラフィックを許可するものです。適切な侵入インスペクションをトラフィックに適用できます。

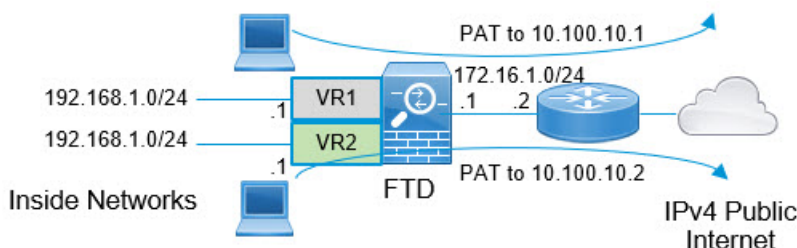
たとえば、Sales のインターフェイスが Sales-Zone セキュリティゾーンにあり、Warehouse のインターフェイスが Warehouse-Zone セキュリティゾーンにある場合、アクセス制御ルールは次のようになります。

Order	Title	Action
1	Warehouse Rule	Allow
Source/Destination		
Applications		
URLs		
Users		
Intrusion Policy		
File policy		
Logging		
SOURCE		
Zones	Networks	Ports
Sales-Zone	ANY	ANY
DESTINATION		
Zones	Networks	Ports/Protocols
Warehouse-Zone	Warehouse-Server	ANY

重複するアドレス空間を持つ複数の仮想ルータへのインターネットアクセスを提供する方法

仮想ルータを使用する場合、別のルータに存在するインターフェイスに対して同じネットワークアドレスを設定できます。たとえば、**inside** および **inside-2** のインターフェイスをどちらも IP アドレス 192.168.1.1/24 を使用するように定義し、192.168.1.0/24 ネットワーク内のセグメント上のエンドポイントを管理することができます。ただし、これらの個別の仮想ルータでルーティングされる IP アドレスは同じであるため、リターントラフィックが正しい宛先に到達するように、仮想ルータから発信されるトラフィックを慎重に処理する必要があります。

たとえば、同じアドレス空間を使用する 2 つの仮想ルータからのインターネットアクセスを許可するには、NAT ルールを各仮想ルータ内のインターフェイスに個別に適用する必要があります。それぞれ別の NAT または PAT プールを使用することが理想的です。PAT を使用して、仮想ルータ 1 の送信元アドレスを 10.100.10.1 に変換し、仮想ルータ 2 の送信元アドレスを 10.100.10.2 に変換することができます。次の図は、インターネット側の外部インターフェイスがグローバルルータの一部である場合の設定を示しています。送信元インターフェイスを明示的に選択した NAT/PAT ルールを定義する必要があります。これは、送信元インターフェイスとして「any」を使用すると、同じ IP アドレスが 2 つの異なるインターフェイスに存在する可能性があるため、システムが正しい送信元を識別できなくなるからです。



(注) この例では、各仮想ルータに 1 つのインターフェイスが含まれています。「inside」仮想ルータに複数のインターフェイスがある場合は、「inside」インターフェイスごとに NAT ルールを作成する必要があります。重複するアドレス空間を使用しない仮想ルータ内にいくつかのインターフェイスがある場合でも、NAT ルールで送信元インターフェイスを明示的に特定することでトラブルシューティングが容易になり、インターネットにバインドされた仮想ルータからのトラフィックを確実に分離できるようになります。

手順

ステップ 1 仮想ルータ 1 (VR 1) の内部インターフェイスを設定します。

- a) [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)] リンクをクリックします。

- b) VR1 に割り当てるインターフェイスの [アクション (Action)] 列にある編集アイコン (🔗) をクリックします。
- c) 少なくとも次のプロパティを設定します。
- [名前 (Name)] : この例では **inside**。
 - [モード (Mode)] : [ルーテッド (Routed)] を選択します。
 - [ステータス (Status)] : インターフェイスを有効にします。
 - [IPv4 アドレスタイプ (IPv4 Address Type)] > : [スタティック (Static)] を選択します。
 - [IPv4 アドレスとサブネットマスク (IPv4 Address and Subnet Mask)] : 192.168.1.1/24 と入力します。

Interface Name: Mode: Routed Status: ☒

Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces.

Description:

IPv4 Address IPv6 Address Advanced

Type: Static

IP Address and Subnet Mask: /

e.g. 192.168.5.15/17 or 192.168.5.15/255.255.128.0

Standby IP Address and Subnet Mask: /

e.g. 192.168.5.16

- d) [OK] をクリックします。

ステップ 2 仮想ルータ 2 (VR2) の inside-2 インターフェイスを設定しますが、IP アドレスは指定しないでください。

- a) [インターフェイス (Interface)] リストページで、VR2 に割り当てるインターフェイスの [アクション (Action)] 列にある編集アイコン (🔗) をクリックします。
- b) 少なくとも次のプロパティを設定します。
- [名前 (Name)] : この例では **inside-2**。
 - [モード (Mode)] : [ルーテッド (Routed)] を選択します。

- [ステータス (Status)] : インターフェイスを有効にします。
- [IPv4アドレスタイプ (IPv4 Address Type)] > : [スタティック (Static)] を選択します。
- [IPv4アドレスとサブネットマスク (IPv4 Address and Subnet Mask)] : これらのフィールドは空欄のままにします。この時点で **inside** インターフェイスと同じアドレスを設定しようとする、システムによってエラーメッセージが表示され、機能しない設定は作成できなくなります。同じルータ内の異なるインターフェイスを介して同じアドレス空間にルーティングすることはできません。

Interface Name: inside-2

Mode: Routed

Status: On

Most features work with named interfaces only, although some require unnamed interfaces.

Description:

IPv4 Address | IPv6 Address | Advanced

Type: Static

IP Address and Subnet Mask:
 e.g. 192.168.5.15/17 or 192.168.5.15/255.255.128.0

Standby IP Address and Subnet Mask:
 e.g. 192.168.5.16

- c) [OK] をクリックします。

ステップ3 外部インターフェイスへのスタティック デフォルトルート リークを含む、仮想ルータ VR1 を設定します。

- [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ルーティングページの上部にある [複数の仮想ルータの追加 (Add Multiple Virtual Router)] をクリックします。
- 説明パネルの右下にある [最初のカスタム仮想ルータの作成 (Create First Custom Virtual Router)] をクリックします。
- 仮想ルータ VR1 のプロパティを入力します。
 - [名前 (Name)] : VR1 または選択した別の名前を入力します。

- [インターフェイス (Interfaces)] : [+] をクリックし、**inside** を選択して [OK] をクリックします。

Name

VR1

Description

Interfaces

+

inside (GigabitEthernet0/1)

- e) [OK] をクリックします。

ダイアログボックスが閉じ、仮想ルータのリストが表示されます。

- f) 仮想ルータのリストで、VR1 仮想ルータの [アクション (Action)] 列にある [表示 (view)] アイコン (👁️) をクリックします。
- g) [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。

- [名前 (Name)] : **default-VR1** などの任意の名前を指定します。
- [インターフェイス (Interface)] : **outside** を選択します。インターフェイスが別のルータにあり、ルートリークを作成しているという警告が表示されます。これを今から実行します。
- [プロトコル (Protocol)] : この例では、**IPv4** を使用します。
- [ネットワーク (Networks)] : **any-ipv4** オブジェクトを選択します。これは、VR1 内でルーティングできないすべてのトラフィックのデフォルトルートになります。
- [ゲートウェイ (Gateway)] : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name
default-VR1

Description

 The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface
outside (GigabitEthernet0/0)  Belongs to different Router

Protocol
☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

any-ipv4

Gateway
Please select a gateway

Metric
1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type
Please select an SLA Monitor

h) [OK] をクリックします。

ステップ 4 外部インターフェイスへのスタティック デフォルトルート リークを含む、仮想ルータ VR2 を設定します。

- a) VR1 を表示している場合は、戻るボタン (←) をクリックして仮想ルータのリストに戻ります。
- b) リストの先頭にある [+] をクリックします。
- c) 仮想ルータ VR2 のプロパティを入力します。
 - [名前 (Name)] : VR2 または選択した別の名前を入力します。
 - [インターフェイス (Interfaces)] : [+] をクリックし、**inside-2** を選択して [OK] をクリックします。

Name

VR2

Description

Interfaces

+

inside-2 (GigabitEthernet0/2)

- d) [OK] をクリックします。
- ダイアログボックスが閉じ、仮想ルータのリストが表示されます。
- e) 仮想ルータのリストで、VR2 仮想ルータの [アクション (Action)] 列にある [表示 (view)] アイコン (🔍) をクリックします。
- f) [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。
- [名前 (Name)] : **default-VR2** などの任意の名前を指定します。
 - [インターフェイス (Interface)] : **outside** を選択します。インターフェイスが別のルータにあり、ルートリークを作成しているという警告が表示されます。これを今から実行します。
 - [プロトコル (Protocol)] : この例では、**IPv4** を使用します。
 - [ネットワーク (Networks)] : **any-ipv4** オブジェクトを選択します。これは、VR2 内でルーティングできないすべてのトラフィックのデフォルトルートになります。
 - [ゲートウェイ (Gateway)] : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name
default-VR2

Description

 The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface
outside (GigabitEthernet0/0)  Belongs to different Router

Protocol
☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

any-ipv4

Gateway
Please select a gateway

Metric
1

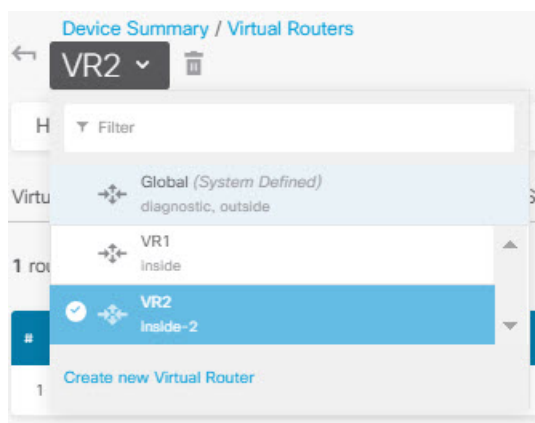
SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type
Please select an SLA Monitor

g) [OK] をクリックします。

ステップ 5 外部インターフェイスへのグローバルルータのデフォルトルートを作成します。

このルートの目的は、2 つの仮想ルータからグローバルルータの外部インターフェイスへのトラフィックリークに適切なゲートウェイを割り当てることです。

a) VR2 を表示している場合は、ページの上部にある VR2 の名前をクリックして仮想ルータのリストを開き、グローバルルータを選択します。



- b) グローバルルータの[スタティックルーティング (Static Routing)]タブで、[+]をクリックしてルートを設定します。

- [名前 (Name)] : default-ipv4 などの任意の名前を指定します。
- [インターフェイス (Interface)] : **outside** を選択します。
- [プロトコル (Protocol)] : この例では、**IPv4** を使用します。
- [ネットワーク (Networks)] : **any-ipv4** オブジェクトを選択します。これは、任意のIPv4 トラフィックのデフォルトルートになります。
- [ゲートウェイ (Gateway)] : オブジェクトがまだ存在していないと仮定して、[新規ネットワークオブジェクトの作成 (Create New Network Object)] をクリックし、外部インターフェイス（この場合は172.16.1.2）のネットワークリンクの反対側にあるゲートウェイのIPアドレスに対してホストオブジェクトを定義します。オブジェクトを作成したら、そのオブジェクトをスタティックルートの [ゲートウェイ (Gateway)] フィールドで選択します。

Name

outside-gateway

Description

Type

☒ Host

Host

172.16.1.2

e.g. 192.168.2.1 or 2001:D

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name
default-ipv4

Description

Interface
outside (GigabitEthernet0/0) Belongs to current Router
Global

Protocol
☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks
+
any-ipv4

Gateway
outside-gateway

Metric
1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type
Please select an SLA Monitor

- c) [OK] をクリックします。

ステップ 6 [インターフェイス (Interface)] ページに戻り、inside-2 に IP アドレスを追加します。

- [デバイス (Device)] をクリックしてから、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーにある [すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)] リンクをクリックします。
- VR2 に割り当てる inside-2 インターフェイスの [アクション (Action)] 列にある編集アイコン (🔧) をクリックします。
- [IPv4 アドレス (IPv4 Address)] タブで、IP アドレスとサブネットマスクとして 192.168.1.1/24 と入力します。
- [OK] をクリックします。

この時点では、inside および inside-2 インターフェイスが別の仮想ルータにあるため、重複する IP アドレスに対するエラーは発生しません。

ステップ 7 inside to outside トラフィックの 10.100.10.1 への PAT を実行する NAT ルールを作成します。

- [ポリシー (Policies)] を選択し、[NAT] をクリックします。
- 内部から外部インターフェイスに InsideOutsideNatRule という名前の手動 NAT ルールがすでに存在する場合、インターフェイス PAT を適用するには、ルール編集アイコン (🔧) をクリックします。そうでない場合は、[+] をクリックして新しいルールを作成します。

既存のルールを編集する場合は、送信元インターフェイスと宛先インターフェイスが異なる仮想ルータにあり、ルートを定義する必要があることを示す警告が表示されることに注意してください。これは、前の手順で行ったものです。

- c) 既存のルールを編集する場合は、**[変換済みパケット (Translated Packet)]** > **[送信元アドレス (Source Address)]** のドロップダウン矢印をクリックし、**[新規ネットワークの作成 (Create New Network)]** をクリックします (10.100.10.1 を定義しているホストオブジェクトがない場合)。
- d) PAT アドレスのホスト ネットワーク オブジェクトを設定します。オブジェクトは次のようになります。

Name
VR1-PAT-pool

Description

Type
☐ Network ☒ Host ☐ Range

Host
10.100.10.1

e.g. 192.168.2.1 or 2001:DB8::0DB8:800:200C::

- e) **[変換済みパケット (Translated Packet)]** > **[送信元アドレス (Source Address)]** として新しいオブジェクトを選択します。NAT ルールは次のようになります。

Title: InsideOutsideNatRule Create Rule for: Manual NAT Status: ☒

Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.

Placement: Before Auto NAT Rules Type: Dynamic

Packet Translation Advanced Options

 The source and destination interfaces belong to different virtual routers. Please ensure you have configured appropriate routes across the virtual routers for this rule to function correctly.

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	inside	Destination Interface	outside
Source Address	any-ipv4	Source Address	VR1-PAT-pool
Source Port	Any	Source Port	Any
Destination Address	Any	Destination Address	Any
Destination Port	Any	Destination Port	Any

f) [OK] をクリックします。

ステップ 8 NAT ルールを作成して、inside-2 to outside トラフィックの 10.100.10.2 PAT を実行します。

このルールは、VR1 のルールとまったく同じように表示されますが、次の例外があります。

- [名前 (Name)] : 一意である必要があります (たとえば、Inside2OutsideNatRule)。
- [元の packets (Original Packet)] > [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside-2 を選択します。
- [変換済み packets (Translated Packet)] > [送信元アドレス (Source Address)] : 10.100.10.2 の新しいホスト ネットワーク オブジェクトを作成します。

ルールは次のようになります。

Title	Create Rule for	Status
Inside2OutsideNatRule	Manual NAT	☒
Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.		
Placement	Type	
Before Auto NAT Rules	Dynamic	
Packet Translation Advanced Options		
⚠ The source and destination interfaces belong to different virtual routers. Please ensure you have configured appropriate routes across the virtual routers for this rule to function correctly.		
<u>ORIGINAL PACKET</u>		<u>TRANSLATED PACKET</u>
Source Interface	Destination Interface	
inside-2	outside	
Source Address	Source Port	Source Address
any-ipv4	Any	VR2-PAT-pool
Destination Address	Destination Port	Destination Address
Any	Any	Any

ステップ 9 [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] を選択し、inside_zone および inside2_zone からのトラフィックを outside_zone に許可するアクセス制御ルールを設定します。

最後に、inside インターフェイスと inside-2 インターフェイスから outside インターフェイスへのトラフィックを許可するようにアクセスコントロールポリシーを設定する必要があります。アクセス制御ルールではセキュリティゾーンを使用するため、これらのインターフェイスごとにゾーンを作成する必要があります。または、inside と inside-2 の両方を保持する単一のゾーンを作成することもできますが、これらのルータでトラフィックがどのように処理されるかを区別するために、このポリシーまたは他のポリシーで追加のルールを作成することになるでしょう。

インターフェイスの名前が付けられたゾーンを作成したとすると、すべてのトラフィックがインターネットに流れることを許可する基本ルールは、次のようになります。このルールには、適切な侵入ポリシーを適用できます。たとえば、URL フィルタリングを実装するために、不要なトラフィックをブロックする追加のルールを定義できます。

Order	Title	Action
3	AllowInternetTraffic	Allow

Source/Destination			Applications	URLs	Users	Intrusion Policy	File policy	Logging
SOURCE Zones: Networks: Ports: inside_zone ANY ANY inside2_zone			DESTINATION Zones: Networks: Ports/Protocols: outside_zone ANY ANY					

仮想ルータのモニタリング

仮想ルータをモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLI コンソールを開くか、またはデバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用します。また、[ルーティング (Routing)] ページの [コマンド (Commands)] メニューから、これらのコマンドの一部を選択することもできます。

- **show vrf** システムで定義されている仮想ルータの情報を表示します。
- **show ospf [vrf name | all]**

仮想ルータの OSPF プロセスに関する情報を表示します。仮想ルータを指定して、その仮想ルータ内のプロセスに関する情報のみを表示するか、オプションを省略して、すべての仮想ルータにわたる VRF に関する情報を表示することができます。追加オプションを表示するには、**show ospf ?** を使用します。

- **show bgp [vrf name | all]**

仮想ルータの BGP プロセスに関する情報を表示します。仮想ルータを指定して、その仮想ルータ内のプロセスに関する情報のみを表示するか、オプションを省略して、すべての仮想ルータにわたる VRF に関する情報を表示することができます。追加オプションを表示するには、**show bgp ?** を使用します。

- **show eigrp option**

EIGRP プロセスに関する情報を表示します。使用可能なオプションを表示するには、**show eigrp ?** を使用します。



第 15 章

ルートチューニングのためのルートマップ およびその他のオブジェクト

さまざまなルーティングプロトコルにより、ルートの配布や集約などのアクティビティを微調整できます。一部のチューニング機能では、ルートマップまたはその他のオブジェクトを使用して、チューニングポリシーの対象となるルートを識別します。ルートマップには、一致するルートに関するオプションを設定する追加機能があります。これにより、ネクストホップルータがカスタム動作を適用するために使用できるルートに変更を加えることができます。

これらのオブジェクトを作成する必要があるかどうかは、実装するルーティングプロトコルの動作を微調整するために必要なものに基づいて決まります。最初に要件を評価することによって、設定する調整コマンドに必要なオブジェクトのタイプを決定します。

- [ルートマップの設定 \(455 ページ\)](#)
- [アクセス リストの設定 \(462 ページ\)](#)
- [AS パスアクセスリストの設定 \(466 ページ\)](#)
- [コミュニティリストの設定 \(468 ページ\)](#)
- [ポリシー リストの設定 \(470 ページ\)](#)
- [プレフィックス リストの設定 \(472 ページ\)](#)

ルートマップの設定

ルートマップはさまざまな目的で使用でき、一部のルーティングプロトコルは他のプロトコルよりも多くの用途をサポートしています。最も一般的な用途は、別のルーティングプロトコルへのルート再配布を微調整することです。

ルートマップの **permit** 句と **deny** 句

ルートマップは、1 つ以上の **permit** 句または **deny** 句で構成されます。これらの句の順序は重要です。ルートはマップのトップダウンで評価され、最初の一致が優先されます。ルートがどの句とも一致しない場合、ルートマップと一致しないと見なされます。

各 **permit** 句には、0 個以上の **match** ステートメントおよび **set** ステートメントを含めることができます。**match** ステートメントはどのルートが句と一致するかを決定しますが、**set** ステートメントはルートのいくつかの特性（ルートメトリックなど）を変更します。**set** ステートメントは必要ありません。ルートを変更することなく、再配布（または別のサービス）のためにルートを照合できます。

各 **deny** 句には、0 個以上の **match** ステートメントを含めることができます。ただし、「拒否された」ルートは単にルートマップと一致しないため、**set** アクションを適用できないことから、**set** 句を含めても意味がありません。

ルートマップの **match** ステートメントと **set** ステートメント

各ルートマップ句には、次の 2 種類の値があります。

- **match** 値は、この句が適用されるルートを選択します。
- **set** 値は、ルートの一部の属性を変更します。

たとえば、再配布される各ルートについて、ルータは最初にルートマップの句の一致基準を評価します。ルートが基準に一致する場合、そのルートは **permit** 句または **deny** 句に従って再配布または拒否されます。**permit** 句と一致する場合、ルートの属性の一部は、**set** コマンドからの値によって変更される可能性があります。ルートが基準に一致しない場合、この句はルートに適用されず、システムはルートマップの次の句でルートを評価します。ルートマップのスキューンには、ルートと一致する句が見つかるまで、もしくはルートマップの最後に到達するまで続行します。一致する句がない場合、ルートはルートマップに一致しないと見なされます（拒否アクションと同等）。

1 つの句内の **match** ステートメントおよび **set** ステートメントについては、次のようになります。

- 複数の **match** ステートメントは AND 演算されます。つまり、ルートが句に一致するには、そのルートが各ステートメントを満たす必要があります。
- 1 つの **match** ステートメントに含まれる複数の値は OR 演算されます。つまり、ルートがある **match** 句内のいずれかの値と一致する場合、そのルートはその句と全体として一致すると見なされます。
- **match** ステートメントがない場合、すべてのルートが句と一致します。
- ルートマップの **permit** 句に **set** ステートメントがない場合、機能（再配布など）は、ルートの現在の属性を変更せずに、ルートに適用されます。
- **deny** 句内の **set** ステートメントは無視されます。「拒否された」ルートは単にルートマップと一致しないため、**set** アクションを適用できないことから、**set** 句を含めても意味がありません。
- **match** ステートメントまたは **set** ステートメントがない空の句は、それより前の句と一致しなかったすべてのルートと一致します。次に例を示します。

- 空の **permit** 句を使用すると、変更を加えずに残りのルートの再配布が可能になります。
- 空の **deny** 句では、残りのルートを再配布できません。これは、ルートマップがすべてスキャンされたときに明示的な一致が見つからなかった場合のデフォルトアクションです。

ルートマップの設定

ルートマップはさまざまな目的で使用でき、一部のルーティングプロトコルは他のプロトコルよりも多くの用途をサポートしています。最も一般的な用途は、別のルーティングプロトコルへのルート再配布を微調整することです。

ルートマップは、1 つ以上の **permit** 句または **deny** 句で構成されます。これらの句の順序は重要です。ルートはマップのトップダウンで評価され、最初の一致が優先されます。ルートがどの句とも一致しない場合、ルートマップと一致しないと見なされます。

各 **permit** 句には、0 個以上の **match** ステートメントおよび **set** ステートメントを含めることができます。**match** ステートメントはどのルートが句と一致するかを決定しますが、**set** ステートメントはルートのいくつかの特性（ルートメトリックなど）を変更します。**set** ステートメントは必要ありません。ルートを変更することなく、再配布（または別のサービス）のためにルートを照合できます。

各 **deny** 句には、0 個以上の **match** ステートメントを含めることができます。ただし、「拒否された」ルートは単にルートマップと一致しないため、**set** アクションを適用できないことから、**set** 句を含めても意味がありません。

match ステートメントと **set** ステートメントの評価方法の詳細については、[ルートマップの match ステートメントと set ステートメント（456 ページ）](#) を注意深く参照してください。

始める前に

アクセスリスト、AS パスアクセスリスト、コミュニティリスト、ポリシーリスト、プレフィックスリストといった他のさまざまなオブジェクトをルートマップで使用して、一致基準を定義することができます。ルートマップを作成する前に、これらのオブジェクトを作成する必要があります。

ACL 照合の場合、IPv4 アドレスには標準 ACL または拡張 ACL を使用できますが、IPv6 アドレスに使用できるのは拡張 ACL のみです。**match** 句は IPv4 または IPv6 のみに基づいているため、ACL に **match** ステートメントの正しいアドレススキームがあることを確認してください。

また、他のルーティングプロトコルと比較すると BGP の一致および設定基準が異なることに注意してください。ルートマップを使用するルーティングプロセスに関して正しい一致/設定基準を選択していることを確認してください。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** コンテンツテーブルから [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- ステップ 3** 次のいずれかを実行します。
- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
 - オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。
- 参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。
- ステップ 4** [CLI テンプレート (CLI Template)] として [ルートマップ (Route Map)] を選択します。
- ステップ 5** スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、CLI テンプレートの最初の行 (**route-map** コマンド内) のルートマップ名としても入力されることに注意してください。
- ステップ 6** 最初の句を作成します。
- a) [redistribution] 変数をクリックし、次のいずれかを選択します。
- **permit** : 一致します。このルールに一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
 - **deny** : 一致しません。このルールに一致する接続は、この機能から除外されます。「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであることに注意してください。たとえば、このルートマップを使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。
- b) **sequence-number** 変数をクリックし、句の番号を 1 ～ 65535 の範囲で入力します。
- この番号は、ルートマップ内の他の番号付き句に関連しています。一般的な方法は、カウントを 10 ずつスキップし (つまり、10、20、30)、将来新しい句を挿入する余地を残すことです。
- ステップ 7** [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックし、句の **match** ステートメントを設定します。
- a) **configure clause** コマンドを有効にするには、コマンドの横にある [+] をクリックします。
- b) [clause] をクリックし、**bgp-match-clause** (BGP ルートマップの場合) または **match-clause** (他のすべてのルーティングプロトコルの場合) を選択します。
- c) (BGP ルートマップ) 次の **match** ステートメントの任意の組み合わせを設定して、この句でターゲットとする特定のルートを識別します。設定しないコマンドについては、必ず、[-] アイコンをクリックして無効にしてください。

- **match as-path** : 変数をクリックし、照合する自律システム番号を定義する AS パスオブジェクトを選択します。
- **match community** : 変数をクリックし、照合するコミュニティを定義するコミュニティリストオブジェクトを選択します。
- **match policy-list** : 変数をクリックし、句の一致基準を定義するポリシーリストオブジェクトを選択します。
- **match tag** : 変数をクリックし、照合するルートタグ値を 0 ～ 4294967295 の範囲で入力します。

d) (他のすべてのルーティングプロトコル) 次の **match** ステートメントの任意の組み合わせを設定して、この句でターゲットとする特定のルートを識別します。設定しないコマンドについては、必ず、[-]アイコンをクリックして無効にしてください。これらのコマンドの一部を有効にするには、[+] をクリックする必要がある場合があります。

- **match interface** : 変数をクリックし、照合するルート内のすべてのインターフェイスを選択します。
- **configure match ipv4/ipv6 ip address list-type** : IP バージョンに適したコマンドを有効にします。次に、[list-type] 変数をクリックし、**access-list** または **prefix-list** に基づいてルートの IP アドレスを照合するかどうかを選択します。これにより **match ipv4/ipv6 address** コマンドが追加されます。このコマンドの変数をクリックし、照合する IP アドレスを定義するアクセスリストまたはプレフィックスリストを選択することができます。
- **configure match ipv4/ipv6 ip next-hop list-type** : [list-type] 変数をクリックし、**access-list** または **prefix-list** に基づいてルートのネクストホップルータの IP アドレスを照合するかどうかを選択します。これにより **match ipv4/ipv6 next-hop** コマンドが追加されます。このコマンドの変数をクリックし、照合する IP アドレスを定義するアクセスリストまたはプレフィックスリストを選択することができます。
- **configure match ipv4/ipv6 ip route-source list-type** : [list-type] 変数をクリックし、**access-list** または **prefix-list** に基づいてルートのルート送信元の IP アドレスを照合するかどうかを選択します。これにより **match ipv4/ipv6 route-source** コマンドが追加されます。このコマンドの変数をクリックし、照合する IP アドレスを定義するアクセスリストまたはプレフィックスリストを選択することができます。
- **match metric** : 変数をクリックし、照合するルーティングメトリックを 1 ～ 4294967295 の範囲で入力します。
- **match route-type** : (OSPF、EIGRP) 変数をクリックし、ルートタイプを選択します。
 - **external-1**、**external-2** : OSPF または EIGRP の外部タイプ 1 またはタイプ 2 ルート。
 - **internal** : OSPF エリア内およびエリア間ルート、または EIGRP 内部ルート
 - **local** : ローカルに生成された BGP ルート。

- **nssa-external-1**、**nssa-external-2**。外部 Not So Stubby Area (NSSA) タイプ 1 またはタイプ 2 ルート。

ステップ 8 (任意、permit 句のみ) 許可された (つまり、一致した) ルートについて、**set** ステートメントを設定してルート属性を変更できます。ルートを変更する必要はありません。たとえば、ルートを変更せずに再配布することができます。

- a) [...] > **[複製 (Duplicate)]** (permit 句内の **configure match-clause** コマンドまたは **configure bgp-match-clause** コマンドの左横) をクリックします。新しい **configure clause** コマンドが permit 句の最後に追加されます。
- b) [clause] をクリックし、match 句に対して選択したものに基づいて **bgp-set-clause** または **set-clause** を選択します。
- c) (BGP ルートマップ) 一致するルートの属性を変更するには、次の **set** ステートメントの任意の組み合わせを設定します。設定しないコマンドについては、必ず、[-] アイコンをクリックして無効にしてください。

- **configure set as-path options** : [options] をクリックし、**properties** を選択すると、設定する必要がある次のコマンドが追加されます。パスに項目を追加すると、AS 番号が重複していても、パスが長くなり、そのルートが最適なルートとして選択される可能性が低くなります。

- **set as-path prepend as-path** : [as-path] をクリックし、ルートの AS_PATH 属性の先頭に追加する最大 10 個の自律システム番号を入力します。この変更は、アウトバウンド BGP ルートマップに適用されます。

- **set as-path prepend last-as value** : [value] をクリックし、システムが AS_PATH 変数の先頭にアドバタイジングネイバーの自律システム番号を付加する回数を入力します。この変更は、インバウンド BGP ルートマップに適用されます。

- **set as-path tag** : ルートのタグを自律システムパスに変換します。BGP にルートを再配布するときのみ適用されます。

- **set community community-number properties** : [community-number] をクリックし、ルートのコミュニティを 1 ~ 4694967295 の範囲で入力します。必要に応じて、[properties] をクリックし、次のいずれかを追加できます。

- **internet** : このコミュニティのあるルートは、すべてのピア (内部および外部) にアドバタイズされます。

- **no-advertise** : このコミュニティのあるルートは、ピア (内部または外部) にはアドバタイズされません。

- **no-export** : このコミュニティのあるルートは、同じ自律システム内のピアへのみ、または連合内の他のサブ自律システムへのみアドバタイズされます。これらのルートは外部ピアにはアドバタイズされません。

- **set local-preference** : 変数をクリックし、自律システムパスのプリファレンス値を 0 ~ 4294967295 の範囲で入力します。グローバル BGP オプションで変更しないかぎり、

BGP ルートのデフォルトプリファレンスは 100 です。プリファレンス値が最大のルートが優先されます。

- **set weight** : 変数をクリックし、ルートの重み 0 ～ 65535 の範囲で入力します。ルータが同じ宛先への複数のルートがあることを学習すると、Weight が最も大きいルートが優先されます。
 - **set origin options** : BGP ルートの起点は、メイン IP ルーティングテーブルのルートのパス情報に基づいています。これを変更するには、[options] をクリックし、BGP 送信元コードの設定方法を選択します。
 - **igp** : 送信元を内部ゲートウェイプロトコル (IGP) のリモートシステムに設定します。
 - **incomplete** : 送信元を不明な継承として設定します。
 - **configure next-hop ipv4/ipv6 options** : これらは個別のコマンドです。適切な IP バージョンの [options] をクリックし、次のいずれかを選択します。ネクストホップゲートウェイの設定は、通常、ポリシーベースのルーティングを実装するときに行います。
 - **specific-ip** : このルートのネクストホップゲートウェイの IP アドレスを明示的に設定する場合は、このオプションを選択します。set ip/ipv6 next-hop ip-address コマンドが追加されます。変数をクリックし、ネクストホップゲートウェイの IP アドレスを入力します。スペースで区切ることで、複数の IP アドレスを追加できます。最初のゲートウェイのアドレスに到達できない場合は次のアドレスが試行され、以降同様です。
 - **user-peer-address** : ネクストホップゲートウェイを BGP ピアの IP アドレスとして設定する場合は、このオプションを選択します。このオプションを BGP ピアのアウトバウンドルートマップで使用すると、アドバタイズされた一致するルートのネクストホップをローカルルータのピアアドレスに設定し、ネクストホップ計算をディセーブルにします。このコマンドについては、追加設定は必要ありません。
 - **set ipv4/ipv6 address prefix-list** : これらは個別のコマンドです。選択したプレフィックスリストの内容に基づいて、ルートの IP アドレスを変更します。
 - **set automatic-tag** : システムにルートのタグ値を自動的に計算させます。
- d) (他のすべてのルーティングプロトコル) 一致するルートの属性を変更するには、次の set ステートメントの任意の組み合わせを設定します。設定しないコマンドについては、必ず、[-] アイコンをクリックして無効にしてください。
- **set metric** : 変数をクリックし、メトリック値を 0 ～ 4294967295 の範囲で入力します。この値は EIGRP では使用されません。
 - **set metric-type** : 変数をクリックし、メトリックのタイプを選択します。
 - **type-1**、**type-2** : OSPF の外部ルートのタイプ。デフォルトは type-2 です。

- **internal** : ルートのネクストホップの内部ゲートウェイプロトコル (IGP) メトリックと一致するように、外部 BGP (eBGP) ネイバーにアドバタイズされるプレフィックスの Multi-Exit 識別子 (MED) 値を設定します。これは、生成された内部 BGP (iBGP) 生成ルートおよび eBGP 生成ルートに適用されます。

ステップ 9 permit/deny 句を追加してルートマップを完成させます。

句を追加するには、[...] > **[複製 (Duplicate)]** (permit 行または deny 行の左横) をクリックします。[複製 (Duplicate)] コマンドをクリックした句の直後に新しい *redistribution sequence-number* 句が追加されます。

ルートマップの句は、オブジェクトに表示される順序ではなく、シーケンス番号の順序で評価されますが、新しい句を順番に挿入することで、オブジェクトの編集が容易になります。オブジェクト内で句を移動することはできません。

句を複製すると新しい空の句が挿入され、それらは事前設定された特性を持ちません。「複製」を作成したら、必要に応じて、上記の説明に従って設定してください。

ステップ 10 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ルートマップを必要とする機能のために、ルーティングプロセス設定 (または FlexConfig オブジェクト) でオブジェクトを使用できるようになりました。

アクセス リストの設定

アクセス リスト オブジェクトは、アクセス コントロール リスト (ACL) とも呼ばれ、トラフィックに適用されるサービスを選択します。アクセス リスト オブジェクトを使って、ルートマップなどの機能を設定します。ACL で許可されたトラフィックはサービスを利用できますが、「ブロックされた」トラフィックはサービスから除外されます。サービスから除外されたトラフィックが必ずしも完全にドロップされるわけではありません。

次のタイプの ACL を設定できます。

- **拡張** : 送信元と宛先アドレスおよびポートに基づいてトラフィックを識別します。IPv4/IPv6 アドレスをサポートしています。
- **標準** : 宛先アドレスのみに基づいてトラフィックを識別します。IPv4 のみサポートしています。

ACL は 1 つまたは複数のアクセス コントロール エントリ (ACE) またはルールで構成されます。ACE の順番は重要です。パケットを「許可」ACE と照合して ACL を評価する際、ACL に登録されている ACE の順番どおりに照合します。一致が見つかり、ACE はそれ以上チェックされません。たとえば、10.100.10.1 と一致させ、10.100.10.0/24 の残りを除外する場合、10.100.10.1 の許可エントリは 10.100.10.0/24 の拒否エントリの前に配置する必要があります。通常、具体性の高いルールを ACL の上部に置きます。

許可エントリに一致しないパケットは、拒否されるか、照合から除外されると見なされます。次に、ACL オブジェクトの設定方法について説明します。

拡張アクセスリストの設定

送信元および宛先アドレス、プロトコル、およびポートに基づいて、あるいはトラフィックが IPv6 の場合にトラフィックを照合するには、拡張 ACL オブジェクトを使用します。

始める前に

オブジェクトに作成する ACE に必要なネットワークオブジェクトまたはポートオブジェクトを作成します。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2 コンテンツテーブルから [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- ステップ 3 次のいずれかを実行します。
 - オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
 - オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。
- ステップ 4 [CLI テンプレート (CLI Template)] として [拡張アクセスリスト (Extended Access List)] を選択します。
- ステップ 5 スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、CLI テンプレートの最初の行 (**access list** コマンド内) の ACL 名としても入力されることに注意してください。
- ステップ 6 ACL の最上位のルールとなる ACE を作成します。

1 つの **configure access list entry** コマンドに含まれるコマンドの各リストは基本的に 1 つの ACE ですが、展開すると、特に複数のネットワークオブジェクトを含める場合、システムがコマンドを一連の ACE に分割することがあります。

 - a) **configure access list entry** コマンドで、[action] をクリックし、次のいずれかを選択します。
 - **permit** : 一致します。この ACE に一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
 - **deny** : 一致しません。この ACE に一致する接続は、この機能から除外されます。「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであること

に注意してください。たとえば、ルートマップでは、この ACL を使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。

- b) **permit/deny network** コマンドで、変数をクリックし、接続の送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスを定義するネットワークオブジェクトを選択します。複数のオブジェクトを選択できます。「任意の」アドレスを指定するには、**any-ipv4** オブジェクトおよび **any-ipv6** オブジェクトを選択します。

オブジェクトまたはオブジェクトグループに FQDN を含めることはできません。オブジェクトは IP アドレスのみを指定する必要があります。FQDN オブジェクトは、アクセス制御ルールでのみ有効です。

- c) **configure permit/deny port** コマンドで、[options] をクリックし、次のいずれかを選択します。これにより、関連付けられた **permit/deny** コマンドがテンプレートに追加されます。

- **any** : ポートが問題ではない場合に使用します。つまり、任意のタイプの IP トラフィックが照合されます。
- **any-source** : 送信元 TCP/UDP ポートは問題ではないが、宛先ポートを指定する場合に使用します。**permit/deny port** コマンドの [destination-port] 変数をクリックし、ポートオブジェクトを選択します。
- **any-destination** : 宛先 TCP/UDP ポートは問題ではないが、送信元ポートを指定する場合に使用します。**permit/deny port** コマンドの [source-port] 変数をクリックし、ポートオブジェクトを選択します。
- **source-destination** : 送信元 TCP/UDP ポートと宛先 TCP/UDP ポートの両方が問題である場合に使用します。**permit/deny port** コマンドで [source-port] 変数と [destination-port] 変数をクリックし、ポートオブジェクトを選択します。

- d) **configure logging** コマンドで、**disabled** を選択します。ロギングはアクセス制御に使用される ACL に適用され、これらのオブジェクトをアクセス制御に使用することはできません。そのため、ロギングオプションは選択内容に関係なく無視されます。

ステップ 7 ACE を追加して ACL を完成させます。

ACE を追加するには、[...]>[複製 (Duplicate)] (configure access list entry 行の左横) をクリックします。[複製 (Duplicate)] コマンドをクリックした ACE の直後に新しい ACE グループが追加されます。

そのため、オブジェクトに多数の ACE がある場合は、「複製」する ACE を慎重に選択してください。オブジェクト内では ACE を移動できないため、間違えた場合は、ACE を正しい場所で手動で再作成する必要があります。

ACE を複製すると新しい空の ACE が挿入され、それらは事前設定された特性を持ちません。「複製」を作成したら、必要に応じて、上記の説明に従って設定してください。

ステップ 8 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

拡張ACLを必要とする機能のために、ルートマップオブジェクト（またはFlexConfigオブジェクト）でオブジェクトを使用できるようになりました。

標準アクセスリストの設定

宛先 IPv4 アドレスのみに基づいてトラフィックを照合する場合や、設定している機能が標準 ACL をサポートする場合は、標準 ACL オブジェクトを使用します。それ以外の場合は、拡張 ACL を使用します。

始める前に

オブジェクトに作成する ACE に必要なネットワークオブジェクトを作成します。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2 コンテンツテーブルから [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- ステップ 3 次のいずれかを実行します。
 - オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
 - オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。
- ステップ 4 [CLI テンプレート (CLI Template)] として [標準アクセスリスト (Standard Access List)] を選択します。
- ステップ 5 スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、CLI テンプレートの最初の行 (**access list** コマンド内) の ACL 名としても入力されることに注意してください。
- ステップ 6 ACL の最上位のルールとなる ACE を作成します。

1 つの **configure action** コマンドに含まれるコマンドの各リストは、1 つの ACE です。

 - a) **configure action** コマンドで、[action] をクリックし、次のいずれかを選択します。
 - **permit** : 一致します。この ACE に一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
 - **deny** : 一致しません。この ACE に一致する接続は、この機能から除外されます。「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであること

に注意してください。たとえば、ルートマップでは、この ACL を使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。

- b) **permit/deny host** コマンドで、変数をクリックし、接続の宛先 IP アドレスを定義するネットワークオブジェクトを選択します。このオブジェクトは、ネットワークまたはホストアドレスを指定できます。**permit/deny host** コマンドごとに 1 つのオブジェクトを選択できます。コマンドで [...] > [複製 (Duplicate)] をクリックして追加のアドレスを指定すると、同じアクションを持つ一意の ACE になります。「任意の」アドレスを指定するには、any-ipv4 オブジェクトを選択します。

ステップ 7 ACE を追加して ACL を完成させます。

ACE を追加するには、[...] > [複製 (Duplicate)] (configure action 行の左横) をクリックします。[複製 (Duplicate)] コマンドをクリックした ACE の直後に新しい ACE グループが追加されます。

そのため、オブジェクトに多数の ACE がある場合は、「複製」する ACE を慎重に選択してください。オブジェクト内では ACE を移動できないため、間違えた場合は、ACE を正しい場所で手動で再作成する必要があります。

ACE を複製すると新しい空の ACE が挿入され、それらは事前設定された特性を持ちません。「複製」を作成したら、必要に応じて、上記の説明に従って設定してください。

ステップ 8 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

標準 ACL を必要とする機能のために、ルートマップオブジェクト（または FlexConfig オブジェクト）でオブジェクトを使用できるようになりました。

AS パスアクセスリストの設定

AS パスアクセスリストを使用して、BGP ネイバーの更新を、更新内の自律システム番号に基づいてフィルタ処理できます。許可された AS 番号の場合は更新が受け入れられますが、拒否された AS 番号の場合は更新が拒否されます（つまり、更新はルーティングテーブルに追加されない）。

また、アウトバウンド方向に AS パスフィルタ処理を適用して、ネイバーに送信する更新をフィルタ処理することもできます。

さらに、BGP アドレス集約のルートマップで AS パスオブジェクトを使用できます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ2 コンテンツテーブルから [スマートCLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。

ステップ3 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ4 [CLIテンプレート (CLI Template)] として [ASパス (ASPath)] を選択します。

ステップ5 スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、1 ～ 500 の範囲の数値にする必要があります。この名前は、CLIテンプレートの最初の行 (**as-path** コマンド内) の AS パスアクセスリスト名としても入力されることに注意してください。

ステップ6 AS パスエントリを設定します。

各エントリは、**action** オプションで始まる単一の行に含まれます。

a) [action] をクリックし、次のいずれかを選択します。

- **permit** : 一致します。このルールに一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
- **deny** : 一致しません。このルールに一致する接続は、この機能から除外されます。「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであることに注意してください。たとえば、ルートマップでは、このオブジェクトを使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。

b) [regex] をクリックし、このエントリに一致する AS 番号を定義する正規表現を入力します。

最も単純な形式では、正規表現は単に完全な AS パス番号であり、単一の自律システムからのルート更新を許可または拒否します。

AS 番号には、1 ～ 4294967295 または 1.0 ～ 65535.65535 を指定できます。AS 番号は固有に割り当てられた値であるため、インターネットの各ネットワークが識別されます。システムは、RFC 5396 で定義されている **asplain** および **asdot** 表記をサポートしています。使用する必要がある表記は、BGP グローバル設定で **bgp asnotation dot** コマンドを有効にするかどうかによって異なります。

ステップ7 エントリを追加して AS パスアクセスリストを完成させます。

エントリを追加するには、[...] > [複製 (Duplicate)] (action 行の左横) をクリックします。[複製 (Duplicate)] コマンドをクリックしたエントリの直後に新しいエントリが追加されます。

そのため、オブジェクトに多数のエントリがある場合は、「複製」するエントリを慎重に選択してください。オブジェクト内ではエントリを移動できないため、間違えた場合は、エントリを正しい場所で手動で再作成する必要があります。ルールはトップダウンで評価され、最初の一致が優先されます。

エントリを複製すると新しい空のエントリが挿入され、それらは事前設定された特性を持ちません。「複製」を作成したら、必要に応じて、上記の説明に従って設定してください。

ステップ 8 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

AS パスアクセスリストを必要とする機能のために、BGP オブジェクト、ルートマップオブジェクト（または FlexConfig オブジェクト）でオブジェクトを使用できるようになりました。

コミュニティリストの設定

BGP プロセスでコミュニティ情報を送信できるようにすると、ルートマップでコミュニティリストを **match** 句として使用して、一致するルートで属性を設定できます。たとえば、特定のコミュニティのルート優先度を変更できます。

コミュニティとは、共通するいくつかの属性を共有する宛先グループに関してアドバタイズされたルートにサービスプロバイダーが添付するオプションの属性またはラベルです。特定のコミュニティ番号は ISP がアドバタイズするものであり、それらの番号とその意味を ISP から取得し、ルートマップを使用してそれら进行处理する方法を選択する必要があります。

コミュニティリストは順序付けられており、一致は、アクセスリストやプレフィックスリストと同様に、トップダウン（最初の一致が優先される）方式によって決定されます。

コミュニティリストには次の 2 つのタイプがあります。

- **標準**：特定の既知のコミュニティ（サービスプロバイダーから取得したコミュニティなど）を対象とする場合は、標準リストを使用します。
- **拡張**：正規表現照合に基づいて一連のコミュニティを照合する場合は、拡張リストを使用します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 コンテンツテーブルから [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 4 [CLIテンプレート (CLI Template)] として [標準コミュニティリスト (Standard Community List)] または [拡張コミュニティリスト (Expanded Community List)] を選択します。

ステップ 5 スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、CLI テンプレートの最初の行 (**community-list** コマンド内) のコミュニティリスト名としても入力されることに注意してください。

ステップ 6 (標準リスト) コミュニティリストエントリを設定します。

各エントリは、**action** オプションで始まる単一の行に含まれます。

a) [action] をクリックし、次のいずれかを選択します。

- **permit** : 一致します。このルールに一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
- **deny** : 一致しません。このルールに一致する接続は、この機能から除外されます。
「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであることに注意してください。たとえば、ルートマップでは、このルートを使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。

b) [community-number] をクリックし、最大 10 個のコミュニティをスペースで区切って入力します。1 つのルールに含まれる複数のコミュニティは AND 演算されるため、ルート内のすべてのコミュニティが一致する場合にのみ一致します。

BGP プロセスに関して有効になっている番号付け方法に基づいてコミュニティを 10 進形式 (1 ~ 4294967295) または AA:NN 形式 (各値は 1 ~ 66535) で入力します。これらの番号は、ISP またはその他の BGP ネイバーから取得してください。

c) (任意) [properties] をクリックし、他の既知のコミュニティをルールに追加します。

- **internet** : このコミュニティのあるルートは、すべてのピア (内部および外部) にアドバタイズされます。
- **no-advertise** : このコミュニティのあるルートは、ピア (内部または外部) にはアドバタイズされません。
- **no-export** : このコミュニティのあるルートは、同じ自律システム内のピアへのみ、または連合内の他のサブ自律システムへのみアドバタイズされます。これらのルートは外部ピアにはアドバタイズされません。

ステップ 7 (拡張リスト) コミュニティリストエントリを設定します。

a) [action] をクリックし、**permit** または **deny** を選択します。これらのアクションについては、前述しています。

b) [regex] をクリックし、このエントリに一致するコミュニティを定義する正規表現を入力します。

* または + の文字を使用した照合の順序は、最長のコンストラクトが最初になります。入れ子のコンストラクトは外側から内側へと照合されます。連結コンストラクトは左側から順に照合されます。ある正規表現が、1 つの入力ストリングの異なる 2 つの部分と一致す

る可能性がある場合、早く入力された部分が最初に一致します。正規表現の表記の詳細については、『Cisco IOS Terminal Services Configuration Guide』の付録「Regular Expressions」を参照してください。

ステップ 8 エントリを追加してコミュニティリストを完成させます。

エントリを追加するには、[...]>[複製 (Duplicate)] (action 行の左横) をクリックします。[複製 (Duplicate)] コマンドをクリックしたエントリの直後に新しいエントリが追加されます。

そのため、オブジェクトに多数のエントリがある場合は、「複製」するエントリを慎重に選択してください。オブジェクト内ではエントリを移動できないため、間違えた場合は、エントリを正しい場所で手動で再作成する必要があります。

エントリを複製すると新しい空のエントリが挿入され、それらは事前設定された特性を持ちません。「複製」を作成したら、必要に応じて、上記の説明に従って設定してください。

ステップ 9 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

コミュニティリストを必要とする機能のために、ルートマップやルーティングプロセス（または FlexConfig オブジェクト）でオブジェクトを使用できるようになりました。

ポリシー リストの設定

ルートマップではポリシーリストを 1 つ以上の **match** 句の代わりに使用できます。そのため、再利用したい一連の **match** 句がある場合、ポリシーマップによって設定が簡素化され、各ルートマップで **match** 句を繰り返す必要がなくなります。BGP のポリシーリストを参照するルートマップを使用できます。

ルートマップ内には、ポリシーリストに加えて他の **match** 句を含めることができます。ポリシーリストの **match** 句は、着信属性でのみ照合されます。

ポリシーリストは IPv4 アドレスの照合のみをサポートします。IPv6 アドレスは照合できません。

ポリシーマップ内の **match** 句については、次のようになります。

- 複数の **match** 句は AND 演算されます。つまり、ルートがポリシーリストに一致するには、そのルートが各句を満たす必要があります。
- 1 つの **match** 句内の複数の値は OR 演算されます。つまり、ルートがある **match** 句内のいずれかの値と一致する場合、そのルートはその句と全体として一致すると見なされます。

始める前に

アクセスリスト、プレフィックスリスト、または AS パスアクセスリストに関する **match** 句を設定する場合は、ポリシーリストを作成する前にそれらのオブジェクトを作成する必要があります。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** コンテンツテーブルから [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- ステップ 3** 次のいずれかを実行します。
- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
 - オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。
- 参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。
- ステップ 4** [CLI テンプレート (CLI Template)] として [ポリシーリスト (Policy List)] を選択します。
- ステップ 5** スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、CLI テンプレートの最初の行 (**policy-list** コマンド内) のポリシーリスト名としても入力されることに注意してください。
- ステップ 6** **policy-list** コマンドで [action] をクリックし、次のいずれかを選択します。
- **permit** : 一致します。このリストに一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
 - **deny** : 一致しません。このリストに一致する接続は、この機能から除外されます。「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであることに注意してください。たとえば、ルートマップでは、このオブジェクトを使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。
- ステップ 7** テンプレートの上にある [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして **match** コマンドを表示します。有効にする **match** ステートメントの左側にある [+] アイコンをクリックする必要があります。次の **match** ステートメントの任意の組み合わせを設定して、ターゲットとするルートを定義します。
- **match as-path** : 変数をクリックし、照合する自律システム番号を定義する AS パスオブジェクトを選択します。
 - **configure match ip address list-type** : [list-type] 変数をクリックし、**access-list** または **prefix-list** に基づいてルートの IP アドレスを照合するかどうかを選択します。これにより **match ip address** コマンドが追加されます。このコマンドの変数をクリックし、照合する IP アドレスを定義する標準アクセスリストまたは IPv4 プレフィックスリストを選択することができます。
 - **configure match ip next-hop list-type** : [list-type] 変数をクリックし、**access-list** または **prefix-list** に基づいてルートのネクストホップルータの IP アドレスを照合するかどうかを選択します。これにより **match ip next-hop** コマンドが追加されます。このコマンドの変

数をクリックし、照合する IP アドレスを定義する標準アクセスリストまたは IPv4 プレフィックスリストを選択することができます。

- **configure match ip route-source** *list-type* : [list-type] 変数をクリックし、**access-list** または **prefix-list** に基づいてルートのルート送信元の IP アドレスを照合するかどうかを選択します。これにより **match ip route-source** コマンドが追加されます。このコマンドの変数をクリックし、照合する IP アドレスを定義する標準アクセスリストまたは IPv4 プレフィックスリストを選択することができます。
- **match community** *community-list options* : [community-list] 変数をクリックし、照合するコミュニティを定義するコミュニティ リスト オブジェクトを選択します。リスト内のすべてのコミュニティが一致した場合にのみルートをコミュニティリストと一致させる場合は、[options] をクリックし、**exact-match** を選択します。
- **match interface** : 変数をクリックし、照合するルート内のすべてのインターフェイスを選択します。
- **match metric** : 変数をクリックし、照合するルーティング Multi-Exit 識別子 (MED) メトリックを 1 ～ 4294967295 の範囲で入力します。
- **match tag** : 変数をクリックし、照合するルートタグ値を 0 ～ 4294967295 の範囲で入力します。

ステップ 8 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

BGP ルーティングで使用するためにオブジェクトをルートマップオブジェクトで使えるようになりました。

プレフィックス リストの設定

プレフィックスリストはアクセス制御リストと似ています。プレフィックスリストは、許可/拒否ルール of 順序付きリストです。ここで、「許可」はリストと一致する必要があるアドレスプレフィックスを示し、「拒否」はリストと一致してはならないアドレスプレフィックスを示します。システムは一致をトップダウン方式で評価し、必ずしも最も一致したルールに基づかず、最初に一致したルールに基づいてアクションを割り当てます。そのため、必要な一致を確実に得るには、シーケンス番号を慎重に指定する必要があります。

OSPF フィルタリングや BGP、OSPF、または EIGRP ルートマップのプレフィックスリストを使用して、ルートの再配布または注入、あるいは BGP ネイバーフィルタ処理を行うことができます。

IPv4 アドレス用と IPv6 アドレス用の個別のプレフィックスリストがありますが、リストの構造は同じです。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** コンテンツテーブルから [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- ステップ 3** 次のいずれかを実行します。
- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
 - オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。
- 参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。
- ステップ 4** [CLI テンプレート (CLI Template)] として [IPv4 プレフィックス リスト (IPv4 Prefix List)] または [IPv6 プレフィックス リスト (IPv6 Prefix List)] を選択します。
- ステップ 5** スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力します。この名前は、CLI テンプレートの最初の行 (**prefix-list** コマンド内) のプレフィックス リスト名としても入力されることに注意してください。
- ステップ 6** プレフィックス リスト エントリを設定します (**seq** コマンドライン)。
- 各エントリは、**seq** オプションで始まる単一の行に含まれます。
- a) **seq** で、[sequence-number] をクリックし、このルールを番号を 1 ～ 4294967294 の範囲で入力します。この番号は、他のルールのシーケンス番号に関連し、1 のルールが最初に評価されます。一般的な方法では、カウントを 5 ずつスキップします (つまり 5、10、15 など)。これにより、他のルールのシーケンス番号を変更することなく新しいルールを挿入する余地が残ります。
 - b) [action] をクリックし、次のいずれかを選択します。
 - **permit** : 一致します。このルールに一致する接続は、設定中の機能に関して選択されます。
 - **deny** : 一致しません。このルールに一致する接続は、この機能から除外されます。「拒否された」トラフィックはドロップされず、サービスが適用されないだけであることに注意してください。たとえば、ルートマップでは、このルートを使用して再配布されるルートを定義すると、「拒否された」アドレス空間が再配布されないだけです。
 - c) [ip-address-mask] をクリックし、ネットワークアドレスおよびマスク (IPv4 の場合 CIDR 形式) または IPv6 の場合はプレフィックス長を入力します。たとえば、10.100.10.0/24 (IPv4) または 2001:DB8:0:CD30::/60 (IPv6) と入力します。

ge オプションまたは **le** オプションのいずれかを含めないかぎり、システムは、このアドレス/マスクの完全一致を使用します。たとえば、ルールに **ge 9** を含めないかぎり、10.100.10.10/8 は 10.100.10.0/24 と一致しません。

マスクまたはプレフィックス長は次のように設定できます。

- IPv4 = 0 ～ 32
- IPv6 = 0 ～ 128

- d) (オプション)。 **ge** キーワードおよび **le** キーワードを使用して、IP アドレスおよびマスク/プレフィックス長よりも具体的なプレフィックスに対して一致するプレフィックス長の範囲を指定できます。これらのキーワードがないときは、完全一致の場合にのみルールに一致すると見なされます。

ge min-prefix-length では、照合する最小プレフィックス長を指定します。この最小値は、マスク/プレフィックス長より大きく、**le** オプションで定義されている最大値以下である（存在する場合）必要があります。

le max-prefix-length では、照合する最大プレフィックス長を指定します。この最大値は、最小値以上である（存在する場合）か、マスク/プレフィックス長より大きい（最小値が定義されていない場合）必要があります。

上記の相対的な長さの制限に加えて、これらのオプションの長さには、次の外的制限があります。

- IPv4 = 1 ～ 32
- IPv6 = 0 ～ 128

ステップ 7 エントリを追加してプレフィックスリストを完成させます。

エントリを追加するには、**[...] > [複製 (Duplicate)]** (**seq** 行の左横) をクリックします。[複製 (Duplicate)] コマンドをクリックしたエントリの直後に新しいエントリが追加されます。

便宜上、エントリを順番に保持することをお勧めします。ただし、オブジェクト内で混ざっていても、展開するとプレフィックスリストは順番に書き換えられます。

エントリを複製すると新しい空のエントリが挿入され、それらは事前設定された特性を持ちません。「複製」を作成したら、必要に応じて、上記の説明に従って設定してください。

ステップ 8 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

プレフィックスリストを必要とする機能のために、ルートマップやルーティングプロセス（または FlexConfig オブジェクト）でオブジェクトを使用できるようになりました。

例

以下に、プレフィックスリストを使用してプレフィックスを照合する方法の例を示します。分かりやすくするために例ではシーケンス番号を省いています。各ルールの実

実際の動作は、対象のアドレス空間のサブセットに一致するルールがそれよりも前にある場合は、それによって変更されます。

- デフォルトルート 0.0.0.0/0 を拒否する：

```
deny 0.0.0.0/0
```

- プレフィックス 10.0.0.0/8 を許可する：

```
permit 10.0.0.0/8
```

- プレフィックス 192/8 のルートで最大 24 ビットのマスク長を許可する：

```
permit 192.168.0.0/8 le 24
```

- プレフィックス 192/8 のルートで 25 ビットよりも大きいマスク長を拒否する：

```
deny 192.168.0.0/8 ge 25
```

- すべてのアドレス空間で 8 ～ 24 ビットのマスク長を許可する：

```
permit 0.0.0.0/0 ge 8 le 24
```

- すべてのアドレス空間で 25 ビットよりも大きいマスク長を拒否する：

```
deny 0.0.0.0/0 ge 25
```

- プレフィックス 10/8 のすべてのルートを拒否する：

```
deny 10.0.0.0/8 le 32
```

- プレフィックス 192.168.1/24 のルートで 25 ビットよりも大きいすべてのマスクを拒否する：

```
deny 192.168.1.0/24 ge 25
```

- プレフィックス 0/0 のすべてのルートを許可する：

```
permit 0.0.0.0/0 le 32
```




第 16 章

Open Shortest Path First (OSPF)

Open Shortest Path First (OSPF) は、リンクステート内部ゲートウェイプロトコルです。OSPF ルータは、リンクステート情報を隣接ルータにフラッディングし、OSPF エリア内のすべてのルータがネットワークトポロジを完全に把握できるようにします。

IPv4 ネットワークの場合は OSPFv2、IPv6 ネットワークの場合は OSPFv3 など、IP バージョンに基づいて、個別の OSPF バージョンがあります。これらのバージョンは独立していて、OSPFv3 は OSPFv2 に代わるものではありません。

Smart CLI オブジェクトを使用して OSPFv2 を設定し、デバイスを OSPFv2 ネットワーク トポロジに統合することができます。OSPFv3 は設定できません。

- [OSPFv2 のプロセスとエリアを設定する \(477 ページ\)](#)
- [OSPF プロセスとエリア特性のカスタマイズ \(480 ページ\)](#)
- [OSPFv2 インターフェイスの設定と OSPF 認証 \(495 ページ\)](#)
- [OSPF のモニタリング \(500 ページ\)](#)

OSPFv2 のプロセスとエリアを設定する

脅威に対する防御で最大 2 つの OSPFv2 プロセスを設定できます。プロセス番号は純粋に内部的なインジケータです。他のデバイスで使用されているプロセス番号と一致させる必要はありませんが、独自のトラッキングを目的として番号を一致させることもできます。

プライベートネットワークの番号 (192.168.1.0/24 など) を内部ネットワークに使用する場合は、プライベートアドレスをパブリックアドレスから分離し、これらの内部ネットワークに対して 1 つの OSPFv2 プロセスを使用し、外部の公的にアドレス可能なネットワークに対して 2 番目のプロセスを使用することが必要になる場合があります。プライベート番号を使用しない場合でも、1 つのプロセスを内部で実行し、別のプロセスを外部で実行して、2 つのプロセス間でルートのサブセットを再配布することができます。NAT を使用していて、OSPF がパブリックエリアおよびプライベートエリアで動作している場合、またアドレスフィルタリングが必要な場合は、2 つの OSPF プロセス (1 つはパブリックエリア用、1 つはプライベートエリア用) を実行する必要があります。

一方、エリア番号はネットワーク内に存在するため、他の隣接ルータで使用されているものと同じ番号を使用する必要があります。シングルエリアネットワークを設定する場合は、エリア

0（バックボーンエリアとも呼ばれる）を使用します。階層型ネットワーク設計の複数エリアネットワークの場合は、ネットワークで定義されたエリアを理解し、このデバイスをどのエリアに参加させるかを把握する必要があります。

仮想ルータを使用している場合は、仮想ルータごとに 2 つの OSPFv2 プロセスを作成できます。

次の手順で、1 つの OSPFv2 プロセスを作成する方法を説明します。2 番目のプロセスを作成するには、この手順を繰り返します。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。

- 新しいプロセスを作成するには、[+] > [OSPF] をクリックするか、[OSPF オブジェクトの作成 (Create OSPF Object)] > [OSPF] ボタンをクリックします。
- 編集するオブジェクトの横にある [編集 (edit)] アイコン () をクリックします。オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があります。これら行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

プロセスが不要になった場合は、オブジェクトの [ごみ箱 (Trash)] アイコンをクリックして削除します。

- ステップ 5** オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。
- ステップ 6** 基本的なプロセスのプロパティを設定します。

- **router ospf process-id** : *process-id* をクリックし、1 ~ 65535 の番号を入力します。この番号は、このデバイス内のみで意味を持つもので、他のルータで設定されているプロセス番号と一致している必要はありません。この番号は仮想ルータ内で一意である必要があります。
- **log-adj-changes log-state** : *log-state* をクリックし、次のいずれかのオプションを選択します。
 - **enable** (推奨) : OSPFv2 ネイバーがアップまたはダウンすると、システムは syslog メッセージを生成します。このオプションを選択すると、追加の **log-adj-changes log-type** 行がオブジェクトに追加されます。ネイバーが起動または停止した場合だけでなく、状態が変わるたびに syslog メッセージを送信したい場合、**log-type** をクリックして **detail** を選択します。

詳細なメッセージが表示されないようにするには、*log-type* をオプションのままにします。オブジェクトからこの行を削除しないでください。

- **disable** : syslog メッセージは生成されません。 **no log-adj-changes** 行がオブジェクトに追加されます。この行は削除しないでください。

ステップ 7 オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックして、その他のすべての設定行を追加します。

ステップ 8 エリア番号を設定します。

- a) **area area-id** 行の左にある [+] をクリックして、コマンドを有効にします。コマンドは有効にするまで設定できません。
- b) **area-id** をクリックし、エリアの番号を入力します。このエリア番号は、OSPFv2 エリアを定義する他のルータで使用されている番号と同じである必要があります。このエリア ID には、10 進数か IP アドレスを指定できます。有効な 10 進値の範囲は、0 ~ 4294967295 です。

ステップ 9 エリア内でルーティングする必要があるネットワークとインターフェイスを設定します。

- a) **configure area area-id options** 行の左にある [+] をクリックします。
- b) **area-id** をクリックし、**area** コマンドと同じエリア番号を入力します。
- c) **options** をクリックして、**properties** を選択します。このアクションにより複数の行が追加されます。これには、デフォルトで有効になっている行、**network** コマンドが含まれます。
- d) **network** コマンドで **network-object** をクリックし、この領域に含めるネットワークを定義するオブジェクトを選択します。通常、これは直接接続されたネットワークです。たとえば、内部インターフェイスの IP アドレスが 192.168.1.1/24 の場合、このコマンドに関連付けられているネットワークオブジェクトには 192.168.1.0/24 が含まれます。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックして、今すぐ作成します。
- e) (任意) **network** コマンドで **tag-interface** をクリックして、ネットワークにホストまたはルーティングするインターフェイスを選択します。このインターフェイスを選択すると、それがルーティングプロセスで使用されるため、インターフェイス上のアドレスを変更できなくなる場合があります。この場合、インターフェイスアドレッシングへの変更がルーティング設定に影響を与える可能性があることがわかります。

ここでインターフェイスを選択した場合は、インターフェイス上のアドレスを変更する前に、まずルーティングプロセスからインターフェイスを削除する必要があります。次に、IP アドレスを変更した後、忘れずにここに戻り、新しいネットワークとインターフェイスを選択して、ルーティングプロセスを正しく設定します。

- f) その他の新しいエリア行はすべてオプションで、デフォルトでは無効になっています。これらのサービスが必要な場合にのみ設定してください。詳細については、「[OSPF プロセスとエリア特性のカスタマイズ \(480 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 10 複数エリア ネットワークのプロセスを設定する場合は、**area** と **configure area** の行の丸で囲まれた [-] の左側の領域にカーソルを合わせ、[...] > [重複 (duplicate)] をクリックします。次に、前述のように、新しいエリアとそのネットワークを設定します。このルーティングプロセスが参加する必要があるすべてのエリアを定義するまで、このプロセスを繰り返します。

ステップ 11 [OK] をクリックします。

OSPF プロセスとエリア特性のカスタマイズ

OSPF には、デフォルト値を持つ多くのオプションが含まれています。これらの値は、多くのネットワークで適切に機能します。ただし、必要とする動作を正確に得るために、設定を1つ以上調整する必要がある場合があります。以降のトピックでは、OSPFv2 ルーティングプロセスをカスタマイズするためのさまざまな方法について説明します。

OSPF プロセスの詳細設定の構成

OSPFv2 プロセスの全体的な動作を制御する複数の設定を構成できます。これには、ディスタンスメトリック、タイマー、グレースフルリスタート、リンク ステート アドバタイズメントやその他のルーティングアップデートの送信に使用されるルータ ID などがあります。これらの設定の多くには、ほとんどのネットワークに適しているデフォルト設定があります。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン (🔍) をクリックします。
- ステップ 3 [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4 OSPF プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- ステップ 5 **setup ospf** 行を見つけます。

オブジェクトを追加する場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックして、この行を表示する必要があります。次に、コマンドの [+] をクリックして有効にし、**configuration** をクリックして、**advanced** を選択します。デフォルトで有効になっているコマンドは、デフォルト値を使用してすでに有効になっています。

オブジェクトを編集するときには、その行はすでに有効になっています。

この手順の残りの部分では、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしたことを前提としています。コマンドが表示されない場合は、無効なコマンドが表示されるようになっていることを確認してください。

- ステップ 6 (オプション) ルータ ID を設定します。

[+] をクリックして **router-id** コマンドを有効にし、変数をクリックして、このデバイスからルータアップデートを送信するときに使用する IPv4 アドレスを入力します。OSPF システム内

の2台のルータが同じルータ ID を持つことはできないため、ID がエリア内で一意であることを確認してください。

プロセスに対してルータ ID を明示的に指定しない場合、システムはアクティブインターフェイスに割り当てられている最も大きいIPアドレスを使用します。そのため、選択したインターフェイスを無効にするか、アドレスを変更すると、ルータ ID が変更される場合があります。ルータ ID を明示的に割り当てることにより、プロセスの一貫性を確保することができます。

ステップ 7 (オプション) サマリールートコストを計算する際に、RFC 1583 互換性を設定します。

[+] をクリックして **configure summary-route-cost** コマンドを有効にし、変数をクリックして、**any** (RFC 1583 互換性をオフにする)、または **rfc1583** (RFC 1583 互換性をオンにする) をクリックします。

OSPF オブジェクトではこのコマンドはデフォルトで有効になっていませんが、実際は RFC 1583 互換性が、サマリールートのコストを計算するときに使用されるデフォルトの方法となっています。定義された設定を CLI で確認すると、無効になっている設定のみが表示されます。

RFC 1583 の互換性が有効な場合、ルーティング ループが発生することがあります。ルーティング ループを防止するには、これを無効にします。RFC 1583 互換性は、OSPF ルーティング ドメイン内のすべての OSPF ルータで同じに設定するようにしてください。

ステップ 8 (オプション) マルチキャスト OSPF (MOSPF) リンク ステートアドバタイズメント (LSA) の syslog メッセージを抑制します。

[+] をクリックして、**ignore lsa mospf** コマンドを有効にします。

システムは、LSA タイプ 6 MOSPF パケットをサポートしていません。このコマンドを有効にすると、システムがこれらのパケットを受信したときに syslog メッセージが送信されないようにできるため、syslog サーバのノイズを削減できます。

ステップ 9 ディスタンスメトリックを設定します。

次の **distance** コマンドは、デフォルトで有効になっています。ルートのタイプに基づいて、OSPF ルートアドミニストレーティブディスタンスを変更できます。距離は 1 ~ 255 で、数値が高いほど信頼度が低下します。これらのメトリックは、異なるプロセスからの類似したルートと比較する際に、学習したルートの相対値を判断するために使用されます。

- **distance ospf inter-area 110** を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、あるエリアから別のエリアまでのすべてのルートの距離を設定します。
- **distance ospf intra-area 110** を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、エリア内のすべてのルートの距離を設定します。
- **distance ospf external 110** を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、再配布によって取得した他のルーティングドメインからのルートの距離を設定します。

ステップ 10 OSPF プロセスのルート計算タイマーを設定します。

次のタイマーコマンドは、これらのデフォルト値で有効になっています。

- **timers lsa arrival 1000**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、システムが OSPF ネイバーから同じリンク ステート アドバタイズメント (LSA) を受け入れる最小間隔を設定します (0 ~ 600000 ミリ秒)。このコマンドを使用して、ネイバーから着信する同じ LSA を受信する間に経過する必要がある最小間隔を指定します。この最小時間より前に着信した LSA は無視されます。
- **timers pacing flood 33**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、フラッディングキュー内の LSA がアップデートの合間にペーシング処理される時間を設定します (5 ~ 100 ミリ秒)。
- **timers pacing lsp-group 240**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、OSPF リンク ステート アドバタイズメント (LSA) を 1 つのグループに収集し、更新、チェックサム、または期限切れにする間隔を設定します (10 ~ 1800 秒)。
- **timers pacing retransmission 66**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、再送信キュー内の LSA がペーシング処理される時間間隔を設定します (5 ~ 200 ミリ秒)。OSPF パケットフラッディングの要件を満たす他のオプションをすべて使用した場合に限り、パケット再送信ペーシングタイマーを変更することが推奨されます。特に、デフォルトのフラッディングタイマーを変更する前に、集約、スタブエリアの使用方法、キューの調整、およびバッファの調整を設定してください。
- **timers throttle lsa 0 5000 5000**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、Open Shortest Path First (OSPF) のリンクステート アドバタイズメント (LSA) 生成に対するレート制限値を設定します。LSA および SPF スロットリングは、ネットワークが不安定になっている間に OSPF の LSA 更新頻度を低下させて、より高速な OSPF コンバージェンスを可能にするダイナミックメカニズムを提供します。値は次のとおりです。
 - [インターバル (開始) (Start Interval)] (最初の数値) : LSA の最初のオカレンスを生成する最小遅延 (1 ~ 600000 ミリ秒)。LSA の最初のインスタンスは、ローカル OSPF トポロジの変更直後に生成されます。次の LSA は、この開始インターバルの後にのみ生成されます。遅延なしで LSA が生成されるようにするには、0 を指定します。
 - [ホールド時間 (Hold Time)] (2 番目の数値) : LSA を再生成する最小遅延 (1 ~ 600000 ミリ秒)。この値は、LSA 生成の時間を制限する従属レートを計算するために使用されます。
 - [最大インターバル (Maximum Interval)] (3 番目の数値) : LSA を再生成する最大遅延 (1 ~ 600000 ミリ秒)。
- **timers throttle spf 5000 10000 10000**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、最短パス優先 (SPF) 生成のレート制限値を設定します。値は次のとおりです。
 - [インターバル (開始) (Start Interval)] (最初の数値) : SPF 計算の変更を受信するまでの遅延 (1 ~ 600000 ミリ秒)。
 - [ホールド時間 (Hold Time)] (2 番目の数値) : 1 回目の SPF 計算と 2 回目の SPF 計算の間の遅延 (1 ~ 600000 ミリ秒)。

- [最大インターバル (Maximum Interval)] (3 番目の数値) : SPF 計算の最大待機時間 (1 ~ 600000 ミリ秒)。

ステップ 11 (オプション) デフォルトの外部ルートを OSPF ルーティングドメインに生成します。

+ をクリックして、**default-information originate** コマンドを有効にします。次のコマンドを有効にして設定し、機能を微調整することができます (オプション)。

- **default-information originate always** を使用して無効にすることができます。デフォルトルートがない場合でも、常にデフォルトルートをアドバタイズします。
- **default-information originate metric 1 metric-type metric-type-value**。デフォルトルートを生成するためのメトリックのタイプと値。
 - **metric** の数値をクリックして、OSPF のデフォルトメトリック値を入力します (0 ~ 16777214)。別の値が必要であることがわかっている場合を除き、「10」と入力します。
 - **metric-type** の数値をクリックして、OSPF ルーティングドメインにアドバタイズされるデフォルトルートに関連付けられる外部リンクタイプを選択します (1 または 2)。デフォルトは 2 です。
- **default-information originate route-map route-map**。ルーティングプロセスを指定するルートマップを選択します。このルートマップが一致した場合、このルーティングプロセスによりデフォルトルートが生成されます。

ステップ 12 (オプション) デバイスが高可用性 (HA) 用に設定されている場合、Non-Stop Forwarding (NSF) グレースフルリスタートを設定します。

システムでは、既知の障害状況が発生することがあります。これにより、スイッチングプラットフォーム全体でパケット転送に影響を与えることがあってはなりません。Non-Stop Forwarding (NSF) 機能では、ルーティングプロトコル情報を復元している間に、既知のルートへのデータ転送が続行されます。この機能は、コンポーネントに障害が発生した場合 (たとえば、HA でアクティブ装置がスタンバイ装置にフェールオーバーした場合や、クラスタのプライマリユニットに障害が発生してセカンダリユニットが新しいプライマリとして選出された場合)、またはスケジュールされたヒットレス ソフトウェア アップグレードがある場合に役立ちます。

NSF Cisco (RFC 4811 および RFC 4812) または NSF IETF (RFC 3623) のいずれかを使用して、OSPFv2 上でグレースフル リスタートを設定できます。

デバイスは NSF 対応または NSF 認識として設定できます。NSF 対応デバイスは、ネイバーに対して独自のリスタート アクティビティを示すことができ、NSF 認識デバイスはネイバーのリスタートをサポートすることができます。

- デバイスは、動作中のモードに関係なく、NSF 認識として設定できます。
- デバイスを NSF 対応として設定するには、デバイスが高可用性 (フェールオーバー) であるかスパンド EtherChannel (L2) クラスタモードである必要があります。

(注)

グレースフルリスタートも設定する場合は、**fast hello** パケットを使用するように OSPF プロセスを設定しないでください。**fast hello** パケットを使用するとグレースフルリスタートは発生しません。これは、アクティブユニットとスタンバイユニット間のロール変更にかかる時間が、設定されている **dead** 間隔を超えるためです。

グレースフルリスタートを設定するには、次の手順を実行します。

- a) **+** をクリックして、**configure nsf graceful-restart** コマンドを有効にします。
- b) **mechanism** 変数をクリックして、次のいずれかを選択します。
 - **cisco** Cisco RFC 4811 および RFC 4812 に従って NSF 対応デバイスを設定します。
 - **ietf** IETF RFC 3623 に従って NSF 対応デバイスを設定します。
 - **both** NSF 対応デバイスではなく NSF 認識ヘルパーとしてデバイスを設定します。
 - **none** グレースフルリスタートを無効にします（事前に設定している場合）。
- c) 前の手順での選択内容により、仕様に従ってグレースフルリスタートを実装するために必要なコマンドが追加されます。これらのコマンドは無効にしないでください。必要に応じて詳細な設定が必要となるコマンドが 1 つだけあります。次に、追加されたコマンドの説明を示します。このコマンドの **no** 形式は、関連する機能をオフにします。
 - **nsf cisco helper** を使用して無効にすることができます。Cisco Nonstop Forwarding (NSF) ヘルパーモードを有効にします。NSF 対応 Threat Defense デバイスがグレースフルリスタートを実行しているときに、ヘルパー Threat Defense デバイスはそのノンストップフォワーディングの復帰プロセスを支援します。
 - **nsf ietf helper mode-option**。IETF ノンストップフォワーディング (NSF) ヘルパーモードを有効にします。NSF 対応 Threat Defense デバイスがグレースフルリスタートを実行しているときに、ヘルパー Threat Defense デバイスはそのノンストップフォワーディングの復帰プロセスを支援します。オプションで、**mode-option** をクリックして、厳密なリンクステートアドバタイズメント (LSA) チェックを有効にすることができます。厳密な LSA チェックを有効にすると、再起動しているシステムにフラグディングする可能性がある LSA の変更があることをヘルパーシステムが検出した場合、または、グレースフルリスタートプロセスが開始されたときに、再起動しているシステムの再送リスト内に変更された LSA がある場合、ヘルパーシステムは再起動しているシステムのプロセスの支援を終了します。
 - **capability lls** を使用して無効にすることができます。シスコ グレースフルリスタートに必要なリンクローカルシグナリング (LLS) を有効にします。
 - **capability opaque** を使用して無効にすることができます。IETF グレースフルリスタートに必要な Opaque リンクステートアドバタイズメント (LSA) を有効にします。

ステップ 13 [OK] をクリックします。

OSPF エリアプロパティの設定

複数の OSPF エリアパラメータを設定できます。エリア内でアドバタイズするネットワークに加えて、フィルタリングと仮想リンクを定義できます。さらに、これらのエリアパラメータには、認証の設定、スタブエリアの定義、デフォルトサマリールートへの特定のコストの割り当てがあります。認証では、エリアへの不正アクセスに対してパスワードベースで保護します。

エリアパラメータを設定する場合は、システムがエリア内でどのように機能するかを把握しておく必要があります。

複数のエリアにインターフェイスを持つルータは、エリア境界ルータ（ABR）と呼ばれます。ゲートウェイとして動作し、OSPF を使用しているルータと他のルーティングプロトコルを使用しているルータの間でトラフィックを再配布するルータは、自律システム境界ルータ（ASBR）と呼ばれます。

ABR はリンクステート アドバタイズメント（LSA）を使用して、使用可能なルータに関する情報を他の OSPF ルータに送信します。ABR タイプ 3 LSA フィルタリングを使用すると、ABR として機能するシステムを使用して、プライベートエリアとパブリックエリアを分けることができます。エリア間で Type 3 LSA（エリア間ルート）をフィルタリングできるため、プライベートネットワークをアドバタイズすることなく NAT と OSPF を併用できます。

手順

- ステップ 1 [デバイス（Device）] をクリックしてから、[ルーティング（Routing）] サマリーをクリックします。
- ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン（）をクリックします。
- ステップ 3 [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4 OSPF プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- ステップ 5 エリア番号を設定します。
 - a) **area area-id** 行の左にある [+] をクリックして、コマンドを有効にします。コマンドは有効にするまで設定できません。
 - b) **area-id** をクリックし、エリアの番号を入力します。このエリア番号は、OSPFv2 エリアを定義する他のルータで使用されている番号と同じである必要があります。このエリア ID には、10 進数か IP アドレスを指定できます。有効な 10 進値の範囲は、0 ～ 4294967295 です。
- ステップ 6 エリア内でルーティングする必要があるネットワークとインターフェイスを設定します。
 - a) **configure area area-id options** 行の左にある [+] をクリックします。
 - b) **area-id** をクリックし、**area** コマンドと同じエリア番号を入力します。
 - c) **options** をクリックして、**properties** を選択します。このアクションにより複数の行が追加されます。これには、デフォルトで有効になっている行、**network** コマンドが含まれます。
 - d) **network** コマンドで **network-object** をクリックし、この領域に含めるネットワークを定義するオブジェクトを選択します。通常、これは直接接続されたネットワークです。たとえ

ば、内部インターフェイスの IP アドレスが 192.168.1.1/24 の場合、このコマンドに関連付けられているネットワークオブジェクトには 192.168.1.0/24 が含まれます。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックして、今すぐ作成します。

- e) (任意) **network** コマンドで **tag-interface** をクリックして、ネットワークにホストまたはルーティングするインターフェイスを選択します。このインターフェイスを選択すると、それがルーティングプロセスで使用されるため、インターフェイス上のアドレスを変更できなくなる場合があります。この場合、インターフェイスアドレッシングへの変更がルーティング設定に影響を与える可能性があることがわかります。

ここでインターフェイスを選択した場合は、インターフェイス上のアドレスを変更する前に、まずルーティングプロセスからインターフェイスを削除する必要があります。次に、IP アドレスを変更した後、忘れずにここに戻り、新しいネットワークとインターフェイスを選択して、ルーティングプロセスを正しく設定します。

ステップ 7 (オプション)。スタブエリアまたは Not-So-Stubby Area (NSSA) に送信されるデフォルトサマリールートのコストを設定します。

このオプションは、次に説明するように、エリアをスタブまたは NSSA として設定した場合にのみ有効です。[+] をクリックして、エリアプロパティの次のコマンドを有効にします。

area area-id default-cost 1

必要に応じて、正しいエリア ID を入力します。次に、番号をクリックして、ルートの相対コストを 0 ~ 16777214 の範囲で入力します。デフォルトは 1 です。数値が大きいほど、宛先に適用される別のルートでルートが使用される可能性が低くなります。

ステップ 8 (オプション)。エリアのプレフィックスフィルタリングを設定します。

エリアボーダールータ (ABR) の OSPFv2 エリア間のタイプ 3 リンクステートアドバタイズメント (LSA) でアドバタイズされたプレフィックスをフィルタ処理することができます。プレフィックスのフィルタリングによって、OSPF エリア間のルート再配布の制御が向上します。プレフィックスのフィルタリングでは、指定したプレフィックスだけが 1 つのエリアから別のエリアに送信され、その他のプレフィックスはすべて制限されます。このタイプのエリアフィルタリングは、特定の OSPF エリアから、特定の OSPF エリアに、または同じ OSPF エリアに同時に適用できます。

このコマンドを設定する前に、[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページで、スマート CLI オブジェクトであるプレフィックスリストを作成する必要があります。インバウンドまたはアウトバウンドアドバタイズメントに対して個別のプレフィックスリストを設定できます。フィルタ方向パラメータの方向を選択します。

area area-id filter-list prefix prefix-list filter-direction

ステップ 9 (オプション)。エリアをスタブエリアとして設定します。

スタブエリアは、外部ルートの情報が送信されないエリアです。その代わりに、ABR で生成されるデフォルトの外部ルートがあり、このルートは自律システムの外部の宛先としてスタブエリアに送信されます。適切に動作させるには、スタブエリアでデフォルトルーティングを使用する必要があります。スタブエリアに送信される LSA の数をさらに減らすには、ABR で実

行する **area stub** コマンドに **no-summary** キーワードを設定して、スタブエリアにサマリーリンク アドバタイズメント (LSA タイプ 3) が送信されないようにします。

エリアをスタブとして設定するには、以下を実行します。

- a) **[setup area-id as type]** 行の左にある **[+]** をクリックします。
- b) **[type]** をクリックし、**stub** を選択します。これにより、セットアップ行の後に **area stub** コマンドが追加されます。
- c) オプションで、**area stub** コマンドで **[stub-parameters]** をクリックし、**no-summary** を選択します。

ステップ 10 (オプション) 。エリアを Not-So-Stubby Area (NSSA) に設定します。

Not-So-Stubby Area (NSSA) はスタブエリアに似ています。NSSA は、タイプ 5 の外部 LSA をコアからエリアにフラッドिंगすることはありませんが、自律システムの外部ルートのある限られた方法でエリア内にインポートできます。

NSSA は、再配布によって、タイプ 7 の自律システムの外部ルートを NSSA エリア内部にインポートします。これらのタイプ 7 の LSA は、NSSA のエリア境界ルータ (ABR) によってタイプ 5 の LSA に変換され、ルーティングドメイン全体にフラッドिंगされます。変換中は集約とフィルタリングがサポートされます。

OSPF を使用する中央サイトから異なるルーティングプロトコルを使用するリモートサイトに接続しなければならない ISP またはネットワーク管理者は、接続エリアに NSSA を利用することによって管理を簡略化できます。スタブエリアにはリモートサイトのルートが再配布されないため、企業サイトの境界ルータとリモートルータ間の接続に OSPFv2 スタブエリアを利用できず、2 つのルーティングプロトコルを維持する必要がありました。RIP のようなシンプルなプロトコルを実行して再配布を処理する方法が一般的でした。NSSA が実装されたことで、企業ルータとリモートルータ間のエリアを NSSA として定義することにより、NSSA で OSPFv2 を拡張してリモート接続をカバーできます。

この機能を使用する前に、次のガイドラインを参考にしてください。

- 外部の宛先に到達するために使用可能なタイプ 7 のデフォルトルートを設定できます。設定すると、NSSA または NSSA エリア境界ルータまでのタイプ 7 のデフォルトがルータによって生成されます。
- 同じエリア内のすべてのルータは、エリアが NSSA であることを認識する必要があります。そうでない場合、ルータは互いに通信できません。

エリアを NSSA として設定するには、以下を実行します。

- a) **setup [area-id] as [type]** 行の左にある **[+]** をクリックします。
- b) **[type]** をクリックし、**nssa** を選択します。これにより、**setup** 行の後に、**area nssa** コマンドを含む複数のコマンドが追加されます。このコマンドはイネーブルのままにする必要があります。
- c) (オプション) 。NSSA にタイプ 7 のデフォルトルートを生成するには、**[+]** をクリックして次のコマンドを有効にします。

area area-id nssa default-information-originate metric 1 metric-type 2

オプションで、次の値を調整できます。

- **metric** の数値をクリックして、OSPF のデフォルトメトリック値を入力します (0 ～ 16777214)。別の値が必要であることがわかっている場合を除き、「10」と入力します。
- **metric-type** の数値をクリックして、OSPF ルーティングドメインにアドバタイズされるデフォルトルートに関連付けられる外部リンクタイプを選択します (1 または 2)。デフォルトは 2 です。

- d) (オプション)。システムが ABR であり、他のルーティングプロトコルから再配布して、NSSA ではなく通常のエリアにのみルートをインポートする場合は、[+] をクリックして次のコマンドを有効にします。

area area-id nssa no-redistribution

- e) (オプション)。サマリールートを NSSA に挿入しない場合は、[+] をクリックして次のコマンドを有効にします。

area area-id nssa no-summary

ステップ 11 (オプション)。エリアの仮想リンクを設定します。

OSPF では、すべてのエリアがバックボーンエリアに接続されている必要があります。バックボーンへの接続が失われた場合は、仮想リンクを確立して修復できます。バックボーンエリアに接続されているルータへの仮想リンクを設定できます。

- a) **configure area [area-id] virtual-link [ip_address option]** 行の左にある [+] をクリックします。
- b) [ip_address] をクリックして、仮想リンクを確立するルータのルータ ID を入力します。
- c) (オプション)。**[option]** をクリックして **properties** を選択し、次の属性を調整します。これらの属性はすべて、ほとんどのネットワークに適したデフォルト値になっています。これらのコマンドの最初の部分は、同じコマンドのパラメータであるため、省略されています。
 - **authentication auth-type**。[+] をクリックしてコマンドを有効にし、[auth-type] をクリックして **none**、**password**、または **message-digest** を選択します。[none] 以外の項目を選択した場合は、キーオプションを設定します。このオプションは、[OSPFv2 インターフェイスの設定と OSPF 認証 \(495 ページ\)](#) で説明されているように、OSPF インターフェイスで設定するものと同じです。他のルータが認証を使用している場合にのみ、認証を設定します。
 - **hello-interval 10**：番号をクリックし、インターフェイスで送信される hello パケットの間隔を 1 ～ 65535 秒の範囲で入力します。
 - **retransmit-interval 5**：番号をクリックし、仮想リンクの LSA 再送信間の時間を 1 ～ 65535 秒の範囲で入力します。
 - **transmit-delay 1**：番号をクリックし、OSPF がトポロジ変更を受信してから最短パス優先 (SPF) 計算を開始するまでの遅延時間を 0 ～ 65535 秒の範囲で入力します。

- d) 別の仮想リンクを定義するには、[...] > [重複 (Duplicate)] (configure area virtual-link コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 12 (オプション)。システムがエリア境界ルータ (ABR) の場合は、エリアのルートを統合または集約するための範囲を設定します。

area range コマンドを設定すると、その結果、1つの集約ルートが ABR によって他のエリアにアドバタイズされます。ルーティング情報は、エリア境界でまとめられます。エリアの外部では、アドレス範囲ごとに1つのルートがアドバタイズされます。この動作は、「経路集約」と呼ばれます。1つのエリアに複数の **area range** コマンドを設定できます。このように、OSPF は多くの異なるアドレス範囲セットのアドレスを集約できます。

ルート集約を設定するには、以下を実行します。

- a) **area [area-id] range [network-object range-parameters]** 行の左側にある [+] をクリックします。
- b) [network-object] をクリックし、集約するルートのアドレス範囲を定義するネットワークオブジェクトを選択します。
- c) (オプション)。[range-parameters] をクリックし、次のいずれかの属性を選択します。
- **advertise** : アドバタイズするアドレス範囲ステータスを設定し、タイプ 3 サマリー リンクステートアドバタイズメント (LSA) を生成します。これは、[no] オプションを選択した場合のデフォルトです。
 - **not-advertise** : アドレス範囲ステータスを DoNotAdvertise に設定します。Type 3 サマリー LSA は抑制され、コンポーネント ネットワークは他のネットワークから隠された状態のままです。
- d) 別のルート集約を定義するには、[...] > [重複 (Duplicate)] (**area range** コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 13 マルチエリアネットワークのプロセスを設定する場合は、**area** と **configure area** の行の丸で囲まれた [-] の左側の領域にカーソルを合わせ、[...] > [重複 (Duplicate)] をクリックします。次に、前述のように、新しいエリアとそのネットワークを設定します。このルーティングプロセスが参加する必要があるすべてのエリアを定義するまで、このプロセスを繰り返します。

ステップ 14 [OK] をクリックします。

スタティック OSPF ネイバーの設定

ポイントツーポイントの非ブロードキャスト ネットワーク、つまり、VPN トンネルを介して OSPF ルートをアドバタイズするには、スタティック OSPF ネイバーを定義する必要があります。

通常のブロードキャストネットワークのルータは隣接関係を形成できるため、それらのネットワーク上にあるスタティックネイバーを定義する必要はありません。

始める前に

システムがネイバーに到達するために使用するインターフェイスを決定します。ネイバールータを定義する前に、このインターフェイスの OSPF 設定を設定する必要があります。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4** OSPF インターフェイス オブジェクトを追加または編集し、選択したインターフェイスに対して **ospf network point-to-point non-broadcast** コマンドを有効にします。変更を保存します。
- ステップ 5** OSPF プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- ステップ 6** [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **neighbor** コマンドを有効にします。
- ステップ 7** ネイバーアドレスを設定します。
- neighbor ip-address interface interface**
- [ip-address] をクリックし、ネイバールータの IP アドレスを入力します。
 - [interface] をクリックして、システムがルータに到達するために使用するインターフェイスを選択します。
- ステップ 8** 必要に応じて、ネイバールータのスタティックルートを設定します。
- ルータの IP アドレスが、選択したインターフェイスと同じネットワーク上にある場合、スタティックルートは必要ありません。たとえば、IP アドレスが 10.100.10.1/24 であるインターフェイスを選択し、ネイバーアドレスが 10.100.10.2/24 の場合、スタティックルートは必要ありません。
- ステップ 9** 別のスタティックネイバーを定義するには、[...] > [重複 (Duplicate)] (**neighbor** コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。
- ステップ 10** [OK] をクリックします。
-

OSPF サマリーアドレスの設定

他のプロトコルからのルートを OSPF に再配布する場合、各ルートは外部 LSA で個別にアドバタイズされます。ただし、再配布されるルートのうち、指定のネットワークアドレスとマスクに含まれるすべてのものを 1 つのルートで表し、そのルートだけをアドバタイズするようにシステムを設定することができます。この設定によって OSPF リンクステートデータベースの

サイズが小さくなります。指定した IP アドレスマスクペアと一致するルートは廃止できます。ルートマップで再配布を制御するために、タグ値を一致値として使用できます。

ルート集約は、アドバタイズされるアドレスを統合することです。他のルーティングプロトコルから学習したルートを集約できます。サマリーのアドバタイズに使用されるメトリックは、具体的なルートすべての中で最小のメトリックです。サマリー ルートは、ルーティング テーブルのサイズを削減するのに役立ちます。

OSPF のサマリー ルートを使用すると、OSPF ASBR は、そのアドレスでカバーされるすべての再配布ルートの集約として、1 つの外部ルートをアドバタイズします。OSPF に再配布されている、他のルーティング プロトコルからのルートだけをサマライズできます。

始める前に

集約するすべてのアドレスのネットワークオブジェクトを作成します。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3 [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4 OSPF プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- ステップ 5 [Show Disabled] をクリックしてすべてのコマンドを公開し、[+] をクリックして **configure network-object as option summary-address** コマンドを有効にします。
- ステップ 6 [network-object] をクリックし、集約するアドレス空間を定義するオブジェクトを選択します。
- ステップ 7 [options] をクリックし、次のいずれかを選択します。
 - **advertising** : アドレスに一致するルートをアドバタイズします。
 - **non-advertising** : アドレスに一致するルートを抑制します。
- ステップ 8 (オプション)。集約されたルートにタグ値を追加するには、[+] をクリックして **summary-address tag** コマンドを有効にし、[tag-number] 変数をクリックして、タグ番号 (0 ~ 4294967295) を入力します。

この値は OSPF 自体には使用されません。自律システム境界ルータ (ASBR) 間で情報を通信するために使用できます。何も指定しない場合、BGP および EGP からのルートにはリモート自律システムの番号が使用され、その他のプロトコルには 0 が使用されます。

タグ値を使用する主な理由は、タグ番号に基づいて再配布を制御することです。再配布ルートマップでタグ値を使用しない場合は、ここで設定する必要はありません。
- ステップ 9 別のルート集約を定義するには、[...] > [重複 (Duplicate)] (**configure summary-address** コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

OSPF フィルタルールの設定

各フィルタルールに必要なスマート CLI 標準アクセスリストオブジェクトを作成します。拒否アクセス制御エントリ（ACE）を使用してエントリに一致するルートを除外し、更新する必要があるルートの ACE を許可します。

始める前に

エリア境界ルータ（ABR）タイプ 3 LSA フィルタを設定すると、指定したプレフィックスだけが 1 つのエリアから別のエリアに送信され、その他のプレフィックスはすべて制限されます。このタイプのエリアフィルタリングは、特定の OSPF エリアから、特定の OSPF エリアへ、または同じ OSPF エリアへ同時に適用できます。OSPF ABR タイプ 3 LSA フィルタリングによって、OSPF エリア間のルート再配布の制御が向上します。

手順

- ステップ 1 [デバイス（Device）] をクリックしてから、[ルーティング（Routing）] サマリーをクリックします。
- ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン（）をクリックします。
- ステップ 3 [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4 OSPF プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- ステップ 5 [無効を表示（Show Disabled）] をクリックしてすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **configure filter-rules direction** コマンドを有効にします。
- ステップ 6 [direction] をクリックし、**in**（インバウンドアップデートをフィルタ処理する場合）または **out**（アウトバウンドアップデートをフィルタ処理する場合）を選択します。
- ステップ 7 インバウンドフィルタの場合は、必要に応じて、アップデートをフィルタ処理するインターフェイスを指定できます。インターフェイスを指定しない場合、フィルタは任意のインターフェイスで受信されるすべてのアップデートに適用されます。
 - a) [+] をクリックして **distribute-list acl-name in interface interface** コマンドを有効にします。
 - b) [interface] 変数をクリックし、インターフェイスを選択します。
- ステップ 8 アウトバウンドフィルタの場合は、必要に応じて、プロトコルを指定して、そのルーティングプロセスにアドバタイズされたルートにフィルタを制限できます。

distribute-list out コマンドには 2 つの形式があります。一方には [protocol] 変数の後に [identifier] 識別子があり、もう一方には [identifier] 識別子がありません。次のプロトコルを選択できますが、追加の識別子情報を提供する必要があるかどうかに基づいて、これらのコマンドのバージョン間でプロトコルが分けられます。

- **connected** : システムのインターフェイスに直接接続されているネットワークに対して確立されたルート用です。
- **static** : 手動で作成したスタティックルート用です。
- **rip** : RIP にアドバタイズされたルート用です。
- **bgp autonomous-system** : BGP にアドバタイズされたルート用です。[identifier] をクリックし、システムで定義されている BGP プロセスの自律システム番号を入力します。
- **eigrp autonomous-system** : EIGRP にアドバタイズされたルート用です。[identifier] をクリックし、システムで定義されている EIGRP プロセスの自律システム番号を入力します。
- **ospf process-id** : OSPF にアドバタイズされたルート用です。[Identifier] をクリックし、システムで定義されている他の OSPF プロセスのプロセス ID を入力します。

ステップ 9 別のフィルタルールを定義するには、[...]>[重複 (Duplicate)] (configure filter-rules コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

OSPF 再配布の設定

他のルーティングプロトコル、接続されたルート、およびスタティックルートからの OSPF プロセスへのルートの再配布を制御できます。

始める前に

OSPF への再配布を設定する前に、ルートを再配布するルーティングプロセスを設定し、変更を展開することがベストプラクティスです。

ルートマップを適用して、再配布されるルートを微調整する場合は、Smart CLI ルートマップオブジェクトを作成します。ルートマップに一致するルートが再配布され、一致しないルートはすべて再配布されません。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4** OSPF プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- ステップ 5** [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **configure redistribution** コマンドを有効にします。

ステップ 6 [protocol] 変数をクリックし、ルートの再配布元となる送信元プロセスを選択します。connected および static のルート、あるいは bgp、eigrp、isis、ospf、または rip のいずれかによって生成されたルートを再配布できます。

ステップ 7 ルーティングプロセスを選択した場合は、[identifier] 変数をクリックして、必要な値を入力します。

- **bgp、eigrp。** 自律システムの番号を入力します。
- **ospf。** プロセス ID 番号を入力します。
- **connected、static、isis、rip、none** を入力します。別の値を入力しても、無視されます。

ステップ 8 (任意: IS のみ)。redistribute isis level-2 コマンドで、level-2 をクリックして、IS-IS エリア (level-1) 内でのみ学習したルートを再配布するか、IS-IS エリア (level-2) 間、または両方 (level-1-2) で再配布するかを選択します。

ステップ 9 (任意: すべてのプロトコル)。再配布を制御するためにタグをルートに適用する場合は、[+] をクリックして redistribute tag tag-number コマンドを有効にし、変数をクリックして、再配布するルートに関連付けられているタグを入力します。タグ番号の範囲は 0 ~ 4294967295 です。

ステップ 10 (任意: すべてのプロトコル)。標準クラスに準拠するものだけでなく、すべてのサブネットのルートを再配布する場合は、[+] をクリックして redistribute subnets コマンドを有効にします。

たとえば、このコマンドを有効にしない場合、10.100.10.0/24 の特定のルートは再配布されず、代わりに、10.0.0.0/8 のルートのみが再配布されます。

ステップ 11 (任意: すべてのプロトコル)。ルートマップに基づいて再配布されるルートを微調整するには、[+] をクリックして redistribute route-map コマンドを有効にし、変数をクリックして、制限を定義するルートマップを選択します。

ルートマップを適用しない場合は、(再配布用に設定された他のコマンドに適合する) プロセスのすべてのルートが再配布されます。

ステップ 12 (任意: すべてのプロトコル)。再配布されたルートのメトリックを微調整するには、[+] をクリックして次のコマンドを有効にし、オプションを設定します。

redistribute protocol metric metric-value metric-type metric-type-value

変数をクリックして、次のように設定します。

- **metric。** 配布されているルートのメトリック値 (0 ~ 16777214)。同じデバイス上で 1 つの OSPF プロセスから別の OSPF プロセスに再配布する場合、メトリック値を指定しないと、メトリックは 1 つのプロセスから他のプロセスに渡されます。他のプロセスを OSPF プロセスに再配布する場合、デフォルトのメトリックは 20 です。
- **metric-type。** メトリックタイプは、OSPF ルーティングドメインにアドバタイズされるデフォルトルートに関連付けられた外部リンクタイプです。使用可能なオプションは、タイプ 1 外部ルートの場合は 1、タイプ 2 外部ルートの場合は 2 です。デフォルトは 2 です。

ステップ 13 (任意: OSPF のみ)。別の OSPF プロセスからルートを再配布する場合、次のコマンドはデフォルトで有効になっています。[-] をクリックして、不要なコマンドを無効化できます。

これらのコマンドで、OSPF ルートを他のルーティングドメインに再配布する条件を指定します。

- **redistribute ospf match external 1**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 1 外部ルートとしてインポートされるルート。
- **redistribute ospf match external 2**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 2 外部ルートとしてインポートされるルート。
- **redistribute ospf match internal**。特定の自律システムの内部ルート。
- **redistribute ospf match nssa-external 1**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 1 外部ルートとしてインポートされ、Not-So-Stubby-Area (NSSA) 専用としてマークされるルート。
- **redistribute ospf match nssa-external 2**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 2 外部ルートとしてインポートされ、Not-So-Stubby-Area (NSSA) 専用としてマークされるルート。

ステップ 14 ... > [重複 (Duplicate)] (configure redistribution コマンドの横) をクリックして、別のプロトコルの再配布を設定できます。ネットワークに適したプロトコルごとの再配布を設定します。

ステップ 15 [OK] をクリックします。

OSPFv2 インターフェイスの設定と OSPF 認証

ネイバー OSPF ルータに面しているインターフェイスは、hello パケットなどの方法を用いてルータと通信して、ネイバーの正常性を確認し、ルーティングの更新を共有します。これらの特性の一部にはデフォルト設定がありますが、ベストプラクティスは、OSPF インターフェイス設定オブジェクトを使用してオプションを明示的に設定する方法です。OSPF ネイバールータに隣接する各インターフェイスのオブジェクトを作成します。



(注) ネットワーク上のルータは、認証および失われたネイバー検出の hello と dead 間隔で同じ値を持つ必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。

ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、OSPF を設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。

ステップ 3 [OSPF] タブをクリックします。

ステップ 4 次のいずれかを実行します。

- 新しいオブジェクトを作成するには、[+] > [OSPF インターフェイス設定 (OSPF Interface Settings)] をクリックするか、または [OSPF オブジェクトの作成 (Create OSPF Object)] > [OSPF インターフェイス設定 (OSPF Interface Settings)] ボタンをクリックします。
- 編集するオブジェクトの横にある [編集 (edit)] アイコン () をクリックします。オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

インターフェイス設定オブジェクトが不要になった場合は、オブジェクトのごみ箱アイコンをクリックして削除します。

ステップ 5 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。

ステップ 6 インターフェイスの認証を設定します。

configure authentication auth-type

OSPF 認証を設定するには、各 OSPF インターフェイスでパスワードまたは認証キーを設定してから、そのエリア自体で認証を有効にする必要があります。インターフェイスとエリアで同じ認証方式を選択する必要があります。

[認証タイプ (auth-type)] をクリックして、次のオプションを選択できます。

- **none** : OSPF 認証を使用しない。リンクで動作するすべての OSPF ルータは、このルータとの隣接関係を確立できます。オブジェクトにコマンド **ospf authentication null** が追加されます。
- **password** : 共有パスワードを使用して OSPF 接続を認証する。インターフェイス単位で各ネットワークに個別のパスワードを設定できます。とはいえ、OSPF 情報を交換するには、同じネットワーク上のすべての隣接ルータに同じパスワードを設定する必要があります。

このオプションを選択すると、2 つのコマンド (**ospf authentication** および **ospf authentication-key key**) が追加されます。変数をクリックして、次のように設定します。

- **key** : パスワードが格納されている秘密鍵オブジェクトを選択します。パスワードは最大 8 文字です。2 文字間に空白を含めることができます。パスワードの先頭または末尾の空白は無視されます。オブジェクトがまだ存在しない場合、リストの下部にある [新しい秘密鍵の作成 (Create New Secret Key)] をクリックして作成します。
- **message-digest** : メッセージダイジェスト (MD5) を使用して OSPF 接続を認証します。MD5 認証は、通信の整合性を検証し、発信元を認証し、適時性をチェックします。両方のルータで同じ MD5 キーが使用されるように設定する必要があります。

このオプションを選択すると、2つのコマンド (**ospf authentication message-digest** および **ospf message-digest-key key-id md5 key**) が追加されます。変数をクリックして、次のように設定します。

- **key-id** : 1 ~ 255 の認証キー ID 番号。同じキー ID および関連付けられた MD5 キーを使用して、ネイバールータを設定する必要があります。
- **key** : MD5 キーが格納されている秘密鍵オブジェクトを選択します。キーは最大 16 文字の英数字のパスワードです。文字間にスペースを含めることができます。キーの先頭または末尾のスペースは無視されます。オブジェクトがまだ存在しない場合、リストの下部にある [新しい秘密鍵の作成 (Create New Secret Key)] をクリックして作成します。

ステップ 7 (任意) リンクステート アドバタイズメント (LSA) タイマーを設定します。

これらのタイマーにはデフォルト値があるため、ネットワークで別の設定が必要な場合にのみ変更する必要があります。次のコマンドを設定します。

- **ospf retransmit interval 5** : OSPF インターフェイスに属する隣接ルータに LSA を再送信する間隔の秒数。接続ネットワーク上の任意の 2 台のルータ間で想定される往復遅延より大きな秒数にする必要があります。範囲は 1~8192 秒です。デフォルト値は 5 秒です。5 をクリックし、新しい数値を入力して値を変更します。
- **ospf transmit-delay 1** : OSPF インターフェイスでリンクステートアップデートパケットを送信するために必要な推定秒数 (1 ~ 8192 秒)。デフォルト値は 1 秒です。1 をクリックし、新しい数値を入力して値を変更します。

ステップ 8 (任意) 他のすべての設定は、デフォルト値が設定されているか、オプションです。別の動作が必要な場合にのみ、それらを変更するか有効にします。オプションを表示するには、[無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックします。

次に、付加的なインターフェイス設定を示します。設定を有効にするには、コマンドの左側にある [+] をクリックして、コマンドを設定します (必要な場合)。

- **ospf cost value** : OSPF インターフェイスでパケットを送信するコスト (リンクステートメトリック) (1 ~ 65535)。値 1 は、インターフェイスに直接接続されているネットワークを表します。変数をクリックし、ネットワークで使用している番号に基づいてインターフェイスの性能を表すコストを入力します。

値を決定する際、インターフェイスの帯域幅が大きいほど、そのインターフェイスでパケットを送信するための関連コストが低くなります。つまり、コストの値が大きければインターフェイス帯域幅が小さく、コストの値が小さければインターフェイス帯域幅が大きいということになります。選択した特定の数値には固有の意味はありません。この値は、OSPF エリア全体でインターフェイスに設定したその他の値に相対的なものです。これらの値は、接続先への最適ルートの計算に影響します。

脅威に対する防御 デバイスでの OSPF インターフェイスのデフォルトのコストは 10 です。このデフォルトは、Cisco IOS ソフトウェアとは異なります。Cisco IOS ソフトウェアの場合、デフォルトのコストはファストイーサネットおよびギガビットイーサネットでは

1、10BaseT では 10 です。ネットワークで ECMP を使用している場合には、このことを考慮に入れることが重要です。

- **ospf database-filter all out** : 同期およびフラッディング中の OSPF インターフェイスへのすべての発信 LSA をフィルタで除外します。
- **ospf mtu-ignore** : 受信データベースパケットの OSPF 最大伝送ユニット (MTU) 不一致検出を無効にします。OSPF は、ネイバーが共通インターフェイスで同じ MTU を使用しているかどうかをチェックします。このチェックは、ネイバーがデータベース記述子 (DBD) パケットを交換するときに実行されます。DBD パケット内の受信 MTU が着信インターフェイスに設定されている MTU より高い場合、OSPF の隣接性は確立されません。インターフェイス上の MTU 値を同じ値に修正できない場合は、MTU チェックを無効にすることができます。
- **ospf network point-to-point non-broadcast** : OSPF インターフェイスをポイントツーポイントの非ブロードキャストネットワークとして設定します。この設定により、VPN トンネルを介して OSPF ルートを送信できるようになります。このオプションを設定すると、ネイバーを動的に検出できなくなります。次の手順の実行も必要です。
 - このインターフェイスに対して 1 つのスタティックネイバーを定義するには、OSPF プロセスオブジェクトを更新します。また、ネイバールータの OSPF プロセスを更新して、このデバイスをスタティックネイバーとして定義します。
 - ネイバールータを指すスタティックルート (各ルータ上) を作成します。
- **ospf priority value** : ネットワーク内の他のルータと相対的なルータのプライオリティ (0 ~ 255)。デフォルトのプライオリティは 1 です。ネットワークにアタッチされている 2 つのルータがともに指定ルータになろうとした場合、ルータのプライオリティの高い方が優先されます。プライオリティが同じ場合、より高位のルータ ID を持つルータが優先されます。ルータのプライオリティがゼロに設定されているルータには、指定ルータまたはバックアップ指定ルータになる資格がありません。変数をクリックし、ネットワークで使用する相対的な番号付け方式に基づいて優先順位を選択します。
- **ospf lost-neighbor-detection detection-mechanism** : ネイバールータがダウンしているかどうかをシステムがどのように判断するかを定義します。OSPF は、OSPF ルータがダウンしていると宣言されるたびにルートを再計算する必要があります。失われたネイバー検出の設定の詳細については、[OSPFv2 の失われたネイバー検出と Fast Hello パケットの設定 \(OSPF インターフェイス設定\)](#) (499 ページ) を参照してください。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

OSPFv2 の失われたネイバー検出と Fast Hello パケットの設定（OSPF インターフェイス設定）

OSPF プロセスは定期的に各ネイバルーターに hello パケットを送信し、ネイバーが応答できることを確認します。応答の継続的な失敗は、ネイバルーター（全インターフェイスまたは隣接するインターフェイスのみ）がルーティングに使用できないことを示し、OSPF はルートを再計算する必要がある、OSPF システムは更新されたルーティングテーブルへのコンバージェンスが必要となります。

次の値を調整して、ネットワークを微調整できます。理想的には、ネイバーがダウンしていると宣言され、ルートが再計算される頻度を最小限に抑える必要があります。一方、OSPF ルーター（またはインターフェイス）が実際にダウンしたときに、ネットワークが適切なルーティングテーブルに再コンバージェンスするのにかかる時間を最小限に抑える必要もあります。

- **[hello 間隔（Hello interval）]** : hello パケットを送信する時間の間隔です。デフォルトは 10 秒ごとです。必要に応じて、hello が 1 秒未満の間隔で送信される **fast hello** パケットを設定できます。fast hello パケットを使用すると、ダウンしているネイバーの検出と、ルーティングテーブルの再コンバージェンスが最速になります。
- **[dead 間隔（Dead interval）]** : ネイバーから hello パケットが検出されなかった場合に、ネイバーが dead と宣言されるまでの時間の長さ。デフォルトは 40 秒（デフォルトの hello 間隔の 4 倍）です。ただし、fast hello パケットを使用している場合を除きます（この場合 dead 間隔は常に 1 秒）。小さい dead 間隔を指定すると、ダウンしているネイバーの検出が速くなり、コンバージェンスが向上しますが、ルーティングが不安定になる可能性があります。どのような場合でも、dead 間隔は hello 間隔よりも大きい値に設定する必要があります。ネットワーク内のすべての OSPF ルーターで同じ dead 間隔を設定する必要があります。

[OSPF インターフェイス設定（OSPF Interface Settings）] オブジェクトで、[失われたネイバー検出（lost neighbor detection）] を設定します。

手順

- ステップ 1** [デバイス（Device）] をクリックしてから、[ルーティング（Routing）] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルーターを有効にした場合は、OSPF を設定しているルーターの表示アイコン（）をクリックします。
- ステップ 3** [OSPF] タブをクリックします。
- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。
 - 新しいオブジェクトを作成するには、**[+] > [OSPF インターフェイス設定（OSPF Interface Settings）]** をクリックするか、または **[OSPF オブジェクトの作成（Create OSPF Object）] > [OSPF インターフェイス設定（OSPF Interface Settings）]** ボタンをクリックします。

- 編集するオブジェクトの横にある [編集 (edit)] アイコン (✎) をクリックします。オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があります。これら行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

ステップ 5 `ospf lost-neighbor-detection detection-mechanism` コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックします。

ステップ 6 コマンドを有効にするには、コマンドの左側にある [+] をクリックします。

ステップ 7 `detection-mechanism` をクリックし、実装するメカニズムを選択します。

- **dead-interval** : 標準の hello 間隔を秒単位で設定します。次のコマンドが追加されます。必要に応じて値を調整します。
 - **ospf hello-interval 10** : hello 間隔 (1 ~ 8192 秒)。デフォルトは 10 です。この値は、dead 間隔より小さくする必要があります。値をクリックして、目的の数字を入力します。
 - **ospf dead-interval 40** : dead 間隔 (1 ~ 8192 秒)。推奨値は hello 間隔の 4 倍ですが、コンバージェンスを高速化するために短い時間を設定できます。
- **hello-multiplier** : 1 秒未満の fast hello パケットを設定します。次のコマンドが追加されました。値を設定する必要があります。
 - **ospf dead-interval minimal hello-multiplier value** : 変数をクリックし、1 秒間に送信する hello パケットの数を 3 ~ 20 の間で入力します。dead 間隔は、**minimal** キーワードによって 1 秒に設定されます。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

OSPF のモニタリング

OSPF をモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLI コンソールを開くか、またはデバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用します。また、[ルーティング (Routing)] ページの [コマンド (Commands)] メニューから、これらのコマンドの一部を選択することもできます。

追加オプションのリストを取得するには、**show ospf ?** を使用します。たとえば、プロセス ID、エリア ID、および仮想ルータを指定して、表示する情報を制限することができます。また、探している情報だけを対象とするその他のオプションも指定できます。次のリストは概要のみです。

- **show ospf**
OSPFv2 ルーティング プロセスに関する一般情報を表示します。
- **show ospf border-routers**

ABR および ASBR までの内部 OSPFv2 ルーティング テーブル エントリを表示します。

- **show ospf database**

特定のルータの OSPFv2 データベースに関する情報のリストを表示します。

- **show ospf events**

OSPF 内部イベント情報を表示します。

- **show ospf flood-list**

OSPFv2 パケットペーシングの観察のために、インターフェイスへのフラッディングを待機している LSA のリストを表示します。OSPFv2 アップデートパケットは、自動的にペーシングされるため、各パケットの送信間隔が 33 ミリ秒未満になることはありません。ペーシングを行わないと、リンクが低速の状態でアップデートパケットの一部が失われたり、ネイバーがアップデートを十分すばやく受信できなくなったり、あるいは、ルータがバッファ スペースを使い切ってしまったたりすることがあります。

ペーシングは、再送信間でも、送信効率を高めて再送信パケットの損失を最小にするために利用されます。インターフェイスからの送信を待機している LSA を表示することもできます。ペーシングの利点は、OSPFv2 アップデートおよび再送信パケットの送信の効率をよくすることです。

- **show ospf interface**

OSPFv2-related インターフェイスの情報を表示します。

- **show ospf neighbor**

OSPFv2 ネイバー情報をインターフェイスごとに表示します。

- **show ospf nsf**

OSPFv2 関連のノンストップ フォワーディング (NSF) 情報を表示します。

- **show ospf request-list**

ルータで要求されるすべての LSA のリストを表示します。

- **show ospf retransmission-list**

再送信を待機しているすべての LSA のリストを表示します。

- **show ospf rib**

OSPF ルータ情報ベース (RIB) を表示します。

- **show ospf statistics**

さまざまな OSPF 統計 (SPF が実行された回数、理由、期間など) を表示します。

- **show ospf summary-addresses**

OSPFv2 プロセスで設定されているサマリー アドレスのすべての再配布情報のリストを表示します。

- **show ospf traffic**

特定の OSPFv2 インスタンスで送信または受信されたパケットのさまざまなタイプのリストを表示します。

- **show ospf virtual-links**

OSPFv2-related 仮想リンク情報を表示します。



第 17 章

Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP)

Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP) は、ディスタンスベクターとリンクステートのハイブリッド内部ゲートウェイルーティングプロトコルです。当初はシスコが開発した独自のプロトコルでしたが、現在では RFC 7868 で定義されているオープン標準になっています。自律システム内の内部ルートを管理するように EIGRP を設定できます。

- [EIGRP のベストプラクティス \(503 ページ\)](#)
- [EIGRP について \(504 ページ\)](#)
- [EIGRP のガイドライン \(506 ページ\)](#)
- [コア EIGRP プロセスの設定 \(506 ページ\)](#)
- [EIGRP プロセスのカスタマイズ \(511 ページ\)](#)
- [EIGRP のモニタリング \(522 ページ\)](#)

EIGRP のベストプラクティス

EIGRP の設定に関するいくつかのヒントを次に示します。

- デバイスを既存の EIGRP 自律システムに挿入する場合は、自律システム内の他のルータの設定を調べて、システム番号とその他のカスタマイズを確認します。追加する Threat Defense デバイスには、必ず、同じカスタマイズ（または少なくとも一貫性のあるカスタマイズ）を実装してください。
- 完全な EIGRP プロセスまたはスタブプロセスのどちらを設定するかを決定します。
 - Threat Defense デバイスが自律システムの中央にあり、他の複数の EIGRP ルータに接続されている場合は、完全な EIGRP プロセスが必要です。[完全なルーティングのための EIGRP プロセスの設定 \(506 ページ\)](#) を参照してください。
 - Threat Defense デバイスが自律システムのエッジにあり、他の 1 つの EIGRP ルータにのみ接続されていて、それ以外は、接続されたネットワークのみをホストする場合は、それをスタブルータとして設定することが最も合理的である可能性があります。Threat Defense デバイスが接続されたルートに関する情報を EIGRP ネイバーに送信するようにスタブを設定して、自律システム内の他の EIGRP ルータが Threat Defense デ

バスの接続されたネットワークへのルートを取得できるようにすることが可能です。[スタブルーティングのためのEIGRPプロセスの設定（508ページ）](#)を参照してください。

- デフォルト設定はほとんどのネットワークで機能するため、自律システム内の他のEIGRPルータで設定を調整した場合にのみ設定を調整してください。自律システム番号を設定し、ルーティングするネットワークを指定するだけで、完全に機能するEIGRPプロセスを実現できます。
- ルータIDを設定して、ルータを識別するために安定したアドレスが使用されるようにします。これにより、ルーティングに関する問題のトラブルシューティングが容易になります。[EIGRPの高度な設定の指定（511ページ）](#)を参照してください。
- ルーティングループが発生せず、ネットワークに何らかの利点をもたらすと判断される場合以外は、自動ルート集約（**auto-summary** コマンド）を有効にしないでください。自動集約がネットワークで機能するかどうかを判断する方法は、このドキュメントの範囲外です。

EIGRP について

Enhanced Interior Gateway Routing Protocol (EIGRP) は、ディスタンスベクターとリンクステートのハイブリッド内部ゲートウェイルーティングプロトコルです。EIGRPは同じ自律システム内のルータにルーティング更新を送信します。通常、EIGRPはマルチキャスト更新を使用してネイバールータを検出しますが、マルチキャスト境界の外側にある静的ネイバーを設定でき、これらの静的ネイバーはユニキャスト更新を取得します。

EIGRPのコンバージェンステクノロジーは、Diffusing Update Algorithm (DUAL) と呼ばれるアルゴリズムに基づいています。このアルゴリズムは、ルート計算中のどの時点でもループが発生しないようにし、トポロジ変更に関与するすべてのデバイスを同期できるようにします。トポロジ変更の影響を受けないデバイスは、再計算に含まれません。

限られた範囲で、ルーティングメトリックを調整して、ルートの選択方法を制御できます。以下のトピックでは、これらの高度な概念の背景について説明します。



(注) これらのメトリックを調整する場合、自律システム内のすべてのルータに同じ調整を行う必要があります。そうしないと、ルーティングループが発生する可能性があります。

DUAL 有限状態マシン (FSM)

DUAL有限状態マシンには、すべてのルート計算の決定プロセスが組み込まれており、すべてのネイバーによってアドバタイズされたすべてのルートが追跡されます。DUALは距離情報（メトリックともいう）を使用して、効率的な、ループのないパスを選択し、

さらに DUAL は適切な後継ルータに基づいて、ルーティング テーブルに挿入するルートを選択します。サクセサは、宛先への最小コストパス（ルーティンググループに関連しないことが保証されている）を持つ、パケット転送に使用される隣接デバイスです。

トポロジが変更されると、DUAL はフィージブルサクセサが存在するかどうかを確認します。フィージブルサクセサがある場合、DUAL は検出されたいずれかのフィージブルサクセサを使用して、不要な再計算を防止します。

フィージブルサクセサがなく、宛先にアドバタイズするネイバーだけがある場合は、再計算を行って新たなサクセサを決定する必要があります。ルートの再計算に必要な時間は、コンバージェンス時間に影響します。

EIGRP のメトリック重み

EIGRP は、ルーティングおよびメトリック計算でメトリックの重み（K 値と呼ばれる）を使用します。EIGRP メトリックのデフォルトは、大半のネットワークで最適なパフォーマンスを実現できるよう、慎重に選択されています。

IOS ルータとは異なり、Threat Defense デバイスで動作する EIGRP のデフォルトの K 値は調整できません。自律ネットワーク内のすべてのシステムで同じ K 値を使用する必要があるため、Threat Defense デバイスを含む自律システム内のすべてのルータでこれらの値を変更しないでください。

K 値の使用方法については、[EIGRP コスト メトリック（505 ページ）](#) を参照してください。

EIGRP コスト メトリック

EIGRP は、リンク特性に加えてメトリックの重み（K 値）を使用して、複合コストメトリックを計算します。リンク特性が変わった結果としてネットワーク内でチャーンが生じないようにするために、この計算で使用される値の一部を調整できます。

実際の計算は非常に複雑であり、5 つの K 値（乗数として）と 5 つのベクトル属性を使用します。ただし、3 つの K 値はデフォルトで 0 であり、K 値のデフォルトは変更できないため、実際の計算は大幅に簡素化されます。

コストメトリック = $256 * (\text{帯域幅} + \text{遅延})$

変更できるのは、EIGRP プロセスとの間で再配布されるルートの帯域幅と遅延の値です。具体的には、これらの値を **default-metric** コマンド（すべてのタイプの再配布ルートについてデフォルトを設定する）または **redistribute metric** コマンド（特定のタイプのルートについてメトリックを設定する）で調整できます。次の点に注意してください。

- 「帯域幅」はルートの最小帯域幅（キロビット/秒単位）です。1 ～ 4294967295 キロバイト/秒を指定できます。この式の帯域幅は、次の式によってスケーリングおよび反転されます。

$(10^7 / \text{帯域幅（キロビット/秒単位）})$

- 「遅延」はルートの遅延（10 マイクロ秒単位）です。

Threat Defense で使用されないその他の特性は、遅延の信頼性、ルートの有効負荷、およびルートの最小 MTU（最大伝送ユニット）です。これらの値は使用されませんが、これらのコマンドを調整する場合は設定する必要があります。

EIGRP がコストメトリックを計算する方法の詳細については、『*IP Routing: EIGRP Configuration Guide*』を参照してください。たとえば、https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/ios-xml/ios/iproute_eigrp/configuration/xr-16-7/ire-xr-16-8-book/ire-enhanced-igrp.html のようになります。

EIGRP のガイドライン

IPv6 のガイドライン

IPv6 はサポートされません。

その他のガイドライン

- 最大 1 つの EIGRP プロセスがサポートされます。
- EIGRP プロセスの自律システム番号は変更できません。代わりに、プロセスを削除し、変更を展開してから、新しい自律システム番号を使用して新しいプロセスを設定してください。
- ブリッジ仮想インターフェイス（BVI）に属する EIGRP プロセスにネットワークを含めることはできません。
- 設定の変更が適用されるたびに、EIGRP 隣接関係のフラップが発生し、特に配布リスト、オフセットリスト、および集約への変更のネイバーからの（送信または受信された）ルーティング情報が変更されます。ルータが同期されると、EIGRP はネイバー間の隣接関係を再確立します。隣接関係が壊れて再確立されると、ネイバー間で学習されたすべてのルートが消去され、新しい配布リストを使用して、ネイバー間の同期がすべて新しく実行されます。

コア EIGRP プロセスの設定

ここでは、デバイスで EIGRP を稼働状態にする方法について説明します。完全なルーティングプロセスを設定することも、EIGRP ルータとして自律ネットワークに完全に参加させないシステムのスタブプロセスとして設定することもできます。

完全なルーティングのための EIGRP プロセスの設定

1 つの EIGRP プロセスを設定できます。複数の仮想ルータを設定する場合、EIGRP はグローバル仮想ルータでのみサポートされます。

次の手順では、EIGRP ルーティングのすべてのデフォルト値を使用して、一連のネットワークの基本的な EIGRP ルーティングをセットアップします。デバイスで EIGRP を有効にするに

は、この手順を完了するだけで十分です。必要に応じて、他の手順を実行して EIGRP プロセスを微調整できます。

始める前に

ネットワークで EIGRP に使用している自律システム番号を確認します。

EIGRP 自律システム内でルーティングする各ネットワークを定義するネットワークオブジェクトを作成します。たとえば、192.168.1.0/24 ネットワークと 192.168.2.0/24 ネットワークに EIGRP を使用する場合は、各ネットワークに 1 つずつ、2 つのネットワークオブジェクトを作成します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。
- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。

- 新しいプロセスを作成するには、[+] をクリックするか、[EIGRP オブジェクトの作成 (Create EIGRP Object)] ボタンをクリックします。
- 編集するオブジェクトの横にある [編集 (edit)] アイコン () をクリックします。オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

プロセスが不要になった場合は、オブジェクトの [ごみ箱 (Trash)] アイコンをクリックして削除します。

- ステップ 5** スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力し、任意で説明を入力します。
- ステップ 6** 基本的なプロセスのプロパティを設定します。

router eigrp autonomous-system

変数をクリックし、番号を 1 ～ 65535 の範囲で入力します。このデバイスと同じルーティングドメイン内で動作する必要があるネットワーク内の他のルータで使用されている自律システム番号を使用してください。

- ステップ 7** EIGRP 自律システム内でルーティングする必要があるネットワークとインターフェイスを設定します。
 - a) オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックして、その他のすべての設定行を追加します。
 - b) [network-object] 行の左横にある [+] をクリックします。 **network**

- c) **network** コマンドで、変数をクリックし、この自律システムに含めるネットワークを定義するオブジェクトを選択します。

通常、これは直接接続されたネットワークです。たとえば、内部インターフェイスの IP アドレスが 192.168.1.1/24 の場合、このコマンドに関連付けられているネットワークオブジェクトには 192.168.1.0/24 が含まれます。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックして、今すぐ作成します。

直接接続されているネットワークと静的ネットワークが定義されたネットワークに含まれていれば、プロセスによってアドバタイズされます。さらに、定義されたネットワークに含まれる IP アドレスを持つインターフェイスだけが、EIGRP ルーティング プロセスに参加します。

アドバタイズするネットワークに接続されているインターフェイスを EIGRP ルーティングに参加させない場合は、[EIGRP パッシブルーティングインターフェイスの設定 \(514 ページ\)](#) を参照してください。

- d) ルーティングする追加のネットワークがある場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] (**network** コマンドの左横) をクリックして新しいネットワークを追加します。ルーティングするすべてのネットワークを設定するまで、**network** 行の追加を続けます。

ステップ 8 (オプション)。必要に応じて、最初に無効にした他のコマンドの設定を調整します。[EIGRP プロセスのカスタマイズ \(511 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

スタブルーティングのための EIGRP プロセスの設定

EIGRP スタブルータになるようにデバイスを設定できます。スタブルーティングを使用すると、システムのメモリおよび処理要件を減らすことができます。スタブルータとして設定すると、システムはローカル以外のトラフィックをすべて配布ルータに転送するため、完全な EIGRP ルーティングテーブルを維持する必要はありません。一般に、配布ルータからスタブルートに送信する必要があるのは、デフォルト ルートだけです。

スタブルータから配布ルータには、指定されたルートだけが伝搬されます。スタブルータであるシステムは、サマリー、接続されているルート、再配布された静的ルート、外部ルート、および内部ルートに対するクエリーすべてに、応答として「inaccessible」というメッセージを返します。システムは、自身のスタブルータとしてのステータスを報告するために、特殊なピア情報パケットをすべての隣接ルータに送信します。スタブステータスの情報を伝えるパケットを受信したネイバーはすべて、スタブルータにルートのクエリーを送信しなくなり、スタブピアを持つルータはそのピアのクエリーを送信しなくなります。スタブルータが正しいアップデートをすべてのピアに送信するには、配布ルータが必要です。

始める前に

ネットワークで EIGRP に使用している自律システム番号を確認します。

EIGRP 自律システム内でルーティングする各ネットワークを定義するネットワークオブジェクトを作成します。たとえば、192.168.1.0/24 ネットワークと 192.168.2.0/24 ネットワークに EIGRP を使用する場合は、各ネットワークに 1 つずつ、2 つのネットワークオブジェクトを作成します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン (🔵) をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。
- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。

- 新しいプロセスを作成するには、[+] をクリックするか、[EIGRP オブジェクトの作成 (Create EIGRP Object)] ボタンをクリックします。
- 編集するオブジェクトの横にある [編集 (edit)] アイコン (✎) をクリックします。オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

プロセスが不要になった場合は、オブジェクトの [ごみ箱 (Trash)] アイコンをクリックして削除します。

- ステップ 5** スマート CLI オブジェクトの [名前 (Name)] を入力し、任意で説明を入力します。
- ステップ 6** 基本的なプロセスのプロパティを設定します。

router eigrp autonomous-system

変数をクリックし、番号を 1 ～ 65535 の範囲で入力します。このデバイスと同じルーティングドメイン内で動作する必要があるネットワーク内の他のルータで使用されている自律システム番号を使用してください。

- ステップ 7** EIGRP 自律システム内でルーティングする必要があるネットワークとインターフェイスを設定します。
- オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックして、その他のすべての設定行を追加します。
 - [network-object] 行の左横にある [+] をクリックします。 **network**
 - network** コマンドで、変数をクリックし、この自律システムに含めるネットワークを定義するオブジェクトを選択します。

通常、これは直接接続されたネットワークです。たとえば、内部インターフェイスの IP アドレスが 192.168.1.1/24 の場合、このコマンドに関連付けられているネットワークオブジェクトには 192.168.1.0/24 が含まれます。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックして、今すぐ作成します。

直接接続されているネットワークと静的ネットワークが定義されたネットワークに含まれていれば、プロセスによってアドバタイズされます。さらに、定義されたネットワークに含まれる IP アドレスを持つインターフェイスだけが、EIGRP ルーティング プロセスに参加します。

アドバタイズするネットワークに接続されているインターフェイスを EIGRP ルーティングに参加させない場合は、[EIGRP パッシブルーティングインターフェイスの設定 \(514 ページ\)](#) を参照してください。

- d) ルーティングする追加のネットワークがある場合は、**[...] > [複製 (Duplicate)]** (**network** コマンドの左横) をクリックして新しいネットワークを追加します。ルーティングするすべてのネットワークを設定するまで、**network** 行の追加を続けます。

ステップ 8 スタブ設定を指定します。

- [configuration] 行の左横にある [+] をクリックします。 **setup eigrp**
- 変数をクリックし、**advanced** を選択します。
- [stub-options] コマンドの左側にある [+] をクリックします。 **setup eigrp stub**
- デバイスに EIGRP ネイバルータからのみ更新を受信させるために、自律システム内の他のルータとルートとを共有しないようにデバイスを制限するには、[stub-options] をクリックし、**receive** を選択します。その後、次のコマンドを設定します。

eigrp stub stub-parameters

変数をクリックし、**receive-only** を選択します。

- e) デバイスが EIGRP ネイバルータにルートをアドバタイズできるようにするには、[stub-options] をクリックし、**other** を選択します。次に、次のコマンドを設定して、アドバタイズする必要があるルートのタイプを選択します。

eigrp stub connected-parameter redistributed-parameter static-parameter summary-parameter

変数をクリックして選択します。少なくとも 1 つのルートタイプを選択する必要がありますが、すべてまたは任意の組み合わせを選択できます。

- **connected-parameter** : 接続ルートをアドバタイズするには、**connected** を選択します。接続ルートが **network** ステートメントで指定されていない場合は、EIGRP プロセスでの接続ルートの再配布の設定が必要となることがあります。
- **redistributed-parameter** : 他のルーティングプロトコルから EIGRP ルーティングプロセスに再配布されるルートをアドバタイズするには、**redistributed** を選択します。
- **static-parameter** : 静的ルートをアドバタイズするには、**static** を選択します。また、**configure redistribution** コマンドを有効にして、静的ルートの再配布を設定する必要があります。
- **summary-parameter** : サマリールートをアドバタイズするには、**summary** を選択します。

ステップ 9 (オプション)。必要に応じて、最初に無効にした他のコマンドの設定を調整します。[EIGRP プロセスのカスタマイズ \(511 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

EIGRP プロセスのカスタマイズ

EIGRP には、デフォルト値を持つ多数のオプションが含まれています。これらの値は、多くのネットワークで適切に機能します。ただし、必要とする動作を正確に得るために、設定を 1 つ以上調整する必要がある場合があります。以下のトピックでは、EIGRP ルーティングプロセスをカスタマイズするさまざまな方法について説明します。

EIGRP の高度な設定の指定

EIGRP プロセスの全体的な動作を制御する複数の設定を指定することができます。これには、自動ルート集約、ディスタンスメトリック、ロギング、リンク ステート アドバタイズメントやその他のルーティング更新の送信に使用されるルータ ID などがあります。これらの設定の多くには、ほとんどのネットワークに適しているデフォルト設定があります。

始める前に

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています（[コア EIGRP プロセスの設定](#)（506 ページ）を参照）。

このプロセスを作成すると、特定の詳細オプションがデフォルトで有効になります。EIGRP オブジェクトを編集する際に、これらの有効なオプションが表示されます。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。
- ステップ 4** EIGRP オブジェクトの編集アイコン () をクリックします。
- オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。
- ステップ 5** オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして、その他のすべての設定行を追加します。
- ステップ 6** `setup eigrp configuration` 行は、`setup eigrp advanced` のように、すでに有効になっているはずです。有効になっていない場合は、行の左横にある [+] をクリックして有効にしてから、変数をクリックし、**advanced** を選択します。

ステップ 7 (任意。推奨されません) ネットワーク番号境界上のルートを自動的に集約するには、**auto-summary** コマンドの横にある **[+]** をクリックします。

このことは、不連続ネットワークがある場合にルーティングの問題の原因となることがあります。

たとえば、ネットワーク 172.16.1.0、172.16.2.0、172.16.3.0 が接続されているルータがあり、それらのネットワークがすべて EIGRP に参加しているとすると、EIGRP ルーティングプロセスはそれらのルートに対しサマリーアドレス 172.16.0.0 を作成します。さらにネットワーク 172.16.10.0 と 172.16.11.0 が接続されているルータがこのネットワークに追加され、それらのネットワークが EIGRP に参加すると、これらもまた 172.16.0.0 として集約されます。そのため、ルートを自動的に集約すると、トラフィックが誤ったルータにルーティングされます。

ステップ 8 (任意。推奨) ルータ ID を設定します。

[+] をクリックして **router-id** コマンドを有効にし、変数をクリックして、このデバイスからルータアップデートを送信するときに使用する IPv4 アドレスを入力します。EIGRP 自律システム内の 2 台のルータが同じルータ ID を持つことはできないため、ID がシステム内で一意であることを確認してください。

プロセスに対してルータ ID を明示的に指定しない場合、システムはアクティブインターフェイスに割り当てられている最も大きい IP アドレスを使用します。そのため、選択したインターフェイスを無効にするか、アドレスを変更すると、ルータ ID が変更される場合があります。ルータ ID を明示的に割り当てることにより、プロセスの一貫性を確保することができます。

ステップ 9 (オプション) 内部および外部 EIGRP ルートのアドミニストレーティブ ディスタンスを設定します。

プロセスを設定すると、次のコマンドがデフォルトで有効になります。新しいオブジェクトを設定する際は、**[+]** をクリックしてコマンドを有効にする必要がある場合があります。

distance eigrp 90 170

各ルーティング プロトコルには、他のルーティング プロトコルと異なるアルゴリズムに基づいたメトリックがあるため、異なるルーティング プロトコルによって生成された同じ宛先への 2 つのルートのいずれが「最適パス」であるかは、必ずしも判別できません。アドミニストレーティブ ディスタンスは、2 つの異なるルーティング プロトコルから同じ宛先に複数の異なるルートがある場合に、システムが最適なパスの選択に使用するルートパラメータです。

EIGRP のアドミニストレーティブ ディスタンスの範囲は 1 ～ 255 です。これらの数値は、システムが最適なルートを選択したときに他のルーティングプロセスに割り当てられる管理値との相対的な値です。通常は、値が大きいほど、信頼性の格付けが下がります。デフォルト値は、ほとんどのネットワークで機能します。EIGRP ルートを優先させるか、EIGRP ルートが使用される可能性を低減させる場合は、それらを調整します。

数値は、次を意味します。

- 最初の値 (90) : **内部距離**。EIGRP 内部ルートのアドミニストレーティブ ディスタンス。内部ルートとは、同じ自律システム内の別のエンティティから学習されるルートです。

- 2 番目の値 (170) : **外部距離**。EIGRP 外部ルートのアドミニストレーティブ ディスタンス。外部ルートとは、最適パスを自律システムの外部にあるネイバーから学習するルートです。

ステップ 10 **default-metric** コマンドは、他のルーティングプロセスからルートを再配布するときに使用されます。これは、再配布も設定する場合にのみ設定します。詳細については、「[EIGRP のルート再配布の設定 \(520 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 11 ネイバーロギングを設定します。

プロセスを設定すると、次のコマンドがデフォルトで有効になります。新しいオブジェクトを設定する際は、[+] をクリックしてコマンドを有効にする必要がある場合があります。ロギングを無効にする場合は、[-] をクリックしてコマンドを無効にします。

- **eigrp log-neighbor-changes** EIGRP ネイバーとの隣接関係に関する変更のロギングを有効にします。
- **eigrp log-neighbor-warnings 10** EIGRP ネイバーの警告メッセージのロギングを有効にします。この数値は、ネイバー警告メッセージの反復間隔 (1 ~ 65535 秒) です。この間隔内に警告が繰り返し発生した場合、それらの警告はログに記録されません。

ステップ 12 **setup stub** コマンドを設定する場合は、[スタブルーティングのための EIGRP プロセスの設定 \(508 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 13 [OK] をクリックします。

EIGRP がアドバタイズするネットワークの設定

network コマンドを使用してネットワークを特定します。これにより、EIGRP ルーティングに含まれるインターフェイスが特定されます。EIGRP ルーティングに参加するインターフェイスは、これらのネットワーク エントリで定義されるアドレスの範囲内に存在する必要があります。アドバタイズされる直接接続およびスタティックのネットワークも、これらのネットワーク エントリの範囲内である必要があります。

始める前に

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています ([コア EIGRP プロセスの設定 \(506 ページ\)](#) を参照)。

アドバタイズするネットワークを定義するネットワークオブジェクトを作成します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。

ステップ 2 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。

ステップ 3 [EIGRP] タブをクリックします。

ステップ 4 EIGRP オブジェクトの編集アイコン (✎) をクリックします。

オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

ステップ 5 オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして、その他のすべての設定行を追加します。

ステップ 6 ネットワークをすでに設定している場合は、[...]>[複製 (Duplicate)] (network 行の横) をクリックし、新しい空のコマンドを作成します。

まだネットワークを定義していない場合は、空の **network network-object** 行の横にある [+] をクリックします。

ステップ 7 **network** コマンドで、変数をクリックし、この自律システムに含めるネットワークを定義するオブジェクトを選択します。

通常、これは直接接続されたネットワークです。たとえば、内部インターフェイスの IP アドレスが 192.168.1.1/24 の場合、このコマンドに関連付けられているネットワークオブジェクトには 192.168.1.0/24 が含まれます。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックして、今すぐ作成します。

直接接続されているネットワークと静的ネットワークが定義されたネットワークに含まれていれば、プロセスによってアドバタイズされます。さらに、定義されたネットワークに含まれる IP アドレスを持つインターフェイスだけが、EIGRP ルーティングプロセスに参加します。

アドバタイズするネットワークに接続されているインターフェイスを EIGRP ルーティングに参加させない場合は、[EIGRP パッシブルーティングインターフェイスの設定 \(514 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 8 ルーティングする追加のネットワークがある場合は、[...]>[複製 (Duplicate)] (network コマンドの左横) をクリックして新しいネットワークを追加します。ルーティングするすべてのネットワークを設定するまで、**network** 行の追加を続けます。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

EIGRP パッシブルーティングインターフェイスの設定

アドバタイズするネットワークに接続されているインターフェイスを EIGRP ルーティングに参加させない場合は、インターフェイスが接続されているネットワークが対象に含まれるように **network** コマンドを設定し、**passive-interface** コマンドを使用して、そのインターフェイスが EIGRP 更新を送受信しないようにします。

デフォルトでは、システムは **no passive-interface default** コマンドを有効にします。これにより、すべてのインターフェイスがアクティブに設定され、EIGRP 更新が送受信されます。

次の手順では、インターフェイスをパッシブに変更する方法について説明します。

始める前に

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています（[コア EIGRP プロセスの設定（506 ページ）](#)を参照）。

プロセスを作成する際、**network** コマンドを追加して、EIGRP を使用してルーティングする必要があるネットワークを示します。ルーティングする追加のネットワークを設定するには、[EIGRP がアドバタイズするネットワークの設定（513 ページ）](#)を参照してください。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。
- ステップ 4** EIGRP オブジェクトの編集アイコン () をクリックします。
- オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。
- ステップ 5** オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして、その他のすべての設定行を追加します。
- ステップ 6** オブジェクトを編集している場合、**configure interface passive** コマンドとその子である **no passive-interface default** が有効になります。
- 新しいオブジェクトの場合は、[+] をクリックして **configure routing-interface parameters** コマンドを有効にします。
- ステップ 7** インターフェイスをデフォルトでアクティブになるように設定し、インターフェイスを選択的にパッシブにするには、次の手順に従います。
- a) **passive** コマンドで、変数をクリックし、**configure routing-interface** を選択します。
- このアクションにより **no passive-interface default** コマンドが有効になります。これにより、EIGRP インターフェイスがデフォルトでアクティブになります。
- b) **passive-interface interface** コマンドの横にある [+] をクリックし、変数をクリックして、パッシブにして EIGRP ルーティング更新に参加させないインターフェイスを選択します。
 - c) 追加のパッシブインターフェイスを設定する必要がある場合は、[...]>[複製 (Duplicate)] (**passive-interface interface** コマンドの横) をクリックします。パッシブにする必要があるすべてのインターフェイスで **passive-interface** コマンドが有効になるまで続行します。
- ステップ 8** インターフェイスをデフォルトでパッシブになるように設定し、インターフェイスを選択的にアクティブにするには、次の手順に従います。

- a) **active** コマンドで、変数をクリックし、**configure routing-interface** を選択します。
このアクションにより **passive-interface default** コマンドが有効になります。これにより、EIGRP インターフェイスがデフォルトでパッシブになります。
- b) **no passive-interface interface** コマンドの横にある [+] をクリックし、変数をクリックして、EIGRP ルーティング更新にアクティブに参加させるインターフェイスを選択します。
- c) 追加のアクティブインターフェイスを設定する必要がある場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] (**no passive-interface interface** コマンドの横) をクリックします。アクティブにする必要があるすべてのインターフェイスで **no passive-interface** コマンドが有効になるまで続行します。

ステップ 9 インターフェイスをデフォルトの動作（パッシブまたはアクティブ）に戻すには、特定のインターフェイスをパッシブまたはアクティブにするコマンドの横にある [-] をクリックします。これにより、例外アクションが削除され、設定されたデフォルトのアクションに従ってインターフェイスが動作するようになります。

ステップ 10 [OK] をクリックします。

静的 EIGRP ネイバーの設定

EIGRP hello パケットはマルチキャスト パケットとして送信されます。EIGRP ネイバーが非ブロードキャストネットワーク（VPN トンネルなど）を超えた場所にある場合は、そのネイバーを手動で定義する必要があります。手動で EIGRP ネイバーを定義すると、hello パケットはユニキャスト メッセージとしてそのネイバーに送信されます。

通常のブロードキャストネットワークのルータは隣接関係を形成できるため、それらのネットワーク上にあるスタティックネイバーを定義する必要はありません。

始める前に

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています（[コア EIGRP プロセスの設定（506 ページ）](#) を参照）。

システムがネイバーに到達するために使用するインターフェイスを決定します。

ネイバーのロギング設定を指定することもできます（[EIGRP の高度な設定の指定（511 ページ）](#) を参照）。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。

ステップ 4 EIGRP オブジェクトの編集アイコン (✎) をクリックします。

オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があります。これら行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

ステップ 5 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **neighbor** コマンドを有効にします。

ステップ 6 ネイバーアドレスを設定します。

neighbor ip-address interface interface

- [ip-address] をクリックし、ネイバールータの IP アドレスを入力します。
- [interface] をクリックして、システムがルータに到達するために使用するインターフェイスを選択します。

ステップ 7 必要に応じて、ネイバールータのスタティックルートを設定します。

ルータの IP アドレスが、選択したインターフェイスと同じネットワーク上にある場合、スタティックルートは必要ありません。たとえば、IP アドレスが 10.100.10.1/24 であるインターフェイスを選択し、ネイバーアドレスが 10.100.10.2/24 の場合、スタティックルートは必要ありません。

ステップ 8 [...] > [重複 (Duplicate)] (**neighbor** コマンドの横) をクリックして別の静的ネイバーを定義できます。必要な数だけ定義します。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

EIGRP のデフォルトルート候補配信の制御

EIGRP プロセスからのデフォルトルート候補の送受信を制御できます。デフォルトでは、ルートフィルタリングおよび再配布設定に応じて、すべてのルート候補がアダプタイズされるか受け入れられます。

デフォルトルートの送受信を直接オフにすることはできません。EIGRP からのデフォルトルートの配信を防止する場合は、any-ipv4 ネットワークを拒否する標準 ACL を使用して、これらのコマンドを設定します。

始める前に

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています (コア EIGRP プロセスの設定 (506 ページ) を参照)。

各フィルタルールに必要なスマート CLI 標準アクセスリストオブジェクトを作成します。拒否アクセス制御エントリ (ACE) を使用してエントリに一致するルートを除外し、更新する必要があるルートの ACE を許可します。

手順

-
- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン (🔵) をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。
- ステップ 4** EIGRP オブジェクトの編集アイコン (✎) をクリックします。
- オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。
- ステップ 5** オブジェクト本文の上にある [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして、その他のすべての設定行を追加します。
- ステップ 6** [+] をクリックして次のコマンドのいずれかまたは両方を有効にします。
- **default-information in acl** : デフォルトルート候補の受信を制御する場合。
 - **default-information out acl** : デフォルトルート候補の送信を制御する場合。
- ステップ 7** 変数をクリックし、フィルタを適用する標準 ACL を選択します。
- ステップ 8** [OK] をクリックします。
-

EIGRP のフィルタールールの設定

標準アクセス制御リストで定義されているネットワークプレフィックスに基づいて、着信ルーティング更新または発信ルーティング更新をフィルタ処理できます。このフィルタ処理により、EIGRP 自律システムへのルート配布や他のルーティングプロセスへのアウトバウンドの制御が向上します。

始める前に

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています ([コア EIGRP プロセスの設定 \(506 ページ\)](#) を参照)。

各フィルタールールに必要なスマート CLI 標準アクセスリストオブジェクトを作成します。拒否アクセス制御エントリ (ACE) を使用してエントリに一致するルートを除外し、更新する必要があるルートの ACE を許可します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン (🔵) をクリックします。
- ステップ 3** [EIGRP] タブをクリックします。
- ステップ 4** EIGRP オブジェクトの編集アイコン (✎) をクリックします。
- オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があることに注意してください。これらの行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。
- ステップ 5** [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしてすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **configure filter-rules direction** コマンドを有効にします。
- ステップ 6** [direction] をクリックし、**in** (インバウンドアップデートをフィルタ処理する場合) または **out** (アウトバウンドアップデートをフィルタ処理する場合) を選択します。
- このアクションにより、**distribute-list** コマンドがオブジェクトに追加されます。
- ステップ 7** インバウンドフィルタの場合は、必要に応じて、アップデートをフィルタ処理するインターフェイスを指定できます。インターフェイスを指定しない場合、フィルタは任意のインターフェイスで受信されるすべてのアップデートに適用されます。[+] をクリックして次のいずれかのオプションを有効にします。
- **distribute-list acl-name in**
標準 ACL オブジェクトを選択します。
 - **distribute-list acl-name in interface interface**
標準 ACL オブジェクトと、着信更新をフィルタ処理するインターフェイスを選択します。
- ステップ 8** アウトバウンドフィルタの場合は、必要に応じて、プロトコルを指定して、そのルーティングプロセスによって生成されたルートと、更新をフィルタ処理するインターフェイスにフィルタを制限できます。[+] をクリックして次のいずれかのオプションを有効にします。
- **distribute-list acl-name out**
標準 ACL オブジェクトを選択します。
 - **distribute-list acl-name out interface interface**
標準 ACL オブジェクトと、発信更新をフィルタ処理するインターフェイスを選択します。
 - **distribute-list acl-name out protocol**
標準 ACL オブジェクトと次のいずれかのルートタイプを選択します。
 - **connected** : システムのインターフェイスに直接接続されているネットワークに対して確立されたルート用です。

- **static** : 手動で作成したスタティックルート用です。
- **rip** : RIP によって生成されたルート用です。
- **distribute-list** *acl-name out protocol identifier*
標準 ACL オブジェクトと次のいずれかのルートタイプを選択します。
 - **ospf process-id** : OSPF によって生成されたルート用です。[identifier] をクリックし、システムで定義されている OSPF プロセスのプロセス ID を入力します。
 - **bgp autonomous-system** : BGP によって生成されたルート用です。[identifier] をクリックし、システムで定義されている BGP プロセスの自律システム番号を入力します。

ステップ 9 別のフィルタルールを定義するには、[...] > **[重複 (Duplicate)]** (**configure filter-rules** コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 10 **[OK]** をクリックします。

EIGRP のルート再配布の設定

他のルーティングプロトコル、接続されたルート、およびスタティックルートからの EIGRP プロセスへのルートの再配布を制御できます。

始める前に

EIGRP への再配布を設定する前に、ルートを再配布するルーティングプロセスを設定し、変更を展開することがベストプラクティスです。

ルートマップを適用して、再配布されるルートを微調整する場合は、**Smart CLI ルートマップ** オブジェクトを作成します。ルートマップに一致するルートが再配布され、一致しないルートはすべて再配布されません。

この手順は、EIGRP プロセスがすでに設定されていることを前提としています ([コア EIGRP プロセスの設定 \(506 ページ\)](#) を参照)。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータが有効になっている場合は、グローバル仮想ルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。
- ステップ 3** **[EIGRP]** タブをクリックします。
- ステップ 4** EIGRP オブジェクトの編集アイコン (✏️) をクリックします。

オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があります。これらに行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

ステップ 5 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして、すべてのコマンドを表示します。

ステップ 6 (オプション)。[+] をクリックして、**default-metric** コマンドを有効にします。このコマンドは、**setup eigrp advanced** コマンドグループに含まれています。

default-metric コマンドは、ルートタイプに関して特定の **redistribute metric** コマンドを設定しない場合に、再配布されたルートに使用するメトリックを設定します。

default-metric bandwidth-metric delay-metric reliability-metric effective-bandwidth path-MTU

変数をクリックして、次のように設定します。すべてのメトリック変数を設定する必要があります。

- **bandwidth-metric** : 変数をクリックし、このルートの接続の帯域幅を 1 ～ 4294967295 キロバイト/秒の範囲で入力します。
- **delay-metric** : 変数をクリックし、ルート上の接続の遅延 (10 マイクロ秒単位) を 0 ～ 4294967295 の範囲で入力します。
- **reliability-metric** : 変数をクリックし、ルートの EIGRP 信頼性メトリックを 0 ～ 255 の範囲で入力します。255 は 100 % の信頼性を示します。このメトリックは無視されますが、依然として設定する必要があります。
- **effective-bandwidth** : 変数をクリックし、ルートの EIGRP 有効帯域幅を 1 ～ 255 の範囲で入力します。255 は 100% の負荷を示します。このメトリックは無視されますが、依然として設定する必要があります。
- **path-MTU** : 変数をクリックして、パスの平均伝送単位 (MTU) を 1 ～ 65535 の範囲で入力します。このメトリックは無視されますが、依然として設定する必要があります。

ステップ 7 + をクリックして、**configure redistribution** コマンドを有効にします。

ステップ 8 [protocol] 変数をクリックし、ルートの再配布元となる送信元プロセスを選択します。**connected** および **static** のルート、あるいは **bgp**、**isis**、**ospf**、または **rip** によって生成されたルートを再配布できます。

ステップ 9 ルーティングプロセスを選択した場合は、[identifier] 変数をクリックして、必要な値を入力します。

- **bgp**。自律システムの番号を入力します。
- **ospf**。プロセス ID 番号を入力します。
- **connected**、**static**、**isis**、**rip**。 **none** を入力します。別の値を入力しても、無視されます。

ステップ 10 (任意 : IS のみ)。 **redistribute isis route-level route-level** コマンドで、変数をクリックし、IS-IS エリア (**level-1**) 内でのみ学習したルートを再配布するか、IS-IS エリア (**level-2**) 間、または両方 (**level-1-2**) で再配布するかを選択します。

ステップ 11 (任意：すべてのプロトコル)。ルートマップに基づいて再配布されるルートを微調整するには、[+]をクリックして **redistribute route-map** コマンドを有効にし、変数をクリックして、制限を定義するルートマップを選択します。

ルートマップを適用しない場合は、（再配布用に設定された他のコマンドに適合する）プロセスのすべてのルートが再配布されます。

ステップ 12 (任意：すべてのプロトコル)。再配布されたルートのメトリックを微調整するには、[+] をクリックして次のコマンドを有効にし、オプションを設定します。

redistribute protocol metric bandwidth-metric delay-metric reliability-metric effective-bandwidth path-MTU

変数をクリックし、上記の **default-metric** コマンドで説明されている値を設定します。すべてのメトリック変数を設定する必要があります。

ステップ 13 (任意：OSPF のみ)。OSPF プロセスからルートを再配布する場合、次のコマンドはデフォルトで有効になっています。[-] をクリックして、不要なコマンドを無効化できます。

これらのコマンドで、OSPF ルートを他のルーティングドメインに再配布する条件を指定します。

- **redistribute ospf match external 1**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 1 外部ルートとしてインポートされるルート。
- **redistribute ospf match external 2**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 2 外部ルートとしてインポートされるルート。
- **redistribute ospf match internal**。特定の自律システムの内部ルート。
- **redistribute ospf match nssa-external 1**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 1 外部ルートとしてインポートされ、Not-So-Stubby-Area (NSSA) 専用としてマークされるルート。
- **redistribute ospf match nssa-external 2**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 2 外部ルートとしてインポートされ、Not-So-Stubby-Area (NSSA) 専用としてマークされるルート。

ステップ 14 [...] > [重複 (Duplicate)] (**configure redistribution** コマンドの横) をクリックして、別のプロトコルの再配布を設定できます。ネットワークに適したプロトコルごとの再配布を設定します。

ステップ 15 [OK] をクリックします。

EIGRP のモニタリング

次のコマンドを使用して、EIGRP ルーティングプロセスをモニタできます。コマンド出力の例と説明については、コマンドリファレンスを参照してください。

- **show eigrp events** [{*start end*} | **type**]

EIGRP イベント ログを表示します。

- **show eigrp interfaces** [*if-name*] [**detail**]

EIGRP ルーティングに参加するインターフェイスを表示します。

- **show eigrp neighbors** [**detail** | **static**] [*if-name*]

EIGRP ネイバー テーブルを表示します。

- **show eigrp topology** [*ip-addr* [*mask*] | **active** | **all-links** | **pending** | **summary** | **zero-successors**]

EIGRP トポロジ テーブルを表示します。

- **show eigrp traffic**

EIGRP トラフィックの統計情報を表示します。



第 18 章

Border Gateway Protocol (BGP)

BGP は、インターネット上でルーティング情報を交換するために使用され、インターネット サービス プロバイダー (ISP) 間で使用されるプロトコルです。システムがサービスプロバイダーネットワークへのゲートウェイである場合は、BGPの実装が必要になることがあります。1つの自律システムに対して、デバイスに1つのBGPプロセスを設定できます。

- [BGPについて \(525 ページ\)](#)
- [BGP の設定 \(529 ページ\)](#)
- [BGP のモニタリング \(555 ページ\)](#)

BGPについて

BGPは相互および内部の自律システムのルーティングプロトコルです。自律システムとは、共通の管理下にあり、共通のルーティングポリシーを使用するネットワークまたはネットワークのグループです。BGP は、インターネットのルーティング情報を交換するために、インターネット サービス プロバイダー (ISP) 間で使用されるプロトコルです。

ルーティング テーブルの変更

BGP ネイバーは、ネイバー間で最初に TCP 接続を確立する際に、完全なルーティング情報を交換します。ルーティングテーブルで変更が検出された場合、BGP ルータはネイバーに対し、変更されたルートのみを送信します。BGP ルータは、定期的にルーティング アップデートを送信しません。また BGP ルーティング アップデートは、宛先ネットワークに対する最適パスのアドバタイズのみを行います。



- (注) AS ループの検出は、完全な AS パス (AS_PATH 属性で指定される) をスキャンし、ローカルシステムの AS 番号が AS パスに現れないことを確認することによって実行されます。デフォルトでは、EBGP は学習したルートと同じピアにアドバタイズすることで、ループチェックを実行するときにデバイスで追加の CPU サイクルが発生することを防ぐとともに、既存の発信更新タスクの遅延を防ぎます。

BGPにより学習されたルートには、特定の宛先に対して複数のパスが存在する場合、宛先に対する最適なルートを決断するために使用されるプロパティが設定されています。次のプロパティはBGP属性と呼ばれ、ルート選択プロセスで使用されます。

- **Weight:** これはシスコ定義の属性で、ルータに対してローカルです。Weight属性は、隣接ルータにアドバタイズされません。ルータが同じ宛先への複数のルートがあることを学習すると、[重み (Weight)] 属性値が最も大きいルートが優先されます。
- **Local preference:** Local preference属性は、ローカルASからの出口点を選択するために使用されます。Weight属性とは異なり、Local preference属性は、ローカルAS全体に伝搬されます。ASからの出口点が複数ある場合は、Local preference属性が最も高い出口点が特定のルートの出口点として使用されます。
- **Multi-exit discriminator:** メトリック属性であるMulti-exit discriminator (MED)は、メトリックをアドバタイズしているASへの優先ルートに関して、外部ASへの提案として使用されます。これが提案と呼ばれるのは、MEDを受信している外部ASがルート選択の際に他のBGP属性も使用している可能性があるためです。MEDメトリックが小さい方のルートが優先されます。
- **Origin:** Origin属性は、BGPが特定のルートについてどのように学習したかを示します。Origin属性は、次の3つの値のいずれかに設定することができ、ルート選択に使用されます。
 - **IGP:** ルートは発信側ASの内部にあります。この値は、ネットワークルータコンフィギュレーションコマンドを使用してBGPにルートを挿入する場合に設定されます。
 - **EGP:** ルートはExterior Border Gateway Protocol (EBGP)を使用して学習されます。
 - **Incomplete:** ルートの送信元が不明であるか、他の方法で学習されています。IncompleteのOriginは、ルートがBGPに再配布されるときに発生します。
- **AS_path :** ルートアドバタイズメントが自律システムを通過すると、ルートアドバタイズメントが通過した AS 番号が AS 番号の順序付きリストに追加されます。AS_path リストが最も短いルートのみ、IP ルーティングテーブルにインストールされます。
- **Next hop:** EBGPのnext-hop属性は、アドバタイジングルータに到達するために使用されるIPアドレスです。EBGPピアの場合、ネクストホップアドレスは、ピア間の接続のIPアドレスです。IBGPの場合、EBGPのネクストホップアドレスがローカルASに伝送されます。ただし、ネクストホップがeBGPピアのピアリングアドレスと同じサブネットにある場合、ネクストホップは変更されません。この動作は、サードパーティのネクストホップと呼ばれます。
- **Community:** Community属性は、ルーティングの決定(承認、優先順位、再配布など)を適用できる接続先をグループ化する方法、つまりコミュニティを提供します。ルートマップは、Community属性を設定するために使用されます。事前定義済みのCommunity属性は次のとおりです。
 - **no-export:** EBGPピアにアドバタイズしません。
 - **no-advertise:** どのピアにもこのルートをアドバタイズしません。

- **internet** : インターネット コミュニティにこのルートをアドバタイズします。ネットワーク内のすべてのルートがこのコミュニティに属します。

BGP を使用する状況

通常、大学や企業などの顧客ネットワークではネットワーク内でルーティング情報を交換するために OSPF などの Interior Gateway Protocol (IGP) を採用しています。カスタマーはISPに接続し、ISPはBGPを使用してカスタマーおよび ISPルートを交換します。自律システム (AS) 間でBGPを使用する場合、このプロトコルは外部BGP (EBGP) と呼ばれます。サービスプロバイダーがBGPを使用してAS内のルートを交換する場合、このプロトコルは内部BGP (IBGP) と呼ばれます。

BGPは、IPv6ネットワーク上でIPv6プレフィックスのルーティング情報を伝送するためにも使用することができます。

BGP パスの選択

BGPは、異なる送信元から同じルートに対する複数のアドバタイズメントを受信する場合があります。BGP はベストパスとして 1 つのパスだけを選択します。ベストパスを選択すると、BGPは選択したパスをIPルーティングテーブルに格納し、そのネイバーにパスを伝達します。BGP は、次に示す順序で次の条件を使用して、宛先のパスを選択します。

- パスで指定されているネクストホップが到達不能な場合、更新はドロップされます。
- 重みが最大のパスが優先されます。
- 重みが同じ場合、ローカルプリファレンスが最大のパスが優先されます。
- ローカルプリファレンスが同じ場合、このルータで動作している BGP により発信されたパスが優先されます。
- ルートが発信されていない場合、AS_pathが最短のルートが優先されます。
- すべてのパスの AS_path の長さが同じ場合、Origin タイプが最下位のパス (IGP は EGP よりも低く、EGP は Incomplete よりも低い) が優先されます。
- Origin コードが同じ場合、最も小さい MED 属性を持つパスが優先されます。
- パスの MED が同じ場合、内部パスより外部パスが優先されます。
- それでもパスが同じ場合、最も近い IGP ネイバーを経由するパスが優先されます。
- [BGP マルチパス \(528 ページ\)](#) 用のルーティングテーブルに複数のパスをインストールする必要があるか判断します。
- 両方のパスが外部のときは、先に受信したパス(最も古いパス)が優先されます。
- BGPルータIDで指定された、IPアドレスが最も小さいパスが優先されます。

- 発信元 ID またはルータ ID が複数のパスで同じ場合は、最小のクラスタ リスト長を持つパスが優先されます。
- 最も小さいネイバー アドレスから発信されたパスが優先されます。

BGP マルチパス

BGP マルチパスでは、同じ宛先プレフィックスへの複数の等コスト BGP パスの IP ルーティングテーブルへのインストールが許可されます。その場合、宛先プレフィックスへのトラフィックは、インストールされたすべてのパス間で共有されます。

これらのパスは、ロードシェアリング用にベストパスとともにテーブルにインストールされます。BGP マルチパスはベストパスの選択には影響しません。たとえば、ルータではアルゴリズムに従って、ベストパスとしてパスの 1 つが引き続き指定され、そのベストパスが BGP ピアにアドバタイズされます。

マルチパスの候補になるためには、同じ宛先へのパスに、最適パスの特性に等しいこれらの特性が備わっている必要があります。

- 重量
- ローカル プリファレンス
- AS-PATH length
- オリジン コード
- Multi Exit識別子(MED)
- 次のいずれか。
 - ネイバー AS または sub-AS (BGP マルチパス機能が追加される前)
 - AS-PATH (BGP マルチパス機能が追加された後)

一部の BGP マルチパス機能により、マルチパス候補に関する追加要件が加わりました。

- パスは、外部またはコンフェデレーション外部の近接ルータ (eBGP) から学習されます。
- BGP ネクストホップへの IGP メトリックは、最適パスの IGP メトリックと等しくなる必要があります。

内部 BGP (iBGP) マルチパスの候補には次の追加要件があります。

- パスは、内部の近接ルータ (iBGP) から学習されます。
- ルータが不等コスト iBGP マルチパスで設定されない限り、BGP ネクストホップへの IGP メトリックは、最適パスの IGP メトリックと等しくなる必要があります。

BGP は、マルチパス候補から最近受信した最大 n 個のパスを IP ルーティングテーブルに挿入します。ここで、 n は、BGP マルチパスを設定するときに指定した、ルーティングテーブルに

インストールするルートの数です。マルチパスがディセーブルになっている場合のデフォルト値は 1 です。

不等コスト ロード バランシングでは、BGP リンク帯域幅も使用できます。



(注) 内部ピアへの転送前に、eBGP マルチパスで選択されたベストパスに対し、同等の next-hop-self が実行されます。

BGP の設定

ここでは、BGP の設定方法について説明します。

BGP のグローバル設定

仮想ルータを使用する場合、BGP を設定するとグローバル設定がすべての仮想ルータに適用されます。BGP プロセスを定義するために設定する追加の BGP 設定があります。仮想ルータを使用する場合は、仮想ルータごとに個別の BGP プロセスを作成できます。

始める前に

BGP グローバル設定オブジェクトを作成した後で、不要になった場合は削除できます。この手順に従ってオブジェクトを編集するだけですが、ダイアログボックスの下部にある [BGP グローバル設定オブジェクトの削除 (Delete BGP Global Settings Object)] ボタンをクリックします。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** メインのルーティングまたは仮想ルータのページで、[BGP グローバル設定 (BGP Global Settings)] ボタンをクリックします。
仮想ルータを表示している場合は、仮想ルータのメインリストに戻る必要があります。
- ステップ 3** BGP グローバル設定オブジェクトを設定していない場合は、[BGP グローバル設定オブジェクトの作成 (Create BGP Global Settings Object)] をクリックします。
- ステップ 4** (オプション) オブジェクト名の変更や、オブジェクトの説明の入力が可能です。デフォルトのオブジェクト名は BgpGeneralSettings です。
- ステップ 5** 少なくとも次の基本設定を行います。
 - **router bgp as-number**. as-number をクリックして、BGP プロセスの自律システム (AS) 番号を入力します。AS 番号には、1 ~ 4294967295 または 1.0 ~ 65535.65535 を指定できます。AS 番号は固有に割り当てられた値であるため、インターネットの各ネットワーク

が識別されます。システムは、RFC 5396 で定義されている **asplain** および **asdot** 表記をサポートしています。

- **log-neighbor-changes state**. *state* をクリックして、**enable** または **disable** を選択します。**enable** にした場合（推奨）、BGP ネイバーの変化（アップまたはダウン）とリセットがログに記録されます。これは、ネットワーク接続の問題をトラブルシューティングしたり、ネットワークの安定性を評価する際に役に立ちます。
- **transport path-mtu-discovery state**. *state* をクリックして、**enable** または **disable** を選択します。**enable** にした場合（推奨）、システムは2つの IP ホスト間のネットワークパスの最大伝送ユニット（MTU）サイズを確認し、最大 MTU パスを利用します。これにより、IP フラグメンテーションが回避されます。
- **fast-external-fallover state**. *state* をクリックして、**enable** または **disable** を選択します。**enable** にした場合（推奨）、システムは BGP ピ어링セッションに対して、直接接続されている外部ピアとの高速外部フォールオーバーを使用します。セッションは、リンクがダウンすると即座にリセットされます。BGP 高速外部フォールオーバーをディセーブルにした場合、BGP ルーティングプロセスはデフォルトのホールドタイマーの期限（3 回のキープアライブ）が切れるまで待ってからピ어링セッションをリセットします。
- **enforce-first-as state**. *state* をクリックして、**enable** または **disable** を選択します。**enable** にした場合（推奨）、システムは eBGP ピアから受信した、AS_PATH 属性内の最初のセグメントとしてそのピアの自律システム番号が示されていない着信アップデートを拒否します。このコマンドをイネーブルにすると、間違った設定のピアや権限のないピアが、別の自律システムからのルートであるかのようにルートをアドバタイズすることによってトラフィックを誤った宛先に送信する（ローカルルータをスプーフィングする）ことを回避できます。

ステップ 6 （オプション）オブジェクト本文の上にある [無効を表示（Show Disabled）] リンクをクリックして、その他のすべての設定行を追加します。

オプションの左側にある **[+]** をクリックすると、次のオプションを有効にすることができます。

- **bgp asnotation dot** を使用して無効にすることができます。デフォルトの表示を変更し、BGP 4 バイト自律システム番号の正規表現一致形式を、**asplain**（10 進数の値）から **asdot**（ドット付き表記）にします。システムでは自律システム番号のデフォルト表示形式として **asplain** が使用されますが、このコマンドをイネーブルにしていなくても、4 バイト自律システム番号を **asplain** と **asdot** の両方の形式で設定できます。

また、正規表現で 4 バイト自律システム番号とマッチングするためのデフォルト形式は **asplain** であるため、このコマンドをイネーブルにしない場合は、4 バイト自律システム番号とマッチングする正規表現はすべて **asplain** 形式で記述する必要があります。
- **bgp scan time 60** を使用して無効にすることができます。数値をクリックし、ネクストホップを検証するための BGP ルータのスキャン間隔を入力します（5 ～ 60 秒）。デフォルトは 60 秒です。
- **configure nexthop trigger state**. *state* をクリックして、**enable** または **disable** を選択します。BGP ネクストホップアドレストラッキングはイベントドリブンです。BGP プレフィッ

クスは、ピアリングセッションの確立時に自動的にトラッキングされます。ネクストホップの変更は、ルーティング情報ベース（RIB）で更新されると BGP に迅速に報告されます。この最適化によって、RIB にインストールされているルートのネクストホップの変更に対する応答時間が短縮されることで、全体的な BGP コンバージェンスが改善されます。BGP スキャナ サイクル間に最適パス計算が実行されると、変更内容だけが処理および追跡されます。ネクストホップアドレストラッキングをイネーブルにすると、次のコマンドが追加されます。新しいオブジェクトで全般オプションを設定しない場合、デフォルトではこの機能が有効になることに注意してください。

- **bgp nexthop trigger enable**を使用して無効にすることができます。BGP ネクストホップアドレストラッキングによって、BGP 応答時間を大幅に短縮できます。ただし、不安定な内部ゲートウェイプロトコル（IGP）ピアにより、BGP が不安定になることがあります。BGP への影響の可能性を軽減するために、不安定な IGP ピアリングセッションを積極的にダンプニングさせることを推奨します。
- **bgp nexthop trigger delay 5**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、BGP ネクストホップアドレストラッキングのルーティングテーブルウォーク間の遅延間隔を設定します。すべてのルーティングテーブルウォーク間の遅延間隔を調整して IGP の調整パラメータと一致させることで、BGP ネクストホップアドレストラッキングのパフォーマンスを向上させることができます。デフォルトの遅延間隔は 5 秒であり、高速で調整される IGP の場合はこれが最適な値です。よりゆっくり収束する IGP の場合は、IGP コンバージェンス時間に応じて遅延間隔を 20 秒以上に変更できます。遅延は 0 ～ 100 秒の間で設定できます。
- **bgp aggregate-timer 30**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、BGP ルートが集約される間隔を設定します（6 ～ 60 秒）。デフォルトは 30 秒です。
- **bgp router-id router-id**。router-id をクリックして、グローバルルータ ID として使用する IPv4 アドレスを入力します。この ID は、ルータ ID を指定していない仮想ルータ内のすべての BGP プロセスに使用されます。このコマンドをイネーブルにしていない場合、ルータ ID は仮想ルータに割り当てられている物理インターフェイスの最上位の IP アドレスに設定されます。このコマンドを使用すると、ルータ ID が安定したまま維持されます。
- **bgp maxas-limit value**。value をクリックして、BGP アップデートメッセージ内の AS-path 属性に含まれる自律システム番号の最大数（1 ～ 254）を入力します。AS-path 属性は、移動パケットの最短ルートになる送信元と宛先のルータ間の中間 AS 番号のシーケンスです。システムは、指定された値を超える多数の自律システムを AS-path 内に持つルートを廃棄します。このコマンドは、AS パス セグメント内の自律システム番号の数に制限を設定するだけでなく、AS パス セグメントの数を 10 に制限します。このコマンドをイネーブルにしない場合、ルートは廃棄されません。

ステップ 7 （オプション） BGP の詳細オプションを設定します。

必要に応じて [無効を表示（Show Disabled）] リンクをクリックして、次のコマンドを表示します。設定を編集すると、**timers** および **bestpath** の両方のオプションセットが表示されます。これは、明示的に設定していない場合でも有効になっているデフォルトがいくつかあるためです。

configure bgp advanced *advanced-option*

advanced-option をクリックして、次のいずれかを選択します。左の列の [...] をクリックして [複製 (Duplicate)] を選択すると、これらのオプションをすべて設定できます。

- **timers**を使用して無効にすることができます。BGP ネイバルータとの通信時に使用されるタイマーを設定します。

timers bgp 60 180 0

- 最初の値（デフォルトは60）：キープアライブ間隔。数値をクリックして、システムがキープアライブメッセージをBGP ネイバーに送信する頻度を入力します（0～65535 秒）。20 以下を指定しないことをお勧めします。20 以下を指定すると、ルートが不必要にフラッピングする可能性があります。
 - 2 番目の値（デフォルトは180）：ホールド時間。数値をクリックして、キープアライブメッセージを受信しなくなってから BGP ネイバーの **dead** を宣言するまでシステムが待機する時間を入力します（0～65535 秒）。
 - 3 番目の値（デフォルトは0）：最小ホールド時間。数値をクリックして、BGP ネイバーで設定される最小許容ホールド時間を指定します。最小許容ホールド時間は、このシステムのホールド時間として指定した間隔以下にする必要があります。範囲は0～65535 秒です。
- **bestpath**を使用して無効にすることができます。BGP ベストパス選択アルゴリズムで使用するオプションを設定します。**bgp default local-preference** コマンドがデフォルトで設定されていますが、コマンドの[+]をクリックして他のコマンドを追加することもできます。
 - **bgp default local-preference 100**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、BGP AS 内の他のルータに対するこのシステムの優先順位を示す値を入力します（0～4294967295）。デフォルト値は100 です。値が大きいくほど、優先度が高いことを示します。この優先度は、ローカル自律システム内のすべてのルータおよびアクセスサーバに送信されます。この属性はiBGP ピア間だけで交換され、ローカルポリシーを決定するために使用されます。
 - **bgp always-compare-med**を使用して無効にすることができます。異なる自律システムにあるネイバーからのパスの Multi Exit Discriminator (MED) の比較を許可します。デフォルトでは、異なる自律システム内のネイバーからのパスに対して、MED を比較しません。
 - **bgp bestpath compare-routerid**を使用して無効にすることができます。2つの異なるピア（ルータ ID を除くすべての属性が同じ）から2つの同一のルートが受信されたときに、最適パス選択のタイブレーカーとしてルータ ID を使用します。このコマンドがイネーブルになっている場合、その他の属性がすべてが等しければ、最も小さいルータ ID が最適パスとして選択されます。それ以外の場合は、最初に受信したルートが使用されます。
 - **bgp deterministic-med**を使用して無効にすることができます。隣接 AS からアドバタイズされた最適な MED パスを選択します。

- **bgp bestpath med missing-as-worst**を使用して無効にすることができます。MED 属性が欠落しているパスを最も優先度の低いパスとして設定します。デフォルトでは、MED が欠落しているルートが最適ルートと見なされます。
- **graceful-restart**を使用して無効にすることができます。高可用性またはクラスタ構成のシステムのグレースフルリスタートを設定します。
 - **bgp graceful-restart**を使用して無効にすることができます。ノンストップ フォワーディングのグレースフルリスタートを有効にします。グレースフルリスタートを使用すると、システムは、再起動中にアドレス グループのフォワーディング ステートを維持する機能をアドバタイズできます。
 - **bgp graceful-restart restart-time 120**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、リスタートイベントが発生した後、グレースフルリスタート対応ネイバーが通常の動作に戻るまでシステムが待機する最大時間を入力します（1 ～ 3600 秒）。デフォルトは 120 秒です。
 - **bgp graceful-restart stalepath-time 360**を使用して無効にすることができます。数値をクリックして、リスタートしているピアの古いパスをシステムが保持する最大時間を入力します（1 ～ 3600 秒）。すべての古いパスは、このタイマーが期限切れになった後に削除されます。デフォルト値は 360 秒です。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

BGP プロセスの設定

BGP グローバル設定を構成した後に、BGP プロセスを設定できます。仮想ルータを使用している場合は、仮想ルータごとに個別のプロセスを作成できます。システムまたは仮想ルータごとに、最大でも 1 つの BGP プロセスを設定できます。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。
- ステップ 3 [BGP] タブをクリックします。
- ステップ 4 次のいずれかを実行します。
 - 新しいプロセスを作成するには、[+] をクリックするか、[BGP オブジェクトの作成 (Create BGP Object)] ボタンをクリックします。

- 編集するオブジェクトの横にある [編集 (edit)] アイコン (✎) をクリックします。オブジェクトを編集すると、直接設定していない行が表示される場合があります。これら行は、設定されているデフォルト値を示すために公開されています。

プロセスが不要になった場合は、オブジェクトの [ごみ箱 (Trash)] アイコンをクリックして削除します。

ステップ 5 名前を入力し、オプションでオブジェクトの説明を入力します。

ステップ 6 プロセスの最小限の設定を行います。

- **router bgp as-number**。as-number をクリックして、グローバル設定で指定した BGP プロセスと同じ自律システム (AS) 番号を入力します。AS 番号には、1 ~ 4294967295 または 1.0 ~ 65535.65535 を指定できます。AS 番号は固有に割り当てられた値であるため、インターネットの各ネットワークが識別されます。システムは、RFC 5396 で定義されている asplain および asdot 表記をサポートしています。
- **configure address-family ip-protocol**。Ip protocol をクリックして、IPv4 または IPv6 を選択します。仮想ルータを使用している場合、IPv6 はグローバルルータにのみ設定できます。IPv4 は、すべての仮想ルータに設定できます。オプションを選択すると、**address-family ipv4 unicast** または **address-family ipv6 unicast** コマンドが追加され、さらに次のコマンドを設定する必要があります。
- **configure address-family {ipv4 | ipv6} settings**。settings をクリックして、**general** または **advanced** を選択します。これらのオプションの下で少なくとも 1 つのコマンドを設定する必要がありますが、これだけでは意味のあるプロセスには不十分です。

ステップ 7 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックして、ネットワークで正しく機能するようにプロセスをカスタマイズします。

ここまで説明したように、最小限のコマンドセットを設定すれば、オブジェクトを保存して後でプロセス設定をカスタマイズできます。以降のトピックでは、さまざまなオプションのセットについて説明します。少なくとも、ネットワーク設定を完了して、プロセスがルートを配布する先のネットワークを特定する必要があります。全般と詳細の両方の設定には、大部分の状況に適切となるコマンドのデフォルトがあります。

- [BGP 一般設定 \(535 ページ\)](#)
- [BGP 詳細設定の指定 \(536 ページ\)](#)
- [BGP でアドバタイズする ネットワークの設定 \(538 ページ\)](#)
- [BGP ルートの挿入の設定 \(540 ページ\)](#)
- [BGP 集約アドレス設定の設定 \(541 ページ\)](#)
- [IPv4 用の BGP フィルタ設定の指定 \(543 ページ\)](#)
- [BGP ネイバーの設定 \(544 ページ\)](#)
- [他のルーティングプロトコルからの BGP ルート再配布の設定 \(553 ページ\)](#)

ステップ 8 (オプション) プロセスのルータ ID を設定します。

BGP のグローバル設定で、BGP プロセスに使用するルータ ID を設定できます。必要に応じて、プロセスオブジェクトでも設定できます。プロセスオブジェクトで設定されたルータ ID は、グローバルルータ ID をオーバーライドします。これにより、特定の仮想ルータのグローバル値を簡単にオーバーライドすることができます。

次のコマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックし、その横にある [+] をクリックしてコマンドを有効にします。

- **bgp router-id router-id**。router-id をクリックして、このプロセスのルータ ID として使用する IPv4 アドレスを入力します。このコマンドをイネーブルにしていない場合、ルータ ID はグローバルルータ ID、または仮想ルータに割り当てられている物理インターフェイスの最上位の IP アドレスに設定されます。このコマンドを使用すると、ルータ ID が安定したまま維持されます。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

BGP 一般設定

全般設定では、アドミニストレーティブ ディスタンス、タイマー、ネクストホップアドレス トラッキング (IPv4 のみ) が定義されます。これらのオプションには、ほとんどのネットワークに適したデフォルト設定があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。

ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁) をクリックします。

ステップ 3 [BGP] タブをクリックします。

ステップ 4 BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。

ステップ 5 **configure address-family ipv4** または **ipv6** 行を見つけます。general オプションがすでに選択されている場合は、次の手順に進みます。それでも、次の対応を試してください。

- settings 変数がまだ表示されている場合は、それをクリックして **general** を選択します。
- 高度なオプションをすでに設定している場合は、コマンドの左側にある [...] ボタンをクリックして、[複製 (Duplicate)] を選択します。次に、settings をクリックして **general** を選択します。

ステップ 6 次のコマンドを設定します。

- **distance bgp 20 200 200** を使用して無効にすることができます。BGP のアドミニストレーティブ ディスタンスを設定します (1 ~ 255)。これらの数値は、システムが最適なルー

トを選択したときに他のルーティングプロセスに割り当てられる管理値との相対的な値です。通常は、値が大きいほど、信頼性の格付けが下がります。他のプロトコルが外部BGP（eBGP）によって実際に学習されたルートよりも良いルートをノードに提供できることがわかっている場合、または一部の内部ルートがBGPによって優先されるべきである場合、このコマンドを使用します。アドミニストレーティブディスタンスが255のルートはルーティングテーブルに格納されません。数値は、次を意味します。

- 最初の値（デフォルトは20）：外部ディスタンス。数値をクリックして、外部BGPルートのアドミニストレーティブディスタンスを入力します。外部自律システムから学習されたルートは、外部ルートです。
- 2番目の値（デフォルトは200）：内部ディスタンス。数値をクリックして、内部BGPルートのアドミニストレーティブディスタンスを入力します。ローカル自律システムのピアから学習されたルートは、内部ルートです。内部BGPルートのアドミニストレーティブディスタンスを変更することは危険と見なされており、推奨されません。不適切な設定により、ルーティングテーブルの不整合性やルーティングの中断が発生する可能性があります。
- 3番目の値（デフォルトは200）：ローカルディスタンス。数値をクリックして、ローカルBGPルートのアドミニストレーティブディスタンスを入力します。ローカルルートは、BGPルーティングプロセスで **network** コマンドによりリストされるネットワーク（つまりプロセスがアドバタイズしているネットワーク）、または別のプロセスからBGPに再配布されているネットワーク向けのものです。

ステップ7 [OK] をクリックします。

BGP 詳細設定の指定

詳細設定を使用して、特別な状況下でのみ必要となる各種オプションを設定します。これらのオプションのほとんどは、デフォルトでは無効になっています。

始める前に

table-map コマンドを設定する場合は、初めに **[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)]** ページに移動して、コマンドで必要となるスマートCLIルートマップオブジェクトを作成する必要があります。

手順

ステップ1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。

ステップ2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。

ステップ3 [BGP] タブをクリックします。

ステップ 4 BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。

ステップ 5 **configure address-family ipv4** または **ipv6** 行を見つけます。 **advanced** オプションがすでに選択されている場合は、次の手順に進みます。それでも、次の対応を試してください。

- **settings** 変数がまだ表示されている場合は、それをクリックして **advanced** を選択します。
- すでに全般オプションを設定している場合は、コマンドの左側にある [...] ボタンをクリックして [複製 (Duplicate)] を選択します。次に、**settings** をクリックして **advanced** を選択します。

ステップ 6 次のコマンドを設定します。最初にオブジェクトを作成するときに、最初のコマンド以外のすべてのコマンド表示するには [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックする必要があります。

コマンドを有効にするには、コマンドの [+] をクリックします。

- **bgp redistribute-internal** を使用して無効にすることができます。EIGRP や OSPF などの内部ゲートウェイプロトコル (IGP) への iBGP の再配布を設定します。iBGP を IGP に再配布する際は、慎重に行ってください。再配布されるプレフィックスの数を制限するために IP prefix-list ステートメントおよび route-map ステートメントを使用します。フィルタリングされていない BGP ルーティングテーブルを IGP に再配布すると、通常の IGP ネットワーク動作に影響を及ぼす可能性があります。このコマンドはデフォルトで有効になっているため、オフにするには [-] ボタンをクリックする必要があります。
- **bgp suppress-inactive** を使用して無効にすることができます。RIB (非アクティブなルート) にインストールされていないルートがピアにアドバタイズされることを防止します。デフォルトの設定では、BGP は非アクティブなルートをアドバタイズします。BGP は、RIB にインストールされていないルートに RIB 失敗フラグを付けることに注意してください。このフラグは、**show bgp** コマンドの出力にも、Rib-Failure (17) のように表示されます。このフラグは、ルートまたは RIB に関するエラーまたは問題を示すものではありません。
- **auto-summary** を使用して無効にすることができます。(IPv4 のみ) サブネットルートをネットワークレベルのルートに自動的に集約します。ルート集約により、ルーティングテーブルにおけるルーティング情報の量が少なくなります。切断されているサブネット間のルーティングを実行する必要がある場合は、自動サマライズをディセーブルにします。自動サマライズをディセーブルにすると、サブネットがアドバタイズされます。
- **synchronization** を使用して無効にすることができます。BGP と、OSPF などの内部ゲートウェイプロトコル (IGP) システムの間の同期を有効にします。通常、ルートがローカルであるか IGP に存在する場合を除き、BGP スピーカーは外部ネイバーにルートをアドバタイズしません。この機能により、自律システム内のルータおよびアクセス サーバは、BGP が他の自律システムでルートを使用可能にする前にルートを確保できるようになります。自律システム内の他のルータが BGP を実行していない場合、このコマンドを使用します。
- **table-map route-map options**。(IPv4 のみ) BGP ルーティングテーブル内で更新されたルートのメトリック、タグ値、またはトラフィックインデックスを設定するルートマップを適用するか、ルートが RIB にダウンロードされるかどうかを制御します。**route map** をクリックして、ルートマップを定義するスマート CLI オブジェクトを選択します。ルート

マップでは、IP アクセスリスト、自律システムパス、コミュニティ、プレフィックスリスト、およびネクストホップに対して **match** 句を使用できます。

options をクリックして、空白または **filter** のいずれかを選択することで、ルートマップの使用方法を決定できます。

- **filter** を選択しない場合、ルートが RIB にインストールされる前に、ルートマップを使用してルートの特定のプロパティが設定されます。ルートは、ルートマップで許可されているか拒否されているかにかかわらず、常にダウンロードされます。
 - **filter** を選択すると、ルートマップは BGP ルートが RIB にダウンロードされるかどうかを制御します。ルートマップで許可されているルートのみがダウンロードされます。拒否されたルートはダウンロードされません。
 - **default-information originate** を使用して無効にすることができます。デフォルトのルート（ネットワーク 0.0.0.0）をアドバタイズするように BGP を設定します。 **default-information originate** コマンドの設定は、 **network** コマンドの設定に似ています。ただし、 **default-information originate** コマンドではルート 0.0.0.0 を明示的に再配布する必要があります。 **network** コマンドでは、ルート 0.0.0.0 が OSPF などの内部ゲートウェイプロトコル（IGP）のルーティングテーブルに存在することのみが必要です。このため、デフォルトルートを配布する場合に **network** コマンドが優先されます。
 - **maximum paths 1** を使用して無効にすることができます。ルーティングテーブルにインストールできる並列 BGP ルートの最大数を制御します（1～8）。このコマンドは、BGP ピアリングセッションに等コストまたは非等コスト マルチパス ロードシェアリングを設定するために使用されます。ルートを BGP ルーティングテーブル内のマルチパスとして導入する場合、ルートはすでにある他のルートと同じネクストホップを持つことはできません。BGP ルーティングプロセスは、BGP マルチパス ロードシェアリングが設定されている場合、BGP ピアに最適パスをアドバタイズします。等コストルートの場合、最下位のルータ ID を持つネイバーからのパスは、ベストパスとしてアドバタイズされます。
- BGP 等コスト マルチパス ロードシェアリングを設定するには、すべてのパス属性を同じにする必要があります。パスの属性には、重み値、ローカルプリファレンス、自律システムパス（長さだけでなく、属性全体）、オリジンコード、MED、および Interior Gateway Protocol（IGP）のディスタンスが含まれます。
- **maximum paths ibgp 1** を使用して無効にすることができます。ルーティングテーブルにインストールできる内部 BGP ルートの最大数を制御します（1～8）。マルチパス iBGP の考慮事項は、上記の **maximum paths** コマンドで説明されているものと同じです。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

BGP でアドバタイズする ネットワークの設定

BGP ルーティングプロセスによってアドバタイズ可能なネットワークを定義する必要があります。

始める前に

アドバタイズするネットワークを定義するネットワークオブジェクトを作成します。BGP 用に設定するアドレスファミリに応じて、IPv4 または IPv6 ネットワーク、またはその両方を定義できます。

ネットワークオブジェクトで大規模なネットワークスペースが指定されている場合は、アドバタイズしたくない大きなスペース内のサブネットを除外するために、ネットワークオブジェクトに対して適用するルートマップを作成することもできます。ルートマップの仕様に一致するルートだけがアドバタイズされます。Smart CLI を使用して、ルートマップオブジェクトを作成します。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン () をクリックします。
- ステップ 3 [BGP] タブをクリックします。
- ステップ 4 BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。

network コマンドは、**configure address family ipv4** または **ipv6** コマンドの下のコマンドセット内にあります。アドバタイズするネットワークを設定するには、アドレスファミリを設定する必要があります。

各アドレスグループ内の **network** コマンドは、設定するアドレスファミリに一致するアドレスを指定する必要があります。

- ステップ 5 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしてすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **network** または **network route-map** コマンドを有効にします。
 - **network-object**。変数をクリックして、アドバタイズするネットワークを定義するネットワークオブジェクト (IPv4 ネットワークアドレスとマスク、または IPv6 ネットワークアドレスとプレフィックス) を選択します。
 - **route-map map-tag**。変数をクリックし、ネットワークオブジェクトに適用するルートマップを選択して、範囲内のどのアドレスをアドバタイズするかをフィルタリングします。
 - (任意、IPv6 のみ) **prefix-name**。変数をクリックし、プレフィックスをアドバタイズする DHCPv6 プレフィックスの名前を入力します。このオプションを設定すると、ネットワークオブジェクトはプレフィックスのサブネットとして機能します。このオプションを使用するには、DHCPv6 プレフィックス委任クライアントをイネーブルにする必要があります。これを行うには、FlexCnfig を使用して、インターフェイス コンフィギュレーション モードで **ipv6 dhcp client pd** コマンドをインターフェイスに追加する必要があります。
- ステップ 6 [...] > [重複 (Duplicate)] (**network** または **network route-map** コマンドの横) をクリックして、アドバタイズする追加のネットワークを設定します。

ステップ7 [OK] をクリックします。

BGP ルートの挿入の設定

BGP ルーティングテーブルに固有性の強いルートを注入するよう条件付きルート注入を設定することができます。条件付きルート注入により、一致するものがなくても、より具体的なプレフィックスを BGP ルーティングテーブルにすることができます。注入されたプレフィックスには、有効な親ルートが存在する必要があります。集約ルート（既存プレフィックス）と同じかそれより具体的なプレフィックスのみを注入できます。

始める前に

プレフィックスを定義するために必要なルートマップを作成する必要があります。これらのルートマップは、手順で説明されている要件を満たしている必要があります。

手順

ステップ1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。

ステップ2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。

ステップ3 [BGP] タブをクリックします。

ステップ4 BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。

route injection コマンドは、**configure address family ipv4** または **ipv6** コマンドの下のコマンドセット内にあります。アドバタイズするネットワークを設定するには、アドレスファミリを設定する必要があります。

ステップ5 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしてすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **bgp inject-map** コマンドを有効にします。

ステップ6 コマンドのプロパティを設定します。

- **inject-map inject-map** : 変数をクリックし、作成されてルーティングテーブルにインストールされるプレフィックスを定義するルートマップを選択します。注入されたプレフィックスは、ローカル BGP RIB に格納されます。有効な親ルートが存在する必要があります。集約ルート（既存プレフィックス）と同じかそれより具体的なプレフィックスのみを注入できます。ルートマップでは、プレフィックスリストを使用して、注入するルートを指定する必要があります。
- **exist-map exist-map** : 変数をクリックし、BGP スピーカーが追跡するプレフィックスを定義するルートマップを選択します。このルートマップでは、プレフィックスリストを使用して、集約プレフィックスとルートソースを指定する必要があります。ルートソースは、サブネットではなく、ルータ (10.2.1.1/32 など) になります。

- **options** : 必要に応じて、変数をクリックし、**copy-attributes** を選択します。このオプションにより、集約ルートと同じ属性を継承するように、注入されたプレフィックスが設定されます。このキーワードを選択しない場合、注入されたプレフィックスは、ローカルで生成されたルートのデフォルト属性を使用します。

ステップ 7 追加のルート注入ルールを設定するには、**[...] > [重複 (Duplicate)]** (**bgp inject-map** コマンドの横) をクリックします。

ステップ 8 **[OK]** をクリックします。

BGP 集約アドレス設定の設定

BGP ネイバーはルーティング情報を格納し、交換しますが、設定される BGP スピーカーの数が増えるに従って、ルーティング情報の量が増えます。ルート集約は、複数の異なるルートの属性を合成し、1 つのルートだけがアドバタイズされるようにするプロセスです。集約プレフィックスは、クラスレス ドメイン間ルーティング (CIDR) の原則を使用して、複数の隣接するネットワークを、ルーティング テーブルに要約できる IP アドレスのクラスレス セット 1 つに合成します。結果として、アドバタイズの必要なルートは少なくなります。

キーワードを指定せずに集約ルートを設定すると、指定された範囲内にあるより具体的な BGP ルートが使用できる場合、BGP ルーティング テーブルに集約 エントリが作成されます。(集約に一致する長いプレフィックスは、ルーティング情報ベース (RIB) に存在する必要があります)。集約ルートは自律システムからのルートとしてアドバタイズされます。また、この集約ルートには、情報が失われている可能性を示すために、アトミック集約属性が設定されますアトミック集約属性は、**as-set** キーワードを指定しない限り設定されます。

次の手順では、特定のルートを 1 つのルートに集約する設定方法について説明します。

始める前に

ルートマップを適用して、集約されるルート、または集約ルートに設定されている属性を微調整するには、Smart CLI ルートマップオブジェクトを作成します。

手順

ステップ 1 **[デバイス (Device)]** をクリックしてから、**[ルーティング (Routing)]** サマリーをクリックします。

ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁) をクリックします。

ステップ 3 **[BGP]** タブをクリックします。

ステップ 4 BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。

aggregation コマンドは、**configure address family ipv4** または **ipv6** コマンドの下のコマンドセット内にあります。集約を設定するには、アドレスファミリを設定する必要があります。

ステップ 5 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしてすべてのコマンドを公開し、[+] をクリックして **configure aggregate-address** コマンドを有効にします。

ステップ 6 *map-type* 変数をクリックし、この特定の集約ルートに適用するルートマップのタイプを選択します。

このオプションでは、オブジェクトに追加される **aggregate-address** コマンドに含めるパラメータを決めます。最大 3 つの独立したルートマップを適用して、集約からのルートを抑制し、ルートをアドバタイズし、集約ルートに適用する属性を定義できます。

- ルートマップを適用する必要がある場合は、**no-map** を選択します。
- 3 つのオプションすべてにルートマップを適用する場合は、**all** を選択します。
- すべてではなく、1 つまたは 2 つのマップを適用する場合は、適切なキーワードの組み合わせを選択します。**suppress-map**、**advertise-map**、**attribute-map**、**suppress-advertise**、**suppress-attribute**、**advertise-attribute**。

ステップ 7 集約するルートのプロパティを設定します。

次に、プロパティの完全なリストを示します。表示される内容は、選択するマップタイプによって異なります。

- **network-object**。変数をクリックし、集約するアドレス空間を定義するネットワークオブジェクトを選択します。オブジェクトでは、設定しているアドレスタイプに一致する IPv4 または IPv6 アドレッシングを使用する必要があります。たとえば、すべての 10.0.0.0/8 サブネットのルートを集約できます。
- **suppress-map suppress-route-map**。変数をクリックし、ルートマップを選択して、指定されたルートのアドバタイズメントを抑制します。ルートマップの **match** 句を使用して、集約のより具体的な一部のルートを選択的に抑制し、他のルートは抑制しないようにできます。ルートマップは、アクセスリストと自律システムパスに基づいてルートを照合できます。
- **advertise-map advertise-route-map**。変数をクリックし、集約ルートの異なるコンポーネント (AS_SET やコミュニティなど) を構築するために使用される特定のルートを選択するルートマップを選択します。これは、集約のコンポーネントが別々の自律システムにあり、AS_SET で集約を作成して同じ自律システムの一部にアドバタイズする場合に役立ちます。AS_SET から特定の自律システム番号を省略し、集約が受信ルータの BGP ループ検出メカニズムによってドロップされるのを防ぐことを忘れてはなりません。ルートマップは、アクセスリストと自律システムパスに基づいてルートを照合できます。
- **attribute-map attribute-route-map**。変数をクリックし、集約ルートの属性を変更するルートマップを選択します。これは、AS_SET を構成するルートの 1 つが **community no-export** 属性 (集約ルートがエクスポートされるのを防ぐ) などの属性で設定されている場合に役立ちます。
- **options**。変数をクリックし、次のオプションのいずれか、またはすべてを選択するか、いずれも選択しません。

- **as-set**。集約ルートの自律システム設定パス情報を生成します。このルートにアドバタイズされるパスは、集約中のすべてのパス内に含まれるすべての要素で構成される AS_SET になります。このルートは集約されたルート変更に関する自律システムパス到着可能性情報として継続的に削除して更新する必要があるため、多くのパスを集約する際にはこのキーワードを使用しないでください。
- **summary-only**。すべてのネイバーへの、より具体的なルートのアドバタイズメントを抑制します。

ステップ 8 [...] > [重複 (Duplicate)] (configure aggregate-address コマンドの横) をクリックして、集約する追加ルートを設定します。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

IPv4 用の BGP フィルタ設定の指定

システムが他のルーティングプロトコルから学習する、または他のルーティングプロトコルにアドバタイズする、ルーティング情報を制限するフィルタルールを作成できます。

ここで説明する設定は、すべてのローカルプロセスに適用され、すべての BGP ネイバーへのアップデートのフィルタ処理に使用されます。ネイバー設定では、ネイバーごとに異なるフィルタルールを設定できます。

始める前に

各フィルタルールに必要なスマート CLI 標準アクセスリストオブジェクトを作成します。拒否アクセス制御エントリ (ACE) を使用してエントリに一致するルートを除外し、更新する必要があるルートの ACE を許可します。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (🔍) をクリックします。
- ステップ 3** [BGP] タブをクリックします。
- ステップ 4** BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- filtering コマンドは、**configure address family ipv4** コマンドの下のコマンドセット内にあります。フィルタ処理を設定するには、アドレスファミリを設定する必要があります。これらのルールは IPv6 には使用できません。
- ステップ 5** [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしてすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **configure filter-rules direction** コマンドを有効にします。

ステップ 6 [direction] をクリックし、**in**（インバウンドアップデートをフィルタ処理する場合）または **out**（アウトバウンドアップデートをフィルタ処理する場合）を選択します。

ステップ 7 インバウンドフィルタの場合は、必要に応じて、アップデートをフィルタ処理するインターフェイスを指定できます。インターフェイスを指定しない場合、フィルタは任意のインターフェイスで受信されるすべてのアップデートに適用されます。

- a) **[+]** をクリックして **distribute-list acl-name in interface interface** コマンドを有効にします。
- b) **[interface]** 変数をクリックし、インターフェイスを選択します。

ステップ 8 アウトバウンドフィルタの場合は、必要に応じて、プロトコルを指定して、そのルーティングプロセスにアドバタイズされたルートにフィルタを制限できます。

distribute-list out コマンドには2つの形式があります。一方には **[protocol]** 変数の後に **[identifier]** 識別子があり、もう一方には **[identifier]** 識別子がありません。次のプロトコルを選択できますが、追加の識別子情報を提供する必要があるかどうかに基づいて、これらのコマンドのバージョン間でプロトコルが分けられます。

- **connected** : システムのインターフェイスに直接接続されているネットワークに対して確立されたルート用です。
- **static** : 手動で作成したスタティックルート用です。
- **rip** : RIP にアドバタイズされたルート用です。
- **bgp autonomous-system** : BGP にアドバタイズされたルート用です。 **[identifier]** をクリックし、システムで定義されている BGP プロセスの自律システム番号を入力します。
- **eigrp autonomous-system** : EIGRP にアドバタイズされたルート用です。 **[identifier]** をクリックし、システムで定義されている EIGRP プロセスの自律システム番号を入力します。
- **ospf process-id** : OSPF にアドバタイズされたルート用です。 **[identifier]** をクリックし、システムで定義されている OSPF プロセスのプロセス ID を入力します。

ステップ 9 別のフィルタルールを定義するには、**[...] > [重複 (Duplicate)]** (**configure filter-rules** コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 10 **[OK]** をクリックします。

BGP ネイバーの設定

BGP がルーティングアップデートを交換するネイバーを定義する必要があります。

始める前に

いくつかのオプションコマンドには、ルートマップ、プレフィックスリストなどのために Smart CLI オブジェクトが必要です。設定が必要なオプションを調べて、オブジェクトが必要かどうかを判断してください。Smart CLI オブジェクトは、関連する BGP コマンドを設定する前に作成する必要があります。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。
- ステップ 2** 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。
- ステップ 3** [BGP] タブをクリックします。
- ステップ 4** BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。
- neighbor コマンドは、**configure address family ipv4** または **ipv6** コマンドの下のコマンドセット内にあります。ネイバーは、アドレスファミリごとに個別に設定する必要があります。
- ステップ 5** [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしてすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **configure neighbor** コマンドを有効にします。
- ステップ 6** neighbor コマンドで基本ネイバーパラメータを設定します。
- **neighbor neighbor-address** : 変数をクリックし、設定しているアドレスグループに応じて、BGP ネイバールータの IPv4 アドレスまたは IPv6 アドレスを入力します。
 - **remote-as as-number** : 変数をクリックし、BGP ネイバールータの自律システム番号を入力します。
 - **config-options** : 変数をクリックし、**properties** を選択します。デフォルトで設定されているプロパティだけで、ネイバーがアクティブになります。この手順で説明されているように、他のオプションを調整できます。
- ステップ 7** (オプション) 。ネイバーの全般設定を指定します。
- a) [+] をクリックして **configure neighbor neighbor-address remote-as settings** コマンドを有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
 - b) [settings] をクリックし、**general** を選択します。
 - c) **configure neighbor description** コマンドで、変数をクリックし、最大 80 文字のネイバーの説明 (場所や目的など) を入力するか、説明が必要ない場合は [-] をクリックしてコマンドを無効にします。説明にスペースや疑問符を含めることはできません。
 - d) (IPv4 のみ) **configure neighbor shutdown** コマンドは、最初は有効になっています。このコマンドにより、この BGP ネイバーとの通信が無効になり、アクティブなセッションが終了して、関連するルーティング情報がすべて削除されます。このネイバーとアクティブに通信するには、[-] をクリックしてこのコマンドを無効にします。
 - e) **configure neighbor fall-over bfd** コマンドで、[option] をクリックして、**single-hop** または **multi-hop** (BFD 構成に基づいて) を選択するか、[-] をクリックしてコマンドを無効にします。
- このコマンドにより、Bidirectional Forwarding Detection (BFD) からフォワーディングパス検出エラーメッセージを受信するために BGP が登録されます。シングルホップを選択する

かマルチホップを選択するかは、このネイバーへの接続に使用されるインターフェイスに対して作成して適用した BFD テンプレートのタイプによって異なります。ここでの選択が BFD テンプレートと一致していることを確認してください。BFD テンプレートを作成と適用には FlexConfig を使用する必要があります。

ステップ 8 (オプション)。ネイバーの詳細設定を指定します。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address remote-as settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は [+] をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**advanced** を選択します。
- c) **neighbor password** コマンドで、[secret] 変数をクリックし、ネイバーの認証時に使用するパスワードを含む秘密鍵オブジェクトを選択するか、メッセージダイジェスト 5 (MD5) 認証を使用しない場合は [-] をクリックしてコマンドを無効にします。BGP オブジェクトの編集時に鍵オブジェクトを作成できます。

秘密鍵オブジェクトには、大文字と小文字が区別される最大 25 文字のパスワードを含める必要があります。この文字列には、英数字とスペースおよび特殊文字の `~!@#\$%^&\*()-\_+=|\}]{["`:/><.,?` を使用できます。ただし、数字-スペース-任意の文字の形式ではパスワードを指定できません。数字の後にスペースを使用すると、認証に失敗する原因となることがあります。

ネイバーが同じパスワードを使用するように設定されていることを確認します。

- d) **configure neighbor hops** コマンドで、[options] 変数をクリックして次のいずれかを選択するか、ピアが複数ホップ離れていない（つまり、このシステムに直接接続されていない）場合は [-] をクリックしてコマンドを無効にします。これらのオプションはルーティングループや振動ルートを発生させる可能性があるため、注意して使用してください。直接接続されたピアのみを設定することをお勧めします。
 - **ebgp-multihop**。直接接続されていないネットワーク上の外部ピアからの BGP 接続を受け入れ、またそのピアへの BGP 接続を試みます。このオプションを選択すると、次のコマンドが追加されます。
 - **neighbor ebgp-multihop 255**。[255] をクリックし、1 ～ 255 のホップ数で存続可能時間の値を入力します。
 - **neighbor disable-connected-check**。ループバック インターフェイスを使用するシングルホップピアとの eBGP ピアリングセッションを確立するには、[+] をクリックしてこのコマンドを有効にして、接続検証を無効にします。このコマンドを使用しない場合、ピアが同じネットワークセグメントに直接接続されていないと、ピアリングセッションは確立されません。
 - **ttl-security-hop**。BGP ピアリングセッションを保護し、2 つの外部 BGP (eBGP) ピアを区切るホップの最大数を設定します。このオプションを選択すると、次のコマンドが追加されます。

neighbor ttl-security hops *hop-count* : 変数をクリックし、ピアを区切るホップの最大数を 1 ～ 254 の範囲で入力します。

neighbor ttl-security コマンドは、CPU 利用率に基づく攻撃から BGP ピアリングセッションを保護するための簡単なセキュリティメカニズムを提供します。この種の攻撃は、通常、パケットヘッダーの送信元と宛先の IP アドレスを偽造した大量の IP パケットでネットワークをあふれさせてネットワークをディセーブルにしようとする力任せのサービス拒否 (DoS) 攻撃です。

この機能は、TTL カウントがローカルの設定値以上である IP パケットだけを受け入れるという IP パケットの設計上の動作を利用したものです。IP パケットの TTL カウントを完全に偽造することは一般には不可能であると考えられます。内部の送信元ネットワークまたは宛先ネットワークにアクセスしない限り、信頼できるピアからの TTL カウントに完全に一致するパケットを偽造することはできません。

この機能の効果を最大化するには、ローカルネットワークと外部ネットワークの間のホップカウントが一致するように **hop-count** の値を厳密に設定する必要があります。また、この機能をマルチホップ ピアリングセッションに対して設定する場合は、パスがそれぞれで異なる点についても考慮する必要があります。ネットワーク内のすべてのルータでこの機能が設定されていることを確認してください。

- e) **neighbor version** コマンドで、[*version-number*] 変数をクリックし、「4」と入力してソフトウェアに BGP バージョン 4 を強制的に使用させるか、[-] をクリックしてコマンドを無効にします。ソフトウェアはデフォルトではバージョン 4 を使用し、必要に応じて動的にバージョン 2 にネゴシエートします。このコマンドで「4」を設定すると、バージョンネゴシエーションが防止されます。
- f) **neighbor transport connection-mode** コマンドで、[*options*] 変数をクリックして TCP 接続が **active** または **passive** のいずれであるかを選択するか、[-] をクリックしてコマンドを無効にして、モードをデフォルトのままにします。
- g) **neighbor transport path-mtu-discovery** コマンドで、[*options*] 変数をクリックし、**blank** を選択してパス MTU ディスカバリを有効にするか、**disable** を選択してパス MTU ディスカバリを無効にします。パス MTU ディスカバリはデフォルトで実行されるため、空白を選択することは、[-] をクリックしてコマンドを無効にすることと同じです。パス MTU ディスカバリにより、BGP セッションは、より大きな MTU リンクを利用することが可能になります。

ステップ 9 (オプション)。ネイバーの移行設定を指定します。

移行設定では、**neighbor local-as** コマンドを設定します。**neighbor local-as** コマンドを使用して、eBGP ネイバーから受信するルート of the 自律システム番号を追加および削除することで、AS_PATH 属性がカスタマイズされます。このコマンドの設定により、自律システム番号を移行するために、外部ピアに対して別の自律システムのメンバーとしてルータを表示できます。この機能を使用すると、既存のピアリング関係を維持したまま、ネットワークオペレータが通常のサービス時間内に顧客を新しい設定に移行できるため、BGP ネットワークの自律システム番号を変更するプロセスが簡単になります。

この移行は、正しい eBGP ピアリングセッションについてのみ実行できます。2 つのピアが、コンフェデレーションの異なるサブ自律システムにある場合、このコマンドは機能しません。

注意

BGP は、ネットワーク到着可能性情報を維持し、ルーティングループを防ぐために、ルートが通過する各 BGP ネットワークから自律システム番号をプリペンドします。このコマンドは自律システムの移行のためにのみ設定し、移行が完了したら設定を解除してください。この手順は、経験豊富なネットワークオペレータ以外は実行しないようにしてください。不適切な設定によりルーティングループが発生する可能性があります。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address remote-as settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は [+] をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**migration** を選択します。これにより、次のコマンドが追加されます。

configure neighbor-address local-as local-as-number options

- c) [local-as-number] 変数をクリックし、ローカル自律システム (AS) 番号を入力して、AS_PATH 属性の先頭に 1 ~ 4294967295 (asplain 表記) または 1.0 ~ 65535.65535 (asdot 表記) を追加します。ローカル BGP ルーティングプロセスからの自律システム番号またはリモートピアのネットワークからの自律システム番号を指定することはできません。
- d) [options] 変数をクリックし、次のいずれかを選択します。このリスト内の項目 (**none** 以外) を選択すると、リスト内のその上のすべてのオプションも選択されることに注意してください。これは予期されることです。オプションは完全に独立しているわけではありません。

- **none** : 次のオプションは設定しないでください。
- **no-prepend** : eBGP ネイバーから受信されたルートにローカル自律システム番号を追加しないでください。
- **replace-as** : 実際の自律システム番号を eBGP アップデートのローカル自律システム番号で置き換えます。ローカル BGP ルーティングプロセスからの自律システム番号は、追加されません。
- **dual-as** : 実際の自律システム番号 (ローカル BGP ルーティングプロセスからの) を使用するか、ローカル自律システム番号を使用してピアリングセッションを確立するように eBGP ネイバーを設定します。

ステップ 10 (オプション。IPv4 のみ) ネイバーのハイアベイラビリティ (HA) 設定を指定します。

HA モード設定では、個々の BGP ネイバーのグレースフルリスタート機能を有効または無効にする **neighbor ha-mode graceful-restart** コマンドが設定されます。グレースフルリスタート機能が BGP ピアで有効になっている場合は、**disable** キーワードを使用して無効にできます。

グレースフルリスタート機能は、セッションの確立時に OPEN メッセージのノンストップフローディング (NSF) 対応ピアと NSF 認識ピアの間でネゴシエートされます。BGP セッションが確立された後にグレースフルリスタート機能を有効にする場合は、ソフトリセットまたはハードリセットによってセッションを再起動する必要があります。

HA モード設定では、個々のネイバーのグレースフルリスタートを設定します。代わりに、BGP グローバル設定を使用して、すべてのネイバーのグレースフルリスタートを有効にできます。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address remote-as settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は[+]をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**ha-mode** を選択します。
- c) グレースフルリスタートを無効にする場合は、**neighbor ha-mode graceful-restart** コマンドの [options] をクリックし、**disable** を選択します。以前の無効化アクションを取り消すには、空白を選択します。

ステップ 11 (オプション)。ネイバーのアクティベーション オプションを設定します。

新しいネイバーを設定すると、デフォルトでアクティブになります。ネイバーを最初に無効にする場合、または他のアクティベーション設定を指定する場合は、アクティベーション設定を有効にする必要があります。

- a) **configure neighbor neighbor-address activate activate-options** コマンドを有効にするには、[+] をクリックします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [activate-options] をクリックし、**properties** を選択します。
- c) **neighbor neighbor-address activate** コマンドが有効な状態で追加されます。コマンドを無効にして、ネイバーを最初に無効として設定するには、[-] をクリックしてください。ネイバーと通信する準備ができたなら、このオブジェクトを編集してネイバーを有効にする必要があります。

ステップ 12 (オプション)。ネイバーのアクティベーション設定でフィルタ処理を設定します。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address activate settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は[+]をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**filtering** を選択します。
- c) 次の **neighbor** コマンドの任意の組み合わせを使用して、このネイバーから受信されるプレフィックスまたはこのネイバーに送信されるプレフィックスを制御するようにフィルタ処理を設定します。使用しないものを無効にするには、[-] をクリックします。これらのコマンドはすべて、着信方向と発信方向の両方でフィルタ処理を許可します。双方向を設定する場合は、コマンドに対して [...] > [複製 (Duplicate)] をクリックしてください。

同じ方向のネイバーに **neighbor distribute-list** コマンドと **neighbor prefix-list** コマンドの両方を適用しないでください。これら 2 つのコマンドは相互に排他的であり、インバウンドまたはアウトバウンドの各方向に適用できるのは、いずれかだけです。

- **distribute-list acl options** : (IPv4 のみ) 選択した標準アクセスリスト (ACL) に基づいてプレフィックスをフィルタ処理します。次に、[options] をクリックし、フィルタを **in** 方向で適用するか **out** 方向で適用するかを選択します。

- **route-map** *route-map options* : 選択したルートマップに基づいてプレフィックスをフィルタ処理します。次に、[options] をクリックし、フィルターを **in** 方向で適用するか **out** 方向で適用するかを選択します。ルートマップ内で、アクセスリスト、AS パス、プレフィックス、および配布リストに基づいてフィルタ処理を設定できます。
 - **prefix-list** *prefix-list options* : 選択した IPv4 または IPv6 プレフィックスリストに基づいてプレフィックスをフィルタ処理します。次に、[options] をクリックし、フィルターを **in** 方向で適用するか **out** 方向で適用するかを選択します。
 - **filter-list** *as-path options* : 選択した AS パスフィルターオブジェクトに基づいてプレフィックスをフィルタ処理します。次に、[options] をクリックし、フィルターを **in** 方向で適用するか **out** 方向で適用するかを選択します。
- d) **configure prefix-limit neighbor** *neighbor-address limit-options* コマンドで、[limit-options] をクリックして次のいずれかを選択するか、[-] をクリックしてコマンドを無効にします。いずれかのオプションを選択すると、何らかの形式の **neighbor maximum-prefix** コマンドが、設定する必要がある追加のオプションとともに追加されます。このコマンドを使用して、ネイバーから受信できるプレフィックスの数を制御します。
- **none** : 追加パラメータのない基本形式のコマンドを設定します。変数をクリックし、次の値を設定します。
 - **max-prefix-limit** : このネイバーから許可されるプレフィックスの最大数 (1 ~ 2147483647)。他のいずれかのオプションを選択する場合も、この変数を設定する必要があります。
 - **75 (threshold)** : ルータが警告メッセージの生成を開始する最大値に対するパーセンテージ (1 ~ 100)。デフォルトは 75 % です。
 - **restart** : 制限に達するとネイバーとのピアリングセッションを停止します。
[restart-interval] 変数をクリックし、システムがセッションを再開する前に待機する時間を 1 ~ 65535 分の範囲で設定します。
 - **warning-only** : 制限に達してもセッションを停止しません。代わりに、単に警告の Syslog メッセージを発行して、セッションを続行します。

ステップ 13 (オプション)。ネイバーのアクティベーション設定でルートを設定します。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address activate settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は [+] をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**routes** を選択します。
- c) **neighbor advertisement-interval** コマンドで、[value] 変数をクリックし、このネイバーへのルートアップデート送信の最小ルートアドバタイズメントインターバルを 0 ~ 600 秒の範囲で入力します。または、[-] をクリックすることでコマンドを無効にして、インターバルを、デフォルトの 0 (仮想ルータでの iBGP および eBGP セッションの場合) または 30

(仮想ルータ以外での eBGP セッションの場合) のままにします。値を 0 にすると、頻度を考慮せず、ルーティングテーブルが変更されるたびにアップデートが送信されます。

- d) **neighbor advertise-map** コマンドで、次のオプションを設定して、選択したルートをネイバーに条件付きでアドバタイズするか、[-] をクリックすることでコマンドを無効にして、すべてのルートアップデートをネイバーに無条件で送信します。

条件付きでアドバタイズされるルート (プレフィックス) は、アドバタイズマップと存在マップまたは不在マップの 2 つのルートマップで定義されます。

存在マップまたは不在マップと関連付けられているルートマップは、BGP スピーカーが追跡するプレフィックスを指定します。

アドバタイズマップと関連付けられているルートマップは、条件が満たされたときに、指定されたネイバーにアドバタイズされるプレフィックスを指定します。

存在マップを設定する場合、プレフィックスがアドバタイズマップと存在マップの両方に存在するときに条件が満たされます。

不在マップを設定する場合、プレフィックスがアドバタイズマップには存在するが、不在マップには存在しないときに条件が満たされます。

条件が満たされない場合、ルートは取り消され、条件付きアドバタイズメントは行われません。条件付きアドバタイズメントを行うには、ダイナミックにアドバタイズされるルート、またはアドバタイズされないルートがすべて BGP ルーティングテーブルに存在する必要があります。

- **advertise-route-map** : この変数をクリックし、存在マップまたは不在マップの条件が満たされた場合にアドバタイズされるルートを定義するルートマップを選択します。
 - **options condition-route-map** : [options] をクリックし、次のいずれかを選択します。
 - **exist-map** : 変数をクリックし、存在ルートマップを選択します。
 - **non-exist-map** : 変数をクリックし、不在ルートマップを選択します。
- e) **neighbor neighbor-address remove-private-as** コマンドが有効な状態で追加されます。コマンドを無効にするには [-] をクリックします。このコマンドにより、プライベート自律システム番号が eBGP アウトバウンドルーティングアップデートから削除されます。プライベート AS の値の範囲は 64512 ~ 65535 です。
- f) **configure neighbor default-originate** コマンドで、[options] をクリックして次のいずれかを選択するか、[-] をクリックしてコマンドを無効にします。
- **none** : システムがデフォルトルートをネイバーに無条件で送信することを可能にします。
 - **route-map** : システムがデフォルトルートをネイバーに条件付きで送信するようにします。match IP address 句を含むルートマップとともに使用することで、IP アクセスリストと完全に一致するルートがある場合にデフォルトルートが挿入されるようにすることができます。ルートマップで標準アクセスリストまたは拡張アクセスリストを使用してデフォルトルートを定義することができます。オブジェクトに追加された

neighbor default-originate コマンドの [route-map] 変数をクリックし、ルートマップを選択する必要があります。

ステップ 14 (オプション)。ネイバーのアクティベーション設定でタイマーを設定します。

ネイバーのタイマーを設定すると、この設定が、グローバル BGP 設定ですべての BGP ネイバーに対して設定されているタイマーよりも優先されます。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address activate settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は [+] をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**timers** を選択します。
- c) **neighbors timers** コマンドで、次の変数を設定します。
 - **keepalive-interval** : システムがこのネイバーにキープアライブメッセージを送信する頻度 (0 ~ 65535 秒)。このコマンドを設定しない場合、デフォルトは 60 秒です。
 - **hold-time** : キープアライブメッセージを受信できない状態が継続して、このネイバーがデッドであるとシステムが宣言するまでの時間 (0 ~ 65535 秒)。このコマンドを設定しない場合、デフォルトは 180 秒です。
 - **0 (minimum hold time)** : このネイバーに設定できる最小許容ホールド時間 (0 ~ 65535 秒)。この値は、このシステムに設定されているホールド時間以下である必要があります。ネイバーのホールド時間がこの値よりも小さい場合、システムはネイバーとの BGP セッションを確立しません。

ステップ 15 (オプション)。高度なネイバーアクティベーション設定を指定します。

- a) すでに設定されている場合は、[...] > [複製 (Duplicate)] を **configure neighbor neighbor-address activate settings** コマンドに対してクリックするか、まだ使用されていない場合は [+] をクリックして有効にします。コマンドが表示されない場合は、[無効を表示 (Show Disabled)] をクリックします。
- b) [settings] をクリックし、**advanced** を選択します。
- c) 次の **neighbor** コマンドのどれを有効のままにするのかを決定します。[-] をクリックして不要なオプションを無効にします。
 - **send-community** : ネイバーにコミュニティ属性を送信します。
 - **weight value** : このネイバーから学習したルートに初期重み (0 ~ 65535) を割り当てるには、この変数をクリックします。このコマンドを設定しない場合、別の BGP ピアから学習されたルートのデフォルトの重みは 0 です。ローカルルータから送信されたルートのデフォルトの重みは 32768 です。ただし、ルートマップを使用して設定されたルートの重みは、このコマンドを使用して設定された重みよりも優先されます。
 - **next-hop-self** : ルータを BGP 対応ネイバーのネクストホップとして設定します。このコマンドは、BGP ネイバーから同じ IP サブネット上の他の一部のネイバーに直接アクセスできない非メッシュ型のネットワーク (フレームリレーや X.25 など) で便利です。

ステップ 16 別のネイバーを定義するには、[...] >[重複 (Duplicate)] (configure neighbor コマンドの横) をクリックします。必要な数だけ定義します。

ステップ 17 [OK] をクリックします。

他のルーティングプロトコルからの BGP ルート再配布の設定

他のルーティングプロトコル、接続されたルート、およびスタティックルートからの BGP プロセスへのルートの再配布を制御できます。

始める前に

BGP への再配布を設定する前に、ルートを再配布するルーティングプロセスを設定し、変更を展開することがベストプラクティスです。

ルートマップを適用して、再配布されるルートを微調整する場合は、Smart CLI ルートマップオブジェクトを作成します。ルートマップに一致するルートが再配布され、一致しないルートはすべて再配布されません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[ルーティング (Routing)] サマリーをクリックします。

ステップ 2 仮想ルータを有効にした場合は、BGP を設定しているルータの表示アイコン (👁) をクリックします。

ステップ 3 [BGP] タブをクリックします。

ステップ 4 BGP プロセスオブジェクトを追加または編集します。

redistribution コマンドは、**configure address family ipv4** または **ipv6** コマンドの下のコマンドセット内にあります。再配布を設定するには、アドレスファミリーを設定する必要があります。

ステップ 5 [無効を表示 (Show Disabled)] をクリックしすべてのコマンドを表示し、[+] をクリックして **configure ipv4/ipv6 redistribution** コマンドを有効にします。

ステップ 6 [protocol] 変数をクリックし、ルートの再配布元となる送信元プロセスを選択します。**connected** および **static** のルート、あるいは **eigrp** (IPv4 のみ)、**isis**、**ospf**、**rip** (IPv4 のみ) によって生成されたルートを再配布できます。

ステップ 7 ルーティングプロセスを選択した場合は、[identifier] 変数をクリックして、必要な値を入力します。

- **eigrp**。自律システムの番号を入力します。
- **ospf**。プロセス ID 番号を入力します。
- **connected**、**static**、**isis**、**rip**。none を入力します。別の値を入力しても、無視されます。

ステップ 8 (任意: IS のみ)。**redistribute isis level-2** コマンドで、**level-2** をクリックして、IS-IS エリア (**level-1**) 内でのみ学習したルートを再配布するか、IS-IS エリア (**level-2**) 間、または両方 (**level-1-2**) で再配布するかを選択します。

ステップ 9 (任意: すべてのプロトコル)。再配布されたルートのメトリックを微調整するには、**[+]** をクリックして次のコマンドを有効にし、オプションを設定します。

redistribute protocol metric metric-value

変数をクリックし、配布されているルートのメトリック値 (0 ~ 4294967295) を入力します。

ステップ 10 (任意: すべてのプロトコル)。ルートマップに基づいて再配布されるルートを微調整するには、**[+]** をクリックして **redistribute route-map** コマンドを有効にし、変数をクリックして、制限を定義するルートマップを選択します。

ルートマップを適用しない場合は、(再配布用に設定された他のコマンドに適合する) プロセスのすべてのルートが再配布されます。

ステップ 11 (任意: OSPF のみ)。OSPF プロセスからルートを再配布する場合、次のコマンドはデフォルトで有効になっています。**[-]** をクリックして、不要なコマンドを無効化できます。

これらのコマンドで、OSPF ルートを他のルーティングドメインに再配布する条件を指定します。

- **redistribute ospf match external 1**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 1 外部ルートとしてインポートされるルート。
- **redistribute ospf match external 2**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 2 外部ルートとしてインポートされるルート。
- **redistribute ospf match internal**。特定の自律システムの内部ルート。
- **redistribute ospf match nssa-external 1**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 1 外部ルートとしてインポートされ、Not-So-Stubby-Area (NSSA) 専用としてマークされるルート。
- **redistribute ospf match nssa-external 2**。自律システムの外部だが、OSPF にタイプ 2 外部ルートとしてインポートされ、Not-So-Stubby-Area (NSSA) 専用としてマークされるルート。

ステップ 12 **[...] > [重複 (Duplicate)]** (**configure redistribution** コマンドの横) をクリックして、別のプロトコルの再配布を設定できます。ネットワークに適したプロトコルごとの再配布を設定します。

ステップ 13 **[OK]** をクリックします。

BGP のモニタリング

BGP をモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLI コンソールを開くか、またはデバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用します。また、[ルーティング (Routing)] ページの [コマンド (Commands)] メニューから、これらのコマンドの一部を選択することもできます。

追加オプションのリストを取得するには、**show bgp ?** を使用します。たとえば、自律システム番号（および仮想ルータ）を指定して、表示する情報を制限することができます。また、探している情報だけを対象とするその他のオプションも指定できます。次のリストは概要のみです。

- **show bgp**

BGP ルーティング テーブルにあるエントリを表示します。

- **show bgp cidr-only**

ナチュラル ネットワーク マスク以外を使用するルート（つまり、クラスレス ドメイン間ルーティング (CIDR)）を表示します。

- **show bgp community**

指定された BGP コミュニティに属するルートを示します。

- **show bgp community-list**

BGP コミュニティ リストによって許可されたルートを表示します。

- **show bgp filter-list access-list-number**

指定されたフィルタ リストと一致するルートを表示します。

- **show bgp injected-paths**

BGP ルーティング テーブルに注入されたすべてのパスを表示します。

- **show bgp ipv4 unicast**

ユニキャスト セッションの IPv4 BGP ルーティング テーブルのエントリを表示します。

- **show bgp ipv6 unicast**

IPv6 BGP ルーティング テーブルのエントリを表示します。

- **show bgp neighbors**

ネイバーに対する BGP 接続と TCP 接続に関する情報を表示します。

- **show bgp paths**

データベース内のすべての BGP パスを表示します。

- **show bgp prefix-list**

プレフィックス リストまたはプレフィックス リスト エントリに関する情報を表示します。

- **show bgp regexp *regexp***

自律システム パスの正規表現と一致するルートを表示します。

- **show bgp rib-failure**

ルーティング情報ベース（RIB）テーブルにインストールできなかったBGPルートを表示します。

- **show bgp summary**

すべての BGP 接続のステータスを表示します。

- **show bgp update-group**

BGP アップデート グループに関する情報を表示します。



第 **V** 部

セキュリティ ポリシー

- [SSL 復号 \(559 ページ\)](#)
- [アイデンティティ ポリシー \(587 ページ\)](#)
- [セキュリティ インテリジェンス \(605 ページ\)](#)
- [アクセス制御 \(611 ページ\)](#)
- [侵入ポリシー \(659 ページ\)](#)
- [ネットワーク アドレス変換 \(NAT\) \(691 ページ\)](#)



第 19 章

SSL 復号

HTTPS など一部のプロトコルは、Secure Sockets Layer (SSL) またはその後継バージョンである Transport Layer Security (TLS) を使用して、セキュアな転送のためにトラフィックを暗号化します。システムでは暗号化された接続を検査できないため、アクセス判断のために上位層のトラフィック特性を考慮したアクセスルールを適用する場合は、暗号化された接続を復号する必要があります。

- [SSL 復号について \(559 ページ\)](#)
- [SSL 復号のためのライセンス要件 \(563 ページ\)](#)
- [SSL 復号のガイドライン \(563 ページ\)](#)
- [SSL 復号ポリシーの実装および管理方法 \(564 ページ\)](#)
- [SSL 復号ポリシーの設定 \(566 ページ\)](#)
- [例：ネットワークからの古い SSL/TLS バージョンのブロック \(583 ページ\)](#)
- [SSL 復号のモニタリングおよびトラブルシューティング \(584 ページ\)](#)

SSL 復号について

通常、接続は、許可されるかブロックされるかを決定するアクセス コントロール ポリシーを経由します。ただし、SSL 復号ポリシーを有効にする場合、暗号化された接続は最初に SSL 復号ポリシー経由で送信され、復号するかブロックする必要があるかが判断されます。ブロックされていない接続は、復号されているかどうかにかかわらず、許可/ブロックの最終的な決定のためアクセス コントロール ポリシーを経由します。



- (注) アイデンティティポリシーでアクティブな認証ルールを実装するためには、SSL 復号ポリシーを有効にする必要があります。SSL 復号を有効にしてアイデンティティポリシーを有効にするのが、SSL 復号は実装しない場合、デフォルトのアクションに [復号しない (Do Not Decrypt)] を選択し、追加の SSL 復号ルールは作成しないでください。アイデンティティポリシーでは、必要なルールを自動的に生成します。

ここでは、暗号化トラフィック フロー管理と復号についてさらに詳しく説明します。

なぜ SSL 復号を実装するか

HTTPS 接続などの暗号化されたトラフィックは検査することができません。

銀行や他の金融機関への接続など、多くの接続は合法的に暗号化されます。多くの Web サイトでは、プライバシーや機密性の高いデータを保護するために暗号化を使用します。たとえば、Device Manager への接続は暗号化されます。

ただし、暗号化された接続の中ではユーザが望ましくないトラフィックを隠すこともできます。

SSL 復号を実装することによって、接続を復号して脅威またはその他の望ましくないトラフィックが含まれていないかを確認するために検査し、再度暗号化してから接続の続行を許可することができます。（復号されたトラフィックは、アクセス制御ポリシーを通過し、暗号化された特性ではなく、復号された接続の検査特性に基づいたルールに一致します。）これは、機密情報を保護するために、アクセス制御ポリシーを適用する必要性とユーザの必要性との間でバランスをとります。

ネットワークを利用させたくない種類の暗号化されたトラフィックをブロックする SSL 復号ルールを構成することもできます。

トラフィックの復号とその後の再暗号化は、全体的なシステムパフォーマンスを低下させるデバイスの処理負荷を増加することに注意してください。

暗号化されたトラフィックに適用できるアクション

SSL 復号ルールを設定する場合は、次のトピックで説明しているアクションを適用できます。これらのアクションは、明示的なルールと一致しないすべてのトラフィックに適用されるデフォルトのアクションにも使用できます。



- (注) SSL 復号ポリシーを経由するすべてのトラフィックは、アクセス コントロール ポリシーを経由する必要があります。SSL 復号ポリシーにドロップするトラフィックを除き、許可またはドロップの最終的な決定はアクセス コントロール ポリシーに委ねられます。

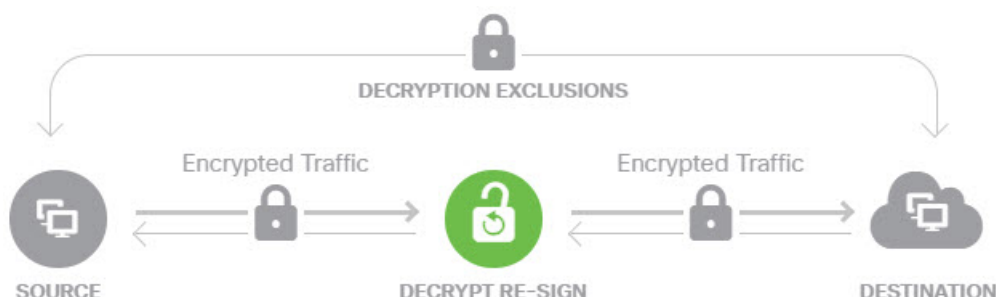
再署名の復号

トラフィックを復号し再署名する場合、システムは中間者として機能します。

たとえば、ユーザがブラウザで <https://www.cisco.com> と入力します。トラフィックが脅威に対する防御 デバイスに達すると、デバイスはルールで指定された CA 証明書を使用するユーザと交渉し、ユーザと脅威に対する防御 デバイス間に SSL トンネルを構築します。同時に、デバイスは <https://www.cisco.com> に接続し、サーバと脅威に対する防御 デバイス間に SSL トンネルを作成します。

このため、ユーザには、www.cisco.com からの証明書ではなく、SSL 復号ルールで設定された CA 証明書が表示されます。ユーザは、接続を完了するために証明書を信頼する必要があります。

す。脅威に対する防御 デバイスは、ユーザと宛先サーバ間のトラフィックで両方向に復号/再暗号化を実行します。



- (注) クライアントがサーバ証明書の再署名に使用された CA を信頼していない場合、その証明書を信頼できないとユーザに警告されます。これを防止するには、クライアントの信用できる CA ストアに CA 証明書をインポートします。または組織にプライベート PKI がある場合は、組織の全クライアントで自動的に信頼されるルート CA が署名する中間 CA 証明書を発行して、その CA 証明書をデバイスにアップロードすることもできます。

再署名の復号アクションでルールを設定する場合、設定されているルールの条件に加え、参照される内部 CA 証明書の署名アルゴリズムの種類に基づいてルールがトラフィックと一致します。SSL 復号ポリシーに 1 つの再署名証明書を選択できるため、これによって再署名ルールのトラフィック一致を制限することができます。

たとえば、楕円曲線 (EC) アルゴリズムで暗号化された発信トラフィックは、再署名証明書が EC ベースの CA 証明書の場合にのみ、再署名の復号ルールと一致します。同様に、RSA アルゴリズムで暗号化されたトラフィックは、グローバル再署名証明書が RSA の場合にのみ、再署名の復号ルールと一致します。EC アルゴリズムで暗号化された発信トラフィックは、設定されたその他すべてのルール条件が一致していても、このルールとは一致しません。

既知キーの復号

宛先サーバを所有している場合、既知のキーで復号を実装できます。この場合、ユーザが <https://www.cisco.com> への接続を開くと、それが証明書を提示している 脅威に対する防御 デバイスであっても、www.cisco.com の実際の証明書がユーザに表示されます。



ドメインおよび証明書の所有者は、所属組織でなければなりません。[cisco.com](https://www.cisco.com) を例として取り上げると、エンドユーザにシスコの証明書が表示されるのは、組織が実際にドメイン [cisco.com](https://www.cisco.com) の所有者であり（つまり、所属企業が Cisco Systems であること）、パブリック CA によって署名された [cisco.com](https://www.cisco.com) 証明書の所有権を持っている場合のみです。復号できるのは、所属組織が所有するサイトの既存のキーを使用する場合のみです。

既知のキーを使用して復号する主な目的は、HTTPS サーバへのトラフィックを復号して、社内サーバを外部の攻撃から保護することです。外部 HTTPS サイトへのクライアント側のトラフィックを検査する場合は、サーバを所有していないので、再署名の復号を使用する必要があります。



- (注) 既知キーの復号を使用するには、サーバの証明書およびキーを内部アイデンティティ証明書としてアップロードし、SSL 復号ポリシー設定で既知のキー証明書の一覧に追加する必要があります。その後は、宛先アドレスとしてサーバのアドレスを使用して既知のキーの復号のルールを作成できます。SSL 復号ポリシーに証明書を追加する方法については、[既知のキーと復号の再署名の証明書の設定 \(579 ページ\)](#) を参照してください。

復号禁止

特定の種類のトラフィックで復号をバイパスする場合、トラフィックの処理は行われません。暗号化されたトラフィックはアクセス コントロール ポリシーに渡され、一致するアクセス制御ルールに基づいて許可またはドロップされます。

ブロック

単に SSL 復号ルールと一致する暗号化されたトラフィックをブロックすることができます。SSL 復号ポリシーのブロックでは、アクセス コントロール ポリシーに接続が達することを防ぎます。

HTTPS 接続をブロックすると、ユーザにはシステムのデフォルトのブロック応答ページが表示されません。代わりに、ブラウザのセキュアな接続の障害時のデフォルトページが表示されます。このエラーメッセージは、ポリシーに基づいてサイトがブロックされたことは示しません。代わりに、一般的な暗号化アルゴリズムが存在しないことを示します。このメッセージでは、接続が意図的にブロックされたのかは分かりません。

自動的に生成された SSL 復号ルール

SSL 復号ポリシーを有効にしてもしなくても、システムはアクティブな認証を実装する各アイデンティティ ポリシー ルールに対して再署名の復号ルールを自動的に生成します。これは、HTTPS 接続でアクティブな認証を有効にするために必要です。

SSL 復号ポリシーを有効にすると、アイデンティティ ポリシーのアクティブな認証ルールの見出しの下にこれらのルールが表示されます。これらのルールは、SSL 復号ポリシーの上部にグループ化されます。ルールは読み取り専用です。アイデンティティ ポリシーを変更することによってのみ変更できます。

復号できないトラフィックの処理

接続が復号できなくなる特性は複数あります。接続に次の特性のいずれかがある場合、接続で一致するルールがあっても接続にはデフォルトのアクションが適用されます。 ([復号しない

(Do Not Decrypt)]ではなく) デフォルト アクションとしてブロックを選択する場合、正当なトラフィックの過剰なドロップなどの問題があることがあります。デフォルトの動作は変更できます ([高度なトラフィックおよび復号できないトラフィックの設定の指定 \(580 ページ\)](#) を参照)。

- 圧縮されたセッション：データ圧縮が接続に適用されています。
- SSLv2 セッション：サポートされている最下位の SSL バージョンは SSLv3 です。
- 不明な暗号スイート：システムで接続の暗号スイートが認識されません。
- サポート外の暗号スイート：システムで、検出された暗号スイートに基づく復号がサポートされません。
- キャッシュされないセッション：SSL セッションにおいてセッションの再利用が可能になっていて、クライアントとサーバがセッション ID でセッションを再確立したときに、システムがそのセッション ID をキャッシュに入れなかったことを意味します。
- ハンドシェイクエラー：SSL ハンドシェイクのネゴシエーション中にエラーが発生しました。
- 復号エラー：復号処理中にエラーが発生しました。
- パッシブ インターフェイス トラフィック：パッシブ インターフェイス (パッシブ セキュリティ ゾーン) のすべてのトラフィックが復号不能です。

SSL 復号のためのライセンス要件

SSL 復号ポリシーを使用するのに特別なライセンスは必要ありません。

ただし、URL カテゴリおよびレピュテーションを一致基準として使用するルールを作成するには、**URL** ライセンスが必要です。ライセンスの設定については、[オプション ライセンスのイネーブル化とディセーブル化 \(111 ページ\)](#) を参照してください。

SSL 復号のガイドライン

SSL 復号ポリシー設定してモニタする場合は、次の点に注意してください。

- SSL 復号ポリシーは、次のようなアクセス制御ルールがトラフィックを信頼またはブロックするように設定されている場合に、それらのルールに一致する接続に関してバイパスされます。
 - セキュリティゾーン、ネットワーク、地理位置情報、およびポートだけをトラフィック照合基準として使用する。
 - 検査を必要とする他のルール (アプリケーションまたは URL に基づいて接続を照合するルールなど) に先立つか、侵入またはファイル検査を適用するルールを許可する。

- URL カテゴリ照合を使用する場合は、サイトのログイン ページがサイト自体とは異なるカテゴリに含まれる場合があることに注意してください。たとえば、Gmail は「Web based email（Web ベース電子メール）」カテゴリに含まれますが、ログイン ページは「Internet Portals（インターネットポータル）」カテゴリに含まれます。これらのサイトへの接続を復号するには、両方のカテゴリをルールに含める必要があります。
- 脆弱性データベース（VDB）の更新によってアプリケーションが削除（廃止）される場合は、削除されたアプリケーションを使用するすべての SSL 暗号解読ルールまたはアプリケーションフィルタに変更を加える必要があります。これらのルールを修正するまで、変更は展開できません。さらに、システムソフトウェアの更新は、問題を修正するまでインストールできません。[アプリケーションフィルタ（Application Filters）] オブジェクト ページ、またはルールの [アプリケーション（Application）] タブでは、これらのアプリケーション名の後に「（廃止）（Deprecated）」と表示されます。
- アクティブ認証ルールを使用している場合は、SSL 復号ポリシーを無効にすることができません。SSL 復号ポリシーを無効にするには、アイデンティティ ポリシーを無効にするか、またはアクティブ認証を使用するアイデンティティ ルールを削除する必要があります。

SSL 復号ポリシーの実装および管理方法

URL フィルタリング、侵入、マルウェア コントロール、および詳細なパケット検査を必要とするその他のサービスを適用できるように、SSL 復号ポリシーを使用して暗号化されたトラフィックをプレーン テキスト トラフィックにできます。ポリシーがトラフィックが許可する場合、そのトラフィックはデバイスから出る前に再暗号化されます。

SSL 復号ポリシーは、暗号化されたトラフィックにのみ適用されます。暗号化されていない接続は SSL 復号ルールに対して評価されません。

他のセキュリティポリシーの場合とは異なり、SSL 復号ポリシーは、監視して積極的に保守する必要があります。これは、証明書の期限が切れたり、宛先サーバで変更されたりするためです。さらに、クライアントソフトウェアの変更により特定の接続を復号する能力が変わる場合もあります。これは、再署名の復号アクションを中間者攻撃と区別できないためです。

次の手順では、SSL 復号ポリシーの実装と保守のエンドツーエンドプロセスを説明します。

手順

ステップ 1 再署名の復号ルールを実装する場合は、必要な内部 CA 証明書を作成します。

内部認証局（CA）証明書を使用する必要があります。次の選択肢があります。ユーザは証明書を信頼する必要があるため、すでに信頼されると設定されているクライアントブラウザに証明書をアップロードするか、またはアップロードする証明書がブラウザの信頼ストアに追加されるようにします。

- デバイス自体によって署名される自己署名内部 CA 証明書を作成します。 [自己署名内部および内部 CA 証明書の生成 \(204 ページ\)](#) を参照してください。
- 外部の信頼できる CA または組織内部の CA によって署名される内部 CA 証明書およびキーをアップロードします。 [内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 2 既知キーの復号ルールを実装する場合は、各内部サーバから証明書とキーを収集します。

サーバから証明書とキーを取得する必要があるため、既知キーの復号は自分で制御しているサーバでのみ使用できます。これらの証明書とキーを内部証明書（内部 CA 証明書ではない）としてアップロードします。「[内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 3 [SSL 復号ポリシーの有効化 \(568 ページ\)](#)。

ポリシーを有効にする際に、いくつかの基本的な設定も構成します。

ステップ 4 [SSL 復号のデフォルトアクションの設定 \(569 ページ\)](#) を確認してください。

不確かな場合は、デフォルトアクションとして[復号しない (Do not decrypt)]を選択します。この場合でも、アクセス制御ポリシーは、デフォルトの SSL 復号ルールに一致するトラフィックを適切な場合はドロップできます。

ステップ 5 [SSL 復号ルールの設定 \(570 ページ\)](#) を確認してください。

復号するトラフィック、および適用する復号のタイプを識別します。

ステップ 6 既知のキーでの復号を設定する場合は、これらの証明書を含めるように SSL 復号ポリシー設定を編集します。 [既知のキーと復号の再署名の証明書の設定 \(579 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 7 必要に応じて、再署名の復号ルールに使用する CA 証明書をダウンロードして、クライアントワークステーションのブラウザにアップロードします。

証明書のダウンロードおよびクライアントへの配布については、[再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード \(581 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 8 定期的に、再署名証明書および既知のキーの証明書を更新します。

- 再署名証明書：期限切れになる前にこの証明書を更新します。Device Manager を使用して証明書を生成する場合は、5 年間有効です。証明書の有効期間を確認するには、[オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] を選択し、リスト内で証明書を見つけて [アクション (Actions)] 列の [情報 (information)] アイコン (i) をクリックします。情報ダイアログボックスに、有効期間およびその他の特性が表示されます。このページから代替証明書をアップロードすることもできます。
- 既知キーの証明書：既知のキーによる復号のルールの場合、宛先サーバの現在の証明書とキーがアップロードされていることを確認する必要があります。サポートされるサーバで証明書およびキーが変更されるたびに、新しい証明書およびキーを（内部証明書として）アップロードし、新しい証明書を使用するように SSL 復号設定を更新する必要があります。

ステップ 9 外部サーバで不足している信頼できる CA 証明書をアップロードします。

システムには、サードパーティによって発行された、広範な信頼できる CA ルート証明書および信頼できる CA 中間証明書が含まれています。これらは、再署名の復号ルールについて脅威に対する防御 と宛先サーバーの間で接続をネゴシエートするときに必要です。

信頼できるルート CA の信頼チェーン内にあるすべての証明書を、信頼できる CA 証明書のリストにアップロードしますが、これにはルート CA 証明書およびすべての中間 CA 証明書が含まれます。これを行わないと、中間 CA から発行された信頼できる証明書の検出が困難になります。[オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] ページで証明書をアップロードします。「[信頼できる CA 証明書のアップロード \(206 ページ\)](#)」を参照してください。

SSL 復号ポリシーの設定

URL フィルタリング、侵入、マルウェア コントロール、および詳細なパケット検査を必要とするその他のサービスを適用できるように、SSL 復号ポリシーを使用して暗号化されたトラフィックをプレーンテキスト トラフィックにできます。ポリシーがトラフィックが許可する場合、そのトラフィックはデバイスから出る前に再暗号化されます。

SSL 復号ポリシーは、暗号化されたトラフィックにのみ適用されます。暗号化されていない接続は SSL 復号ルールに対して評価されません。



(注) VPN トンネルは SSL 復号ポリシーが評価される前に復号されるので、トンネル自体にはポリシーは適用されません。ただし、トンネル内で暗号化された接続は SSL 復号ポリシーによる評価の対象となります。

以下の手順で、SSL 復号ポリシーを設定する方法を説明します。SSL 復号を作成および管理するエンドツーエンドプロセスの説明については、[SSL 復号ポリシーの実装および管理方法 \(564 ページ\)](#) を参照してください。

始める前に

SSL 復号ルール テーブルには、2 つのセクションが含まれています。

- [アイデンティティポリシーアクティブ認証ルール (Identity Policy Active Authentication Rules)] : アイデンティティ ポリシーを有効にしてアクティブ認証を使用するルールを作成すると、システムがこれらのポリシーの動作に必要な SSL 復号ルールを自動的に作成します。これらのルールは、常に自分で作成した SSL 復号ルールの前に評価されます。アイデンティティポリシーに変更することによって、間接的にのみこれらのルール変更できます。
- [SSL ネイティブルール (SSL Native Rules)] : これらはあなたが構成したルールです。このセクションにのみルールを追加できます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL 復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

ポリシーをまだ有効化していない場合は、[SSL 復号の有効化 (Enable SSL Decryption)] をクリックし、「[SSL 復号ポリシーの有効化 \(568 ページ\)](#)」の説明に従ってポリシーを設定します。

ステップ 2 ポリシーのデフォルト アクションを設定します。

最も安全な選択肢は、[復号しない (Do Not Decrypt)] です。詳細については、[SSL 復号のデフォルト アクションの設定 \(569 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 SSL 復号ポリシーを管理します。

SSL 復号を設定した後、このページにすべてのルールが順番に一覧表示されます。上から下に向かってルールがトラフィックと照合され、最初に適合したルールによって、適用されるアクションが決定されます。このページで次の操作を実行できます。

- ポリシーを無効にするには、[SSL 復号ポリシー (SSL Decryption Policy)] トグルをクリックします。[SSL 復号を有効化 (Enable SSL Decryption)] をクリックすると再度有効にできます。
- ポリシーで使用する証明書のリストを含むポリシー設定を編集するには、[SSL 復号設定 (SSL Decryption Settings)] ボタン (⚙️) をクリックします。[SSL 復号設定の指定 \(579 ページ\)](#) を参照してください。また、クライアントに配布できるように、再署名の復号ルールで使用する証明書をダウンロードできます。次の項を参照してください。
 - [既知のキーと復号の再署名の証明書の設定 \(579 ページ\)](#)
 - [再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード \(581 ページ\)](#)
- ルールを設定するには、次の手順を実行します。
 - 新しいルールを作成するには、[+] ボタンをクリックします。[SSL 復号ルールの設定 \(570 ページ\)](#) を参照してください。
 - 既存のルールを編集する場合は、([操作 (Actions)] 列の) 対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。また、テーブル内の特定のルールプロパティをクリックして、そのプロパティを選択的に編集することもできます。
 - 不要になったルールを削除する場合は、([操作 (Actions)] 列の) 対象のルールの削除アイコン (🗑️) をクリックします。
- ルールを移動するには、編集して [順序 (Order)] ドロップダウン リストから新しい場所を選択します。
- URL カテゴリの削除または変更などが原因で特定のルールに問題が発生した場合、これらのルールのみを表示するには、検索ボックスの横にある [\[See Problem Rules\]](#) リンクをクリック

クしてテーブルをフィルタ処理します。これらのルールを編集および修正（または削除）して、必要とするサービスが提供されるようにします。

SSL 復号ポリシーの有効化

SSL 復号ルールを設定する前に、ポリシーを有効にして、いくつかの基本的な設定を構成する必要があります。以下の手順で、ポリシーを直接有効にする方法を説明します。アイデンティティ ポリシーを有効にするときにこのポリシーを有効にすることもできます。アイデンティティ ポリシーでは、SSL 復号ポリシーを有効にする必要があります。

始める前に

SSL 復号ポリシーを持たないリリースからアップグレードし、アクティブな認証ルールを使用してアイデンティティ ポリシーを設定した場合、SSL 復号ポリシーはすでに有効になっています。必ず使用する再署名の復号証明書を選択し、必要に応じて事前定義されたルールを有効にします。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL 復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

ステップ 2 [SSL 復号の有効化 (Enable SSL Decryption)] をクリックしてポリシー設定を構成します。

- このポリシーを初めて有効にする場合は、[SSL 復号設定 (SSL Decryption Configuration)] ダイアログ ボックスが開きます。次の手順に進みます。
- 以前にこのポリシーを設定した後で無効にした場合は、前の設定とルールを使用してポリシーが再度有効になります。[SSL 復号設定 (SSL Decryption Settings)] ボタン (⚙️) をクリックし、[既知のキーと復号の再署名の証明書の設定 \(579 ページ\)](#) で説明されているように設定できます。

ステップ 3 [再署名証明書の復号 (Decrypt Re-Sign Certificate)] で、再署名証明書での復号を実装するルールに使用するために内部 CA 証明書を選択します。

事前定義済みの NGFW-Default-InternalCA 証明書か、作成またはアップロードしたものを使用できます。証明書がまだ存在しない場合は、[内部CAを作成 (Create Internal CA)] をクリックして作成します。

クライアントのブラウザに証明書をまだインストールしていない場合は、ダウンロードボタン (📄) をクリックしてコピーを入手します。証明書をインストールする方法については、各ブラウザのマニュアルを参照してください。[再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード \(581 ページ\)](#) も参照してください。

ステップ 4 (オプション) 。[信頼できるCA証明書 (Trusted CA Certificates)] の下にある [+] をクリックし、ポリシーで信頼する証明書または証明書グループを選択します。

デフォルトグループの Cisco-Trusted-Authorities には、システム定義の信頼できる CA 証明書がすべて含まれています。追加の証明書をアップロードした場合は、ここでそれらを追加するか、それらを独自のグループに収集して、ここでグループを選択できます。

Cisco-Trusted-Authorities グループを置き換えるか、単に独自のグループを追加できます。ユーザは、証明書の署名機関がこのリストに含まれていないサイトの証明書を受け入れるように求められます。証明書が信頼されていないという理由だけで、サイトへのアクセスがブロックされることはありません。

リストを空のままにするか、空の証明書グループのみを選択すると、SSL 復号ポリシーはすべての証明書を信頼します。

ステップ 5 初期 SSL 復号ルールを選択します。

システムには以下の事前定義ルールが含まれており、役立つ場合があります。

- [Sensitive_Data] : このルールでは、金融サービスまたは健康と医療の URL カテゴリ（銀行、医療機関、ヘルスケア サービスなど）内の Web サイトに一致するトラフィックは復号しません。このルールを実装するには、URL ライセンスを有効にする必要があります。

ステップ 6 [有効化 (Enable)] をクリックします。

SSL 復号のデフォルト アクションの設定

暗号化された接続が特定の SSL 復号ルールに一致しない場合、SSL 復号ポリシーのデフォルトアクションに基づいて処理されます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL 復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

ステップ 2 [デフォルトアクション (Default Action)] フィールドの任意の場所をクリックします。

ステップ 3 一致するトラフィックに適用するアクションを選択します。

- [復号しない (Do Not Decrypt)] : 暗号化された接続を許可します。次にアクセス制御ポリシーは、暗号化された接続を評価し、アクセス制御ルールに基づいてドロップまたは許可します。
- [ブロック (Block)] : 接続をすぐに切断します。接続はアクセス制御ポリシーに渡されません。

ステップ 4 (オプション) デフォルト アクションのロギングを設定します。

デフォルトアクションに一致するトラフィックのログギングをダッシュボードのデータまたはイベントビューアに記載されるようにするには、トラフィックのログギングを有効にする必要があります。次のオプションから選択します。

- [接続終了時 (At End of Connection)] : 接続の終了時にイベントを生成します。
- [接続イベントの送信先 (Send Connection Events To)] : 外部の syslog サーバにイベントのコピーを送信するには、syslog サーバを定義するサーバオブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しい Syslog サーバの作成 (Create New Syslog Server)] をクリックして作成します (syslog サーバへのログギングを無効化するには、サーバのリストから [任意 (Any)] を選択します)。

デバイスのイベント ストレージは限られているため、外部の syslog サーバにイベントを送信することにより、長期間ストレージが利用できるようになり、イベントの分析を向上できます。

- [ログギングなし (No Logging)] : イベントを生成しません。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

SSL 復号ルールの設定

SSL 復号ルールを使用して、暗号化された接続を処理する方法を決定します。SSL 復号ポリシーに設定されたルールは、上から下への順に評価されます。トラフィックに適用されるルールは、すべてのトラフィック基準が一致した最初のルールです。

[SSLネイティブルール (SSL Native Rules)] セクションでのみルールを作成し、編集できます。



- (注) SSL 復号ポリシーが接続を評価する前に、VPN 接続 (サイト間とリモート アクセスの両方) のトラフィックが復号されます。したがって、SSL 復号ルールが VPN 接続に適用されることなく、これらのルールを作成するときに VPN 接続を考慮する必要はありません。ただし、VPN トンネル内で暗号化された接続を使用する場合は評価されます。たとえば、RA VPN トンネル自体は(すでに復号されているので)評価されなくても、RA VPN接続経由の内部サーバへのHTTPS接続は、SSL復号ルールによって評価されます。

始める前に

既知キーの復号ルールを作成する場合は、宛先サーバのための証明書とキーを (内部証明書として) アップロードし、証明書を使用するために SSL 復号ポリシーの設定も編集します。既知キールールは通常、ルールの宛先ネットワークの条件で宛先サーバを指定します。詳細については、[既知のキーと復号の再署名の証明書の設定 \(579 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

(アクティブ認証アイデンティティ ルール用に自動的に生成されたもの以外に) 任意の SSL 復号ルールを構成していない場合、[事前定義済みルールを追加 (Add Pre-Defined Rules)] をクリックして、事前定義済みのルールを追加できます。ルールを選択するように要求されます。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (🔧) をクリックします。

不要になったルールを削除する場合は、対象のルールの削除アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 [順序 (Order)] で、ルールの番号付きリストのどこにルールを挿入するかを選択します。

[SSLネイティブルール (SSL Native Rules)] セクションにのみルールを挿入できます。アイデンティティ ポリシーアクティブ認証ルールはアイデンティティ ポリシーから自動的に生成され、読み取り専用です。

ルールは最初に一致したものから順に適用されるため、限定的なトラフィック一致基準を持つルールは、同じトラフィックに適用され、汎用的な基準を持つルールよりも上に置く必要があります。

デフォルトでは、ルールはリストの最後に追加されます。ルールの配置を後で変更する場合は、このオプションを編集して配置を変更します。

ステップ 4 [タイトル (Title)] にルールの名前を入力します。

この名前にスペースを含めることはできません。英数字と特殊文字 + . _ - を使用できます

ステップ 5 一致するトラフィックに適用するアクションを選択します。

各オプションの詳細については、次を参照してください。

- [再署名の復号 \(560 ページ\)](#)
- [既知キーの復号 \(561 ページ\)](#)
- [復号禁止 \(562 ページ\)](#)
- [ブロック \(562 ページ\)](#)

ステップ 6 以下のタブの任意の組み合わせを使用して、トラフィック一致基準を定義します。

- [送信元/送信先 (Source/Destination)] : トラフィックが通過するセキュリティゾーン (インターフェイス)、IP アドレスまたは IP アドレスの国/大陸 (地理的ロケーション)、トラフィックで使用されている TCP ポート。デフォルトでは、すべてのゾーン、アドレス、

地理的ロケーション、TCP ポートが対象になります。SSL 復号ルールの送信元/送信先基準 (573 ページ) を参照してください。

- [アプリケーション (Application)] : アプリケーション、またはタイプ、カテゴリ、タグ、リスク、ビジネスとの関連性ごとにアプリケーションを定義するフィルタ。デフォルトは任意の暗号化されたアプリケーションです。SSL 復号ルールのアプリケーション基準 (574 ページ) を参照してください。
- [URL] : Web 要求の URL カテゴリ。デフォルトでは URL カテゴリおよびレピュテーションはマッチングの目的では考慮されません。「SSL 復号ルールの URL 基準 (576 ページ)」を参照してください。
- [ユーザ (Users)] : アイデンティティ ソース、ユーザまたはユーザ グループ。アイデンティティポリシーにより、ユーザおよびグループ情報をトラフィックの照合に使用できるかどうかを判断します。この基準を使用するには、アイデンティティポリシーを設定する必要があります。SSL 復号ルールのユーザ基準 (577 ページ) を参照してください。
- [拡張 (Advanced)] : SSL/TLS バージョンや証明書のステータスなどの接続に使用する証明書に由来する特性。SSL 復号ルールの詳細条件 (578 ページ) を参照してください。

条件を変更するには、条件内の [+] ボタンをクリックし、希望するオブジェクトまたは要素を選択し、ポップアップダイアログボックスの [OK] をクリックします。基準にオブジェクトが必要で、そのオブジェクトが存在しない場合、[新規オブジェクトの作成 (Create New Object)] をクリックします。オブジェクトまたは要素をポリシーから削除するには、そのオブジェクトまたは要素の [x] をクリックします。

条件を SSL 復号ルールに追加する際は、以下のヒントを参考にしてください。

- 1 つのルールにつき複数の条件を設定できます。ルールがトラフィックに適用されるには、トラフィックがそのルールのすべての条件に一致する必要があります。たとえば、URL カテゴリに基づいて復号するために単一のルールを使用できます。
- ルールの条件ごとに、最大 50 の条件を追加できます。トラフィックが、基準のいずれかと一致する場合、トラフィックはその条件を満たすことになります。たとえば、単一のルールを使用して、最大 50 のアプリケーションまたはアプリケーション フィルタのアプリケーション制御を適用できます。したがって、単一の条件では項目間に OR 関係がありますが、条件タイプ間 (たとえば、送信元/宛先とアプリケーション間) には AND 関係があります。
- URL カテゴリのマッチングには、URL フィルタリング機能のライセンスが必要です。

ステップ 7 (オプション) ルールのロギングを設定します。

ルールと一致するトラフィックをダッシュボード データまたはイベント ビューアに含めるには、ロギングを有効にする必要があります。次のオプションから選択します。

- [接続終了時 (At End of Connection)] : 接続の終了時にイベントを生成します。
 - [接続イベントの送信先 (Send Connection Events To)] : 外部の syslog サーバにイベントのコピーを送信するには、syslog サーバを定義するサーバオブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しい Syslog サーバの作成 (Create New Syslog Server)] をクリックして作成します (syslog サーバへのロギングを無効化するには、サーバのリストから [任意 (Any)] を選択します)。

デバイスのイベント ストレージは限られているため、外部の syslog サーバにイベントを送信することにより、長期間ストレージが利用できるようになり、イベントの分析を向上できます。

- [ロギングなし (No Logging)] : イベントを生成しません。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

SSL 復号ルールを送信元/送信先基準

SSL 復号ルールの [送信元/送信先 (Source/Destination)] 基準で、トラフィックが通過するセキュリティゾーン (インターフェイス)、IP アドレスまたは IP アドレスの国/大陸 (地理的ロケーション)、トラフィックで使用されている TCP ポートを定義します。デフォルトでは、すべてのゾーン、アドレス、地理的ロケーション、TCP ポートが対象になります。TCP は、SSL 復号ルールに一致する唯一のプロトコルです。

条件を変更するには、該当する条件の [+] ボタンをクリックして目的のオブジェクトまたは要素を選択し、[OK] をクリックします。基準にオブジェクトが必要で、そのオブジェクトが存在しない場合、[新規オブジェクトの作成 (Create New Object)] をクリックします。オブジェクトまたは要素をポリシーから削除するには、そのオブジェクトまたは要素の [x] をクリックします。

ルールに一致する送信元と送信先を識別するのに、次の基準を使用できます。

送信元ゾーン、送信先ゾーン

トラフィックが経由するインターフェイスを定義するセキュリティゾーンオブジェクト。どのインターフェイスのトラフィックでも適用するものとして、いずれか、または両方の基準を定義することも、両方とも未定義にすることもできます。

- ゾーン内のインターフェイスからデバイスを発信するトラフィックと一致させるには、そのゾーンを [送信先ゾーン (Destination Zones)] に追加します。
- ゾーン内のインターフェイスからデバイスに着信するトラフィックと一致させるには、そのゾーンを [送信元ゾーン (Source Zones)] に追加します。
- 送信元ゾーンと送信先ゾーンの条件を両方ともルールに追加した場合、指定した送信元ゾーンのいずれかから発信されて、指定した送信先ゾーンのいずれかを經由するトラフィックが一致することになります。

トラフィックがデバイスに出入りする場所に基づいてルールを適用する必要がある場合は、この基準を使用します。たとえば、外部ホストから内部ホストへのすべてのトラフィックが復号されたことを確認したい場合、[送信元ゾーン (Source Zones)] で外部ゾーンを選択し、[送信先ゾーン (Destination Zones)] で内部ゾーンを選択します。

送信元ネットワーク、宛先ネットワーク

ネットワーク アドレスまたはトラフィックの場所を定義するネットワーク オブジェクトまたは地理的位置です。

- IP アドレスまたは地理的位置からのトラフィックを一致させるには、[送信元ネットワーク (Source Networks)] を設定します。
- IP アドレスまたは地理的位置へのトラフィックを一致させるには、[送信先ネットワーク (Destination Networks)] を設定します。
- 送信元と送信先ネットワークの両方の条件をルールに追加すると、一致するトラフィックは指定した IP アドレスのいずれかから送信され、送信先 IP アドレスのいずれかを通って出力されなければなりません。

この条件を追加するには、次のタブから選択します。

- [ネットワーク (Network)] : 制御するトラフィックの送信元または宛先 IP アドレスを定義するネットワーク オブジェクトまたはグループを選択します。



(注) 既知キーの復号ルールの場合、証明書とアップロードしたキーを使用する送信先サーバの IP アドレスを持つオブジェクトを選択します。

- [地理位置情報 (Geolocation)] : 位置情報機能を選択して、その送信元または宛先の国や大陸に基づいてトラフィックを制御できます。大陸を選択すると、その大陸内のすべての国が選択されます。地理的位置を直接ルールで選択するほかに、作成した位置情報オブジェクトを選択して場所を定義することもできます。地理的位置を使用すると、特定の国で使用されているすべての潜在的な IP アドレスを知る必要なく、その国へのアクセスを簡単に制限できます。

送信元ポート、宛先ポート/プロトコル

トラフィックで使用されるプロトコルを定義するポートオブジェクト。SSL 復号ルールに対してのみ TCP プロトコルとポートを指定できます。

- TCP ポートからのトラフィックを一致させるには、[送信元ポート (Source Ports)] を設定します。
- TCP ポートへのトラフィックを一致させるには、[送信先ポート/プロトコル (Destination Ports/Protocols)] を設定します。
- 特定の TCP ポートから特定の TCP ポートへ発信されるトラフィックを一致させるには、両方のポートを設定します。たとえば、TCP/80 ポートから TCP/8080 ポートへのトラフィックをターゲットにすることができます。

SSL 復号ルール of アプリケーション基準

SSL 復号ルール of アプリケーション基準では、IP 接続で使用するアプリケーション、あるいは、タイプ、カテゴリ、タグ、リスク、またはビジネスとの関連性によってアプリケーションを定義するフィルタ処理が定義されます。デフォルトは、SSL プロトコル タグを持つアプリケーションです。暗号化されていないアプリケーションは SSL 復号ルールと一致できません。

ルールで個別のアプリケーションを指定できますが、アプリケーション フィルタを使用すれば、ポリシーの作成と管理が簡単になります。たとえば、リスクが高くビジネス関連性が低いすべてのアプリケーションを復号またはブロックする SSL 復号ルールを作成できます。ユーザがこのようなアプリケーションのいずれかを使用しようとする、セッションが復号またはブロックされます。

さらに、シスコはシステムおよび脆弱性データベース (VDB) の更新を通して、頻繁にアプリケーション検出機能の更新や追加を行います。これにより、リスクの高いアプリケーションのルールが新しいアプリケーションに自動的に適用される可能性があり、手動でルールを更新する必要がなくなります。

アプリケーションとフィルタをルールで直接指定することも、これらの特性を定義するアプリケーション フィルタ オブジェクトを作成することもできます。複雑なルールを作成する場合は、オブジェクトを使用すると、システム制限内 (基準ごとに 50 項目) に収めることが簡単になります。

アプリケーションとフィルタのリストを変更するには、条件内にある[+] ボタンをクリックし、個別のタブにリストされている必要なアプリケーションまたはアプリケーション フィルタ オブジェクトを選択して、ポップアップダイアログボックスの [OK] をクリックします。いずれかのタブで [高度なフィルタ (Advanced Filter)] をクリックすると、フィルタ基準の選択、または特定のアプリケーションの検索ができます。アプリケーション、フィルタ、またはオブジェクトの [x] をクリックすると、ポリシーから削除されます。[フィルタとして保存 (Save As Filter)] リンクをクリックすると、組み合わせ条件が、新規のアプリケーション フィルタ オブジェクトとして保存されます。

アプリケーション基準と、高度なフィルタを設定してアプリケーションを選択する方法の詳細については、[アプリケーション フィルタ オブジェクトの設定 \(187 ページ\)](#) を参照してください。

SSL 復号ルールでアプリケーション基準を使用する場合は、次のヒントを考慮してください。

- システムは、StartTLS を使用して暗号化できる、暗号化されていないアプリケーションを識別できます。これには、SMTPS、POPS、FTPS、TelnetS、および IMAPS などのアプリケーションが含まれます。また、TLS ClientHello メッセージのサーバ ネーム インジケーション、またはサーバ証明書のサブジェクト識別名の値に基づいて特定の暗号化アプリケーションを特定できます。
- システムは、サーバ証明書の交換後にのみアプリケーションを識別できます。SSL ハンドシェイク中に交換されたトラフィックがアプリケーション基準を含む SSL ルールの他のすべての条件と一致するが識別が完了していない場合、SSL ポリシーはパケットの通過を許可します。この動作により、ハンドシェイクを完了させてアプリケーションを識別できるようにすることができます。システムが識別を完了すると、システムはアプリケーション基準と一致する残りのセッション トラフィックに対して SSL ルール アクションを適用します。
- 選択したアプリケーションが VDB の更新によって削除された場合は、アプリケーション名の後に「(廃止)」が表示されます。これらのアプリケーションはフィルタから削除する必要があります。削除しないと、それ以降の展開やシステム ソフトウェアのアップグレードがブロックされます。

SSL 復号ルール URL 基準

SSL 復号ルール URL の基準は、Web 要求の URL が属するカテゴリを定義します。また、復号、ブロック、または復号せずに許可するサイトの相対的なレピュテーションも指定できます。デフォルトは、URL カテゴリに基づき接続と一致しません。

たとえば、すべての暗号化されたギャンブルサイトをブロックしたり、信頼できないソーシャル ネットワーキング サイトを復号したりできます。該当するカテゴリとレピュテーションの URL をユーザが参照しようとする、セッションがブロックされるか、または復号されます。URL カテゴリの照合の詳細については、[カテゴリ別とレピュテーション別の URL のフィルタリング \(618 ページ\)](#) を参照してください。

[カテゴリ (Categories)] タブ

[+] をクリックし、必要なカテゴリを選択し、[OK] をクリックします。ポリシーからカテゴリやオブジェクトを削除するには、該当する [x] をクリックします。

デフォルトでは、レピュテーションに関係なく、選択した各カテゴリのすべての URL にルールが適用されます。レピュテーションに基づいてルールを制限するには、各カテゴリの下矢印をクリックして、[任意 (Any)] チェックボックスを選択解除し、[レピュテーション (Reputation)] スライダを使用してレピュテーションレベルを選択します。レピュテーションスライダの左側に復号なしで許可されるサイトが示され、右側に復号またはブロックされるサイトが示されます。レピュテーションの使用方法はルールアクションによって異なります。

- ルールで接続が復号またはブロックされる場合は、レピュテーションレベルを選択すると、そのレベルよりもシビラティ (重大度) が高いすべてのレピュテーションも選択されます。たとえば、**問題のあるサイト** (レベル2) を復号またはブロックするルールを設定する場合、**信頼できない** (レベル1) のサイトも自動的に復号またはブロックされます。
- ルールで復号なし (復号しない) で接続が許可される場合は、レピュテーションレベルを選択すると、そのレベルよりもシビラティ (重大度) が低いすべてのレピュテーションも選択されます。たとえば、**好ましいサイト (Favorable sites)** (レベル4) を復号しないルールを設定した場合、**信頼できる (Trusted)** (レベル5) サイトも自動的に復号されません。

レピュテーションが不明な URL をレピュテーション一致に含めるには、[レピュテーションが不明なサイトを含める (Include Sites with Unknown Reputation)] オプションを選択します。通常、新しいサイトは評価されていません。また、その他の理由でサイトのレピュテーションが不明である (または判断できない) 場合もあります。

URL のカテゴリを確認します。

特定の URL のカテゴリとレピュテーションを確認できます。[確認する URL] ボックスに URL を入力し、[移動] をクリックします。結果を表示するには、外部の Web サイトに移動します。分類に同意しない場合は、[URL カテゴリの異議を送信する] リンクをクリックしてお知らせください。

SSL 復号ルールของผู้ใช้基準

SSL 復号ルールของผู้ใช้基準は、IP 接続のユーザーまたはユーザー グループを定義します。ルールにユーザーまたはユーザー グループの基準を含めるように、アイデンティティ ポリシーと関連ディレクトリ サーバを設定する必要があります。

アイデンティティ ポリシーは、特定の接続のためにユーザー アイデンティティを収集するかどうかを決定します。アイデンティティが確立されると、ホストの IP アドレスが識別されたユーザーに関連付けられます。したがって、送信元 IP アドレスがユーザーにマッピングされているトラフィックは、そのユーザーから発信されたものとみなされます。IP パケット自体にはユーザー アイデンティティ情報が含まれていないため、この IP アドレスからユーザーへのマッピングが最良の推測となります。

1つのルールに最大 50 のユーザーまたはグループを追加できるので、個々のユーザーを選択するよりも、グループを選択する方が妥当です。たとえば、外部ネットワークからエンジニアリンググループへのトラフィックを復号するルールを作成し、そのグループからの発信トラフィックを復号しない別のルールを作成できます。すると、新しいエンジニアにこのルールを適用するには、エンジニアをディレクトリ サーバの Engineering グループに追加するだけですみます。

そのソース内のすべてのユーザーに適用するアイデンティティ ソースを選択することもできます。したがって、複数の Active Directory ドメインをサポートしている場合は、ドメインに基づいて差分復号を提供できます。

ユーザーリストを変更するには、条件の中にある [+] ボタンをクリックし、次のいずれかの方法でユーザーまたはユーザーグループを選択します。ポリシーからユーザーまたはグループを削除するには、該当する [x] をクリックします。

- [アイデンティティソース (Identity Sources)] : AD レalmやローカルユーザー データベースなど、選択したソースから取得したすべてのユーザーにルールを適用するアイデンティティ ソースを選択します。必要なレalmがまだ存在していない場合は、[新しいアイデンティティレalmの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックします。
- [グループ (Groups)] : 目的のユーザー グループを選択します。グループを選択できるのは、ディレクトリ サーバでグループを設定している場合だけです。グループを選択すると、そのグループのすべてのメンバー (サブグループを含む) にそのルールが適用されます。サブグループを別の方法で処理する場合は、サブグループ用の個別のアクセスルールを作成し、それをアクセス コントロール ポリシー内で親グループのルールの上に配置する必要があります。
- [ユーザー]: 個々のユーザーを選択します。ユーザー名には、Realm\usernameなどのアイデンティティソースのプレフィックスが付きます。

Special-Identities-Realmの下にはいくつかの組み込みユーザーがあります。

- [認証失敗 (Failed Authentication)] : ユーザーが認証を求められ、有効なユーザー名/パスワードを入力できずに最大試行回数に達しました。認証の失敗により、ユーザーがネットワークにアクセスできなくなることはありませんが、このようなユーザーに対してネットワーク アクセスを制限するアクセスルールを作成できます。
- [ゲスト (Guest)] : ゲストユーザーは [認証失敗 (Failed Authentication)] ユーザーと似ていますが、アイデンティティルールでこのようなユーザーがゲストと呼ばれるように設

定されている点で異なります。ゲストユーザが認証を求められましたが、認証できずに最大試行回数に達しました。

- [認証不要 (No Authentication Required)] : ユーザの接続が、認証不要と指定されているアイデンティティルールに一致したため、ユーザは認証を求められませんでした。
- [不明 (Unknown)] : IP アドレスのユーザマッピングがないため、認証失敗の記録がありません。通常、これは、HTTP トラフィックがそのアドレスからまだ見られてないことを意味します。

SSL 復号ルールの詳細条件

詳細のトラフィックの一致条件は、接続に使用する証明書に由来する特徴に関連します。次のオプションのいずれかまたはすべてを設定できます。

証明書のプロパティ

トラフィックは、選択したプロパティのいずれかに一致する場合、ルールの証明書プロパティのオプションに一致します。次の項目を設定できます。

証明書のステータス

証明書が [有効 (Valid)] か [無効 (Invalid)] か。証明書のステータスを気にしない場合は、[任意 (Any)] (デフォルト) を選択します。

証明書は、次の条件のすべてが満たされている場合に有効とみなされ、それ以外の場合は無効とみなされます。

- ポリシーが証明書を発行した CA を信用できる。
- 証明書の署名を証明書の内容に対して正しく検証できる。
- 発行元の CA 証明書が信用できる CA 証明書のポリシーのリストに格納されている。
- ポリシーの信用できる CA すべてで証明書が失効していない。
- 現在の日付が証明書の [有効期間の開始 (Valid From)] と [有効期間の終了 (Valid To)] の期間内にある。

自己署名

サーバ証明書に同じサブジェクトおよび発行元識別名が含まれているかどうか。次のいずれかを選択します。

- 自己署名 (Self-Signing) : サーバ証明書は自己署名されています。
- CA 署名 (CA-Signing) : サーバ証明書は認証局によって署名されています。つまり、発行元とサブジェクトは同じではありません。
- 任意 (Any) : 証明書が自己署名されているかどうかを一致条件として考慮しません。

サポートされるバージョン

一致する SSL/TLS バージョン。ルールは、選択したいいずれかのバージョンを使用するトラフィックにのみ適用されます。デフォルトは全バージョンです。SSL 3.0、TLS 1.0、TLS 1.1、TLS 1.2、TLS 1.3 から選択してください。

たとえば、TLSv1.2/3 の接続のみを許可する場合は、それよりも低いバージョンにブロックルールを作成できます。

TLS 1.3 接続に一致させるには Snort 3 を使用している必要があります。

記載されていない SSL v2.0 などのバージョンを使用するトラフィックは、SSL 復号ポリシーのデフォルトのアクションによって処理されます。

SSL 復号設定の指定

トラフィックを復号するルールがある場合は、証明書設定を指定する必要があります。設定を変更して、暗号化されたトラフィックに復号を適用する方法を変更することもできます。以降のトピックでは、オプションについて説明します。

既知のキーと復号の再署名の証明書の設定

再署名によってまたは既知のキーを使用して復号を実装する場合は、SSL 復号ルールが使用できる証明書を特定する必要があります。すべての証明書が有効で、期限が切れていないことを確認します。

特に既知のキーの復号の場合は、復号する接続の各宛先サーバの現在の証明書とキーがシステムにあることを確認する必要があります。既知キーの復号ルールでは、復号の宛先サーバからの実際の証明書とキーを使用します。したがって、常に脅威に対する防御デバイスに最新の証明書とキーがあることを確認する必要があります。そうでない場合復号は失敗します。

既知のキールールで宛先サーバの証明書またはキーを変更するたびに新しい内部証明書とキーをアップロードします。それらを内部証明書（内部 CA 証明書ではありません）としてアップロードします。次の手順の間に証明書をアップロードするか、[オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] ページに進み、そこにアップロードします。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL 復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

ステップ 2 [SSL 復号設定 (SSL Decryption Settings)] ボタン (⚙️) をクリックします。

必要に応じて、[基本 (Basic)] タブを選択します。

ステップ 3 [再署名証明書の復号 (Decrypt Re-Sign Certificate)] で、再署名証明書での復号を実装するルールに使用するために内部 CA 証明書を選択します。

事前定義済みの NGFW-Default-InternalCA 証明書か、作成またはアップロードしたものを使用できます。証明書がまだ存在しない場合は、[内部CAを作成 (Create Internal CA)] をクリックして作成します。

クライアントのブラウザに証明書をまだインストールしていない場合は、ダウンロードボタン (📥) をクリックしてコピーを入手します。証明書をインストールする方法については、各ブラウザのマニュアルを参照してください。再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード (581 ページ) も参照してください。

ステップ 4 既知のキーを使用して復号するルールごとに、宛先サーバの内部証明書とキーをアップロードします。

- a) [既知キー証明書の復号 (Decrypt Known-Key Certificates)] で [+] をクリックします。
- b) 内部 ID の証明書を選択するか、[新しい内部証明書の作成 (Create New Internal Certificate)] をクリックし、ここでそれをアップロードします。
- c) [OK] をクリックします。

ステップ 5 (オプション)。[信頼できるCA証明書 (Trusted CA Certificates)] の下にある [+] をクリックし、ポリシーで信頼する証明書または証明書グループを選択します。

デフォルトグループの Cisco-Trusted-Authorities には、システム定義の信頼できる CA 証明書がすべて含まれています。この設定の変更が必要になる可能性のある主なケースは次のとおりです。

- デフォルトグループにない信頼できる CA 証明書を使用する場合。作成後、SSL 復号ポリシー設定でデフォルトグループと新しいグループの両方を選択します。これは、追加の信頼できる CA 証明書をアップロード済みの場合に実行できます。
- デフォルトグループにあるものよりも限定された信頼できる CA 証明書のリストを使用する場合。作成後、信頼できる証明書の完全なリスト（差分だけでなく）を持つグループを作成し、SSL 復号ポリシー設定で唯一のグループとして選択します。

ユーザは、証明書の署名機関がこのリストに含まれていないサイトの証明書を受け入れるように求められます。証明書が信頼されていないという理由だけで、サイトへのアクセスがブロックされることはありません。

リストを空のままにするか、空の証明書グループのみを選択すると、SSL 復号ポリシーはすべての証明書を信頼します。

ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックします。

高度なトラフィックおよび復号できないトラフィックの設定の指定

デフォルトの動作を使用しない場合は、高度な復号の設定と復号できないトラフィックの設定を指定できます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

ステップ 2 [SSL復号設定 (SSL Decryption Settings)] ボタン (⚙️) をクリックします。

ステップ 3 [詳細 (Advanced)] タブで、**TLS 1.3 復号**を有効にするかどうかを選択します。

TLS 1.3 復号を有効にする場合は、TLS 1.3 に適用する必要がある各ルールの [詳細 (Advanced)] タブでも [TLS 1.3] オプションを選択する必要があります。TLS 1.3 を復号するには、Snort 3 を実行している必要があります。

ステップ 4 [復号化不可のアクション (Undecryptable Actions)] タブで、復号を実装するルールに一致するものの復号できない接続をシステムが処理する方法を変更します。

デフォルトでは、これらの接続にはデフォルトアクションと同じアクションが適用されます。例外は復号エラーの発生であり、それについてはブロックするカリセットによりブロックすることのみを選択できます。

これらのカテゴリの説明については、[復号できないトラフィックの処理 \(562 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード

トラフィックを復号する場合、ユーザは、TLS/SSL を使用するアプリケーションで信頼できるルート認証局として定義された暗号化プロセスで使用される、内部 CA 証明書を持っている必要があります。通常、証明書を生成した場合や、証明書をインポートした場合であっても、これらのアプリケーションで証明書がすでに信頼されているものとして定義されることはありません。大部分の Web ブラウザはデフォルトで、ユーザが HTTPS 要求を送信すると、Web サイトのセキュリティ証明書に問題があることを知らせる警告メッセージがクライアントアプリケーションから表示されます。通常、このエラーメッセージでは、Web サイトのセキュリティ証明書が信頼された認証局から発行されたものではないこと、または Web サイトが不明な認証局で証明されたものであることが示されますが、警告によって処理中に中間者攻撃の可能性があることが示唆される場合もあります。クライアントアプリケーションによっては、この警告メッセージがユーザに示されず、ユーザは承認されない証明書を受け入れることができません。

以下のいくつかの方法で、ユーザに必要な証明書を提供できます。

ルート証明書を受け入れるようにユーザに通知する

組織内のユーザに会社の新しいポリシーの内容を伝え、信頼された送信元として組織によって提供されるルート証明書を受け入れるように伝えることができます。ユーザは証明書を受け入れ、信頼されたルート認証局のストレージエリアにそれを保存して、次にサイトにアクセスしたときにプロンプトが再度表示されないようにする必要があります。



- (注) ユーザは、代替証明書を作成した CA 証明書を受け入れて、信頼する必要があります。そうではなく、単に代替サーバ証明書を信頼した場合は、異なる HTTPS サイトを訪問するたびに、警告が表示される状況が続きます。

クライアントデバイスにルート証明書を追加する

ネットワーク上のすべてのクライアントデバイスに、信頼できるルート認証局としてルート証明書を追加できます。そうすれば、クライアントアプリケーションは自動的にルート証明書を持つトランザクションを受け入れるようになります。

証明書を電子メールで送信するか、共有サイトに置くことで、ユーザが証明書を入手できるようにします。または、会社のワークステーションイメージに証明書を組み込み、アプリケーションの更新機能を使用して、ユーザに証明書を自動的に配布することもできます。

次に、内部 CA 証明書をダウンロードして、Windows クライアントにインストールする方法を説明します。

手順

ステップ 1 Device Manager から証明書をダウンロードします。

- [ポリシー (Policies)] > [SSL 復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。
- [SSL 復号設定 (SSL Decryption Settings)] ボタン (⚙️) をクリックします。
- [Download] ボタン (📶) をクリックします。
- ダウンロード場所を選択して、必要に応じてファイル名を変更し (拡張子そのまま)、[保存 (Save)] をクリックします。

これで、[SSL 復号設定 (SSL Decryption Settings)] ダイアログ ボックスからキャンセルできます。

ステップ 2 クライアントシステムの Web ブラウザにある信頼されたルート認証局のストレージエリアに証明書をインストールするか、クライアント自体が証明書をインストールできるようにします。

プロセスは、オペレーティング システムとブラウザの種類によって異なります。たとえば、Windows 上で実行されている Internet Explorer および Chrome の場合は次のプロセスを使用できます。(Firefox の場合は、[ツール (Tools)] > [オプション (Options)] > [詳細 (Advanced)] ページでインストールします。)

- [スタート (Start)] メニューから、[コントロールパネル (Control Panel)] > [インターネット オプション (Internet Options)] を選択します。
- [Content] タブを選択します。
- [証明書 (Certificates)] ボタンをクリックして、[証明書 (Certificates)] ダイアログ ボックスを開きます。

- d) [信頼されたルート証明機関 (Trusted Root Certification Authorities)] タブを選択します。
- e) [Import (インポート)] をクリックし、ウィザードに従ってダウンロードされたファイル (<uuid>_internalCA.crt) を見つけて選択し、信頼できるルート認証局のストアに追加します。
- f) [Finish] をクリックします。

メッセージは、インポートが成功したことを示しているはずです。ユーザがよく知られたサードパーティの認証局から証明書を取得するのではなく自己署名証明書を生成した場合は、途中で Windows が証明書を検証できなかったことを警告するダイアログ ボックスが表示される場合があります。

[証明書 (Certificates)] ダイアログ ボックスと [インターネット オプション (Internet Options)] ダイアログ ボックスを閉じることができます。

例：ネットワークからの古いSSL/TLSバージョンのブロック

一部の組織では、政府の規制または会社のポリシーにより、古いバージョンのSSLまたはTLSの使用を禁止する必要があります。SSL復号ポリシーを使用して、禁止するSSL/TLSバージョンを使用するトラフィックをブロックできます。禁止されたトラフィックをすぐに捕捉できるようにするには、このルールをSSL復号ポリシーの先頭に配置することを検討してください。

次の例では、すべてのSSL 3.0およびTLS 1.0接続をブロックします。

始める前に

この手順では、SSL 復号ポリシーがすでに有効になっていると仮定します ([SSL 復号ポリシーの有効化 \(568 ページ\)](#) を参照)。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [SSL復号 (SSL Decryption)] の順に選択します。

ステップ 2 [+] ボタンをクリックして、新しいルールを作成します。

ステップ 3 [順序 (Order)] で、[1] を選択してルールをポリシーの先頭に配置するか、またはネットワークに最も適した数を選択します。

デフォルトでは、ルールはポリシーの最後に追加されます。

ステップ 4 [タイトル (Title)] に、ルールの名前 (たとえば、Block_SSL3.0_and_TLS1.0) を入力します。

ステップ 5 [アクション (Action)] で、[ブロック (Block)] を選択します。これにより、ルールに一致するすべてのトラフィックが即座にドロップされます。

- ステップ 6** [送信元/宛先 (Source/Destination)]、[アプリケーション (Applications)]、[URL (URLs)]、[ユーザ (Users)]の各タブについては、すべてのオプションをデフォルト値のままにします。
- ステップ 7** [詳細 (Advanced)]タブをクリックし、[サポートされているバージョン (Supported Versions)]の下の [SSL 3.0] と [TLS 1.0] を選択したままにします。ただし、[TLS 1.1]、[TLS 1.2]、および [TLS 1.3] はオフにします。
- ステップ 8** (任意) ブロックされた接続をダッシュボードやイベントに反映させるには、[ロギング (Logging)]タブをクリックし、[接続終了 (At End of Connection)]を選択します。外部syslogサーバを使用している場合は、それを選択することもできます。
- ステップ 9** [OK]をクリックします。

これでポリシーを展開できます。展開すると、システムを通過するSSL 3.0またはTLS 1.0接続はドロップされます。

(注)

SSL 2.0 接続は、ポリシーのデフォルトアクションによって処理されます。これらもドロップされるようにするには、デフォルトアクションを[ブロック (Block)]に変更します。

次のタスク

このルールを実装する場合、次の推奨事項があります。

- どのタイプの復号ルールでも、すべてのSSL/TLSオプションが選択されている[詳細設定]タブはデフォルト設定のままにします。すべてのバージョンに適用することで、ハンドシェイクプロセスが簡素化されます。ただし、最初のブロックルールでは、SSL 3.0 および TLS 1.0 接続が引き続き妨げられます。
- 通常は、ポリシーのデフォルトアクションとして [復号しない (Do Not Decrypt)] を使用することをお勧めします。しかし、SSL 2.0 接続は常にデフォルトアクションによって処理されるため、代わりに [ブロック (Block)] を使用することもできます。ただし、すべての復号可能なトラフィックのデフォルトアクションとして [復号しない (Do Not Decrypt)] を適用する場合は、ポリシーの最後に [復号しない (Do Not Decrypt)] ルールを作成し、トラフィック一致基準のすべてのデフォルト値を受け入れます。このルールならば、テーブル内の以前のルールに一致しない、すべてのサポート対象の TLS 接続に一致し、それらの TLS バージョンにおけるデフォルトとして機能します。

SSL 復号のモニタリングおよびトラブルシューティング

ここでは、SSL 復号ポリシーのモニタおよびトラブルシューティング方法について説明します。

SSL 復号のモニタリング

ダッシュボードに復号についての情報を表示でき、ログ収集を有効化したルール（またはデフォルトのアクション）に一致するトラフィックのイベントを表示できます。

SSL 復号のダッシュボード

全体的な復号の統計情報を評価するには、**[モニタリング (Monitoring)] > [SSL復号 (SSL Decryption)]** ダッシュボードを表示します。ダッシュボードには次の情報が表示されます。

- 暗号化されたトラフィックとプレーン テキスト トラフィックの割合。
- SSL ルールに従って、暗号化されたトラフィックがどの程度復号されたか。

イベン

ダッシュボードに加えて、イベント ビューア (**[モニタリング (Monitoring)] > [イベント (Events)]**) には、暗号化されたトラフィックの SSL 情報が含まれています。イベントの評価についていくつかのヒントを次に示します。

- 一致するトラフィックをブロックする SSL ルール（またはデフォルトのアクション）と一致したためにドロップされた接続の場合、**[アクション (Action)]** は「ブロック」で、**[理由 (Reason)]** は「SSL ブロック」を示す必要があります。
- **[実際の SSL アクション (SSL Actual Action)]** フィールドは、システムが接続に適用した実際のアクションを示します。これは、一致するルールに定義されたアクションを示す **[予期された SSL アクション (SSL Expected Action)]** とは異なります。たとえば、接続が復号を適用するルールと一致しても、いくつかの理由で復号できないことがあります。

復号再署名がブラウザに関して動作する（ただしアプリケーションに関しては機能しない）Web サイトの処理（SSL または認証局ピンニング）

スマートフォンおよびその他のデバイス用の一部のアプリケーションでは「SSL（または認証局）ピンニング」と呼ばれる手法が使用されます。SSL ピンニング手法では、元のサーバ証明書のハッシュがアプリケーション自体の内部に埋め込まれます。その結果、アプリケーションが脅威に対する防御 デバイスから再署名された証明書を受け取ると、ハッシュ検証に失敗し、接続が中断されます。

Web サイトのアプリケーションを使用してそのサイトに接続することができないにもかかわらず、Web ブラウザを使用する場合は、接続に失敗したアプリケーションを使用したデバイス上のブラウザでも接続できるというのが主な症状です。たとえば、Facebook の iOS または Android アプリケーションを使用すると接続に失敗しますが、Safari または Chrome で <https://www.facebook.com> を指定すると接続に成功します。

SSL ピンニングは特に中間者攻撃を回避するために使用されるため、回避策はありません。次のいずれかの選択肢を使用する必要があります。

- アプリケーションのユーザをサポートします。この場合は、サイトへのトラフィックを復号できません。[SSL復号（SSL Decryption）] ルールの [アプリケーション（Application）] タブで、サイトのアプリケーションの [復号しない（Do Not Decrypt）] ルールを作成し、そのルールが、接続に適用される [再署名の復号（Decrypt Re-sign）] ルールの前に適用されることを確認します。
- ユーザにブラウザだけを使用させます。サイトへのトラフィックを復号する必要がある場合は、ネットワーク経由で接続するときにサイトのアプリケーションを使用できないためにブラウザだけを使用する必要があることをユーザに通知する必要があります。

詳細の表示

サイトがブラウザでは機能するのに同じデバイス上のアプリケーションでは機能しない場合は、ほぼ確実に SSL ピンニングによるものと考えられます。ただし、詳しく調べる必要がある場合は、ブラウザのテストに加えて、接続イベントを使用して SSL ピンニングを識別できます。

アプリケーションは、次の 2 つの方法でハッシュ検証の失敗に対処する場合があります。

- グループ 1 のアプリケーション（Facebook など）は、サーバから SH、CERT、SHD メッセージを受け取るとすぐに SSLALERT メッセージを送信します。アラートは、通常、SSL ピンニングを示す「Unknown CA (48)」アラートです。アラートメッセージの後に TCP リセットが送信されます。イベントの詳細情報で次のような症状が見られます。
 - SSL フロー フラグには ALERT_SEEN が含まれます。
 - SSL フロー フラグには APP_DATA_C2S または APP_DATA_S2C は含まれません。
 - SSL フロー メッセージは、通常、CLIENT_HELLO、SERVER_HELLO、SERVER_CERTIFICATE、SERVER_KEY_EXCHANGE、SERVER_HELLO_DONE です。
- グループ 2 のアプリケーション（Dropbox など）はアラートを送信しません。代わりに、ハンドシェイクが完了するまで待ってから TCP リセットを送信します。イベントで次のような症状が見られます。
 - SSL フロー フラグには ALERT_SEEN、APP_DATA_C2S、または APP_DATA_S2C は含まれません。
 - SSL フロー メッセージは、通常、CLIENT_HELLO、SERVER_HELLO、SERVER_CERTIFICATE、SERVER_KEY_EXCHANGE、SERVER_HELLO_DONE、CLIENT_KEY_EXCHANGE、CLIENT_CHANGE_CIPHER_SPEC、CLIENT_FINISHED、SERVER_CHANGE_CIPHER_SPEC、SERVER_FINISHED です。



第 20 章

アイデンティティ ポリシー

アイデンティティ ポリシーを使用して、接続からユーザ アイデンティティ情報を収集できます。その後、ユーザアイデンティティに基づく使用状況をダッシュボードに表示し、ユーザまたはユーザ グループに基づくアクセス制御を設定できます。

- [アイデンティティ ポリシーの概要 \(587 ページ\)](#)
- [アイデンティティ ポリシーを実装する方法 \(589 ページ\)](#)
- [アクティブ認証のベストプラクティス \(590 ページ\)](#)
- [アイデンティティ ポリシーの設定 \(592 ページ\)](#)
- [透過的なユーザ認証のイネーブル化 \(600 ページ\)](#)
- [アイデンティティ ポリシーのモニタリング \(604 ページ\)](#)
- [アイデンティティ ポリシーの例 \(604 ページ\)](#)

アイデンティティ ポリシーの概要

アイデンティティポリシーを使って、接続に関連付けられたユーザを検出できます。ユーザを特定することにより、脅威、エンドポイント、ネットワーク インテリジェンスとユーザ アイデンティティ情報を関連付けることができます。ネットワーク動作、トラフィック、イベントを個別のユーザに直接リンクすることにより、ポリシー違反、攻撃、またはネットワークの脆弱性の発生源の特定に役立てることができます。

たとえば、侵入イベントのターゲットになっているホストの所有者や内部攻撃またはポートスキャンを開始した人物を特定できます。高帯域幅ユーザや望ましくない Web サイトまたはアプリケーションにアクセスしているユーザを特定することもできます。

ユーザ検出には、分析のためのデータ収集以上のメリットがあります。ユーザ アイデンティティに基づいてリソースへのアクセスを選択的に許可またはブロックできるようユーザ名やユーザ グループ名に基づくアクセスルールを作成することもできます。

ユーザ アイデンティティは、次の方法で取得できます。

- パッシブ認証：すべてのタイプの接続で、ユーザ名とパスワードを求められることなく、その他の認証サービスからユーザ アイデンティティを取得します。

- アクティブ認証：HTTP 接続でのみ、ユーザ名とパスワードの入力が求められ、送信元 IP アドレスのユーザ アイデンティティを取得するために指定のアイデンティティ ソースに対する認証が行われます。

ここでは、ユーザ アイデンティティについて詳しく説明します。

パッシブ認証経由のユーザ アイデンティティの確立

パッシブ認証では、ユーザにユーザ名とパスワードを求めることなくユーザアイデンティティを収集します。システムは、指定したアイデンティティ ソースからマッピングを取得します。

ユーザと IP アドレスのマッピングは次のソースから受動的に取得できます。

- リモートアクセス VPN ログイン。パッシブアイデンティティについては次のユーザタイプがサポートされています。
 - 外部認証サーバで定義されたユーザ アカウント。
 - Device Manager で定義されたローカルユーザーアカウント。
- Cisco Identity Services Engine (ISE)、Cisco Identity Services Engine Passive Identity Connector (ISE PIC)。

特定のユーザが複数のソースによって識別される場合は、RA VPN ID が優先されます。

アクティブ認証経由のユーザ アイデンティティの確立

認証は、ユーザのアイデンティティを確認する動作です。

アクティブ認証を使用すると、ユーザとアイデンティティのマッピングが存在しないシステムの IP アドレスから HTTP トラフィック フローが送られてきたときに、システム用に設定されたディレクトリに対してトラフィック フローを開始したユーザを認証するかどうかを判断できます。ユーザが正常に認証された場合、IP アドレスには、認証されたユーザのアイデンティティがあると見なされます。

認証に失敗しても、ユーザのネットワークアクセスは阻止されません。最終的には、アクセスルールがそのようなユーザへのアクセス権を決定します。

不明なユーザの処理

アイデンティティ ポリシーのためにディレクトリ サーバを設定する場合、システムはディレクトリ サーバからユーザおよびグループ メンバーシップ情報をダウンロードします。この情報は 24 時間ごとの真夜中に、またはディレクトリの設定を編集して保存するたびに（変更を何も加えていなくても）更新されます。

アクティブな認証用アイデンティティルールに求められた際に、ユーザが認証に成功しても、ユーザの名前がダウンロードされたユーザのアイデンティティ情報にない場合、ユーザは「不

明」としてマークされます。アイデンティティ関連のダッシュボードにはユーザの ID は表示されず、ユーザはグループルールにも一致しません。

ただし、不明ユーザ用のアクセス制御ルールはすべて適用されます。例えば、不明ユーザに対して接続をブロックする場合、これらのユーザは認証に成功した場合（つまりディレクトリサーバがユーザを認識し、パスワードが有効である場合）でもブロックされます。

ユーザの追加または削除やグループメンバーシップの変更など、ディレクトリサーバに変更を加えた場合、システムがその更新をディレクトリからダウンロードするまで、これらの変更はポリシーに反映されません。

真夜中の日次更新まで待てず、すぐに更新を適用させる必要がある場合は、ディレクトリのレールム情報を編集します（**[オブジェクト（Objects）]>[アイデンティティ ソース（Identity Sources）]**に移動し、レールムを編集する）。**[保存（Save）]**をクリックして、変更を展開します。システムはただちに更新情報をダウンロードします。



- (注) システムに新しいユーザ情報や削除されたユーザ情報があるかを確認するには、**[ポリシー（Policies）]>[アクセスコントロール（Access Control）]**に移動し、**[ルールの追加（+）（Add Rule(+))]** ボタンをクリックし、**[ユーザ（Users）]** タブにあるユーザのリストを確認します。新しいユーザが見つからない、もしくは、削除されたユーザが見つかる場合、システムの情報は古いままです。

アイデンティティ ポリシーを実装する方法

ユーザ アイデンティティの取得を有効にし、IP アドレスに関連付けられているユーザを認識させるには、いくつかの項目を設定する必要があります。正しく設定されている場合、監視ダッシュボードおよびイベントでユーザ名を確認できます。ユーザ アイデンティティは、アクセス制御ルールや SSL 復号ルールでもトラフィック一致基準として使用できます。

次の手順では、アイデンティティ ポリシーを機能させるために設定する必要がある内容の概要を示します。

手順

ステップ 1 AD アイデンティティ レールムを設定します。

（ユーザ認証を要求して）ユーザアイデンティティをアクティブに収集するか、またはパッシブに収集して、ユーザアイデンティティ情報を含む Active Directory（AD）サーバを設定する必要があります。[AD アイデンティティ レールムの設定（213 ページ）](#)を参照してください。

パッシブ ID を設定すると、複数の AD レールムの ID からシステムがプルできる AD レールムシーケンスを作成できます。この機能は、ネットワーク内に複数の AD ドメインがある場合に役立ちます。

ステップ 2 パッシブ認証アイデンティティ ルールを使用する場合は、パッシブアイデンティティ ソースを設定します。

デバイスに実装しているサービスおよびネットワークで使用可能なサービスに基づき、次のいずれかを設定できます。

- リモートアクセス VPN : デバイスへのリモートアクセス VPN 接続をサポートする場合は、AD サーバーまたは (Device Manager に定義されている) ローカルユーザーに基づいて、ユーザーログイン時にアイデンティティを提供できます。RA VPN の設定方法については、[リモートアクセス VPN の設定 \(852 ページ\)](#) を参照してください。
- Cisco Identity Services Engine (ISE) または Cisco Identity Services Engine Passive Identity Connector (ISE PIC) : これらの製品を使用する場合は、デバイスを pxGrid サブスクライバとして設定し、ISE からユーザアイデンティティを取得できます。「[Identity Services Engine の設定 \(225 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 3 [ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] を選択し、アイデンティティポリシーを有効にします。「[アイデンティティポリシーの設定 \(592 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 4 [アイデンティティポリシーの設定 \(593 ページ\)](#)。

システムに設定しているソースに基づいて、パッシブアイデンティティ ソースが自動的に選択されます。アクティブ認証を設定する場合は、キャプティブポータルおよび (SSL 復号ポリシーをまだ有効にしていない場合の) SSL 再署名復号用の証明書を設定する必要があります。

ステップ 5 [アイデンティティポリシーのデフォルトアクションの設定 \(595 ページ\)](#) を確認してください。

パッシブ認証だけを使用する場合は、パッシブ認証に対するデフォルトアクションを設定でき、特定のルールを作成する必要はありません。

ステップ 6 [アイデンティティルールの設定 \(595 ページ\)](#) を確認してください。

関連するネットワークからパッシブまたはアクティブユーザアイデンティティを収集するルールを作成します。

アクティブ認証のベストプラクティス

アイデンティティルールによりユーザのアクティブ認証が要求されると、そのユーザを接続するために使用されているインターフェイス上のキャプティブポータルポートにユーザがリダイレクトされ、ユーザに認証が求められます。

このリダイレクションはインターフェイス IP アドレスに対するものなので、ID ポリシー証明書は正確には一致せず、ユーザは信頼できない証明書エラーを受け取ります。続行してデバイスに対して認証されるには、ユーザは証明書を受け入れる必要があります。この動作は中間者攻撃に似ているため、ユーザは信頼できない証明書を受け入れることに消極的です。

この問題を回避するために、デバイス上の1インターフェイスの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を使用するようにアクティブ認証を設定できます。適切に設定された証明書を使用すると、ユーザは信頼できない証明書エラーを受け取ることがなくなり、認証がよりシームレスになり、安全性が向上します。

始める前に

アクティブ認証はHTTPトラフィックに対してのみ行われ、ユーザのワークステーションや他のクライアントデバイスに対する最新のユーザマッピングがデバイスにない場合は常に、エンドユーザの作業が中断されます。代わりにパッシブ認証を実装することで、中断を回避できます。

手順

ステップ 1 DNS サーバで、アクティブ認証を収集するために使用するインターフェイスのインターフェイス IP アドレスの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を定義します。

これはキャプティブポータルとも呼ばれ、ルーテッドインターフェイスである必要があります。

ステップ 2 認証局 (CA) を使用して、この FQDN の証明書を取得します。

ftd1.captive-port.example.com など、特定の FQDN の証明書を作成できます。(任意) 以下を実行できます。

- *.captive-port.example.com など、さまざまなデバイス上のキャプティブポータルインターフェイスに適用できるワイルドカード証明書を取得します。ワイルドカードの範囲を広くして、*.eng.example.com や *.example.com などの幅広いエンドポイントに適用できます。
- 証明書に複数のサブジェクト代替名 (SAN) を含めます。

ステップ 3 [オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] を選択し、証明書をアップロードします。

ステップ 4 [オブジェクト (Objects)] > [ネットワーク (Network)] を選択し、DNS 名の FQDN ネットワークオブジェクトを作成します。

ステップ 5 [ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] ページで、証明書と FQDN オブジェクトを使用して ID ポリシー設定を更新します。

ステップ 6 アクティブ認証を使用する ID ポリシーのルールを作成します。

アイデンティティ ポリシーの設定

アイデンティティ ポリシーを使用して、接続からユーザ アイデンティティ情報を収集できます。その後、ユーザアイデンティティに基づく使用状況をダッシュボードに表示し、ユーザまたはユーザ グループに基づくアクセス制御を設定できます。

次に、アイデンティティ ポリシーを介してユーザ アイデンティティを取得するための設定について説明します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] の順に選択します。

アイデンティティ ポリシーをまだ定義していない場合には、[アイデンティティポリシーを有効にする (Enable Identity Policy)] をクリックして、[アイデンティティ ポリシーの設定 \(593 ページ\)](#) の説明のとおり設定します。

ステップ 2 アイデンティティ ポリシーを管理します。

アイデンティティを設定した後、このページにすべてのルールが順番に一覧表示されます。ルールは上から下の順にトラフィックと照合され、最初に一致したルールが、適用するアクションを決定します。このページで、次を実行できます。

- アイデンティティ ポリシーを有効または無効にするには、[アイデンティティポリシー (Identity Policy)] トグルをクリックします。
- アイデンティティポリシー設定を変更するには、[アイデンティティポリシー設定 (Identity Policy Configuration)] ボタン (⚙️) をクリックします。
- [デフォルトアクション (Default Action)] を変更するには、アクションをクリックして、希望のアクションを選択します。[アイデンティティ ポリシーのデフォルトアクションの設定 \(595 ページ\)](#) を参照してください。
- ルールを移動するには、編集して [順序 (Order)] ドロップダウン リストから新しい場所を選択します。
- ルールを設定するには、次の手順を実行します。
 - 新しいルールを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
 - 既存のルールを編集する場合は、([操作 (Actions)] 列の) 対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。また、テーブル内の特定のルールプロパティをクリックして、そのプロパティを選択的に編集することもできます。
 - 不要になったルールを削除する場合は、([操作 (Actions)] 列の) 対象のルールの削除アイコン (🗑️) をクリックします。

アイデンティティ ルールの作成と編集の詳細については、[アイデンティティ ルールの設定 \(595 ページ\)](#) を参照してください。

アイデンティティ ポリシーの設定

アイデンティティ ポリシーを機能させるには、ユーザ アイデンティティ 情報を提供する送信元を設定する必要があります。必要な設定は、設定するルールのタイプ（パッシブ、アクティブ、または両方）によって異なります。

別のセクションで、設定ダイアログボックスにこれらの設定が表示されます。ダイアログボックスにアクセスする方法に応じて、両方のセクションが表示されるか、または片方のセクションだけが表示されます。構成済みの必要な設定を使用せずに認証タイプのルールを作成しようとすると、自動的にダイアログボックスが表示されます。

次の手順で、すべてのダイアログボックスについて説明します。

始める前に

ディレクトリ サーバ、Threat Defense デバイス、およびクライアント間で時刻設定が一致していることを確認します。これらのデバイス間で時刻にずれがあると、ユーザ認証が成功しない場合があります。「一致」とは、別のタイムゾーンを使用できるが、たとえば、10 AM PST = 1 PM EST など、それらのゾーンに対して相対的に同じになっている必要があることを意味しています。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] を選択します。

ステップ 2 [アイデンティティポリシー設定 (Identity Policy Configuration)] ボタン (⚙️) をクリックします。

ステップ 3 [パッシブ認証 (Passive Authentication)] オプションを設定します。

ダイアログボックスに、設定済みのパッシブ認証ソースが表示されます。

必要に応じて、このダイアログボックスで ISE を設定できます。ISE オブジェクトを設定していない場合は、[ISEの統合 (Integrate ISE)] リンクをクリックしてすぐに作成することができます。オブジェクトが存在する場合は、状態 ([有効 (Enabled)] または [無効 (Disabled)]) とともに表示されます。

パッシブ認証ルールを作成するには、少なくとも1つの有効なパッシブアイデンティティ ソースを設定する必要があります。

ステップ 4 [アクティブ認証 (Active Authentication)] オプションを設定します。

アイデンティティルールによりユーザのアクティブ認証が要求されると、そのユーザはキャプティブポータルポートにリダイレクトされ、認証を求められます。これらの設定を設定する前に、[アクティブ認証のベストプラクティス（590 ページ）](#) を読んでください。

- [サーバ証明書 (Server Certificate)] : アクティブ認証時にユーザに提示する内部証明書を選択します。必要な証明書をまだ作成していない場合は、ドロップダウンリストの一番下にある [新しい内部証明書の作成 (Create New Internal Certificate)] をクリックします。

ユーザのブラウザが信頼済みの証明書をアップロードしない場合、ユーザは証明書を承認するよう要求されることになります。

- [ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] (Snort 3.0 のみ) : アクティブな認証要求のキャプティブポータルとして使用するインターフェイスの完全修飾ホスト名を定義するネットワークオブジェクトを選択します。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックします。

FQDN は、デバイス上のいずれかのインターフェイスの IP アドレスに解決される必要があります。FQDN を使用すると、クライアントが認識するアクティブ認証用の証明書を割り当てることができます。これにより、IP アドレスにリダイレクトされたときにユーザに表示される信頼できない証明書の警告を回避できます。証明書では、FQDN、ワイルドカード FQDN、または複数の FQDN をサブジェクト代替名 (SAN) に指定できます。

アイデンティティルールによりユーザのアクティブ認証が要求されているが、リダイレクト FQDN を指定していない場合、ユーザは、接続されているインターフェイス上のキャプティブポータルポートにリダイレクトされます。

- [ポート (Port)] : キャプティブ ポータル ポート。デフォルトは 885 (TCP) です。別のポートを設定する場合は、1025 ~ 65535 の範囲にする必要があります。

(注)

[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を指定しない場合、HTTP 基本、HTTP 応答ページ、および NTLM 認証方式では、インターフェイスの IP アドレスを使用してユーザがキャプティブポータルにリダイレクトされます。ただし、HTTP ネゴシエートでは、完全修飾 DNS 名 *firewall-hostname.AD-domain-name* を使用してユーザがリダイレクトされます。[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を指定せずに HTTP ネゴシエートを使用する場合は、アクティブ認証が必要なすべての内部インターフェイスの IP アドレスにこの名前をマッピングするように DNS サーバを更新する必要があります。そうでない場合は、リダイレクションが完了せず、ユーザは認証できません。認証方式に関係なく一貫した動作を確保するために、[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を常に指定することを推奨します。

ステップ 5 (アクティブ認証のみ)。[再署名証明書の復号 (Decrypt Re-Sign Certificate)] で、再署名証明書での復号を実装するルールに使用するために内部 CA 証明書を選択します。

事前定義済みの NGFW-Default-InternalCA 証明書か、作成またはアップロードしたものを使用できます。証明書がまだ存在しない場合は、[内部CAを作成 (Create Internal CA)] をクリックして作成します。

クライアントのブラウザに証明書をまだインストールしていない場合は、ダウンロードボタン (📄) をクリックしてコピーを入手します。証明書をインストールする方法については、各ブラウザのマニュアルを参照してください。再署名の復号ルールの CA 証明書のダウンロード (581 ページ) も参照してください。

(注)

SSL 復号ポリシーをまだ構成していない場合にのみ SSL 復号の設定が求められます。ID ポリシーを有効にした後、これらの設定を変更するには、SSL 復号ポリシー設定を編集します。

ステップ 6 [保存 (Save)] をクリックします。

アイデンティティ ポリシーのデフォルト アクションの設定

アイデンティティ ポリシーにはデフォルトアクションがあり、これは個別のアイデンティティ ルールに一致しない接続に実行されます。

実際には、ルールがないことがポリシーの有効な設定になります。すべてのトラフィックの送信元でパッシブ認証を使用する予定の場合は、単純にパッシブ認証をデフォルトアクションとして設定します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] の順に選択します。

ステップ 2 [デフォルトアクション (Default Action)] をクリックして、次のいずれかを選択します。

- [パッシブ認証 (任意のアイデンティティソース) (Passive Auth (Any Identity Source))] : ユーザアイデンティティは、任意のアイデンティティ ルールに一致しない接続に対して設定されたすべてのパッシブアイデンティティ ソースを使用して特定されます。パッシブアイデンティティ ソースを設定しない場合は、パッシブ認証をデフォルトとして使用すると [認証なし (No Auth)] を使用することと同じになります。
- [認証なし (認証不要) (No Auth (No Authentication Required))] : ユーザアイデンティティは、任意のアイデンティティ ルールに一致しない接続について特定されません。

アイデンティティ ルールの設定

アイデンティティ ルールにより、一致するトラフィックでユーザアイデンティティ情報を収集するかどうかが決まります。一致するトラフィックのユーザアイデンティティ情報を収集しない場合は、[認証なし (No Authentication)] を設定できます。

注意する点として、ルールの設定に関わらず、アクティブ認証はHTTPトラフィックに対してのみ行われます。したがって、HTTP 以外のトラフィックをアクティブ認証から除外するため

のルールを作成する必要はありません。アクティブ認証ルールをすべての送信元および宛先に適用するだけで、すべての HTTP トラフィックのユーザ アイデンティティ情報を取得できます。



(注) また、認証が失敗してもネットワークアクセスには影響がないことに注意してください。アイデンティティ ポリシーが収集するのはユーザ アイデンティティ情報のみです。認証に失敗したユーザがネットワークにアクセスできないようにするには、アクセスルールを使用する必要があります。

始める前に

ルールは、トップダウン方式で評価されます。特定のルールの指定されたネットワーク基準に一致する接続の場合、ユーザーは、ルールで指定されたアイデンティティレルムに対して評価されます。そのレルムの一部ではない場合、そのユーザーは不明としてマークされ、アイデンティティポリシー内のそれ以上のルールは評価されません。そのため、評価する必要があるレルムが複数ある場合は、単一のレルムではなく、必ずレルムシーケンスを使用してください。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (🔍) をクリックします。

不要になったルールを削除する場合は、対象のルールの削除アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 [順序 (Order)] で、ルールの番号付きリストのどこにルールを挿入するかを選択します。

ルールは最初に一致したもののから順に適用されるため、限定的なトラフィック一致基準を持つルールは、同じトラフィックに適用され、汎用的な基準を持つルールよりも上に置く必要があります。

デフォルトでは、ルールはリストの最後に追加されます。ルールの配置を後で変更する場合は、このオプションを編集して配置を変更します。

ステップ 4 [タイトル (Title)] にルールの名前を入力します。

ステップ 5 [Action] を選択し、必要に応じて [AD Identity Source] を選択します。

パッシブおよびアクティブ認証ルールのユーザ アカウントが含まれる AD アイデンティティレルムを選択する必要があります。必要なレルムがまだ存在しない場合、[新規アイデンティティレルムの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックして作成します。パッシブ認証では、単一の AD レルムオブジェクトではなく、AD レルムシーケンスを選択できます。

- [パッシブ認証 (Passive Auth)] : パッシブ認証を使用して、ユーザアイデンティティを判断します。設定されたすべてのアイデンティティ ソースが表示されます。ルールでは、設定されたすべてのソースが自動的に使用されます。
- [アクティブ認証 (Active Auth)] : アクティブ認証を使用して、ユーザアイデンティティを判断します。アクティブ認証はHTTPトラフィックのみに適用されます。他のタイプのトラフィックが、アクティブ認証を要求または許可するアイデンティティポリシーに適合した場合、アクティブ認証は試行されません。
- [認証なし (No Auth)] : ユーザアイデンティティ情報を取得しません。該当するトラフィックにアイデンティティベースのアクセスルールは適用されません。このようなユーザは [認証不要 (No Authentication Required)] としてマークされます。

ステップ 6 (アクティブ認証のみ) ディレクトリサーバでサポートされる認証方式 ([タイプ (Type)]) を選択します。

- [HTTP Basic] : 暗号化されていないHTTP基本認証 (BA) 接続を使用してユーザを認証します。ユーザはブラウザのデフォルト認証ポップアップウィンドウを使用してネットワークにログインします。これはデフォルトです。
- [NTLM] : NT LAN Manager (NTLM) 接続を使用してユーザを認証します。この選択項目は、AD レルムを選択した場合にのみ有効になります。ユーザはブラウザのデフォルト認証ポップアップウィンドウを使用してネットワークにログインしますが、IEおよびFirefoxブラウザでは、それぞれの Windows ドメイン ログインを使用して透過的に認証が行われるように設定することができます ([透過的なユーザ認証のイネーブル化 \(600 ページ\)](#) を参照)。
- [HTTP ネゴシエート (HTTP Negotiate)] : このオプションを選択すると、ユーザエージェント (トラフィックフローを開始するためにユーザが使用しているアプリケーション) と Active Directory サーバの間でデバイスが方式をネゴシエートできるようになります。ネゴシエーションの結果は、一般的にサポートされている方式のうち最も強力な方式 (NTLM、基本の順) になります。ユーザはブラウザのデフォルト認証ポップアップウィンドウを使用してネットワークにログインします。
- [HTTP 応答ページ (HTTP Response Page)] : システムで提供する Web ページを使用してユーザに認証を求めます。これは、HTTP 基本認証の一種です。

(注)

[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を指定しない場合、HTTP 基本、HTTP 応答ページ、および NTLM 認証方式では、インターフェイスの IP アドレスを使用してユーザがキャプティブポータルにリダイレクトされます。ただし、HTTP ネゴシエートでは、完全修飾 DNS 名 `firewall-hostname.AD-domain-name` を使用してユーザがリダイレクトされます。[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を指定せずに HTTP ネゴシエートを使用する場合は、アクティブ認証が必要なすべての内部インターフェイスの IP アドレスにこの名前をマッピングするように DNS サーバを更新する必要があります。そうでない場合は、リダイレクションが完了せず、ユーザは認証できません。認証方式に関係なく一貫した動作を確保するために、[ホスト名にリダイレクト (Redirect to Host Name)] FQDN を常に指定することを推奨します。

ステップ 7 (アクティブ認証のみ) [ゲストとしてフォールバック (Fall Back as Guest)] > [オン/オフ (On/Off)] の順に選択し、アクティブ認証に失敗したユーザに [ゲスト (Guest)] ユーザのラベルを付けるかどうかを指定します。

ユーザは、正常に認証する 3 つの機会が得られます。3 回とも失敗した場合にユーザがどのようにマークされるかは、このオプションによって決まります。これらの値に基づき、アクセスルールを書き込みできます。

- [ゲストとしてフォールバック (Fall Back as Guest)] > [オン (On)] : ユーザは [ゲスト (Guest)] としてマークされます。
- [ゲストとしてフォールバック (Fall Back as Guest)] > [オフ (Off)] : ユーザは [失敗した認証 (Failed Authentication)] としてマークされます。

ステップ 8 [送信元/宛先 (Source/Destination)] タブで、トラフィック一致基準を定義します。

注意する点として、アクティブ認証は HTTP トラフィックでのみ試行されます。したがって、HTTP 以外のトラフィックに対して「認証なし」のルールを設定は不要で、HTTP 以外のトラフィックに対してアクティブ認証ルールを作成するポイント也没有ありません。ただし、パッシブ認証は任意のタイプのトラフィックに有効です。

アイデンティティ ルールの送信元/宛先基準は、トラフィックが通過するセキュリティゾーン (インターフェイス)、IP アドレス、または IP アドレスの国または大陸 (地理的位置)、またはトラフィックで使用されるプロトコルおよびポートを定義します。デフォルトでは、すべてのゾーン、アドレス、地理的ロケーション、プロトコル、ポートが対象になります。

条件を変更するには、条件内の [+] ボタンをクリックし、希望するオブジェクトまたは要素を選択し、ポップアップダイアログボックスの [OK] をクリックします。基準にオブジェクトが必要で、そのオブジェクトが存在しない場合、[新規オブジェクトの作成 (Create New Object)] をクリックします。オブジェクトまたは要素をポリシーから削除するには、そのオブジェクトまたは要素の [x] をクリックします。

以下のトラフィック一致基準を設定できます。

送信元ゾーン、送信先ゾーン

トラフィックが経由するインターフェイスを定義するセキュリティゾーンオブジェクト。どのインターフェイスのトラフィックでも適用するものとして、いずれか、または両方の基準を定義することも、両方とも未定義にすることもできます。

- ゾーン内のインターフェイスからデバイスを発信するトラフィックと一致させるには、そのゾーンを [送信先ゾーン (Destination Zones)] に追加します。
- ゾーン内のインターフェイスからデバイスに着信するトラフィックと一致させるには、そのゾーンを [送信元ゾーン (Source Zones)] に追加します。
- 送信元ゾーンと送信先ゾーンの条件を両方ともルールに追加した場合、指定した送信元ゾーンのいずれかから発信されて、指定した送信先ゾーンのいずれかを經由するトラフィックが一致することになります。

トラフィックがデバイスに出入りする場所に基づいてルールを適用する必要がある場合は、この基準を使用します。たとえば、ネットワーク内から発信されるすべてのトラフィックからユーザアイデンティティが収集されるようにするには、内部ゾーンを [送信元ゾーン (Source Zones)] として選択し、送信先ゾーンを空のままにします。

(注)

1つのルールにパッシブセキュリティゾーンとルーテッドセキュリティゾーンを混在させることはできません。さらに、パッシブセキュリティゾーンは送信元ゾーンとしてのみ指定でき、宛先ゾーンとして指定することはできません。

送信元ネットワーク、宛先ネットワーク

ネットワークアドレスまたはトラフィックの場所を定義するネットワークオブジェクトまたは地理的位置です。

- IP アドレスまたは地理的位置からのトラフィックを一致させるには、[送信元ネットワーク (Source Networks)] を設定します。
- IP アドレスまたは地理的位置へのトラフィックを一致させるには、[送信先ネットワーク (Destination Networks)] を設定します。
- 送信元と送信先ネットワークの両方の条件をルールに追加すると、一致するトラフィックは指定した IP アドレスのいずれかから送信され、送信先 IP アドレスのいずれかを通して出力されなければなりません。

この条件を追加するには、次のタブから選択します。

- [ネットワーク (Network)] : 制御するトラフィックの送信元または宛先 IP アドレスを定義するネットワークオブジェクトまたはグループを選択します。
- [地理位置情報 (Geolocation)] : 位置情報機能を選択して、その送信元または宛先の国や大陸に基づいてトラフィックを制御できます。大陸を選択すると、その大陸内のすべての国が選択されます。地理的位置を直接ルールで選択するほかに、作成した位置情報オブジェクトを選択して場所を定義することもできます。地理的位置を使用すると、特定の国で使用されているすべての潜在的な IP アドレスを知る必要なく、その国へのアクセスを簡単に制限できます。

(注)

最新の地理的ロケーションデータを使用してトラフィックがフィルタリングされるようにするために、定期的に地理位置情報データベース (GeoDB) を更新することを強く推奨します。

送信元ポート、宛先ポート/プロトコル

トラフィックで使用されるプロトコルを定義するポートオブジェクト。TCP/UDPの場合、ポートが含まれます。

- 特定のポートまたはポートからのトラフィックと一致させるには、[送信元ポート (Source Ports)] を設定します。送信元ポートに設定できるのは、TCP/UDPのみです。

- プロトコルまたはポートからのトラフィックを一致させるには、[宛先ポート/プロトコル (Destination Ports/Protocols)] を設定します。
- 特定の TCP/UDP ポートから特定の TCP/UDP ポートへ発信されるトラフィックを一致させるには、両方のポートを設定します。送信元および宛先ポートの両方を条件に追加する場合は、単一のトランスポート プロトコル (TCP または UDP) を共有するポートのみを追加できます。たとえば、TCP/80 ポートから TCP/8080 ポートへのトラフィックをターゲットにすることができます。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

透過的なユーザ認証のイネーブル化

アクティブ認証を許可するようにアイデンティティポリシーを設定した場合は、次の認証方式を使用してユーザ アイデンティティを取得できます。

HTTP 基本認証

HTTP 基本認証では、ユーザは常に自分のディレクトリ ユーザ名とパスワードで認証を行うよう要求されます。パスワードはクリアテキストで送信されます。そのため、基本認証はセキュアな認証形式とは見なされません。

基本認証は、デフォルトの認証メカニズムです。

HTTP レスポンス ページ

これは、HTTP 基本認証の一種であり、ユーザにログイン ブラウザ ページが表示されます。

NTLM、HTTP ネゴシエート (Active Directory 用の統合 Windows 認証)

統合 Windows 認証では、ユーザがドメインにログインしてワークステーションを使用するという事実が利用されます。ブラウザは、アクティブ認証中の 脅威に対する防御 キャプティブ ポータルを含め、サーバへのアクセス時にこのドメイン ログインの使用を試みます。パスワードは送信されません。認証が成功すると、ユーザは透過的に認証されるため、認証チャレンジが実行されたのを意識することはありません。

ブラウザがドメイン ログイン クレデンシャルを使用して認証要求を満足できない場合、ユーザは、ユーザ名とパスワードの入力を要求されますが、これは基本認証と同じユーザエクスペリエンスとなります。つまり、統合 Windows 認証を設定した場合は、同じドメイン内のネットワークまたはサーバにアクセスする際、ユーザがクレデンシャルを入力する必要がなくなります。

HTTP ネゴシエートでは、アクティブ ディレクトリ サーバとユーザ エージェントの両方でサポートされる最も強力な方式が選択されます。ネゴシエーションの認証方式で HTTP Basic が選択された場合は、トランスペアレント認証が行われません。強度の順位は NTLM、基本の順番です。トランスペアレント認証を可能にするためには、ネゴシエーションで NTLM を選択する必要があります。

トランスペアレント認証を有効にするには、統合 Windows 認証をサポートするようにクライアントブラウザを設定する必要があります。以降のセクションでは、広く利用されているブラウザがサポートしている統合 Windows 認証の一般的な要件と基本的な設定について説明します。詳細についてはブラウザ（またはその他のユーザエージェント）のヘルプを参照してください。これは、ソフトウェアのリリースによって方法が異なるためです。



ヒント Chrome や Safari など、すべてのブラウザが統合 Windows 認証をサポートしているとは限りません（本書の執筆時点で入手可能なバージョンに基づきます）。ユーザはユーザ名とパスワードの入力を要求されます。使用しているバージョンがサポートされているかを確認するには、ブラウザのマニュアルを参照してください。

トランスペアレント認証の要件

トランスペアレント認証を実装するには、ユーザ ブラウザまたはユーザ エージェントを設定する必要があります。これは、個別に実行することも、そのための設定を作成し、ソフトウェア配布ツールを使用してその設定をクライアントワークステーションにプッシュすることもできます。この作業をユーザが自分で実行する場合は、ネットワークの具体的な設定パラメータを提供する必要があります。

ブラウザまたはユーザ エージェントに関係なく、次の一般的な設定を実装する必要があります。

- 脅威に対する防御 リダイレクトホスト名、またはユーザがネットワークへの接続に使用するインターフェイスを [信頼済みサイト (Trusted Sites)] リストに追加します。リダイレクトホスト名を使用しない場合、IP アドレスか、使用可能な場合は完全修飾ドメイン名 (inside.example.com など) を使用できます。また、ワイルドカードやアドレスの一部を使用して、汎用化された信頼済みサイトを作成できます。たとえば、*.example.com または単に example.com を使用してすべての内部サイトを網羅し、自社ネットワーク内 (example.com 部分は自社ドメイン名) のすべてのサイトを信頼することができます。インターフェイスの特定アドレスを追加する場合には、信頼済みサイトに複数のアドレスを追加して、ネットワークへのすべてのユーザ アクセス ポイントに対処することが必要な場合があります。
- 統合 Windows 認証は、プロキシサーバ経由で機能しません。したがって、プロキシを使用しないか、脅威に対する防御リダイレクトホスト名を追加するか、またはプロキシを経由しないアドレスにインターフェイスを追加する必要があります。プロキシを使用する必要がある場合、ユーザは NTLM を使用していても認証を要求されます。



ヒント トランスペアレント認証の設定は必須ではありませんが、エンドユーザにとって便利です。トランスペアレント認証を設定しなかった場合、ユーザはすべての認証方式に対するログインチャレンジを提示されます。

トランスペアレント認証用の Internet Explorer の設定

NTLM トランスペアレント認証用に Internet Explorer を設定するには次の手順に従います。

手順

ステップ 1 [ツール (Tools)] > [インターネット オプション (Internet Options)] を選択します。

ステップ 2 [セキュリティ (Security)] タブを選択し、[ローカルイントラネット (Local Intranet)] ゾーンを選択した後、次の手順を実行します。

a) [サイト (Sites)] ボタンをクリックして、信頼済みサイトのリストを開きます。

b) 少なくとも次のオプションの 1 つが選択されていることを確認します。

- [イントラネット ネットワークの自動検出 (Automatically detect intranet network)]。このオプションを選択すると、他のすべてのオプションがディセーブルになります。

- [プロキシをバイパスするすべてのサイトを含める (Include all sites that bypass the proxy)]。

c) [詳細 (Advanced)] をクリックして [ローカルイントラネット サイト (Local Intranet Sites)] ダイアログボックスを開いた後、信頼する URL を [サイトの追加 (Add Site)] ボックスに貼り付けて [追加 (Add)] をクリックします。

複数の URL が存在する場合は、このステップを繰り返します。ワイルドカードを使用して、**http://*.example.com** のように URL の一部を指定するか、または単に ***.example.com** と指定します。

このダイアログボックスを閉じて、[インターネット オプション (Internet Options)] ダイアログボックスに戻ります。

d) [ローカルイントラネット (Local Intranet)] が選択されたままの状態、[カスタムレベル (Custom Level)] をクリックして [セキュリティ設定 (Security Settings)] ダイアログボックスを開きます。[ユーザ認証 (User Authentication)] > [ログオン (Logon)] 設定を探して、[イントラネット ゾーンのみ自動ログオン (Automatic logon only in Intranet zone)] を選択します。[OK] をクリックします。

ステップ 3 [インターネット オプション (Internet Options)] ダイアログボックスで [接続 (Connections)] タブをクリックし、次に [LAN 設定 (LAN Settings)] をクリックします。

[LAN にプロキシサーバを使用する (Use a proxy server for your LAN)] が選択されている場合、脅威に対する防御 インターフェイスがプロキシをバイパスすることを確認する必要があります。必要に応じて、次のいずれかを実行します。

- [ローカルアドレスのプロキシサーバをバイパス] を選択します。

- [詳細 (Advanced)] をクリックして、アドレスを [次で始まるアドレスにはプロキシサーバを使用しない (Do not use proxy server for addresses beginning with)] ボックスに入力します。たとえば、***.example.com** のようにワイルドカードを使用できます。

トランスペアレント認証用の Firefox の設定

NTLM トランスペアレント認証用に Firefox を設定するには、次の手順に従います。

手順

ステップ 1 [about:config] を開きます。フィルタバーを使用して、変更する必要があるプリファレンスを検索します。

ステップ 2 NTLM をサポートするには、次のプリファレンスを変更します (network.automatic でフィルタリング)。

- [network.automatic-ntlm-auth.trusted-uris] : プリファレンスをダブルクリックし、URL を入力して [OK] をクリックします。カンマで区切って複数の URL を入力できます。プロトコルを含めるかどうかは任意です。例：

```
http://host.example.com, http://hostname, myhost.example.com
```

URL の一部を使用することもできます。Firefox は、ランダムに部分文字列と照合するのではなく、文字列の末尾と照合します。したがって、ドメイン名のみ指定することにより、内部ネットワーク全体を包含することができます。例：

```
example.com
```

- [network.automatic-ntlm-auth.allow-proxies] : 値が、デフォルトの [true] であることを確認します。値が [false] になっている場合は、ダブルクリックして変更します。

ステップ 3 HTTP プロキシ設定を確認します。これを確認するには、[ツール (Tools)] > [オプション (Options)] を選択し、次に [オプション (Options)] ダイアログボックスで [ネットワーク (Network)] タブをクリックします。[接続 (Connection)] グループで、[設定 (Settings)] ボタンをクリックします。

- [プロキシなし (No Proxy)] が選択されている場合は、何も設定する必要がありません。
- [システム プロキシ設定を使用 (Use System Proxy Settings)] が選択されている場合、[about:config] 内の [network.proxy.no_proxies_on] プロパティを変更して、[network.automatic-ntlm-auth.trusted-uris] に含めた信頼済み URI を追加する必要があります。
- [手動プロキシ設定 (Manual Proxy Configuration)] が選択されている場合、これらの信頼済み URI を包含するように [プロキシなし (No Proxy For)] リストを更新します。

- 他のオプションの1つが選択されている場合、これらの設定で使用するプロパティから同一の信頼済み URI が除外されていることを確認します。

アイデンティティ ポリシーのモニタリング

認証が必要なアイデンティティ ポリシーが正しく機能している場合、ユーザ情報は **[モニタリング (Monitoring)] > [ユーザ (Users)]** ダッシュボードやその他のダッシュボード（ユーザ情報を含む）に表示されます。

さらに、**[モニタリング (Monitoring)] > [イベント (Events)]** に表示されるイベントにユーザ情報が含まれます。

ユーザ情報がまったく表示されない場合は、ディレクトリ サーバが正しく機能していることを確認してください。**[ディレクトリ サーバ設定 (directory server configuration)]** ダイアログボックスの **[テスト (Test)]** ボタンを使用して接続を確認します。

ディレクトリ サーバが機能し、使用可能である場合、アクティブ認証を必要とするアイデンティティ ルールのトラフィック一致条件が、ユーザを照合するように書かれていることを確認します。たとえば、ユーザトラフィックがデバイスを通過する際のインターフェイスが、ソースゾーンに含まれていることを確認します。アクティブ認証アイデンティティ ルールは HTTP トラフィックのみを照合するため、ユーザはデバイスを通じてそのタイプのトラフィックを送信する必要があります。

パッシブ認証の場合、そのソースを使用しているときは、ISE オブジェクトの **[テスト (Test)]** ボタンを使用します。リモートアクセス VPN を使用している場合は、サービスが正常に機能していることと、ユーザが VPN 接続を確立できることを確認します。問題の特定と解決の詳細については、これらの機能に関するトラブルシューティングのトピックを参照してください。

アイデンティティ ポリシーの例

使用例の章には、アイデンティティ ポリシーの実装例が含まれています。[ネットワーク トラフィックを調べる方法 \(57 ページ\)](#) を参照してください。



第 21 章

セキュリティ インテリジェンス

セキュリティ インテリジェンス ポリシーにより、送信元/宛先の IP アドレスまたは宛先 URL に基づいて、望ましくないトラフィックを早い段階でドロップできます。ここでは、セキュリティ インテリジェンスの実装方法について説明します。

- [セキュリティ インテリジェンスについて \(605 ページ\)](#)
- [セキュリティ インテリジェンスのためのライセンス要件 \(608 ページ\)](#)
- [セキュリティ インテリジェンスの設定 \(608 ページ\)](#)
- [セキュリティ インテリジェンスのモニタリング \(609 ページ\)](#)
- [セキュリティ インテリジェンスの例 \(610 ページ\)](#)

セキュリティ インテリジェンスについて

セキュリティ インテリジェンス ポリシーにより、送信元/宛先の IP アドレスまたは宛先 URL に基づいて、望ましくないトラフィックを早い段階でドロップできます。システムは、この望ましくないトラフィックをアクセス制御ポリシーで評価する前にドロップすることにより、使用されるシステムリソースの量を減らします。

次のものに基づいてトラフィックをブロックできます。

- **Cisco Talos Intelligence Group (Talos) フィード** : Talos は、定期的に更新されるセキュリティ インテリジェンス フィードへのアクセスを提供します。セキュリティに対する脅威（マルウェア、スパム、ボットネット、スパム、フィッシングなど）を表すサイトが現れては消えるペースが早すぎて、カスタム設定を更新して導入するのが間に合わないことがあります。システムはフィードの更新を定期的にダウンロードするため、設定を再導入する必要なく新しい脅威インテリジェンスを利用できます。



(注) Talos フィードはデフォルトで1時間ごとに更新されます。**[デバイス (Device)] > [更新 (Updates)]** ページからは、更新頻度を変更するだけでなく、オンデマンドでフィードを更新することもできます。

- ネットワークおよび URL オブジェクト：ブロック対象の IP アドレスまたは URL が既知の場合は、それらのオブジェクトを作成し、それらをブロックリストまたは例外リストに追加することができます。FQDNまたは範囲指定によりネットワークオブジェクトを使用できないことに注意してください。

IP アドレス（ネットワーク）と URL で別のリストを作成します。



(注) HTTP/HTTPS リクエストの宛先が、ホスト名ではなく IP アドレスを使用する URL の場合は、ネットワークアドレスリストにある IP アドレスのレピュテーションが検索されます。ネットワークおよび URL リストで IP アドレスを重複させる必要はありません。

ブロックリストの例外の作成

ブロックリストごとに、関連する例外リスト（ブロック禁止リストとも呼ばれる）を作成できます。例外リストの唯一の目的は、ブロックリストに表示される IP アドレスまたは URL を除外することです。つまり、使用する必要があり、安全であることがわかっているアドレスや URL が、ブロックリストに設定されているフィールドにある場合、ブロックリストから完全にカテゴリを削除せずに、そのネットワーク/URL を除外できます。

除外されたトラフィックは、以後アクセス制御ポリシーによって評価されます。接続が許可またはドロップされたかどうかの最終決定は、接続に一致するアクセス制御ルールに基づきます。アクセスルールはまた、接続に侵入やマルウェア検査を適用するかどうかも判断します。

セキュリティ インテリジェンス フィールド カテゴリ

次の表では、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) フィールドで使用可能なカテゴリについて説明します。これらのカテゴリは、ネットワークブロックリングと URL ブロックリングの両方で使用できます。

これらのカテゴリは時間とともに変化する可能性があるため、新しくダウンロードしたフィールドのカテゴリが変更される場合があります。セキュリティインテリジェンスを設定する際は、カテゴリ名の横にある情報アイコンをクリックして説明を表示できます。

表 10: Cisco Talos Intelligence Group (Talos) フィールドカテゴリ

セキュリティインテリジェンス カテゴリ	説明
攻撃者	悪意のある発信アクティビティが知られているアクティブスキャナやホスト
Banking_fraud	電子バンキングに関連する詐欺行為を行うサイト
Bogon	Bogon ネットワークおよび割り当てられていない IP アドレス
Bots	バイナリ マルウェア ドロップをホストするサイト

セキュリティ インテリジェンス カテゴリ	説明
CnC	botnets 用のホスト C & C サーバを有するサイト
仮想通貨マイニング	プールと財布へのリモートアクセスを提供するホスト (cryptocurrency のマイニングのため)
Dga	C & C サーバのランデブー ポイントとして機能するさまざまなドメイン名を生成するために使用されるマルウェア アルゴリズム
Exploitkit	クライアントのソフトウェアの脆弱性を特定するために設計されたソフトウェア キット
High_risk	セキュリティグラフからの OpenDNS 予測セキュリティアルゴリズムと一致するドメインとホスト名
Ioc	侵害の兆候 (IOC) に関与していることが観察されているホスト
Link_sharing	権限のないファイルを共有する web サイト
悪意のある (Malicious)	他のより詳細な脅威カテゴリに必ずしも適合しているわけではない、悪意のある動作を示しているサイト
Malware	マルウェアバイナリまたはエクスプロイト キットを有するサイト
Newly_seen	最近登録されたドメイン、またはテレメトリでまだ認識されていないドメイン 注目 現在、このカテゴリにはアクティブなフィードがなく、将来の使用のために予約されています。
Open_proxy	匿名 Web ブラウジングを許可するオープン プロキシ
Open_relay	スパム用に使用されることが既知のオープン メール リレー
Phishing	フィッシング ページを有するサイト
応答	悪意があるか疑わしいアクティブに積極的に参加している IP アドレスと URL
Spam	スパムを送信することが知られているメール ホスト
スパイウェア	スパイウェアおよびアドウェアのアクティビティを含む、提供する、またはサポートすることが知られているサイト
Suspicious	疑いがあり、既知のマルウェアと同様の特性を持つようなファイル
Tor_exit_node	Tor アノニマイザーネットワークの出口ノードサービスを提供することが知られているホスト

セキュリティ インテリジェンスのためのライセンス要件

セキュリティ インテリジェンスを使用するには、**IPS** ライセンスを有効にする必要があります。「[オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化 \(111 ページ\)](#)」を参照してください。

セキュリティ インテリジェンスの設定

セキュリティ インテリジェンス ポリシーにより、送信元/宛先の IP アドレスまたは宛先 URL に基づいて、望ましくないトラフィックを早い段階でドロップできます。許可された接続もすべてアクセス コントロール ポリシーによって引き続き評価され、最終的にドロップされる可能性があります。セキュリティ インテリジェンスを使用するには、IPS ライセンスを有効にする必要があります。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [セキュリティインテリジェンス (Security Intelligence)] の順に選択します。

ステップ 2 ポリシーが有効になっていない場合は、[セキュリティインテリジェンスの有効化 (Enable Security Intelligence)] ボタンをクリックします。

[セキュリティインテリジェンス (Security Intelligence)] をクリックして [オフ (Off)] にすることで、いつでもポリシーを無効にできます。設定は維持されるため、ポリシーを再度有効にするときに再設定する必要はありません。

ステップ 3 セキュリティ インテリジェンスを設定します。

ネットワーク (IP アドレス) と URL には別々のブロックリストがあります。

- a) [ネットワーク (Network)] または [URL] タブをクリックして、設定するリストを表示します。
- b) ブロック/ドロップリストで、[+] をクリックして、接続をすぐにドロップするオブジェクトまたはフィードを選択します。

オブジェクトセレクトは、種類によってオブジェクトおよびフィードを別々のタブに整理します。希望するオブジェクトがまだ存在しない場合、リストの下部にある [新しいオブジェクトの作成 (Create New Object)] リンクをクリックして作成します。Cisco Talos Intelligence Group (Talos) フィードの説明については、フィードの横にある [i] ボタンをクリックします。[セキュリティ インテリジェンス フィード カテゴリ \(606 ページ\)](#) も参照してください。

(注)

セキュリティ インテリジェンスでは、ネットマスク /0 を使用する IP アドレスのブロックを無視します。これには、any-ipv4 と any-ipv6 のネットワーク オブジェクトが含まれます。ネットワークのブロックのためにこれらのオブジェクトを選択しないでください。

- c) 非ブロックリストで、[+] をクリックし、ブロックリストの例外をすべて選択します。

このリストを設定する唯一の理由は、ブロックリストにある IP アドレスまたは URL を例外にすることです。適用除外された接続は、その後アクセス制御ポリシーによって評価され、いずれにしても破棄される可能性があります。

- d) 他のブロックリストを設定するには上記の手順を繰り返します。

ステップ 4 (オプション) [ログ設定の編集 (Edit Logging Settings)] ボタン (⚙️) をクリックしてログを設定します。

ロギングを有効にした場合は、ブロックリストのエントリに一致するものが記録されます。ロギングを有効にして、除外された接続がアクセス制御ルールに一致した場合、ログメッセージは取得しますが例外エントリに一致するものは記録されません。

次の設定を行います。

- [接続イベントロギング (Connection Events Logging)] : クリックしてロギングを有効または無効に切り替えます。
- [syslog] : 外部の syslog サーバにイベントのコピーを送信するには、このオプションを選択して、syslog サーバを定義するサーバオブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しい Syslog サーバの追加 (Add Syslog Server)] をクリックして作成します。

デバイスのイベントストレージは限られているため、外部の syslog サーバにイベントを送信することにより、長期間ストレージが利用できるようになり、イベントの分析を向上できます。

セキュリティ インテリジェンスのモニタリング

セキュリティ インテリジェンス ポリシーのログ記録を有効にすると、システムは、ブロックリストの項目に一致する接続ごとにセキュリティ インテリジェンス イベントを生成します。これらの接続に一致する接続イベントがあります。

ドロップされた接続の統計情報は、[モニタリング (Monitoring)] ページの、使用可能なさまざまなダッシュボードに表示されます。

[モニタリング (Monitoring)] > [アクセスおよびSIルール (Access and SI Rules)] ダッシュボードに、トラフィックと一致する、上位のアクセスルールとセキュリティ インテリジェンスに相当するルールが表示されます。

さらに、[モニタリング (Monitoring)] > [イベント (Events)]、次に [セキュリティインテリジェンス (Security Intelligence)] を選択して、セキュリティ インテリジェンス イベントと、関連する接続イベントを [接続 (Connection)] タブに表示することができます。

- イベントの [SIカテゴリID (SI Category ID)] フィールドは、ネットワークまたは URL オブジェクトあるいはフィードなど、ブロックリストに一致するオブジェクトを示します。
- 接続イベントの [理由 (Reason)] フィールドは、イベントに表示されたアクションが適用された理由について説明します。たとえば、ブロックアクションは、IP ブロックまたは URL ブロックなどの理由と組み合わせられて、接続がセキュリティインテリジェンスによってドロップされたことを示します。

セキュリティ インテリジェンスの例

使用例の章には、セキュリティ インテリジェンス ポリシーの実装例が含まれています。脅威のブロック方法 (65 ページ) を参照してください。



第 22 章

アクセス制御

ここでは、アクセス制御ルールについて説明します。これらのルールによって、デバイスを通過することが許可されるトラフィックが制御され、侵入検査などの高度なサービスがトラフィックに適用されます。

- [アクセス制御のベストプラクティス \(611 ページ\)](#)
- [アクセス制御の概要 \(615 ページ\)](#)
- [アクセス制御のためのライセンス要件 \(628 ページ\)](#)
- [アクセス コントロール ポリシーに関する注意事項と制限事項 \(629 ページ\)](#)
- [アクセス コントロール ポリシーの設定 \(632 ページ\)](#)
- [アクセス制御ポリシーのモニタリング \(647 ページ\)](#)
- [アクセス制御の例 \(650 ページ\)](#)

アクセス制御のベストプラクティス

アクセス制御ポリシーは、内部ネットワークを保護し、ユーザが望ましくない外部ネットワークリソース（不適切な Web サイトなど）にアクセスすることを防止するための主要なツールです。そのため、このポリシーに特に注意を払い、必要な保護と接続のレベルを得るためにポリシーを微調整することをお勧めします。

次の手順は、アクセス制御ポリシーを使用する場合に実行する必要がある基本的なことの概要を示しています。これは概要であり、各タスクを実行するための完全な手順は示していません。

アクセス制御ポリシーにアクセスするには、[ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] を選択します。

手順

ステップ 1 ポリシーのデフォルト アクションを設定します。

デフォルトアクションでは、ポリシー内の特定のルールに一致しない接続が処理されます。デフォルトでは、このアクションは[ブロック (Block)]であるため、ルールに含まれていない

ものはすべてブロックされます。そのため、必要なトラフィックを許可するアクセス制御ルールを作成するだけで済みます。これは、アクセス制御ポリシーを設定する従来の方法です。

反対に、デフォルトでトラフィックを許可して既知の望ましくないトラフィックをドロップするルールを作成することができます。この場合、許可するすべてのものに関するルールを用意する必要がなくなります。これにより、新しいサービスの使用が容易になりますが、気付かないうちに新しい望ましくないトラフィックが通過するリスクが生じます。

- ステップ 2** [アクセスポリシーの設定] (⚙️) ボタンをクリックし、[TLSサーバアイデンティティ検出] オプションを有効にします。

このオプションにより、TLS 1.3 接続の最初のアプリケーション検出と URL カテゴリおよびレピュテーションの識別が改善されます。このオプションを有効にしないと、TLS 1.3 トラフィックが意図したルールと一致しない可能性があります。また、このオプションを有効にすることにより、復号ルールの有効性が向上する可能性もあります。

- ステップ 3** できるだけ少ないアクセス制御ルールを作成します。

従来のファイアウォールでは、IP アドレスとポートのさまざまな組み合わせに対して何万ものルールが作成される場合があります。次世代ファイアウォールでは、高度な検査を使用して、これらの詳細なルールの一部を回避できます。ルールの数が少ないほど、トラフィックが速く評価されるようになり、ルールセット内の問題を見つけて修正することも容易になります。

- ステップ 4** アクセス制御ルールのロギングを有効にします。

ロギングを有効にした場合にのみ、一致するトラフィックの統計が収集されます。ロギングを有効にしないと、モニタリングダッシュボードが不正確になります。

- ステップ 5** より固有性の高いルールをポリシーの上の方に配置し、固有性の高いルールも一致する接続と一致する、より一般的なルールが、それらの固有性の高いルールよりも下になっていることを確認します。

ポリシーはトップダウンで評価され、最初の一致が優先されます。そのため、特定のサブネットへのすべてのトラフィックをブロックするルールを配置し、その後そのサブネット内の単一 IP アドレスへのアクセスを許可するルールを配置しても、最初のルールによってブロックされるため、そのアドレスへのトラフィックは許可されません。

また、入力/出力インターフェイス、送信元/宛先 IP アドレス、ポート、地理位置情報などの従来の基準のみに基づいてトラフィックを評価するルールは、ユーザ基準、URL フィルタリング、アプリケーションフィルタリングなどに適用される、詳細な検査が必要なルールの前に配置してください。前者のルールは検査を必要としないため、それらのルールを前に配置することにより、接続の一致に関するアクセス制御の決定を迅速に行うことが可能になります。

その他の推奨事項については、[アクセス コントロール ルールの順序のベスト プラクティス \(627 ページ\)](#) を参照してください。

- ステップ 6** トラフィックのターゲットサブセットに対するブロックルールと許可ルールをペアで設定します。

たとえば、多くの HTTP/HTTPS トラフィックを許可する一方で、望ましくないサイト（ポルノサイトやギャンブルサイトなど）へのアクセスをブロックしたい場合があります。これを実

現するには、次のルールを作成し、それらをポリシー内で順番に並べます（たとえば、ルール 11 とルール 12）。

- 内部セキュリティゾーン（送信元）および外部セキュリティゾーン（宛先）と、IP アドレス、ポート、または地理位置情報に適用される、望ましくない URL カテゴリを対象とした URL フィルタリングブロックルール。たとえば、ボットネット、児童虐待コンテンツ、クリプトジャッキング、DNS トンネリング、電子バンキング詐欺、エクスプロイト、エクストリーム、フィルタ回避、ギャンブル、ハッキング、ヘイトスピーチ、ハイリスクのサイト/場所、違法行為、違法ダウンロード、違法薬物、悪意のあるサイト、マルウェアサイト、モバイル脅威、P2P マルウェアノード、フィッシング、ポルノ、スパム、スパイウェア、およびアドウェアをブロックします。
- 内部セキュリティゾーン（送信元）および外部セキュリティゾーン（宛先）と、IP アドレス、ポート、または地理位置情報に適用される、HTTP および HTTPS アプリケーションのアプリケーションフィルタ処理許可ルール。この URL フィルタ処理ルールでは、望ましくない Web リソースへのアクセスをブロックした後、他のすべての HTTP/HTTPS アクセスが許可されます。

ステップ 7 高度な次世代ファイアウォール機能を使用して、IP アドレスやポートに関係なくトラフィックが評価されます。

攻撃者やその他の悪意のある人物は、IP アドレスとポートを頻繁に変更することにより、従来のアクセス制御トラフィックの一致基準を回避します。代わりに、次の次世代機能を使用してください。

- ユーザ基準：トラフィックを開始しているユーザに関する情報を取得するようにアイデンティティポリシーを設定します。理想的には、Active Directory サーバがユーザをグループに編成します。これによって、ユーザグループメンバーシップに基づいてトラフィックを許可またはブロックするアクセス制御ルールを作成できます。たとえば、エンジニアユーザには開発サブネットへのアクセスを許可しますが、エンジニアグループに属していないユーザは暗黙的にブロックします。個別のユーザ名ではなくグループを使用するため、ユーザがネットワークに追加されるたびにルールを更新する必要がありません。
- アプリケーション基準：アプリケーションフィルタ処理基準を使用して、アプリケーションのタイプを許可またはブロックします。これにより、ユーザが HTTP 接続のポートを変更した場合、システムは、ポート 80 に接続していなくても HTTP であることを認識できます。その他の推奨事項については、[アプリケーションフィルタリングのベストプラクティス（617 ページ）](#)を参照してください。
- URL カテゴリおよびレピュテーション基準：カテゴリに基づく URL フィルタ処理を使用して、サイトのタイプに基づいてサイトを動的に許可またはブロックします。サイトのタイプ（またはカテゴリ）内で、サイトのレピュテーション（正常または危険）に基づいてルールを微調整できます。URL によってサイトを手動でブロックしようとする場合には URL が変更されるたびにルールを調整する必要がありますが、カテゴリとレピュテーションを使用することにより、そのような調整が不要になります。その他の推奨事項については、[効果的な URL フィルタリングのベストプラクティス（622 ページ）](#)を参照してください。

URLカテゴリ/レピュテーションフィルタリングルールをDNSルックアップ要求のFQDNに適用することもできます。システムは、ブロックされたカテゴリ/レピュテーションに対するDNS応答を防止し、ユーザの接続試行を効果的にブロックできます。詳細は、[URLカテゴリとレピュテーションに基づいたDNS要求のフィルタリング（625 ページ）](#) を参照してください。

ステップ 8 すべての許可ルールに侵入検査を適用します。

次世代ファイアウォールの強力な機能の一つは、同じデバイスを使用して侵入検査とアクセス制御を適用できることです。侵入ポリシーを各許可ルールに適用してください。これにより、攻撃が通常は害のないパスを介してネットワークに侵入した場合でも、それを察知して攻撃接続をドロップできます。

デフォルトアクションが「許可」の場合は、デフォルトアクションに一致するトラフィックに侵入防御を適用することもできます。

ステップ 9 また、望ましくない IP アドレスおよび URL をブロックするようにセキュリティインテリジェンス ポリシーを設定します。

セキュリティ インテリジェンス ポリシーはアクセス制御ポリシーの前に適用されるため、アクセス制御ルールが評価される前に望ましくない接続をブロックできます。これにより早い段階でのブロックを実現でき、アクセス制御ルールの複雑さを軽減するために役立ちます。

ステップ 10 SSL 復号ポリシーの実装を検討します。

システムは、暗号化されたトラフィックに対して詳細な検査を実行できません。SSL 復号ポリシーを設定すると、アクセス制御ポリシーが復号されたバージョンのトラフィックに適用されます。そのため、詳細な検査によって攻撃を識別でき（侵入ポリシーを使用）、アプリケーションおよび URL フィルタリングをより効果的に適用できるため、ルールの照合が強化されます。アクセス制御ポリシーで許可されたトラフィックは、デバイスから送信される前に再暗号化されるため、エンドユーザが暗号化の保護を失うことはありません。

ステップ 11 オブジェクトグループ検索を有効にして、ルールの展開を簡素化します。

リリース 7.2 以降、この機能は新しい展開ではデフォルトで有効になっていますが、アップグレードされたシステムでは自動的に有効になりません。

オブジェクトグループ検索を有効にすると、ネットワークオブジェクトを含むアクセスコントロールポリシーのメモリ要件が軽減されます。ただし、オブジェクトグループ検索では、ルールルックアップのパフォーマンスが低下して、CPU 使用率が増大する可能性があることに注意してください。CPU に対する影響と、特定のアクセス コントロール ポリシーに関するメモリ要件の軽減とのバランスをとる必要があります。ほとんどの場合、オブジェクトグループ検索を有効にすると、ネット運用が改善されます。

FlexConfig を使用してこのオプションを設定するには、**object-group-search access-control** コマンドを発行します。否定テンプレートでは、このコマンドの **no** 形式を使用します。

アクセス制御の概要

以下のトピックでは、アクセス制御ポリシーについて説明します。

アクセス制御ルールおよびデフォルト アクション

ネットワーク リソースへのアクセスを許可またはブロックするには、アクセス コントロール ポリシーを使用します。ポリシーは順序付けられた一連のルールで構成され、上から下へと評価されます。トラフィックに適用されるルールは、すべてのトラフィック基準が一致した最初のルールです。

アクセス制御は次に基づいて行われます。

- 送信元と宛先の IP アドレス、プロトコル、ポート、インターフェイスなど従来のネットワーク特性（セキュリティ ゾーンの形式で）。
- 送信元と宛先の完全修飾ドメイン名（FQDN）（ネットワーク オブジェクトの形式）。トラフィックの照合は、その名前に関して DNS ルックアップから返された IP アドレスに基づいて行われます。
- Cisco Identity Services Engine（ISE）によって送信元または宛先に割り当てられたセキュリティグループタグ（SGT）。
- 使用されているアプリケーション。特定のアプリケーションに基づいてアクセスを制御するか、アプリケーションのカテゴリ、特性タグ、タイプ（クライアント、サーバ、Web）、リスク、ビジネスとの関連性に基づいたルールを作成することができます。
- Web 要求の宛先 URL（URL の汎用カテゴリを含む）。ターゲットサイトのパブリック レピュテーションに基づいて、カテゴリの一致を絞り込みます。
- DNSルックアップ要求のFQDNのURLカテゴリとレピュテーション。不要なカテゴリや低いレピュテーションに対してDNS応答をブロックして、その後の接続試行を効果的に防ぐことができます。
- 要求を作成したユーザ、またはユーザが所属するユーザグループ。

暗号化されていない許可したトラフィックに対しては、IPS インスペクションを適用して、脅威をチェックし、攻撃とみられるトラフィックをブロックできます。また、ファイルポリシーを使用して、禁止されているファイルやマルウェアをチェックできます。

アクセスルールに一致しないすべてのトラフィックは、アクセス コントロールの[デフォルト アクション（Default Action）]によって処理されます。デフォルトでトラフィックを許可する場合は、侵入インスペクションをトラフィックに適用できます。ただし、デフォルトアクションで処理されるトラフィックに対してファイルインスペクションやマルウェアインスペクションは実行できません。

アプリケーションのフィルタリング

アクセス制御ルールを使用して、接続に使用されるアプリケーションに基づいてトラフィックをフィルタ処理できます。システムはさまざまなアプリケーションを認識できるので、すべての Web アプリケーションをブロックすることなく、特定の Web アプリケーションのみをブロックする方法を自分で試行錯誤する必要はありません。

よく使われるアプリケーションの場合、そのアプリケーションの特殊な機能に絞ってフィルタ処理できます。たとえば、Facebook をすべてブロックするのではなく、Facebook のゲームのみをブロックするルールを作成できます。

アプリケーションの一般的な特性（リスク、ビジネスとの関連性、タイプ、カテゴリ、タグ）に基づいて、そのグループ全体をブロックしたり許可したりするルールを作成することもできます。ただし、アプリケーションフィルタでカテゴリを選択するときは、目的のアプリケーション以外を含まないように一致するアプリケーションのリストをよく確認してください。グループ化の詳細については、[アプリケーション基準](#)（639 ページ）を参照してください。

暗号化トラフィックおよび復号トラフィックのアプリケーション制御

アプリケーションが暗号化を使用する場合、システムはアプリケーションを識別できない場合があります。

システムは StartTLS（SMTPS、POPS、FTPS、TelnetS、IMAPS など）で暗号化されたアプリケーション トラフィックを検出できます。また、TLS ClientHello メッセージのサーバ ネーム インジケーション、またはサーバ証明書のサブジェクト識別名の値に基づいて特定の暗号化アプリケーションを特定できます。

アプリケーションフィルタのダイアログボックスを使用し、次のタグを選択することでアプリケーションに復号が必要かどうかを決定してから、アプリケーションのリストを確認します。

- [SSL プロトコル (SSL Protocol)] : SSL プロトコルとしてタグ付けされたトラフィックは復号する必要はありません。システムはこのトラフィックを認識してアクセス制御アクションを適用します。リストされたアプリケーションのアクセス制御ルールは、想定される接続と一致する必要があります。
- [復号されたトラフィック (Decrypted Traffic)] : 最初にトラフィックを復号する場合のみ、システムがこのトラフィックを特定できます。このトラフィックに SSL 復号ルールを設定します。

Common Industrial Protocol (CIP) および Modbus アプリケーション (ISA 3000) でのフィルタリング

Cisco ISA 3000 デバイスで Common Industrial Protocol (CIP) および Modbus プリプロセッサを有効にし、CIP および Modbus アプリケーションのアクセス制御ルールでフィルタを有効にすることができます。CIP アプリケーションの名前はすべて、CIP Write のように「CIP」で始まります。Modbus 用のアプリケーションは 1 つだけです。

プリプロセッサを有効にするには、CLIセッション（SSHまたはコンソール）でエキスパートモードに移行し、次のコマンドを発行して、これらの遠隔監視制御・情報取得（SCADA）アプリケーションの一方または両方を有効にする必要があります。

```
sudo /usr/local/sf/bin/enable_scada.sh {cip | modbus | both}
```

たとえば、両方のプリプロセッサを有効にするには次の手順を実行します。

```
> expert
admin@firepower:~$ sudo /usr/local/sf/bin/enable_scada.sh both
```



(注) このコマンドは、展開のたびに発行する必要があります。これらのプリプロセッサは、展開時には無効になります。

アプリケーションフィルタリングのベストプラクティス

アプリケーションフィルタリングのアクセス制御ルールを設計する際は、次の推奨事項を覚えておいてください。

- Web サーバによって参照されるトラフィック（アドバタイズメントトラフィックなど）を処理するには、参照元アプリケーションではなく、参照先アプリケーションを照合します。
- アプリケーションと URL の基準を同じルールで組み合わせることは避けてください（特に暗号化されたトラフィックの場合）。
- [復号トラフィック（Decrypted Traffic）] のタグが付けられたトラフィックにルールを作成する場合、一致するトラフィックを復号する SSL 復号ルールがあることを確認します。これらのアプリケーションは、復号された接続でのみ識別できます。
- TLS 1.3 では、ほとんどのハンドシェイクメッセージが暗号化されるため、証明書情報を簡単に利用できません。TLS 1.3 で暗号化されたトラフィックで、アプリケーションまたは URL フィルタリングを使用するアクセスルールに効果的に対応するには、システムがサーバーのクリアテキスト証明書を取得する必要があります。アクセス制御設定で [TLS 1.3 証明書の可視性（TLS 1.3 Certificate Visibility）] を有効にすることをお勧めします。このオプションを有効にすると、システムは、クライアントの Hello パケットの IP アドレスおよび SNI（Server Name Indication）に基づいて、サイトの証明書がキャッシュに保存されているかどうかを確認します。保存されていない場合、システムは、TLS 1.2 プローブを使用して証明書を取得します。その後は、この証明書を使用して、接続を復号せずにアプリケーション/URL カテゴリおよびレピュテーションを識別することができます。
- システムでは複数の種類の Skype アプリケーショントラフィックを検出できます。Skype トラフィックを制御するには、個々のアプリケーションを選択する代わりに、[アプリケーションフィルタ（Application Filters）] リストから [Skype] タグを選択します。これにより、システムは同じ方法で Skype のすべてのトラフィックを検出して制御できるようになります。

- Zoho メールへのアクセスを制御するには、Zoho アプリケーションと Zoho Mail アプリケーションの両方を選択します。

URL フィルタリング

アクセス制御ルールを使用して、HTTP または HTTPS 接続に使用される URL に基づいてトラフィックをフィルタ処理できます。HTTPS は暗号化されるので、HTTP の URL フィルタリングは HTTPS の URL フィルタリングよりも簡単なものであることに注意してください。

次の手法を使用して、URL フィルタリングを実装できます。

- カテゴリおよびレピュテーションベースの URL フィルタリング：URL フィルタリングライセンスにより、URL の一般的な分類（カテゴリ）とリスクレベル（レピュテーション）に基づいて、Web サイトへのアクセスを制御できます。これは、不要なサイトをブロックするのに最も簡単で効果的な方法です。
- 手動での URL フィルタリング：どのライセンスでも、個々の URL と URL グループを指定して、Web トラフィックに対する制御をより細かくカスタマイズできます。手動フィルタリングの主な目的はカテゴリベースのブロックルールに例外を作成することですが、他の目的にも手動ルールを使用できます。

ここでは、URL フィルタリングについて詳しく説明します。

カテゴリ別とレピュテーション別の URL のフィルタリング

URL フィルタリングライセンスを使用することにより、要求された URL のカテゴリおよびレピュテーションに基づいて Web サイトへのアクセスを制御できます。

- カテゴリ：URL の一般的な分類。たとえば ebay.com はオークションカテゴリ、monster.com は求職カテゴリに属します。URL は、複数のカテゴリに属することができます。
- レピュテーション：組織のセキュリティ ポリシーに反する目的でその URL が使用される可能性。信頼できない（レベル 1）から信頼できる（レベル 5）までのレピュテーション範囲。

URL カテゴリおよびレピュテーションにより、URL フィルタリングを素早く設定することができます。たとえば、アクセス制御を使用して、薬物乱用カテゴリの信頼できない URL をブロックできます。

カテゴリの説明については、<https://www.talosintelligence.com/categories>を参照してください。

カテゴリおよびレピュテーションデータを使用することで、ポリシーの作成と管理も簡素化されます。脅威を示すサイトや、望ましくないコンテンツを提供するサイトが現れては消えるペースが早すぎて、新しいポリシーを更新して適用するのが間に合わないこともあります。シスコが URL データベースで新しいサイト、変更された分類、変更されたレピュテーションについて更新すると、ルールは自動的に新しい情報に調整されます。新しいサイトを考慮するようにルールを編集する必要はありません。

定期的な URL データベースの更新を有効にすると、システムは最新の情報を使用して URL フィルタリングを行うことができます。また、Cisco Collective Security Intelligence (CSI) との通信を有効にすると、不明なカテゴリとレピュテーションについて URL の最新の脅威インテリジェンスを取得することもできます。詳細については、[URL フィルタリングの設定 \(972 ページ\)](#) を参照してください。



(注) イベントおよびアプリケーションの詳細に、URL カテゴリとレピュテーションの情報を含めるには、URL 条件を付けたルールを少なくとも 1 つ作成する必要があります。

URL のカテゴリとレピュテーションのルックアップ

特定の URL のカテゴリとレピュテーションを確認できます。アクセスコントロールルールまたは SSL 復号ルールの [URL] タブに移動するか、[デバイス] > [システム設定] > [URL フィルタリング設定] に移動します。そこで、[確認する URL (URL to Check)] ボックスに URL を入力し、[移動 (Go)] をクリックします。

ルックアップ結果を示す Web サイトが表示されます。この情報は、カテゴリおよびレピュテーションベースの URL フィルタリングルールの動作をチェックするために役立ちます。

分類に同意しない場合は、Device Manager で [URL カテゴリの異議を送信する (Submit a URL Category Dispute)] をクリックして、ご意見をお聞かせください。

手動 URL フィルタリング

個別の URL または URL のグループを手動でフィルタリングすることにより、カテゴリおよびレピュテーションベースの URL フィルタリングを補完または選択的にオーバーライドできます。このタイプの URL フィルタリングは特別なライセンスなしで実行できます。

たとえば、アクセス制御を使用して、組織にとって不適切なカテゴリの Web サイトをブロックできます。ただし、カテゴリに適切な Web サイトが含まれ、アクセスを提供したい場合、そのサイトに対して手動の許可ルールを作成し、カテゴリのブロックルールの前に配置できます。

手動で URL フィルタリングを設定するには、対象の URL を含む URL オブジェクトを作成します。この URL を解釈する方法は、次のルールに基づきます。

- パスを含めない（つまり、URL に / の文字がない）場合、一致はサーバーのホスト名のみに基づきます。1 つ以上の / を含む場合、文字列の部分一致には URL 文字列全体が使用されます。次に、次のいずれかに該当する場合、URL は一致と見なされます。
 - 文字列が URL の先頭にある。
 - 文字列がドットの後に続く。
 - 文字列の先頭にドットが含まれている。
 - 文字列が :// 文字の後に続く。

たとえば、ign.com は ign.com および www.ign.com と一致するが、verisign.com とは一致しません。



(注) サーバーは再構成でき、ページは新しいパスに移動できるため、個々の Web ページまたはサイトの一部（つまり / 文字を含む URL 文字列）をブロックまたは許可するために手動の URL フィルタリングは使用しないことをお勧めします。

- システムは、暗号化プロトコル（HTTP と HTTPS）を無視します。つまり、ある Web サイトをブロックした場合、アプリケーション条件で特定のプロトコルを対象にしない限り、その Web サイトに向かう HTTP トラフィックと HTTPS トラフィックの両方がブロックされます。URL オブジェクトを作成するときに、プロトコルを指定する必要はありません。たとえば、http://example.com ではなく example.com を使用します。
- アクセス コントロール ルールで URL オブジェクトを使用して HTTPS トラフィックを照合することを計画している場合は、トラフィックの暗号化に使用される公開キー証明書内でサブジェクトの共通名を使用するオブジェクトを作成します。また、システムはサブジェクト共通名に含まれるサブドメインを無視するので、サブドメイン情報を含めないでください。たとえば、www.example.com ではなく、example.com を使用します。

ただし、証明書のサブジェクト共通名が Web サイトのドメイン名とはまったく関係ない場合があることをご了承ください。たとえば、youtube.com の証明書のサブジェクト共通名は *.google.com です（当然、これは随時変更される可能性があります）。SSL 復号ポリシーを使用して HTTPS トラフィックを復号し、URL フィルタリングルールが復号されたトラフィックで動作するようにすると、より一貫性のある結果が得られるようになります。



(注) 証明書情報を利用できないためにブラウザが TLS セッションを再開した場合、URL オブジェクトは HTTPS トラフィックと一致しません。このため、慎重に URL オブジェクトを設定した場合でも、HTTPS 接続では一貫性のない結果が得られることがあります。

HTTPS トラフィックのフィルタリング

HTTPS トラフィックは暗号化されているために、HTTPS トラフィックに対して直接 URL フィルタリングを実行しても、HTTP トラフィックに対して行う場合ほどシンプルではありません。そのため、SSL 復号ポリシーを使用してフィルタリング対象のすべての HTTPS トラフィックを復号することを検討する必要があります。この方法では、URL フィルタリング アクセス コントロールポリシーは復号されたトラフィックで機能し、通常の HTTP トラフィックの場合と同じ結果が得られます。

ただし、一部の HTTPS トラフィックが復号せずにアクセス コントロール ポリシーに渡されるようにする場合は、HTTPS トラフィックと一致するルールは HTTP トラフィックの場合と異なることを理解する必要があります。暗号化されたトラフィックをフィルタ処理するために、システムは SSL ハンドシェイク中に渡された情報（トラフィックを暗号化するために使用される公開キー証明書内のサブジェクト共通名）に基づいて要求された URL を特定します。URL の Web サイトホスト名とサブジェクト共通名の間には、ほとんど、またはまったく関係がないことがあります。

DNS 要求フィルタリングを有効にすると、カテゴリ/レピュテーションルールの HTTPS でのマッチングを改善できます。システムは、ユーザが HTTPS 接続の試行を開始する前に、DNS 解決フェーズでカテゴリとレピュテーションを決定し、不要な組み合わせに対する DNS 応答をブロックできます。許可された DNS 応答の場合、システムは後続の HTTPS 接続で使用可能なカテゴリ/レピュテーション情報を保持します。[DNS 要求のフィルタリング（624 ページ）](#) を参照してください。

HTTP フィルタリングと異なり、HTTPS フィルタリングはサブジェクト共通名内のサブドメインを無視します。HTTPS の URL を手動でフィルタリングする場合は、サブドメイン情報を含めないでください。たとえば、`www.example.com` ではなく `example.com` を使用します。また、サイトによって使用される証明書の内容を確認し、サブジェクト共通名で使われるドメインが正しいこと、この名前が他のルールと競合しないことを確認してください（たとえば、ブロックするサイトの名前が許可する名前と重複する可能性があります）。たとえば、`youtube.com` の証明書のサブジェクト共通名は `*.google.com` です（当然、これは随時変更される可能性があります）。



- (注) 証明書情報を利用できないためにブラウザが TLS セッションを再開した場合、URL オブジェクトは HTTPS トラフィックと一致しません。このため、慎重に URL オブジェクトを設定した場合でも、HTTPS 接続では一貫性のない結果が得られることがあります。

暗号化プロトコルによるトラフィックの制御

システムは、URL フィルタリングの実行時に暗号化プロトコル（HTTP と HTTPS）を無視します。これは、手動とレピュテーションベースの両方の URL 条件に対して行われます。つまり、URL フィルタリングでは、次の Web サイトへのトラフィックが同様に処理されます。

- `http://example.com`
- `https://example.com`

両方ではなく、HTTP トラフィックのみまたは HTTPS トラフィックのみと一致するルールを設定するには、宛先の条件で TCP ポートを指定するか、アプリケーション条件をルールに追加します。たとえば、それぞれ、TCP ポートまたはアプリケーション条件と URL 条件を含む 2 つのアクセス制御ルールを作成することにより、サイトへの HTTPS アクセスを許可しながら、HTTP アクセスを禁止することができます。

最初のルールは Web サイトへの HTTPS トラフィックを許可します。

アクション：許可

TCP ポートまたはアプリケーション : HTTPS (TCP ポート 443)

URL : example.com

2 つ目のルールでは、同じ Web サイトへの HTTP アクセスがブロックされます。

アクション : ブロック

TCP ポートまたはアプリケーション : HTTP (TCP ポート 80)

URL: example.com

URL フィルタリングとアプリケーション フィルタリングの比較

URL フィルタリングとアプリケーション フィルタリングには類似点があります。しかし、それらは非常に異なる目的で使用する必要があります。

- URL フィルタリングは、Web サーバ全体へのアクセスをブロックまたは許可するのに適しています。たとえば、ネットワーク上であらゆるタイプのギャンブルを許可しないようにする場合は、ギャンブルカテゴリをブロックする URL フィルタリングルールを作成できます。このルールでは、ユーザはカテゴリ内の Web サーバ上のどのページにもアクセスできません。
- アプリケーション フィルタリングは、ホスティング サイトに関係なく特定のアプリケーションをブロックするため、またはそうしないと許容される Web サイトの特定の機能をブロックするために便利です。たとえば、Facebook のすべてをブロックすることなく Facebook のゲーム アプリケーションだけをブロックすることができます。

アプリケーション基準と URL の基準を組み合わせると予期しない結果につながることもあるため、URL とアプリケーションの基準では別のルールを作成するのが良いポリシーです。1 つのルールでアプリケーション基準と URL の基準を組み合わせる必要がある場合は、アプリケーションと URL のルールがより一般的なアプリケーションのみまたは URL のみのルールの例外として機能する場合を除き、単純なアプリケーションのみまたは URL のみのルールの後に配置する必要があります。URL フィルタリングブロックルールはアプリケーション フィルタリングよりも広範になるため、アプリケーションのみのルールの上に配置する必要があります。

アプリケーション基準と URL の基準を組み合わせる場合、より慎重にネットワークをモニタし、不要なサイトやアプリケーションへのアクセスを許可しないようにする必要があります。

効果的な URL フィルタリングのベスト プラクティス

URL フィルタリングのアクセス制御ルールを設計するときは、次の推奨事項を覚えておいてください。

- カテゴリとレピュテーションブロックは可能な限り使用します。これにより、新しいサイトはカテゴリに追加されるとともに、自動的にブロックされ、そのレピュテーションに基づくブロックは、サイトの評判が上がる（または下がる）と調整されます。
- URL カテゴリ照合を使用する場合は、サイトのログイン ページがサイト自体とは異なるカテゴリに含まれる場合があることに注意してください。たとえば、Gmail は [Web ベース電子メール (Web based Email)] カテゴリに含まれますが、ログイン ページは [検索エンジンとポータル (Search Engines and Portals)] カテゴリに含まれます。それらのカテゴリに

関して異なるアクションを実行する異なるルールがある場合、意図しない結果が生じる可能性があります。

- URL オブジェクトを使用して、Web サイト全体を対象とし、カテゴリ ブロック ルールの例外を作成します。つまり、本来はカテゴリ ルールでブロックされる特定のサイトを許可します。
- (URL オブジェクトを使用して) Web サーバを手動でブロックする場合は、セキュリティ インテリジェンス ポリシーでこれを行うとより効果的です。セキュリティ インテリジェンス ポリシーはアクセス制御ルールが評価される前に接続をドロップするので、より速くより効率的にブロックすることができます。
- HTTPS 接続の最も効果的なフィルタリングのために、記述しているアクセス制御ルールの対象のトラフィックを復号する SSL 復号ルールを実装します。復号された HTTPS 接続はアクセス制御ポリシーの HTTP 接続としてフィルタ処理されるので、HTTPS フィルタリングの制限はすべて回避されます。
- TLS 1.3 では、ほとんどのハンドシェイクメッセージが暗号化されるため、証明書情報を簡単に利用できません。TLS 1.3 で暗号化されたトラフィックで、アプリケーションまたは URL フィルタリングを使用するアクセスルールに効果的に対応するには、システムがサーバーのクリアテキスト証明書を取得する必要があります。アクセス制御設定で [TLS 1.3 証明書の可視性 (TLS 1.3 Certificate Visibility)] を有効にすることをお勧めします。このオプションを有効にすると、システムは、クライアントの Hello パケットの IP アドレスおよび SNI (Server Name Indication) に基づいて、サイトの証明書がキャッシュに保存されているかどうかを確認します。保存されていない場合、システムは、TLS 1.2 プローブを使用して証明書を取得します。その後は、この証明書を使用して、接続を復号せずにアプリケーション/URL カテゴリおよびレピュテーションを識別することができます。
- URL のブロック ルールはアプリケーション フィルタリング ルールの前に配置します。URL フィルタリングは Web サーバ全体をブロックするのに対し、アプリケーション フィルタリングは Web サーバに関係なく、特定のアプリケーションの使用を対象とするからです。
- カテゴリが不明な高リスクサイトをブロックする場合は、[未分類 (Uncategorized)] カテゴリを選択し、評価スライダを [疑わしい (Questionable)] または [信頼できない (Untrusted)] に調整します。
- DNS 要求フィルタリングも有効にすることで、URL フィルタリング全般の有効性を向上させることができます。DNS 要求フィルタリングを使用すると、DNS ルックアップ時に FQDN の URL カテゴリとレピュテーションが決定されるため、後続の HTTP/HTTPS 要求が同じ宛先に送信される際にこの情報を使用できます。さらに、カテゴリ/レピュテーションをブロックすると、試行された接続は、Web セッションの確立段階ではなく、DNS 要求段階で停止します。「[DNS 要求のフィルタリング \(624 ページ\)](#)」を参照してください。

Web サイトがブロックされた際、ユーザに対して表示される内容

URL フィルタリング ルールを使用して Web サイトをブロックする場合、ユーザに対して表示される内容は、サイトが暗号化されているかどうかによって異なります。

- HTTP接続：接続のタイムアウトまたはリセットが発生した場合の標準ブラウザページではなく、システムのデフォルトブロック応答ページが表示されます。このページにより、接続が意図的にブロックされていることを明示的に示します。
- HTTPS（暗号化）接続：システムのデフォルト ブロック応答ページは表示されません。代わりに、セキュア接続が失敗したことを示すブラウザのデフォルトページが表示されます。このエラーメッセージは、ポリシーに基づいてサイトがブロックされたことは示しません。代わりに、一般的な暗号化アルゴリズムが存在しないことを示します。このメッセージでは、接続が意図的にブロックされたのかは分かりません。

また、明示的な URL フィルタリング ルールではない他のアクセス制御ルールや、デフォルトのアクションによっても、Web サイトがブロックされることがあります。たとえば、ネットワーク全体または特定地域全体をブロックすると、そのネットワークまたは地域内のすべての Web サイトがブロックされます。このようなルールによってブロックされるユーザに対しては、以下の制限により、応答ページが表示される場合と表示されない場合があります。

URL フィルタリングを導入する場合は、サイトが意図的にブロックされた際の表示で、ブロックされた理由やブロックするサイトのタイプについてエンドユーザに説明することをお勧めします。この点を説明しないと、エンドユーザはブロックされた接続のトラブルシューティングに多大な時間を費やすことになります。

HTTP 応答ページの制限

システムにより Web トラフィックがブロックされる場合、HTTP 応答ページが表示されないこともあります。

- プロモートされたアクセス制御ルール（単純なネットワーク条件だけが指定されている初期に適用されたブロックルール）の結果としてトラフィックがブロックされる場合には、応答ページは表示されません。
- 要求された URL をシステムが特定する前に Web トラフィックがブロックされる場合、応答ページは表示されません。
- アクセス制御ルールによって暗号化接続がブロックされる場合、応答ページは表示されません。

DNS要求のフィルタリング

HTTP/HTTPS以外の接続試行でも、URLカテゴリとレピュテーションデータベースをDNSルックアップ要求に適用できます。

たとえば、ユーザがwww.example.comにFTP接続しようとする、その完全修飾ドメイン名(FQDN)のDNSルックアップ要求が検出されたときに、www.example.comのカテゴリとレピュテーションを検索するようにシステムを設定できます。返されたカテゴリ/レピュテーションのDNS/URLフィルタリングルールがブロックルールの場合、システムはDNS応答をブロックします。そのため、ユーザはFQDNのIPアドレスを取得できず、接続試行に失敗します。

DNS ルックアップ要求フィルタリングを有効にすることで、URL フィルタリングルールを HTTP/HTTPS 以外のプロトコルに拡張し、FTP、TFTP、SCP、ICMP などのプロトコルが Web アクセスをブロックしているサイトへの接続を確立しないようにできます。このフィルタリングは、ユーザがFQDN名を使用しており、DNSルックアップを必要とする限り機能します。ユーザがIPアドレスを使用する場合、DNS要求は発生しないため、DNS要求のブロックはできません。

HTTP/HTTPSトラフィックの場合、DNS要求時にカテゴリ/レピュテーションルックアップを実行すると、システムパフォーマンスが向上する可能性があります。これは、Webセッションの確立を試行する前に接続される事態を妨ぐことができるためです。これは、特に暗号化されているHTTPSに対して有効です。DNS要求の段階で拒否することで、システムはHTTPS接続を認識しないため、復号ルールを評価する必要がなくなり、暗号されたセッションを適切なアクセス制御ルールに一致させるというさらに難しいタスクを実行する必要もなくなります。

DNS要求のフィルタリングのガイドライン

DNS要求のフィルタリングを設定する際は、次の点に注意してください。

- DNS要求のフィルタリングは、DNSセッションでのみ機能します。DNS応答を許可する場合(つまり、URLフィルタリングルールアクションが[許可]の場合)、返されたIPアドレスを使用してユーザが確立する後続の接続は、アクセス制御ルールに対して個別に照合されます。接続が別のルールに一致するためブロックされることも、他の理由で許可されることもあります。たとえば、FTPがDNSルックアップを介してIPアドレスを取得しようとする、FTP接続を禁止する別のアクセス制御ルールが存在するため接続が最終的にブロックされることがあります。
- URL/DNS要求のフィルタリングルールの前にあるアクセス制御ルールに一致するDNSルックアップ要求は、一致ルールに従って許可またはブロックされます。これらの接続では、カテゴリ/レピュテーションルックアップは実行されません。
- この機能では、カテゴリ/レピュテーションに基づいてURLフィルタリングを実装する必要があります。このタイプのURLフィルタリングには、URLフィルタリングライセンスが必要です。カテゴリ/レピュテーションに基づくURLフィルタリングルールがない場合、DNS要求のフィルタリングは関係ないため、有効にしないでください。
- DNSフィルタリングによって生成される接続イベントには、DNSクエリ、URLカテゴリ、およびURLレピュテーションという特に重要なフィールドが含まれます。[DNSクエリ] フィールドには、ルックアップ要求の完全修飾ドメイン名(FQDN)が表示されます。DNSフィルタリングイベントの場合、URLフィールドは空白になります。
- DNS要求のフィルタリングは、URLカテゴリとレピュテーションデータベースのみを使用します。一致するアクセス制御ルールで定義されたURLオブジェクトまたはその他の手動URLフィルタリングは無視されます。手動でDNS名のブロックを実装する場合は、セキュリティインテリジェンスDNSポリシーを使用します。

URLカテゴリとレピュテーションに基づいたDNS要求のフィルタリング

次の手順では、DNSルックアップ要求フィルタリングを実装する方法について説明します。

始める前に

まだ有効になっていない場合は、URL ライセンスを有効にする必要があります。

手順

ステップ 1 [ポリシー]>[アクセス制御]の順に選択します。

ステップ 2 必要に応じて、[アクセスポリシー設定] (⚙️) ボタンをクリックし、[DNSトラフィックへのレピュテーション適用] オプションを選択して、[OK] をクリックします。

このオプションは、アクセス コントロール ポリシーのDNS要求のフィルタリングを有効にします。このオプションは、デフォルトでは有効になっています。

ステップ 3 既存のURLフィルタリングルールを評価するか、新しいルールを作成して、DNS要求にも適用されるURLカテゴリとレピュテーションに基づくフィルタリングを実装します。

URLフィルタリングは通常、HTTP/HTTPSトラフィックにのみ適用されるため、アプリケーションやポートに基づいてこれらのルールを制限する必要はありません。ただし、次の制限がある場合は、ルールがDNS要求にも適用できることを確認してください。

- [送信元/宛先] タブで、[宛先ポート] フィールドに [任意] が指定されている場合、変更は不要です。ポートを指定した場合は、[DNS over UDP] および [DNS over TCP] をリストに追加します。
- [アプリケーション] タブで、アプリケーションリストに [任意] だけが指定されている場合、変更は不要です。アプリケーションまたはアプリケーションフィルタを指定した場合は、[DNS] アプリケーションをリストまたはフィルタに追加します。その他のDNS関連オプションは、この目的には関係ありません。

アクセス制御ルールの作成の詳細については、[アクセス制御ルールの設定（634ページ）](#) を参照してください。

ステップ 4 DNS要求がこれらのルールに一致しないことを確認するには、前述のルールを評価します。

カテゴリおよびレピュテーションの決定は、DNS要求がカテゴリおよびレピュテーションの仕様を持つURLフィルタリングルールと一致する場合にのみ行われます。URLフィルタリングルールよりも前のアクセス コントロール ポリシーのルールに一致するDNS要求は、DNS要求のフィルタリングをバイパスします。このようなDNS要求は、ブロックまたは許可された一致ルールに従って処理されます。

侵入、ファイル、およびマルウェア検査

侵入ポリシーとファイルポリシーは共に連携して、トラフィックの侵入に対する最後の防衛線として機能します。

- 侵入ポリシーは、システムの侵入防御機能を制御します。

- ファイルポリシーは、システムのファイル制御機能とマルウェア防御機能を管理します。

他のトラフィック処理はすべて、侵入、禁止されたファイル、およびマルウェアについて、ネットワーク トラフィックが調べられる前に実行されます。侵入ポリシーまたはファイル ポリシーをアクセス制御ルールに関連付けることによって、アクセス制御ルールの条件に一致するトラフィックを通過させる前に、侵入ポリシーまたはファイルポリシー（またはその両方）を使って、そのトラフィックを検査するよう、システムに指示できます。

トラフィックを**許可**するルールで、侵入ポリシーとファイルポリシーの設定を行えます。トラフィックを**信頼**または**ブロック**するように設定したルールで検査は行われません。さらに、アクセス制御ポリシーのデフォルト アクションが、**許可**の場合、侵入ポリシーは設定できますが、ファイル ポリシーは設定できません。

アクセス制御ルールで処理されるすべての単一接続において、侵入検査の前にファイル検査が行われます。つまり、侵入のファイルポリシーによってブロックされたファイルに対してシステムは検査を行いません。ファイル 検査では、ファイル タイプによるブロックが、マルウェア インспекションおよびブロックよりも優先されます。セッションでファイルが検出されブロックされるまで、そのパケットは侵入検査の対象となります。



- (注) デフォルトでシステムは、暗号化ペイロードの侵入検査とファイル検査を無効化します。これにより、暗号化された接続が、侵入検査とファイル検査が設定されたアクセス制御ルールに一致した際の誤検出を減らすため、パフォーマンスが向上されます。検査は暗号化されていないトラフィックにのみ機能します。

アクセス コントロール ルールの順序のベスト プラクティス

ルールは最初に一致したもののから順に適用されるため、限定的なトラフィック一致基準を指定するルールを汎用的な基準を指定するルールよりも上に配置して、限定的なルールが汎用的なルールよりも先にトラフィックと一致して適用されるようにする必要があります。次の推奨事項を考慮してください。

- 固有のルールは一般的なルールの前に来る必要があります（特に特定のルールが一般的なルールの例外である場合）。
- レイヤ 3/4 基準（IP アドレス、セキュリティゾーン、ポート番号など）のみに基づいてトラフィックをドロップするルールはできるだけ早く来る必要があります。レイヤ 3/4 基準は迅速かつ検査なしで評価することができるので、アプリケーションや URL 基準などの検査を必要とするルールの前に来ることをお勧めします。もちろん、これらのルールの例外はこれらより上位に配置されなければなりません。
- 可能な限り、固有のドロップルールはポリシーの最上位近くに配置します。これにより、望ましくないトラフィックへの可能な限り早期の決定が保証されます。
- アプリケーションと URL の基準の両方を含むルールは、より一般的なアプリケーションのみまたは URL のみのルールの例外として機能している場合を除き、単純なアプリケーションのみまたは URL のみのルールの後に来る必要があります。アプリケーションと URL

の基準を組み合わせることで、予期しない結果が生じることがある（特に暗号化されたトラフィックの場合）ので、可能な限り、URLとアプリケーションのフィルタリング用に個別のルールを作成することをお勧めします。

NAT とアクセス ルール

アクセスルールは、NATを設定している場合でも、アクセスルールの一致に実際のIPアドレスを使用します。たとえば、内部サーバ10.1.1.5用のNATを設定して、パブリックにルーティング可能な外部のIPアドレス209.165.201.5をこのサーバに付与する場合は、この内部サーバへのアクセスを外部トラフィックに許可するアクセスルールの中で、サーバのマッピングアドレス（209.165.201.5）ではなく実際のアドレス（10.1.1.5）を参照する必要があります。

その他のセキュリティ ポリシーがアクセス制御に影響する仕組み

その他のセキュリティポリシーは、アクセス制御ルールが機能し接続と一致する方法に影響を与えます。アクセスルールを設定するときは、次の点に注意してください。

- **SSL 復号** ポリシー：SSL 復号ルールはアクセス制御の前に評価されます。したがって、暗号化された接続が、復号のいくつかのタイプを適用するSSL 復号ルールと一致する場合、それはアクセス コントロール ポリシーによって評価されるプレーン テキスト（復号）接続です。アクセスルールは、暗号化されたバージョンの接続を参照しません。また、トラフィックをドロップするSSL 復号ルールと一致するすべての接続はアクセス コントロール ポリシーによって参照されることがありません。最後に、復号しないルールと一致する暗号化された接続は、その暗号化された状態で評価されます。
- **アイデンティティ** ポリシー：送信元 IP アドレスのユーザ マッピングがある場合にのみ接続はユーザ（およびユーザグループ）と一致します。ユーザまたはグループメンバーシップを重視するアクセスルールは、ユーザ アイデンティティがアイデンティティ ポリシーによって正常に収集された接続のみと一致できます。
- **[セキュリティ インテリジェンス (Security Intelligence)]** ポリシー：アクセス コントロール ポリシーではドロップされた接続が参照されることはありません。ブロックリストに一致しない接続は、その後にアクセス制御ルールと照合され、最終的に、そのアクセス制御ルールによって、接続の処理方法（許可またはドロップ）が決定されます。
- **VPN**（サイト間またはリモート アクセス）：VPN トラフィックは常にアクセス コントロール ポリシーに対して評価され、一致するルールに基づいて接続は許可またはドロップされます。ただし、VPN トンネル自体はアクセス コントロール ポリシーが評価される前に復号されます。アクセス コントロール ポリシーは、トンネル自体ではなく VPN トンネル内に組み込まれている接続を評価します。

アクセス制御のためのライセンス要件

アクセス制御ポリシーを使用するのに特別なライセンスはありません。

ただし、アクセス制御ポリシー内の特定の機能には、次のライセンスが必要です。ライセンスの設定については、[オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化（111ページ）](#)を参照してください。

- **URL** ライセンス：URL カテゴリおよびレピュテーションを一致基準として使用するルールを作成するため。
- **IPS** ライセンス：アクセスルールまたはデフォルトアクションに侵入ポリシーを設定するため。ファイルポリシーを使用するには、このライセンスも必要です（マルウェア防御ライセンスも必要）。
- **マルウェア防御**ライセンス：アクセスルールにファイルポリシーを設定するため。IPS ライセンスは、ファイルポリシーにも必要です。

アクセスコントロールポリシーに関する注意事項と制限事項

アクセス制御のためのいくつかの追加の制限事項を次に示します。ルールから期待どおりの結果を得ているかどうかを評価してこれらを検討してください。

- **URL** データベースの更新にカテゴリの追加（新規、着信）、廃止（送信）、または削除が含まれている場合は、影響を受けるアクセス制御ルールを変更するための猶予期間があります。影響を受けるルールは情報メッセージと一緒にマークされ、メッセージにはルールに影響する問題についての説明と、カテゴリ変更に関する詳細情報がある **Cisco Talos Intelligence Group (Talos)** Web サイトへのリンクが記載されます。最新の URL データベースで使用可能な適切なカテゴリを使用するように、ルールを更新する必要があります。

猶予期間に対応するため、廃止された送信カテゴリを削除せずに新しく追加された着信カテゴリを適切なルールに追加します。ルールは新旧のカテゴリの両方を含める必要があります。新しいカテゴリは、古いカテゴリが削除対象としてマークされている場合に有効になります。古いカテゴリが最終的に削除されたら、ルールを編集して削除されたカテゴリを除去し、設定を再展開する必要があります。削除されたカテゴリを使用するルールを修正するまで、設定の展開はブロックされます。注意が必要なルールをフィルタリングするには、表の上にある [問題のルールを表示 (See Problem Rules)] リンクをクリックします。

- **Device Manager** はディレクトリサーバーから最大 50,000 人のユーザーに関する情報をダウンロードできます。ディレクトリ サーバに 50,000 以上のユーザ アカウントが含まれる場合、アクセスルールでユーザを選択するとき、またはユーザ ベースのダッシュボード情報を閲覧するときに、すべての可能な名前を確認することができません。ルールは、ダウンロードしたこれらの名前だけに書き込むことができます。

50,000 までの制限は、グループに関連付けられた名前にも適用されます。グループに 50,000 を超えるメンバーが含まれている場合は、ダウンロードした 50,000 個の名前だけをグループ メンバーシップに照らして照合できます。

- 脆弱性データベース（VDB）の更新によってアプリケーションが削除（廃止）される場合は、削除されたアプリケーションを使用するアクセス制御ルールまたはアプリケーションフィルタに変更を加える必要があります。これらのルールを修正するまで、変更は展開できません。さらに、システムソフトウェアの更新は、問題を修正するまでインストールできません。[アプリケーションフィルタ（Application Filters）] オブジェクト ページ、またはルールの [アプリケーション（Application）] タブでは、これらのアプリケーション名の後に「（廃止）（Deprecated）」と表示されます。
- 完全修飾ドメイン名（FQDN）ネットワーク オブジェクトを送信元または宛先の基準として使用するには、[デバイス（Device）] > [システム設定（System Settings）] > [DNS サーバ（DNS Server）] でデータ インターフェイスの DNS も設定する必要があります。システムでは、アクセス制御ルールで使用されているFQDNオブジェクトのルックアップを実行するために管理DNSサーバの設定は使用されません。FQDN 解決のトラブルシューティングについては、[DNS の一般的な問題のトラブルシューティング（959 ページ）](#) を参照してください。

FQDNによるアクセスの制御はベストエフォート型のメカニズムであることに注意してください。次の点を考慮してください。

- DNS 応答はスプーフィングされる可能性があるため、完全に信頼できる内部 DNS サーバのみを使用します。
- 一部の FQDN は、特に非常に人気の高いサーバの場合、数千とはいかなくても、数百の IP アドレスを持つことがあり、それらが頻繁に変更されることがあります。システムはキャッシュされている DNS ルックアップの結果を使用するため、ユーザーはキャッシュに存在しないアドレスを取得する可能性があり、その接続はFQDNルールに合致しません。FQDN ネットワークオブジェクトを使用するルールは、100 未満のアドレスに解決される名前に対してのみ効果的に機能します。

100 を超えるアドレスに解決される FQDN のネットワーク オブジェクト ルールを作成しないことを推奨します。接続のアドレスが解決され、デバイスのDNSキャッシュで使用可能である可能性は低いからです。このような場合は、FQDN ネットワーク オブジェクト ルールの代わりに URL ベースのルールを使用します。

- 人気のある FQDN では、異なる DNS サーバが異なるセットの IP アドレスを返す場合があります。したがって、ユーザが設定したものと異なる DNS サーバを使用している場合、FQDN ベースのアクセス制御ルールがクライアントで使用されているサイトのすべての IP アドレスに適用されないことがあり、ルールで意図した結果が得られません。
- 一部の FQDN DNS エントリには、非常に短い存続可能時間（TTL）値が設定されています。この結果、ルックアップテーブルで頻繁に再コンパイルが発生し、全体的なシステムパフォーマンスに影響を与える場合があります。
- 実際に使用されているルールを編集する場合、その変更は、Snort によって検査されなくなった、確立されている接続には適用されません。新しいルールは、将来の接続に対する照合に使用されます。また、Snortによって接続がアクティブに検査されている場合、Snort は、変更された一致またはアクション基準を既存の接続に適用できます。現在のすべての接続に変更を確実に適用する必要がある場合は、デバイス CLI にログインし、**clear conn**

コマンドを使用して、確立されている接続を終了させることができます。これは、その後に接続の送信元が接続を再確立を試み、そのために新しいルールに対して適切に照合されることを前提としています。

- 接続のアプリケーションまたは URL を識別するためにシステムは 3 ～ 5 パケットを使用します。したがって、正しいアクセス制御ルールでも特定の接続ではすぐに一致しない可能性があります。ただし、アプリケーション/URL が判明すると、接続は一致するルールに基づいて処理されます。暗号化された接続の場合、これは SSL ハンドシェイクでのサーバ証明書の交換後に発生します。
- システムは、アプリケーションが識別された接続内のペイロードを持たないパケットに対して、デフォルト ポリシー アクションを適用します。
- マッチング基準はなるべく空欄にしておきます（特にセキュリティゾーン、ネットワークオブジェクト、およびポートオブジェクトで）。たとえば、すべてのインターフェイスを含むゾーンを作成するのではなく、セキュリティゾーンの条件を空白のままにするだけで、システムはすべてのインターフェイスのトラフィックをより効率的に照合できます。複数の基準を指定すると、指定された条件の内容のすべての組み合わせを照合する必要があります。
- 送信元または宛先の基準に IP アドレスを指定する場合は、同じルールに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスを混在させないでください。IPv4 アドレスと IPv6 アドレスに個別のルールを作成します。
- 動作中、Threat Defense デバイスは、アクセスルールで使用されるネットワークオブジェクトの内容に基づいて、アクセス制御ルールを複数のアクセスコントロールリストのエントリに展開します。オブジェクトグループ検索を有効にすることで、アクセスコントロールルールの検索に必要なメモリを抑えることができます。オブジェクトグループ検索を有効にした場合、システムによってネットワークオブジェクトは拡張されませんが、オブジェクトグループの定義に基づいて一致するアクセスルールが検索されます。オブジェクトグループ検索は、アクセスルールがどのように定義されるか、または Device Manager にどのように表示されるかには影響しません。アクセスコントロールルールと接続を照合するときに、デバイスがアクセスコントロールルールを解釈して処理する方法のみに影響します。

オブジェクトグループ検索を有効にすると、ネットワークオブジェクトを含むアクセスコントロールポリシーのメモリ要件が軽減されます。ただし、オブジェクトグループ検索では、ルールルックアップのパフォーマンスが低下して、CPU 使用率が増大する可能性があります。ことに注意してください。CPU に対する影響と、特定のアクセスコントロールポリシーに関するメモリ要件の軽減とのバランスをとる必要があります。ほとんどの場合、オブジェクトグループ検索を有効にすると、ネット運用が改善されます。

FlexConfig を使用してこのオプションを設定するには、**object-group-search access-control** コマンドを発行します。否定テンプレートでは、このコマンドの **no** 形式を使用します。

リリース 7.2 以降、この機能は新しい展開ではデフォルトで有効になっていますが、アップグレードされたシステムでは自動的に有効になりません。

- 関連 RFC に違反する GRE トンネルはドロップされます。たとえば、RFC に反して GRE トンネルの予約ビットにゼロ以外の値が含まれている場合、そのトンネルはドロップされます。非標準の GRE トンネルを許可する必要がある場合は、リモートマネージャを使用して、そのセッションを信頼するプレフィルタルールを設定する必要があります。Device Manager を使用してプレフィルタルールを設定することはできません。

アクセスコントロール ポリシーの設定

ネットワーク リソースへのアクセスを制御するには、アクセス制御ポリシーを使用します。ポリシーは順序付けられた一連のルールで構成され、上から下へと評価されます。トラフィックに適用されるルールは、すべてのトラフィック基準が一致した最初のルールです。トラフィックに一致するルールがない場合、ページ下部に表示されるデフォルトアクションが適用されます。

アクセス制御ポリシーを設定するには、[ポリシー (Policies)] > [アクセス 制御 (Access Control)] を選択します。

アクセスコントロール表には、すべてのルールが順番に表示されます。各ルールに対して次を実行します。

- 一番左の列にあるルール番号の隣の [>] ボタンをクリックして、ルールの図を開きます。図は、ルールがどのようにトラフィックを制御するかを視覚的に理解するのに役立ちます。もう一度ボタンをクリックすると図が閉じます。
- ほとんどのセルではインライン編集が可能です。例えば、アクションをクリックして別のものを選択するか、送信元ネットワークオブジェクトをクリックして送信元の条件を追加または変更します。
- ルールを移動するには、[移動 (move)] アイコン (🔄) が表示されるまでルールにカーソルを合わせ、次にルールをクリックして新しいロケーションにドラッグし、ドロップします。また、ルールを編集してから [順番 (Order)] リストで新しい場所を選択することにより、ルールを移動することもできます。処理したい順番でルールを配置することが重要です。特に、一般的なルールにおける例外など、特別なルールは上部に配置する必要があります。
- 一番右の列には、ルールのアクション ボタンがあります。セルにマウス オーバーするとボタンが表示されます。ルールを編集 (🔧) または削除 (🗑️) することができます。
- [アクセスコントロールの設定 (Access Control Settings)] (⚙️) ボタンをクリックして、ポリシー内の特定のルールではなく、アクセス コントロール ポリシーに適用される設定を行います。
- テーブルの上の [ヒットカウントの切り替え (Toggle Hit Counts)] アイコン (📊) をクリックし、テーブルの [ヒットカウント (Hit Count)] 列を追加または削除します。[ヒットカウント (Hit Count)] 列は [名前 (Name)] 列の右側にあり、ルールの合計ヒット数と最新のヒットの日付と時刻が表示されます。ヒットカウント情報は、切り替えボタンをク

リックしたときに取得されます。最新情報を取得するには、更新アイコン (🔄) をクリックします。

- URL カテゴリの削除または変更などが原因で特定のルールに問題が発生した場合、これらのルールのみを表示するには、検索ボックスの横にある [\[See Problem Rules\]](#) リンクをクリックしてテーブルをフィルタ処理します。これらのルールを編集および修正（または削除）して、必要とするサービスが提供されるようにします。

ここでは、ポリシーの設定方法について説明します。

デフォルト アクションの設定

接続が特定のアクセス ルールに一致しない場合、アクセス コントロール ポリシーのデフォルト アクションによって処理されます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] の順に選択します。

ステップ 2 [デフォルトアクション (Default Action)] フィールドの任意の場所をクリックします。

ステップ 3 一致するトラフィックに適用するアクションを選択します。

- [信頼性 (Trust)] : どんな種類の検査も行うことなくトラフィックを許可します。
- [許可 (Allow)] : 侵入ポリシーに基づいてトラフィックを許可します。
- [ブロック (Block)] : トラフィックを無条件でドロップします。トラフィックのインスペクションは実行されません。

ステップ 4 アクションが [許可 (Allow)] の場合、侵入ポリシーを選択します。

ポリシー オプションの説明については、[侵入ポリシーの設定 \(644 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 5 (オプション) デフォルト アクションのロギングを設定します。

デフォルト アクションに一致するトラフィックをダッシュボード データやイベント ビューアに含めるには、ロギングを有効にする必要があります。[ロギングの設定 \(645 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

アクセス コントロール ポリシーの設定

ポリシー内の特定のルールではなく、アクセス コントロール ポリシーに適用される設定を行います。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policy)] > [アクセス制御 (Access Control)] の順に選択します。

ステップ 2 [アクセスポリシーの設定 (Access Policy Settings)] (⚙️) ボタンをクリックします。

ステップ 3 以下の設定項目を設定します。

- [TLSサーバーアイデンティティ検出 (TLS Server Identity Discovery)] : TLS 1.3 では、ほとんどのハンドシェイクメッセージが暗号化されるため、証明書情報を簡単に利用できません。TLS 1.3 で暗号化されたトラフィックで、アプリケーションまたは URL フィルタリングを使用するアクセスルールに対応するには、システムにサーバーのクリアテキスト証明書がある必要があります。このオプションを有効にすると、システムは、クライアントの Hello パケットの IP アドレスおよび SNI (Server Name Indication) に基づいて、サイトの証明書がキャッシュに保存されているかどうかを確認します。保存されていない場合、システムは、TLS 1.2 プロブを使用して証明書を取得します。その後は、この証明書を使用して、アプリケーション/URL カテゴリおよびレピュテーションを識別することができます。暗号化された接続が適切なアクセス制御ルールに適合していることを確認するために、このオプションを有効にすることを推奨します。この設定では、証明書のみが取得されます。接続は暗号化されたままになります。TLS 1.3 証明書を取得するには、このオプションを有効にするだけで十分です。対応する SSL 復号ルールを作成する必要はありません。ただし、キャッシュされた証明書は、アクセス制御処理に加えて、より効果的な復号ルール処理にも使用されます。
- [DNSトラフィックへのレピュテーション適用]: URL フィルタリングカテゴリとレピュテーションルールをDNSルックアップ要求に適用するには、このオプションを有効にします。ルックアップ要求の完全修飾ドメイン名 (FQDN) にブロックしているカテゴリやレピュテーションがある場合、システムは DNS 応答をブロックします。ユーザは DNS 解決を受信しないため、ユーザは接続を完了できません。非 Web トラフィックに URL カテゴリおよびレピュテーションフィルタリングを適用するには、このオプションを使用します。詳細については、[DNS要求のフィルタリング \(624 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

アクセス制御ルールの設定

アクセス制御ルールを使用して、ネットワークリソースへのアクセスを制御します。アクセス制御ポリシーに設定されたルールは、上から下への順に評価されます。トラフィックに適用されるルールは、すべてのトラフィック基準が一致する最初のルールです。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (🔍) をクリックします。

不要になったルールを削除する場合は、対象のルールの削除アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 [順序 (Order)] で、ルールの番号付きリストのどこにルールを挿入するかを選択します。

ルールは最初に一致したもののから順に適用されるため、限定的なトラフィック一致基準を持つルールは、同じトラフィックに適用され、汎用的な基準を持つルールよりも上に置く必要があります。

デフォルトでは、ルールはリストの最後に追加されます。ルールの配置を後で変更する場合は、このオプションを編集して配置を変更します。

ステップ 4 [タイトル (Title)] にルールの名前を入力します。

この名前にスペースを含めることはできません。英数字と特殊文字 + . _ - を使用できます

ステップ 5 一致するトラフィックに適用するアクションを選択します。

- [信頼性 (Trust)] : どんな種類の検査も行わずにトラフィックを許可します。
- [許可 (Allow)] : ポリシーの侵入およびその他のインスペクション設定に従ってトラフィックを許可します。
- [ブロック (Block)] : トラフィックを無条件でドロップします。トラフィックは検査されません。

ステップ 6 以下のタブの任意の組み合わせを使用して、トラフィック一致基準を定義します。

- [送信元/宛先 (Source/Destination)] : トラフィックが通過するセキュリティゾーン (インターフェイス)、IP アドレスまたは IP アドレスの国/大陸 (地理的位置)、アドレスに割り当てられたセキュリティグループタグ (SGT)、またはトラフィックで使用するプロトコルおよびポート。デフォルトは、すべてのゾーン、アドレス、地理的位置、SGT、プロトコル、およびポートです。 [送信元/送信先条件 \(637 ページ\)](#) を参照してください。
- [アプリケーション (Application)] : アプリケーション、あるいはタイプ、カテゴリ、タグ、リスク、またはビジネスとの関連性によってアプリケーションを定義するフィルタ。デフォルトは任意のアプリケーションです。 [アプリケーション基準 \(639 ページ\)](#) を参照してください。
- [URL] : Web または DNS ルックアップ要求の URL または URL カテゴリ。デフォルトは任意の URL です。 [URL の基準 \(641 ページ\)](#) を参照してください。
- [ユーザ (Users)] : アイデンティティ ソース、ユーザまたはユーザ グループ。アイデンティティポリシーにより、ユーザおよびグループ情報をトラフィックの照合に使用できる

かどうかを判断します。この基準を使用するには、アイデンティティポリシーを設定する必要があります。[ユーザ基準（643 ページ）](#)を参照してください。

条件を変更するには、条件内の **[+]** ボタンをクリックし、希望するオブジェクトまたは要素を選択し、ポップアップダイアログボックスの **[OK]** をクリックします。基準にオブジェクトが必要で、そのオブジェクトが存在しない場合、**[新規オブジェクトの作成 (Create New Object)]** をクリックします。オブジェクトまたは要素をポリシーから削除するには、そのオブジェクトまたは要素の **[x]** をクリックします。

条件をアクセス制御ルールに追加する際は、以下のヒントを参考にしてください。

- ルールごとに複数の条件を設定できます。ルールがトラフィックに適用されるには、トラフィックがそのルールのすべての条件に一致する必要があります。たとえば、特定のホストまたはネットワークの URL フィルタリングを行う単一のルールを使用できます。
- ルールの条件ごとに、最大 50 の条件を追加できます。トラフィックが、基準のいずれかと一致する場合、トラフィックはその条件を満たすことになります。たとえば、単一のルールを使用して、最大 50 のアプリケーションまたはアプリケーションフィルタのアプリケーション制御を適用できます。このように、単一の条件に含まれる基準の間には OR 関係があり、条件のタイプ間（送信元/送信先とアプリケーションの間など）には AND 関係があるということです。
- 一部の機能の使用には、該当するライセンスを有効にする必要があります。

ステップ 7 (オプション) 「許可」アクションを使用するポリシーでは、暗号化されていないトラフィックに対する追加検査を設定できます。次のいずれかのリンクをクリックします。

- **[侵入ポリシー (Intrusion Policy)]** : トラフィックで侵入およびエクスプロイトを検査する場合は、**[侵入ポリシー (Intrusion Policy)]** > **[オン (On)]** を選択し、侵入検査ポリシーを選択します。[侵入ポリシーの設定（644 ページ）](#)を参照してください。
- **[ファイルポリシー (File Policy)]** : マルウェアに感染したファイルやブロックする必要があるファイルがないかをトラフィックで検査する場合に選択します。[ファイルポリシー設定（644 ページ）](#)を参照してください。

ステップ 8 (オプション) ルールのロギングを設定します。

デフォルトでは、ルールと一致するトラフィックの接続イベントは生成されません。ただし、ファイルポリシーを選択した場合はデフォルトでファイルイベントが生成されます。この動作は変更できます。ポリシーと一致するトラフィックをダッシュボードデータまたはイベントビューアに含めるには、ロギングを有効にする必要があります。[ロギングの設定（645 ページ）](#)を参照してください。

マッチングアクセスルールのログ構成に関係なくドロップまたはアラートするように設定されている侵入ルールについては、常に侵入イベントが生成されます。

ステップ 9 **[OK]** をクリックします。

送信元/送信先条件

アクセスルールの送信元/送信先条件は、トラフィックが通過するセキュリティゾーン（インターフェイス）、IP アドレスまたは IP アドレスの国/大陸（地理的位置）、アドレスに割り当てられたセキュリティグループタグ（SGT）、またはトラフィックで使用されるプロトコルおよびポートを定義します。デフォルトは、すべてのゾーン、アドレス、地理的位置、SGT、プロトコル、およびポートです。

条件を変更するには、該当する条件の [+] ボタンをクリックして目的のオブジェクトまたは要素を選択し、[OK] をクリックします。基準にオブジェクトが必要で、そのオブジェクトが存在しない場合、[新規オブジェクトの作成 (Create New Object)] をクリックします。オブジェクトまたは要素をポリシーから削除するには、そのオブジェクトまたは要素の [x] をクリックします。

ルールに一致する送信元と送信先を識別するのに、次の基準を使用できます。

送信元ゾーン、送信先ゾーン

トラフィックが経由するインターフェイスを定義するセキュリティゾーンオブジェクト。どのインターフェイスのトラフィックでも適用するものとして、いずれか、または両方の基準を定義することも、両方とも未定義にすることもできます。

- ゾーン内のインターフェイスからデバイスを発信するトラフィックと一致させるには、そのゾーンを [送信先ゾーン (Destination Zones)] に追加します。
- ゾーン内のインターフェイスからデバイスに着信するトラフィックと一致させるには、そのゾーンを [送信元ゾーン (Source Zones)] に追加します。
- 送信元ゾーンと送信先ゾーンの条件を両方ともルールに追加した場合、指定した送信元ゾーンのいずれかから発信されて、指定した送信先ゾーンのいずれかを経由するトラフィックが一致することになります。

トラフィックがデバイスに出入りする場所に基づいてルールを適用する必要がある場合は、この基準を使用します。たとえば、ホスト内部に向かうすべてのトラフィックが侵入検査を受けるようにする場合は、内部ゾーンを [送信先ゾーン (Destination Zones)] として選択し、送信元ゾーンは空白のままにします。侵入フィルタリングをルールに含めるには、ルールのアクションを [許可 (Allow)] にし、ルールで侵入ポリシーを選択する必要があります。



- (注) 1 つのルールにパッシブ セキュリティ ゾーンとルーテッド セキュリティ ゾーンを混在させることはできません。さらに、パッシブセキュリティゾーンは送信元ゾーンとしてのみ指定でき、宛先ゾーンとして指定することはできません。

送信元ネットワーク、宛先ネットワーク

ネットワーク アドレスまたはトラフィックの場所を定義するネットワーク オブジェクトまたは地理的位置です。

- IP アドレスまたは地理的位置からのトラフィックを一致させるには、[送信元ネットワーク (Source Networks)] を設定します。
- IP アドレスまたは地理的位置へのトラフィックを一致させるには、[送信先ネットワーク (Destination Networks)] を設定します。
- 送信元と送信先ネットワークの両方の条件をルールに追加すると、一致するトラフィックは指定した IP アドレスのいずれかから送信され、送信先 IP アドレスのいずれかを通って出力されなければなりません。

この条件を追加するには、次のタブから選択します。

- [ネットワーク (Network)] : 制御するトラフィックの送信元または宛先 IP アドレスを定義するネットワークオブジェクトまたはグループを選択します。完全修飾ドメイン名 (FQDN) を使用してアドレスを定義するオブジェクトを使用できます。このアドレスは DNS ルックアップによって判別されます。
- [地理位置情報 (Geolocation)] : 位置情報機能を選択して、その送信元または宛先の国や大陸に基づいてトラフィックを制御できます。大陸を選択すると、その大陸内のすべての国が選択されます。地理的位置を直接ルールで選択するほかに、作成した位置情報オブジェクトを選択して場所を定義することもできます。地理的位置を使用すると、特定の国で使用されているすべての潜在的な IP アドレスを知る必要なく、その国へのアクセスを簡単に制限できます。



(注) 地理的位置の最新データを常にトラフィックフィルタリングで使えるよう、地理位置情報データベース (GeoDB) を定期的に更新することを推奨します。

送信元ポート、宛先ポート/プロトコル

トラフィックで使用されるプロトコルを定義するポートオブジェクト。TCP/UDP の場合、ポートが含まれます。ICMP の場合、コードおよびタイプが含まれます。

- 特定のプロトコルまたはポートからのトラフィックと一致させるには、[送信元ポート (Source Ports)] を設定します。送信元ポートに設定できるのは、TCP/UDP のみです。
- プロトコルまたはポートからのトラフィックを一致させるには、[宛先ポート/プロトコル (Destination Ports/Protocols)] を設定します。宛先ポートだけを条件に追加する場合、異なるトランスポートプロトコルを使用するポートを追加できます。ICMP およびその他の非 TCP/UDP 仕様は、宛先ポートのみで許可されます。送信元ポートでは許可されません。
- 特定の TCP/UDP ポートから特定の TCP/UDP ポートへ発信されるトラフィックを一致させるには、両方のポートを設定します。送信元および宛先ポートの両方を条件に追加する場合は、単一のトランスポートプロトコル (TCP または UDP) を共有するポー

トのみを追加できます。たとえば、TCP/80 ポートから TCP/8080 ポートへのトラフィックをターゲットにすることができます。

送信元 SGT グループ、宛先 SGT グループ

Identity Services Engine (ISE) からダウンロードされた、トラフィックに割り当てられた SGT を識別するセキュリティグループタグ (SGT) グループオブジェクト。これらのオブジェクトは、ISE アイデンティティソースを定義する場合にのみ使用できます。それ以外の場合、このセクションは表示されません。アクセス制御のために SGT を使用方法の詳細については、[TrustSec セキュリティ グループ タグを使用したネットワーク アクセスの制御方法 \(650 ページ\)](#) を参照してください。

- 送信元がグループで定義された SGT のいずれかを持つトラフィックを照合するには、[送信元SGTグループ (Source SGT Groups)] を設定します。
- 宛先がグループで定義された SGT のいずれかを持つトラフィックを照合するには、[宛先SGTグループ (Destination SGT Groups)] を設定します。
- 送信元 SGT 条件と宛先 SGT 条件の両方をルールに追加する場合、指定されたタグのいずれかを持つ送信元から発信され、宛先タグのいずれかに送信されるトラフィックのみが照合されます。

アプリケーション基準

アクセス ルールのアプリケーション基準では、IP 接続で使用されるアプリケーション、あるいは、タイプ、カテゴリ、タグ、リスク、またはビジネスとの関連性によってアプリケーションを定義するフィルタ処理が定義されます。デフォルトは任意のアプリケーションです。

ルールで個別のアプリケーションを指定できますが、アプリケーション フィルタを使用すれば、ポリシーの作成と管理が簡単になります。たとえば、リスクが高くビジネス関連性が低いすべてのアプリケーションを識別してブロックするアクセス制御ルールを作成できます。ユーザがこのようなアプリケーションのいずれかを使用しようとすると、セッションがブロックされます。

さらに、シスコはシステムおよび脆弱性データベース (VDB) の更新を通して、頻繁にアプリケーション検出機能の更新や追加を行います。これにより、リスクの高いアプリケーションをブロックするルールが新しいアプリケーションに自動的に適用され、手動でルールを更新する必要がなくなります。

ルールでアプリケーションとフィルタを直接指定するか、特性を定義するアプリケーション フィルタ オブジェクトを作成できます。複雑なルールを作成する場合は、オブジェクトを使用すると、システム制限内 (基準ごとに 50 項目) に収めることが簡単になります。

アプリケーションとフィルタのリストを変更するには、条件内にある [+] ボタンをクリックし、個別のタブにリストされている必要なアプリケーションまたはアプリケーション フィルタ オブジェクトを選択して、ポップアップ ダイアログボックスの [OK] をクリックします。いずれかのタブで [高度なフィルタ (Advanced Filter)] をクリックすると、フィルタ基準の選択、または特定のアプリケーションの検索ができます。アプリケーション、フィルタ、またはオブジェクトの [x] をクリックすると、ポリシーから削除されます。[フィルタとして保存 (Save As

Filter)]リンクをクリックすると、組み合わせ条件が、新規のアプリケーションフィルタオブジェクトとして保存されます。



- (注) 選択したアプリケーションが VDB の更新によって削除された場合は、アプリケーション名の後に「(廃止)」が表示されます。これらのアプリケーションはフィルタから削除する必要があります。削除しないと、それ以降の展開やシステムソフトウェアのアップグレードがブロックされます。

次の **[高度なフィルタ (Advanced Filter)]** 基準を使用して、ルールに一致するアプリケーションやフィルタを特定できます。これらはアプリケーション フィルタ オブジェクトで使用されるものと同じです。



- (注) 1つのフィルタ条件内での複数の選択はOR関係にあります。「リスクが高いOR非常に高い」という具合です。フィルタ間の関係はANDであり、「リスクが高いOR非常に高いANDビジネスとの関連性は低いOR非常に低い」となります。フィルタを選択するごとに、アプリケーションの一覧が更新され、条件に一致するものだけが表示されます。これらのフィルタを使用して、個別に追加するアプリケーションの検索や、フィルタ基準をルールに追加する際に目的のアプリケーションが対象となっているかを確認できます。

リスク

アプリケーションが、組織のセキュリティポリシーに違反して使用される可能性：非常に低い～非常に高い。

ビジネスとの関連性

アプリケーションが、娯楽としてではなく、組織のビジネス活動の範囲内で使用される可能性：非常に低い～非常に高い。

種類

アプリケーションのタイプ：

- **アプリケーションプロトコル**：HTTPやSSHなどのホスト間の通信を表すアプリケーションプロトコル。
- **クライアント プロトコル**：Web ブラウザや電子メール クライアントなどのホスト上で動作しているソフトウェアを表すクライアント。
- **Web アプリケーション**：HTTP トラフィックの内容または要求された URL を表す MPEG ビデオや Facebook などの Web アプリケーション。

カテゴリ

アプリケーションの最も基本的な機能を表す一般的な分類。

タグ

アプリケーションに関する追加の情報。カテゴリに類似。

暗号化されたトラフィックの場合、システムがトラフィックを識別してフィルタ処理できるのは **SSL プロトコル** のタグが付けられたアプリケーションのみです。このタグが付いていないアプリケーションは、暗号化されていない、または復号されたトラフィックでのみ検出可能です。また、システムは **復号トラフィック** タグを、復号されたトラフィックでのみ検出できるアプリケーションに割り当てます。（暗号化されたトラフィックや暗号化されていないトラフィックで検出されるアプリケーションには割り当てない）

アプリケーション一覧（画面下部）

この一覧は、上部のフィルタオプションを選択することによって更新されるため、現在のフィルタに一致するアプリケーションのみを確認できます。この一覧を使用することで、フィルタ基準をルールに追加する際に目的のアプリケーションが対象となっているかを確認できます。特定のアプリケーションを追加しようとしている場合、このリストからそのアプリケーションを選択します。

URL の基準

アクセス ルールの URL の基準は、Web 要求で使用される URL、または要求される URL が属するカテゴリを定義します。カテゴリ照合の場合は、許可またはブロックするサイトの関連レピュテーションも指定できます。デフォルトではすべての URL が許可されます。

DNSルックアップ要求フィルタリングを有効にすると、カテゴリとレピュテーションの設定は、ルックアップ要求の完全修飾ドメイン名(FQDN)にも適用されます。DNS要求フィルタリングには、カテゴリとレピュテーションの設定のみが適用されます。手動URLフィルタリングは無視されます。

URL のカテゴリとレピュテーションにより、アクセス制御ルールの URL 条件を容易に作成できます。たとえば、すべてのギャンブルサイトをブロックしたり、信頼できないソーシャルネットワーキングサイトをブロックしたりできます。該当するカテゴリとレピュテーションの URL をユーザが参照しようとする、セッションがブロックされます。

カテゴリおよびレピュテーションデータを使用することで、ポリシーの作成と管理も簡素化されます。この方法では、システムが Web トラフィックを予期されるとおりに制御することが保証されます。さらに、シスコの脅威インテリジェンスは常に更新されて新しい URL が追加され、既存の URL も新しいカテゴリとリスクに更新されるため、システムでは常に最新情報を使用して要求対象の URL がフィルタ処理されます。ただし、セキュリティに対する脅威（マルウェア、スパム、ボットネット、スパム、フィッシングなど）を表す悪意のあるサイトが現れては消えるペースが早すぎて、新しいポリシーを更新して導入するのが間に合わないこともあります。

URL リストを変更するには、条件の中にある [+] ボタンをクリックし、次のいずれかの方法で URL カテゴリを選択します。ポリシーからカテゴリやオブジェクトを削除するには、該当する [x] をクリックします。

[URL] タブ

[+] をクリックし、URL オブジェクトまたはグループを選択し、[OK] をクリックします。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しい URL の作成 (Create New URL)] をクリックします。



(注) 特定のサイトをターゲットにするように URL オブジェクトを設定する前に、手動 URL フィルタリングに関する情報を注意深く読みます。

[カテゴリ (Categories)] タブ

[+] をクリックし、必要なカテゴリを選択し、[OK] をクリックします。

カテゴリの説明については、<https://www.talosintelligence.com/categories> を参照してください。

デフォルトでは、レピュテーションに関係なく、選択した各カテゴリのすべての URL にルールが適用されます。レピュテーションに基づいてルールを制限するには、各カテゴリの下向き矢印をクリックし、[すべて (Any)] チェックボックスをオフにしてから、[レピュテーション (Reputation)] スライダを使用してレピュテーション レベルを選択します。レピュテーション スライダの左側に許可されるサイトが示され、右側にブロックされるサイトが示されます。レピュテーションの使用方法はルールアクションによって異なります。

- ルールで Web アクセスがブロックまたは監視される場合は、レピュテーション レベルを選択すると、そのレベルよりもシビアティ（重大度）が高いすべてのレピュテーションも選択されます。たとえば、**問題のあるサイト (レベル 2)** をブロックまたは監視するルールを設定する場合、**信頼できない (レベル 1)** のサイトも自動的にブロックまたは監視されます。
- ルールが Web アクセスを許可する場合は、レピュテーション レベルを選択すると、そのレベルより深刻でないすべてのレピュテーションも選択されます。たとえば、**好ましいサイト (Favorable sites) (レベル 4)** を許可するルールを設定した場合、**信頼できる (Trusted) (レベル 5)** サイトも自動的に許可されます。

レピュテーションが不明な URL をレピュテーション一致に含めるには、[レピュテーションが不明なサイトを含める (Include Sites with Unknown Reputation)] オプションを選択します。通常、新しいサイトは評価されていません。また、その他の理由でサイトのレピュテーションが不明である（または判断できない）場合もあります。

URL のカテゴリを確認します。

特定の URL のカテゴリとレピュテーションを確認できます。[確認する URL] ボックスに URL を入力し、[移動] をクリックします。結果を表示するには、外部の Web サイトに移動します。分類に同意しない場合は、[URL カテゴリの異議を送信する] リンクをクリックしてお知らせください。

ユーザ基準

アクセス ルールのユーザ基準は、IP 接続のユーザまたはユーザ グループを定義します。アクセスルールにユーザまたはユーザグループの基準を含めるように、アイデンティティポリシーと関連ディレクトリ サーバを設定する必要があります。

アイデンティティ ポリシーは、特定の接続のためにユーザ アイデンティティを収集するかどうかを決定します。アイデンティティが確立されると、ホストの IP アドレスが識別されたユーザに関連付けられます。したがって、送信元 IP アドレスがユーザにマッピングされているトラフィックは、そのユーザから発信されたものとみなされます。IP パケット自体にはユーザ アイデンティティ情報が含まれていないため、この IP アドレスからユーザへのマッピングが最良の推測となります。

1つのルールに最大 50 のユーザまたはグループを追加できるので、個々のユーザを選択するよりも、グループを選択する方が妥当です。たとえば、Engineering グループが開発ネットワークにアクセスできるようにするルールを作成し、その下位ルールとして Engineering グループ以外のすべてのユーザ/グループによる開発ネットワークへのアクセスを拒否するルールを作成するとします。すると、新しいエンジニアにこのルールを適用するには、エンジニアをディレクトリ サーバの Engineering グループに追加するだけですみます。

そのソース内のすべてのユーザに適用するアイデンティティ ソースを選択することもできます。したがって、複数の Active Directory ドメインをサポートする場合は、ドメインに基づいてリソースへの差分アクセスを提供できます。

ユーザリストを変更するには、条件の中にある [+] ボタンをクリックし、次のいずれかの方法でアイデンティティを選択します。ポリシーからアイデンティティを削除するには、該当する [x] をクリックします。

- [アイデンティティ ソース (Identity Sources)] : AD レalmやローカル ユーザ データベースなど、選択したソースから取得したすべてのユーザにルールを適用するアイデンティティ ソースを選択します。必要なレalmがまだ存在していない場合は、[新しいアイデンティティレalmの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックします。
- [グループ (Groups)] : 目的のユーザ グループを選択します。グループを選択できるのは、ディレクトリ サーバでグループを設定している場合だけです。グループを選択すると、そのグループのすべてのメンバー (サブグループを含む) にそのルールが適用されます。サブグループを別の方法で処理する場合は、サブグループ用の個別のアクセスルールを作成し、それをアクセス コントロール ポリシー内で親グループのルールの上に配置する必要があります。
- [ユーザ]: 個々のユーザを選択します。ユーザ名には、Realm\usernameなどのアイデンティティソースのプレフィックスが付きます。

Special-Identities-Realmの下にはいくつかの組み込みユーザがあります。

- [認証失敗 (Failed Authentication)] : ユーザが認証を求められ、有効なユーザ名/パスワードを入力できずに最大試行回数に達しました。認証の失敗により、ユーザがネットワークにアクセスできなくなることはありませんが、このようなユーザに対してネットワーク アクセスを制限するアクセス ルールを作成できます。

- [ゲスト (Guest)] : ゲストユーザは[認証失敗 (Failed Authentication)]ユーザと似ていますが、アイデンティティルールでこのようなユーザがゲストと呼ばれるように設定されている点で異なります。ゲストユーザが認証を求められましたが、認証できずに最大試行回数に達しました。
- [認証不要 (No Authentication Required)] : ユーザの接続が、認証不要と指定されているアイデンティティルールに一致したため、ユーザは認証を求められませんでした。
- [不明 (Unknown)] : IP アドレスのユーザマッピングがないため、認証失敗の記録がありません。通常、これは、HTTP トラフィックがそのアドレスからまだ見られてないことを意味します。

侵入ポリシーの設定

ファイアウォールシステムには複数の侵入ポリシーが付属しています。Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によって提供されるいくつかの侵入ポリシーはシスコによって設計されています。Talos によって、侵入およびプリプロセッサルール状態と詳細設定が規定されています。トラフィックを許可するアクセス制御ルールでは、侵入ポリシーを選択して、トラフィックにおける侵入およびエクスプロイトを検査することができます。侵入ポリシーにより、デコードされたパケットがパターンに基づいて調査され、悪意のあるトラフィックがブロックまたは除去されます。

Snort 3 を実行している場合は、これらのポリシーのいずれかを選択するか、独自の侵入ポリシーを作成できます。

侵入検査を有効化するには、**[侵入ポリシー]>[オン]**を選択し、必要なポリシーを選択します。各ポリシーの説明を表示するには、ドロップダウンリストでポリシーの情報アイコンをクリックします。

定義済みポリシーの詳細については、[システム定義のネットワーク分析および侵入ポリシー \(660 ページ\)](#) を参照してください。

ファイル ポリシー設定

ファイルポリシーにより、マルウェア防御を使用して悪意のあるソフトウェア (マルウェア) を検出することができます。ファイル制御を実行するファイルポリシーを使用して、ファイルにマルウェアが含まれているかどうかに関係なく、特定のタイプのすべてのファイルを制御することもできます。

マルウェア防御は、ネットワークトラフィックで検出された潜在的なマルウェアの性質を取得し、ローカルマルウェアファイル分析と事前分類の更新を取得するために Secure Malware Analytics Cloud を使用します。Secure Malware Analytics Cloud にアクセスし、マルウェアルックアップを実行するため、管理インターフェイスにはインターネットへのパスが必要です。デバイスが対象ファイルを検出すると、ファイルの SHA-256 ハッシュ値を使用してファイルの性質について Secure Malware Analytics Cloud に問い合わせます。可能な性質を次に示します。

- マルウェア (Malware) : Secure Malware Analytics Cloud はファイルをマルウェアとして分類しました。ファイル内のいずれかのファイルがマルウェアである場合、アーカイブファイル (たとえば zip ファイル) はマルウェアとしてマークされます。

- クリーン (Clean) : Secure Malware Analytics Cloudはファイルをマルウェアが含まれないクリーンな状態であると分類しました。その中のすべてのファイルがクリーンであれば、アーカイブ ファイルはクリーンであるとマークされます。
- 不明 (Unknown) : Secure Malware Analytics Cloudはまだファイルの性質を指定していません。その中のすべてのファイルが不明であれば、アーカイブファイルは不明であるとマークされます。
- 使用不可 (Unavailable) : システムは Secure Malware Analytics Cloudに対し、このファイルの性質を問い合わせることができませんでした。この性質に関するイベントが、わずかながら存在する可能性があります。これは予期された動作です。「使用不可」イベントが続く場合は、管理アドレスのインターネット接続が正しく機能していることを確認してください。

ファイル ポリシー

次のファイル ポリシーのいずれかを選択できます。

- [なし (None)] : 送信されたファイルでマルウェアを評価せず、ファイル固有のブロッキングを実行しません。このオプションは、ファイル送信が信頼されている、またはファイル送信の可能性が低い（または不可能である）、あるいはアプリケーションを信頼している、または URL フィルタリングがネットワークを適切に保護しているルールに対して選択します。
- [マルウェアをすべてブロック (Block Malware All)] : Secure Malware Analytics Cloudに問い合わせでネットワークを通過するファイルにマルウェアが含まれているかどうかを判断し、脅威を示しているファイルをブロックします。
- [クラウドをすべてルックアップ (Cloud Lookup All)] : Secure Malware Analytics Cloudに問い合わせでネットワークを通過するファイルの傾向を取得して記録したうえでその伝送を許可します。
- (カスタムファイルポリシー) : 脅威に対する防御 API filepolicies リソース、およびその他の FileAndMalwarePolicies リソース (filetypes、filetypecategories、ampcloudconfig、ampservers、ampcloudconnections など) を使用して、独自のファイルポリシーを作成できます。ポリシーを作成して変更を展開した後、Device Manager でアクセス制御ルールを編集するときにポリシーを選択できます。ポリシーを選択すると、ポリシーの下にポリシーの説明が表示されます。

ロギングの設定

アクセスルールのロギング設定によって、ルールに一致するトラフィックに対する接続イベントを発行するかどうかを決定します。イベントビューアでルールに関連するイベントを表示するには、ロギングを有効化する必要があります。一致するトラフィックが、システムのモニタに使用する各種のダッシュボードに反映されるためにも、ロギングを有効化する必要があります。

組織のセキュリティおよびコンプライアンスの要件に従って接続をログギングしてください。生成されるイベントの数を抑えてパフォーマンスを向上させることを目標にする場合は、分析のために重要な意味を持つ接続のログギングだけを有効化してください。一方、プロファイリングの目的でネットワークトラフィックの広範な表示が必要な場合は、その他の接続のログギングを有効化します。



注意 サービス妨害（DoS）攻撃中にブロックされたTCP接続のログギングは、複数の同様のイベントでシステムのパフォーマンスに影響を与え、データベースのパフォーマンス低下させる可能性があります。ブロックルールのログギングを有効化する前に、そのルールの対象がインターネットに接続されているインターフェイスか、それとも DoS 攻撃に脆弱な他のインターフェイスかを考慮します。

次のログギングアクションを設定できます。

[ログアクションの選択 (Select Log Action)]

次のいずれかのアクションを選択できます。

- [接続の始まりと終わりにログ (Log at Beginning and End of Connection)] : 接続の始まりと終わりにイベントを発行します。「接続の終わり」イベントには、「接続の始まり」イベントに含まれるものすべてに加えて接続中に収集された情報のすべてが含まれるため、許可するトラフィックにこのオプションを選択するのはお勧めしません。両方のイベントをログギングすると、システムのパフォーマンスに影響を及ぼす可能性があります。一方、ブロックされるトラフィックにはこのオプションのみ許可されています。
- [接続の終わりにログ (Log at End of Connection)] : 接続の終わりに接続のログギングを有効化する場合はこのオプションを選択します。許可された、または信頼できるトラフィックには、このオプションを推奨します。
- [接続時にログしない (No Logging at Connection)] : ルールのログギングを無効化するにはこのオプションを選択します。これはデフォルトです。



(注) アクセス制御ルールに呼び出された侵入ポリシーが侵入を検出して侵入イベントを生成すると、システムは（ルールにおけるログギング設定とは無関係に）侵入が発生した接続の終了を自動的にログギングします。接続で侵入がブロックされると、接続ログ内の接続アクションは [ブロック (Block)]、理由は [侵入のブロック (Intrusion Block)] になります。侵入検査を実行するには許可 (Allow) ルールを使用する必要があります。

ファイル イベント (File Events)

禁止されたファイルまたはマルウェアのイベントのログギングを有効化する場合、[ファイルのログ (Log Files)] を選択します。このオプションを設定するには、ルールでファイル ポリシーを選択する必要があります。ルールでファイル ポリシーを選択する場合、

このオプションはデフォルトで有効になっています。このオプションを有効のままにしておくことを推奨します。

禁止されたファイルをシステムが検出した場合、次のうち1種類のイベントがログに記録されます。

- ファイル イベント：検出またはブロックされたファイル（マルウェア ファイルを含む）を表します。
- マルウェア イベント：検出またはブロックされたマルウェア ファイルのみを表します。
- レトロスペクティブ マルウェア イベント：以前に検出されたファイルでのマルウェア処理が変化した場合に生成されます。

接続でファイルがブロックされると、接続ログ内で関連付けられるアクションは[ブロック (Block)]になります。ファイル検査とマルウェア検査を実行するには許可 (Allow) ルールを使用する必要があります。接続の理由は、[ファイルモニタ (File Monitor)] (ファイル タイプまたはマルウェアが検出された)、あるいは[マルウェア ブロック (Malware Block)]または[ファイル ブロック (File Block)] (ファイルがブロックされた) です。

[接続イベントの送信先： (Send Connection Events To)]

外部の syslog サーバにイベントのコピーを送信するには、syslog サーバを定義するサーバ オブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しい Syslog サーバの作成 (Create New Syslog Server)] をクリックして作成します (syslog サーバへのロギングを無効化するには、サーバのリストから [任意 (Any)] を選択します)。

デバイスのイベントストレージは限られているため、外部の syslog サーバにイベントを送信することにより、長期間ストレージが利用できるようになり、イベントの分析を向上できます。

この設定は、接続イベントのみに適用されます。侵入イベントを syslog に送信するには、侵入ポリシーの設定でサーバを設定します。Syslog にファイル/マルウェア イベントを送信するには、[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [ロギング設定 (Logging Settings)] でサーバを設定します。

アクセス制御ポリシーのモニタリング

以下のトピックでは、アクセス制御ポリシーのモニタ方法について説明します。

ダッシュボードでのアクセス制御統計情報のモニタリング

[モニタリング (Monitoring)] ダッシュボードにあるほとんどのデータアクセス制御ポリシーに直接関係します。「[トラフィックおよびシステムダッシュボードのモニタリング \(127 ページ\)](#)」を参照してください。

- [モニタリング] > [アクセスおよびSIルール] には、最もヒットしたアクセスルールとセキュリティインテリジェンスに相当するルールおよび関連する統計情報が表示されます。

- 一般的な統計情報は、[ネットワーク概要 (Network Overview)]、[送信先 (Destinations)] および [ゾーン (Zones)] ダッシュボードで確認できます。
- URL フィルタリングの結果は [Webカテゴリ (Web Categories)]、[URLカテゴリ (URL Categories)] および [送信先 (Destinations)] ダッシュボードで確認できます。[Webカテゴリ (Web Categories)]、[URLカテゴリ (URL Categories)] ダッシュボードに情報を表示するには、少なくとも 1 つの URL フィルタリング ポリシーが必要です。
- アプリケーション フィルタリングの結果は、[アプリケーション (Applications)] および [Webアプリケーション (Web Applications)] ダッシュボードで確認できます。
- ユーザーベース統計情報は [ユーザ (Users)] ダッシュボードで確認できます。ユーザ情報を収集するには、アイデンティティ ポリシーを実装する必要があります。
- 侵入ポリシー統計情報は [攻撃者 (Attackers)] および [ターゲット (Targets)] ダッシュボードで確認できます。これらのダッシュボードに情報を表示するには、侵入ポリシー 1 つ以上のアクセス制御ルールに適用する必要があります。
- ファイル ポリシーおよびマルウェア フィルタリング統計情報は、[ファイルログ (File Logs)] および [マルウェア (Malware)] ダッシュボードで確認できます。このダッシュボードに情報を表示するには、ファイルポリシーを 1 つ以上のアクセス制御ルールに適用する必要があります。
- [モニタリング (Monitoring)] > [イベント (Events)] にはアクセス制御ルールに関連する接続とデータのイベントも表示されます。

ルール ヒット カウントの調査

各アクセス制御ルールのヒットカウントを表示することができます。ヒットカウントは、接続がルールに一致する頻度を示します。この情報を使用して、最もアクティブなルールとアクティブの度合いが低いルールを特定できます。

このカウントは、再起動やアップグレードの後も維持されます。

また、デバイス CLI で **show rule hits** コマンドを使用してルールヒットカウント情報を表示することもできます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [アクセスコントロール (Access Control)] を選択します。

ステップ 2 [ヒットカウントの切り替え (Toggle Hit Counts)] アイコン (🔍) をクリックします。

[ヒットカウント (Hit Count)] 列は [名前 (Name)] 列の右側にあり、ルールの合計ヒット数と最新のヒットの日付と時刻が表示されます。ヒットカウント情報は、切り替えボタンをクリックしたときに取得されます。

ヒットカウントの情報を使用して、次を行うことができます。

- ボタンの左側には、ヒットカウントが最後に更新されたときの情報が表示されます。最新の数字を取得するには、更新アイコン (🔄) をクリックします。
- 特定のルールヒットのヒットカウンルの詳細表示を開くには、テーブルのヒット カウント番号をクリックして [ヒットカウント (Hit Count)] ダイアログ ボックスを開きます。ヒット カウント情報には、ヒットの回数と、ルールに一致した最後の接続の日付と時刻が含まれます。カウンタをゼロにリセットするには、[リセット (Reset)] をクリックします。
一度にすべてのルールのヒットカウントをリセットする場合は、デバイスへの SSH セッションを開き、**clear rule hits** コマンドを発行します。
- 再度 [ヒットカウンルの切り替え (Toggle Hit Counts)] アイコン (🔍) をクリックし、テーブルから [ヒットカウント (Hit Count)] 列を削除します。

アクセス制御に関する Syslog メッセージのモニタリング

イベントはイベント ビューアで確認するだけでなく、アクセス制御ルール、侵入ポリシー、ファイル/マルウェア ポリシー、およびセキュリティ インテリジェンス ポリシーを設定してイベントを syslog サーバに送信することができます。イベントでは、次のメッセージ ID が使用されます。

- 430001: 侵入イベント。
- 430002: 接続の開始時にログに記録される接続イベント。
- 430003: 接続の終了時にログに記録される接続イベント。
- 430004: ファイルイベント。
- 430005: マルウェア イベント。

CLI でのアクセス制御ポリシーのモニタリング

CLI コンソールを開くか、またはデバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用し、アクセス制御ポリシーと統計情報に関する詳細情報を取得することもできます。

- **show access-control-config** はアクセス制御ルールに関する概要情報とルールごとのヒット数を表示します。
- **show access-list** はアクセス制御ルールから生成されたアクセス制御リスト (ACL) を表示します。ACL は初期フィルタを提供し、できる限り迅速な決定を実現しようとするため、ドロップされる接続を調査する (および、そのために不必要にリソースを消費する) 必要はありませんこの情報には、ヒット数が含まれます。
- **show rule hits** は、**show access-control-config** および **show access-list** で表示されるカウントよりも正確な、統合されたヒットカウントを表示します。ヒットカウントをリセットするには、**clear rule hits** コマンドを使用します。

- **show snort statistics** は主要なインスペクタである Snort インスペクションエンジンに関する情報を表示します。Snort は、アプリケーション フィルタリング、URL フィルタリング、侵入からの保護、ファイルおよびマルウェア フィルタリングを実装します。
- **show conn** は現在インターフェイスを通じて確立されている接続に関する情報を表示します。
- **show traffic** は各インターフェイスを介したトラフィックフローに関する統計情報を表示します。
- **show ipv6 traffic** はデバイスを介した IPv6 トラフィックフローに関する統計情報を表示します。

アクセス制御の例

使用例の章には、アクセス制御ルールのいくつかの実装例が含まれています。次の例を参照してください。

- [ネットワーク トラフィックを調べる方法 \(57 ページ\)](#) を確認してください。この例では、全体的な接続およびユーザ情報を収集するための基本的な考え方が示されています。
- [脅威のブロック方法 \(65 ページ\)](#) を確認してください。この例では、侵入ポリシーを適用する方法が示されています。
- [マルウェアのブロック方法 \(71 ページ\)](#) を確認してください。この例では、ファイル ポリシーを適用する方法が示されています。
- [アクセプタブルユース ポリシー \(URL フィルタリング\) の実装方法 \(75 ページ\)](#) を確認してください。この例では、URL フィルタリングを実行する方法が示されています。
- [アプリケーションの使用を制御する方法 \(81 ページ\)](#) を確認してください。この例では、アプリケーション フィルタリングを実行する方法が示されています。
- [サブネットの追加方法 \(85 ページ\)](#) を確認してください。この例では、トラフィック フローを許可するために必要なアクセスルールを含め、新しいサブネットをネットワーク全体に統合する方法が示されています。
- [ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法 \(92 ページ\)](#)

次に、その他の例を示します。

TrustSec セキュリティ グループ タグを使用したネットワーク アクセスの制御方法

Cisco TrustSec ネットワークでトラフィックを分類するために Cisco Identity Services Engine (ISE) を使用してセキュリティ グループ タグ (SGT) を定義して使用する場合は、一致基準として SGT を使用するアクセス制御ルールを作成できます。これにより、IP アドレスではなく、セ

セキュリティ グループ メンバーシップに基づいてアクセスをブロックまたは許可することができます。

セキュリティ グループ タグ (SGT) について

Cisco Identity Services Engine (ISE) では、セキュリティグループタグ (SGT) を作成し、各タグにホストまたはネットワークの IP アドレスを割り当てることができます。また、ユーザアカウントに SGT を割り当て、SGT がユーザのトラフィックに割り当てられるようにすることもできます。ネットワーク内のスイッチとルータがそのように設定されている場合、これらのタグは、ISE、Cisco TrustSec クラウドによって制御されるネットワークに入るときに、パケットに割り当てられます。

Device Manager で ISE アイデンティティソースを設定すると、脅威に対する防御 システムは自動的に ISE から SGT のリストをダウンロードします。その後、アクセス制御ルールでトラフィックの一致条件として SGT を使用できます。

たとえば、[実稼働ユーザ (Production Users)] タグを作成し、192.168.7.0/24 ネットワークをタグに関連付けることができます。これは、ラップトップ、Wi-Fi クライアントなどのユーザエンドポイントにそのネットワークを使用する場合に適しています。実稼働サーバ用に別のタグを作成し、関連するサーバまたはサブネットの IP アドレスをそのタグに割り当てることができます。次に、脅威に対する防御 では、タグに基づいてユーザーネットワークから実稼働サーバへのアクセスを許可またはブロックすることができます。ISE でタグに関連付けられているホストまたはネットワーク アドレスを後で変更する場合、脅威に対する防御 デバイ스에定義されているアクセス制御ルールを変更する必要はありません。

脅威に対する防御 は、アクセス制御ルールのトラフィック一致基準として SGT を評価するときに、次の優先順位を使用します。

1. パケット内で定義されている送信元 SGT タグ (存在する場合)。SGT タグがパケットに含まれるようにするには、ネットワーク内のスイッチおよびルータがそれらを追加するように設定されている必要があります。このメソッドの実装方法については、ISE のマニュアルを参照してください。
2. ISE セッションディレクトリからダウンロードされる、ユーザセッションに割り当てられた SGT。この種の SGT 照合では、セッションディレクトリ情報をリスンするオプションを有効にする必要がありますが、このオプションは最初に ISE アイデンティティソースを作成するときにデフォルトでオンになっています。SGT は、送信元または宛先に一致させることができます。必須ではありませんが、通常は ISE アイデンティティソースを AD レルムとともに使用してパッシブ認証アイデンティティルールを設定し、ユーザ ID 情報を収集します。
3. SXP を使用してダウンロードされた SGT-to-IP アドレス マッピング。IP アドレスが SGT の範囲内にある場合、トラフィックは SGT を使用するアクセス制御ルールと一致します。SGT は、送信元または宛先に一致させることができます。

ISE は、セキュリティグループ交換プロトコル (SXP) を使用して、SGT マッピングデータベースをネットワークデバイスに伝播します。ISE サーバを使用するように 脅威に対する防御 デバイスを設定する場合は、ISE から SXP トピックをリスンするオプションをオンにする必要があります。そのため、脅威に対する防御 デバイスは、ISE からセキュリ

ティグループタグとマッピングについて直接学習し、ISEが更新されたセキュリティグループタグとマッピングを公開するたびに通知を受け取ります。これにより、デバイス上でセキュリティグループタグのリストが最新の状態に維持されるため、脅威に対する防御は、ISE で定義されたポリシーを効果的に適用できるようになります。

セキュリティ グループ タグ (SGT) に基づくアクセス制御の設定

セキュリティ グループ タグ (SGT) を一致基準として使用するアクセス コントロール ルールを設定するには、最初に ISE サーバから SGT マッピングを取得するようにデバイスを設定する必要があります。

次の手順では、SXP で公開されている SGT から IP アドレスへのマッピングを含め、ISE で定義されているすべてのマッピングを取得するという前提に基づいたエンドツーエンドのプロセスについて説明します。または、下記の手順も実行できます。

- パケット内の SGT 情報のみを使用し、ISE からダウンロードされたマッピングを使用しない場合は、単に SGT グループ ダイナミック オブジェクトを作成し、それらをアクセス制御ルールを送信元 SGT 条件として使用します。この場合、送信元条件としてのみ SGT タグを使用できます。これらのタグは宛先の基準には決して一致しません。
- パケットとユーザセッション SGT のマッピングのみで SGT を使用する場合は、ISE アイデンティティソースの SXP トピックを登録するオプションを有効にする必要はなく、SXP マッピングを公開するように ISE を設定する必要もありません。この情報は送信元と宛先の両方の一致条件に使用できます。

始める前に

ここでは、ネットワークに Cisco TrustSec がすでに設定されていて、ポリシー適用ポイントとして脅威に対する防御 デバイスを追加するだけであることを前提としています。Cisco TrustSec を展開していない場合は、ISE から開始し、ネットワークを設定してから、この手順に戻ります。Cisco TrustSec の説明は、このドキュメントの範囲外です。

手順

ステップ 1 SGT が定義されていること、ISE が SXP トピックをパブリッシュするように正しく設定されていること、および必要な静的マッピングが設定されていることを確認します。

[ISE でのセキュリティグループと SXP パブリッシングの設定 \(654 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 2 SXP トピックをリッスンするように Identity Services Engine オブジェクトを更新します。

ISE を使用して、ユーザセッション SGT マッピング、SXP を介したスタティック SGT から IP アドレスへのマッピング、またはその両方を取得できます。デフォルトでは、ISE アイデンティティ ソースを設定すると、ユーザセッション マッピングのみが取得されます。ISE から SXP トピックをリッスンするには、オプションを有効にする必要があります。

- a) [オブジェクト (Objects)] > [アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。
- b) ISE オブジェクトを編集します。まだ設定していない場合は、[+] > [Identity Services Engine] をクリックし、[Identity Services Engine の設定 \(225 ページ\)](#) を参照してください。
- c) [サブスクリプション対象 (Subscribe To)] で、[SXP トピック (SXP Topic)] を選択します。

パッシブ認証を使用している場合またはユーザと SGT のマッピングが必要な場合は、[セッションディレクトリのトピック (Session Directory Topic)] が選択されていることも確認してください。

Subscribe to



Session Directory Topic



SXP Topic

- d) [OK] をクリックします。

ステップ 3 変更を展開し、システムが ISE からタグとマッピングをダウンロードするのを待ちます。

ISE アイデンティティ ソースを設定して変更を展開すると、ISE サーバからセキュリティ グループ タグ (SGT) 情報が取得されます。ダウンロードは、変更を展開するまで行われません。

ステップ 4 アクセス制御ルールに必要な SGT グループオブジェクトを作成します。

ISE から取得した情報をアクセス制御ルールで直接使用することはできません。代わりに、ダウンロードした SGT 情報を参照する SGT グループを作成する必要があります。SGT グループは複数の SGT を参照できます。そのため、必要に応じて、関連するタグのコレクションに基づいてポリシーを適用できます。

オブジェクトの数と内容は、作成するアクセス制御ルールによって異なります。次のプロセスを繰り返して、必要なすべてのオブジェクトを作成してください。

- a) [オブジェクト (Objects)] > [SGT グループ (SGT Groups)] を選択します。
- b) [+] をクリックして新しいオブジェクトを追加するか、既存のオブジェクトを編集します。
- c) 新しいオブジェクトの場合、名前を入力し、任意で説明を入力します。
- d) [タグ (Tags)] で、[+] をクリックし、グループに含める必要があるすべてのタグを選択します。

Name

prod-users

Description

Tags



Production_Users (Tag 7)

- e) [OK] をクリックします。

ステップ 5 SGT グループオブジェクトを使用するアクセス制御ルールを作成します。

たとえば、以下のルールにより、実稼働ユーザから実稼働サーバへのトラフィックが許可されます。ルールはSGTに完全に依存します。送信元/宛先インターフェイスやその他の基準によって制限を受けることはありません。そのため、ルールはさまざまなインターフェイスからのトラフィックに動的に適用され、ISEでセキュリティグループのメンバーシップを変更するときには適用されます。パケットに送信元 SGT が明示的に含まれていない場合は、パケットの IP アドレスを、ユーザセッション情報または SXP 公開マッピングから取得される、SGT から IP アドレスへのマッピングと比較することによって、送信元/宛先の照合が行われます。

- a) [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] を選択します。
- b) [+] をクリックして新しいルールを作成するか、既存のルールを編集します。
- c) ルール名を入力し、アクションとして [許可 (Allow)] を選択します。
- d) [送信元/宛先 (Source/Destination)] タブで、[送信元 (Source)] > [SGTグループ (SGT Groups)] の [+] をクリックし、実稼働ユーザ用に作成したオブジェクトを選択します。
- e) [送信元/宛先 (Source/Destination)] タブで、[宛先 (Destination)] > [SGTグループ (SGT Groups)] の [+] をクリックし、実稼働サーバ用に作成したオブジェクトを選択します。
- f) 必要に応じて他のオプションを設定します。たとえば、ロギングを有効にして、侵入ポリシーを適用することができます。
- g) [OK] をクリックします。

ステップ 6 設定を展開します。**ISE でのセキュリティグループと SXP パブリッシングの設定**

Cisco Identity Services Engine (ISE) では、TrustSec ポリシーとセキュリティ グループ タグ (SGT) を作成するために実行を必要とする設定が多数あります。TrustSecの実装の詳細については、ISEのマニュアルを参照してください。

次の手順では、脅威に対する防御 デバイスがスタティック SGT から IP アドレスへのマッピングをダウンロードして適用できるようにするためにISEで設定する必要があるコア設定のハイライトを示します。これは、アクセス制御ルールでの送信元と宛先 SGT の照合に使用できます。詳細については、ISEのマニュアルを参照してください。

この手順のスクリーンショットは、ISE 2.4に基づいています。これらの機能にアクセスするための正確な手順は後続のリリースで変更される可能性があります。概念と要件は同じです。ISE 2.4 以降、特に 2.6 以降が推奨されますが、ISE 2.2 パッチ 1 以降でもこの設定は動作します。

始める前に

SGT から IP アドレスへのスタティックマッピングを公開し、ユーザセッションからと SGT へのマッピングを取得して 脅威に対する防御 デバイスがそれらを受信できるようにするには、ISE Plus ライセンスが必要です。

手順

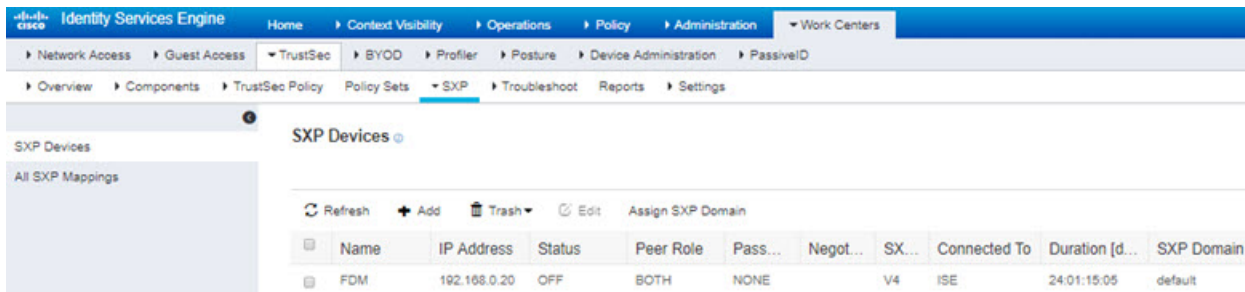
ステップ 1 [ワークセンター (Work Centers)] > [TrustSec] > [設定 (Settings)] > [SXP 設定 (SXP Settings)] を選択し、[PxGrid で SXP バインディングを公開 (Publish SXP Bindings on PxGrid)] オプションを選択します。

このオプションにより、ISEはSXPを使用してSGTマッピングを送信します。リストからSXPトピックまでを"確認する"には、Threat Defense デバイスに対してこのオプションを選択する必要があります。このオプションは、Threat Defense デバイスが静的 SGT-to-IP アドレスマッピング情報を取得するために選択する必要があります。単に、パケット内で定義された SGT タグ、またはユーザセッションに割り当てられた SGT を使用するのみの場合は、このステップは必要ありません。

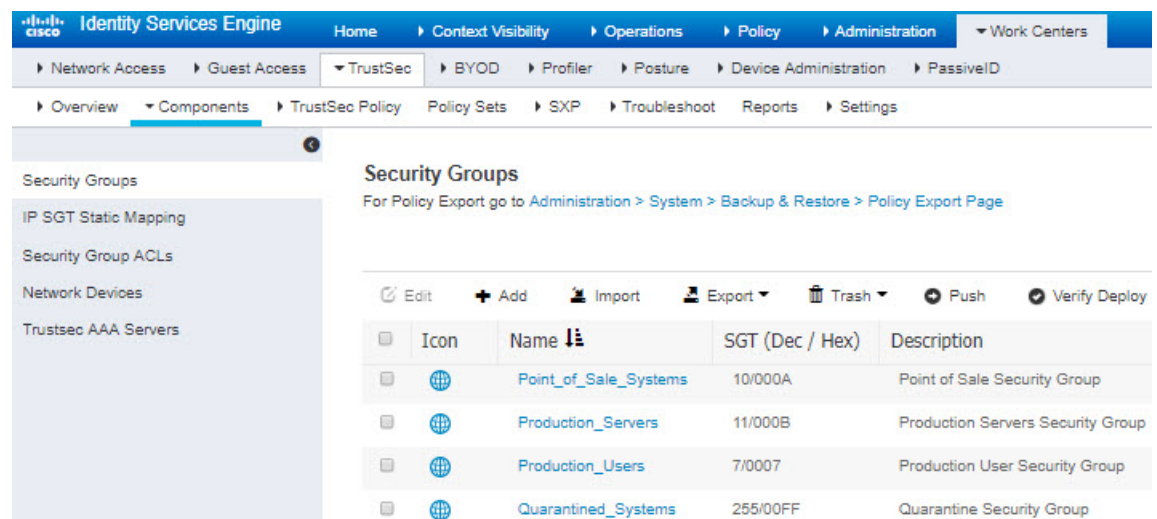
The screenshot shows the Cisco Identity Services Engine (ISE) configuration interface. The breadcrumb trail is: Home > Context Visibility > Operations > Policy > Administration > Work Centers > TrustSec > SXP > Settings. The left sidebar shows the navigation menu with 'SXP Settings' selected. The main content area is titled 'SXP Settings'. A checkbox labeled 'Publish SXP bindings on PxGrid' is checked and highlighted with a red rectangle. To its right is a link 'Add radius mappings into SXP IP SGT mapping table'. Below this is the 'Global Password' section with a password field and a note: 'This global password will be overridden by the device specific password'. The 'Timers' section contains five settings, each with a text input field and a unit description: 'Minimum Acceptable Hold Time' (120, Seconds (1-65534, 0 to disable)), 'Reconciliation Timer' (120, Seconds (0-64000)), 'Minimum Hold Time' (90, Seconds (3-65534, 0 to disable)), 'Maximum Hold Time' (180, Seconds (4-65534)), and 'Retry Open Timer' (120, Seconds (0-64000)). At the bottom right are 'Set Default' and 'Save' buttons.

ステップ 2 [ワークセンター (Work Centers)] > [TrustSec] > [SXP] > [SXPデバイス (SXP Devices)] を選択し、デバイスを追加します。

これは実際のデバイスである必要はありませんが、脅威に対する防御 デバイスの管理 IP アドレスを使用することもできます。このテーブルには、ISEが静的SGT-to-IPアドレスマッピングをパブリッシュするためのデバイスが1つ以上必要です。単に、パケット内で定義された SGT タグ、またはユーザセッションに割り当てられた SGT を使用するのみの場合は、このステップは必要ありません。



ステップ 3 [ワークセンター（Work Centers）]>[TrustSec]>[コンポーネント（Components）]>[セキュリティグループ（Security Groups）]の順に選択し、セキュリティグループタグが定義されていることを確認します。必要に応じて新しいタグを作成します。



ステップ 4 [ワークセンター（Work Centers）]>[TrustSec]>[コンポーネント（Components）]>[IP SGT スタティックマッピング（IP SGT Static Mapping）]を選択し、ホストとネットワーク IP アドレスをセキュリティグループタグにマッピングします。

単に、パケット内で定義された SGT タグ、またはユーザセッションに割り当てられた SGT を使用するのみの場合は、このステップは必要ありません。

Identity Services Engine

Home > Context Visibility > Operations > Policy > Administration > Work Centers

Network Access > Guest Access > TrustSec > BYOD > Profiler > Posture > Device Administration > PassiveID

Overview > Components > TrustSec Policy > Policy Sets > SXP > Troubleshoot > Reports > Settings

Security Groups

IP SGT Static Mapping

Security Group ACLs

Network Devices

Trustsec AAA Servers

IP SGT static mapping

0 Selected

Refresh Add Trash Edit Move to mapping group Manage groups Import

IP address/Host	SGT	Mapping group	Deploy via	Deploy to
192.168.1.0/24	AppServer (16/0010)		default	[No Devices]
192.168.1.101	AppServer (16/0010)		default	[No Devices]
192.168.2.102	DataCenter (17/0011)		default	[No Devices]
192.168.7.0/24	Production_Users (7/0007)		default	[No Devices]
192.168.8.0/24	Production_Servers (11/000B)		default	[No Devices]



第 23 章

侵入ポリシー

次のトピックでは、侵入ポリシーと密接に関連付けられているネットワーク分析ポリシー（NAP）について説明します。侵入ポリシーには、脅威についてトラフィックをチェックし、攻撃が判明したトラフィックをブロックするルールが含まれます。ネットワーク分析ポリシーは、トラフィックを正規化してプロトコルの異常を識別することによってさらに検査するためにトラフィックの準備を行う、トラフィックの前処理を制御します。

前処理と侵入検査を非常に密接に関連しているため、1つのパケットを調べるネットワーク分析と侵入ポリシーはお互いを補完する必要があります。

- [侵入ポリシーとネットワーク分析ポリシーについて（659 ページ）](#)
- [侵入ポリシーのためのライセンス要件（666 ページ）](#)
- [アクセス制御ルールでの侵入ポリシーの適用（666 ページ）](#)
- [侵入イベントの Syslog の設定（667 ページ）](#)
- [ネットワーク分析ポリシーの設定（Snort 3）（667 ページ）](#)
- [侵入ポリシーの管理（Snort 3）（673 ページ）](#)
- [侵入ポリシーのモニタリング（688 ページ）](#)
- [侵入ポリシーの例（689 ページ）](#)

侵入ポリシーとネットワーク分析ポリシーについて

ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリシーは、共同で侵入の脅威を検出し、防ぎます。

- ネットワーク分析ポリシー（NAP）では、トラフィックの復号および前処理の方法について、特に侵入の試行を示す可能性がある異常なトラフィックをさらに評価できるよう、制御します。
- 侵入ポリシーでは、侵入ルールと呼ばれる侵入やプリプロセッサのルールを使用し、パターンに基づいて攻撃がないかデコードされたパケットを調べます。ルールでは、脅威となるトラフィックを防いで（ドロップして）イベントを生成したり、単に検出（警告）してイベントの生成のみを行うことができます。

システムがトラフィックを分析するとき、ネットワーク分析の復号および前処理のフェーズは、侵入防御のフェーズより前に、個別に発生します。ネットワーク分析ポリシーと侵入ポリ

シーは、共同で広範かつ深いパケット検査を提供します。これらによって、ホストとそのデータの可用性、整合性、および機密性を脅かす可能性があるネットワークトラフィックを検出、警告し、保護することができます。

システム定義のネットワーク分析および侵入ポリシー

システムには、相互に補完して動作する、同じ名前のネットワーク分析と侵入ポリシーのいくつかのペアが含まれています。たとえば [バランスのとれたセキュリティと接続性 (Balanced Security and Connectivity)] という名前の NAP と侵入ポリシーの両方があり、一緒に使用されることを意図しています。システム提供のポリシーは、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によって設定されます。これらのポリシーに対して Talos は侵入とプリプロセッサルールの状態を設定し、プリプロセッサの最初の設定とその他の高度な設定を行います。

新たな脆弱性が既知になると、Talos は侵入ルールの更新をリリースします。これらのルールの更新により、システム提供のネットワーク分析や侵入のポリシーを変更でき、新規および更新された侵入ルールとプリプロセッサルール、既存のルールの変更された状態、変更されたデフォルトのポリシー設定を提供できます。ルールの更新はまた、システム提供のポリシーからルールを削除、新しいルールのカテゴリを提供、デフォルトの変数セットを変更することができます。

手動で、ルールデータベースを更新したり、定期的な更新スケジュールを設定できます。有効にするには更新を展開する必要があります。システムデータベースの更新についての詳細は、[システム データベースの更新 \(987 ページ\)](#) を参照してください。

次にシステム提供のポリシーについて示します。

[バランスのとれたセキュリティと接続 (Balanced Security and Connectivity)] ネットワーク分析と侵入ポリシー

これらのポリシーは、速度と検出の両方のために作成されています。これらを一緒に使用すると、ほとんどの種類のネットワークおよび展開に適した出発点として機能します。[バランスのとれたセキュリティと接続 (Balanced Security and Connectivity)] ネットワーク分析ポリシーがデフォルトとして使用されます。

[セキュリティよりも接続性を優先 (Connectivity Over Security)] ネットワーク分析と侵入ポリシー

これらのポリシーは、接続性、すべてのリソースを取得する機能が、ネットワークインフラストラクチャのセキュリティよりも優先されるネットワーク向けに作られています。この侵入ポリシーは、[接続性よりもセキュリティを優先 (Security over Connectivity)] ポリシー内で有効になっているルールよりもはるかに少ないルールを有効にします。トラフィックをブロックする最も重要なルールのみが有効にされます。

[接続性よりもセキュリティを優先 (Security Over Connectivity)] ネットワーク分析と侵入ポリシー

これらのポリシーは、ネットワークインフラストラクチャのセキュリティがユーザの利便性よりも優先されるネットワーク向けに作られています。侵入ポリシーは、正当なトラフィックでも警告やドロップすることがあるネットワーク異常侵入ルールを有効にします。

[最大検出 (Maximum Detection)] ネットワーク分析と侵入ポリシー

これらのポリシーは、ネットワーク インフラストラクチャのセキュリティが、運用に対する影響が大きい、[接続性よりもセキュリティを優先 (Security Over Connectivity)] ポリシーで考慮されるセキュリティよりもさらに重視されるネットワーク向けに作られています。たとえば、侵入ポリシーは、マルウェア、エクスプロイトキット、従来の一般的な脆弱性、および既知の in-the-wild エクスプロイトを含むさまざまな脅威カテゴリでルールを有効化します。

検査モード：防御と検出

デフォルトでは、侵入防御システム (IPS) を実装するため、すべての侵入ポリシーが防御モードで動作します。防御インスペクションモードでは、トラフィックを切断するアクションの侵入ルールと接続が一致する場合、接続は能動的にブロックされます。

代わりに、ネットワーク上で侵入ポリシーの影響をテストするには、侵入検知システム (IDS) を実装する「検出」にモードを変更します。このインスペクションモードでは、ドロップルールはアラートルールと同様に扱われます。この場合、一致する接続が通知されますが、アクションの結果がブロックされ、実際に接続がブロックされることはありません。

侵入ポリシーごとにインスペクションモードを変更するため、防御と検出を混在させることができます。

Snort3 ネットワーク分析ポリシー (NAP) にもインスペクションモードがあります。侵入ポリシーとは異なり、NAP ポリシーはグローバルであるため、すべての NAP 処理を防御モードまたは検出モードで実行する必要があります。侵入ポリシーに使用するのと同じモードを使用する必要があります。防御ポリシーと検出ポリシーが混在している場合は、最も制限の厳しい侵入ポリシーに一致するように [防御 (Prevention)] を選択します。

侵入とプリプロセッサのルール

侵入ルールとは、ネットワーク内の脆弱性を不正利用する試みを検出するためにシステムが使用する、指定されたキーワードと引数のセットのことです。システムは、ネットワーク トラフィックを分析し、各ルールで指定された基準でパケットを比較し、データパケットがルールで指定されたすべての基準を満たしている場合、ルールがトリガーされます。

システムには、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によって作成された次のタイプのルールが含まれています。

- 侵入ルール。共有オブジェクトルールおよび標準のテキストルールに細分される
- プリプロセッサルール。プリプロセッサと、ネットワーク分析ポリシーのパケットデコーダ検出オプションが関連付けられたルール。デフォルトではほとんどのプリプロセッサルールは無効です。

ここでは、侵入ルールについてより詳細に説明します。

侵入ルール属性

侵入ポリシーを表示すると、脅威を特定するために利用できるすべての侵入ルールのリストが表示されます。

各ポリシーのルールのリストは同じです。異なる点は、各ルールに設定されたアクションです。30,000を超えるルールがあるため、リスト全体をスクロールするには時間がかかります。ルールは、リストをスクロールしていくと順に表示されます。

次に、各ルールを定義する属性を示します。

> (シグニチャの説明)

左の列の[>]ボタンをクリックして、署名の説明を開きます。説明は、トラフィックとルールを照合するために、Snort インспекションエンジンによって使用されます。コードの説明はこのドキュメントの範囲外ですが、『Management Center Configuration Guide』で詳しく説明しています。<http://www.cisco.com/c/en/us/support/security/defense-center/products-installation-and-configuration-guides-list.html> からご使用のソフトウェアのバージョン用のブックを選択してください。侵入ルールの編集についての情報を探します。

署名には、特定の項目の変数が含まれています。詳細については、[デフォルトの侵入変数セット \(663 ページ\)](#) を参照してください。

GID

ジェネレータ識別子 (ID)。この数は、ルールを評価し、イベントを生成する、システムコンポーネントを示します。1は標準テキスト侵入ルール、3は共有オブジェクト侵入ルールを示します（これらのルールタイプの違いは Device Manager ユーザーにとって意味はありません）。これらは、侵入ポリシーを設定するときに対象となる主なルールです。その他のGIDの詳細については、[ジェネレータ識別子 \(664 ページ\)](#) を参照してください。

SID

Snort 識別子 (ID)。署名 ID と呼ばれます。1000000 より小さい Snort ID が Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によって作成されました。

アクション

選択した侵入ポリシーでのこのルールの状態。各ルールに対し、このポリシー内のルールのデフォルトアクションに「(デフォルト)」が追加されます。ルールをデフォルトの設定に戻すには、このアクションを選択します。設定できるアクションは次のとおりです。

- **アラート**：このルールがトラフィックと一致するとイベントを作成しますが、接続はドロップしません。
- **ドロップ**：このルールがトラフィックと一致するとイベントを作成し、接続をドロップします。
- **無効**：このルールではトラフィックは一致しません。イベントは生成されません。

メッセージ

これはルールの名前で、ルールによってトリガーされたイベントにも表示されます。メッセージは通常、署名が一致した脅威を識別します。それぞれの脅威の詳細についてインターネットで検索することができます。

デフォルトの侵入変数セット

侵入ルールの署名には、特定の項目の変数が含まれます。変数のデフォルト値を次に示します。`$HOME_NET` と `$EXTERNAL_NET` が最もよく使用される変数です。プロトコルはポート番号とは別々に指定されるため、ポート変数は数字のみです。

- `$DNS_SERVERS = $HOME_NET` (任意の IP アドレスを示します)。
- `$EXTERNAL_NET = 任意の IP アドレス`。
- `$FILE_DATA_PORTS = $HTTP_PORTS, 143, 110`。
- `$FTP_PORTS = 21, 2100, 3535`。
- `$GTP_PORTS = 3386, 2123, 2152`。
- `$HOME_NET = 任意の IP アドレス`。
- `$HTTP_PORTS = 次の番号の 144 個のポート : 36, 80 ~ 90, 311, 383, 443, 555, 591, 593, 631, 666, 801, 808, 818, 901, 972, 1158, 1212, 1220, 1414, 1422, 1533, 1741, 1830, 1942, 2231, 2301, 2381, 2578, 2809, 2980, 3029, 3037, 3057, 3128, 3443, 3507, 3702, 4000, 4343, 4848, 5000, 5117, 5222, 5250, 5450, 5600, 5814, 6080, 6173, 6767, 6988, 7000, 7001, 7005, 7071, 7080, 7144, 7145, 7510, 7770, 7777 ~ 7779, 8000, 8001, 8008, 8014, 8015, 8020, 8028, 8040, 8060, 8080 ~ 8082, 8085, 8088, 8118, 8123, 8161, 8180 ~ 8182, 8222, 8243, 8280, 8300, 8333, 8344, 8400, 8443, 8500, 8509, 8787, 8800, 8888, 8899, 8983, 9000, 9002, 9060, 9080, 9090, 9091, 9111, 9290, 9443, 9447, 9710, 9788, 9999, 10000, 11371, 12601, 13014, 15489, 19980, 23472, 29991, 33300, 34412, 34443, 34444, 40007, 41080, 44449, 50000, 50002, 51423, 53331, 55252, 55555, 56712`。
- `$HTTP_SERVERS = $HOME_NET` (任意の IP アドレスを示します)。
- `$ORACLE_PORTS = 任意`
- `$SHELLCODE_PORTS = 180`。
- `$SIP_PORTS = 5060, 5061, 5600`
- `$SIP_SERVERS = $HOME_NET` (任意の IP アドレスを示します)。
- `$SMTP_SERVERS = $HOME_NET` (任意の IP アドレスを示します)。
- `$SNMP_SERVERS = $HOME_NET` (任意の IP アドレスを示します)。
- `$SQL_SERVERS = $HOME_NET` (任意の IP アドレスを示します)。
- `$SSH_PORTS = 22`。

- \$SSH_SERVERS = \$HOME_NET (任意の IP アドレスを示します)。
- \$STELNET_SERVERS = \$HOME_NET (任意の IP アドレスを示します)。

ジェネレータ識別子

ジェネレータ識別子 (GID) は、侵入ルールを評価し、イベントを生成するサブシステムを識別します。標準のテキスト侵入ルールのジェネレータ ID は 1、共有オブジェクト侵入ルールのジェネレータ ID は 3 です。また、各種プリプロセッサに対して複数のルールセットがあります。次の表で、GID について説明します。

表 11: ジェネレータ ID

ID	コンポーネント
1	標準テキスト ルール
2	タグ付きパケット (タグ付きセッションからパケットを生成するタグジェネレータのルール。)
3	共有オブジェクト ルール
102	HTTP デコーダ
105	バック オフィス探知機
106	RPC デコーダ
116	パケット デコーダ
119、120	HTTP インスペクト プリプロセッサ。 (GID 120 ルールは、サーバ固有の HTTP トラフィックに関連しています)。
122	ポートスキャン ディテクタ
123	IP 最適化
124	SMTP デコーダ (SMTP 動詞に対するエクスプロイト。)
125	FTP デコーダ
126	Telnet デコーダ
128	SSH プリプロセッサ
129	ストリーム プリプロセッサ
131	DNS プリプロセッサ

ID	コンポーネント
133	DCE/RPC プリプロセッサ
134	ルール遅延、パケット遅延 (これらのルールのイベントは、ルール遅延中断 (SID 1) または侵入ルールのグループの再有効化 (SID 2) のとき、またはパケット遅延のしきい値を超えた (SID 3) ためにシステムがパケットの検査を中止したときに生成されます)。
135	レートベースの攻撃ディテクタ (ネットワーク上のホストへの過剰な接続。)
137	SSL プリプロセッサ
138、139	機密データ プリプロセッサ
140	SIP プリプロセッサ
141	IMAP プリプロセッサ
142	POP プリプロセッサ
143	GTP プリプロセッサ
144	Modbus プリプロセッサ
145	DNP3 プリプロセッサ

ネットワーク分析ポリシー

ネットワーク分析ポリシーはトラフィック前処理を制御します。プリプロセッサは、トラフィックを正規化し、プロトコル異常を識別することにより、トラフィックがさらに検査されるように準備します。ネットワーク分析関連の前処理が行われるのは、セキュリティインテリジェンスによるドロップと SSL 復号の後ですが、アクセス制御と侵入またはファイル検査の前です。

デフォルトでは、システムは [バランスのとれたセキュリティと接続性 (Balanced Security and Connectivity)] ネットワーク分析ポリシーを使用して、アクセス制御ポリシーによって処理されるすべてのトラフィックを前処理します。ただし、アクセス制御ルールで侵入ポリシーを設定する場合、システムは、適用される最も積極的な侵入ポリシーに一致するネットワーク分析ポリシーを使用します。たとえば、アクセス制御ルールで [接続性よりセキュリティを優先

(Security over Connectivity)] ポリシーと [バランスのとれたセキュリティと接続性 (Balanced Security and Connectivity)] ポリシーの両方を使用する場合、システムはすべてのトラフィックに対して [接続性よりセキュリティを優先 (Security over Connectivity)] NAP を使用します。Snort3 カスタム侵入ポリシーの場合、この割り当ては、侵入ポリシーに割り当てられた基本テンプレートポリシーに従って行われます。

Snort3を使用している場合、ポリシーを明示的に選択し、オプションで設定をカスタマイズできます。侵入ポリシーを直接使用するか、カスタム侵入ポリシーのベースポリシーとして使用するにかかわらず、デバイスを通過するほとんどのトラフィックに使用する侵入ポリシーと名前が一致するポリシーを選択することを推奨します。その後、インスペクションモードを変更したり、ネットワーク上のトラフィックを考慮して特定のインスペクタまたはバインダ設定を調整したりできます。

さらに、侵入ポリシーでプリプロセッサルールを有効にしているかどうかにも考慮します。プリプロセッサを必要とするルールを有効にする場合は、NAPで対応するインスペクタも有効にしてください。インスペクタごとに、検査対象のポート（バインダ）を含むインスペクタの属性を調整して、ネットワークのインスペクタの動作もカスタマイズできます。

侵入ポリシーのためのライセンス要件

アクセス制御ルールの侵入ポリシーを適用するには、**IPS** ライセンスを有効にする必要があります。ライセンスの設定については、[オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化（111 ページ）](#)を参照してください。

ネットワーク分析ポリシーには追加ライセンスは必要ありません。

アクセス制御ルールでの侵入ポリシーの適用

侵入ポリシーをネットワークトラフィックに適用するには、トラフィックを許可するアクセス制御ルール内でポリシーを選択します。侵入ポリシーを直接指定しません。

保護するネットワークの相対的なリスクに基づいた可変の侵入保護を提供する別の侵入のポリシーを割り当てることができます。たとえば、内部ネットワークと外部ネットワーク間のトラフィックには、より厳しい「接続性よりもセキュリティを優先」ポリシーを使用する場合があります。一方で、内部ネットワーク間のトラフィックに対しては、より緩やかな「セキュリティよりも接続性を優先」ポリシーを適用する場合があります。

また、すべてのネットワークに対して同じポリシーを使用することで、構成を簡略化することもできます。たとえば、「バランスのとれたセキュリティと接続性」ポリシーは、接続に過度に影響を与えずに良好な保護を提供するための設計です。

手順

ステップ 1 [ポリシー（Policies）] > [アクセス制御（Access Control）] の順に選択します。

ステップ 2 トラフィックを許可する、新しいルールを作成するか、既存のルールを編集します。

既定のアクションを許可する場合は、既定のアクションで侵入ポリシーを指定することもできます。

トラフィックを信頼またはブロックするルールに侵入ポリシーを適用することはできません。

ステップ3 [侵入ポリシー (Intrusion Policy)] タブをクリックします。

ステップ4 [侵入ポリシー (Intrusion Policy)] > [On] を選択し、トラフィックの照合に使用する侵入検査ポリシーを選択します。

侵入イベントの Syslog の設定

侵入ポリシーの外部 syslog サーバを設定して Syslog サーバに侵入イベントを送信できます。サーバに送信される侵入イベントを取得するために侵入ポリシーで Syslog サーバを設定する必要があります。アクセスルールで syslog サーバを設定し、侵入イベントではなく、接続イベントのみ syslog サーバに送信します。

複数の syslog サーバを選択する場合、イベントは各サーバに送信されます。

侵入イベントのメッセージ ID は 430001 です。

手順

ステップ1 [ポリシー] > [侵入]の順に選択します。

ステップ2 [侵入ポリシーの設定 (Intrusion Policy Settings)] ボタン (⚙️) をクリックして syslog を設定します。

ステップ3 [侵入イベント送信先 (Send Intrusion Events To)] の下にある [+] ボタンをクリックして、syslog サーバを定義するサーバオブジェクトを選択します。必要なオブジェクトが存在しない場合は、[新しい Syslog サーバの作成 (Create New Syslog Server)] をクリックして作成します。

ステップ4 [OK] をクリックします。

ネットワーク分析ポリシーの設定 (Snort 3)

ネットワーク分析ポリシー (NAP) は、デバイスで許可されているすべての接続に適用されます。NAPは、有効になっているインスペクタと、インスペクタで使用される属性の値を決定します。バインダは、さまざまなインスペクタに関連付ける必要があるポートとプロトコルを決定します。

アクセス制御ルールで適用する侵入ポリシーと NAP を調整します。

- アクセス制御ルールで単一の侵入ポリシーを使用する場合は、同じ名前の NAP を選択します。次に、侵入ポリシーの設定に基づいてインスペクタと属性を調整します。たとえば、CIP などの特定のインスペクタに対して侵入ルールを有効にする場合は、NAP でそのインスペクタを有効にしてください。

- 複数の侵入ポリシーを使用する場合は、使用する最も厳密な侵入ポリシーに一致する NAP を選択します。
- カスタム侵入ポリシーを使用する場合は、カスタム侵入ポリシーの基本侵入ポリシーに基づいて NAP を選択します。
- インспекタやバインダをカスタマイズする必要がある場合は、侵入ポリシーの使用に基づいて最適な NAP を自動的に選択するようにシステムを設定することを検討してください。これがデフォルトのオプションです。

始める前に

これを防止しない限り、システムは定期的にインспекションルールに LSP の更新をダウンロードします。LSP の更新では、インспекタと属性を追加または削除したり、属性のデフォルト設定を変更したりできます。削除されたインспекタをオーバーライドした場合、それらのオーバーライドは保持され、インспекタがサポートされなくなったことを示す警告が表示されます。この場合、インспекタを削除し、その他のフラグ付き調整を行って、NAP が完全に有効であることを確認します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

テーブルの上に表示されている Snort のバージョンが 3.x であることを確認します。

ステップ 2 [侵入ポリシーの設定 (Intrusion Policy Settings)] (⚙️) ボタンをクリックします。

ステップ 3 [デフォルトのネットワーク分析ポリシー (Default Network Analysis Policy)] で、次のいずれかを選択します。

- [自動 (Auto)] : アクセス制御ルールで適用される最も使用されている侵入ポリシー（またはカスタムルールの基本ポリシー）に一致する NAP を自動的に選択します。侵入ポリシーを適用しない場合は、Balanced Security および Connectivity NAP が使用されます。NAP は防御モードで実行され、侵入またはバインダの設定はカスタマイズできません。この手順の残りの部分は、自動モードで実行している場合は当てはまりません。
- [カスタム (Custom)] : 使用する NAP を明示的に選択します。別のポリシーを選択するには、ポリシー名の横にある [編集 (Edit)] リンクをクリックします。次に、インспекションモードを選択し、次の手順の説明に従い、インспекタとバインダの設定をカスタマイズできます。

ステップ 4 [ネットワーク分析ポリシーの編集 (Edit Network Analysis Policy)] ダイアログボックスで、ポリシーを選択し、設定を行います。

- a) [ネットワーク分析ポリシー (Network Analysis Policy)] で、許可されたすべての接続にグローバルに適用するポリシーを選択します。
- b) [インспекションモード (Inspection Mode)] を選択します。

インスペクションモードは、非標準トラフィックの処理方法を決定します。最適な結果を得るには、侵入ポリシーで使用するものと同じインスペクションモードを使用します。

- [防御 (Prevention)] : ポリシーの設定に基づいて、デコーダ、正規化、またはプロトコルの異常をブロックします。SSL 復号ポリシーを有効にする場合またはアクセスコントロール ポリシー設定で [TLS サーバーアイデンティティ検出 (TLS Server Identity Discovery)] オプションを有効にする場合は、このオプションを使用する必要があります。
- [検出 (Detection)] : デコーダ、正規化、またはプロトコルの異常についてアラートを発行するだけです。トラフィックはブロックしないでください。

c) (任意) インスペクタとバインダへのオーバーライドを設定および管理します。

- オーバーライドを編集するには、[インスペクタおよびバインダオーバーライドの設定 \(669 ページ\)](#) を参照してください。
- スキーマまたはオーバーライドをダウンロードするには、[オーバーライドとスキーマのダウンロード \(672 ページ\)](#) を参照してください。
- オーバーライドをアップロードするには、[オーバーライドのアップロード \(673 ページ\)](#) を参照してください。
- すべてのオーバーライドをリセットするには、NAP ファイルの上にある [インスペクタ/バインダのオーバーライドのリセット (Reset Inspector/Binder Overrides)] リンクをクリックします。リセットの確認を求められます。コマンド名に示されているように、削除はインスペクタまたはバインダに限定されます。たとえば、すべてのバインダオーバーライドを削除しても、インスペクタオーバーライドは変更されません。
- 選択したインスペクタに対するすべての変更を元に戻すには、[インスペクタをデフォルトにリセット (Reset Inspector to Defaults)] をクリックします。
- オーバーライドがあるインスペクタだけが表示されるようにビューをフィルタ処理するには、[オーバーライドのみ表示 (Show Only Overrides)] をクリックします。[すべてのインスペクタを表示 (Show All Inspectors)] をクリックして、フィルタを削除します。

d) [OK] をクリックします。

インスペクタおよびバインダオーバーライドの設定

基本 NAP を選択すると、その基準ポリシーに含まれるインスペクタ設定が選択されます。ほとんどの場合、これらは適切な設定です。

ただし、選択した NAP の設定はオーバーライドできます。たとえば、個々のインスペクタを有効または無効にしたり、属性やバインダの値を変更したりできます。

次の手順では、オーバーライドを直接設定する方法について説明します。または、スキーマをダウンロードし、オフラインで変更を行い、オーバーライドをアップロードできます。別のデバイスからダウンロードしたオーバーライドをアップロードすることもできます。

始める前に

各インスペクタ、バインダー、および属性の説明は、このドキュメントの範囲外です。例などの詳細については、<https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/secure-firewall/snort3-inspectors/snort-3-inspector-reference.html>にある Snort 3 インспекタリファレンス [英語] を参照してください。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択し、[侵入ポリシーの設定 (Intrusion Policy Settings)] ボタン (⚙️) をクリックし、NAP 設定に [カスタム (Custom)] を選択し、ポリシー名の横にある [編集 (Edit)] リンクをクリックします。

ステップ 2 変更する設定を含むタブをクリックします。

- [インスペクタ (Inspectors)] : インспекタは、FTP などの特定のタイプのトラフィックについてプロトコル異常を検査します。
- [バインダー (Binders)] : バインダーインспекタは、サービスインспекタを使用してトラフィックを検査する必要があるタイミングを決定します。バインダーインспекタの設定には、ネットワーク分析ポリシーの別のインспекタがトラフィックを検査する必要がある場合に定義するポート、ホスト、CIDR、およびサービスが含まれます。

ステップ 3 必要に応じて、設定を編集します。

- JSON エディタで表示を制御するには、次を使用します。
 - JSON ファイルの全文検索を実行するには、[フィルタ (Filter)] 編集ボックスを使用します。
 - JSON ファイル内のすべてのフォルダを開くには、[すべてのフィールドを展開 (Expand All Fields)] ボタン (📁) をクリックします。
 - JSON ファイル内のすべてのフォルダを閉じるには、[すべてのフィールドを折りたたむ (Collapse All Fields)] (📁) ボタンをクリックします。
 - 最新の変更を元に戻すには、[最後のアクションを元に戻す (Undo Last Action)] (↶) ボタンをクリックします。
 - 最後に元に戻した変更をやり直すには、[やり直し (Redo)] (↷) ボタンをクリックします。

- [ツリー (Tree)] を選択すると、JSON ファイルのフォーマットビューが表示されます。このビューには、アクションメニュー、エラーフラグ、および編集をガイドするその他の機能が含まれています。
- 未処理の JSON ファイルを表示するには、[コード (Code)] を選択します。
- [ツリー (Tree)] ビューで、[メニュー (Menu)] (☰) ボタンをクリックしてファイルの内容を操作します。次の操作を実行できます。
 - 属性を挿入します。[自動 (Auto)] を使用して、エディタに適切なデータ型を決定させます。それ以外の場合は、配列、オブジェクト、または文字列を追加します。無効な属性を追加すると、インスペクタまたはバインダに、解決する必要がある問題があることがマークされます。
 - 属性を追加します。このアクションは挿入と同じですが、属性をセクションの最後に配置します。
 - 選択した属性を複製します。
 - 選択した属性を削除します。属性を編集するときに、ポップアップメッセージに Delete コマンドが表示される場合もあります。
- 現在無効になっているインスペクタを有効にしたり、ブール属性の設定を変更したりするには、属性値の前にあるチェックボックスをクリックします。たとえば、インスペクタを有効にするには、`enabled: false` 属性を次のように変更します。



- 文字列または数値属性の値を変更するには、属性をクリックし、必要に応じて値を編集します。エントリがフィールドのルールに違反している場合は、エラーメッセージに不一致の説明が表示されます。たとえば、範囲外の値を入力した場合、有効な値の範囲が数値で示されます。
- オーバーライドをリセットするには、次の手順を実行します。
 - [インスペクタ/バインダオーバーライドのリセット (Reset Inspector/Binder Overrides)] をクリックして、すべてのインスペクタまたはバインダに対するすべての変更を削除し、デフォルト値に戻します。コマンド名に示されているように、削除はインスペクタまたはバインダに限定されます。たとえば、すべてのバインダオーバーライドを削除しても、インスペクタオーバーライドは変更されません。
 - [インスペクタをデフォルトにリセット (Reset Inspector to Defaults)] をクリックして、選択したインスペクタのみに対するすべての変更を元に戻します。
- オーバーライドがあるインスペクタだけが表示されるようにビューをフィルタ処理するには、[オーバーライドのみ表示 (Show Only Overrides)] をクリックします。[すべてのインスペクタを表示 (Show All Inspectors)] をクリックして、フィルタを削除します。

- インスペクタがサポートされなくなった場合、インスペクタにメッセージとともにフラグが付けられます。メッセージ内の[インスペクタの削除 (Delete Inspector)] リンクをクリックして、インスペクタを削除します。

ステップ 4 完了したら、[OK] をクリックします。

オーバーライドとスキーマのダウンロード

NAP スキーマをダウンロードするか、ポリシーに設定したオーバーライドをダウンロードできます。

以前の設定に戻す場合に備えて、基本 NAP を変更するたびにオーバーライドをダウンロードすることをお勧めします。さらに、1 つのデバイスで JSON エディタを使用して、すべてのデバイスで使用するオーバーライドを実装し、オーバーライドをダウンロードして、そのオーバーライドファイルを他のデバイスにアップロードできます。

オフラインでファイルを編集し、このデバイスまたは複数のデバイスにオーバーライドをアップロードする場合は、スキーマをダウンロードすると便利です。ファイル全体をアップロードするのではなく、変更が必要なセクションのみをコピーして貼り付け、変更内容のみがオーバーライドと見なされるようにします。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択し、[侵入ポリシーの設定 (Intrusion Policy Settings)] ボタン (⚙️) をクリックし、NAP 設定に[カスタム (Custom)] を選択し、ポリシー名の横にある[編集 (Edit)] リンクをクリックします。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 現在選択されている NAP のスキーマをダウンロードするには、歯車アイコン (⚙️) をクリックし、[ダウンロード (Download)] > [ポリシースキーマ (Policy Schema)] を選択します。
- 現在の編集セッションの前に存在していた一連の保存済みオーバーライドをダウンロードするには、歯車アイコン (⚙️) をクリックし、[ダウンロード (Download)] > [最後に保存されたオーバーライド (Last Saved Overrides)] を選択します。ファイルには、オーバーライドされた属性に加えて、属性に含まれるオブジェクトが含まれます。
- 現在の編集セッションで作成したオーバーライドをダウンロードするには、歯車アイコン (⚙️) をクリックし、[ダウンロード (Download)] > [現在未保存のオーバーライド (Current Unsaved Overrides)] を選択します。ファイルには、オーバーライドされた属性に加えて、属性に含まれるオブジェクトが含まれます。

オーバーライドのアップロード

組み込みのJSONエディタを使用して属性を編集する代わりに、NAP ポリシースキーマをダウンロードし、ファイルをオフラインで編集してから、ファイルをアップロードできます。アップロードしたファイルに設定されているオーバーライドは、選択した NAP に適用されます。

別のデバイスでオーバーライドを設定した後にダウンロードしたファイルもアップロードできます。

オーバーライドをアップロードすると、同じファイルを複数のデバイスにアップロードして、同じオーバーライドを簡単に適用できます。

始める前に

ネットワーク分析ポリシーでインスペクタ設定をオーバーライドするには、必要な変更のみをアップロードする必要があります。オーバーライドが本質的に困難になるため、設定全体をアップロードしないでください。したがって、LSP 更新の一部としてのデフォルト値や設定に対する後続の変更は適用されません。アップロードしたオーバーライドが、変更する属性だけに集中していることを確認します。

手順

- ステップ 1** [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択し、[侵入ポリシーの設定 (Intrusion Policy Settings)] ボタン (⚙️) をクリックし、NAP 設定に [カスタム (Custom)] を選択し、ポリシー名の横にある [編集 (Edit)] リンクをクリックします。
- ステップ 2** 歯車アイコン (⚙️) をクリックし、[アップロード (Upload)] > [オーバーライド (Overrides)] を選択します。
- ステップ 3** (任意) 既存のオーバーライドのコピーを保存するには、[ダウンロード (Download)] リンクのいずれかをクリックします。

最後に保存されたオーバーライド (現在の編集セッションの前に作成されたオーバーライド) または現在未保存のオーバーライド (現在の編集セッション中に作成されたオーバーライド) をダウンロードできます。
- ステップ 4** [アップロードのオーバーライドの確認 (Confirm Upload Overrides)] ダイアログボックスで [はい (Yes)] をクリックして、続行することを確認します。
- ステップ 5** [参照 (Browse)] をクリックするか、ドラッグアンドドロップしてオーバーライドを含む JSON ファイルを選択し、[OK] をクリックします。

侵入ポリシーの管理 (Snort 3)

Snort3 を検査エンジンとして使用する場合は、独自の侵入ポリシーを作成し、それらを目的に応じてカスタマイズすることができます。システムには、同じ名前の Cisco Talos Intelligence

Group (Talos) 定義のポリシーに基づく事前定義されたポリシーが付属しています。これらのポリシーを編集することもできますが、基盤となる Talos ポリシーに基づいて独自のポリシーを作成し、ルールアクションを調整する必要がある場合にはそれを変更することをお勧めします。

これらの各事前定義ポリシーには同じ侵入ルール（署名とも呼ばれます）のリストが含まれていますが、各ルールに対して実行する操作は異なります。たとえば、同じルールがあるポリシーでは有効になっているものの別のポリシーでは無効になっている可能性があります。

適用されている特定のルールであまりにも誤検出が多く、そのルールでブロックして欲しくないトラフィックがブロックされている場合、安全性の低い侵入ポリシーに切り替えることなく、ルールを無効にできます。または、トラフィックをドロップせずに、一致すると警告するように変更することもできます。

逆に、特定の攻撃に対して保護する必要があるにもかかわらず、関連するルールが選択した侵入ポリシーで無効になっている場合は、より安全なポリシーに変更せずに、ルールを有効にすることができます。

侵入に関連したダッシュボードおよびイベントビューアを使用して(いずれも[モニタリング] ページに存在)、侵入ルールがトラフィックに与えている影響を評価します。警告や削除に設定された侵入ルールに一致したトラフィックに対してのみ、侵入イベントや侵入データが表示されることに注意してください。無効になっているルールは評価されません。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

テーブルの上に表示されている Snort のバージョンが 3.x であることを確認します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- [検索/フィルタ (Search/Filter)] ボックスを使用してポリシーを検索します。名前でのみ検索できます。
- 歯車アイコン (⚙️) をクリックし、syslog サーバへのロギングを有効にします。 [侵入イベントの Syslog の設定 \(667 ページ\)](#) を参照してください。
- 歯車アイコン (⚙️) をクリックし、ネットワーク分析ポリシー (NAP) を設定します。 [ネットワーク分析ポリシーの設定 \(Snort 3\) \(667 ページ\)](#) を参照してください。
- [+] をクリックし、新しいポリシーを作成します。 [カスタム侵入ポリシーの設定 \(Snort 3\) \(675 ページ\)](#) を参照してください。
- 編集アイコン (✎) をクリックしてポリシーのプロパティとルールを表示し、それらを編集します。 [侵入ポリシーのプロパティの表示または編集 \(Snort 3\) \(676 ページ\)](#) を参照してください。

- 削除アイコン (🗑️) をクリックしてポリシーを削除します。

カスタム侵入ポリシーの設定 (Snort 3)

事前定義ポリシーがニーズに合わない場合は、新しい侵入ポリシーを作成してルール of 動作をカスタマイズできます。一般に、事前定義ポリシーを変更するのではなく、事前定義ポリシーに基づいてカスタムポリシーを作成することをお勧めします。これにより、カスタマイズによって必要な結果が得られない場合に、Cisco Talos 定義のポリシーの一つを簡単に実装できます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいポリシーを作成するには、[+] をクリックします。
- 既存のポリシーを編集するには、そのポリシーの編集アイコン (✎) をクリックします。ポリシーの詳細が表示されたら、ページの上にあるポリシープロパティのセクションの [編集 (Edit)] リンクをクリックします。

ステップ 3 ポリシーの [名前 (Name)] を入力し、必要に応じて、説明を入力します。

ステップ 4 ポリシーの [検査モード (Inspection Mode)] を設定します。

- [防止 (Prevention)] : 侵入ルールのアクションが常に適用されます。切断ルールに一致する接続はブロックされます。
- [検出 (Detection)] : 侵入ルールはアラートのみを生成します。切断ルールに一致する接続はアラート メッセージを生成しますが、接続はブロックされません。

ステップ 5 ポリシーの [基本テンプレート (Base Template)] を選択します。

基本テンプレートはCisco Talosによって提供されます。ポリシーの詳細を表示するには、それぞれの情報アイコンをクリックします。新しいルールパッケージがインストールされると、ポリシー名が変更される場合があります、新しいポリシーも表示されることに注意してください。

- [最大検出(Cisco Talos)]: このポリシーはセキュリティを最重要としています。ネットワーク接続とスループットは保証されず、誤検出が発生する可能性があります。このポリシーは、高度なセキュリティを要するエリアでのみ使用する必要があります。また、アラートを調査し、その有効性を判別できるように、セキュリティモニタを準備する必要があります。
- [接続性よりもセキュリティを優先(Cisco Talos)]: このポリシーはセキュリティに重点を置いており、ネットワーク接続とスループットが犠牲になる場合があります。トラフィック

はより綿密に検査され、より多くのルールが評価されるため、理に適った範囲内での、誤検出と遅延の増加の両方が予期されます。

- [バランスのとれたセキュリティと接続性(Cisco Talos)]: (デフォルト)。このポリシーは、ネットワーク接続とスループット、およびセキュリティのニーズの間の微妙なバランスを確立しようとします。このポリシーは、[接続性よりもセキュリティを優先]ほど厳格ではありませんが、通常のトラフィックの中断を減少させながら、ユーザのセキュリティを保持しようとします。
- [セキュリティよりも接続性を優先(Cisco Talos)]: このポリシーは、ネットワーク接続とスループットに重点を置いており、セキュリティが犠牲になる場合があります。トラフィックは綿密に検査されず、評価されるルール数は少なくなります。
- [アクティブなルールなし(Cisco Talos)]: このポリシーは、一般的なブリプロセッサ設定を指定する基本ポリシーですが、ルールや組み込みアラートは有効になっていません。適用するポリシーのみを有効にする場合は、このポリシーをベースとして使用します。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

侵入ポリシーリストに戻ります。これで、新しいポリシーを表示し、必要に応じてルールアクションを調整することができます。

侵入ポリシーのプロパティの表示または編集 (Snort 3)

[侵入ポリシー (Intrusion Policy)] ページには、事前定義されたポリシーとユーザ定義のポリシーの両方を含むポリシーのリストとその説明が表示されます。ポリシーを編集するには、まずポリシーのプロパティを表示する必要があります。

手順

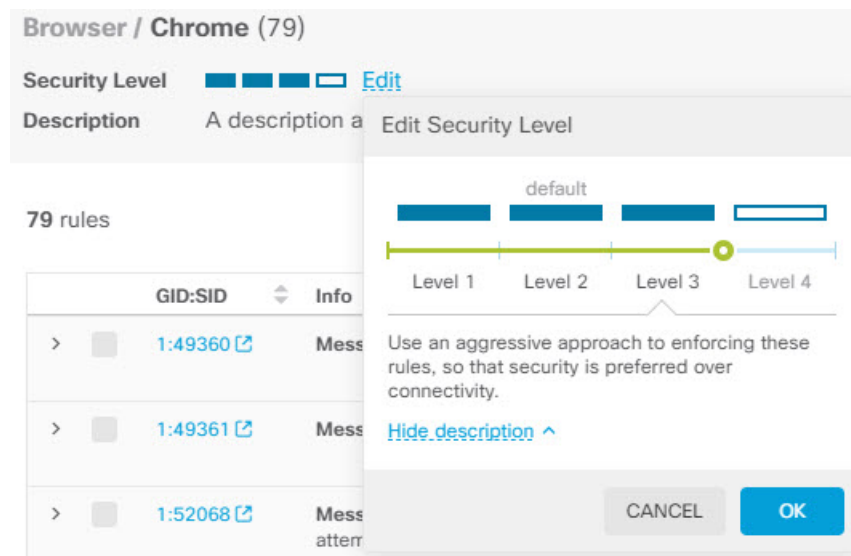
ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 ポリシーの編集アイコン()をクリックします。

ポリシーには、次のセクションが含まれています。

- [ポリシー名 (Policy Name)] ドロップダウンリスト。
 - ドロップダウンリストから選択することで別のポリシーに簡単に切り替えたり、戻るボタン () をクリックしてポリシーのリストに戻ることができます。
 - このポリシーを削除するには、ポリシー名の横にある削除アイコン () をクリックします。

- [一般プロパティ (General properties)]。このセクションには、侵入モード、基本ポリシー、および説明が示されます。これらのプロパティまたはポリシー名を変更するには、[編集 (Edit)] をクリックします。
- [ルールグループ (Rule Group)] の目次。このリストには、ポリシーにアクティブなルールがあるすべてのルールグループが表示されます。グループには階層があり、親グループには、より大きな親グループ内のルールのサブセットを編成する子グループが含まれます。各グループはルールの論理的な集合であり、特定のルールが複数のグループに含まれる場合があります。
 - 現在ポリシーにアクティブなルールがないグループを追加するには、[+][+] > [既存のルールグループの追加] をクリックして、そのグループを選択します。 [侵入ポリシーのルールグループの追加または削除 \(Snort 3\) \(679 ページ\)](#) を参照してください。
 - グループのセキュリティレベルを変更するには、リストから子グループを選択します。ルールリストが変更され、セキュリティレベルが上部に表示され、グループ内のルールが下に一覧表示されます。セキュリティレベルの横にある [編集 (Edit)] リンクをクリックし、新しいレベルを選択します。各セキュリティレベルに関する情報を取得するには、編集時に [説明の表示 (View Description)] をクリックします。レベルを変更すると、アクティブなルールが（および特定のルールのアクションも）変更される可能性があることに注意してください。よりセキュアなレベルでは、アクティブなルールが多くなり、ドロップアクションを持つルールが多くなる傾向があります。[OK] をクリックして変更を確定します。（セキュリティレベルはカスタムルールグループには適用されません）。



- グループ内のすべてのルールを削除するには、リストから子グループを選択します。次に、グループ名の右端にある [除外 (Exclude)] リンクをクリックし、グループを除外することを確認します。グループを除外すると、グループ内のすべてのルールが無効になるだけです。グループは削除されません。

ただし、グループに、有効になっている他のグループと共有しているルールが含まれている場合、共有ルールでは、現在もアクティブであるグループによって適用される

アクションがすべて保持されます。すべての場合において、グループメンバーシップに関係なく、個々のルールに対して最も積極的な設定が保持されます。

- カスタムルールの新しいカスタムルールグループを追加するには、**[+]>[カスタムルールのアップロード]**をクリックします。詳細は、[カスタム侵入ルールのアップロード \(684 ページ\)](#) を参照してください。
- カスタムルールグループの名前または説明を変更するには、**[編集]**をクリックします。
- カスタムルールグループを削除するには、**[削除]**をクリックします。詳細については、[カスタム侵入ルールとルールグループの管理 \(683 ページ\)](#) を参照してください。
- カスタムルールグループに新しいカスタムルールを追加するには、ルールテーブルの上にある**[+]**をクリックします。[個人のカスタム侵入ルールの設定 \(687 ページ\)](#) を参照してください。
- カスタムルールのグループメンバーシップを編集、複製、削除、または管理するには、ルールの右側にカーソルを合わせ、適切なボタンまたはコマンドをクリックします。詳細については、[個人のカスタム侵入ルールの設定 \(687 ページ\)](#) を参照してください。
- **[ルールのリスト (List of rules)]**。検索フィールドを使用すると、全文検索でルールを検索できます。フィルタリング項目を選択して、**GID** または **SID** の任意の組み合わせで検索したり、（追加した）ユーザー定義のルールのみ表示したり、アクションがオーバーライドされたルールのみ表示したり、単にアクション（無効、アラート、ドロップ）に基づいてルールを表示したりもできます。ルールは遅延ロードされるため、フィルタ処理されていないリスト全体のスクロールにはかなりの時間がかかります。リストをフィルタ処理する場合は、更新ボタンをクリックして、フィルタ処理されたビューをリロードしてください。
- ルールのアクションを変更するには、ルールの **[アクション (Action)]** セルをクリックし、新しいアクションを選択します。アラートのみにする場合は **[アラート (Alert)]**、一致するトラフィックをブロックする場合は **[ブロック (Block)]**、ルールを無効にする場合は **[無効 (Disable)]** を選択してください。各ルールのデフォルトアクションが示されます。
- 一度に複数のルールのアクションを変更するには、変更するルールの左の列にあるチェックボックスをクリックし、ルールテーブルの上にある **[アクション]** ドロップダウンリストから新しいアクションを選択します。**GID:SID** ヘッダーのチェックボックスをクリックしてリスト内のすべてのルールを選択します。最大 **5000** のルールを一度に変更できます。
- カスタムルールグループ内のルールを更新するには、**[ルールファイルのアップロード]**をクリックします。詳細については、[カスタム侵入ルールのアップロード \(684 ページ\)](#) を参照してください。
- ルールに関する詳細情報を取得するには、**[GID : SID]** セルのリンクをクリックします。リンクをクリックすると **Snort.org** に移動します。

- 一覧表示されるルールを変更するには、ルールグループの目次から子グループ（親グループではなく）をクリックします。ルールグループリストの上部にある [すべてのルール (ALL RULES)] をクリックすると、すべてのルールのリストに戻ることができます。
- ソート順序を変更するには、カラムのテーブルヘッダーをクリックします。ルールのデフォルトのソートは、上書きされたルール、ドロップルール、アラートルールの順です。
- 侵入ルール (LSP) の更新で行われた変更を確認するには、[フィルタ (Filter)] フィールドで [LSPの更新 (LSP Update)] を選択し、変更を表示する更新を選択し、すべての変更を表示するか、またはルールに対する追加や変更のみ表示するかを指定します。

侵入ポリシーのルールグループの追加または削除 (Snort 3)

侵入ルールはローカルグループで編成されます。グループには階層があり、親グループには関連する子グループが含まれます。ルール自体は子グループにのみ表示されます。親グループは単に組織的な構成要素です。特定のルールが複数のグループに表示される場合があります。

作成したカスタムルールグループは、[ユーザ定義グループ] フォルダにあります。カスタムルールグループには階層がありません。

侵入ポリシーのルールを追加または削除する最も簡単な方法は、グループを追加または削除することです。グループ内のルールは論理的に関連しているため、高い確率で、特定のグループ内のすべてではないにしてもほとんどのルールを使用することになります。

次の手順では、グループを追加し、グループのセキュリティレベルを変更する方法について説明します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 変更するポリシーの編集アイコン()をクリックします。

ステップ 3 (グループの追加) ルールグループのリストにグループが表示されない場合は、[+][+] > [既存のルールグループの追加] をクリックして、次の手順を実行します。

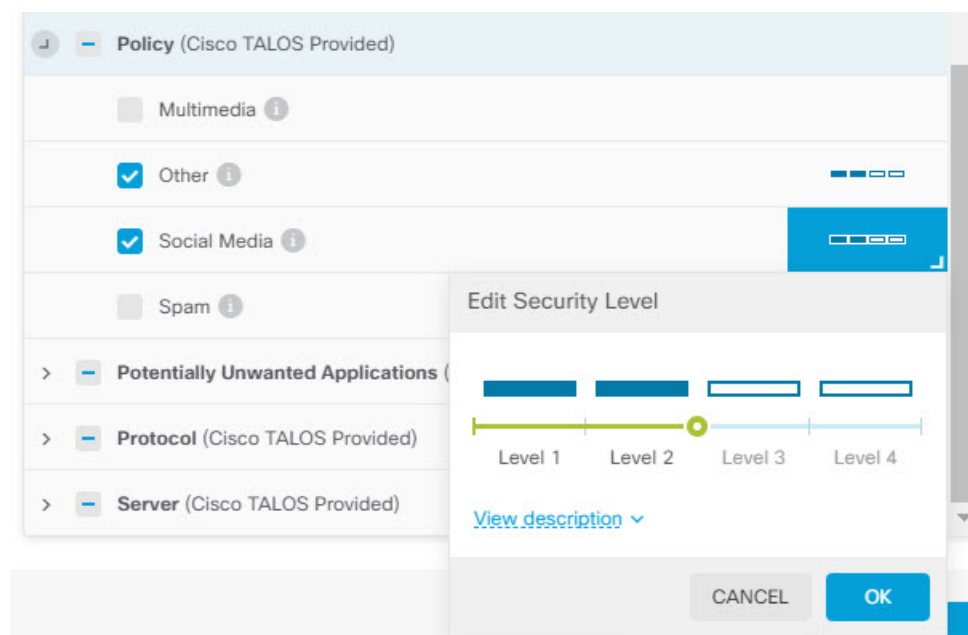
a) 子グループを検索します。

- 親グループ名の横のチェックマークは、その親グループに含まれるすべての子グループがすでに選択されていることを示します。
- 親グループ名の横のマイナス記号は、1 つ以上の子グループがこのポリシーに対して有効なルールを持っていないことを示します。これらは追加できるグループです。

- 子グループ名の横のチェックマークは、そのグループがすでに選択されていることを示します。

- 追加するグループを選択します (チェックボックスをオンにする)。
- (オプション、カスタムルールグループには適用されません) 各グループには、カスタムポリシーに使用される基本ポリシーに応じたデフォルトのセキュリティレベルがあります。変更する場合は、セキュリティレベルのアイコンをクリックし、新しいレベルを選択して、[OK] をクリックします。

レベル 1 は最も安全性の低いセキュリティ態勢であり、セキュリティよりも接続性が重視されます。一方、レベル 4 は最も積極的なセキュリティ態勢であり、最大のセキュリティを提供します。[説明の表示 (View Description)] をクリックすると、選択した各レベルの説明が表示されます。



- すべての変更が完了するまで、グループの選択 (または選択解除) を続けます。
- [OK] をクリックします。

ステップ 4 (グループの削除) グループに含まれるすべてのルールを無効にするには、次のいずれかの方法を使用できます。

- ルールのリストの上で、グループを選択し、グループ名の右端にある [除外 (Exclude)] リンクをクリックします。
- グループを追加する手法を使用しますが、代わりに、不要なグループの選択を解除し (チェックボックスをオフする)、[OK] をクリックします。
- カスタムルールグループを削除して、システムおよびそのルールを使用するすべての侵入ポリシーから完全に削除できます。グループを選択してから、[削除] をクリックします。

侵入ルールアクションの変更 (Snort 3)

各侵入ポリシーには同じルールがあります。違いは、各ルールで取られるアクションがポリシーごとに異なる場合があります。

ルールアクションを変更して、誤検出が多すぎるルールを無効にすることができます。またはルールが、一致するトラフィックのアラートを発するか、そのトラフィックを切断するかどうかを変更できます。また、無効になっているルールを有効にして、一致するトラフィックをアラートまたは切断することもできます。

ルールアクションを変更する最も簡単な方法は、ルールグループのセキュリティレベルを変更することです。グループのセキュリティレベルを変更すると、グループ内のルールのアクションが変更されます。選択するセキュリティ態勢により、これが一部のルールを有効（または無効）にすることを意味する場合もあれば、アクションがアラートとドロップの間で変化する場合もあります。ただし、必要に応じて、個々のルールアクションを変更できます。



- (注) 特定のルールのデフォルトアクションは、グループとシビラティ（重大度）の全体的な選択に基づいて決まります。グループのシビラティ（重大度）を変更したり、グループを除外したりすると、ルールのデフォルトアクションが変化する場合があります。

始める前に

カスタムルールグループにはセキュリティレベルがありません。セキュリティレベルの手法を使用して、カスタムルールのルールアクションを変更することはできません。

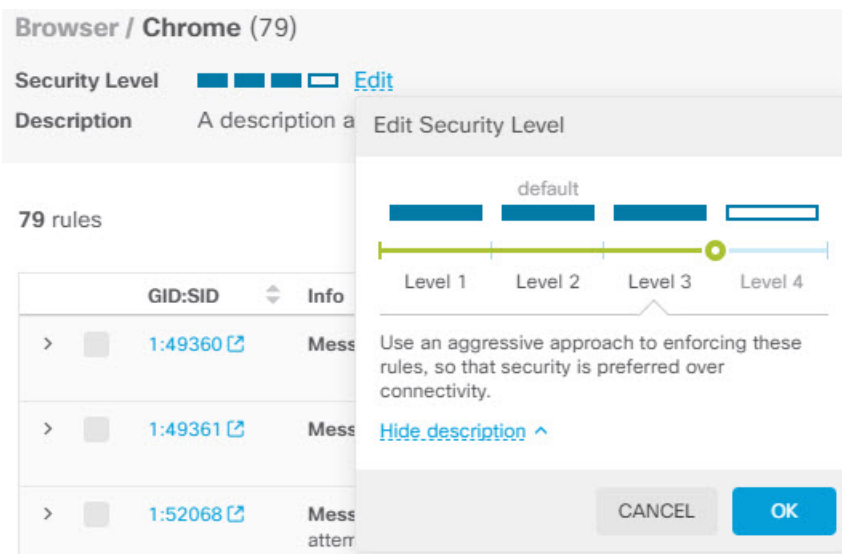
手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 ルールアクションを変更するポリシーの表示アイコン (🔍) をクリックします。

ステップ 3 (推奨される方法) グループのセキュリティレベルを変更します。

- ルールグループリストの子ルールグループをクリックします。
- ルールのリストの上で、グループのセキュリティレベルの横にある [編集 (Edit)] をクリックします。



(注)

グループ内のすべてのルールを無効にする場合は、[編集 (Edit)] をクリックしないでください。代わりに、[除外 (Exclude)] をクリックし、グループを除外することを確認します。グループは削除されず、そのルールが単に無効になります。残りの手順はスキップしてください。

- c) グループの新しいレベルを選択します。[説明の表示 (View Description)] をクリックして、選択した各レベルの説明を表示します。

レベル 1 は最も安全性の低いセキュリティ態勢であり、セキュリティよりも接続性が重視されます。一方、レベル 4 は最も積極的なセキュリティ態勢であり、最大のセキュリティを提供します。

- d) [OK] をクリックします。

ステップ 4 (手動の方法) 1 つ以上のルールのアクションを変更します。

- a) 変更するアクションのルールを検索します。

ルール情報内の文字列を検索するには、[検索/フィルター (Search/Filter)] ボックスを使用します。フィルタ処理項目を選択して、GID または SID の任意の組み合わせで検索したり、単にそれらのアクション（無効、アラート、ドロップ）に基づいてルールを表示したりすることもできます。ルールは遅延ロードされるため、フィルタ処理されていないリスト全体のスクロールにはかなりの時間がかかります。リストをフィルタ処理する場合は、更新ボタンをクリックして、フィルタ処理されたビューをリロードしてください。

理想的には、連携して問題に取り組んでいる場合にイベントやシスコ テクニカル サポートから Snort 識別子 (SID) とジェネレータ識別子 (GID) を取得できます。これにより、ルールを正確に検索できます。

- b) アクションを変更するには、次のいずれかを実行します。

- ルールを 1 つずつ変更：ルールの [アクション (Action)] 列をクリックし、必要なアクションを選択します。

- **アラート**：このルールがトラフィックと一致するとイベントを作成しますが、接続はドロップしません。
- **ドロップ**：このルールがトラフィックと一致するとイベントを作成し、接続をドロップします。
- **無効**：このルールではトラフィックは一致しません。イベントは生成されません。
- **一度に複数のルールを変更**：変更するルールのチェックボックスをクリックし、表の上にある[一括 (Bulk)] ドロップダウンをクリックして、目的のアクションを選択します。GID:SID ヘッダーのチェックボックスをクリックしてリスト内のすべてのルールを選択します。最大 5000 のルールを一度に変更できます。

カスタム侵入ルールとルールグループの管理

システムには、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) によって定義された何千もの侵入ルールが付属しています。追加の攻撃を把握している場合は、カスタム侵入ルールを作成してアップロードし、それらの攻撃をスクリーニングして、アラートを発出したり、攻撃をドロップしたりすることができます。ルールを1つずつ作成、編集、削除することもできます。

アップロードするルールの場合、テキストエディタを使用してルールをオフラインで作成します。アップロードする各テキストファイルにカスタムルールのグループを含めることをお勧めします。これにより、ルールへの変更を簡単にアップロードし、新しいルールをカスタムルールグループにマージしたり、ルールを新しい編集済みコピーに置き換えたりできます。

こうしたルールの作成方法の説明は、このドキュメントの対象範囲に含まれていません。Snort 2ルールをSnort 3形式に変換する方法など、Snort用の侵入ルールの作成方法に関する詳細については、<https://snort.org/documents>のガイドを参照してください。たとえば、<https://snort.org/documents/rules-writers-guide-to-snort-3-rules>で『Snort 3ルールを作成するルール作成者のための手引き』を参照してください。

始める前に

カスタムルールグループは、[カスタム侵入ルールのアップロード \(684 ページ\)](#) で説明されているようにカスタムルールをアップロードするプロセスで作成するか、個々のルールを作成するか、またはルールメンバーシップを管理するときに作成します。グループを作成した後は、グループとその内容を管理できます。

カスタムグループは、グループを作成したときに編集していたポリシーだけでなく、すべての侵入ポリシーで使用できることに注意してください。そのため、グループに加えた変更はすべてのポリシーに対しても加えられます。たとえば、カスタムルールグループを削除すると、そのグループはすべてのポリシーから削除され、どのポリシーでも使用できなくなります。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 ポリシーの編集アイコン()をクリックします。

いずれかの組み込みポリシーではなくカスタム侵入ポリシーに、カスタムルールを追加することをお勧めします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- グループを作成するには、[+] > [カスタムルールの上ロード] をクリックします。 [カスタム侵入ルールの上ロード \(684 ページ\)](#) を参照してください。
- グループの名前または説明を編集するには、[ユーザ定義グループ] フォルダのグループ目次でグループを選択します。[編集] をクリックして変更を加えることができます。
- ポリシーからグループとそのルールを除外するには、[ユーザ定義グループ] フォルダのグループ目次でグループを選択します。選択後、[除外] をクリックしてグループを削除できます。
- システムからグループを削除するとともに、そのグループを使用するすべてのポリシーを削除するには、[ユーザ定義グループ] フォルダのグループ目次でグループを選択します。次に、[削除] をクリックします。あるルールが削除されたグループのみに存在する場合、そのルールはシステムからも削除されることに注意してください。他方、削除していない他のカスタムルールグループにも同じルールが存在する場合、そのルールはそれらのグループに残されます。
- グループ内のルールを一括で置換または更新するには、[ユーザ定義グループ] フォルダのグループ目次でグループを選択します。次に、グループのルールテーブルの上にある[アクション] ドロップダウンリスト横の[ルールファイルの上ロード] をクリックします。このプロセスは、[カスタム侵入ルールの上ロード \(684 ページ\)](#) で説明されたものと同じです。
- 個々のルール、およびルールグループへの割り当てを作成および管理するには、[個人のカスタム侵入ルールの設定 \(687 ページ\)](#) を参照してください。

カスタム侵入ルールの上ロード

現在他のルールでカバーされていない攻撃を把握している場合は、カスタム侵入ルールを作成して上ロードし、それらの攻撃をスクリーニングして、アラートを発出したり、攻撃をドロップしたりすることができます。インポートされたルールのアクションはアラートまたはドロップのいずれかである必要があります。ルールのデフォルトアクションはインポートされたファイルのアクションによって定義されます。インポートしたら、ルールアクションを変更し、必要に応じてルールを無効にすることができます。

これらのルールはオフラインで作成する必要があります。DeviceManager では、ルールファイルをアップロードするだけで、ルールを直接設定するわけではありません。ルールファイルはテキストファイルである必要があります。改行を使用してルールを読みやすい形式にしたり、1行にルールを入力したりできます。空の行は許可されます。ルールの形式については、snort.org を参照してください。

たとえば、3つのルールのアップロードファイルは次のようになります。

```

alert tcp $HOME_NET any -> $EXTERNAL_NET $HTTP_PORTS (
  msg: "My Custom Rule: EXPLOIT-KIT Styx exploit kit landing page request";
  flow:to_server,established;
  http_raw_uri;
  bufferlen:>100;
  http_uri;
  content: "/i.html?",depth 8; pcre: "/i\\.html\\?[a-z0-9]+\\=[a-zA-Z0-9]{25}/";
  flowbits:set,styx_landing;
  metadata: copied from talos sid 29452;
  service:http;
  classtype:trojan-activity;
  gid:1;
  sid:1000000;
  rev:1;
)

alert tcp $HOME_NET 8811 -> $EXTERNAL_NET any (
  msg:"My Custom rule: MALWARE-BACKDOOR fear1.5/aciddrop1.0 runtime detection - initial
  connection";
  flow:to_client,established;
  flowbits:isset,Fear15_conn.2;
  content:"Drive",nocase;
  metadata:copied from talos sid 7710;
  classtype:trojan-activity;
  gid:1;
  sid:1000001;
  rev:1;
)

alert tcp $EXTERNAL_NET $FILE_DATA_PORTS -> $HOME_NET any (
  msg:"My Custom Rule: INDICATOR-COMPROMISE download of a Office document with embedded
  PowerShell";
  flow:to_client,established;
  flowbits:isset,file.doc;
  file_data;
  content:"powershell.exe",fast_pattern,nocase;
  metadata:copied from talos sid 37244;
  classtype:trojan-activity;
  gid:1;
  sid:1000002;
  rev:1;
)

```

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 ポリシーの編集アイコン()をクリックします。

いずれかの組み込みポリシーではなくカスタム侵入ポリシーに、カスタムルールを追加することをお勧めします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- グループのリストの上にある[+] > [カスタムルールの上ロード]をクリックします。
- 作成済みのカスタムルールグループにルールを上ロードする場合は、カスタムルールグループを選択して、グループのルールテーブルの上にある[アクション]ドロップダウンリストの横にある[ルールファイルの上ロード]をクリックします。

ステップ 4 [参照]をクリックしてカスタムルールファイルを選択するか、ファイルを[ファイルの上ロード]ダイアログボックスにドラッグアンドドロップします。

上ロードが完了するまで待ちます。

ステップ 5 競合の処理方法を選択します。

競合は、追加するルールがシステムにすでに存在するルールと同じ場合に発生します。これは、以前に上ロードしたのと同じルールまたは編集したバージョンのルールを上ロードする場合にのみ発生します。

次のいずれかのオプションを選択します。

(注)

[マージ]と[置換]は基本的に同じものです。既存のルールに変更を加えるには、上ロードしたルールのリビジョン番号が、上ロード済みのルールのリビジョン番号よりも大きい必要があります。唯一の違いは、[置換]オプションを使用すると、上ロードファイルに対象のカスタムルールグループ内のルールがない場合、それらのルールがルールグループから削除されることです。[マージ]オプションでは、これらの"欠落している"ルールがそのまま残ります。

- [マージ]: 上ロードされたファイルのルールのリビジョン番号が大きい場合、上ロードされたファイル内の変更されたルールのうち、選択したグループにも存在するものは、それらの変更がマージされます。変更されていないルール、または上ロードに対応するルールがないグループ内のルールは変更されません。上ロード内の新しいルールが追加されます。これがデフォルトのオプションです。
- [置換]: 上ロードされたファイルのルールは、上ロードされたルールのリビジョン番号が大きい場合、選択したグループのルールを置き換えます。上ロードされたファイルに存在しない既存のルールは、グループから削除されます。上ロードされたバージョンのリビジョン番号が同じかそれ以下の既存のルールは変更されません。上ロード内の新しいルールが追加されます。

ステップ 6 [+]をクリックし、上ロードしたルールのカスタムルールグループを選択します。

使用するカスタムルールグループが存在しない場合は、[新しいグループの作成]をクリックしてすぐに作成します。新しいグループには名前と、必要に応じて説明が必要です。その後、新しいグループを選択できます。

ルールを置き換える場合は、1つのグループのみを選択できます。ルールをマージする場合は、複数のグループを選択できます。

ステップ7 [OK] をクリックします。

ファイルがアップロードされ、新しいグループに配置されます。アップロードされたルールの数と、更新、削除、または無視されたルールの数の概要が表示されます。

ファイルにエラーがある場合、アップロードは失敗します。[ダウンロードエラーファイル]リンクをクリックすると、エラーの詳細情報を取得できます。

グループは、この侵入ポリシーで自動的にアクティブ化されます。グループと新しいルールは他のポリシーに追加できますが、グループとルールが他のポリシーで自動的に有効になることはありません。他のポリシーへのグループの追加については、[侵入ポリシーのルールグループの追加または削除 \(Snort 3\)](#) (679 ページ) を参照してください。

個人のカスタム侵入ルールの設定

カスタム侵入ルールは、ファイルアップロードによって一括で行うのではなく、一度に1つずつ設定できます。この方法は、あるルールをすばやく調整する必要がある場合や、一度に少数のルールを作成または変更する必要がある場合に適しています。

侵入ルールを設定する場合は、次の点に注意してください。

- すべてのカスタムルールのGIDは1である必要があります。
- ルールのSIDは、システム内のすべてのルールで一意である必要があります。また、100万 (1000000) 以上である必要があります。
- ルールを編集する場合は、ルールのバージョンを変更する必要があります。通常、バージョン番号は1ずつ増加します。
- Cisco Talos Intelligence Group (Talos) ルールを複製して独自のバージョンのルールを作成できますが、重複するSIDを変更して一意にする必要があります。

ルールが適切に形成されていることを確認するためにいくつかの有効性チェックが実行され、問題に関するエラーメッセージが表示されます。ただし、システムはルールが適切かどうかを判断できません。

Snort2ルールをSnort3形式に変換する方法など、Snort用の侵入ルールの作成方法に関する詳細については、<https://snort.org/documents>のガイドを参照してください。たとえば、<https://snort.org/documents/rules-writers-guide-to-snort-3-rules>で『Snort 3ルールを作成するルール作成者のための手引き』を参照してください。

手順

ステップ1 [ポリシー (Policies)] > [侵入 (Intrusion)] を選択します。

ステップ 2 ポリシーの編集アイコン()をクリックします。

いずれかの組み込みポリシーではなくカスタム侵入ポリシーに、カスタムルールを追加することをお勧めします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- 侵入ルールを追加するには、ルールテーブルの上にある [新しい侵入ルールの追加 (Add New Intrusion Rule)] ボタン (+) をクリックします。ルールを追加する場合、新しいルールを含める1つ以上のカスタムルールグループを選択する必要があります。必要に応じて、ルールを追加しながら新しいグループを作成できます。
- 既存のルールを複製および編集してルールを追加するには、ルールの右端にマウスを合わせ、[複製]()ボタンをクリックします。ボタンは、マウスオーバーでのみ表示されます。カスタムルールの場合、[複製]コマンドはその他のオプション(...)ボタンの下にあります。
- カスタムルールを編集するには、カスタムルールグループでルールを検索し、ルールの編集()ボタンをクリックします。編集内容は、ルールが存在するすべてのグループに適用されます。変更を行う場合は、ルールのバージョン番号を少なくとも1つ増やしてください。
- カスタムルールを削除するには、ルールの削除()ボタンをクリックします。ルールが含まれるすべてのルールグループから、そのルールが削除されます。あるグループから1つのルールだけを削除する場合は、ルールを削除する代わりに[グループ割り当ての管理]オプションを使用します。
- ルールを含むグループを変更するには、その他のオプション(...)ボタンをクリックし、[グループ割り当ての管理]を選択します。その後、グループを追加または削除できます。変更はグループメンバーシップに影響するだけで、ルールの変更や削除は行いません。

ステップ 4 新しいルールとグループの場合は、ルールをポリシーに追加します。

新しいルールの作成時または既存のルールの編集時に新しいグループを作成すると、そのグループはポリシーに自動的に追加されず、ルールも自動的に有効になりません。編集するポリシーにグループを追加するように求められます。ルールの追加または編集集中にグループを追加しない場合は、次のプロセスを使用して後でグループを追加できます。

- a) グループの目次の上にある[+] > [既存のルールグループを追加]をクリックします。
- b) [ユーザ定義グループ]フォルダでグループを見つけて選択し、[OK]をクリックします。
- c) 目次でグループを選択し、新しいルールがグループ内にあり、目的のアクションがあることを確認します。

侵入ポリシーのモニタリング

侵入ポリシー統計情報は、[モニタリング (Monitoring)] ページの [攻撃者 (Attackers)] および [ターゲット (Targets)] ダッシュボードで確認できます。これらのダッシュボードに情報を

表示するには、侵入ポリシー1つ以上のアクセス制御ルールに適用する必要があります。「[トラフィックおよびシステムダッシュボードのモニタリング（127ページ）](#)」を参照してください。

侵入イベントを表示するには、**[モニタリング (Monitoring)] > [イベント (Events)]** を選択して、**[侵入 (Intrusion)]** タブをクリックします。イベントの上にマウスを置き、**[詳細の表示 (View Details)]** へのリンクをクリックして、詳細情報を表示できます。詳細ページから、**[IPS ルールの表示 (View IPS Rule)]** をクリックして、関連する侵入ポリシーのルールへ移動して、そこでルールアクションを変更することができます。ルールによりブロックされる適切な接続が多すぎる場合に、アクションをドロップから警告に変更することにより、誤検出の影響を軽減することができます。逆に、ルールに対する攻撃トラフィックが多い場合は、アラートルールをドロップルールに変更できます。

侵入ポリシーの syslog サーバを設定した場合、侵入イベントのメッセージ ID は 430001 です。

侵入ポリシーの例

使用例の章には、次の侵入ポリシーの実装例が含まれています。

- [脅威のブロック方法（65 ページ）](#)
- [ネットワークでトラフィックを受動的にモニタする方法（92 ページ）](#)



第 24 章

ネットワーク アドレス変換（NAT）

ここでは、ネットワーク アドレス変換（NAT）とその設定方法について説明します。

- [NAT を使用する理由（691 ページ）](#)
- [NAT の基礎（692 ページ）](#)
- [NAT のガイドライン（700 ページ）](#)
- [NAT の設定（707 ページ）](#)
- [IPv6 ネットワークの変換（741 ページ）](#)
- [NAT のモニタリング（755 ページ）](#)
- [NAT の例（756 ページ）](#)

NAT を使用する理由

IP ネットワーク内の各コンピュータおよびデバイスには、ホストを識別する固有の IP アドレスが割り当てられています。パブリック IPv4 アドレスが不足しているため、これらの IP アドレスの大部分はプライベートであり、プライベートの企業ネットワークの外部にルーティングできません。RFC 1918 では、アドバタイズされない、内部で利用できるプライベート IP アドレスが次のように定義されています。

- 10.0.0.0 ～ 10.255.255.255
- 172.16.0.0 ～ 172.31.255.255
- 192.168.0.0 ～ 192.168.255.255

NAT の主な機能の 1 つは、プライベート IP ネットワークがインターネットに接続できるようにすることです。NAT は、プライベート IP アドレスをパブリック IP に置き換え、内部プライベート ネットワーク内のプライベート アドレスをパブリック インターネットで使用可能な正式の、ルーティング可能なアドレスに変換します。このようにして、NAT はパブリック アドレスを節約します。これは、ネットワーク全体に対して 1 つのパブリック アドレスだけを外部に最小限にアドバタイズするように NAT を設定できるからです。

NAT の他の機能は、次のとおりです。

- セキュリティ：内部アドレスを隠蔽し、直接攻撃を防止します。

- **IP ルーティング ソリューション**：NAT を使用する際は、重複 IP アドレスが問題になりません。
- **柔軟性**：外部で使用可能なパブリック アドレスに影響を与えずに、内部 IP アドレッシング スキームを変更できます。たとえば、インターネットにアクセス可能なサーバの場合、インターネット用に固定 IP アドレスを維持できますが、内部的にはサーバのアドレスを変更できます。
- **IPv4 と IPv6（ルーテッド モードのみ） の間の変換**：IPv6 ネットワークを IPv4 ネットワークに 接続する場合は、NAT を使用すると、2 つのタイプのアドレス間で変換を行うことができます。



(注) NAT は必須ではありません。特定のトラフィック セットに NAT を設定しない場合、そのトラフィックは変換されませんが、セキュリティ ポリシーはすべて通常どおりに適用されます。

NAT の基礎

ここでは、NAT の基礎について説明します。

NAT の用語

このマニュアルでは、次の用語を使用しています。

- **実際のアドレス/ホスト/ネットワーク/インターフェイス**：実際のアドレスとは、ホストで定義されている、変換前のアドレスです。内部ネットワークが外部にアクセスするときに内部ネットワークを変換するという典型的な NAT のシナリオでは、内部ネットワークが「実際の」ネットワークになります。内部ネットワークだけでなく、デバイスに接続された任意のネットワークを変換することに注意してください。したがって、外部アドレスを変換するように NAT を設定した場合、「実際の」ネットワークは、外部ネットワークが内部ネットワークにアクセスしたときの外部ネットワークを指します。
- **マッピングアドレス/ホスト/ネットワーク/インターフェイス**：マッピングアドレスとは、実際のアドレスが変換されるアドレスです。内部ネットワークが外部にアクセスするときに内部ネットワークを変換するという典型的な NAT のシナリオでは、外部ネットワークが「マッピング」ネットワークになります。



(注) アドレスの変換時、デバイスのインターフェイス用に設定された IP アドレスは変換されません。

- **双方向の開始**：スタティック NAT では、双方向に接続を開始できます。つまり、ホストへの接続とホストからの接続の両方を開始できます。

- 送信元および宛先の NAT : 任意のパケットについて、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスの両方を NAT ルールと比較し、1 つまたは両方を変換する、または変換しないことができます。スタティック NAT の場合、ルールは双方向です。このガイドでは、特定の接続が「宛先」アドレスから発生する場合でも、コマンドや説明に「送信元」および「宛先」が使用されるので注意してください。

NAT タイプ

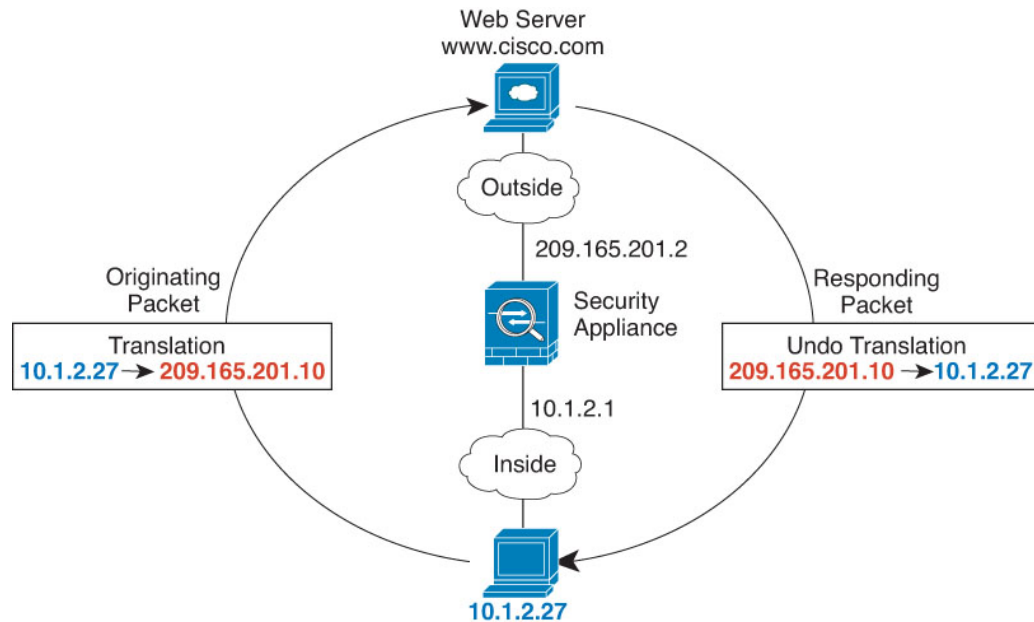
NAT は、次の方法を使用して実装できます。

- ダイナミック NAT : 実際の IP アドレスのグループが、（通常は、より小さい）マッピング IP アドレスのグループに先着順でマッピングされます。実際のホストだけがトラフィックを開始できます。[ダイナミック NAT \(708 ページ\)](#) を参照してください。
- ダイナミック ポート アドレス変換 (PAT) : 実際の IP アドレスのグループが、1 つの IP アドレスにマッピングされます。この時、この IP アドレスの一意の送信元ポートが使用されます。[ダイナミック PAT \(714 ページ\)](#) を参照してください。
- スタティック NAT : 実際の IP アドレスとマッピング IP アドレスとの間での一貫したマッピング。双方向にトラフィックを開始できます。[スタティック NAT \(720 ページ\)](#) を参照してください。
- アイデンティティ NAT : 実際のアドレスがスタティックにそのアドレス自身に変換されます。基本的に NAT を回避します。大規模なアドレス グループは変換し、小さいアドレス グループは除外する場合、NAT をこの方法で設定します。「[アイデンティティ NAT \(730 ページ\)](#)」を参照してください。

ルーテッド モードの NAT

次の図は、内部にプライベート ネットワークを持つ、ルーテッド モードの一般的な NAT の例を示しています。

図 34: NAT の例 : ルーテッド モード



1. 内部ホスト 10.1.2.27 が Web サーバにパケットを送信すると、パケットの実際の送信元アドレス 10.1.2.27 はマッピング アドレス 209.165.201.10 に変換されます。
2. サーバが応答すると、マッピング アドレス 209.165.201.10 に応答を送信し、Threat Defense デバイスがそのパケットを受信します。これは、Threat Defense デバイスがプロキシ ARP を実行してパケットを要求するためです。
3. Threat Defense デバイスはその後、パケットをホストに送信する前に、マッピング アドレス 209.165.201.10 を変換し、実際のアドレス 10.1.2.27 に戻します。

自動 NAT および 手動 NAT

自動 NAT および 手動 NAT という 2 種類の方法でアドレス変換を実装できます。

手動 NAT の追加機能を必要としない場合は、自動 NAT を使用することをお勧めします。自動 NAT の設定が容易で、Voice over IP (VoIP) などのアプリケーションでは信頼性が高い場合があります (VoIP では、ルールで使用されるオブジェクトのいずれにも属さない間接アドレスの変換が失敗することがあります)。

自動 NAT

ネットワーク オブジェクトのパラメータとして設定されているすべての NAT ルールは 自動 NAT ルールとみなされます。これは、ネットワーク オブジェクトに NAT を設定するための迅速かつ簡単な方法です。ただし、これらのルールをグループオブジェクトに対して作成できません。

これらのルールはオブジェクト自体の一部として設定されますが、オブジェクトマネージャからオブジェクト定義内の NAT 設定は確認できません。

パケットがインターフェイスに入ると、送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスの両方が 自動 NAT ルールと照合されます。個別の照合が行われる場合、パケット内の送信元 IP アドレスと宛先 IP アドレスは、個別のルールによって変換できます。これらのルールは、相互に結び付けられていません。トラフィックに応じて、異なる組み合わせのルールを使用できます。

ルールがペアになることはないので、sourceA/destinationA で sourceA/destinationB とは別の変換が行われるように指定することはできません。この種の機能には、手動 NAT を使用することで、1 つのルールで送信元アドレスおよび宛先アドレスを識別できます。

手動 NAT

手動 NAT では、1 つのルールで送信元アドレスと宛先アドレスの両方を識別できます。送信元アドレスと宛先アドレスの両方を指定すると、sourceA/destinationA で sourceA/destinationB とは別の変換が行われるように指定できます。



- (注) スタティック NAT の場合、ルールは双方向であるため、たとえば、特定の接続が「宛先」アドレスから発生する場合でも、このガイド内でのコマンドおよび説明では「送信元」および「宛先」が使用されていることに注意してください。たとえば、ポートアドレス変換を使用するスタティック NAT を設定し、送信元アドレスを Telnet サーバとして指定する場合に、Telnet サーバに向かうすべてのトラフィックのポートを 2323 から 23 に変換するには、変換する送信元ポート（実際：23、マッピング：2323）を指定する必要があります。Telnet サーバアドレスを送信元アドレスとして指定しているため、その送信元ポートを指定します。

宛先アドレスはオプションです。宛先アドレスを指定する場合、宛先アドレスを自身にマッピングするか（アイデンティティ NAT）、別のアドレスにマッピングできます。宛先マッピングは、常にスタティック マッピングです。

自動 NAT と 手動 NAT の比較

これら 2 つの NAT タイプの主な違いは、次のとおりです。

- 実際のアドレスの定義方法
 - 自動 NAT : NAT ルールがネットワーク オブジェクトのパラメータになります。ネットワーク オブジェクトの IP アドレスは元の（実際の）アドレスとして機能します。
 - 手動 NAT : 実際のアドレスとマッピングアドレス両方のネットワークオブジェクトまたはネットワーク オブジェクト グループを識別します。この場合、NAT はネットワーク オブジェクトのパラメータではありません。ネットワーク オブジェクトまたはグループが、NAT コンフィギュレーションのパラメータです。実際のアドレスのネットワーク オブジェクト グループを使用できることは、手動 NAT がよりスケーラブルであることを意味します。
- 送信元および宛先 NAT の実装方法

- 自動 NAT : 各ルールは、パケットの送信元または宛先のいずれかに適用できます。つまり、送信元 IP アドレスに 1 つ、宛先 IP アドレスに 1 つと、2 つのルールが使用されることがあります。これらの 2 つのルールを相互に結び付けて、送信先と宛先の組み合わせに特定の変換を適用することはできません。
- 手動 NAT : 1 つのルールにより送信元と宛先の両方が変換されます。パケットは 1 つのルールにのみ一致し、それ以上のルールはチェックされません。オプションの宛先アドレスを設定しない場合でも、マッチングするパケットは、1 つの手動 NAT ルールだけに一致します。送信元および宛先は相互に結び付けられるので、送信元と宛先の組み合わせに応じて、異なる変換を適用できます。たとえば、sourceA/destinationA には、sourceA/destinationB とは異なる変換を設定できます。
- NAT ルールの順序
 - 自動 NAT : NAT テーブルで自動的に順序付けされます。
 - 手動 NAT : NAT テーブルで手動で順序付けします（自動 NAT ルールの前または後）。

NAT ルールの順序

自動 NAT および 手動 NAT ルールは、3 つのセクションに分割される 1 つのテーブルに保存されます。最初にセクション 1 のルール、次にセクション 2、最後にセクション 3 というように、一致が見つかるまで順番に適用されます。たとえば、セクション 1 で一致が見つかった場合、セクション 2 とセクション 3 は評価されません。次の表に、各セクション内のルールの順序を示します。



- (注) セクション 0 もあり、このセクションには、システムが使用するために作成される NAT ルールが含まれています。これらのルールは、他のすべてのルールよりも優先されます。これらのルールはシステムで自動的に作成され、必要に応じて `xlates` がクリアされます。セクション 0 では、ルールの追加、編集、または変更はできません。

表 12: NAT ルール テーブル

テーブルのセクション	ルール タイプ	セクション内のルールの順序
セクション 1	手動 NAT	コンフィギュレーションに登場する順に、最初の一致ベースで適用されます。最初の一致が適用されるため、一般的なルールの前に固有のルールが来るようにする必要があります。そうしない場合、固有のルールを期待どおりに適用できない可能性があります。デフォルトでは、手動 NAT ルールはセクション 1 に追加されます。 「固有のルールを前に」とは、次のことを意味します。 - 静的ルールは動的ルールの前に配置する必要があります。 - 宛先変換を含むルールは、送信元変換のみのルールの前に配置する必要があります。 送信元アドレスまたは宛先アドレスに基づいて複数のルールが適用される可能性がある重複するルールを排除できない場合は、これらの推奨事項に従うように特に注意してください。
セクション 2	自動 NAT	セクション 1 で一致が見つからない場合、セクション 2 のルールが次の順序で適用されます。 1. スタティック ルール 2. ダイナミック ルール 各ルールタイプでは、次の順序のガイドラインが使用されます。 1. 実際の IP アドレスの数量：小から大の順。たとえば、アドレスが 1 個のオブジェクトは、アドレスが 10 個のオブジェクトよりも先に評価されます。 2. 数量が同じ場合には、アドレス番号（低から高の順）が使用されます。たとえば、10.1.1.0 は、11.1.1.0 よりも先に評価されます。 3. 同じ IP アドレスが使用される場合、ネットワーク オブジェクトの名前がアルファベット順で使用されます。たとえば、abracadabra は catwoman よりも先に評価されます。

テーブルのセクション	ルール タイプ	セクション内のルールの順序
セクション 3	手動 NAT	まだ一致が見つからない場合、セクション3のルールは、コンフィギュレーションに登場する順に、最初の一致ベースで適用されます。このセクションには、最も一般的なルールを含める必要があります。このセクションにおいても、一般的なルールの前に固有のルールが来るようにする必要があります。そうしない場合、一般的なルールが適用されます。

たとえばセクション2のルールでは、ネットワーク オブジェクト内に定義されている次の IP アドレスがあるとしたします。

- 192.168.1.0/24 (スタティック)
- 192.168.1.0/24 (ダイナミック)
- 10.1.1.0/24 (スタティック)
- 192.168.1.1/32 (ダイナミック)
- 172.16.1.0/24 (ダイナミック) (オブジェクト def)
- 172.16.1.0/24 (ダイナミック) (オブジェクト abc)

この結果、使用される順序は次のとおりです。

- 192.168.1.1/32 (ダイナミック)
- 10.1.1.0/24 (スタティック)
- 192.168.1.0/24 (スタティック)
- 172.16.1.0/24 (ダイナミック) (オブジェクト abc)
- 172.16.1.0/24 (ダイナミック) (オブジェクト def)
- 192.168.1.0/24 (ダイナミック)

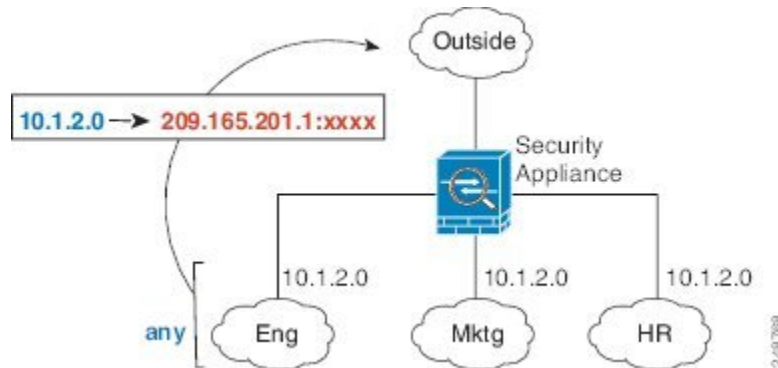
NAT インターフェイス

ブリッジグループメンバー インターフェイスを除き、NATルールを設定して任意のインターフェイス（つまり、すべてのインターフェイス）に適用できます。または、特定の実際のインターフェイスおよびマッピングインターフェイスを識別できます。実際のアドレスには任意のインターフェイスを指定できます。マッピングインターフェイスには特定のインターフェイスを指定できます。または、その逆も可能です。

たとえば、複数のインターフェイスで同じプライベートアドレスを使用し、外部へのアクセス時にはすべてのインターフェイスを同じグローバルプールに変換する場合、実際のアドレスに

任意のインターフェイスを指定し、マッピングアドレスには外部インターフェイスを指定します。

図 35: 任意のインターフェイスの指定



ただし、「任意の」インターフェイスの概念は、ブリッジグループメンバーのインターフェイスには適用されません。「任意の」インターフェイスを指定する場合、すべてのブリッジグループメンバーインターフェイスは除外されます。このため、NAT をブリッジグループメンバーに適用するには、メンバーインターフェイスを指定する必要があります。したがって、ただ 1 つのインターフェイスが異なるだけで多数の類似したルールができる可能性があります。ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) 自体に NAT を設定することはできませんが、メンバーのインターフェイスのみに NAT を設定することはできます。

パッシブ インターフェイスでは NAT を設定できません。

NAT 用のルーティングの設定

脅威に対する防御 デバイスは、変換された (マッピング) アドレスに送信されるパケットの宛先である必要があります。

パケットを送信する際、デバイスは宛先インターフェイスを使用するか (指定した場合)、またはルーティング テーブルルックアップ (指定しない場合) を使用して、出力インターフェイスを決定します。アイデンティティ NAT の場合は、宛先インターフェイスを指定した場合でもルート ルックアップを使用することができます。

以下で説明するように、必要なルーティング設定はマッピングアドレスによって異なります。

マッピング インターフェイスと同じネットワーク上のアドレス

宛先 (マッピング) インターフェイスと同じネットワーク上のアドレスを使用する場合、Threat Defense デバイスはプロキシ ARP を使用してマッピングアドレスの ARP 要求に応答し、マッピングアドレス宛てのトラフィックを代行受信します。この方法では、Threat Defense デバイスがその他のネットワークのゲートウェイである必要がないため、ルーティングが簡略化されます。このソリューションは、外部ネットワークに十分な数のフリーアドレスが含まれている場合に最も適しており、ダイナミック NAT またはスタティック NAT などの 1:1 変換を使用している場合は考慮が必要です。ダイナミック PAT ではアドレス数が少なくても使用できる変換の数が大幅に拡張されるので、外部ネットワークで利用できるアドレスが少ししかない場合

でも、この方法を使用できます。PAT では、マッピング インターフェイスの IP アドレスも使用できます。

固有のネットワーク上のアドレス

宛先（マッピングされた）インターフェイス ネットワークで使用可能なアドレスより多くのアドレスが必要な場合は、別のサブネット上のアドレスを識別できます。アップストリーム ルータには、Threat Defense デバイスを指しているマッピングアドレスのスタティック ルートが必要です。

実際のアドレスと同じアドレス（アイデンティティ NAT）

アイデンティティ NAT のデフォルト動作で、プロキシ ARP は有効になっており、他の静的 NAT ルールと一致します。必要に応じてプロキシ ARP をディセーブルにできます。また、必要に応じて通常のスタティック NAT のプロキシ ARP をディセーブルにすることもできます。その場合には、アップストリーム ルータに適切なルートが確実に設定されていなくてはなりません。

アイデンティティ NAT の場合、通常はプロキシ ARP が不要で、場合によっては接続性に関する問題を引き起こす可能性があります。たとえば、「any」の IP アドレスに対して広範囲のアイデンティティ NAT ルールを設定した場合は、プロキシ ARP をイネーブルのままにしておくと、マッピング インターフェイスに直接接続されたネットワーク上のホストに問題が発生する可能性があります。この場合、マッピング ネットワークのホストが同じネットワークの他のホストと通信すると、ARP 要求内のアドレスは（任意のアドレスと一致する）NAT ルールと一致します。このとき、実際には Threat Defense デバイス 向けのパケットでない場合でも、Threat Defense デバイスはこのアドレスの ARP をプロキシします（この問題は、手動 NAT ルールが設定されている場合にも発生します。NAT ルールは送信元と宛先のアドレス両方に一致する必要がありますが、プロキシ ARP 判定は「送信元」アドレスに対してのみ行われます）。実際のホストの ARP 応答の前に Threat Defense デバイスの ARP 応答を受信した場合、トラフィックは誤って Threat Defense デバイス に送信されます。

NAT のガイドライン

ここでは、NAT の実装に関する詳細なガイドラインについて説明します。

インターフェイス ガイドライン

NAT は標準の物理ルーテッド インターフェイスまたはサブインターフェイスでサポートされます。

ただし、ブリッジグループメンバー インターフェイス（ブリッジ仮想インターフェイス（BVI）の一部であるインターフェイス）の NAT の設定には次の制限があります。

- ブリッジグループのメンバーの NAT を設定するときは、メンバー インターフェイスを指定します。ブリッジグループ インターフェイス（BVI）自体に NAT を設定することはできません。

- ブリッジ グループ メンバー インターフェイス間で NAT を行う場合は、送信元と宛先のインターフェイスを指定する必要があります。インターフェイスとして「any」を指定することはできません。
- 宛先インターフェイスがブリッジグループメンバーインターフェイスの場合は、インターフェイスにアタッチされている IP アドレスがないため、インターフェイス PAT を設定できません。
- 送信元と宛先のインターフェイスが同じブリッジグループのメンバーである場合、IPv4 と IPv6 ネットワーク（NAT64/46）の間での変換はできません。スタティック NAT/PAT 44/66、ダイナミック NAT44/66、およびダイナミック PAT44 のみが使用可能な方式であり、ダイナミック PAT66 はサポートされていません。

IPv6 NAT ガイドライン

NAT では、次のガイドラインと制御事項に基づいて IPv6 をサポートしています。

- 標準ルーテッド モード インターフェイスの場合、IPv4 と IPv6 の間の変換も可能です。
- 同一ブリッジグループのメンバーであるインターフェイスの IPv4 と IPv6 間の変換はできません。2つの IPv6 または 2つの IPv4 ネットワーク間でのみ変換できます。この制限は、ブリッジグループのメンバーと標準的なルーテッド インターフェイスの間には該当しません。
- 同じブリッジグループのインターフェイス間で変換するときは、IPv6 のダイナミック PAT（NAT66）を使用できません。この制限は、ブリッジグループのメンバーと標準的なルーテッド インターフェイスの間には該当しません。
- スタティック NAT の場合は、/64 までの IPv6 サブネットを指定できます。これよりも大きいサブネットはサポートされません。
- FTP を NAT46 とともに使用する場合は、IPv4 FTP クライアントが IPv6 FTP サーバに接続するときに、クライアントは拡張パッシブ モード（EPSV）または拡張ポート モード（EPRT）を使用する必要があります。PASV コマンドおよび PORT コマンドは IPv6 ではサポートされません。

IPv6 NAT のベスト プラクティス

NAT を使用すると、IPv6 ネットワーク間、さらに IPv4 および IPv6 ネットワークの間で変換できます（ルーテッド モードのみ）。次のベスト プラクティスを推奨します。

- NAT66（IPv6-to-IPv6）：スタティック NAT を使用することを推奨します。ダイナミック NAT または PAT を使用できますが、IPv6 アドレスは大量にあるため、ダイナミック NAT を使用する必要がありません。リターントラフィックを許可しない場合は、スタティック NAT ルールを単一方向にできます（手動 NAT のみ）。
- NAT46（IPv4-to-IPv6）：スタティック NAT を使用することを推奨します。IPv6 アドレス空間は IPv4 アドレス空間よりかなり大きいので、容易にスタティック変換に対応でき

ます。リターン トラフィックを許可しない場合は、スタティック NAT ルールを単一方向にできます（手動 NAT のみ）。IPv6 サブネットに変換する場合（/96 以下）、結果のマッピングアドレスはデフォルトで IPv4 埋め込み IPv6 アドレスとなります。このアドレスでは、IPv4 アドレスの 32 ビットが IPv6 プレフィックスの後に埋め込まれています。たとえば、IPv6 プレフィックスが /96 プレフィックスの場合、IPv4 アドレスは、アドレスの最後の 32 ビットに追加されます。たとえば、201b::0/96 に 192.168.1.0/24 をマッピングする場合、192.168.1.4 は 201b::0.192.168.1.4 にマッピングされます（混合表記で表示）。/64 など、より小さいプレフィックスの場合、IPv4 アドレスがプレフィックスの後に追加され、サフィックスの 0 が IPv4 アドレスの後に追加されます。

- NAT64（IPv6-to-IPv4）：IPv6 アドレスの数に対応できる十分な数の IPv4 アドレスがない場合があります。大量の IPv4 変換を提供するためにダイナミック PAT プールを使用することを推奨します。

検査対象プロトコルの NAT サポート

セカンダリ接続を開いたり、パケットに IP アドレスを埋め込んだりする、一部のアプリケーション層プロトコルは、次のサービスを提供するために検査されます。

- ピンホール作成：一部のアプリケーション プロトコルは標準ポートまたはネゴシエートポートのどちらかでセカンダリ TCP または UDP 接続を開きます。検査により、これらのセカンダリポートに対してピンホールが開かれるため、アクセス制御ルールを作成する必要はありません。
- NAT リライト：FTP などのプロトコルは、セカンダリ接続用の IP アドレスとポートをプロトコルの一部としてパケットデータに埋め込みます。いずれかのエンドポイントに対して NAT 変換が含まれている場合、インスペクションエンジンはパケットデータを書き換えて、埋め込まれたアドレスとポートの NAT 変換を反映させます。NAT リライトなしでは、セカンダリ接続は機能しません。
- プロトコル強制：一部の検査は、検査対象プロトコルの RFC に対して一定の準拠を強制します。

次の表は、NAT リライトが適用される検査対象プロトコルとそれらの NAT 制限を示します。これらのプロトコルを含む NAT ルールを作成する場合は、これらの制限に留意してください。ここに示されていない検査対象プロトコルには NAT リライトが適用されません。こうしたインスペクションには GTP、HTTP、IMAP、POP、SMTP、SSH および SSL があります。



-
- (注) NAT リライトは示されているポートでのみサポートされます。これらのプロトコルを非標準ポートで使用する場合、接続で NAT を使用しないでください。
-

表 13: NAT がサポートするアプリケーション インспекション

アプリケーション	検査対象のプロトコル、ポート	NAT の制限	ピンホールの作成
DCERPC	TCP/135	NAT64 はサポートされません。	はい
直径	TCP/3868 TCP/5868 (TCP/TLS の場合) SCTP/3868	NAT/PAT なし。	はい
DNS over UDP	UDP/53	NAT サポートは、WINS 経由の名前解決では使用できません。	いいえ
ESMTP	TCP/25	NAT64 はサポートされません。	いいえ
FTP	TCP/21	制限なし。	○
GTP	UDP/3386 (GTPv0) UDP/2123 (GTPv1+)	拡張 PAT はサポートされません。 NAT なし。	—
H.323 H.225 (発呼信号) H.323 RAS	TCP/1720 UDP/1718 RAS の場合、 UDP/1718 ~ 1719	NAT64 はサポートされません。	はい
ICMP ICMP Error	ICMP (デバイス インターフェイスに転送される ICMP トラフィックは検査されません)	制限なし。	いいえ
IP オプション	RSVP	NAT64 はサポートされません。	いいえ
M3UA	SCTP/2905	組み込みアドレス用の NAT または PAT なし。	—
NetBIOS Name Server over IP	UDP/137、138 (送信元ポート)	NAT64 はサポートされません。	いいえ
RSH	TCP/514	PAT はサポートされません。 NAT64 はサポートされません。	○
RTSP	TCP/554 (HTTP クローキングは処理されません)	NAT64 はサポートされません。	○

アプリケーション	検査対象のプロトコル、ポート	NAT の制限	ピンホールの作成
SIP	TCP/5060 UDP/5060	拡張 PAT はサポートされません。 NAT64 または NAT46 はなし。	○
Skinny (SCCP)	TCP/2000	NAT64、NAT46、または NAT66 はなし。	○
SQL*Net (バージョン 1 および 2)	TCP/1521	NAT64 はサポートされません。	○
SCTP	SCTP	SCTP トラフィックでスタティック ネットワーク オブジェクト NAT を実行できますが (ダイナミック NAT/PAT なし)、インスペクション エンジン は NAT には使用されません。	非対応
Sun RPC	TCP/111 UDP/111	NAT64 はサポートされません。	はい
TFTP	UDP/69	NAT64 はサポートされません。 ペイロード IP アドレスは変換されません。	はい
XDMCP	UDP/177	NAT64 はサポートされません。	対応

FQDN 宛先のガイドライン

IP アドレスの代わりに完全修飾ドメイン名 (FQDN) ネットワークオブジェクトを使用して、手動 NAT ルールに変換済み (マッピング) 宛先を指定できます。たとえば、`www.example.com` Web サーバを宛先とするトラフィックに基づいてルールを作成できます。

FQDN を使用すると、システムは DNS 解決を取得し、返されたアドレスに基づいて NAT ルールを書き込みます。DNS サーバから複数のアドレスを取得する場合、使用されるアドレスは次の情報に基づきます。

- 指定したインターフェイスと同じサブネット上にアドレスがある場合は、そのアドレスが使用されます。同じサブネットに存在しない場合は、最初に返されたアドレスが使用されます。
- 変換後の送信元と変換後の宛先の IP タイプは一致している必要があります。たとえば、変換後の送信元アドレスが IPv6 の場合、FQDN オブジェクトはアドレスタイプとして IPv6 を指定する必要があります。変換後の送信元が IPv4 の場合、FQDN オブジェクトはアドレスタイプとして IPv4 を指定する必要があります。変換後の送信元が IPv4 の場合、FQDN オブジェクトは IPv4 または IPv4 と IPv6 の両方を指定できます。この場合、IPv4 アドレスが選択されます。

手動 NAT 宛先に使用されるネットワークグループに FQDN オブジェクトを含めることはできません。NAT では、1 つの宛先ホストだけがこのタイプの NAT ルールに適しているため、FQDN オブジェクトは単独で使用する必要があります。

FQDN を IP アドレスに解決できない場合、DNS 解決が取得されるまでルールは機能しません。

NAT のガイドラインの補足

- ブリッジ グループ メンバーであるインターフェイスに対しては、NAT ルールを作成しません。ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) 自体には、NAT ルールは作成できません
- サイト間 VPN で使用される仮想トンネルインターフェイス (VTI) の NAT ルールは作成できません。VTI の送信元インターフェイスのルールを作成すると、NAT は VPN トンネルに適用されません。VTI でトンネリングされた VPN トラフィックに適用される NAT ルールを作成するには、インターフェイスとして [任意 (any)] を使用する必要があります。インターフェイス名を明示的に指定することはできません。
- (自動 NAT のみ)。特定のオブジェクトに対して 1 つの NAT ルールだけを定義できません。オブジェクトに対して複数の NAT ルールを設定する場合は、同じ IP アドレスを指定する異なる名前の複数のオブジェクトを作成する必要があります。
- VPN がインターフェイスで定義されると、インターフェイスの着信 ESP トラフィックに NAT ルールは適用されません。システムでは、確立されている VPN トンネルの ESP トラフィックだけが許可され、既存のトンネルに関連付けられていないトラフィックはドロップされます。この制約は ESP と UDP ポート 500 および 4500 に適用されます。
- ダイナミック PAT を適用しているデバイスの背後にあるデバイスでサイト間 VPN を定義する場合、UDP ポート 500 および 4500 は実際に使用されないため、PAT デバイス背後のデバイスから接続を開始する必要があります。正しいポート番号がわからないため、レスポンドはセキュリティ アソシエーション (SA) を開始できません。
- NAT コンフィギュレーションを変更したときに、既存の変換がタイムアウトするまで待たずに新しい NAT コンフィギュレーションを使用できるようにするには、デバイス CLI で **clear xlate** コマンドを使用して変換テーブルを消去します。ただし、変換テーブルを消去すると、変換を使用している現在の接続がすべて切断されます。

既存の接続 (VPN トンネルなど) に適用する新しい NAT ルールを作成する場合は、**clear conn** を使用して接続を終了する必要があります。その後、接続を再確立しようとすると、NAT ルールが適用され、接続が正しく NAT 変換されます。



- (注) ダイナミック NAT または PAT ルールを削除し、削除したルールに含まれるアドレスと重複するマッピングアドレスを含む新しいルールを追加すると、削除されたルールに関連付けられたすべての接続がタイムアウトするか、**clear xlate** または **clear conn** コマンドを使用してクリアされるまで、新しいルールは使用されません。この予防手段のおかげで、同じアドレスが複数のホストに割り当てられないようにできます。

- 1つのオブジェクトグループに IPv4 と IPv6 の両方のアドレスを入れることはできません。オブジェクトグループには、1つのタイプのアドレスだけが含まれている必要があります。
- アドレスやサブネットの範囲内で明示的に指定するか暗黙的に指定するかにかかわらず、NAT で使用されるネットワークオブジェクトに 131,838 を超える IP アドレスを含めることはできません。アドレス空間をより狭い範囲に分割し、小さなオブジェクトに対して個別のルールを作成します。
- (手動 NAT のみ)。発信元アドレスとして **any** を NAT ルールで使用する場合、「any」トラフィックの定義 (IPv4 と IPv6) はルールによって異なります。Threat Defense デバイスがパケットに対して NAT を実行する前に、パケットが IPv6-to-IPv6 または IPv4-to-IPv4 である必要があります。この前提条件では、Threat Defense デバイスは、NAT ルールの **any** の値を決定できます。たとえば、「any」から IPv6 サーバへのルールを設定しており、このサーバが IPv4 アドレスからマッピングされている場合、**any** は「任意の IPv6 トラフィック」を意味します。「any」から「any」へのルールを設定し、送信元をインターフェイスの IPv4 アドレスにマッピングする場合、**any** は「任意の IPv4 トラフィック」を意味します。これは、マッピングされたインターフェイス アドレスが、宛先も IPv4 であることを暗示しているためです。
- 同じマッピング オブジェクトやグループを複数の NAT ルールで使用できます。
- マッピング IP アドレス プールには、次のアドレスを含めることはできません。
 - マッピング インターフェイスの IP アドレス。ルールに「any」インターフェイスを指定すると、すべてのインターフェイスの IP アドレスが拒否されます。インターフェイス PAT (ルーテッドモードのみ) の場合は、インターフェイス アドレスの代わりにインターフェイス名を指定します。
 - フェールオーバー インターフェイスの IP アドレス。
 - (ダイナミック NAT) VPN が有効な場合は、スタンバイ インターフェイスの IP アドレス。
- スタティックおよびダイナミック NAT ポリシーでは重複アドレスを使用しないでください。たとえば、重複アドレスを使用すると、PPTP のセカンダリ接続がダイナミック xlate ではなくスタティック xlate にヒットした場合、PPTP 接続の確立に失敗する可能性があります。
- NAT ルールの送信元アドレスとリモートアクセス VPN アドレスプールの重複アドレスは使用できません。
- ルールで宛先インターフェイスを指定すると、ルーティングテーブルでルートが検索されるのではなく、そのインターフェイスが出力インターフェイスとして使用されます。ただしアイデンティティ NAT の場合は、代わりにルート ルックアップを使用することもできます。
- NAT はトラフィックを介してのみ適用されます。システムによって生成されたトラフィックは、NAT の対象外です。

- ネットワークオブジェクトまたはグループの PAT プールには、大文字と小文字を組み合わせた名前を付けないでください。
- Protocol Independent Multicast (PIM) レジスタの内部ペイロードで NAT を使用することはできません。
- (手動 NAT) デュアル ISP インターフェイス セットアップ (ルーティング設定でサービスレベルアグリーメントを使用するプライマリインターフェイスとバックアップインターフェイス) の NAT ルールを作成する場合は、ルールで宛先基準を指定しないでください。プライマリインターフェイスのルールがバックアップインターフェイスのルールよりも前にあることを確認してください。これにより、デバイスは、プライマリ ISP が利用できない場合に、現在のルーティング状態に基づいて正しい NAT 宛先インターフェイスを選択できます。宛先オブジェクトを指定すると、NAT ルールは、指定しない場合には重複するルールのプライマリインターフェイスを常に選択します。
- インターフェイスに定義された NAT ルールと一致しないトラフィックについて ASP ドロップ理由 `nat-no-xlate-to-pat-pool` が示される場合は、影響を受けるトラフィックのアイデンティティ NAT ルールを設定して、トラフィックが変換されずに通過できるようにします。
- GRE トンネルエンドポイントの NAT を設定する場合は、エンドポイントでキープアライブを無効にする必要があります。無効にしないと、トンネルを確立できません。エンドポイントは、キープアライブを元のアドレスに送信します。
- DHCP と BOOTP はポート UDP/67 ~ 68 を共有します。BOOTP は廃止されているため、DHCP も実行している場合、BOOTP ポートの NAT ルールを作成するとポート割り当ての問題が発生する可能性があります。ネットワークセグメント間で DHCP 要求を送信する場合は、代わりに DHCP リレーを使用することを検討してください。

NAT の設定

ネットワークアドレス変換は非常に複雑になることがあります。変換の問題が発生したり、トラブルシューティングが難しい状況にならないよう、ルールはできるだけ単純にすることを推奨します。NAT を実装する前に、慎重に計画を立てることが非常に重要です。以下の手順では、基本的なアプローチを説明します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 必要となるルールのタイプを決定します。

作成できるルールには、ダイナミック NAT ルール、ダイナミック PAT ルール、スタティック NAT ルール、およびアイデンティティ NAT ルールがあります。概要については、[NAT タイプ \(693 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 手動 NAT または自動 NAT として実装するルールを決定します。

この 2 つの実装オプションの比較については、[自動 NAT および 手動 NAT \(694 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 以下の項で説明している手順に従ってルールを作成します。

- [ダイナミック NAT \(708 ページ\)](#)
- [ダイナミック PAT \(714 ページ\)](#)
- [スタティック NAT \(720 ページ\)](#)
- [アイデンティティ NAT \(730 ページ\)](#)

ステップ 5 NAT ポリシーおよびルールを管理します。

以下の操作によって、ポリシーとそのルールを管理できます。

- ルールを編集するには、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
- ルールを削除するには、対象のルールの削除アイコン (🗑) をクリックします。

ダイナミック NAT

ここでは、ダイナミック NAT とその設定方法について説明します。

ダイナミック NAT について

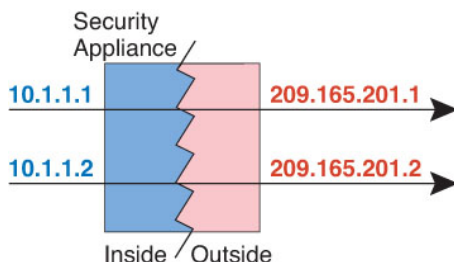
ダイナミック NAT では、実際のアドレスのグループは、宛先ネットワーク上でルーティング可能なマッピングアドレスのプールに変換されます。マッピングされたプールにあるアドレスは、通常、実際のグループより少なくなります。変換対象のホストが宛先ネットワークにアクセスすると、マッピングされたプールから IP アドレスが、NAT によって、そのホストに割り当てられます。変換は、実際のホストが接続を開始したときにだけ作成されます。変換は接続が継続している間だけ有効であり、変換がタイムアウトすると、そのユーザは同じ IP アドレスを保持しません。したがって、アクセスルールでその接続が許可されている場合でも、宛先ネットワークのユーザは、ダイナミック NAT を使用するホストへの確実な接続を開始できません。



- (注) 変換の実施中、アクセスルールで許可されていれば、リモートホストは変換済みホストへの接続を開始できます。アドレスは予測不可能であるため、ホストへの接続は確立されません。ただし、この場合は、アクセスルールのセキュリティに依存できます。リモートホストからの接続が成功すると、接続のアイドルタイマーがリセットされます。

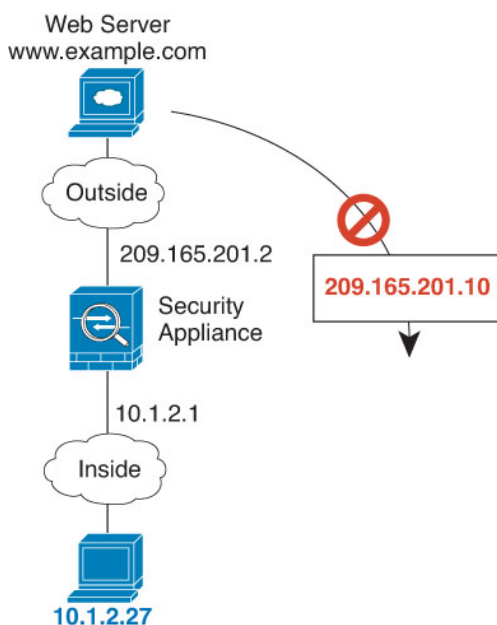
次の図に、一般的なダイナミック NAT のシナリオを示します。実際のホストだけが NAT セッションを作成でき、応答トラフィックが許可されます。

図 36: ダイナミック NAT



次の図に、マッピングアドレスへの接続開始を試みているリモート ホストを示します。このアドレスは、現時点では変換テーブルにないため、パケットはドロップされます。

図 37: マッピング アドレスへの接続開始を試みているリモート ホスト



ダイナミック NAT の欠点と利点

ダイナミック NAT には、次の欠点があります。

- マッピングされたプールにあるアドレスが実際のグループより少ない場合、予想以上にトラフィックが多いと、アドレスが不足する可能性があります。

この事象が発生した場合には、PAT または PAT フォールバック方式を使用します。PAT では、単一アドレスのポートを使用して 64,000 を超える変換を処理できるためです。

- マッピングプールではルーティング可能なアドレスを多数使用する必要があるのに、ルーティング可能なアドレスは多数用意できない場合があります。

ダイナミック NAT の利点は、一部のプロトコルで PAT を使用できないことです。たとえば、PAT は以下において機能しません。

- GRE バージョン 0 などのように、オーバーロードするためのポートがない IP プロトコル。
- 1 つのポート上にデータストリームを持ち、別のポート上に制御パスを持つオープンスタンダードではないアプリケーション。

ダイナミック自動 NAT の設定

ダイナミック自動 NAT ルールを使用して、アドレスを宛先ネットワークでルーティング可能な別の IP アドレスに変換します。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件を満たす必要があります：

- [元のアドレス (Original Address)]：ネットワーク オブジェクト（グループではなく）にする必要があります。ホスト、範囲、またはサブネットのいずれかを使用できます。
- [変換済みアドレス (Translated Address)]：ネットワーク オブジェクトまたはグループを指定できますが、サブネットを含めることはできません。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。グループに範囲とホスト IP アドレスの両方が含まれている場合、範囲はダイナミック NAT に使用され、ホスト IP アドレスは PAT のフォールバックとして使用されます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

- [タイトル (Title)]：ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成 (Create Rule For)]：[自動 NAT (Auto NAT)] を選択します。
- [タイプ (Type)]：[ダイナミック (Dynamic)] を選択します。

ステップ 4 次のパケット変換オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source]は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバー インターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。
- [元のアドレス (Original Address)] : 変換するアドレスを含むネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] : マッピング アドレスが含まれるネットワーク オブジェクトまたはグループを指定します。

ステップ 5 (オプション) [詳細オプション (Advanced Options)] リンクをクリックし、目的のオプションを選択します。

- [このルールに一致する DNS 応答を変換 (Translate DNS replies that match this rule)] : DNS 応答の IP アドレスを変換するかどうかを指定します。マッピング インターフェイスから実際のインターフェイスに移動する DNS 応答の場合、アドレス (IPv4 A または IPv6 AAAA) レコードはマッピングされた値から実際の値に書き換えられます。反対に、実際のインターフェイスからマッピングされたインターフェイスへの DNS 応答の場合、レコードは実際の値からマッピングされた値に書き換えられます。このオプションは特殊なときに使用され、NAT64/46 の変換で必要になる場合もあります。この場合、書き換えによって A レコードと AAAA レコードの変換も実行されます。詳細については、「[NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え \(777 ページ\)](#)」を参照してください。
- [インターフェイス PAT へのフォールスルー (宛先インターフェイス) (Fallthrough to Interface PAT (Destination Interface))] : 他のマッピング アドレスがすでに割り当てられている場合、バックアップ手段として宛先インターフェイスの IP アドレスを使用するかどうか (インターフェイス PAT フォールバック) を指定します。このオプションは、ブリッジ グループのメンバーではない宛先インターフェイスを選択した場合にのみ使用できます。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

ダイナミック手動 NAT の設定

ダイナミック手動 NAT ルールは、自動 NAT ではニーズを満たさない場合に使用します。たとえば、宛先に応じて異なる変換を適用する必要がある場合などです。ダイナミック NAT は、アドレスを宛先ネットワークでルーティング可能な別の IP アドレスに変換します。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件も満たしている必要があります。

- [元の送信元アドレス (Original Source Address)] : ネットワーク オブジェクトまたはグループを指定できます。ホスト、範囲、またはサブネットを含めることができます。すべての元の送信元トラフィックを変換する場合、この手順をスキップし、ルールで [すべて (Any)] を指定します。
- [変換済み送信元アドレス (Translated Source Address)] : ネットワーク オブジェクトまたはグループを指定できますが、サブネットを含めることはできません。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。グループに範囲とホスト IP アドレスの両方が含まれている場合、範囲はダイナミック NAT に使用され、ホスト IP アドレスは PAT のフォールバックとして使用されます。

ルールで各アドレスのスタティック変換を設定すると、[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] および [変換済み宛先アドレス (Translated Destination Address)] のネットワーク オブジェクトを作成できます。

ダイナミック NAT では、宛先でポート変換を行うこともできます。オブジェクト マネージャで、[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] および [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] に使用できるポート オブジェクトがあることを確認します。送信元ポートを指定した場合、無視されます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (🖋️) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

- [タイトル (Title)] : ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] : [手動 NAT (Manual NAT)] を選択します。
- [ルールの配置 (Rule Placement)] : ルールを追加する場所です。ルールは、カテゴリ (自動 NAT ルールの前か後)、または選択したルールの上か下に挿入できます。
- [タイプ (Type)] : [ダイナミック (Dynamic)] を選択します。この設定が適用されるのは、送信元アドレスだけです。宛先アドレスの変換を定義すると、変換は常にスタティックなものになります。

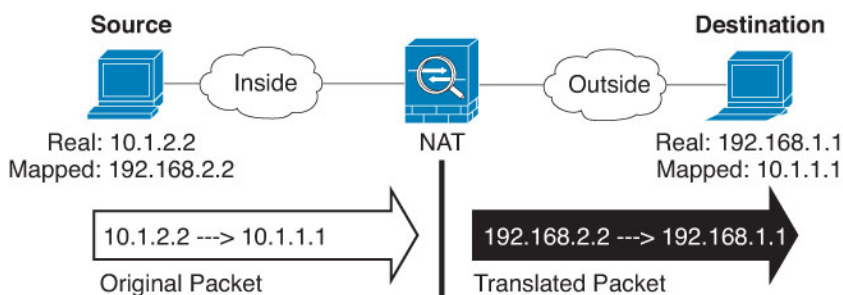
ステップ 4 次のインターフェイス オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされ

たインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバ インターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。

ステップ 5 元の packets アドレス (IPv4 または IPv6) 、つまり、元の packets に表示される packets アドレスを特定します。

元の packets と変換された packets の例については、次の図を参照してください。



- [Original Source][Address] : 変換するアドレスを含むネットワークオブジェクト、またはネットワークグループ。
- [Original Destination][Address] : (オプション)。宛先アドレスを含むネットワークオブジェクト。空白のままにすると、宛先に関係なく、送信元アドレス変換が適用されます。宛先アドレスを指定した場合、そのアドレスにスタティック変換を設定するか、単にアイデンティティ NAT を使用できます。

[インターフェイス (Interface)] の順に選択して、元の宛先を送信元インターフェイスに基づかせることもできます (この場合、[すべて (Any)] を指定することはできません)。このオプションを選択する場合、変換済みの宛先オブジェクトも選択する必要があります。スタティック インターフェイス NAT に宛先アドレスのポート変換を実装するには、このオプションを選択し、さらにその宛先ポートの適切なポートオブジェクトを選択します。

ステップ 6 変換後の packets のアドレスが IPv4 または IPv6 のどちらであることを識別します。つまり、宛先インターフェイス ネットワークで表される packets アドレスです。必要に応じて、IPv4 と IPv6 の間で変換できます。

- [変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)] : マッピング アドレスが含まれるネットワーク オブジェクトまたはグループを指定します。
- [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] : (オプション) 変換後の packets で使用される宛先アドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループを指定します。[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] にオブジェクトを選択した場合、同じオブジェクトを選択してアイデンティティ NAT (つまり、変換なし) を設定します。

ステップ 7 (オプション) [元の宛先ポート (Original Destination Port)]、[変換後の宛先ポート (Translated Destination Port)] で、サービス変換の宛先サービス ポートを指定します。

ダイナミック NAT ではポート変換がサポートされないため、[元の送信元ポート (Original Source Port)] および [変換後の送信元ポート (Translated Source Port)] フィールドを空のまま

にします。ただし、宛先の変換は常にスタティックであるため、宛先ポートに対してポート変換を実行できます。

NAT では、TCP または UDP だけがサポートされます。ポートを変換する場合、実際のサービス オブジェクトのプロトコルとマッピング サービス オブジェクトのプロトコルの両方を同じにします（両方とも TCP または両方とも UDP）。アイデンティティ NAT では、実際のポートとマッピング ポートの両方に同じサービス オブジェクトを使用できます。

ステップ 8 （オプション） [詳細オプション（Advanced Options）] リンクをクリックし、目的のオプションを選択します。

- [このルールに一致する DNS 応答を変換（Translate DNS replies that match this rule）]：DNS 応答の IP アドレスを変換するかどうかを指定します。マッピングインターフェイスから実際のインターフェイスに移動する DNS 応答の場合、アドレス（IPv4 A または IPv6 AAAA）レコードはマッピングされた値から実際の値に書き換えられます。反対に、実際のインターフェイスからマッピングされたインターフェイスへの DNS 応答の場合、レコードは実際の値からマッピングされた値に書き換えられます。このオプションは特殊なときに使用され、NAT64/46 の変換で必要になる場合もあります。この場合、書き換えによって A レコードと AAAA レコードの変換も実行されます。詳細については、「[NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え（777 ページ）](#)」を参照してください。
- [インターフェイス PAT へのフォールスルー（宛先インターフェイス）（Fallthrough to Interface PAT (Destination Interface)）]：他のマッピングアドレスがすでに割り当てられている場合、バックアップ手段として宛先インターフェイスの IP アドレスを使用するかどうか（インターフェイス PAT フォールバック）を指定します。このオプションは、ブリッジ グループのメンバーではない宛先インターフェイスを選択した場合にのみ使用できます。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

ダイナミック PAT

ここでは、ダイナミック PAT について説明します。

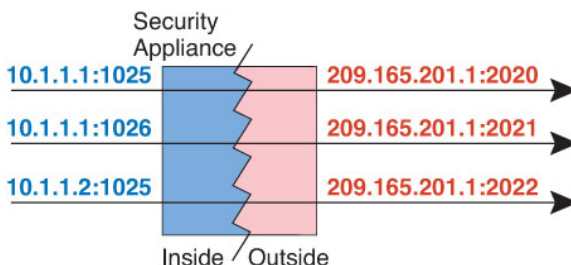
ダイナミック PAT について

ダイナミック PAT では、実際のアドレスおよび送信元ポートが 1 つのマッピング アドレスおよび固有のポートに変換されることによって、複数の実際のアドレスが 1 つのマッピング IP アドレスに変換されます。

送信元ポートが接続ごとに異なるため、各接続には別の変換セッションが必要です。たとえば、10.1.1.1:1025 には、10.1.1.1:1026 とは別の変換が必要です。

次の図に、一般的なダイナミック PAT のシナリオを示します。実際のホストだけが NAT セッションを作成でき、応答トラフィックが許可されます。マッピングアドレスはどの変換でも同じですが、ポートがダイナミックに割り当てられます。

図 38: ダイナミック PAT



変換が継続している間、アクセスルールで許可されていれば、宛先ネットワーク上のリモートホストは変換済みホストへの接続を開始できます。実際のポートアドレスおよびマッピングポートアドレスはどちらも予測不可能であるため、ホストへの接続は確立されません。ただし、この場合は、アクセスルールのセキュリティに依存できます。

接続の有効期限が切れると、ポート変換も有効期限切れになります。



- (注) インターフェイスごとに異なる PAT プールを使用することをお勧めします。複数のインターフェイスに同じプールを使用する場合（特に「任意の」インターフェイスに使用する場合）は、プールが短時間で使い尽くされ、新しい変換に使用できるポートがなくなる可能性があります。

ダイナミック PAT の欠点と利点

ダイナミック PAT では、1 つのマッピングアドレスを使用できるため、ルーティング可能なアドレスが節約されます。さらに、Threat Defense デバイス インターフェイスの IP アドレスを PAT アドレスとして使用できます。ただし、インターフェイス上の IPv6 アドレスに対しインターフェイス PAT を使用することはできません。

同じブリッジグループのインターフェイス間で変換するときは、IPv6 のダイナミック PAT (NAT66) を使用できません。この制限は、ブリッジグループのメンバーと標準的なルーティングインターフェイスの間には該当しません。

ダイナミック PAT は、制御パスとは異なるデータ ストリームを持つ一部のマルチメディア アプリケーションでは機能しません。詳細については、[検査対象プロトコルの NAT サポート \(702 ページ\)](#) を参照してください。

ダイナミック PAT によって、単一の IP アドレスから送信されたように見える数多くの接続が作成されることがあります。この場合、このトラフィックはサーバで DoS 攻撃として解釈される可能性があります。

ダイナミック自動 PAT の設定

ダイナミック自動 PAT ルールを使用して、アドレスを複数の IP アドレスだけに変換するのではなく、固有の IP アドレス/ポートの組み合わせに変換します。単一のアドレス（宛先インターフェイスのアドレスや別のアドレス）に変換できます。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件を満たす必要があります：

- [元のアドレス (Original Address)]：ネットワーク オブジェクト（グループではなく）にする必要があります。ホスト、範囲、またはサブネットのいずれかを使用できます。
- [変換済みアドレス (Translated Address)]：PAT アドレスを指定するオプションは次のとおりです。
 - [接続先インターフェイス (Destination Interface)]：接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合、ネットワーク オブジェクトを作成する必要はありません。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
 - [単一 PAT アドレス (Single PAT address)]：単一のホストが含まれるネットワーク オブジェクトを作成します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

- [タイトル (Title)]：ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成 (Create Rule For)]：[自動 NAT (Auto NAT)] を選択します。
- [タイプ (Type)]：[ダイナミック (Dynamic)] を選択します。

ステップ 4 次のパケット変換オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)]：(ブリッジグループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジグループ メンバインターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。
- [元のアドレス (Original Address)]：変換するアドレスを含むネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)]：以下のいずれかを選択します。

- (インターフェイス PAT)。接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合は、[インターフェイス (Interface)] を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループ メンバー インターフェイスは選択できません。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
- 接続先インターフェイスアドレス以外の単一アドレスを使用するには、この目的で作成したホスト ネットワーク オブジェクトを選択します。

ステップ 5 (オプション) [詳細オプション (Advanced Options)] リンクをクリックし、目的のオプションを選択します。

- [インターフェイス PAT へのフォールスルー (Fallthrough to Interface PAT)] (宛先インターフェイス) : 他のマッピングアドレスがすでに割り当てられている場合、バックアップ手段として宛先インターフェイスの IP アドレスを使用するかどうか (インターフェイス PAT フォールバック) を指定します。このオプションは、ブリッジグループのメンバーではない宛先インターフェイスを選択した場合にのみ使用できます。すでにインターフェイス PAT を変換済みアドレスとして設定している場合には、このオプションは使用できません。このオプションは、IPv6 ネットワークで使用することもできません。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

ダイナミック手動 PAT の設定

ダイナミック手動 PAT ルールは、自動 PAT ではニーズを満たさない場合に使用します。たとえば、宛先に応じて異なる変換を適用する必要がある場合などです。ダイナミック PAT は、アドレスを複数の IP アドレスだけに変換するのではなく、固有の IP アドレス/ポートの組み合わせに変換します。単一のアドレス (宛先インターフェイスのアドレスや別のアドレス) に変換できます。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件も満たしている必要があります。

- [元の送信元アドレス (Original Source Address)] : ネットワーク オブジェクトまたはグループを指定できます。ホスト、範囲、またはサブネットを含めることができます。すべての元の送信元トラフィックを変換する場合、この手順をスキップし、ルールで [すべて (Any)] を指定します。
- [変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)] : PAT アドレスを指定する、以下のオプションがあります。

- [接続先インターフェイス (Destination Interface)] : 接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合、ネットワーク オブジェクトを作成する必要はありません。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
- [単一 PAT アドレス (Single PAT address)] : 単一のホストが含まれるネットワーク オブジェクトを作成します。

ルールで [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] と [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] にスタティック変換を設定する場合は、これらのアドレスにおいてネットワーク オブジェクトを作成することもできます。

ダイナミック PAT では、宛先でポート変換を行うこともできます。オブジェクトマネージャで、[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] および [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] に使用できるポートオブジェクトがあることを確認します。送信元ポートを指定した場合、無視されます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

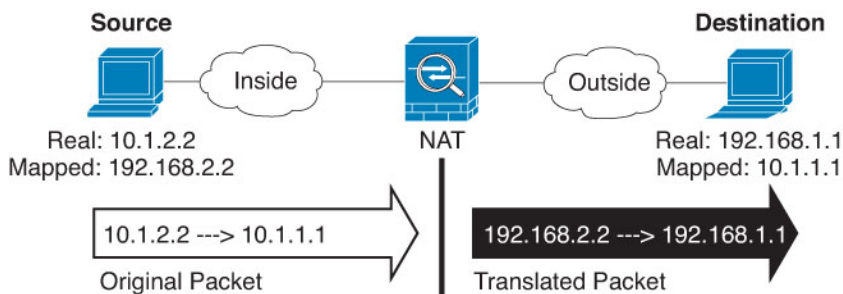
- [タイトル (Title)] : ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] : [手動 NAT (Manual NAT)] を選択します。
- [ルールの配置 (Rule Placement)] : ルールを追加する場所です。ルールは、カテゴリ (自動 NAT ルールの前か後)、または選択したルールの上か下に挿入できます。
- [タイプ (Type)] : [ダイナミック (Dynamic)] を選択します。この設定が適用されるのは、送信元アドレスだけです。宛先アドレスの変換を定義すると、変換は常にスタティックなものになります。

ステップ 4 次のインターフェイス オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバー インターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。

ステップ 5 元の packets アドレス (IPv4 または IPv6) 、つまり、元の packets に表示される packets アドレスを特定します。

元の packets と変換された packets の例については、次の図を参照してください。



- **[Original Source][Address]** : 変換するアドレスを含むネットワークオブジェクト、またはネットワークグループ。
- **[Original Destination][Address]** : (オプション)。宛先アドレスを含むネットワークオブジェクト。空白のままにすると、宛先に関係なく、送信元アドレス変換が適用されます。宛先アドレスを指定した場合、そのアドレスにスタティック変換を設定するか、単にアイデンティティ NAT を使用できます。

[インターフェイス (Interface)] の順に選択して、元の宛先を送信元インターフェイスに基づかせることもできます (この場合、[すべて (Any)] を指定することはできません)。このオプションを選択する場合、変換済みの宛先オブジェクトも選択する必要があります。スタティック インターフェイス NAT に宛先アドレスのポート変換を実装するには、このオプションを選択し、さらにその宛先ポートの適切なポートオブジェクトを選択します。

ステップ 6 変換後の packets のアドレスが IPv4 または IPv6 のどちらであることを識別します。つまり、宛先インターフェイス ネットワークで表される packets アドレスです。必要に応じて、IPv4 と IPv6 の間で変換できます。

- **[変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)]** : 以下のいずれかを選択します。
 - (インターフェイス PAT)。接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合は、**[インターフェイス (Interface)]** を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループメンバーインターフェイスは選択できません。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
 - 接続先インターフェイスアドレス以外の単一アドレスを使用するには、この目的で作成したホスト ネットワーク オブジェクトを選択します。
- **[変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)]** : (オプション) 変換後の packets で使用される宛先アドレスを含むネットワークオブジェクトまたはグループを指定します。**[変換前の宛先 (Original Destination)]** にオブジェクトを選択した場合、同じオブジェクトを選択してアイデンティティ NAT (つまり、変換なし) を設定します。

ステップ 7 (オプション) [元の宛先ポート (Original Destination Port)]、[変換後の宛先ポート (Translated Destination Port)] で、サービス変換の宛先サービス ポートを指定します。

ダイナミック NAT ではポート変換がサポートされないため、[元の送信元ポート (Original Source Port)] および [変換後の送信元ポート (Translated Source Port)] フィールドを空のままにします。ただし、宛先の変換は常にスタティックであるため、宛先ポートに対してポート変換を実行できます。

NAT では、TCP または UDP だけがサポートされます。ポートを変換する場合、実際のサービス オブジェクトのプロトコルとマッピング サービス オブジェクトのプロトコルの両方を同じにします (両方とも TCP または両方とも UDP) 。アイデンティティ NAT では、実際のポートとマッピング ポートの両方に同じサービス オブジェクトを使用できます。

ステップ 8 (オプション) [詳細オプション (Advanced Options)] リンクをクリックし、目的のオプションを選択します。

- [インターフェイス PAT へのフォールスルー (Fallthrough to Interface PAT)] (宛先インターフェイス) : 他のマッピングアドレスがすでに割り当てられている場合、バックアップ手段として宛先インターフェイスの IP アドレスを使用するかどうか (インターフェイス PAT フォールバック) を指定します。このオプションは、ブリッジグループのメンバーではない宛先インターフェイスを選択した場合にのみ使用できます。すでにインターフェイス PAT を変換済みアドレスとして設定している場合には、このオプションは使用できません。このオプションは、IPv6 ネットワークで使用することもできません。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

スタティック NAT

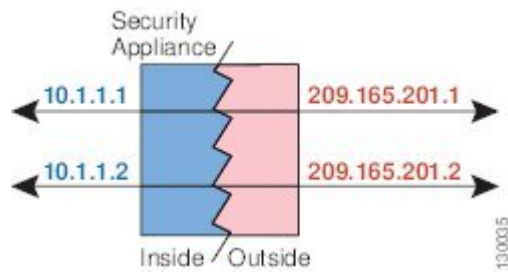
ここでは、スタティック NAT の概要およびその実装方法について説明します。

スタティック NAT について

スタティック NAT では、実際のアドレスからマッピング アドレスへの固定変換が作成されます。マッピング アドレスは連続する各接続で同じなので、スタティック NAT では、双方向の接続 (ホストへの接続とホストからの接続の両方) を開始できます (接続を許可するアクセスルールが存在する場合) 。一方、ダイナミック NAT および PAT では、各ホストが後続の変換に対して異なるアドレスまたはポートを使用するので、双方向の接続は開始できません。

次の図に、一般的なスタティック NAT のシナリオを示します。この変換は常にアクティブなので、実際のホストとリモート ホストの両方が接続を開始できます。

図 39:スタティック NAT



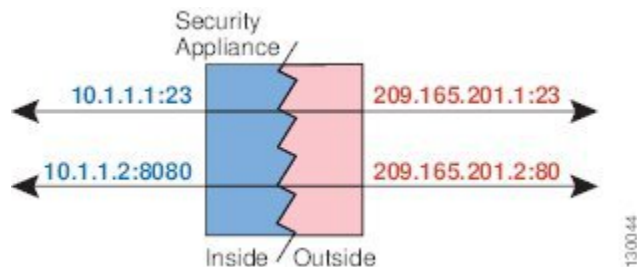
ポート変換を設定したスタティック NAT

ポート変換を設定したスタティック NAT では、実際のプロトコルとマッピング プロトコルおよびポートを指定できます。

スタティック NAT を使用してポートを指定する場合、ポートまたは IP アドレスを同じ値にマッピングするか、別の値にマッピングするかを選択できます。

次の図に、ポート変換が設定された一般的なスタティック NAT のシナリオを示します。自身にマッピングしたポートと、別の値にマッピングしたポートの両方を示しています。いずれのケースでも、IP アドレスは別の値にマッピングされています。この変換は常にアクティブなので、変換されたホストとリモート ホストの両方が接続を開始できます。

図 40:ポート変換を設定したスタティック NAT の一般的なシナリオ



ポート変換ルールを設定したスタティック NAT は、指定されたポートの宛先 IP アドレスのみにアクセスを制限します。NAT ルールの対象となっていない別のポートの宛先 IP アドレスにアクセスしようとする、接続がブロックされます。さらに、手動 NAT の場合、NAT ルールの送信元 IP アドレスと一致しないトラフィックは、宛先ポートに関係なく、宛先 IP アドレスと一致するとドロップされます。そのため、宛先 IP アドレスに対して許可される他のすべてのトラフィックに関してルールを追加する必要があります。たとえば、ポートを指定しないで IP アドレスのスタティック NAT ルールを設定し、それをポート変換ルールの後に配置することができます。



- (注) セカンダリ チャネルのアプリケーションインスペクションが必要なアプリケーション (FTP、VoIP など) を使用する場合は、NAT が自動的にセカンダリ ポートを変換します。

次は、ポート変換を使用するスタティック NAT のその他の使用例です。

アイデンティティ ポート変換を設定したスタティック NAT

内部リソースへの外部アクセスを簡素化できます。たとえば、異なるポート（FTP、HTTP、および SMTP など）でサービスを提供する、3つの独立したサーバがある場合、外部ユーザーに単一の IP アドレスを付与してこれらのサービスにアクセスできるようにすることができます。次に、アイデンティティ ポート変換を設定したスタティック NAT を設定して、単一の外部 IP アドレスを実際のサーバの正しい IP アドレスに、アクセスしようとしているポートに基づいてマッピングします。サーバは標準のポート（それぞれ21、80、および25）を使用しているため、ポートを変更する必要はありません。

標準以外のポートのポート変換を設定したスタティック NAT

ポート変換を設定したスタティック NAT を使用すると、予約済みポートから標準以外のポートへの変換や、その逆の変換も実行できます。たとえば、内部 Web サーバがポート 8080 を使用する場合、ポート 80 に接続することを外部ユーザーに許可し、その後、変換を元のポート 8080 に戻すことができます。同様に、セキュリティをさらに高めるには、Web ユーザーに標準以外のポート 6785 に接続するように指示し、その後、変換をポート 80 に戻すことができます。

ポート変換を設定したスタティック インターフェイス NAT

スタティック NAT は、実際のアドレスをインターフェイスアドレスとポートの組み合わせにマッピングするように設定できます。たとえば、デバイスの外部インターフェイスへの Telnet アクセスを内部ホストにリダイレクトする場合、内部ホストの IP アドレス/ポート 23 を外部インターフェイス アドレス/ポート 23 にマッピングできます。

1 対多のスタティック NAT

通常、スタティック NAT は 1 対 1 のマッピングで設定します。しかし場合によっては、1つの実際のアドレスを複数のマッピングアドレスに設定することがあります（1 対多）。1 対多のスタティック NAT を設定する場合、実際のホストがトラフィックを開始すると、常に最初のマッピングアドレスが使用されます。しかし、ホストに向けて開始されたトラフィックの場合、任意のマッピングアドレスへのトラフィックを開始でき、1つの実際のアドレスには変換されません。

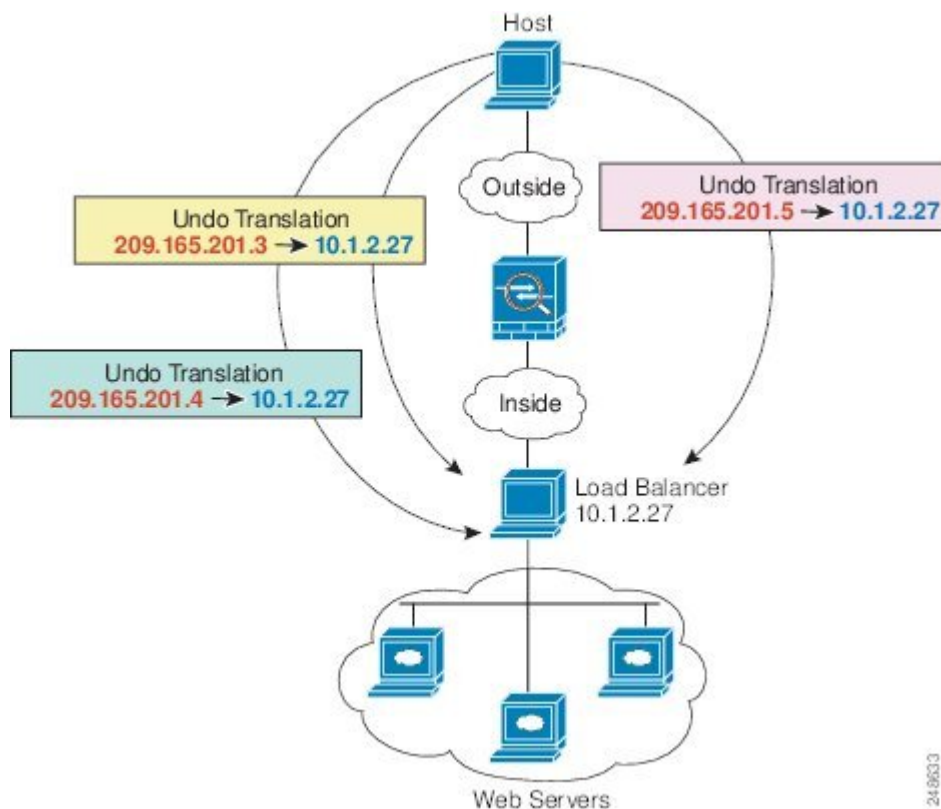
次の図に、一般的な 1 対多のスタティック NAT シナリオを示します。実際のホストが開始すると、常に最初のマッピングアドレスが使用されるため、実際のホスト IP/最初のマッピング IP の変換は、理論的には双方向変換のみが行われます。

図 41: 1 対多のスタティック NAT



たとえば、10.1.2.27 にロードバランサが存在するとします。要求される URL に応じて、トラフィックを正しい Web サーバにリダイレクトします。

図 42: 一対多のスタティック NAT の例



他のマッピング シナリオ（非推奨）

NATには、1対1、1対多だけではなく、少対多、多対少、多対1など任意の種類のスタティック マッピング シナリオを使用できるという柔軟性があります。1対1マッピングまたは1対多マッピングだけを使用することをお勧めします。その他のマッピング オプションは、予期しない結果が発生する可能性があります。

機能的には、少対多は、1対多と同じです。しかし、コンフィギュレーションが複雑化して、実際のマッピングが一目では明らかな場合があるため、必要とする実際の各アドレスに対して1対多のコンフィギュレーションを作成することを推奨します。たとえば、少対多のシナリオでは、少数の実際のアドレスが多数のマッピング アドレスに順番にマッピングされます（Aは1、Bは2、Cは3）。すべての実際のアドレスがマッピングされたら、次にマッピング アドレスは、最初の実際のアドレスにマッピングされ、すべてのマッピング アドレスがマッピングされるまで続行されます（Aは4、Bは5、Cは6）。この結果、実際の各アドレスに対して複数のマッピング アドレスが存在することになります。1対多のコンフィギュレーションのように、最初のマッピングだけが双方向です。後続のマッピングでは、実際のホストへのトラフィックは開始できますが、実際のホストからのすべてのトラフィックは、送信元として最初にマッピングされたアドレスだけを使用します。

次の図に、一般的な少対多のスタティック NAT シナリオを示します。

図 43: 少対多のスタティック NAT



多対少または多対1コンフィギュレーションでは、マッピングアドレスよりも多くの実際のアドレスが存在します。実際のアドレスが不足するよりも前に、マッピングアドレスが不足します。双方向の開始を実現できるのは、最下位の実際の IP アドレスとマッピングされたプールの中でマッピングを行ったときだけです。残りの上位の実際のアドレスはトラフィックを開始できますが、これらへのトラフィックは開始できません。リターントラフィックは、接続の固有の5つの要素（送信元 IP、宛先 IP、送信元ポート、宛先ポート、プロトコル）によって適切な実際のアドレスに転送されます。



- (注) 多対少または多対1の NAT は PAT ではありません。2つの実際のホストが同じ送信元ポート番号を使用して同じ外部サーバおよび同じ TCP 宛先ポートにアクセスする場合は、両方のホストが同じ IP アドレスに変換されると、アドレスの競合が起るため（5 タプルが一意でない）、両方の接続がリセットされます。

次の図に、一般的な多対少のスタティック NAT シナリオを示します。

図 44: 多対少のスタティック NAT



このようにスタティックルールを使用するのではなく、双方向の開始を必要とするトラフィックに1対1のルールを作成し、残りのアドレスにダイナミックルールを作成することをお勧めします。

スタティック自動 NAT の設定

スタティック自動 NAT ルールを使用して、アドレスを宛先ネットワークでルーティング可能な別の IP アドレスに変換します。また、スタティック NAT ルールではポート変換を行うこともできます。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件を満たす必要があります：

- [元のアドレス (Original Address)]：ネットワーク オブジェクト（グループではなく）にする必要があります。ホスト、範囲、またはサブネットのいずれかを使用できます。
- [変換済みアドレス (Translated Address)]：変換済みアドレスを指定するには、次のオプションがあります。
 - [接続先インターフェイス (Destination Interface)]：接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合、ネットワーク オブジェクトを作成する必要はありません。このオプションでは、ポート変換を適用するスタティック インターフェイス NAT を設定します。送信元アドレス/ポートは、インターフェイスのアドレスおよび同じポート番号に変換されます。IPv6 にインターフェイス PAT は使用できません。
 - [アドレス (Address)]：ホスト、範囲、またはサブネットが含まれるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは1つだけにする必要があります。通常、1 対 1 のマッピングでは、実際のアドレスと同じ数のマッピングアドレスを設定します。しかし、アドレスの数が一致しない場合もあります。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

- [タイトル (Title)]：ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成 (Create Rule For)]：[自動 NAT (Auto NAT)] を選択します。
- [タイプ (Type)]：[スタティック (Static)] を選択します。

ステップ 4 次のパケット変換オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジグループメンバーインターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジグループメンバーインターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。
- [元のアドレス (Original Address)] : 変換するアドレスを含むネットワークオブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] : 以下のいずれかを選択します。
 - 複数のアドレスが含まれるグループを使用するには、マッピングアドレスが含まれるネットワークオブジェクトまたはグループを選択します。通常、1対1のマッピングでは、実際のアドレスと同じ数のマッピングアドレスを設定します。しかし、アドレスの数が一致しない場合もあります。
 - (ポート変換を適用するスタティック インターフェイス NAT の場合) 接続先インターフェイスのアドレスを使用するには、[インターフェイス (Interface)] を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループメンバーインターフェイスは選択できません。IPv6 にインターフェイス PAT は使用できません。これはポート変換と共に、スタティック インターフェイス NAT を設定します。送信元アドレス/ポートは、インターフェイスのアドレス、および同じポート番号に変換されます。
- (オプション) 。[元のポート (Original Port)]、[変換済みポート (Translated Port)] : TCP または UDP ポートを変換する必要がある場合、元のポートと変換済みポートを定義するポートオブジェクトを選択します。オブジェクトは、同じプロトコルを対象としたものでなければなりません。オブジェクトが存在しない場合は、[新しいオブジェクトの作成 (Create New Object)] リンクをクリックします。たとえば、必要に応じて TCP/80 を TCP/8080 に変換することができます。

ステップ 5 (オプション) [詳細オプション (Advanced Options)] リンクをクリックし、目的のオプションを選択します。

- [このルールに一致する DNS 応答を変換 (Translate DNS replies that match this rule)] : DNS 応答の IP アドレスを変換するかどうかを指定します。マッピングインターフェイスから実際のインターフェイスに移動する DNS 応答の場合、アドレス (IPv4 A または IPv6 AAAA) レコードはマッピングされた値から実際の値に書き換えられます。反対に、実際のインターフェイスからマッピングされたインターフェイスへの DNS 応答の場合、レコードは実際の値からマッピングされた値に書き換えられます。このオプションは特殊なときに使用され、NAT64/46 の変換で必要になる場合もあります。この場合、書き換えによって A レコードと AAAA レコードの変換も実行されます。詳細については、「[NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え \(777 ページ\)](#)」を参照してください。このオプションはポート変換を行う場合は使用できません。
- [宛先インターフェイスで ARP をプロキシしない (Do not proxy ARP on Destination Interface)] : マッピング IP アドレスへの着信パケットのプロキシ ARP を無効にします。マッピングインターフェイスと同じネットワーク上のアドレスを使用した場合、システムはプロキシ ARP を使用してマッピングアドレスのすべての ARP 要求に応答することで、

マッピングアドレスを宛先とするトラフィックを代行受信します。この方法では、デバイスがその他のネットワークのゲートウェイである必要がないため、ルーティングが簡略化されます。必要に応じてプロキシ ARP を無効にすることもできます。その場合、アップストリーム ルータに適切なルートが確実に設定されていなくてもはなりません。アイデンティティ NAT の場合、通常はプロキシ ARP が不要で、場合によっては接続性に関する問題を引き起こす可能性があります。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

スタティック手動 NAT の設定

スタティック手動 NAT ルールは、自動 NAT ではニーズを満たさない場合に使用します。たとえば、宛先に応じて異なる変換を適用する必要がある場合などです。スタティック NAT ルールを使用して、アドレスを宛先ネットワークでルーティング可能な別の IP アドレスに変換します。また、スタティック NAT ルールではポート変換を行うこともできます。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件も満たしている必要があります。

- [元の送信元アドレス (Original Source Address)] : ネットワーク オブジェクトまたはグループを指定できます。ホスト、範囲、またはサブネットを含めることができます。すべての元の送信元トラフィックを変換する場合、この手順をスキップし、ルールで [すべて (Any)] を指定します。
- [変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)] : 変換後のアドレスを指定する、以下のオプションがあります。
 - [接続先インターフェイス (Destination Interface)] : 接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合、ネットワーク オブジェクトを作成する必要はありません。このオプションでは、ポート変換を適用するスタティック インターフェイス NAT を設定します。送信元アドレス/ポートは、インターフェイスのアドレスおよび同じポート番号に変換されます。IPv6 にインターフェイス PAT は使用できません。
 - [アドレス (Address)] : ホスト、範囲、またはサブネットが含まれるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。通常、1 対 1 のマッピングでは、実際のアドレスと同じ数のマッピングアドレスを設定します。しかし、アドレスの数が一致しない場合もあります。

スタティック変換をこれらのアドレスに対してルールで設定する場合は、[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] と [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] のネットワーク オブジェクトを作成することもできます。ポート変換のみを適用する宛先スタ

ティック インターフェイス NAT を設定する場合は、宛先マッピングアドレスのオブジェクトを追加せずに、インターフェイスをルールに指定できます。

送信元、宛先、またはその両方でポート変換を実行することもできます。オブジェクトマネージャで、元のポートと変換済みポートに使用できるポートオブジェクトがあることを確認します。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

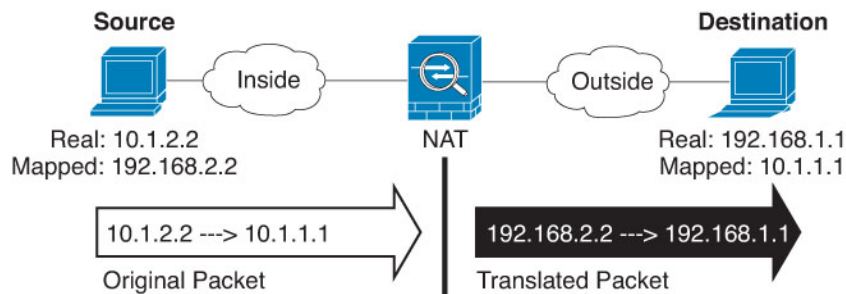
- [タイトル (Title)] : ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] : [手動 NAT (Manual NAT)] を選択します。
- [ルールの配置 (Rule Placement)] : ルールを追加する場所です。ルールは、カテゴリ (自動 NAT ルールの前か後)、または選択したルールの上か下に挿入できます。
- [タイプ (Type)] : [スタティック (Static)] を選択します。この設定が適用されるのは、送信元アドレスだけです。宛先アドレスの変換を定義すると、変換は常にスタティックなものになります。

ステップ 4 次のインターフェイス オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバインターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。

ステップ 5 元のパケットアドレス (IPv4 または IPv6)、つまり、元のパケットに表示されるパケットアドレスを特定します。

元のパケットと変換されたパケットの例については、次の図を参照してください。



- **[Original Source][Address]** : 変換するアドレスを含むネットワークオブジェクト、またはネットワークグループ。
- **[Original Destination][Address]** : (オプション)。宛先アドレスを含むネットワークオブジェクト。空白のままにすると、宛先に関係なく、送信元アドレス変換が適用されます。宛先アドレスを指定した場合、そのアドレスにスタティック変換を設定するか、単にアイデンティティ NAT を使用できます。

[インターフェイス (Interface)] の順に選択して、元の宛先を送信元インターフェイスに基づかせることもできます (この場合、[すべて (Any)] を指定することはできません)。このオプションを選択する場合、変換済みの宛先オブジェクトも選択する必要があります。スタティック インターフェイス NAT に宛先アドレスのポート変換を実装するには、このオプションを選択し、さらにその宛先ポートの適切なポートオブジェクトを選択します。

ステップ 6 変換後のパケットのアドレスが IPv4 または IPv6 のどちらであることを識別します。つまり、宛先インターフェイス ネットワークで表されるパケット アドレスです。必要に応じて、IPv4 と IPv6 の間で変換できます。

- **[変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)]** : 以下のいずれかを選択します。
 - 複数のアドレスが含まれるグループを使用するには、マッピングアドレスが含まれるネットワーク オブジェクトまたはグループを選択します。通常、1 対 1 のマッピングでは、実際のアドレスと同じ数のマッピングアドレスを設定します。しかし、アドレスの数が一致しない場合もあります。
 - (ポート変換を適用するスタティック インターフェイス NAT の場合) 接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合は、**[インターフェイス (Interface)]** を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジ グループ メンバー インターフェイスは選択できません。これはポート変換と共に、スタティック インターフェイス NAT を設定します。送信元アドレス/ポートは、インターフェイスのアドレス、および同じポート番号に変換されます。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
- **[変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)]** : (オプション) 変換後のパケットで使用される宛先アドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループを指定します。**[変換前の宛先 (Original Destination)]** にオブジェクトを選択した場合、同じオブジェクトを選択してアイデンティティ NAT (つまり、変換なし) を設定します。

ステップ 7 (任意) サービス変換の送信元または宛先サービスのポートを特定します。

ポート変換を適用するスタティック NAT を設定している場合、送信元、宛先、またはその両方のポートを変換できます。たとえば、TCP/80 と TCP/8080 の間での変換が可能です。

NAT では、TCP または UDP だけがサポートされます。ポートを変換する場合、実際のサービス オブジェクトのプロトコルとマッピング サービス オブジェクトのプロトコルの両方を同じにします (両方とも TCP または両方とも UDP)。アイデンティティ NAT では、実際のポートとマッピング ポートの両方に同じサービス オブジェクトを使用できます。

- [元の送信元ポート (Original Source Port)]、[変換済み送信元ポート (Translated Source Port)] : 送信元アドレスのポート変換を定義します。
- [元の宛先ポート (Original Destination Port)]、[変換済み宛先ポート (Translated Destination Port)] : 宛先アドレスのポート変換を定義します。

ステップ 8 (オプション) [詳細オプション (Advanced Options)] リンクをクリックし、目的のオプションを選択します。

- [このルールに一致する DNS 応答を変換 (Translate DNS replies that match this rule)] : DNS 応答の IP アドレスを変換するかどうかを指定します。マッピングインターフェイスから実際のインターフェイスに移動する DNS 応答の場合、アドレス (IPv4 A または IPv6 AAAA) レコードはマッピングされた値から実際の値に書き換えられます。反対に、実際のインターフェイスからマッピングされたインターフェイスへの DNS 応答の場合、レコードは実際の値からマッピングされた値に書き換えられます。このオプションは特殊なときに使用され、NAT64/46 の変換で必要になる場合もあります。この場合、書き換えによって A レコードと AAAA レコードの変換も実行されます。詳細については、「[NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え \(777 ページ\)](#)」を参照してください。このオプションはポート変換を行う場合は使用できません。
- [宛先インターフェイスで ARP をプロキシしない (Do not proxy ARP on Destination Interface)] : マッピング IP アドレスへの着信パケットのプロキシ ARP を無効にします。マッピングインターフェイスと同じネットワーク上のアドレスを使用した場合、システムはプロキシ ARP を使用してマッピングアドレスのすべての ARP 要求に応答することで、マッピングアドレスを宛先とするトラフィックを代行受信します。この方法では、デバイスがその他のネットワークのゲートウェイである必要がないため、ルーティングが簡略化されます。必要に応じてプロキシ ARP を無効にすることもできます。その場合、アップストリーム ルータに適切なルートが確実に設定されていなくてはなりません。アイデンティティ NAT の場合、通常はプロキシ ARP が不要で、場合によっては接続性に関する問題を引き起こす可能性があります。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

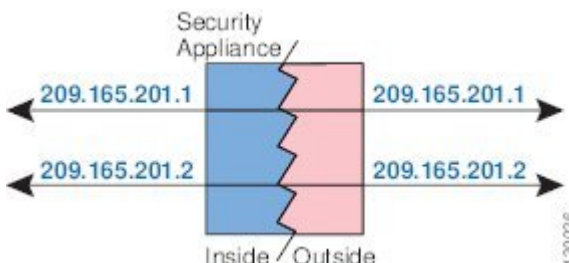
アイデンティティ NAT

IP アドレスを自身に変換する必要がある NAT コンフィギュレーションを設定できます。たとえば、1 つのネットワークを除いた、すべてのネットワークに NAT を適用するといった広範

なルールを作成する場合、スタティック NAT ルールを作成して、アドレスを自身に変換することができます。

次の図に、一般的なアイデンティティ NAT のシナリオを示します。

図 45: アイデンティティ NAT



ここでは、アイデンティティ NAT の設定方法について説明します。

アイデンティティ自動 NAT の設定

アドレスが変換されないようにするには、スタティック アイデンティティ自動 NAT ルールを使用します。つまり、アドレスをそのアドレス自体に変換するということです。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件を満たす必要があります：

- [元のアドレス (Original Address)]：ネットワーク オブジェクト（グループではなく）にする必要があります。ホスト、範囲、またはサブネットのいずれかを使用できます。
- [変換済みアドレス (Translated Address)]：元の送信元オブジェクトとコンテンツがまったく同一のネットワーク オブジェクトまたはグループ。同じオブジェクトを使用することもできます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

- [タイトル (Title)]：ルールの名前を入力します。

- [ルール作成 (Create Rule For)] : [自動 NAT (Auto NAT)] を選択します。
- [タイプ (Type)] : [スタティック (Static)] を選択します。

ステップ 4 次のパケット変換オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジグループメンバーインターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジグループメンバーインターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。
- [元のアドレス (Original Address)] : 変換するアドレスを含むネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] : 元の送信元と同じオブジェクトを指定します。オプションで、内容が完全に同じ別のオブジェクトを選択することもできます。

アイデンティティ NAT には、[元のポート (Original Port)] および [変換済みポート (Translated Port)] オプションを設定しないでください。

ステップ 5 (オプション) [詳細 (Advanced)] リンクをクリックし、適切なオプションを選択します。

- [このルールと一致する DNS 応答を変換 (Translate DNS replies that match this rule)] : アイデンティティ NAT には、このオプションを設定しないでください。
- [宛先インターフェイスで ARP をプロキシしない (Do not proxy ARP on Destination Interface)] : マッピング IP アドレスへの着信パケットのプロキシ ARP を無効にします。マッピングインターフェイスと同じネットワーク上のアドレスを使用した場合、システムはプロキシ ARP を使用してマッピングアドレスのすべての ARP 要求に応答することで、マッピングアドレスを宛先とするトラフィックを代行受信します。この方法では、デバイスがその他のネットワークのゲートウェイである必要がないため、ルーティングが簡略化されます。必要に応じてプロキシ ARP を無効にすることもできます。その場合、アップストリーム ルータに適切なルートが確実に設定されていなくてはなりません。アイデンティティ NAT の場合、通常はプロキシ ARP が不要で、場合によっては接続性に関する問題を引き起こす可能性があります。
- [宛先インターフェイスのルートルックアップの実行 (Perform Route Lookup for Destination Interface)] : 元の発信元アドレスと変換された発信元アドレスに同一のオブジェクトを選択する際に送信元インターフェイスと宛先インターフェイスを選択する場合、このオプションを選択すると、NAT ルールで設定された宛先インターフェイスではなくルーティング テーブルに基づいてシステムが宛先インターフェイスを決定するようにできます。

ステップ 6 [OK] をクリックします。

アイデンティティ手動 NAT の設定

スタティック アイデンティティ手動 NAT ルールは、自動 NAT ではニーズを満たさない場合に使用します。たとえば、宛先に応じて異なる変換を適用する必要がある場合などです。アド

レスが変換されないようにするには、スタティック アイデンティティ NAT ルールを使用します。つまり、アドレスをそのアドレス自体に変換するということです。

始める前に

[オブジェクト (Objects)] を選択し、ルールで必要となるネットワーク オブジェクトまたはグループを作成します。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。または、NAT ルールを定義する際にオブジェクトを作成することもできます。作成するオブジェクトは、以下の要件も満たしている必要があります。

- [元の送信元アドレス (Original Source Address)] : ネットワーク オブジェクトまたはグループを指定できます。ホスト、範囲、またはサブネットを含めることができます。すべての元の送信元トラフィックを変換する場合、この手順をスキップし、ルールで [すべて (Any)] を指定します。
- [変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)] : 元の送信元オブジェクトと同じオブジェクトを指定します。オプションで、内容が完全に同じ別のオブジェクトを選択することもできます。

スタティック変換をこれらのアドレスに対してルールで設定する場合は、[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] と [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] のネットワーク オブジェクトを作成することもできます。ポート変換のみを適用する宛先スタティック インターフェイス NAT を設定する場合は、宛先マッピングアドレスのオブジェクトを追加せずに、インターフェイスをルールに指定できます。

送信元、宛先、またはその両方でポート変換を実行することもできます。オブジェクトマネージャで、元のポートと変換済みポートに使用できるポートオブジェクトがあることを確認します。アイデンティティ NAT では、同じオブジェクトを使用できます。

手順

ステップ 1 [ポリシー (Policies)] > [NAT] の順に選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいルールを作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
- 既存のルールを編集する場合は、対象のルールの編集アイコン (✎) をクリックします。
(不要になったルールを削除する場合は、対象のルールのゴミ箱アイコンをクリックします)。

ステップ 3 以下の基本ルール オプションを設定します。

- [タイトル (Title)] : ルールの名前を入力します。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] : [手動 NAT (Manual NAT)] を選択します。
- [ルールの配置 (Rule Placement)] : ルールを追加する場所です。ルールは、カテゴリ (自動 NAT ルールの前か後)、または選択したルールの上か下に挿入できます。

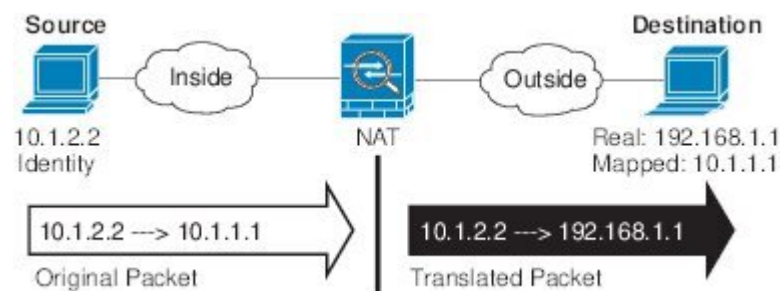
- [タイプ (Type)] : [スタティック (Static)] を選択します。この設定が適用されるのは、送信元アドレスだけです。宛先アドレスの変換を定義すると、変換は常にスタティックなものになります。

ステップ 4 次のインターフェイス オプションを設定します。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)] : (ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバー インターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。

ステップ 5 元の packets アドレス (IPv4 または IPv6) を識別します。つまり、元の packets で表されている packets アドレスです。

元の packets と変換後の packets を比較する例として、以下の図を参照してください。ここでは、内部ホストでアイデンティティ NAT を実行しますが、外部ホストは変換します。



- [元の送信元アドレス (Original Source Address)] : 変換しているアドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループ。
- [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] : (オプション) 宛先アドレスを含むネットワーク オブジェクト。空白のままにすると、宛先に関係なく、送信元アドレス変換が適用されます。宛先アドレスを指定した場合、そのアドレスにスタティック変換を設定するか、単にアイデンティティ NAT を使用できます。

[インターフェイス (Interface)] を選択して、元の宛先を送信元インターフェイスに基づかせることもできます (この場合、[すべて (Any)] を指定することはできません)。このオプションを選択する場合、変換済みの宛先オブジェクトも選択する必要があります。スタティック インターフェイス NAT に宛先アドレスのポート変換を実装するには、このオプションを選択し、さらにその宛先ポートの適切なポートオブジェクトを選択します。

ステップ 6 変換後の packets のアドレスが IPv4 または IPv6 のどちらであるかを識別します。つまり、宛先インターフェイス ネットワークで表される packets アドレスです。必要に応じて、IPv4 と IPv6 の間で変換できます。

- [変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)] : 元の送信元オブジェクトと同じオブジェクトを指定します。オプションで、内容が完全に同じ別のオブジェクトを選択することもできます。
- [変換後の宛先アドレス (Translated Destination Address)] : (オプション) 変換後のパケットで使用される宛先アドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループを指定します。[元の宛先アドレス (Original Destination Address)] にオブジェクトを選択した場合、同じオブジェクトを選択してアイデンティティ NAT (つまり、変換なし) を設定します。

ステップ 7 (任意) サービス変換の送信元または宛先サービスのポートを特定します。

ポート変換を適用するスタティック NAT を設定している場合、送信元、宛先、またはその両方のポートを変換できます。たとえば、TCP/80 と TCP/8080 の間での変換が可能です。

NAT では、TCP または UDP だけがサポートされます。ポートを変換する場合、実際のサービス オブジェクトのプロトコルとマッピング サービス オブジェクトのプロトコルの両方を同じにします (両方とも TCP または両方とも UDP)。アイデンティティ NAT では、実際のポートとマッピング ポートの両方に同じサービス オブジェクトを使用できます。

- [元の送信元ポート (Original Source Port)]、[変換済み送信元ポート (Translated Source Port)] : 送信元アドレスのポート変換を定義します。
- [元の宛先ポート (Original Destination Port)]、[変換済み宛先ポート (Translated Destination Port)] : 宛先アドレスのポート変換を定義します。

ステップ 8 (オプション) [詳細 (Advanced)] リンクをクリックし、適切なオプションを選択します。

- [このルールと一致する DNS 応答を変換 (Translate DNS replies that match this rule)] : アイデンティティ NAT には、このオプションを設定しないでください。
- [宛先インターフェイスでARPをプロキシしない (Do not proxy ARP on Destination Interface)] : マッピング IP アドレスへの着信パケットのプロキシ ARP を無効にします。マッピングインターフェイスと同じネットワーク上のアドレスを使用した場合、システムはプロキシ ARP を使用してマッピングアドレスのすべての ARP 要求に応答することで、マッピングアドレスを宛先とするトラフィックを代行受信します。この方法では、デバイスがその他のネットワークのゲートウェイである必要がないため、ルーティングが簡略化されます。必要に応じてプロキシ ARP を無効にすることもできます。その場合、アップストリーム ルータに適切なルートが確実に設定されていなくてはなりません。アイデンティティ NAT の場合、通常はプロキシ ARP が不要で、場合によっては接続性に関する問題を引き起こす可能性があります。
- [宛先インターフェイスのルートルックアップの実行 (Perform route lookup for Destination Interface)] : 元の発信元アドレスと変換された発信元アドレスに同一のオブジェクトを選択する際に送信元インターフェイスと宛先インターフェイスを選択する場合、このオプションを選択すると、NAT ルールで設定された宛先インターフェイスではなくルーティング テーブルに基づいてシステムが宛先インターフェイスを決定するようにできます。

ステップ 9 [OK] をクリックします。

Threat Defense の NAT ルールのプロパティ

ネットワークアドレス変換（NAT）ルールを使用して、IP アドレスを他の IP アドレスに変換します。通常、NAT ルールを使用して、プライベートアドレスをパブリックにルーティング可能なアドレスに変換します。1つのアドレスから別のアドレスへ変換することも、また、ポートアドレス変換（PAT）を使用して、多数のアドレスを1つのアドレスへ変換することもできます（ポート番号を利用して送信元アドレスを区別します）。

NAT ルールには次の基本的なプロパティが含まれます。特に説明がない限り、自動 NAT ルールと手動 NAT ルールのプロパティは同じです。

立場

ルールの名前を入力します。名前にスペースを含めることはできません。

ルールの作成（Create Role For）

変換ルールを[自動 NAT（Auto NAT）]にするか、[手動 NAT（Manual NAT）]にするかを指定します。自動 NAT は手動 NAT よりも簡単ですが、手動 NAT では、宛先アドレスに基づいて送信元アドレス用に別々の変換を作成できます。

[ステータス（Status）]

ルールをアクティブにするか、無効にするかを指定します。

配置（Placement）（手動 NAT のみ）

ルールを追加する場所です。ルールは、カテゴリ（自動 NAT ルールの前か後）、または選択したルールの上か下に挿入できます。

[タイプ（Type）]

変換ルールを[ダイナミック（Dynamic）]または[スタティック（Static）]で指定します。ダイナミック変換はマッピングアドレスをアドレスのプール（PAT 実装時にはアドレスとポートの組み合わせ）から自動的に選択します。マッピングアドレスおよびポートを独自に定義する場合はスタティック変換を使用します。

以降のトピックでは、その他の NAT ルール プロパティについて説明します。

自動 NAT のパケット変換プロパティ

[パケット変換（Packet Translation）] オプションを使用して、送信元アドレスとマッピング変換後アドレスを定義します。次のプロパティは自動 NAT にのみ適用されます。

[送信元インターフェイス（Source Interface）]、[宛先インターフェイス（Destination Interface）]

（ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須）この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバインターフェイスを除くすべてのインターフェイス（[Any]）に適用されます。

[元のアドレス (Original Address)] (常に必須)

変換している送信元アドレスを含むネットワーク オブジェクト。グループではなくネットワーク オブジェクトにする必要があり、ホスト、範囲、またはサブネットを含めることができます。

[変換済みアドレス (Translated Address)] (通常は必須)

変換先のマッピング アドレス。ここでの選択は定義する変換ルールのタイプに依存します。

- **[ダイナミック NAT (Dynamic NAT)]** : マッピング アドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループ。これはネットワーク オブジェクトまたはグループにすることができますが、サブネットを含むことはできません。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。グループに範囲とホスト IP アドレスの両方が含まれている場合、範囲はダイナミック NAT に使用され、ホスト IP アドレスは PAT のフォールバックとして使用されます。
- **[ダイナミック PAT (Dynamic PAT)]** : 次のいずれかです。
 - (インターフェイス PAT)。接続先インターフェイスの IPv4 アドレスを使用する場合は、**[インターフェイス (Interface)]** を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループ メンバー インターフェイスは選択できません。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
 - 接続先インターフェイスアドレス以外の単一アドレスを使用するには、この目的で作成したホスト ネットワーク オブジェクトを選択します。
- **[スタティック NAT (Static NAT)]** : 次のいずれかです。
 - アドレスの設定グループを使用するには、マッピングされたアドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループを選択します。オブジェクトまたはグループはホスト、範囲、またはサブネットを含むことができます。通常、1対1のマッピングでは、実際のアドレスと同じ数のマッピングアドレスを設定します。しかし、アドレスの数が一致しない場合もあります。
 - (ポート変換を適用するスタティック インターフェイス NAT の場合) 接続先インターフェイスのアドレスを使用するには、**[インターフェイス (Interface)]** を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループ メンバー インターフェイスは選択できません。これはポート変換と共に、スタティック インターフェイス NAT を設定します。送信元アドレス/ポートは、インターフェイスのアドレス、および同じポート番号に変換されます。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
- **[アイデンティティ NAT (Identity NAT)]** : 送信元と同じオブジェクト。オプションで、内容が完全に同じ別のオブジェクトを選択することもできます。

[変換前のポート (Original Port)]、[変換後のポート (Translated Port)] (スタティック NAT のみ)

TCP または UDP ポートを変換する必要がある場合、変換前のポートと変換後のポートを定義するポートオブジェクトを選択します。オブジェクトは、同じプロトコルを対象としたものでなければなりません。たとえば、必要に応じて TCP/80 を TCP/8080 に変換することができます。

手動 NAT のパケット変換プロパティ

[パケット変換 (Packet Translation)] オプションを使用して、送信元アドレスとマッピング変換後アドレスを定義します。次のプロパティは手動 NAT にのみ適用されます。特に説明がない限り、すべてオプションです。

[送信元インターフェイス (Source Interface)]、[宛先インターフェイス (Destination Interface)]

(ブリッジ グループ メンバー インターフェイスの場合は必須) この NAT ルールを適用するインターフェイス。[Source] は実際のインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスに入ります。[Destination] はマッピングされたインターフェイスで、このインターフェイスを経由してトラフィックはデバイスから出ます。デフォルトでは、ルールはブリッジ グループ メンバインターフェイスを除くすべてのインターフェイス ([Any]) に適用されます。

[元の送信元アドレス (Original Source Address)] (常に必須)

変換するアドレスを含むネットワークオブジェクトまたはグループ。これはネットワークオブジェクトまたはグループにすることが可能で、ホスト、範囲、またはサブネットを含むことができます。変換前のすべての送信元トラフィックを変換する場合、ルール内に [任意 (Any)] を指定できます。

[変換後の送信元アドレス (Translated Source Address)] (通常は必須)

変換先のマッピングアドレス。ここでの選択は定義する変換ルールのタイプに依存します。

- [ダイナミック NAT (Dynamic NAT)] : マッピングアドレスを含むネットワークオブジェクトまたはグループ。これはネットワークオブジェクトまたはグループにすることができますが、サブネットを含むことはできません。グループに IPv4 アドレスと IPv6 アドレスの両方を混在させることはできません。グループに含まれるタイプは 1 つだけにする必要があります。グループに範囲とホスト IP アドレスの両方が含まれている場合、範囲はダイナミック NAT に使用され、ホスト IP アドレスは PAT のフォールバックとして使用されます。
- [ダイナミック PAT (Dynamic PAT)] : 次のいずれかです。
 - (インターフェイス PAT)。接続先インターフェイスのアドレスを使用するには、[インターフェイス (Interface)] を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループメンバーインターフェイスは選択できません。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。

- 接続先インターフェイスアドレス以外の単一アドレスを使用するには、この目的で作成したホスト ネットワーク オブジェクトを選択します。
- [スタティック NAT (Static NAT)] : 次のいずれかです。
 - アドレスの設定グループを使用するには、マッピングされたアドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループを選択します。オブジェクトまたはグループはホスト、範囲、またはサブネットを含むことができます。通常、1対1のマッピングでは、実際のアドレスと同じ数のマッピングアドレスを設定します。しかし、アドレスの数が一致しない場合もあります。
 - (ポート変換を適用するスタティック インターフェイス NAT の場合) 接続先インターフェイスのアドレスを使用するには、[インターフェイス (Interface)] を選択します。この場合、特定の接続先インターフェイスも選択する必要があります。ブリッジグループメンバーインターフェイスは選択できません。これはポート変換と共に、スタティック インターフェイス NAT を設定します。送信元アドレス/ポートは、インターフェイスのアドレス、および同じポート番号に変換されます。IPv6 にインターフェイス PAT を使用することはできません。
- [アイデンティティ NAT (Identity NAT)] : 送信元と同じオブジェクト。オプションで、内容が完全に同じ別のオブジェクトを選択することもできます。

[元の宛先アドレス (Original Destination Address)]

宛先アドレスを含むネットワークオブジェクト。空白のままにすると、宛先に関係なく、送信元アドレス変換が適用されます。宛先アドレスを指定した場合、そのアドレスにスタティック変換を設定するか、単にアイデンティティ NAT を使用できます。

[インターフェイス (Interface)] を選択して、元の宛先を送信元インターフェイスに基づかせることもできます (この場合、[すべて (Any)] を指定することはできません)。このオプションを選択する場合、変換済みの宛先オブジェクトも選択する必要があります。スタティック インターフェイス NAT に宛先アドレスのポート変換を実装するには、このオプションを選択し、さらにその宛先ポートの適切なポートオブジェクトを選択します。

[変換済み宛先アドレス (Translated Destination Address)]

変換後のパケットで使用される宛先アドレスを含むネットワーク オブジェクトまたはグループを指定します。[変換前の宛先 (Original Destination)] にオブジェクトを選択した場合、同じオブジェクトを選択してアイデンティティ NAT (つまり、変換なし) を設定します。

変換後の宛先として完全修飾ドメイン名を指定するネットワークオブジェクトを使用できます。詳細については、[FQDN 宛先のガイドライン \(704ページ\)](#) を参照してください。

[変換前の送信元ポート (Original Source Port)]、[変換後の送信元ポート (Translated Source Port)]、[変換前の宛先ポート (Original Destination Port)]、[変換後の宛先ポート (Translated Destination Port)]

変換前のパケットと変換後のパケットに対する送信元サービスと宛先サービスを定義するポートオブジェクト。ポートを変換する、もしくは、ポートを変換せずにルールをサービ

スに提供できるように同じオブジェクトを選択します。サービスを設定するときは、次のルールに注意してください。

- (ダイナミック NAT または PAT) 。[変換前の送信元ポート (Original Source Port)] および [変換後の送信元ポート (Translated Source Port)] では変換できません。変換は宛先ポートでのみ実行できます。
- NAT では、TCP または UDP だけがサポートされます。ポートを変換する場合、実際のサービス オブジェクトのポートとマッピング サービス オブジェクトのポートの両方を同じにします (両方とも TCP または両方とも UDP) 。アイデンティティ NAT では、実際のポートとマッピング ポートの両方に同じオブジェクトを使用できます。

詳細 NAT プロパティ

NAT を設定する場合、**[詳細 (Advanced)]** オプションで、専門サービスを提供するプロパティを設定できます。これらのプロパティはすべてオプションです。サービスが必要な場合にのみ設定します。

このルールに一致する DNS 回答の変換

DNS 応答の IP アドレスを変換するかどうかを指定します。マッピングインターフェイスから実際のインターフェイスに移動する DNS 応答の場合、アドレス (IPv4 A または IPv6 AAAA) レコードはマッピングされた値から実際の値に書き換えられます。反対に、実際のインターフェイスからマッピングされたインターフェイスへの DNS 応答の場合、レコードは実際の値からマッピングされた値に書き換えられます。このオプションは特殊なときに使用され、NAT64/46 の変換で必要になる場合もあります。この場合、書き換えによって A レコードと AAAA レコードの変換も実行されます。詳細については、「[NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え \(777 ページ\)](#)」を参照してください。このオプションは、スタティック NAT ルールでポート変換を行っているときは利用できません。

[インターフェイス PAT へのフォールスルー (宛先インターフェイス) (Fallthrough to Interface PAT (Destination Interface))] (ダイナミック NAT のみ)

他のマッピングアドレスがすでに割り当てられている場合、バックアップ手段として宛先インターフェイスの IP アドレスを使用するかどうか (インターフェイス PAT フォールバック) を指定します。このオプションは、ブリッジグループのメンバーではない宛先インターフェイスを選択した場合にのみ使用できます。変換されたアドレスとしてすでにインターフェイス PAT を設定している場合、このオプションを選択できません。このオプションは、IPv6 ネットワークでは使用できません。

宛先インターフェイスでプロキシ ARP なし (スタティック NAT のみ)

マッピング IP アドレスへの着信パケットのプロキシ ARP を無効にします。マッピングインターフェイスと同じネットワーク上のアドレスを使用した場合、システムはプロキシ ARP を使用してマッピングアドレスのすべての ARP 要求に応答することで、マッピングアドレスを宛先とするトラフィックを代行受信します。この方法では、デバイスがその他のネットワークのゲートウェイである必要がないため、ルーティングが簡略化されます。必要に応じてプロキシ ARP を無効にすることもできます。その場合、アップストリーム

ルータに適切なルートが確実に設定されていなくてはなりません。アイデンティティ NAT の場合、通常はプロキシ ARP が不要で、場合によっては接続性に関する問題を引き起こす可能性があります。

[宛先インターフェイスのルート ルックアップの実行 (Perform Route Lookup for Destination Interface)] (静的アイデンティティ NAT のみ、ルーテッド モードのみ)

元の発信元アドレスと変換された発信元アドレスに同一のオブジェクトを選択する際に送信元インターフェイスと宛先インターフェイスを選択する場合、このオプションを選択すると、NAT ルールで設定された宛先インターフェイスではなくルーティング テーブルに基づいてシステムが宛先インターフェイスを決定するようにできます。

IPv6 ネットワークの変換

トラフィックが IPv6 のみのネットワークと IPv4 のみのネットワークの間を通過する必要がある場合、NAT を使用してアドレス タイプを変換する必要があります。2 つの IPv6 ネットワークの場合でも、外部ネットワークに対して内部アドレスを非表示にする必要がある場合があります。

IPv6 ネットワークでは次の変換タイプを使用できます。

- NAT64、NAT46—IPv6 パケットから IPv4 パケットへの変換とその逆変換2つのポリシー、IPv6 から IPv4 への変換、および IPv4 から IPv6 への変換を定義する必要があります。これは、1 つの手動 NAT ルールで実行できますが、DNS サーバが外部ネットワーク上にある場合、DNS 応答をリライトする必要があります。宛先を指定するときに手動 NAT ルールで DNS リライトを有効にすることができないため、2 つの自動 NAT ルールを作成することがより適切なソリューションです。



(注) NAT46 はスタティック マッピングのみをサポートします。

- NAT66—IPv6 パケットを別の IPv6 アドレスに変換します。スタティック NAT を使用することを推奨します。ダイナミック NAT または PAT を使用できますが、IPv6 アドレスは大量にあるため、ダイナミック NAT を使用する必要はありません。



(注) NAT64 および NAT 46 は、標準のルーテッド インターフェイスのみで使用できます。NAT66 は、ルーテッドおよびブリッジ グループ メンバー インターフェイスの両方で使用できます。

NAT64/46 : IPv6 から IPv4 へのアドレス変換

トラフィックが IPv6 ネットワークから IPv4 専用のネットワークへ通過する際には IPv6 アドレスを IPv4 に変換し、リターン トラフィックに対しては IPv4 から IPv6 に変換する必要があります。IPv6 アドレスをバインドする IPv4 アドレス プール (IPv4 内) と IPv4 アドレスをバイ

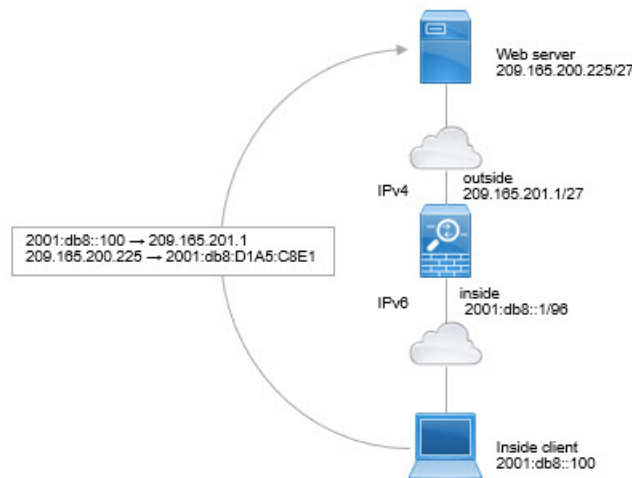
ンドする IPv6 アドレス プール (IPv6 内) という 2 つのアドレス プールを定義する必要があります。

- NAT64 ルール用の IPv4 アドレス プールは、一般に小さく、通常は IPv6 クライアント アドレスと 1 対 1 でマッピングするために十分なアドレスを持っていません。ダイナミック PAT は、ダイナミック NAT やスタティック NAT と比較して、多数の IPv6 クライアント アドレスに容易に適合します。
- NAT 46 ルール用の IPv6 アドレス プールは、マッピングされる IPv4 アドレスの数以上にすることができます。よって、各 IPv4 アドレスを異なる IPv6 アドレスにマッピングできます。NAT46 はスタティック マッピングのみをサポートするため、ダイナミック PAT は使用できません。

送信元 IPv6 ネットワーク用と、宛先 IPv4 ネットワーク用の 2 つのポリシーを定義する必要があります。これは、1 つの手動 NAT ルールで実行できますが、DNS サーバが外部ネットワーク上にある場合、DNS 応答をリライトする必要があります。宛先を指定するときに手動 NAT ルールで DNS リライトを有効にすることができないため、2 つの自動 NAT ルールを作成することがより適切なソリューションです。

NAT64/46 の例：内部 IPv6 ネットワークと外部 IPv4 インターネット

次に、内部 IPv6 専用ネットワークがある場合に、インターネットに送信されるトラフィックを IPv4 に変換する簡単な例を示します。この例では DNS 変換が不要なため、1 つの手動 NAT ルールで NAT64 と NAT46 の両方の変換を実行できる、と想定しています。



この例では、外部インターフェイスの IP アドレスとダイナミック PAT インターフェイスを使用して、内部 IPv6 ネットワークを IPv4 に変換します。外部 IPv4 トラフィックは 2001:db8::/96 ネットワークのアドレスに静的に変換され、内部ネットワークでの送信が許可されます。

手順

ステップ 1 内部 IPv6 ネットワークのためのネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- b) コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- c) 内部 IPv6 ネットワークを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：inside_v6）、[ネットワーク (Network)] を選択し、ネットワーク アドレス 2001:db8::/96 を入力します。

Add Network Object

Name
inside_v6

Description

Type
☒ Network ☐ Host

Network
2001:DB8::/96

- d) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。

ステップ 2 IPv6 ネットワークを IPv4 に変換し、再度変換する手動 NAT ルールを作成します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル (Title)] = PAT64Rule（またはユーザーが選択する別の名前）
 - [ルール の 作成 対象 (Create Rule For)] = [手動 NAT (Manual NAT)]。
 - [配置 (Placement)] : [自動 NAT ルールの 前 (Before Auto NAT Rules)]。
 - [タイプ (Type)] = [ダイナミック (Dynamic)]
 - [送信元 インターフェイス (Source Interface)] : inside。
 - [宛先 インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
 - [元の パケット 発信元 アドレス (Original Packet Source Address)] : inside_v6 ネットワーク オブジェクト。
 - [変換済み パケット 発信元 アドレス (Translated Packet Source Address)] : [インターフェイス (Interface)]。このオプションでは、宛先 インターフェイスの IPv4 アドレスが PAT アドレスとして使用されます。

- [元の packets宛先アドレス (Original Packet Destination Address)] : inside_v6 ネットワークオブジェクト。
- [変換済み packets宛先アドレス (Translated Packet Destination Address)] : any-ipv4 ネットワークオブジェクト。

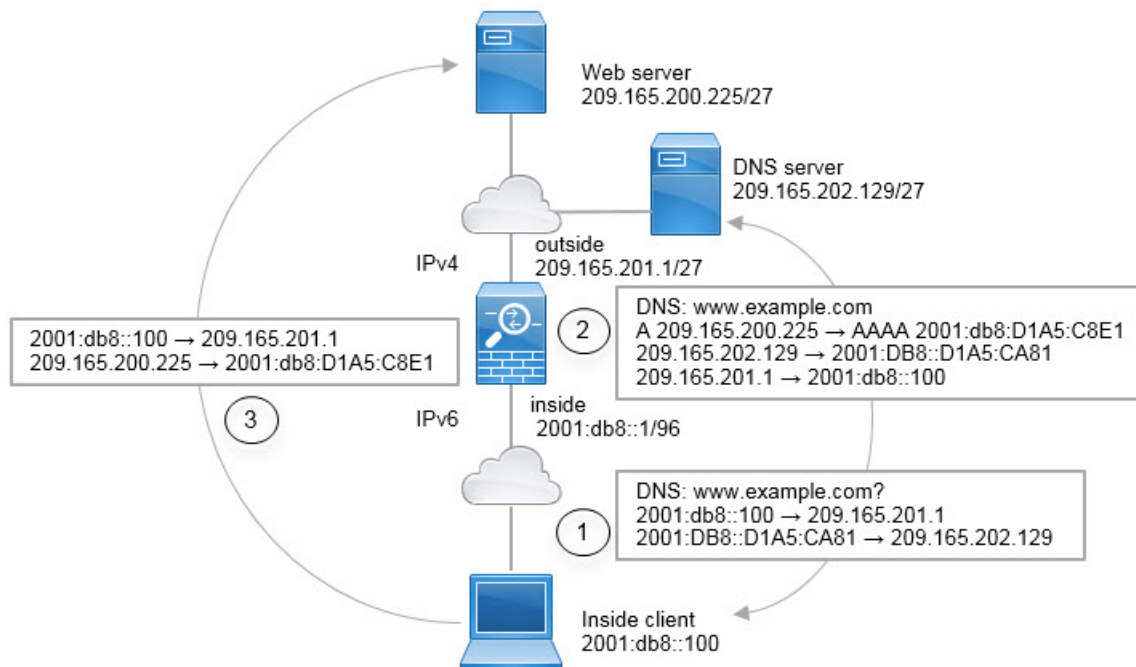
Title		Create Rule for		Status
PAT64Rule		Manual NAT		☒
Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.				
Placement		Type		
Before Auto NAT Rules		Dynamic		
Packet Translation		Advanced Options		
ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET		
Source Interface		Destination Interface		
inside		outside		
Source Address	Source Port	Source Address	Source Port	
inside_v6	Any	Interface	Any	
Destination Address	Destination Port	Destination Address	Destination Port	
inside_v6	Any	any-ipv4	Any	

d) [OK] をクリックします。

このルールにより、内部インターフェイスの 2001:db8::/96 サブネットから外部インターフェイスに向かうすべてのトラフィックが、外部インターフェイスの IPv4 アドレスを使用して NAT64 PAT 変換されます。逆に、内部インターフェイスに入る外部ネットワークの IPv4 アドレスはすべて、組み込み IPv4 アドレス方式を使用して 2001:db8::/96 ネットワーク上の 1 つのアドレスに変換されます。

NAT64/46 の例：外部 IPv4 インターネットと DNS 変換を使用した内部 IPv6 ネットワーク

内部の IPv6 専用ネットワークが存在するものの、内部ユーザが必要とする一部の IPv4 専用サービスがインターネット外部に存在する例を次に示します。



この例では、外部インターフェイスの IP アドレスとダイナミック PAT インターフェイスを使用して、内部 IPv6 ネットワークを IPv4 に変換します。外部 IPv4 トラフィックは 2001:db8::/96 ネットワークのアドレスに静的に変換され、内部ネットワークでの送信が許可されます。NAT46 ルールでの DNS の書き換えを有効にし、外部 DNS サーバからの応答を A (IPv4) から AAAA (IPv6) レコードに変換したり、アドレスを IPv4 から IPv6 に変換したりできます。

内部 IPv6 ネットワーク上の 2001:DB8::100 にあるクライアントが www.example.com を開こうとする Web 要求の通常のシーケンスを次に示します。

1. クライアントのコンピュータは、2001:DB8::D1A5:CA81 で DNS サーバに DNS リクエストを送信します。NAT ルールは、DNS リクエストで送信元と宛先に以下の変換を実行します。
 - 2001:DB8::100 から 209.165.201.1 上の固有のポート (NAT64 インターフェイス PAT ルール)
 - 2001:DB8::D1A5:CA81 から 209.165.202.129 (NAT46 ルール。D1A5:CA81 は IPv6 の 209.165.202.129 と同じです)
2. DNS サーバが応答で、www.example.com が 209.165.200.225 であるという A レコードを示します。DNS の書き換えが有効になっている NAT46 ルールは、A レコードを IPv6 版の AAAA レコードに変換し、AAAA レコードの 209.165.200.225 を 2001:db8:D1A5:C8E1 に変換します。さらに、DNS 応答の発信元アドレスと宛先アドレスは変換されません。
 - 209.165.202.129 から 2001:DB8::D1A5:CA81
 - 209.165.201.1 から 2001:db8::100

3. これで、IPv6 クライアントには Web サーバの IP アドレスが含まれるようになり、2001:db8:D1A5:C8E1 で www.example.com への HTTP リクエストを行います（D1A5:C8E1 は IPv6 の 209.165.200.225 と同じです）。HTTP リクエストの発信元アドレスと送信先アドレスは次のように変換されます。

- 2001:DB8::100 から 209.156.101.54 上の固有のポート（NAT64 インターフェイス PAT ルール）
- 2001:db8:D1A5:C8E1 から 209.165.200.225（NAT46 ルール）

次の手順では、この例の指定方法について説明します。

手順

ステップ 1 内部 IPv6 ネットワークおよび外部 IPv4 ネットワークを定義するネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- 内部 IPv6 ネットワークを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：inside_v6）、[ネットワーク (Network)] を選択し、ネットワーク アドレス 2001:db8::/96 を入力します。

Add Network Object

Name

inside_v6

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

2001:DB8::/96

- [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。
- [+] をクリックして、外部 IPv4 ネットワークを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：outside_v4_any）、[ネットワーク (Network)] を選択し、ネットワーク アドレス 0.0.0.0/0 を入力します。

Add Network Object

Name
outside_v4_any

Description

Type
☒ Network ☐ Host

Network
0.0.0.0/0

ステップ 2 内部 IPv6 ネットワークの NAT64 ダイナミック PAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル (Title)] = PAT64Rule (またはユーザーが選択する別の名前)
 - [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
 - [種類 (Type)] : Dynamic。
 - [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
 - [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
 - [元のアドレス (Original Address)] : [inside_v6] ネットワーク オブジェクト。
 - [変換後のアドレス (Translated Address)] = [インターフェイス (Interface)]。このオプションは、PAT アドレスとしての宛先インターフェイスの IPv4 アドレスです。

Add NAT Rule

Title
PAT64Rule

Create Rule for
Auto NAT

Status
☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement
Automatically placed in Auto NAT rules

Type
Dynamic

Packet Translation **Advanced Options**

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	inside	Destination Interface	outside
Original Address	inside_v6	Translated Address	Interface
Original Port	Any	Translated Port	Any

d) [OK] をクリックします。

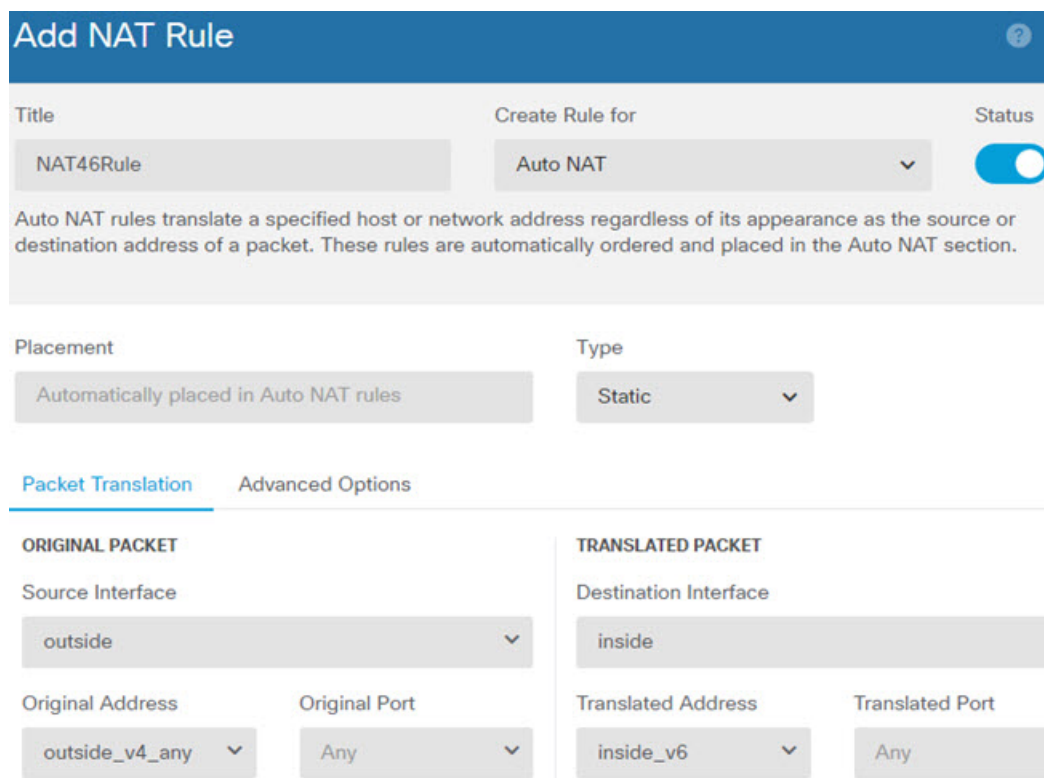
このルールを使用すると、内部インターフェイス上の 2001:db8::/96 サブネットから外部インターフェイスに入るすべてのトラフィックは、外部インターフェイスの IPv4 アドレスを使用して NAT64 PAT 変換を受けます。

ステップ 3 外部 IPv4 ネットワークのスタティック NAT46 ルールを設定します。

a) [+] ボタンをクリックします。

b) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = NAT46Rule (またはユーザーが選択する別の名前)。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : outside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : inside。
- [元のアドレス (Original Address)] = [outside_v4_any] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] = [inside_v6] ネットワーク オブジェクト。
- [詳細オプション (Advanced Options)] タブで、[このルールに一致する DNS 応答を変換する (Translate DNS replies that match this rule)] を選択します。



Add NAT Rule

Title: NAT46Rule Create Rule for: Auto NAT Status: ☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules Type: Static

Packet Translation Advanced Options

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	outside	Destination Interface	inside
Original Address	outside_v4_any	Translated Address	inside_v6
Original Port	Any	Translated Port	Any

c) [OK] をクリックします。

このルールを使用すると、内部インターフェイスに入る外部ネットワークの IPv4 アドレスはすべて、組み込み IPv4 アドレス方式を使用して 2001:db8::/96 ネットワーク上の 1 つのアドレスに変換されます。さらに、DNS 応答は、A (IPv4) から AAAA (IPv6) レコードに変換され、アドレスは IPv4 から IPv6 に変換されます。

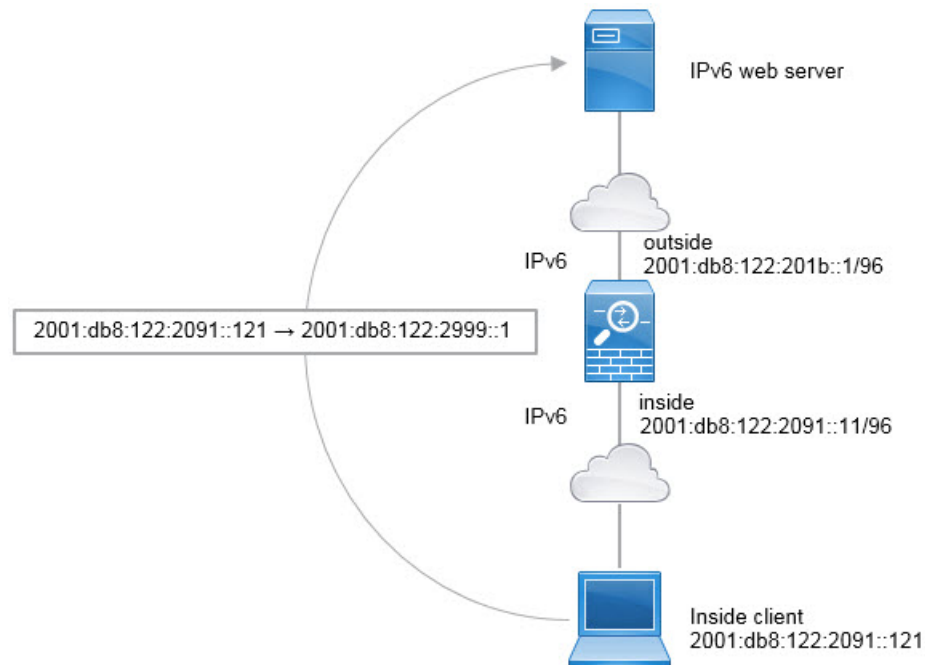
NAT66 : IPv6 アドレスから別の IPv6 アドレスへの変換

IPv6 ネットワークから別の IPv6 ネットワークへと通過する場合、IPv6 アドレスを外部ネットワーク上の別の IPv6 アドレスに変換できます。スタティック NAT を使用することを推奨します。ダイナミック NAT または PAT を使用できますが、IPv6 アドレスは大量にあるため、ダイナミック NAT を使用する必要はありません。

異なるアドレス タイプの間で変換されていないため、NAT66 変換用の 1 つのルールが必要です。これらのルールは、自動 NAT を使用して簡単にモデル化することができます。ただし、リターントラフィックを許可しない場合は、手動 NAT のみを使用してスタティック NAT ルールを単方向にできます。

NAT66 の例：ネットワーク間のスタティック変換

自動NATを使用して、IPv6アドレスプール間のスタティック変換を設定できます。次の例は、2001:db8:122:2091::/96 ネットワークの内部アドレスを、2001:db8:122:2999::/96 ネットワークの外部アドレスへ変換する方法について説明しています。



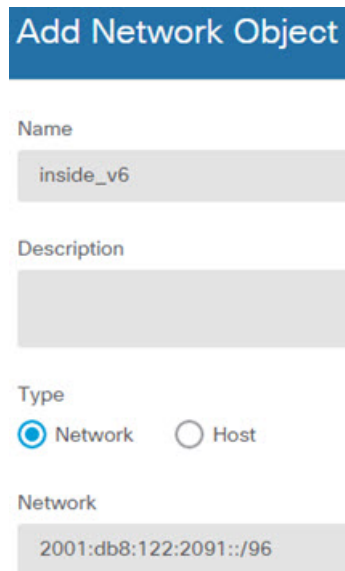
(注) この例では、内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス（BVI）ではなく、標準的なルーテッドインターフェイスであることを想定しています。内部インターフェイスが BVI の場合は、メンバー インターフェイスごとにルールを複製する必要があります。

手順

ステップ 1 内部 IPv6 ネットワークおよび外部 IPv6 NAT ネットワークを定義するネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- 内部 IPv6 ネットワークを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：inside_v6）、[ネットワーク (Network)] を選択し、ネットワーク アドレス 2001:db8:122:2091::/96 を入力します。



Add Network Object

Name
inside_v6

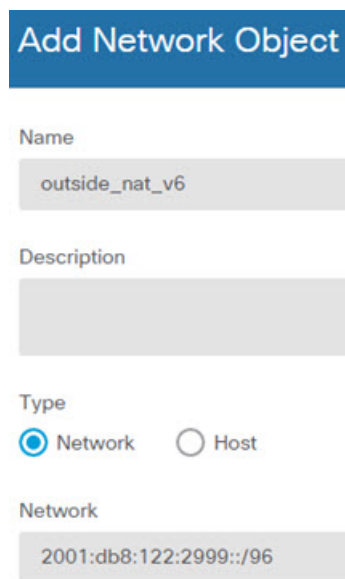
Description

Type
☒ Network ☐ Host

Network
2001:db8:122:2091::/96

- d) [追加 (Add)], [OK] をクリックします。
- e) [+] をクリックして、外部 IPv6 PAT ネットワークを定義します。

ネットワークオブジェクトに名前を付け（例 : outside_nat_v6）、[ネットワーク (Network)] を選択し、ネットワーク アドレス 2001:db8:122:2999::/96 を入力します。



Add Network Object

Name
outside_nat_v6

Description

Type
☒ Network ☐ Host

Network
2001:db8:122:2999::/96

ステップ 2 内部 IPv6 ネットワークのスタティック NAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
- [タイトル (Title)] = NAT66Rule（またはユーザーが選択する別の名前）

- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元のアドレス (Original Address)] : [inside_v6] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] = [outside_nat_v6] ネットワーク オブジェクト。

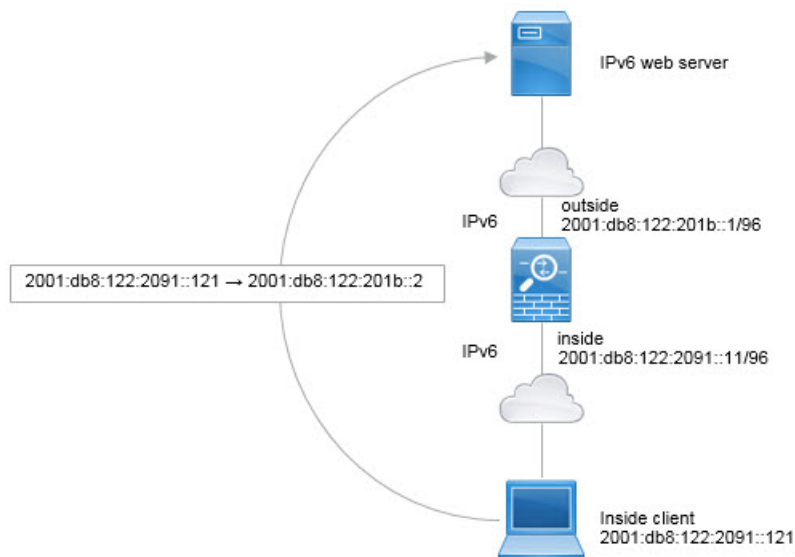
d) [OK] をクリックします。

このルールを使用すると、内部インターフェイス上の 2001:db8:122:2091::/96 サブネットから外部インターフェイスに入るすべてのトラフィックは、2001:db8:122:2999::/96 ネットワークのアドレスへのスタティック NAT66 変換を受けます。

NAT66 の例 : シンプル IPv6 インターフェイス PAT

NAT66 を実装する簡単な方法は、内部アドレスを外部インターフェイス IPv6 アドレスのさまざまなポートに動的に割り当てることです。

ただし、Device Manager を使用して、インターフェイスの IPv6 アドレスを使用するインターフェイス PAT は設定できません。代わりに、ダイナミック PAT プールと同じネットワークで単一のフリー アドレスを使用してください。



(注) この例では、内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス (BVI) ではなく、標準的なルーテッドインターフェイスであることを想定しています。内部インターフェイスが BVI の場合は、メンバー インターフェイスごとにルールを複製する必要があります。

手順

ステップ 1 内部 IPv6 ネットワークおよび IPv6 PAT アドレスを定義するネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- b) コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- c) 内部 IPv6 ネットワークを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け (例 : inside_v6)、[ネットワーク (Network)] を選択し、ネットワーク アドレス 2001:db8:122:2091::/96 を入力します。

Add Network Object

Name
inside_v6

Description

Type
☒ Network ☐ Host

Network
2001:db8:122:2091::/96

- d) [追加 (Add)], [OK] をクリックします。
- e) [+] をクリックして、外部 IPv6 PAT アドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例 : ipv6_pat）、[ホスト (Host)] を選択し、ホスト アドレス 2001:db8:122:201b::2 を入力します。

Add Network Object

Name
ipv6_pat

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
2001:db8:122:201b::2

ステップ 2 内部 IPv6 ネットワークのダイナミック PAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル (Title)] = PAT66Rule（またはユーザーが選択する別の名前）。

- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Dynamic。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元のアドレス (Original Address)] : [inside_v6] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] = [ipv6_pat] ネットワーク オブジェクト。

d) [OK] をクリックします。

このルールを使用すると、内部インターフェイス上の 2001:db8:122:2091::/96 サブネットから外部インターフェイスに入るすべてのトラフィックは、2001:db8:122:201b::2 のポートへのダイナミック PAT66 変換を受けます。

NAT のモニタリング

NAT 接続をモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLI コンソールを開くか、またはデバイスの CLI にログインして、次のコマンドを使用します。

- **show nat** NAT ルールとルールごとのヒット数を表示します。NAT のその他の情報を表示する追加キーワードがあります。
- **show xlate** 現在アクティブな実際の NAT 変換を表示します。
- **clear xlate** アクティブな NAT 変換を削除できます。既存の接続は接続が終了するまで古い変換スロットを継続して使用するため、NAT ルールを変更する場合はアクティブな変換を削除しなければならないことがあります。変換を消去することで、クライアントの次の接続時に、システムは新しいルールに基づいてクライアントの新しい変換を作成します。（このコマンドは CLI コンソールでは使用できません）

NAT の例

ここでは、Threat Defenceデバイス上で NAT を設定する例を紹介します。

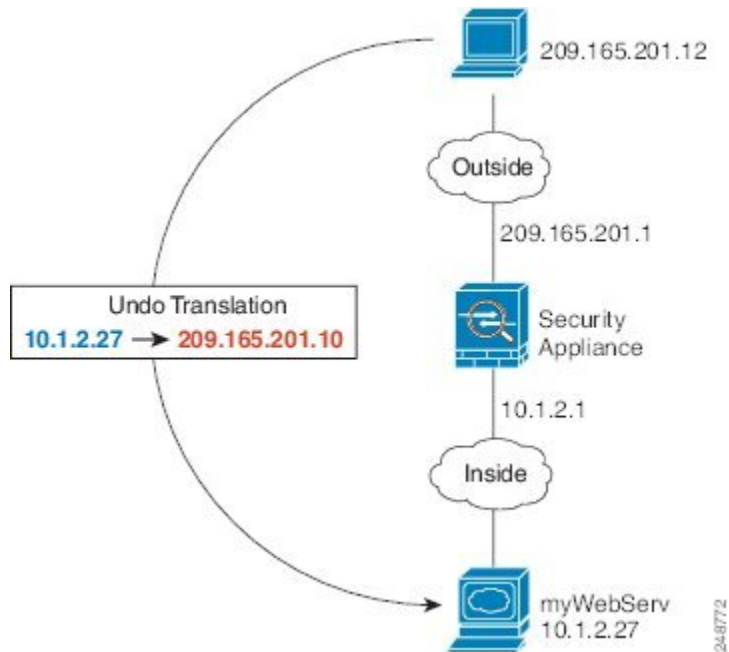
内部 Web サーバへのアクセスの提供（スタティック自動 NAT）

次の例では、内部 Web サーバに対してスタティック NAT を実行します。実際のアドレスはプライベート ネットワーク上にあるので、パブリック アドレスが必要です。スタティック NAT は、固定アドレスにある Web サーバへのトラフィックをホストが開始できるようにするために必要です



(注) この例では、内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス（BVI）ではなく、標準的なルーテッドインターフェイスであることを想定しています。内部インターフェイスが BVI である場合、Web サーバが接続された特定のブリッジ グループ メンバー インターフェイスを選択します（inside1_3 など）。

図 46: 内部 Web サーバのスタティック NAT

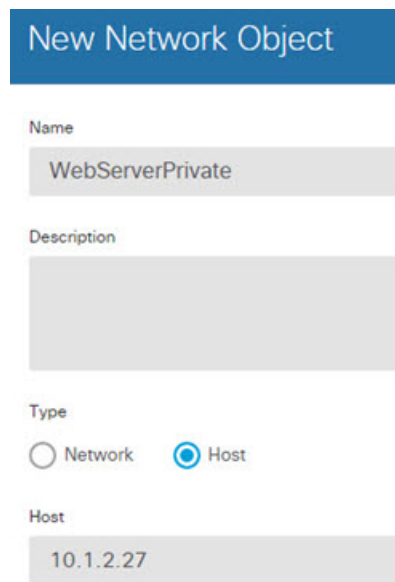


手順

ステップ 1 サーバのプライベートおよびパブリック ホスト アドレスを定義するネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- Web サーバのプライベート アドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け (例: WebServerPrivate)、[ホスト (Host)] を選択し、実際のホスト IP アドレス 10.1.2.27 を入力します。



New Network Object

Name
WebServerPrivate

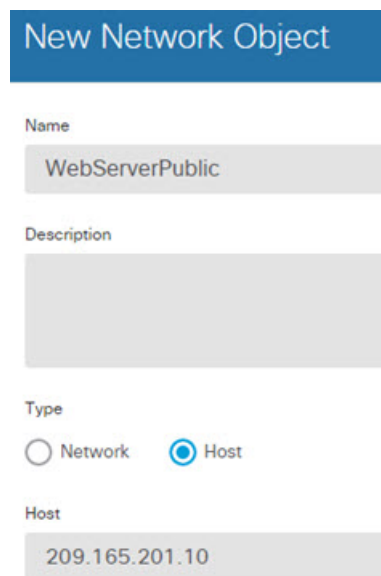
Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
10.1.2.27

- d) [追加 (Add)], [OK] の順にクリックします。
- e) [+] をクリックして、パブリック アドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：WebServerPublic）、[ホスト (Host)] を選択し、ホストアドレス 209.165.201.10 を入力します。



New Network Object

Name
WebServerPublic

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
209.165.201.10

- f) [追加 (Add)], [OK] の順にクリックします。

ステップ 2 オブジェクトのスタティック NAT を設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = WebServer（またはユーザーが選択する別の名前）
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元のアドレス (Original Address)] = [WebServerPrivate] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] = [WebServerPublic] ネットワーク オブジェクト。

Add NAT Rule

Title: WebServer

Create Rule for: Auto NAT

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules

Type: Static

Packet Translation | Advanced Options

Original Packet

Source Interface: inside

Original Address: WebServerPrivate

Original Port: Any

Translated Packet

Destination Interface: outside

Translated Address: WebServerPublic

Translated Port: Any

d) [OK] をクリックします。

FTP、HTTP、および SMTP のための単一アドレス（ポート変換を設定したスタティック自動 NAT）

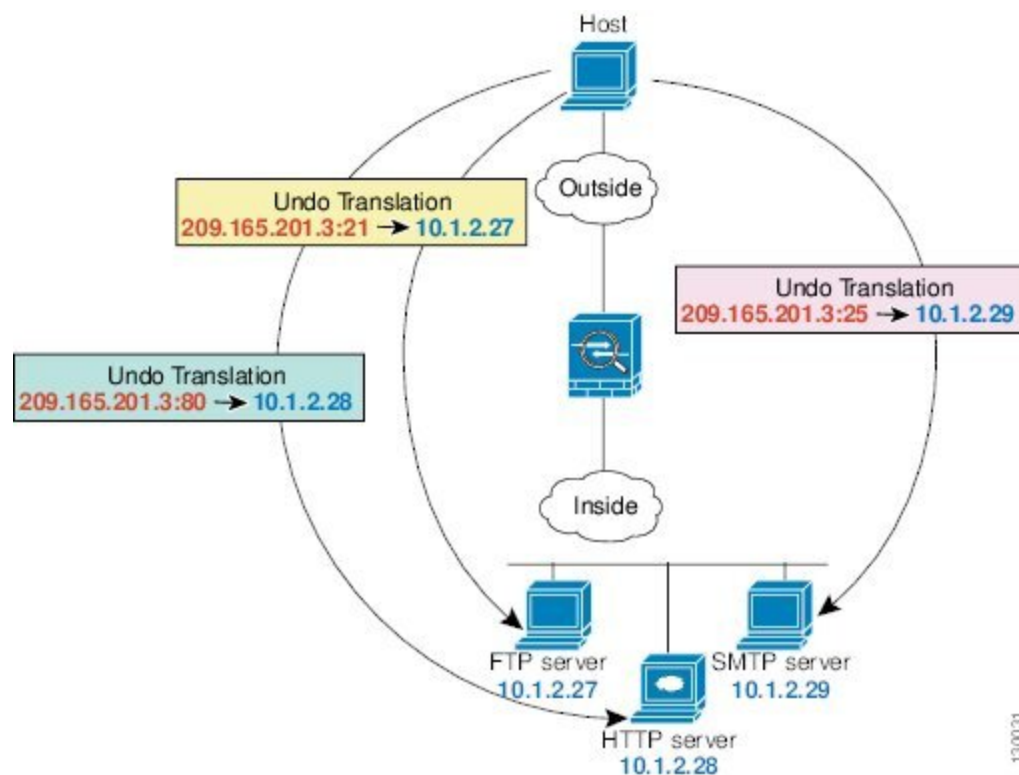
次のポート変換を設定したスタティック NAT の例では、リモート ユーザは単一のアドレスで FTP、HTTP、および SMTP にアクセスできるようになります。これらのサーバは実際には、それぞれ異なるデバイスとして実際のネットワーク上に存在しますが、ポート変換を設定した

スタティック NAT ルールを指定すると、使用するマッピング IP アドレスは同じで、それぞれ別のポートを使用することができます。



- (注) この例では、内部インターフェイスがスイッチに接続された標準的なルーテッドインターフェイスであること、サーバがそのスイッチに接続されていることを想定しています。内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス（BVI）で、サーバが別個のブリッジグループメンバーインターフェイスに接続されている場合、該当するルールにおいて各サーバが接続されている特定のメンバーインターフェイスを選択します。たとえば、内部ではなく、送信元インターフェイスにルール `inside1_2`、`inside1_3`、`inside1_4` が指定されるなどです。

図 47: ポート変換を設定したスタティック NAT



手順

ステップ 1 FTPサーバのネットワークオブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：FTPServer）、[ホスト (Host)] を選択し、FTP サーバの実際の IP アドレス 10.1.2.27 を入力します。

New Network Object

Name
FTPServer

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
10.1.2.27

- d) [追加 (Add)]、[OK] の順にクリックします。

ステップ 2 HTTPサーバのネットワークオブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
b) ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：HTTPServer）、[ホスト (Host)] を選択し、ホストアドレス 10.1.2.28 を入力します。

New Network Object

Name
HTTPServer

Description

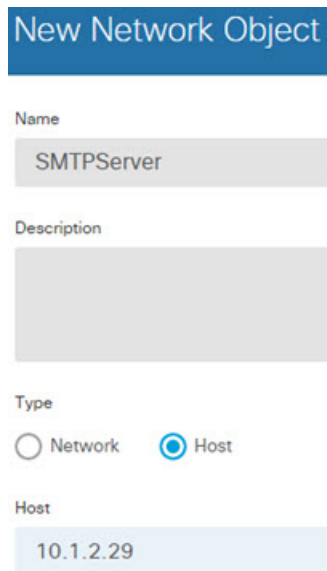
Type
☐ Network ☒ Host

Host
10.1.2.28

- c) [追加 (Add)]、[OK] の順にクリックします。

ステップ 3 SMTPサーバのネットワークオブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
b) ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：SMTPServer）、[ホスト (Host)] を選択し、ホストアドレス 10.1.2.29 を入力します。



New Network Object

Name
SMTPServer

Description

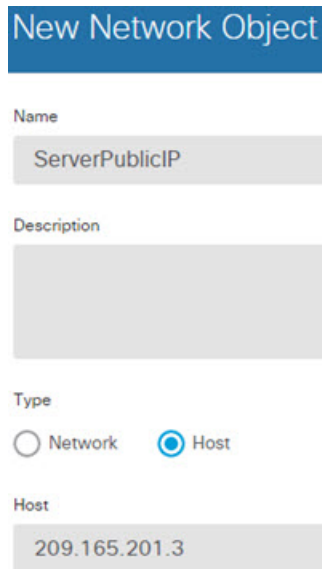
Type
☐ Network ☒ Host

Host
10.1.2.29

- c) [追加 (Add)]、[OK] の順にクリックします。

ステップ 4 3つのサーバに使用されるパブリックIPアドレスのネットワークオブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
- b) ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：ServerPublicIP）、[ホスト (Host)]を選択し、ホストアドレス 209.165.201.3 を入力します。



New Network Object

Name
ServerPublicIP

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
209.165.201.3

- c) [追加 (Add)]、[OK] の順にクリックします。

ステップ 5 FTP サーバに対するポート変換を設定したスタティック NAT を設定し、FTP ポートをマッピングします。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。

c) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = FTPServer（または任意の別の名前）
- [ルールを作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元のアドレス (Original Address)] = [FTPServer] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] = [ServerPublicIP] ネットワーク オブジェクト。
- [元のアドレス (Original Address)] = [FTP] ポート オブジェクト。
- [変換後のアドレス (Translated Address)] = [FTP] ポート オブジェクト。

Add NAT Rule

Title: FTPServer

Create Rule for: Auto NAT

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules

Type: Static

Packet Translation | Advanced Options

Original Packet

Source Interface: inside

Original Address: FTPServer

Original Port: FTP

Translated Packet

Destination Interface: outside

Translated Address: ServerPublicIP

Translated Port: FTP

d) [OK] をクリックします。

ステップ 6 HTTP サーバに対するポート変換を設定したスタティック NAT を設定し、HTTP ポートをマッピングします。

- [+] ボタンをクリックします。
- 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル (Title)] = HTTPServer（または任意の別の名前）。

- [ルールの作成対象（Create Rule For）] = [自動 NAT（Auto NAT）]。
- [種類（Type）] : Static。
- [送信元インターフェイス（Source Interface）] : inside。
- [宛先インターフェイス（Destination Interface）] : outside。
- [元のアドレス（Original Address）] = [HTTPServer] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス（Translated Address）] = [ServerPublicIP] ネットワーク オブジェクト。
- [元のアドレス（Original Address）] = [HTTP] ポート オブジェクト。
- [変換後のアドレス（Translated Address）] = [HTTP] ポート オブジェクト。

Add NAT Rule

Title: HTTPServer Create Rule for: Auto NAT ☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules Type: Static

Packet Translation Advanced Options

Original Packet		Translated Packet	
Source Interface	inside	Destination Interface	outside
Original Address	HTTPServer	Translated Address	ServerPublicIP
Original Port	HTTP	Translated Port	HTTP

- c) [OK] をクリックします。

ステップ 7 SMTP サーバに対するポート変換を設定したスタティック NAT を設定し、SMTP ポートをマッピングします。

- [+] ボタンをクリックします。
- 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル（Title）] = SMTPServer（または任意の別の名前）。
 - [ルールの作成対象（Create Rule For）] = [自動 NAT（Auto NAT）]。
 - [種類（Type）] : Static。

- [送信元インターフェイス（Source Interface）] : inside。
- [宛先インターフェイス（Destination Interface）] : outside。
- [元のアドレス（Original Address）] = [SMTPServer] ネットワーク オブジェクト。
- [変換後のアドレス（Translated Address）] = [ServerPublicIP] ネットワーク オブジェクト。
- [元のアドレス（Original Address）] = [SMTP] ポート オブジェクト。
- [変換後のアドレス（Translated Address）] = [SMTP] ポート オブジェクト。

Add NAT Rule

Title: SMTPServer

Create Rule for: Auto NAT

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules

Type: Static

Packet Translation | Advanced Options

Original Packet		Translated Packet	
Source Interface	inside	Destination Interface	outside
Original Address	SMTPServer	Translated Address	ServerPublicIP
Original Port	SMTP	Translated Port	SMTP

c) [OK] をクリックします。

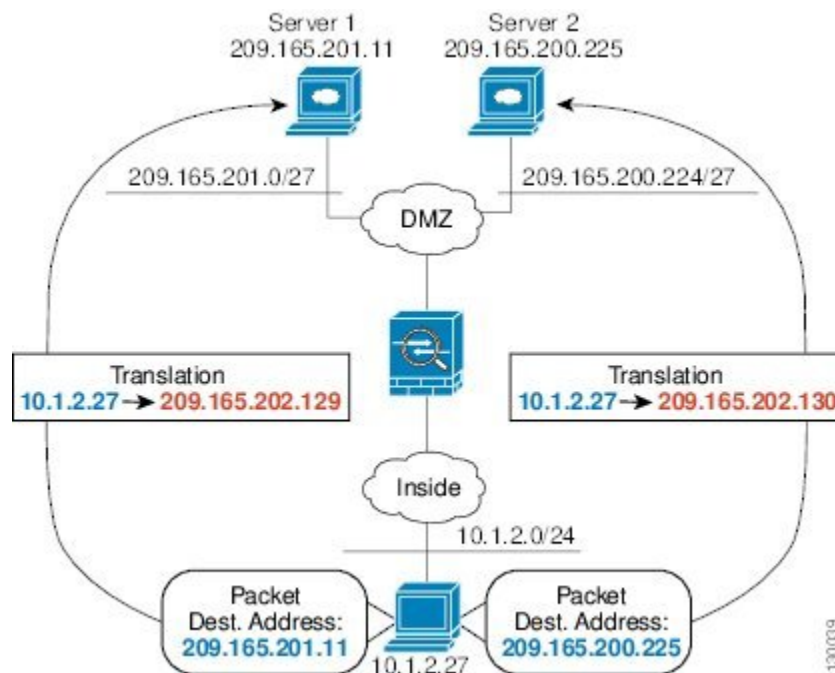
宛先に応じて異なる変換（ダイナミック手動 PAT）

次の図に、2つの異なるサーバにアクセスする、10.1.2.0/24 ネットワーク上のホストを示します。ホストがサーバ 209.165.201.11 にアクセスすると、実際のアドレスは 209.165.202.129:ポートに変換されます。ホストがサーバ 209.165.200.225 にアクセスすると、実際のアドレスは 209.165.202.130:ポートに変換されます。



- (注) この例では、内部インターフェイスがスイッチに接続された標準的なルーテッドインターフェイスであること、サーバがそのスイッチに接続されていることを想定しています。内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス（BVI）で、サーバが別個のブリッジグループメンバーインターフェイスに接続されている場合、該当するルールにおいて各サーバが接続されている特定のメンバーインターフェイスを選択します。たとえば、ルールで、内部ではなく送信元インターフェイスに `inside1_2` と `inside1_3` が指定されるなどです。

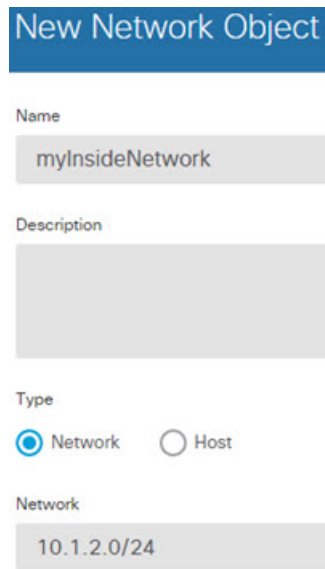
図 48:異なる宛先アドレスを使用する手動 NAT



手順

ステップ 1 内部ネットワーク用のネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- ネットワーク オブジェクトに名前を付け (myInsideNetwork など)、[ネットワーク (Network)] を選択して、実際のネットワーク アドレス 10.1.2.0/24 を入力します。



New Network Object

Name

myInsideNetwork

Description

Type

☒ Network ☐ Host

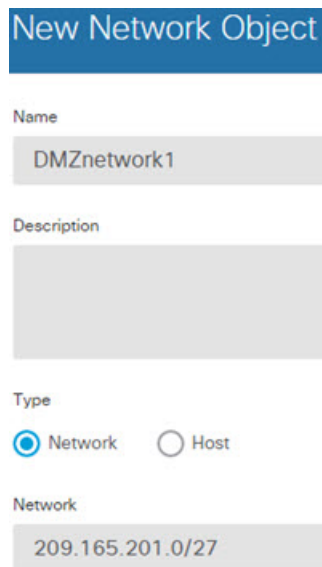
Network

10.1.2.0/24

d) [OK] をクリックします。

ステップ 2 DMZ ネットワーク 1 のネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
- b) ネットワーク オブジェクトに名前（例：DMZnetwork1）を付け、[ネットワーク（Network）] を選択して、ネットワーク アドレス「209.165.201.0/27」（サブネットマスク「255.255.255.224」）を入力します。



New Network Object

Name

DMZnetwork1

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

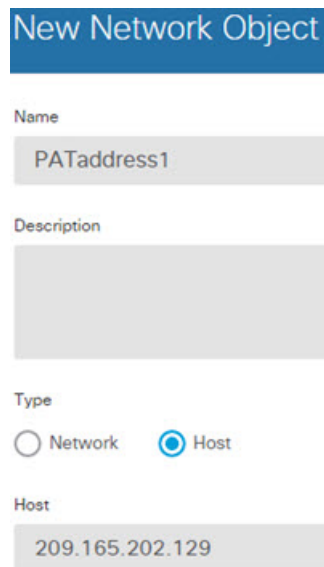
209.165.201.0/27

c) [追加（Add）]、[OK] をクリックします。

ステップ 3 DMZ ネットワーク 1 の PAT アドレスのネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。

- b) ネットワークオブジェクトに名前（例：PATaddress1）を付け、[ホスト（Host）]を選択して、ホストアドレス「209.165.202.129」を入力します。



New Network Object

Name

PATaddress1

Description

Type

☐ Network ☒ Host

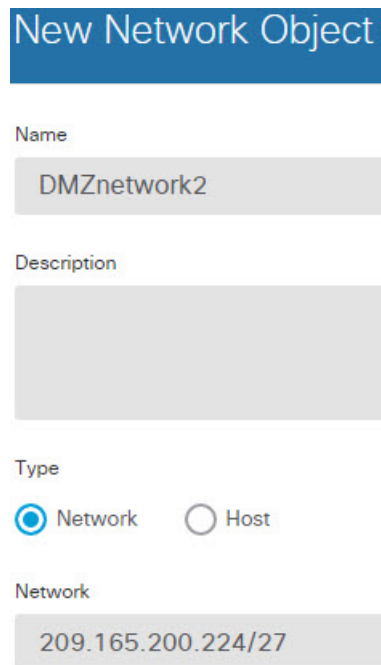
Host

209.165.202.129

- c) [追加（Add）]、[OK] をクリックします。

ステップ 4 DMZ ネットワーク 2 のネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
- b) ネットワークオブジェクトに名前（例：DMZnetwork2）を付け、[ネットワーク（Network）]を選択して、ネットワーク アドレス「209.165.200.224/27」（サブネットマスク「255.255.255.224」）を入力します。



New Network Object

Name

DMZnetwork2

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

209.165.200.224/27

- c) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。

ステップ 5 DMZ ネットワーク 2 の PAT アドレスのネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
b) ネットワーク オブジェクトに名前（例：PATAddress2）を付け、[ホスト (Host)]を選択して、ホストアドレス「209.165.202.130」を入力します。

New Network Object

Name
PATAddress2

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
209.165.202.130

- c) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。

ステップ 6 DMZ ネットワーク 1 のダイナミック手動 PAT を設定します。

- a) [ポリシー (Policies)]> [NAT] を選択します。
b) [+] ボタンをクリックします。
c) 次のプロパティを設定します。
- [タイトル (Title)] = DMZNetwork1（または任意の別の名前）。
 - [ルールを作成対象 (Create Rule For)] = [手動NAT (Manual NAT)]。
 - [種類 (Type)] : Dynamic。
 - [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
 - [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : dmz。
 - [元の発信元アドレス (Original Source Address)] : myInsideNetwork ネットワーク オブジェクト。
 - [変換済み発信元アドレス (Translated Source Address)] : PATAddress1 ネットワーク オブジェクト。
 - [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] : DMZnetwork1 ネットワーク オブジェクト。

- [変換済み宛先アドレス（Translated Destination Address）] : DMZnetwork1 ネットワーク オブジェクト。

（注）

宛先アドレスを変換する必要はないため、元の宛先アドレスと変換後の宛先アドレスに同じアドレスを指定することにより、アイデンティティ NAT を設定する必要があります。ポート フィールドはすべて空欄のままにしておきます。

Add NAT Rule

Title: DMZNetwork1

Create Rule for: Manual NAT

Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.

Placement: Before Auto NAT Rules

Type: Dynamic

Packet Translation | Advanced Options

Original Packet		Translated Packet	
Source Interface	inside	Destination Interface	dmz
Source Address	myInsideNetwork	Source Address	PATaddress1
Source Port	Any	Source Port	Any
Destination Address	DMZnetwork1	Destination Address	DMZnetwork1
Destination Port	Any	Destination Port	Any

- d) [OK] をクリックします。

ステップ 7 DMZ ネットワーク 2 用のダイナミック手動 PAT を設定します。

- [+] ボタンをクリックします。
- 次のプロパティを設定します。
 - タイトル（Title） = DMZNetwork2（または任意の別の名前）。
 - [ルール の 作成 対象（Create Rule For）] = [手動 NAT（Manual NAT）]。
 - [種類（Type）] : Dynamic。
 - [送信元 インターフェイス（Source Interface）] : inside。
 - [宛先 インターフェイス（Destination Interface）] : dmz。

- [元の発信元アドレス（Original Source Address）]：myInsideNetwork ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み発信元アドレス（Translated Source Address）]：PATaddress2 ネットワーク オブジェクト。
- [元の宛先アドレス（Original Destination Address）]：DMZnetwork2 ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み宛先アドレス（Translated Destination Address）]：DMZnetwork2 ネットワーク オブジェクト。

Add NAT Rule

Title: DMZNetwork2

Create Rule for: Manual NAT

Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.

Placement: Before Auto NAT Rules

Type: Dynamic

Packet Translation | Advanced Options

Original Packet		Translated Packet	
Source Interface	inside	Destination Interface	dmz
Source Address	myInsideNetwork	Source Address	PATaddress2
Source Port	Any	Source Port	Any
Destination Address	DMZnetwork2	Destination Address	DMZnetwork2
Destination Port	Any	Destination Port	Any

c) **[OK]** をクリックします。

宛先アドレスおよびポートに応じて異なる変換（ダイナミック手動 PAT）

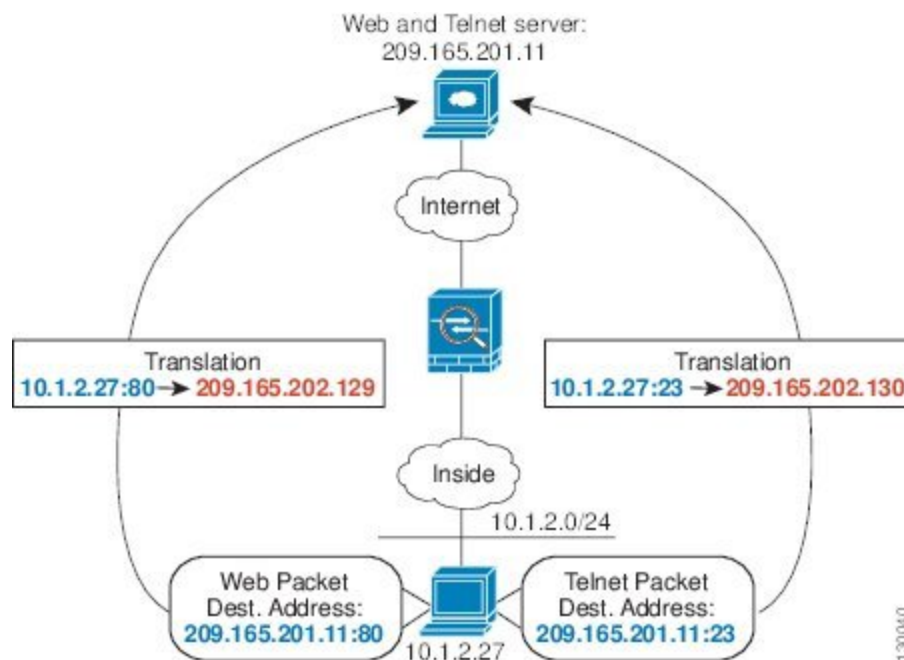
次の図に、送信元ポートおよび宛先ポートの使用例を示します。10.1.2.0/24 ネットワークのホストは Web サービスと Telnet サービスの両方を提供する 1 つのホストにアクセスします。ホストが Telnet サービスを求めてサーバにアクセスすると、実際のアドレスは 209.165.202.129:port

に変換されます。ホストが Web サービスを求めて同じサーバにアクセスすると、実際のアドレスは 209.165.202.130:port に変換されます。



- (注) この例は、内部インターフェイスがスイッチに接続された標準的なルーテッドインターフェイスで、サーバがそのスイッチに接続されていることを想定しています。内部インターフェイスが□ブリッジグループインターフェイス（BVI）で、□ブリッジグループメンバーインターフェイスにサーバが接続されている場合は、サーバの接続先である特定のメンバーインターフェイスを選択します。たとえば、ルールでは内部ではなく送信元インターフェイスに `inside1_2` が指定されるなどです。

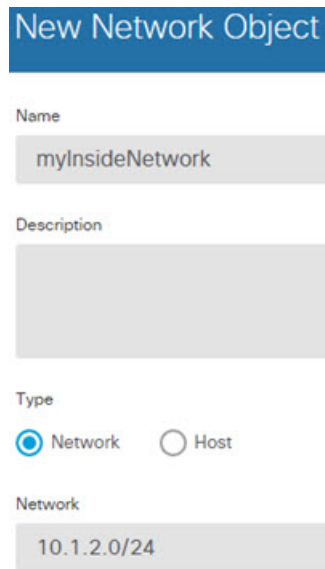
図 49:異なる宛先ポートを使用する手動 NAT



手順

ステップ 1 内部ネットワーク用のネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- ネットワーク オブジェクトに名前を付け (myInsideNetwork など)、[ネットワーク (Network)] を選択して、実際のネットワーク アドレス 10.1.2.0/24 を入力します。

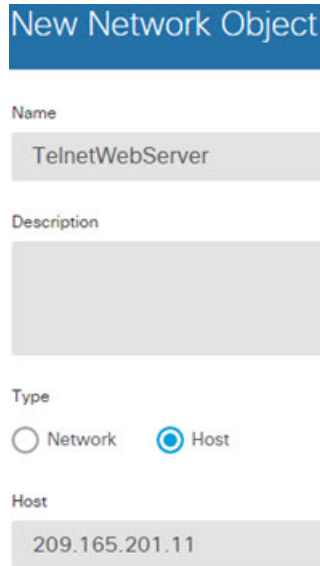


The image shows a 'New Network Object' configuration window. It has a title bar 'New Network Object' in a blue box. Below it, there are three fields: 'Name' with the value 'myInsideNetwork', 'Description' which is empty, and 'Type' with radio buttons for 'Network' (selected) and 'Host'. At the bottom, there is a 'Network' field with the value '10.1.2.0/24'.

d) **[OK]** をクリックします。

ステップ 2 Telnet/Webサーバのネットワークオブジェクトを作成します。

- a) **[+]** をクリックします。
- b) ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：TelnetWebServer）、[ホスト（Host）] を選択して、ホストアドレス「209.165.201.11」を入力します。



The image shows a 'New Network Object' configuration window. It has a title bar 'New Network Object' in a blue box. Below it, there are three fields: 'Name' with the value 'TelnetWebServer', 'Description' which is empty, and 'Type' with radio buttons for 'Network' and 'Host' (selected). At the bottom, there is a 'Host' field with the value '209.165.201.11'.

c) [追加（Add）]、**[OK]** をクリックします。

ステップ 3 Telnet を使用するときは、PAT アドレスのネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) **[+]** をクリックします。
- b) ネットワークオブジェクトに名前（例：PATAddress1）を付け、[ホスト（Host）] を選択して、ホストアドレス「209.165.202.129」を入力します。

New Network Object

Name
PATAddress1

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
209.165.202.129

- c) [追加 (Add)], [OK] をクリックします。

ステップ 4 HTTP を使用するときは、PAT アドレスのネットワーク オブジェクトを作成します。

- a) [+] をクリックします。
 b) ネットワーク オブジェクトに名前（例：PATAddress2）を付け、[ホスト (Host)]を選択して、ホストアドレス「209.165.202.130」を入力します。

New Network Object

Name
PATAddress2

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
209.165.202.130

- c) [追加 (Add)], [OK] をクリックします。

ステップ 5 Telnet アクセスのダイナミック手動 PAT を設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
 b) [+] ボタンをクリックします。
 c) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = TelnetServer（または任意の別の名前）。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [手動NAT (Manual NAT)]。
- [種類 (Type)] : Dynamic。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : dmz。
- [元の発信元アドレス (Original Source Address)] : myInsideNetwork ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み発信元アドレス (Translated Source Address)] : PATAddress1 ネットワーク オブジェクト。
- [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] : TelnetWebServer ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み宛先アドレス (Translated Destination Address)] : TelnetWebServer ネットワーク オブジェクト。
- [元の宛先ポート (Original Destination Port)] : TELNET ポート オブジェクト。
- [変換済み宛先ポート (Translated Destination Port)] : TELNET ポート オブジェクト。

(注)

宛先アドレスやポートを変換する必要はないため、元の宛先アドレスと変換後の宛先アドレスに同じアドレスを指定し、元のポートと変換後のポートに同じポートを指定することにより、アイデンティティ NAT を設定する必要があります。

Add NAT Rule

Title: TelnetServer

Create Rule for: Manual NAT

Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.

Placement: Before Auto NAT Rules

Type: Dynamic

Packet Translation

Original Packet

Source Interface: inside

Source Address: myInsideNetwork

Source Port: Any

Destination Address: TelnetWebServe

Destination Port: TELNET

Translated Packet

Destination Interface: dmz

Source Address: PATAddress1

Source Port: Any

Destination Address: TelnetWebServe

Destination Port: TELNET

d) [OK] をクリックします。

ステップ 6 Web アクセス用のダイナミック手動 PAT を設定します。

a) [+] ボタンをクリックします。

b) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = WebServer（またはユーザーが選択する別の名前）
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [手動NAT (Manual NAT)]。
- [種類 (Type)] : Dynamic。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : dmz。
- [元の発信元アドレス (Original Source Address)] : myInsideNetwork ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み発信元アドレス (Translated Source Address)] : PATAddress2 ネットワーク オブジェクト。
- [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] : TelnetWebServer ネットワーク オブジェクト。

- [変換済み宛先アドレス (Translated Destination Address)] : TelnetWebServer ネットワーク オブジェクト。
- [元の宛先ポート (Original Destination Port)] : HTTP ポート オブジェクト。
- [変換済み宛先ポート (Translated Destination Port)] : HTTP ポート オブジェクト。

c) [OK] をクリックします。

NAT を使用した DNS クエリと応答の書き換え

応答内のアドレスを NAT コンフィギュレーションと一致するアドレスに置き換えて、DNS 応答を修正するように Threat Defense デバイスを設定することが必要になる場合があります。DNS 修正は、各変換ルールの設定時に設定できます。DNS 修正は、DNS Doctoring と呼ばれます。

この機能は、NAT ルールに一致する DNS クエリーと応答のアドレスをリライトします（たとえば、IPv4 の A レコード、IPv6 の AAAA レコード、または逆引き DNS クエリーの PTR レコード）。マッピング インターフェイスから他のインターフェイスに移動する DNS 応答の場合、レコードはマッピングされた値から実際の値に書き換えられます。逆に、任意のインターフェイスからマッピング インターフェイスに移動する DNS 応答では、A レコードは実際の値から

マップされた値へ書き換えられます。この機能は、NAT44、NAT66、NAT46、および NAT64 と連動します。

以下に、NAT ルールで DNS の書き換えを設定する必要がある主な状況を示します。

- ルールが NAT64 または NAT46 で、DNS サーバが外部ネットワーク上に存在する。DNS A レコード (IPv4) と AAAA レコード (IPv6) 間で変換するために DNS 書き換えが必要です。
- DNS サーバが外部に存在し、クライアントが内部に存在し、クライアントが使用する完全修飾ドメイン名の一部が、他の内部ホストに解決される。
- DNS サーバが内部に存在してプライベート IP アドレスで応答し、クライアントが外部に存在する。そして、クライアントが、内部でホストされているサーバを指す完全修飾ドメイン名にアクセスする。

DNS 書き換えに関する制限事項

DNS 書き換えに伴う制限事項を以下に示します。

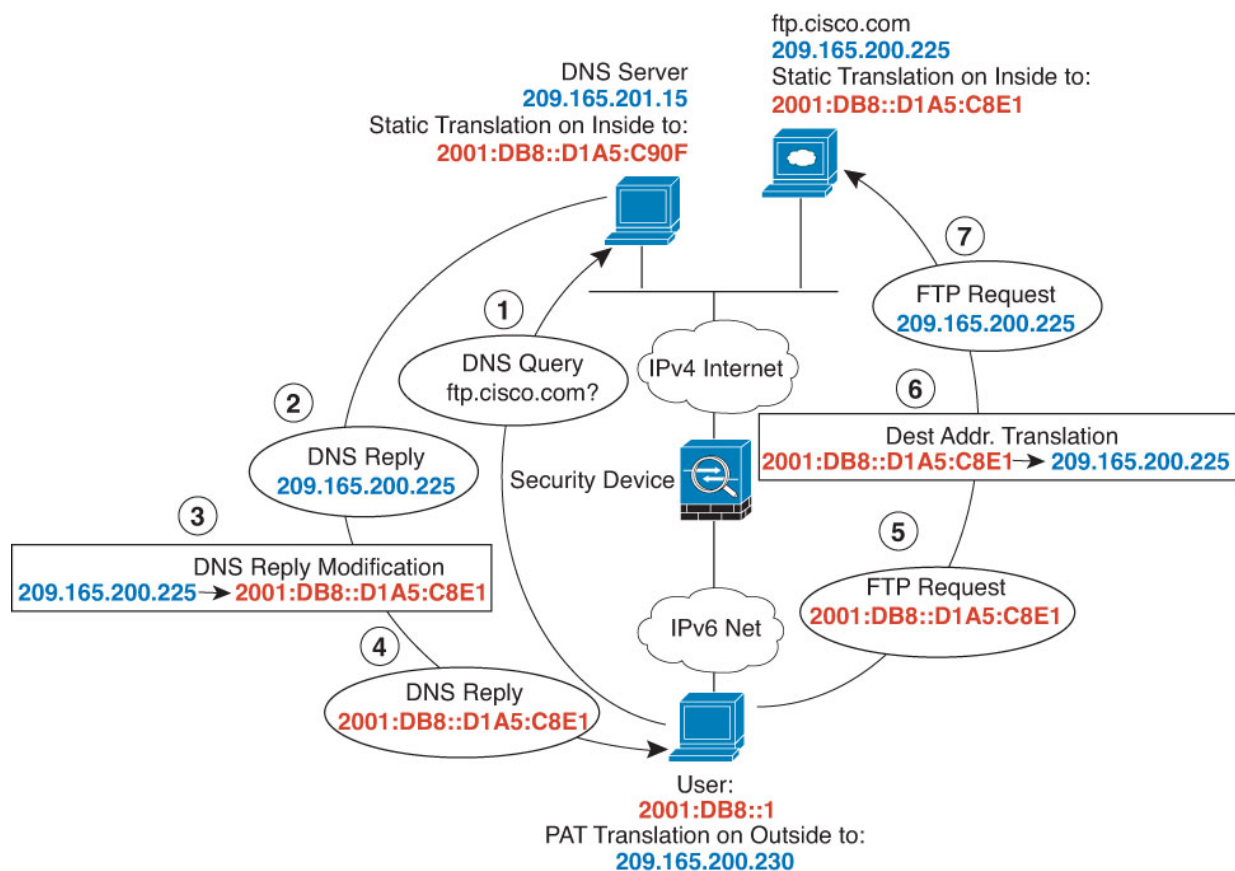
- DNS 書き換えは PAT に適用できません。これは、個々の A または AAAA レコードに複数の PAT ルールを適用できるので、使用する PAT ルールが不明確になるためです。
- 手動 NAT ルールを設定する場合、宛先アドレスおよび送信元アドレスを指定すると、DNS 修正を設定できません。これらの種類のルールでは、A と B に向かった場合に 1 つのアドレスに対して異なる変換が行われる可能性があります。したがって、DNS 応答内の IP アドレスを適切な Twice NAT ルールに一致させることができません。DNS 応答には、DNS 要求を求めたパケット内の送信元アドレスと宛先アドレスの組み合わせに関する情報が含まれません。
- 実際には、DNS 書き換えは NAT ルールではなく xlate エントリで実行されます。そのため、動的ルール用の xlate が存在しない場合は、書き換えを正しく実行できません。スタティック NAT では、同じ問題が発生しません。
- DNS 書き換えでは、DNS 動的更新メッセージ (opcode 5) が書き換えられません。

次のセクションでは、NAT ルール内の DNS 書き換えの例を示します。

DNS 64 応答修正

次の図に、外部の IPv4 ネットワーク上の FTP サーバと DNS サーバを示します。システムには、外部サーバ用のスタティック変換があります。この場合、内部 IPv6 ユーザが ftp.cisco.com のアドレスを DNS サーバに要求すると、DNS サーバは応答で実際のアドレス 209.165.200.225 を示します。

内部ユーザが ftp.cisco.com のマッピングアドレス (2001:DB8::D1A5:C8E1。D1A5:C8E1 は 209.165.200.225 と同等の IPv6 アドレス) を使用するには、スタティック変換に対して DNS 応答修正を設定する必要があります。この例には、DNS サーバのスタティック NAT 変換、および内部 IPv6 ホストの PAT ルールも含まれています。



(注) この例では、内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス（BVI）ではなく、標準的なルーテッドインターフェイスであることを想定しています。内部インターフェイスがBVIの場合は、メンバーインターフェイスごとにルールを複製する必要があります。

手順

ステップ 1 FTP サーバ、DNS サーバ、内部ネットワーク、および PAT プール用のネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツテーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- 実際の FTP サーバ アドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け (例: ftp_server)、[ホスト (Host)] を選択して、実際の IP アドレス「209.165.200.225」を入力します。

Add Network Object

Name

ftp_server

Description

Type



Network



Host

Host

209.165.200.225

- d) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。
- e) [+] をクリックして、DNS サーバの実際のアドレスを定義します。

ネットワークオブジェクトに名前を付け（例：dns_server）、[ホスト (Host)]を選択して、ホストアドレス「209.165.201.15」を入力します。

Add Network Object

Name

dns_server

Description

Type



Network



Host

Host

209.165.201.15

- f) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。
- g) [+] をクリックして内部 IPv6 ネットワークを定義します。

ネットワークオブジェクトに名前を付け（例：inside_v6）、[ネットワーク (Network)]を選択し、ネットワーク アドレス 2001:db8::/96 を入力します。

Add Network Object

Name

inside_v6

Description

Type



Network



Host

Network

2001:DB8::/96

- h) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。
- i) [+] をクリックして内部 IPv6 ネットワークの IPv4 PAT アドレスを定義します。
- ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：ipv4_pat）、[ホスト (Host)] を選択して、ホストアドレス「209.165.200.230」を入力します。

Add Network Object

Name

ipv4_pat

Description

Type



Network



Host

Host

209.165.200.230

- j) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。

ステップ 2 FTP サーバ用の DNS 修正を設定したスタティック NAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
- [タイトル (Title)] = FTPServer（または任意の別の名前）

- [ルールを作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : outside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : inside。
- [元のアドレス (Original Address)] : ftp_server ネットワーク オブジェクト。
- [変換済みアドレス (Translated Address)] : inside_v6 ネットワーク オブジェクト。IPv4 アドレスを IPv6 アドレスに変換する際に IPv4 埋め込みアドレス方式が使用されているため、209.165.200.225 は IPv6 でこれに相当する D1A5:C8E1 に変換され、ネットワーク プレフィックスが追加されて完全なアドレス 2001:DB8::D1A5:C8E1 になります。
- [詳細オプション (Advanced Options)] タブで、[このルールに一致する DNS 応答を変換する (Translate DNS replies that match this rule)] を選択します。

Add NAT Rule

Title: FTPServer Create Rule for: Auto NAT Status: ☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules Type: Static

Packet Translation Advanced Options

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	outside	Destination Interface	inside
Original Address	ftp_server	Translated Address	inside_v6
Original Port	Any	Translated Port	Any

d) [OK] をクリックします。

ステップ 3 DNS サーバ用のスタティック NAT ルールを設定します。

- [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- [+] ボタンをクリックします。
- 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル (Title)] = DNSServer (または任意の別の名前)。

- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : outside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : inside。
- [元のアドレス (Original Address)] : dns_server ネットワーク オブジェクト。
- [変換済みアドレス (Translated Address)] : inside_v6 ネットワーク オブジェクト。IPv4 アドレスを IPv6 アドレスに変換する際に IPv4 埋め込みアドレス方式が使用されているため、209.165.201.15 は IPv6 でこれに相当する D1A5:C90F に変換され、ネットワーク プレフィックスが追加されて完全なアドレス 2001:DB8::D1A5:C90F になります。

Add NAT Rule

Title: DNSServer Create Rule for: Auto NAT Status: ☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules Type: Static

Packet Translation Advanced Options

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	outside	Destination Interface	inside
Original Address	dns_server	Translated Address	inside_v6
Original Port	Any	Translated Port	Any

- d) [OK] をクリックします。

ステップ 4 内部 IPv6 ネットワークのダイナミック PAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
 - [タイトル (Title)] = PAT64Rule (またはユーザーが選択する別の名前)
 - [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
 - [種類 (Type)] : Dynamic。

- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元のアドレス (Original Address)] : [inside_v6] ネットワーク オブジェクト。
- [変換済みアドレス (Translated Address)] : [ipv4_pat] ネットワーク オブジェクト。

Add NAT Rule

Title: PAT64Rule Create Rule for: Auto NAT Status: ☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement: Automatically placed in Auto NAT rules Type: Dynamic

Packet Translation Advanced Options

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	inside	Destination Interface	outside
Original Address	inside_v6	Translated Address	ipv4_pat
Original Port	Any	Translated Port	Any

d) [OK] をクリックします。

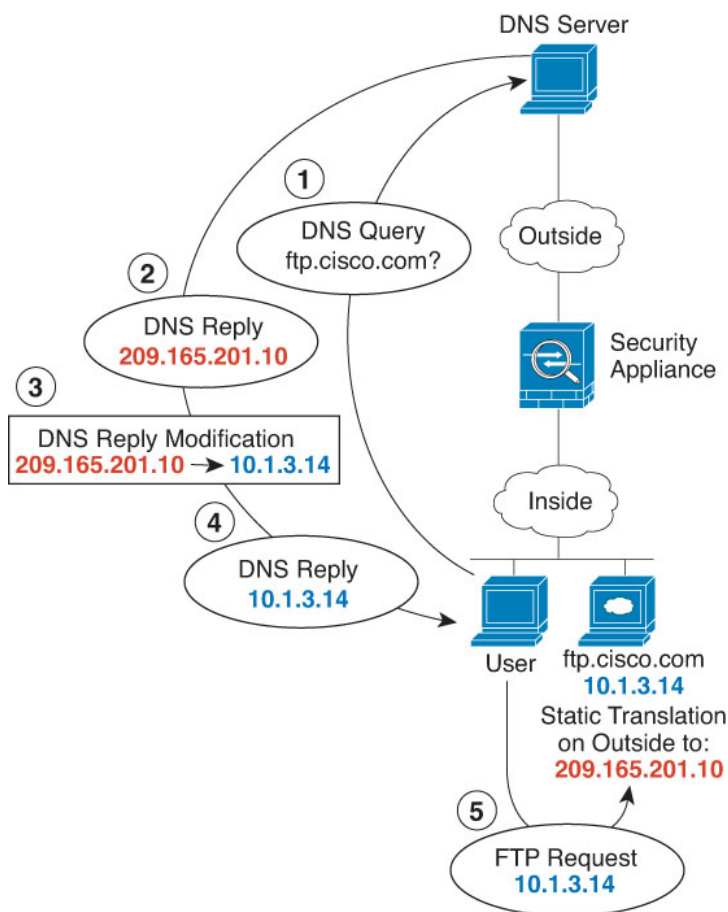
DNS 応答修正、外部の DNS サーバ

次の図に、外部インターフェイスからアクセス可能な DNS サーバを示します。ftp.cisco.com というサーバが内部インターフェイス上にあります。ftp.cisco.com の実際のアドレス (10.1.3.14) を、外部ネットワーク上で可視のマッピングアドレス (209.165.201.10) にスタティックに変換するように、NAT を設定します。

この場合、このスタティック ルールで DNS 応答修正をイネーブルにする必要があります。これにより、実際のアドレスを使用して ftp.cisco.com にアクセスすることを許可されている内部ユーザは、マッピング アドレスではなく実際のアドレスを DNS サーバから受信できるようになります。

内部ホストが ftp.cisco.com のアドレスを求める DNS 要求を送信すると、DNS サーバは応答でマッピング アドレス (209.165.201.10) を示します。システムは、内部サーバのスタティック

ルールを参照し、DNS 応答内のアドレスを 10.1.3.14 に変換します。DNS 応答修正をイネーブ
ルにしない場合、内部ホストは ftp.cisco.com に直接アクセスする代わりに、209.165.201.10 に
トラフィックを送信することを試みます。



(注) この例では、内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス（BVI）ではなく、標準的なルーテッドインターフェイスであることを想定しています。内部インターフェイスが BVI の場合は、メンバー インターフェイスごとにルールを複製する必要があります。

手順

ステップ 1 FTP サーバのネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- 実際の FTP サーバアドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：ftp_server）、[ホスト（Host）] を選択して、実際の IP アドレス「10.1.3.14」を入力します。

Add Network Object

Name

ftp_server

Description

Type



Network



Host

Host

10.1.3.14

- d) [追加（Add）]、[OK] をクリックします。
- e) [+] をクリックして、FTP サーバの変換済みアドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：ftp_server_outside）、[ホスト（Host）] を選択して、ホストアドレス「209.165.201.10」を入力します。

Add Network Object

Name

ftp_server_outside

Description

Type



Network



Host

Host

209.165.201.10

ステップ 2 FTP サーバ用の DNS 修正を設定したスタティック NAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー（Policies）] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。

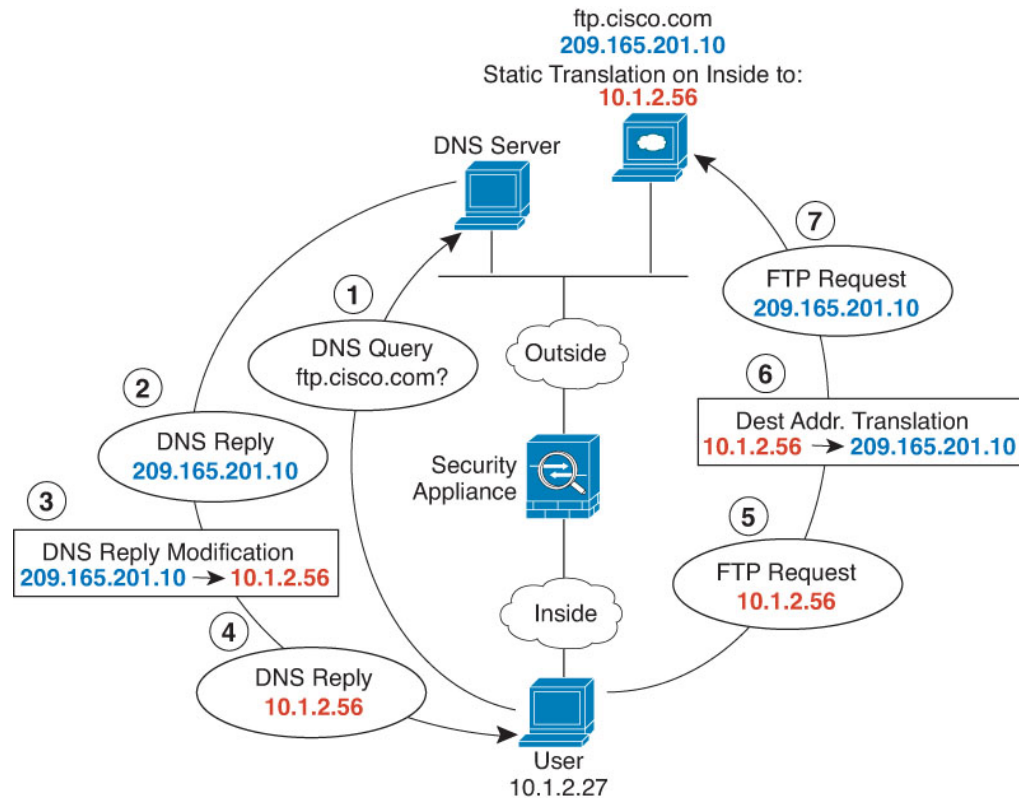
- [タイトル (Title)] = FTPServer (または任意の別の名前)
- [ルール の作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元 インターフェイス (Source Interface)] : inside。
- [宛先 インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元 のアドレス (Original Address)] : ftp_server ネットワーク オブジェクト。
- [変換済みアドレス (Translated Address)] : ftp_server_outside ネットワーク オブジェクト。
- [詳細オプション (Advanced Options)] タブで、[このルールに一致する DNS 応答を変換する (Translate DNS replies that match this rule)] を選択します。

d) [OK] をクリックします。

DNS 応答修正、ホスト ネットワーク上の DNS サーバ

次の図に、外部の FTP サーバと DNS サーバを示します。システムには、外部サーバ用のステティック変換があります。この場合、ftp.cisco.com のアドレスを DNS サーバに要求すると、DNS サーバは応答で実際のアドレス 209.165.20.10 を示します。ftp.cisco.com のマッピングア

ドレス (10.1.2.56) が内部ユーザによって使用されるようにするには、スタティック変換に対して DNS 応答修正を設定する必要があります。



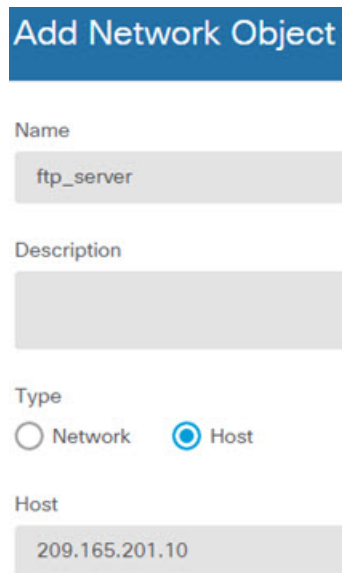
(注) この例では、内部インターフェイスがブリッジグループインターフェイス (BVI) ではなく、標準的なルーテッドインターフェイスであることを想定しています。内部インターフェイスが BVI の場合は、メンバー インターフェイスごとにルールを複製する必要があります。

手順

ステップ 1 FTP サーバのネットワーク オブジェクトを作成します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- 実際の FTP サーバ アドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け (例: ftp_server)、[ホスト (Host)] を選択して、実際の IP アドレス「209.165.201.10」を入力します。



Add Network Object

Name
ftp_server

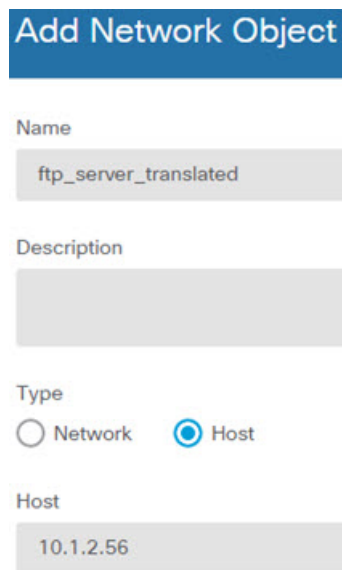
Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
209.165.201.10

- d) [追加 (Add)]、[OK] をクリックします。
- e) [+] をクリックして、FTP サーバの変換済みアドレスを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け（例：ftp_server_translated）、[ホスト (Host)] を選択して、ホスト アドレス「10.1.2.56」を入力します。



Add Network Object

Name
ftp_server_translated

Description

Type
☐ Network ☒ Host

Host
10.1.2.56

ステップ 2 FTP サーバ用の DNS 修正を設定したスタティック NAT ルールを設定します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) 次のプロパティを設定します。
- [タイトル (Title)] = FTPServer（または任意の別の名前）

- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [自動 NAT (Auto NAT)]。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : outside。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : inside。
- [元のアドレス (Original Address)] : ftp_server ネットワーク オブジェクト。
- [変換済みアドレス (Translated Address)] : ftp_server_translated ネットワーク オブジェクト。
- [詳細オプション (Advanced Options)] タブで、[このルールに一致する DNS 応答を変換する (Translate DNS replies that match this rule)] を選択します。

Add NAT Rule

Title FTPServer **Create Rule for** Auto NAT **Status** ☒

Auto NAT rules translate a specified host or network address regardless of its appearance as the source or destination address of a packet. These rules are automatically ordered and placed in the Auto NAT section.

Placement Automatically placed in Auto NAT rules **Type** Static

Packet Translation **Advanced Options**

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	outside	Destination Interface	inside
Original Address	ftp_server	Translated Address	ftp_server_transla
Original Port	Any	Translated Port	Any

d) [OK] をクリックします。



第 **VI** 部

仮想プライベート ネットワーク（**VPN**）

- [サイト間 VPN（793 ページ）](#)
- [リモート アクセス VPN（843 ページ）](#)



第 25 章

サイト間 VPN

仮想プライベート ネットワーク (VPN) は、パブリック ソース (インターネットや他のネットワーク) を使ってリモートピア間でセキュアなトンネルを確立するネットワーク接続です。VPN は、トンネルを使用してデータ パケットを通常の IP パケット内にカプセル化し、IP ベースのネットワーク経由で転送するものです。その際、暗号化を使用してプライバシーを確保し、認証を使用してデータの整合性を確保します。

- [VPN の基本 \(793 ページ\)](#)
- [サイト間 VPN の管理 \(803 ページ\)](#)
- [サイト間 VPN のモニタリング \(823 ページ\)](#)
- [サイト間 VPN の例 \(823 ページ\)](#)

VPN の基本

トンネリングは、インターネットなどのパブリック TCP/IP ネットワークを使用して、リモートユーザと企業ネットワークとの間でセキュアな接続を構築することを可能にします。それぞれのセキュアな接続は、トンネルと呼ばれます。

IPsec ベースの VPN テクノロジーは、Internet Security Association and Key Management Protocol (ISAKMP または IKE) と IPsec トンネリング標準を使用して、トンネルの構築と管理を行います。ISAKMP と IPsec は、次の処理を実行できます。

- トンネル パラメータのネゴシエーション。
- トンネルの確立。
- ユーザとデータの認証。
- セキュリティ キーの管理。
- データの暗号化と復号。
- トンネル経由のデータ転送の管理。
- トンネル エンドポイントまたはルータとしての着信と発信のデータ転送の管理。

VPN内のデバイスは、双方向のトンネルエンドポイントとして機能します。プライベートネットワークからプレーンパケットを受信してカプセル化し、トンネルを作成して、カプセル化したパケットをトンネルのもう一方の終端に送信します。トンネルの終端では、パケットのカプセル化が解除されて最終的な宛先に送信されます。また、カプセル化されたパケットをパブリック ネットワークから受信してカプセル化を解除し、プライベート ネットワーク上の最終的な宛先に送信します。

サイト間 VPN 接続が確立されると、ローカル ゲートウェイの背後にあるホストが、セキュアな VPN トンネルを介してリモート ゲートウェイの背後にあるホストに接続します。接続は、2つのゲートウェイの IP アドレスとホスト名、それらの背後のサブネット、2つのゲートウェイが相互認証に使用する方式で構成されます。

Internet Key Exchange (IKE)

インターネット キー交換 (IKE) は、IPsec ピアの認証、IPsec 暗号キーのネゴシエーションと配布、およびセキュリティアソシエーション (SAs) の自動的な確立に使用されるキー管理プロトコルです。

IKE ネゴシエーションは2つのフェーズで構成されています。フェーズ1では、2つの IKE ピア間のセキュリティアソシエーションをネゴシエートします。これにより、ピアはフェーズ2で安全に通信できるようになります。フェーズ2のネゴシエーションでは、IKEによってIPsecなどの他のアプリケーション用の SA が確立されます。両方のフェーズで接続のネゴシエーション時にプロポーザルが使用されます。

IKE ポリシーは、2つのピア間の IKE ネゴシエーションを保護するためにこれらのピアで 사용되는アルゴリズムのセットです。IKE ネゴシエーションは、共通 (共有) IKE ポリシーに合意している各ピアによって開始されます。このポリシーは、どのセキュリティパラメータが後続のIKEネゴシエーションを保護するかを規定します。IKEバージョン1 (IKEv1) では、IKE ポリシーに、単一のアルゴリズムのセットと係数グループが含まれています。IKEv1とは異なり、IKEv2 ポリシーでは、フェーズ1ネゴシエーション中にピアがその中から選択できるように、複数のアルゴリズムとモジュラス グループを選択できます。単一の IKE ポリシーを作成できますが、最も必要なオプションにより高い優先順位をつけるために異なるポリシーが必要となる場合もあります。サイト間 VPN では、単一の IKE ポリシーを作成できます。

IKE ポリシーを定義するには、次の内容を指定します。

- 一意の優先順位 (1 ~ 65,543、1 が最高優先順位)。
- データを保護して、プライバシーを確保するための IKE ネゴシエーション用の暗号化方式。
- 送信者を特定し、搬送中にメッセージが変更されていないことを保証するハッシュ メッセージ 認証コード (HMAC) 方式 (IKEv2 では整合性アルゴリズムと呼ばれます)。
- IKEv2 では、別個の疑似乱数関数 (PRF) をアルゴリズムとして使用して、IKEv2 トンネルの暗号化に必要なキー関連情報とハッシュ操作を取得していました。オプションは、ハッシュ アルゴリズムに使用されるものと同じです。

- 暗号キー決定アルゴリズムの強度を決定する Diffie-Hellman グループ。デバイスは、このアルゴリズムを使用して、暗号キーとハッシュ キーを導き出します。
- ピアの ID を保証するための認証方式。
- デバイスが暗号化キーを交換するまでに使用できる時間制限。

IKE ネゴシエーションが開始されると、そのネゴシエーションを開始したピアが、有効ポリシーすべてをリモートピアに送信します。リモートピアは所有するポリシーで一致するものを優先順位順に検索します。暗号化、ハッシュ (IKEv2 の場合、整合性と PRF)、認証、および Diffie-Hellman 値が同じで、SA ライフタイムが、送信されたポリシーのライフタイム以下の場合には、IKE ポリシー間に一致が存在します。ライフタイムが等しくない場合は、リモートピア ポリシーから取得した短い方のライフタイムが適用されます。デフォルトでは、DES を使用した単純な IKE ポリシーが唯一の有効ポリシーです。より高い優先順位で他の IKE ポリシーを有効にして、より強力な暗号化標準をネゴシエートできますが、DES ポリシーはネゴシエーションを成功させる必要があります。

VPN 接続をセキュアにする方法

通常、VPN トンネルはインターネットなどのパブリック ネットワークを通過するため、トラフィックを保護するために接続を暗号化する必要があります。IKE ポリシーと IPsec プロポーザルの使用を適用するために、暗号化とその他のセキュリティ テクニックを定義します。

デバイス ライセンスで強力な暗号化の適用が可能な場合は、さまざまな暗号化アルゴリズム、ハッシュ アルゴリズム、Diffie-Hellman グループから選択することができます。ただし、一般的なルールとして、トンネルに適用する暗号化が強力なほど、システムパフォーマンスは低下します。効率を犠牲にすることなく十分な保護を提供するようにセキュリティとパフォーマンスのバランスを取る必要があります。

オプションの選択肢に関する特定のガイダンスを示すことはできませんが、大規模な企業や組織で運用する場合は、すでに標準が定義されていることがあります。そうでない場合は、時間をかけてオプションを検討してください。

ここでは、使用可能なオプションについて説明します。

使用する暗号化アルゴリズムの決定

IKE ポリシーまたは IPsec プロポーザルで使用する暗号化アルゴリズムを決定する場合は、選択肢が VPN 内のデバイスによってサポートされているアルゴリズムに限られます。

IKEv2 の場合は、複数の暗号化アルゴリズムを設定できます。システムは、設定をセキュア度が最も高いものから最も低いものの順に並べ、その順序を使用してピアとのネゴシエーションを行います。IKEv1 の場合は、1 つのオプションしか選択できません。

IPsec プロポーザルの場合、このアルゴリズムはカプセル化セキュリティ プロトコル (ESP) で使用されます。これは、認証サービス、暗号化サービス、アンチリプレイ サービスを提供します。ESP は、IP プロトコル タイプ 50 です。IKEv1 IPsec プロポーザルでは、アルゴリズム名の先頭に ESP- が付けられます。

デバイスライセンスが強力な暗号化に対応している場合は、次の暗号化アルゴリズムの中から選択できます。強力な暗号化の対象ではない場合、DES のみ選択できます。



(注) 強力な暗号化の対象である場合、評価ライセンスをスマートライセンスにアップグレードする前に、暗号化アルゴリズムを確認および更新して暗号化を強化し、VPN 設定が適切に機能するようにしてください。AES ベースのアルゴリズムを選択します。強力な暗号化をサポートするアカウントを使用して登録されている場合、DES はサポートされません。登録後は、DES の使用対象をすべて削除するまで変更を展開できません。

- AES-GCM— (IKEv2 のみ) ガロア/カウンタ モードの Advanced Encryption Standard は、機密性とデータ発信元認証を提供するブロック暗号モードの操作であり、AES より優れたセキュリティを実現します。AES-GCM には、128 ビット、192 ビット、256 ビットの 3 種類のキー強度が用意されています。キーが長いほど安全になりますが、パフォーマンスは低下します。GCM は NSA Suite B をサポートするために必要な AES のモードです。NSA Suite B は暗号強度に関する連邦規格を満たすためにデバイスがサポートすべき暗号化アルゴリズムのセットです。。
- AES : Advanced Encryption Standard は、DES よりも優れたセキュリティを提供し、3DES よりも効率的に計算する対称暗号アルゴリズムです。AES には、128 ビット、192 ビット、256 ビットの 3 種類のキー強度が用意されています。キーが長いほど安全になりますが、パフォーマンスは低下します。
- DES : 56 ビットのキーを使用して暗号化するデータ暗号化規格 (Data Encryption Standard) は、対称秘密キー ブロック アルゴリズムです。ライセンスアカウントが輸出規制の要件を満たしていない場合、これは唯一のオプションです。
- NULL、ESP-NULL : 使用しないでください。NULL 暗号化アルゴリズムは、暗号化を使用しない認証を提供します。これは、ほとんどのプラットフォームでサポートされていません。

使用するハッシュ アルゴリズムの決定

IKE ポリシーでは、ハッシュアルゴリズムがメッセージダイジェストを作成します。これは、メッセージの整合性を保証するために使用されます。IKEv2 では、ハッシュアルゴリズムは 2 つのオプション (整合性アルゴリズム用に 1 つと Pseudo-Random Function (PRF; 疑似乱数関数) 用に 1 つ) に分かれています。

IPsec プロポーザルでは、ハッシュアルゴリズムが、認証用のカプセル化セキュリティプロトコル (ESP) で用されます。IKEv2 IPsec プロポーザルでは、これが整合性ハッシュと呼ばれています。IKEv1 IPsec プロポーザルでは、アルゴリズム名の先頭に ESP- が付けられ、末尾に -HMAC (「ハッシュ法認証コード」を意味する) が付けられます。

IKEv2 の場合は、複数のハッシュアルゴリズムを設定できます。システムは、設定をセキュリティ度が最も高いものから最も低いものの順に並べ、その順序を使用してピアとのネゴシエーションを行います。IKEv1 の場合は、1 つのオプションしか選択できません。

次のハッシュ アルゴリズムから選択できます。

- [SHA (Secure Hash Algorithm)] : 標準の SHA (SHA1) は、160 ビットのダイジェストを生成します。
よりセキュアな次の SHA-2 オプションを IKEv2 設定に使用できます。NSA Suite B 暗号化仕様を実装する場合は、次のいずれかを選択します。
 - SHA256 : 256 ビットのダイジェストでセキュア ハッシュ アルゴリズム SHA 2 を指定します。
 - SHA384 : 384 ビットのダイジェストでセキュア ハッシュ アルゴリズム SHA 2 を指定します。
 - SHA512 : 512 ビットのダイジェストでセキュア ハッシュ アルゴリズム SHA 2 を指定します。
- ノルまたはなし (NULL、ESP-NONE) : (IPsec プロポーザルのみ)。ノル ハッシュ アルゴリズムは、通常、テスト目的にのみ使用されます。しかし、暗号化オプションとしていずれかの AES-GCM オプションを選択した場合は、NULL 整合性アルゴリズムを選択する必要があります。ノル以外のオプションを選択した場合でも、これらの暗号化標準では整合性ハッシュは無視されます。

使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定

次の Diffie-Hellman キー導出アルゴリズムを使用して、IPsec セキュリティ アソシエーション (SA) キーを生成することができます。各グループでは、異なるサイズの係数が使用されます。係数が大きいほどセキュリティが強化されますが、処理時間が長くなります。両方のピアに、一致する係数グループが存在する必要があります。

AES 暗号化を選択した場合は、AES に必要な大きいキー サイズをサポートするために、Diffie-Hellman (DH) グループ 5 以上を使用する必要があります。IKEv1 ポリシーは、以下に示すすべてのグループをサポートしているわけではありません。

NSA Suite B 暗号化仕様を実装するには、IKEv2 を使用し、楕円曲線 Diffie-Hellman (ECDH) オプション (19、20、または 21) のいずれかを選択します。2048 ビット係数を使用した楕円曲線オプションとグループは、Logjam などの攻撃に耐性があります。

IKEv2 の場合は、複数のグループを設定できます。システムは、設定をセキュア度が最も高いものから最も低いものの順に並べ、その順序を使用してピアとのネゴシエーションを行います。IKEv1 の場合は、1 つのオプションしか選択できません。

- 14 : Diffie-Hellman グループ 14 (2048 ビット Modular Exponential (MODP) グループ)。192 ビットのキーでは十分な保護レベルです。
- 15 : Diffie-Hellman グループ 15 (3072 ビット MODP グループ)。
- 16 : Diffie-Hellman グループ 16 (4096 ビット MODP グループ)。
- 19 : Diffie-Hellman グループ 19 (国立標準技術研究所 (NIST) 256 ビット楕円曲線モジュロプライム (ECP) グループ)。
- 20 : Diffie-Hellman グループ 20 (NIST 384 ビット ECP グループ)。

- 21 : Diffie-Hellman グループ 21 (NIST 521 ビット ECP グループ)。
- 31 : Diffie-Hellman グループ 31 (Curve25519 256 ビット EC グループ)。

使用する認証方式の決定

次の方法を使用して、サイト間VPN接続でピアを認証できます。

事前共有キー

事前共有キーは、接続内の各ピアで設定された秘密キー文字列です。これらのキーは、IKE が認証フェーズで使用します。IKEv1 の場合は、各ピアで同じ事前共有キーを設定する必要があります。IKEv2の場合は、各ピアに一意のキーを設定できます。

事前共有キーは、証明書に比べて拡張性がありません。多数のサイト間VPN接続を設定する必要がある場合は、事前共有キー方式ではなく証明書方式を使用します。

証明書

デジタル証明書は IKE キー管理メッセージの署名や暗号化に RSA キー ペアを使用します。サイト間 VPN 接続の両端を設定するときに、リモートピアがローカルピアを認証できるように、ローカルデバイスのアイデンティティ証明書を選択します。

証明書方式を使用するには、次の手順を実行する必要があります。

1. ローカルピアを認証局 (CA) に登録し、デバイスアイデンティティ証明書を取得します。この証明書をデバイスにアップロードします。詳細については、「[内部および内部 CA 証明書のアップロード \(202 ページ\)](#)」を参照してください。

リモートピアも担当している場合、そのピアも登録してください。ピアに同じCAを使用すると便利ですが、必須ではありません。

自己署名証明書を使用してVPN接続を確立することはできません。認証局でデバイスを登録する必要があります。

Windows 認証局 (CA) を使用してサイト間 VPN エンドポイントの証明書を作成する場合は、アプリケーションポリシー拡張に IP セキュリティエンドシステムを指定する証明書を使用する必要があります。これは(Windows CAサーバ)の[拡張]タブにある証明書の[プロパティ]ダイアログボックスで確認できます。この拡張のデフォルトは IP セキュリティ IKE 中間であり、Device Manager を使用して設定されたサイト間 VPN では機能しません。

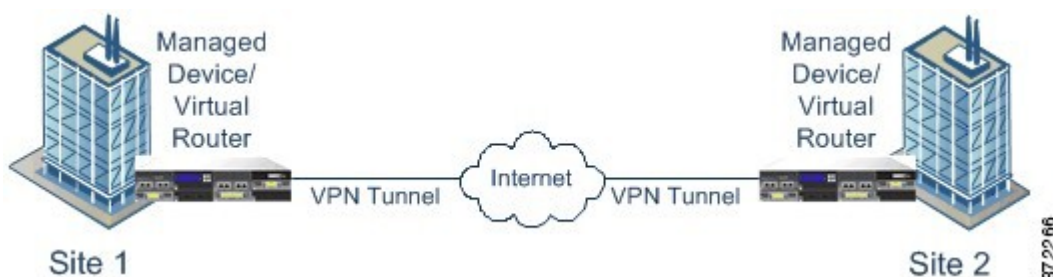
2. ローカル ピアのアイデンティティ証明書に署名するために使用された、信頼できる CA 証明書をアップロードします。中間CAを使用した場合は、ルート証明書と中間証明書を含む完全なチェーンをアップロードします。詳細については、「[信頼できる CA 証明書のアップロード \(206 ページ\)](#)」を参照してください。
3. リモートピアが異なる CA で登録されていた場合、リモートピアのアイデンティティ証明書に署名するために使用した信頼できる CA 証明書もアップロードします。リモートピアを制御する組織から証明書を取得します。中間CAを使用した場合は、ルート証明書と中間証明書を含む完全なチェーンをアップロードします。

4. サイト間VPN接続を設定したら、証明書方式を選択し、ローカルピアのアイデンティティ証明書を選択します。接続の両端が、接続のローカルエンドの証明書を指定します。リモートピアの証明書は指定しません。

VPN トポロジ

Device Manager を使用して設定できるのは、ポイントツーポイント VPN 接続のみです。すべての接続はポイントツーポイントですが、デバイスが参加する各トンネルを定義することで、より大規模なハブアンドスポーク VPN、またはメッシュ VPN にリンクできます。

次の図に、一般的なポイントツーポイント VPN トポロジを示します。ポイントツーポイント VPN トポロジでは、2つのエンドポイントが相互に直接通信します。2つのエンドポイントをピアデバイスとして設定し、いずれかのデバイスでセキュアな接続を開始することができます。



動的にアドレス指定されたピアによるサイト間 VPN 接続の確立

ピアの IP アドレスが不明な場合でも、ピアへのサイト間 VPN 接続を作成できます。これは、次のような場合に役立ちます。

- ピアが DHCP を使用してそのアドレスを取得した場合は、特定の静的 IP アドレスを持つリモートエンドポイントに依存することはできません。
- 不特定多数のリモートピアが、ハブアンドスポークトポロジのハブとして機能するデバイスとの接続を確立できるようにする場合。

動的にアドレス指定されたピア B へのセキュアな接続を確立する必要がある場合は、接続の終了 A にスタティック IP アドレスがあることを確認する必要があります。次に、A で接続を作成するときに、ピアのアドレスがダイナミックであることを指定します。ただし、ピア B で接続を設定する際は、リモートピアアドレスとして A の IP アドレスを入力します。

システムがサイト間 VPN 接続を確立する場合、ピアがダイナミックアドレスを持つすべての接続は応答のみとなります。つまり、リモートピアは接続を開始するものである必要があります。リモートピアが接続を確立しようとする、デバイスは事前共有キーまたは証明書（接続で定義されているいずれかの方式）を使用して接続を検証します。

VPN 接続はリモートピアが接続を開始した後にのみ確立されるため、VPN トンネルのトラフィックを許可するアクセス制御ルールに一致するすべての発信トラフィックは、接続が確立

されるまでドロップされます。これにより、適切な暗号化と VPN 保護のないデータがネットワークから流出しないようになります。

仮想トンネルインターフェイスとルートベースの VPN

従来は、VPN トンネルを介して暗号化される特定のローカルネットワークとリモートネットワークを定義することにより、サイト間 VPN 接続を設定していました。これらは、VPN 接続プロファイルの一部である暗号マップで定義されます。このタイプのサイト間 VPN は、ポリシーベースと呼ばれます。

また、ルートベースのサイト間 VPN を設定することもできます。この場合は、仮想トンネルインターフェイス (VTI) を作成します。これは、特定の物理インターフェイス（通常、外部インターフェイス）に関連付けられた仮想インターフェイスです。その後、ルーティングテーブルと静的ルートおよび動的ルートを使用して、目的のトラフィックを VTI に転送します。VTI (出力) を介してルーティングされるトラフィックは、VTI 用に設定した VPN トンネルを介して暗号化されます。

そのため、ルートベースのサイト間 VPN を使用すると、VPN 接続プロファイルを一切変更することなく、ルーティングテーブルを変更するだけで、特定の VPN 接続で保護されたネットワークを管理できます。リモートネットワークの追跡を継続し、前述の変更に対応して VPN 接続プロファイルを更新する必要はありません。その結果、クラウド サービス プロバイダーや大企業の VPN 管理が簡素化されます。

さらに、VTI のアクセス制御ルールを作成して、トンネルで許可されるトラフィックのタイプを微調整できます。たとえば、侵入検査や、URL およびアプリケーションフィルタリングを適用できます。

ルートベースの VPN を設定するためのプロセスの概要

概要として、ルートベースのサイト間 VPN をセットアップするプロセスには、次の手順が含まれます。

手順

- ステップ 1** ローカルエンドポイントの IKEv1/2 ポリシーと IPsec プロポーザルを作成します。
- ステップ 2** リモートピアに面する物理インターフェイスに関連付けられた仮想トンネルインターフェイス (VTI) を作成します。
- ステップ 3** VTI、IKE ポリシー、および IPsec プロポーザルを使用するサイト間 VPN 接続プロファイルを作成します。
- ステップ 4** リモートピア（およびリモート VTI）に同じ IKE および IPsec プロポーザルを作成し、このローカル VTI をリモートエンドポイントとして指定（リモートピアの観点から）するサイト間 VPN 接続プロファイルを作成します。
- ステップ 5** トンネルを介して適切なトラフィックを送信するために、両方のピアでルートとアクセス制御ルールを作成します。

両方向のトラフィックフローを可能にするために、各エンドポイントのルートとアクセス制御が相互にミラーリングされていることを確認してください。

静的ルートには、次のような一般的特性があります。

- [インターフェイス (Interface)] : 仮想トンネルインターフェイス (VTI) の名前。
- [ネットワーク (Networks)] : リモートエンドポイントによって保護されるリモートネットワークを定義するネットワークオブジェクト。
- [ゲートウェイ (Gateway)] : VPN トンネルのリモートエンドポイントの IP アドレスを定義するネットワークオブジェクト。

仮想トンネルインターフェイスとルートベースの VPN に関するガイドライン

IPv6 のガイドライン

仮想トンネルインターフェイスは IPv4 アドレスのみをサポートしています。VTI で IPv6 アドレスを設定することはできません。

追加のガイドライン

- 最大1024個のVTIを作成できます。
- VTI ルートベース VPN では、リバース ルート インジェクション（静的または動的）を設定できません（リバース ルート インジェクションは Threat Defense API のみを使用して設定可能）。
- VTI をローカルインターフェイスとして選択する場合は、動的ピアアドレスを設定できません。
- VTI をローカルインターフェイスとして選択する場合は、リモートバックアップピアを設定できません。
- カスタム仮想ルータに割り当てられている送信元インターフェイスにVTIを作成することはできません。仮想ルータを使用する場合、グローバル仮想ルータのインターフェイスのみで、VTIを設定できます。
- IKE および IPsec のセキュリティ アソシエーションには、トンネル内のデータ トラフィックに関係なく、継続的にキーの再生成が行われます。これにより、VTI トンネルは常にアップした状態になります。
- ルートベースの接続プロファイルで IKEv1 と IKEv2 の両方を設定することはできません。1つのバージョンの IKE のみを設定する必要があります。
- 暗号マップに設定されるピアアドレスと VTI のトンネル宛先が異なる場合は、同じ物理インターフェイスで異なる VTI およびポリシーベース（暗号マップ）設定を指定できます。
- VTI を介してサポートされるのは BGP ルーティングプロトコルだけです。

- システムが IOS IKEv2 VTI クライアントを終端している場合は、IOS VTI クライアントによって開始されたセッションのモード CFG 属性をシステムが取得できないため、IOS の設定交換要求を無効にします。
- ルートベースのサイト間 VPN は双方向として設定されます。つまり、VPN トンネルのどちらのエンドポイントでも接続を開始できます。接続プロファイルを作成したら、このエンドポイントを唯一のイニシエータ (INITIATE_ONLY) に変更するか排他的にレスポンド (RESPOND_ONLY) に変更することができます。必ず、補完的な接続タイプを使用するようにリモートエンドポイントを変更してください。この変更を行うには、API エクスプローラに移動し、GET /devices/default/s2sconnectionprofiles を使用して接続プロファイルを見つける必要があります。その後、本文の内容をコピーして PUT /devices/default/s2sconnectionprofiles/{objId} メソッドに貼り付け、[connectionType] を更新して目的のタイプを指定して、メソッドを実行します。

IPsec フローのオフロード

IPsec フローのオフロードを使用するように、サポートするデバイスモデルを設定できます。IPsec サイト間 VPN またはリモートアクセス VPN セキュリティ アソシエーション (SA) の初期設定後、IPsec 接続はデバイスのフィールドプログラマブル ゲート アレイ (FPGA) にオフロードされるため、デバイスのパフォーマンスが向上します。Cisco Secure Firewall 1200 シリーズでは、デバイスのパフォーマンスを向上させるために、IPsec 接続が Marvell Cryptographic Accelerator (CPT) にオフロードされます。

オフロード操作は、特に、入力の事前復号および復号処理と出力の事前暗号化および暗号化処理に関連しています。システムソフトウェアは、セキュリティポリシーを適用するための内部フローを処理します。

IPsec フローのオフロードはデフォルトで有効になっており、次のデバイスタイプに適用されます。

- Cisco Secure Firewall 1200
- Cisco Secure Firewall 3100

IPsec フローのオフロードに関する制約事項

次の IPsec フローはオフロードされません。

- IKEv1 トンネル。IKEv2 トンネルのみがオフロードされます。IKEv2 は、より強力な暗号をサポートしています。
- ボリュームベースのキー再生成が設定されているフロー。
- 圧縮が設定されているフロー。
- トランスポートモードのフロー。トンネルモードのフローのみがオフロードされます。
- AH 形式。ESP/NAT-T 形式のみがサポートされます。
- ポストフラグメンテーションが設定されているフロー。

- 64 ビット以外のアンチリプレイ ウィンドウ サイズを持ち、アンチリプレイが無効になっていないフロー。
- ファイアウォールフィルタが有効になっているフロー。

IPsec フローのオフロードの設定

IPsec フローのオフロードは、この機能をサポートするハードウェア プラットフォームではデフォルトで有効になっています。設定を変更するには、FlexConfig を使用して **flow-offload-ipsec** コマンドを実装します。このコマンドの詳細については、ASA コマンドリファレンスを参照してください。

サイト間 VPN の管理

仮想プライベート ネットワーク (VPN) は、パブリック ソース (インターネットや他のネットワーク) を使ってリモートピア間でセキュアなトンネルを確立するネットワーク接続です。VPN は、トンネルを使用してデータ パケットを通常の IP パケット内にカプセル化し、IP ベースのネットワーク経由で転送するものです。その際、暗号化を使用してプライバシーを確保し、認証を使用してデータの整合性を確保します。

ピア デバイスへの VPN 接続を作成することができます。すべての接続はポイントツーポイントですが、すべての関連接続を設定することによって、デバイスをより大きなハブアンドスポークまたはメッシュ VPN にリンクできます。

始める前に

次の事実によって、再作成できるサイト間 VPN 接続のタイプと数が制御されます。

- VPN 接続は暗号化を使用して、ネットワークのプライバシーを確保します。使用できる暗号化アルゴリズムは、基本ライセンスで強力な暗号化が許可されているかどうかによって異なります。これは、Cisco Smart License Manager に登録する際にデバイス上でエクスポート制御機能を許可するオプションを選択したかどうかによって制御されます。評価ライセンスを使用している場合または輸出規制機能を有効にしていない場合は、強力な暗号化を使用できません。
- 最大 20 の一意の IPsec プロファイルを作成できます。一意性は、IKEv1/v2 プロポーザルと証明書、接続タイプ、DH グループ、および SA ライフタイムの組み合わせによって決定されます。既存のプロファイルを再利用できます。そのため、すべてのサイト間 VPN 接続に同じ設定を使用すると、1 つの一意の IPsec プロファイルを持つことになります。一意の IPsec プロファイルの数が上限の 20 に達すると、既存の接続プロファイルに使用したものと同一属性の組み合わせを使用しないかぎり、新しいサイト間 VPN 接続を作成できません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、次に [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

これで、[サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] ページが開き、設定済みのすべての接続が表示されます。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいサイト間VPN接続を作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。 [サイト間VPN接続の設定 \(804 ページ\)](#) を参照してください。

既存の接続がなければ、[サイト間接続の作成 (Create Site-to-Site Connection)] ボタンをクリックすることもできます。

- 既存の接続を編集するには、その接続の編集 (🔗) アイコンをクリックします。 [サイト間VPN接続の設定 \(804 ページ\)](#) を参照してください。

- 接続設定のサマリーをクリップボードにコピーするには、その接続の[コピー (copy)] アイコン (📋) をクリックします。この情報をドキュメントに貼り付け、そのドキュメントを管理者に送信することで、リモート デバイスの接続設定に利用できます。

- 不要な接続を削除するには、その接続の削除アイコン (🗑️) をクリックします。

サイト間 VPN 接続の設定

ポイントツーポイント VPN 接続を作成することで、デバイスを別のデバイスにリンクできます。ただし、リモートデバイス所有者の協力と許可を得ることが前提となります。すべての接続はポイントツーポイントですが、デバイスが参加するトンネルそれぞれを定義することで、ハブアンドスポークまたはメッシュ構造の大規模な VPN にリンクすることができます。

始める前に

ローカル ネットワークとリモート ネットワークの組み合わせごとに作成できる VPN 接続は 1 つに限られます。ただし、リモートネットワークがそれぞれの接続プロファイル内で固有であれば、ローカル ネットワークに対して複数の接続を作成できます。

リモートネットワークが重複している場合は、より制限の厳しい接続プロファイルを最初に作成するように注意してください。システムはトンネルを、表示される順序 (アルファベット順) ではなく、接続プロファイルを作成した順序で作成します。

たとえば、リモートエンドポイント A へのアクセスには 192.16.0.0/16 から 10.91.0.0/16 までのトンネリングさせ、192.16.0.0/24 から 10.0.0.0/8 の残りへのトンネリングはリモートエンドポ

イント B を介して行う場合、B の接続プロファイルを作成する前に A の接続プロファイルを作成する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、次に [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいサイト間 VPN 接続を作成する場合は、[+] ボタンをクリックします。
既存の接続がなければ、[サイト間接続の作成 (Create Site-to-Site Connection)] ボタンをクリックすることもできます。
- 既存の接続を編集する場合は、対象の接続の編集アイコン (🔧) をクリックします。

不要な接続を削除するには、その接続の削除アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 ポイントツーポイント VPN 接続のエンドポイントを定義します。

- [接続プロファイル名 (Connection Profile Name)] : 接続の名前を最大 64 文字で、スペースを含めずに入力します。たとえば、「MainOffice」と入力します。IP アドレスを名前として使用することはできません。
- [タイプ (Type)] : VPN トンネルを介して送信する必要があるトラフィックを識別する方法。次のいずれかを選択します。
 - [ルートベース (VTI) (Route Based (VTI))] : ルーティングテーブル (主に静的ルート) を使用して、トンネルに参加するローカルネットワークとリモートネットワークを定義します。このオプションを選択する場合は、仮想トンネルインターフェイス (VTI) をローカル VPN アクセスインターフェイスとして選択する必要があります。また、トンネルのリモートエンドには静的 IP アドレスを使用する必要があります。VPN 接続プロファイルを作成した後に、必ず、VTI の適切な静的ルートとアクセス制御ルールを設定してください。
 - [ポリシーベース (Policy Based)] : ローカルネットワークとリモートネットワークを、サイト間 VPN 接続プロファイルで直接指定します。これは、VPN トンネルによって保護する必要があるトラフィックを定義するための従来のアプローチです。
- [ローカルサイト (Local Site)] : 以下のオプションによってローカルエンドポイントを定義します。
 - [ローカル VPN アクセス インターフェイス (Local VPN Access Interface)] : リモートピアに接続を許可するインターフェイスを選択します。通常は、外部インターフェイスを選択します。ブリッジグループのメンバーとなっているインターフェイスを選択することはできません。ポリシーベースの接続のバックアップピアを設定する場合は、ピアが接続できるすべてのインターフェイスを選択してください。ルートベースの接続の場合、選択できるインターフェイスは 1 つだけです。

- [ローカルネットワーク (Local Network)] : (ポリシーベースのみ) [+] をクリックし、VPN接続に参加する必要があるローカルネットワークを識別するネットワークオブジェクトを選択します。選択したネットワークのユーザが、この接続を介してリモート ネットワークに到達できるようになります。

(注)

これらのネットワークには IPv4 または IPv6 アドレスを使用できますが、接続の両側に一致するアドレス タイプがなければなりません。たとえば、ローカル IPv4 ネットワークの VPN 接続には、少なくとも 1 つのリモート IPv4 ネットワークが必要です。単一の接続の両側で IPv4 と IPv6 を組み合わせることはできます。エンドポイントの保護対象ネットワークを重複させることはできません。

- [リモートサイト (Remote Site)] : これらのオプションでリモート エンドポイントを定義します。

- [スタティック (Static)]/[ダイナミック (Dynamic)] : リモートピアの IP アドレスが静的または動的 (DHCP などを使用して) のどちらで定義されるか。[スタティック (Static)] を選択した場合、リモートピアの IP アドレスも入力します。[ダイナミック (Dynamic)] を選択した場合、リモートピアのみがこの VPN 接続を開始できるようになります。

ルートベースの VPN の場合は、選択できるのは [スタティック (Static)] のみです。

- [リモートIPアドレス (Remote IP Address)] (スタティックアドレス指定のみ) : VPN 接続をホストするリモート VPN ピアのインターフェイスの IP アドレスを入力します。
- [リモートバックアップピア (Remote Backup Peers)] : (オプション、ポリシーベースの接続のみ) [ピアの追加 (Add Peer)] をクリックして、リモートエンドポイントのバックアップを追加します。プライマリエンドポイントが使用できなくなると、システムはバックアップピアの 1 つで VPN 接続を再確立しようとします。複数のバックアップを追加できます。

各バックアップピアを設定するときに、そのピアで使用する事前共有キーと証明書を設定できます。プライマリリモートピアの設定に使用したのと同じ手法を使用します。接続プロファイルに設定されている同じ値を使用するには、これらの設定を空白のままにします。

最初のバックアップピアを設定後、[別のピアを追加 (Add Another Peer)] をクリックして別のピアを追加するか、ピアを削除するか、または [編集 (Edit)] をクリックしてピアの設定を変更できます。

バックアップピアがプライマリピアとは異なるインターフェイスを介して到達可能な場合は、[ローカルVPNアクセスインターフェイス (Local VPN Access Interface)] で必要なインターフェイスを選択していることを確認します。

- [リモートネットワーク (Remote Network)] : (ポリシーベースのみ) [+] をクリックし、VPN接続に参加する必要があるリモートネットワークを識別するネットワークオブジェクトを選択します。

プロジェクトを選択します。選択したネットワークのユーザが、この接続を介してローカルネットワークに到達できるようになります。

ステップ 4 [次へ (Next)] をクリックします。

ステップ 5 VPN のプライバシー設定を定義します。

(注)

使用しているライセンスにより、選択できる暗号化プロトコルが決まります。最も基本的なオプション以外の強力な暗号化、つまりエクスポート制御の必要を満たす暗号化を選択する資格がなければなりません。

- **[IKE バージョン 2 (IKE Version 2)]、[IKE バージョン 1 (IKE Version 1)]** : インターネット キー エクスチェンジ (IKE) ネゴシエーションで使用する IKE バージョンを選択します。ポリシーベースの接続の場合は、いずれかまたは両方を選択できます。ルートベースの場合、選択できるのは一方のみです。もう一方のピアとの接続のネゴシエーションを試行する際、デバイスはユーザが許可したバージョンの内もう一方のピアが受け入れるバージョンを使用します。両方のバージョンを許可すると、最初に選択したバージョンでのネゴシエーションが正常に行われなかった場合、デバイスはもう一方のバージョンに自動的にフォールバックします。IKEv2 が設定されている場合、最初に試行されるのは常に IKEv2 です。ネゴシエーションで使用するには、両方のピアが IKEv2 をサポートする必要があります。
- **[IKE ポリシー (IKE Policy)]** : インターネット キー エクスチェンジ (IKE) は、IPsec ピアの認証、IPsec 暗号キーのネゴシエーションと配布、IPsec セキュリティ アソシエーション (SA) の自動的な確立に使用されるキー管理プロトコルです。これはグローバル ポリシーであり、有効にするオブジェクトがすべての VPN に適用されます。IKE バージョンごとに現在グローバルに有効にされているポリシーを確認する場合や、新しいポリシーを有効にして作成する場合は、[編集 (Edit)] をクリックします。詳細については、[グローバル IKE ポリシーの設定 \(811 ページ\)](#) を参照してください。
- **[IPsec プロポーザル (IPsec Proposal)]** : IPsec プロポーザルは、IPsec トンネル内のトラフィックを保護するためのセキュリティプロトコルおよびアルゴリズムの組み合わせを定義します。[編集 (Edit)] をクリックし、IKE バージョンごとにプロポーザルを選択します。許可するプロポーザルをすべて選択します。システムのデフォルト値をそのまま選択する場合は、[デフォルトに設定 (Set Default)] をクリックします。デフォルト値は、該当するエクスポートコンプライアンスによって異なります。システムはピアと合意に至るまで、最も強力なプロポーザルから弱いものへの順でネゴシエートします。詳細については、「[IPsec プロポーザルの設定 \(817 ページ\)](#)」を参照してください。
- **[認証タイプ (Authentication Type)]** : VPN 接続でピアを認証する方法 ([事前共有手動キー (Preshared Manual Key)] または [証明書 (Certificate)] のいずれか)。また、選択内容に基づいて次のフィールドに入力する必要があります。IKEv1 の場合、接続用に設定された IKEv1 ポリシーオブジェクトで選択された認証方式と選択内容が一致する必要があります。オプションの詳細については、[使用する認証方式の決定 \(798 ページ\)](#) を参照してください。

- (IKEv2) [ローカル事前共有キー (Local Preshared Key)]、[リモートピア事前共有キー (Remote Peer Preshared Key)] : VPN 接続のためにこのデバイスとリモートデバイスで定義されたキー。IKEv2 では異なるキーを使用できます。キーは 1 ～ 127 文字の英数字で指定できます。
- (IKEv1) [事前共有キー (Preshared Key)] : ローカル デバイスとリモート デバイスの両方で定義されているキー。キーは 1 ～ 127 文字の英数字で指定できます。
- [証明書 (Certificate)] : ローカル ピアのデバイスアイデンティティ証明書。これは、認証局(CA)から取得した証明書である必要があります。自己署名証明書は使用できません。証明書をアップロードしていない場合は、[新しいオブジェクトの作成]リンクをクリックします。また、アイデンティティ証明書の署名に使用されたルート CA 証明書および信頼できる中間 CA 証明書をアップロードする必要があります。アップロードされた証明書の [検証の使用 (Validation Usage)] が [IPsec クライアント (IPsec Client)] を含むように設定されていることを確認します。まだアップロードしていない場合は、このウィザードを閉じた後に実行できます。
- [IPsec設定]: セキュリティ アソシエーションのライフタイム。ライフタイムに達すると、システムはセキュリティ アソシエーションを再ネゴシエートします。システムは、ピアからネゴシエーション要求を受信すると、ピアが指定するライフタイム値またはローカルに設定されたライフタイム値のうち、小さい方を新しいセキュリティ アソシエーションのライフタイムとして使用します。ライフタイムには、"指定時刻" ライフタイムと "トラフィック量" ライフタイムの2つがあります。これらのライフタイムのいずれかに最初に到達すると、セキュリティ アソシエーションが期限切れになります。
- [ライフタイム期間]: セキュリティ アソシエーションの有効期限が切れるまでの存続時間(秒数)を指定します。指定できる範囲は 120 ～ 214783647 秒です。グローバルのデフォルトは 28,800 秒 (8 時間) です。
- [ライフタイムサイズ]: 所定のセキュリティ アソシエーションの有効期限が切れるまでに、そのセキュリティ アソシエーションを使用してピア間を通過できるトラフィックの量をKB単位で指定します。範囲は10～214783647KB、または空白です。グローバルなデフォルトは4,608,000 KBです。サイズベースの制限を削除し、期間を唯一の制限として使用するには、フィールドを空白のままにします。
- [NAT免除 (NAT Exempt)] : (ポリシーベースのみ) ローカル VPN アクセスインターフェイスで VPN トラフィックを NAT ポリシーから免除するかどうか。NAT ルールをローカル ネットワークに適用しない場合は、そのローカル ネットワークをホストしているインターフェイスを選択します。このオプションは、ローカル ネットワークが (ブリッジグループ メンバーではなく) 単一のルーテッド インターフェイスの背後にある場合のみ機能します。ローカル ネットワークが複数のルーテッド インターフェイスの背後にある場合、または 1 つ以上のブリッジグループ メンバーになっている場合は、手動で NAT 免除ルールを作成する必要があります。必要なルールを手動で作成する方法については、[NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除 \(823 ページ\)](#) を参照してください。
- [Perfect Forward Secrecy 用 Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy)] : 暗号化された交換ごとに一意のセッション キーを生成および使用するために

Perfect Forward Secrecy (PFS) を使用するかどうかを指定します。一意のセッション キーを使用することによって、以降の復号から交換が保護されます。このことは、交換全体が記録され、攻撃者がエンドポイントデバイスで使用される事前共有キーまたは秘密キーを入手している場合であっても該当します。Perfect Forward Secrecy を有効にするには、[モジュラス グループ (Modulus Group)] リストで、PFS セッション キーの生成時に使用する Diffie-Hellman キー導出アルゴリズムを選択します。IKEv1 と IKEv2 の両方を有効にする場合、オプションは IKEv1 でサポートされるものに制限されます。オプションの説明については、[使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定 \(797 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 6 [次へ (Next)] をクリックします。

ステップ 7 概要を確認してから [完了 (Finish)] をクリックします。

概要情報はクリップボードにコピーされます。この情報はドキュメントに貼り付けて、リモートピアの設定、またはピアの設定責任者に送信するために使用できます。

[サイト間 VPN 経由のトラフィックの許可 \(810 ページ\)](#) で説明したように、追加の手順で VPN トンネル内のトラフィックを許可する必要があります。

設定を展開後、デバイス CLI にログインし、**show ipsec sa** コマンドを使用してエンドポイントでセキュリティ アソシエーションが確立されることを確認します。「[サイト間 VPN 接続の確認 \(820 ページ\)](#)」を参照してください。

仮想トンネルインターフェイスの設定

ルートベースのサイト間 VPN 接続プロファイルでのみ仮想トンネルインターフェイス (VTI) を使用できます。VTI は物理インターフェイスに関連付けられており、これを介してリモートピアへの VPN 接続が確立されます。仮想インターフェイスを使用すると、サイト間 VPN 接続が簡素化され、接続プロファイルで VPN のローカルネットワークとリモートネットワークを指定するのではなく、静的ルートと動的ルートを使用してトラフィックを制御できます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[インターフェイス (Interfaces)] サマリーのリンクをクリックして、[仮想トンネルインターフェイス (Virtual Tunnel Interfaces)] をクリックします。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- [+] または [仮想トンネルインターフェイスの作成 (Create Virtual Tunnel Interface)] をクリックして新しいインターフェイスを作成します。
- 既存のインターフェイスの編集アイコン (🔍) をクリックします。

インターフェイスが不要になった場合は、そのインターフェイスの削除アイコン (🗑️) をクリックします。インターフェイスを削除する前に、まず、そのインターフェイスを使用するサイト間接続プロファイルをすべて削除する必要があります。

ステップ 3 次のオプションを設定します。

- [名前 (Name)] : インターフェイス名 (最大 48 文字)。既存のインターフェイスの名前を変更すると、それを含むすべてのポリシーとオブジェクトでも名前が自動的に変更されます。名前に大文字を使用することはできません。
- [ステータス (Status)] : スライダをクリックして有効の位置にします (🔵)。
- [Description] : (任意) 説明は 200 文字以内で入力できます。改行を入れずに 1 行で入力します。
- [トンネル ID (Tunnel ID)] : 0 ~ 10413 の番号。この番号が「Tunnel」という語に付加されて、インターフェイスのハードウェア名が形成されます。まだ別の VTI に使用されていない番号を選択する必要があります。たとえば、インターフェイス Tunnel1 を作成するには 1 を入力します。
- [トンネルの送信元 (Tunnel Source)] : この VTI に関連付けられるインターフェイスを選択します。トンネルの送信元は、仮想トンネルインターフェイスで定義されたサイト間 VPN がリモートエンドポイントに接続するためのインターフェイスです。外部インターフェイスなどのリモートエンドポイントに到達できるインターフェイスを選択します。送信元インターフェイスには、名前付きの物理インターフェイス、サブインターフェイス、または Etherchannel を指定できます。インターフェイスをブリッジ仮想インターフェイス (BVI) のメンバーにすることはできません。
- [IP アドレスとサブネットマスク (IP Address and Subnet Mask)] : IPv4 アドレスおよび関連サブネットマスク。たとえば、192.168.1.1/24 または /255.255.255.0 です。このアドレスは、トンネル送信元インターフェイスのアドレスと同じサブネット上にある必要はありません。ただし、送信元インターフェイスでリモートアクセス(RA)VPNを設定する場合、VTI IP アドレスは RA VPN に設定されたアドレスプール内にはありません。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

サイト間 VPN 経由のトラフィックの許可

サイト間 VPN トンネル内のトラフィックフローを有効にするには、次の方法のいずれかを使用します。

- **sysopt connection permit-vpn** コマンドを設定します。これにより、VPN 接続と一致するトラフィックがアクセス コントロール ポリシーから免除されます。このコマンドのデフォルトは **no sysopt connection permit-vpn** で、VPN トラフィックをアクセス コントロール ポリシーでも許可する必要があることを意味します。

これはVPNでトラフィックを許可する一層安全なメソッドです。外部ユーザが保護されたリモートネットワーク内のIPアドレスをスプーフィングできないためです。欠点はVPNトラフィックが検査されないことです。つまり、侵入とファイルの保護、URLフィルタリング、その他の高度な機能がトラフィックに適用されません。つまり、このトラフィックに対する接続イベントは生成されず、VPN 接続は統計ダッシュボードには反映されません。

このコマンドを設定するのに適した方法は、リモート アクセス VPN 接続プロファイルを作成し、そこで [復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (Bypass Access Control policy for decrypted traffic)] オプションを選択することです。RA VPN を設定したくない場合、または RA VPN を設定できない場合、FlexConfig を使用してコマンドを設定することができます。



(注) この方式は、仮想トンネルインターフェイス (VTI) で設定されたルートベースのVPN 接続には適用されません。ルートベースのVPN のアクセス制御ルールは常に設定する必要があります。

- ・リモートネットワークからの接続を許可するアクセス制御ルールを作成します。この方法では、VPNトラフィックが検査され、高度なサービスを接続に適用できることが保証されます。欠点は、外部ユーザがIP アドレスになりすまして内部ネットワークにアクセスする可能性があることです。

グローバル IKE ポリシーの設定

Internet Key Exchange (IKE; インターネット キー交換) は、IPsec ピアの認証、IPsec 暗号キーのネゴシエーションと配布、および IPsec Security Association (SA; セキュリティ アソシエーション) の自動的な確立に使用されるキー管理プロトコルです。

IKE ネゴシエーションは2つのフェーズで構成されています。フェーズ1では、2つのIKE ピア間のセキュリティアソシエーションをネゴシエートします。これにより、ピアはフェーズ2で安全に通信できるようになります。フェーズ2のネゴシエーションでは、IKEによってIPsecなどの他のアプリケーション用のSAが確立されます。両方のフェーズで接続のネゴシエーション時にプロポーザルが使用されます。IKEプロポーザルは、2つのピア間のネゴシエーションを保護するためにこれらのピアで使用されるアルゴリズムのセットです。IKE ネゴシエーションは、共通 (共有) IKE ポリシーに合意している各ピアによって開始されます。このポリシーは、後続のIKE ネゴシエーションを保護するために使用されるセキュリティ パラメータを示します。

IKE ポリシー オブジェクトは、これらのネゴシエーション用のIKE プロポーザルを定義します。有効化されたオブジェクトは、ピアがVPN 接続をネゴシエートする際に使用されます。接続ごとに異なるIKE ポリシーを指定することはできません。各オブジェクトの相対的な優先順位に従って、最初に試行されるポリシーが決まります。番号が小さいほど優先順位が高くなります。両方のピアがサポートするポリシーをネゴシエーションで見つけられない場合、接続は確立されません。

グローバル IKE ポリシーを定義するには、それぞれの IKE バージョンに関して有効にするオブジェクトを選択します。事前定義済みのオブジェクトが独自の要件を満たさない場合は、新しいポリシーを作成してセキュリティ ポリシーを実施できます。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページでグローバルポリシーを設定する方法について説明します。また、IKE ポリシー設定の[編集 (Edit)] をクリックすることにより、VPN 接続を編集する際にポリシーを有効化、無効化、および作成することもできます。



(注) 最大20のIKEポリシーを有効にできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [IKE ポリシー (IKE Policies)] を選択します。

IKEv1 のポリシーと IKEv2 のポリシーは別個のリストに表示されます。

ステップ 2 それぞれの IKE バージョンに関して許可する IKE ポリシーを有効化します。

- a) オブジェクト テーブルの上の [IKEv1] または [IKEv2] を選択すると、そのバージョンのポリシーが表示されます。
- b) [状態 (State)] トグルをクリックして、適切なオブジェクトを有効化し、要件に適合しないオブジェクトを無効化します。

セキュリティ要件の一部が既存のオブジェクトに反映されていない場合は、新しいオブジェクトを定義して必要な要件を実装できます。詳細については、次のトピックを参照してください。

- [IKEv1 ポリシーの設定 \(813 ページ\)](#)
- [IKEv2 ポリシーの設定 \(814 ページ\)](#)

- c) 相対的な優先順位が要件に一致することを確認します。

ポリシーの優先順位を変更する必要がある場合は、編集します。事前定義されたシステムポリシーの場合、優先順位を変更するには、そのポリシーの独自のバージョンを作成する必要があります。

優先順位は相対的であり、絶対的ではありません。たとえば、優先順位 80 は 160 より高くなります。有効にしたオブジェクトの中で 80 が最も優先順位の高いオブジェクトであれば、そのオブジェクトが最初に選択されるポリシーになります。その後、優先順位 25 のポリシーを有効にすると、そのオブジェクトが最初に選択されるポリシーになります。

- d) 両方の IKE バージョンを使用する場合は、もう一方のバージョンでこのプロセスを繰り返します。

IKEv1 ポリシーの設定

Internet Key Exchange (IKE; インターネットキーエクスチェンジ) バージョン 1 ポリシー オブジェクトには、VPN 接続を定義する際に IKEv1 ポリシーで必要となるパラメータが含まれています。IKE は、IPsec ベースの通信の管理を簡易化するキー管理プロトコルです。IPsec ピアの認証、IPsec 暗号キーのネゴシエーションと配布、および IPsec Security Association (SA; セキュリティ アソシエーション) の自動確立に使用されます。

事前定義済みの IKEv1 ポリシーがいくつか用意されています。ニーズに適したものがあれば、単に [状態 (State)] トグルをクリックしてそれらを有効化します。または新しいポリシーを作成して、他のセキュリティ設定の組み合わせを実装することもできます。システム定義されたオブジェクトを編集/削除することはできません。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [新しいIKEポリシーの作成 (Create New IKE Policy)] リンクをクリックすることにより、VPN 接続の IKEv1 設定を編集する際に IKEv1 ポリシー オブジェクトを作成することもできます。

手順

- ステップ 1** [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [IKE ポリシー (IKE Policies)] を選択します。
- ステップ 2** オブジェクト テーブルの上の [IKEv1] を選択し、IKEv1 ポリシーを表示します。
- ステップ 3** システム定義されたポリシーの中に要件に合うポリシーがあれば、[状態 (State)] トグルをクリックしてそれらを有効化します。

不要なポリシーを無効化する場合にも、[状態 (State)] トグルを使用します。相対的な優先順位に従って、最初に試行されるポリシーが決まります。番号が小さいほど優先順位が高くなります。

- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

- ステップ 5** IKEv1 のプロパティを設定します。

- [優先順位]: IKE ポリシーの関連優先順位は 1 ~ 65,535 です。この優先順位によって、共通のセキュリティ アソシエーション (SA) の検出試行時に、ネゴシエーションする 2 つのピアを比較することで、IKE ポリシーの順序が決定します。リモート IPsec ピアは、最も優先順位の高いポリシーで選択されているパラメータをサポートしていない場合、次に小さい優先順位で定義されているパラメータの使用を試行します。値が小さいほど、プライオリティが高くなります。
- [名前 (Name)]: オブジェクトの名前 (最大 128 文字)。

- [状態 (State)] : IKE ポリシーが有効か無効かを示します。状態を変更するには切り替えをクリックします。IKE ネゴシエーション中には、有効なポリシーのみが使用されます。
- [認証 (Authentication)] : 2 つのピア間で使用される認証方式。詳細については、[使用する認証方式の決定 \(798 ページ\)](#) を参照してください。
 - [事前共有キー (Preshared Key)] : 各デバイスで定義されている事前共有キーを使用します。事前共有キーを使用すると、秘密鍵を2つのピア間で共有し、認証フェーズ中にIKEで使用できます。ピアに同じ事前共有キーが設定されていない場合は、IKE SA を確立できません。
 - [証明書 (Certificate)] : ピアのデバイス ID 証明書を使用して相互に識別します。認証局に各ピアを登録することによって、これらの証明書を取得する必要があります。また、各ピアでアイデンティティ証明書の署名に使用された、信頼できる CA ルート証明書および中間 CA 証明書もアップロードする必要があります。ピアは、同じ CA または別の CA に登録できます。どちらのピアにも自己署名証明書を使用することはできません。
- [暗号化 (Encryption)] : フェーズ2 ネゴシエーションを保護するためのフェーズ1 セキュリティ アソシエーション (SA) の確立に使用される暗号化アルゴリズム。オプションの説明については、[使用する暗号化アルゴリズムの決定 \(795 ページ\)](#) を参照してください。
- [Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group)] : 2 つの IPsec ピア間の共有秘密を互いに送信することなく取得するために使用する Diffie-Hellman グループ。係数が大きいほどセキュリティが強化されますが、処理時間が長くなります。2 つのピアに、一致する係数グループが設定されている必要があります。オプションの説明については、[使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定 \(797 ページ\)](#) を参照してください。
- [ハッシュ (Hash)] : メッセージの整合性を確保するために使用されるメッセージ ダイジェストを作成するためのハッシュアルゴリズム。オプションの説明については、[使用するハッシュアルゴリズムの決定 \(796 ページ\)](#) を参照してください。
- [有効期間 (Lifetime)] : セキュリティ アソシエーション (SA) のライフタイム (120～2147483647 までの秒数、または空白)。このライフタイムを超えると、SAの期限が切れ、2つのピア間で再ネゴシエーションを行う必要があります。一般的に、ライフタイムが(ある程度)短いほど、IKE ネゴシエーションがセキュアになります。ただし、ライフタイムが長いと、今後の IPsec セキュリティ アソシエーションのセットアップが、短いライフタイムの場合よりも迅速に行われます。デフォルトは86400です。無期限のライフタイムを指定するには、値を入力しません(フィールドを空白のままにします)。

ステップ6 [OK] をクリックして変更を保存します。

IKEv2 ポリシーの設定

Internet Key Exchange (IKE; インターネットキーエクスチェンジ) バージョン2 ポリシー オブジェクトには、VPN 接続を定義する際に IKEv2 ポリシーで必要となるパラメータが含まれています。IKE は、IPsec ベースの通信の管理を簡易化するキー管理プロトコルです。IPsec ピア

の認証、IPsec 暗号キーのネゴシエーションと配布、および IPsec Security Association (SA; セキュリティ アソシエーション) の自動確立に使用されます。

事前定義済みの IKEv2 ポリシーがいくつか用意されています。ニーズに適したものがあれば、単に [状態 (State)] トグルをクリックしてそれらを有効化します。または新しいポリシーを作成して、他のセキュリティ設定の組み合わせを実装することもできます。システム定義されたオブジェクトを編集/削除することはできません。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [新しいIKEポリシーの作成 (Create New IKE Policy)] リンクをクリックすることにより、VPN 接続の IKEv2 設定を編集する際に IKEv2 ポリシー オブジェクトを作成することもできます。

手順

- ステップ 1** [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [IKE ポリシー (IKE Policies)] を選択します。
- ステップ 2** オブジェクト テーブルの上の [IKEv2] を選択し、IKEv2 ポリシーを表示します。
- ステップ 3** システム定義されたポリシーの中に要件に合うポリシーがあれば、[状態 (State)] トグルをクリックしてそれらを有効化します。

不要なポリシーを無効化する場合にも、[状態 (State)] トグルを使用します。相対的な優先順位に従って、最初に試行されるポリシーが決まります。番号が小さいほど優先順位が高くなります。

- ステップ 4** 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

- ステップ 5** IKEv2 のプロパティを設定します。

- [優先順位]: IKE ポリシーの関連優先順位は 1 ~ 65,535 です。この優先順位によって、共通のセキュリティ アソシエーション (SA) の検出試行時に、ネゴシエーションする 2 つのピアを比較することで、IKE ポリシーの順序が決定します。リモート IPsec ピアは、最も優先順位の高いポリシーで選択されているパラメータをサポートしていない場合、次に小さい優先順位で定義されているパラメータの使用を試行します。値が小さいほど、プライオリティが高くなります。
- [名前 (Name)]: オブジェクトの名前 (最大 128 文字)。
- [状態 (State)]: IKE ポリシーが有効か無効かを示します。状態を変更するには切り替えをクリックします。IKE ネゴシエーション中には、有効なポリシーのみが使用されます。

- [暗号化 (Encryption)] : フェーズ2 ネゴシエーションを保護するためのフェーズ1 セキュリティ アソシエーション (SA) の確立に使用される暗号化アルゴリズム。許可するすべてのアルゴリズムを選択します。ただし、同じポリシー内に混合モード (AES-GCM) オプションと通常モードオプションの両方を含めることはできません。(通常モードでは整合性ハッシュを選択する必要がありますが、混合モードでは整合性ハッシュを別個に選択することが禁じられています)。システムは、最も強力なアルゴリズムから最も弱いアルゴリズムの順に、一致するものが見つかるまでピアとネゴシエートします。オプションの説明については、[使用する暗号化アルゴリズムの決定 \(795 ページ\)](#) を参照してください。
- [Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group)] : 2 つの IPsec ピア間の共有秘密を互いに送信することなく取得するために使用する Diffie-Hellman グループ。係数が大きいほどセキュリティが強化されますが、処理時間が長くなります。2 つのピアに、一致する係数グループが設定されている必要があります。許可するアルゴリズムをすべて選択します。システムは、最も強力なグループから最も弱いグループの順に、一致するものが見つかるまでピアとネゴシエートします。オプションの説明については、[使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定 \(797 ページ\)](#) を参照してください。
- [整合性ハッシュ (Integrity Hash)] : メッセージの整合性を確保するために使用されるメッセージダイジェストを作成するためのハッシュ アルゴリズムの整合性部分。許可するアルゴリズムをすべて選択します。システムは、最も強力なアルゴリズムから最も弱いアルゴリズムの順に、一致するものが見つかるまでピアとネゴシエートします。整合性ハッシュを AES-GCM 暗号化オプションと併用することはできません。オプションの説明については、[使用するハッシュ アルゴリズムの決定 \(796 ページ\)](#) を参照してください。
- [疑似ランダム関数 (PRF) ハッシュ (Pseudo Random Function (PRF) Hash)] : ハッシュ アルゴリズムの疑似ランダム関数 (PRF) 部分。このアルゴリズムは IKEv2 トンネル暗号化に必要なキー関連情報とハッシュ操作を取得するために使用されます。IKEv1 では、整合性と PRF アルゴリズムは別々ではありませんが、IKEv2 では、これらの要素に異なるアルゴリズムを指定できます。許可するアルゴリズムをすべて選択します。システムは、最も強力なアルゴリズムから最も弱いアルゴリズムの順に、一致するものが見つかるまでピアとネゴシエートします。オプションの説明については、[使用するハッシュ アルゴリズムの決定 \(796 ページ\)](#) を参照してください。
- [有効期間 (Lifetime)] : セキュリティ アソシエーション (SA) のライフタイム (120～2147483647 までの秒数、または空白)。このライフタイムを超えると、SA の期限が切れ、2 つのピア間で再ネゴシエーションを行う必要があります。一般的に、ライフタイムが (ある程度) 短いほど、IKE ネゴシエーションがセキュアになります。ただし、ライフタイムが長いと、今後の IPsec セキュリティ アソシエーションのセットアップが、短いライフタイムの場合よりも迅速に行われます。デフォルトは 86400 です。無期限のライフタイムを指定するには、値を入力しません (フィールドを空白のままにします)。

ステップ 6 [OK] をクリックして変更を保存します。

IPsec プロポーザルの設定

IPsec は、VPN を設定する場合の最も安全な方法の 1 つです。IPsec では、IP パケット レベルでのデータ暗号化が提供され、標準規格に準拠した堅牢なセキュリティソリューションが提供されます。IPsec では、データはトンネルを介してパブリック ネットワーク経由で送信されます。トンネルとは、2つのピア間のセキュアで論理的な通信パスです。IPsec トンネルを通過するトラフィックは、トランスフォーム セットと呼ばれるセキュリティ プロトコルとアルゴリズムの組み合わせによって保護されます。IPsec Security Association (SA; セキュリティ アソシエーション) ネゴシエーション中に、ピアでは、両方のピアに共通するトランスフォーム セットが検索されます。

IKE バージョン (IKEv1 または IKEv2) に基づいて、別個の IPsec プロポーザル オブジェクトがあります。

- IKEv1 IPsec プロポーザルを作成する場合、IPsec が動作するモードを選択し、必要な暗号化タイプおよび認証タイプを定義します。アルゴリズムには単一のオプションを選択できます。VPN で複数の組み合わせをサポートするには、複数の IKEv1 IPsec プロポーザル オブジェクトを作成し、選択します。
- IKEv2 IPsec プロポーザルを作成する場合、VPN で許可するすべての暗号化アルゴリズムとハッシュアルゴリズムを選択できます。システムは、設定を安全性が最も高いものから最も低いものに並べ替え、その順序に従い一致するものが見つかるまでピアとのネゴシエーションを行います。そのため、IKEv1 のように、許可される各組み合わせを個別に送信するのではなく、許可されるすべての組み合わせを単一のプロポーザルで送信できます。

IKEv1 と IKEv2 IPsec プロポーザルの両方で、カプセル化セキュリティ プロトコル (ESP) が使用されます。これは、認証、暗号化およびアンチリプレイの各サービスを提供します。ESP は、IP プロトコル タイプ 50 です。



(注) IPsec トンネルで暗号化と認証の両方を使用することを推奨します。

次のセクションでは、各 IKE バージョンにおける IPsec プロポーザルの設定方法について説明します。

IKEv1 用 IPsec プロポーザルの設定

IKEv1 IPsec プロポーザル オブジェクトを使用して、IKE フェーズ 2 ネゴシエーション中に使われる IPsec プロポーザルを設定します。IPsec プロポーザルは、IPsec トンネル内のトラフィックを保護するためのセキュリティ プロトコルとアルゴリズムの組み合わせを定義します。

事前定義済みの IKEv1 IPsec プロポーザルがいくつか用意されています。または新しいプロポーザルを作成して、他のセキュリティ設定の組み合わせを実装することもできます。システム定義されたオブジェクトを編集/削除することはできません。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [新しい IPsec プロポーザルの作成

(Create New IPsec Proposal)] リンクをクリックすることにより、VPN 接続の IKEv1 IPsec 設定を編集する際に IKEv1 IPsec プロポーザル オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、コンテンツ テーブルから [IPsec プロポーザル (IPsec Proposals)] を選択します。

ステップ 2 オブジェクト テーブルの上の [IKEv1] を選択し、IKEv1 IPsec プロポーザルを表示します。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔗) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 4 IKEv1 IPsec プロポーザルのプロパティを設定します。

- [名前 (Name)] : オブジェクトの名前 (最大 128 文字) 。
- [モード (Mode)] : IPsec トンネルが動作するモード。
 - [トンネル (Tunnel)] モードでは、IP パケット全体がカプセル化されます。IPsec ヘッダーが、元の IP ヘッダーと新しい IP ヘッダーとの間に追加されます。これはデフォルトです。トンネルモードは、ファイアウォールの背後にあるホストとの間で送受信されるトラフィックをファイアウォールが保護する場合に使用します。トンネルモードは、インターネットなどの非信頼ネットワークを介して接続されている 2 つのファイアウォール (またはその他のセキュリティ ゲートウェイ) 間で通常の IPsec が実装される標準の方法です。
 - [トランスポート (Transport)] モードでは、IP パケットの上位層プロトコルだけがカプセル化されます。IPsec ヘッダーは、IP ヘッダーと上位層プロトコルヘッダー (TCP など) との間に挿入されます。トランスポートモードでは、送信元ホストと宛先ホストの両方が IPsec をサポートしている必要があります。また、トランスポートモードは、トンネルの宛先ピアが IP パケットの最終宛先である場合にだけ使用されます。一般的に、トランスポート モードは、レイヤ 2 またはレイヤ 3 のトンネリング プロトコル (GRE、L2TP、DLSW など) を保護する場合にだけ使用されます。
- [ESP 暗号化 (ESP Encryption)] : このプロポーザルのカプセル化セキュリティ プロトコル (ESP) 暗号化アルゴリズム。オプションの説明については、[使用する暗号化アルゴリズムの決定 \(795 ページ\)](#) を参照してください。
- [ESP ハッシュ (ESP Hash)] : 認証のために使用するハッシュ アルゴリズムまたは整合性アルゴリズム。オプションの説明については、[使用するハッシュアルゴリズムの決定 \(796 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

IKEv2 用 IPsec プロポーザルの設定

IKEv2 IPsec プロポーザル オブジェクトを使用して、IKE フェーズ 2 ネゴシエーション中に使われる IPsec プロポーザルを設定します。IPsec プロポーザルは、IPsec トンネル内のトラフィックを保護するためのセキュリティ プロトコルとアルゴリズムの組み合わせを定義します。

事前定義済みの IKEv2 IPsec プロポーザルがいくつか用意されています。または新しいプロポーザルを作成して、他のセキュリティ設定の組み合わせを実装することもできます。システム定義されたオブジェクトを編集/削除することはできません。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。また、オブジェクトの一覧に表示される [IPsec プロポーザルの新規作成 (Create New IPsec Proposal)] リンクをクリックすることにより、VPN 接続の IKEv2 IPsec 設定を編集する際に IKEv2 IPsec プロポーザル オブジェクトを作成することもできます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、コンテンツ テーブルから [IPsec プロポーザル (IPsec Proposals)] を選択します。

ステップ 2 オブジェクト テーブルの上の [IKEv2] を選択し、IKEv2 IPsec プロポーザルを表示します。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 4 IKEv2 IPsec プロポーザルのプロパティを設定します。

- [名前 (Name)] : オブジェクトの名前 (最大 128 文字)。
- [暗号化 (Encryption)] : このプロポーザルのカプセル化セキュリティプロトコル (ESP) 暗号化アルゴリズム。許可するアルゴリズムをすべて選択します。システムは、最も強力なアルゴリズムから最も弱いアルゴリズムの順に、一致するものが見つかるまでピアとネゴシエートします。オプションの説明については、[使用する暗号化アルゴリズムの決定 \(795 ページ\)](#) を参照してください。
- [整合性ハッシュ (Integrity Hash)] : 認証のために使用するハッシュ アルゴリズムまたは整合性アルゴリズム。許可するアルゴリズムをすべて選択します。システムは、最も強力なアルゴリズムから最も弱いアルゴリズムの順に、一致するものが見つかるまでピアとネゴシエートします。オプションの説明については、[使用するハッシュアルゴリズムの決定 \(796 ページ\)](#) を参照してください。

(注)

いずれかの AES-GCM/GMAC オプションを暗号化アルゴリズムとして選択した場合は、NULL 整合性アルゴリズムを選択してください。非 NULL オプションを選択した場合でも、これらの暗号化標準規格は整合性ハッシュを使用しません。

ステップ 5 [OK] をクリックして変更を保存します。

サイト間 VPN 接続の確認

サイト間 VPN 接続を設定し、設定をデバイスに展開した後で、システムがリモート デバイスとのセキュリティ アソシエーションを確立することを確認します。

接続を確立できない場合は、デバイス CLI から **ping interface interface_name remote_ip_address** コマンドを使用して、VPN インターフェイスを介したリモート デバイスへのパスが存在することを確認します。設定したインターフェイスを介した接続が存在しない場合は、**interface interface_name** キーワードをオフにしたまま、接続が別のインターフェイス経由になっていないかどうかを判別します。接続に対して間違ったインターフェイスが選択されている可能性があります。保護されたネットワークに面したインターフェイスではなく、リモート デバイスに面したインターフェイスを選択する必要があります。

ネットワーク パスが存在する場合は、両方のエンドポイントで設定およびサポートされている IKE バージョンとキーを確認し、必要に応じて VPN 接続を調整します。アクセス制御または NAT ルールが接続をブロックしていないことを確認します。

手順

ステップ 1 デバイス CLI にログインします (コマンドライン インターフェイス (CLI) へのログイン (9 ページ) を参照)。

ステップ 2 **show ipsec sa** コマンドを使用して、IPSec セキュリティ アソシエーションが確立されていることを確認します。

ご使用のデバイス (**local addr**) とリモート ピア (**current_peer**) の間に VPN 接続が確立されているはずです。その接続を介してトラフィックを送信すると、パケット (pkts) 数が増加します。アクセス リストには、接続のローカル ネットワークおよびリモート ネットワークが表示されます。

たとえば、次の出力は、IKEv2 接続を示しています。

```
> show ipsec sa
interface: site-a-outside
  Crypto map tag: s2sCryptoMap, seq num: 1, local addr: 192.168.2.15

    access-list |s2sAc1|0730e31c-1e5f-11e7-899f-27f6e1030344
extended permit ip 192.168.1.0 255.255.255.0 192.168.3.0 255.255.255.0
  local ident (addr/mask/prot/port): (192.168.1.0/255.255.255.0/0/0)
  remote ident (addr/mask/prot/port): (192.168.3.0/255.255.255.0/0/0)
```

```

current_peer: 192.168.4.6

#pkts encaps: 69, #pkts encrypt: 69, #pkts digest: 69
#pkts decaps: 69, #pkts decrypt: 69, #pkts verify: 69
#pkts compressed: 0, #pkts decompressed: 0
#pkts not compressed: 69, #pkts comp failed: 0, #pkts decomp failed: 0
#pre-frag successes: 0, #pre-frag failures: 0, #fragments created: 0
#PMTUs sent: 0, #PMTUs rcvd: 0, #decapsulated frgs needing reassembly: 0
#TFC rcvd: 0, #TFC sent: 0
#Valid ICMP Errors rcvd: 0, #Invalid ICMP Errors rcvd: 0
#send errors: 0, #recv errors: 0

local crypto endpt.: 192.168.2.15/500, remote crypto endpt.: 192.168.4.6/500
path mtu 1500, ipsec overhead 55(36), media mtu 1500
PMTU time remaining (sec): 0, DF policy: copy-df
ICMP error validation: disabled, TFC packets: disabled
current outbound spi: CD22739C
current inbound spi : 52D2F1E4

inbound esp sas:
spi: 0x52D2F1E4 (1389556196)
  SA State: active
  transform: esp-aes-gcm-256 esp-null-hmac no compression
  in use settings ={L2L, Tunnel, PFS Group 19, IKEv2, }
  slot: 0, conn_id: 62738432, crypto-map: s2sCryptoMap
  sa timing: remaining key lifetime (kB/sec): (4285434/28730)
  IV size: 8 bytes
  replay detection support: Y
  Anti replay bitmap:
    0xFFFFFFFF 0xFFFFFFFF
outbound esp sas:
spi: 0xCD22739C (3441587100)
  SA State: active
  transform: esp-aes-gcm-256 esp-null-hmac no compression
  in use settings ={L2L, Tunnel, PFS Group 19, IKEv2, }
  slot: 0, conn_id: 62738432, crypto-map: s2sCryptoMap
  sa timing: remaining key lifetime (kB/sec): (4055034/28730)
  IV size: 8 bytes
  replay detection support: Y
  Anti replay bitmap:
    0x00000000 0x00000001

```

次の出力は、IKEv1 接続を示しています。

```

> show ipsec sa
interface: site-a-outside
  Crypto map tag: s2sCryptoMap, seq num: 1, local addr: 192.168.2.15

  access-list |s2sAcl|0730e31c-1e5f-11e7-899f-27f6e1030344
extended permit ip 192.168.1.0 255.255.255.0 192.168.3.0 255.255.255.0
  local ident (addr/mask/prot/port): (192.168.1.0/255.255.255.0/0/0)
  remote ident (addr/mask/prot/port): (192.168.3.0/255.255.255.0/0/0)
  current_peer: 192.168.4.6

#pkts encaps: 10, #pkts encrypt: 10, #pkts digest: 10
#pkts decaps: 10, #pkts decrypt: 10, #pkts verify: 10
#pkts compressed: 0, #pkts decompressed: 0
#pkts not compressed: 10, #pkts comp failed: 0, #pkts decomp failed: 0
#pre-frag successes: 0, #pre-frag failures: 0, #fragments created: 0
#PMTUs sent: 0, #PMTUs rcvd: 0, #decapsulated frgs needing reassembly: 0
#TFC rcvd: 0, #TFC sent: 0

```



```
#Valid ICMP Errors rcvd: 0, #Invalid ICMP Errors rcvd: 0
#send errors: 0, #recv errors: 0

local crypto endpt.: 192.168.2.15/0, remote crypto endpt.: 192.168.4.6/0
path mtu 1500, ipsec overhead 74(44), media mtu 1500
PMTU time remaining (sec): 0, DF policy: copy-df
ICMP error validation: disabled, TFC packets: disabled
current outbound spi: 077D72C9
current inbound spi : AC146DEC

inbound esp sas:
  spi: 0xAC146DEC (2887020012)
    SA State: active
    transform: esp-aes-256 esp-sha-hmac no compression
    in use settings = {L2L, Tunnel, PFS Group 5, IKEv1, }
    slot: 0, conn_id: 143065088, crypto-map: s2sCryptoMap
    sa timing: remaining key lifetime (kB/sec): (3914999/28567)
    IV size: 16 bytes
    replay detection support: Y
    Anti replay bitmap:
      0x00000000 0x000007FF
outbound esp sas:
  spi: 0x077D72C9 (125661897)
    SA State: active
    transform: esp-aes-256 esp-sha-hmac no compression
    in use settings = {L2L, Tunnel, PFS Group 5, IKEv1, }
    slot: 0, conn_id: 143065088, crypto-map: s2sCryptoMap
    sa timing: remaining key lifetime (kB/sec): (3914999/28567)
    IV size: 16 bytes
    replay detection support: Y
    Anti replay bitmap:
      0x00000000 0x00000001
```

ステップ 3 **show isakmp sa** コマンドを使用して、IKE セキュリティ アソシエーションを確認します。

sa キーワードを使用せずに(または代わりに **stats** キーワードを使用して)このコマンドを使用すると、IKE 統計情報が表示されます。

たとえば、次の出力は、IKEv2 セキュリティ アソシエーションを示しています。

```
> show isakmp sa

There are no IKEv1 SAs

IKEv2 SAs:

Session-id:15317, Status:UP-ACTIVE, IKE count:1, CHILD count:1

Tunnel-id Local          Remote          Status  Role
592216161 192.168.2.15/500 192.168.4.6/500  READY  INITIATOR
      Encr: AES-GCM, keysize: 256, Hash: N/A, DH Grp:21, Auth sign: PSK, Auth verify:
      PSK
      Life/Active Time: 86400/12 sec
Child sa: local selector 192.168.1.0/0 - 192.168.1.255/65535
          remote selector 192.168.3.0/0 - 192.168.3.255/65535
          ESP spi in/out: 0x52d2f1e4/0xcd22739c
```

次の出力は、IKEv1 セキュリティ アソシエーションを示しています。

```
> show isakmp sa
```

```

IKEv1 SAs:

    Active SA: 1
    Rekey SA: 0 (A tunnel will report 1 Active and 1 Rekey SA during rekey)
Total IKE SA: 1

1  IKE Peer: 192.168.4.6
   Type      : L2L                      Role      : initiator
   Rekey     : no                       State     : MM_ACTIVE

There are no IKEv2 SAs

```

サイト間 VPN のモニタリング

サイト間VPN接続をモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLIコンソールを開くか、またはデバイスのCLI ログインして、次のコマンドを使用します。

- **show ipsec sa** は VPN セッション（セキュリティ アソシエーション）を表示します。これらの統計は **clear ipsec sa counters** コマンドを使用してリセットできます。
- **show ipsec keyword** は IPsec 運用データおよび統計情報を表示します。 **show ipsec ?** と入力し、使用可能なキーワードを確認します。
- **show isakmp** は ISAKMP 運用データおよび統計情報を表示します。

サイト間 VPN の例

以下に、サイト間 VPN を設定する例を示します。

NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除

インターフェイスでサイト間 VPN 接続が定義され、そのインターフェイスに NAT ルールが設定されている場合は、オプションで VPN 上のトラフィックを NAT ルールから免除できます。これを行うのは、たとえば VPN 接続のリモートエンドで内部アドレスを処理できる場合です。

VPN 接続を作成する際に、[NAT 免除 (NAT Exempt)] オプションを選択するとルールを自動的に作成できます。ただし、これが機能するのは、ローカル保護されたネットワークが（ブリッジグループメンバーではなく）単一のルーテッドインターフェイス経由で接続される場合だけです。一方、接続内のローカルネットワークが複数のルーテッドインターフェイスまたは1つ以上のブリッジグループメンバーの背後に存在する場合は、NAT 免除ルールを手動で設定する必要があります。

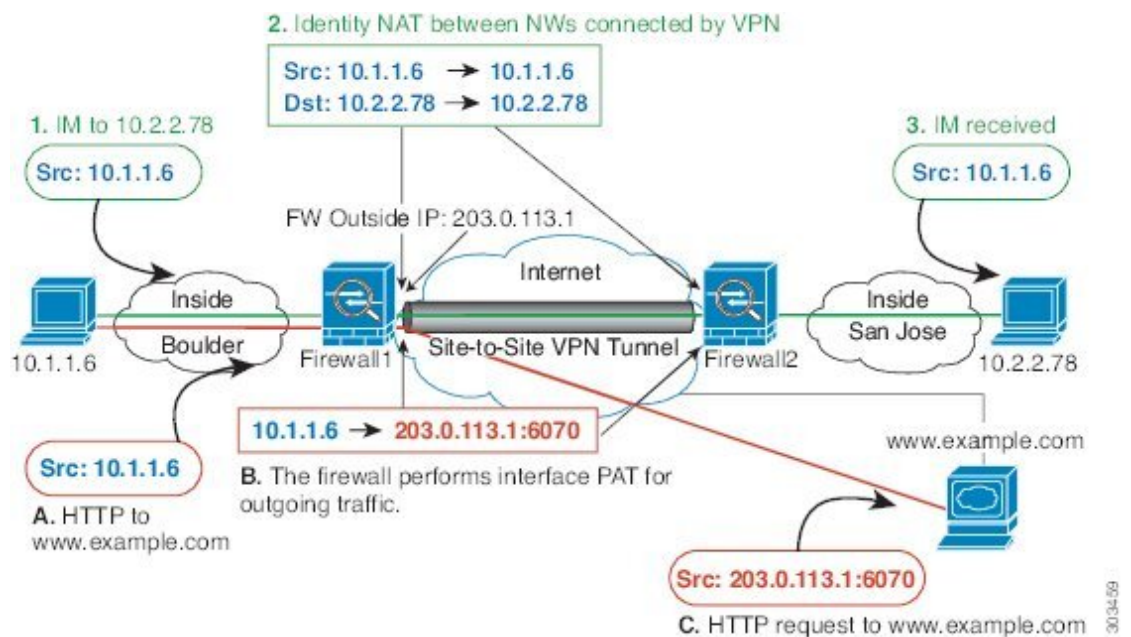
VPN トラフィックを NAT ルールから免除するには、リモートネットワークを宛先とするローカルトラフィック用のアイデンティティ手動 NAT ルールを作成します。次に、それ以外（インターネットなど）を宛先とするトラフィックに NAT を適用します。ローカルネットワーク

に複数のインターフェイスが存在する場合は、インターフェイスごとにルールを作成します。さらに、次の推奨事項も考慮してください。

- 接続内に複数のローカル ネットワークが存在する場合、ネットワーク グループ オブジェクトを作成して、それらのネットワークを定義するオブジェクトを保持します。
- VPN に IPv4 ネットワークと IPv6 ネットワークの両方を含める場合は、それぞれに別個のアイデンティティ NAT ルールを作成します。

次の例に、米国ボルダー (Boulder) とサンノゼ (San Jose) のオフィスを接続するサイト間トンネルを示します。インターネットに向かうトラフィック (たとえばボルダーの 10.1.1.6 から www.example.com へ) については、インターネット アクセス用に NAT によって提供されるパブリック IP アドレスが必要です。次の例では、インターフェイス PAT ルールを使用しています。ただし、VPN トンネルを経由するトラフィック (たとえば、ボルダーの 10.1.1.6 からサンノゼの 10.2.2.78 へ) については NAT を実行しません。したがって、アイデンティティ NAT ルールを作成して、そのトラフィックを除外する必要があります。アイデンティティ NAT は、あるアドレスを同じアドレスに変換するだけです。

図 50: サイトツーサイト VPN のためのインターフェイス PAT およびアイデンティティ NAT



次の例は、Firewall1 (ボルダー) の設定を示します。この例では、内部インターフェイスがブリッジグループであることを想定しているため、各メンバーインターフェイスのルールを記述する必要があります。ルーテッド内部インターフェイスが1つの場合も複数の場合も、プロセスは同じです。



- (注) この例では IPv4 のみと想定しています。VPN に IPv6 ネットワークも含まれる場合は、IPv6 用の並行ルールを作成します。なお、IPv6 インターフェイス PAT を実装することはできないため、PAT に使用する一意の IPv6 アドレスが指定されたホストオブジェクトを作成する必要があります。

手順

ステップ 1 オブジェクトを作成して、さまざまなネットワークを定義します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- コンテンツ テーブルから [ネットワーク (Network)] を選択し、[+] をクリックします。
- ネットワーク内部の Boulder を識別します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け (boulder-network など)、[ネットワーク (Network)] を選択して、ネットワーク アドレス「10.1.1.0/24」を入力します。

Add Network Object

Name

boulder-network

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

10.1.1.0/24

- [OK] をクリックします。
- [+] をクリックして、内部 San Jose ネットワークを定義します。

ネットワーク オブジェクトに名前を付け (sanjose-network など)、[ネットワーク (Network)] を選択して、ネットワーク アドレス「10.2.2.0/24」を入力します。

Add Network Object

Name
sanjose-network

Description

Type
☒ Network ☐ Host

Network
10.2.2.0/24

f) [OK] をクリックします。

ステップ 2 Firewall1 (ボールダー) 上で VPN 経由でサンノゼに向かう場合、ボールダー ネットワークの手動アイデンティティ NAT を設定します。

a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] を選択します。

b) [+] ボタンをクリックします。

c) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = NAT Exempt 1_2 Boulder San Jose VPN (または別の名前)。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [手動NAT (Manual NAT)]。
- [配置 (Placement)] = [特定のルールの上 (Above a Specific Rule)]。[自動NATの前に手動NAT (Manual NAT Before Auto NAT)] セクションの最初のルールを選択します。このルールが、宛先インターフェイスに関するすべての一般的なインターフェイス PAT ルールより前にあることを確認します。そうでない場合、適切なトラフィックにルールが適用されない可能性があります。
- [種類 (Type)] : Static。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside1_2。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元の発信元アドレス (Original Source Address)] : boulder-network ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み発信元アドレス (Translated Source Address)] : boulder-network ネットワーク オブジェクト。
- [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] : sanjose-network ネットワーク オブジェクト。

- [変換済み宛先アドレス (Translated Destination Address)] : sanjose-network ネットワーク オブジェクト。

(注)

宛先アドレスを変換する必要はないため、元の宛先アドレスと変換後の宛先アドレスに同じアドレスを指定することにより、アイデンティティ NAT を設定する必要があります。ポートフィールドはすべて空欄のままにしておきます。このルールは、送信元と宛先の両方にアイデンティティ NAT を設定します。

Add NAT Rule

Title: NAT Exempt 1_2 Boulder San Jose VPN

Create Rule for: Manual NAT

Status: ☒

Manual NAT rules allow the translation of the source as well as the destination address of a network packet. Destination and port translation are optional. You can place manual NAT rules either before or after Auto NAT rules and insert the rules at a specific location.

Placement: Above a Specific Rule

Type: Static

Packet Translation | Advanced Options

ORIGINAL PACKET		TRANSLATED PACKET	
Source Interface	inside1_2	Destination Interface	outside
Source Address	boulder-network	Source Address	boulder-network
Source Port	Any	Source Port	Any
Destination Address	sanjose-network	Destination Address	sanjose-network
Destination Port	Any	Destination Port	Any

- [詳細 (Advanced)] タブで、[宛先インターフェイスでプロキシ ARP しない (Do not proxy ARP on Destination Interface)] を選択します。
- [OK] をクリックします。
- このプロセスを繰り返して、他の内部インターフェイスにもそれぞれ同等のルールを作成します。

ステップ 3 Firewall1 (Boulder) 上の内部 Boulder ネットワーク用に、インターネットにアクセスする際の手動ダイナミック インターフェイス PAT を設定します。

(注)

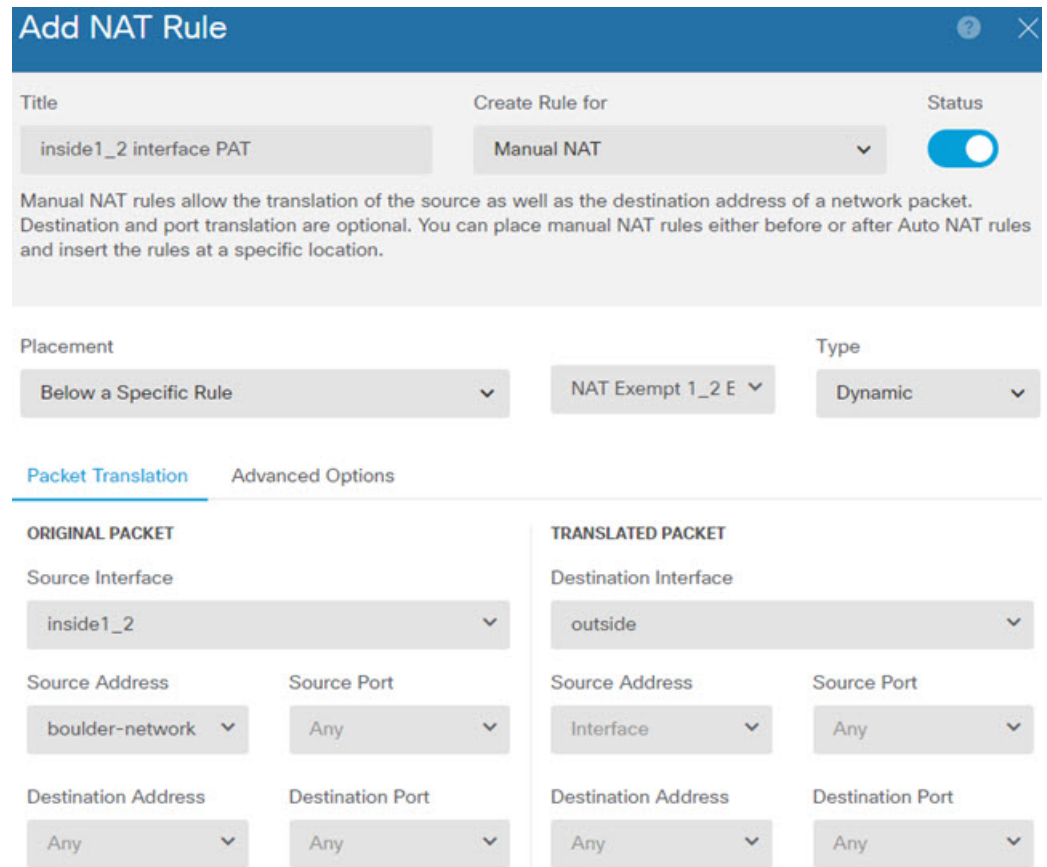
IPv4 トラフィックを対象とする内部インターフェイス用ダイナミック インターフェイス PAT ルールは、初期設定時にデフォルトで作成されるので、既に存在する可能性があります。しかしすべての点を説明するために、ここで設定を示します。これらの手順を完了する前に、内部

インターフェイスとネットワークを対象とするルールが既に存在するかを確認し、存在する場合はこの手順をスキップします。

a) [+] ボタンをクリックします。

b) 次のプロパティを設定します。

- [タイトル (Title)] = inside1_2 インターフェイス PAT (または任意の別の名前)。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] = [手動NAT (Manual NAT)]。
- [配置 (Placement)] = [特定のルールの下 (Below a Specific Rule)]。[自動NATの前に手動NAT (Manual NAT Before Auto NAT)] セクションで、このインターフェイスのために先に作成したルールを選択します。このルールは任意の宛先アドレスに適用されるので、sanjose-network を宛先として使用するルールはこのルールより前に配置される必要があります。そうしないと sanjose-network ルールが一致なくなります。デフォルトでは、新しい手動 NAT ルールが [NAT ルールを自動 NAT より優先 (NAT Rules Before Auto NAT)] セクションの末尾に配置され、これで十分です。
- [種類 (Type)] : Dynamic。
- [送信元インターフェイス (Source Interface)] : inside1_2。
- [宛先インターフェイス (Destination Interface)] : outside。
- [元の発信元アドレス (Original Source Address)] : boulder-network ネットワーク オブジェクト。
- [変換済み発信元アドレス (Translated Source Address)] : Interface。このオプションは、宛先インターフェイスを使用してインターフェイス PAT を設定します。
- [元の宛先アドレス (Original Destination Address)] : any。
- [変換済み宛先アドレス (Translated Destination Address)] : any。



- c) [OK] をクリックします。
- d) このプロセスを繰り返して、他の内部インターフェイスにもそれぞれ同等のルールを作成します。

ステップ 4 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ステップ 5 Firewall2 (San Jose) も管理している場合は、そのデバイスにも同様のルールを設定できます。

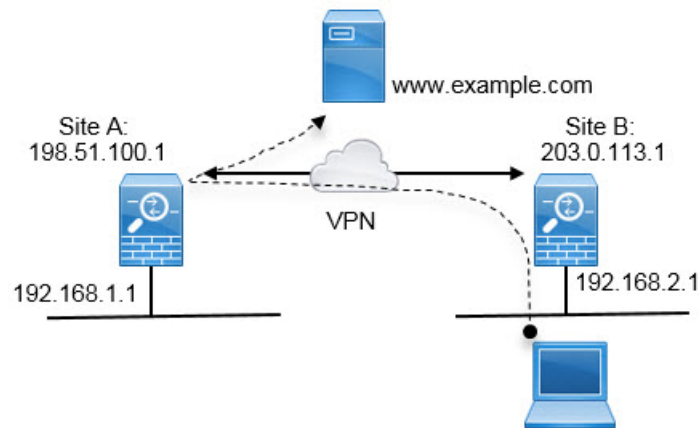
- 手動アイデンティティ NAT ルールの対象は、boulder-network を宛先とする sanjose-network です。Firewall2 内部/外部ネットワーク用に新しいインターフェイス オブジェクトを作成します。

- 手動ダイナミック インターフェイス PAT ルールの対象は、any を宛先とする sanjose-network です。

外部サイト間 VPN ユーザの外部インターフェイスでインターネットアクセスを実現する方法 (ヘアピンング)

サイト間VPNでは、リモートネットワーク上のユーザに自分のデバイスを介してインターネットにアクセスさせようとする場合があります。しかし、リモートユーザは、インターネット（外部インターフェイス）に面している同じインターフェイス上のデバイスにアクセスしているため、インターネットトラフィックを外部インターフェイスからすぐに戻す必要があります。この技術はヘアピンングと呼ばれることがあります。

次の図は、例を示しています。198.51.100.1（メインサイトのサイト A）と 203.0.113.1（リモートサイトのサイト B）間にサイト間 VPN トンネルが設定されています。リモートサイトの内部ネットワーク（192.168.2.0/24）からのユーザトラフィックはすべて VPN を通過します。そのため、内部ネットワークのユーザがインターネット上のサーバ（www.example.com など）にアクセスする場合、接続は最初に VPN を通過し、その後 198.51.100.1 インターフェイスからインターネットにルートバックされます。



次の手順では、このサービスの設定方法を説明します。VPN トンネルの両方のエンドポイントを設定する必要があります。

始める前に

この手順では、VPN トラフィックをアクセス コントロール ポリシーの対象とする、VPN トラフィックを許可するためのデフォルト設定を使用していると仮定します。実行中のコンフィギュレーションでは、これは **no sysopt connection permit-vpn** コマンドで表されます。代わりに FlexConfig を介して **sysopt connection permit-vpn** を有効にした場合、または RA VPN 接続プロファイルで [復号されたトラフィックでアクセス制御ポリシーをバイパスする (Bypass Access Control policy for decrypted traffic)] オプションを選択することで、アクセス制御ルールを設定する手順は不要になります。

手順

ステップ 1 (サイト A、メインサイト)。リモート サイト B へのサイト間 VPN 接続を設定します。

- a) **[デバイス (Device)]** をクリックし、次に **[サイト間 VPN (Site-to-Site VPN)]** グループの **[設定の表示 (View Configuration)]** をクリックします。
- b) **[+]** をクリックして新しい接続を追加します。
- c) 次のようにエンドポイントを定義し、**[次へ (Next)]** をクリックします。
 - **[接続プロファイル名 (Connection Profile Name)]** : わかりやすい接続の名前を付けます。例、Connection Profile Name。
 - **[ローカル VPN アクセス インターフェイス (Local VPN Access Interface)]** : 外部インターフェイスを選択します。
 - **[ローカル ネットワーク (Local Network)]** : デフォルトの **[任意 (Any)]** のままにします。
 - **[リモート IP アドレス (Remote IP Address)]** : リモート ピアの外部インターフェイスの IP アドレスを入力します。この例では、203.0.113.1 です。
 - **[リモート ネットワーク (Remote Network)]** : **[+]** をクリックして、リモート ピアの保護ネットワークを定義するネットワーク オブジェクトを選択します。この例では、192.168.2.0/24 です。**[新しいネットワークの作成 (Create New Network)]** をクリックして、今すぐオブジェクトを作成できます。

次の図は、最初の手順を示しています。

Connection Profile Name

Site-A-to-Site-B

LOCAL SITE	REMOTE SITE
Local VPN Access Interface	☒ Static ☐ Dynamic
outside	Remote IP Address
	203.0.113.1
Local Network	Remote Network
+	+
ANY	Site-B-Network

- d) プライバシー設定を定義して、**[次へ (Next)]** をクリックします。

- [IKE ポリシー (IKE Policy)] : IKE の設定はヘアピンニングに影響を及ぼしません。セキュリティのニーズに合わせて IKE バージョン、ポリシー、およびプロポーザルを選択します。入力するローカルとリモートの事前共有キーはメモしてください。リモートピアの設定時に必要になります。
- [NAT 免除 (NAT Exempt)] : 内部インターフェイスを選択します。

Additional Options

NAT Exempt

inside

- [Perfect Forward Secrecy 用 Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy)] : この設定はヘアピンニングに影響を及ぼしません。必要に応じて設定します。

- e) [完了 (Finish)] をクリックします。

接続の概要がクリップボードにコピーされます。接続の概要は、テキストファイルやその他のドキュメントに貼り付けて、リモートピアの設定に役立てることができます。

ステップ 2 (サイト A、メインサイト)。外部インターフェイスからのすべての接続の宛先を外部 IP アドレスのポートに変換する NAT ルールを設定します (インターフェイス PAT)。

デバイスの初期設定を完了すると、`InsideOutsideNatRule` という名前の NAT ルールが作成されます。このルールは、外部インターフェイスを経由してデバイスで終了するすべてのインターフェイスからの IPv4 トラフィックにインターフェイス PAT を適用します。外部インターフェイスは、[任意 (Any)] 送信元インターフェイスに含まれているため、ルールはすでに存在している必要があります (ルールを編集または削除している場合を除く)。

次の手順で、必要なルールを作成する方法を説明します。

- a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] をクリックします。
- b) 次のいずれかを実行します。
 - `InsideOutsideNatRule` を編集するには、[アクション (Action)] 列にマウス オーバーして、編集アイコン (🔧) をクリックします。
 - 新しいルールを作成する場合は、[+] をクリックします。
- c) 次のプロパティを指定してルールを設定します。
 - [タイトル (Title)] : 新しいルールの場合は、スペースを含めずにわかりやすい名前を入力します。例、`OutsideInterfacePAT`。
 - [ルールの作成対象 (Create Rule For)] : [手動 NAT (Manual NAT)]。
 - [配置 (Placement)] : [自動 NAT ルールの前 (Before Auto NAT Rules)] (デフォルト)。

- [タイプ (Type)] : [ダイナミック (Dynamic)]。
- [元の packets (Original Packet)] : [送信元アドレス (Source Address)] の場合は、[任意 (Any)] または any-ipv4 を選択します。[送信元インターフェイス (Source Interface)] の場合は、デフォルトの [任意 (Any)] を必ず選択してください。[元の packets (Original Packet)] のその他すべてのオプションは、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。
- [Translated Packet (変換後の packets)] : [宛先インターフェイス (Destination Interface)] の場合は、[外部 (outside)] を選択します。[変換後のアドレス (Translated Address)] の場合は、[インターフェイス (Interface)] を選択します。[Translated Packet (変換後の packets)] のその他すべてのオプションは、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。

次の図は、発信元アドレスに [任意 (Any)] を選択している単純な例を示しています。

The screenshot shows the configuration for a NAT rule named 'OutsideInterfacePAT'. The rule type is 'Manual NAT'. The placement is 'Before Auto NAT Rules' and the type is 'Dynamic'. The configuration is divided into 'ORIGINAL PACKET' and 'TRANSLATED PACKET' sections. In the 'ORIGINAL PACKET' section, 'Source Interface' is set to 'Any' and 'Source Address' is set to 'Any'. In the 'TRANSLATED PACKET' section, 'Destination Interface' is set to 'outside' and 'Source Address' is set to 'Interface'. Other fields like 'Source Port', 'Destination Address', and 'Destination Port' are all set to 'Any'.

d) [OK] をクリックします。

ステップ 3 (サイト A、メインサイト)。サイト B の保護ネットワークへのアクセスを許可するアクセス制御ルールを設定します。

VPN 接続を作成するだけで、VPN 上のトラフィックが自動的に許可されるわけではありません。使用しているアクセス コントロール ポリシーがリモート ネットワークへのトラフィックを許可している必要があります。

次の手順では、リモートネットワーク用の固有ルールを追加する方法を示します。追加のルールが必要かどうかは、既存のルールによって異なります。

a) **[ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)]** をクリックします。

b) **[+]** をクリックして新しいルールを作成します。

c) 次のプロパティを指定してルールを設定します。

- **[順序 (Order)]** : 接続と一致し、それらの接続をブロックする可能性があるその他すべてのルールより前の位置をポリシー内で選択します。デフォルトでは、ルールはポリシーの最後に追加されます。後でルールを再配置する必要がある場合は、このオプションを編集するか、テーブルの適切なスロットにルールをドラッグアンドドロップすることができます。
- **[タイトル (Title)]** : スペースを含めずにわかりやすい名前を入力します。例、Site-B-Network。
- **[アクション (Action)]** : **[許可 (Allow)]**。このトラフィックのプロトコル違反または侵入を調べない場合は、**[信頼 (Trust)]** を選択できます。
- **[送信元または宛先 (Source/Destination)]** タブ : **[宛先 (Destination)] > [ネットワーク (Network)]** で、リモートネットワークのVPN接続プロファイルに使用しているのと同じオブジェクトを選択します。**[送信元と宛先 (Source and Destination)]** の他のすべてのオプションについては、デフォルトの**[任意 (Any)]** のままにします。

SOURCE			DESTINATION		
Zones	+	Networks	Zones	+	Networks
ANY		ANY	ANY		ANY
					Site-B-Network

- **[アプリケーション (Application)]**、**[URL]**、**[ユーザ (Users)]** タブ : これらのタブはデフォルトの設定のままにします。つまり、何も選択しません。
- **[侵入 (Intrusion)]**、**[ファイル (File)]** タブ : 必要に応じて、脅威やマルウェアを検査するための侵入ポリシーやファイルポリシーを選択できます。
- **[ロギング (Logging)]** タブ : 必要に応じて接続ロギングを有効にできます。

d) **[OK]** をクリックします。

ステップ 4 (サイト A、メイン サイト)。変更を保存します。

a) Web ページの右上にある **[変更の展開 (Deploy Changes)]** アイコンをクリックします。



b) **[今すぐ展開 (Deploy Now)]** ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または **[OK]** をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。ウィンドウを開いたままにすると、展開成功後に保留中の変更がないことが示されます。

ステップ 5 (サイト B、リモート サイト) リモート サイトのデバイスにログインし、サイト A へのサイト間 VPN 接続を設定します。

サイト A のデバイス設定から取得した接続の概要を使用して、サイト B 側の接続を設定します。

- a) **[デバイス (Device)]** をクリックし、次に **[サイト間 VPN (Site-to-Site VPN)]** グループの **[設定の表示 (View Configuration)]** をクリックします。
- b) **[+]** をクリックして新しい接続を追加します。
- c) 次のようにエンドポイントを定義し、**[次へ (Next)]** をクリックします。
 - **[接続プロファイル名 (Connection Profile Name)]** : わかりやすい接続の名前を付けます。例、Site-B-to-Site-A。
 - **[ローカル VPN アクセス インターフェイス (Local VPN Access Interface)]** : 外部インターフェイスを選択します。
 - **[ローカル ネットワーク (Local Network)]** : **[+]** をクリックして、ローカルの保護ネットワークを定義するネットワーク オブジェクトを選択します。この例では、192.168.2.0/24 です。**[新しいネットワークの作成 (Create New Network)]** をクリックして、今すぐオブジェクトを作成できます。
 - **[リモート IP アドレス (Remote IP Address)]** : メイン サイトの外部インターフェイスの IP アドレスを入力します。この例では、198.51.100.1 です。
 - **[リモート ネットワーク (Remote Network)]** : デフォルトの **[任意 (Any)]** のままにします。警告は無視します。この使用例には関係ありません。

次の図は、最初の手順を示しています。

Connection Profile Name

Site-B-to-Site-A

LOCAL SITE

Local VPN Access Interface

outside

Local Network



ANY

REMOTE SITE

☒ Static ☐ Dynamic

Remote IP Address

198.51.100.1

Remote Network



We don't recommend to use "ANY" for this option.



ANY

- d) プライバシー設定を定義して、**[次へ (Next)]** をクリックします。

- [IKE ポリシー (IKE Policy)] : IKE の設定はヘアピニングに影響を及ぼしません。サイト A の VPN 接続の終端と同じオプションまたは互換性のあるオプションを設定します。事前共有キーは正しく設定する必要があります。サイト A デバイスに設定されている (IKEv2 の) ローカル キーとリモート キーを切り替えます。IKEv1 の場合、キーは 1 つだけで、両方のピアで同一である必要があります。
- [NAT 免除 (NAT Exempt)] : 内部インターフェイスを選択します。

Additional Options

NAT Exempt

inside

- [Perfect Forward Secrecy 用 Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy)] : この設定はヘアピニングに影響を及ぼしません。サイト A の VPN 接続の終端で使用されている設定と照合します。

e) [完了 (Finish)] をクリックします。

ステップ 6 (サイト B、リモート サイト) 保護ネットワークのすべての NAT ルールを削除し、そのサイトからのトラフィックがすべて VPN トンネルを通過するようにします。

サイト A のデバイスではアドレス変換が行われるため、このデバイスで NAT を実行する必要はありません。ただし、個別の状況を確認してください。複数の内部ネットワークがあり、そのすべてがこの VPN 接続に参加しているわけではない場合は、それらのネットワークに必要な NAT ルールを削除しないでください。

a) [ポリシー (Policies)] > [NAT] をクリックします。

b) 次のいずれかを実行します。

- ルールを削除するには、[アクション (Action)] 列にマウス オーバーして、削除アイコン (🗑️) をクリックします。
- ルールを編集して、保護ネットワークに適用されないようにするには、[アクション (Action)] 列にマウス オーバーして、編集アイコン (✎) をクリックします。

ステップ 7 (サイト B、リモート サイト) 保護ネットワークからインターネットへのアクセスを許可するアクセス制御ルールを設定します。

次の例では、保護ネットワークから任意の宛先へのトラフィックが許可されます。これは、ユーザ固有の要件を満たすように調整できます。不要なトラフィックを除外するブロックルールをルールの前に配置することもできます。別のオプションとして、サイト A のデバイスにブロックルールを設定することもできます。

a) [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] をクリックします。

b) [+] をクリックして新しいルールを作成します。

c) 次のプロパティを指定してルールを設定します。

- [順序 (Order)] : 接続と一致し、それらの接続をブロックする可能性があるその他すべてのルールより前の位置をポリシー内で選択します。デフォルトでは、ルールはポリシーの最後に追加されます。後でルールを再配置する必要がある場合は、このオプションを編集するか、テーブルの適切なスロットにルールをドラッグアンドドロップすることができます。
- [タイトル (Title)] : スペースを含めずにわかりやすい名前を入力します。例、Protected-Network-to-any
- [アクション (Action)] : [許可 (Allow)]。このトラフィックのプロトコル違反または侵入を調べない場合は、[信頼 (Trust)] を選択できます。
- [送信元または宛先 (Source/Destination)] タブ : [送信元 (Source)] > [ネットワーク (Network)] で、ローカル ネットワークの VPN 接続プロファイルに使用しているのと同じオブジェクトを選択します。[送信元と宛先 (Source and Destination)] の他のすべてのオプションについては、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。

SOURCE			DESTINATION		
Zones	+	Networks	+	Ports	+
ANY		ProtectedNetwork	ANY	ANY	ANY

- [アプリケーション (Application)]、[URL]、[ユーザ (Users)] タブ : これらのタブはデフォルトの設定のままにします。つまり、何も選択しません。
- [侵入 (Intrusion)]、[ファイル (File)] タブ : 必要に応じて、脅威やマルウェアを検査するための侵入ポリシーやファイル ポリシーを選択できます。
- [ロギング (Logging)] タブ : 必要に応じて接続ロギングを有効にできます。

d) [OK] をクリックします。

ステップ 8 (サイト B、リモート サイト) 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックして、展開が完了するまで待ちます。

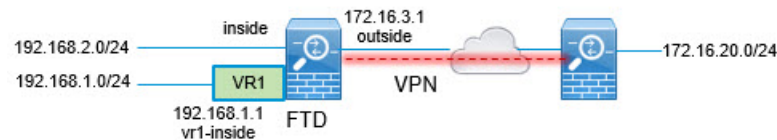
展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。ウィンドウを開いたままにすると、展開成功後に保留中の変更がないことが示されます。

サイト間 VPN における複数の仮想ルータのネットワークからのトラフィックを保護する方法

1 つのデバイスに複数の仮想ルータを設定する場合には、グローバル仮想ルータでサイト間 VPN を設定する必要があります。カスタム仮想ルータに割り当てられているインターフェイスにサイト間 VPN を設定することはできません。

仮想ルータのルーティングテーブルはそれぞれ異なるため、サイト間 VPN を介して、カスタム仮想ルータ内でホストされているネットワークとの接続を保護する必要がある場合には、スタティックルートを作成する必要があります。また、前述の付加的なネットワークが含まれるように、サイト間 VPN 接続を更新する必要もあります。

次の例について考えます。この例では、サイト間 VPN は 172.16.3.1 の外部インターフェイスで定義されます。この VPN には、内部インターフェイスがグローバル仮想ルータの一部でもあるため、追加の設定なしで内部ネットワーク 192.168.2.0/24 を含めることができます。ただし、VR1 仮想ルータの一部である 192.168.1.0/24 ネットワークにサイト間 VPN サービスを提供する必要がある場合には、双方向のスタティックルートを設定して、このネットワークをサイト間 VPN 設定に追加する必要があります。



始める前に

この例では、すでに 192.168.2.0/24 ローカルネットワークと 172.16.20.0/24 外部ネットワークの間にサイト間 VPN を設定し、仮想ルータを定義し、インターフェイスを設定して適切な仮想ルータに割り当てていることを前提としています。

手順

ステップ 1 グローバル仮想ルータから VR1 へのルートリークを設定します。

このルートにより、サイト間 VPN の外部（リモート）エンドによって保護されたエンドポイントは、VR1 仮想ルータの 192.168.1.0/24 ネットワークにアクセスできます。

- a) [デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] > [設定の表示 (View Configuration)] の順に選択します。
- b) グローバル仮想ルータの表示アイコン (👁️) をクリックします。
- c) グローバルルータの [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。
 - [名前 (Name)] : 任意の名前 (s2svpn-leak-vr1 など) を付けることができます。
 - [インターフェイス (Interface)] : **vr1-inside** を選択します。

- [プロトコル (Protocol)] : **IPv4** を選択します。
- [ネットワーク (Networks)] : 192.168.1.0/24 ネットワークを定義するオブジェクトを選択します。必要な場合には、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックしてオブジェクトを作成します。

Name

nw-192-168.1.0

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

192.168.1.0/24

e.g. 192.168.2.0/24 or 2001:DB8:0:C

- [ゲートウェイ (Gateway)] : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name

s2svpn-leak-vr1

Description

The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface

vr1-inside (GigabitEthernet0/2)

Belongs to different Router

VR1

Protocol

☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

+

nw-192-168.1.0

Gateway

Please select a gateway

Metric

1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type

Please select an SLA Monitor

d) [OK] をクリックします。

ステップ 2 VR1 からグローバル仮想ルータへのルートリークを設定します。

このルートにより、192.168.1.0/24 ネットワーク上のエンドポイントは、サイト間 VPN トンネルを通過する接続を開始できます。この例では、リモートエンドポイントが 172.16.20.0/24 ネットワークを保護しています。

- 仮想ルータのドロップダウンリストから [VR1] を選択して、VR1 設定に切り替えます。
- VR1 ルータの [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。

- [名前 (Name)] : 任意の名前 (**s2svpn-traffic** など) を付けることができます。
- [インターフェイス (Interface)] : **outside** を選択します。
- [プロトコル (Protocol)] : **IPv4** を選択します。

- [ネットワーク (Networks)] : リモートエンドポイントの保護されたネットワークのために作成したオブジェクトを選択します (**external-vpn-network** など)。
- [ゲートウェイ (Gateway)] : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name

s2svpn-traffic

Description

The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface

outside (GigabitEthernet0/0)

Belongs to different Router

Global

Protocol

☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

+

external-vpn-network

Gateway

Please select a gateway

Metric

1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type

Please select an SLA Monitor

- c) [OK] をクリックします。

ステップ 3 192.168.1.0/24 ネットワークをサイト間 VPN 接続プロファイルに追加します。

- [デバイス (Device)] > [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] > [設定の表示 (View Configuration)] の順に選択します。
- 接続プロファイルの編集アイコン (🔧) をクリックします。
- ウィザードの最初のページで、[ローカルネットワーク (Local Network)] 下の [+] をクリックして、192.168.1.0/24 ネットワークのオブジェクトを追加します。

Connection Profile Name

Site-B

LOCAL SITE

Local VPN Access Interface

outside (GigabitEthernet0/0) ▼

Local Network

+

nw-192-168.1.0

nw-192.168.2.0

REMOTE SITE

☒ Static ☐ Dynamic

Remote IP Address

10.10.10.1

Remote Network

+

external-vpn-network

d) ウィザードを完了します。



第 26 章

リモート アクセス VPN

リモートアクセス 仮想プライベート ネットワーク (VPN) では、各ユーザがインターネットに接続されたコンピュータまたはその他のサポート対象の iOS または Android デバイスを使用して、離れた場所からネットワークに接続することができます。これにより、モバイル ワーカーが各自のホーム ネットワークや公共の Wi-Fi ネットワークなどから接続できるようになります。

ここでは、ネットワークのリモート アクセス VPN を設定する方法について説明します。

- ・ [リモート アクセス VPN の概要 \(843 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN のライセンス要件 \(851 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN に関する注意事項と制限事項 \(851 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN の設定 \(852 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN 設定の管理 \(860 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN のモニタリング \(878 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN のトラブルシューティング \(879 ページ\)](#)
- ・ [リモート アクセス VPN の例 \(882 ページ\)](#)

リモート アクセス VPN の概要

Device Manager では、セキュアクライアントソフトウェアを使用して SSL 経由でリモート アクセス VPN を設定できます。

セキュアクライアントが Threat Defense デバイスと SSL VPN 接続をネゴシエートする際、Transport Layer Security (TLS) または Datagram Transport Layer Security (DTLS) を使用して接続します。DTLS により、一部の SSL 接続で発生する遅延および帯域幅の問題が回避され、パケット遅延の影響を受けやすいリアルタイム アプリケーションのパフォーマンスが向上します。クライアントおよび Threat Defense デバイスは、使用する TLS/DTLS バージョンをネゴシエートします。DTLS はクライアントがサポートする場合に使用されます。

デバイス モデル別の同時 VPN セッションの最大数

デバイス モデルに基づいて、1 台のデバイスで許可される同時リモートアクセス VPN セッション数に上限が設けられます。この限度は、システムパフォーマンスが許容できないレベルにまで低下することがないように設定されています。キャパシティプランニングの際は次の限度を考慮してください。

デバイス モデル	最大同時リモート アクセス VPN セッション数
Firepower 1010	75
Firepower 1120	150
Firepower 1140	400
Cisco Secure Firewall 1210CE/1210CP	200
Cisco Secure Firewall 1220CX	300
Cisco Secure Firewall 1230	500
Cisco Secure Firewall 1240	1000
Cisco Secure Firewall 1250	1500
Secure Firewall 3110	3000
Secure Firewall 3120	6000
Secure Firewall 3130	15,000
Secure Firewall 3140	20,000
Firepower 4100 シリーズ、すべてのモデル	10,000
Firepower 9300 appliance、すべてのモデル	20,000
Threat Defense Virtual: FTDv5	50
Threat Defense Virtual : FTDv10、FTDv20、FTDv30	250
Threat Defense Virtual: FTDv50	750
Threat Defense Virtual : FTDv100	10,000
ISA 3000	25

セキュアクライアント ソフトウェアのダウンロード

リモートアクセス VPN を設定するには、セキュアクライアント ソフトウェアをワークステーションにダウンロードする必要があります。VPN を定義するときに、これらのパッケージをアップロードする必要があります。

最新の機能、バグ修正、セキュリティ パッチを確保するには、最新の セキュアクライアント バージョンをダウンロードする必要があります。脅威に対する防御 デバイスのパッケージは定期的に更新してください。



- (注) Windows、Mac、Linux の各オペレーティングシステムごとに1つのセキュアクライアントパッケージをアップロードできます。1つの OS タイプに対して複数のバージョンをアップロードすることはできません。

セキュアクライアント ソフトウェアパッケージは software.cisco.com から取得します。クライアントの「フル インストール パッケージ」バージョンをダウンロードしてください。

セキュアクライアント ソフトウェアのインストール方法

VPN 接続を完了するには、ユーザーはセキュアクライアント ソフトウェアをインストールする必要があります。既存のソフトウェア配布方式を使用して、ソフトウェアを直接インストールできます。または、Threat Defense デバイスから セキュアクライアントを直接インストールすることもできます。

ソフトウェアをインストールするには、ユーザにワークステーションでの管理者権限が必要です。

セキュアクライアントがすでにインストールされている場合、新しいセキュアクライアントバージョンがアップロードされると、ユーザーが次に VPN 接続を行った際、新しいバージョンがセキュアクライアントによって検出され、更新されたクライアント ソフトウェアのダウンロードとインストールを指示するメッセージが自動的に表示されます。この自動化により、ソフトウェアの配布が容易になります。

ソフトウェアの最初のインストールをThreat Defense デバイスからユーザに行ってもらう場合、以下の手順を実行するようにユーザに指示します。



- (注) Android および iOS のユーザーは、適切な App Store から セキュアクライアント をダウンロードする必要があります。

手順

ステップ 1 Webブラウザを使用して、**https://ravpn-address**を開きます。**ravpn-address**は、VPN接続を許可する外部インターフェイスのIPアドレスまたはホスト名です。

このインターフェイスは、リモート アクセス VPN を設定する際に指定します。ログインを示すメッセージがユーザに示されます。

リモートアクセス VPN 接続用のポートを変更した場合、ユーザはURL にカスタムポートを含める必要があります。たとえば、ポートを 4443 に変更した場合は、**https://ravpn.example.com:4443** のような URL にします。

ステップ 2 サイトにログインします。

ユーザは、リモート アクセス VPN 用に設定されたディレクトリ サーバを使用して認証されます。続行するには、ログインが正常に行われる必要があります。

ログインが成功すると、システムは、必要となるセキュアクライアントのバージョンがインストールされているかを確認します。セキュアクライアントがユーザのコンピュータにないか、下位のバージョンである場合、システムは自動的に セキュアクライアント ソフトウェアのインストールを開始します。

インストールが終了すると、セキュアクライアント がリモートアクセス VPN 接続を完了します。

RADIUS およびグループ ポリシーを使用したユーザの権限および属性の制御

外部 RADIUS サーバまたは 脅威に対する防御 デバイスで定義されているグループ ポリシーから、RA VPN 接続にユーザの認可属性（ユーザの権利または権限とも呼ばれる）を適用できます。脅威に対する防御 デバイスがグループポリシーに設定されている属性と競合する外部 AAA サーバから属性を受信した場合は、AAA サーバからの属性が常に優先されます。

脅威に対する防御 デバイスは、次の順序で属性を適用します。

1. AAAサーバ上で定義されたユーザ属性: ユーザ認証や認可が成功すると、サーバからこの属性が返されます。
2. 脅威に対する防御 デバイス上で設定されているグループ ポリシー : RADIUS サーバからユーザの RADIUS CLASS 属性 IETF-Class-25 (OU=group-policy) の値が返された場合は、脅威に対する防御 デバイスはそのユーザを同じ名前のグループ ポリシーに入れて、そのグループ ポリシーの属性のうち、サーバから返されないものを適用します。
3. 接続プロファイルによって割り当てられたグループポリシー : 接続プロファイルには、接続の事前設定が含まれているほか、認証前にユーザに適用されるデフォルトのグループポリシーが含まれています。脅威に対する防御 デバイスに接続するすべてのユーザは、最

初にこのグループに所属します。このグループでは、AAA サーバから返されるユーザ属性、またはユーザに割り当てられたグループポリシーにはない属性が定義されています。

Threat Defense デバイスは、ベンダーID 3076のRADIUS属性をサポートします。使用するRADIUS サーバにこれらの属性が定義されていない場合は、手動で定義する必要があります。属性を定義するには、属性名または番号、タイプ、値、ベンダー コード (3076) を使用します。

次のトピックでは、サポートされている属性値について、値がRADIUS サーバで定義されるかどうか、または RADIUS サーバにシステムが送信する値であるかどうかに基づいて説明します。

RADIUS サーバに送信された属性

RADIUS属性146および150は、認証および許可の要求のために脅威に対する防御デバイスからRADIUSサーバに送信されます。次の 4 つの属性はすべて、アカウント開始、中間アップデート、および終了の要求の場合に 脅威に対する防御 デバイスから RADIUS サーバに送信されます。

表 14: Threat Defense から RADIUS に送信される属性

属性	属性番号	シンタックス、タイプ	シングルまたはマルチ値	説明または値
クライアント タイプ (Client Type)	150	整数	シングル	VPN に接続しているクライアントのタイプは次のとおりです。 2 = セキュアクライアント SSL VPN
セッション タイプ	151	整数	シングル	接続のタイプ : 1 = セキュアクライアント SSL VPN
Tunnel Group Name	146	文字列	シングル	脅威に対する防御 デバイスで定義されているセッションの確立に使用された接続プロファイルの名前。名前には 1 ～ 253 文字を使用できます。

RADIUS サーバから受信した属性

次のユーザ認可属性が 脅威に対する防御 デバイスから RADIUS サーバに送信されます。

表 15:送信される RADIUS 属性 Threat Defense

属性	属性番号	シンタックス、タイプ	シングルまたはマルチ値	説明または値
Access-List-Inbound	86	文字列	シングル	アクセスリスト属性の両方が、脅威に対する防御デバイスで設定されている ACL の名前を使用します。スマート CLI 拡張アクセス リストのオブジェクトタイプを使用して、これらの ACL を作成します ([デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [スマート CLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Object)] を選択します)。 これらのACLは、着信(脅威に対する防御 デバイスに入るトラフィック)または発信(脅威に対する防御 デバイスから出るトラフィック)方向のトラフィックフローを制御します。
Access-List-Outbound	87	文字列	シングル	
Address-Pools	217	文字列	シングル	サブネットを識別する脅威に対する防御デバイスで定義されたネットワークオブジェクトの名前。RA VPNに接続するクライアントのアドレスプールとして使用されます。[オブジェクト]ページでネットワークオブジェクトを定義します。
Banner1	15	文字列	シングル	ユーザがログインしたときに表示されるバナー。
Banner2	36	文字列	シングル	ユーザがログインしたときに表示されるバナーの 2 番目の部分。Banner2 が Banner1 に追加されます。
Group-Policy	25	文字列	シングル	接続に使用されるグループポリシー。RA VPN[グループポリシー]ページでグループポリシーを作成する必要があります。次のいずれかの形式を使用できます。 - グループポリシー名 - OU=グループポリシー名 - OU=グループポリシー名。
Simultaneous-Logins	2	整数	シングル	ユーザが確立を許可されている個別の同時接続数。0 ～ 2147483647。
VLAN	140	整数	シングル	ユーザの接続を制限する VLAN。0 ～ 4094。脅威に対する防御 デバイスのサブインターフェイスでも、この VLAN を設定する必要があります。

二要素認証

RA VPNの二要素認証を設定できます。二要素認証を使用する場合、ユーザはユーザ名とステックパスワードに加えて、RSA トークンや Duo パスコードなどの追加項目を指定する必要があります。二要素認証が2番目の認証ソースを使用することと異なるのは、1つの認証ソースで2つの要素が設定され、RSA/Duo サーバとの関係がプライマリ認証ソースに関連付けられている点です。Duo LDAPは例外で、Duo LDAPサーバをセカンダリ認証ソースとして設定します。

システムは、2番目の要素のためにモバイルにプッシュされる RSA トークンと Duo パスコードを、二要素認証プロセスの最初の要素としての RADIUS サーバまたは AD サーバと組み合わせることでテストされています。

RSA 二要素認証

次のいずれかのアプローチを使用して RSA を設定できます。RSA 側の設定の詳細については、RSA のマニュアルを参照してください。

- **Device Manager** で RADIUS サーバとして RSA サーバを直接定義し、RA VPN のプライマリ認証ソースとしてサーバを使用します。

このアプローチを使用する場合、ユーザは RSA RADIUS サーバで設定されているユーザ名を使用して認証する必要があります。また、パスワードとトークンをカンマで区切り (*password*、*token*)、パスワードと1回限りの一時的な RSA トークンを連結します。

この設定では、認証サービスを提供するために (Cisco ISE で供給されるような) 個別の RADIUS サーバを使用することが一般的です。2番目の RADIUS サーバを認証サーバとして設定し、必要に応じてアカウントिंगサーバを設定します。

- RSA サーバを、直接統合をサポートする RADIUS または AD サーバと統合し、プライマリ認証ソースとして非 RSA RADIUS または AD サーバを使用するように RA VPN を設定します。この場合、RADIUS/AD サーバは RSA-SDI を使用して、クライアントと RSA サーバ間の二要素認証を委任およびオーケストレーションします。

このアプローチを使用する場合、ユーザは非 RSA RADIUS または AD サーバで設定されているユーザ名を使用して認証する必要があります。また、パスワードとトークンをカンマで区切り (*password*、*token*)、パスワードと1回限りの一時的な RSA トークンを連結します。

この設定では、RSA 以外の RADIUS サーバを認証サーバとして設定し、必要に応じてアカウントिंगサーバとしても設定します。

RADIUS を使用した Duo 二要素認証

Duo RADIUS サーバはプライマリ認証ソースとして設定できます。このアプローチでは、Duo RADIUS 認証プロキシを使用します。

Duo の設定手順の詳細については、<https://duo.com/docs/cisco-firepower> を参照してください。

次に、別の RADIUS サーバまたは AD サーバを最初の認証ファクタとして使用し、Duo クラウドサービスを 2 番目の認証ファクタとして使用するため、プロキシサーバ向けの認証要求を転送するように Duo を設定します。

このアプローチを使用する場合、ユーザは、Duo 認証プロキシおよび関連する RADIUS/AD サーバの両方で設定されているユーザ名と、RADIUS/AD サーバで設定されたユーザ名のパスワード（その後に次のいずれかの Duo コードが続く）を使用して認証する必要があります。

- Duo-passcode。my-password,12345 など
- push。my-password,push など。push は、ユーザによるインストールと登録が完了している Duo モバイルアプリに認証をプッシュ送信するように Duo に指示する場合に使用します。
- sms。my-password,sms など。sms を使用して、新しいパスワードのバッチを含む SMS メッセージをユーザのモバイルデバイスに送信するように Duo に指示します。sms を使用すると、ユーザの認証試行は失敗します。その後、ユーザは再認証し、2 番目の認証ファクタとして新しいパスワードを入力する必要があります。
- phone。my-password,phone など。phone は、電話コールバック認証を実行するように Duo に指示する場合に使用します。

ユーザ名/パスワードが認証されると、Duo 認証プロキシは Duo クラウドサービスに連絡し、Duo クラウドサービスは、その要求が設定されている有効なプロキシデバイスからのものであることを検証してから、指示に従ってユーザのモバイルデバイスに一時的なパスワードをプッシュ送信します。ユーザがこのパスワードを受け入れると、セッションは Duo で認証済みとマークされ、RA VPN が確立されます。

LDAP を使用した Duo 二要素認証

プライマリソースとしての Microsoft Active Directory (AD) または RADIUS サーバとともに、セカンダリ認証ソースとして Duo LDAP サーバを使用できます。Duo LDAP を使用すると、セカンダリ認証により、プライマリ認証が Duo パスコード、プッシュ通知、または電話コールで検証されます。

脅威に対する防御 デバイスは、ポート TCP/636 経由で LDAPS を使用して、Duo LDAP と通信します。

Duo LDAP サーバは認証サービスのみを提供し、アイデンティティサービスを提供しないことに注意してください。そのため、プライマリ認証ソースとして Duo LDAP を使用する場合、どのダッシュボードにも RA VPN 接続に関連付けられているユーザ名は表示されず、これらのユーザに対してアクセス コントロール ルールを作成することはできません。

このアプローチを使用する場合は、RADIUS/AD サーバと Duo LDAP サーバの両方で設定されているユーザ名を使用して認証する必要があります。セキュアクライアントによってログインするように求められた場合は、プライマリ [パスワード (Password)] フィールドに RADIUS/AD のパスワードを入力します。[セカンダリパスワード (Secondary Password)] では、次のいずれかを使用して Duo で認証します。詳細については、<https://guide.duo.com/anyconnect> を参照してください。

- [Duo パスコード (Duo passcode)] : Duo Mobile で生成され、SMS を介して送信され、ハードウェア トークンによって生成されるパスコード、または管理者によって提供されるパスコードを使用して、認証します。1234567 などです。
- [プッシュ (push)] : Duo Mobile アプリをインストールしてアクティブにしている場合は、ログイン要求を電話機にプッシュします。要求を確認し、[承認 (Approve)] をタップしてログインします。
- [電話 (phone)] : 電話機のコールバックを使用して認証します。
- [sms] : Duo パスコードをテキストメッセージで要求します。ログイン試行は失敗します。新しいパスコードを使用して再度ログインします。

Duo LDAP の詳細な説明と例については、[Duo LDAP を使用した二要素認証の設定方法 \(892 ページ\)](#) を参照してください。

リモート アクセス VPN のライセンス要件

リモート アクセス VPN を設定可能にするには、基本デバイス ライセンスがエクスポート要件を満たす必要があります。デバイスの登録は、輸出規制機能が有効化された Smart Software Manager アカウントで行う必要があります。また、評価ライセンスを使用して機能を設定することはできません。

さらに、次のいずれかのリモートアクセス VPN ライセンスを購入し、有効にする必要があります : Secure Client Advantage、Secure Client Premier、Secure Client VPN のみ。これらのライセンスは、ASA ソフトウェアベースのヘッドエンドで使用される場合、さまざまな機能セットを許可するように設計されていますが、Threat Defense デバイスでは同様に扱われます。

ライセンスを有効にするには、[デバイス (Device)] > [スマートライセンス (Smart License)] > [設定の表示 (View Configuration)] を選択し、[RA VPN ライセンス (RA VPN License)] グループで適切なライセンスを選択します。Smart Software Manager Account で使用可能なライセンスが必要です。ライセンスの有効化の詳細については、[オプションライセンスのイネーブル化とディセーブル化 \(111 ページ\)](#) を参照してください。

詳細については、『Cisco AnyConnect Ordering Guide』 (<http://www.cisco.com/c/dam/en/us/products/collateral/security/anyconnect-og.pdf>) を参照してください。<http://www.cisco.com/c/en/us/products/security/anyconnect-secure-mobility-client/datasheet-listing.html> には、使用できるその他のデータシートもあります。

リモート アクセス VPN に関する注意事項と制限事項

RA VPN を設定する際は、次の注意事項と制限事項に注意してください。

- 同じ TCP ポートの同じインターフェイスで、Device Manager アクセス (管理アクセスリストの HTTPS アクセス) とリモートアクセス SSL VPN の両方を設定することはできません。たとえば、外部インターフェイスにリモートアクセス SSL VPN を設定する場合、ポー

ト 443 で HTTPS 接続用の外部インターフェイスも開くことはできません。同じインターフェイスで両方の機能を設定する場合は、競合を回避するために、必ず、これらのサービスの少なくとも 1 つの HTTPS ポートを変更してください。

- RA VPN 外部インターフェイスはグローバル設定です。異なるインターフェイスに個別の接続プロファイルを設定することはできません。
- NAT ルールの送信元アドレスとリモート アクセス VPN アドレス プールの重複アドレスは使用できません。
- RADIUS トークンと RSA トークンを使用して二要素認証を設定すると、ほとんどの場合、デフォルトの 12 秒の認証タイムアウトでは短すぎて正常な認証が行われません。[クライアントプロファイルの設定およびアップロード \(854 ページ\)](#) で説明しているように、カスタムセキュアクライアントプロファイルを作成し、それを RA VPN 接続プロファイルに適用することにより、認証タイムアウト値を増やすことができます。認証タイムアウトを 60 秒以上にすることをお勧めします。これにより、ユーザーの認証および RSA トークンの貼り付けと、トークンのラウンドトリップ検証のための十分な時間が得られます。
- RA VPN ヘッドエンドなどに対する **curl** などのコマンドの実行は直接サポートされていないため、望ましい結果が得られない可能性があります。たとえば、ヘッドエンドは HTTP HEAD リクエストに応答しません。
- RA VPN の場合、他の属性が異なっても、同じアイデンティティプロバイダー (IDP) エンティティ ID URL を持つ複数の SAML サーバーオブジェクトを使用することはできません。エンティティ ID は、RA VPN 接続プロファイルで使用されるすべての SAML サーバー オブジェクトで一意である必要があります。

リモート アクセス VPN の設定

クライアントのリモート アクセス VPN を有効化するには、いくつかの項目を設定する必要があります。次の手順を実行します。

手順

ステップ 1 ライセンスを設定します。

次の 2 つのライセンスを有効にする必要があります。

- デバイスの登録は、輸出規制機能が有効化された Smart Software Manager アカウントで行う必要があります。リモート アクセス VPN を設定するには、その前に基本ライセンスが輸出規制要件を満たす必要があります。また、この機能の設定に評価ライセンスを使用することはできません。デバイスを登録する手順については、[デバイスの登録 \(109 ページ\)](#) を参照してください。

- リモート アクセス VPN ライセンス。詳細については、『[リモート アクセス VPN のライセンス要件 \(851 ページ\)](#)』を参照してください。ライセンスを有効にするには、[オプション ライセンスのイネーブル化とディセーブル化 \(111 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 2 証明書を設定します。

証明書は、クライアントとデバイスの間の SSL 接続を認証するために必要です。事前定義された VPN 用の DefaultInternalCertificate を使用することも、独自に作成することもできます。

認証に使われるディレクトリ レalm に暗号化接続を使用する場合は、信頼される CA 証明書をアップロードする必要があります。

証明書とそれらのアップロード方法の詳細については、[証明書の設定 \(201 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 3 (オプション) TLS/SSLを設定します。

デフォルトでは、システムは、システムでサポートされている任意の TLS バージョンと暗号化方式を使用して、リモート ユーザがリモート アクセス VPN に接続できるようにします。ただし、よりセキュアな接続を実現するため、許可される TLS/DTLS バージョン、暗号、および Diffie-Hellman グループを制限することもできます。[TLS/SSL 暗号設定の設定 \(981 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 (オプション) クライアント プロファイルの設定およびアップロード (854 ページ) .

ステップ 5 リモート ユーザを認証する目的で使用されるアイデンティティ ソースを設定します。

リモート アクセス VPN へのログインを許可されるユーザアカウントに次のソースを使用できます。代わりに、クライアント証明書を単独で、またはアイデンティティソースと連携させて、認証に使用することができます。

- **Active Directory** アイデンティティ レalm : プライマリ認証ソースとして。ユーザアカウントは Active Directory (AD) サーバで定義されます。「[AD アイデンティティ レalm の設定 \(213 ページ\)](#)」を参照してください。
- **RADIUS** サーバグループ : プライマリまたはセカンダリ認証ソースとして。認可およびアカウントリングにも。「[RADIUS サーバグループの設定 \(221 ページ\)](#)」を参照してください。
- **LocalIdentitySource** (ローカルユーザデータベース) : プライマリ ソースまたはフォールバック ソースとして。デバイスで直接ユーザを定義できます。外部サーバを使用することはできません。フォールバック ソースとしてローカルデータベースを使用する場合は、必ず外部サーバで定義したものと同一ユーザ名/パスワードを定義します。[ローカル ユーザの設定 \(232 ページ\)](#) を参照してください。
- **Duo LDAP** サーバ: プライマリまたはセカンダリ認証ソースとして使用できます。Duo LDAP サーバをプライマリソースとして使用することはできますが、通常の設定ではありません。通常は、プライマリ Active Directory または RADIUS サーバとともに二要素認証を提供するためのセカンダリソースとして使用します。詳細は、[Duo LDAP を使用した二要素認証の設定方法 \(892 ページ\)](#) を参照してください。

- **SAML** : プライマリ認証でSAMLサーバーを使用します。SAMLを使用する場合は、フォールバックまたはセカンダリ認証ソースを設定できません。詳細については、「[SAML サーバの設定 \(228 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 6 (オプション) 。 [RA VPN のグループ ポリシーの設定 \(871 ページ\)](#)

グループポリシーは、ユーザに関連する属性を定義します。グループメンバーシップに基づいて、リソースへの差分アクセスを提供するためにグループポリシーを設定することができます。または、すべての接続でデフォルトポリシーを使用することもできます。

ステップ 7 [RA VPN 接続プロファイルの設定 \(861 ページ\)](#) 。

ステップ 8 [リモート アクセス VPN 経由のトラフィックの許可 \(858 ページ\)](#) 。

ステップ 9 [リモート アクセス VPN 設定の確認 \(858 ページ\)](#) を確認してください。

接続の完了に関する問題が発生した場合は、[リモート アクセス VPN のトラブルシューティング \(879 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 10 (オプション) アイデンティティ ポリシーを有効にして、パッシブ認証のルールを設定します。

パッシブ ユーザ認証を有効にすると、リモート アクセス VPN 経由でログインするユーザがダッシュボードに表示され、ポリシー内のトラフィック一致基準としても使用できます。パッシブ認証を有効にしない場合、RA VPN ユーザはアクティブ認証ポリシーに一致する場合のみ使用できます。ダッシュボードのユーザ情報またはトラフィック照合用のユーザ情報を取得するには、アイデンティティ ポリシーを有効にする必要があります。

クライアント プロファイルの設定およびアップロード

セキュアクライアントプロファイルは、セキュアクライアントソフトウェアとともにクライアントにダウンロードされます。これらのプロファイルでは、多くのクライアント関連オプション (スタートアップ時の自動接続、自動再接続など) や、エンドユーザーがセキュアクライアントの設定および詳細設定からオプションを変更することを許可するかどうかを定義します。

リモートアクセスVPN接続を設定する際に外部インターフェイスの完全修飾ホスト名 (FQDN) を設定すると、システムが自動的にクライアントプロファイルを作成します。このプロファイルでは、デフォルトの設定が有効にされます。クライアントプロファイルを作成してアップロードする必要があるのは、デフォルト以外の動作が必要な場合のみです。クライアントプロファイルはオプションであることに注意してください。クライアントプロファイルをアップロードしなければ、セキュアクライアントはプロファイルで制御されるすべてのオプションにデフォルトの設定を使用します。



- (注) 初回の接続時に、ユーザーが制御できる設定のすべてをセキュアクライアントに表示させるには、VPN プロファイルのサーバーリストに、Threat Defense デバイスの外部インターフェイスを含める必要があります。アドレスまたは FQDN をホスト エントリとしてプロファイルに追加していない場合、セッションにフィルタは適用されません。たとえば、証明書照合を作成し、証明書が基準と適切に一致した場合でも、プロファイルにデバイスをホスト エントリとして追加しなければ、この証明書照合は無視されます。

セキュアクライアントのプロファイルに加えて、必要に応じてセキュアクライアントで利用できるさまざまなモジュール（AMP イネーブラなど）のプロファイルを作成できます。これらのモジュールのプロファイルをアップロードできますが、Device Manager は、セキュアクライアントプロファイルの作成のみをサポートしています。ただし、Device Manager を介して任意の種類のプロファイルをアップロードしてから、Threat Defense API を使用して（API Explorer から）、オブジェクトのプロファイルタイプを変更できます。[プロファイル (Profiles)] ページには任意のタイプのすべてのプロファイルが表示されますが、リストにはプロファイルタイプは示されません。次の手順では、これを実行する方法について説明します。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページからオブジェクトを直接作成および編集する方法を説明します。オブジェクトリストに表示される **[新規 Secure Client プロファイルの作成 (Create New Secure Client Profile)]** リンクをクリックして、セキュアクライアントプロファイル オブジェクトをプロファイルプロパティの編集集中に作成することもできます。

始める前に

クライアントプロファイルをアップロードするには、その前に、以下の作業を行う必要があります。

- セキュアクライアントの「Profile Editor : Windows/Standalone installer インストーラ (MSI)」をダウンロードしてインストールします。このインストールファイルは Windows 専用で、ファイル名は anyconnect-profileeditor-win-<version>-k9.msi です。ここで、<version> はセキュアクライアントのバージョンです（ファイル名は変更される場合があります）。たとえば、anyconnect-profileeditor-win-4.3.04027-k9.msi のような名前になります。プロファイル エディタをインストールする前に、Java JRE（1.6 以降）もインストールする必要があります。software.cisco.com から セキュアクライアント プロファイル エディタ を入手します。このパッケージには、VPN クライアントのプロファイル エディタだけでなく、すべてのプロファイル エディタが含まれていることに注意してください。
- プロファイル エディタを使用して、必要なプロファイルを作成します。プロファイルには、外部インターフェイスのホスト名または IP アドレスを指定する必要があります。詳細については、エディタのオンライン ヘルプを参照してください。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択してから、目次で [Secure Client プロファイル (Secure Client Profiles)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。
- オブジェクトに関連付けられているプロファイルをダウンロードする場合は、対象のオブジェクトの [ダウンロード (download)] アイコン (📄) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 名前を入力し、オプションでオブジェクトの説明を入力します。

モジュールプロファイルをアップロードする場合は、セキュアクライアントプロファイルと区別しやすいように、モジュールタイプを示すオブジェクト名を使用してください。

ステップ 4 [アップロード (Upload)] をクリックし、プロファイルエディタを使って作成したファイルを選択します。

ステップ 5 [開く (Open)] をクリックしてプロファイルをアップロードします。

ステップ 6 [OK] をクリックしてオブジェクトを追加します。

ステップ 7 作成したプロファイルが実際にセキュアクライアントプロファイルとは異なるタイプである場合は、次の手順を実行してオブジェクトのプロファイルタイプを変更します。

- [詳細オプション (More options)] ボタン (⋮) をクリックし、[API エクスプローラ (API Explorer)] を選択します。

ブラウザの設定に応じて、API エクスプローラが別のタブまたはウィンドウで開きます。

- AnyConnectClientProfile リソースを開きます。
- GET /object/anyconnectclientprofiles メソッドを選択し、[試行する (Try It Out!)] ボタンをクリックします。

各プロファイルオブジェクトは次のように表されます。強調表示されている属性は、変更する必要がある属性です。

```
{
  "version": "oiwtsaoxbmip7",
  "name": "amp-install-profile",
  "md5Checksum": "12f18388580d3bb2eb0a9dcd8f9a7150",
  "description": null,
  "diskFileName": "bad3506d-9440-11ea-97d2-4d3296494e7b.xml",
  "anyConnectModuleType": "ANY_CONNECT_CLIENT_PROFILE",
  "id": "bba6cd0e-9440-11ea-97d2-7b74302649a4",
  "type": "anyconnectclientprofile",
```

```

"links": {
  "self": "https://10.89.5.38/api/fdm/v6/object/
anyconnectclientprofiles/bba6cd0e-9440-11ea-97d2-7b74302649a4"
}

```

- d) 出力でオブジェクトを見つけて、コードを選択し、Ctrl キーを押しながらクリックしてクリップボードにコピーします。
- e) PUT /object/anyconnectclientprofiles/{objId} メソッドを選択し、その内容を [body] フィールドに貼り付けます。
- f) [id] 値をコピーし、本文の上にある [objId] 編集ボックスに貼り付けます。オブジェクト ID は「自己」URL の末尾でも確認できます。

Parameter	Value
objId	bba6cd0e-9440-11ea-97d2-7b74302649a4
body	<pre>{ "version": "oiwtsaoxbmip7", "name": "amp-install-profile", "md5Checksum": "12f18388580d3bb2eb0a9dcd8f9a7150", "description": null, "diskFileName": "bad3506d-9440-11ea-</pre>

Parameter content type: application/json ▼

- g) オブジェクトの本文にある [anyConnectModuleType] フィールドを見つけて、その値をプロファイルタイプの値に置き換えます。DART、FEEDBACK、WEB_SECURITY、ANY_CONNECT_CLIENT_PROFILE、AMP_ENABLER、NETWORK_ACCESS_MANAGER、NETWORK_VISIBILITY、START_BEFORE_LOGIN、ISE_POSTURE、UMBRELLA から選択してください。
- h) 再び [body] で、[links] 属性を削除 ([type] 値の後のカンマを含め) します。
オブジェクト本文は、次のようになります。

```

{
  "version": "oiwtsaoxbmip7",
  "name": "amp-install-profile",
  "md5Checksum": "12f18388580d3bb2eb0a9dcd8f9a7150",
  "description": null,
  "diskFileName": "bad3506d-9440-11ea-97d2-4d3296494e7b.xml",
  "anyConnectModuleType": "AMP_ENABLER",
  "id": "bba6cd0e-9440-11ea-97d2-7b74302649a4",
  "type": "anyconnectclientprofile"
}

```

- i) [試してみる (Try It Out!)] をクリックします。応答を調べて、オブジェクトが正しく変更されたことを確認します。応答コードが 200 であり、応答本文で変更がエコーされている必要があります。GET メソッドを使用することで、結果のさらなる確認を行うことができます。

リモート アクセス VPN 経由のトラフィックの許可

リモートアクセス VPN トンネル内のトラフィックフローを有効にするには、次の方法のいずれかを使用します。

- **sysopt connection permit-vpn** コマンドを設定します。これにより、VPN 接続と一致するトラフィックがアクセス コントロール ポリシーから免除されます。このコマンドのデフォルトは **no sysopt connection permit-vpn** で、VPN トラフィックをアクセス コントロール ポリシーでも許可する必要があることを意味します。

これは、外部ユーザがリモート アクセス VPN アドレス プール内の IP アドレスになりますことができないため、VPN でトラフィックを許可するよりも安全な方法です。欠点は VPN トラフィックが検査されないことです。つまり、侵入とファイルの保護、URL フィルタリング、その他の高度な機能がトラフィックに適用されません。つまり、このトラフィックに対する接続イベントは生成されず、VPN 接続は統計ダッシュボードには反映されません。

このコマンドを設定するには、RA VPN 接続プロファイルで [復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (Bypass Access Control policy for decrypted traffic)] オプションを選択します。

- リモート アクセス VPN アドレス プールからの接続を許可するアクセス制御ルールを作成します。この方法では、VPN トラフィックが検査され、高度なサービスを接続に適用できることが保証されます。欠点は、外部ユーザが IP アドレスになりすまして内部ネットワークにアクセスする可能性があることです。

リモート アクセス VPN 設定の確認

リモート アクセス VPN を設定し、設定をデバイスに展開した後で、リモート接続を行えることを確認します。

問題が発生した場合は、トラブルシューティングトピックに目を通し、問題の分離と修正に役立てます。[リモート アクセス VPN のトラブルシューティング \(879 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 外部ネットワークから、セキュアクライアントを使用して VPN 接続を確立します。

Web ブラウザを使用して、**https://ravpn-address**を開きます。**ravpn-address**は、VPN 接続を許可する外部インターフェイスの IP アドレスまたはホスト名です。必要に応じて、クライアントソフトウェアをインストールし、接続を完了します。[セキュアクライアントソフトウェアのインストール方法 \(845 ページ\)](#) を参照してください。

リモートアクセス VPN 接続用のポートを変更した場合は、URL にカスタムポートを含める必要があります。たとえば、ポートを 4443 に変更した場合は、**https://ravpn.example.com:4443** のような URL にします。

グループ URL を設定した場合は、それらの URL も試みてください。

ステップ 2 デバイス CLI にログインします ([コマンドラインインターフェイス \(CLI\) へのログイン \(9 ページ\)](#) を参照)。または、CLI コンソールを開きます。

ステップ 3 `show vpn-sessiondb` コマンドを使用して、現在の VPN セッションに関する概要情報を表示します。

統計情報では、アクティブなセキュアクライアントセッション、および累積セッション数、ピーク同時セッション数、非アクティブセッション数の情報が示されます。次は、コマンドからの出力例です。

```
> show vpn-sessiondb
```

```
-----
```

```
VPN Session Summary
```

```
-----
```

	Active	Cumulative	Peak Concur	Inactive
AnyConnect Client	: 1	: 49	: 3	: 0
SSL/TLS/DTLS	: 1	: 49	: 3	: 0
Clientless VPN	: 0	: 1	: 1	
Browser	: 0	: 1	: 1	

Total Active and Inactive	: 1		Total Cumulative	: 50
Device Total VPN Capacity	: 10000			
Device Load	: 0%			

```
-----
```

```
Tunnels Summary
```

```
-----
```

	Active	Cumulative	Peak Concurrent
Clientless	: 0	: 1	: 1
AnyConnect-Parent	: 1	: 49	: 3
SSL-Tunnel	: 1	: 46	: 3
DTLS-Tunnel	: 1	: 46	: 3

Totals	: 3	: 142	

```
-----
```

```
IPv6 Usage Summary
```

```
-----
```

	Active	Cumulative	Peak Concurrent
AnyConnect SSL/TLS/DTLS	: :	: :	
Tunneled IPv6	: 1	: 20	: 2

ステップ 4 `show vpn-sessiondb anyconnect` コマンドを使用して、現在の VPN セッションに関する詳細情報を表示します。

詳細情報には、使用されている暗号化、送信バイト数と受信バイト数などの統計情報が含まれます。VPN 接続を使用する場合、このコマンドを再発行すると送信バイト数と受信バイト数が変わるのわかります。

```
> show vpn-sessiondb anyconnect
```

```

Session Type: AnyConnect

Username      : priya                      Index      : 4820
Assigned IP   : 172.18.0.1                 Public IP   : 192.168.2.20
Assigned IPv6 : 2009::1
Protocol      : AnyConnect-Parent SSL-Tunnel DTLS-Tunnel
License       : AnyConnect Premium
Encryption    : AnyConnect-Parent: (1)none  SSL-Tunnel: (1)AES-GCM-256  DTLS-Tunnel:
(1)AES256
Hashing       : AnyConnect-Parent: (1)none  SSL-Tunnel: (1)SHA384  DTLS-Tunnel: (1)SHA1
Bytes Tx      : 27731                      Bytes Rx    : 14427
Group Policy  : MyRaVpn|Policy             Tunnel Group : MyRaVpn
Login Time    : 21:58:10 UTC Mon Apr 10 2017
Duration      : 0h:51m:13s
Inactivity    : 0h:00m:00s
VLAN Mapping  : N/A                       VLAN        : none
Audt Sess ID  : c0a800fd012d400058ebfff2
Security Grp  : none                      Tunnel Zone  : 0

```

リモート アクセス VPN 設定の管理

リモートアクセス VPN 接続プロファイルは、外部ユーザーがセキュアクライアントを使用してシステムに VPN に接続することを許可するという接続特性を定義します。各プロファイルは、ユーザの認証に使用される証明書と AAA サーバ、ユーザの IP アドレスを割り当てるためのアドレスプール、およびさまざまなユーザ向け属性を定義するグループポリシーを定義します。

異なるユーザグループに可変サービスを提供する必要がある場合、または異なる認証ソースがある場合は、複数のプロファイルを作成します。たとえば、自分の組織が異なる認証サーバを使用する別の組織と合併する場合、別の組織の認証サーバを使用する新しいグループのプロファイルを作成できます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [リモートアクセス VPN (Remote Access VPN)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

グループには、現在設定されている接続プロファイルおよびグループポリシーの数に関する概要情報が表示されます。

ステップ 2 目次の[接続プロファイル]をクリックします(未選択の場合)。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- 新しい接続プロファイルを作成するには、[+] ボタンをクリックします。詳細な手順については、[RA VPN 接続プロファイルの設定 \(861 ページ\)](#) を参照してください。

- 表示ボタン (🔍) をクリックして、接続プロファイルの概要と接続手順を開きます。サマリー内で、[編集 (Edit)] をクリックして変更できます。
- 削除ボタン (🗑️) をクリックすると、不要な接続プロファイルを削除できます。
- コンテンツテーブルで[グループポリシー (Group Policies)]を選択して、接続プロファイルのユーザ指向属性を定義します。「[RA VPN のグループポリシーの設定 \(871 ページ\)](#)」を参照してください。

RA VPN 接続プロファイルの設定

リモートアクセス VPN 接続プロファイルを作成すると、ホーム ネットワークなどの外部ネットワークからでも、ユーザは内部ネットワークに接続できるようになります。異なる認証方式に対応するために、個別のプロファイルを作成します。

始める前に

リモート アクセス (RA) VPN 接続を設定する前に、以下のことを行います。

- 必要な セキュアクライアント ソフトウェアパッケージを software.cisco.com からワークステーションにダウンロードします。
- リモートアクセス VPN 接続を終了する外部インターフェイスは、同じポートで HTTPS 接続を許可する管理アクセスリストを持つこともできません。管理アクセス用に別のポートを設定するか ([データインターフェイスでの管理アクセス用の HTTPS ポートの設定 \(938 ページ\)](#)) を参照)、接続プロファイル用に別のポートを設定します。どちらのサービスもデフォルトでポート 443 を使用するため、いずれかを変更する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

グループには、現在設定されている接続プロファイルおよびグループポリシーの数に関する概要情報が表示されます。

ステップ 2 目次の[接続プロファイル]をクリックします(未選択の場合)。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- 新しい接続プロファイルを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- 表示ボタン (🔍) をクリックして、接続プロファイルの概要と接続手順を開きます。サマリー内で、[編集 (Edit)] をクリックして変更できます。

ステップ 4 基本接続の属性を設定します。

- [接続プロファイル名 (Connection Profile Name)] : スペースを含めずに最大 50 文字で、この接続の名前を指定します。たとえば、「MainOffice」と入力します。IP アドレスを名前として使用することはできません。

(注)

ここで入力する名前が、セキュアクライアント クライアントの接続リストに表示されます。ユーザにとってわかりやすい名前を選択してください。

- [グループエイリアス (Group Alias)]、[グループ URL (Group URL)] : エイリアスには特定の接続プロファイルの代替ユーザ名または URL を含めることができます。VPN ユーザーは、脅威に対する防御 デバイスへの接続時に、セキュアクライアント クライアントの接続リストでエイリアス名を選択できます。接続プロファイル名前は自動的にグループエイリアスとして追加されます。エイリアスは最大31文字です。

グループ URL のリストも設定できます。このリストは、リモートアクセス VPN 接続を開始するときにエンドポイントが選択できるリストです。ユーザがグループ URL を使用して接続すると、システムはその URL に一致する接続プロファイルを自動的に使用します。この URL は、セキュアクライアント クライアントをまだインストールしていないクライアントによって使用されます。

グループエイリアスと URL を必要な数だけ追加します。これらのエイリアスと URL は、デバイスで定義されているすべての接続プロファイルで一意でなければなりません。グループ URL は https:// で始まる必要があります。

たとえば、「Contractor」というエイリアスとグループ URL

「https://ravpn.example.com/contractor」があるとします。セキュアクライアント クライアントをインストールすると、ユーザーは単純にセキュアクライアント VPN の接続ドロップダウンリストでグループエイリアスを選択します。

ステップ 5 プライマリ アイデンティティ ソース、および必要に応じてセカンダリ ソースを設定します。

これらのオプションにより、リモート アクセス VPN 接続を有効にするためにデバイスにユーザ認証を行う方法が決定されます。最も簡単なアプローチは、AAA のみを使用し、AD レルムを選択するか、または LocalIdentitySource を使用する方法です。[認証タイプ (Authentication Type)] には、次のアプローチを使用できます。

- [AAA のみ (AAA Only)] : ユーザ名とパスワードに基づいてユーザを認証および認可します。詳細は、[接続プロファイルのための AAA の設定 \(865 ページ\)](#) を参照してください。
- [クライアント証明書のみ (Client Certificate Only)] : クライアントデバイスアイデンティティ証明書に基づいてユーザを認証します。詳細は、[接続プロファイルのための証明書認証の設定 \(869 ページ\)](#) を参照してください。
- [AAA およびクライアント認証 (AAA and Client Certificate)] : ユーザ名/パスワードと、クライアント デバイス アイデンティティ証明書の両方を使用します。

- **SAML** : プライマリ認証でSAMLサーバーを使用します。SAMLを使用する場合は、フォールバックまたはセカンダリ認証ソースを設定できません。詳細については、「[接続プロファイルのための AAA の設定 \(865 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 6 クライアントのアドレス プールを設定します。

アドレスプールは、リモートクライアントが VPN 接続を確立するときに、システムがリモートクライアントに割り当てることができる IP アドレスを定義します。詳細については、[RA VPN のクライアント アドレス指定の設定 \(870 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 7 [次へ (Next)] をクリックします。

ステップ 8 このプロファイルに使用する [グループポリシー (Group Policy)] を選択します。

グループ ポリシーは、トンネルの確立後にユーザ接続の期間を設定します。システムには、DfltGrpPolicy という名前のデフォルトグループポリシーがあります。必要なサービスを提供するために追加のグループポリシーを作成することができます。

グループポリシーを選択すると、グループの特性の概要が表示されます。サマリー内で、[編集 (Edit)] をクリックして変更できます。

必要なグループ ポリシーが存在しない場合は、ドロップダウンリストの [新しいグループポリシーの作成 (Create New Group Policy)] をクリックします。

グループポリシーの詳細については、[RA VPN のグループポリシーの設定 \(871 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 9 [Next] をクリックします。

ステップ 10 グローバル設定を設定します。

これらのオプションは、すべての接続プロファイルに適用されます。最初の接続プロファイルを作成すると、これらのオプションは、後続の各プロファイルに対して事前に設定されます。変更すると、設定済みのすべての接続プロファイルが変更されます。

- [デバイスアイデンティティ証明書 (Certificate of Device Identity)] : デバイスのアイデンティティを確立するために使用する内部証明書を選択します。セキュアな VPN 接続を完了するには、クライアントがこの証明書を受け入れる必要があります。証明書をまだ持っていない場合、ドロップダウンリストから [内部証明書の新規作成 (Create New Internal Certificate)] をクリックします。証明書を設定する必要があります。
- [外部インターフェイス (Outside Interface)] : ユーザがリモートアクセス VPN 接続を行う際の接続先インターフェイス。通常、これは外部 (インターネット側) インターフェイスですが、サポートされるデバイスおよびエンドユーザ間の任意のインターフェイスを選択できます。
- [外部インターフェイス用完全修飾ドメイン名 (Fully-qualified Domain Name for the Outside Interface)] : インターフェイスの名前 (例 : ravpn.example.com) 。名前を指定すると、システムによってクラスタ プロファイルが作成されます。

(注)

VPN とクライアントで使用される DNS サーバが、この名前を外部インターフェイスの IP アドレスに解決できるようにする必要があります。FQDN を、該当する DNS サーバに追加します。

- [ポート (Port)] : RA VPN 接続に使用する TCP ポート。デフォルトは 443 です。RA VPN に使用されているインターフェイスで **Device Manager** に接続する必要がある場合は、接続プロファイルまたは **Device Manager** のポート番号を変更する必要があります。どちらのサービスもデフォルトでポート 443 を使用します。リモートアクセス VPN 接続のポートを変更する場合、ユーザは URL にポート番号を含める必要があることに注意してください。
- [復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn))] : VPN トラフィックにアクセス制御ポリシーを適用するかどうか。復号された VPN トラフィックは、デフォルトでアクセスコントロールポリシーインスペクションの対象となります。[復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn))] を有効にすると、アクセス制御ポリシーはバイパスされますが、リモートアクセス VPN の場合、AAA サーバからダウンロードされた VPN フィルタ ACL および認証 ACL は引き続き VPN トラフィックに適用されます。

このオプションを選択すると、システムによりグローバル設定である **sysopt connection permit-vpn** コマンドが設定されることに注意してください。これは、サイト間 VPN 接続の動作にも影響を及ぼします。また、接続プロファイル間でこのオプションの選択を変えることはできません。この機能は、すべてのプロファイルに対してオンまたはオフにします。

このオプションを選択しない場合、外部ユーザがリモートアクセス VPN アドレスプール内の IP アドレスをスプーフィングし、ネットワークにアクセスするおそれがあります。この理由は、アドレスプールに内部リソースへのアクセスを許可するアクセスコントロールルールを作成する必要があるためです。アクセス制御ルールを使用する場合は、送信元 IP アドレスだけでなく、ユーザの仕様を使用してアクセスを制御することを検討してください。

このオプションを選択することの欠点は、VPN トラフィックが検査されないことです。つまり、侵入およびファイル保護、URL フィルタリング、またはその他の高度な機能がトラフィックに適用されません。つまり、このトラフィックに対する接続イベントは生成されず、VPN 接続は統計ダッシュボードには反映されません。

- [NAT免除 (NAT Exempt)] : リモートアクセス VPN エンドポイントとの入出力トラフィックに対する NAT 変換を免除するには、NAT 免除を有効にします。VPN トラフィックを NAT から除外しない場合、外部/内部インターフェイスに関する既存の NAT ルールがアドレスの RA VPN プールに適用されないようにしてください。NAT 免除ルールは、特定の送信元/宛先インターフェイスに関する手動の静的 ID の NAT ルールですが、NAT ポリシーには反映されず、隠されています。NAT 免除を有効にした場合、以下も設定する必要があります。

これはすべての接続プロファイルに適用されるグローバルオプションであることに注意してください。したがって、インターフェイスおよび内部ネットワークは追加するだけで、交換しないでください。そうでない場合、すでに定義済みのその他の接続プロファイルすべてに対する NAT 免除設定が変更されます。

- **[内部インターフェイス (Inside Interfaces)]** : リモートユーザがアクセスする内部ネットワークのインターフェイスを選択します。これらのインターフェイスに関する NAT ルールが作成されます。
- **[内部ネットワーク (Inside Networks)]** : リモートユーザがアクセスする内部ネットワークを表すネットワーク オブジェクトを選択します。ネットワーク リストには、サポートしているアドレス プールと同じ IP タイプを含める必要があります。
- **[Secure Client パッケージ (Secure Client Package)]** : RA VPN 接続でサポートする セキュアクライアント の完全インストール ソフトウェア イメージ。パッケージごとに、ファイル名 (拡張子を含む) を 60 文字以下で指定します。Windows、Mac、Linux のエンドポイントに対して別々のパッケージをアップロードできます。ただし、異なる接続プロファイルに対しては異なるパッケージを設定できません。別のプロファイルパッケージがすでに設定されている場合、パッケージは事前を選択されます。これを変更すると、すべてのプロファイルに対して変更されます。

Software.cisco.com からパッケージをダウンロードします。そのエンドポイントに適合するパッケージがまだインストールされていない場合、ユーザ認証後にパッケージをダウンロードしてインストールするようユーザに促すプロンプトが表示されます。

ステップ 11 [次へ (Next)] をクリックします。

ステップ 12 サマリーを確認します。

最初に、サマリーが正しいことを確認します。

次に、[手順 (Instructions)] をクリックして、セキュアクライアント ソフトウェアをインストールし、VPN 接続を完了できることをテストするためにエンドユーザが最初に行う必要がある内容を確認します。[コピー (Copy)] をクリックして、これらの指示をクリップボードにコピーし、ユーザに配布します。

ステップ 13 [Finish] をクリックします。

次のタスク

[リモート アクセス VPN 経由のトラフィックの許可 \(858 ページ\)](#) で説明したように、トラフィックが VPN トンネルで許可されていることを確認します。

接続プロファイルのための AAA の設定

認証、認可、およびアカウンティング (AAA) サーバは、ユーザがリモート アクセス VPN へのアクセスを許可されるかどうかを判断するためにユーザ名とパスワードを使用します。RADIUS サーバを使用する場合は、認証されたユーザ間で認証レベルを区別して、保護された

リソースへの差別化されたアクセスを提供できます。使用状況を追跡するために RADIUS アカウンティングサービスを使用することもできます。

AAA を設定する場合は、プライマリ アイデンティティ ソースを設定する必要があります。セカンダリソースとフォールバックソースはオプションです。RSA トークンや DUO などを使用する二重認証を実装する場合は、セカンダリソースを使用します。

プライマリアイデンティティソースオプション

- [ユーザ認証用のプライマリアイデンティティソース (Primary Identity Source for User Authentication)] : リモートユーザの認証に使用されるプライマリ アイデンティティ ソース。VPN接続を完了するには、エンドユーザがこのソースか任意のフォールバックソースで定義されている必要があります。次のいずれかを選択します。
 - Active Directory(AD)のアイデンティティレルム。必要なレルムがまだ存在していない場合は、[新しいアイデンティティレルムの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックします。
 - RADIUS サーバ グループ。
 - LocalIdentitySource (ローカルユーザデータベース): デバイスで直接ユーザを定義できます。外部サーバを使用することはできません。
 - DuoLDAPサーバ。ただし、これは、[DuoLDAPを使用した二要素認証の設定方法 \(892 ページ\)](#) の説明に従って二要素認証を提供するためのセカンダリ認証ソースとして使用することを推奨します。プライマリ ソースとして使用する場合、ユーザ ID 情報は取得されません。ダッシュボードにユーザ情報が表示されず、ユーザベースのアクセス コントロール ルールを作成することもできません。
 - SAML サーバ。SAML サーバを使用する場合は、フォールバックまたはセカンダリ認証ソースを設定できません。RADIUS を認可サーバとして使用できますが、認証が不要になるように RADIUS サーバを設定する必要があります。つまり、接続が SAML によって認証された後に RADIUS サーバが認可情報を提供するようにします。
- [SAMLログインエクスペリエンス (SAML Login Experience)] : プライマリ認証ソースとして SAML を選択した場合は、Web 認証を完了するために使用するクライアントブラウザを選択する必要があります。
 - [VPN クライアント組み込みブラウザ (VPN Client embedded browser)] : VPN クライアントは Web 認証に組み込みブラウザを使用するため、認証は VPN 接続にのみ適用されます。これはデフォルトであり、追加の設定は必要ありません。
 - [デフォルトOSブラウザ (Default OS Browser)] : VPN クライアントは、Web 認証にシステムのデフォルトブラウザを使用します。このオプションは、VPN認証と他の企業ログインの間のシングルサインオン (SSO) を有効にします。組み込みブラウザでは実行できない Web 認証方式 (生体認証など) をサポートしたい場合も、このオプションを選択します。

ブラウザでWeb認証を有効にするパッケージをアップロードする必要があります。パッケージは software.cisco.com から取得します。アップロードするパッケージは、デ

フォルトの OS ブラウザで SAML を使用するすべての接続プロファイルで使用されます。パッケージはグローバルであり、接続プロファイル固有ではありません。

- [フォールバックローカルアイデンティティソース (Fallback Local Identity Source)] : プライマリソースが外部サーバの場合、プライマリサーバが使用できない場合のフォールバックとして LocalIdentitySource を選択できます。フォールバックソースとしてローカルデータベースを使用する場合は、必ず外部サーバで定義したものと同一ローカルユーザ名/パスワードを定義します

[詳細オプション (Advanced Options)] : [詳細 (Advanced)] リンクをクリックして、次のオプションを設定します。

- [削除オプション (Strip options)] : レルムとは管理ドメインのことです。次のオプションをイネーブルにすると、ユーザ名だけに基づいて認証できます。これらのオプションを任意に組み合わせて有効にできます。ただし、サーバが区切り文字を解析できない場合は、両方のチェックボックスをオンにする必要があります。
 - [ユーザ名からアイデンティティソースサーバを削除 (Strip Identity Source Server from Username)] : ユーザ名を AAA サーバに渡す前に、ユーザ名からアイデンティティソース名を削除するかどうか。たとえば、このオプションを選択してユーザが「username」として domain\username に入ると、ドメインがユーザ名から取り除かれ、認証用に AAA サーバに送信されます。デフォルトでは、このオプションはオフになっています。
 - [ユーザ名からグループを削除 (Strip Group from Username)] : ユーザ名を AAA サーバに渡す前に、ユーザ名からグループ名を削除するかどうかを指定します。このオプションは、username@domain 形式で指定された名前に適用されます。選択すると、domain と @ 記号が削除されます。デフォルトでは、このオプションはオフになります。
- [パスワード管理を有効にする (Enable Password Management)] : パスワードの有効期限が切れたときにユーザにパスワードの変更を許可するかどうかを指定します。このオプションを選択しない場合、ユーザーのパスワードが期限切れになると、セキュアクライアントは接続を拒否するため、ユーザーは AAA サーバにアクセスして、パスワードを変更する必要があります。このオプションを選択すると、セキュアクライアントはパスワードの有効期限が切れたときにパスワードの変更をユーザーに要求します。これは、ユーザーにとって非常に便利です。次のいずれかのオプションを選択します。また、AAA サーバで MSCHAPv2 を有効にします。
 - [パスワードの有効期限の x 日前にユーザに通知 (Notify user x days prior to password expiration)] (LDAP のみ) : 指定した日数から始めて、パスワードの有効期限が近づいていることをユーザに警告します。1 ～ 180 日の範囲で警告を設定できます。デフォルトは 14 です。
 - [パスワードの有効期限の日にユーザに通知 (Notify user on the day of password expiration)] : ユーザに警告は表示されませんが、パスワードの有効期限が切れると、パスワードの変更を求められます。警告期間を設定している場合でも、RADIUS ユーザは常にパスワードの変更を求められます。

セカンダリアイデンティティソース

- [ユーザ認証用のセカンダリアイデンティティソース (Secondary Identity Source for User Authentication)] : オプションの 2 番目のアイデンティティ ソースです。ユーザがプライマリ ソースで正常に認証されると、セカンダリ ソースでの認証が求められます。AD レalm、RADIUS サーバグループ、Duo LDAP サーバ、またはローカルアイデンティティ ソースを選択できます。
- [詳細オプション (Advanced options)] : [詳細 (Advanced)] リンクをクリックし、次のオプションを設定します。
 - [セカンダリ用フォールバックローカルアイデンティティソース (Fallback Local Identity Source for Secondary)] : セカンダリ ソースが外部サーバの場合、セカンダリ サーバが使用できない場合のフォールバックとして LocalIdentitySource を選択できます。フォールバック ソースとしてローカル データベースを使用する場合は、必ずセカンダリ外部サーバで定義したものと同一ローカル ユーザ名/パスワードを定義します。
 - [セカンダリログインにプライマリユーザ名を使用 (Use Primary Username for Secondary Login)] : デフォルトでは、セカンダリ アイデンティティ ソースを使用する場合、セカンダリ ソースに対してユーザ名とパスワードの両方が求められます。このオプションを選択すると、システムはセカンダリ パスワードの入力のみを求め、プライマリアイデンティティ ソースに対して認証されたものと同じユーザ名をセカンダリ ソースに対して使用します。プライマリとセカンダリの両方のアイデンティティソースで同じユーザ名を設定する場合は、このオプションを選択します。
 - [セッションサーバのユーザ名 (Username for Session Server)] : 認証に成功すると、ユーザ名はイベントと統計ダッシュボードに表示され、ユーザベースまたはグループベースの SSL 復号およびアクセス制御ルールに一致するものを判断するために使用され、アカウントに使用されます。2 つの認証ソースを使用しているため、ユーザアイデンティティとして、プライマリまたはセカンダリのどちらのユーザ名を使用するかシステムに通知する必要があります。デフォルトでは、プライマリ名が使用されます。
 - [パスワードタイプ (Password Type)] : セカンダリ サーバのパスワードを取得する方法。このフィールドは、認証タイプに [AAA とクライアント証明書 (AAA and Client Certificate)] を選択した場合にのみ適用されます。証明書オプションでは、[ユーザログインウィンドウの証明書からユーザ名を事前入力 (Prefill username from certificate on user login window)] と [ログインウィンドウでユーザ名を非表示にする (Hide username in login window)] の両方を選択します。デフォルトは [プロンプト] で、ユーザにパスワードの入力を求めます。

プライマリ サーバへのユーザ認証時に入力したパスワードを自動的に使用するには、[プライマリアイデンティティソースのパスワード (Primary Identity Source Password)] を選択します。

[共通パスワード]を選択してすべてのユーザに同じパスワードを使用し、[共通パスワード]フィールドにそのパスワードを入力します。

その他のオプション

- [認証サーバ (Authorization Server)] : リモート アクセス VPN ユーザを認証するように設定された RADIUS サーバ グループです。

認証が完了すると、認証によって各認証済みユーザが使用できるサービスとコマンドが制御されます。認可は、ユーザが実行を認可されていることを示す属性のセット、それらの実際の機能および制限を組み立てることによって機能します。認可を使用しない場合は、認証が単独で、認証済みのすべてのユーザに対して同じアクセスを提供します。認可のための RADIUS の設定の詳細については、[RADIUS およびグループポリシーを使用したユーザの権限および属性の制御 \(846 ページ\)](#) を参照してください。

システムがグループ ポリシーで定義されているものと重複する認可属性を RADIUS サーバから取得した場合、RADIUS 属性は、グループポリシー属性をオーバーライドすることに注意してください。

- [アカウンティングサーバ (Accounting Server)] : (オプション) リモート アクセス VPN セッションへのアカウンティングに使用する RADIUS サーバ グループ。

アカウンティングは、ユーザがアクセスしているサービスや、ユーザが消費しているネットワーク リソース量を追跡します。脅威に対する防御 デバイスは、RADIUS サーバにユーザ アクティビティを報告します。アカウンティング情報には、セッションの開始時刻と終了時刻、ユーザ名、デバイスを通過するセッションのバイト数、使用されたサービス、および各セッションの継続時間などの情報が含まれます。これらのデータは、ネットワーク管理、クライアントへの課金、または監査のために後で分析できます。アカウンティングは、単独で使用するか、認証および認可とともに使用することができます。

接続プロファイルのための証明書認証の設定

リモート アクセス VPN 接続を認証するために、クライアントデバイスにインストールされた証明書を使用することができます。証明書認証を使用している場合は、リモートアクセスユーザ接続の検証に使用する信頼できる CA 証明書に、[検証の使用 (Validation Usage)] の [SSL クライアント (SSL Client)] オプションが含まれていることを確認します。

クライアント証明書を使用していても、セカンダリ アイデンティティ ソース、フォールバック ソース、および認証およびアカウンティング サーバを引き続き設定できます。これらは AAA オプションです。詳細については [接続プロファイルのための AAA の設定 \(865 ページ\)](#) を参照してください。

次に、証明書固有の属性を示します。これらの属性は、プライマリアイデンティティソースとセカンダリアイデンティティソースに対して個別に設定できます。セカンダリソースの設定はオプションです。

- [証明書のユーザ名 (Username from Certificate)] : 次のいずれかを選択します。
 - [マップ固有フィールド (Map Specific Field)] : 証明書の要素を [プライマリフィールド (Primary Field)] および [セカンダリフィールド (Secondary Field)] の順番で使用します。デフォルトは CN(共通名) と OU(組織ユニット) です。組織に適したオプションを選択します。これらのフィールドを組み合わせるとユーザ名が提供され、このユーザ

名がベント、ダッシュボード、さらに SSL 復号とアクセス制御ルールでのマッチング目的に使用されます。

- [DN (識別名) 全体をユーザ名として使用 (Use entire DN (distinguished name) as username)] : システムが自動的に DN フィールドからユーザ名を導出します。
- [詳細オプション (Advanced options)] : [詳細 (Advanced)] リンクをクリックし、次のオプションを設定します。
 - [ユーザログインウィンドウの証明書からユーザ名を事前入力 (Prefill username from certificate on user login window)] : ユーザに認証を要求するときに、取得したユーザ名をユーザ名フィールドに入力するかどうか。
 - [ログインウィンドウでユーザ名を非表示にする (Hide username in login window)] : [事前入力 (Prefill)] オプションを選択すると、ユーザ名を非表示にできます。これは、ユーザがパスワードプロンプトでユーザ名を編集できないことを意味します。

RA VPN のクライアント アドレス指定の設定

リモートアクセス VPN に接続するエンドポイントにシステムが IP アドレスを提供するための方法が必要です。これらのアドレスは、AAA サーバ、DHCP サーバ、グループ ポリシーで設定されている IP アドレス プール、または接続プロファイルで設定された IP アドレス プールによって提供されることができます。システムは、この順序でこれらのリソースを試行し、使用可能なアドレスを取得すると停止し、次にアドレスをクライアントに割り当てます。このように、同時接続数が異常な場合のフェールセーフを作成するために複数のオプションを設定できます。

接続プロファイルのアドレスプールを設定するには、次の方法の 1 つ以上を使用します。

- [AAA サーバ (AAA Server)] : まず、アドレスプールのサブネットを指定する Threat Defense デバイスのネットワークオブジェクトを設定します。次に、RADIUS サーバで、オブジェクト名によりユーザの Address-Pools (217) 属性を設定します。また、接続プロファイルで認証用の RADIUS サーバを指定します。
- [DHCP] : まず、1 つ以上の IPv4 アドレス範囲を持つ RA VPN の DHCP サーバを設定します (DHCP を使用して IPv6 プールを設定することはできません)。次に、DHCP サーバの IP アドレスを使用してホストネットワークオブジェクトを作成します。その後、このオブジェクトを接続プロファイルの [DHCP サーバ (DHCP Servers)] 属性で選択できます。最大 10 台の DHCP サーバを設定できます。

DHCP サーバに複数のアドレス プールがある場合、[DHCP スコープ (DHCP Scope)] 属性を接続プロファイルにアタッチするグループポリシーで使用して、使用するプールを選択することができます。プールのネットワークアドレスを使用して、ホストネットワークオブジェクトを作成します。たとえば、DHCP プールに 192.168.15.0/24 および 192.168.16.0/24 が含まれている場合、DHCP スコープを 192.168.16.0 に設定すると、192.168.16.0/24 サブネットからのアドレスが必ず選択されるようになります。

- [ローカル IP アドレスプール (Local IP address pools)] : まず、サブネットを指定する最大 6 つのネットワーク オブジェクトを作成します。IPv4 と IPv6 に別々のプールを設定できま

す。次に、グループポリシーまたは接続プロファイルの [IPv4 アドレスプール (IPv4 Address Pool)] および [IPv6 アドレスプール (IPv6 Address Pool)] オプションで、これらのオブジェクトを選択します。IPv4 と IPv6 の両方を設定する必要はなく、サポートするアドレス方式のみを設定します。

また、グループポリシーと接続プロファイルの両方でプールを設定する必要もありません。グループポリシーは接続プロファイル設定をオーバーライドします。そのため、グループポリシーでプールを設定する場合は、接続プロファイルのオプションを空白のままにしてください。

プールはリストの順序で使用されることに注意してください。

RA VPN のグループポリシーの設定

グループポリシーは、リモートアクセス VPN 接続のための一連のユーザ指向の属性と値のペアです。接続プロファイルでは、トンネル確立後、ユーザ接続の条件を設定するグループポリシーが使用されます。グループポリシーを使用すると、ユーザまたはユーザのグループに属性セット全体を適用できるので、ユーザごとに各属性を個別に指定する必要がありません。

システムには、DfltGrpPolicy という名前のデフォルトグループポリシーがあります。必要なサービスを提供するために追加のグループポリシーを作成することができます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

グループには、現在設定されている接続プロファイルおよびグループポリシーの数に関する概要情報が表示されます。

ステップ 2 目次で [グループポリシー (Group Policies)] をクリックします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- [\[+\] ボタンをクリックして、新しいエンドポイント ID グループを作成します。グループポリシーのページの属性の説明については、次のトピックを参照してください。](#)
 - [一般属性 \(872 ページ\)](#)
 - [セッション設定属性 \(873 ページ\)](#)
 - [アドレス割り当て属性 \(873 ページ\)](#)
 - [スプリット トンネリング属性 \(874 ページ\)](#)
 - [セキュアクライアント 属性 \(875 ページ\)](#)
 - [トラフィック フィルタ属性 \(877 ページ\)](#)
 - [Windows ブラウザ プロキシ属性 \(878 ページ\)](#)

- 既存のグループポリシーを編集するには、編集ボタン (🔗) をクリックします。
- 不要なグループを削除するには、削除ボタン (🔴) をクリックします。現在、グループを接続プロファイルで使用することはできません。

一般属性

グループポリシーの全般的な属性では、グループの名前およびその他の基本設定を定義します。名前属性は唯一の必須属性です。

- [名前 (Name)] : グループ ポリシーの名前。名前には最大 64 文字の長さを使用でき、スペースも使用できます。
- [説明 (Description)] : デバイス グループの説明。説明には、最大 1,024 文字を使用できます。
- [DNSサーバ (DNS Servers)] : VPNに接続する際、クライアントがドメイン名の解決に使用する DNS サーバを定義する DNS サーバグループを選択します。必要なグループがまだ定義されていない場合は、[DNSグループの作成 (Create DNS Group)] をクリックしてすぐに作成します。
- [バナー (Banner)] : ユーザーのログイン時に表示するバナーテキストまたはウェルカムメッセージです。デフォルトでは、バナーは表示されません。最大文字数は 496 文字です。セキュアクライアントは、部分的な HTML をサポートしています。リモートユーザーへバナーが適切に表示されることを確認するには、
タグを使用して改行を示します。
- [デフォルトドメイン (Default Domain)] : RA VPN内のユーザのデフォルト ドメインの名前。例、example.com。このドメインは、完全修飾されていないホスト名（たとえば、serverA.example.com ではなく serverA）に追加されます。
- [Secure Client プロファイル (Secure Client Profiles)] : [+] をクリックし、このグループに使用するセキュアクライアントプロファイルを選択します。外部インターフェイスの完全修飾ドメイン名を設定すると（接続プロファイルで）、デフォルトプロファイルが自動的に作成されます。代わりに、自分用のクライアントプロファイルをアップロードすることもできます。スタンドアロンセキュアクライアントプロファイルエディタを使用してこれらのプロファイルを作成します。スタンドアロン AnyConnect プロファイルエディタは、software.cisco.com からダウンロードしてインストールできます。クライアントプロファイルを選択しない場合、セキュアクライアントクライアントはすべてのオプションにデフォルト値を使用します。このリストの項目は、プロファイル自体ではなくセキュアクライアントプロファイルオブジェクトです。新しいプロファイルを作成（およびアップロード）するには、ドロップダウンリストで **[新規 Secure Client プロファイルの作成 (Create New Secure Client Profile)]** をクリックします。

セキュアクライアントプロファイルに加えて、AMP イネーブラなどのセキュアクライアントモジュールプロファイルを選択できます。モジュールタイプごとに1つのプロファイルを選択できます。

セッション設定属性

グループポリシーのセッションの設定は、VPNを通じて接続できる時間と、接続を確立できる個別の接続数を制御します。

- [最大接続時間 (Maximum Connection Time)] : ログアウトして再接続することなく、ユーザが VPN に接続したままでいられる最大時間 (分単位)。1 ~ 4473924、または空白で指定します。デフォルトは無制限 (空白) ですが、その場合でもアイドルタイムアウトは適用されます。
- [接続時間のアラート間隔 (Connection Time Alert Interval)] : 最大接続時間を指定した場合、アラート間隔は、次の自動切断についてユーザに警告を表示する最大時間に達するまでの時間を定義します。ユーザーは、接続を終了し、再接続してタイマーを再起動することを選択できます。デフォルトは 1 分です。1 ~ 30 分を指定できます。
- [アイドルタイム]: VPN 接続が自動的に閉じるまでアイドル状態である分単位の時間の長さ (1 ~ 35791394)。この連続した分数の間、接続で通信アクティビティがない場合、システムは接続を停止します。デフォルトは 30 分です。
- [アイドル時間のアラート間隔 (Idle Time Alert Interval)] : アイドルセッションが原因の次の自動切断について、ユーザにアラートを表示するアイドル時間に達するまでの時間。アクティビティがあるとタイマーがリセットされます。デフォルトは 1 分です。1 ~ 30 分を指定できます。
- [ユーザあたり同時ログイン (Simultaneous Logins Per User)] : ユーザに許可する同時接続の最大数。デフォルトは 3 です。1 ~ 2147483647 個の接続を指定できます。複数の同時接続を許可するとセキュリティの低下を招き、パフォーマンスに影響を及ぼすおそれがあります。

アドレス割り当て属性

グループポリシーのアドレスの割り当て属性は、グループの IP アドレスプールを定義します。ここで定義されているプールで、このグループを使用するすべての接続プロファイルで定義済みのプールがオーバーライドされます。接続プロファイルで定義済みのプールを使用する場合は、これらの設定を空白のままにします。

- [IPv4 アドレスプール (IPv4 Address Pool)]、[IPv6 アドレスプール (IPv6 Address Pool)] : これらのオプションは、リモートエンドポイントのアドレスプールを定義します。クライアントには、VPN 接続のために使用する IP バージョンに基づき、これらのプールからアドレスが割り当てられます。サポートする IP タイプごとにサブネットを定義するネットワーク オブジェクトを選択します。当該 IP バージョンをサポートしない場合は、リストを空のままにします。たとえば、IPv4 プールを「10.100.10.0/24」と定義できます。アドレスプールは、外部インターフェイスの IP アドレスと同じサブネット上に存在することはできません。

ローカルアドレスの割り当てに使用する最大 6 個のアドレスプールのリストを指定できます。プールの指定順序は重要です。システムでは、プールの表示順に従いそれらのプールからアドレスが割り当てられます。

- [DHCPスコープ (DHCP Scope)] : 接続プロファイルのアドレス プールに DHCP サーバを設定した場合、DHCP スコープはこのグループのプールに使用するサブネットを識別します。DHCP サーバーには、そのスコープによって識別される同じサブネット内のアドレスも設定されている必要があります。スコープを使用すると、この特定のグループに使用する DHCP サーバーで定義されているアドレスプールのサブセットを選択できます。

ネットワーク スコープを定義しない場合、DHCP サーバはアドレス プールの設定順にプール内を探して IP アドレスを割り当てます。未割り当てのアドレスが見つかるまで、プールが順に検索されます。

スコープを指定するには、目的のプールと同じサブネット上にあり、そのプール内にはないルーティング可能なアドレスを含むネットワークオブジェクトを選択します。DHCP サーバは、この IP アドレスが属するサブネットを判別し、そのプールからの IP アドレスを割り当てます。

ルーティングの目的で可能な場合は常に、インターフェイスの IP アドレスを使用することを推奨します。たとえば、プールが 10.100.10.2 ~ 10.100.10.254 で、インターフェイスアドレスが 10.100.10.1/24 の場合、DHCP スコープとして 10.100.10.1 を使用します。ネットワーク番号は使用しないでください。オブジェクトがまだ存在しない場合は、[新しいネットワークの作成]をクリックします。DHCP は IPv4 アドレス指定にのみ使用することができます。選択したアドレスがインターフェイスアドレスではない場合、スコープアドレスのスタティックルートを作成する必要があります。

スプリット トンネリング属性

グループポリシーのスプリットトンネリング属性は、システムが内部ネットワーク用のトラフィックと外部方向トラフィックを処理する方法を定義します。スプリットトンネリングは、VPN トンネル（暗号化）と VPN トンネル外の残りのネットワークトラフィック（非暗号化、つまりクリアテキスト）を介して一部のネットワークトラフィックを誘導します。

- [IPv4スプリットトンネリング (IPv4 Split Tunneling)]、[IPv6スプリットトンネリング (IPv6 Split Tunneling)] : トラフィックが IPv4 または IPv6 アドレスを使用するかどうかによって、さまざまなオプションを指定できますが、それぞれのオプションは同じです。スプリットトンネリングを有効にする場合は、ネットワークオブジェクトを選択する必要があるオプションのいずれかを指定します。
 - [トンネル経由のトラフィックをすべて許可する (Allow all traffic over tunnel)] : スプリット トンネリングを行いません。RA VPN 接続を行うと、ユーザのすべてのトラフィックは保護されたトンネルを通過します。これがデフォルトです。最も安全なオプションであるとも考えられます。
 - [トンネル経由で指定されたトラフィックを許可する (Allow specified traffic over the tunnel)] : 宛先ネットワークとホスト アドレスを定義するネットワーク オブジェクトを選択します。これらの宛先へのトラフィックすべては、保護されたトンネルを通過します。その他のすべての宛先へのトラフィックは、クライアントによって、トンネル外の接続（ローカル Wi-Fi またはネットワーク接続など）にルーティングされます。

- [以下に指定したネットワークを除外する (Exclude networks specified below)] : 宛先ネットワークまたはホストアドレスを定義するネットワークオブジェクトを選択します。これらの宛先へのトラフィックは、クライアントによって、トンネルの外の接続にルーティングされます。他の宛先へのトラフィックはトンネルを通過します。
- [スプリットDNS (Split DNS)] : クライアントが、クライアントで設定されている DNS サーバに他の DNS 要求を送信することを許可しながら、セキュアな接続を介していくつかの DNS 要求を送信するようにシステムを設定することができます。次のDNS動作を設定できます。
 - [スプリットトンネルポリシーに従ってDNS要求を送信する (Send DNS Request as per split tunnel policy)] : このオプションでは、スプリット トンネル オプションが定義されているのと同じ方法で DNS 要求が処理されます。スプリットトンネリングを有効にすると、DNS 要求は宛先アドレスに基づいて送信されます。スプリットトンネリングを有効にしていない場合、DNS 要求はすべて保護された接続を介します。
 - [常にトンネル経由でDNS要求を送信する (Always send DNS requests over tunnel)] : スプリット トンネリングを有効にするけれども、すべての DNS 要求をグループで定義された DNS サーバに保護された接続を介して送信したい場合は、このオプションを選択します。
 - [指定したドメインのみをトンネル経由で送信 (Send only specified domains over tunnel)] : 保護された DNS サーバが特定のドメインのアドレスだけを解決するようにしたい場合は、このオプションを選択します。次に、ドメインを指定します。ドメイン名はコンマで区切ります。たとえば、「example.com, example1.com」と指定します。内部 DNS サーバが内部ドメインの名前を解決し、外部 DNS サーバが他のすべてのインターネットトラフィックを処理するようにする場合は、このオプションを使用します。

セキュアクライアント 属性

グループポリシーの セキュアクライアント 属性は、セキュアクライアントでリモートアクセス VPN 接続に使用されるいくつかの SSL および接続設定を定義します。

SSL 設定

- [Datagram Transport Layer Security (DTLS) の有効化 (Enable Datagram Transport Layer Security (DTLS))] : セキュアクライアントが SSL トンネルおよび DTLS トンネルの 2 つのトンネルを同時に使用することを許可するかどうか。DTLS によって、一部の SSL 接続に関連する遅延および帯域幅の問題が回避され、パケット遅延の影響を受けやすいリアルタイムアプリケーションのパフォーマンスが向上します。DTLS を有効にしない場合、SSL VPN 接続を確立している セキュアクライアントユーザーは SSL トンネルのみで接続します。
- [DTLS圧縮 (DTLS Compression)] : LZS を使用してこのグループの Datagram Transport Layer Security (DTLS) 接続を圧縮するかどうか。[DTLS圧縮 (DTLS Compression)] はデフォルトで無効になっています。

- [SSL圧縮 (SSL Compression)] : データ圧縮を有効にするかどうか。有効にする場合は、使用するデータ圧縮の方法 ([圧縮 (Deflate)] または [LZS (LZS)])。[SSL圧縮 (SSL Compression)] はデフォルトで無効になっています。データ圧縮は、伝送速度を上げますが、各ユーザセッションのメモリ要件と CPU 使用率も高めます。したがって、SSL圧縮はデバイスの全体的なスループットを低下させます。
- [SSLキーの再生成方法 (SSL Rekey Method)]、[SSLキーの再生成間隔 (SSL Rekey Interval)] : クライアントは、暗号キーと初期化ベクトルを再ネゴシエートしながら VPN 接続キーを再生成して、接続のセキュリティを強化します。[なし]を選択して、キーの再生成を無効にします。キーの再生成を有効にするには、新しいトンネルを作成するたびに [新しいトンネル (New Tunnel)] を選択します([既存のトンネル]オプションは、[新しいトンネル]と同じアクションになります)。キーの再生成を有効にする場合は、キーの再生成間隔も設定します。デフォルトは4分です。この間隔は、4 ~ 10080 分 (1 週間) の範囲で設定できます。

接続の設定

- [DF (フラグメント化しない) ビットを無視する (Ignore the DF (Don't Fragment) bit)] : フラグメント化が必要なパケットの Don't Fragment (DF) ビットを無視するかどうか。DF ビットが設定されているパケットの強制フラグメンテーションを許可し、それらのパケットがトンネルを通過できるようにするには、このオプションを選択します。
- [クライアントバイパスプロトコル (Client Bypass Protocol)] : セキュアゲートウェイによる (IPv6 トラフィックだけを予期しているときの) IPv4 トラフィックの管理方法や、(IPv4 トラフィックだけを予期しているときの) IPv6 トラフィックの管理方法を設定することができます。

セキュアクライアントがヘッドエンドに VPN 接続するときに、ヘッドエンドは IPv4 と IPv6 の一方または両方のアドレスを割り当てます。ヘッドエンドがセキュアクライアント接続に IPv4 アドレスのみ、または IPv6 アドレスのみを割り当てた場合に、ヘッドエンドが IP アドレスを割り当てなかったネットワークトラフィックについて、クライアントプロトコルバイパスによってそのトラフィックをドロップさせるか (デフォルト、無効、オフ)、またはヘッドエンドをバイパスしてクライアントからの暗号化なし、つまり「クリアテキスト」としての送信を許可するか (有効、オン) を設定できるようになりました。

たとえば、セキュアゲートウェイがセキュアクライアント接続に IPv4 アドレスだけを割り当て、エンドポイントがデュアルスタックされていると想定してください。このエンドポイントが IPv6 アドレスへの到達を試みたときに、クライアントバイパスプロトコルが無効の場合は、IPv6 トラフィックがドロップされますが、クライアントバイパスプロトコルが有効の場合は、IPv6 トラフィックはクライアントからクリアテキストとして送信されます。

- [MTU] : セキュアクライアントによって確立された SSL VPN 接続の最大伝送ユニット (MTU) サイズ。デフォルトは1406バイトです。範囲は576~1462バイトです。
- [Secure ClientとVPNゲートウェイ間のキープアライブメッセージ (Keepalive Messages Between Secure Client and VPN Gateway)] : トンネルでのデータの送受信にピアを使用で

きることを示すために、ピア間でキープアライブメッセージを交換するかどうかを指定します。キープアライブメッセージは、設定された間隔で送信されます。デフォルトの間隔は 20 秒、有効な範囲は 15 ～ 600 秒です。

- [ゲートウェイ側の間隔でのDPD (DPD on Gateway Side Interval)]、[クライアント側の間隔でのDPD (DPD on Client Side Interval)] : ピアが応答しなくなったときに VPN ゲートウェイまたは VPN クライアントによる迅速な検出を確実に実行するには、Dead Peer Detection (DPD) を有効にします。ゲートウェイまたはクライアント DPD を個別に有効にすることができます。DPD メッセージのデフォルトの送信間隔は30秒です。間隔は、5 ～3600秒にすることができます。

トラフィック フィルタ属性

グループ ポリシーのトラフィック フィルタ属性は、グループに割り当てられているユーザに適用する制限を定義します。アクセス制御ポリシールールを作成する代わりにこれらの属性を使用することで、ホストまたはサブネットアドレスとプロトコル、またはVLANに基づいて、特定のリソースを RA VPN ユーザを制限することができます。

デフォルトでは、グループ ポリシーによって RA VPN ユーザが保護されたネットワーク上の宛先へのアクセスが制限されることはありません。

- [アクセスリストのフィルタ (Access List Filter)] : 拡張アクセス コントロール リスト (ACL) を使用してアクセスを制限します。スマートCLIの拡張ACLオブジェクトを選択するか、[拡張アクセスリストの作成]をクリックして作成します。

拡張 ACL では、送信元アドレス、宛先アドレス、およびプロトコル (IP TCP など) に基づいたフィルタリングが可能です。ACLはトップダウン方式で最初に一致したもののから順に評価されるため、具体的なルールはより一般的なルールの前に配置してください。ACLの末尾には、暗黙的な「deny any」があります。そのため、いくつかのサブネットへのアクセスだけを拒否しながら、他のすべてのアクセスを許可したい場合は、ACLの最後に「permit any」ルールを含めるようにしてください。VPN フィルタは初期接続にのみ適用されます。アプリケーションインスペクションのアクションによって開かれたSIPメディア接続などのセカンダリ接続には適用されません。

拡張 ACL スマート CLI オブジェクトを編集しながらネットワーク オブジェクトを作成することはできないため、グループ ポリシーを編集する前に、ACL を作成する必要があります。そうしないと、単純にオブジェクトを作成し、後でもう一度ネットワークオブジェクトを作成し、その後で必要なすべてのアクセス制御エントリを作成する必要があります。ACLを作成するには、[デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [スマートCLI (Smart CLI)] > [オブジェクト (Object)] に移動し、オブジェクトを作成して、オブジェクトタイプとして [拡張アクセスリスト (Extended Access List)] を選択します。例については、[グループによって RA VPN アクセスを制御する方法 \(921 ページ\)](#)を参照してください。

- [VPNをVLANに制限 (Restrict Access to VLAN)] : (オプション) 「VLAN マッピング」とも呼ばれます。この属性により、このグループポリシーが適用されるセッションの出力 VLAN インターフェイスを指定します。システムは、このグループからのトラフィックすべてを、選択した VLAN に転送します。

この属性を使用して VLAN をグループポリシーに割り当て、アクセスコントロールを簡素化します。この属性に値を割り当てる方法は、ACLを使用してセッションのトラフィックをフィルタリングする方法の代替方法です。デバイスのサブインターフェイスで定義されているVLAN番号を指定していることを確認します。値の範囲は1～4094です。

Windows ブラウザ プロキシ属性

グループ ポリシーの Windows のブラウザ プロキシ属性は、ユーザのブラウザで定義されたプロキシが動作しているかどうか、およびその動作方法を判断します。

VPN セッション中にブラウザプロキシに対して次のいずれかの値を選択できます。

- [エンドポイント設定のまま (No change in endpoint settings)] : HTTP にブラウザ プロキシを設定するかどうかをユーザが決定できます。設定されている場合、そのプロキシが使用されます。
- [ブラウザプロキシの無効化 (Disable browser proxy)] : ブラウザに定義されているプロキシ (ある場合) を使用しません。どのブラウザ接続もプロキシを経由しません。
- [自動検出設定 (Auto detect settings)] : クライアント デバイスのブラウザでの自動プロキシサーバ検出の使用をイネーブルにします。
- [カスタム設定を使用 (Use custom settings)] : HTTP トラフィックに対してすべてのクライアント デバイスで使用する必要があるプロキシを定義します。次を設定します。
 - [プロキシサーバのIPまたはホスト名 (Proxy Server IP or Hostname)]、[ポート (Port)] : プロキシサーバの IP アドレスまたはホスト名、およびプロキシサーバが使用するプロキシ接続のポート。ホストとポートを組み合わせた文字数が100文字を超えることはできません。
 - [ブラウザ免除リスト (Browser Exemption List)] : 免除リストにあるホスト/ポートへの接続はプロキシを経由しません。プロキシを使用すべきでない宛先のすべてのホスト/ポート値を追加します。たとえば、www.example.com のポート 80 などです。リストに項目を追加するには、[追加 (Add)] リンクをクリックします。項目を削除するには、ゴミ箱アイコンをクリックします。プロキシ例外リスト全体 (すべてのアドレスとポートを含む) は、255 文字を超過することができません。

リモート アクセス VPN のモニタリング

リモートアクセスVPN接続をモニタし、トラブルシューティングを行うには、CLIコンソールを開くか、またはデバイスのCLIにログインして、次のコマンドを使用します。

- **show vpn-sessiondb** は VPN セッションに関する情報を表示します。これらの統計は **clear vpn-sessiondb** コマンドを使用してリセットできます。
- **show webvpn keyword** はリモートアクセス VPN 設定に関する情報を表示します。統計情報とインストールされている AnyConnect イメージが含まれます。 **show webvpn ?** と入力し、使用可能なキーワードを確認します。

- **show aaa-server** はリモートアクセス VPN とともに使用されるディレクトリサーバに関する統計情報を表示します。

リモート アクセス VPN のトラブルシューティング

リモート アクセス VPN 接続の問題の原因は、クライアントまたは Threat Defense のデバイス設定の可能性があります。次の各項で、発生する可能性のある主な問題のトラブルシューティングについて説明します。

SSL 接続問題のトラブルシューティング

ユーザーがセキュアクライアントをダウンロードするため、外部 IP アドレスに対しセキュアクライアントを使用せずに初めて SSL 接続しようとしたが接続できない場合には、次の手順を実行します。

1. リモートアクセス VPN 接続プロファイルにデフォルト以外のポートを設定した場合は、ユーザが URL にポート番号を含めていることを確認します。たとえば、<https://ravpn.example.com:4443> です。
2. クライアント ワークステーションから、外部インターフェイスの IP アドレスに ping を実行できるかどうかを確認します。実行できない場合は、ユーザのワークステーションからそのアドレスまでのルートが存在しない原因を特定します。
3. クライアント ワークステーションから、外部インターフェイスの完全修飾ドメイン名 (FQDN) に ping を実行できるかどうかを確認します。この FQDN は、リモート アクセス (RA) VPN 接続プロファイルで定義されているものです。IP アドレスを ping できても、FQDN を ping できない場合は、クライアントおよび RA VPN 接続プロファイルで使用されている DNS サーバを更新し、FQDN と IP アドレスのマッピングを追加する必要があります。
4. 外部インターフェイスで提示される証明書をユーザが承認していることを確認します。ユーザはこの証明書を永久に受け入れる必要があります。
5. RA VPN 接続設定を調べ、正しい外部インターフェイスを選択していることを確認します。よくある誤りとして、RA VPN ユーザに面している外部インターフェイスではなく、内部ネットワークに面している内部インターフェイスを選択していることがあります。
6. SSL 暗号化が適切に設定されている場合は、外部スニファを使用して、TCP スリーウェイ ハンドシェイクが正常に実行されるかどうかを確認します。

セキュアクライアントのダウンロードおよびインストールの問題のトラブルシューティング

ユーザーが外部インターフェイスに SSL 接続可能で、セキュアクライアント パッケージをダウンロードおよびインストールできない場合、次の点を考慮してください。

- クライアントのオペレーティングシステムに対応する セキュアクライアント パッケージをアップロードしていることを確認してください。たとえば、ユーザーのワークステーションに Linux が搭載されているのに、Linux セキュアクライアント イメージをアップロードしなかった場合、インストールできるパッケージはありません。
- Windows クライアントの場合、ソフトウェアのインストールには管理者権限が必要です。
- Windows クライアントの場合は、ワークステーションで ActiveX を有効にするか、または JRE 1.5 以降 (JRE 7 を推奨) をインストールする必要があります。
- Safari ブラウザの場合、Java が有効であることが必要です。
- 別のブラウザを試してみてください。あるブラウザでは失敗しても、別のブラウザでは成功することがあります。

セキュアクライアント 接続問題のトラブルシューティング

外部インターフェイスに接続し、セキュアクライアントをダウンロードしてインストールできても、セキュアクライアントを使用して接続を完了できなかった場合、次のことを確認してください。

- DHCP を使用してクライアントに IP アドレスを提供しており、クライアントがアドレスを取得できない場合は、NAT ルールを確認します。RA VPN ネットワークに適用される NAT ルールには、ルート ルックアップ オプションが含まれている必要があります。ルート ルックアップは、DHCP 要求が適切なインターフェイスを介して DHCP サーバーに確実に送信されるようにするために役立つ場合があります。
- 認証が失敗した場合、ユーザが正しいユーザ名とパスワードを入力しており、ユーザ名が認証サーバーで正しく定義されていることを確認してください。認証サーバーもデータ インターフェイスのいずれかを使用してアクセス可能である必要があります。



- (注) 認証サーバーが外部ネットワークにある場合は、外部ネットワークへのサイト間 VPN 接続を設定し、リモート アクセス VPN インターフェイス アドレスを VPN 内に含める必要があります。詳細については、[リモート アクセス VPN を使用した外部ネットワークでのディレクトリ サーバの使用法 \(905 ページ\)](#) を参照してください。

- リモートアクセス (RA) VPN 接続プロファイルで外部インターフェイスの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を設定した場合、クライアントデバイスから FQDN を ping できることを確認します。IP アドレスを ping できても、FQDN を ping できない場合、クライアントおよび RA VPN 接続プロファイルで使用されている DNS サーバを更新し、FQDN と IP アドレスのマッピングを追加する必要があります。外部インターフェイスの FQDN を指定した時に生成されたデフォルトのセキュアクライアントプロファイルを使用している場合、DNS が更新されるまでは IP アドレスを使用するようにサーバーアドレスを編集する必要があります。
- 外部インターフェイスで提示される証明書をユーザが承認していることを確認します。ユーザはこの証明書を永久に受け入れる必要があります。
- ユーザーのセキュアクライアントに複数の接続プロファイルが含まれている場合、正しいプロファイルを選択していることを確認します。
- クライアント側の設定がすべて正しいと考えられる場合は、Threat Defense デバイスに SSH 接続し、**debug webvpn** コマンドを入力します。接続試行中に表示されたメッセージを確認します。

RA VPN トラフィック フローの問題のトラブルシューティング

ユーザが安全なリモートアクセス (RA) VPN 接続を確立できても、トラフィックの送受信ができない場合は、次の操作を実行してください。

1. クライアントを切断して再接続します。これで、問題が解決することがあります。
2. セキュアクライアントで、トラフィック統計を確認して、送信カウンタと受信カウンタの両方が増えているかどうかを確認します。受信パケットカウンタがゼロのままの場合、Threat Defense デバイスはトラフィックを返していません。Threat Defense の設定に問題がある可能性があります。一般的な問題を次に示します。
 - アクセスルールでトラフィックをブロックしている。アクセス制御ポリシーのルールで、ネットワーク内と RA VPN アドレスプール間のトラフィックを妨害しているルールがないかを確認します。デフォルトのアクションでトラフィックがブロックされている場合は、明示的な [許可 (Allow)] ルールを作成する必要があります。
 - VPN フィルタがトラフィックをブロックしています。接続プロファイルのグループポリシーで設定されている ACL トラフィック フィルタまたは VLAN フィルタを確認します。グループポリシーに基づいてトラフィックをフィルタリングしている場合、またはその方法によっては、ACL で調整を行うか、VLAN を変更する必要があります。
 - NAT ルールが、RA VPN トラフィックでバイパスされていない。すべての内部インターフェイスの RA VPN 接続で NAT がオフに設定されていることを確認してください。または、NAT ルールが内部ネットワークとインターフェイス、および RA VPN アドレスプールと外部インターフェイス間の通信を妨害していないことを確認してください。

- ルートが誤って設定されている。すべての定義されたルートが有効で正しく機能していることを確認します。たとえば、外部インターフェイス用に定義したスタティック IP アドレスがある場合、ルーティングテーブルにデフォルトルート (0.0.0.0/0 および ::/0) が含まれていることを確認します。
 - RA VPN の DNS サーバとドメイン名が正しく設定されており、クライアント システムで正しく使用されていることを確認します。DNSサーバに到達可能であることを確認します。
 - RA VPN でスプリットトンネリングが有効になっている場合、指定した内部ネットワークへのトラフィックがトンネルを通っており、他のすべてのトラフィックがトンネルをバイパスしている (Threat Defense デバイスが認識しない) ことを確認します。
3. Threat Defense デバイスに SSH 接続し、リモートアクセス VPN との間でトラフィックが送受信されていることを確認します。次のコマンドを使用します。
- `show webvpn anyconnect`
 - `show vpn-sessiondb`

リモート アクセス VPN の例

以下に、リモート アクセス VPN を設定する例を示します。

RADIUS 認可変更の実装方法

ダイナミック認証とも呼ばれる RADIUS 認可変更 (CoA) は、脅威に対する防御 リモートアクセス VPN にエンドポイントセキュリティを提供します。RA VPN の重要な課題は、侵害されたエンドポイントに対して内部ネットワークを保護し、ウイルスやマルウェアの影響を受けたときに、エンドポイントへの攻撃を修復することによって、エンドポイント自体を保護することです。エンドポイントと内部ネットワークは、RA VPN セッションの前、最中、および後のすべてのフェーズで保護する必要があります。RADIUS CoA 機能は、この目標を達成するのに役に立ちます。

Cisco Identity Services Engine (ISE) RADIUSサーバを使用する場合は、認可変更ポリシーの適用を設定できます。

ISE 認可変更機能は、認証、認可、およびアカウンティング (AAA) セッションの属性を、セッション確立後に変更するためのメカニズムを提供します。AAA のユーザーまたはユーザーグループのポリシーが変更されると、ISE は CoA メッセージを 脅威に対する防御 デバイスに送信して認証を再初期化し、新しいポリシーを適用します。Inline Posture Enforcement Point (IPEP) では、脅威に対する防御 デバイスによって確立された各 VPN セッションにアクセス コントロールリスト (ACL) を適用する必要はありません。

CoA 中に変更できる属性は、リダイレクト URL、リダイレクト ACL、およびセキュリティグループタグです。

ここでは、CoA の動作とその設定方法について説明します。

認可変更へのシステム フロー

Cisco ISE には、プロセス、ファイル、レジストリエントリ、ウイルス対策保護、スパイウェア対策保護、およびホストにインストールされているファイアウォールソフトウェアなどの条件に対するエンドポイントのコンプライアンスを評価するクライアント ポスチャ エージェントがあります。管理者はその後、エンドポイントがコンプライアンスに対応するまでネットワーク アクセスを制限したり、修復方法を確立できるようにローカル ユーザの権限を強化したりできます。ISE ポスチャは、クライアント側評価を実行します。クライアントは、ISE からポスチャ要件ポリシーを受信し、ポスチャデータ収集を実行し、結果をポリシーと比較し、評価結果を ISE に返します。

次に、認可変更 (CoA) 処理のための 脅威に対する防御 デバイス、ISE、および RA VPN クライアントの間のシステム フローを示します。

1. リモートユーザーは、セキュアクライアントを使用して、脅威に対する防御 デバイスとの RA VPN セッションを開始します。
2. 脅威に対する防御 デバイスはそのユーザの RADIUS アクセス要求メッセージを ISE サーバに送信します。
3. クライアント ポスチャはこの時点で不明であるため、ISE は不明なポスチャに設定されている認証ポリシーにユーザを一致させます。このポリシーは、ISE が RADIUS Access-Accept の応答で 脅威に対する防御 に送信する次の `cisco-av-pair` オプションを定義します。

- **url-redirect-acl=acl_name**。ここで `acl_name` は、脅威に対する防御 デバイスで設定されている拡張 ACL の名前です。この ACL は、どのユーザ トラフィックを ISE サーバにリダイレクトすべきか (HTTP トラフィック) を定義します。例：

```
url-redirect-acl=redirect
```

- **url-redirect=url**：トラフィックのリダイレクト先 URL。例：

```
url-redirect=https://ise2.example.com:8443/guestportal/gateway?sessionId=xx&action=cpp
```

ホスト名を解決できるように、データインターフェイスの DNS を設定する必要があります。接続プロファイルのためにグループ ポリシーにトラフィック フィルタリングも設定する場合は、クライアント プールがポート (この例では TCP/8443) 経由で ISE サーバに到達できることを確認します。

4. 脅威に対する防御 は RADIUS Accounting-Request 開始パケットを送信し、ISE から応答を受信します。アカウントing 要求には、セッション ID、VPN クライアントの外部 IP アドレス、脅威に対する防御 デバイスの IP アドレスを含む、セッションの詳細がすべて含まれます。ISE はセッション ID を使用してそのセッションを識別します。脅威に対する防御 デバイスはさらに、定期的な中間アカウント情報を送信します。この情報で最も重要な属性は、脅威に対する防御 デバイスによってクライアントに割り当てられている IP アドレスを持つ Framed-IP-Address です。

5. ポスチャ状態が不明な場合、脅威に対する防御 デバイスはリダイレクト ACL に一致するクライアントからのトラフィックをリダイレクト URL にリダイレクトします。ISE は、クライアントに必要なポスチャ コンプライアンス モジュールがあるかどうかを決定し、必要に応じてユーザにインストールを指示します。
6. エージェントは、クライアントデバイスにインストールされると、ISE ポスチャポリシーで設定されたチェックを自動的に実行します。クライアントは ISE と直接通信します。クライアントは ISE にポスチャレポートを送信します。このレポートには、SWISS プロトコルおよびポート TCP/UDP 8905 を使用した複数の交換を含めることができます。
7. ISE がエージェントからポスチャレポートを受信すると、認証ルールをもう一度処理します。この時点で、ポスチャの結果が認識され、別のルールがクライアントと一致するようになります。ISE は RADIUS CoA のパケットを送信します。このパケットには準拠または非準拠のいずれかのエンドポイント向けのダウンロード可能 ACL (DACL) が含まれます。たとえば、準拠 DACL はすべてのアクセスを許可しますが、非準拠 DACL はすべてのアクセスを拒否することがあります。DACL の内容は、ISE 管理者によって設定されます。
8. 脅威に対する防御 デバイスがリダイレクションを削除します。このデバイスが DACL をキャッシュしていない場合、デバイスは ISE からダウンロードするために Access-Request を送信する必要があります。特定の DACL が VPN セッションに関連付けられますが、デバイス構成の一部にはなりません。
9. RA VPN ユーザーがもう一度 Web ページにアクセスしようとすると、ユーザーはそのセッション用に 脅威に対する防御 デバイスにインストールされている DACL によって許可されたすべてのリソースにアクセスできます。



(注) エンドポイントが必須要件を満たしていない場合、および手動修復が必要な場合は、セキュアクライアントで修復ウィンドウが開き、アクションを必要とする項目が表示されます。修復ウィンドウはバックグラウンドで実行されるため、ネットワークアクティビティのアップデートはポップアップ表示されず、干渉や中断は発生しません。セキュアクライアントの ISE ポスチャタイトル部分で [詳細 (Details)] をクリックして、検出された内容およびネットワークに参加する前に必要なアップデート内容を確認できます。

Threat Defense デバイスでの認可変更の設定

認可変更ポリシーのほとんどは、ISE サーバで設定されます。ただし、脅威に対する防御 デバイスは適切に ISE に接続するように設定する必要があります。次の手順では、この構成の脅威に対する防御 側の設定方法について説明します。

始める前に

任意のオブジェクトでホスト名を使用する場合、[データおよび管理トラフィック用の DNS の設定 \(957 ページ\)](#) で説明したように、データインターフェイスと一緒に使用できるように DNS サーバが設定されていることを確認します。通常は、システムを完全に機能させるために DNS を設定する必要があります。

手順

ステップ 1 ISE への初期接続をリダイレクトするように、拡張アクセスコントロールリスト (ACL) を設定します。

リダイレクト ACL の目的は、ISE がクライアントポスチャを評価できるように、初期トラフィックを ISE に送信することです。ACL は ISE に HTTPS トラフィックを送信しますが、ISE 宛てのトラフィックや、名前解決のために DNS サーバに送信されるトラフィックは送信しません。リダイレクト ACL の例は次のようになります。

```
access-list redirect extended deny ip any host <ISE server IP>
access-list redirect extended deny ip any host <DNS server IP>
access-list redirect extended deny icmp any any
access-list redirect extended permit tcp any any eq www
```

ただし、ACL には、最後のアクセス コントロール エントリ (ACE) として暗黙の「deny any any」があることに注意してください。この例では、TCP ポート www (つまりポート 80) に一致する最後の ACE は、最初の 3 つの ACE に一致するすべてのトラフィックと一致しないため、これらは冗長となります。単純に、最後の ACE を使用して ACL を作成し、同じ結果を得ることもできます。

リダイレクト ACL では、permit および deny アクションによって、ACL に一致するトラフィックが特定されることに注意してください (permit は一致、deny は不一致)。トラフィックは実際にはドロップされず、拒否されたトラフィックは ISE にリダイレクトされません。

リダイレクト ACL を作成するには、Smart CLI オブジェクトを設定する必要があります。

- a) [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [Smart CLI] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- b) [+] をクリックして新しいオブジェクトを作成します。
- c) ACL の名前を入力します。たとえば、**redirect** などと入力します。
- d) [CLI テンプレート (CLI Template)] の場合は、[拡張アクセスリスト (Extended Access List)] を選択します。
- e) [テンプレート (Template)] 本文で次のように設定します。
 - configure access-list-entry action = permit
 - source-network = any-ipv4
 - destination-network = any-ipv4
 - configure permit port = any-source
 - destination-port = HTTP
 - configure logging = disabled

ACE は次のようになります。

Name	Description
redirect	

CLI Template
Extended Access List

Template
<pre> 1 access-list redirect extended 2 configure access-list-entry permit 3 permit network source [any-ipv4] destination [any-ipv4] 4 configure permit port any-source 5 permit port source ANY destination [HTTP] 6 configure logging disabled 7 disabled log set log-level INFORMATIONAL log-interval 300 </pre>

- f) [OK]をクリックします。

この ACL は、次に変更を展開するときに設定されます。別のポリシーでオブジェクトを使用して強制的に展開する必要はありません。

(注)

この ACL は IPv4 にのみ適用されます。IPv6 のサポートも追加する場合は、属性がすべて同じ 2 つ目の ACE を追加します。ただし、送信元ネットワークと宛先ネットワークには any-ipv6 を選択します。ISE または DNS サーバへのトラフィックはリダイレクトされないことを確認するために、他の ACE を追加することもできます。最初に、それらのサーバの IP アドレスを保持するホスト ネットワーク オブジェクトを作成する必要があります。

ステップ 2 RADIUS サーバ グループをダイナミック認証に設定します。

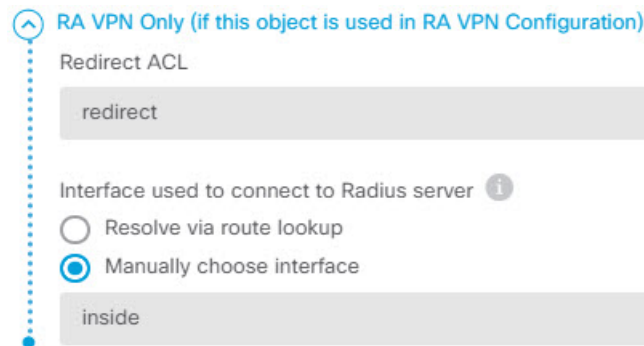
ダイナミック認証とも呼ばれる認可変更を有効にするには、RADIUS サーバとサーバグループオブジェクトでいくつかの重要なオプションを正確に選択する必要があります。次の手順では、これらの属性に焦点を当てています。これらのオブジェクトの詳細については、[RADIUS サーバおよびグループ \(218 ページ\)](#) を参照してください。

- [オブジェクト] > [アイデンティティソース] を選択します。
- [+] > [RADIUSサーバ] をクリックします。
- サーバの名前と、ISE RADIUS サーバのホスト名または IP アドレス、認証ポート、およびサーバに設定されている秘密鍵を入力します。必要に応じてタイムアウトを調整します。これらのオプションは、ダイナミック認証には直接関連していません。
- [RA VPN専用] リンクをクリックし、次のオプションを設定します。
 - [リダイレクトACL (Redirect ACL)] : リダイレクト用に作成した拡張 ACL を選択します。この例では、redirect という名前の ACL を使用します。
 - [RADIUSサーバに接続するために使用されるインターフェイス (Interface Used to Connect to RADIUS Server)] : [インターフェイスを手動で選択する (Manually Choose)]

Interface)] を選択し、サーバに到達できるインターフェイスを選択します。システムがインターフェイスで CoA リスナーを適切に有効化できるように、特定のインターフェイスを選択する必要があります。

Device Manager 管理アクセスにもこのサーバーを使用する場合、このインターフェイスは無視されます。管理アクセスの試行は、常に管理 IP アドレスを介して認証されます。

次の例は、内部インターフェイスに設定されているオプションを示しています。



- e) [OK] をクリックしてサーバ オブジェクトを保存します。
複数の重複する ISE RADIUS サーバによる冗長設定がある場合、これらのサーバそれぞれにサーバ オブジェクトを作成します。
- f) [+] > [RADIUSサーバグループ] をクリックします。
- g) サーバグループの名前を入力し、必要な場合は、デッドタイムと最大試行回数を調整します。
- h) ISE サーバが別のポートを使用するように設定されている場合は、[ダイナミック認証 (Dynamic Authorization)] オプションを選択し、ポート番号を変更します。ポート 1700 は、CoA パケットをリスンするために使用されるデフォルトのポートです。
- i) AD サーバを使用してユーザを認証するように RADIUS サーバが設定されている場合は、この RADIUS サーバと組み合わせて使用される AD サーバを指定する [RADIUS サーバをサポートするレルム (Realm that Supports the RADIUS Server)] を選択します。レルムが存在していない場合は、リストの下部にある [新しいアイデンティティレルムの作成 (Create New Identity Realm)] をクリックして作成します。
- j) [RADIUSサーバ (RADIUS Server)] の下で [+] をクリックし、RA VPN 用に作成したサーバ オブジェクトを選択します。
- k) [OK] をクリックしてサーバ グループ オブジェクトを保存します。

ステップ 3 [デバイス (Device)] > [RA VPN] > [接続プロファイル (Connection Profiles)] を選択し、この RADIUS サーバグループを使用する接続プロファイルを作成します。

[AAA 認証 (AAA Authentication)] を使用し (単独または証明書と一緒に)、[ユーザ認証用のプライマリアイデンティティソース (Primary Identity Source for User Authentication)]、[認可 (Authorization)]、および [アカウンティング (Accounting)] オプションでサーバグループを選択します。

組織での要件に応じて、その他すべてのオプションを設定します。

(注)

DNS サーバに VPN ネットワーク経由で到達する場合、接続プロファイルで使用されるグループ ポリシーを編集し、スプリット トンネリング属性ページで [スプリット DNS (Split DNS)] オプションを設定します。

ISE での認可変更の設定

認可変更設定のほとんどは、ISEサーバで設定されます。ISEにはエンドポイントデバイス上で実行されるポスチャ アセスメント エージェントがあり、ISE はデバイスと直接通信してポスチャスタンスを決定します。脅威に対する防御 デバイスは基本的に、特定のエンド ユーザの処理に関する ISE からの指示を待ちます。

ポスチャ アセスメント ポリシーの設定の詳細は、このドキュメントの範囲外です。ただし、次の手順では、いくつかの基本について説明します。この手順をISEの設定の開始点として使用します。正確なコマンドパス、ページ名、および属性名は、リリースごとに変更される場合があります。使用している ISE のバージョンによっては、異なる用語または構成を使用する場合があります。

サポートされる最小のISEリリースは2.2パッチ1です。

始める前に

この手順では、ISE RADIUS サーバでユーザがすでに設定済みだと仮定します。

手順

ステップ 1 [管理 (Administration)] > [ネットワークリソース (Network Resources)] > [ネットワークデバイス (Network Devices)] > [ネットワークデバイス (Network Devices)] を選択し、脅威に対する防御 デバイスを ISE ネットワーク デバイス インベントリに追加して、RADIUS の設定を行います。

[RADIUS認証設定 (RADIUS Authentication Settings)] を選択し、脅威に対する防御 RADIUS サーバーオブジェクトで設定されているものと同じ [共有秘密 (Shared Secret)] を設定します。必要な場合は、[CoA ポート (CoA Port)] 番号を変更し、脅威に対する防御 RADIUS サーバーグループオブジェクトで同じポートを設定していることを確認します。

ステップ 2 [ポリシー (Policy)] > [ポリシー要素 (Policy Elements)] > [結果 (Results)] > [許可 (Authorization)] > [ダウンロード可能ACL (Downloadable ACLs)] を選択します。

2つのダウンロード可能ACL(DACL)を作成します。1つは準拠エンドポイント用、もう1つは非準拠エンドポイント用です。

たとえば、非準拠エンドポイントへのすべてのアクセスを拒否(deny ip any any)し、準拠エンドポイントのすべてのアクセスを許可(deny ip any any)することができます。コンプライアンス状

態に基づいてユーザが必要とする正確なアクセスを提供するために、これらの DACL は必要なだけ複雑にすることができます。これらの DACL は認証プロファイルで使用します。

ステップ 3 [ポリシー (Policy)] > [ポリシー要素 (Policy Elements)] > [結果 (Results)] > [認可 (Authorization)] > [認可プロファイル (Authorization Profile)] を選択し、必要なプロファイルを設定します。

次の状態のプロファイルが必要です。それぞれの最小属性が表示されます。

- [不明 (Unknown)] : 不明なポスチャプロファイルはデフォルトのポスチャプロファイルです。すべてのエンドポイントは、RA VPN 接続の最初の確立時にこのポリシーに一致します。このルールポイントは、リダイレクト ACL と URL を適用し、ポスチャエージェントがエンドポイント上に存在していない場合は、これをダウンロードすることです。エンドポイントは、エージェントがインストールされていない場合、またはインストールが失敗した場合、このプロファイルが適用されたままとなります。そうでない場合、エンドポイントはポスチャを評価した後に準拠または非準拠プロファイルに移行します。

最小属性は次のとおりです。

- [名前 (Name)] : PRE_POSTURE など。
- [アクセスタイプ (Access Type)] : [ACCESS_ACCEPT] を選択します。
- [共通タスク (Common Tasks)] : [Webリダイレクション (CWA、DRW、MDM、NSP、CPP) (Web Redirection (CWA, DRW, MDM, NSP, CPP))] を選択し、次に [クライアントプロビジョニング (ポスチャ) (Client Provisioning (Posture))] を選択し、脅威に対する防御 デバイスで設定したリダイレクト ACL の名前を入力します。[値 (Value)] では、[クライアントプロビジョニングポータル (Client Provisioning Portal)] を選択します (まだ選択していない場合)。
- [属性の詳細 (Attribute Details)] には、url-redirect-acl および url-redirect の 2 つの cisco-av-pair 値が表示されている必要があります。ISE はこのデータを 脅威に対する防御 デバイスに送信し、RA VPN ユーザセッションに条件が適用されます。
- [準拠 (Compliant)] : ポスチャアセスメントが完了した後、エンドポイントに設定されたすべての要件を満たしている場合、クライアントは準拠と見なされてこのプロファイルを取得します。通常、このクライアントにはフルアクセスを付与します。

最小属性は次のとおりです。

- [名前 (Name)] : FULL_ACCESS など。
- [アクセスタイプ (Access Type)] : [ACCESS_ACCEPT] を選択します。
- [共通タスク (Common Tasks)] : [DACL名 (DACL Name)] を選択し、準拠ユーザ向けに PERMIT_ALL_TRAFFIC などのダウンロード可能 ACL を選択します。ISE は ACL を 脅威に対する防御 デバイスに送信し、デバイスが ACL をユーザセッションに適用します。この DACL は、ユーザセッションの最初のリダイレクト ACL を置き換えます。

- [非準拠 (Non-compliant)] : ポスチャアセスメントによってエンドポイントがすべての要件を満たしていないことが決定された場合、必要な更新プログラムをインストールするなどにより、クライアントがエンドポイントを準拠させることができるカウントダウンが存在します。セキュアクライアントは、準拠の問題をユーザーに通知します。カウントダウンの間、エンドポイントは不明な準拠状態になります。カウントダウンの期限が切れてもエンドポイントが非準拠のままである場合、セッションは非準拠としてマークされ、非準拠プロファイルが取得されます。通常、このエンドポイントに対するすべてのアクセスを禁止するか、少なくとも何らかの方法でアクセスを制限します。

最小属性は次のとおりです。

- [名前 (Name)] : Non_Compliant など。
- [アクセスタイプ (Access Type)] : [ACCESS_ACCEPT] を選択します。
- [共通タスク] : [DACL名]を選択し、非準拠ユーザ向けにDENY_ALL_TRAFFICなどのダウンロード可能ACLを選択します。ISE は ACL を 脅威に対する防御 デバイスに送信し、デバイスが ACL をユーザセッションに適用します。この DACL は、ユーザセッションの最初のリダイレクト ACL を置き換えます。

ステップ 4 [ポリシー (Policy)] > [ポリシー要素 (Policy Elements)] > [結果 (Results)] > [クライアントプロビジョニング (Client Provisioning)] > [リソース (Resources)] を選択し、次のリソースを設定します。

- [AnyConnectパッケージ (AnyConnect package)] : software.cisco.com からダウンロードしたヘッドエンドパッケージファイル。サポートするクライアントプラットフォームごとに別個のパッケージが必要です。そのため、AnyConnectDesktopWindows などの複数のタイプを設定する必要があります。
- [ISEポスチャ設定ファイル (タイプ : AnyConnectProfile) (ISE Posture Configuration File (Type: AnyConnectProfile))] : この設定ファイルは、コンプライアンス モジュールがエンドユーザのデバイスを評価するために使用する設定を定義します。このファイルはまた、ユーザが非準拠デバイスを準拠させるために使用できる時間の長さを定義します。
- [コンプライアンス モジュール パッケージ (タイプ : ComplianceModule) (Compliance Module Package (Type: ComplianceModule))] : セキュアクライアント コンプライアンス モジュールファイルは、エンドポイントのコンプライアンスを確認するためにインストールされた AnyConnect パッケージにプッシュされるファイルです。[Ciscoサイトからリソースを追加 (Add Resource from Cisco Site)] コマンドを使用してこのファイルをダウンロードします。設定した セキュアクライアント パッケージに基づいた正しいモジュールをダウンロードしてください。そうしないと、ユーザーはダウンロードに失敗します。software.cisco.com で、ISEComplianceModule フォルダ内のセキュアクライアント リストでこれらのファイルを検索することもできます。
- [AnyConnect設定ファイル (タイプ : AnyConnectConfig) (AnyConnect Configuration File (Type: AnyConnectConfig))] : これらのセキュアクライアント リリース固有設定は、[AnyConnectパッケージ (AnyConnect Package)]、[コンプライアンスモジュール (Compliance Module)]、および適用する [ISEポスチャ (ISE Posture)] を定義します。パッケージは OS

固有であるため、サポートするクライアント OS (Windows、MAC、Linux など) ごとに個別の設定ファイルを作成します。

ステップ 5 [ポリシー]>[クライアントプロビジョニング]を選択し、クライアントプロビジョニングポリシーを設定します。

CoA を実装する必要があるオペレーティングシステムごとに、CoA_ClientProvisionWin などの名前を持つ新しいルールを作成します。ルールに適したオペレーティングシステムを選択し、[結果 (Results)] で、OS 用に作成した セキュアクライアント 設定ファイルを [エージェント (Agent)] として選択します。

置換するデフォルトの OS 固有のルールを無効にします。

ステップ 6 ポスチャポリシーを設定します。

この手順では、組織に適したポスチャ要件を作成します。

- [ポリシー]>[ポリシー要素]>[条件]>[ポスチャ]を選択し、満たす必要がある単純なポスチャ条件を定義します。たとえば、ユーザに特定のアプリケーションのインストールを要求する場合があります。
- [ポリシー (Policy)]>[ポリシー要素 (Policy Elements)]>[結果 (Results)]>[ポスチャ (Posture)]>[要件 (Requirements)]を選択し、エンドポイントのコンプライアンスモジュール要件を定義します。
- [ポリシー (Policy)]>[ポスチャ (Posture)]>[ポスチャポリシー (Posture Policy)]を選択し、サポートされるオペレーティングシステムのポリシーを設定します。

ステップ 7 [ポリシー]>[ポリシーセット]>[デフォルト]>[認証ポリシー]を選択し、ポリシーを作成します。

準拠条件ごとにルールを追加します。次のサンプル値は、前の手順の例に基づいています。

- [不明 (Unknown)] : pre-posture およびポスチャ ダウンロード用。
 - [名前 (Name)] : PRE_POSTURE など
 - [条件 (Conditions)] : "Session-PostureStatus EQUALS Unknown" および "Radius-NAS-Port-Type EQUALS Virtual".
 - [プロファイル (Profiles)] : PRE_POSTURE など。
- [準拠 (Compliant)] : ポスチャ要件を満たすクライアント用。
 - [名前 (Name)] : FULL_ACCESS など
 - [条件 (Conditions)] : "Session-PostureStatus EQUALS Compliant" および "Radius-NAS-Port-Type EQUALS Virtual".
 - [プロファイル (Profiles)] : FULL_ACCESS など
- [非準拠 (Non-compliance)] : ポスチャ要件を満たさないクライアント用。

- [名前 (Name)] : Non_Compliant など。
- [条件 (Conditions)] : "Session-PostureStatus EQUALS NonCompliant" および "Radius-NAS-Port-Type EQUALS Virtual"。
- [プロファイル (Profiles)] : Non_Compliant など

ステップ 8 (オプション)。**[管理]>[設定]>[ポスチャ]>[再評価]**を選択し、ポスチャ再評価を有効にします。

デフォルトでは、ポスチャは接続時にのみ評価されます。ポスチャ再評価をイネーブルにして、接続されたエンドポイントのポスチャを定期的に確認できます。再評価間隔を設定して、発生頻度を決定できます。

システムが再評価に失敗した場合は、システムの応答方法を定義できます。ユーザの続行を許可する (接続したまま)、ユーザをログオフさせる、またはユーザにシステムの修復を依頼することができます。

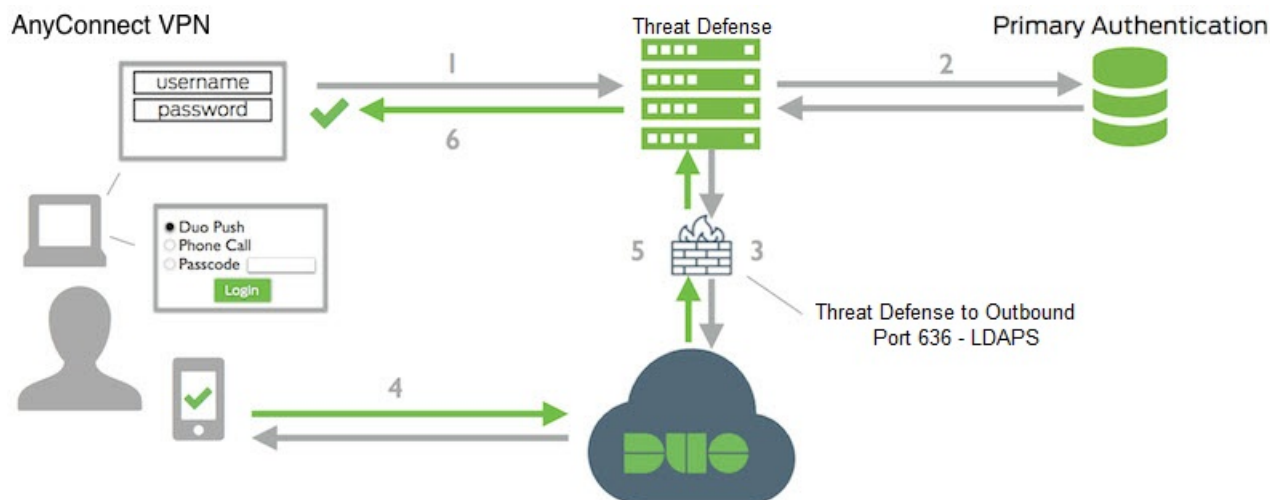
Duo LDAP を使用した二要素認証の設定方法

プライマリソースとしての Microsoft Active Directory (AD) または RADIUS サーバとともに、セカンダリ認証ソースとして Duo LDAP サーバを使用できます。Duo LDAP を使用すると、セカンダリ認証により、プライマリ認証が Duo パスコード、プッシュ通知、または電話コールで検証されます。

以降のトピックでは設定についてさらに詳しく説明します。

Duo LDAP セカンダリ認証のシステム フロー

次の図は、LDAP を使用した二要素認証を実現するために、脅威に対する防御 と Duo がどのように連携するかを示しています。



次に、システムフローについて説明します。

1. ユーザーは、脅威に対する防御 デバイスへのリモートアクセス VPN 接続を確立し、ユーザー名とパスワードを提供します。
2. Threat Defense は、プライマリ認証サーバー (Active Directory や RADIUS など) でプライマリ認証の試行を認証します。
3. プライマリ認証が機能する場合、脅威に対する防御 は Duo LDAP サーバーにセカンダリ認証の要求を送信します。
4. 要求を受けた Duo は、プッシュ通知、パスコード付きのテキストメッセージ、または電話コールによって、ユーザを個別に認証します。ユーザはこの認証を正常に完了する必要があります。
5. Duo は 脅威に対する防御 デバイスに応答して、ユーザーが正常に認証されたかどうかを示します。
6. セカンダリ認証が成功すると、脅威に対する防御 デバイスは、ユーザーの セキュアクライアント クライアントとのリモートアクセス VPN 接続を確立します。

Duo LDAP セカンダリ認証の設定

次の手順では、セカンダリ認証ソースとして Duo LDAP を使用して、リモートアクセス VPN の二要素認証を設定するエンドツーエンドのプロセスについて説明します。この設定を完了するには、Duo のアカウントを取得し、Duo から情報を取得する必要があります。

手順

ステップ 1 Duo アカウントを作成し、統合キー、秘密キー、および API ホスト名を取得します。

次に、プロセスの概要を示します。詳細については、Duo の Web サイト (<https://duo.com>) を参照してください。

- a) Duo アカウントへのサインアップ
- b) Duo Admin Panel にログインし、[アプリケーション (Applications)] に移動します。
- c) [アプリケーションの保護 (Protect An Application)] をクリックし、アプリケーションリストで Cisco SSL VPN を探します。[アプリケーションの保護 (Protect this Application)] をクリックし、統合キー、秘密キー、および API ホスト名を取得します。詳細については、Duo の『Getting Started』ガイド (<https://duo.com/docs/getting-started>) を参照してください。

ステップ 2 Duo LDAP サーバの Duo LDAP アイデンティティソースを作成します。

Duo LDAP オブジェクトを作成するには、脅威に対する防御 API を使用する必要があります。Device Manager を使用して作成することはできません。API Explorer を使用するか、独自のクライアントアプリケーションを作成してオブジェクトを作成できます。次の手順では、API Explorer を使用してオブジェクトを作成する方法について説明します。

- a) Device Manager にログインし、[詳細オプション (More options)] ボタン (⋮) をクリックし、[APIエクスプローラ (API Explorer)] を選択します。

ブラウザの設定に応じて、API エクスプローラが別のタブまたはウィンドウで開きます。

- b) (オプション)。Duo LDAPサーバに接続するためにシステムが使用するインターフェイスの特定に必要な値を取得します。

インターフェイスを指定しない場合は、ルーティングテーブルが使用されます。必要に応じて、Duo LDAP サーバのスタティックルートを作成できます。または、Duo LDAPオブジェクトで使用するインターフェイスを指定できます。インターフェイスを指定する場合は、インターフェイスグループのさまざまなGETメソッドを使用して、必要な値を取得します。物理インターフェイス、サブインターフェイス、EtherChannel、またはVLANインターフェイスを使用できます。たとえば、物理インターフェイスの値を取得するには、GET /devices/default/interfacesメソッドを使用して、使用する必要があるインターフェイスのオブジェクトを検索します。インターフェイスオブジェクトから次の値が必要です。

- ID
- タイプ
- バージョン
- 名前

- c) [DuoLDAPIdentitySource] 見出しをクリックして、グループを開きます。
- d) [POST /object/duoldapidentitysources] メソッドをクリックします。
- e) [パラメータ (Parameters)] 見出しの [本文 (body)] 要素について、右側の [データタイプ (Data Type)] 列の [サンプル値表示 (Example Value display)] ボックスをクリックします。このアクションにより、本文の値の編集ボックスに例がロードされます。
- f) [本文の値 (body value)] 編集ボックスで、次の手順を実行します。

- 属性行の **version**、**id** を削除します (これらの属性は、PUT 呼び出しには必要ですが POST には必要ありません)。
- [名前]には、Duo-LDAP-serverなどのオブジェクトの名前を入力します。
- [説明]では、参照用にオブジェクトのわかりやすい説明を入力するか、属性行を削除します。
- [apiHostname]には、Duoアカウントから取得したAPIホスト名を入力します。ホスト名は API-XXXXXXXXX.DUOSEcurity.COM のような形式になります。X の部分を一意の値に置き換えます。大文字は必須ではありません。
- [ポート]には、LDAPSに使用するTCPポートを入力します。Duoから別のポートを使用するように指示されていない限り、これは636になります。アクセス制御リストで、必ずこのポートを介した Duo LDAP サーバへのトラフィックを許可してください。
- [タイムアウト]には、Duoサーバに接続する際のタイムアウトを秒単位で入力します。値は1〜300秒です。デフォルトは 120 です。デフォルトを使用するには、120を入力するか、属性行を削除します。

- [IntegrationKey]には、Duoアカウントから取得した統合キーを入力します。
- [secretKey]には、Duoアカウントから取得した秘密キーを入力します。このキーはその後マスクされます。
- [インターフェイス]には、Duo LDAPサーバに接続するために使用するインターフェイスのID、タイプ、バージョン、および名前の値を入力するか、インターフェイス属性を定義するために使用する6つの行を削除します(末尾の閉じ括弧を含む)。
- [タイプ]では、値はduoldapidentitysourceのままにします。

たとえば、オブジェクトの本文は次のようになります。apiHostname と integrationKey は不明瞭にしてありますが、秘密キーは意図的に仮のものを示しています。

```
{
  "name": "Duo-LDAP-server",
  "description": "Duo LDAP server for RA VPN",
  "apiHostname": "API-XXXXXXXXX.DUOSECURITY.COM",
  "port": 636,
  "timeout": 120,
  "integrationKey": "XXXXXXXXXXXXXXXXXXXX",
  "secretKey": "123456789",
  "type": "duoldapidentitysource"
}
```

- g) [試してみる (Try It Out!)] ボタンをクリックします。

システムは、curlコマンドを発行してオブジェクトをデバイス設定にポストします。curlコマンド、応答本文、および応答コードが表示されます。有効な本文を作成した場合は、[応答コード (Response Code)] フィールドに **200** と表示されます。

エラーが発生した場合は、応答本文でエラーメッセージを確認します。本文の値を修正して再試行できます。

- h) トップメニューで[デバイス (Device)] をクリックして、Device Manager に戻ります。
i) [オブジェクト]を選択し、目次から[アイデンティティソース]を選択します。

Duo LDAPオブジェクトがリストに表示されます。表示されない場合は、API Explorerに戻り、オブジェクトの作成を再試行します。GETメソッドを使用して、実際に作成されたかどうかを確認できます。

Device Manager を使用してオブジェクトを削除できますが、編集したりその内容を表示したりすることはできません。これらの操作にはAPIを使用する必要があります。関連するメソッドは [DuoLDAPIdentitySource] グループに表示されます。

ステップ3 Duo Web サイトの信頼できる CA 証明書を Device Manager にアップロードします。

Threat Defense システムには、Duo LDAP サーバーへの接続を検証するために必要な証明書がなければなりません。Google Chromeブラウザで実行する次の手順を使用して、証明書を取得してアップロードできます。ご使用のブラウザの手順は異なる場合があります。または、<https://www.digicert.com/digicert-root-certificates.htm>に直接移動して証明書をダウンロードすることもできますが、次の手順は一般的なものであり、任意のサイトの信頼できるルートCA証明書を取得するために使用できます。

- a) ブラウザで<https://duo.com>を開きます。
- b) ブラウザの URL フィールドでサイト情報リンクをクリックし、[証明書 (Certificate)] リンクをクリックします。この操作により、証明書情報ダイアログボックスが開きます。
- c) [証明のパス (Certificate path)] タブをクリックし、パスのルート (最上位) を選択します。この場合はDigiCertです。
- d) DigiCert を選択した状態で、[証明書の表示 (View Certificate)] をクリックします。この操作により、新しい証明書ダイアログボックスが開き、[一般]タブにDigiCert High Assurance EV Root CAに対して証明書が発行されたことが示されます。これは、Device Manager にアップロードする必要があるルート CA 証明書です。
- e) [詳細 (Details)] タブをクリックし、[ファイルにコピー (Copy to File)] ボタンをクリックして、証明書のダウンロードウィザードを起動します。
- f) ウィザードを使用して、ワークステーションに証明書をダウンロードします。デフォルトのDER形式を使用してダウンロードします。
- g) Device Manager で、[オブジェクト (Objects)] > [証明書 (Certificates)] を選択します。
- h) [+] > [信頼済みCAの証明書の追加 (Add Trusted CA Certificate)] をクリックします。
- i) 証明書の名前を入力します(例: DigiCert_High_Assurance_EV_Root_CA) (スペースは使用できません)。
- j) [証明書のアップロード (Upload Certificate)] をクリックし、ダウンロードしたファイルを選択します。

Add Trusted CA Certificate

Name

DigiCert_High_Assurance_EV_Root_CA

Paste certificate, or choose file:

DigiCertHighAssuranceEVRootCA.cer

-----BEGIN CERTIFICATE-----

```

MIIDxTCCAq2gAwIQAQxcJmoLQJuPC3nyrkYldzANBgkqhkiG9w0BAQUFADB3
MQswCQYDVQQGEwJVUzEVMBMGA1UEChMMRGlnaUNlcnQgSW5jMRkwFwYDVQQLExB3
d3cuZGlnaWNoLnQuY29tMSswKQYDVQDEYjEaWdpQ2VydCBlaWdoIEFzc3VyYW5j
ZSBFViBSb290IENBMBA4XDTA2MTEwMDAwMDAwMFAoXDTMxMTEwMDAwMDAwMFowbDEL
MAkGA1UEBhMCVVMxFTATBgNVBAoTDERpZ2IDZXJ0IEluYzEZMBcGA1UECwMQd3d3

```

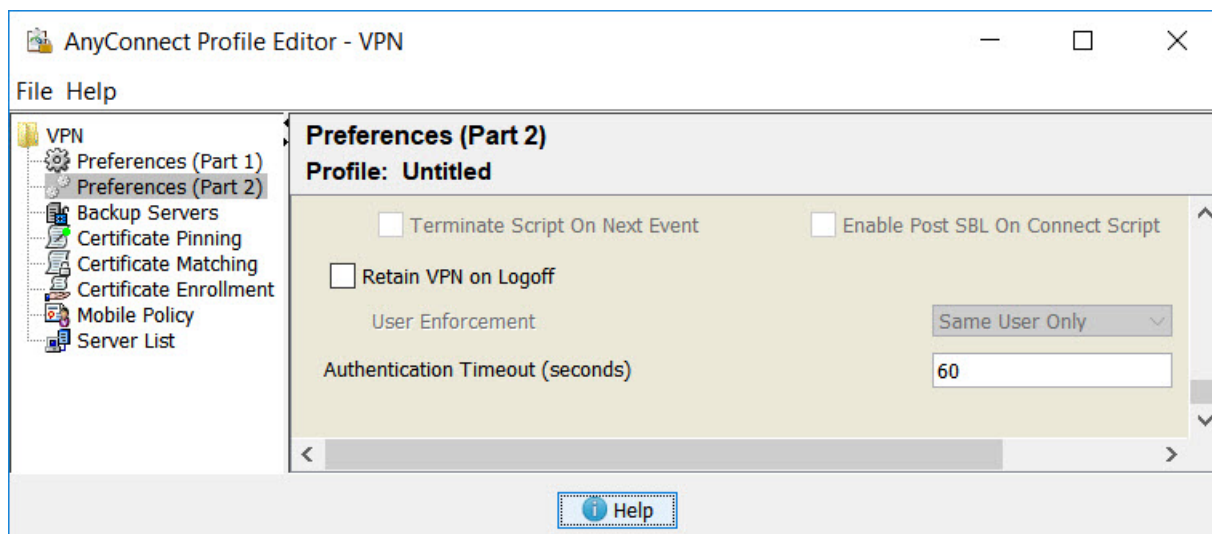

- k) [OK]をクリックします。

ステップ 4 セキュアクライアント プロファイルエディタを使用して、認証タイムアウトに 60 秒以上を指定するプロファイルを作成します。

ユーザがDuoのパスコードを取得し、セカンダリ認証を完了するために、余裕を持った時間を指定する必要があります。60秒以上を推奨します。

セキュアクライアントプロファイルの作成とアップロードの詳細については、[クライアントプロファイルの設定およびアップロード \(854 ページ\)](#) を参照してください。次の手順では、認証タイムアウトのみを設定してから、**Threat Defense** にプロファイルをアップロードする方法について説明します。他の設定を変更する場合は、ここで行ってください。

- a) セキュアクライアントプロファイルエディタ パッケージをダウンロードしてインストールします（まだ行っていない場合）。このパッケージは、Cisco Software Center (software.cisco.com) の使用しているセキュアクライアントバージョンのフォルダにあります。
- b) セキュアクライアントの **VPN プロファイルエディタ**を開きます。
- c) 目次の [設定 (パート2) (Preferences (Part 2))] を選択し、ページの最後までスクロールして、[認証タイムアウト (Authentication Timeout)] を 60 以上に変更します。次の図は AnyConnect 4.7 VPN プロファイルエディタからの引用です。それより前のバージョンや後のバージョンでは、内容が異なる場合があります。



- d) [ファイル (File)] > [保存 (Save)] を選択し、プロファイル XML ファイルに適切な名前 (duo-ldap-profile.xml など) を付けてワークステーションに保存します。
これで、VPN プロファイルエディタ アプリケーションを閉じることができます。
- e) Device Manager で、[オブジェクト (Objects)] > [Secure Clientプロファイル (Secure Client Profiles)] を選択します。
- f) [+] をクリックして新しいプロファイルオブジェクトを作成します。
- g) [名前 (Name)] に、オブジェクトの名前を入力します。たとえば、Duo-LDAP-profile と入力します。
- h) [アップロード (Upload)] をクリックし、作成した XML ファイルを選択します。
- i) [OK] をクリックします。

ステップ 5 グループポリシーを作成し、ポリシーでセキュアクライアントプロファイルを選択します。
ユーザに割り当てるグループポリシーは、接続のさまざまな側面を制御します。次の手順では、プロファイルXMLファイルをグループに割り当てる方法について説明します。グループポ

リシーで実行できる操作の詳細については、[RA VPN のグループ ポリシーの設定 \(871 ページ\)](#) を参照してください。

- a) [デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- b) 目次で[グループポリシー]をクリックします。
- c) DfltGrpPolicy を編集するか、[+] をクリックして新しいグループポリシーを作成します。たとえば、すべてのユーザに対して 1 つのリモートアクセス VPN 接続プロファイルが必要な場合は、デフォルトのグループポリシーを編集することが適切です。
- d) [全般] ページで、次のプロパティを設定します。
 - [名前]: 新しいプロファイルの場合は、名前を入力します。たとえば、Duo-LDAP-group と入力します。
 - [Secure Client プロファイル (Secure Client Profiles)] : [+] をクリックし、作成したセキュアクライアントプロファイルを選択します。
- e) [OK] をクリックしてグループプロファイルを保存します。

ステップ 6 Duo LDAP セカンダリ認証に使用するリモートアクセス VPN 接続プロファイルを作成または編集します。

接続プロファイルを設定するには数多くの手順があります。詳細については、[RA VPN 接続プロファイルの設定 \(861 ページ\)](#) を参照してください。次の手順では、Duo-LDAP をセカンダリ認証ソースとして有効にし、セキュアクライアントプロファイルを適用するための主な変更について説明します。新しい接続プロファイルの場合は、残りの必須フィールドも設定する必要があります。この手順では、既存の接続プロファイルを編集しており、これら 2 つの設定だけ変更する必要があると仮定しています。

- a) [RA VPN] ページで、目次の[接続プロファイル]をクリックします。
- b) 既存の接続プロファイルを編集するか、新規に作成します。
- c) [プライマリアイデンティティソース] で、次を設定します。
 - [認証タイプ (Authentication Type)] : [AAA のみ (AAA Only)] または [AAA とクライアント証明書 (AAA and Client Certificate)] のいずれかを選択します。AAA を使用していない場合、二要素認証を設定できません。
 - [ユーザ認証のプライマリアイデンティティソース]: プライマリ Active Directory または RADIUS サーバを選択します。プライマリソースとして Duo-LDAP アイデンティティソースを選択することに注意してください。ただし、Duo-LDAP は認証サービスのみを提供し、アイデンティティサービスは提供しないため、プライマリ認証ソースとして Duo-LDAP を使用する場合、どのダッシュボードにも RA VPN 接続に関連付けられているユーザ名は表示されず、これらのユーザに対してアクセスコントロールルールを作成することはできません(必要に応じて、ローカルアイデンティティソースへのフォールバックを設定できます)。
 - [セカンダリアイデンティティソース (Secondary Identity Source)] : Duo-LDAP のアイデンティティソースを選択します。

Primary Identity Source

Authentication Type

AAA Only

Client Certificate Only

AAA and Client Certificate

Primary Identity Source for User Authentication

AD

Fallback Local Identity Source ⚠

Please Select Local Identity Source

☐ Strip Identity Source server from username☐ Strip Group from Username

Secondary Identity Source

Secondary Identity Source for User Authentication

Duo-LDAP-server

- d) [Next] をクリックします。
- e) [リモートユーザ (Remote User)] ページで、作成または編集した [グループポリシー (Group Policy)] を選択します。

Group Policy

Duo-LDAP-group

- f) このページの [次へ (Next)] をクリックし、次のページの [グローバル設定 (Global Settings)] をクリックします。
- g) [完了 (Finish)] をクリックして、接続プロファイルへの変更を保存します。

ステップ 7 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



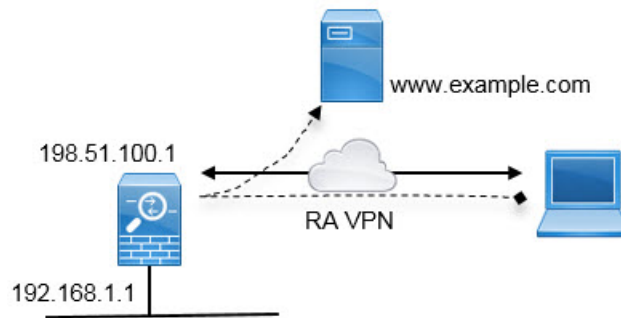
- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

リモートアクセスVPNユーザの外部インターフェイスでインターネットアクセスを実現する方法（ヘアピニング）

リモートアクセスVPNでは、リモートネットワーク上のユーザに自分のデバイスを介してインターネットにアクセスさせたい場合があります。しかし、リモートユーザは、インターネット（外部インターフェイス）に面している同じインターフェイス上のデバイスにアクセスしているため、インターネットトラフィックを外部インターフェイスからすぐに戻す必要があります。この技術はヘアピニングと呼ばれることがあります。

次の図は、例を示しています。外部インターフェイス、198.51.100.1 に設定されているリモートアクセスVPNがあります。リモートユーザのVPNトンネルを分割し、インターネットに向かうトラフィックを外部インターフェイスから戻し、内部ネットワークに向かうトラフィックはデバイスを通し続けるようにできます。そのため、リモートユーザがインターネット上のサーバ（www.example.com など）にアクセスする場合、接続は最初にVPNを通過し、その後 198.51.100.1 インターフェイスからインターネットにルートバックされます。



次の手順では、このサービスの設定方法について説明します。

始める前に

この例は、デバイスが登録済み、リモートアクセスVPNライセンスが適用済み、セキュアクライアントイメージがアップロード済みであることを前提としています。アイデンティティポリシーでも使用されるアイデンティティレلمも設定済みであると想定しています。

手順

ステップ1 リモートアクセスVPN接続を設定します。

設定には、接続プロファイルだけでなく、カスタマイズされたグループポリシーが必要です。ヘアピニングは一般的な設定であり、グループポリシーで必要な設定がほぼ該当するため、この例では新しいグループポリシーを作成するのではなく、デフォルトグループポリシーを編集します。どちらのアプローチも取ることができます。

- a) **[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)]** グループで **[設定の表示 (View Configuration)]** をクリックします。

- b) 目次の [グループポリシー (Group Policies)] をクリックし、DfltGrpPolicy オブジェクトの編集アイコン (🔗) をクリックします。
- c) デフォルトグループポリシーに次の変更を加えます。

- [全般 (General)] ページの [DNSサーバ (DNS Server)] で、VPN エンドポイントがドメイン名を解決するために使用する必要があるサーバを定義する DNS サーバ グループを選択します。

DNS Server

CustomDNSServerGroup

- [スプリットトンネリング (Split Tunneling)] ページで、IPv4 と IPv6 の両方のスプリットトンネリングで [すべてのトラフィックをトンネル経由で許可 (Allow all traffic on tunnel)] オプションを選択します。これはデフォルト設定であるため、すでに正しく設定されている可能性があります。

IPv4 Split Tunneling

Allow all traffic over tunnel

IPv6 Split Tunneling

Allow all traffic over tunnel

(注)

これは、ヘアピン接続を有効にするための重要な設定です。すべてのトラフィックを VPN ゲートウェイに向かわせる場合、スプリット トンネリングは、リモート クライアントが VPN の外部にあるローカル サイトやインターネット サイトに直接アクセスできるようにするための方法です。

- d) [OK] をクリックして、デフォルトグループポリシーの変更を保存します。
- e) [接続プロファイル (Connection Profiles)] をクリックし、既存のプロファイルを編集するか、または新しいプロファイルを作成します。
- f) 接続プロファイルで、ウィザードのページを表示し、他の RA VPN 設定の場合と同じようにすべてのオプションを設定します。ただし、ヘアピン接続を有効にするには、次のオプションを正しく設定する必要があります。

- 手順 2 の [グループポリシー (Group Policy)]。ヘアピンング用にカスタマイズしたグループポリシーを選択します。

Group Policy

DfltGrpPolicy

- 手順 3 の [NAT免除 (NAT Exempt)]。この機能を有効にします。内部インターフェイスを選択し、内部ネットワークを定義するネットワーク オブジェクトを選択します。この例では、オブジェクトは 192.168.1.0/24 を指定します。内部ネットワークに向かう RA VPN トラフィックは、アドレス変換されません。ただし、ヘアピンングされたトラフィックは外部インターフェイスの外に出るため、引き続き NAT が行われます。これは、NAT免除は内部インターフェイスにのみ適用されるためです。他に定義済み

の接続プロファイルがある場合、既存の設定に追加する必要があります。これは、その設定がすべての接続プロファイルに適用されるためです。

NAT Exempt



Inside Interfaces

The interfaces through which remote access VPN users can connect to the internal networks



inside

Inside Networks

The internal networks remote access VPN users are allowed to use. The IP versions of the internal networks and address pools must match, either IPv4, IPv6, or both.



local-network

(注)

[NAT免除 (NAT Exempt)] オプションは、ヘアピン設定のもう 1 つの重要な設定です。

- g) (オプション)。[グローバル設定]で、[復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする(sysopt permit-vpn)]オプションを選択します。

このオプションを選択すると、RA VPN プールアドレスからのトラフィックを許可するアクセス制御ルールを設定する必要がなくなります。このオプションはセキュリティを向上(外部ユーザがプール内のアドレスをスプーフィングできません)させますが、RA VPN トラフィックが、URL フィルタリングや侵入防御を含むインスペクションから除外されることを意味します。このオプションを決定する前に、長所と短所を考慮してください。

- h) RA VPN の設定を確認してから [完了 (Finish)] をクリックします。

ステップ 2 外部インターフェイスからのすべての接続の宛先を外部 IP アドレスのポートに変換する NAT ルールを設定します (インターフェイス PAT)。

デバイスの初期設定を完了すると、InsideOutsideNatRule という名前の NAT ルールが作成されます。このルールは、外部インターフェイスを経由してデバイスで終了するすべてのインターフェイスからの IPv4 トラフィックにインターフェイス PAT を適用します。外部インターフェイスは、[任意 (Any)] 送信元インターフェイスに含まれているため、ルールはすでに存在している必要があります (ルールを編集または削除している場合を除く)。

次の手順で、必要なルールを作成する方法を説明します。

- a) **[ポリシー (Policies)] > [NAT]** をクリックします。
- b) 次のいずれかを実行します。
 - InsideOutsideNatRule を編集するには、[アクション (Action)] 列にマウス オーバーして、編集アイコン (🔧) をクリックします。
 - 新しいルールを作成する場合は、[+] をクリックします。
- c) 次のプロパティを指定してルールを設定します。

- [タイトル (Title)] : 新しいルールの場合は、スペースを含めずにわかりやすい名前を入力します。例、OutsideInterfacePAT。
- [ルールの作成対象 (Create Rule For)] : [手動 NAT (Manual NAT)]。
- [配置 (Placement)] : [自動 NAT ルールの前 (Before Auto NAT Rules)] (デフォルト)。
- [タイプ (Type)] : [ダイナミック (Dynamic)]。
- [元の packets (Original Packet)] : [送信元アドレス (Source Address)] の場合は、[任意 (Any)] または any-ipv4 を選択します。[送信元インターフェイス (Source Interface)] の場合は、デフォルトの [任意 (Any)] を必ず選択してください。[元の packets (Original Packet)] のその他すべてのオプションは、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。
- [Translated Packet (変換後の packets)] : [宛先インターフェイス (Destination Interface)] の場合は、[外部 (outside)] を選択します。[変換後のアドレス (Translated Address)] の場合は、[インターフェイス (Interface)] を選択します。[Translated Packet (変換後の packets)] のその他すべてのオプションは、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。

次の図は、発信元アドレスに [任意 (Any)] を選択している単純な例を示しています。

The screenshot shows the configuration for a NAT rule in Cisco Secure Firewall Device Manager. The rule is titled "OutsideInterfacePAT" and is configured as a "Manual NAT" rule. The placement is set to "Before Auto NAT Rules" and the type is "Dynamic". The configuration is divided into two main sections: "ORIGINAL PACKET" and "TRANSLATED PACKET". In the "ORIGINAL PACKET" section, the "Source Interface" is set to "Any" and the "Source Address" is set to "Any". In the "TRANSLATED PACKET" section, the "Destination Interface" is set to "outside" and the "Source Address" is set to "Interface". The "Destination Address" and "Destination Port" for both sections are set to "Any". Red circles highlight the "Create Rule for" dropdown, the "Placement" dropdown, the "Type" dropdown, and the "Source Interface", "Source Address", "Destination Interface", and "Source Address" dropdowns in the "TRANSLATED PACKET" section.

d) [OK] をクリックします。

ステップ 3 (接続プロファイルで [復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn))] を設定していない場合。) リモート アクセス VPN アドレス プールからのアクセスを許可するアクセス制御ルールを設定します。

接続プロファイルで [復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn))] を選択した場合、RA VPN プールアドレスからのトラフィックは、アクセス制御ポリシーをバイパスします。このトラフィックに適用されるアクセス制御ルールを作成することはできません。オプションを無効にした場合にのみ、ルールを作成する必要があります。

次の例では、アドレスプールから任意の宛先へのトラフィックが許可されます。これは、ユーザ固有の要件を満たすように調整できます。不要なトラフィックを除外するブロックルールをルールの前に置くことができます。

a) [ポリシー (Policies)] > [アクセス制御 (Access Control)] をクリックします。

b) [+] をクリックして新しいルールを作成します。

c) 次のプロパティを指定してルールを設定します。

- [順序 (Order)] : 接続と一致し、それらの接続をブロックする可能性があるその他すべてのルールより前の位置をポリシー内で選択します。デフォルトでは、ルールはポリシーの最後に追加されます。後でルールを再配置する必要がある場合は、このオプションを編集するか、テーブルの適切なスロットにルールをドラッグアンドドロップすることができます。
- [タイトル (Title)] : スペースを含めずにわかりやすい名前を入力します。例、RAVPN-address-pool。
- [アクション (Action)] : [許可 (Allow)]。このトラフィックのプロトコル違反または侵入を調べない場合は、[信頼 (Trust)] を選択できます。
- [送信元または宛先 (Source/Destination)] タブ : [送信元 (Source)] > [ネットワーク (Network)] で、アドレス プールの RA VPN 接続プロファイルに使用しているのと同じオブジェクトを選択します。[送信元と宛先 (Source and Destination)] の他のすべてのオプションについては、デフォルトの [任意 (Any)] のままにします。

SOURCE			DESTINATION		
Zones	+	Networks	+	Ports	+
ANY		ravpn-pool		ANY	ANY

- [アプリケーション (Application)]、[URL]、[ユーザ (Users)] タブ : これらのタブはデフォルトの設定のままにします。つまり、何も選択しません。
- [侵入 (Intrusion)]、[ファイル (File)] タブ : 必要に応じて、脅威やマルウェアを検査するための侵入ポリシーやファイル ポリシーを選択できます。
- [ロギング (Logging)] タブ : 必要に応じて接続ロギングを有効にできます。

d) **[OK]** をクリックします。

ステップ 4 変更を保存します。

a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または **[OK]** をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

リモート アクセス VPN を使用した外部ネットワークでのディレクトリ サーバの使用法

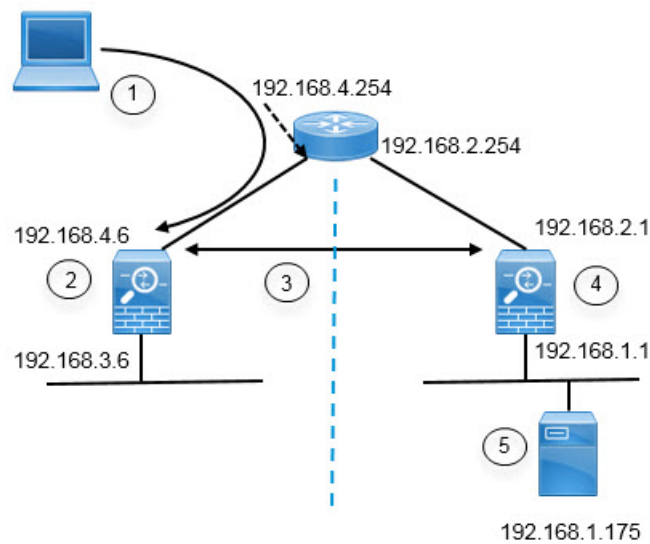
リモートアクセス VPN を設定し、モバイルワーカーや在宅勤務者に対して内部ネットワークへのセキュア接続を許可できます。接続のセキュリティはディレクトリサーバに応じて異なります。セキュリティサーバは、許可されたユーザだけがアクセスできるようにユーザ接続を認証します。

ディレクトリサーバが内部ネットワークではなく外部ネットワークにある場合は、外部インターフェイスからディレクトリサーバがあるネットワークへのサイト間 VPN 接続を設定する必要があります。**サイト間 VPN 設定におけるヒント**：リモートアクセス VPN デバイスの外部インターフェイスアドレスを、サイト間 VPN 接続の「内部」ネットワークと、ディレクトリサーバの前に位置するデバイスのリモートネットワークに含める必要があります。これについては、次の手順で詳しく説明します。



(注) 仮想管理インターフェイスのゲートウェイとしてデータ インターフェイスを使用する場合には、この設定によりアイデンティティ ポリシーにディレクトリを使用できるようになります。管理ゲートウェイとしてデータ インターフェイスを使用しない場合は、管理ネットワークから、サイト間 VPN 接続に参加する内部ネットワークへのルートがあることを確認してください。

この使用例では次のネットワーク シナリオが実現します。



図のコールアウト	説明
1	192.168.4.6 へ VPN 接続するリモート アクセス ホスト。クライアントは 172.18.1.0/24 アドレス プールのアドレスを取得します。
2	サイト A：リモート アクセス VPN をホストします。
3	サイト A とサイト B の 脅威に対する防御 デバイスの外部インターフェイス間のサイト間 VPN トンネル。
4	サイト B：ディレクトリ サーバをホストします。
5	サイト B の内部ネットワーク上のディレクトリ サーバ。

始める前に

この使用例では、デバイス設定ウィザードで標準のベースライン構成が完了していることを前提としています。詳細：

- `inside_zone` から `outside_zone` へのトラフィックを許可（または信頼）する `Inside_Outside_Rule` アクセス制御ルールが設定されている。
- `inside_zone` セキュリティ ゾーンに内部インターフェイス、`outside_zone` セキュリティ ゾーンに外部インターフェイスが含まれている。
- 内部インターフェイスから外部インターフェイスへ流れるすべてのトラフィックに対してインターフェイス PAT を実行する `InsideOutsideNATRule` がある。デフォルトで内部ブリッジグループを使用するデバイスには、インターフェイス PAT に関する複数のルールが設定されていることがあります。
- 外部インターフェイスを指す `0.0.0.0/0` のスタティック IPv4 ルートがある。この例では、外部インターフェイスにスタティック IP アドレスを使用することを前提としています。

DHCP を使用してスタティックルートを動的に取得することもできます。この例では、次のスタティック ルートが想定されます。

- サイト A : 外部インターフェイス、ゲートウェイは 192.168.4.254 です。
- サイト B : 外部インターフェイス、ゲートウェイは 192.168.2.254 です。

手順

ステップ 1 ディレクトリ サーバをホストする **サイト B** でサイト間 VPN 接続を設定します。

- a) **[デバイス (Device)]** をクリックし、次に **[サイト間 VPN (Site-to-Site VPN)]** グループの **[設定の表示 (View Configuration)]** をクリックします。
- b) **[+]** ボタンをクリックします。
- c) **[エンドポイント設定 (Endpoint Settings)]** の次のオプションを設定します。
 - **[接続プロファイル名 (Connection Profile Name)]** : 名前を入力します。例えば、(サイト A への接続を示す) **SiteA** と入力します。
 - **[ローカル サイト (Local Site)]** : 以下のオプションによってローカルエンドポイントを定義します。
 - **[ローカル VPN アクセス インターフェイス (Local VPN Access Interface)]** : **outside** インターフェイス (図でアドレスが 192.168.2.1 のインターフェイス) を選択します。
 - **[ローカル ネットワーク (Local Network)]** : **[+]** をクリックし、VPN 接続に参加させるローカルネットワークを特定するネットワーク オブジェクトを選択します。ディレクトリ サーバは、このネットワーク上にあるのでサイト間 VPN に参加できます。オブジェクトがまだ存在していない場合には、**[新しいネットワークの作成 (Create New Network)]** をクリックし、192.168.1.0/24 ネットワークのオブジェクトを設定します。オブジェクトを保存した後で、ドロップダウンリストからそのオブジェクトを選択し、**[OK]** をクリックします。

Add Network Object

Name

Network192.168.1.0

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

192.168.1.0/24

- [リモート サイト (Remote Site)] : 以下のオプションによってリモート エンドポイントを定義します。
 - [リモート IP アドレス (Remote IP Address)] : 192.168.4.6 (VPN 接続をホストするリモート VPN ピアのインターフェイスの IP アドレス) を入力します。
 - [リモート ネットワーク (Remote Network)] : [+] をクリックし、VPN 接続に参加させるリモート ネットワークを特定するネットワーク オブジェクトを選択します。[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックし、以下のオブジェクトを設定し、リストからこれらのオブジェクトを選択します。
 1. SiteAInside、Network、192.168.3.0/24.

Add Network Object

Name

SiteAInside

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

192.168.3.0/24

2. SiteAInterface、Host、192.168.4.6. ヒント：リモートアクセス VPN 接続ポイントのアドレスを、サイト間 VPN 接続のリモートネットワークの一部として含める必要があります。これにより、そのインターフェイスでホストされている RA VPN がディレクトリ サーバを使用できるようになります。

Add Network Object

Name

SiteAInterface

Description

Type

☐ Network ☒ Host

Host

192.168.4.6

終了すると、エンドポイント設定は次のようになります。

Connection Profile Name

SiteA

LOCAL SITE

Local VPN Access Interface

outside

Local Network

+

Network192.168.1.0

REMOTE SITE

☒ Static ☐ Dynamic

Remote IP Address

192.168.4.6

Remote Network

+

SiteAInside

SiteAInterface

- d) [次へ (Next)] をクリックします。
- e) VPN のプライバシー設定を定義します。

この使用例では、エクスポート制御機能を使用できる資格があり、これにより強力な暗号化が使用可能であることを前提としています。各自のニーズとライセンスコンプライアンスに合わせて次に示す設定例を調整してください。

- [IKE バージョン 2 (IKE Version 2)]、[IKE バージョン 1 (IKE Version 1)] : デフォルトのままにします ([IKE バージョン 2 (IKE Version 2)] は有効、[IKE バージョン 1 (IKE Version 1)] は無効)。
- [IKE ポリシー (IKE Policy)] : [編集 (Edit)] をクリックし、[AES-GCM-NULL-SHA] と [AES-SHA-SHA] を有効にし、[DES-SHA-SHA] を無効にします。
- [IPsec プロポーザル (IPsec Proposal)] : [編集 (Edit)] をクリックします。[IPsec プロポーザル (IPsec Proposal)] ダイアログボックスで [+] をクリックし、次に [デフォルトを設定 (Set Default)] を選択してデフォルトの AES-GCM プロポーザルを選択します。
- [ローカル事前共有キー (Local Preshared Key)]、[リモートピア事前共有キー (Remote Peer Preshared Key)] : このデバイスとリモートデバイスで VPN 接続に対して定義されているキーを入力します。IKEv2 では異なるキーを使用できます。キーは 1 ~ 127 文字の英数字で指定できます。サイト A のデバイスでサイト間 VPN 接続を作成するときに同じ文字列を設定する必要があるため、これらのキーは覚えておいてください。

IKE ポリシーは次のようになります。

The screenshot shows the configuration page for a VPN tunnel. At the top, there are two toggle switches for 'IKE Version 2' (which is turned on) and 'IKE Version 1' (which is turned off). Below these are sections for 'IKE Policy' (set to 'Globally applied' with an 'EDIT...' button), 'IPSec Proposal' (set to 'Default set selected' with an 'EDIT...' button), 'Authentication Type' (with 'Pre-shared Manual Key' selected and 'Certificate' as an option), and two password fields: 'Local Pre-shared Key' and 'Remote Peer Pre-shared Key', both containing masked characters.

f) [追加オプション (Additional Options)] を設定します。

- [NAT 免除 (NAT Exempt)] : 内部ネットワークをホストするインターフェイス (この例では **inside** インターフェイス) を選択します。通常、サイト間 VPN トンネル内のトラフィックで IP アドレスを変換することは推奨されません。このオプションは、ローカル ネットワークが (ブリッジ グループ メンバーではなく) 単一のルーテッドインターフェイスの背後にある場合のみ機能します。ローカル ネットワークが複数のルーテッドインターフェイスの背後にある場合、または 1 つ以上のブリッジ グループ メンバーになっている場合は、手動で NAT 免除ルールを作成する必要があります。必要なルールを手動で作成する方法については、[NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除 \(823 ページ\)](#) を参照してください。
- [Perfect Forward Secrecy 用 Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy)] : [グループ 19 (Group 19)] を選択します。このオプションは、暗号化された交換ごとに一意のセッションキーを生成および使用するために、Perfect Forward Secrecy (PFS) を使用するかどうかを指定します。一意のセッションキーを使用することによって、以降の復号から交換が保護されます。このことは、交換全体が記録され、攻撃者がエンドポイントデバイスで使用される事前共有キーまたは秘密キーを入手している場合であっても該当します。オプションの説明については、[使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定 \(797 ページ\)](#) を参照してください。

オプションは次のようになります。

Additional Options

NAT Exempt

Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy

inside



19



- g) [次へ (Next)] をクリックします。
- h) 概要を確認してから [完了 (Finish)] をクリックします。
概要情報はクリップボードにコピーされます。この情報をドキュメントに貼り付けて、リモート ピアを設計する際の参考にしたたり、ピアの設定担当者に送信したりできます。
- i) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- j) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックして、導入が正常に完了するまで待ちます。

これでサイト B デバイスがサイト間 VPN 接続の片側をホストできるようになりました。

ステップ 2 サイト B デバイスからログアウトし、**サイト A** デバイスにログインします。

ステップ 3 リモート アクセス VPN をホストする**サイト A** でサイト間 VPN 接続を設定します。

- a) [デバイス (Device)] をクリックし、次に [サイト間 VPN (Site-to-Site VPN)] グループの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- b) [+] ボタンをクリックします。
- c) [エンドポイント設定 (Endpoint Settings)] の次のオプションを設定します。
 - [接続プロファイル名 (Connection Profile Name)] : 名前を入力します。たとえば、サイト B への接続を示す SiteB と入力します。
 - [ローカル サイト (Local Site)] : 以下のオプションによってローカルエンドポイントを定義します。
 - [ローカル VPN アクセス インターフェイス (Local VPN Access Interface)] : **outside** インターフェイス (図でアドレスが 192.168.4.6 のインターフェイス) を選択します。
 - [ローカル ネットワーク (Local Network)] : [+] をクリックし、VPN 接続に参加させるローカルネットワークを特定するネットワーク オブジェクトを選択します。[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックし、以下のオブジェクトを設定し、リストからこれらのオブジェクトを選択します。**サイト B** のデバイスに同じオブジェクトを作成しましたが、**サイト A** のデバイスでも再度同じオブジェクトを作成する必要があります。

1. SiteAInside、Network、192.168.3.0/24.

Add Network Object

Name

SiteAInside

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

192.168.3.0/24

2. SiteAInterface、Host、192.168.4.6. ヒント：リモートアクセス VPN 接続ポイントのアドレスを、サイト間 VPN 接続の内部ネットワークの一部として含める必要があります。これにより、そのインターフェイスでホストされている RA VPN がリモートネットワークのディレクトリ サーバを使用できるようになります。

Add Network Object

Name

SiteAInterface

Description

Type

☐ Network ☒ Host

Host

192.168.4.6

- [リモート サイト (Remote Site)]：以下のオプションによってリモート エンドポイントを定義します。

- [リモート IP アドレス (Remote IP Address)] : 192.168.2.1 (VPN 接続をホストするリモート VPN ピアのインターフェイスの IP アドレス) を入力します。
- [リモート ネットワーク (Remote Network)] : [+] をクリックし、VPN 接続に参加させるリモート ネットワーク (ディレクトリ サーバを含むネットワーク) を特定するネットワーク オブジェクトを選択します。[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックし、192.168.1.0/24 ネットワークのオブジェクトを設定します。オブジェクトを保存した後で、ドロップダウンリストからそのオブジェクトを選択し、[OK] をクリックします。サイト B のデバイスに同じオブジェクトを作成しましたが、サイト A のデバイスでも再度同じオブジェクトを作成する必要があります。

Add Network Object

Name

Network192.168.1.0

Description

Type



Network



Host

Network

192.168.1.0/24

終了すると、エンドポイント設定は次のようになります。サイト B の設定と比較すると、ローカル/リモートネットワークで逆の設定が使用されていることに注意してください。ポイントツーポイント接続の両端がこのようなようになります。

Connection Profile Name

SiteB

LOCAL SITE

Local VPN Access Interface

outside

Local Network



SiteAInside

SiteAInterface

REMOTE SITE

☒ Static ☐ Dynamic

Remote IP Address

192.168.2.1

Remote Network



Network192.168.1.0

- d) [次へ (Next)] をクリックします。
- e) VPN のプライバシー設定を定義します。

サイト B 接続と同じ IKE バージョン、ポリシー、および IPsec プロポーザル、同じ事前共有キーを設定しますが、ローカルとリモートの事前共有キーが逆になっていることを確認してください。

IKE ポリシーは次のようになります。

IKE Version 2



IKE Policy

Globally applied

EDIT...

IKE Version 1



IPSec Proposal

Default set selected

EDIT...

Authentication Type

☒ Pre-shared Manual Key ☐ Certificate

Local Pre-shared Key

●●●●●●●●

Remote Peer Pre-shared Key

●●●●●●●●

- f) [追加オプション (Additional Options)] を設定します。

- [NAT 免除 (NAT Exempt)] : 内部ネットワークをホストするインターフェイス (この例では **inside** インターフェイス) を選択します。通常、サイト間 VPN トンネル内のトラフィックで IP アドレスを変換することは推奨されません。このオプションは、ローカル ネットワークが (ブリッジグループ メンバーではなく) 単一のルーテッドインターフェイスの背後にある場合にのみ機能します。ローカルネットワークが複数のルーテッドインターフェイスの背後にある場合、または 1 つ以上のブリッジグループ メンバーになっている場合は、手動で NAT 免除ルールを作成する必要があります。必要なルールを手動で作成する方法については、[NAT からのサイト間 VPN トラフィックの免除 \(823 ページ\)](#) を参照してください。
- [Perfect Forward Secrecy 用 Diffie-Hellman グループ (Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy)] : [グループ 19 (Group 19)] を選択します。

オプションは次のようになります。

Additional Options

NAT Exempt

Diffie-Hellman Group for Perfect Forward Secrecy

- [次へ (Next)] をクリックします。
- 概要を確認してから [完了 (Finish)] をクリックします。
- Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックして、導入が正常に完了するまで待ちます。

これでサイト A デバイスがサイト間 VPN 接続のもう一方の側をホストできるようになりました。サイト B は互換性のある設定を使用してすでに設定されているため、2 つのデバイスが VPN 接続をネゴシエートします。

接続を確認するには、デバイス CLI にログインし、ディレクトリ サーバに対して ping を実行します。show ipsec sa コマンドを使用して、セッション情報を表示することもできます。

ステップ 4 サイト A のディレクトリ サーバを設定します。[テスト (Test)] をクリックして、接続があることを確認します。

- [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [アイデンティティレルム (Identity Realm)] [[アイデンティティソース (Identity Sources)] を選択します。
- [+] > [AD] をクリックします。
- 基本レルムのプロパティを設定します。

- [名前 (Name)] : ディレクトリ レルムの名前。たとえば、AD などです。

- [タイプ (Type)] : ディレクトリ サーバのタイプ。サポートされているタイプは **Active Directory** のみのため、このフィールドは変更できません。
- [ディレクトリユーザ名 (Directory Username)]、[ディレクトリパスワード (Directory Password)] : 取得するユーザ情報に対して適切な権限を持つユーザの識別用ユーザ名とパスワード。Active Directory では、昇格されたユーザ特権は必要ありません。ドメイン内の任意のユーザを指定できます。ユーザ名は **Administrator@example.com** などの完全修飾名である必要があります (Administrator だけでなく)。

(注)

この情報から **ldap-login-dn** と **ldap-login-password** が生成されます。たとえば、**Administrator@example.com** は **cn=adminisntrator,cn=users,dc=example,dc=com** と変換されます。cn=users は常にこの変換の一部であるため、ここで指定するユーザは、共通名の「users」フォルダの下で設定する必要があります。

- [ベースDN (Base DN)] : ユーザおよびグループ情報、つまり、ユーザとグループの共通の親を検索またはクエリするためのディレクトリ ツリー。たとえば、**cn=users,dc=example,dc=com** となります。ベース DN の検索方法については、[ディレクトリ ベース DN の決定 \(212 ページ\)](#) を参照してください。
- [AD プライマリ ドメイン (AD Primary Domain)] : デバイスが参加する必要がある、完全修飾 Active Directory ドメイン名。たとえば、**example.com** のように指定します。

Name AD	Type Active Directory (AD)
Directory Username Administrator@example.com <i>e.g. user@example.com</i>	Directory Password *****
Base DN cn=users,dc=example,dc=com <i>e.g. ou=user, dc=example, dc=com</i>	AD Primary Domain example.com <i>e.g. example.com</i>

d) ディレクトリ サーバのプロパティを設定します。

- [ホスト名/IP アドレス (Hostname/IP Address)] : ディレクトリ サーバのホスト名または IP アドレス。サーバに対して暗号化された接続を使用する場合、IP アドレスではなく、完全修飾ドメイン名を入力する必要があります。この例では、**192.168.1.175** と入力します。
- [ポート (Port)] : サーバとの通信に使用するポート番号。デフォルトは **389** です。LDAPS を暗号化方式に選択している場合は、ポート **636** を使用します。この例では **389** のままにします。

- [暗号化 (Encryption)] : ユーザとグループ情報をダウンロードするときに暗号化接続を使用します。デフォルトは[なし (None)]です。したがって、ユーザとグループ情報はクリアテキストでダウンロードされます。RA VPN の場合は[LDAPS] (LDAP over SSL) を使用できます。このオプションを選択する場合はポート 636 を使用します。RA VPN は STARTTLS をサポートしていません。この例では[なし (None)]を選択します。
- [信頼できる CA 証明書 (Trusted CA Certificate)] : 暗号化方式を選択した場合は、認証局 (CA) 証明書をアップロードして、システムとディレクトリ サーバの間に信頼できる接続を有効化します。認証に証明書を使用している場合、証明書のサーバ名とサーバのホスト名/IP アドレスが一致する必要があります。たとえば、IP アドレスとして 192.168.1.175 を使用し、証明書内で ad.example.com を使用した場合は、接続が失敗します。

Directory Server Configuration

Hostname / IP Address	Port
192.168.1.175	389
e.g. ad.example.com	
Encryption	Trusted CA certificate
NONE	Please select a certificate

- e) システムがサーバと通信できるか確認するには、[テスト (Test)] ボタンをクリックします。

システムは別個のプロセスを使用してサーバにアクセスします。このため、アイデンティティ ポリシーでは接続に成功してリモート アクセス VPN では失敗するなど、ある使用方法では接続が成功しても、別の方法では失敗したことを示すエラーが表示される場合があります。サーバにアクセスできない場合は、指定した IP アドレスとホスト名が正しく、DNS サーバにそのホスト名が入力されているかなどを確認します。また、サイト間 VPN 接続が機能しており、VPN にサイト A の外部インターフェイス アドレスを含めており、NAT がディレクトリ サーバのトラフィックを変換していないことを確認します。サーバのスタティック ルートを設定することが必要な場合もあります。

- f) [OK]をクリックします。

ステップ 5 [デバイス (Devices)] > [スマート ライセンス (Smart License)] > [設定の表示 (View Configuration)] をクリックし、RA VPN ライセンスを有効にします。

RA VPN ライセンスを有効にする場合は、購入したライセンスのタイプ (Plus、Apex (または両方)、VPN Only) を選択します。詳細については、[リモート アクセス VPN のライセンス要件 \(851 ページ\)](#) を参照してください。

RA VPN License

Type

PLUS ▼

DISABLE

✓ Enabled

Please select the license type that you purchased to enable remote access VPN. Note that Firepower Device Manager does not support any of the advanced features covered by the Apex license.

Includes: RA-VPN

ステップ 6 サイト A のリモート アクセス VPN を設定します。

- a) **[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)]** グループで **[設定の表示 (View Configuration)]** をクリックします。 **[接続プロファイル (Connection Profiles)]** ページを表示していることを確認します。
- b) 接続プロファイルを作成または編集します。
- c) ウィザードの最初のステップでプロファイル名を設定し、その後にプライマリ認証ソースとして AD レルムを選択します。必要に応じて、フォールバックアイデンティティソースとしてローカルデータベースを選択できます。

Primary Identity Source

Authentication Type

AAA Only

Client Certificate Only

AAA and Client Certificate

Primary Identity Source for User Authentication

AD ▼

Fallback Local Identity Source ⚠

LocalIdentitySource ▼

- d) アドレスプールを設定します。

この例では、**[+]** をクリックしてから **IPv4 アドレスプール** で **[新しいネットワークの作成 (Create New Network)]** を選択し、**172.18.1.0/24** ネットワークのオブジェクトを作成し、そのオブジェクトを選択します。クライアントには、このプールからアドレスが割り当てられます。IPv6 プールは空白のままにします。外部インターフェイスの IP アドレスと同じサブネット上にアドレス プールを指定することはできません。

オブジェクトは次のようになります。

Name

ra-vpn-pool

Description

Type

☒ Network

Network

172.18.1.0/24

プールの仕様は次のようになります。

Client Address Pool Assignment

IPv4 Address Pool

Endpoints are provided an address from this pool



ra-vpn-pool

IPv6 Address Pool

Endpoints are provided an address from this pool



DHCP Servers



- e) [次へ (Next)] をクリックし、適切なグループポリシーを選択します。

選択したポリシーに関する要約情報を確認します。DNSサーバが設定されていることを確認します。設定されていない場合は、ここでポリシーを編集して、DNSを設定します。

- f) [次へ (Next)] をクリックし、[グローバル設定 (Global Settings)] で [復号されたトラフィックでアクセスコントロールポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn))] オプションを選択し、[NAT免除 (NAT Exempt)] オプションを設定します。

[NAT免除 (NAT Exempt)] では、次のオプションを設定する必要があります。他に定義済みの接続プロファイルがある場合、既存の設定に追加する必要があります。これは、その設定がすべての接続プロファイルに適用されるためです。

- [内部インターフェイス (Inside Interfaces)] : [内部 (inside)] インターフェイスを選択します。これらは、リモート ユーザがアクセスする内部ネットワークのインターフェイスです。これらのインターフェイスに関する NAT ルールが作成されます。
- [内部ネットワーク (Inside Networks)] : SiteAInside ネットワーク オブジェクトを選択します。これらは、リモート ユーザがアクセスする内部ネットワークを表すネットワーク オブジェクトです。

Access Control for VPN Traffic

Decrypted VPN traffic is subjected to access control policy inspection by default. Enabling the Bypass Access Control policy for decrypted traffic option bypasses the access control policy, but for remote access VPN, the VPN Filter ACL and the authorization ACL downloaded from the AAA server are still applied to VPN traffic.

☒ Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn)

NAT Exempt



Inside Interfaces

The interfaces through which remote access VPN users can connect to the internal networks



inside

Inside Networks

The internal networks remote access VPN users are allowed to use. The IP versions of the internal networks and address pools must match, either IPv4, IPv6, or both.



SiteAInside

- g) サポートするプラットフォームのセキュアクライアント パッケージをアップロードします。
- h) [次へ (Next)] をクリックして、設定を確認します。

最初に、サマリーが正しいことを確認します。

次に、[手順 (Instructions)] をクリックして、セキュアクライアント ソフトウェアをインストールし、VPN 接続を完了できることをテストするためにエンドユーザーが最初に行う必要がある内容を確認します。[コピー (Copy)] をクリックして、それらの手順をクリップボードにコピーし、テキスト ファイルまたは電子メールに貼り付けます。

- i) [終了] をクリックします。

ステップ 7 Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



ステップ 8 [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックして、導入が正常に完了するまで待ちます。

これで、サイト A のデバイスが RA VPN の接続を承認できるようになりました。外部ユーザーにセキュアクライアント クライアントをインストールさせて、VPN 接続を完了させます。

接続を確認するには、デバイス CLI にログインし、**show vpn-sessiondb anyconnect** コマンドを使用してセッション情報を表示します。

グループによって RA VPN アクセスを制御する方法

リモートアクセス VPN 接続プロファイルを、グループポリシーに基づいて内部リソースへの差分アクセスを提供するように設定することができます。たとえば、従業員に無制限のアクセスを提供し、請負業者には単一の内部ネットワーク以外へのアクセスを提供したくない場合

は、グループポリシーを使用して、適切にアクセスを制限するための異なる ACL を定義できます。

次の例は、192.168.2.0/24 内部サブネットにのみアクセスする必要がある請負業者の RA VPN 接続の設定方法を示しています。通常の従業員の場合、VPN に対してトラフィックフィルタが定義されていないデフォルトグループポリシーを使用できます。デフォルトグループポリシーを編集してこれらのユーザに制限を適用し、次のように構築された ACL を適用することができます。

始める前に

次の手順では、請負業者に使用するアイデンティティソースがすでに作成されていると仮定します。これは、通常の従業員に使用するものとは異なるソースである可能性があります。アイデンティティソースはアクセスの制限に厳密に関連するものではないため、この例からは省略します。

また、この例では、「inside2」インターフェイスが 192.168.2.0/24 サブネットを IP アドレス 192.168.2.1 でホストするように設定されていると想定します（サブネット上のその他のアドレスも許可されます）。

手順

ステップ 1 RA VPN トラフィックを制限するため、拡張アクセスコントロールリスト (ACL) を設定します。

まず、ターゲット 192.168.2.0/24 を定義するネットワークオブジェクトを設定し、次にアクセスリストを定義するスマート CLI オブジェクトを作成する必要があります。ACL の最後には暗黙の「deny」があるため、サブネットへのアクセスを許可することだけが必要となります。サブネット外の IP アドレスへのトラフィックは拒否されます。この例は、IPv4 のみに適用されます。また、特定のサブネットへの IPv6 アクセスを制限するためのオブジェクトも設定できます。ネットワークオブジェクトを作成し、同じ ACL に IPv6 ベースの ACE を追加するだけです。

a) **[オブジェクト]>[ネットワーク]**を選択し、必要なオブジェクトを作成します。

たとえば、オブジェクトに **ContractNetwork** という名前を付けます。このオブジェクトは次のようになります。

Name

ContractNetwork

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

192.168.2.0/24

e.g. 192.168.2.0/24

- b) [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] > [Smart CLI] > [オブジェクト (Objects)] を選択します。
- c) [+] をクリックして新しいオブジェクトを作成します。
- d) ACL の名前を入力します。 **ContractACL** などを入力します。
- e) [CLI テンプレート (CLI Template)] の場合は、[拡張アクセスリスト (Extended Access List)] を選択します。
- f) [テンプレート (Template)] 本文で次のように設定します。
 - configure access-list-entry action = permit
 - source-network = any-ipv4
 - destination-network = ContractNetwork object
 - configure permit port = any
 - configure logging = default

ACE は次のようになります。

Name	Description
ContractACL	

CLI Template
Extended Access List

Template
<pre> 1 access-list ContractACL extended 2 configure access-list-entry permit 3 permit network source [any-ipv4] destination [ContractNetwork] 4 configure permit port any 5 permit port source ANY destination ANY 6 configure logging default 7 default log set log-level INFORMATIONAL log-interval 300 </pre>

g) [OK]をクリックします。

この ACL は、次に変更を展開するときに設定されます。別のポリシーでオブジェクトを使用して強制的に展開する必要はありません。

ステップ2 ACL を使用するグループポリシーを作成します。

最低限として、グループポリシーの DNS サーバを設定する必要もあります。必要に応じて他のオプションを設定できます。次の手順は、この使用例に関連する1つの設定に重点を置いています。

- [デバイス (Device)] > [RA VPN] > [グループポリシー (Group Policies)] を選択します。
- [+] をクリックして新しいグループポリシーを作成します。
- [全般 (General)] ページで、ポリシーの名前 (ContractGroup など) を入力します。
- 目次で[トラフィックフィルタ]をクリックします。
- [アクセスリストフィルタ (Access List Filter)] の場合は、ContractACL オブジェクトを選択します。

この例では、VLAN オプションは空のままにします。別の方法として、フィルタリング用の VLAN を設定し、その VLAN にサブインターフェイスを設定することも可能です。

Access List Filter
ContractACL
Restrict VPN to VLAN
1-4094

f) [OK] をクリックして、グループポリシーを保存します。

ステップ3 コントラクタの接続プロファイルを設定します。

- a) [RA VPN] ページで、目次の [接続プロファイル (Connection Profiles)] をクリックします。
- b) 新しい接続プロファイルを作成するには、[+] をクリックします。
- c) ウィザードのステップ 1 を完了し、[次へ (Next)] をクリックします。

プロファイルの名前 (Contractors など) を入力します。

残りのオプションを通常どおりに設定します。これには、請負業者の適切な認証ソースの選択、アドレスプールの定義が含まれます。

- d) 請負業者用に設定されているグループポリシーを選択し、[次へ (Next)] をクリックします。

Group Policy

ContractGroup

- e) グローバル設定で、[復号されたトラフィックでアクセスコントロール ポリシーをバイパスする (sysopt permit-vpn) (Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn)] オプションを選択し、[NAT免除 (NAT Exempt)] オプションを設定します。

[NAT免除 (NAT Exempt)] では、次のオプションを設定する必要があります。他に定義済みの接続プロファイルがある場合、既存の設定に追加する必要があります。これは、その設定がすべての接続プロファイルに適用されるためです。

- [内部インターフェイス (Inside Interfaces)] : **inside2** インターフェイスを選択します。これらは、リモート ユーザがアクセスする内部ネットワークのインターフェイスです。これらのインターフェイスには NAT ルールが作成されます。
- [内部ネットワーク (Inside Networks)] : **ContractNetwork** ネットワーク オブジェクトを選択します。これらは、リモート ユーザがアクセスする内部ネットワークを表すネットワーク オブジェクトです。

Access Control for VPN Traffic

Decrypted VPN traffic is subjected to access control policy inspection by default. Enabling the Bypass Access Control policy for decrypted traffic option bypasses the access control policy, but for remote access VPN, the VPN Filter ACL and the authorization ACL downloaded from the AAA server are still applied to VPN traffic

☒ Bypass Access Control policy for decrypted traffic (sysopt permit-vpn)

NAT Exempt



Inside Interfaces

The interfaces through which remote access VPN users can connect to the internal networks



inside2

Inside Networks

The internal networks remote access VPN users are allowed to use. The IP versions of the internal networks and address pools must match, either IPv4, IPv6, or both.



ContractNetwork

- f) サポートするプラットフォームのセキュアクライアントパッケージをアップロードします。
- g) [次へ (Next)] をクリックして、設定を確認します。

最初に、サマリーが正しいことを確認します。

次に、[手順 (Instructions)] をクリックして、セキュアクライアント ソフトウェアをインストールし、VPN 接続を完了できることをテストするためにエンドユーザーが最初に行う必要がある内容を確認します。[コピー (Copy)] をクリックして、それらの手順をクリップボードにコピーし、テキスト ファイルまたは電子メールに貼り付けます。

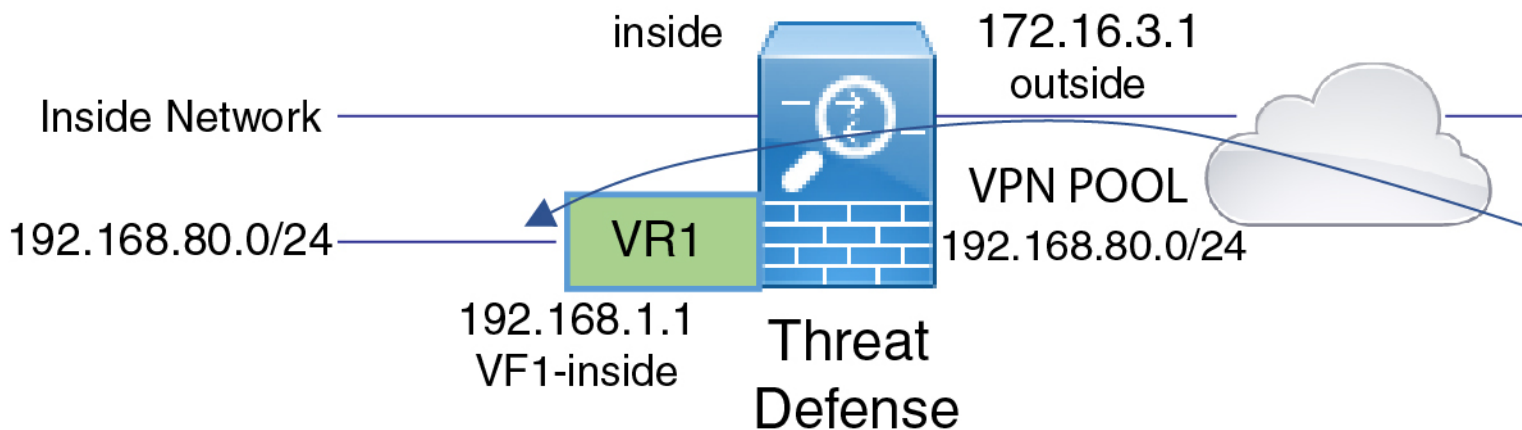
- h) [完了 (Finish)] をクリックします。

異なる仮想ルータの内部ネットワークへの RA VPN アクセスを可能にする方法

1 つのデバイスに複数の仮想ルータを設定する場合には、グローバル仮想ルータで RA VPN を設定する必要があります。カスタム仮想ルータに割り当てられているインターフェイスに RA VPN を設定することはできません。

仮想ルータのルーティングテーブルはそれぞれ異なるため、RA VPN ユーザが別の仮想ルータの一部であるネットワークにアクセスする必要がある場合には、スタティックルートを作成する必要があります。

次の例について考えます。RA VPN ユーザが 172.16.3.1 の外部インターフェイスに接続するとします。このユーザには 192.168.80.0/24 のプールに含まれる IP アドレスが割り当てられます。その結果、このユーザは、グローバル仮想ルータに接続されている内部ネットワークにアクセスできるようになります。ただし、仮想ルータ VR1 の一部である 192.168.1.0/24 ネットワークに到達することはできません。VR1 ネットワークと RA VPN ユーザ間のトラフィックフローを許可するには、双方向のスタティックルートを設定する必要があります。



始める前に

この例では、すでに RA VPN を設定し、仮想ルータを定義し、インターフェイスを設定して適切な仮想ルータに割り当てていることを前提としています。

手順

ステップ 1 グローバル仮想ルータから VR1 へのルートリークを設定します。

このルートにより、VPN プール内の IP アドレスが割り当てられた セキュアクライアントは、VR1 仮想ルータの 192.168.1.0/24 ネットワークにアクセスできるようになります。

a) **[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] > [設定の表示 (View Configuration)]** の順に選択します。

b) グローバル仮想ルータの表示アイコン (🔍) をクリックします。

c) グローバルルータの **[スタティックルーティング (Static Routing)]** タブで、**[+]** をクリックしてルートを設定します。

- **[名前 (Name)]** : 任意の名前 (**ravpn-leak-vr1** など) を付けることができます。
- **[インターフェイス (Interface)]** : **vr1-inside** を選択します。
- **[プロトコル (Protocol)]** : **IPv4** を選択します。
- **[ネットワーク (Networks)]** : 192.168.1.0/24 ネットワークを定義するオブジェクトを選択します。必要な場合には、**[新しいネットワークの作成 (Create New Network)]** をクリックしてオブジェクトを作成します。

Name

nw-192-168.1.0

Description

Type

☒ Network ☐ Host

Network

192.168.1.0/24

e.g. 192.168.2.0/24 or 2001:DB8:0::C

- **[ゲートウェイ (Gateway)]** : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name

ravpn-leak-vr1

Description

The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface

vr1-inside (GigabitEthernet0/2)

Belongs to different Router

VR1

Protocol

☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

+

nw-192-168.1.0

Gateway

Please select a gateway

Metric

1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type

Please select an SLA Monitor

d) [OK] をクリックします。

ステップ 2 VR1 からグローバル仮想ルータへのルートリークを設定します。

このルートにより、192.168.1.0/24 ネットワーク上のエンドポイントは、VPN プール内の IP アドレスが割り当てられた セキュアクライアントへの接続を開始できます。

- 仮想ルータのドロップダウンリストから [VR1] を選択して、VR1 設定に切り替えます。
- VR1 ルータの [スタティックルーティング (Static Routing)] タブで、[+] をクリックしてルートを設定します。

- [名前 (Name)] : 任意の名前 (**ravpn-traffic** など) を付けることができます。
- [インターフェイス (Interface)] : **outside** を選択します。
- [プロトコル (Protocol)] : **IPv4** を選択します。
- [ネットワーク (Networks)] : VPN プール用に作成したオブジェクト (**vpn-pool** など) を選択します。

- [ゲートウェイ (Gateway)] : この項目は空白のままにします。別の仮想ルータにルートをリークする場合は、ゲートウェイアドレスを選択しません。

次のようなダイアログが表示されるはずです。

Name

ravpn-traffic

Description

The selected interface belongs to a different virtual router. If you create this static route, the route will cross virtual router boundaries, with the risk that traffic from this virtual router will leak into another virtual router. Proceed with caution.

Interface

outside (GigabitEthernet0/0)

Belongs to different Router

Global

Protocol

☒ IPv4 ☐ IPv6

Networks

+

vpn-pool

Gateway

Please select a gateway

Metric

1

SLA Monitor Applicable only for IPv4 Protocol type

Please select an SLA Monitor

- c) [OK] をクリックします。

次のタスク

RA VPN アドレスプールとカスタム仮想ルータの IP アドレスの間に重複がある場合には、IP アドレスに対してスタティック NAT ルールを使用し、適切なルーティングを有効にする必要があります。とはいえ、単に重複しないように RA VPN アドレスプールを変更する方がはるかに簡単です。

セキュアクライアントのアイコンとロゴをカスタマイズする方法

Windows および Linux クライアントマシン上の セキュアクライアント アプリケーションのアイコンとロゴをカスタマイズできます。アイコンの名前は事前定義されており、アップロードする画像のファイルタイプとサイズには特定の制限があります。

独自の実行可能ファイルを展開して GUI をカスタマイズする場合は、任意のファイル名を使用できますが、この例では、完全にカスタマイズされたフレームワークを展開せずに、アイコンとロゴを置き換えるだけであることを前提としています。

置き換えることができる画像はいくつかあり、それらのファイル名はプラットフォームによって異なります。カスタマイズオプション、ファイル名、タイプ、およびサイズの詳細については、『Cisco Secure Client Administrator Guide』のセキュアクライアントおよびインストーラのカスタマイズとローカライズに関する章を参照してください。たとえば、4.8 クライアントに関する章は次の場所にあります。

https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/vpn_client/anyconnect/anyconnect48/administration/guide/b_AnyConnect_Administrator_Guide_4-8/customize-localize-anyconnect.html

始める前に

この例では、Windows クライアントの次の画像を置き換えます。画像のサイズが最大サイズと異なる場合、自動的に最大サイズに変更され、必要に応じて画像が拡大されます。

- app_logo.png

このアプリケーションロゴ画像はアプリケーションアイコンであり、最大サイズは 128 X 128 ピクセルです。

- company_logo.png

この企業ロゴ画像は、トレイフライアウトと [詳細 (Advanced)] ダイアログの左上隅に表示されます。最大サイズは 97 X 58 ピクセルです。

- company_logo_alt.png

この代替企業ロゴ画像は、[バージョン情報 (About)] ダイアログの右下隅に表示されます。最大サイズは 97 X 58 ピクセルです。

これらのファイルをアップロードするには、Threat Defense デバイスがアクセスできるサーバーにファイルを配置する必要があります。TFTP、FTP、HTTP、HTTPS、または SCP サーバを使用できます。これらのファイルから画像を取得するための URL には、サーバのセットアップに必要なパスとユーザ名/パスワードを含めることができます。この例では、TFTP を使用します。

手順

ステップ 1 カスタマイズされたアイコンとロゴを使用する必要がある、RA VPN ヘッドエンドとして機能している各 Threat Defense デバイスに画像ファイルをアップロードします。

- a) SSH クライアントを使用してデバイス CLI にログインします。
- b) CLI で、**system support diagnostic-cli** コマンドを入力して、診断 CLI モードを開始します。

```
> system support diagnostic-cli
Attaching to Diagnostic CLI ... Press 'Ctrl+a then d' to detach.
Type help or '?' for a list of available commands.

ftdvl>
```

(注)

メッセージに示されているように、診断 CLI を終了して通常の Threat Defense CLI モードに戻るには、**Ctrl + A** キーを押してから **D** キーを押す必要があります。

- c) コマンドプロンプトに注意してください。通常の CLI では > だけが表示されますが、診断 CLI のユーザ EXEC モードではホスト名と > が表示されます。この例では、ftdvl> です。特権 EXEC モードを開始する必要があります。このモードでは、ftdvl# のように、# が終了文字として使用されます。プロンプトにすでに # が表示されている場合は、この手順をスキップしてください。それ以外の場合は、**enable** コマンドを入力し、パスワードプロンプトではパスワードを入力せずに単に Enter キーを押します。

```
ftdvl> enable
Password:
ftdvl#
```

- d) **copy** コマンドを使用して、ホスティングサーバーから Threat Defense デバイスの disk0 に各ファイルをコピーします。それらのファイルは disk0:/anyconnect-images/ などのサブディレクトリに配置できます。**mkdir** コマンドを使用して新しいフォルダを作成できます。

たとえば、TFTP サーバの IP アドレスが 10.7.0.80 であり、新しいディレクトリを作成する場合、コマンドは次のようになります。最初の例の後は **copy** コマンドへの応答が省略されていることに注意してください。

```
ftdvl# mkdir disk0:anyconnect-images

Create directory filename [anyconnect-images]? yes

Created dir disk0:/anyconnect-images

ftdvl# copy /noconfirm tftp://10.7.0.80/app_logo.png
disk0:/anyconnect-images/app_logo.png

Accessing tftp://10.7.0.80/app_logo.png...!!!!!!
Writing file disk0:/anyconnect-images/app_logo.png...
!!!!!!
12288 bytes copied in 1.000 secs (12288 bytes/sec)

ftdvl# copy /noconfirm tftp://10.7.0.80/company_logo.png
disk0:/anyconnect-images/company_logo.png
ftdvl# copy /noconfirm tftp://10.7.0.80/company_logo_alt.png
disk0:/anyconnect-images/company_logo_alt.png
```

ステップ 2 診断 CLI で **import webvpn** コマンドを使用して、セキュアクライアントに、それ自体のクライアントマシンへのインストール時にこれらの画像をダウンロードするように指示します。

```
import webvpn AnyConnect-customization type resource platform win name filename  
disk0:/directoryname/filename
```

このコマンドは Windows 用です。Linux の場合は、クライアントに応じて、**win** キーワードを **linux** または **linux-64** に置き換えます。

たとえば、前の手順でアップロードしたファイルをインポートする場合、まだ 診断 CLI だとすると、次のようになります。

```
ftdvl# import webvpn AnyConnect-customization type resource platform win  
name app_logo.png disk0:/anyconnect-images/app_logo.png
```

```
ftdvl# import webvpn AnyConnect-customization type resource platform win  
name company_logo.png disk0:/anyconnect-images/company_logo.png
```

```
ftdvl# import webvpn AnyConnect-customization type resource platform win  
name company_logo_alt.png disk0:/anyconnect-images/company_logo_alt.png
```

ステップ 3 設定を確認します。

- インポートしたファイルを確認するには、診断 CLI の特権 EXEC モードで **show import webvpn AnyConnect-customization** コマンドを使用します。
- 画像がクライアントにダウンロードされたことは、ユーザがクライアントを実行したときに画像が表示されることで確認できます。Windows クライアントで次のフォルダを確認することもできます。ここで、**%PROGRAMFILES%** は、通常、**c:\Program Files** に置き換えられます。

```
%PROGRAMFILES%\Cisco\Cisco AnyConnect Secure Mobility Client\res
```

次のタスク

デフォルトの画像に戻す場合は、カスタマイズしたイメージごとに **revert webvpn** コマンドを（診断 CLI の特権 EXEC モードで）使用します。コマンドは次のとおりです。

```
revert webvpn AnyConnect-customization type resource platform win name filename
```

import webvpn の場合と同様に、当該のクライアントプラットフォームをカスタマイズしている場合は **win** を **linux** または **linux-64** に置き換え、インポートした画像ファイル名ごとに個別にコマンドを発行してください。例：

```
ftdvl# revert webvpn AnyConnect-customization type resource platform win  
name app_logo.png
```

```
ftdvl# revert webvpn AnyConnect-customization type resource platform win  
name company_logo.png
```

```
ftdvl# revert webvpn AnyConnect-customization type resource platform win  
name company_logo_alt.png
```



第 **VII** 部

システム管理

- システム設定 (935 ページ)
- システム管理 (985 ページ)



第 27 章

システム設定

ここでは、[システム設定 (System Settings)] ページにまとめられているさまざまなシステム設定を指定する方法について説明します。これらの設定はシステム全体の機能を対象としています。

- [管理アクセスの設定 \(935 ページ\)](#)
- [ログイン画面のカスタマイズ \(940 ページ\)](#)
- [システム ロギングの設定 \(941 ページ\)](#)
- [DHCP の設定 \(947 ページ\)](#)
- [ダイナミック DNS \(DDNS\) の設定 \(952 ページ\)](#)
- [DNS の設定 \(955 ページ\)](#)
- [デバイスのホスト名の設定 \(961 ページ\)](#)
- [Network Time Protocol \(NTP\) の設定 \(961 ページ\)](#)
- [Precision Time Protocol の設定 \(ISA 3000\) \(962 ページ\)](#)
- [管理接続用 HTTP プロキシの設定 \(966 ページ\)](#)
- [クラウド サービスの設定 \(966 ページ\)](#)
- [Web 分析の有効化または無効化 \(972 ページ\)](#)
- [URL フィルタリングの設定 \(972 ページ\)](#)
- [Device Manager から Management Center または Security Cloud Control に切り替えます。 \(974 ページ\)](#)
- [Management Center または Security Cloud Control を Device Manager に切り替えます。 \(980 ページ\)](#)
- [TLS/SSL暗号設定の設定 \(981 ページ\)](#)

管理アクセスの設定

管理アクセスとは、設定およびモニタ目的で脅威に対する防御デバイスにログインする機能のことです。次の項目を設定できます。

- ユーザアクセス認証に使用するアイデンティティ ソースを特定するための AAA。ローカルユーザデータベースまたは外部 AAA サーバを使用することができます。管理ユーザの

管理の詳細については、[Device Manager および Threat Defense ユーザーアクセスの管理 \(1012 ページ\)](#) を参照してください。

- 管理インターフェイスおよびデータ インターフェイスへのアクセス制御。これらのインターフェイスには個別のアクセス リストがあります。どの IP アドレスが HTTPS (Device Manager で使用) および SSH (CLI で使用) で許可されるかを決定できます。[管理アクセス リストの設定 \(936 ページ\)](#) を参照してください。
- Device Manager に接続するためにユーザーが受け入れる必要がある管理 Web サーバー証明書。Web ブラウザで信頼される証明書をアップロードすることにより、ユーザが不明な証明書を信頼するよう求められるのを避けることができます。「[Threat Defense Web サーバー証明書の設定 \(939 ページ\)](#)」を参照してください。

管理アクセス リストの設定

デフォルトでは、任意の IP アドレスから、デバイスの管理アドレス上の Device Manager Web または CLI インターフェイスにアクセスできます。システム アクセスは、ユーザ名/パスワードによってのみ保護されます。ただし、特定の IP アドレスまたはサブネットのみからの接続を許可するようアクセス リストを設定し、さらにレベルの高い保護を提供できます。

また、データインターフェイスを開いて、Device Manager または SSH から CLI への接続を許可することもできます。これにより、管理アドレスを使用せずにデバイスを管理できます。たとえば、外部インターフェイスに対する管理アクセスを許可することで、デバイスをリモートから設定できます。ユーザ名/パスワードによって、不正な接続が阻止されます。デフォルトでは、データインターフェイスへの HTTPS 管理アクセスは内部インターフェイスで有効になっていますが、外部インターフェイスでは無効になっています。デフォルトの「内部」ブリッジグループが設定されている Firepower 1010 または Cisco Secure Firewall 1210/1220 の場合、この設定は、ブリッジグループに含まれる任意のデータインターフェイスを使用して Device Manager をブリッジグループ IP アドレス (デフォルトは 192.168.95.1) に接続できることを意味します。管理接続は、デバイスに入るインターフェイス上でのみ開くことができます。



注意 アクセスを特定のアドレスに制限すると、容易にシステムから締め出されてしまう可能性があります。たとえば、現在使用している IP アドレスに関連するアクセスを削除し、「any」アドレスのエントリが1つもないポリシーを導入するとシステムにアクセスできなくなります。アクセス リストを設定する場合は、特に注意してください。

始める前に

同じ TCP ポートの同じインターフェイスでは、Device Manager アクセス (HTTPS アクセス) とリモートアクセス SSL VPN の両方を設定できません。たとえば、外部インターフェイスにリモートアクセス SSL VPN を設定する場合、ポート 443 で HTTPS 接続用の外部インターフェイスも開くことはできません。同じインターフェイスで両方の機能を設定する場合は、競合を回避するために、必ず、これらのサービスの少なくとも 1 つの HTTPS ポートを変更してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[System Settings] > [Management Access] の順にリンクをクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次で [管理アクセスリスト (Management Access List)] [管理アクセス (Management Access)] をクリックします。

このページで AAA を設定して、外部 AAA サーバで定義されたユーザの管理アクセスを許可することもできます。詳細は、[Device Manager および Threat Defense ユーザーアクセスの管理 \(1012 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 2 管理アドレスのルールを作成するには、以下の手順に従います。

a) [管理インターフェイス (Management Interface)] タブを選択します。

ルールのリストは、指定されたポートへのアクセスが許可されるアドレスを定義します。Device Manager (HTTPS Web インターフェイス) の場合は 443、SSH CLI の場合は 22 です。

ルールのリストは順序付けられたものではありません。IP アドレスが要求ポートのいずれかのルールと一致すると、そのユーザにはデバイスへのログイン試行が許可されます。

(注)

ルールを削除するには、ルールの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。あるプロトコルのルールをすべて削除した場合、そのプロトコルを使用して該当インターフェイスのデバイスにアクセスすることはできなくなります。

b) [+] をクリックし、次のオプションを入力します。

- [プロトコル (Protocol)] : ルールの対象として HTTPS (ポート 443) または SSH (ポート 22) のいずれかを選択します。
- [IP アドレス (IP Address)] : IPv4/IPv6 ネットワークを定義するネットワーク オブジェクト、またはシステムへのアクセスを許可するホストを選択します。「any」アドレスを指定するには、[any-ipv4] (0.0.0.0/0) および [any-ipv6] (::/0) を選択します。

c) [OK] をクリックします。

ステップ 3 データ インターフェイスに対するルールを作成するには、以下の手順に従います。

a) [データインターフェイス (Data Interfaces)] タブを選択します。

ルールのリストは、インターフェイス上の指定されたポートへのアクセスが許可されるアドレスを定義します。Device Manager (HTTPS Web インターフェイス) の場合は 443、SSH CLI の場合は 22 です。

ルールのリストは順序付けられたものではありません。IP アドレスが要求ポートのいずれかのルールと一致すると、そのユーザにはデバイスへのログイン試行が許可されます。

(注)

ルールを削除するには、ルールの[ごみ箱 (trash can)]アイコン (🗑️) をクリックします。あるプロトコルのルールをすべて削除した場合、そのプロトコルを使用して該当インターフェイスのデバイスにアクセスすることはできなくなります。

b) [+] をクリックし、次のオプションを入力します。

- [インターフェイス (Interface)] : 管理アクセスを許可するインターフェイスを選択します。
- [プロトコル (Protocol)] : ルールの対象として HTTPS (ポート 443) 、SSH (ポート 22) 、またはその両方を選択します。外部インターフェイスがリモートアクセス VPN 接続プロファイルで使用されている場合、その外部インターフェイスに HTTPS ルールを設定することはできません。
- [許可ネットワーク (Allowed Networks)] : IPv4/IPv6 ネットワークを定義するネットワークオブジェクト、またはシステムへのアクセスを許可するホストを選択します。「任意」のアドレスを指定するには、[any-ipv4] (0.0.0.0/0) および [any-ipv6] (::/0) を選択します。

c) (オプション)。HTTPS データポート番号を変更する場合は、番号をクリックし、新しいポートを入力します。[データインターフェイスでの管理アクセス用の HTTPS ポートの設定 \(938 ページ\)](#) を参照してください。

d) [OK] をクリックします。

データインターフェイスでの管理アクセス用の HTTPS ポートの設定

デフォルトでは、Device Manager または Threat Defense API のいずれかで管理のためにデバイスにアクセスする場合、ポート TCP/443 を経由します。データインターフェイスの管理アクセスポートは変更できます。

ポートを変更すると、ユーザは、システムにアクセスするための URL にカスタムポートを含める必要があります。たとえば、データインターフェイスが ftd.example.com であり、ポートを 4443 に変更した場合、ユーザは URL を https://ftd.example.com:4443 に変更する必要があります。

すべてのデータインターフェイスで同じポートが使用されます。インターフェイスごとに異なるポートを設定することはできません。



(注) 管理インターフェイスの管理アクセスポートは変更できません。管理インターフェイスでは常にポート 443 が使用されます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [管理アクセス (Management Access)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次で [管理アクセス (Management Access)] をクリックします。

ステップ 2 [データインターフェイス (Data Interfaces)] タブをクリックします。

ステップ 3 [HTTPSデータポート (HTTPS Data Port)] 番号をクリックします。

ステップ 4 [データインターフェイス設定 (Data Interfaces Setting)] ダイアログボックスで [HTTPSデータポート (HTTPS Data Port)] を、使用するポートに変更します。

次の番号は指定できません。

- 22 : このポートは SSH 接続に使用されます。
- リモートアクセス VPN に使用するポート (管理アクセスも許可されているインターフェイス用に設定されている場合) : リモートアクセス VPN はデフォルトではポート 443 を使用しますが、カスタムポートを設定できます。
- アイデンティティポリシーでアクティブ認証に使用するポート : デフォルトは 885 です。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

Threat Defense Web サーバー証明書の設定

Web インターフェイスにログインするときに、システムはデジタル証明書を使用して HTTPS で通信を保護します。デフォルトの証明書はブラウザで信頼されていないため、Untrusted Authority という警告が表示され、証明書を信頼するかどうかを確認されます。ユーザは証明書を Trusted Root Certificate ストアに保存することもできますが、その代わりに信頼するようにブラウザがすでに設定されている新しい証明書をアップロードすることもできます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [管理アクセス (Management Access)] リンクの順にクリックします。

[System Settings] ページがすでに表示されている場合は、目次で [Management Access] をクリックします。

ステップ 2 [管理Webサーバ (Management Web Server)] タブをクリックします。

ステップ 3 [Webサーバ証明書 (Web Server Certificate)] で、Device Manager への HTTPS 接続をセキュリティ保護するために使用する内部証明書を選択します。

証明書をアップロードまたは作成していない場合、リストの下部にある [内部証明書の新規作成 (Create New Internal Certificate)] リンクをクリックして作成します。

デフォルトは、事前に定義された DefaultWebserverCertificate オブジェクトです。

ステップ 4 証明書が自己署名されていない場合は、完全な信頼チェーン内のすべての中間証明書とルート証明書を信頼チェーンリストに追加します。

チェーンには最大 10 個の証明書を追加できます。各中間証明書を追加するには、[+] をクリックし、最後にルート証明書を追加します。[保存 (Save)] をクリックし (Web サーバの再起動を警告するダイアログで [続行 (Proceed)] をクリックすると)、証明書がない場合は、欠落しているチェーン内の次の証明書の共通名を含むエラーメッセージが表示されます。チェーンに含まれていない証明書を追加した場合も、エラーが表示されます。これらのメッセージを慎重に調べて、追加または削除する必要がある証明書を特定してください。

ここから証明書をアップロードするには、[+] をクリックした後に、[新規信頼 CA 証明書の作成 (Create New Trusted CA Certificate)] をクリックします。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

変更はすぐに適用され、システムは Web サーバを再起動します。設定を展開する必要はありません。

数分待つて再起動が完了してから、ブラウザを更新します。

ログイン画面のカスタマイズ

組織で必要な場合は、ログイン画面にカスタムイメージを追加できます。オプションとして免責事項などのテキストを追加することもできます。このイメージは、ブラウザを介してログインするときに表示されます。テキストは、ブラウザにも、コマンドラインインターフェイスへの SSH ログイン時にも表示されます。

始める前に

これらのカスタマイズは、デバイスごとに一意なものです。高可用性ペアで、アクティブユニットに加えた変更は、スタンバイユニットに自動的に複製されないため、各デバイスを個別にカスタマイズする必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [ログイン ページ (Login Page)] リンクの順にクリックします。

すでに [システム設定 (System Settings)] ページが表示されている場合は、目次の **[ログイン ページ (Login Page)]** をクリックします。

ステップ 2 設定を構成します。**[デフォルトにリセット (Reset to Default)]** をクリックすると、カスタマイズが無効になったデフォルトのロゴに戻ります。

- **[ログイン画面の画像 (Login Screen Image)]** : **[デフォルトの画像 (Default Image)]** または **[画像なし (No Image)]** のどちらを使用するかを選択します。デフォルトの画像を使用すると、ユーザー名/パスワード フィールドの左側に画像が再表示されます。
- **[追加カスタム ロゴ (Additional Custom Logo)]** : カスタム ロゴは、[ユーザー名/パスワード (Username/Password)] フィールドの上に配置される HTTPS ログイン画面への追加画像です。**[カスタム ロゴなし (No Custom Logo)]** を選択するか、**[追加のカスタム ロゴを表示 (Show Additional Custom Logo)]** を選択し、**[ファイルの参照 (Browse a File)]** をクリックし、ログイン時にユーザーに表示される SVG 形式または PNG 形式の画像ファイルをアップロードします。ログイン画面画像で **[画像なし (No Image)]** を選択した場合、このカスタム画像だけがユーザーに表示されます。

画像ファイルのサイズは 200KB 未満である必要があります。

- **[ユーザー テキストの表示 (Show User Text)]** : HTTPS と SSH の両方のログイン画面にテキストを追加するには、このオプションを選択します。それからテキストのタイトルとテキスト自体を入力します。たとえば、警告や免責事項を追加できます。ユーザーは、システムにログインする前にこのテキストを読んで同意する必要があります。タイトルの最大サイズは 64 文字で、テキストの最大サイズは 2048 文字です。

ステップ 3 **[プレビュー (Preview)]** をクリックして、ログイン画面が意図したとおりに表示されることを確認します。必要に応じて調整を行います。

ステップ 4 **[保存 (Save)]** をクリックします。

システム ロギングの設定

Threat Defense デバイスのシステム ロギング (syslog) を有効にすることができます。情報をロギングすることで、ネットワークの問題またはデバイス設定の問題を特定して分離できます。syslog は、アクセス制御、侵入防御、およびファイルとマルウェアのロギングを含む診断ロギングおよび接続関連ロギングのために有効にすることができます。

診断ロギングは、デバイスとシステムの正常性に関連するイベントと、接続とは関係のないネットワーク設定に関する syslog メッセージを提供します。個々のアクセスコントロールルール内に接続ロギングを設定します。

診断ロギングでは、データプレーン上で実行されている機能、つまり **show running-config** コマンドで表示できる CLI 設定で定義されている機能に関するメッセージが生成されます。これには、ルーティング、VPN、データインターフェイス、DHCP サーバ、NAT などの機能が含まれます。

これらのメッセージの詳細については、https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/Syslogs/b_fptd_syslog_guide.htmlにある『Cisco Threat Defense Syslog Messages』を参照してください。

次のトピックでは、さまざまな出力場所に対するの診断メッセージやファイル/マルウェアメッセージのログGINGを設定する方法について説明します。

重要度レベル

次の表に、syslog メッセージのシビラティ（重大度）の一覧を示します。

表 16: Syslog メッセージのシビラティ（重大度）

レベル番号	重要度	説明
0	致命的	システムが使用不可能です。
1	Alert（警告）	すぐに措置する必要があります。
2	深刻	深刻な状況です。
3	エラー	エラー状態です。
4	warning	注意状態。
5	Notification（通知）	正常ですが、注意を必要とする状況です。
6	情報	情報メッセージです。
7	デバッグ	デバッグメッセージ。 問題をデバッグするときに、このレベルで一時的にのみログに記録します。このログレベルでは、非常に多くのメッセージが生成される可能性があるため、システムパフォーマンスに影響を与える可能性があります。



（注） ASA および Threat Defense は、重大度 0（緊急）の syslog メッセージを生成しません。

リモート syslog サーバのログGINGの設定

syslog のメッセージを外部 syslog サーバに送信するようにシステムを設定できます。これはシステムログGINGの最適なオプションです。外部サーバを使用すると、メッセージを保持するためのスペースを確保し、サーバの施設を使用してメッセージを表示、分析、およびアーカイブできます。

さらに、アクセス制御ルールでトラフィックにファイルポリシーを適用してファイルへのアクセスまたはマルウェア、あるいはその両方を制御する場合、外部 syslog サーバにファイル イベントメッセージを送信するようにシステムを設定できます。syslog サーバを設定しない場合、イベントは **Device Manager** イベントビューアのみに表示されます。

次の手順では、診断（データ）ログGINGとファイル/マルウェアログGING用に syslog をイネーブルにする方法について説明します。次のイベント用に外部ログGINGを設定することもできます。

- 接続イベント。個々のアクセス制御ルール、SSL復号ルール、またはセキュリティインテリジェンスポリシー設定でsyslogサーバを選択します。
- 侵入イベントの場合は、侵入ポリシーの設定で syslog サーバを選択します。

始める前に

ファイル/マルウェアイベントの syslog 設定は、IPS およびマルウェア防御ライセンスを必要とするファイルまたはマルウェアのポリシーを適用する場合にのみ該当します。

さらに、ポリシーを適用するアクセス制御ルールで、**[ファイルイベント (File Events)] > [ファイルのログGING (Log Files)]** オプションが選択されていることを確認する必要があります。そうでない場合、syslog でもイベントビューアでもイベントはまったく生成されません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、**[システム設定 (System Settings)] > [ログ設定 (Logging Settings)]** リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに開いている場合、目次の [ログGINGの設定 (Logging Settings)] をクリックします。

ステップ 2 [リモートサーバ (Remote Server)] の下の [データログGING (Data Logging)] スライダを [ON] にし、データプレーンで生成された診断メッセージの外部 syslog サーバへのログGINGを有効にする。その後、次のオプションを設定します。

- [Syslogサーバ (Syslog Server)] : [+] をクリックし、1 つまたは複数の syslog サーバ オブジェクトを選択して、[OK] をクリックします。オブジェクトが存在しない場合は、[Syslogサーバの追加 (Add Syslog Server)] リンクをクリックして作成します。詳細については、[「syslog サーバの設定 \(193 ページ\)」](#) を参照してください。
- [FXOSシャーシsyslogのフィルタリングの重大度レベル (Severity Level for Filtering FXOS Chassis Syslogs)] : FXOS を使用する特定のデバイス モデルの、基本の FXOS プラットフォームによって生成される syslog メッセージの重大度レベル。このオプションは、デバイスに関連している場合にのみ表示されます。シビラティ (重大度) のレベルを選択します。このレベル以上のメッセージは、syslog サーバに送信されます。

- [メッセージフィルタリング (Message Filtering)] : Threat Defense のオペレーティングシステム用に生成されたメッセージを制御するには、次のオプションのいずれかを選択します。
 - [すべてのイベントのフィルタリングの重大度レベル (Severity Level for Filtering All Events)] : 重大度レベルを選択します。このレベル以上のメッセージは、syslog サーバに送信されます。
 - [カスタムロギングフィルタ (Custom Logging Filter)] : 関心のあるメッセージのみを取得するために追加のメッセージフィルタリングを行う場合、生成させたいメッセージを定義するイベントリストフィルタを選択します。このフィルタが存在しない場合は、[新しいイベントリストフィルタの作成]をクリックして作成します。詳細については、「[イベントリストフィルタの設定 \(946 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 3 ファイルおよびマルウェアのイベントの外部 syslog サーバへのロギングを有効にするには、[ファイル/マルウェア (File/Malware)] スライダを [ON] にします。次に、ファイル/マルウェアロギングのオプションを設定します。

- [Syslogサーバ (Syslog Server)] : syslog サーバオブジェクトを選択します。オブジェクトが存在しない場合は、[Syslogサーバの追加 (Add Syslog Server)] リンクをクリックして作成します。
- [重大度レベルのログ (Log at Severity Level)] : ファイル/マルウェア イベントに割り当てる重大度レベルを選択します。すべてのファイル/マルウェア イベントが同じ重大度で生成されるため、フィルタリングは実行されません。選択したレベルに関係なく、すべてのイベントが表示されます。これは、メッセージの [シビラティ (重大度) (severity)] フィールドに表示されるレベルになります (つまり、FTD-x-<message_ID> の x)。ファイルイベントはメッセージ ID 430004 であり、マルウェアイベントは 430005 です。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

内部バッファへのロギングの設定

システムを設定して、内部ロギングバッファに syslog メッセージを保存できます。このバッファの内容を表示するには、CLI または CLI コンソールで **show logging** コマンドを使用します。

新しいメッセージは、バッファの最後に追加されます。バッファの空きがなくなると、システムはバッファをクリアしてから、メッセージの追加を続行します。ログバッファに空きがなくなると、システムは最も古いメッセージを削除して、バッファに新しいメッセージ用の領域を確保します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [ログ設定 (Logging Settings)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに開いている場合、目次の [ロギングの設定 (Logging Settings)] をクリックします。

ステップ 2 ロギングの宛先としてバッファを有効にするには、[内部バッファ (Internal Buffer)] スライダーを「オン」にします。

ステップ 3 内部バッファロギングのオプションの設定。

- [すべてのイベントのフィルタリングの重大度レベル (Severity Level for Filtering All Events)] : 重大度レベルを選択します。このレベル以上のメッセージが内部バッファに送信されます。
- [カスタムロギングフィルタ (Custom Logging Filter)] : (オプション) 関心のあるメッセージのみを取得するために追加のメッセージフィルタリングを行う場合、生成するメッセージを定義するイベント リスト フィルタを選択します。このフィルタが存在しない場合は、[新しいイベントリストフィルタの作成] をクリックして作成します。詳細については、[イベント リスト フィルタの設定 \(946 ページ\)](#) を参照してください。
- [バッファサイズ (Buffer Size)] : syslog メッセージを保存する内部ログ バッファのサイズを指定します。バッファが一杯になった場合は上書きされます。デフォルトは4096バイトです。範囲は 4096 ~ 52428800 です。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

コンソールへのロギングの設定

コンソールにメッセージを送信するようにシステムを設定できます。コンソールポートの CLI にログインしたときに、これらのメッセージが表示されます。さらに、**show console-output** コマンドを使用することで、他のインターフェイス(管理アドレスを含む)に対するSSHセッションでもこれらのログが表示されます。さらに、メイン CLI から **system support diagnostic-cli** と入力すると、診断 CLI でリアルタイムでこれらのメッセージを表示できます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [ログ設定 (Logging Settings)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに開いている場合、目次の [ロギングの設定 (Logging Settings)] をクリックします。

- ステップ2** ログイングの宛先としてコンソールを有効にするには、[コンソールフィルタ (Console Filter)] スライダーを「オン」にします。
- ステップ3** シビラティ (重大度) のレベルを選択します。このレベル以上のメッセージは、コンソールに送信されます。
- ステップ4** [保存 (Save)] をクリックします。
-

イベントリストフィルタの設定

[イベントリストフィルタ (event list filter)] は、宛先に送信されるメッセージを制御するためにログイング宛先に適用できるカスタムフィルタです。通常は、シビラティ (重大度) のみに基づいて宛先へのメッセージをフィルタ処理しますが、カスタムフィルタを使用すると、イベントクラス、シビラティ (重大度)、およびメッセージ識別子 (ID) の組み合わせに基づいて、送信するメッセージを微調整できます。

シビラティ (重大度) レベル単独でのメッセージの制限では目的を十分に果たせない場合は、フィルタを使用します。

次の手順では、[オブジェクト (Objects)] ページでフィルタを設定する方法について説明します。フィルタを使用できるログイング宛先の設定時にフィルタを作成することもできます。

手順

- ステップ1** [オブジェクト (Objects)] を選択し、目次から [イベントリストフィルタ (Event List Filters)] を選択します。

- ステップ2** 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

- ステップ3** フィルタのプロパティを設定します。

- [名前 (Name)] : フィルタ オブジェクトの名前。
- [説明 (Description)] : (オプション) オブジェクトの説明。
- [重大度とログクラス (Severity and Log Class)] : メッセージクラスでフィルタリングする場合は、[+] をクリックしてクラスフィルタの重大度レベルを選択し、[OK] をクリックします。次に、シビラティ (重大度) レベル内のドロップダウン矢印をクリックして、そのシビラティ (重大度) レベルでフィルタ処理する 1 つ以上のクラスを選択し、[OK] をクリックします。

システムは、そのシビラティ（重大度）レベル以上のメッセージがある場合にのみ、指定されたメッセージクラスの syslog メッセージを送信します。各シビラティ（重大度）レベルには、最大で 1 つの行を追加できます。

特定の重大度レベルですべてのクラスをフィルタリングする場合は、重大度リストを空のままにし、その代わりに、ロギング宛先を有効にするときにそのロギング宛先のグローバル重大度レベルを選択します。

- [Syslog 範囲/メッセージ ID (Syslog Range/Message ID)] : syslog メッセージ ID でフィルタリングする場合は、単独のメッセージ ID、またはメッセージを生成する ID 番号の範囲を入力します。開始番号と終了番号は、100000-200000 のようにハイフンで区切ります。ID は 6 桁の数字です。特定のメッセージ ID および関連するメッセージについては、https://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/Syslogs/b_fptd_syslog_guide.html の『Cisco Threat Defense Syslog Messages』を参照してください。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

これで、[カスタムフィルタリング (custom filtering)] オプションでこのオブジェクトを選択して、そのオブジェクトを許可する宛先をロギングできます。[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [ロギング設定 (Logging Settings)] に移動します。

DHCP の設定

DHCP サーバは、IP アドレスなどのネットワーク設定パラメータを DHCP クライアントに提供します。インターフェイス上の DHCP サーバを設定して、接続されたネットワーク上の DHCP クライアントに設定パラメータを提供するか、またはインターフェイス上の DHCP リレーを有効にして、ネットワーク内の別のデバイスで動作している外部 DHCP サーバに要求を転送できます。

これらの機能は相互に排他的です。いずれか一方のみ設定でき、両方は設定できません。

DHCP サーバの設定

DHCP サーバは、IP アドレスなどのネットワーク構成パラメータを DHCP クライアントに提供します。接続されたネットワーク上の DHCP クライアントに設定パラメータを提供するために、インターフェイス上で DHCP サーバを設定できます。

IPv4 DHCP クライアントは、サーバに到達するために、マルチキャストアドレスよりもブロードキャストを使用します。DHCP クライアントは UDP ポート 68 でメッセージをリッスンし、DHCP サーバは UDP ポート 67 でメッセージをリッスンします。DHCP サーバは、BOOTP 要求をサポートしません。



- (注) DHCP サーバが既に稼働しているネットワークでは、DHCP サーバを設定しないでください。2つのサーバが競合するため、結果は予測不可能になります。

始める前に

DHCP クライアントは、サーバが有効になっているインターフェイスと同じネットワーク上に存在する必要があります。つまり、スイッチがあるとしても、サーバとクライアントの間にルータを介在させることはできません。

複数のネットワークをサポートする必要がある、各インターフェイスで DHCP サーバを設定したくない場合は、代わりに DHCP リレーを設定して、一つのネットワークから別のネットワークに存在する DHCP サーバに DHCP 要求を転送できます。この場合、DHCP サーバはネットワーク内の別のデバイス上に存在する必要があります。一つのインターフェイスで DHCP サーバを設定し、同じデバイスの別のインターフェイスで DHCP リレーを設定することはできません。DHCP リレーを使用する場合は、DHCP サーバが管理する各ネットワークアドレス空間のアドレスプールを DHCP サーバに設定してください。

DHCP リレーを設定する方法については、[DHCP リレーの設定 \(950 ページ\)](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [DHCPサーバ/リレー (DHCP Server / Relay)] リンクをクリックします。

すでに [システム設定 (System Settings)] ページを表示している場合は、目次の [DHCPサーバ (DHCP Server)] > [DHCP] > [DHCPサーバ (DHCP Server)] をクリックします。

ページには 2 つのタブがあります。最初は、[設定 (Configuration)] タブにグローバルパラメータが表示されます。

[DHCPサーバ (DHCP Server)] タブには、DHCP サーバが設定されたインターフェイス、サーバが有効になっているかどうか、およびサーバのアドレスプールが表示されます。

ステップ 2 [設定 (Configuration)] タブで、自動設定とグローバル設定を設定します。

DHCP 自動設定では、指定したインターフェイスで動作している DHCP クライアントから取得した DNS サーバ、ドメイン名、および WINS サーバの情報が、DHCP サーバから DHCP クライアントに提供されます。通常、外部インターフェイスで DHCP を使用してアドレスを取得する場合には自動設定を使用しますが、DHCP を介してアドレスを取得する任意のインターフェイスを選択することができます。自動設定を使用できない場合には、必要なオプションを手動で定義できます。

- a) 自動設定を使用するには、[自動設定の有効化 (Enable Auto Configuration)] > [オン (On)] (スライダを右に) をクリックした後、DHCP を介してアドレスを取得するインターフェイスを [送信元インターフェイス (From Interface)] から選択します。

仮想ルータを設定する場合、DHCPサーバの自動設定は、グローバル仮想ルータのインターフェイスのみで使用できます。自動設定は、ユーザ定義の仮想ルータに割り当てられているインターフェイスではサポートされていません。

- b) 自動設定を有効にしない場合、またはいずれかの自動設定をオーバーライドする必要がある場合は、次のグローバルオプションを設定します。これらの設定は、DHCPサーバをホストするすべてのインターフェイスの DHCP クライアントに送信されます。

- [プライマリ WINS IP アドレス (Primary WINS IP Address)]、[セカンダリ WINS IP アドレス (Secondary WINS IP Address)] : Windows インターネット ネーム サービス (WINS) サーバクライアントのアドレスは、NetBIOS の名前解決に使用されます。
- [プライマリ DNS IP アドレス (Primary DNS IP Address)]、[セカンダリ DNS IP アドレス (Secondary DNS IP Address)] : クライアントがドメイン名の解決に使用するドメイン ネーム システム (DNS) サーバのアドレス。OpenDNS パブリック DNS サーバを設定するには、[OpenDNS の使用 (Use OpenDNS)] をクリックします。ボタンをクリックすると、適切な IP アドレスがフィールドに読み込まれます。

- c) [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 3 [DHCP サーバ (DHCP Servers)] タブをクリックし、サーバを設定します。

- a) 次のいずれかを実行します。

- まだ一覧にないインターフェイス用に DHCP サーバを設定するには、[+] をクリックします。
- 既存の DHCP サーバを編集するには、そのサーバの編集アイコン (🔍) をクリックします。

サーバを削除するには、サーバのごみ箱アイコン (🗑️) をクリックします。

- b) サーバのプロパティを次のように設定します。

- [DHCP サーバを有効にする] : サーバを有効にするかどうかを指定します。現時点でサーバを設定できますが、サーバを使用する準備が整うまでは無効にしておいてください。
- [インターフェイス (Interface)] : DHCP アドレスをクライアントに提供するインターフェイスを選択します。このインターフェイスには、静的 IP アドレスが設定される必要があります。インターフェイス上で DHCP サーバを実行する場合は、DHCP を使ってインターフェイス アドレスを取得することができません。ブリッジグループの場合、メンバーインターフェイスではなく、ブリッジ仮想インターフェイス (BVI) で DHCP サーバを設定します。そうすると、サーバはすべてのメンバーインターフェイスで有効になります。

この画面で 管理 インターフェイス上に DHCP サーバを設定することはできません。その代わりに、[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] ページで、管理インターフェイス上に DHCP サーバを設定します。

- [アドレスプール (Address Pool)] : アドレスを要求するクライアントにサーバが提供できる IP アドレスの最小から最大までの範囲。プールの開始アドレスと終了アドレスをハイフンで区切って指定します。たとえば、10.100.10.12-10.100.10.250 のように指定します。

IP アドレスの範囲は、選択したインターフェイスと同じサブネット上に存在する必要がある、インターフェイス自体の IP アドレス、ブロードキャストアドレス、またはサブネット ネットワーク アドレスを含めることはできません。

アドレスプールのサイズは、脅威に対する防御 デバイス上のプールあたり 256 アドレスに制限されています。アドレスプールの範囲が 253 アドレスよりも大きい場合、脅威に対する防御 インターフェイスのネットマスクは、クラス C アドレス（たとえば、255.255.255.0）にはできないため、それよりいくらか大きく、たとえば、255.255.254.0 にする必要があります。

- c) [OK] をクリックします。

DHCP リレーの設定

インターフェイスで受信した DHCP 要求を 1 つまたは複数の DHCP サーバに転送するように DHCP リレー エージェントを設定できます。

DHCP クライアントは、最初の DHCPDISCOVER メッセージを送信するために UDP ブロードキャストを使用します。接続されたネットワークについての情報がクライアントにはないためです。サーバを含まないネットワークセグメントにクライアントがある場合、脅威に対する防御 デバイスはブロードキャストトラフィックを転送しないため、UDP ブロードキャストは通常転送されません。DHCP リレーエージェントを使用して、ブロードキャストを受信している脅威に対する防御 デバイスのインターフェイスを、別のインターフェイスを介して利用可能な DHCP サーバに DHCP 要求を転送するように設定できます。

そのため、DHCP サーバをホストしていないサブネット上のクライアントでも、別のサブネットに存在する DHCP サーバから IP アドレスリースを取得できます。

始める前に

- 追加するサブネットごとに、アドレスプールを使用して DHCP サーバを設定します。たとえば、アドレスが 192.168.1.1/24 のインターフェイスで DHCP リレークライアントを有効にする場合、192.168.1.0/24 ネットワーク上のクライアントをサポートするには、DHCP サーバが 192.168.1.0/24 サブネットの IP アドレス（192.168.1.2 ～ 192.168.1.254 など）を提供できる必要があります。
- DHCP サーバごとに、サーバの IP アドレスを指定して、ホスト ネットワーク オブジェクトを作成します。
- [DHCP] > [DHCPサーバ (DHCP Servers)] ページで、すべてのサーバが削除または無効化されていることを確認します。いずれかのインターフェイスで DHCP リレーが有効に

なっている場合は、どのインターフェイスでも（異なるインターフェイスであっても）DHCP サーバをホストできません。

- インターフェイスに関する制限：インターフェイスには、サーバまたはエージェントのいずれかに使用される名前が必要です。また、次の点に注意してください。
 - インターフェイスをルーティング ECMP トラフィックゾーンのメンバーにすることはできません。
 - インターフェイスは DHCP を使用してアドレスを取得できません。
 - DHCP サーバと DHCP リレーの両方を、物理インターフェイス、サブインターフェイス、VLAN インターフェイス、および EtherChannel で設定できます（それらのメンバーでは設定できない）。
 - 仮想トンネルインターフェイス（VTI）で DHCP リレーサーバを設定することもできます。
 - どちらのサービスも、管理インターフェイス、またはブリッジグループとそのメンバーをサポートしません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [DHCPサーバ/リレー (DHCP Server / Relay)] リンクをクリックして、目次の [DHCP] > [DHCPリレー (DHCP Relay)] をクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに開いている場合は、目次の [DHCP] > [DHCPリレー (DHCP Relay)] をクリックします。

ステップ 2 （任意）必要に応じて、[IPv4リレータイムアウト (IPv4 Relay Timeout)] と [IPv6リレータイムアウト (IPv6 Relay Timeout)] の設定を調整します。

これらのタイムアウトにより、特定の IP バージョンの DHCP リレー アドレス ネゴシエーションで許可される秒数が設定されます。デフォルトは 60 秒（1 分）ですが、1 ～ 3600 秒の範囲で異なるタイムアウトを設定できます。サブネットと DHCP サーバの間に大きな遅延がある場合は、タイムアウトを長くすることが適切である可能性があります。

ステップ 3 DHCP リレーサーバを設定します。

DHCP リレーサーバは、DHCP リレー要求を処理するネットワーク内の DHCP サーバです。これらの DHCP サーバは、ネットワーク内の設定しているデバイスとは異なるデバイス上に存在します。

- a) [+] をクリックし、DHCP サーバの IP アドレスを持つホストネットワークオブジェクトを選択して、[OK] をクリックします。

オブジェクトがまだ存在しない場合は、[新しいネットワークの作成 (Create New Network)] をクリックして、今すぐ作成します。追加した DHCP サーバを使用する必要がなくなった場合は、サーバのエントリの右側にある [X] をクリックして削除します。

- b) 追加した DHCP サーバのエントリをクリックし、その DHCP サーバに到達できるインターフェイスを選択します。

ステップ 4 DHCP リレーエージェントを設定します。

DHCP リレーエージェントはインターフェイス上で動作します。これらは、ネットワークセグメント上のクライアントからの DHCP 要求を DHCP サーバに転送してから、応答をクライアントに返します。

- a) [+] をクリックし、DHCP リレーエージェントを実行するインターフェイスを選択して、[OK] をクリックします。

インターフェイスで DHCP リレーエージェントを実行する必要がなくなった場合は、サーバのエントリの右側にある [X] をクリックして削除します。必要に応じて、テーブルからインターフェイスを削除せず、単にすべての DHCP リレーサービスを無効にすることができます。

- b) 追加したインターフェイスエントリをクリックし、エージェントが提供する DHCP サービスを選択して、[OK] をクリックします。

- [IPv4 を有効にする (Enable IPv4)] : IPv4 アドレス要求を DHCP サーバに転送します。このオプションを選択しない場合、IPv4 アドレス要求は無視され、クライアントは IPv4 アドレスを取得できません。
- [ルート設定 (Set Route)] (IPv4 のみ) : DHCP サーバから送信されるパケットにある最初のデフォルトルータアドレスを、DHCP リレーエージェントを実行している脅威に対する防御 デバイスインターフェイスのアドレスに変更します。このアクションを行うと、クライアントは、自分のデフォルトルートを設定して、DHCP サーバで異なるルータが指定されている場合でも、脅威に対する防御 デバイスをポイントすることができます。パケット内にデフォルトのルータオプションがなければ、DHCP リレーエージェントは、そのインターフェイスのアドレスを含んでいるデフォルトルータを追加します。
- [IPv6 を有効にする (Enable IPv6)] : IPv6 アドレス要求を DHCP サーバに転送します。このオプションを選択しない場合、IPv6 アドレス要求は無視され、クライアントは IPv6 アドレスを取得できません。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

ダイナミック DNS (DDNS) の設定

Web 更新方式を使用してダイナミック ドメインネームシステム (DDNS) の変更をダイナミック DNS サービスに送信するようにシステムを設定できます。これらのサービスは、完全修飾

ドメイン名 (FQDN) に関連付けられた新しい IP アドレスを使用するように DNS サーバを更新します。これにより、ユーザがホスト名を使用してシステムにアクセスしようとしたときに、DNS によって名前が正しい IP アドレスに解決されます。

DDNS を使用すると、システムのインターフェイスに定義された FQDN が常に正しい IP アドレスに解決されるようになります。これは、DHCP を使用してインターフェイスのアドレスを取得するように設定する場合に特に重要です。また、スタティック IP アドレスに使用しても効果的です。DNS サーバに正しいアドレスが保持され、スタティックアドレスを変更した場合に簡単に更新できるようになります。

選択した DDNS サービスプロバイダーのグループを使用するように DDNS を設定できるほか、カスタムオプションを使用すると Web 更新をサポートする他の DDNS プロバイダーに更新を送信できます。インターフェイスに指定する FQDN をこれらのサービスプロバイダーに登録する必要があります。



(注) Device Manager を使用して設定できるのは Web 更新の DDNS のみです。IETF RFC 2136 で定義されている方式の DDNS は設定できません。

始める前に

プロバイダーの証明書を検証する信頼できる CA 証明書が必要です。この証明書がシステムにないと、DDNS 接続は成功しません。証明書はサービスプロバイダーのサイトからダウンロードできます。適切な証明書がアップロードされて展開されていることを確認してください。また、アップロードした証明書の [検証の使用 (Validation Usage)] が SSL サーバを含むように設定されていることを確認します。「[信頼できる CA 証明書のアップロード \(206 ページ\)](#)」を参照してください。

手順

ステップ 1 [Device] をクリックし、[System Settings] > [DDNS Service] リンクをクリックします。

[System Settings] ページをすでに開いている場合、目次の [DDNS Service] をクリックします。

このページには、サービスプロバイダー、インターフェイス、インターフェイスの完全修飾ドメイン名 (FQDN)、DNS サーバで FQDN の IP アドレスの変更を更新する頻度など、DDNS 更新方式のリストが表示されます。エントリの [ステータスの表示 (Show Status)] リンクをクリックすると、エントリが正しく機能しているかどうかを確認できます。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- 新しいダイナミック DNS 更新方式を作成するには、[+] または [Create DDNS Service] ボタンをクリックします。
- 既存のダイナミック DNS 更新方式を編集するには、その方式の編集アイコン (🔗) をクリックします。

方式を削除するには、その方式のごみ箱アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 ダイナミック DNS サービスのプロパティを設定します。

- [Name] : サービスの名前。
- [Web Type Update] : DDNS サービスプロバイダーでサポートされる内容に基づいて、更新するアドレスのタイプを選択します。デフォルトは [All Addresses] で、IPv4 と IPv6 の両方のすべてのアドレスが更新されます。代わりに [IPv4 Address]、[IPv4 and One IPv6 Address]、[One IPv6 Address]、または [All IPv6 Addresses] を選択すると、該当するアドレスを更新できます。

IPv6 アドレスについては、次の点に注意してください。

- 更新されるのはグローバルアドレスのみです。リンクローカルアドレスは更新されません。
- Device Manager では各インターフェイスに設定できる IPv6 アドレスは 1 つだけであるため、1 つの IPv6 アドレスのみが更新されます。
- [Service Provider] : ダイナミック DNS 更新を受信して処理するサービスプロバイダーを選択します。次のサービスプロバイダーを使用できます。
 - [No-IP] : No-IP DDNS サービスプロバイダー (<https://www.noip.com/>) 。
 - [Dynamic DNS] : Oracle Dynamic DNS サービスプロバイダー (<https://account.dyn.com/>) 。
 - [Google] : Google Domains サービスプロバイダー (<https://domains.google.com>) 。
 - [Custom URL] : その他の DDNS サービスプロバイダー。選択したプロバイダーに必要な URL (ユーザ名とパスワードを含む) を [Web URL] フィールドに入力する必要があります。DDNS サービスは、<https://help.dyn.com/remote-access-api/> で説明されている標準に従う必要があります。

- [Username] と [Password] ([Custom URL] 以外の方式) : ダイナミック DNS 更新を送信するときに使用するユーザ名とパスワード (サービスプロバイダーのプラットフォームで定義) 。

注 :

- ユーザ名にスペースや @ および : を含めることはできません。これらの文字はデリミタとして使用されます。
- パスワードにスペースや @ を含めることはできません。この文字はデリミタとして使用されます。最初の : から @ までの間にある : は、パスワードの一部と見なされません。
- [Web URL] ([Custom URL] 方式) : サービスプロバイダーとしてカスタム URL を選択した場合、ダイナミック DNS サービスの URL を入力します。URL は次の形式にする必要があります、511 文字までに制限されます。

`http(s)://username:password@provider-domain/xyz?hostname=<h> &myip=<a>`

<https://username:password@domain-provider/xyz?hostname=%3Ch%3E&myip=%3Ca%3E>

- [Interfaces and Fully-Qualified Domain Name] : このサービスプロバイダーで DNS レコードを更新するインターフェイスを選択し、各インターフェイスの完全修飾ドメイン名を入力します。たとえば、`interface.example.com` のようになります。インターフェイスには次の制限があります。
 - 名前付きの物理インターフェイスとサブインターフェイスのみを選択できます。
 - 管理、BVI/EtherChannel またはそのメンバー、VLAN、仮想トンネルインターフェイス (VTI) のタイプのインターフェイスは選択できません。
 - 各インターフェイスは 1 つの DDNS 更新方式でのみ選択できます。同じ DDNS 更新オブジェクトでサービスプロバイダーを使用するすべてのインターフェイスを選択できます。
- [Update Interval] : ダイナミック DNS 更新を送信する頻度。デフォルトは [On Change] で、インターフェイスの IP アドレスが変更されるたびに更新が送信されます。ほかに、[Hourly]、[Daily]、または [Monthly] を選択できます。更新を毎日送信する場合は時刻を設定し、毎月送信する場合は時刻と日付を設定します。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

DNS の設定

ドメイン ネーム システム (DNS) サーバは、ホスト名を IP アドレスに解決するために使用されます。初期システムセットアップ時に DNS サーバを設定します。それにより、これらのサーバがデータインターフェイスと管理インターフェイスに適用されます。セットアップ後に変更することが可能です。また、データインターフェイスと管理インターフェイスに個別のサーバセットを使用できます。

少なくとも、管理インターフェイスの DNS を設定する必要があります。FQDN ベースのアクセス制御ルールを使用する場合や、**ping** などの CLI コマンドでホスト名を使用する場合は、データインターフェイスの DNS も設定する必要があります。

DNS の設定は、DNS グループを設定し、インターフェイスで DNS を設定するという 2 手順のプロセスです。

ここでは、このプロセスについて詳しく説明します。

DNS グループの設定

DNS グループは、DNS サーバと一部の関連属性のリストを定義します。管理インターフェイスとデータ インターフェイスで別々に DNS を設定できます。`www.example.com` などの完全修飾ドメイン名 (FQDN) を IP アドレスに解決するには、DNS サーバが必要です。

デバイスセットアップウィザードが完了した後、次のシステム定義 DNS グループの一方または両方を使用できます。

- **CiscoUmbrellaDNSServerGroup** : このグループには、Cisco Umbrella と使用できる DNS サーバの IP アドレスが含まれています。初期セットアップ時にこれらのサーバを選択した場合、これが唯一のシステム定義グループになります。このグループの名前またはサーバリストを変更することはできませんが、他のプロパティは編集できます。
- **CustomDNSServerGroup** : デバイス セットアップ時に Umbrella サーバを選択していない場合、システムはサーバリストを使用してこのグループを作成します。このグループのすべてのプロパティを編集できます。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択して、目次から [DNSグループ (DNS Groups)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- グループを作成するには、[グループの追加 (Add Group)] () ボタンをクリックします。
- グループを編集するには、そのグループの編集アイコン () をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン () をクリックします。

ステップ 3 次のプロパティを設定します。

- **[名前 (Name)]** : DNS サーバ グループの名前。DefaultDNS という名前は予約済みで使用できません。
- **[DNS IPアドレス (DNS IP Addresses)]** : DNS サーバの IP アドレスを入力します。複数のサーバを設定するには、[別のDNS IPアドレスを追加 (Add Another DNS IP Address)] をクリックします。サーバアドレスを削除する場合は、アドレスの削除アイコン () をクリックします。

リストは優先順です。リストの最初のサーバが常に使用されます。後続のサーバは、上位のサーバから応答が受信されない場合にのみ使用されます。最大6台のサーバを設定できます。ただし、6台のサーバはデータインターフェイスでのみサポートされます。管理インターフェイスでは、最初の3台のサーバのみが使用されます。
- **[ドメイン検索名 (Domain Search Name)]** : ネットワークのドメイン名 (example.com など) を入力します。このドメインは、完全修飾されていないホスト名 (たとえば、serverA.example.com ではなく serverA) に追加されます。名前は、データ インターフェイスのグループを使用するために 63 文字以下にする必要があります。

- [再試行 (retries)] : システムが応答を受信しない場合に DNS サーバのリストを再試行する回数 (0 ~ 10 の範囲)。デフォルトは 2 です。この設定は、データ インターフェイスでのみ使用される DNS グループに適用されます。
- [Timeout] : 次の DNS サーバを試行する前に待機する秒数 (1 ~ 30)。デフォルト値は 2 秒です。システムがサーバのリストを再試行するたびに、このタイムアウトは 2 倍に増えます。この設定は、データ インターフェイスでのみ使用される DNS グループに適用されます。

ステップ 4 [OK] をクリックします。

データおよび管理トラフィック用のDNSの設定

ドメイン ネーム システム (DNS) サーバは、IP アドレスのホスト名の解決に使用されます。2つのDNSサーバ設定があり、異なるタイプのトラフィック (データトラフィックと特別な管理トラフィック) に適用されます。データトラフィックには、アクセスコントロールルールやリモートアクセス VPN など、DNS ルックアップが必要な FQDN を使用するサービスが含まれます。特別な管理トラフィックには、スマートライセンスやデータベースの更新など、管理インターフェイスで発生するトラフィックが含まれます。

CLI セットアップウィザードを使用する場合、システムの初期設定で管理 DNS サーバを設定します。Device Manager セットアップウィザードでデータおよび管理 DNS サーバを設定することもできます。次の手順を使用して、DNS サーバのデフォルトを変更できます。

configure network dns servers および **configure network dns searchdomains** コマンドを使用して、CLI で管理 DNS の設定を変更することもできます。データインターフェイスおよび管理インターフェイスが同じDNSグループを使用していて、そのグループが更新され次の展開段階にある場合、データインターフェイスにも変更が適用されます。

DNS サーバ通信の正しいインターフェイスを決定するために、Threat Defense はルーティンググループアップを使用しますが、どのルーティングテーブルが使用されるかは、DNS をイネーブルにするインターフェイスによって異なります。詳細については、以下のインターフェイス設定を参照してください。

DNS 解決に関する問題が発生した場合は、次を参照してください。

- [DNS の一般的な問題のトラブルシューティング \(959 ページ\)](#)
- [管理インターフェイスの DNS のトラブルシューティング \(1028 ページ\)](#)

始める前に

- DNS サーバグループを作成していることを確認します。この説明については、[DNS グループの設定 \(955 ページ\)](#) を参照してください。
- Threat Defense に、DNS サーバにアクセスするための適切なスタティックルートまたはダイナミックルートがあることを確認します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [DNSサーバ (DNS Server)] リンクをクリックします。

すでに [システム設定 (System Settings)] ページを表示している場合は、コンテンツテーブルの [DNSサーバ (DNS Server)] をクリックします。

ステップ 2 データインターフェイスのDNSを設定します。

- a) すべてのインターフェイスまたは特定のインターフェイスで DNS ルックアップを有効にします。これらの選択は、使用されるルーティングテーブルにも影響します。

インターフェイスで DNS ルックアップを有効にすることは、ルックアップの送信元インターフェイスを指定することとは異なるので注意してください。デバイスは、常にルートルックアップを使用して送信元インターフェイスを決定します。

- [すべて (ANY)] (どのインターフェイスも選択しない) : すべてのインターフェイスで、DNS ルックアップを有効にします。デバイスはデータルーティングテーブルのみ。
 - [管理インターフェイスまたは管理専用インターフェイス以外の選択したインターフェイス (Interfaces selected but not the Diagnostic interface or a management)] : 指定したインターフェイスで DNS ルックアップを有効にします。デバイスはデータルーティングテーブルのみチェックします。
 - [選択したインターフェイスと管理インターフェイスまたは管理専用インターフェイス (Interfaces selected plus the Diagnostic interface or a management-only interface)] : 指定したインターフェイスでDNSルックアップを有効にします。デバイスはデータルーティングテーブルをチェックし、ルートが見つからない場合、管理専用ルーティングテーブルにフォールバックします。
 - [選択された管理インターフェイスまたは管理専用インターフェイス (Only the Diagnostic interface or a management-only interface selected)] : 管理インターフェイスまたは管理専用インターフェイスで DNS ルックアップを有効にします。デバイスは管理専用ルーティングテーブルのみチェックします。
- b) データインターフェイスで使用するサーバを定義する [DNSグループ] を選択します。グループが存在しない場合は、[新しいDNSグループの作成 (Create New DNS Group)] をクリックしてすぐに作成します。データ インターフェイスでルックアップしないようにするには、[なし (None)] を選択します。
- c) (オプション) アクセス制御ルールで FQDN ネットワーク オブジェクトを使用する場合は、[FQDN DNS設定 (FQDN DNS Settings)] を設定します。

これらのオプションは、FQDN オブジェクトのみを解決する場合に使用されます。その他のタイプの DNS 解決では無視されます。

- [ポーリング時間 (Poll Time)] : FQDN ネットワーク オブジェクトを IP アドレスに解決するために使用するポーリング サイクルの時間 (分単位)。FQDN オブジェクトは、アクセス コントロール ポリシーで使用されている場合にのみ解決されます。タイマーによって、解決間隔の最大時間が決定されます。また、DNS エントリの存続可能時間 (TTL) の値を使用しても、IP アドレス解決を更新するタイミングを決定できます。したがって、個々の FQDN がポーリングサイクルよりも頻繁に解決される可能性があります。デフォルトは 240 (4 時間) です。指定できる範囲は 1 ~ 65535 分です。
- [有効期限 (Expiry)] : DNS エントリの期限が切れる (DNS サーバから取得した TTL が経過する) 分数。この分数が経過すると、エントリは DNS ルックアップ テーブルから削除されます。エントリの削除にはテーブルをコンパイルする必要があります。したがって、削除を頻繁に行うとデバイス上の処理負荷が増加する可能性があります。一部の DNS エントリには極めて短時間の TTL (3 秒程度) を設定できるため、この設定を使用すると TTL を事実上、延長することができます。デフォルトは 1 分です (つまり、TTL の経過後 1 分でエントリが削除されます)。指定できる範囲は 1 ~ 65535 分です。

- d) [保存 (Save)] をクリックします。設定を展開して、デバイスに変更を適用する必要もあります。

ステップ 3 管理インターフェイスの DNS を設定します。

- a) 管理インターフェイスで使用するサーバを定義する [DNS グループ] を選択します。グループが存在しない場合は、[新しい DNS グループの作成 (Create New DNS Group)] をクリックしてすぐに作成します。
- b) [保存 (Save)] をクリックします。管理 DNS サーバを更新するには、変更を展開する必要があります。

DNS の一般的な問題のトラブルシューティング

管理インターフェイスおよびデータインターフェイスに個別に DNS サーバを設定する必要があります。一部の機能では、両方ではなくどちらか片方のタイプのインターフェイスで名前解決を行います。所定の機能では、用途に応じて異なる解決方法を使用することもあります。

たとえば、**ping hostname** コマンドと **ping interface interface_name hostname** コマンドはデータインターフェイス DNS サーバを使用して名前解決を行い、**ping system hostname** コマンドは管理インターフェイス DNS サーバを使用します。これにより、特定のインターフェイスおよびルーティング テーブルを介した接続をテストできます。

ホスト名ルックアップに関する問題をトラブルシューティングする場合は、このことに留意してください。

管理インターフェイスの DNS をトラブルシューティングする場合は、[管理インターフェイスの DNS のトラブルシューティング \(1028 ページ\)](#) も参照してください。

名前解決しない場合

単純に名前解決が実行されない場合のトラブルシューティングに関するヒントは、次のとおりです。

- 管理インターフェイスとデータ インターフェイスの両方に DNS サーバを設定していることを確認します。データインターフェイスでは、インターフェイスに[任意 (Any)]を使用します。一部のインターフェイスで DNS を許可しない場合にのみ、インターフェイスを明示的に指定します。
- 管理インターフェイスまたは管理専用インターフェイス管理インターフェイスを使用する場合は、そのインターフェイスのみが選択されていることを確認します。
- 各 DNS サーバの IP アドレスに ping を実行して、到達可能であることを確認します。system キーワードおよび interface キーワードを使用して、特定のインターフェイスをテストします。ping が失敗した場合は、スタティック ルートとゲートウェイを確認します。サーバのスタティック ルートを追加する必要がある場合があります。
- ping が成功して名前解決が失敗する場合は、アクセス制御ルールを確認します。サーバから到達可能なインターフェイスの DNS トラフィック (UDP/53) を許可していることを確認します。このトラフィックは、システムと DNS サーバの間にあるデバイスによってブロックされる可能性もあるため、別の DNS サーバを使用する必要がある場合があります。
- ping が機能する場合は適切なルートが存在し、アクセス制御ルールに問題はありません。DNS サーバに FQDN のマッピングが存在しない可能性を考えます。別のサーバを使用する必要がある場合があります。

名前解決が正しくない場合

名前解決は実行されるが名前の IP アドレスが最新のものではない場合、キャッシュに問題がある可能性があります。この問題は、アクセス制御ルールで使用される FQDN ネットワークオブジェクトなどのデータ インターフェイス ベースの機能にのみ影響します。

システムには、以前のルックアップで取得した DNS 情報のローカルキャッシュが存在します。新しいルックアップが要求されると、システムは最初にローカルキャッシュを調べます。ローカルキャッシュに情報がある場合、結果の IP アドレスが戻されます。ローカルキャッシュで要求を解決できない場合、DNS サーバに DNS クエリが送信されます。外部 DNS サーバによって要求が解決された場合、結果の IP アドレスが、対応するホスト名とともにローカル キャッシュに格納されます。

各ルックアップには DNS サーバによって定義される存続可能時間値が設定されており、キャッシュからのルックアップは自動的に期限切れになります。また、システムはアクセス制御ルールで使用される FQDN の値を定期的に更新します。この更新は、少なくともポーリング間隔（デフォルトでは4時間ごと）で実行されますが、エントリの存続可能時間値に基づいて、より頻繁に実行できます。

show dns-hosts コマンドおよび **show dns** コマンドを使用して、ローカルキャッシュを確認します。FQDN の IP アドレスが正しくない場合は、**dns update [host hostname]** コマンドを使用して情報を強制的に更新できます。ホストを指定せずにコマンドを使用すると、すべてのホスト名が更新されます。

`clear dns[host fqdn]` コマンドおよび `clear dns-hosts cache` コマンドを使用して、キャッシュ情報を削除できます。

デバイスのホスト名の設定

デバイス ホスト名を変更できます。

また、CLI で `configure network hostname` コマンドを使用してホスト名を変更できます。



注意 ホスト名を使用してシステムに接続しているときにホスト名を変更すると、変更はただちに適用されるため、変更を保存するときに Device Manager へのアクセスが失われます。デバイスに接続し直す必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [ホスト名 (Hostname)] リンクの順にクリックします。

すでにシステム設定ページを開いている場合、目次の [ホスト名 (Hostname)] をクリックします。

ステップ 2 新しいホスト名を入力します。

ステップ 3 [保存 (Save)] をクリックします。

ホスト名の変更は、いくつかのシステムプロセスにすぐに適用されます。ただし、すべてのシステムプロセスで同じ名前が使用されるため、更新を完了するには変更を展開する必要があります。

Network Time Protocol (NTP) の設定

システムの時間を定義するには Network Time Protocol (NTP) サーバを設定する必要があります。初期システム セットアップ時に NTP サーバを設定しますが、次の手順で設定を変更することもできます。NTP 接続に問題がある場合は、[NTP のトラブルシューティング \(1026 ページ\)](#) を参照してください。

Threat Defense デバイスは NTPv4 をサポートします。



(注) Firepower 4100/9300 の場合は、Device Manager を介して NTP を設定しません。FXOS で NTP を設定します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [タイムサービス (Time Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに表示している場合は、目次で [タイムサービス (Time Services)] をクリックします。

ステップ 2 [NTP タイムサーバ (NTP Time Server)] で、独自のタイムサーバとシスコのタイムサーバのどちらを使用するか選択します。

- **[デフォルト NTP サーバ (Default NTP Servers)]** : このオプションを選択すると、NTP に使用するサーバ名がサーバリストに表示されます。
- **[ユーザ定義 NTP サーバ]** : このオプションを選択する場合は、使用する NTP サーバの完全修飾ドメイン名あるいは IPv4 または IPv6 アドレスを入力します。例 : ntp1.example.com や 10.100.10.10 など。最大 3 台の NTP サーバを追加できます。

ステップ 3 [保存 (Save)] をクリックします。

Precision Time Protocol の設定 (ISA 3000)

高精度時間プロトコル (PTP) は、パケットベースネットワーク内のさまざまなデバイスのクロックを同期するために開発された時間同期プロトコルです。それらのデバイスクロックは、一般的に精度と安定性が異なります。このプロトコルは、産業用のネットワーク化された測定およびコントロールシステム向けに設計されており、必要な帯域幅は最小限で、処理オーバーヘッドが少ないため、分散システムでの使用に最適です。

PTP システムは、PTP デバイスと非 PTP デバイスの組み合わせで構成される分散ネットワークシステムです。PTP デバイスには、オーディナリクロック、境界クロック、およびトランスペアレントクロックが含まれます。非 PTP デバイスには、ネットワークスイッチ、ルータ、およびその他のインフラストラクチャ デバイスが含まれます。

Threat Defense デバイスは、トランスペアレントクロックとして設定できます。Threat Defense デバイスは、自身のクロックを PTP クロックと同期しません。Threat Defense デバイスは、PTP クロックで定義されている PTP のデフォルトプロファイルを使用します。

PTP デバイスを設定するときは、連携させるデバイスのドメイン番号を定義します。したがって、複数の PTP ドメインを設定した後、1 つの特定のドメインに PTP クロックを使用するように各非 PTP デバイスを設定できます。

始める前に

デバイスが使用する PTP クロックに設定されているドメイン番号を確認します。また、システムがドメイン内の PTP クロックに到達できるインターフェイスを決定します。

以下に、PTP の設定に関するガイドラインを示します。

- この機能は、Cisco ISA 3000 アプライアンスでのみ使用できます。
- Cisco PTP は、マルチキャスト PTP メッセージのみサポートしています。
- PTP は IPv4 ネットワークでのみ使用でき、IPv6 ネットワークでは使用できません。
- PTP 設定は、ルーテッドかブリッジグループメンバーかを問わず、物理イーサネットデータ インターフェイスでサポートされます。管理インターフェイス、サブインターフェイス、EtherChannel、ブリッジ仮想インターフェイス (BVI)、またはその他の仮想インターフェイスではサポートされません。
- VLAN サブインターフェイスでの PTP フローは、適切な PTP 設定が親インターフェイス上に存在する場合にサポートされます。
- PTP パケットが確実にデバイスを通過できるようにする必要があります。PTP トラフィックは UDP 宛先ポート 319 と 320、および宛先 IP アドレス 224.0.1.129 によって識別されます。そのため、このトラフィックを許可するアクセス コントロール ルールはすべて動作します。
- ルーティングされたインターフェイス間で PTP パケットが転送される場合は、マルチキャストルーティングを有効にするとともに、各インターフェイスが 224.0.1.129 IGMP マルチキャストグループに参加する必要があります。同じブリッジグループ内のインターフェイス間で PTP パケットが転送される場合は、マルチキャストルーティングを有効にして IGMP グループを設定する必要はありません。

手順

ステップ 1 PTP クロック側インターフェイスの設定を確認します。

デフォルト設定では、すべてのインターフェイスが同じブリッジグループに配置されますが、ブリッジグループからインターフェイスを削除できます。マルチキャスト IGMP グループの場合とは異なる方法で設定する必要があるため、インターフェイスがルーテッドなのかブリッジグループメンバーなのかを決定することが重要です。

次の手順では、ブリッジグループに含まれているインターフェイスの確認方法について説明します。PTP 用に設定するインターフェイスがブリッジグループメンバーかどうかを確認します。

- a) FDM で、**[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)]** の **[すべてのインターフェイスを表示 (View All Interfaces)]** をクリックします。
- b) リストでインターフェイスを検索し、**[モード (Mode)]** 列を確認します。BridgeGroupMember はブリッジグループの一部であることを意味します。それ以外の場合はルーテッドです。

ステップ 2 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [タイムサービス (Time Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに表示している場合は、目次で [タイムサービス (Time Services)] をクリックします。

ステップ 3 PTP の設定を行います。

- [ドメイン番号 (Domain Number)] : ネットワーク内の PTP デバイスに設定されているドメイン番号 (0 ~ 255)。異なるドメインで受信されたパケットは、通常のマルチキャストパケットのように扱われるため、PTP 処理は行われません。
- [クロックモード (Clock Mode)] : [エンドツーエンドトランスペアレント (End To End Transparent)] を選択します。デバイスを PTP トランスペアレントクロックとしてのみ動作させることができます。

[転送 (Forward)] を選択することもできますが、これは PTP を設定しない場合と基本的に同じです。ドメイン番号は無視されます。PTP パケットは、マルチキャストトラフィックのルーティングテーブルに基づいてデバイスを通過します。これは、デフォルトの PTP 設定です。

- [インターフェイス (Interface)] : システムがネットワーク内の PTP クロックに接続できるインターフェイスをすべて選択します。PTP は、これらのインターフェイスでのみ有効になります。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

ステップ 5 選択したインターフェイスのいずれかがルーテッドモードである場合、つまりブリッジグループメンバーではない場合は、FlexConfig を使用してマルチキャストルーティングを有効にし、ルーテッドインターフェイスを正しい IGMP グループに参加させる必要があります。

選択したすべてのインターフェイスがブリッジグループメンバーである場合は、この手順を完了しないでください。ブリッジグループメンバーで IGMP を設定しようとすると、展開に失敗します。

- a) [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- b) 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig オブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。
- c) マルチキャストルーティングを有効にし、ルーテッドインターフェイスの IGMP 参加を設定するために、必要なオブジェクトを作成します。

次に、オブジェクトの基本テンプレートを示します。この例では、GigabitEthernet1/2 は、PTP を有効にするルーテッドインターフェイスの 1 つです。必要に応じてインターフェイスのハードウェア名を変更します。また、複数のルーテッドインターフェイスがある場合は、追加のインターフェイスごとに **interface** コマンドと **igmp** コマンドを繰り返します。

コマンド **igmp** では、224.0.1.129 IGMP グループに参加します。これは、ネットワークアドレスに関係なく、すべてのインターフェイスの正しい IP アドレスです。

```
multicast-routing
interface GigabitEthernet1/2
  igmp join-group 224.0.1.129
```

ルーテッドインターフェイスのネゲートテンプレートは、次のようになります。

```
no multicast-routing
interface GigabitEthernet1/2
  no igmp join-group 224.0.1.129
```

- d) 目次の [FlexConfigポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックして、FlexConfig ポリシーにこのオブジェクトを追加し、[保存 (Save)] をクリックします。

プレビューに、オブジェクトからの期待されるコマンドが表示されていることを確認します。

次のタスク

変更を展開した後に、PTP の設定を確認できます。Device Manager CLI コンソール、または SSH またはコンソールセッションから、さまざまな **show ptp** コマンドを発行します。たとえば、GigabitEthernet1/2 のみでドメイン 10 の PTP を設定している場合、出力は次のようになります。

```
> show ptp clock
PTP CLOCK INFO
  PTP Device Type: End to End Transparent Clock
  Operation mode: One Step
  Clock Identity: 34:62:88:FF:FE:1:73:81
  Clock Domain: 10
  Number of PTP ports: 4
> show ptp port
PTP PORT DATASET: GigabitEthernet1/1
  Port identity: Clock Identity: 34:62:88:FF:FE:1:73:81
  Port identity: Port Number: 1
  PTP version: 2
  Port state: Disabled

PTP PORT DATASET: GigabitEthernet1/2
  Port identity: Clock Identity: 34:62:88:FF:FE:1:73:81
  Port identity: Port Number: 2
  PTP version: 2
  Port state: Enabled

PTP PORT DATASET: GigabitEthernet1/3
  Port identity: Clock Identity: 34:62:88:FF:FE:1:73:81
  Port identity: Port Number: 3
  PTP version: 2
  Port state: Disabled

PTP PORT DATASET: GigabitEthernet1/4
  Port identity: Clock Identity: 34:62:88:FF:FE:1:73:81
  Port identity: Port Number: 4
  PTP version: 2
  Port state: Disabled
```


管理接続用 HTTP プロキシの設定

システムとインターネットの間に直接接続がない場合は、管理インターフェイスの HTTP プロキシを設定できます。システムは、Device Manager への接続やデータベース更新をダウンロードするためのシステムからシスコへの接続など、すべての管理接続にプロキシを使用します。

また、Threat Defense CLI で **configure network http-proxy** コマンドを使用して、HTTP プロキシを設定することもできます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [HTTP プロキシ (HTTP Proxy)] リンクをクリックします。

すでに [システム設定 (System Settings)] ページを表示している場合は、目次の [HTTP プロキシ (HTTP Proxy)] をクリックします。

ステップ 2 トグルをクリックしてプロキシを有効にしてから、プロキシ設定を指定します。

- [HTTP プロキシ (HTTP proxy)] : プロキシサーバの IP アドレス。
- [Port (ポート)] : HTTP 接続をリッスンするためにプロキシサーバに設定するポート番号。
- [プロキシ認証を使用 (Use Proxy Authentication)] : プロキシ接続に認証を要求するようサーバが設定されている場合は、このオプションを選択します。このオプションを選択した場合は、プロキシサーバにログインできるアカウントの [ユーザ名 (Username)] と [パスワード (Password)] も入力します。

ステップ 3 [保存 (Save)] をクリックし、変更を確定します。

変更はすぐに適用されます。展開ジョブは必要ありません。

システムの管理接続完了方法を変更しようとしているため、Device Manager への接続が失われます。変更が完了するまで数分待って、ブラウザウィンドウを更新してからもう一度ログインしてください。

クラウド サービスの設定

クラウドサービスに登録すると、Security Cloud Control、Cisco Threat Response、Cisco Success Network など、さまざまなクラウドベースのアプリケーションを使用できます。

クラウドに登録すると、ページには登録ステータスおよびテナントタイプと、デバイス登録で使われたアカウント名が表示されます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [クラウドサービス (Cloud Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次の [クラウドサービス (Cloud Services)] をクリックします。

デバイスが登録されていない場合、このページに Cisco Cloud に登録するための登録方法が表示されます。クラウドに登録すると、個々のクラウドサービスを有効または無効にできます。

ステップ 2 評価モードのとき、またはクラウドサービスからの登録解除後に、Cisco Cloud に登録するには、次のいずれかのオプションを選択します。

- **Security Cloud Control セキュリティ/SCC アカウント**：次のいずれかの方法を使用できます。

- **[Security Cloud Control からのテナンシーに自動登録 (Auto-enroll with Tenancy from)]**

(Firepower 1000、Secure Firewall 3100 のみ)。登録キーを取得する代わりに、自動登録を使用できます。まず、Security Cloud Control に移動し、デバイスのシリアル番号でデバイスを追加します。次に、Device Manager でこのチェックボックスをオンにして登録を開始します。デバイスのシャーシまたは梱包明細からシリアル番号を取得します。FXOS の場合は、FXOS CLI に移動して **show chassis detail** コマンドを実行することにより、シリアル番号 (SN) というラベルが付いた正しいシリアル番号が表示されます。Threat Defense コマンドの **show serial-number** では異なるシリアル番号が表示されることに注意してください。これは Security Cloud Control 登録には推奨されません。この方式は、Security Cloud Control のレガシー デバイス マネージャ モードだけでなく、Security Cloud Control のクラウド提供型 Management Center でも機能します。

(注)

デバイス マネージャ モードは、このモードを使用して Threat Defense デバイスをすでに管理している既存のユーザーのみが使用できます。

- **Security Cloud Control またはその他のセキュリティアカウントにログインし、登録キーを生成します。** このページに戻り、[クラウドサービスのリージョン (Cloud Services Region)] を選択して、[登録キー (Registration Key)] に貼り付けます。この方式は、Security Cloud Control のレガシー デバイス マネージャ モードでのみ機能します。Security Cloud Control のクラウド提供型の管理センターについては、[デバイス マネージャから管理センターへの切り替え](#)または[Security Cloud Control](#)を参照してください。

(注)

デバイス マネージャ モードは、このモードを使用して Threat Defense デバイスをすでに管理している既存のユーザーのみが使用できます。

この時点で、**Cisco Security Cloud Control** と **Cisco Success Network** を有効にすることもできます。これらはデフォルトで有効になっています。

- [スマートライセンス（Smart License）]：（Security Cloud Control を使用しない場合のみ）リンクをクリックして [スマートライセンシング（Smart Licensing）] ページに移動し、CSSM に登録します。プロセス登録中に Cisco Success Network を有効にした場合、CSSM に登録すると、デバイスがクラウドサービスにも登録されます。

（注）

クラウドサービスから登録解除した場合、またはスマートライセンシングに登録したときに Cisco Success Network に登録しなかった場合、スマートライセンスの登録アプローチではいくつかの追加手順が必要です。この場合、[クラウドサービスのリージョン]を選択し、[登録]をクリックします。開示内容を読み、[承認]をクリックします。

ステップ 3 クラウドサービスに登録したら、必要に応じて機能を有効または無効にできます。次の項を参照してください。

- [Security Cloud Control の有効化または無効化（レガシー デバイス マネージャ モード）](#)
- [Cisco Success Network への接続（969 ページ）](#)
- [Cisco Cloud へのイベントの送信（970 ページ）](#)
- [クラウドサービスの登録解除（971 ページ）](#)

SecurityCloudControlの有効化または無効化（レガシーデバイスマネージャ モード）



（注） このセクションは、クラウド提供型の管理センターではなく、Security Cloud Control のレガシー デバイス マネージャ モードにのみ適用されます。

[クラウドサービスの設定（966 ページ）](#) の推奨に従い、Security Cloud Control からの登録キーを使用してクラウドサービスに登録した場合、デバイスはすでに Security Cloud Control に登録されています。その後、必要に応じて接続を無効にしたり、再度有効にしたりできます。

デバイスがスマートライセンスを使用してクラウドサービスに登録されている場合、Security Cloud Control を有効にすると問題が発生します。デバイスは Security Cloud Control インベントリに表示されません。最初にクラウドサービスからデバイスの登録を解除しておくことを強くお勧めします。歯車(⚙️)ドロップダウンリストから[クラウドサービスの登録解除]を選択します。登録解除後、[クラウドサービスの設定（966 ページ）](#) で説明されているとおりに、Security Cloud Control から登録トークンを取得し、トークンとセキュリティアカウントを使用して再登録します。

クラウド管理の仕組みの詳細については、Security Cloud Control ポータル (<http://www.cisco.com/go/cdo>) を参照するか、共に作業しているリセラーまたはパートナーにお問い合わせください。

始める前に

高可用性を設定する予定の場合、高可用性グループで使用する両方のデバイスを登録する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [クラウドサービス (Cloud Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次で [クラウドサービス (Cloud Services)] をクリックします。

ステップ 2 必要に応じて、Security Cloud Control 機能の [有効化 (Enable)]/[無効化 (Disable)] ボタンをクリックして設定を変更します。

Cisco Success Network への接続

デバイスを登録するときに、Cisco Success Network への接続を有効にするかどうかを決めます。[デバイスの登録 \(109 ページ\)](#) を参照してください。

Cisco Success Network を有効にすると、テクニカル サポートを提供するために不可欠な使用状況の情報と統計情報がシスコに提供されます。またこの情報により、シスコは製品を向上させ、未使用の使用可能な機能を認識させるため、ネットワーク内にある製品の価値を最大限に生かすことができます。

接続を有効にすると、デバイスが Cisco Cloud へのセキュアな接続を確立し、シスコから提供されているテクニカルサポートサービス、クラウド管理および監視サービスなどの追加サービスに参加できるようになります。お使いのデバイスは、いつでもこのセキュアな接続を確立して維持できます。クラウドから完全に切断する方法については、[クラウドサービスの登録解除 \(971 ページ\)](#) を参照してください。

デバイスを登録した後で Cisco Success Network の設定を変更できます。



(注) システムがシスコにデータを送信する際に、タスク リストにテレメトリ ジョブが表示されます。

始める前に

Cisco Success Network を有効にするには、デバイスをクラウドに登録する必要があります。デバイスを登録するには、([スマートライセンス (Smart Licensing)] ページで) Cisco Smart Software Manager にデバイスを登録し、登録中に [Cisco Success Network] オプションを選択するか、または登録キーを入力して Security Cloud Control に登録します (Security Cloud Control のレガシー デバイス マネージャ モードのみ)。



(注) 高可用性グループのアクティブ装置で Cisco Success Network を有効にする場合、スタンバイ装置での接続も有効にします。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [クラウドサービス (Cloud Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次で [クラウドサービス (Cloud Services)] をクリックします。

ステップ 2 必要に応じて Cisco Success Network 機能の [有効にする (Enable)]/[無効にする (Disable)] コントロールをクリックして設定を変更します。

[サンプルデータ (sample data)] リンクをクリックするとシスコに送信される情報の種類を確認できます。

接続を有効にする場合、情報開示を読み、[同意 (Accept)] をクリックします。

Cisco Cloud へのイベントの送信

Cisco Cloud サーバにイベントを送信できます。このサーバから、各種のシスコ クラウドサービスがイベントにアクセスできます。次に、クラウドアプリケーションを使用して、イベントを分析したり、デバイスが遭遇した可能性のある脅威を評価したりできます。

クラウドツールは、送信したイベントを使用するかどうかを決定します。ツールのマニュアルを参照するか、イベントデータを調べて、未使用のイベントをクラウドに送信して帯域幅とストレージ領域の両方を無駄にしていないことを確認します。ツールは同じソースからイベントを取り込むため、最も制限の厳しいツールだけでなく、使用するすべてのツールを選択する必要があります。例：

- Security Cloud Control のセキュリティ分析およびロギングツールは、すべての接続イベントを使用できます。
- Threat Response は優先順位の高い接続イベントのみを使用するため、すべての接続イベントをクラウドに送信する必要がありません。またこれは、セキュリティインテリジェンスの優先順位の高いイベントのみを使用します。

始める前に

このサービスを有効にするには、事前にクラウドサービスにデバイスを登録する必要があります。

米国地域では <https://visibility.amp.cisco.com/> で、EU 地域では <https://visibility.eu.amp.cisco.com> で、APJC 地域では <https://visibility.apjc.amp.cisco.com> で、Threat Response に接続できます。アプリケーションの使い方と利点についての動画は、YouTube でご視聴いただけます (<http://cs.co/CTRvideos>)。詳細については、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/defense-center/products-installation-and-configuration-guides-list.html> にある『Cisco Secure Firewall Threat Defense and SecureX Threat Response Integration guide』を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [クラウドサービス (Cloud Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次で [クラウドサービス (Cloud Services)] をクリックします。

ステップ 2 必要に応じて [Cisco Cloud にイベントを送信 (Send Events to the Cisco Cloud)] オプションの [有効にする (Enable)]/[無効にする (Disable)] コントロールをクリックして設定を変更します。

ステップ 3 サービスを有効にすると、クラウドに送信するイベントを選択するように求められます。後で、選択したイベントのリストの横にある [編集 (Edit)] をクリックして、これらの選択を変更できます。送信するイベントのタイプを選択し、[OK] をクリックします。

- [ファイル/マルウェア (File/Malware)] : 任意のアクセスコントロールルールで適用した任意のファイルポリシー用。
- [侵入 (Intrusion)] : 任意のアクセスコントロールルールで適用した任意の侵入ポリシー用。
- [接続 (Connection)] : ログイングを有効にしたアクセスコントロールルール用。このオプションを選択すると、すべての接続イベントを送信するか、優先度の高い接続イベントのみを送信するかを選択することも可能です。優先度の高い接続イベントとは、侵入、ファイル、またはマルウェアイベントをトリガーする接続、またはセキュリティインテリジェンスブロッキングポリシーに一致する接続に関連するイベントです。

クラウドサービスの登録解除

クラウドサービスを使用しなくなった場合は、クラウドからそのデバイスの登録を解除できます。デバイスをサービスから削除する場合、またはサービスの使用を停止する場合、登録を解除する必要があります。クラウドサービスのリージョンを変更する必要がある場合は、登録を解除してから、再登録時に新しいリージョンを選択します。

この手順を使用してクラウドから登録を解除しても、スマートライセンスの登録には影響しません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [クラウドサービス (Cloud Services)] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページがすでに表示されている場合は、目次で [クラウドサービス (Cloud Services)] をクリックします。

ステップ 2 歯車 (⚙️) のドロップダウンリストから、[クラウドサービスの登録解除 (Unregister Cloud Services)] を選択します。

ステップ 3 警告を確認してから、[登録解除 (Unregister)] をクリックします。

有効にしたクラウドサービスは自動的に無効になり、それらを再度有効にすることはできなくなります。ただし、クラウドに登録するための制御が表示され、再登録できます。

Web 分析の有効化または無効化

Web 分析を有効にすると、ページのヒット数に基づいて匿名の製品使用情報をシスコに提供できます。情報には、表示したページ、ページで費やした時間、ブラウザのバージョン、製品バージョン、デバイスのホスト名などが含まれます。この情報は、シスコが機能の使用パターンを判定し、製品を改善するために役立ちます。すべての使用データは匿名であり、センシティブ データは送信されません。

Web 分析はデフォルトで有効になっています。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[システム設定 (System Settings)] > [Web 分析 (Web Analytics)] リンクをクリックします。

すでに [システム設定 (System Settings)] ページを表示している場合は、目次の [Web 分析 (Web Analytics)] をクリックします。

ステップ 2 必要に応じて [Web 分析 (Web Analytics)] 機能の [有効化 (Enable)]/[無効化 (Disable)] コントロールをクリックして設定を変更します。

URL フィルタリングの設定

システムは Cisco Collective Security Intelligence (csi) (Cisco Talos Intelligence Group (Talos)) から URL カテゴリおよびレピュテーションデータベースを取得します。これらの設定により、

データベースの更新とシステムが不明なカテゴリまたはレピュテーションの URL を処理する方法が制御されます。これらの設定を行うには、URL フィルタリングライセンスを有効にする必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定]>[URL フィルタリングの設定] リンクの順にクリックします。

[システム設定 (System Settings)] ページをすでに開いている場合、目次の [クラウドの基本設定 (Cloud Preferences)] と [URL フィルタリングの基本設定 (Filtering Preferences)] をクリックします。

ステップ 2 次のオプションを設定します。

- [自動更新の有効化 (Enable Automatic Updates)] : カテゴリとレピュテーションを含む更新された URL データをチェックしてダウンロードすることをシステムに許可します。データは通常 1 日に 1 回更新されますが、システムは 30 分ごとに更新をチェックします。デフォルトでは、更新が有効に設定されています。このオプションを選択解除した状態でカテゴリとレピュテーションのフィルタリングを使用している場合、このオプションを周期的に有効にして新しい URL データを取得してください。
- [URL クエリソース (URL Query Source)] : URL のカテゴリとレピュテーションを取得するためにクエリを実行するソース。
 - [ローカルデータベースのみ (Local Database Only)] : ローカル URL フィルタリングデータベースでのみカテゴリとレピュテーションを検索します。一致するものがない場合、URL はレピュテーションなしの未分類になります。この方式は、特にローエンドシステムにおいてストレージが限られているために URL フィルタリングデータベースが小さい場合には、限定的なものになる可能性があります。
 - [ローカルデータベースおよび Cisco Cloud (Local Database and Cisco Cloud)] : これは推奨されるオプションです。ローカルデータベースに一致するものがない場合、更新されたカテゴリ/レピュテーション情報に関して Cisco Cloud に対するクエリが実行されます。規定された時間内に応答が受信された場合は、それが照合に使用されます。それ以外の場合、および一致するものがない場合、URL はレピュテーションなしの未分類になります。
 - [Cisco Cloud のみ (Cisco Cloud Only)] : カテゴリおよびレピュテーション情報に関して、常に、Cisco Cloud に対するクエリが実行されます。ローカル URL データベースは使用されません。
- [URL 存続可能時間 (URL Time to Live)] ([未知の URL 用 Cisco CSI のクエリ (Query Cisco CSI for Unknown URLs)] を選択している場合にのみ利用可能) : 指定された URL のカテゴリおよびレピュテーションルックアップ値を保持する時間。存続可能時間が経過すると、次に試行される URL のアクセスが新規のカテゴリ/レピュテーションルックアップになります。時間が短いほど URL フィルタリングが正確になり、時間が長いほど未知の URL

Device Manager から Management Center または Security Cloud Control に切り替えます。

に対するパフォーマンスが向上します。TTL は 2、4、8、12、24、または 48 時間、1 週間、または [使用しない (Never)] (デフォルト) に設定できます。

ステップ 3 必要に応じて、URL のカテゴリを確認できます。

特定の URL のカテゴリとレピュテーションを確認できます。[確認する URL] ボックスに URL を入力し、[移動] をクリックします。結果を表示するには、外部の Web サイトに移動します。分類に同意しない場合は、[URL カテゴリの異議を送信する] リンクをクリックしてお知らせください。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

Device Manager から Management Center または Security Cloud Control に切り替えます。

Device Manager から切り替える場合は、Threat Defense デバイスを Management Center または Security Cloud Control に接続するように設定して管理できます。



(注) Security Cloud Control は、クラウド提供型の管理センターを使用して Threat Defense デバイスを管理できます。Security Cloud Control の簡素化されたデバイスマネージャ機能は、このモードで Threat Defense をすでに管理している既存のユーザーのみが使用できます。この手順は、クラウド提供型の管理センターにのみ適用されます。

Device Manager を使用して Management Center/Security Cloud Control セットアップを実行すると、管理インターフェイスおよびマネージャ アクセス インターフェイスの設定に加えて、管理のために Management Center/Security Cloud Control に切り替えたときに、Device Manager で完了したすべてのインターフェイス構成が保持されます。アクセス コントロール ポリシーやセキュリティゾーンなどの他のデフォルト設定は保持されないことに注意してください。Management Center/Security Cloud Control の初期設定に Threat Defense CLI を使用する場合、管理インターフェイスとマネージャアクセス設定のみが保持されます（たとえば、デフォルトの内部インターフェイス設定は保持されません）。

Management Center/Security Cloud Control に切り替えると、Device Manager を使用して Threat Defense デバイスを管理できなくなります。

始める前に

ファイアウォールが高可用性用に設定されている場合は、まず、Device Manager（可能な場合）または **configure high-availability disable** コマンドを使用して、高可用性設定を中断する必要があります。アクティブなユニットから高可用性を中断することをお勧めします

手順

ステップ 1 Cisco Smart Software Manager にファイアウォールを登録した場合は、マネージャを切り替える前に登録を解除する必要があります。[デバイスの登録解除 \(113 ページ\)](#) を参照してください。

ファイアウォールを登録解除すると、基本ライセンスとすべての機能ライセンスが解放されます。ファイアウォールを登録解除しないと、これらのライセンスは、Cisco Smart Software Manager のファイアウォールに割り当てられたままになります。

ステップ 2 (必要に応じて) 管理インターフェイスを設定します。[管理インターフェイスの設定 \(318 ページ\)](#) を参照してください。

マネージャアクセスにデータインターフェイスを使用する場合でも、管理インターフェイスの設定を変更する必要がある場合があります。Device Manager 接続に管理インターフェイスを使用していた場合は、Device Manager に再接続する必要があります。

- マネージャアクセス用のデータインターフェイス：管理インターフェイスには、データインターフェイスに設定されたゲートウェイが必要です。デフォルトでは、管理インターフェイスは DHCP から IP アドレスとゲートウェイを受信します。DHCP からゲートウェイを受信しない場合（たとえば、管理インターフェイスをネットワークに接続していない場合）、ゲートウェイはデフォルトでデータインターフェイスになり、何も設定する必要はありません。DHCP からゲートウェイを受信した場合は、代わりに管理インターフェイスに静的 IP アドレスを設定し、ゲートウェイをデータインターフェイスに設定する必要があります。
- マネージャアクセス用の管理インターフェイス：静的 IP アドレスを設定する場合は、デフォルトゲートウェイもデータインターフェイスではなく一意のゲートウェイに設定してください。DHCP を使用する場合は、DHCP からゲートウェイを正常に取得できると仮定して、何も設定する必要はありません。

ステップ 3 [デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [集中管理 (Central Management)] の順に選択し、[続行 (Proceed)] をクリックして Management Center/Security Cloud Control の管理を設定します。

ステップ 4 [Management Center/SCCCDOの詳細 (Management Center/SCC Details)] を設定します。

Device Manager から Management Center または Security Cloud Control に切り替えます。

図 51 : Management Center/SCC の詳細

Management Center/SCC Details

Do you know the Management Center/SCC hostname or IP address?

☒ Yes
☐ No

Threat Defense

10.89.5.4

fe80::6a87:c6ff:fea6:5480/64

Management Center/SCC

10.89.5.35

Management Center/SCC Hostname or IP Address

10.89.5.35

Management Center/SCC Registration Key

....

NAT ID

Required when the management center/SCC hostname or IP address is not provided. We recommend always setting the NAT ID even when you specify the management center/SCC hostname or IP address.

11204

Connectivity Configuration

Threat Defense Hostname

1120-4

DNS Server Group

CustomDNSServerGroup

Management Center/SCC Access Interface

outside (Ethernet1/1)

Type: Static | IP Address: 10.89.5.6 / 255.255.255.192 [Edit](#)

Before you connect to the management center or SCC, perform additional configuration:

- [Add a static route](#) through the data management interface so the threat defense can reach the management center. Or [review your current static routes](#).
- Optional. [Add a Dynamic DNS \(DDNS\) method](#). Or [review your current DDNS methods](#). DDNS ensures the management center can reach the threat defense at its Fully-Qualified Domain Name (FQDN) if the threat defense's IP address changes.

CANCEL CONNECT

- a) [Management Center/SCCDOのホスト名またはIPアドレスを知っていますか (Do you know the Management Center/SCC hostname or IP address?)] で、IP アドレスまたはホスト名を使用して Management Center/Security Cloud Control に到達できる場合は[はい (Yes)]をクリック

くし、Management CenterSecurity Cloud Control が NAT の背後にあるか、パブリック IP アドレスまたはホスト名がない場合は [いいえ (No)] をクリックします。

双方向の TLS-1.3 暗号化通信チャネルを 2 台のデバイス間に確立するには、少なくとも 1 台以上のデバイス (Management Center/Security Cloud Control または Threat Defense デバイス) に到達可能な IP アドレスが必要です。

- b) [はい (Yes)] を選択した場合は、[Management Center/SCCCDOのホスト名/IPアドレス (Management Center/SCC Hostname or IP Address)] を入力します。
- c) [Management Center/SCCCDO登録キー (Management Center/SCC Registration Key)] を指定します。

このキーは、Threat Defense デバイスを登録するときに Management Center/Security Cloud Control でも指定する任意の 1 回限りの登録キーです。登録キーは 2 ～ 36 文字である必要があります。有効な文字には、英数字 (A～Z、a～z、0～9) 、およびハイフン (-) などがあります。この ID は、Management Center/Security Cloud Control に登録する複数のデバイスに使用できます。

- a) [NAT ID] を指定します。

この ID は、Management Center/Security Cloud Control でも指定する任意の 1 回限りの文字列です。NAT ID は 2 ～ 36 文字である必要があります。有効な文字には、英数字 (A～Z、a～z、0～9) 、およびハイフン (-) などがあります。この ID は、Management Center/Security Cloud Control に登録する他のデバイスには使用できません。NAT ID は、正しいデバイスからの接続であることを確認するために IP アドレスと組み合わせて使用されます。IP アドレス/NAT ID の認証後にのみ、登録キーがチェックされます。オプションである場合でも常に NAT ID を使用することを推奨しますが、次の場合は必須です。

- Management Center IP アドレスを **DONTRESOLVE** に設定する。
- Management Center でデバイスを追加するときに、到達可能なデバイスの IP アドレスまたはホスト名を指定していない。
- 両側で IP アドレスを指定する場合でも、管理にデータインターフェイスを使用する。
- Management Center が複数の管理インターフェイスを使用する。

ステップ 5 [接続の設定 (Connectivity Configuration)] を設定します。

- a) [FTDホスト名 (FTD Hostname)] を指定します。

[Management Center/SCCCDOアクセスインターフェイス (Management Center/SCC Access Interface)] のアクセスにデータインターフェイスを使用する場合、FQDN がこのインターフェイスに使用されます。

- b) [DNSサーバグループ (DNS Server Group)] を指定します。

既存のグループを選択するか、新しいグループを作成します。デフォルトの DNS グループは CiscoUmbrellaDNSServerGroup と呼ばれ、OpenDNS サーバが含まれます。

[Management Center/SCCCDOアクセスインターフェイス (Management Center/SCC Access Interface)] のデータインターフェイスを選択する場合は、この設定でデータインターフェ

イス DNS サーバーを設定します。セットアップウィザードで設定した管理 DNS サーバーは、管理トラフィックに使用されます。データ DNS サーバーは、DDNS（設定されている場合）またはこのインターフェイスに適用されるセキュリティポリシーに使用されます。管理トラフィックとデータトラフィックの両方が外部インターフェイス経由で DNS サーバーに到達するため、管理に使用したものと同一 DNS サーバークラスを選択する可能性があります。

Management Center/Security Cloud Control では、この Threat Defense デバイスに割り当てるプラットフォーム設定ポリシーでデータインターフェイス DNS サーバーが設定されます。Management Center/Security Cloud Control に Threat Defense デバイスを追加すると、ローカル設定が維持され、DNS サーバーはプラットフォーム設定ポリシーに追加されません。ただし、DNS 設定を含む Threat Defense デバイスに後でプラットフォーム設定ポリシーを割り当てると、その設定によってローカル設定が上書きされます。Management Center/Security Cloud Control と Threat Defense デバイスを同期させるには、この設定に一致するように DNS プラットフォーム設定をアクティブに設定することをお勧めします。

また、ローカル DNS サーバーは、DNS サーバーが初期登録で検出された場合にのみ Management Center/Security Cloud Control で保持されます。

[Management Center/SCCCDO アクセスインターフェイス (Management Center/SCC Access Interface)] の管理インターフェイスを選択する場合は、この設定で管理 DNS サーバーを設定します。

- c) [Management Center/SCCCDO アクセスインターフェイス (Management Center/SCC Access Interface)] については、任意の設定済みインターフェイスを選択します。

管理インターフェイスは、Threat Defense デバイスを Management Center/Security Cloud Control に登録した後に、管理インターフェイスまたは別のデータインターフェイスのいずれかに変更できます。

- ステップ 6** （任意） 外部インターフェイスではないデータインターフェイスを選択した場合は、デフォルトルートを追加します。

インターフェイスを通過するデフォルトルートがあることを確認するように求めるメッセージが表示されます。外部を選択した場合は、セットアップウィザードの一環としてこのルートがすでに設定されています。別のインターフェイスを選択した場合は、Management Center/Security Cloud Control に接続する前にデフォルトルートを手動で設定する必要があります。スタティックルートの設定の詳細については、「[スタティックルートの設定 \(416 ページ\)](#)」を参照してください。

管理インターフェイスを選択した場合は、この画面に進む前に、ゲートウェイを一意的ゲートウェイとして設定する必要があります。[管理インターフェイスの設定 \(318 ページ\)](#) を参照してください。

- ステップ 7** （任意） データインターフェイスを選択した場合は、[ダイナミック DNS (DDNS) 方式の追加 (Add a Dynamic DNS (DDNS) method)] をクリックします。

DDNS は、IP アドレスが変更された場合に Management Center/Security Cloud Control が完全修飾ドメイン名 (FQDN) で Threat Defense デバイスに到達できるようにします。[デバイス

(Device)]>[システム設定 (System Settings)]>[DDNSサービス (DDNS Service)]を参照して DDNS を設定します。

Management Center/Security Cloud Control に Threat Defense デバイスを追加する前に DDNS を設定すると、Threat Defense デバイスは、Cisco Trusted Root CA バンドルからすべての主要 CA の証明書を自動的に追加し、Threat Defense デバイスが HTTPS 接続のために DDNS サーバー証明書を検証できるようにします。Threat Defense は、DynDNS リモート API 仕様

(<https://help.dyn.com/remote-access-api/>) を使用するすべての DDNS サーバーをサポートします。

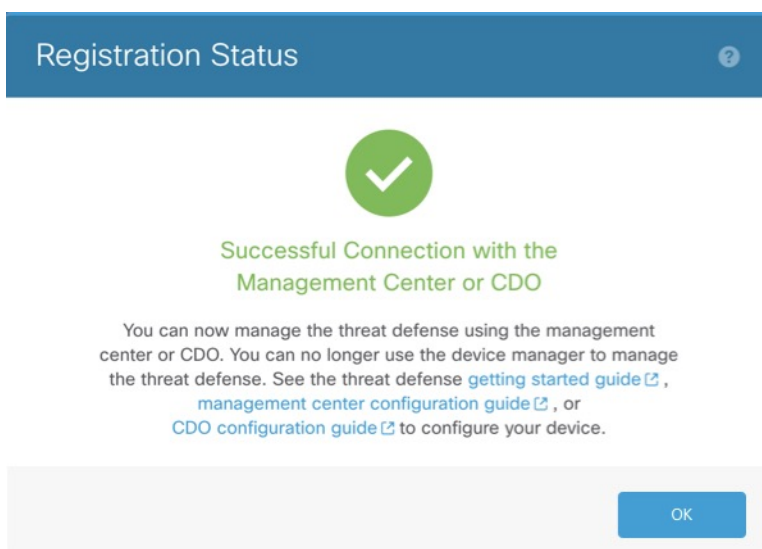
マネージャアクセスに管理インターフェイスを使用する場合、DDNSはサポートされません。

ステップ 8 [接続 (Connect)]をクリックします。[登録ステータス (Registration Status)]ダイアログボックスには、Management Center/Security Cloud Control への切り替えに関する現在のステータスが表示されます。[Management Center/SCCCDO登録設定の保存 (Saving Management Center/SCC Registration Settings)]のステップの後、Management Center/Security Cloud Control に移動してファイアウォールを追加します。

Management Center/Security Cloud Control への切り替えをキャンセルする場合は、[登録のキャンセル (Cancel Registration)]をクリックします。キャンセルしない場合は、[Management Center/SCCCDO登録設定の保存 (Saving Management Center/SCC Registration Settings)]のステップが完了するまで Device Manager のブラウザウィンドウを閉じないでください。閉じた場合、プロセスは一時停止し、Device Manager に再接続した場合のみ再開されます。

[Management Center/SCCCDO登録設定の保存 (Saving Management Center/SCC Registration Settings)]のステップの後に Device Manager に接続したままにする場合、その後 [Management CenterまたはSCCCDOとの正常接続 (Successful Connection with Management Center/SCC)]ダイアログボックスが表示され、Device Manager から切断されます。

図 52: 正常接続



Management Center または Security Cloud Control を Device Manager に切り替えます。

代わりにDevice Managerを使用するように、オンプレミスまたはクラウド提供型のManagement Centerによって現在管理されている Threat Defense デバイスを設定できます。

ソフトウェアを再インストールすることなく、Management CenterからDevice Managerに切り替えることができます。Management CenterからDevice Managerに切り替える前に、Device Manager がすべての設定要件を満たしていることを確認します。Device Manager から Management Center に切り替える場合は、[Device Manager から Management Center または Security Cloud Control に切り替えます。](#) (974 ページ) を参照してください。



注意 Device Manager に切り替えると、デバイスの設定は削除され、システムはデフォルト設定に戻ります。ただし、管理 IP アドレスとホスト名は維持されます。

手順

ステップ 1 Management Center で、**[デバイス (Devices)] > [デバイス管理 (Device Management)]** ページからファイアウォールを削除します。

ステップ 2 SSH またはコンソールポートを使用して、Threat Defense CLI に接続します。SSH の場合、管理 IP アドレスへの接続を開き、admin ユーザー名（または管理者権限を持つ他のユーザー）で Threat Defense CLI にログインします。

（Firepower モデル）コンソールポートはデフォルトで FXOS CLI になります。**connect ftd** コマンドを使用して、Threat Defense CLI に接続します。SSH セッションは Threat Defense CLI に直接接続します。

管理 IP アドレスに接続できない場合は、次のいずれかを実行します。

- 管理物理ポートが、機能しているネットワークに接続されていることを確認します。
- 管理ネットワークに管理 IP アドレスとゲートウェイが設定されていることを確認します。
configure network ipv4/ipv6 manual コマンドを使用します。

ステップ 3 現在、リモート管理モードになっていることを確認します。

show managers

例：

```
> show managers
Type                : Manager
Host                : 10.89.5.35
Display name        : 10.89.5.35
Identifier           : f7ffad78-bf16-11ec-a737-baa2f76ef602
```

```
Registration : Completed
```

ステップ 4 リモート マネージャを削除すると、マネージャなしのモードになります。

configure manager delete uuid

リモート管理からローカル管理に直接移行することはできません。複数のマネージャが定義されている場合は、識別子（UUID と呼ばれます。**show managers** コマンドを参照）を指定する必要があります。各マネージャ エントリを個別に削除します。

例：

```
> configure manager delete
Deleting task list
Manager successfully deleted.

>
> show managers
No managers configured.
```

ステップ 5 ローカル マネージャを設定します。

configure manager local

これで、Web ブラウザで **https://management-IP-address** にアクセスしてローカル マネージャを開くことができるようになりました。

例：

```
> configure manager local
Deleting task list

> show managers
Managed locally.
```

TLS/SSL暗号設定の設定

SSL暗号設定は、デバイスへのTLS/SSL接続に許可されるTLSバージョンと暗号化暗号スイートを制御します。

通常、設定する暗号スイートには、使用可能な複数の暗号化暗号スイートが必要です。システムは、クライアントと Threat Defense デバイスの両方がサポートする最高の TLS バージョンを決定し、その TLS バージョンと互換性のある両方をサポートする暗号スイートを選択します。システムは、両方のエンドポイントでサポートされている最も強力な TLS バージョンと暗号スイートを選択して、許可する暗号の中で最も安全な接続を確保します。

始める前に

デフォルトでは、システムはDefaultSSLCipherオブジェクトを使用して、許可される暗号スイートを定義します。このオブジェクトに含まれる暗号は、スマート ライセンス アカウントが輸出規制機能に対して有効になっているかどうかによって異なります。このデフォルトでは、できるだけ多くのクライアントが接続を完了できるように、低セキュリティレベルが設定されます。デフォルトのDiffie-Hellmanグループもあります。これらの設定は、デフォルトが要件に適合しない場合にのみ設定する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス]をクリックし、[システム設定]>[ログ設定]リンクの順にクリックします。

ステップ 2 SSL 設定を次のように構成します。

これらの設定は、リモート アクセス VPN 接続を確立するときにクライアントが使用できる暗号を制御します。

- [暗号]: 許可されるTLSバージョンと暗号化アルゴリズムを定義するSSL暗号オブジェクトを選択します。DefaultSSLCipherオブジェクトでは、低セキュリティレベルが設定されます。このオブジェクトをCiscoRecommendedCipher、または独自のカスタム暗号オブジェクトに置き換えて、より高い要件を実装します。理想的には、すべておよび許可するTLSバージョンと暗号のみを含む単一のオブジェクトを作成します。

オブジェクトを今すぐ作成する必要がある場合は、リストの下部にある[新しい暗号の作成]をクリックします。

- [一時的なDiffie-Hellmanグループ]: 一時的な暗号化アルゴリズムに使用するDHグループ。DHグループの説明については、[使用する Diffie-Hellman 係数グループの決定 \(797 ページ\)](#) を参照してください。デフォルトは14です。
- [楕円曲線DHグループ]: 楕円曲線暗号化アルゴリズムに使用するDHグループ。デフォルトは19です。

ステップ 3 [保存 (Save)] をクリックします。

TLS/SSL暗号オブジェクトの設定

SSL 暗号オブジェクトでは、Threat Defense デバイスへの SSL 接続を確立するときに使用できるセキュリティレベル、TLS/DTLS プロトコルバージョン、および暗号化アルゴリズムの組み合わせを定義します。ボックスへのSSL接続を確立するユーザのセキュリティ要件を定義するには、[デバイス]>[システム設定]>[SSL設定]で次のオブジェクトを使用します。

選択できるTLSのバージョンと暗号は、スマート ライセンス アカウントによって制御されます。輸出コンプライアンス要件を満たしている場合は、オプションの任意の組み合わせを選択できます。ライセンスが輸出要件に準拠していない場合は、TLSv1.0およびDES-CDC-SHAに制

限されます。これらは最も低いセキュリティオプションです。評価モードは非準拠モードと見なされるため、システムのライセンスを取得するまではオプションが制限されます。

システムには、事前定義されたオブジェクトがいくつか含まれています。事前定義されたオブジェクトがセキュリティ要件に適合しない場合にのみ、新しいオブジェクトを作成する必要があります。オブジェクトは次のとおりです。

- **DefaultSSLCipher:** これは低セキュリティレベルのグループです。これは、できるだけ多くのクライアントがシステムへの接続を完了できるようにするために、SSL設定で使用されるデフォルトです。システムでサポートされるすべてのプロトコルバージョンと暗号が含まれます。
- **CiscoRecommendedCipher:** これは、最も安全な暗号とTLSバージョンのみを含む、高セキュリティレベルのグループです。このグループは最高のセキュリティを提供しますが、各クライアントが一致する暗号を使用できるようにする必要があります。暗号の不一致の問題によって、一部のクライアントが接続を完了できない可能性が高くなります。

手順

ステップ 1 [オブジェクト]を選択し、目次から[SSL暗号]を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔍) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの[ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの[名前]を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 次のオプションを設定します。

- **[セキュリティレベル]:** オブジェクトの相対的なセキュリティレベル。セキュリティレベルを選択した後にプロトコルバージョンまたは暗号スイートリストを編集すると、オブジェクトによって提供される実際のセキュリティレベルが選択したセキュリティレベルと一致しない場合があることに注意してください。次のいずれかを実行します。
 - **[すべて]:** 低セキュリティから高セキュリティまで、すべてのTLSレベルと暗号スイートをオブジェクトに含めます。
 - **[低]:** すべてのTLSバージョンと暗号が含まれます。この場合、ユーザは最も安全性の低い暗号で接続を完了できます。非輸出準拠ライセンスの場合は、TLSv1.0およびDES-CBC-SHAが含まれます。
 - **[中]:** すべてのTLSバージョンが含まれますが、一部の比較的安全でない暗号は削除されます。このオプションと[低/すべて]オプションの違いはごくわずかです。このオプションは、非輸出準拠ライセンスでは使用できません。

- [高]: 最新のDTLSおよびTLSバージョンのみ、およびこれらのバージョンで動作する暗号を許可します。このオプションは、現在使用可能な最も安全な暗号に接続を制限します。このオプションは、非輸出準拠ライセンスでは使用できません。
- [カスタム]: TLSバージョンと暗号を個別に選択する場合は、このオプションを選択します。選択するオプションによって、定義するセキュリティ暗号化設定の高低が決まります。カスタムオブジェクトにはデフォルトはありませんが、[カスタム]を選択する前に別のレベルを選択した場合は、前に表示されたオプションが選択したままになります。
- [プロトコルバージョン (Protocol Versions)] : クライアントが Threat Defense デバイスへの TLS/SSL 接続を確立するときに使用できる TLS/DTLS バージョン。カスタムオブジェクトの場合は、サポートするバージョンを選択します。他のセキュリティレベルの場合は、リストを編集しないことが理想的ですが、必要に応じてバージョンを追加または削除できます。
- [使用可能な暗号スイート]: クライアントが使用できる暗号化アルゴリズム。新しいスイートを追加する場合は[+]をクリックします。スイートを削除する場合はそのスイートの[x]をクリックします。

選択したプロトコルバージョンによって、このリストで使用可能なスイートが制御されます。プロトコルバージョンを変更すると、選択したバージョンで動作しなくなった選択済みのスイートにフラグが付けられます。それらのスイートは削除するか、必要なプロトコルバージョンを再度追加する必要があります。

ステップ 5 [OK] をクリックします。



第 28 章

システム管理

ここでは、システムデータベースの更新やシステムのバックアップと復元などのシステム管理タスクの実行方法について説明します。

- [ソフトウェア アップデートのインストール \(985 ページ\)](#)
- [システムのバックアップと復元 \(997 ページ\)](#)
- [監査と変更管理 \(1004 ページ\)](#)
- [デバイス設定のエクスポート \(1011 ページ\)](#)
- [Device Manager および Threat Defense ユーザーアクセスの管理 \(1012 ページ\)](#)
- [システムの再起動またはシャットダウン \(1020 ページ\)](#)
- [システムのトラブルシューティング \(1021 ページ\)](#)
- [ハードウェア管理のタスク \(1034 ページ\)](#)

ソフトウェア アップデートのインストール

システム データベースとシステム ソフトウェアにアップデートをインストールできます。ここでは、このようなアップデートをインストールする方法について説明します。

システム データベースおよびフィードの更新

システムは、複数のデータベースおよびセキュリティ インテリジェンス フィードを使用して高度なサービスを提供します。シスコでは、セキュリティ ポリシーで最新の情報が使用されるよう、これらのデータベースおよびフィードに対する更新を提供しています。

システム データベースおよびフィードの更新の概要

Threat Defense は次のデータベースおよびフィードを使用して高度なサービスを提供します。

侵入ルール

新たな脆弱性が既知になると、Cisco Talos Intelligence Group (Talos) はユーザがインポート可能な侵入ルールの更新をリリースします。これらの更新は侵入ルール、プリプロセス ルール、およびルールを使用するポリシーに影響します。

侵入ルールを更新すると、更新された新しい侵入ルールおよびプリプロセッサルール、既存のルールに対して変更された状態、および変更されたデフォルトの侵入ポリシーの設定が提供されます。ルールの更新では、ルールが削除されたり、新しいルールカテゴリとデフォルトの変数が提供されたり、デフォルトの変数値が変更されたりすることもあります。

侵入ルール更新による変更を有効にするには、設定を再導入する必要があります。

侵入ルールの更新は量が多くなることがあるため、ルールのインポートはネットワークの使用量が少ないときに実行してください。低速ネットワークでは、更新の試行が失敗し、再試行が必要になることがあります。

位置情報データベース (GeoDB)

シスコの地理位置情報データベース (GeoDB) は、ルーティング可能な IP アドレスに関連する地理情報データ (国、都市、緯度と経度など) のデータベースです。

GeoDB の更新には、検出されたルーティング可能な IP アドレスにシステムが関連付けることが可能な物理的な場所に関する更新情報が含まれています。位置情報データは、アクセス コントロール ルールとして使用できます。

GeoDB の更新にかかる時間はアプライアンスによって異なります。インストールには通常、30 ～ 40 分かかります。GeoDB の更新は他のシステム機能 (実行中の地理情報の収集など) を中断することはありませんが、更新が完了するまでシステムのリソースを消費します。更新を計画する場合には、これらを考慮してください。

脆弱性データベース (VDB)

シスコの脆弱性データベース (VDB) は、オペレーティング システム、クライアント、およびアプリケーションのフィンガープリントだけでなく、ホストが影響を受ける可能性がある既知の脆弱性のデータベースです。ファイアウォールシステムはフィンガープリントと脆弱性を関連付けて、特定のホストがネットワークの侵害のリスクを増大させているかどうかを判断するのをサポートします。Cisco Talos Intelligence Group (Talos) は、VDB の定期的な更新を発行します。

脆弱性のマッピングを更新するのにかかる時間は、ネットワークマップ内のホストの数によって異なります。システムのダウンタイムの影響を最小にするために、システムの使用率が低い時間帯に更新をスケジュールすることをお勧めします。一般的に、更新の実行にかかるおおよその時間 (分) を判断するには、ネットワーク上のホストの数を 1000 で割ります。

VDB を更新した後で、更新されたアプリケーション検出器およびオペレーティング システム フィンガープリントを有効にするには、設定を再導入する必要があります。

Cisco Talos Intelligence Group (Talos) セキュリティ インテリジェンスのフィード

Talos セキュリティ インテリジェンス ポリシーで使用するために定期的に更新されるインテリジェンスフィードへのアクセスを提供します。セキュリティに対する脅威 (マルウェア、スパム、ボットネット、スパム、フィッシングなど) を表すサイトが現れては消えるペースが早すぎて、カスタム設定を更新して導入するのが間に合わないことがあります。これらのフィードには、既知の脅威のアドレスや URL が含まれています。システムによっ

てフィードが更新される場合、再展開する必要はありません。後続の接続の評価には新しい一覧が使用されます。

URL カテゴリ/レピュテーション データベース

システムは Cisco Collective Security Intelligence (CSI) から URL カテゴリおよびレピュテーションデータベースを取得します。カテゴリとレピュテーションに関してフィルタリングする URL フィルタリング アクセス制御ルールを設定すると、要求された URL がデータベースと照合されます。[システム設定 (System Settings)] > [URL フィルタリングの設定 (URL Filtering Preferences)] でデータベースの更新といくつかのその他の URL フィルタリング設定を設定できます。URL カテゴリ/レピュテーション データベースの更新は、他のシステム データベースの更新を管理する方法では管理できません。

システム データベースの更新

システムデータベースのアップデートは、必要に応じて、手動で取得して適用することができます。更新はシスコサポートサイトから取得されます。そのため、システムの管理アドレスからインターネットへのパスが必要です。

または、インターネットから更新パッケージを取得して、ワークステーションからアップロードできます。この方法は、主に、シスコから更新を取得するためのインターネットへのパスがないエアギャップネットワークを対象としています。software.cisco.com のシステム ソフトウェア アップグレードをダウンロードするのと同じフォルダから更新をダウンロードします。



- (注) 2022 年 5 月、GeoDB が 2 つのパッケージに分割されました。IP アドレスを国/大陸にマッピングする国コードパッケージと、ルーティング可能な IP アドレスに関連付けられた追加のコンテキストデータを含む IP パッケージです。Device Manager は IP パッケージの情報を使用しません。また、これまでに使用したこともありません。この分割により、ローカルで管理された Threat Defense 展開においてディスク容量が大幅に節約されます。シスコからご自身で GeoDB を入手する場合は、古いオールインワンパッケージと同じファイル名を持つ国コードパッケージ (Cisco_GEOdb_Update-date-build) を入手してください。

また、データベースアップデートを定期的に取得して適用するようにスケジュールすることもできます。ただし、アップデートは大きくなる可能性があるため、ネットワーク アクティビティが少ない時間にスケジュールしてください。



- (注) データベースの更新中、ユーザ インターフェイスの反応が鈍くなることがあります。

始める前に

保留中の変更に影響が及ばないようにするため、データベースを手動で更新する前に、まず設定をデバイスに展開します。

VDBおよびURLカテゴリを更新すると、アプリケーションまたはカテゴリが削除される可能性があることに注意してください。変更を展開する前に、これらの廃止された項目を使用しているアクセス制御ルールまたはSSL復号ルールを更新する必要があります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[更新]のサマリーで[設定の表示]をクリックします。

これによって、[更新 (Updates)] ページが開きます。各データベースの現行バージョンと各データベースが最後に更新された日時が表示されます。

ステップ 2 データベースを手動で更新するには、そのデータベースのセクションで次のいずれかのオプションをクリックします。

- [クラウドから更新 (Update From Cloud)] : Device Manager が更新パッケージをシスコから取得するようにします。これは最も簡単で信頼性の高い方法ですが、使用するにはインターネットへのパスが必要です。
- (下矢印) > [オプション (option)] : ワークステーションまたはワークステーションに接続されているドライブから更新パッケージを選択します。オプションは次のいずれかです。
 - [ファイルの選択 (Select File)] : VDB または地理位置情報パッケージを選択します。
 - [新しいバージョンに更新 (Update to Newer Version)] : 現在インストールされている侵入ルールパッケージよりも新しいパッケージを選択します。
 - [古いバージョンにダウングレード (Downgrade to Older Version)] : 現在インストールされている侵入ルールパッケージよりも古いパッケージを選択します。

ルールおよび VDB の更新では、アクティブにするための設定の展開が必要です。クラウドから更新する場合、今すぐ展開するかどうかを尋ねられるので、[はい (Yes)] をクリックします。[いいえ (No)] をクリックする場合は、都合の良いときにできるだけ早く展開ジョブを開始してください。

独自のファイルをアップロードする場合は、必ず手動で変更を展開する必要があります。

ステップ 3 (オプション) 定期的なデータベース更新スケジュールを設定するには、次の手順に従います。

- a) 目的のデータベースのセクションにある[設定 (Configure)] リンクをクリックします。すでにスケジュールが存在する場合、[編集 (Edit)] をクリックします。

更新スケジュールは、データベースごとに違います。スケジュールはそれぞれに定義する必要があります。

- b) 更新の開始時刻を次のように設定します。

- 更新の頻度 (毎日、毎週、毎月)。

- 毎週または毎月の場合、更新を実行する曜日または日付。
 - 更新を開始する時刻。指定した時間はサマータイムに合わせて調整されるため、地域で時間が調整されるたびに 1 時間前または後に進みます。年間を通して正確な時刻を保持するには、時刻の変更の際にスケジュールを編集する必要があります。
- c) ルールまたは VDB の更新では、データベースが更新されるたびにシステムが設定を展開するようにする場合は、[更新の自動展開 (Automatically Deploy the Update)] チェックボックスをオンにします。
- 更新は、展開されるまでは有効になりません。自動展開では、まだ展開されていないその他の設定変更も展開されます。
- d) [保存 (Save)] をクリックします。
- (注)
- 定期スケジュールを削除する場合は、[編集 (Edit)] リンクをクリックしてスケジューリングダイアログボックスを開き、[削除 (Remove)] ボタンをクリックします。

Cisco Security Intelligence フィードの更新

Cisco Talos Intelligence Group (Talos) 定期的に更新されるセキュリティ インテリジェンス フィードへのアクセスを提供します。セキュリティに対する脅威 (マルウェア、スパム、ボットネット、スパム、フィッシングなど) を表すサイトが現れては消えるペースが早すぎて、カスタム設定を更新して導入するのが間に合わないことがあります。システムによってフィードが更新される場合、再展開する必要はありません。後続の接続の評価には新しい一覧が使用されます。

システムがインターネットからフィードを更新するタイミングを厳密に制御する場合は、そのフィードの自動更新を無効にすることができます。ただし、自動更新を使用すると、最新の関連データであることが確認されます。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[更新 (Updates)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- [更新 (Updates)] ページが開きます。ページには、**セキュリティ インテリジェンス フィード** の現在のバージョン、およびフィードの最終更新日時が表示されます。
- ステップ 2** フィードを手動で更新するには、[セキュリティ インテリジェンス フィード (Security Intelligence Feeds)] グループで [今すぐ更新 (Update Now)] をクリックします。
- 高可用性グループ内の 1 台の装置のフィードを手動で更新する場合は、その他の装置のフィードも手動で更新して一貫性を確保する必要があります。

ステップ3 (オプション) 定期的な更新の頻度を設定するには：

- a) [シスコのフィード (Cisco Feeds)] セクションにある [設定 (Configure)] リンクをクリックします。すでにスケジュールが存在する場合、[編集 (Edit)] をクリックします。
- b) 希望する頻度を選択します。

デフォルトは [毎時 (Hourly)] です。[毎日 (Daily)] 更新 (時刻を指定) または [毎週 (Weekly)] 更新 (曜日と時刻を指定) を設定することもできます。指定した時間はサマータイムに合わせて調整されるため、地域で時間が調整されるたびに 1 時間前または後に進みます。年間を通して正確な時刻を保持するには、時刻の変更の際にスケジュールを編集する必要があります。

[削除 (Delete)] をクリックして、自動更新されないようにします。

- c) [OK] をクリックします。

のアップグレード Threat Defense

この手順を使用して、スタンドアロンの Threat Defense デバイスをアップグレードします。FXOS を更新する必要がある場合は、それを最初に実行します。高可用性脅威防御をアップグレードするには、[ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレード \(288 ページ\)](#) を参照してください。



注意 アップグレード中にトラフィックがドロップされます。システムが非アクティブまたは無反応に見えても、アップグレード中は手動で再起動またはシャットダウンしないでください。システムが使用できない状態になり、再イメージ化が必要になる場合があります。失敗した (または進行中) のアップグレードを手動でキャンセルし、失敗したアップグレードを再試行できます。問題が解消されない場合は、Cisco TAC にお問い合わせください。

アップグレード中に発生する可能性のあるこれらの問題およびその他の問題の詳細については、[Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング \(995 ページ\)](#) を参照してください。

始める前に

アップグレードの計画を完了します。正常に展開され、通信が確立されていることを確認します。



ヒント アップグレードの計画は、『Cisco Secure Firewall Threat Defense リリースノート』を読むことから始まります。次に、バックアップの作成、アップグレードパッケージの取得、および関連するアップグレード（Firepower 4100/9300 の FXOS など）の実行が含まれます。また、必要な構成変更のチェック、準備状況のチェック、ディスク容量のチェック、実行中のタスクとスケジュールされたタスクの両方のチェックも含まれます。詳細については、お使いのバージョンの『Device Manager 用 Cisco Secure Firewall Threat Defense アップグレードガイド』を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] を選択し、[更新 (Updates)] パネルの [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

[システムアップグレード (System Upgrade)] パネルには、現在実行中のソフトウェアバージョン、およびすでにアップロードされたアップグレードパッケージが表示されます。

ステップ 2 アップグレードパッケージをアップロードします。

アップロードできるパッケージは1つだけです。新しいパッケージをアップロードすると、古いパッケージが置き換えられます。ターゲットバージョンとデバイスモデルに適したパッケージがあることを確認してください。[参照 (Browse)] または [別のファイルをアップロード (Upload Another File)] [ファイルの置き換え (Replace File)] をクリックしてアップロードを開始します。

アップロードが完了すると、確認ダイアログボックスが表示されます。[OK] をクリックする前に、必要に応じて [すぐにアップグレードを実行 (Run Upgrade Immediately)] を選択して、ロールバックオプションを選択し、今すぐアップグレードします。今すぐアップグレードする場合は、アップグレード前のチェックリストをできるだけ多く完了することが特に重要です（次のステップを参照）。

ステップ 3 準備状況チェックを含む、アップグレード前の最終チェックを実行します。

アップグレード前のチェックリストを再確認します。関連するすべてのタスク、特に最終チェックを完了していることを確認してください。準備状況チェックを手動で実行しない場合、アップグレードの開始時に実行されます。準備状況チェックに失敗すると、アップグレードはキャンセルされます。詳細については、[アップグレード準備状況チェックの実行 \(992 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 4 [インストール (Install)] [今すぐアップグレード (Upgrade Now)] をクリックしてアップグレードを開始します。

a) ロールバックオプションを選択します。

[アップグレードに失敗すると自動的にキャンセルされ、前のバージョンにロールバックする (Automatically cancel on upgrade failure and roll back to the previous version)] を選択できます。オプションを有効にすると、アップグレードが失敗した場合、デバイスは自動的に

アップグレード前の状態に戻ります。失敗したアップグレードを手動でキャンセルまたは再試行できるようにする場合は、このオプションを無効にします。

- b) [続行 (Continue)] をクリックして、アップグレードしてデバイスを再起動します。

自動的にログオフされ、デバイスが再起動するまでアップグレードを監視できるステータスページに移動します。また、このページには、進行中のインストールをキャンセルするオプションが含まれています。自動ロールバックを無効にしてアップグレードが失敗した場合は、アップグレードを手動でキャンセルするか、再試行できます。

アップグレード中にトラフィックがドロップされます。

ステップ 5 可能なときに再度ログインし、アップグレードが成功したことを確認します。

[デバイスの概要 (Device Summary)] ページには、現在実行中のソフトウェアのバージョンが表示されます。

ステップ 6 アップグレード後のタスクを完了します。

- a) システムデータベースを更新します。侵入ルール、VDB、GeoDB の自動更新が設定されていない場合は、ここで更新します。
- b) アップグレード後に必要な構成変更が他にもあれば、実行します。
- c) 展開します。

アップグレード準備状況チェックの実行

アップグレードパッケージがインストールされる前に、準備状況チェックが実行されて、システムに有効なアップグレードであるか確認されます。また、他にもアップグレードの成功を妨げる可能性のある項目がないかチェックされます。準備状況チェックに失敗した場合は、インストールを再試行する前に問題を修正する必要があります。チェックに失敗した場合、次回インストールを試みると、チェック失敗についてのプロンプトが表示され、強制的にインストールを実行するオプションが与えられます。

次の手順の説明に従って、アップグレードを開始する前に手動で準備状況チェックを実行することもできます。

始める前に

チェックするアップグレードパッケージをアップロードします。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[更新サマリー (Updates summary)] の [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

[システムアップグレード (System Upgrade)] セクションには、現在実行中のソフトウェアバージョン、およびすでにアップロードされた更新が表示されます。

ステップ 2 [Readiness Check] セクションを確認します。

- アップグレードチェックがまだ実行されていない場合は、[Run Upgrade Readiness Check] リンクをクリックします。チェックの進行状況がこの領域に表示されます。プロセスの完了には、20 秒程度かかります。
- アップグレードチェックがすでに実行されている場合、このセクションにはチェックが成功か失敗かが示されます。チェックに失敗した場合は、[See Details] をクリックして、準備状況チェックの詳細を表示します。問題を修正した後、チェックを再度実行します。

ステップ 3 準備状況チェックに失敗した場合は、アップグレードパッケージをインストールする前に問題を解決する必要があります。詳細情報には、指摘された問題の修正方法に関するヘルプが含まれています。失敗したスクリプトについては、[Show Recovery Message] リンクをクリックすると情報が表示されます。

一般的な問題のいくつかを以下に示します。

- **FXOS バージョンに互換性がない**：FXOS アップグレードを個別にインストールする Firepower 4100/9300 などのシステムでは、現行の Threat Defense ソフトウェアバージョンとは異なる FXOS の最小バージョンが必要になる場合があります。この場合、Threat Defense ソフトウェアをアップグレードする前に、まず FXOS をアップグレードする必要があります。
- **デバイスモデルがサポートされていない**：アップグレードパッケージは、サポートされていないデバイスにはインストールできません。誤ったパッケージをアップロードしたか、デバイスが旧モデルのため、新しい Threat Defense ソフトウェアバージョンではサポートされていない可能性があります。デバイスの互換性を確認し、サポートされているパッケージがあればアップロードしてください。
- **ディスク容量が不十分**：十分な空き容量がない場合は、システムバックアップなどの不要なファイルを削除してください。作成したファイルのみを削除します。

アップグレードのモニタリング Threat Defense

Threat Defense のアップグレードを開始すると、自動的にログオフされ、アップグレードの進捗を監視できるステータスページに移動します。また、このページには、進行中のインストールをキャンセルするオプションが含まれています。自動ロールバックを無効にしてアップグレードが失敗した場合は、このページから、アップグレードを手動でキャンセルするか、再試行できます。

デバイスに SSH で接続し、CLI (**show upgrade status**) を使用することもできます。ログエントリが生成されたときにそれらを表示するには **continuous** キーワードを追加します。また、詳細情報を表示するには **detail** キーワードを追加します。両方のキーワードを追加して、継続的な詳細情報を取得します。

アップグレードが完了した後は、デバイスがリブートすると、ステータスページと CLI にアクセスできなくなります。

Threat Defense のアップグレードのキャンセルまたは再試行

アップグレードステータスのページまたは CLI を使用して、失敗した（または進行中）のメジャーおよびメンテナンスアップグレードを手動でキャンセルし、失敗したアップグレードを再試行することができます。

- アップグレードステータスのページ：進行中のアップグレードをキャンセルするには、[アップグレードのキャンセル（Cancel Upgrade）] をクリックします。アップグレードが失敗した場合は、[アップグレードのキャンセル（Cancel Upgrade）] をクリックしてジョブを停止し、アップグレード前のデバイスの状態に戻すことができます。また、[続行（Continue）] をクリックしてアップグレードを再試行することができます。
- CLI：進行中のアップグレードをキャンセルするには、**upgrade cancel** を使用します。アップグレードが失敗した場合は、**upgrade cancel** を使用してジョブを停止し、アップグレード前のデバイスの状態に戻すことができます。また、**upgrade retry** を使用してアップグレードを再試行することができます。



- (注) デフォルトでは、Threat Defense はアップグレードが失敗すると自動的にアップグレード前の状態に復元されます（「自動キャンセル」）。失敗したアップグレードを手動でキャンセルまたは再試行できるようにするには、アップグレードを開始するときに自動キャンセルオプションを無効にします。高可用性の展開では、自動キャンセルは各デバイスに個別に適用されます。つまり、1 つのデバイスでアップグレードが失敗した場合、そのデバイスだけが元に戻ります。

パッチでは、キャンセルと再試行はサポートされていません。正常なアップグレードを元に戻す方法については、[Threat Defense の復元（994 ページ）](#) を参照してください。

Threat Defense の復元

メジャーアップグレードまたはメンテナンスアップグレードに成功したにもかかわらず、システムが期待どおりに機能しない場合は、復元が可能です。Threat Defense を復元すると、ソフトウェアは、最後のメジャーアップグレードまたはメンテナンスアップグレードの直前の状態に戻ります。アップグレード後の設定変更は保持されません。パッチ適用後に復元すると、パッチも必然的に削除されます。またはホットフィックスを元に戻すことはできないので注意してください。

次の手順では、Device Manager から復元する方法について説明します。Device Manager にアクセスできない場合は、**upgrade revert** コマンドを使用して SSH セッションの Threat Defense コマンドラインから復元できます。**show upgrade revert-info** コマンドを使用すると、システムがどのバージョンに戻るのかを確認できます。

始める前に

ユニットがハイアベイラビリティペアの一部である場合は、両方のユニットを元に戻す必要があります。理想的には、フェールオーバーの問題なしに設定を復元できるように、両方のユ

ニットで復元を同時に開始します。両方のユニットでセッションを開き、それぞれで復元が可能であることを確認してから、プロセスを開始します。復元時にトラフィックが中断されることに注意してください。そのため、可能であれば、これを業務時間外に実行してください。

Firepower 4100/9300 シャーシの場合、Firepower のメジャーバージョンには特別に認定および推奨されている付随の Threat Defense バージョンがあります。これは、Threat Defense ソフトウェアを復元した後に、推奨されていない（新しすぎる）バージョンの FXOS を実行している可能性があることを意味します。新しいバージョンの FXOS は旧バージョンの Threat Defense と下位互換性がありますが、シスコでは推奨の組み合わせについて拡張テストを実施しています。FXOS をダウングレードすることはできないため、このような状況下で推奨の組み合わせを稼働するには、デバイスの再イメージ化が必要になります。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] を選択してから、[更新 (Updates)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2** [システムのアップグレード (System Upgrade)] セクションで、[アップグレードの復元 (Revert Upgrade)] リンクをクリックします。

現在のバージョンと復元されるバージョンを示す確認ダイアログボックスが表示されます。復元できるバージョンがない場合、[アップグレードの復元 (Revert Upgrade)] リンクは表示されません。
- ステップ 3** ターゲットバージョンが許容できるバージョンである場合（かつ使用可能な場合）、[復元 (Revert)] をクリックします。

復元後、デバイスを Smart Software Manager に再登録する必要があります。

Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング

以下の問題は、スタンドアロンまたはハイアベイラビリティペアのデバイスをアップグレードするときに発生する可能性があります。ハイアベイラビリティのアップグレードに固有の問題をトラブルシューティングするには、[ハイアベイラビリティ Threat Defense のアップグレードのトラブルシューティング \(290 ページ\)](#) を参照してください。

アップグレードパッケージのエラー。

適切なアップグレードパッケージを見つけるには、使用しているモデルを シスコ サポートおよびダウンロード サイト で選択または検索し、適切なバージョンのソフトウェアのダウンロードページを参照します。使用可能なアップグレードパッケージは、インストールパッケージ、ホットフィックス、およびその他の該当するダウンロードとともに表示されます。アップグレードパッケージのファイル名には、プラットフォーム、パッケージタイプ（アップグレード、パッチ、ホットフィックス）、ソフトウェアバージョン、およびビルドが反映されています。

バージョン 6.2.1 以降のアップグレードパッケージは署名されており、ファイル名の最後は .sh.REL.tar です。署名付きのアップグレードパッケージは解凍しないでください。アップグレードパッケージの名前を変更したり、電子メールで転送したりしないでください。

アップグレード中にデバイスにまったく到達できない。

デバイスは、アップグレード中、またはアップグレードが失敗した場合に、トラフィックを渡すことを停止します。アップグレードする前に、ユーザーの位置からのトラフィックがデバイスの管理インターフェイスにアクセスするためにデバイス自体を通過する必要があることを確認してください。

アップグレード中にデバイスが非アクティブまたは無反応に見える。

進行中のメジャーおよびメンテナンスアップグレードは手動でキャンセルできます。[Threat Defense のアップグレードのキャンセルまたは再試行 \(994 ページ\)](#) を参照してください。デバイスが応答しない場合、またはアップグレードをキャンセルできない場合は、Cisco TAC にお問い合わせください。



注意 システムが非アクティブに見えても、アップグレード中は手動で再起動またはシャットダウン「しない」でください。システムが使用できない状態になり、再イメージ化が必要になる場合があります。

アップグレードは成功したが、システムが予期どおりに機能しない。

まず、キャッシュされた情報が更新されていることを確認します。単にブラウザウィンドウを更新して再度ログインするのではなく、URL から「余分な」パスを削除し、ホームページに再接続します（たとえば、<http://threat-defense.example.com/>）。

引き続き問題が発生し、以前のメジャーリリースまたはメンテナンスリリースに戻す必要がある場合は、復元できる場合があります。[Threat Defense の復元 \(994 ページ\)](#) を参照してください。復元できない場合は、イメージを再作成する必要があります。

アップグレードが失敗する。

メジャーアップグレードまたはメンテナンスアップグレードを開始する場合は、[アップグレードに失敗すると自動的にキャンセルされる... (Automatically cancel on upgrade failure...)] (自動キャンセル) オプションを使用して、次のように、アップグレードが失敗した場合の動作を選択します。

- [自動キャンセルが有効 (Auto-cancel enabled)] (デフォルト) : アップグレードが失敗すると、アップグレードがキャンセルされ、デバイスは自動的にアップグレード前の状態に復元されます。問題を修正し、後で再試行してください。
- [自動キャンセルが無効 (Auto-cancel disabled)] : アップグレードが失敗した場合、デバイスはそのままになります。問題を修正してすぐに再試行するか、手動でアップグレードをキャンセルして後で再試行してください。

詳細については、[Threat Defense のアップグレードのキャンセルまたは再試行](#)（994 ページ）を参照してください。再試行またはキャンセルできない場合、または問題が解消されない場合は、Cisco TAC にお問い合わせください。

デバイスのイメージ再作成

デバイスのイメージを再作成するには、デバイス設定を除去し、新しいソフトウェアイメージをインストールする必要があります。イメージの再作成の目的は、工場出荷時のデフォルト設定を使用してクリーンインストールを行うことです。

デバイスのイメージの再作成は、次のような状況で行います。

- ASA ソフトウェアから Threat Defense ソフトウェアにシステムを変換する場合。ASA イメージを実行しているデバイスを Threat Defense イメージを実行しているデバイスにアップグレードすることはできません。
- デバイスが正しく機能せず、設定の修正ですべての試行が失敗した場合。

デバイスの再イメージ化の詳細については、ご使用のデバイスモデルの『*Reimage the Cisco ASA or Threat Defense Device*』または *Threat Defense* のクイックスタートガイドを参照してください。これらのガイドは、次の URL から入手可能です。

<http://www.cisco.com/c/en/us/support/security/firepower-ngfw/products-installation-guides-list.html>

システムのバックアップと復元

後の設定ミスまたは物理的な事故が原因で設定が損なわれた場合にデバイスを復元できるように、システム設定をバックアップできます。

代替のデバイスにバックアップを復元できるのは、どちらのデバイスも同じモデルで、（同時リリースだけでなく、ビルド番号を含む）同じバージョンのソフトウェアを実行している場合のみです。アプライアンス間で設定をコピーするためにバックアップおよび復元プロセスを使用しないでください。バックアップファイルにはアプライアンスを一意に識別する情報が含まれているので、この要領で情報を共有することはできません。



- (注) バックアップには管理 IP アドレスの設定は含まれません。このため、バックアップ ファイルを回復しても、管理アドレスはバックアップコピーから置換されません。これにより、アドレスに行った変更は維持され、異なるネットワークセグメントの異なるデバイスの設定を復元することもできるようになります。バックアップにはライセンス情報やクラウド登録情報も含まれていないため、復元時に存在するライセンスやクラウド登録の状態はすべて保持されます。

バックアップには設定のみが含まれ、システム ソフトウェアは含まれません。デバイスのイメージを完全に再作成する必要がある場合は、ソフトウェアを再インストールする必要があります。その後バックアップをアップロードして設定を回復できます。

バックアップ中は設定データベースがロックされます。バックアップ中にポリシーやダッシュボードなどの表示はできますが、設定の変更はできません。復元中は、システムは完全に使用できなくなります。

[バックアップと復元 (Backup and Restore)] ページのテーブルには、システムで利用可能な既存のバックアップのコピーが、バックアップのファイル名、作成された日時、ファイルサイズとともにリストされます。バックアップの種類（手動、スケジュール、反復）は、バックアップコピーを作成する際にシステムで指定します。



ヒント バックアップ コピーはシステム自体に作成されます。ディザスタ リカバリ用にバックアップ コピーを確保するため、バックアップコピーを手動でダウンロードして安全なサーバに保存しておく必要があります。システムは、デバイス上に最大3つのバックアップコピーを保持します。新しいバックアップによって、最も古いバックアップが置き換えられます。

以下のトピックでは、バックアップの管理と復元操作について説明します。

システムの即時バックアップ

希望する場合はいつでもバックアップを開始できます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[バックアップと復元 (Backup and Restore)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

これにより、[バックアップおよび復元 (Backup and Restore)] ページが開きます。使用可能なすべての既存のバックアップ コピーが表にリストされています。

ステップ 2 [手動バックアップ (Manual Backup)] > [今すぐバックアップ (Back Up Now)] の順にクリックします。

ステップ 3 バックアップの名前を入力し、任意で説明を入力します。

今すぐではなく、将来のある時刻にバックアップする場合は、代わりに [スケジュール (Schedule)] をクリックできます。

ステップ 4 (任意) [Encrypt File] オプションを選択して、バックアップファイルを暗号化します。

このオプションを選択した場合は、バックアップ ファイルの復元に必要な [パスワード (Password)] (および [パスワードの確認 (Confirm Password)]) を入力する必要があります。

ステップ 5 (ISA 3000 のみ) [バックアップファイルの場所 (Location of Backup Files)] を選択します。

[ローカルハードディスク (Local Hard Disk)] または [SDカード (SD Card)] でバックアップを作成できます。SD カードを使用する利点は、カードを使用して代替デバイスに設定を回復できることです。

ステップ 6 [今すぐバックアップ (Back Up Now)] をクリックします。

システムによってバックアッププロセスが開始されます。バックアップが完了すると、バックアップ ファイルがテーブルに表示されます。必要に応じてバックアップ コピーをシステムにダウンロードして、別の場所に保存できます。

バックアップを開始した後は、[バックアップと復元 (Backup and Restore)] ページから移動しても構いません。ただし、システムの動作が遅くなる可能性があるため、バックアップを完了するために作業を一時停止することを検討してください。

また、一部または全部のバックアップ中に、システムによってコンフィギュレーションデータベースのロックが取得され、それが原因でバックアッププロセス中に変更を加えることができません場合があります。

システムのスケジュール バックアップ

スケジュール バックアップを設定して、将来の特定の日にシステムをバックアップできます。スケジュール バックアップは、一度だけ行われます。定期的にバックアップを作成するようバックアップ スケジュールを作成する必要がある場合は、スケジュール バックアップではなく定期的バックアップを設定します。



(注) 将来のバックアップのスケジュールを削除するには、スケジュールを編集して、[削除 (Remove)] をクリックします。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[バックアップと復元 (Backup and Restore)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 [スケジュールバックアップ (Scheduled Backup)] > [バックアップをスケジュール (Schedule a Backup)] をクリックします。

すでにスケジュール バックアップがある場合は、[スケジュールバックアップ (Scheduled Backup)] > [編集 (Edit)] をクリックします。

ステップ 3 バックアップの名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 バックアップの日時を入力します。

ステップ 5 (任意) [Encrypt File] オプションを選択して、バックアップファイルを暗号化します。

このオプションを選択した場合は、バックアップ ファイルの復元に必要な [パスワード (Password)] (および [パスワードの確認 (Confirm Password)]) を入力する必要があります。

ステップ6 (ISA 3000 のみ) [バックアップファイルの場所 (Location of Backup Files)] を選択します。

[ローカルハードディスク (Local Hard Disk)] または [SDカード (SD Card)] でバックアップを作成できます。SD カードを使用する利点は、カードを使用して代替デバイスに設定を回復できることです。

ステップ7 [スケジュール (Schedule)] をクリックします。

選択した日時になると、システムによってバックアップが作成されます。バックアップが完了すると、作成されたバックアップ コピーがバックアップ テーブルに表示されます。

反復バックアップスケジュールの設定

反復バックアップをセットアップして、定期的なスケジュールでシステムをバックアップすることができます。たとえば、毎週金曜日の午前0時にバックアップを実行するなどです。反復バックアップ スケジュールにより、バックアップ セットを常に最新の状態に保つことができます。



(注) 定期的なスケジュールを削除する場合、スケジュールを編集し、[削除 (Delete)] をクリックします。

手順

ステップ1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[バックアップと復元 (Backup and Restore)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ2 [定期バックアップ (Recurring Backup)] > [設定 (Configure)] をクリックします。

すでに定期バックアップを設定している場合は、[定期バックアップ (Recurring Backup)] > [編集 (Edit)] をクリックします。

ステップ3 バックアップの名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ4 [頻度 (Frequency)] および関連する項目を選択します。

- [毎日 (Daily)] : 時刻を選択します。毎日スケジュールした時刻にバックアップが行われます。
- [毎週 (Weekly)] : 曜日と時刻を選択します。指定した曜日の指定した時刻にバックアップが行われます。たとえば、毎週月曜日/水曜日/金曜日の 23:00 (午後 11 時) にバックアップをスケジュールするというぐあいです。
- [毎月 (Monthly)] : 日付と時刻を選択します。指定した日の指定した時刻にバックアップが行われます。たとえば、1 日、15 日、28 日の 23 時 (午後 11 時) にバックアップをスケジュールすることもできます。

指定した時間はサマータイムに合わせて調整されるため、地域で時間が調整されるたびに1時間前または後に進みます。年間を通して正確な時刻を保持するには、時刻の変更の際にスケジュールを編集する必要があります。

ステップ 5 (任意) [Encrypt File] オプションを選択して、バックアップファイルを暗号化します。

このオプションを選択した場合は、バックアップ ファイルの復元に必要な [パスワード (Password)] (および [パスワードの確認 (Confirm Password)]) を入力する必要があります。

ステップ 6 (ISA 3000 のみ) [バックアップファイルの場所 (Location of Backup Files)] を選択します。

[ローカルハードディスク (Local Hard Disk)] または [SDカード (SD Card)] でバックアップを作成できます。SD カードを使用する利点は、カードを使用して代替デバイスに設定を回復できることです。

ステップ 7 [保存 (Save)] をクリックします。

指定した日時にシステムはバックアップを行います。バックアップが完了すると、作成されたバックアップ コピーがバックアップ テーブルに表示されます。

バックアップは、反復スケジュールを変更または削除するまで続行されます。

バックアップの復元

デバイスでバックアップを取得したときに実行されていたものと同じソフトウェアバージョン (ビルド番号を含む) が実行されている限り、バックアップを復元することができます。代替のデバイスにバックアップを復元できるのは、どちらのデバイスも同じモデルで、同じバージョンのソフトウェア (ビルド番号を含む) を実行している場合のみです。

ただし、このデバイスがハイアベイラビリティペアの一部である場合、バックアップは復元できません。まず、**[デバイス (Device)] > [高可用性 (High Availability)]** ページから HA を無効化することで、バックアップを復元できます。バックアップに HA の設定が含まれている場合、デバイスは HA グループに再度参加します。両方のユニットで同じバックアップを復元しないでください (両方のユニットがアクティブになってしまうため)。代わりに、まず、アクティブする装置でバックアップを復元し、その後に、別のユニットで同等のバックアップを復元してください。

復元するバックアップ コピーがまだデバイスに存在しない場合、復元する前にまずバックアップをアップロードする必要があります。

復元中、システムは完全に使用できなくなります。



- (注) バックアップには管理 IP アドレスの設定は含められません。このため、バックアップ ファイルを回復しても、管理アドレスはバックアップ コピーから置換されません。これにより、アドレスに行った変更は維持され、異なるネットワーク セグメントの異なるデバイスの設定を復元することもできるようになります。バックアップにはライセンス情報やクラウド登録情報も含まれていないため、復元時に存在するライセンスやクラウド登録の状態はすべて保持されます。

始める前に

別のシステムでバックアップを復元する場合（デバイスを交換するときなど）、ベストプラクティスは、最初にデバイスを登録し、バックアップファイルで設定された機能に必要なオプションのライセンスを有効にすることです。バックアップファイルにはライセンス情報やクラウドサービス情報が含まれていないため、復元前に行ったライセンスの変更やクラウドの登録は保持されます。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] をクリックしてから、[バックアップと復元 (Backup and Restore)] のサマリーで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

これにより、[バックアップおよび復元 (Backup and Restore)] ページが開きます。使用可能なすべての既存のバックアップ コピーが表にリストされています。

- ステップ 2** 復元するバックアップ コピーが、使用可能なバックアップのリストに存在しない場合は、[アップロード (Upload)] > [参照 (Browse)] をクリックし、バックアップ コピーをアップロードします。

- ステップ 3** ファイルの [復元 (restore)] アイコン (🔄) をクリックします。

復元の確認が求められます。デフォルトで、バックアップ コピーは復元後に削除されますが、[復元後にバックアップを削除しない (Do not remove the backup after restoring)] を選択してバックアップを保存することが可能です。

バックアップファイルが暗号化されている場合は、ファイルを開いて復号するために必要な [パスワード (Password)] を入力する必要があります。

復元が完了すると、システムが再起動します。

(注)

システムが再起動後、脆弱性データベース (VDB)、地理位置情報、およびルールデータベースの更新が自動的にチェックされ、必要に応じてダウンロードされます。これらの更新は大規模な場合があるため、初回の試行が失敗する可能性があります。タスクリストを確認し、ダウンロードが失敗した場合は[システムデータベースの更新 \(987 ページ\)](#)の説明に従って手動で更新をダウンロードしてください。さらに、システムはポリシーを再展開します。更新が成功しないと、それ以降の展開はすべて失敗します。

ステップ 4 必要に応じて、[デバイス (Device)] > [スマートライセンス (Smart License)] > [設定の表示 (View Configuration)] をクリックし、デバイスを再登録し、必要なオプションライセンスを再度有効にします。

バックアップにはライセンス情報やクラウド登録情報は含まれません。そのため、新しいシステムにバックアップを復元する場合（デバイスを交換するときなど）、システムが評価モードのときは、それを登録し、必要なすべてのライセンスを有効にする必要があります。復元前にデバイスを登録し、ライセンスを有効にした場合、追加の変更は必要ありません。

以前のバックアップを同じシステムに単に復元するだけの場合は、ライセンスやクラウド登録を変更する必要はありません。ただし、バックアップにはバックアップの作成後に無効にしたライセンスを必要とする機能が含まれている可能性があるため、必要なすべてのオプションライセンスが有効になっていることを確認してください。

バックアップ ファイルの管理

新しいバックアップを作成すると、バックアップ ファイルが [バックアップと復元 (Backup and Restore)] ページに表示されます。バックアップ コピーは無期限に保持されません。デバイスのディスク容量の使用状況が最大しきい値に達すると、古いバックアップが削除され、新しいバックアップ用に容量が解放されます。さらに、ホットフィックス以外のアップグレードをインストールすると、すべてのバックアップファイルが削除されます。このため、維持が必須である特定のバックアップ コピーを確保するために、定期的にバックアップ ファイルを管理する必要があります。

バックアップ コピーを管理するには、次を実行します。

- ファイルを安全なストレージにダウンロード：バックアップファイルをワークステーションにダウンロードするには、ファイルの [ダウンロード (download)] アイコン (📄) をクリックします。その後、安全なファイル ストレージにファイルを移動できます。
- システムへのバックアップファイルのアップロード：デバイスで使用不可能になったバックアップ コピーを復元する場合、[アップロード (Upload)] > [ファイルの参照 (Browse File)] をクリックし、ワークステーションからアップロードします。その後、復元できます。



(注) アップロードされたファイルの名前を、元のファイル名に一致させるために、変更する必要がある場合があります。また、システムに既存するバックアップコピーの数が 3 を超えると、容量確保のために、最も古いコピーが削除されます。古いソフトウェアバージョンで作成されたファイルをアップロードすることはできません。

- バックアップを復元する：バックアップ コピーを復元するには、ファイルの [復元 (restore)] アイコン (🔄) をクリックします。システムは復元中、使用できず、復元が

完了するとリブートされます。システムが動作するようになったら、設定を展開する必要があります。

- バックアップファイルを削除する：特定のバックアップが必要でなくなったら、ファイルの削除アイコン（）をクリックします。削除の確認が求められます。一旦削除したバックアップファイルは回復できません。

監査と変更管理

システムイベントやユーザが実行したアクションに関するステータス情報を表示できます。この情報は、システムを監査し、システムが適切に管理されていることを確認するために役立ちます。

監査ログを表示するには、[デバイス（Device）]>[デバイス管理（Device Administration）]>[監査ログ（Audit Log）]をクリックします。さらに、右上隅にある[タスクリスト（Task List）]アイコン ボタンまたは[展開（Deployment）]アイコン ボタンをクリックすると、システム管理情報を確認できます。

ここでは、システム監査および変更管理のいくつかの主要な概念とタスクについて説明します。

監査イベント

監査ログには、次のタイプのイベントを含めることができます。

[カスタムフィードの更新イベント（Custom Feed Update Event）]、[カスタムフィードの更新に失敗（Custom Feed Update Failed）]

これらのイベントは、カスタムセキュリティ インテリジェンス フィードの更新が正常に完了または失敗したことを示します。詳細には、更新を開始したユーザと、更新されたフィードに関する情報が含まれます。

カスタムルールファイルのインポートの概要イベント

これらのイベントは、1つ以上のカスタム侵入ルールを含むファイルをインポートしたことを示します。イベントには、追加、更新、および削除されたルールの数の概要と、インポートされたルールの詳細を示す差異ビューが含まれます。

Deployment Completed（展開完了）、Deployment Failed（展開失敗）：ジョブ名またはエンティティ名

これらのイベントは、正常に完了した展開ジョブまたは失敗した展開ジョブを示します。詳細には、ジョブを開始したユーザと、そのジョブエンティティに関する情報が含まれます。失敗したジョブには、その失敗に関連するエラー メッセージが含まれます。

詳細には[差異ビュー（Differences View）]タブもあります。このタブには、ジョブでデバイスに展開された変更が表示されます。これは、展開されたエンティティのすべてのエンティティ変更イベントの組み合わせです。

これらのイベントをフィルタリングするには、事前定義フィルタの[展開履歴 (Deployment History)] をクリックします。これらのイベントのイベントタイプは Deployment Event (展開イベント) であり、完了したイベントまたは失敗したイベントのみをフィルタリングすることはできないことに注意してください。

イベント名には、ユーザ定義のジョブ名 (定義している場合) または「User (username) Triggered Deployment (ユーザ (ユーザ名) トリガー イベント)」が含まれます。また、デバイス セットアップ ウィザードの実行時に発生する「Device Setup Automatic Deployment (デバイス セットアップ 自動展開)」ジョブと「Device Setup Automatic Deployment (Final Step) (デバイス セットアップ 自動展開 (最終手順))」ジョブもあります。

Entity Created (エンティティ作成)、Entity Updated (エンティティ更新)、Entity Deleted (エンティティ削除) : エンティティ名 (エンティティ型)

これらのイベントは、識別されたエンティティまたはオブジェクトに変更が加えられたことを示します。エンティティの詳細には、エンティティ名、タイプ、およびIDに加えて、変更を加えたユーザが含まれます。これらの項目に関してフィルタリングできます。詳細には[差異ビュー (Differences View)] タブもあります。このタブには、オブジェクトに加えられた変更が表示されます。

HA Action Event (HA アクション イベント)

これらのイベントは、高可用性設定でのアクション (ユーザが開始したアクションまたはシステムが開始したアクション) に関連したものです。HA Action Event はイベントタイプですが、イベント名は次のいずれかです。

- **HA Suspended** (HA 一時停止) : ユーザがシステムで HA を意図的に一時停止しました。
- **HA Resumed** (HA 再開) : ユーザがシステムで HA を意図的に再開しました。
- **HA Reset** (HA リセット) : ユーザがシステムで HA を意図的にリセットしました。
- **HA Failover: Unit Switched Modes** (HA フェールオーバー: ユニット モード切り替え) : ユーザがモードを意図的に切り替えたか、ヘルスメトリック違反のためにシステムがフェールオーバーしました。このメッセージは、アクティブピアがスタンバイになったか、スタンバイ ピアがアクティブになったことを示します。

High Availability Sync Completed (高可用性同期完了)

アクティブユニットがスタンバイユニットと設定を同期しました。イベントには、同期バージョンと比較した前のバージョンの変更情報が含まれています。

Interface List Scanned (スキャンされたインターフェイス リスト)

このイベントは、インターフェイスインベントリの変更をスキャンしたことを示します。

Pending Changes Discarded (保留中の変更の破棄)

このイベントは、保留中のすべての変更をユーザが削除したことを示します。このイベントと以前の Deployment Completed イベントの間の Entity Created、Entity Updated、および Entity Deleted イベントで示されたすべての変更が削除され、影響を受けたオブジェクトの状態が、最後に展開されたバージョンに戻されています。

ルール更新イベント

Snort 3 を実行している場合、LSPUpdateServer エンティティからのこのイベントは、新しい侵入ルールパッケージがダウンロードされてインストールされたときに追加、削除、または変更された侵入ルールに関する詳細情報を示します。イベントは 100 のルールに制限されているため、100 を超えるルールが追加、削除、または変更された場合、イベントには完全な情報が含まれなくなります。

Task Started（タスク開始）、Task Completed（タスク完了）、Task Failed（タスク失敗）

タスクイベントは、システムまたはユーザによって開始されたジョブの開始および終了を示します。これらの 2 つのイベントは、タスク リストで 1 つのタスクに統合されます。このタスク リストは、右上隅にある [タスク リスト (Task List)] ボタンをクリックすると表示されます。



タスクには、展開ジョブや手動（またはスケジュールされた）データベース更新などのアクションが含まれます。タスクリスト内の任意の項目は、監査ログの 2 つのタスクイベント、タスクの開始の表示、正常な完了または失敗のいずれかに対応します。

User Logged In（ユーザ ログイン）、User Logged Out（ユーザ ログアウト）：ユーザ名

これらのイベントは、Device Manager のユーザーログインおよびユーザーログアウトの時間と送信元 IP アドレスを示します。User Logged Out イベントは、アクティブ ログアウトと、アイドル時間を超過したための自動ログアウトの両方で発生します。

これらのイベントは、デバイスとの接続を確立している RA VPN ユーザに関するものではありません。また、デバイス CLI のログイン/ログアウトも含まれません。

監査ログの表示および分析

監査ログには、展開ジョブ、データベースの更新、Device Manager のログインとログアウトなど、システムが開始したイベントやユーザが開始したイベントに関する情報が含まれています。

ログで確認できるイベントの種類の説明については、[監査イベント（1004 ページ）](#) を参照してください。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[デバイス管理 (Device Administration)] > [設定の表示 (View Configuration)] リンクをクリックします。

ステップ 2 目次の[監査]をクリックします(未選択の場合)。

イベントは日付別にグループ分けされ、1 日の中では時間別にグループ分けされます。最新の日時がリストの一番上に表示されます。初めは、各イベントは折りたたまれているため、時間、イベント名、そのイベントを開始したユーザ、ユーザの送信元 IP アドレスのみ確認でき

ます。ユーザと IP アドレスの「システム」は、デバイス自体がイベントを開始したことを意味しています。

次を実行できます。

- イベント名の横にある [v] をクリックしてイベントを開き、イベントの詳細を確認します。もう一度アイコンをクリックするとイベントが閉じます。多くのイベントには、イベント属性（イベントタイプ、ユーザ名、送信元 IP アドレスなど）の簡単なリストがあります。ただし、エンティティ イベントと展開イベントには次の 2 つのタブがあります。
 - [概要 (Summary)] : 基本的なイベント属性が示されます。
 - [差異ビュー (Differences View)] : 既存の「展開済み」設定とイベントの一部として行われた変更との比較が示されます。展開ジョブの場合、このビューは長く、スクロールする必要がある場合があります。このタブには、展開ジョブの一部だったエンティティ イベントの変更のすべての差異が要約されます。
- [フィルタ (Filter)] フィールドの右にあるドロップダウン リストから別の時間範囲を選択します。デフォルトでは、過去 2 週間のイベントが表示されますが、過去 24 時間、7 日間、月、または 6 ヶ月に変更することができます。[カスタム (Custom)] をクリックし、開始および終了日時を入力して、正確な範囲を指定します。
- ログ内で任意のリンクをクリックして、該当項目の検索フィルタを追加します。リストが更新されて、該当項目を含むイベントだけが表示されます。単純に [フィルタ (Filter)] ボックスをクリックして、フィルタを直接作成することもできます。フィルタボックスの下には事前定義済みのフィルタがいくつかあり、クリックして関連するフィルタ条件をロードすることができます。イベントのフィルタリングの詳細については、[監査ログのフィルタリング \(1007 ページ\)](#) を参照してください。
- ブラウザ ページをリロードして、ログを最新のイベントで更新します。

監査ログのフィルタリング

監査ログにフィルタを適用して、特定タイプのメッセージだけが表示されるように絞り込むことができます。フィルタの各要素は、正確な完全一致です。たとえば、「User = admin」では **admin** という名前のユーザが開始したイベントだけが表示されます。

次の手法を単独または組み合わせて使用して、フィルタを作成できます。このリストは、フィルタ要素を追加するたびに自動的に更新されます。

事前定義のフィルタをクリック

[フィルタ (Filter)] フィールドの下には事前定義のフィルタがあります。リンクをクリックするだけでフィルタがロードされます。確認を求められます。すでにフィルタが適用されている場合は、追加されず、置き換えられます。

強調表示された項目をクリック

フィルタを作成する最も簡単な方法は、フィルタリングの基準となる値を含むログテーブルまたはイベント詳細情報内の項目をクリックすることです。項目をクリックすると、その値と要素の組み合わせに正しく定式化されている要素を使用して、[フィルタ (Filter)] フィールドが更新されます。ただし、この手法を使用するには、イベントの既存のリストに目的の値が含まれている必要があります。

項目に関するフィルタ要素を追加できる場合は、その項目にマウスカーソルを合わせると下線が引かれ、[クリックしてフィルタに追加 (Click to Add to Filter)] コマンドが表示されます。

アトミック要素を選択

[フィルタ (Filter)] フィールドをクリックして、ドロップダウン リストから必要なアトミック要素を選択し、等号の後に照合値を入力してから **Enter** キーを押すことでフィルタを作成することもできます。次の要素に関するフィルタリングを実行できます。すべての要素がすべてのイベント タイプに関連するわけではないことに注意してください。

- [イベント タイプ (Event Type)] : これは、通常、イベント名と同じですが、異なる場合もあります (エンティティ名やユーザのような可変修飾子はありません)。展開イベントの場合、イベントタイプは **Deployment Event** (展開イベント) です。イベントタイプの説明については、[監査イベント \(1004 ページ\)](#) を参照してください。
- [ユーザ (User)] : イベントを開始したユーザの名前。システム ユーザは **SYSTEM** (すべて大文字) です。
- [送信元 IP (Source IP)] : ユーザがイベントを開始した IP アドレス。システムが開始したイベントの送信元 IP アドレスは **SYSTEM** です。
- [エンティティ ID (Entity ID)] : エンティティまたはオブジェクトの UUID。これは、理解できない長い文字列 (8e7021b4-2e1e-11e8-9e5d-0fc002c5f931 など) です。通常、このフィルタを使用するには、イベント詳細情報内のエンティティ ID をクリックするか、REST API を使用し、関連する GET コールによって必要な ID を取得する必要があります。
- [エンティティ名 (Entity Name)] : エンティティまたはオブジェクトの名前。ユーザが作成したエンティティの場合は、通常、ユーザがオブジェクトに付けた名前 (ネットワーク オブジェクトの **InsideNetwork** など) です。システムが生成したエンティティの場合は (一部のユーザ定義のエンティティについても)、事前定義されているものの理解できる名前です。たとえば、明示的に名前を付けない展開ジョブの場合は「**User (admin) Triggered Deployment**」です。
- [エンティティ タイプ (Entity Type)] : エンティティまたはオブジェクトの種類。これらは、事前定義されているものの理解できる名前 (**Network Object** など) です。API エクスプローラで「**type**」値の関連オブジェクト モデルを調べることによってエンティティ タイプを確認することができます。通常、API タイプはすべて小文字であり、スペースは含まれません。それらをモデルに表示されているとおりに正確に入力し、**Enter** キーを押すと、文字列が理解しやすい形式に変更されます。どちらの形式で入力しても機能します。API エクスプローラを開くには、[詳細オプション (More

options)] ボタン (⋮) をクリックし、[APIエクスプローラ (API Explorer)] を選択します。

複雑な監査ログ フィルタのルール

複数のアトミック要素を含む複雑なフィルタを作成する場合、次のルールに注意してください。

- 同じタイプの要素には、そのタイプのすべての値の間に OR 関係があります。たとえば、「User = admin」と「User = SYSTEM」が含まれている場合、いずれかのユーザによって開始されたイベントと一致します。
- 異なるタイプの要素には、AND 関係があります。たとえば、「Event Type = Entity Updated」と「User = SYSTEM」が含まれている場合、アクティブ ユーザではなくシステムがエンティティを更新したイベントだけが表示されます。
- ワイルドカード、正規表現、部分一致、または単純なテキスト文字列の一致は使用できません。

展開およびエンティティ変更履歴の確認

展開およびエンティティ イベントの詳細には、[差異ビュー (Differences View)] タブが含まれています。このタブには、古い設定と変更の色分けされた比較が表示されます。

- 展開ジョブの場合は、展開前にデバイスで実行されていた設定と、実際に展開された変更との比較です。
- エンティティ イベントの場合は、オブジェクトの以前のバージョンに行われた設定の変更です。エンティティ イベントの場合は、オブジェクトの以前のバージョンに行われた設定の変更です。

手順

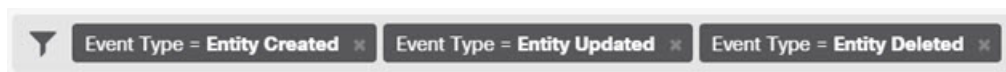
ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックし、[デバイス管理 (Device Administration)] > [設定の表示 (View Configuration)] リンクをクリックします。

ステップ 2 目次の[監査]をクリックします(未選択の場合)。

ステップ 3 (オプション) メッセージのフィルタ処理：

- 展開イベント：フィルタ ボックスの下にある [展開履歴 (Deployment History)] 事前定義フィルタをクリックします。
- エンティティ変更イベント：関心のある変更の種類に対して、[イベントの種類 (Event Type)] 要素を使用してフィルタを手動で作成します。すべてのエンティティの変更を確認するには、[作成済みエンティティ (Entity Created)]、[更新済みエンティティ (Entity

Updated)]、および [削除済みエンティティ (Entity Deleted)] の 3 つの仕様を含めます。フィルタは次のようになります。



ステップ 4 イベントを開き、[差異ビュー (Differences View)] タブをクリックします。

Deployment Completed: User (admin) Triggered Deployment

Summary Differences View

DEPLOYED VERSION	PENDING VERSION	Legend: Removed Added Edited
Syslog Server Removed		
Entity ID: 4a1605df-311d-11e8-893d-c15d8f450fd9		
syslogServerIpAddress: 192.168.1.25	-	Removed
portNumber: 514	-	Removed
deviceInterface:		
inside	-	Removed
Network Object Added		
Entity ID: b64f4101-311d-11e8-893d-a302db0bc31e		
-	subType: Network	Added
-	value: 10.1.10.0/24	Added
-	isSystemDefined: false	Added
-	name: RemoteNetwork	Added
Network Object Edited		
Entity ID: ddb608e9-311c-11e8-893d-5588b92854ca		
value: 192.168.2.0/24	192.168.1.0/24	Edited

変更は色分けされていて、見出しにはオブジェクトの種類と、Added（作成）、Removed（削除）、または Edited（更新）が表示されます。Edited オブジェクトには、変更された属性またはオブジェクトから削除された属性のみ表示されます。展開ジョブの場合、変更されたエンティティごとに個別の見出しがあります。見出しには、オブジェクトのエンティティタイプが示されます。

保留中の全変更の廃棄

まだ展開されていない一連の設定の変更に納得していない場合は、すべての保留中の変更を破棄できます。破棄すると、すべての機能がデバイスに存在する状態に戻ります。その後、設定の変更をもう一度を開始できます。

手順

- ステップ 1** Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。
保留中の変更がある場合、アイコンがドット付きで強調表示されます。



- ステップ 2** [詳細オプション (More Options)] > [すべて破棄 (Discard All)] をクリックします。

- ステップ 3** 確認ダイアログで [OK] をクリックします。

変更が破棄され、プロセスが完了すると、保留中の変更がないことを示すメッセージが表示されます。監査ログに [保留中の変更の破棄 (Pending Changes Discarded)] イベントが追加されます。

デバイス設定のエクスポート

現在展開されている設定のコピーを JSON 形式でエクスポートできます。このファイルは、アーカイブまたはレコードの保存目的で使用できます。パスワードや秘密鍵などのセンシティブ データはすべてマスク処理されます。

ファイルを当該デバイスや別のデバイスにインポートすることはできません。この機能は、システム バックアップの代替機能ではありません。

設定をダウンロードする前に、少なくとも 1 つの展開ジョブが正常に完了している必要があります。

手順

- ステップ 1** [デバイス (Device)] を選択し、[デバイス管理 (Device Administration)] グループで [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

- ステップ 2** 目次で [設定のダウンロード (Download Configuration)] をクリックします。

- ステップ 3** [デバイス設定の取得 (Get Device Configuration)] をクリックして、ファイルを作成するジョブを開始します。

ファイルを事前に作成している場合、ファイルの作成日とともに、[ダウンロード (Download)] ボタンと **File is ready to download** メッセージが表示されます。

設定のサイズによっては、ファイルの生成に数分かかることがあります。タスク リストや監査ログを確認したり、定期的にこのページに戻ったりして、Export Config ジョブが完了してファイルが生成されるのを待ちます。

ステップ 4 ファイルが生成されたらこのページに戻り、[設定ファイルのダウンロード (Download the Configuration File)] ボタン (📄) をクリックして、ファイルをワークステーションに保存します。

Device Manager および Threat Defense ユーザーアクセスの管理

ユーザーが Threat Defense にログイン (HTTPS アクセス) するための外部認証および認可ソースを設定できます。ローカル ユーザー データベースとシステム定義の **管理者** ユーザーに加えて (またはその代わりに) 外部サーバを使用できます。Device Manager アクセス用の追加のローカル ユーザーアカウントは作成できないことに注意してください。

設定を変更できる複数の外部 Device Manager ユーザーアカウントを用意できますが、それらの変更がユーザーごとに追跡されることはありません。1人のユーザーが変更を展開すると、すべてのユーザーが行った変更が展開されます。ロック機能はありません。つまり、複数のユーザーが同じオブジェクトの更新を同時に試みることができます。その結果、1人のユーザーだけが変更を正常に保存できます。また、ユーザーに基づいて変更を破棄することもできません。

5つのユーザーセッションを同時に処理できます。6人目のユーザーがログインすると、最も古いユーザーセッションが自動的にログオフされます。また、アイドルタイムアウトがあり、非アクティブユーザーは20分後にログアウトされます。

脅威に対する防御 CLI への SSH アクセスの外部認証および認可も設定できます。ローカル データベースは外部ソースを使用する前に常にチェックされるため、フェールセーフアクセスでは追加のローカルユーザーを作成することができます。ローカルソースと外部ソースの両方で重複するユーザーを作成しないでください。**管理者** ユーザーを除き、CLI ユーザーと Device Manager ユーザーが入れ替わることはありません。ユーザーアカウントは完全に個別です。



(注) 外部サーバーを使用する場合、個別の AAA サーバーグループを設定するか、AAA サーバー内に認証/認可ポリシーを作成して、ユーザーが特定の 脅威に対する防御 デバイスの IP アドレスだけにアクセスできるようにすることで、ユーザーによるデバイスのサブセットへのアクセスを制御できます。

ここでは、Device Manager および CLI ユーザーアクセスの設定方法と管理方法について説明します。

Device Manager (HTTPS) ユーザー用の外部認証 (AAA) 設定

外部 AAA サーバーからの Device Manager への HTTPS アクセスを提供できます。AAA 認証および認可を有効にすることにより、さまざまなレベルのアクセス権を付与でき、すべてのユーザーがローカル管理者アカウントを使用してログインする必要がなくなります。

これらの外部ユーザは、Threat Defense API および API エクスプローラについても認証されます。

AAA サーバーで管理ユーザーの認可を設定することで、ロールベース アクセス コントロール (RBAC) を提供できます。使用できる値はサーバータイプによって異なります。ユーザーが Device Manager にログインすると、ページの右上隅にユーザー名とロールが表示されます。AAA サーバーで正しくアカウントを設定すると、次の手順で管理アクセス用にそのアカウントを有効にできます。

SAML ユーザー認証

SAML サーバー アイデンティティ ソースを設定するときに、承認レベルを含むフィールドを指定します。外部ユーザーには、管理者、監査管理者、暗号管理者、読み取り/書き込みユーザー、読み取り専用ユーザーの認証アクセスタイプを設定できます。[SAML サーバの設定 \(228 ページ\)](#) を参照してください。

RADIUS ユーザー認証

ロールベース アクセス コントロール (RBAC) を提供するには、RADIUS サーバー上のユーザーアカウントを更新して、**cisco-av-pair** 属性を定義します (これは ISE の場合で、FreeRADIUS ではこの属性のスペルは Cisco-AVPair です。使用しているシステムで正しいスペルを確認してください)。この属性はユーザーアカウントで正しく定義されている必要があります。正しく定義されていないと、ユーザーの Device Manager へのアクセスが拒否されます。**cisco-av-pair** 属性のサポートされる値は、次のとおりです。

- **fdm.userrole.authority.admin** はフル管理者アクセスを提供します。これらのユーザは、ローカル管理者ユーザが実行できるすべてのアクションを実行できます。
- **fdm.userrole.authority.rw** は読み取り/書き込みアクセスを提供します。これらのユーザは、読み取り専用ユーザが実行できるすべてのアクションを実行でき、設定を編集および展開することもできます。アップグレードのインストール、バックアップの作成と復元、監査ログの表示、Device Manager ユーザーのセッションの終了など、システムクリティカルなアクションに対してのみ制限があります。
- **fdm.userrole.authority.ro** は読み取り専用アクセスを提供します。これらのユーザは、ダッシュボードと設定を表示できますが、変更できません。ユーザが変更しようすると、権限が不足していることを示すエラー メッセージが表示されます。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [管理アクセス (Management Access)] リンクの順にクリックします。

[System Settings] ページがすでに表示されている場合は、目次で [Management Access] をクリックします。

ステップ 2 まだ選択されていない場合は、[AAA設定 (AAA Configuration)] タブをクリックします。

ステップ 3 [HTTPS接続 (HTTPS Connection)] オプションの設定。

- [管理/REST API用のサーバーグループ (Server Group for Management/REST API)] : プライマリ認証ソースとして使用する RADIUS または SAML サーバーグループ (外部認証/認可) またはローカルユーザー データベース (LocalIdentitySource) を選択します。

サーバーグループがまだ存在しない場合は、リンクをクリックしてすぐに作成します。RADIUS の場合、サーバーごとに RADIUS サーバーオブジェクトを作成してグループに追加する必要もありますが、サーバーグループを定義するときにこれを実行できます。RADIUS の詳細については、[RADIUS サーバおよびグループ \(218 ページ\)](#) を参照してください。SAML の詳細については、[SAML サーバの設定 \(228 ページ\)](#) を参照してください。

- [ローカルによる認証 (Authentication with LOCAL)] (RADIUS のみ) : 外部 RADIUS サーバーグループを選択する場合、ローカル [管理 (admin)] アカウントを含むローカル アイデンティティ ソースを使用する方法を指定できます。次のいずれかを選択します。
 - [外部サーバの前 (Before External Server)] : システムは、まずローカルソースに対してユーザ名とパスワードを確認します。
 - [外部サーバの後 (After External Server)] : 外部ソースが使用できない場合またはユーザアカウントが外部ソースで見つからなかった場合にのみ、ローカルソースが確認されます。
 - [使用しない (Never)] : (非推奨) ローカルソースがまったく使用されないため、管理者ユーザとしてログインできません。

注意

[使用しない (Never)] を選択すると、[管理 (admin)] アカウントを使用して Device Manager にログインできなくなります。AAA サーバーが使用できなくなった場合または AAA サーバーのアカウント設定が間違っている場合は、システムがロックされます。

(注)

[ローカルによる認証 (Authentication with LOCAL)] は、SAML を使用する場合は適用されません。SAML では、SAML ログイン情報を入力するために [シングルサインオン (SSO) (Single-Sign On (SSO))] リンクを明示的にクリックする必要があるため、ローカルのユーザー名とパスワードを入力することで、いつでもローカルデータベースを使用してログインできます。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

Threat Defense CLI (SSH) ユーザー用の外部認証 (AAA) 設定

外部 RADIUS サーバーからの Threat Defense CLI への SSH アクセスを提供できます。RADIUS 認証および許可を有効にすることで、デバイスごとに個別のローカルユーザアカウントを定義するのではなく、単独の認証ソースからさまざまなレベルのアクセス権を提供することができます。

これらの SSH 外部ユーザは、Threat Defense API および API エクスプローラについては認証されません。SSH の許可を定義するために使用するメカニズムは、HTTPS アクセスに必要なものとは異なります。ただし、SSH と HTTPS の両方の許可条件で同じ RADIUS ユーザを設定し、どちらのプロトコルでも特定のユーザがシステムにアクセスできるようにすることは可能です。

SSH アクセスにロールベースのアクセス制御 (RBAC) を提供するには、RADIUS サーバ上のユーザアカウントを更新して **Service-Type** 属性を定義します。この属性はユーザアカウントで定義されている必要があります。定義されていないと、ユーザの SSH へのアクセスが拒否されます。次に、**Service-Type** 属性でサポートされている値を示します。

- **[Administrator (6)]** : CLI への **config** アクセス認証を提供します。これらのユーザは、CLI ですべてのコマンドを使用できます。
- **NAS Prompt (7)** または 6 以外のレベル : CLI への **basic** アクセス認証を提供します。これらのユーザは **show** コマンドなど、モニタリングやトラブルシューティングのための読み取り専用コマンドを使用できます。

RADIUS サーバで正しくアカウントを設定すると、次の手順で SSH 管理アクセス用にそのアカウントを有効にできます。



- (注) ローカルソースと外部ソースの両方で重複するユーザを作成しないでください。重複するユーザ名を作成する場合は、同じ認証権限を持っていることを確認します。許可権限がローカルユーザアカウントで異なる場合、外部バージョンのユーザアカウントのパスワードを使用してログインすることはできません。ログインできるのはローカルのパスワードを使用した場合のみです。権限が同じ場合、パスワードが異なると仮定して、使用するパスワードによって外部ユーザまたはローカルユーザのどちらでログインしているかが判断されます。最初にローカルデータベースが確認されますが、ユーザ名がローカルデータベースに存在するがパスワードが正しくない場合、外部サーバが確認され、外部ソースのパスワードが正しい場合、ログインが成功します。

始める前に

外部定義ユーザに次の動作を通知し、希望通りに設定できるようにしてください。

- 外部ユーザが初めてログインすると、Threat Defense は必要な構造を作成しますが、ユーザセッションを同時に作成することはできません。ユーザがセッションを開始するには、再度認証する必要があります。ユーザには次のようなメッセージが表示されます。「New external username identified. Please log in again to start a session.」
- 同様に、最後のログイン以降に **Service-Type** で定義したユーザの認証が変更された場合は、ユーザは再認証する必要があります。ユーザには次のようなメッセージが表示されます。「Your authorization privilege has changed. セッションを開始するにはもう一度ログインしてください。(Please log in again to start a session.)」

外部ユーザが GUI に正常にログインできても CLI に正常にログインできない場合は、AAA サーバーの秘密鍵に問題がある可能性があります。キーに & または \ の文字が含まれていないことを確認してください。これらは GUI ログインでは機能する可能性があります、SSH ログインでは機能しません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] をクリックしてから、[システム設定 (System Settings)] > [管理アクセス (Management Access)] リンクの順にクリックします。

[System Settings] ページがすでに表示されている場合は、目次で [Management Access] をクリックします。

ステップ 2 まだ選択されていない場合は、[AAA設定 (AAA Configuration)] タブをクリックします。

ステップ 3 [SSH接続 (SSH Connection)] のオプションを設定します。

- [サーバグループ (Server Group)] : プライマリ認証ソースとして使用する RADIUS サーバグループまたはローカルユーザデータベース (LocalIdentitySource) を選択します。外部認証を使用する RADIUS サーバグループを選択する必要があります。

サーバグループがまだ存在しない場合は、[新しいRADIUSサーバグループの作成 (Create New RADIUS Server Group)] リンクをクリックしてすぐに作成します。サーバごとに RADIUS サーバオブジェクトを作成してグループに追加する必要がありますが、サーバグループを定義するときにこれを実行できます。RADIUS の詳細については、[RADIUS サーバおよびグループ \(218 ページ\)](#) を参照してください。

SSH 接続では、グループ内の最初の 2 台のサーバのみが使用されることに注意してください。3 つ以上のサーバがあるグループを使用する場合、追加のサーバが試行されることはありません。さらに、[デッドタイム (Dead Time)] と [最大失敗試行数 (Maximum Failed Attempts)] グループ属性は使用されません。

- [ローカルによる認証 (Authentication with LOCAL)] : 外部サーバグループを選択する場合、ローカルアイデンティティソースを使用する方法を指定できます。SSH アクセスでは、ローカルデータベースが常に外部サーバの前に確認されます。

ステップ 4 [保存 (Save)] をクリックします。

Device Manager ユーザーセッションの管理

[モニタリング (Monitoring)] > [セッション (Sessions)] を選択すると、現在 Device Manager にログインしているユーザーのリストが表示されます。このリストには、各ユーザが現在のセッションにログインしている時間が示されます。

同じユーザ名が複数回表示される場合は、ユーザが異なる送信元アドレスからセッションを開いたことを意味します。セッションは、ユーザ名と送信元アドレスに基づいて個別に追跡され、各セッションは固有のタイムスタンプを持ちます。

このシステムでは、5つの同時ユーザセッションが可能です。6人目のユーザがログインすると、最も古い現在のセッションが自動的にログアウトされます。また、アイドル状態のユーザは、アクティビティが20分間ないと自動的にログアウトされます。

Device Manager ユーザーが誤ったパスワードを入力し、3回連続してログインに失敗した場合、アカウントは5分間ロックされます。ユーザーが再度ログインを試みるには、待機する必要があります。**Device Manager** ユーザーアカウントをロック解除する方法はありません。また、再試行回数やロックタイムアウトを調整することもできません（SSHユーザの場合は、これらの設定を調整し、アカウントのロックを解除することができます）。

必要に応じて、セッションの削除アイコン（）をクリックすることにより、ユーザセッションを終了させることができます。自分自身のセッションを削除すると、自分もログアウトされます。セッションを終了させた場合、ロックアウト期間はなく、ユーザはすぐにログインしなおすことができます。

外部ユーザー用のスタンバイ HA ユニットでの Device Manager アクセスの有効化

Device Manager ユーザー用に外部認証を設定すると、これらのユーザーはハイアベイラビリティペアのアクティブおよびスタンバイ装置の両方にログインできます。ただし、スタンバイユニットへの初回ログインを成功させるには、アクティブユニットへのログインと比較して、いくつかの追加手順を実行する必要があります。

外部ユーザがアクティブユニットに初めてログインすると、そのユーザとユーザのアクセス権を定義するオブジェクトが作成されます。管理者または読み取り/書き込みユーザはその後、アクティブな装置からユーザオブジェクトの設定を展開し、スタンバイ装置で表示されるようにする必要があります。

展開および後続の設定の同期が正常に完了して初めて、外部ユーザはスタンバイユニットにログインできます。

管理者ユーザと読み取り/書き込みユーザは、アクティブユニットにログイン後に変更を展開できます。ただし、読み取り専用ユーザは設定を展開できないため、適切な権限を持つユーザに設定を展開を依頼する必要があります。

Threat Defense CLI のローカル ユーザ アカウントの作成

脅威に対する防御 デバイスで CLI にアクセスするユーザを作成できます。これらのアカウントは、管理アプリケーションへのアクセスは許可されませんが、CLI のみアクセスできます。CLI はトラブルシューティングやモニタリング用に役立ちます。

複数のデバイス上にローカルユーザアカウントを一度に作成することはできません。デバイスごとに固有のローカル ユーザ CLI アカウントのセットがあります。

手順

ステップ 1 config 権限を持つアカウントを使用してデバイスの CLI にログインします。

管理者ユーザアカウントには必要な権限がありますが、設定権限を持つ任意のアカウントで作業できます。SSH セッションまたはコンソール ポートを使用できます。

特定のデバイス モデルでは、コンソール ポートから FXOS CLI に移動します。connect ftd を使用して 脅威に対する防御 の CLI にアクセスします。

ステップ 2 ユーザ アカウントを作成します。

configure user add username {basic | config}

次の権限レベルを持つユーザを定義できます。

- **config** : ユーザに設定アクセス権を付与します。すべてのコマンドの管理者権限がユーザに与えられます。
- **basic** : ユーザに基本的なアクセス権を付与します。ユーザはコンフィギュレーション コマンドを入力することはできません。使用できるコマンドは、dig、ping、traceroute です。

例 :

次の例では、joecool という名前の設定アクセス権を持つユーザ アカウントを追加します。パスワードは入力時に非表示となります。

```
> configure user add joecool config
Enter new password for user joecool: newpassword
Confirm new password for user joecool: newpassword
> show user
```

Login	UID	Auth	Access	Enabled	Reset	Exp	Warn	Str	Lock	Max
admin	1000	Local	Config	Enabled	No	Never	N/A	Dis	No	N/A
joecool	1001	Local	Config	Enabled	No	Never	N/A	Dis	No	5

(注)

ユーザーは、初回ログイン時にパスワードを変更するように求められます。ユーザーは、**configure password** コマンドを使用して以降のパスワードの変更を開始できます。

ステップ 3 (任意) セキュリティ要件を満たすアカウントの特性を調整します。

アカウントのデフォルト動作を変更するには、次のコマンドを使用できます。

- **configure user aging username max_days warn_days**

ユーザパスワードの有効期限を設定します。パスワードが有効である最大日数に続いて、有効期限前にユーザに今後の期限切れを警告する日数を指定します。値は共に 1 から 9999 ですが、警告日数は最大日数よりも小さくなければなりません。アカウントを作成した場合、パスワードの有効期限はありません。

- **configure user forcereset username**

次回ログイン時にユーザにパスワードを強制的に変更するよう要求します。

- **configure user maxfailedlogins** *username number*

アカウントがロックされる前の連続したログイン失敗の最大回数を 1~9999 までで設定します。Use the **configure user unlock** command to unlock accounts. 新しいアカウントのデフォルトは、5 回連続でのログインの失敗です。

- **configure user minpasswlen** *username number*

パスワードの最小の長さを 1 から 127 に設定します。

- **configure user strengthcheck** ユーザ名 {**enable** | **disable**}

パスワードの変更時にユーザに対してパスワード要件を満たすように要求する、パスワードの強度確認を有効または無効にします。ユーザパスワードの有効期限が切れた場合、または **configure user forcereset** コマンドを使用した場合は、ユーザが次にログインしたときにこの要件が自動的に有効になります。

ステップ 4 必要に応じてユーザ アカウントを管理します。

ユーザのアカウントをロックアウトできます。そうしないとアカウントの削除やその他の問題の修正が必要な場合があります。システムのユーザアカウントを管理するには、次のコマンドを使用します。

- **configure user access** ユーザ名 {**basic** | **config**}

ユーザ アカウントの権限を変更します。

- **configure user delete** *username*

指定したアカウントを削除します。

- **configure user disable** *username*

指定したアカウントを削除せずに無効にします。ユーザは、アカウントを有効にするまでログインできません。

- **configure user enable** *username*

指定したアカウントを有効にします。

- **configure user password** *username*

指定したユーザのパスワードを変更します。ユーザーは通常 **configure password** コマンドを使用して自分のパスワードを変更する必要があります。

- **configure user unlock** *username*

連続して失敗したログイン試行が最大数を越えたためにロックされたユーザアカウントのロックを解除します。

システムの再起動またはシャットダウン

必要に応じて、システムを再起動またはシャットダウンできます。

下記の手順以外に、**reboot** コマンドまたは **shutdown** コマンドを使用して、SSH セッションまたは Device Manager CLI コンソールからこれらのタスクを実行することもできます。

手順

ステップ 1 [デバイス]をクリックし、[システム設定]>[再起動/シャットダウン]リンクをクリックします。

すでに[システム設定 (System Settings)] ページを表示している場合は、目次の[再起動/シャットダウン (Reboot/Shutdown)] をクリックします。

ステップ 2 必要な機能を実行するボタンをクリックします。

- [再起動]: システムが正常に動作しておらず、試行錯誤しても問題解決に至らない場合、デバイスを再起動できます。また、システムソフトウェアをリロードするためにデバイスを再起動するよう求める手順がいくつかあります。
- [シャットダウン]: システムをシャットダウンして、制御された方法で電源をオフにします。ネットワークからデバイスを削除する場合、たとえばデバイスを交換する場合は、シャットダウンを使用します。デバイスをシャットダウンした後は、ハードウェアのオン/オフスイッチからのみ電源をオンにすることができます。

ステップ 3 アクションが完了するまで待ちます。

コンソールからファイアウォールに接続している場合は、ファイアウォールがシャットダウンするときにシステムプロンプトをモニターします。次のプロンプトが表示されます。

```
System is stopped.  
It is safe to power off now.  
Do you want to reboot instead? [y/N]
```

ISA 3000 の場合、シャットダウンが完了すると、システム LED が消灯します。電源を切る前に、少なくとも 10 秒待ってください。

システムの再起動またはシャットダウン中は、Device Manager または CLI で他のアクションを実行できません。

再起動中、Device Manager のページが更新され、再起動が完了するとログインページに移動します。再起動が完了する前にページを更新しようとする、その時点での Device Manager Web サーバーの動作状態に基づいて、Web ブラウザに 503 または 404 エラーが表示されることがあります。

シャットダウンの場合、システムは最終的にまったく応答なくなり、404エラーが表示されます。システムを完全にオフにしようとしているため、これは想定される結果です。

システムのトラブルシューティング

ここでは、システム レベルのトラブルシューティング タスクと機能について説明します。アクセス制御など特定の機能のトラブルシューティングについては、その機能に対応する章を参照してください。

接続テストのためのアドレスへの ping

ping は、特定のアドレスが有効であり応答するかどうかを判別できる単純なコマンドです。これは基本的な接続性が機能していることを意味します。ただし、デバイスで実行されている他のポリシーにより、特定のタイプのトラフィックは正常にデバイスを通して通過できないことがあります。ping CLI コンソールを開く、またはデバイス CLI へのログインによって、使用することができます。



- (注) システムには複数のインターフェイスがあるため、アドレスの ping に使用されるインターフェイスを制御できます。目的とする接続性をテストするためには、適切なコマンドを使用してください。たとえば、システムは管理インターフェイスを介してシスコのライセンスサーバに到達する必要があります。この場合、**ping system** コマンドを使用して接続をテストする必要があります。ping を使用と、複数のデータ インターフェイスを通じて到達できるかをテストするため、同じ結果が得られない可能性があります。

通常の ping は、ICMP パケットを使用して接続をテストします。ネットワークで ICMP が禁止されている場合、代わりに TCP ping を使用できます（データ インターフェイス ping のみ）。

IP アドレスまたは完全修飾ホスト名（FQDN）のいずれかを ping できます。ping が FQDN で機能するためには、管理インターフェイスまたはデータインターフェイスのいずれかに設定された DNS サーバが IP アドレスを正常に返す必要があります。管理インターフェイスとデータインターフェイスに個別に DNS サーバを設定する必要があります。特定のインターフェイスに DNS サーバが設定されていない場合は、**dig** コマンドを使用して、特定の FQDN の IP アドレスを検索します。

ネットワーク アドレスに ping を実行する場合の主なオプションを次に示します。

管理インターフェイスを経由したアドレスの ping

ping system コマンドを使用します。

ping system host

ホストは IP アドレスまたは完全修飾ドメイン名（FQDN）（**www.example.com** など）にできます。データ インターフェイスを経由した ping と異なり、システム ping のデフォルト

カウントはありません。Ctrl+C キーを使用して停止させるまで、ping は続きます。次に例を示します。

```
> ping system www.cisco.com
PING origin-www.cisco.COM (72.163.4.161) 56(84) bytes of data.
64 bytes from www1.cisco.com (72.163.4.161): icmp_seq=1 ttl=242 time=10.6 ms
64 bytes from www1.cisco.com (72.163.4.161): icmp_seq=2 ttl=242 time=8.13 ms
64 bytes from www1.cisco.com (72.163.4.161): icmp_seq=3 ttl=242 time=8.51 ms
64 bytes from www1.cisco.com (72.163.4.161): icmp_seq=4 ttl=242 time=8.40 ms
^C
--- origin-www.cisco.COM ping statistics ---
4 packets transmitted, 4 received, 0% packet loss, time 3003ms
rtt min/avg/max/mdev = 8.139/8.927/10.650/1.003 ms
>
```

ルーティング テーブルを使用するデータ インターフェイスを介したアドレスの ping

ping コマンドを使用します。インターフェイスを指定せずに、システムが一般的にホストへのルートを検索できるかどうかをテストします。システムは通常このようにしてトラフィックをルーティングするため、一般的に実行する必要があるのはこのテストです。

ping host

例 :

```
> ping 171.69.38.1
Sending 5, 100-byte ICMP Echos to 171.69.38.1, timeout is 2 seconds:
!!!!!!
Success rate is 100 percent (5/5), round-trip min/avg/max = 1/2/10 ms
```



(注) タイムアウト、繰り返しカウント、パケットサイズのほか、送信するデータ パターンも指定できます。CLI で ? を使用すると、使用可能なオプションが表示されます。

特定のデータ インターフェイスを介したアドレスの ping

特定のデータインターフェイスを経由した接続をテストする場合、**ping interface if_name** コマンドを使用します。

ping interface if_name host

例 :

```
> ping interface inside 171.69.38.1
Sending 5, 100-byte ICMP Echos to 171.69.38.1, timeout is 2 seconds:
!!!!!!
Success rate is 100 percent (5/5), round-trip min/avg/max = 1/2/10 ms
```

TCP ping を使用するデータ インターフェイスを介したアドレスの ping

pingtcp コマンドを使用します。TCP ping では、SYN パケットを送信し、宛先から SYN-ACK パケットが返されると成功と見なします。

ping tcp [interface if_name] host port

ホストと TCP ポートを指定する必要があります。FQDN のみが判明している場合は、**nslookup fqdn-name** コマンドを使用して、IP アドレスを判別します。

オプションで、**ping** を送信するインターフェイスではなく、**ping** の送信元インターフェイスであるインターフェイスを指定できます。このタイプの **ping** は常にルーティング テーブルを使用します。

TCP **ping** では SYN パケットを送信し、宛先から SYN-ACK パケットが返されると **ping** が成功したとみなします。次に例を示します。

```
> ping tcp 10.0.0.1 21
Type escape sequence to abort.
No source specified. Pinging from identity interface.
Sending 5 TCP SYN requests to 10.0.0.1 port 21
from 10.0.0.10, timeout is 2 seconds:
!!!!
Success rate is 100 percent (5/5), round-trip min/avg/max = 1/1/1 ms
```



(注) タイムアウト、繰り返しカウント、および TCP **ping** の送信元アドレスを指定することもできます。CLI で ? を使用すると、使用可能なオプションが表示されます。

ホストへのルートのトレース

トラフィックを IP アドレスに送信する際に問題が発生した場合、ホストまでのルートをトレースし、ネットワーク パスに問題があるかどうかを判別できます。トレースルートは、無効なポートまたは ICMPv6 エコーで UDP パケットを宛先に送信することで機能します。宛先までの間にあるルータから ICMP Time Exceeded メッセージが返され、トレースルートにエラーが報告されます。各ノードは 3 つのパケットを受信するため、有益な結果を得る機会が 1 台のノードにつき 3 回あります。**traceroute** CLI コンソールを開く、またはデバイス CLI へのログインによって、を使用することができます。



(注) データインターフェイス (**traceroute**) または仮想管理インターフェイス (**traceroute system**) を経由するルートをトレースするための個別のコマンドがあります。適切なコマンドを使用するようにしてください。

次の表に、パケットごとの出力に表示される結果を示します。

出力記号	説明
*	タイムアウトの期間内にプローブへの応答を受信しませんでした。
nn msec	各ノードに対する、指定した数のプローブのラウンドトリップ時間 (ミリ秒)。
!N.	ICMP ネットワークに到達できません。

出力記号	説明
!H	ICMP ホストに到達できません。
!P	ICMP プロトコルに到達できません。
!A	ICMP が管理的に禁止されています。
?	ICMP の原因不明のエラーが発生しました。

仮想管理インターフェイスを介したルートの追跡

traceroute system コマンドを使用します。

traceroute system [接続先 (Destination)]

ホストには、IPv4/IPv6 アドレスまたは完全修飾ドメイン名 (FQDN) (www.example.com など) を使用できます。次に例を示します。

```
> traceroute system www.example.com
traceroute to www.example.com (172.163.4.161), 30 hops max, 60 byte packets
 1 192.168.0.254 (192.168.0.254) 0.213 ms 0.310 ms 0.328 ms
 2 10.88.127.1 (10.88.127.1) 0.677 ms 0.739 ms 0.899 ms
 3 lab-gw1.example.com (10.89.128.25) 0.638 ms 0.856 ms 0.864 ms
 4 04-bb-gw1.example.com (10.152.240.65) 1.169 ms 1.355 ms 1.409 ms
 5 wan-gw1.example.com (10.152.240.33) 0.712 ms 0.722 ms 0.790 ms
 6 wag-gw1.example.com (10.152.240.73) 13.868 ms 10.760 ms 11.187 ms
 7 rbb-gw2.example.com (172.30.4.85) 7.202 ms 7.301 ms 7.101 ms
 8 rbb-gw1.example.com (172.30.4.77) 8.162 ms 8.225 ms 8.373 ms
 9 sbb-gw1.example.com (172.16.16.210) 7.396 ms 7.548 ms 7.653 ms
10 corp-gw2.example.com (172.16.16.58) 7.413 ms 7.310 ms 7.431 ms
11 dmzbb-gw2.example.com (172.16.0.78) 7.835 ms 7.705 ms 7.702 ms
12 dmzdcg-gw2.example.com (172.16.0.190) 8.126 ms 8.193 ms 11.559 ms
13 dcz05n-gw1.example.com (172.16.2.106) 11.729 ms 11.728 ms 11.939 ms
14 www1.example.com (172.16.4.161) 11.645 ms 7.958 ms 7.936 ms
```

データ インターフェイスを介したルートの追跡

traceroute コマンドを使用します。

traceroute [接続先 (Destination)]

データインターフェイスに DNS サーバを設定する場合、ホストには IPv4/IPv6 アドレスまたは www.example.com のような完全修飾ドメイン名 (FQDN) を指定できます。特定のインターフェイスに DNS サーバが設定されていない場合は、**dig** コマンドを使用して、特定の FQDN の IP アドレスを検索します。例：

```
> traceroute 209.165.200.225
Tracing the route to 209.165.200.225
 1 10.83.194.1 0 msec 10 msec 0 msec
 2 10.83.193.65 0 msec 0 msec 0 msec
 3 10.88.193.101 0 msec 10 msec 0 msec
 4 10.88.193.97 0 msec 0 msec 10 msec
 5 10.88.239.9 0 msec 10 msec 0 msec
 6 10.88.238.65 10 msec 10 msec 0 msec
 7 172.16.7.221 70 msec 70 msec 80 msec
```

```
8 209.165.200.225 70 msec 70 msec 70 msec
```



- (注) タイムアウト、パケット存続時間（TTL）、ノード当たりのパケット数を指定できます。さらに、トレースルートの送信元として使用する IP アドレスまたはインターフェイスも指定できます。CLI で ? を使用すると、使用可能なオプションが表示されます。

デバイスのトレースルートへの表示

デフォルトでは、Threat Defense デバイスは、トレースルートにホップとして表示されません。表示されるようにするには、デバイスを通過するパケットの存続可能時間を減らし、ICMP 到達不能メッセージのレート制限を増やす必要があります。そのためには、必要なサービスポリシー ルールとその他のオプションを設定する FlexConfig オブジェクトを作成する必要があります。

サービス ポリシーとトラフィック クラスの詳細については、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/asa-firepower-services/products-installation-and-configuration-guides-list.html> で入手可能な Cisco ASA シリーズ ファイアウォール コンフィグレーション ガイド [英語] を参照してください。



- (注) 存続可能時間を減らすと、TTL が 1 のパケットはドロップされますが、接続に TTL がもっと長いパケットが含まれている可能性があるという仮定の下に、セッションに対して接続が開かれます。OSPF hello パケットなどの一部のパケットは TTL が 1 で送信されるため、存続可能時間を減らすと予期しない結果が生じることがある点に注意してください。トラフィック クラスを定義する際には、これらの考慮事項に注意してください。

手順

- ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ 2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig オブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。
- ステップ 3 TTL を減らすためのオブジェクトを作成します。
 - a) [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。
 - b) オブジェクトの名前を入力します。例、**Decrement_TTL**。
 - c) [テンプレート (Template)] エディタで、インデントを含む次の行を入力します。

```
icmp unreachable rate-limit 50 burst-size 1
policy-map global_policy
  class class-default
```

```
set connection decrement-ttl
```

- d) [ネゲート テンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

コマンドを有効にするための正しいサブモードに移行するためには、親コマンドを含める必要があるのと同様に、ネゲート テンプレートにもそれらのコマンドを含める必要があります。

ネゲート テンプレートは、（正常に展開後に）FlexConfig ポリシーからこのオブジェクトを削除した場合に適用されます。また、展開に失敗した場合にも（設定を前の状態にリセットするために）適用されます。

したがって、この例では、ネゲート テンプレートは次のようになります。

```
no icmp unreachable rate-limit 50 burst-size 1
policy-map global_policy
  class class-default
    no set connection decrement-ttl
```

- e) [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ステップ 4 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

FlexConfig ポリシー内の選択したオブジェクトのみ展開されます。

- 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。
- [グループ リスト (Group List)] で [+] をクリックします。
- Decrement_TTL オブジェクトを選択し、[OK] をクリックします。

プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。予想していたコマンドが表示されていることを確認します。

- d) [保存 (Save)] をクリックします。

これで、ポリシーを展開できます。

NTP のトラブルシューティング

システムが正常に機能し、イベントおよびその他のデータ ポイントを正確に処理できることは、正確で一貫性のある時間に依存します。少なくとも 1 つ、理想的には 3 つのネットワーク タイム プロトコル (NTP) サーバシステムが、常に信頼できる時刻情報を持っているように設定する必要があります。

デバイスの接続概要図（メイン メニューの [デバイス (Device)] をクリック）に、NTP サーバへの接続の状態が表示されます。ステータスが黄色またはオレンジ色の場合、設定されているサーバへの接続に問題があります。接続の問題が解消されない（一時的な問題ではない）場合は、次の操作を試します。

- まず、[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [NTP] で、少なくとも 3 つの NTP サーバが設定されていることを確認します。必須ではありませんが、少なくとも 3 つの NTP サーバがあると、信頼性が大幅に高くなります。
 - 管理インターフェイスの IP アドレス ([デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [管理インターフェイス (Management Interface)] で定義されている) と NTP サーバ間のネットワーク パスがあることを確認します。
 - 管理インターフェイスゲートウェイがデータインターフェイスで、デフォルトのルートが十分でない場合、[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] で、NTP サーバへのスタティック ルートを設定できます。
 - 明示的な管理インターフェイスゲートウェイを設定する場合、デバイスの CLI にログインし、**ping system** コマンドを使用して、各 NTP サーバへのネットワーク パスがあるかどうかをテストします。
 - デバイスの CLI にログインし、次のコマンドで NTP サーバの状態を確認してください。
 - **show ntp**: このコマンドは、NTP サーバとその可用性に関する基本的な情報を示します。ただし、Device Manager の接続ステータスではその他の情報を使用してステータスを示すため、このコマンドが示す内容や接続ステータス図が示す内容と一致しないことがあります。このコマンドは CLI コンソールから発行することもできます。
 - **system support ntp**: このコマンドには、**show ntp** の出力と、NTP プロトコルで記載される標準 NTP コマンド **ntpq** の出力が含まれています。NTP 同期を確認する必要がある場合は、このコマンドを使用します。
- セクション「Results of 'ntpq -pn」を探してください。たとえば、次のように表示されます。

```
Results of 'ntpq -pn'
remote           : +216.229.0.50
refid            : 129.7.1.66
st              : 2
t               : u
when            : 704
poll            : 1024
reach           : 377
delay           : 90.455
offset          : 2.954
jitter          : 2.473
```

この例では、NTP サーバのアドレスの前の「+」は、潜在的な候補であることを示します。アスタリスク * は、現在の時刻源のピアを示します。

NTP デーモン (NTPD) は、各ピアから取得される 8 つのサンプルのスライディングウィンドウを使用して、1 つのサンプルをピックアップします。その後、クロック選択によって正しいチャイマーと不正なティックが特定されます。次に、NTPD がラウンドトリップ距離を特定します (候補のオフセットをラウンドトリップ遅延の半分以上にすることはできません)。接続の遅延、パケットの損失、またはサーバの問題が発生して 1 つまたはすべての候補が拒否されると、同期中に長い遅延が生じます。また、調整にも非常に長い時間がかかります。クロック規律アルゴリズムによって、

クロック オフセットおよびオシレータ エラーを解決する必要がありますが、これには数時間かかる可能性があります。



- (注) refid が .LOCL. の場合は、ピアが無規律のローカルクロックであることを示します。つまり、時間設定にそのローカルクロックのみを使用します。選択したピアが .LOCL. の場合、Device Manager は NTP 接続を常に黄色（非同期）にマークします。通常、NTP はより適した候補があれば、.LOCL. を選択しません。これが少なくとも 3 台のサーバを設定する必要がある理由です。

管理インターフェイスの DNS のトラブルシューティング

管理インターフェイスで使用する少なくとも 1 つの DNS サーバを設定する必要があります。DNS サーバは、スマートライセンス、データベースの更新（GeoDB、ルール、VDB など）、およびドメイン名を解決する必要があるその他すべてのアクティビティなどのサービスへのクラウド接続のために必要です。

DNS サーバの設定は簡単な作業です。デバイスの初回設定時に、使用する DNS サーバの IP アドレスを入力するだけです。その後、**[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [DNS サーバ (DNS Server)]** ページで設定を変更できます。

ただし、ネットワークの接続性の問題や DNS サーバ自体の問題のために、システムが完全修飾ドメイン名 (FQDN) を解決できないことがあります。システムが DNS サーバを使用できない場合は、問題を特定して解決するために、以下の操作を検討してください。[DNS の一般的な問題のトラブルシューティング \(959 ページ\)](#) も参照してください。

手順

ステップ 1 問題の有無を確認します。

- SSH を使用してデバイスの CLI にログインします。
- ping system www.cisco.com** を入力します。次のような「unknown host」メッセージが表示される場合、システムはドメイン名を解決できていません。ping が成功する場合は、これで終了です。DNS は機能しています。（ping を停止するには、Ctrl+C キーを押します）。

```
> ping system www.cisco.com
ping: unknown host www.cisco.com
```

(注)

system キーワードを **ping** コマンドに含めることが非常に重要です。**system** キーワードを指定すると、管理 IP アドレスから ping が送信されます。このインターフェイスは、管理 DNS サーバを使用する唯一のインターフェイスです。スマートライセンスや更新のためにサーバへのルートが必要なため、www.cisco.com の ping 実行も適切なオプションです。

ステップ2 管理インターフェイスの設定を確認します。

- a) **[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)]** をクリックし、**[管理インターフェイス (Management Interface)]** を編集して、次の点を確認します。変更を加える場合、それらの変更は**[保存 (Save)]** をクリックするとすぐに適用されます。管理アドレスを変更する場合は、再度接続してログインし直す必要があります。

- 管理ネットワークのゲートウェイ IP アドレスが正しいこと。データ インターフェイスをゲートウェイとして使用している場合は、後続の手順でその設定を確認します。
- データインターフェイスをゲートウェイとして使用していない場合は、管理 IP アドレスとサブネットマスク、およびゲートウェイ IP アドレスが同じサブネット上にあることを確認します。

- b) **[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [DNSサーバ (DNS Server)]** をクリックして、正しい DNS サーバが設定されていることを確認します。

ネットワーク エッジにデバイスを展開している場合は、使用できる DNS サーバに関するサービス プロバイダー固有の要件が存在する場合があります。

- c) データインターフェイスをゲートウェイとして使用している場合は、必要なルートがあることを確認します。

0.0.0.0 のデフォルト ルートが必要です。デフォルト ルートのゲートウェイを介して DNS サーバを使用できない場合は、追加のルートが必要になります。次に、2 つの基本的な状況を示します。

- 外部インターフェイスのアドレスを取得するために DHCP を使用していて、**[DHCP を使用してデフォルトルートを取得 (Obtain Default Route using DHCP)]** オプションを選択した場合、デフォルトルートは **Device Manager** には表示されません。SSH から **show route** を入力して、0.0.0.0 のルートがあることを確認します。これは外部インターフェイスのデフォルト設定であるため、発生する可能性が高い状況です。 (**[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)]** に移動して、外部インターフェイスの設定を確認します)。
- 外部インターフェイスで静的 IP アドレスを使用している場合、または DHCP からデフォルト ルートを取得していない場合は、**[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)]** を開きます。デフォルトルートに正しいゲートウェイが使用されていることを確認します。

デフォルトルートから DNS サーバに到達できない場合は、**[ルーティング (Routing)]** ページで DNS サーバへのスタティックルートを定義する必要があります。直接接続ネットワーク (つまり、システムのいずれかのデータインターフェイスに直接接続されているネットワーク) のルートは追加しないでください。システムは、それらのネットワークに自動的にルーティングできるためです。

また、誤ったインターフェイスからサーバにトラフィックを誤導するスタティックルートが存在しないことを確認します。

- d) 展開ボタンに未展開の変更の存在が示されている場合は、ここで展開して、展開が完了するまで待ちます。



- e) **ping system www.cisco.com** を再テストします。問題が解消しない場合は、次の手順に進みます。

ステップ 3 SSH セッションで、**dig www.cisco.com** を入力します。

- **dig** に、DNS サーバから応答を得たことが示されているのに、サーバが名前を検出できない場合、DNS は正しく設定されているものの、使用している DNS サーバに FQDN のアドレスが設定されていないことを意味しています。このエラーは、NXDOMAIN ステータスによって示されます。応答は次のようになります。

```
> dig www.cisco.com

; <<>> DiG 9.11.4 <<>> www.cisco.com
;; global options: +cmd
;; Got answer:
;; ->>HEADER<<- opcode: QUERY, status: NXDOMAIN, id: 43246
;; flags: qr rd ra; QUERY: 1, ANSWER: 0, AUTHORITY: 1, ADDITIONAL: 1

;; OPT PSEUDOSECTION:
; EDNS: version: 0, flags:; udp: 1280
; COOKIE: 78b1c6b2b3ef5b689fc2f65260db9e9b36a7d9fefb301943 (good)
;; QUESTION SECTION:
;www.cisco.com.                IN      A

;; AUTHORITY SECTION:
.                3600     IN      SOA      a.root-servers.net.
nstld.verisign-grs.com. 2021062901 1800 900 604800 86400

;; Query time: 13 msec
;; SERVER: 10.163.47.11#53(10.163.47.11)
;; WHEN: Tue Jun 29 22:28:43 UTC 2021
;; MSG SIZE rcvd: 145
```

解決策：この場合、別の DNS サーバを設定するか、更新した DNS サーバを使用して、解決する必要がある FQDN を解決できるようにします。ネットワーク管理者や ISP と協力して、ネットワークで動作する DNS サーバの IP アドレスを取得します。

- コマンドがタイムアウトする場合、システムが DNS サーバに到達できないか、または現在すべての DNS サーバがダウンしていて応答していません（この可能性は低いです）。次の手順に進みます。

ステップ 4 **traceroute system DNS_server_ip_address** コマンドを使用して、DNS サーバへのルートをトレースします。

たとえば、DNS サーバが 10.100.10.1 の場合は、次のように入力します。

```
> traceroute system 10.100.10.1
```

可能性がある結果を以下に示します。

- トレースルートが完了し、DNS サーバに到達している。この場合、DNS サーバへのルートが実際にあり、システムが到達できます。したがって、ルーティングの問題はありません。ただし、何らかの理由でこのサーバに対する DNS 要求の応答を得られていません。

解決策：パス沿いのルータやファイアウォールで、DNS に使用されるポートである UDP/53 のトラフィックがドロップされている可能性があります。異なるネットワークパスに沿って DNS サーバへのアクセスを試すことができます。これは解決が難しい問題です。トラフィックをブロックしているノードを確認し、システム管理者と協力してアクセスルールを変更する必要があります。

- トレースルートから 1 つのノードにさえ到達できない。これは、次のように表示されます。

```
> traceroute system 10.100.10.1
traceroute to 10.100.10.1 (10.100.10.1), 30 hops max, 60 byte packets
 1  * * *
 2  * * *
 3  * * *
 (and so forth)
```

解決策：この場合、システム内にルーティングの問題があります。ゲートウェイ IP アドレスに対して **ping system** を試行してください。前述の手順に従い、管理インターフェイスの設定を再度確認し、必要なゲートウェイとルートを設定していることを確認します。

- トレースルートは、ルートを解決できなくなる前にいくつかのノードを通過します。これは、次のように表示されます。

```
> traceroute system 10.100.10.1
traceroute to 10.100.10.1 (10.100.10.1), 30 hops max, 60 byte packets
 1  192.168.0.254 (192.168.0.254)  0.475 ms  0.532 ms  0.542 ms
 2  10.88.127.1 (10.88.127.1)  0.803 ms  1.434 ms  1.443 ms
 3  site04-lab-gw1.example.com (10.89.128.25)  1.390 ms  1.399 ms  1.435 ms
 4  * * *
 5  * * *
 6  * * *
```

解決策：この場合、最後のノードでルーティングが中断されています。システム管理者と協力して、そのノードに設定されているルートを修正する必要があります。ただし、意図的にそのノードから DNS サーバへのルートを設定していない場合は、ゲートウェイを変更するか、または独自のスタティック ルートを作成して、トラフィックを DNS サーバにルーティングできるルータを指すようにする必要があります。

CPU およびメモリ使用量の分析

CPU とメモリ使用率についてのシステムレベルの情報を表示するには、**[モニタリング (Monitoring)] > [システム (System)]** を選択して、CPU およびメモリ使用率を表す棒グラフ

フを確認します。これらのグラフには **show cpu system** コマンドと **show memory system** コマンドを使用して CLI で収集した情報が表示されます。

CLI コンソールを開くか CLI にログインして、これらのコマンドの別バージョンを使用すると、他の情報を表示できます。通常、この情報を確認するのは使用状況に関する永続的な問題がある場合や、Cisco Technical Assistance Center (TAC) の指示があった場合に限られます。多くの詳細情報は複雑で、TAC による解釈を必要とします。

以下に、調べることができるいくつかのポイントを示します。これらのコマンドの詳細については、http://www.cisco.com/c/en/us/td/docs/security/firepower/command_ref/b_Command_Reference_for_Firepower_Threat_Defense.html で Cisco Firepower Threat Defense コマンドリファレンスを参照してください。

- **show cpu** はデータプレーンの CPU 使用率を表示します。
- **show cpu core** は、各 CPU コアの使用率を別々に表示します。
- **show cpu detailed** は、追加のコアごと、およびデータプレーン全体の CPU の使用率を表示します。
- **show memory** はデータプレーンのメモリ使用量を表示します。



(注) 一部のキーワード（上記に説明されていない）は、最初に **cpu** または **memory** コマンドを使用して、プロファイリングまたは他の機能を設定する必要があります。これらの機能は、TAC からの指示のもとでのみ使用してください。

ログの表示

システムはさまざまなアクションに関する情報をログに記録します。システムログを開くには **system support view-files** コマンドを使用します。Cisco Technical Assistance Center (TAC) への問い合わせ時にこのコマンドを使用すると、出力を解釈して、適切なログを表示できるようになります。

このコマンドは、ログを選択するためのメニューを表示します。ウィザードを操作するには次のコマンドを使用します。

- サブディレクトリに変更するには、ディレクトリの名前を入力して、**Enter** を押します。
- 表示するファイルを選択するには、プロンプトで **s** と入力します。その後、ファイル名の入力が必要になります。完全な名前を入力する必要があります。大文字と小文字は区別されます。ファイルリストにログのサイズが表示されます。非常に大きいログを開く場合は、十分に検討してください。
- 「--More--」が表示されたら **Space** キーを押してログエントリの次のページを表示します。次のログエントリを表示するには **Enter** キーを押します。ログの最後に到達すると、メインメニューに移動します。「--More--」の行は、ログのサイズと表示した量を示します。

ログのすべてのページを表示する必要がなく、ログを閉じて、コマンドを終了するには、**Ctrl+C** を使用します。

- メニュー構造のレベルを 1 つ上がるには、**b** を入力します。

ログを開いたままにして、新しいメッセージが追加されたときにそのメッセージを確認できるようにするには、**system support view-files** コマンドの代わりに **tail-logs** コマンドを使用します。

次の例は、システムへのログイン試行を追跡する `cisco/audit.log` ファイルがどのように表示されるかを示しています。このファイル リストは、最上位のディレクトリから始まり、現在のディレクトリのファイル リストへと続きます。

```
> system support view-files
```

```
===View Logs===
```

```
=====
```

```
Directory: /ngfw/var/log
```

```
-----sub-dirs-----
```

```
cisco
mojo
removed_packages
setup
connector
sf
scripts
packages
removed_scripts
httpd
```

```
-----files-----
```

```
2016-10-14 18:12:04.514783 | 5371 | SMART_STATUS_sda.log
2016-10-14 18:12:04.524783 | 353 | SMART_STATUS_sdb.log
2016-10-11 21:32:23.848733 | 326517 | action_queue.log
2016-10-06 16:00:56.620019 | 1018 | brl.down.log
```

```
<list abbreviated>
```

```
([b] to go back or [s] to select a file to view, [Ctrl+C] to exit)
Type a sub-dir name to list its contents: cisco
```

```
=====
```

```
Directory: /ngfw/var/log/cisco
```

```
-----files-----
```

```
2017-02-13 22:44:42.394907 | 472 | audit.log
2017-02-13 23:40:30.858198 | 903615 | ev_stats.log.0
2017-02-09 18:14:26.870361 | 0 | ev_stats.log.0.lck
2017-02-13 05:24:00.682601 | 1024338 | ev_stats.log.1
2017-02-12 08:41:00.478103 | 1024338 | ev_stats.log.2
2017-02-11 11:58:00.260805 | 1024218 | ev_stats.log.3
2017-02-09 18:12:13.828607 | 95848 | firstboot.ngfw-onbox.log
2017-02-13 23:40:00.240359 | 6523160 | ngfw-onbox.log
```

```
([b] to go back or [s] to select a file to view, [Ctrl+C] to exit)
Type a sub-dir name to list its contents: s
```

```
Type the name of the file to view ([b] to go back, [Ctrl+C] to exit)
```

```
> audit.log
```

```
2017-02-09 18:59:26 - SubSystem:LOGIN, User:admin, IP:10.24.42.205, Message:Login
```

```

successful,
2017-02-13 17:59:28 - SubSystem:LOGIN, User:admin, IP:10.24.111.72, Message:Login
successful,
2017-02-13 22:44:36 - SubSystem:LOGIN, User:admin, IP:10.24.111.72, Message:Login failed,

2017-02-13 22:44:42 - SubSystem:LOGIN, User:admin, IP:10.24.111.72, Message:Login
successful,
2017-02-13 22:44:42 - SubSystem:LOGIN, User:admin, IP:10.24.111.72, Message:Unlocked
account.,

<remaining log truncated>

```

トラブルシューティング ファイルの作成

問題レポートを提出した際に、Cisco Technical Assistance Center (TAC) の担当者により、システムログ情報の提出を求められることがあります。この情報は、問題の診断に役立ちます。診断ファイルの提出は、求められた場合だけでかまいません。

次の手順では、ログ レベルを設定して診断ファイルを作成する方法について説明します。

手順

ステップ 1 [the name of the device in the menu] をクリックします。[デバイス (Device)]

ステップ 2 [トラブルシューティング (Troubleshooting)] の下で、[ファイルの作成を要求 (Request File to be Created)] または [ファイルの作成を再要求 (Re-Request File to be Created)] (事前に作成していた場合) をクリックします。

システムが診断ファイルの生成を開始します。他のページに移動し、しばらくしてからこのページに戻って状態を確認することができます。ファイルが生成されると、ダウンロードボタンがファイルの作成日時と一緒に表示されます。

ステップ 3 ファイルの生成が完了したら、ダウンロード ボタンをクリックします。

ブラウザの標準的なダウンロード方法を使用して、ファイルがワークステーションにダウンロードされます。

ハードウェア管理のタスク

ここでは、一部のハードウェア メンテナンス タスクの実行方法について説明します。詳細およびここに記されている以外のハードウェア管理タスクについては、対応するハードウェアガイドを参照してください。

ISA 3000 デバイスの交換

ISA 3000 の SD カードは、別の ISA 3000 デバイスとの間でやり取りできます。SD カード上にシステムバックアップを作成すれば、この機能を使用してデバイスを簡単に交換できます。その方法は、障害が発生したデバイスから SD カードを取り出して新しいデバイスに挿入するだけです。その後に、バックアップを使用して復元できます。

必要なバックアップを確実に用意するには、SD カードにバックアップを作成するバックアップジョブを設定します。

Cisco Secure Firewall 3100 での SSD のホットスワップ

SSD が 2 つある場合、起動時に RAID が形成されます。ファイアウォールの電源が入っている状態で Threat Defense CLI で次のタスクを実行できます。

- SSD の 1 つをホットスワップする：SSD に障害がある場合は、交換できます。SSD が 1 つしかない場合、ファイアウォールの電源がオンになっている間 SSD は取り外せません。
- SSD の 1 つを取り外す：SSD が 2 つある場合は、1 つを取り外すことができます。
- 2 つ目の SSD を追加する：SSD が 1 つの場合は、2 つ目の SSD を追加して RAID を形成できます。

**注意**

この手順を使用して、SSD を RAID から削除する前に SSD を取り外さないでください。データが失われる可能性があります。

手順

ステップ 1 SSD の 1 つを取り外します。

- a) SSD を RAID から取り外します。

configure raid remove-secure local-disk {1 | 2}

remove-secure キーワードは SSD を RAID から削除し、自己暗号化ディスク機能を無効にして、SSD を安全に消去します。SSD を RAID から削除するだけでデータをそのまま維持する場合は、**remove** キーワードを使用できます。

例：

```
> configure raid remove-secure local-disk 2
```

- b) SSD がインベントリに表示されなくなるまで、RAID ステータスを監視します。

show raid

SSD が RAID から削除されると、操作性とドライブの状態が劣化として表示されます。2 つ目のドライブは、メンバーディスクとして表示されなくなります。

例：

```
> show raid
Virtual Drive
ID: 1
Size (MB): 858306
Operability: operable
Presence: equipped
Lifecycle: available
Drive State: optimal
Type: raid
Level: raid1
Max Disks: 2
Meta Version: 1.0
Array State: active
Sync Action: idle
Sync Completed: unknown
Degraded: 0
Sync Speed: none

RAID member Disk:
Device Name: nvme0n1
Disk State: in-sync
Disk Slot: 1
Read Errors: 0
Recovery Start: none
Bad Blocks:
Unacknowledged Bad Blocks:

Device Name: nvme1n1
Disk State: in-sync
Disk Slot: 2
Read Errors: 0
Recovery Start: none
Bad Blocks:
Unacknowledged Bad Blocks:

> show raid
Virtual Drive
ID: 1
Size (MB): 858306
Operability: degraded
Presence: equipped
Lifecycle: available
Drive State: degraded
Type: raid
Level: raid1
Max Disks: 2
Meta Version: 1.0
Array State: active
Sync Action: idle
Sync Completed: unknown
Degraded: 1
Sync Speed: none

RAID member Disk:
Device Name: nvme0n1
Disk State: in-sync
Disk Slot: 1
Read Errors: 0
```

```
Recovery Start:          none
Bad Blocks:
Unacknowledged Bad Blocks:
```

- c) SSD をシャーシから物理的に取り外します。

ステップ2 SSD を追加します。

- a) SSD を空のスロットに物理的に追加します。
b) SSD を RAID に追加します。

configure raid add local-disk {1 | 2}

新しい SSD と RAID の同期が完了するまでに数時間かかることがありますが、その間、ファイアウォールは完全に動作します。再起動もでき、電源投入後に同期は続行されます。ステータスを表示するには、**show raid** コマンドを使用します。

以前に別のシステムで使用されており、まだロックされている SSD を取り付ける場合は、次のコマンドを入力します。

configure raid add local-disk {1 | 2} psid

psid は SSD の背面に貼られたラベルに印刷されています。または、システムを再起動し、SSD を再フォーマットして RAID に追加できます。

USB ポートの無効化

デフォルトでは、タイプ A USB ポートは有効になっています。セキュリティ上の理由から、USB ポートへのアクセスを無効にする必要がある場合があります。USB の無効化は、次のモデルでサポートされています。

- Firepower 1000 シリーズ
- Cisco Secure Firewall 3100

ガイドライン

- USB ポートを有効または無効にするには再起動が必要です。
- USB ポートが無効で、この機能をサポートしていないバージョンにダウングレードすると、ポートは無効のままになります。NVRAM を消去（FXOS local-mgmt **erase secure all** コマンド）せずに再度有効にすることはできません。
- ROMMON **factory-reset** または FXOS local-mgmt **erase secure** を実行すると、USB ポートが再度有効になります。
- 高可用性を設定するには、各ユニットでポートを個別に無効にしたり再度有効にしたりする必要があります。



(注) この機能は、USB コンソールポート（存在する場合）には影響しません。

手順

ステップ 1 USB ポートを無効化します。

system support usb configure disable

reboot

USB ポートを再度有効にするには、**system support usb configure enable** と入力します。

例：

```
>system support usb configure disable
USB Port Admin State set to 'disabled'.
Please reboot the system to apply any control state changes.

>reboot
This command will reboot the system. Continue?
Please enter 'YES' or 'NO': YES
```

ステップ 2 ポートステータスを表示します。

system support usb show

[管理ステータス（Admin State）] には、USB ポートの設定が表示されます。[動作ステータス（Oper State）] には、現在の動作が表示されます。たとえば、USB ポートを無効化してリロードしていない場合、[管理ステータス（Admin State）] には無効と表示され、[動作ステータス（Oper State）] は有効になります。

例：

```
>system support usb show
USB Port Info
-----
Admin State: disabled
Oper State: disabled
```



付録 A

詳細設定

いくつかのデバイスの機能は、ASA 設定コマンドを使用して設定されます。Device Manager はコマンドベースの多くの機能を設定できますが、それらのすべてはサポートしません。Device Manager でサポートされていないこれらの ASA 機能の一部を使用する必要がある場合は、Smart CLI または FlexConfig を使用して手動で機能を設定できます。

次のトピックでは、このタイプの高度な設定について、より詳細に説明します。

- [Smart CLI と FlexConfig について \(1039 ページ\)](#)
- [Smart CLI および FlexConfig に関する注意事項と制限事項 \(1050 ページ\)](#)
- [Smart CLI オブジェクトの設定 \(1050 ページ\)](#)
- [FlexConfig ポリシーの設定 \(1052 ページ\)](#)
- [FlexConfig ポリシーのトラブルシューティング \(1067 ページ\)](#)
- [FlexConfig の例 \(1068 ページ\)](#)

Smart CLI と FlexConfig について

Threat Defense では、ASA 設定コマンドを使用して、すべての機能ではなく一部の機能を実装します。脅威に対する防御 設定コマンドの一意のセットはありません。

次の方法により CLI を使用して機能を設定できます。

- **Smart CLI** : (推奨の方法です。) Smart CLI テンプレートは、特定の機能の定義済みのテンプレートです。機能に必要なすべてのコマンドが提供されているため、変数の値を選択するだけで済みます。システムにより選択が検証されるため、機能を正しく設定できる可能性が高まります。目的の機能の Smart CLI テンプレートが存在する場合は、この方法を使用する必要があります。
- **FlexConfig** : FlexConfig ポリシーは、FlexConfig オブジェクトのコレクションです。FlexConfig オブジェクトは Smart CLI テンプレートより自由な形式であり、システムに CLI 変数はなく、データ検証も行われません。有効な一連のコマンドを作成するには、ASA 設定コマンドを知り、ASA 設定ガイドに従う必要があります。

Smart CLI と FlexConfig のポイントは、Device Manager のポリシーと設定によって直接サポートされていない機能を設定できることです。



注意 シスコでは、ASA の強力なバックグラウンドを持つ上級者が自身のリスクで行う場合にのみ、Smart CLI と FlexConfig を使用することを強く推奨します。禁止されていないコマンドはすべて、設定できます。Smart CLI と FlexConfig を使用して機能を有効にすると、その他の設定済みの機能で予期しない結果が生じる可能性があります。

設定した Smart CLI と FlexConfig のオブジェクトに関するサポートについては、Cisco Technical Assistance Center にお問い合わせください。Cisco Technical Assistance Center は、顧客に代わってカスタム設定を設計したり、作成したりしません。正常な動作や他の脅威に対する防御機能の相互運用性について、シスコは一切保証しません。Smart CLI と FlexConfig の機能は、いつでも廃止になる可能性があります。完全に保証された機能のサポートについては、Device Manager サポートを待つ必要があります。疑問がある場合、Smart CLI または FlexConfig は使用しないでください。

ここでは、これらの機能についてさらに詳しく説明します。

Smart CLI と FlexConfig の推奨される使用法

FlexConfig ポリシーには、推奨される使用法が主に 2 つあります。

- ASA から脅威に対する防御に移行中で、互換性はあるが、Device Manager が直接サポートしていない機能を使用しています（および使用を継続する必要があります）。この場合、ASA で **show running-config** コマンドを使用して、その機能の設定を参照し、実装するための FlexConfig オブジェクトを作成します。2 つのデバイスで、**show running-config** の出力を比較して確認します。
- 脅威に対する防御を使用しているが、ある設定または機能を設定する必要があります。たとえば、Cisco Technical Assistance Center が、発生している特定の問題が特定の設定により解決されると伝えます。複雑な機能については、ラボ デバイスを使用して FlexConfig をテストし、期待する動作を得られることを確認します。

ASA 設定を再作成する前に、まず標準的なポリシーで同等の機能を設定できるかどうかを判断します。たとえば、アクセスコントロールポリシーには侵入検知および防御、HTTP およびその他のタイプのプロトコルインスペクション、URL フィルタリング、アプリケーション フィルタリング、アクセス制御が含まれており、ASA はこれらの要素を別個の機能を使用して実装します。多くの機能は CLI コマンドを使用して設定されていないので、**show running-config** の出力にすべてのポリシーが表示されるわけではありません。



(注) 常に、ASA と脅威に対する防御 との間の重複は 1 対 1 であるわけではないことに注意してください。ASA の設定を脅威に対する防御 デバイス上で完全に再現しようとししないでください。FlexConfig を使用して設定した機能は慎重にテストする必要があります。

Smart CLI および FlexConfig オブジェクトの CLI コマンド

脅威に対する防御 では一部の機能の設定に ASA コンフィギュレーション コマンドを使用します。ASA のすべての機能に 脅威に対する防御 との互換性があるわけではありませんが、脅威に対する防御 で使用はできるが Device Manager ポリシーでは設定できない機能があります。Smart CLI および FlexConfig オブジェクトを使用すると、これらの機能を設定するために必要な CLI を指定できます。

Smart CLI または FlexConfig を使用して機能を手動で設定することに決めた場合、適切な構文を認識し、これに従ってコマンドを実装する必要があります。FlexConfig は CLI コマンド構文を検証しません。適切な構文と CLI コマンドの設定の詳細については、ASA ドキュメントを参照してください。

- 『ASA CLI Configuration Guides』では機能を設定する方法について説明しています。ガイドはこちらからご覧ください。 <http://www.cisco.com/c/en/us/support/security/asa-5500-series-next-generation-firewalls/products-installation-and-configuration-guides-list.html>
- 『ASA Command References』ではコマンド名ごとにその他の情報が記載されています。リファレンスはこちらからご覧ください。 <http://www.cisco.com/c/en/us/support/security/asa-5500-series-next-generation-firewalls/products-command-reference-list.html>

ここでは、設定コマンドについて詳しく説明します。

ソフトウェアのアップグレードが FlexConfig ポリシーに与える影響

新しいバージョンの 脅威に対する防御 ソフトウェアにはそれぞれ、Device Manager の機能を設定するためのサポートが追加されています。これらの新機能は、FlexConfig を使用して以前に設定した機能と重複する場合があります。

アップグレードの後に、FlexConfig ポリシーおよびオブジェクトを調べる必要があります。Device Manager または Smart CLI 内の追加されたサポートのために禁止されたコマンドがある場合は、オブジェクトのアイコンとメッセージに問題が示されます。その場合は、設定をやりなおしてください。禁止されたコマンドのリストは、コマンドをどのように設定する必要があるのかを判断するために役立ちます。

FlexConfig ポリシーに添付されている FlexConfig オブジェクトに新しく禁止されたコマンドが含まれていても、システムは変更の展開を妨げません。ただし、FlexConfig ポリシーに示されているすべての問題を解決するまでは、新しい Smart CLI オブジェクトを作成できません。

FlexConfig ポリシーから問題のあるオブジェクトを単に削除できます。これは、デバイス設定にアクティブに展開しているオブジェクトにのみ制限が適用されるためです。そのため、オブジェクトを削除してから、それらを、対応する Smart CLI または統合された Device Manager 設定を作成する際にリファレンスとして使用できます。新しい設定に不満がない場合は、単にオブジェクトを削除できます。削除されたオブジェクトに、禁止されていない要素が含まれている場合は、それらを編集してサポートされていないコマンドを削除してから、オブジェクトを FlexConfig ポリシーに再添付できます。

ASA ソフトウェア バージョンと現在の CLI 設定の決定

システムでは、いくつかの機能の設定に ASA ソフトウェア コマンドを使用するため、脅威に対する防御 デバイスで実行されているソフトウェアで使用する現在の ASA バージョンを決定する必要があります。このバージョン番号は、機能を設定する手順について利用する ASA CLI 設定ガイドを示します。また、CLI ベースの現在の設定をチェックし、実装する ASA 設定と比較する必要があります。

脅威に対する防御 設定とどの ASA 設定も大きく異なることに注意してください。多数の脅威に対する防御 ポリシーは CLI の外で設定されるため、コマンドを見て設定を確認することはできません。ASA と 脅威に対する防御 の設定の間に 1 対 1 の対応を作成しようとはしないでください。

この情報を表示するには、Device Manager の CLI コンソールを開くか、デバイスの管理インターフェイスに SSH 接続し、次のコマンドを発行します。

- **show version system** また、Cisco 適応型セキュリティ アプライアンス ソフトウェアのバージョン番号を検索します。
- **show running-config** : 現在の CLI 設定を表示します。
- **show running-config all** : 現在の CLI 設定にすべてのデフォルト コマンドを含めます。

禁止された CLI コマンド

Smart CLI と FlexConfig の目的は、Device Manager を使用して 脅威に対する防御 デバイスで設定できない ASA デバイスで利用可能な機能を設定することです。

したがって、Device Manager に同等の機能がある ASA 機能は設定することができません。次の表は、これらの禁止されたコマンド領域を示します。このリストには、設定モードを開始する多数の親コマンドが含まれています。親の禁止には、子コマンドの禁止が含まれています。また、コマンドの **no** バージョンと、関連する **clear** コマンドも含まれます。

FlexConfig オブジェクトエディタでは、オブジェクトにこれらのコマンドを含めることができません。Smart CLI テンプレートは、設定可能なコマンドのみが含まれるため、このリストが適用されません。

禁止されたCLIコマンド	コメント
aaa	[オブジェクト (Objects)]>[アイデンティティソース (Identity Sources)] を使用します。
aaa-server	[オブジェクト (Objects)]>[アイデンティティソース (Identity Sources)] を使用します。

禁止されたCLIコマンド	コメント
access-list	部分的にブロックされます。 • ethertype アクセスリストは作成できます。 • extended および standard アクセスリストは作成できません。Smart CLI 拡張アクセス リストまたは標準アクセス リストオブジェクトを使用してこれらの ACL を作成します。その後、それらは、サービスポリシー トラフィック クラス用の拡張 ACL により、オブジェクト名によって ACL を参照する FlexConfig サポートコマンド (match access-list など) で使用できます。 • advanced アクセスリスト (システムが access-group コマンドで使用する) は作成できません。代わりに、[ポリシー (Policies)] > [アクセスコントロール (Access Control)] を使用してアクセス ルールを設定します。 • webtype アクセスリストは作成できません。
anyconnect-custom-data	[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] を使用して セキュアクライアント を設定します。
asdm	この機能は 脅威に対する防御 システムには適用されません。
as-path	Smart CLI AS パス オブジェクトを作成し、それらを Smart CLI BGP オブジェクトで使用して、自律システム パス フィルタを設定します。
attribute	—
auth-prompt	この機能は 脅威に対する防御 システムには適用されません。
boot	—
call-home	—
captive-portal	[ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] を使用して、アクティブな認証に使用するキャプティブ ポータルを設定します。
clear	—
client-update	—
clock	[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [NTP] を使用してシステム時間を設定します。
cluster	—

禁止されたCLIコマンド	コメント
command-alias	—
community-list	Smart CLI 拡張コミュニティ リストまたは標準コミュニティ リスト オブジェクトを作成し、それらを Smart CLI BGP オブジェクトで使用して、コミュニティリストフィルタを設定します。
compression	—
configure	—
crypto	[オブジェクト]ページで、[証明書]、[IKEポリシー]、および [IPSecプロポーザル]を使用します。
ddns	[デバイス]>[システム設定]>[DDNSサービス]を使用して、ダイナミックDNSを設定します。
dhcp-client	—
dhcpd	[デバイス (Device)]>[システム設定 (System Settings)]>[DHCPサーバ (DHCP Server)]を使用します。 ただし、 dhcpd option コマンドは許可されます。
dhcprelay	代わりに、脅威防御 API の dhcprelayservices リソースを使用します。
dns	[オブジェクト (Objects)]>[DNS グループ (DNS Groups)]を使用して DNS グループを設定し、[デバイス (Device)]>[システム設定 (System Settings)]>[DNS サーバ (DNS Server)]を使用してグループを割り当てます。
dns-group	[オブジェクト (Objects)]>[DNS グループ (DNS Groups)]を使用して DNS グループを設定し、[デバイス (Device)]>[システム設定 (System Settings)]>[DNS サーバ (DNS Server)]を使用してグループを割り当てます。
domain-name	[オブジェクト (Objects)]>[DNS グループ (DNS Groups)]を使用して DNS グループを設定し、[デバイス (Device)]>[システム設定 (System Settings)]>[DNS サーバ (DNS Server)]を使用してグループを割り当てます。
dynamic-access-policy-config	—
dynamic-access-policy-record	—
enable	—
event	—

禁止されたCLIコマンド	コメント
failover	—
fips	—
firewall	Device Manager はルーテッドファイアウォールモードのみをサポートしています。
hostname	[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [ホスト名 (Hostname)] を使用します。
hpm	この機能は脅威に対する防御 システムには適用されません。
http	[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [管理アクセス (Management Access)] で [データインターフェイス (Data Interfaces)] タブを使用します。
inline-set	—
interface (BVI、管理、イーサネット、GigabitEthernet、およびサブインターフェイス用)	部分的にブロックされます。 [デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] ページで物理インターフェイス、サブインターフェイス、およびブリッジ仮想インターフェイスを設定します。FlexConfig を使用して追加のオプションを設定できます。 ただし、次の interface モードコマンドは、これらのタイプのインターフェイスでは禁止されています。 cts ip address ip address dhcp ipv6 address ipv6 enable ipv6 nd dad ipv6 nd suppress-ra mode nameif security-level shutdown zone-member
vni、redundant、tunnel の interface	[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] ページでインターフェイスを設定します。Device Manager は、これらのタイプのインターフェイスをサポートしていません。
ip audit	この機能は脅威に対する防御 システムには適用されません。代わりに、アクセス制御ルールを使用して侵入ポリシーを適用します。

禁止されたCLIコマンド	コメント
ip-client	管理ゲートウェイとしてデータ インターフェイスを使用するようシステムを設定するには、[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [管理インターフェイス (Management Interface)] を使用します。
ip local pool	[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] を使用してアドレス プールを設定します。
ipsec	—
ipv6	Smart CLI IPv6プレフィックスリストオブジェクトを作成し、それらをSmart CLI BGPオブジェクトで使用して、IPv6のプレフィックスリストフィルタを設定します。
ipv6-vpn-addr-assign	[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] を使用してアドレス プールを設定します。
isakmp	[デバイス (Device)] > [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] を使用します。
jumbo-frame	デフォルトの 1500 以上のインターフェイスの MTU を増やす場合、システムは自動的にジャンボ フレームのサポートを有効にします。
ldap	—
license-server	[デバイス (Device)] > [スマートライセンス (Smart License)] を使用します。
logging	[オブジェクト] > [Syslogサーバ]および[デバイス] > [システム設定] > [ロギング設定]を使用します。 ただし、FlexConfigで logging history コマンドを設定できます。
management-access	—
migrate	[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] および [デバイス (Device)] > [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] を使用して IKEv2 サポートを有効にします。
mode	Device Manager はシングルコンテキストモードのみをサポートしています。
mount	—
mtu	[デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] でインターフェイスごとに MTU を設定します。

禁止されたCLIコマンド	コメント
nat	[ポリシー (Policies)] > [NAT] を使用します。
ngips	—
ntp	[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [NTP] を使用します。
object-group network object network	[オブジェクト (Objects)] > [ネットワーク (Network)] を使用します。 FlexConfig でネットワーク オブジェクトまたはグループを作成することはできませんが、テンプレート内で変数としてオブジェクト マネージャで定義されているネットワーク オブジェクトおよびグループは使用できます。
object service natorigsvc object service natmappedsvc	object service コマンドは一般に使用できますが、 natorigsvc または natmappedsvc という内部オブジェクトは編集できません。これらの名前の垂直バーは意図的であり、制限されているオブジェクト名の最初の文字です。
passwd password	—
password-policy	—
policy-list	スマート CLI ポリシー リスト オブジェクトを作成し、それらをスマート CLI BGP オブジェクトで使用して、ポリシー リストを設定します。
policy-map sub-commands	ポリシー マップでは次のコマンドを設定できません。 priority police match tunnel-group
prefix-list	Smart CLI IPv4 プレフィックス リスト オブジェクトを作成し、それらを Smart CLI OSPF または BGP オブジェクトで使用して、IPv4 のプレフィックス リスト フィルタを設定します。
priority-queue	—
privilege	—
reload	リロードはスケジュールできません。システムは、システムを再起動するために reload コマンドを使用せず、 reboot コマンドを使用します。
rest-api	この機能は脅威に対する防御 システムには適用されません。REST API は常にインストールされ、有効になります。

禁止されたCLIコマンド	コメント
route	[デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] を使用してスタティック ルートを設定します。
route-map	スマート CLI ルート マップ オブジェクトを作成し、それらをスマート CLI OSPF オブジェクトまたはスマート CLI BGP オブジェクトで使用して、ルート マップを設定します。
router bgp	BGP には Smart CLI テンプレートを使用します。
router eigrp	EIGRP にはスマート CLI テンプレートを使用します。
router ospf	OSPF には Smart CLI テンプレートを使用します。
scansafe	この機能は脅威に対する防御 システムには適用されません。代わりに、アクセス制御ルールでURLフィルタリングを設定します。
setup	この機能は脅威に対する防御 システムには適用されません。
sla	—
snmp-server	SNMP を設定するには、FTP API SNMP リソースを使用します。 ただし、API を使用して構成することができない enable oid mempool などのパラメータは、構成または無効化することができます。
ssh	[デバイス (Device)] > [システム設定 (System Settings)] > [管理アクセス (Management Access)] で[データインターフェイス (Data Interfaces)] タブを使用します。
ssl	[デバイス] > [システム設定] > [SSL設定]を使用します。
telnet	Threat Defense はTelnet接続をサポートしません。デバイス CLI にアクセスするには、Telnet の代わりに SSH を使用します。
time-range	—
tunnel-group	[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] および [デバイス (Device)] > [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] を使用します。
tunnel-group-map	[デバイス (Device)] > [リモートアクセスVPN (Remote Access VPN)] および [デバイス (Device)] > [サイト間VPN (Site-to-Site VPN)] を使用します。
user-identity	[ポリシー (Policies)] > [アイデンティティ (Identity)] を使用します。

禁止されたCLIコマンド	コメント
username	CLI ユーザを作成するには、デバイスに対して SSH またはコンソールセッションを開き、 configure user コマンドを使用します。
vpdn	—
vpn	—
vpn-addr-assign	—
vpnclient	—
vpn-sessiondb	—
vpnsetup	—
webvpn	—
zone	—
zonelabs-integrity	この機能は脅威に対する防御 システムには適用されません。

Smart CLI テンプレート

次の表では、機能に基づく Smart CLI テンプレートについて説明します。



- (注) スマート CLI テンプレートを使用して OSPF と BGP を設定することもできます。ただし、これらのテンプレートは、[詳細設定 (Advanced)] ページではなく [デバイス (Device)] > [ルーティング (Routing)] ページから使用できます。

機能	テンプレート	説明
オブジェクト : AS パス	AS パス	ルーティング プロトコル オブジェクトで使用する AS パス オブジェクトを作成します。
オブジェクト : アクセス リスト	拡張アクセス リスト 標準アクセス リスト	ルーティング オブジェクトで使用する拡張 ACL または標準 ACL を作成します。ACL を使用する許可コマンドを設定する FlexConfig オブジェクトからの名前によって、これらのオブジェクトを参照することもできます。
オブジェクト : コミュニティ リスト	拡張コミュニティ リスト 標準コミュニティ リスト	ルーティング オブジェクトで使用する拡張コミュニティ リストまたは標準コミュニティ リストを作成します。

機能	テンプレート	説明
オブジェクト：プレフィックス リスト	IPv4 プレフィックス リスト IPv6 プレフィックス リスト	ルーティングオブジェクトで使用する IPv4 または IPv6 プレフィックス リストを作成します。
オブジェクト：ポリシー リスト	ポリシー リスト	ルーティングオブジェクトで使用するポリシー リストを作成します。
オブジェクト：ルート マップ	ルートマップ	ルーティングオブジェクトで使用するルート マップを作成します。

Smart CLI および FlexConfig に関する注意事項と制限事項

Smart CLI または FlexConfig を介して機能を設定するときは、次の点に注意してください。

- FlexConfig オブジェクトで定義されているコマンドは、Smart CLI を含む Device Manager で定義された機能のすべてのコマンドの後に展開されます。したがって、デバイスに対してこれらのコマンドが発行される前に設定されているオブジェクト、インターフェイスなどに依存する場合があります。Smart CLI テンプレートで FlexConfig が展開された項目を使用する必要がある場合は、Smart CLI テンプレートを作成して展開する前に FlexConfig を作成して展開します。たとえば、OSPF Smart CLI テンプレートを使用して EIGRP ルートを再配布する場合は、最初に FlexConfig を使用して EIGRP を設定し、それから OSPF Smart CLI テンプレートを作成します。
- FlexConfig から設定した機能または機能の一部を削除するが、Smart CLI テンプレートがその機能を参照している場合は、最初に機能を使用する Smart CLI テンプレートでコマンドを削除する必要があります。その後、Smart CLI で設定された機能が参照しないように設定を展開します。FlexConfig から機能を削除して設定を再展開すると、最終的に完全削除することができます。

Smart CLI オブジェクトの設定

Smart CLI オブジェクトは、Device Manager の他では構成することができない機能を定義します。Smart CLI オブジェクトは、機能の構成において一定レベルのガイダンスを提供します。指定された機能（テンプレート）について、すべての可能なコマンドが事前に読み込まれ、入力した変数が検証されます。したがって、機能を構成するために CLI コマンドを使用しても、Smart CLI オブジェクトは FlexConfig オブジェクトほど自由な形式ではありません。

Smart CLI テンプレートは一定レベルのガイダンスを提供しますが、ネットワークで正しく動作するように値を選択するために ASA 構成ガイドとコマンドリファレンスを読み、コマンドの使用方法を理解する必要があります。理想的には、動作する ASA 構成はすでにあり、必要とされるのは Smart CLI オブジェクトでコマンドの同じシーケンスを構築することだけです。

Smart CLI オブジェクトは、機能エリアによってグループ化されます。



- (注) 定義したすべての Smart CLI オブジェクトが展開されます。FlexConfig とは異なり、いくつかの Smart CLI オブジェクトを作成し、その中から選択して展開することはできません。構成する機能に対してのみ Smart CLI オブジェクトを作成します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 詳細設定の目次で [スマート CLI (Smart CLI)] の下の該当する機能のエリアをクリックします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

オブジェクトを削除するには、そのオブジェクトのごみ箱アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 4 オブジェクトの名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 5 構成する機能の [CLI テンプレート (CLI Template)] を選択します。

システムはコマンドテンプレートを [テンプレート (Template)] ウィンドウに読み込みます。最初に必要なコマンドのみが表示されます。これらはテンプレートに必要な最小構成を表します。

ステップ 6 変数を入力し、必要に応じてテンプレートにコマンドを追加します。

理想的には、ASA または Threat Defense デバイス (Management Center によって管理されているもの) から既存の構成を使用して作業します。所有している構成では、単にネットワーク内のこの特定のデバイスの場所に応じて IP アドレス、インターフェイス名などの変数を変更して、テンプレートをそれに適合させる必要があります。

テンプレートへの入力に関するいくつかのヒントを次に示します。

- 変数の値を選択するには、変数のいずれかをクリックして適切な値を入力するか、リストから選択します (値が列挙されている場合)。入力を必要とする変数をマウスオーバーすると、数値の範囲など、オプションの有効な値が表示されます。一部のケースでは推奨値が記載されています。

たとえば、OSPF のテンプレートでは、必要なコマンドの **router ospf process-id** をマウスオーバーすると「Process ID (1-65535)」と表示され、**process-id** をクリックするとフィールドが強調表示されます。単に希望の数値を入力します。

- 変数のオプションを選択するときに、オプションを構成するために使用できる追加のコマンドがある場合、それらが自動的に公開され必要に応じて有効または無効になります。これらの追加のコマンドを確認します。
- テンプレート上の [表示 (Show)] / [無効を非表示 (Hide Disabled)] リンクを使用してビューを制御します。無効なコマンドは構成されませんが、それらを表示して構成する必要があります。完全なテンプレートを表示するには、テンプレート上の [無効を表示 (Show Disabled)] リンクをクリックします。構成されるコマンドのみを表示するには、テーブルの上の [無効を非表示 (Hide Disabled)] リンクをクリックします。
- オブジェクトを最後に保存して以降のすべての編集をクリアするには、テンプレートの上の [リセット (Reset)] リンクをクリックします。
- オプションのコマンドを有効にするには、行番号の左側にある [+] のボタンをクリックします。
- オプションのコマンドを無効にするには、行番号の左側にある [-] のボタンをクリックします。行を編集した場合、編集内容は削除されません。
- コマンドを複製するには、[オプション... (Options...)] ボタンをクリックして [複製 (Duplicate)] を選択します。コマンドを複数回入力することが有効な場合にのみ、コマンドを複製できます。
- 複製したコマンドを削除するには、[オプション... (Options...)] ボタンをクリックして [削除 (Delete)] を選択します。ベース テンプレートの一部であるコマンドは削除できません。

ステップ 7 [OK] をクリックします。

FlexConfig ポリシーの設定

FlexConfig ポリシーは単にデバイスの構成に展開する FlexConfig オブジェクトのリストです。ポリシーに含まれるこれらのオブジェクトのみが展開され、他はすべてが単に定義されるだけで使用されません。

FlexConfig オブジェクトで定義されているコマンドは、Smart CLI を含む Device Manager で定義された機能のすべてのコマンドの後に展開されます。したがって、デバイスに対してこれらのコマンドが発行される前に設定されているオブジェクト、インターフェイスなどに依存する場合があります。Smart CLI テンプレートで FlexConfig が展開された項目を使用する必要がある場合は、Smart CLI テンプレートを作成して展開する前に FlexConfig を作成して展開します。たとえば、OSPF Smart CLI テンプレートを使用して EIGRP ルートを再配布する場合は、最初に FlexConfig を使用して EIGRP を設定し、それから OSPF Smart CLI テンプレートを作成します。



- (注) 機能の Smart CLI テンプレートがある場合、FlexConfig を使用してそれを構成できません。Smart CLI オブジェクトを使用する必要があります。

始める前に

FlexConfig オブジェクトを作成します。次の項を参照してください。

- [FlexConfig オブジェクトの設定 \(1054 ページ\)](#)
- [FlexConfig オブジェクトの変数の作成 \(1056 ページ\)](#)
- [秘密キー オブジェクトの設定 \(1066 ページ\)](#)

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。

ステップ 3 [グループリスト (Group List)] 内のオブジェクトのリストを管理します。

- オブジェクトを追加するには、[+] ボタンをクリックします。オブジェクトがまだ存在しない場合は、[新規 FlexConfig オブジェクトを作成 (Create New FlexConfig Object)] をクリックして定義します。
- オブジェクトを削除するには、オブジェクトエントリの右側にある [X] ボタンをクリックします。

(注)

各オブジェクトは完全に自己完結型で、他の FlexConfig オブジェクトで定義されている構成に依存しないことをお勧めします。これにより、他のオブジェクトに影響を与えずにオブジェクトを追加または削除できます。

ステップ 4 [プレビュー (Preview)] ペインで提案されたコマンドを評価します。

[展開 (Expand)] ボタン (その後 [折りたたむ (Collapse)]) をクリックすると画面を拡大できます。これにより長いコマンドがより見やすくなります。

プレビューは、変数を評価し、発行される正確なコマンドを生成します。これらのコマンドが正しく有効なことを確認します。コマンドがエラーを生じたり、デバイスが使用できなくなる不適切な構成でないことを確保する責任があります。

注意

システムはコマンドを検証しません。無効なコマンドや、破壊の可能性があるコマンドも展開が可能です。変更を展開する前に慎重にプレビューを確認します。

ステップ 5 [保存 (Save)] をクリックします。

次のタスク

FlexConfig ポリシーを編集した後は、次の展開の結果を慎重に調べてください。エラーがある場合は、オブジェクトの CLI を修正します。「[FlexConfig ポリシーのトラブルシューティング \(1067 ページ\)](#)」を参照してください。

FlexConfig オブジェクトの設定

FlexConfig オブジェクトには、別の方法では Device Manager を使用して設定できない特定の機能を設定するために必要な ASA コマンドが含まれます。コマンドのシーケンスは、入力ミスなく正しく入力する必要があります。システムは、FlexConfig オブジェクトの内容を検証しません。

設定する一般的な機能ごとに別のオブジェクトを作成することをお勧めします。たとえば、バナーを定義し、RIP ルーティング プロトコルも設定する場合は、2 つの独立したオブジェクトを使用します。機能を別のオブジェクトに分離すると、展開するオブジェクトの選択が容易になり、またトラブルシューティングも容易になります。



(注) **enable** および **configure terminal** コマンドは含めないでください。システムは、自動的にコンフィギュレーション コマンドに適切なモードに入ります。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfig オブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。

ステップ 3 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔧) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 4 オブジェクトの名前、さらにオプションで説明を入力します。

ステップ 5 [変数 (Variables)] セクションで、オブジェクト本文内で使用する変数を作成します。

作成する必要がある唯一の変数は **Device Manager** 内で定義されているオブジェクトを指すもので、具体的にはネットワーク、ポート、および秘密キーの変数の型、または名前付きインターフェイスを指すインターフェイス変数です。他の変数の型では、単にオブジェクト本文に値を入力できます。

変数の作成と使用の詳細については、[FlexConfig オブジェクトの変数の作成 \(1056 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 6 [テンプレート (Template)] セクションに、機能を設定するために必要な ASA コマンドを入力します。

機能を設定するために正しい順序でコマンドを入力する必要があります。ASA CLI 構成ガイドを使用して、コマンドを入力する方法を学習します。理想的には、ASA または参照として使用できる別の脅威に対する防御 デバイスから事前テスト済みの構成ファイルを取得します。

変数を参照および処理するために Mustache 表記を使用することもできます。詳細については、[FlexConfig 変数の参照と値の取得 \(1058 ページ\)](#) を参照してください。

オブジェクト本文を作成するためのいくつかのヒントを次に示します。

- 行を追加するには、行の末尾にカーソルを置いて、**Enter** キーを押します。
- 変数を使用するには、二重括弧に間に変数名を入力します：{{変数名}}。オブジェクトを参照する変数では、取得する値の属性を含める必要があります：{{変数名.属性}}。使用可能な属性は、オブジェクトタイプによって異なります。詳細については、[変数参照：{{変数}} または {{変数}}](#) (1058 ページ) を参照してください。
- **Smart CLI** オブジェクトを使用するには、オブジェクト名を入力します。**Smart CLI** に設定されているルーティング プロセスを参照する必要がある場合は、プロセス ID を入力します。[FlexConfig オブジェクト内の Smart CLI オブジェクトの参照 \(1064 ページ\)](#) を参照してください。
- テンプレート本体の上の [展開する/折りたたむ (Expand/Collapse)] リンクをクリックして、本体を大きくまたは小さくします。
- [リセット (Reset)] リンクをクリックして、オブジェクトを最後に保存した後に行ったすべての変更を消去します。

ステップ 7 [ネゲートテンプレート (Negate Template)] セクションに、オブジェクト本体で設定したコマンドを削除または入れ替えるために必要なコマンドを入力します。

ネゲート セクションは非常に重要であり、2 つの目的を果たします。

- 展開を簡単にします。本体でコマンドを再展開する前に、最初に設定を消去したり元に戻すためにこれらのコマンドを使用します。これにより正常に展開されます。
- **FlexConfig** ポリシーからオブジェクトを削除することによって機能を削除する場合、システムはデバイスからコマンドを削除するためにこれらのコマンドを使用します。

オブジェクト本体内で CLI をネゲートまたは入れ替えるために必要なコマンドを指定しない場合、展開ではデバイス全体の構成をクリアし、オブジェクト内のコマンドだけでなく、すべてのポリシーを再展開する必要があります。これにより展開にかかる時間が長くなり、またト

ラフィックが中断されます。オブジェクト本体で定義されている構成を元に戻すために必要なこれらのコマンドがすべてあり、これだけであることを確認します。**negate** コマンドは通常、テンプレートで **no** 形式または **clear** 形式のコマンドになりますが、有効だった機能を実際にオフする場合、「**negate**」コマンドは実際には機能を有効にする正形式のコマンドになります。

ASA 構成ガイドとコマンドリファレンスを使用して、適切なコマンドを判断します。場合によっては、単一のコマンドで設定を元に戻すことができます。たとえば、**RIP** を構成するオブジェクトでは、単純な **no router rip** コマンドで、サブコマンドを含めた **router rip** 構成全体を削除します。

同様に、複数行のバナーを作成するために **banner login** コマンドをいくつかを入力した場合、単一の **no banner login** コマンドでログインバナー全体が無効になります。

テンプレートで複数のネストされたオブジェクトを作成する場合、ネゲートテンプレートでは逆の順番でオブジェクトを削除する必要があります（つまり、オブジェクトを削除する前にオブジェクトへの参照を最初に削除します）。たとえば、まず **ACL** を作成して、トラフィッククラスで **ACL** を参照し、ポリシーマップでトラフィッククラスを参照し、最後にサービスポリシーを使用してポリシーマップを有効にする場合、ネゲートテンプレートではまずサービスポリシーを削除してからポリシーマップ、トラフィッククラス、最後に **ACL** の順で削除して、設定を元に戻す必要があります。

ステップ 8 [OK] をクリックします。

次のタスク

単に FlexConfig オブジェクトを作成するだけでは、それを展開するのには十分ではありません。オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加する必要があります。FlexConfig ポリシー内のこれらのオブジェクトのみ展開されます。これにより FlexConfig オブジェクトの改善が可能になり、すべてが自動的に展開されるのではなくいくつかは特別な用途のために利用可能になります。「[FlexConfig ポリシーの設定 \(1052 ページ\)](#)」を参照してください。

FlexConfig オブジェクトの変数の作成

FlexConfig オブジェクト内部で使用する変数は、オブジェクト自体の内部で定義されます。変数の個別のリストはありません。したがって、変数を定義して個別の FlexConfig オブジェクト内で使用することはできません。

変数はこれらの主な利点を提供します。

- **Device Manager** を使用して定義されているオブジェクトを指し示すことを可能にします。これには、ネットワーク、ポート、および秘密鍵オブジェクトが含まれます。
- これらは変更する可能性がある値をオブジェクト本体から分離します。したがって、値を変更する場合は単に変数を編集します。オブジェクト本体を編集する必要はありません。これは、いくつかのコマンドライン内のオブジェクトを参照する必要がある場合に特に便利です。

この手順では、FlexConfig オブジェクトに変数を追加するプロセスについて説明します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] ページから FlexConfig オブジェクトを編集または作成します。

「[FlexConfig オブジェクトの設定 \(1054 ページ\)](#)」を参照してください。

ステップ 2 [変数 (Variables)] セクションで次のいずれかを実行します。

- 変数を追加するには、[+] ボタンをクリックします（またはまだ定義されていない場合は [変数の追加 (Add Variable)] をクリックします）。
- 変数を編集するには、その変数の編集アイコン (🔍) をクリックします。

変数を削除するには、その変数のごみ箱アイコン (🗑️) をクリックします。その変数への参照をテンプレート本体から削除していることを確認します。

ステップ 3 変数の名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 変数のデータの [タイプ (Type)] を選択し、値を入力または選択します。

次のタイプの変数を作成できます。変数を使用するコマンドのデータ要件に適合するタイプを選択します。

- [文字列 (String)] : テキスト文字列です。たとえば、ホスト名、ユーザ名など。
- [数値 (Numeric)] : 整数値です。コンマ、小数、（マイナスなどの）記号または 16 進数表記を含めないでください。非整数の場合は文字列変数を使用します。
- [ブール値 (Boolean)] : 論理的 true/false です。True または False を選択します。
- [ネットワーク (Network)] : [オブジェクト (Objects)] ページで定義されているネットワーク オブジェクトやグループです。ネットワーク オブジェクトまたはグループを選択します。
- [ポート (Port)] : [オブジェクト (Objects)] ページで定義されている TCP または UDP ポート オブジェクトです。ポート オブジェクトを選択します。グループやその他のプロトコル用のオブジェクトは選択できません。
- [インターフェイス (Interface)] : [デバイス (Device)] > [インターフェイス (Interfaces)] のページで定義されている名前付きインターフェイスです。インターフェイスを選択します。名前を持たないインターフェイスは選択できません。
- [IP] : ネットマスクまたはプレフィックス長がない単一の IPv4 または IPv6 IP アドレスです。
- [秘密 (Secret)] : FlexConfig に定義された秘密鍵オブジェクトです。オブジェクトを選択します。秘密鍵オブジェクトの作成の詳細については、[秘密キーオブジェクトの設定 \(1066 ページ\)](#) を参照してください。

ステップ 5 [変数 (Variable)] ダイアログ ボックスで [追加 (Add)] または [保存 (Save)] をクリックします。

これで FlexConfig オブジェクトの本体内の変数を使用できます。変数を参照する方法は、変数のタイプによって異なります。これらの変数の使用方法の詳細については、次のトピックを参照してください。

- [変数参照 : {{変数}} または {{{変数}}}](#) (1058 ページ)
- [セクション {{#key}} {{/key}} と逆セクション {{^key}} {{/key}}](#) (1062 ページ)

ステップ 6 [FlexConfigオブジェクト (FlexConfig Object)] ダイアログボックスで [OK] をクリックします。

FlexConfig 変数の参照と値の取得

FlexConfig はテンプレート言語として Mustache を使用しますが、サポートは、次のセクションで説明する機能に限定されます。これらの機能を使用して、変数を参照し、その値を取得して、処理します。

変数参照 : {{変数}} または {{{変数}}}

FlexConfig オブジェクト内で定義した変数を参照するには、次の表記を使用します。

```
{{variable_name}}
```

または

```
{{{variable_name}}}
```

次の種類の変数を含む、単一値の変数の場合はこれで十分です : [数値 (Numeric)]、[文字列 (String)]、[ブール値 (Boolean)]、[IP]。変数に & などの特殊文字が含まれている場合、三重カッコを使用します。または、すべての変数で常に三重カッコを使用することもできます。

ただし、構成データベース内のオブジェクトとしてモデル化される要素を指し示す変数の場合は、ドット表記を使用し、取得するオブジェクト属性の名前を含める必要があります。関連するオブジェクト タイプの API エクスプローラでのモデルを調べることによって、これらの属性名を確認できます。次の種類の変数を使用するには次の標記を使用する必要があります : [秘密 (Secret)]、[ネットワーク (Network)]、[ポート (Port)]、[インターフェイス (Interface)]。

```
{{variable_name.attribute}}
```

たとえば、net-object1 (ネットワーク グループではなく、ネットワーク オブジェクトを示す) という名前のネットワーク変数のアドレスを取得するには、次を使用します。

```
{{net-object1.value}}
```

オブジェクト内のオブジェクトから属性値を取得しようとする場合は、一連のドット区切りの属性を使用して、目的の値にドリルダウンする必要があります。たとえば、インターフェイスの IP アドレスは、ipv4 と ipv6 という名前のサブオブジェクトとして、インターフェイス オブジェクトにモデル化されます。したがって、int-inside という名前の (内部インターフェイスを

示す) インターフェイス変数の IPv4 アドレスとサブネット マスクを取得するには、次を使用します。

`{{int-inside.ipv4.ipAddress.ipAddress}}` `{{int-inside.ipv4.ipAddress.netmask}}`



(注) API エクスプローラを開くには、[詳細オプション (More options)] ボタン (⋮) をクリックし、[APIエクスプローラ (API Explorer)] を選択します。

次の表に、変数の型とそれらを参照する方法、オブジェクトの場合は、API モデルの名前と使用する可能性が高い参照を示します。

変数の型	参照モデル	説明
ブール (単純変数)	変数 : <code>{{variable_name}}</code> セクション: <code>{{#variable_name}}</code> <code>commands</code> <code>{{/variable_name}}</code> 反転セクション : <code>{{^variable_name}}</code> <code>commands</code> <code>{{/variable_name}}</code>	論理的 true/false。ブール変数の主な目的は、セクションまたは反転セクションです。たとえば、定期的にまたは特別な事情の下でのみ機能を有効にする必要がある場合、ブール変数の値を編集してコマンドのセクションをオンまたはオフにできます。 いくつかのオブジェクトにも、セクションのオプションの処理を提供するために使用できるそれらのモデルのブール型の属性があります。

変数の型	参照モデル	説明
インターフェイス (オブジェクト変数 : API モデルはインターフェイスです)	変数 : <pre>{{variable_name.attribute}}</pre> セクション: <pre>{{#variable_name.attribute}} commands {{/variable_name.attribute}}</pre> 反転セクション : <pre>{{^variable_name.attribute}} commands {{/variable_name.attribute}}</pre>	[デバイス (Device)]>[インターフェイス (Interfaces)] のページで定義されている名前付きインターフェイス。無名のインターフェイスを指定することはできません。 インターフェイス モデルで使用するさまざまな属性があります。またインターフェイス モデルには、サブオブジェクト、たとえば IP アドレスが含まれます。 次に、役に立つ主な属性をいくつか示します。 • variable_name.name はインターフェイスの論理名を返します。 • variable_name.hardwareName は GigabitEthernet1/8 などのインターフェイスポート名を返します。 • variable_name.managementOnly はブール値です。TRUE は、インターフェイスが管理限定として定義されていることを意味します。FALSE は、インターフェイスがデバイスを通過するトラフィックに使用されることを意味します。このオプションは、セクション キーとして使用できます。 • variable_name.ipv4.ipAddress.ipAddress はインターフェイスの IPv4 アドレスを返します。 • variable_name.ipv4.ipAddress.netmask はインターフェイスの IPv4 アドレスのサブネットマスクを返します。
IP (単純変数)	変数 : <pre>{{variable_name}}</pre>	ネットマスクまたはプレフィックス長がない単一の IPv4 または IPv6 IP アドレス。

変数の型	参照モデル	説明
ネットワーク (オブジェクト変数: API モデルは NetworkObject です)	変数 (ネットワークオブジェクト) : <pre>{{variable_name.attribute}}</pre> セクション (グループオブジェクト) : <pre>{{#variable_name.networkObjects}} commands referring to one of {{value}} {{name}} {{/variable_name.networkObjects}}</pre>	[オブジェクト (Objects)] ページで定義されているネットワーク オブジェクトやグループです。セクションを使用してネットワーク グループを処理することができます。 次に、役に立つ主な属性を示します。 • {{variable_name.name}} はネットワークオブジェクトまたはグループの名前を返します。 • {{variable_name.value}} はネットワークオブジェクト (ネットワークグループではありません) の IP アドレスの内容を返します。ネットワーク オブジェクトの持つ内容のタイプが指定されたコマンドに対して正しいことを確認します。たとえば、サブネットアドレスではなくホストアドレスです。 • {{variable_name.groups}} はネットワークグループに含まれるネットワークオブジェクトのリストを返します。これはネットワーク グループを指す変数でのみ使用します。またグループの内容を繰り返し処理するセクション タグに使用します。{{value}} または {{name}} のいずれかを使用して、次に各ネットワークオブジェクトの内容を取得します。
数値 (単純変数)	変数 : <pre>{{variable_name}}</pre>	整数値。コンマ、小数、(マイナスなどの) 記号または 16 進数表記を含めないでください。非整数の場合は文字列変数を使用します。
ポート (オブジェクト変数: API モデルは、PortObject、tcpports または udpports です)	変数 : <pre>{{variable_name.attribute}}</pre>	[オブジェクト (Objects)] ページで定義されている TCP または UDP ポート オブジェクトです。これは、ポートグループではなく、ポート オブジェクトである必要があります。 次に、役に立つ主な属性を示します。 • {{variable_name.port}} はポート番号を返します。プロトコルは含まれません。 • {{variable_name.name}} はポートオブジェクトの名前を返します。
秘密 (オブジェクト変数: API モデルは Secret です)	変数 : <pre>{{変数名.password}}</pre> または <pre>{{{変数名.password}}}</pre>	FlexConfig に定義された秘密キー オブジェクトです。 参照する必要があるのは、暗号化された文字列を返す password 属性のみです。 パスワードに & などの特殊文字が含まれている場合、三重カッコを使用します。

変数の型	参照モデル	説明
String型 (単純変数)	変数 : <code>{{variable_name}}</code>	テキスト文字列です。たとえば、ホスト名、ユーザ名など。

セクション `{{#key}} {{/key}}` と逆セクション `{{^key}} {{/key}}`

セクションまたは逆セクションは、セクションの開始タグと終了タグの間のコマンドのブロックで、処理条件としてキーを使用します。セクションの処理方法は、それが通常か逆セクションかによって異なります。

- 通常のセクション（または単にセクション）は、キーが **TRUE** であるか、または空でないコンテンツを含む場合に処理されます。キーが **FALSE** であるか、またはオブジェクトにコンテンツがない場合、セクション内のコマンドは設定されません。セクションはバイパスされます。

次に、通常のセクションの構文を示します。

```
{{#key}}
one or more commands
{{/key}}
```

- 逆セクションは、セクションの反対です。キーが **FALSE** であるか、またはオブジェクトにコンテンツがない場合に処理されます。キーが **TRUE** であるか、またはオブジェクトにコンテンツがある場合、逆セクションはバイパスされます。

次に、逆セクションの構文を示します。唯一の違いは、キャレットがハッシュタグを置き換えることです。

```
{{^key}}
one or more commands
{{/key}}
```

次のトピックで、セクションおよび逆セクションの主な用途について説明します。

複数値の変数を処理する方法

複数値の変数の処理の主な例は、ネットワーク グループを指すネットワーク変数です。グループに複数のオブジェクトが含まれている（**objects** 属性の下）ので、ネットワーク グループ内の値を繰り返し実行し、異なる値を使用して複数回同じコマンドを設定できます。

オブジェクトグループによってオブジェクトの属性に含まれるネットワークオブジェクトが定義されますが、ネットワークオブジェクトの内容はオブジェクトに含まれていません。代わりに、**networkObjects** 属性を使用してネットワークオブジェクトの内容を取得します。

たとえば、ホスト 192.168.30.0、192.168.20.0、192.168.10.0 を含む **net-group** という名前のネットワーク グループがある場合は、次の方法を使用して、RIP ルーティング用の各アドレスにネットワーク コマンドを設定できます。ネットワークオブジェクトの **value** 属性のみを使用す

ることに注意してください。セクションの開始時に **net-group.networkObjects** を使用すると、属性値がメンバオブジェクトから取得されるためです。（FlexConfig オブジェクト内の「value」属性に個別の変数を作成しないでください）。

```
router rip
{{#net-group.networkObjects}}
  network {{value}}
{{/net-group.networkObjects}}
```

システムはセクションの構造を次のように変換します。

```
router rip
  network 192.168.10.0
  network 192.168.20.0
  network 192.168.30.0
```

ブール値または空のオブジェクトに基づいて省略可能な処理を実行する方法



- (注) このトピックの例は、説明のみを目的としたものです。たとえば、FlexConfig を使用してバージョン 6.7 以降の SNMP を設定することはできません。代わりに Threat Defense API SNMP リソースを使用する必要があります。

セクション開始タグ内の変数のコンテンツが TRUE の場合、またはオブジェクトが空でない場合、セクションは処理されます。ブール値が FALSE または空（空のオブジェクトなど）のセクションは省略されます。

ここでの主な用途はブール値用です。たとえば、ブール変数を作成し、変数の対象であるセクション内にコマンドを置きます。その後、FlexConfig オブジェクト内のコマンドのセクションを有効または無効にする必要がある場合、ブール変数の値を変更する必要があるだけで、これらの行をコードから削除する必要はありません。これにより、簡単に、機能を有効または無効にすることができます。

たとえば、SNMP を有効にする FlexConfig を使用する場合、SNMP トラップをオフにすることができます。enable-traps という名前のブール変数を作成し、最初は TRUE に設定します。次に、トラップをオフにする場合、変数を編集して FALSE に変更し、オブジェクトを保存して、設定を再展開するだけです。コマンドシーケンスは次のようになります。

```
snmp-server enable
snmp-server host inside 192.168.1.5
snmp-server community clearTextString
{{#enable-traps}}
snmp-server enable traps all
{{/enable-traps}}
```

オブジェクト内のブール値に基づいてこのタイプの処理を行うこともできます。たとえば、そこでいくつかの特性を設定する前に、インターフェイスが管理専用かどうかをチェックできます。次の例で、int-inside は inside という名前のインターフェイスを指すインターフェイス変数です。インターフェイスが管理専用設定されていない場合にのみ、FlexConfig はそのイン

ターフェイスで EIGRP 関連のインターフェイス オプションを設定します。ブール値が FALSE の場合にのみコマンドが設定されるように、逆セクションを使用します。

```
router eigrp 2
  network 192.168.1.0 255.255.255.0
  {{^int-inside.managementOnly}}
interface {{int-inside.hardwareName}}
  hello interval eigrp 2 60
  delay 200
  {{/int-inside.managementOnly}}
```

FlexConfig オブジェクト内の Smart CLI オブジェクトの参照

FlexConfig オブジェクトを作成する場合、変数を使用して、Device Manager 内で設定可能なオブジェクトを示すことができます。たとえば、インターフェイス要素やネットワーク オブジェクトを示す変数を作成できます。

ただし、同じ方法で Smart CLI オブジェクトを示すことはできません。

代わりに、FlexConfig ポリシーで使用する必要がある Smart CLI オブジェクトを作成する場合は、適切な場所で Smart CLI オブジェクトの名前を単純に入力します。

たとえば、プロトコル インспекションを設定する場合、トラフィック クラスとして、拡張 アクセス リストを使用することがあります。これは、拡張アクセスリストの Smart CLI オブジェクトが存在するため、Smart CLI オブジェクトを使用して ACL を作成する必要があるためです。FlexConfig オブジェクトで **access-list** コマンドを使用することはできません。

たとえば、192.168.1.0/24 および 192.168.2.0/24 ネットワーク間でグローバルに DCERPC インспекションを有効化する場合は、次の手順を実行します。

手順

-
- ステップ 1** 2つのネットワークに個別のネットワーク オブジェクトを作成します。たとえば、**InsideNetwork** と **dmz-network**。
 - ステップ 2** これらのオブジェクトを Smart CLI 拡張アクセス リスト オブジェクトで使

Name	Description
dcerpc_class	

CLI Template
Extended Access List

Template

```

1 access-list dcerpc_class extended
2   configure access-list-entry permit
3     permit network source [ InsideNetwork ] destination [ dmz-network ]
4     configure permit port any
5     permit port source ANY destination ANY
6     configure logging default
7     default log set log-level INFORMATIONAL log-interval 300

```

ステップ3 名前で Smart CLI オブジェクトを示す FlexConfig オブジェクトを作成します。

たとえば、オブジェクトの名前が「dcerpc_class」の場合、FlexConfig オブジェクトは次のようになります。ネゲートテンプレートでは、Smart CLI オブジェクトから作成したアクセスリストは無効にできない点に注意してください。そのオブジェクトは、実際には FlexConfig から作成されたオブジェクトではないためです。

Template

```

1 class-map dcerpc_inspection
2   match access-list dcerpc_class
3 policy-map global_policy
4   class dcerpc_inspection
5     inspect dcerpc

```

Negate Template ⚠

```

1 policy-map global_policy
2   no class dcerpc_inspection
3   no class-map dcerpc_inspection

```

ステップ4 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

秘密キーオブジェクトの設定

秘密キーオブジェクトのポイントは、パスワードや機密性の高い文字列を隠すことです。FlexConfig オブジェクトまたは Smart CLI テンプレートで使用する文字列を誰かに見られるリスクを避けたい場合は、文字列の秘密キーオブジェクトを作成します。

手順

ステップ 1 [オブジェクト (Objects)] を選択し、コンテンツテーブルから [秘密キー (Secret Keys)] を選択します。

ステップ 2 次のいずれかを実行します。

- オブジェクトを作成するには、[+] ボタンをクリックします。
- オブジェクトを編集するには、オブジェクトの編集アイコン (🔗) をクリックします。

参照されていないオブジェクトを削除するには、オブジェクトの [ごみ箱 (trash can)] アイコン (🗑️) をクリックします。

ステップ 3 オブジェクトの名前を入力し、任意で説明を入力します。

ステップ 4 [パスワード (Password)] と [パスワードの確認 (Confirm Password)] フィールドの両方にパスワードまたはその他秘密の文字列を入力します。

入力すると、システムがテキストを隠します。

ステップ 5 [OK] をクリックします。

次のタスク

- 新しいオブジェクトの場合は、FlexConfig でそれを使用するために、FlexConfig オブジェクトを編集し、秘密キーの型の変数を作成してオブジェクトを選択します。その後、オブジェクト本体内で変数を参照します。詳細については、[FlexConfig オブジェクトの変数の作成 \(1056 ページ\)](#) を参照してください。
- FlexConfig ポリシーの一部である FlexConfig オブジェクトで使用されている既存のオブジェクトを編集する場合は、新しい文字列でデバイスを更新するために構成を展開する必要があります。
- Smart CLI テンプレートでは、コマンドに秘密キーが必要な場合、関連するプロパティを編集するときにこれらのオブジェクトの一覧が表示されます。目的にあわせて適切なキーを選択します。

FlexConfig ポリシーのトラブルシューティング

FlexConfig ポリシーを編集した後は、次の展開の結果を慎重に調べてください。[保留中の変更 (Pending Changes)] ダイアログボックスに「最後の展開は失敗しました (Last Deployment Failed)」というメッセージが表示された場合は、[詳細の表示 (See Details)] リンクをクリックします。リンクから監査ログが表示されます。このログで失敗した展開ジョブを確認できます。特定のエラー メッセージを検索するには、ジョブを開きます。

展開が FlexConfig の問題のため失敗した場合、詳細には不正なコマンドを含む FlexConfig オブジェクトについて記述され、失敗したコマンドが表示されます。この情報を使用して、オブジェクトを修正し、もう一度展開を試みてください。オブジェクト名はリンクであり、クリックしてオブジェクトの編集のダイアログを開きます。

たとえば、最大 TCP セグメント サイズ (TCP MSS) を設定できます。この設定は、**sysopt connection tcpmss** コマンドを使用して制御できます。Device Manager により設定する場合、このオプションに対する Threat Defense のデフォルトは 0 で、ASA のデフォルトは 1380 です。

MTU のデフォルトの 1500 を使用するインターフェイスで IPv4 VPN を実行している場合、ASA のデフォルトは処理を最適化するように設計されています。システムでは、VPN のヘッダーに 120 バイトが必要です。IPv6 の場合、システムでは 140 バイトが必要です。Threat Defense のデフォルトの 0 では、エンドポイントによる MSS のネゴシエートが許可されるだけで、これは通常のトラフィック、特にデバイス上のインターフェイス間で、1500 以上の MTU を含む、異なる MTU を使用する場合には理想的な設定です。TCP の MSS はグローバル設定であり、インターフェイスごとに設定されないため、トラフィックのかかなりの割合が VPN を介すものであり、過剰に断片化している場合のみ変更します。その場合は、TCP MSS を MTU マイナス 120 (IPv4 用) または 140 (IPv6 用) に設定し、すべてのインターフェイスに同じ MTU を使用します。MSS を明示的に設定した場合でも、TLS/SSL 復号やサーバ検出などのコンポーネントが特定の MSS を必要とする場合、その MSS はインターフェイス MTU に基づいて設定され、MSS 設定は無視されます。

この図では、TCP MSS を 3 バイトに設定するとします。コマンドは最小値として 48 バイトを取るので、次のような展開エラーが発生します。

Deployment Failed: User (admin) Triggered Deployment

◦ "Template" field of **sysopt-connection-tcpmss** caused an error. ERROR: [3] is smaller than minimum allowed MSS of 48 by RFC 791 Config Error - sysopt connection tcpmss 3

```
sysopt connection tcpmss 3
```

エラーは、これらの要素で構成されます。

1. エラーが発生した FlexConfig オブジェクトの名前が含まれている展開エラーメッセージ。オブジェクト名は編集ダイアログボックスにリンクされているので、オブジェクトを開いてすぐにエラーを修正できます。これはメッセージの最初の文です。
2. 「ERROR:」から始まるテキストがデバイスから返されるメッセージです。これは SSH クライアントの書式なしで、誤ったコマンドで入力した場合の、ASA の正確な応答内容です。この例では、エラーメッセージは「エラー: [3] は RFC 791 で許可されている MSS

の最小値 48 よりも小さいです。(ERROR: [3] is smaller than the minimum allowed MSS of 48 by RFC 791.)」です。「設定エラー」で始まるテキストが、エラーメッセージを生成した特定の回線を示しています。

3. 黒のテキストは、エラーを引き起こした FlexConfig オブジェクトからの実際の行です。この行を修正する必要があります。この例では、MTU 1500 インターフェイス（共通の状態）上の IPv4 VPN トラフィックに対応しようとする場合、3 を 1380 に変更します。

この例を修正する場合、CLI コンソールを開いたままにし、**show running-config all sysopt** を使用して、**sysopt** コマンドのすべての設定を確認できます。ほとんどの **sysopt** コマンドには大部分の用途に適したデフォルトの設定があり、実行コンフィギュレーションには表示されません。**all** キーワードでは、出力にこれらのデフォルト設定が含まれます。

FlexConfig の例

ここでは、FlexConfig を使用して機能を設定するいくつかの例を示します。

グローバル デフォルト インスペクションを有効/無効にする方法

一部のプロトコルでは、IP アドレッシング情報がユーザ データ パケットに埋め込まれるか、動的に割り当てられたポートにセカンダリ チャネルが開かれます。そのようなプロトコルの場合、システムはディープ パケット インスペクションを実行し、NAT を適用して、セカンダリ チャネルを許可できるようにする必要があります。いくつかの一般的なインスペクションエンジンはデフォルトで有効になっていますが、ネットワークによっては、他のインスペクションエンジンを有効化したり、デフォルトのインスペクションを無効化したりする必要があります。

現在有効になっているインスペクションの一覧を表示するには、CLI コンソールまたは SSH セッションで **show running-config policy-map** コマンドを使用します。以下の出力は、インスペクションの設定に変更が加えられていないシステムで表示される内容です。この出力では、出力の最後にある **inspect** コマンドの一覧に有効になっているプロトコルインスペクションが表示されています。先行するコマンドにより、**inspection_default** トラフィック クラスでこれらのインスペクションが有効になります（通常のプロトコル、該当する場合はインスペクション済みプロトコルのポート番号）。このクラスは **global_policy** ポリシー マップの一部で、**service-policy** コマンド（出力には未表示）を使用して、すべてのインターフェイスに対するインスペクションに適用されます。たとえば、ICMP インスペクションは、デバイスを通過するすべての ICMP トラフィックに対して行われます。

```
> show running-config policy-map
!
policy-map type inspect dns preset_dns_map
  parameters
    message-length maximum client auto
    message-length maximum 512
    no tcp-inspection
policy-map global_policy
  class inspection_default
```

```
inspect dns preset_dns_map
inspect ftp
inspect h323 h225
inspect h323 ras
inspect rsh
inspect rtsp
inspect sqlnet
inspect skinny
inspect sunrpc
inspect xdmcp
inspect sip
inspect netbios
inspect tftp
inspect ip-options
inspect icmp
inspect icmp error
!
```



- (注) 各インスペクションの詳細については、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/asa-firepower-services/products-installation-and-configuration-guides-list.html> で入手可能な *Cisco ASA シリーズ ファイアウォール コンフィグレーション ガイド* [英語] を参照してください。

次の手順では、このグローバルに適用されるデフォルト インスペクション クラスのインスペクションを有効化または無効化する方法を示します。説明のための例：

- PPTP (Point-to-Point Tunneling Protocol) を有効にします。このプロトコルは、エンドポイント間のポイントツーポイント接続のトンネリングに使用されます。
- SIP (Session Initiation Protocol) を無効にします。通常は、インスペクションによってネットワークに問題が発生している場合のみ SIP を無効化します。SIP を無効化する場合は、アクセス コントロール ポリシーで SIP トラフィック (UDP/TCP 5060) と動的に割り当てられるポートが許可されていること、SIP 接続に NAT のサポートが必要ないことを確認します。アクセス コントロール ポリシーと NAT ポリシーを、FlexConfig ではなく、標準のページを使用して適宜調整します。

始める前に

適切な計画を立てることで FlexConfig を効率的に使用できます。この例では、同じトラフィッククラスに変更を加えていますが、2つの異なる関連性のないインスペクションを変更しています。ただし、それらのポリシーを変更する必要がある場合（可能性は高い）は、個別に変更します。

そのため、この例のインスペクションごとに個別の FlexConfig オブジェクトを作成することをお勧めします。そうすることで、他のインスペクションを変更することなく、1つのインスペクションの設定を簡単に変更でき、FlexConfig オブジェクトを編集する必要もありません。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfigオブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。

ステップ 3 PPTP インスペクションを有効にするオブジェクトを作成します。

- a) [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。
- b) オブジェクトの名前を入力します。例、**Enable_PPTP_Global_Inspection**。
- c) [テンプレート (Template)] エディタで、インデントを含む次の行を入力します。

```
policy-map global_policy
  class inspection_default
    inspect pptp
```

- d) [ネゲート テンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

コマンドを有効にするための正しいサブモードに移行するためには、親コマンドを含める必要があるのと同様に、ネゲートテンプレートにもそれらのコマンドを含める必要があります。

ネゲートテンプレートは、（正常に展開後に）FlexConfig ポリシーからこのオブジェクトを削除した場合に適用されます。また、展開に失敗した場合にも（設定を前の状態にリセットするために）適用されます。

したがって、この例では、ネゲートテンプレートは次のようになります。

```
policy-map global_policy
  class inspection_default
    no inspect pptp
```

オブジェクトは次のようになります。

Name

Enable_PPTP_Global_Inspection

Description

Variables

There are no variables yet.
Start with adding a new variable.

+ ADD VARIABLE

Template

```
1 policy-map global_policy
2   class inspection_default
3     inspect pptp
```

Negate Template

```
1 policy-map global_policy
2   class inspection_default
3     no inspect pptp
```

(注)

inspection_default クラスには有効になっているその他のインスペクション コマンドがあるため、クラス全体を無効にはしたくありません。同様に、global_policy ポリシー マップにはその他のインスペクションが含まれているため、ポリシーマップも無効にはしたくありません。

- e) [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ステップ 4 SIP 検査を無効にするオブジェクトを作成します。

- a) [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。
b) オブジェクトの名前を入力します。例、**Disable_SIP_Global_Inspection**。
c) [テンプレート (Template)] エディタで、インデントを含む次の行を入力します。

```
policy-map global_policy
  class inspection_default
    no inspect sip
```

- d) [ネゲート テンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

「no」 コマンドを無効化するための「negate」 コマンドは、機能を有効化するコマンドです。そのため、「ネゲート」テンプレートは機能を無効化するためのコマンドではな

く、「ポジティブ」テンプレートでの操作を元に戻すためのコマンドです。ネゲートテンプレートの要点は、変更を元に戻す点にあります。

したがって、この例では、ネゲートテンプレートは次のようになります。

```
policy-map global_policy
  class inspection_default
    inspect sip
```

オブジェクトは次のようになります。

Name

Disable_SIP_Global_Inspection

Description

Variables

There are no variables yet.
Start with adding a new variable.

+ ADD VARIABLE

Template

```
1 policy-map global_policy
2   class inspection_default
3     no inspect sip
```

Negate Template

```
1 policy-map global_policy
2   class inspection_default
3     inspect sip
```

e) [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

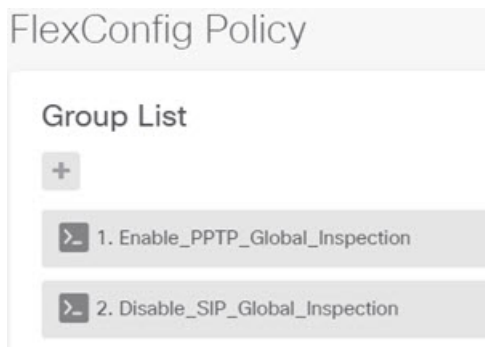
ステップ 5 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

オブジェクトを作成するだけでは不十分です。オブジェクトは、FlexConfig ポリシーに追加（および変更を保存）した場合にのみ展開されます。これにより、未終了の作業で展開が失敗するリスクを犯すことなく、オブジェクトを試す（および部分的に完了した状態で残す）ことができます。その後、オブジェクトを追加および削除することで、機能を簡単にオン/オフできます。オブジェクトを毎回再作成する必要はありません。

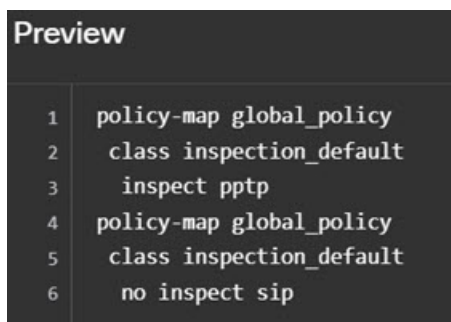
- 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。
- [グループ リスト (Group List)] で [+] をクリックします。

- c) `Enable_PPTP_Global_Inspection` オブジェクトと `Disable_SIP_Global_Inspection` オブジェクトを選択して、[OK] をクリックします。

グループ リストは次のようになります。



プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。予想していたコマンドが表示されていることを確認します。



- d) [保存 (Save)] をクリックします。

これで、ポリシーを展開できます。

ステップ 6 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ステップ 7 CLI コンソールまたは SSH セッションで、`show running-config policy-map` コマンドを使用し、実行コンフィギュレーションが正しく変更されているか確認します。

次の出力では、`inspect pptp` が `inspection_default` クラスの最後に追加されていて、`inspect sip` はクラスに含まれていないことに注意してください。これで、FlexConfig オブジェクトに定義された変更が正常に展開されたことを確認できます。

```
> show running-config policy-map
!
policy-map type inspect dns preset_dns_map
  parameters
    message-length maximum client auto
    message-length maximum 512
    no tcp-inspection
policy-map global_policy
  class inspection_default
    inspect dns preset_dns_map
    inspect ftp
    inspect h323 h225
    inspect h323 ras
    inspect rsh
    inspect rtsp
    inspect sqlnet
    inspect skinny
    inspect sunrpc
    inspect xdmcp
    inspect netbios
    inspect tftp
    inspect ip-options
    inspect icmp
    inspect icmp error
    inspect pptp
!
```

FlexConfig の変更を元に戻す方法

FlexConfig オブジェクトに正しいネゲートテンプレートを入力すると、そのオブジェクトを使用して行った変更の削除が容易になります。FlexConfig ポリシーから単純にオブジェクトを削除すると、次の展開時に、システムがネゲートテンプレートを使用して変更を元に戻します。

変更を元に戻すために新しいオブジェクトを作成する必要はありません。

次の例は、グローバルな SIP 検査を再度有効にする方法を示しています。この例では、SIP 検査を無効化している [グローバルデフォルトインスペクションを有効/無効にする方法（1068 ページ）](#) で説明した変更を元に戻しています。

始める前に

FlexConfig オブジェクトにネゲートテンプレートが正しく設定されていることを確認します。正しくない場合は、オブジェクトを編集してネゲートテンプレートを修正します。

手順

ステップ 1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。

ステップ 2 詳細設定の目次で **[FlexConfig] > [FlexConfigポリシー (FlexConfig Policy)]** をクリックします。

ステップ 3 FlexConfig ポリシーの **Disable_SIP_Global_Inspection** オブジェクトのエントリの右側にある **[X]** をクリックして、ポリシーから削除します。



オブジェクトのコマンドは、プレビューから削除されます。negate コマンドはプレビューには追加されず、バックグラウンドで実行されます。

ステップ 4 **[保存 (Save)]** をクリックします。

ステップ 5 変更を保存します。

a) Web ページの右上にある **[変更の展開 (Deploy Changes)]** アイコンをクリックします。



b) **[今すぐ展開 (Deploy Now)]** ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または **[OK]** をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ステップ 6 CLI コンソールまたは SSH セッションで、**show running-config policy-map** コマンドを使用し、実行コンフィギュレーションが正しく変更されているか確認します。

次の出力では、**inspect sip**がinspection_defaultクラスの一番下に追加されていることに注意してください。これにより、FlexConfig オブジェクトで定義された変更が正常に導入されたことが確認されます（このクラスでは順序は重要ではないため、**inspect sip** が最後にあり、元の場所になくても問題ありません）。

```
> show running-config policy-map
!
policy-map type inspect dns preset_dns_map
  parameters
    message-length maximum client auto
    message-length maximum 512
    no tcp-inspection
policy-map global_policy
  class inspection_default
    inspect dns preset_dns_map
    inspect ftp
    inspect h323 h225
    inspect h323 ras
    inspect rsh
    inspect rtsp
    inspect sqlnet
    inspect skinny
    inspect sunrpc
    inspect xdmcp
    inspect netbios
    inspect tftp
    inspect ip-options
    inspect icmp
    inspect icmp error
```

```
inspect pptp
inspect sip
!
```

一意のトラフィック クラスのインスペクションを有効にする方法

この例では、特定のインターフェイスの2つのエンドポイント間でトラフィックの PPTP インスペクションを有効にします。これは、エンドポイント間にポイントツーポイントトンネルが設定されているエンドポイントのインスペクションだけをターゲットにします。

2つのエンドポイント間で PPTP インスペクションを有効にするために必要な CLI には、以下の内容が含まれます。

1. 送信元と宛先がエンドポイントのホストの IP アドレスに設定されている ACL。
2. この ACL を参照するトラフィック クラス。
3. トラフィック クラスを含み、そのトラフィック クラスでの PPTP インスペクションを有効にするポリシー マップ。
4. 目的のインターフェイスにポリシー マップを適用するサービス ポリシー。これは、実際にポリシーをアクティブにして、インスペクションを有効にする手順です。



(注) インスペクション関連のサービス ポリシーの詳細については、<https://www.cisco.com/c/en/us/support/security/asa-firepower-services/products-installation-and-configuration-guides-list.html> で入手可能な『Cisco ASA Series Firewall Configuration Guide』を参照してください。

手順

- ステップ1 [デバイス (Device)] > [詳細設定 (Advanced Configuration)] で [設定の表示 (View Configuration)] をクリックします。
- ステップ2 詳細設定の目次で [FlexConfig] > [FlexConfigオブジェクト (FlexConfig Objects)] をクリックします。
- ステップ3 [+] ボタンをクリックして新しいオブジェクトを作成します。
- ステップ4 オブジェクトの名前を入力します。例、**Enable_PPTP_Inspection_on_Interface**。
- ステップ5 内部インターフェイスの変数を追加します。
 - a) [変数 (Variables)] リストの上にある [+] をクリックします。
 - b) 変数の名前、**pptp-if** などを入力します。
 - c) [種類 (Type)] で [インターフェイス (Interface)] を選択します。
 - d) [値 (Value)] で [内部 (inside)] インターフェイスを選択します。

ダイアログボックスは次のようになります。

Add New Variable

Name

pptp-if

Description

Type

Interface ▼

Value

inside

e) [追加 (Add)] をクリックします。

ステップ 6 [テンプレート (Template)] エディタで、インデントを含む次の行を入力します。

```
access-list MATCH_ACL permit ip host 192.168.1.55 host 198.51.100.1
class-map MATCH_CMAP
  match access-list MATCH_ACL
policy-map PPTP_POLICY
  class MATCH_CMAP
    inspect pptp
service-policy PPTP_POLICY interface {{pptp-if.name}}
```

変数を使用するには、二重ブレースの間に変数名を入力する点に注意してください。また、インターフェイスを定義するオブジェクトには多数の属性が設定されているため、取得する属性を選択するにはドット表記法を使用する必要があります。インターフェイス名は「name」属性に保持されるため、[{{pptp-if.name}}]を入力すると、変数に割り当てられているインターフェイスのname属性の値が取得されます。PPTPインスペクションのインターフェイスを変更する必要がある場合は、変数定義で単純に別のインターフェイスを選択する必要があります。

ステップ 7 [ネゲートテンプレート (Negate Template)] エディタで、この設定を元に戻すために必要な行を入力します。

この例では、クラスマップ、ポリシーマップ、およびサービスポリシーは、PPTPインスペクションを適用するためにのみ存在していると仮定しています。したがって、ネゲートテンプレートでこれらをすべて削除します。

ただし、インターフェイスの既存のサービスポリシーにPPTPインスペクションを実際に追加する場合は、ポリシーマップやサービスポリシーを無効にはしません。ポリシーマップからクラスを無効にするか、またはポリシーマップ内のクラス内でインスペクションを単純にオフにします。ネゲートテンプレートで予期せぬ結果が生じないようにするには、その他のFlexConfigオブジェクトに実装している内容について明確に把握する必要があります。

ネストされた項目を削除する場合は、作成順とは逆の順番で削除する必要があります。したがって、最初にサービスポリシーを削除して、最後にアクセスリストを削除します。そうし

ないと、使用中のオブジェクトを削除しようとして、システムからエラーが返され、削除できなくなります。

```
no service-policy PPTP_POLICY interface {{pntp-if.name}}
no policy-map PPTP_POLICY
no class-map MATCH_CMAP
no access-list MATCH_ACL permit ip host 192.168.1.55 host 198.51.100.1
```

オブジェクトは次のようになります。

Name

Enable_PPTP_Inspection_on_Interface

Description

Variables

NAME	TYPE	VALUE	DESCRIPTION	ACTIONS
pntp-if	Interface	 inside		

Template

[Expand](#) [Reset](#)

```
1 access-list MATCH_ACL permit ip host 192.168.1.55 host 198.51.100.1
2 class-map MATCH_CMAP
3 match access-list MATCH_ACL
4 policy-map PPTP_POLICY
5 class MATCH_CMAP
6 inspect pntp
7 service-policy PPTP_POLICY interface {{pntp-if.name}}
```

Negate Template 

[Expand](#) [Reset](#)

```
1 no service-policy PPTP_POLICY interface {{pntp-if.name}}
2 no policy-map PPTP_POLICY
3 no class-map MATCH_CMAP
4 no access-list MATCH_ACL permit ip host 192.168.1.55 host 198.51.100.1
```

ステップ 8 [OK] をクリックしてオブジェクトを保存します。

ステップ 9 オブジェクトを FlexConfig ポリシーに追加します。

- 目次で [FlexConfig ポリシー (FlexConfig Policy)] をクリックします。
- [グループ リスト (Group List)] で [+] をクリックします。
- Enable_PPTP_Inspection_on_Interface** オブジェクトを選択し、[OK] をクリックします。
グループ リストは次のようになります。

FlexConfig Policy

Group List



Drag and drop to reorder

1. Enable_PPTP_Inspection_on_Interface

プレビューはテンプレート内のコマンドで更新されます。次の図に示されているように、予想していたコマンドが表示されていることを確認します。プレビューでは、インターフェイス変数は名前「inside」に解決されることに注意してください。変数には特に注意してください。プレビューで正しく解決されていない場合、変数は正確に展開されません。プレビューで変数が正しく変換されるまで、FlexConfig オブジェクトを編集します。

Preview

Expand

```

1  access-list MATCH_ACL permit ip host 192.168.1.55 host
   198.51.100.1
2  class-map MATCH_CMAP
3    match access-list MATCH_ACL
4  policy-map PPTP_POLICY
5    class MATCH_CMAP
6      inspect pptp
7  service-policy PPTP_POLICY interface inside
8

```

- d) [保存 (Save)] をクリックします。

これで、ポリシーを展開できます。

ステップ 10 変更を保存します。

- a) Web ページの右上にある [変更の展開 (Deploy Changes)] アイコンをクリックします。



- b) [今すぐ展開 (Deploy Now)] ボタンをクリックします。

展開が完了するまで待機するか、または [OK] をクリックして、後でタスク リストや展開履歴を確認します。

ステップ 11 CLI コンソールまたは SSH セッションで **show running-config** コマンドのバリエーションを使用して、実行コンフィギュレーションに正しい変更が含まれていることを確認します。

show running-configを入力してCLIの設定全体を検査したり、以下のコマンドを使用して、この設定の各部分を確認したりすることができます。

- **show running-config access-list MATCH_ACL** (ACL の確認用)。

- **show running-config class**（クラスマップの確認用）。すべてのクラス マップが表示されます。
- **show running-config policy-map PPTP_POLICY**（クラスおよびポリシーマップ設定の確認用）。
- **show running-config service-policy**（インターフェイスに適用されているポリシーマップの確認用）。すべてのサービス ポリシーが表示されます。

次の出力には、この一連のコマンドが表示されており、設定が正しく適用されていることを確認できます。

```
> show running-config access-list MATCH_ACL
access-list MATCH_ACL extended permit ip host 192.168.1.55 host 198.51.100.1

> show running-config class
!
class-map MATCH_CMAP
 match access-list MATCH_ACL
class-map inspection_default
 match default-inspection-traffic
!

> show running-config policy-map PPTP_POLICY
!
policy-map PPTP_POLICY
 class MATCH_CMAP
  inspect pptp
!

> show running-config service-policy
service-policy global_policy global
service-policy PPTP_POLICY interface inside
```

翻訳について

このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。